



WebSphere Development Studio

ILE COBOL 解説書

バージョン 6 リリース 1

SD88-5044-06

(英文原典：SC09-2539-06)





WebSphere Development Studio

ILE COBOL 解説書

バージョン 6 リリース 1

SD88-5044-06

(英文原典：SC09-2539-06)

ご注意

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、731 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

- | 本書は、IBM WebSphere Development Studio for System i (5761-WDS) のバージョン 6 リリース 1、モディフィケーション・レベル 0 に適用されます。また改訂版などで特に断りのない限り、これ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションにも適用されます。本書は、RISC システムにのみ適用されます。
- | 本書は、SD88-5044-05 の改訂版です。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： SC09-2539-06
WebSphere Development Studio
ILE COBOL Language Reference
Version 6 Release 1

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

目次

本書について	xi
本書の対象読者	xi
前提条件および関連情報	xiii
新しい機能	xiii
このリリースでの変更点	xiv
V5R4 以降の本書に対する変更	xiv
V5R4 での変更点	xv
V5R3 での変更点	xv
V5R2 での変更点	xvii
V5R1 での変更点	xviii
V4R4 での変更点	xx
V4R2 での変更点	xx
V3R7 での変更点	xxii
V3R6/V3R2 での変更点	xxiv
V3R1 での変更点	xxv
ILE COBOL 構文表記法	xxviii
構文図の読み方	xxix
IBM 拡張	xxx
文書化の構文	xxx
使用されなくなる言語エレメント	xxx
DBCS 表記法	xxxii
工業規格	xxxii
COBOL の使用承諾について	xxxii
概念	xxxiii
サポート情報	xxxiii
第 1 部 COBOL 言語の構成	1
第 1 章 文字	3
文字ストリング	4
DBCS 文字による COBOL 語	5
COBOL 語	6
リテラル	13
PICTURE 文字ストリング	20
コメント記入項目テキスト	20
分離文字	20
分離文字の規則	21
第 2 章 セクションおよび段落	23
記入項目	23
文節	23
文	24
ステートメント	24
句	24
第 3 章 参照形式	25
シーケンス番号域 (1 ~ 6 桁目)	25
標識域 (7 桁目)	25
区域 A (8 ~ 11 桁目)	26
部のヘッダー	26

セクション・ヘッダー	26
段落ヘッダーまたは段落名	26
レベル標識 (FD および SD) またはレベル番号 (01 および 77)	26
DECLARATIVES および END DECLARATIVES	27
END PROGRAM ヘッダー	27
区域 B (12 ~ 72 桁目)	27
項目、文、ステートメント、文節	27
継続行	27
区域 A または区域 B	28
コメント行	28
デバッグ行	28
ブランク行	29
疑似テキスト	29
コンパイラー指示ステートメント	29
コメント域 (73 ~ 80 桁目)	29

第 4 章 データ参照と名前の有効範囲 . . . 31

データ参照の方法	31
ID	31
修飾	33
添え字付け	36
参照変更	39
関数 ID	42
ユーザー定義データ・タイプ	44
名前の有効範囲	45
名前のタイプ	46
ネストされたプログラム	47
グローバル名とローカル名	48
外部オブジェクトと内部オブジェクト	49
データ属性の指定	50
名前の解決	50
プログラム名に関する規則	51

第 5 章 制御の転送 . . . 55

次の実行可能ステートメント	55
---------------	----

第 2 部 COBOL プログラムの構造 57

第 6 章 一般構造 . . . 59

END PROGRAM ヘッダー	60
------------------	----

第 3 部 見出し部 . . . 63

第 7 章 見出し部 . . . 65

PROGRAM-ID 段落	66
プログラム名	66
リテラル	67
RECURSIVE 文節	67
COMMON 文節	68

INITIAL 文節	68
オプションナルの段落	69
コメント記入項目	69

第 4 部 環境部 71

第 8 章 構成セクション 73

コーディング例	73
SOURCE-COMPUTER 段落	73
コンピューター名	74
WITH DEBUGGING MODE 文節	74
OBJECT-COMPUTER 段落	75
SPECIAL-NAMES 段落	76
コーディング例	79
ALPHABET 文節	80
コーディング例	82
CLASS 文節	83
CONSOLE 文節	84
CRT STATUS 文節	85
CRT STATUS 文節についての考慮事項	85
CURRENCY SIGN 文節	87
CURSOR 文節	88
CURSOR 文節についての考慮事項	89
DECIMAL-POINT IS COMMA 文節	89
FORMAT 文節	90
SIZE 句	92
LOCALE 句	92
LINKAGE TYPE 文節	93
LINKAGE TYPE 文節についての考慮事項	95
LOCALE 文節	95
PROGRAM STATUS 文節	96

第 9 章 入出力セクション 99

ファイル・カテゴリ	99
データベース・ファイル	99
装置ファイル	99
DDM ファイル	100
保管ファイル	100
段落	100
FILE-CONTROL 段落	101
FILE-CONTROL 段落 - 形式 1 - 順次ファイル	101
FILE-CONTROL 段落 - 形式 2 - 相対ファイル	102
FILE-CONTROL 段落 - 形式 3 - 索引付きファイル	103
FILE-CONTROL 段落 - 形式 4 - ソート・ファイルまたはマージ・ファイル	104
FILE-CONTROL 段落 - 形式 5 - トランザクション・ファイル	105
SELECT 文節	106
ASSIGN 文節	106
装置	107
ファイル名	108
属性	108
RESERVE 文節	109
ORGANIZATION 文節	110
ORGANIZATION IS SEQUENTIAL (形式 1)	110

ORGANIZATION IS RELATIVE (形式 2)	110
ORGANIZATION IS INDEXED (形式 3)	110
ORGANIZATION IS TRANSACTION (形式 4)	111
PADDING CHARACTER 文節	111
RECORD DELIMITER 文節	112
ACCESS MODE 文節	112
ACCESS MODE 文節 - 形式 1 - 順次ファイル	112
ACCESS MODE 文節 - 形式 2 - 相対ファイル	112
ACCESS MODE 文節 - 形式 3 - 索引付きファイル	113
ACCESS MODE 文節 - 形式 4 - トランザクション・ファイル	113
データ編成とアクセス・モード	114
データ編成	114
アクセス・モード	116
データ編成とアクセス・モードの関係	117
RECORD KEY 文節	118
DUPLICATES 句	118
EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY	120
ALTERNATE RECORD KEY	121
使用に関する考慮事項	122
RELATIVE KEY 文節	123
FILE STATUS 文節	124
CONTROL-AREA 文節	125
I-O-CONTROL 段落	126
I-O-CONTROL 段落 - 形式 1 - 順次ファイル	126
I-O-CONTROL 段落 - 形式 2 - 相対および索引付きファイル	127
I-O-CONTROL 段落 - 形式 3 - ソート・ファイルまたはマージ・ファイル	128
RERUN 文節	128
SAME AREA 文節	129
SAME RECORD AREA 文節	130
SAME SORT AREA 文節	131
SAME SORT-MERGE AREA 文節	131
MULTIPLE FILE TAPE 文節	132
COMMITMENT CONTROL 文節	133

第 5 部 データ部 135

第 10 章 データ部の概要 137

データ部の構造	137
ファイル・セクション	138
作業用ストレージ・セクション	139
ローカル・ストレージ・セクション	140
リンケージ・セクション	140
ADDRESS OF	141
データのタイプ	142
ファイル・データ	142
プログラム・データ	142
データの関係	143
データのレベル	143
データのクラスおよびカテゴリ	146
位置合わせの規則	148
標準データ・フォーマット	149
文字ストリングおよび項目のサイズ	149

符号付きデータ	150	JUSTIFIED 文節	186
第 11 章 データ部 — ファイルとソート記述記入項目	151	LIKE 文節	188
ファイル記述記入項目 - 形式 1 - 順次ファイル	151	継承した USAGE 特性に基づいて生成されるコメント	189
ファイル記述記入項目 - 形式 2 - ディスケット・ファイル	152	規則と制約事項	189
ファイル記述記入項目 - 形式 3 - テープ・ファイル	153	コーディング例	190
ファイル記述記入項目 - 形式 4 - プリンター・ファイル	154	OCCURS 文節	190
ソート記述記入項目 - 形式 5 - ソート・ファイルまたはマージ・ファイル	156	テーブル処理の概念	191
ファイル記述記入項目 - 形式 6 - トランザクション・ファイル	156	制約事項	192
ファイル・セクション	157	テーブルの定義	192
EXTERNAL 文節	157	テーブル・エレメントの参照	193
外部ファイルについての考慮事項	158	固定長テーブル	193
GLOBAL 文節	159	ASCENDING/DESCENDING KEY 句	194
BLOCK CONTAINS 文節	160	ASCENDING/DESCENDING KEY 句の規則	195
RECORD 文節	161	ASCENDING/DESCENDING KEY 句のコーディング例	195
RECORD 文節 - 形式 1	161	INDEXED BY 句	196
RECORD 文節 - 形式 2	161	可変長テーブル	196
RECORD 文節 - 形式 3	163	添え字付け	200
テープ・ファイルの場合	163	添え字付けの制約事項	200
他のすべてのファイルの場合	163	PICTURE 文節	201
すべての形式について的一般考慮事項	163	LOCALE 句	202
LABEL RECORDS 文節	164	PICTURE 文節で使用される記号	203
VALUE OF 文節	164	文字ストリングの表現法	208
DATA RECORDS 文節	165	データ・カテゴリーと PICTURE の規則	209
LINAGE 文節	165	PICTURE 文節の編集	214
LINAGE 文節の各種の句の図	167	REDEFINES 文節	221
LINAGE-COUNTER 特殊レジスター	168	再定義プロセス	221
CODE-SET 文節	168	REDEFINES 文節についての考慮事項	222
第 12 章 データ部 — データ記述記入項目	171	コーディング例	223
形式 1	171	不確定の結果	224
形式 2	174	RENAMES 文節	224
形式 3	174	有効および無効な RENAMES 文節の指定の図示	226
形式 4	175	SIGN 文節	227
形式 5	177	SEPARATE CHARACTER	227
CONSTANT 文節	177	SYNCHRONIZED 文節	228
LIKE 文節	177	同期化データの利点	228
OCCURS 文節	178	OCCURS 文節を使った SYNCHRONIZED 文節の指定	230
INDICATOR 文節	178	REDEFINES 文節を使った SYNCHRONIZED 文節の指定	231
VALUE 文節	178	FILLER 項目	231
レベル番号	178	暗黙 FILLER の例	232
BLANK WHEN ZERO 文節	179	TYPE 文節	233
EXTERNAL 文節	180	TYPEDEF 文節	234
FORMAT 文節	181	USAGE 文節	235
SIZE 句	183	計算用項目	237
日時クラスの項目の使用法	183	BINARY 句	238
FORMAT 文節と PICTURE 文節の類似点	183	PACKED-DECIMAL 句	238
GLOBAL 文節	185	COMPUTATIONAL または COMP 句	239
データの共用	186	COMPUTATIONAL-1 または COMP-1 句	239
		COMPUTATIONAL-2 または COMP-2 句	239
		COMPUTATIONAL-3 または COMP-3 句 (内部 10 進数)	240
		COMPUTATIONAL-4 または COMP-4 句 (2 進数)	240

DISPLAY 句	240
DISPLAY-1 句	244
INDEX 句	244
NATIONAL 句	245
POINTER 句	245
PROCEDURE-POINTER 句	247
VALUE 文節	248
VALUE 文節 - 形式 1 - リテラル値	248
VALUE 文節 - 形式 2 - 条件名値	251
VALUE 文節 - 形式 3 - NULL 値	253

第 6 部 手続き部 255

第 13 章 手続き部 257

形式 1 - セクションと段落あり	257
形式 2 - 段落のみ	258
手続き部ヘッダー	259
USING 句	260
BY REFERENCE	261
BY VALUE	261
GIVING/RETURNING 句	262
宣言	262
プロシージャ	263
セクション	264
段落	264
手続き部のサンプル・ステートメント	265
算術式	265
指数式	266
算術演算子	266
条件式	267
単純条件	267
数字オペランドと非数字オペランドの比較	274
符号条件	279
スイッチ状況条件	280
複合条件	280
ステートメント・カテゴリ	285
ステートメントによる操作	290

第 14 章 手続き部のステートメント 301

ACCEPT ステートメント	302
形式 1 - データの転送	302
形式 2 - システム情報の転送	304
形式 3 - フィードバック	307
形式 4 - 内部データ域	308
形式 5 - プログラム初期設定パラメーター	308
形式 6 - 属性データ域	309
ワークステーション入出力	311
形式 8 - セッション I/O	326
形式 9 - データ域	327
ACQUIRE ステートメント	330
ADD ステートメント	332
ROUNDED 句	333
SIZE ERROR 句	333
CORRESPONDING 句 (形式 3)	333
END-ADD 句	334
ALTER ステートメント	335

コーディング例	335
CALL ステートメント	337
LINKAGE TYPE 句	341
IN LIBRARY 句	342
USING 句	342
BY REFERENCE 句	343
BY CONTENT 句	345
BY VALUE 句	346
LENGTH OF 特殊レジスター	347
GIVING/RETURNING 句	349
ON EXCEPTION 句	349
NOT ON EXCEPTION 句	350
ON OVERFLOW 句	350
END-CALL 句	350
CALL ステートメントの考慮事項	350
プログラム終了ステートメント	351
i5/OS グラフィックス・サポート	352
CANCEL ステートメント	353
IN LIBRARY 句	354
LINKAGE TYPE 句	354
CLOSE ステートメント	357
CLOSE ステートメント - 形式 1	357
CLOSE ステートメント - 形式 2 - テープ・フ	
ァイル	357
CLOSE ステートメントの考慮事項	357
装置タイプ TAPEFILE だけに関する特別の考慮	
事項	358
NO REWIND 句	358
REEL または UNIT 句	359
FOR REMOVAL 句	359
COMMIT ステートメント	361
COMPUTE ステートメント	362
ROUNDED 句	363
SIZE ERROR 句	363
END-COMPUTE 句	363
CONTINUE ステートメント	364
DELETE ステートメント	365
DELETE ステートメントの考慮事項	366
順次アクセス・モード	366
ランダム・アクセス・モードまたは動的アクセ	
ス・モード	366
FORMAT 句	368
NULL-KEY-MAP IS 句	368
INVALID KEY 句	368
NOT INVALID KEY 句	369
END-DELETE 句	369
DISPLAY ステートメント	370
形式 1 - データの転送	370
DISPLAY ステートメントの動作	372
形式 2 - 内部データ域	375
形式 3 - 拡張 DISPLAY ステートメント	376
形式 4 - セッション入出力	381
形式 5 - データ域	382
DIVIDE ステートメント	385
ROUNDED 句	387
REMAINDER 句	387

SIZE ERROR 句	387	END-MULTIPLY 句	435
END-DIVIDE 句	388	OPEN ステートメント	436
DROP ステートメント	389	OPEN ステートメント - 形式 1 - 順次	436
ENTER ステートメント	390	OPEN ステートメント - 形式 2 - 索引付きおよび相対	436
EVALUATE ステートメント	391	OPEN ステートメント - 形式 3 -	
コーディング例	392	TRANSACTION	437
選択サブジェクトと選択オブジェクトの解釈	393	OPEN ステートメントに関する考慮事項	438
END-EVALUATE 句	394	INPUT 句 (順次ファイル)	439
値の決定	394	OUTPUT 句 (順次ファイル)	440
選択サブジェクトと選択オブジェクトの比較	395	I-O 句 (順次ファイル)	441
EVALUATE ステートメントの実行	396	NO REWIND 句 (順次ファイル)	441
EXIT ステートメント	397	REVERSED 句 (順次ファイル)	442
EXIT PROGRAM ステートメント	397	EXTEND 句 (順次ファイル)	442
AND CONTINUE RUN UNIT 句	398	INPUT 句 (索引付きおよび相対ファイル)	442
GOBACK ステートメント	399	OUTPUT 句 (索引付きおよび相対ファイル)	443
GO TO ステートメント	400	I-O 句 (索引付きおよび相対ファイル)	444
無条件 GO TO	400	OPEN ステートメントのプログラミング上の注意事項	445
条件付き GO TO	400	PERFORM ステートメント	447
変更 GO TO ステートメント	401	基本 PERFORM ステートメント	447
IF ステートメント	402	TIMES 句を指定する PERFORM	449
END-IF 句	403	UNTIL 句を指定する PERFORM	450
制御の転送	403	VARYING 句を指定する PERFORM	450
ネストされた IF ステートメント	403	READ ステートメント	460
INITIALIZE ステートメント	404	装置タイプ DISK および DATABASE に関する特別の考慮事項	460
REPLACING 句	405	順次アクセス・モード	460
INITIALIZE ステートメントの規則	405	動的アクセス・モード	460
INSPECT ステートメント	407	ランダム・アクセス・モード	461
INSPECT ステートメント - 形式 1	407	READ ステートメント - 形式 1 - 順次検索 / 順次アクセス	461
INSPECT ステートメント - 形式 2	407	READ ステートメント - 形式 2 - 順次検索 / 動的アクセス	461
INSPECT ステートメント - 形式 3	408	READ ステートメント - 形式 3 - ランダム検索 順次ファイル	469
INSPECT ステートメント - 形式 4	409	相対ファイル	470
INSPECT ステートメントの考慮事項 比較の規則	410	索引付きファイル	471
INSPECT の例	412	複数レコードの処理	472
TALLYING 句 (形式 1 と 3)	413	マルチボリューム・ファイル	473
REPLACING 句 (形式 2 と 3)	414	トランザクション・ファイル	473
BEFORE および AFTER 句 (すべての形式)	415	RELEASE ステートメント	482
CONVERTING 句 (形式 4)	415	RETURN ステートメント	484
INSPECT ステートメントの例	415	AT END 句	485
MERGE ステートメント	417	END-RETURN 句	485
ASCENDING/DESCENDING KEY 句	418	REWRITE ステートメント	486
COLLATING SEQUENCE 句	419	REWRITE ステートメント - 形式 1	486
USING 句	420	REWRITE ステートメントに関する考慮事項	488
GIVING 句	420	トランザクション (サブファイル) 形式	490
OUTPUT PROCEDURE 句	422	ROLLBACK ステートメント	493
SORT-RETURN 特殊レジスター	423	SEARCH ステートメント	494
MOVE ステートメント	424	SEARCH ステートメント - 形式 1 - 逐次検索	494
MOVE ステートメント - 形式 1	424	SEARCH ステートメント - 形式 2 - 二分検索	495
MOVE ステートメント - 形式 2	424	AT END/WHEN 句	496
MOVE ステートメントの規則	424	条件-1	496
基本移動	425	NEXT SENTENCE 句	496
グループ移動	432		
WHEN-COMPILED 特殊レジスター	432		
MULTIPLY ステートメント	434		
ROUNDED 句	435		
SIZE ERROR 句	435		

END-SEARCH 句	496	END-UNSTRING 句	545
逐次検索	496	データの流れ	545
VARYING 句	497	UNSTRING ステートメントの例	548
二分検索	498	WRITE ステートメント	551
WHEN 句	499	順次ファイル	551
SEARCH ステートメントに関する考慮事項	500	索引付きファイルおよび相対ファイル	556
SEARCH の例	501	XML GENERATE ステートメント	568
SET ステートメント	502	ネストされた XML GENERATE または XML PARSE ステートメント	572
形式 1 - 指標名、ID の初期設定	503	XML GENERATE の操作	572
形式 2 - 指標値の調整	504	XML 要素名情報	575
形式 3 - 外部スイッチの設定	505	XML PARSE ステートメント	576
形式 4 - 条件名	506	制御フロー	578
形式 5 - ポインター・データ項目	506	処理プロシージャ	579
形式 6 - プロシージャ・ポインター・データ 項目	507	XML 文書のためのコード化文字セット	580
形式 7 - ポインターの調整	509	特殊レジスター	581
形式 8 - ロケール	510		
SORT ステートメント	513	第 15 章 組み込み関数	587
ASCENDING/DESCENDING KEY 句	514	関数定義と評価	587
DUPLICATES 句	515	関数の指定	587
COLLATING SEQUENCE 句	515	関数のタイプ	588
USING 句	516	使用上の規則	589
INPUT PROCEDURE 句	516	引数	591
GIVING 句	517	関数の引数を評価する際の優先順序	593
OUTPUT PROCEDURE 句	518	ALL 添え字付け	594
START ステートメント	520	関数定義	595
NO LOCK 句	521	ADD-DURATION	602
KEY 句	521	例	603
FORMAT 句	522	CONVERT-DATE-TIME	604
NULL-KEY-MAP IS 句	522	例	605
INVALID KEY 句	523	CURRENT-DATE	606
NOT INVALID KEY 句	524	DISPLAY-OF	607
END-START 句	524	EXTRACT-DATE-TIME	609
索引付きファイル	524	例	610
相対ファイル	527	FIND-DURATION	610
STOP ステートメント	528	例	611
RETURN-CODE 特殊レジスター	529	LENGTH	611
STRING ステートメント	531	LOCALE-DATE	613
DELIMITED BY 句	532	戻り値	613
INTO 句	532	LOCALE-TIME	613
POINTER 句	533	戻り値	614
ON OVERFLOW 句	533	MIDRANGE	614
END-STRING 句	534	MIN	615
データの流れ	534	NATIONAL-OF	615
STRING ステートメントの例	535	ORD-MAX	617
SUBTRACT ステートメント	538	ORD-MIN	617
ROUNDED 句	539	PRESENT-VALUE	618
SIZE ERROR 句	539	RANGE	619
CORRESPONDING 句 (形式 3)	539	STANDARD-DEVIATION	619
END-SUBTRACT 句	540	SUBTRACT-DURATION	620
UNSTRING ステートメント	541	例	621
DELIMITED BY 句	542	SUM	621
INTO 句	543	TEST-DATE-TIME	622
POINTER 句	544	例	623
TALLYING IN 句	544	TRIM	624
ON OVERFLOW 句	544	戻り値	624

例:	625
TRIML	625
TRIMR	626
UTF8STRING	627
VARIANCE	627
WHEN-COMPILED	628

第 7 部 コンパイラー指示ステートメント 631

第 16 章 コンパイラー指示ステートメント 633

*CONTROL (*CBL) ステートメント	633
*CONTROL (*CBL) ステートメントと COPY ステートメント	634
COPY ステートメント	634
COPY ステートメント - 形式 1 - 基本	635
SUPPRESS 句	637
REPLACING 句	637
置き換えおよび比較の規則	639
コーディング例	640
COPY ステートメント - 形式 2 - DDS 変換	641
COPY ステートメント - 形式 3 - 基本 IFS	661
EJECT ステートメント	663
REPLACE ステートメント	663
置き換えのアルゴリズム	664
プログラミング上の注意事項	665
SKIP1/2/3 ステートメント	665
TITLE ステートメント	666
USE ステートメント	667
USE ステートメント - 形式 1 - EXCEPTION/ERROR	667
USE ステートメントのプログラミング上の注意事項	669
ネストされたプログラムについての優先順位規則	669
USE FOR DEBUGGING	670

第 8 部 付録 671

付録 A. ILE COBOLコンパイラー限界値 673

付録 B. 中間結果と算術精度	677
中間結果の精度の計算	677
コンパイラーによる中間結果の計算	678
整数関数	680

浮動小数点データと中間結果	680
-------------------------	-----

付録 C. EBCDIC および ASCII 照合順序	683
EBCDIC 照合順序	683
ASCII 照合順序	685

付録 D. ILE COBOL 関数名およびコンテキストに依存した語のリスト	689
表示キー	689
関数名	689
コンテキストに依存した語	690

付録 E. ILE COBOL 予約語リスト	693
表示キー	693
予約語	693

付録 F. ファイル構造サポートの要約およびファイル状況キーの値	699
ファイル構造サポート・テーブル	699
ファイル状況キーの値および意味	705
属性データ形式	712

付録 G. PROCESS ステートメント	717
対応する作成コマンドのオプション	717

付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON	725
ODO 値の変更の影響	726
ODO オブジェクトの値を変更する場合のエラーの防止	726
可変テーブルへのエレメントの追加時のオーバーレイの防止	727

付録 I. ACCEPT/DISPLAY および COBOL/2 に関する考慮事項 729

特記事項	731
プログラミング・インターフェース情報	732
商標	732
注	733

参考文献	735
----------------	-----

索引	739
--------------	-----

本書について

本書では、統合言語環境 COBOL (ILE COBOL) プログラム言語について説明します。 ILE COBOL プログラム言語の構造および ILE COBOL ソース・プログラムの構造についての情報を提供します。さらに、すべての見出し部段落、環境部文節、データ部文節、手続き部ステートメント、およびコンパイラー指示ステートメントについても説明します。

本書では、他の IBM® 資料に言及しています。これらの資料の、完全な資料名、資料番号を 735 ページの『参考文献』に記載しています。本文で参照するときは、資料名の略称が使われる場合があります。

- ステートメント、文節、特殊レジスター
- プログラム構造
- 概念
- 新しい機能

本書の対象読者

本書は、IBM i5/OS (以前の OS/400) システムの ILE COBOL プログラム言語について解説しています。本書は、データ処理および COBOL プログラム言語の基礎を理解している方々を対象としています。

本書を読む際には、i5/OS システムに関する下記の事柄について理解している必要があります。

- 使用するディスプレイ装置 (ワークステーションとも言う) およびその制御についての知識が必要です。そのディスプレイ装置で稼働しているソフトウェアや接続されているハードウェアに関係なく、標準となっている表示画面の要素やキーボード上のキーもあります。このようなキーの例を次に示します。
 - カーソル移動キー
 - コマンド・キー
 - フィールド終了キー
 - 挿入キーおよび削除キー
 - エラー・リセット・キー
- ディスプレイ装置が IBM iSeries システムと接続され、iSeries ソフトウェアを実行している場合の操作方法について知っておく必要があります。これは、次のようなことを行うために、i5/OS オペレーティング・システムと制御言語 (CL) について理解するということになります。
 - ディスプレイ装置のサインオンおよびサインオフ
 - 表示画面との対話
 - ヘルプの使用
 - CL コマンドの入力
 - ユーティリティーの呼び出し
 - メッセージへの応答

このオペレーティング・システムおよびその制御言語の詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information**

Center の「プログラミング」カテゴリの中の『*CL* および *API*』セクションを参照してください。資料「*CL* プログラミング」も参照することができます。

- **Information Center** 中の『データ管理機能』のトピックについての知識を必要とします。このトピックでは、ユーザー・プログラムの外部にあるデータベース・ファイルや特定の装置ファイルを記述するために必要な、記入項目とキーワードについての詳細説明を提供しています。
- **Information Center** マニュアルの中『*DDS* 解説書』のトピックについての知識を必要とします。このトピックでは、データ管理機能サポートを使用し、ファイルがアプリケーションで作動できるようにするための情報を提供しています。

この資料には、以下の情報が含まれています。

- システムのデータ管理機能サポートの基本的な構造と概念
- スプーリングだけでなく、ディスプレイ装置、プリンター、テープ、およびディスクのデータ管理機能サポート
- 指定変更および宛先変更 (アプリケーションが実行しているときにファイルに一時的な変更を行うこと)
- データをある場所から別の場所にコピーするための、システム・コマンドを使用したファイルのコピー
- 2 バイト文字データを使用するシステムの調整
- **iSeries** システム上で使用可能な特定のユーティリティーの呼び出し方法と使用方法について、知っている必要があります。
 - 画面設計機能 (*SDA*) は、画面の設計およびコーディングに使用します。この情報は「*AS/400 適用業務開発ツールセット AS/400 用 画面設計機能 (SDA)*」に記載されています。
 - 原始ステートメント入力ユーティリティー (*SEU*)。これはソース・メンバーとプロシージャ・メンバーの入力および更新に使用できるフルスクリーン・エディターです。この情報は「*AS/400 適用業務開発ツールセット AS/400 用 原始ステートメント入力ユーティリティー 使用者の手引きと参照*」に記載されています。
 - プログラム開発管理 (*PDM*) ユーティリティーはリスト処理ツールであり、ライブラリー、オブジェクト、メンバー、およびユーザー定義オプションのリストを処理するために使用できます。この情報は「*AS/400 プログラム開発管理機能 (PDM)*」に記載されています。
- **i5/OS** オペレーティング・システムに付随するアプリケーション・プログラム・インターフェース (*API*) の使用方法について知っている必要があります。この情報は「*System API Programming*」に記載されています。
- 表示メッセージや印刷メッセージの解釈の方法を知っている必要があります。この情報は「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」に記載されています。
- **i5/OS®** プログラムの統合言語環境®の概念および用語についての知識が必要です。この情報は「*ILE 概念*」に記載されています。

前提条件および関連情報

iSeries および AS/400e のテクニカル情報を調べる開始点として、iSeries Information Center を使用してください。以下の 2 つの方法で、Information Center にアクセスできます。

- 以下の Web サイトから。

<http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/>

- 注文された i5/OS と一緒に出荷される CD-ROM から。

iSeries Information Center には、CL コマンド、システム・アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)、論理区画、クラスター化、Java™、TCP/IP、Web サーチ、およびセキュア・ネットワークなど、アドバイスのための情報および重要なトピックが含まれています。また、関連する IBM Redbooks へのリンク、および Technical Studio など他の IBM Web サイトや IBM ホーム・ページへのインターネット・リンクも含まれています。

これらの資料は、ILE COBOL コンパイラー機能に最も関係のあるものであり 735 ページの『参考文献』にその一覧が示されています。

新しい機能

ILE COBOL のリリースには、現行の V6R1 のリリース以来、いくつかのリリースがあります。以下は、V3R1 から現行の V6R1 リリースに至るまでの、各リリースに対して行われた機能強化の一覧です。

- xiv ページの『このリリースでの変更点』
- xv ページの『V5R4 での変更点』
- xv ページの『V5R3 での変更点』
- xvii ページの『V5R2 での変更点』
- xviii ページの『V5R1 での変更点』
- xx ページの『V4R4 での変更点』
- xx ページの『V4R2 での変更点』
- xxii ページの『V3R7 での変更点』
- xxiv ページの『V3R6/V3R2 での変更点』
- xxv ページの『V3R1 での変更点』

このセクションを使用して、新しい ILE COBOL の機能にリンクして学習することができます。

注: この製品に対するこの情報は、ILE COBOL の V6R1 のリリースにおける最新のものであります。コンパイラーの前のリリースを使用している場合は、ユーザーのシステムでどの機能がサポートされるかを判断する必要があります。たとえば、V5R3 システムを使用している場合には、V6R1 のリリースにおける新しい機能はサポートされません。

このリリースでの変更点

以下に、V6R1 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- 国別 UCS-2 CCSID サポート

NTLCCSID パラメーターが、CRTCBMOD コマンド、CRTBNDCBL コマンド、および PROCESS ステートメントに追加され、国別データ項目で使用できるように UCS-2 CCSID を指定できるようになりました。このパラメーターによって、国別項目で使用できるように CCSID 1200 のようなデフォルトの 13488 以外の CCSID を指定できます。

- モジュール内の PCML サポート

- CRTCBMOD コマンドおよび CRTBNDCBL コマンドの PGMINFO パラメーターは、生成された PCML を置く位置を指定できるように拡張されました。ユーザーが *PCML を PGMINFO キーワードの最初のパラメーターとして指定するときに、*STMF、*MODULE、または *ALL の位置を指定する 2 番目のパラメーターも指定できます。*STMF によって PCML は INFOSTMF パラメーターで指定されたストリーム・ファイルに置かれ、*MODULE によって PCML は生成されたモジュールに置かれ、および *ALL によって PCML はこれらの位置のすべてに置かれます。

- PROCESS ステートメントのオプション PGMINFO

このオプションにより、ユーザーは PCML がモジュールに追加され、PGMINFO(PCML MODULE) として指定できるように要求できるようになります。ユーザーが作成コマンドで PCML をストリーム・ファイルに追加するように要求した場合、PCML はモジュールとストリーム・ファイルの両方に追加されます。

- 複合 OCCURS DEPENDING ON (ODO) デバッガー・サポート

- サポートが追加され、システム・デバッガーおよびクライアント・デバッガーは複合 OCCURS DEPENDING ON 配列をデバッグできるようになりました。

- 大規模プログラム・サポート

- コンパイラーが拡張され、より大規模なプログラムおよび非常に多数のデータ項目数を含むプログラムがコンパイルできるようになりました (システムしきい値に従います)。

注: このガイドには iSeries への廃止された参照を含む画面取りがある可能性があります。

V5R4 以降の本書に対する変更

V6R1 用の本書「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL 解説書*、SD88-5044-06」は、多くの点で V5R4 用の「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL 解説書*、SD88-5044-05」とは異なります。ほとんどの変更は V6R1 に行われた機能強化に関連するものであり、それ以外は、小規模な技術的な訂正を反映したものです。本書を使用する上で役立つように、V6R1 で行われた技術変更および機能強化による変更箇所は縦線 (|) で示されています。

V5R4 での変更点

以下に、V5R4 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- XML サポートが拡張されました。新規ステートメント、XML GENERATE は、COBOL データ・レコードの内容を XML 形式に変換します。XML GENERATE により、Unicode UCS-2 または複数の 1 バイト EBCDIC のいずれか、または ASCII CCSID にエンコードされた XML 文書が作成されます。
- ヌル終了非数値リテラル

非数値リテラルをヌル終了することができます。非数値リテラルは、非数値リテラルを指定できるすべてのところで使用できますが、ヌル終了リテラルは、「すべてのリテラル」表意定数でサポートされるわけではありません。

- 新しい CRTBNDCBL/CRTCBLMOD オプション

*NOCOMPRESSDBG/*COMPRESSDBG は、DBGVIEW オプション *LIST または *ALL が指定されている場合、リスト・ビューの圧縮が、コンパイラーによって実行される必要があるかどうかを指定します。

- 新しい組み込み関数

- DISPLAY-OF
- NATIONAL-OF
- TRIM
- TRIML
- TRIMR

V5R3 での変更点

以下に、V5R3 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- 大規模な VALUE 文節のサポート

*NOSTDTRUNC コンパイラー・オプションが有効の場合、BINARY を使用するか、PICTURE のピクチャー・シンボル P を PICTURE 文節に持たない COMP-4 を使用して記述されるデータ項目は、固有の 2 進数表記までの容量を持つことができます。

- CONSTANT データ・タイプ

CONSTANT データ・タイプは、リテラルに対して CONSTANT 文節を含むレベル-01 記入項目を指定することで定義されます。その後、CONSTANT データ項目をリテラルの代わりに使用することができます。

- XML サポート

XML PARSE ステートメントには、COBOL 実行時の一部である高速 XML パーサーに対するインターフェースがあります。XML PARSE ステートメントは、XML 文書を構文解析し、1 つずつユーザー作成の処理プロシージャに渡します。

次の XML 特殊レジスタは、XML パーサーとユーザー作成の処理プロシージャ間で情報を通信するために使用されます。

- XML-CODE
- XML-EVENT
- XML-NTEXT
- XML-TEXT

- 代替レコード・キーのサポート

ALTERNATE RECORD KEY 文節を使用すれば、索引付きファイルに関連する代替レコード・キーを定義できます。これらの代替キーを使用すれば、ファイル・レコードのさまざまな論理配列を使用して、ファイルにアクセスできます。

- DBCS データ項目名 (DBCS ワードのサポート)

- 63 桁サポート

- パック 10 進数、ゾーン 10 進数、および数字編集項目の最大長は、31 桁から 63 桁に拡張されました。
- CRTCBMOD および CRTBNDCBL コマンド、並びに PROCESS ステートメントにおける ARITHMETIC パラメーターには、新しい EXTEND63 オプションがあります。

- 7 つの新しい ANSI 組み込み関数

- INTEGER
- REM
- ANNUITY
- INTEGER-PART
- MOD
- FACTORIAL
- RANDOM

- 新しい CRTBNDCBL/CRTCBMOD オプション

- *NOCRTARKIDX/*CRTARKIDX は、永続の代替レコード・キーを検出できない場合、一時的な代替レコード・キー索引を作成するかどうかを指定します。
- *STDINZHEX00 は、値文節のないデータ項目が、16 進数のゼロで初期設定されることを指定します。
- ARITHMETIC パラメーターに対する *EXTEND63 オプションは、固定小数点演算の中間結果の精度を 63 桁にまで増加させます。

- 新しい PROCESS ステートメント・オプション

- PROCESS ステートメント・オプション NOCOMPRESSDBG/COMPRESSDBG は、DBGVIEW オプション *LIST または *ALL が指定されている場合、リスト・ビューの圧縮が、コンパイラーによって実行されるべきかどうかを指定します。
- NOCRTARKIDX/CRTARKIDX
- STDINZHEX00
- ARITHMETIC パラメーターの EXTEND63 オプション

- プログラム状況構造

プログラム状況構造は、COBOL プログラムがエラーを受信したときのエラー情報を含む定義済み構造です。PROGRAM STATUS 文節は、受信されたエラー情報を指定するために使用されます。

V5R2 での変更点

以下に、V5R2 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- 再帰的プログラムのサポート

再帰的プログラムをサポートするために、オプションの RECURSIVE 文節が追加されました。これらのプログラムは、再帰的に再入可能な COBOL プログラムです。

- ローカル・ストレージ・セクションのサポート

呼び出しごとに割り振りと解放が行われるストレージを定義する、新規のデータ・セクションが追加されました。ローカル・ストレージ・セクションは、再帰的プログラムおよび非再帰的プログラムの両方で指定できます。

- Java の相互運用性

Java の相互運用性を高めるために、2 つの新規機能が追加されました。以下の機能です。

- UTF8String 組み込み関数

この関数を使用すると、ストリングを UTF-8 形式に変換できます。

- PCML のサポート

ユーザーが、コンパイラーに、COBOL プログラムの PCML ソースを生成するよう指示できるように、CRTCBMOD コマンドおよび CRTBNDCBL コマンドに新規パラメーターが追加されました。ユーザーが、INFOTMF パラメーターに PGMINFO(*PCML) およびストリーム・ファイルの名前を指定した場合、コンパイラーは、指定されたストリーム・ファイル内に PCML を生成します。PCML が生成されると、Java プログラムが、より少ない Java コードでこの COBOL プログラムを簡単に呼び出せるようになります。

- 追加の組み込み関数

このリリースでは、いくつかの新規の組み込み関数が追加されました。以下の機能です。

- Max
- Median
- Midrange
- Min
- ORD-Max
- ORD-Min
- Present Value
- Range
- Standard Deviation

- Sum
- Variance
- IFS

IFS ストリーム・ファイルに保管されている ILE COBOL ソースはコンパイルすることができます。ユーザーが、コンパイラーに、IFS ストリーム・ファイルに保管されているソースからコンパイルするよう指示できるように、CRTCBMOD コマンドおよび CRTBNDCBL コマンドに SRCSTMF と INCDIR のパラメーターが追加されました。

V5R1 での変更点

以下に、V5R1 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- UCS-2 (ユニコード) サポート

新しいデータ項目のタイプである「国別データ」が追加され、ISO/IEC 10646-1 で UCS-2 として指定されたコード化文字セットに対するサポートを提供します。このコード・セットは、ユニコード規格で定義された基本セットです。

- UCS-2 文字セット

このコード化文字セットは、世界中で使用されている主要な手書き文字に出てくる各文字ごとに、固有なコードを提供します。それぞれの文字は、16 ビット (2 バイト) コードで表されます。

- 国別データ

この新しいデータ項目のタイプには、UCS-2 コード・セットを使用してコード化されたデータが含まれます。その記述に USAGE NATIONAL 文節が含まれる基本データ項目、またはその記述に USAGE NATIONAL 文節が含まれるグループ項目に從属する基本データ項目は、国別データ項目です。

- NTLPADCHAR コンパイラー・オプションおよび PROCESS ステートメント・オプション

このオプションにより、SBCS 埋め込み文字、DBCS 埋め込み文字、および国別埋め込み文字の 3 つの値を指定することができます。ある値が国別データ・タイプ項目に移動され、その国別データ・タイプ項目が完全に埋め込まれない場合は、該当する埋め込み文字が使用されます。

- ALL 国別リテラル

国別 16 進リテラルが許されるところではどこでも ALL という語を使用することが可能であり、それによって、たとえば、すべての UCS-2 ブランクを国別データ項目に移動することができます。

- PROCESS ステートメントのオプション NATIONAL

このオプションが指定されると、PICTURE 記号 N を使用して定義された基本データ項目は、暗黙の USAGE NATIONAL 文節を持つようになります。このコンパイラー・オプションが使用されないと、これらの項目に対して USAGE DISPLAY-1 文節が暗黙に指定されます。

- 国別 16 進リテラル

国別データ値が含まれるリテラルは、以下の構文を使用して指定することができます。

NX"16 進文字シーケンス..."

- 表意定数

表意定数 SPACE/SPACES は、国別データ項目と一緒に使用された場合、1 つ以上の UCS-2 単一バイト・スペース文字 (U+0020) を表します。

• JAVA 相互運用性サポート

- QCBLLSRC.JNI ファイル

このファイルは JNI.h ファイルで提供されるのと同じ定義とプロトタイプを提供しますが、C ではなく COBOL で書かれています。

- Java と COBOL データ・タイプの間のデータ・マッピング

• メインフレーム移植性サポート

- NOCOMPASBIN/COMPASBIN PROCESS ステートメント・オプションは、USAGE COMPUTATIONAL または COMP が、USAGE COMP-3 または USAGE COMP-4 と同じ意味を持つかどうかを指示します。

- NOLSPTRALIGN/LSPTRALIGN PROCESS ステートメント・オプションは、USAGE POINTER または PROCEDURE-POINTER を指定したデータ項目が、リンケージ・セクションのレコードの先頭から相対的に、16 バイトの倍数で位置合わせされるかどうかを指示します。

- 複合 OCCURS DEPENDING ON (ODO) サポート

複合 ODO は、以下のように構成されます。

- 1 つの OCCURS または 1 つの ODO 文節のサブジェクトに従属する記入項目は、ODO 文節を含むことができる (可変長エレメントを持つテーブル)。

- 1 つの ODO によって記述されたデータ項目の後に、ODO 文節によって記述された非従属データ項目を続けることができる (可変位置テーブル)。

- ODO 文節を含む記入項目の後に、非従属項目を続けることができる (可変位置フィールド)。ただし、これらの非従属項目は、ODO 文節のオブジェクトにすることはできません。

- ODO 文節を含む項目に続く、従属項目または非従属項目の位置は、ODO オブジェクトの値による影響を受けます。

- ODO 文節を含む従属項目を持つテーブルに対して、INDEXED BY 句を指定することができます。

• CRTCBMOD および CRTBNDCBL コマンドに LICOPT パラメーターが追加され、上級ユーザーは、ライセンス内部コード・オプションを指定することができます。

V4R4 での変更点

以下に、V4R4 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- スレッド・セーフ・サポート

Domino™ または Java など、スレッド化されたアプリケーションから ILE COBOL プロシージャーを呼び出すためのサポート。PROCESS ステートメントに THREAD パラメーターが追加され、マルチスレッド環境で ILE COBOL モジュールが使用可能になりました。そのモジュール内のプロシージャーのアクセスは、逐次化されている必要があります。

- 31 桁サポート

- パック 10 進数、ゾーン 10 進数、および数字編集項目の最大長は、18 桁から 31 桁の数字に拡張されました。
- ARITHMETIC パラメーターが、CRTCBMOD コマンド、CRTBNDCBL コマンド、および PROCESS ステートメントに追加され、数値データに対して算術モードを設定できるようになりました。これにより、数値データの計算動作を指定することができます。

- ユーロ通貨サポート

- 参加国の間で 1999 年 1 月から 3 年間で有効になる二重通貨システムをサポートするため、COBOL プログラム内で複数の通貨記号を指定する機能。
- 複数の文字で通貨記号を表すことにより、単一文字通貨記号 (たとえば、"¥") だけでなく国際通貨記号 (たとえば、USD、FRF、DEM、EUR) を COBOL 編集フィールドに指定できる機能。
- OPTION パラメーター値 *MONOPIC/*NOMONOPIC が CRTCBMOD および CRTBNDCBL コマンドに追加され、MONOPIC/NOMONOPIC が PROCESS ステートメントに追加されました。これにより、PICTURE 文字ストリングの中で、大文字の通貨記号か大文字小文字を区別する通貨記号かのいずれかを選択することができます。

V4R2 での変更点

以下に、V4R2 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- ユーザー定義データ・タイプ

ユーザー定義データ・タイプは、TYPEDEF 文節が含まれるレベル 01 記入項目を指定することにより定義されます。このレベル 01 記入項目に従属するすべての記入項目が、ユーザー定義データ・タイプの一部として考えられます。ユーザー定義データ・タイプは、そのユーザー定義データ・タイプを参照する新しいデータ項目に対して TYPE 文節を指定することにより、レベル 01、77、または 80 ~ 49 の新しいデータ項目を定義するのに使用できます。

- プログラム・プロファイル作成サポート

PRFDTA パラメーターが、CRTCBMOD と CRTBNDCBL の両方のコマンドおよび PROCESS ステートメントに追加され、最適化のためにプログラムでプロファイルを作成することができます。

- ヌル値サポート

以下のステートメントおよび文節にヌル値サポート (NULL-MAP および NULL-KEY-MAP キーワードを使用する) が追加され、データベース・レコード内でヌル値を操作することができるようになりました。

- ASSIGN 文節
- COPY-DDS ステートメント
- DELETE ステートメント
- READ ステートメント
- REWRITE ステートメント
- START ステートメント
- WRITE ステートメント

- ロケール・サポート

OS/400 ロケール・オブジェクト (*LOCALE) は、日付形式または時刻形式のような、特定の文化圏固有のエレメントを指定します。この文化圏固有の情報は、ILE COBOL の日付項目、時刻項目、および数字編集項目に関連付けることができます。以下の新しい文字、文節、句、およびステートメントがこれをサポートするために追加されました。

- SPECIAL-NAMES 段落の LOCALE 文節
 - OS/400 ロケール・オブジェクトと COBOL 簡略名を関連付けます
- 日付項目、時刻項目、または数字編集項目の LOCALE 句
 - データ項目を OS/400 ロケール・オブジェクトと関連付けるようにするために、ロケール簡略名を指定することができます
- SPECIAL-NAMES 段落の LOCALE 文節に定義された特定のロケールと一緒に、現行ロケールとデフォルト・ロケールが定義されています。現行ロケールは、新しい SET LOCALE ステートメント (形式 8) を使用して変更することができます。
 - 1 つのロケール・オブジェクトは複数のロケール・カテゴリーから構成され、各ロケール・カテゴリーは SET LOCALE ステートメントを使用して変更できます。
- ロケール・カテゴリーは、LC_TIME および LC_MONETARY のような名前を持っています。これらの名前には、下線文字が組み込まれています。この下線文字が COBOL 文字セットに追加されています。
 - COPY DDS ステートメントの SUBSTITUTE 句は、下線文字を取り込めるよう拡張されています。

以下の新しい組み込み関数によって、特定の文化圏固有の日付と時刻を文字ストリングとして戻すことができます。

- LOCALE-DATE
- LOCALE-TIME

- 世紀サポートに対する追加

ILE COBOL の世紀サポートに対して、以下の機能強化が行われています。

- データ項目の新しいクラスである、日時クラスが追加されています。日時クラスには、日付、時刻、およびタイム・スタンプのカテゴリが含まれています。日時データ項目は、データ記述記入項目の新しい FORMAT 文節を使用して宣言されます。
- COPY-DDS と、CVTOPT コンパイラー・パラメーターの以下の値を使用して、OS/400 DDS データ・タイプの日付、時刻、およびタイム・スタンプを、COBOL の日付、時刻、およびタイム・スタンプの項目として、COBOL プログラムに取り込むことができます。
 - *DATE
 - *TIME
 - *TIMESTAMP
- CVTOPT パラメーター値 *CVTTODATE を使用して、DATFMT キーワードを指定したパック、ゾーン、および文字の OS/400 DDS データ・タイプを、データ項目として COBOL に取り込むことができます。
- 以下の新しい組み込み関数により、日時クラスの項目の演算を行い、項目を日時クラスに変換し、日時項目が有効かどうかを確認するためのテストを行い、日時項目の部分抽出を行うことができます。
 - ADD-DURATION
 - CONVERT-DATE-TIME
 - EXTRACT-DATE-TIME
 - FIND-DURATION
 - SUBTRACT-DURATION
 - TEST-DATE-TIME

V3R7 での変更点

以下に、V3R7 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- 世紀サポート

ユーザーが 4 桁の年を使用して作業するための機能が、以下のステートメントおよび関数に追加されています。

- YYYYDDD および YYYYMMDD 句を指定した ACCEPT ステートメント
- 2 桁の年を 4 桁の年に変換する、以下の組み込み関数
 - DATE-TO-YYYYMMDD
 - DAY-TO-YYYYDDD
 - YEAR-TO-YYYY
- 4 桁の年を戻す、以下の組み込み関数
 - CURRENT-DATE
 - DAY-OF-INTEGERS
 - DATE-OF-INTEGERS
 - WHEN-COMPILED

- 浮動小数点サポート

CRTCBLMOD および CRTBNDCBL コマンドの CVTOPT パラメーターの *FLOAT 値により、ILE COBOL プログラム内で浮動小数点データ項目を使用することができます。さらに、影響を受けるステートメント (ACCEPT、

DISPLAY、MOVE、COMPUTE、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、および DIVIDE など) は、浮動小数点をサポートします。

- データ域サポート

ACCEPT および DISPLAY ステートメントの新しい形式が追加され、OS/400 データ域の内容の検索と更新の機能を提供するようになりました。

- 組み込み関数

以下の組み込み関数が追加されています。

ACOS	LOG10
ASIN	LOWER-CASE
ATAN	MEAN
CHAR	NUMVAL
COS	NUMVAL-C
CURRENT-DATE	ORD
DATE-OF-INTEGERS	REVERSE
DAY-OF-INTEGERS	SIN
DATE-TO-YYYYMMDD	SQRT
DAY-TO-YYYYDDD	TAN
INTEGER-OF-DATE	UPPER-CASE
INTEGER-OF-DAY	WHEN-COMPILED
LENGTH	YEAR-TO-YYYY
LOG	

- バインディング・ディレクトリー・パラメーター — BNDDIR

CRTBNDCBL コマンドに BNDDIR パラメーターが追加され、記号の解決に使用されるバインディング・ディレクトリーのリストを指定することが可能になりました。

- 活動化グループ・パラメーター — ACTGRP

CRTBNDCBL コマンドに ACTGRP パラメーターが追加され、プログラムが呼び出されるときに、そのプログラムが関連付けられる活動化グループを指定することが可能になりました。

- ライブラリー修飾されたプログラム・オブジェクトおよびデータ域

以下の ILE COBOL ステートメントに LIBRARY 句が追加され、OS/400 のプログラム・オブジェクトとデータ域を OS/400 ライブラリー名を使用して修飾することが可能になりました。

- CALL
- CANCEL
- SET
- ACCEPT
- DISPLAY

- パフォーマンス収集データ

ENBPFRCOL パラメーターが、CRTCBMOD コマンド、CRTBNDCBL コマンド、および PROCESS ステートメントに追加され、モジュールまたはプログラム内で、パフォーマンス測定コードを生成することが可能になりました。収集され

たデータは、システム・パフォーマンス・ツールを使用して、アプリケーションのパフォーマンスのプロファイルを作成することができます。

- 新しい ILE デバッガー・サポート

ILE デバッガーでは、以下のことが可能になりました。

- ほとんどの OPM プログラムをデバッグすること
- 監視条件を設定すること。これは、変数 (または保管場所のアドレスを決定する式) の値が変更されたときに、停止点を設定する要求となります。

V3R6/V3R2 での変更点

以下に、V3R6 および V3R2 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- 新しい EXIT PROGRAM 句

EXIT PROGRAM ステートメントに AND CONTINUE RUN UNIT 句が追加され、実行単位を停止せずに、呼び出し側プログラムを終了させることが可能になりました。

- 新しい SET ステートメントのポインター形式

SET ステートメントの新しい形式が追加され、ポインター参照の更新が可能になりました。

- DBCS データ・サポート

2 バイト文字セット (DBCS) データを ILE COBOL で処理できるようになりました。ILE COBOL コンパイラーは DBCS (それぞれの論理文字が 2 バイトで表される) をサポートします。DBCS は、IBM 日本語漢字文字セットなどの表意文字言語に対するサポートを提供します。

- CALL...BY VALUE および CALL...RETURNING のサポート

CALL...BY VALUE および CALL...RETURNING により、BY REFERENCE の代わりに BY VALUE で引数を渡し、RETURN 値を受け取る機能が提供されます。これにより、ILE C OS/400 用と ILE RPG OS/400 用の両方が CALL... BY VALUE と CALL...RETURNING をサポートすることになり、マイグレーションがより容易になり、言語相互間のサポートが改善されています。

- PROCEDURE DIVISION ヘッダーの BY VALUE 句および RETURNING 句のサポート

PROCEDURE DIVISION ヘッダーの BY VALUE 句により、COBOL は、呼び出し側 COBOL プログラムまたは RPG、C、または C++ などの他の ILE 言語から、BY VALUE 引数を受け取ることができます。PROCEDURE DIVISION ヘッダーの RETURNING 句により、COBOL は、呼び出し側 ILE プロシージャに VALUE を戻すことができます。

V3R1 での変更点

以下に、V3R1 において ILE COBOL に対して行われた機能強化について説明します。

- EXTERNAL データ項目

EXTERNAL 文節を使用することにより、ILE COBOL 実行単位内のすべてのプログラムで使用可能なデータ項目を定義することができます。プログラム間で共有されるすべての変数を、CALL ステートメントの引数として渡す必要はなくなりました。このサポートは、CALL ステートメントの引数とパラメーターを使用せずにデータを共有できるようにすることで、アプリケーションのより大きなモジュール性を促進します。

- EXTERNAL ファイル

実行単位内のすべてのプログラムで使用可能なファイルを定義することができます。ファイルを EXTERNAL として宣言している、実行単位内のどの ILE COBOL プログラムからでも、同じファイルに対する入出力要求を継ぎ目なしに行うことができます。外部ファイルの場合、そのファイルを使用しているプログラムの数には関係なく、ファイル・カーソルは 1 つだけしかありません。ファイルを複数のプログラムで共用することができ、それによって、より小さな、保守性に優れたプログラムを開発することができます。EXTERNAL ファイルを使用することは、そのファイルを使用するすべての関連プログラムについて、1 つの OPEN および CLOSE 操作しか必要がないため、共用オープン・ファイルを使用することの利点が得られます。ただし、EXTERNAL ファイルは、異なる活動化グループ内では共用できず、また他のプログラム言語で書かれたプログラムとも共用できません。

- ネストされたソース・プログラム

1 つの ILE COBOL ソース・プログラムに、他の ILE COBOL ソース・プログラムを含めることができます。これらの含められたプログラムでは、それらが含まれている元のプログラムのデータ項目やファイルなどの一部のリソースを参照するか、または定義しているプログラムだけが見ることができるリソースをローカルで定義することができます。ILE COBOL プログラムはそれ自体がリソースであるため、その有効範囲は、そのプログラムに付加されたネスト構造および有効範囲属性によっても制御されます。これによって、1 つの ILE COBOL プログラムによって呼び出すことができる、ILE COBOL プログラムのセットの制御の柔軟性が大幅に増します。ネストされた ILE COBOL プログラムでは、リソースを隠蔽して、見ることができないようにするメカニズムを提供します。

- INITIAL 文節

1 つの ILE COBOL プログラムとその中に含まれるすべてのプログラムが、呼び出されるたびに初期状態に置かれるようなメカニズムがあります。これは、PROGRAM-ID 段落に INITIAL を指定することによって可能になります。これによって、COBOL 実行単位の制御の柔軟性がさらに増します。

- REPLACE ステートメント

REPLACE ステートメントは、コンパイルの処理中にソース・プログラムのテキストを置き換えるのに便利です。このステートメントは、REPLACING 句を指定した COPY ディレクティブとは異なり、ファイル全体か、または別の REPLACE

ステートメントに出会うまで操作されます。REPLACE ステートメントは、すべての COPY ステートメントが処理された後で処理されます。これにより、コンパイルすべき ILE COBOL テキストの変更の柔軟性がさらに増します。

- DISPLAY WITH NO ADVANCING ステートメント

DISPLAY ステートメントで NO ADVANCING 句を使用することによって、カーソルを、表示された最後の文字の後にそのまま置いておく機能が得られます。これにより、単一行に表示すべき項目を、ILE COBOL プログラム内のさまざまな点から集めて 1 つのストリングにすることができます。

- ACCEPT FROM DAY-OF-WEEK ステートメント

ILE COBOL では、曜日 (月曜日 = 1、火曜日 = 2 ...) を受け入れ、それに ID を割り当てることができるようになりました。このサポートは、既存の ACCEPT FROM DAY/DATE/TIME サポートを補うものです。

- 相対ファイルに対する SELECT OPTIONAL 文節

これにより、ファイルが I-O でオープンされた場合であっても、相対ファイルの自動作成が可能になります。これは、順次ファイルの場合にすでに使用可能であるサポートを拡張するものです。

- ネストされた COPY ステートメントのサポート

COPY メンバーに COPY ステートメントを含めることができ、それによって COPY ステートメントの能力が拡張されます。COPY メンバーに COPY ディレクティブが含まれている場合は、COPY ディレクティブを含めた側にも、含められた COPY ディレクティブにも、REPLACING 句を指定することができません。

- 拡張 ACCEPT および DISPLAY ステートメントに対する機能強化

拡張 ACCEPT ステートメントで、テーブルの作業を行うことができます。これにより、テーブルの要素を、容易かつ選択的に更新することができます。

拡張 ACCEPT および DISPLAY ステートメントでは、可変長テーブルも許されます。

また、拡張 ACCEPT では、SIZE 文節もサポートされます。

- プロシージャ・ポインターのサポート

プロシージャ・ポインターは、ILE COBOL プログラムまたは非 ILE COBOL プログラムのアドレスを入れることができる新しいデータ・タイプです。プロシージャ・ポインターは、データ項目に USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節を指定することによって定義されます。この新しいデータ・タイプは、パラメーターとしてこのタイプのデータ項目を期待している、呼び出し側プログラムまたは ILE プロシージャにとって便利です。また、プロシージャ・ポインター・データ項目は、別のプログラムを呼び出すための CALL ステートメントのターゲットとしても使用することができます。

- 新しい特殊レジスター

- RETURN-CODE 特殊レジスター

戻り情報を ILE COBOL プログラム間で渡すことができます。通常、このレジスターは、呼び出し先プログラムの成功または失敗に関する情報を渡すのに使用されます。

– SORT-RETURN 特殊レジスター

SORT または MERGE ステートメントの成功に関する情報を戻します。またこれによって、エラー宣言または入出力プロシージャから、SORT/MERGE の処理を終了させることもできます。

• 新しいコンパイラー・オプション

– *PICGGRAPHIC/*NOPICGGRAPHIC

*PICGGRAPHIC は CVTOPT オプションの新しいパラメーターであり、それによって、ユーザーは DBCS データを ILE COBOL プログラムに取り込むことができます。

– *IMBEDERR/*NOIMBEDERR オプション

*IMBEDERR は新しいコンパイラー・オプションであり、それによって、コンパイラー・リストの終わりだけでなく、発生時点でコンパイル時エラーをコンパイラー・リストに組み込みます。

– *FLOAT/*NOFLOAT

*FLOAT は CVTOPT オプションの新しいパラメーターであり、それによって、DDS 名と COMP-1 (単精度) または COMP-2 (倍精度) の USAGE を使用して、浮動小数点データ項目を ILE COBOL プログラムに取り込むことができます。

– *NOSTDTRUNC/*STDTRUNC オプション

*NOSTDTRUNC は新しいコンパイラー・オプションであり、BINARY データ項目の切り捨てを抑制します。このオプションは、IBM System/390® (S/390®) からのアプリケーションのマイグレーションに便利です。

– *CHGPOSSGN/*NOCHGPOSSGN オプション

このオプションは、OS/400® と IBM S/390® の間でデータを共用するのに便利です。このオプションは、IBM System/390 との互換性のために提供されています。このオプションは、符号付きのパックおよびゾーンの数値項目が算術ステートメントまたは MOVE ステートメントで使用され、それらのデータ項目の値が正である場合に、それらのビット表記を変更します。

• 引用符付きシステム名のサポート

システム名が許される場所で、リテラルが許されるサポートが追加されています。システムがサポートする名前であればどのような名前でも使用することができ、有効 COBOL 名に対する制限は無くなりました。

• 以下の機能については、COBOL での制限が無くなり、システムの制約によって決定されるようになりました。

– 宣言済みファイルの数。

– CALL ステートメントおよび手続き部 USING 句のパラメーターの数。ここでは、ILE プロシージャの場合の 400 というシステム制限と、プログラム・オブジェクトの場合の 255 というシステム制限が適用されます。

- SORT-MERGE 入力ファイルの数および SORT-MERGE キーの数。
SORT-MERGE 入力ファイルの最大数は 32 であり、SORT-MERGE キーの最大長は 2000 バイトです。

- NO LOCK 付きの START ステートメント。

START ステートメントで NO LOCK 句を使用することにより、レコード上にロックを置かずに、読み取るべき最初のレコードにファイル・カーソルが位置付けられます。このサポートは、索引付きファイルおよび相対ファイルに対して提供され、すでに使用可能になっている、NO LOCK 付きの READ 機能を補うものです。

注: NO LOCK 付きの START は、ILE COBOL と OPM COBOL/400 の両方における新しいステートメントです。

- 静的プロシージャ呼び出しサポート

より小さく、保守性に優れたモジュール・オブジェクトでアプリケーションを開発して、それらを一緒にリンクして、動的プログラム呼び出しのオーバーヘッドによる不利益を被ることなく、1 つのプログラム・オブジェクトにすることができます。またこの機能は、システムによって提供される共通の実行時環境と相まって、アプリケーションを混合言語で作成する能力も向上させます。ILE プログラム言語では、ソース言語が混合しているかどうかに関係なく、C、RPG、COBOL、および CL を単一のプログラム・オブジェクトにバインドすることができます。

CALL リテラル・ステートメントの新しい構文と新しいコンパイラ・オプションが ILE COBOL に追加され、静的プロシージャ呼び出しと動的プログラム呼び出しを区別するようになりました。

- 可変長レコード・サポート (RECORD IS VARYING 文節)

標準の ANSI COBOL 構文を使用して、同じファイル上で長さが異なるレコードを定義し、容易に使用することができます。これは、ストレージを大幅に削減するだけでなく、他のシステムから複雑なアプリケーションをマイグレーションする作業も容易にします。

- 拡張されたコンパイラ限界値

ILE COBOL は、以下の拡張されたコンパイラ限界値を提供します。

- グループ・データ項目および基本データ項目のサイズ
- 固定長および可変長のテーブルのサイズ
- 条件ステートメントのネスト・レベルの数
- さまざまな手続き部ステートメントのオペランドの数

ILE COBOL 構文表記法

ILE COBOL では、基本的な形式が以下に説明する一定のシステムの構文表記法に従って示されます。この表記法は、COBOL ソース・ステートメントを書く際に役立つように設計されています。

- COBOL キーワードおよびオプションの語は大文字で示してあります。次に例をあげます。

MOVE

これは表記どおり正確につづらなければなりません。キーワードをいずれか 1 つでも書き忘れると、コンパイラーはエラーと見なします。

- ユーザーが指定する名前または値を表記する変数は、すべて小文字 (または日本語) で示されます。次に例をあげます。

parmx

- 本文中で参照しやすいように、次のように、後にハイフンおよび数字または英字を付けた語があります。

identifier-1

この接尾部が付いていても、その語の構文上の定義は変わりません。

- 構文の形式の中にある算術演算子および論理演算子 (+, -, *, /, **, >, <, =, >=, および <=) は、必ず指定しなければなりません。これらの演算子は、特殊文字の予約語です。ILE COBOL の予約語の完全なリストについては 693 ページの『付録 E. ILE COBOL 予約語リスト』を参照してください。
- 構文図に示されているすべての句読点およびその他の特殊文字は、表示するときにその形式の構文上すべて必要なものです。それらを省略すると、プログラムでエラーが起こります。
- 必要な文節でもオプショナルの文節 (ある場合) でも、関連する規則の中で特に指示されていないかぎり、構文図に示されている順序どおりに書かなければなりません。

構文図の読み方

本書では、構文を下記に定義した構造で記述しています。

- 構文図は、左から右へ、上から下へ次のような線のパスに従って読みます。

- ▶▶— この記号は、ステートメントの始めを表します。
- ▶ この記号は、ステートメントの構文が次の行に続くことを表します。
- ▶— この記号は、ステートメントが前の行から続いていることを表します。
- ▶▶ この記号は、ステートメントの終わりを表します。

文節、句、および段落のようなステートメント以外の構文単位の図も、▶▶— 記号で始まり、—▶▶ で終わります。

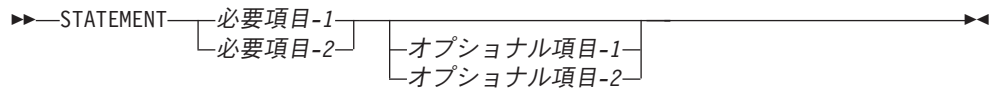
注: 段落全体の図内のステートメントは、その始まりか終わりが段落の始まりか終わりと一致しない限り ▶▶— で始まり、—▶▶ で終わることはありません。

- 必要項目は、水平線 (主パス) 上に示してあります。オプショナルの項目は、主パスの下に示されます。



- 複数の項目の中から選択できる場合には、縦に重ねて示されます。

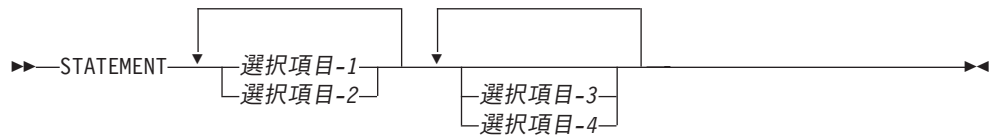
項目の中から必ず 1 つを選択しなければならない場合には、選択項目の 1 つが主要パスに書かれます。項目の選択が任意の場合には、選択項目全体が主パスの下側に書かれます。



- 項目の上側に左向きの矢印がある場合には、その項目を繰り返して指定できることを表しています。



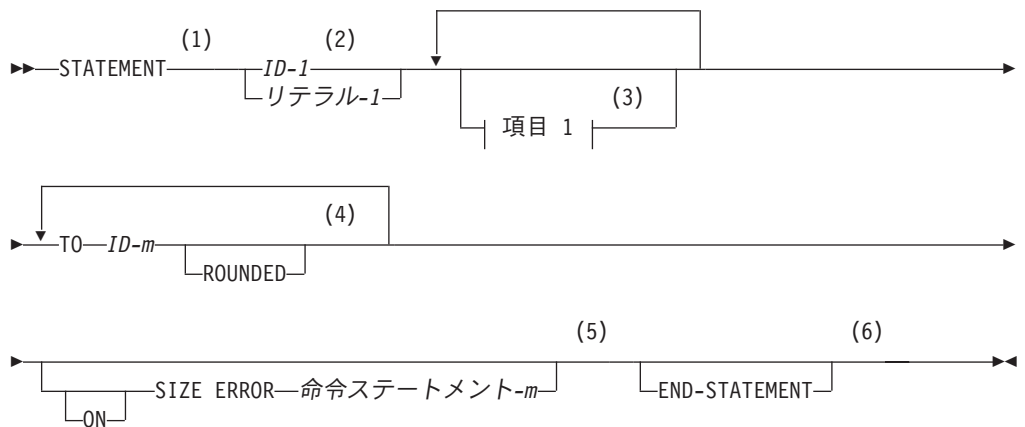
- 必要項目またはオプション項目の上の繰り返しの矢印は、積み重なった項目の中から複数選択することができるか、または 1 つの選択項目を繰り返すことができることを示します。



- 2 つの垂直線の間にある 1 つの項目は、構文の一部であり、図の中の別の場所に詳細が定義されています。

以下の例は、構文図の規則の使用方法を示しています。

形式



項目 1:



注:

- 1 STATEMENT キーワードを指定し、図のようにコーディングしなければなりません。

- 2 このオペランドは必要です。ID-1 またはリテラル-1 のいずれかをコーディングしなければなりません。
- 3 項目 1 の部分はオプションです。アプリケーションに応じて、コーディングしなくてもかまいません。項目 1 をコーディングする場合には繰り返して指定することができ、各項目の間は、1 つまたは複数の COBOL 分離文字で区切ります。このオペランドに選択可能な項目は、図の最下部に説明してあります。
- 4 オペランドの ID-m および関連した TO キーワードは必要で、繰り返す場合には各記入項目を COBOL 分離文字で区切ります。各記入項目には、キーワード `ROUNDED` を割り当てることができます。
- 5 命令ステートメントに関連した `ON SIZE ERROR` 句はオプションです。`ON SIZE ERROR` 句をコーディングする場合、キーワード `ON` はオプションです。
- 6 `END-STATEMENT` キーワードをステートメントの終わりにコーディングできます。これは、必要な分離文字ではありません。

IBM 拡張

IBM 拡張は、一般的にその直前の規則または制約事項を変更するものです。プログラマーによっては IBM 拡張を採用しないで ILE COBOL 言語を使用することもあるため、最初に標準のものを説明します。その後、IBM 拡張を使用するプログラマーのために、拡張について説明します。

図や表の中の IBM 拡張は、拡張として明示的に識別されていない場合は、枠に囲んで示されます。

構文図中に示されている文節とステートメントが ANSI X3.23b-1985 COBOL に対する ILE COBOL 言語の拡張である場合は、その旨が示されます。

IBM 拡張

ANSI X3.23b-1985 COBOL に対する ILE COBOL 言語の拡張が説明文の一部にある場合は、この段落のように、その部分を「IBM 拡張」という見出しが付いた線で囲んであります。

IBM 拡張 の終り

文書化の構文

構文図中に示される COBOL 文節およびステートメントのうち、ILE COBOL コンパイラによって構文検査は行われるが、文書化のための記述として取り扱われるものは、構文図の中で脚注を付けて示されます。

使用されなくなる言語エレメント

使用されなくなる言語エレメントとは、X3.23b-1993 COBOL 規格の ILE COBOL 言語エレメントのうち、今回のこの規格の改訂からは削除されるものです。使用されなくなる言語エレメントに対しては、ILE COBOL コンパイラによる構文検査だけが行われます。

DBCS 表記法

リテラル内の DBCS 文字ストリング、すなわちコメントは、シフトアウト (< で示される) 文字とシフトイン (> で示される) 文字で区切られます。これらの文字の EBCDIC コードは、それぞれ X'0E' および X'0F' です。2 バイト文字は D1D2D3 というように表され、DBCS リテラルは G"<D1D2D3>" というように表されます。APOST オプションを指定した場合は、代わりに単一引用符を使用できます。

工業規格

ILE COBOL は、標準 COBOL をサポートするように設計されています。標準 COBOL とは、American National Standard for Information Systems - Programming Language - COBOL, ANSI X3.23-1985, ISO 1989:1985 に定義されている COBOL プログラム言語のことで、下記の文書の内容にしたがって、リストされている順序に更新されたものです。

- ANSI X3.23a-1989, American National Standard for Information Systems - Programming Language - Intrinsic Function Module for COBOL and ISO 1989:1985/ Amd.1:1992
- Programming Languages - COBOL, AMENDMENT 1: Intrinsic function module
- ANSI X3.23b-1993, American National Standard for Information Systems - Programming Language - Correction Amendment for COBOL
- ISO/IEC 1989 DAM2 Programming Languages - COBOL, AMENDMENT 2: Correction and clarification amendment for COBOL.
- 「*FIPS Publication 21-4, Federal Information Processing Standard 21-4, COBOL*」

本書における標準 COBOL とは、上記で述べた ANSI 規格に従ったものとします。

本書の原典の一部は、「*X3.23b-1993, American National Standard for Information Systems - Programming Language - COBOL*」および「*ISO 1989:1985/Amd 2:1994, Programming languages - COBOL*」からのコピーであり、これらの資料 (米国規格協会が 1985 年の著作権を持つ) から許可を得て複製したものです。これらの資料は、American National Standard Institute at 1430 Broadway, New York, New York, 10018 より購入することができます。

COBOL 言語は、ANSI Technical Committee X3J4 によって維持管理されています。

ILE COBOL コンパイラーがサポートしている工業規格の詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『付録 A』を参照してください。

COBOL の使用承諾について

下記の使用承諾は、ユーザーのための情報および指針とするために、U.S. Government Printing Office Form Number 1965-0795689 からの抜粋を和訳したものです。

どんな組織であっても、この全体または一部の COBOL レポートおよび仕様を複製しようとする場合、指示書の基礎としてまたは他の目的でこのレポートのアイデアを無料で使用できます。しかし、そのような組織はすべて、文書の序

文としてこの部分を複製しなければなりません。書評などで短い引用を行う場合、出所の承認では COBOL に言及しなければなりません、そのすべての部分を引用する必要はありません。

COBOL は産業用言語であり、単一または複数の会社が所有しているものでも、単一または複数の組織が所有しているものでもありません。

プログラミング・システムおよび言語の正確さや機能について、寄稿者または COBOL 委員会は明示的にも暗示的にも何の保証もしません。さらに、関係する事柄について寄稿者や COBOL 委員会が責任を負うこともありません。

COBOL の保守に関する手続きは確立されています。変更をするための手続きについての照会は、データ・システム言語に関する会議の実行委員会に対して行う必要があります。

著作権のある以下の文献の著者および著作権所有者には、COBOL 仕様においてこれらの文献の全体またはその一部を使用することの明確な承認を得ていません。

- Programming for the UNIVAC® I and II, Data Automation Systems copyrighted 1958, 1959, by Unisys Corporation;
- IBM Commercial Translator, Form No. F28-8013, copyrighted 1959 by IBM;
- FACT, DSI 27A5260-2760, copyrighted 1960 by Minneapolis-Honeywell

この承認には、プログラミング解説書または同様の資料において COBOL 仕様を複製したり使用することも含まれます。

概念

ILE COBOL 言語の概念に関するヘルプを表示するには、以下のトピックからいずれかを選択してください。

- 文字、文字ストリング、語、リテラル、コメント、および分離文字
- セクションおよび段落
- COBOL ソース行の参照形式 (シーケンス番号域、標識域、区域 A、区域 B、およびコメント域)
- データ参照および手続き参照の方式
- COBOL 名のタイプおよびそれらの有効範囲
- ステートメント間におけるプログラムの流れの制御権移動
- ユーザー定義データ・タイプ
- サポート情報

サポート情報

このセクションでは、以下のサポート情報について説明します。

- ILE COBOL コンパイラ限界値
- 中間結果と算術精度
- EBCDIC および ASCII 照合順序
- ILE COBOL 関数名およびコンテキストに依存した語のリスト

- ILE COBOL 予約語リスト
- 属性データ形式
- ACCEPT/DISPLAY および COBOL/2 に関する考慮事項
- 参考文献

第 1 部 COBOL 言語の構成

第 1 章 文字

COBOL で、分割不可能なデータの単位は文字です。COBOL 文字セットを形成する英数字、および特殊文字は表 1 に示されています。

統合言語環境* (ILE*) COBOL * 用言語では、文字は、定義された文字セットに制限されます。データ項目に入る非数字リテラル、コメント行、コメント記入項目および値には、(1 次ソース・ファイルの code character set identifier (CCSID) によって) 現在システムに指定されている文字セットの文字を含めることができます。

IBM 拡張

2 バイト文字セット (DBCS) の文字は、特定の COBOL 文字ストリングで有効な文字です。2 バイト文字は、1 文字を表示するために 2 つの隣接するバイトを占有します。(詳細は 4 ページの『文字ストリング』の DBCS の情報を参照してください。)

IBM 拡張 の終り

個々の文字を組み合わせて、文字ストリング、分離文字、およびテキスト語を構成します。

文字ストリングは、COBOL 語、リテラル、PICTURE 文字ストリング、またはコメントを形成する 1 文字または連続する文字です。文字ストリングは、分離文字によって区切られます。

分離文字は、文字ストリングを区切るために使用される 1 つまたは 2 つの連続する句読文字のストリングです。分離文字については 20 ページの『分離文字』に詳しく説明してあります。

テキスト語は、COBOL のライブラリー、ソース・プログラム、または疑似テキストの中のマージン A (桁 7 ~ 桁 8) からマージン R (桁 72 ~ 桁 73) までの間に入っている 1 つの文字、または連続する文字の順序列であり、以下のもののうちのいずれかです。

- スペース、疑似テキスト分離文字、および非数字リテラル分離文字以外の分離文字
- 必要な分離文字を含む、リテラル
- 分離文字によって結合された連続する COBOL 文字のあらゆる順序列のうち、コメント行と語 COPY 以外のもの

表 1. COBOL 文字 — その意味と用法

文字	意味	使用法
A ~ Z	アルファベット (大文字)	英字
a ~ z	アルファベット (小文字)	英字
0 ~ 9	アラビア数字 (数字)	数字
	スペース	句読文字

表 1. COBOL 文字 — その意味と用法 (続き)

文字	意味	使用法
.	小数点またはピリオド	編集用文字 句読文字
<	より小さい	比較文字
(左括弧	句読文字
+	プラス記号	算術演算子 編集用文字
\$	円記号	編集用文字
*	アスタリスク	算術演算子 編集用文字 コメント文字
)	右括弧	句読文字
;	セミコロン	句読文字
:	コロン	句読文字
-	マイナス記号またはハイフン	算術演算子 編集用文字 編集用文字 継続文字 COBOL 語のエレメント
_	下線	ユーザー定義語のエレメント
/	ストロークまたは斜線	算術演算子 編集用文字 編集用文字 継続文字
,	コンマ	編集用文字 句読文字
>	より大きい	比較文字
=	等号	句読文字 比較文字
"	引用符	句読文字
'	アポストロフィ	句読文字
<p>注:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アポストロフィ (') および下線 (_) 文字は IBM 拡張です。 2. システム・オブジェクトの名前を定義するために使用する非数値リテラル、または日時形式では、他の特定の文字が必要な場合があります。 文字 # および @ は、i5/OS システム名では有効なエレメントです。 文字 @ および % は、日時形式の定義時に使用できる変換指定子です。 		

文字ストリング

以下のものを形成するには、1 バイトの文字ストリングを使用できます。

- DBCS 文字による COBOL 語
- COBOL 語
- リテラル

- PICTURE 文字ストリング
- コメント記入項目テキスト

IBM 拡張

以下のものを形成するには、ユーザー定義の DBCS ワードを含む文字ストリングを使用できます。

- リテラル
- コメント記入項目テキスト

DBCS 文字ストリングは、2 バイト文字セットの文字を使用して組み立てられます。混合リテラルを含め、DBCS 文字ストリングを非数字ストリングに組み込むことができます。組み込み DBCS 文字ストリングは、シフトアウト制御文字で開始し、シフトイン制御文字で終了することによって範囲を限定する必要があります。DBCS リテラルの両方のバイトには、X'00' から X'FE' の範囲の文字が含まれます。DBCS リテラルに X'0F7F' (APOST オプションが選択されている場合は X'0F7D') を含めることはできません。

IBM 拡張 の終り

DBCS 文字による COBOL 語

以下は、DBCS 文字からユーザー定義語を形成するための規則です。

シフトアウト、シフトイン文字の使用

DBCS ユーザー定義語は、シフトアウト文字で始まり、シフトイン文字で終わります。

値の範囲

DBCS ユーザー定義語は、両方のバイトについて 16 進数 41 から 16 進数 FE までの値の範囲をとる文字を含むことができます。

含まれる文字

DBCS ユーザー定義語は、DBCS 文字のみを含むことができます。DBCS ユーザー定義語は、単一バイトの EBCDIC 文字に相当する文字と単一バイトの EBCDIC 文字に相当しない文字とを含むことができます。単一バイトの EBCDIC 文字に相当する DBCS 文字は、COBOL ユーザー定義語についての通常の規則に従います。つまり、文字 A から Z、a から z、0 から 9、およびハイフン (-) は許可されます。ハイフンは、先頭文字または最後の文字として使用することはできません。単一バイトの EBCDIC 文字に相当するものを持たない DBCS 文字は、DBCS ユーザー定義語で使用できません。

連結規則

DBCS ワードは、2 行にわたってはなりません。

最大長 14 DBCS 文字。

ユーザー定義語

次のユーザー定義語のタイプは、ILE COBOL でサポートされています。右側の欄は、DBCS 文字がそのタイプで許可されているかを示しています。

ユーザー定義語のタイプ	DBCS 文字を許可
-------------	------------

英字名	Yes
(データの) クラス名	Yes
条件名	Yes
データ名	Yes
ファイル名	Yes
指標名	Yes
ライブラリー名	No
簡略名	Yes
段落名	Yes
プログラム名	No
レコード名	Yes
セクション名	Yes
テキスト名	No

注: DBCS 文字でユーザー定義の COBOL 語を使用するためには、PROCESS オプション GRAPHIC が有効でなければなりません。その他の場合は、DBCS ワードは無効文字として処理されます。

COBOL 語

COBOL 語は、文字、数字、ハイフン、および下線のセットから成る文字ストリングでなければなりません。(ただし、ハイフンおよび下線を先頭文字または最後の文字として使用することはできません。) ILE COBOL 言語では、通常、それぞれの小文字は対応する大文字と等価です。

COBOL 語には、次の 5 つのタイプがあります。

- ユーザー定義語
- システム名
- 関数名

IBM 拡張

- コンテキストに依存した語

IBM 拡張 の終り

- 予約語

ソース・プログラム内に含まれる特殊文字語ではないすべての COBOL 語には次の規則が適用されます。

- COBOL 語の最大長は 30 文字です。
- LENGTH、RANDOM、SUM、および WHEN-COMPILED を除く予約語は、ユーザー定義語、システム名、コンテキストに依存した語、または関数名として使用できません。
- ただし同じ COBOL 語が、次のタイプのうちの複数の ILE COBOL 語として使用されることがあります。
 - ユーザー定義語
 - システム名

- 関数名

IBM 拡張

- コンテキストに依存した語

IBM 拡張 の終り

そのような COBOL 語の特定のオカレンスの種別は、それが出現する句のコンテキストによって判断します。

ユーザー定義語

以下に、ユーザー定義語と、その構成時に従うべき規則をリストします。

ユーザー定義語のタイプ	一般規則
英字名 クラス名 条件名 定数名 データ名 ファイル名 指標名 ロケール名 簡略名 プログラム名 (含まれているプログラム および最外部プログラムは PROCEDURE リンケージ規則 を使って呼び出される) レコード名 ルーチン名 タイプ名	各語には、最低 1 つの英字が含まれていなければならない。
ライブラリー名 プログラム名 (最外部プログラムは PROGRAM リンケージ規則 を使って呼び出される) テキスト名	各語には、最低 1 つの英字が含まれていなければならない。最初の 10 文字は固有でなければならない。
段落名セクション名	各語には、英字が含まれている必要はない。
レベル番号: 01 ~ 49、66、77、88 セグメント番号: 00 ~ 99	各語は 1 桁または 2 桁の整数でなければならないが、固有である必要はない。(セグメント情報は構文検査だけ実行される。)

各ユーザー定義語の機能は、それが現れる文節またはステートメントで説明してあります。

ユーザー定義語を参照する際の制約: 通常、ユーザー定義語は、上記のテーブルにリストしたタイプのいずれか 1 つに属していなければなりません。さらに、ユーザー定義語は、属するタイプの中で固有でなければなりません。

一般規則には、以下の 2 つの例外があります。

- レベル番号またはセグメント番号は、固有である必要はありません。レベル番号またはセグメント番号に使用するユーザー定義語は、別のレベル番号またはセグメント番号のユーザー定義語と同じでもかまいません。
- 参照の固有性が保持できれば、以下のいずれか 1 つ で、1 つのユーザー定義語を重複して使用することができます。
 - 条件名、データ名、およびレコード名からなるグループ
 - 段落名
 - テキスト名

このような名前の参照の固有性の確保について詳しくは 31 ページの『データ参照の方法』を参照してください。

ユーザー定義語が宣言されているプログラムのステートメントおよび記入項目は、次のユーザー定義語のタイプを参照できます。

- 段落名
- セクション名

次のユーザー定義語のタイプは、どの COBOL プログラムでも参照できます。

- ライブラリー名
- プログラム名
- テキスト名

次のタイプの名前は、構成セクションで宣言されていれば、構成セクションを含んだプログラム、またはそのプログラム内に含まれるすべてのプログラムのいずれかにあるステートメントおよび記入項目から、参照できます。

- 英字名
- クラス名
- 条件名
- 簡略名

システム名

システム名は、システムにとって特定の意味を持つように IBM によって定義された文字ストリングです。システム名には次の 4 つのタイプがあります。

- コンピューター名
- 言語名
- 実装者名 (環境名および割り当て名を含む)
- ロケール名

コンピューター名は、DBCS 文字で書くことができますが、その他のシステム名は書くことができません。

関数名

関数名とは、COBOL ソース・プログラムで使用される、一連の指定された語の 1 つです。

関数名は、ILE COBOL によって提供される、組み込み関数の値を判別するためのメカニズムを指定します。

語 LENGTH、RANDOM、SUM、および WHEN-COMPILED の場合を除き、別のコンテキストでは関数名として使用されている語をプログラムの中でユーザー定義語、システム名、またはコンテキストに依存した語として使用できます。

コンテキストに依存した語

IBM 拡張

コンテキストに依存した語は、予約語の規則に従って形成された COBOL 語で、一般形式で指定されたように使用できます。同じ語が、関数名、ユーザー定義語、またはシステム名として使用されることがあります。

ILE COBOL のコンテキストに依存した語は 689 ページの『付録 D. ILE COBOL 関数名およびコンテキストに依存した語のリスト』にリストされています。

IBM 拡張 の終り

予約語

予約語は、COBOL ソース・プログラムで事前定義した意味を持つ文字ストリングのことで、言語定義形式の指定のとおりのみ使用できます。

ILE COBOL の予約語は 693 ページの『付録 E. ILE COBOL 予約語リスト』にリストしてあります。

予約語には、次の 5 つのタイプがあります。

- キーワード
- オプショナル語
- 特殊文字語
- 表意定数
- 特殊レジスター

キーワード: キーワードとは、特定の文節、記入項目、または ステートメント内で必要な予約語のことです。

オプショナル語: オプショナル語とは、読みやすくするために文節、記入項目、またはステートメントの形式の中に含まれる予約語のことです。それらはプログラムの意味や実行に影響を与えることはありません。オプショナル語は形式内では大文字で表されますが、主パスの下部に書かれます。

特殊文字語: 特殊文字語には、次の 2 つのタイプがあります。

- 算術演算子: + - / * **

266 ページの『算術演算子』を参照してください。

- 関係演算子: < > = <= >=

271 ページの『比較条件』を参照してください。

表意定数: 表意定数とは、特定の定数値に名前を付けて、それを参照する予約語のことです。表意定数のための予約語とその意味を次に示します。

ZERO/ZEROS/ZEROES

コンテキストに従って、次の 1 つを表します。

- 数字のゼロ (0)
- 非数字のゼロ (0) の 1 つ以上のオカレンス

IBM 拡張

- ブール値 B"0"

IBM 拡張 の終り

SPACE/SPACES

1 つまたは複数のブランクやスペースを表しますが、これは非数字リテラルとして扱われます。 SPACES は、DBCS データ項目に対して使用した場合、1 つまたは複数の 2 バイト・スペースを表します。 SPACES は、国別データ項目に対して使用した場合、1 つまたは複数の単一バイト UCS-2 スペースを表します。

HIGH-VALUE/HIGH-VALUES

使用する照合順序の中で最高の順位を持つ文字が 1 つまたは複数あることを表します。 NATIVE および EBCDIC の照合順序では、その文字は X'FF' になり、STANDARD-1 および STANDARD-2 の照合順序では、その文字は X'07' になります。それ以外の照合順序の場合、実際に使用される文字は、照合順序に依存します。 HIGH-VALUE は非数字リテラルとして扱われます。

LOW-VALUE/LOW-VALUES

使用する照合順序の中で最低の順位を持つ文字が 1 つまたは複数あることを表します。 NATIVE、EBCDIC、STANDARD-1、および STANDARD-2 の照合順序では、その文字は X'00' となり、それ以外の照合順序の場合、実際に使用される文字は、照合順序に依存します。 LOW-VALUE は非数字リテラルとして扱われます。

QUOTE/QUOTES

1 つまたは複数の引用符文字があることを表し、非数字でなければなりません。非数字リテラルを囲むために、QUOTE または QUOTES を引用符やアポストロフィの代わりに用いることはできません。

IBM 拡張

APOST がコンパイラ・オプションとして指定されるとき、表意定数 QUOTE にはアポストロフィの EBCDIC 値が含まれます。

IBM 拡張 の終り

ALL リテラル

リテラルを構成する文字ストリングが 1 回または複数あることを表します。リテラルは、ALL リテラル以外の非数字リテラルまたは表意定数でなければなりません。

ALL リテラル以外の表意定数を使用する場合には、ALL という語は余分であり、読みやすくするための目的で使用します。 INSPECT、STOP、または STRING ステートメントの中で表意定数の ALL リテラルを使用してはなりません。

注: 表意定数 ALL リテラルが、数字または数字編集項目に関連した場合や、リテラルの長さが 1 より大きい場合、それは古くなったエレメントであり、ANSI 規格の次の改訂から削除されます。

IBM 拡張

ALL リテラルに使用できるリテラルは、ブール・リテラル、DBCS リテラル、または国別の 16 進リテラルです。

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

NULL/NULLS

USAGE IS POINTER 文節、USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節、ADDRESS OF 句、または ADDRESS OF 特殊レジスターにより定義されたデータ項目には、有効なアドレスが含まれていないことを示すために使用される値を表します。NULL は、構文形式で明示的に許可されている場合にだけ使用できます。

ILE COBOL 言語では、NULL の値は定義されていません。

IBM 拡張 の終り

ZERO、SPACE、HIGH-VALUE、LOW-VALUE、QUOTE、および NULL の単数形と複数形は等価なので、いずれを使用してもかまいません。たとえば、DATA-NAME-1 が 5 文字のデータ項目の場合、次のステートメントはどれも、DATA-NAME-1 に 5 桁のスペースを埋めます。

```
MOVE SPACE TO DATA-NAME-1  
MOVE SPACES TO DATA-NAME-1  
MOVE ALL SPACES TO DATA-NAME-1
```

「リテラル」が形式の中のどこにあっても、明示的に禁止されている場合以外は、表意定数を使用できます。形式の中に数字リテラルがある場合には、使用できる表意定数は ZERO だけです。表意定数は、それが関数への引数となっている算術式の中以外においては、関数の引数として使用できません。

IBM 拡張

表意定数 ZERO はブール・リテラルとして使用できます。

IBM 拡張 の終り

表意定数の長さは、プログラムのコンテキストによって決まります。次の規則が適用されます。

- 表意定数がデータ項目と関連している場合 (たとえば、表意定数を他の項目へ移動するか、他の項目と比較する場合)、表意定数の文字ストリングの長さは 1 になるか、または関連したデータ項目内の文字位置の数 (いずれか大きい方) に等しくなります。

- ALL リテラル以外の表意定数が別のデータ項目と関連していない場合 (たとえば、STOP、STRING、または UNSTRING ステートメントで使用する場合)、文字ストリングの長さは 1 文字です。

特殊レジスター: 特殊レジスターとは、コンパイラーにより生成される記憶域に名前を付ける予約語のことです。その主な用途は、特定の COBOL 機能が作成した情報を保管することです。このような記憶域はおのおのが固定の名前を持っているので、プログラムの中で改めて定義する必要はありません。

この指定の一般的な形式では、他に制限がなければ、データ名または ID が指定されているところではどこでも、特殊レジスターを使用できます。ただし、特殊レジスターはデータ名または ID と同一のカテゴリーであることが条件です。修飾が許可されている場合は、特殊レジスターに固有性を与えるために修飾できます。

プログラムの制御が、CALL ステートメントによって、実行単位内であるプログラムから別のプログラムに最初に移されると、コンパイラーは、特殊レジスター・フィールドを初期値に設定します。RETURN-CODE および SORT-RETURN 特殊レジスターは、以下の場合、初期値にリセットされます。

- 参照されたサブプログラムを初期化するために、CANCEL ステートメントが呼び出された場合
- INITIAL 属性を処理するプログラムの場合
- RECURSIVE 属性を処理するプログラムの場合

その他のすべての場合、特殊レジスターが初期値にリセットされることはありません。特殊レジスターは、前回に、プログラム制御が CALL ステートメントによって移されたときに保存された値のままです。

英数字の引数が許可されている場合は、特に禁止されていない限り、英数字レジスターを関数で指定できます。

英数字の引数が許可されている場合は、特に禁止されていない限り、英数字特殊レジスターを関数で指定できます。

それぞれの特殊レジスターについては、次に示されたページから始まるセクションに説明されています。

特殊レジスター	ページ
DEBUG-ITEM	このレジスターは構文検査だけ実行されます。
LINAGE-COUNTER	168

IBM 拡張	
ADDRESS OF	141
DB-FORMAT-NAME	300
LENGTH OF	347
LOCALE OF	184
FORMAT OF	185
RETURN-CODE	529

SORT-RETURN	423
WHEN-COMPILED	432
XML-CODE	581
XML-EVENT	582
XML-NTEXT	584
XML-TEXT	584

IBM 拡張 の終り

リテラル

リテラルは文字ストリングであり、構成されている文字または表意定数の使用のいずれかによって、その値が指定されます (9 ページの『表意定数』を参照してください)。リテラルには、次の 5 つのタイプがあります。

IBM 拡張

- ブール
- DBCS
- 国別 16 進値

IBM 拡張 の終り

- 非数字
- 数字

ブール・リテラル

IBM 拡張

ブール・リテラルとは、左側を分離文字 **B"** で、右側を引用符の分離文字で区切る文字ストリングのことです。この文字ストリングは文字 0 または 1 だけで構成されます。ブール・リテラルの値は、囲んでいる分離文字を除いた文字そのものです。

IBM 拡張 の終り

DBCS リテラル

IBM 拡張

DBCS リテラルには、以下の形式があります。

形式

▶▶—G"—DBCS リテラル—"▶▶

形式

▶▶—N"—DBCS リテラル—"————▶▶

G" または N"

DBCS リテラルの開始分離文字

" DBCS リテラルの終了分離文字

一般に、非数字リテラルに関する規則は、DBCS リテラルにもあてはまります。ただし、DBCS リテラルの最大長は 2 バイト文字で 28 文字であり、これらは 2 行に渡って続けることはできません。

DBCS リテラルは、データ部で次のように指定できます。

- DBCS データ記述記入項目の VALUE 文節内で指定する。データ項目の VALUE 文節内に DBCS を指定した場合、リテラルの長さが、データ項目の PICTURE 文節で示されているサイズを超えてはなりません。DBCS データ項目を USAGE DISPLAY-1 として明示的に定義すると、データ項目を 2 バイトにつき 1 文字ずつ文字形式で保管するよう指定されます。
- JUSTIFIED 文節を使用して指定する。

DBCS リテラルは、手続き部で次のように指定できます。

- DBCS またはグループ項目が受け入れ項目である場合、送り出し項目として指定する。
- 被比較数が DBCS またはグループ項目である場合、関係条件において指定する。
- DBCS リテラルの前の表意定数 SPACE/SPACES、ALL SPACE/SPACES、または ALL として指定する。上記の表意定数だけが DBCS リテラルになることができます。
- DBCS をサポートする組み込み関数への引数として指定する。

DBCS リテラルは、非数字リテラルを使用できる個所ならどこでも指定できます。ただし、次の個所でリテラルとして指定する場合は**例外**です。

- 見出し部
 - PROGRAM-ID 段落
- 環境部
 - ALPHABET 文節
 - ASSIGN 文節
 - CLASS 文節
 - CURRENCY SIGN 文節
 - LINKAGE 文節
 - PADDING CHARACTER 文節
 - RERUN 文節
- 手続き部
 - CALL ステートメント (プログラム名)
 - CANCEL ステートメント
 - END PROGRAM ヘッダー
 - STOP ステートメント
 - DROP ステートメント

- ACQUIRE ステートメント
- COPY
 - COPY ステートメント (テキスト名)
 - COPY ステートメント (ライブラリー名)

IBM 拡張 の終り

国別 16 進リテラル

IBM 拡張

国別 16 進リテラルには、以下の形式があります。

形式

▶—NX"—16 進文字列"—▶

NX"

国別 16 進リテラルの開始分離文字

" 国別 16 進リテラルの終了分離文字

16 進文字列は、汎用文字セットのバージョン 2 (UCS-2) つまりユニコード文字にマップされる、4 つの 16 進数字のグループから構成されます。

国別 16 進リテラルの最大長は 512 国別文字です。

国別 16 進リテラルは、以下の場所で指定できます。

- 国別データ記述記入項目の VALUE 文節内で
- 手続き部内の送り出し項目として。詳細は 424 ページの『MOVE ステートメント』を参照してください。
- 関係条件のオペランドとして
- 国別データをサポートする組み込み関数への引数として

国別 16 進リテラルが後に続く表意定数 SPACE/SPACES、ALL SPACE/SPACES、または ALL は、国別 16 進リテラルである可能性があります。SPACE は単一バイトの UCS-2 スペース (NX"0020") です。

IBM 拡張 の終り

非数字リテラル

非数字リテラルとは、引用符 (") で囲まれた文字ストリングであり、EBCDIC 文字セットで許容される任意の文字を含むことができます。非数字リテラルの最大長は 256 文字です。

非数字リテラルは、引用符 (") で囲まなければなりません。

*APOST コンパイラー・オプションが有効な場合には、非数字リテラルをアポストロフィ (') で囲まなければなりません。

囲みの引用符 (またはアポストロフィ) は、プログラムをコンパイルするときリテラルから除外されます。引用符を非数字リテラルに組み込むには、2 個の引用符を連続して ("") 指定しなければなりません。

たとえば、

```
"THIS ISN""T WRONG"
```

IBM 拡張

アポストロフィ・リテラルでは、2 重アポストロフィ (") が分離文字である場合は、単一のアポストロフィに変えられます。

たとえば、

```
'THIS ISN' 'T WRONG'
```

は、次のものを表します。

```
THIS ISN'T WRONG
```

IBM 拡張 の終り

非数字リテラル内で使用される句読文字は、どれもリテラルの値の一部です。

すべての非数字リテラルは英数字データのカテゴリに入ります。(データのカテゴリについては 146 ページの『データのクラスおよびカテゴリ』で説明します。)

16 進数リテラル:

IBM 拡張

16 進数の表記を使用して **16 進非数字リテラル**を構成することができます。

形式

▶▶ "X" —16 進数— ◀◀

X"

非数字リテラルの 16 進表記用左分離文字。(コンパイラー・オプション *APOST または PROCESS ステートメントのオプション APOST が指定される場合、左分離文字は X' です。)

" 非数字リテラルの 16 進表記用右分離文字。(コンパイラー・オプション *APOST または PROCESS ステートメントのオプション APOST が指定される場合、右分離文字は ' です。)

16 進数値は、0 ~ 9、a ~ f、および A ~ F のいずれかの範囲の文字から成ります。16 進数は 2 桁で 1 文字を表しますから、16 進数は偶数ごとに指定しなければなりません。

16 進非数字リテラルの最大長は 512 桁です。

継続規則は、他の非数字リテラルに関するものと同じです。

コンパイラーは、16 進リテラルを通常非数字リテラルに変換します。16 進非数字リテラルは、非数字リテラルを使用できるのであればどこでも使用できます。

IBM 拡張 の終り

混合リテラル:

IBM 拡張

混合リテラルは、1 バイト文字と 2 バイト文字を組み合わせた非数字リテラルです。2 バイト文字の各ストリングは、シフトアウト制御文字 (16 進数の 0E) で開始し、シフトイン制御文字 (16 進数の 0F) で終了させることによって範囲が限定され、単一バイト・データと区別されます。制御文字は混合リテラルの長さに含まれます。2 バイト文字ストリングは、2 つの制御文字だけから構成される場合もあります。

COBOL ステートメントは、マシン表示に依存することなく、混合リテラルを処理します。バイト単位で動作するステートメント (たとえば、STRING および UNSTRING) は、結果的に 1 バイト文字と 2 バイト文字の有効な混合文字ストリングとならない場合があります。ステートメントが正しく使用されていることを確認するのは、ユーザーの責任です。

混合リテラルは、プログラムが PROCESS ステートメントの GRAPHIC オプションを使用してコンパイルされるような場合にのみ認識されます。それ以外の場合には、単に非数字リテラルとして処理されます。

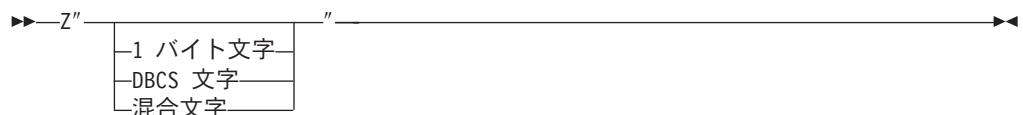
IBM 拡張 の終り

ヌル終了非数値リテラル

IBM 拡張

非数値リテラルを以下の形式で、ヌル終了することができます。

形式



Z" 非数値リテラルのヌル終了表記用の開始区切り文字。(コンパイラー・オプション *APOST または PROCESS ステートメントのオプション APOST が指定される場合、左分離文字は Z' です。)ヌル終了リテラル (Z" または Z') の開始区切り文字の両方の文字は、同じソース行になければなりません。

" 非数値リテラルのヌル終了表記用の終了区切り文字。(コンパイラー・オプション *APOST または PROCESS ステートメントのオプション APOST が指定される場合、右分離文字は ' です。)

開始区切り文字で引用符が使用されている場合、それを終了区切り文字として使用する必要があります。同様に、開始区切り文字でアポストロフィが使用されている場合、それを終了区切り文字として使用する必要があります。

リテラルのコンテンツは、1 バイトまたは 2 バイト文字、またはその両方を含むことができますが、値 `X'00'` を持つ 1 バイト文字を指定することはできません。`X'00'` は、リテラルの最後に自動的に追加されるヌル文字です。その他の点では、リテラルのコンテンツは混合リテラルと同じ規則と制約事項に従います。

リテラル・コンテンツの 1 バイトまたは 2 バイト文字のストリングは、0 から 255 バイトの長さにすることができます。リテラルの実際の長さは、終了ヌル文字を含むため、最大長は 256 バイトになります。

ヌル終了非数値リテラルには、データ・クラスおよびカテゴリ英数字がありません。ヌル終了非数値リテラルは、非数値リテラルを指定できるすべてのところで使用できますが、ヌル終了リテラルは、すべてのリテラル表意定数でサポートされるわけではありません。

ヌル終了リテラルを使用して、COBOL プログラムで外部または内部オブジェクトの名前 (プログラム名、ロケール名、ライブラリー名、プロシージャ名など) を指定しないでください。指定した場合、コンパイラーは終了ヌル文字を文字 "0" で置換し、重大度 20 のエラー・メッセージが発行され、ユーザーにこの置換が通知されます。

LENGTH 組み込み関数は、ヌル終了リテラルに適用された場合、終了ヌルを含まないそれより前のリテラル内のバイト数を戻します。(LENGTH 特殊レジスターは、リテラル・オペランドをサポートしません。)

IBM 拡張 の終り

数字リテラル

数字リテラルとは、数字 0 ~ 9、符号文字 (+ または -)、および小数点の中から選択された文字で構成される文字ストリングのことです。このリテラルに小数点のないものが、整数です。(本書では、形式の中で使用される**整数**という語は、小数点を含まない数字リテラルを表します。コンテキストによっては、このリテラルは、負の値を持つことを許されないか、またはゼロであることを許されません。このような制約事項、および適用される可能性があるその他の制約事項については、形式の説明部分を参照してください)。次の規則が適用されます。

- (デフォルトの) コンパイラー・オプション `*NOEXTEND` または `PROCESS` ステートメント・オプション `NOEXTEND` が指定されているときには、1 ~ 18 桁が可能です。

IBM 拡張

- 算術計算モード・コンパイラー・オプション `*EXTEND31` または `PROCESS` ステートメント・オプション `EXTEND31` が指定されているときには、1 から 31 桁が可能です。

IBM 拡張

- 算術計算モード・コンパイラ・オプション *EXTEND63 または PROCESS ステートメント・オプション EXTEND63 が指定されているときは、1 から 63 桁が可能です。

IBM 拡張 の終り

- 符号文字は 1 文字だけ使用可能です。符号文字を組み込むのは、リテラルの左端でなければなりません。符号文字のないリテラルは、値が正であると見なされず。
- 小数点は 1 文字だけ使用可能です。小数点が組み込まれていると、それは**仮想小数点**として扱われます (すなわち、リテラル内の文字位置を占めません)。小数点は、リテラルの右端を除いて任意の位置に使用できます。
- 引用符で数字リテラルを囲むと、コンパイラはこのリテラルを非数字リテラルとして扱います。

数字リテラルの値は、リテラル内の文字によって表される代数的な量です。標準のデータ・フォーマットの文字の数字リテラルの大きさは、ユーザーが指定する桁数と同じです。

すべての数字リテラルは、数字データの категория に入ります。(データの категория については 146 ページの『データのクラスおよび categoria』で説明します。)

浮動小数点リテラル:

IBM 拡張

数字リテラルは、固定小数点数または浮動小数点数のいずれかにすることができます。浮動小数点リテラル値の規則は次のとおりです。

- 浮動小数点リテラルは、以下の形式で書かれます。

形式



- 仮数と指数の前の符号はオプションです。符号を省略すると、コンパイラは正数を想定します。
- 仮数には、1 から 16 桁までの数字が入ります。仮数には小数点が含まれる必要があります。
- 指数は E によって表示され、その後ろにオプションの符号と、1、2、または 3 桁の数字が続きます。
- 浮動小数点リテラル値の絶対値は、2.225073858507201E-308 から 1.797693134862315E+308 までである必要があります。この範囲外の値については、E レベルの診断が行われ、その値はそれぞれ 0 または 1.797693134862315E+308 に置き換えられます。

注: MVS™ COBOL の範囲は 0.54E-78 から 0.72E+76 で、OS/2® および AIX® の範囲は 2.225E-308 から 1.798E+308 です。

浮動小数点リテラルは、クラスが数字で、カテゴリーが内部浮動小数点になります。一般的に浮動小数点リテラルは、10 進数値リテラルが使用できる場所はどこでも使用できます。

IBM 拡張 の終り

PICTURE 文字ストリング

PICTURE 文字ストリングは、通貨記号で組み立てられる特定の記号および COBOL 文字セットの中の文字の組み合わせで構成されています。

PICTURE 文字ストリングの指定の一部として書かれた句読文字は、どれも句読文字とは見なされず、PICTURE 文字ストリングの指定の中で使われている記号と見なされます。(PICTURE 文節の記号は 203 ページの表 13 に示されています)

コメント記入項目テキスト

コメントとは、EBCDIC 文字セットの任意の文字の組み合わせを含めることができる文字ストリングのことです。これは、プログラムの実行には影響を与えません。コメントには、次の 2 つの形があります。

コメント記入項目

この形式については 69 ページの『オプションの段落』で説明します。

コメント行

この形式については 28 ページの『コメント行』で説明します。

分離文字

分離文字は、1 字の句読文字または句読文字のストリングです。

次に、COBOL 分離文字とその意味についてリストします。

	スペース
,	コンマ
.	ピリオド
;	セミコロン
(左括弧
)	右括弧
"	引用符
==	疑似テキスト分離文字
:	コロンの

IBM 拡張

'	アポストロフィ
B"	ブール・リテラルの開始分離文字
X"	16 進非数字リテラルの開始分離文字
G"	DBCS リテラルの開始分離文字
N"	DBCS リテラルの開始分離文字

NX" 国別 16 進リテラルの開始分離文字
Z" ナル終了非数値リテラル用の開始区切り文字

IBM 拡張 の 終り

分離文字の規則

以下の説明では、各分離文字は大括弧で囲まれています。分離文字または分離文字の一部としてスペースを使用する場合は、どこでも複数のスペースを使用できません。

スペース [b]

スペースは、次の場合を除いて分離文字の直前または直後に使用できます。

- 疑似テキストの開始分離文字 (先行スペースが必要な場合)。
- 引用符内 (または、APOST オプションが有効な場合、アポストロフィ内)。引用符の間のスペースは、分離文字でなく非数値リテラルの一部と見なされません。

ピリオド[.b]、コンマ[,b]、セミコロン[;b]

分離文字ピリオド、分離文字コンマ、または分離文字セミコロンは、ピリオド、コンマ、またはセミコロンとそれに続くスペースから構成されます。分離文字ピリオドが使用できるのは、文の終わりを示すため、または形式で指定された方法による場合だけです。分離文字コンマおよび分離文字セミコロンは、区切りスペースが使用できる所にはどこでも使用できます。

- **見出し部**において、分離文字コンマと分離文字セミコロンは、コメント記入項目の中で使用できます。各段落の終わりは、分離文字ピリオドでなければなりません。
- **環境部**においては、分離文字コンマまたは分離文字セミコロンによって文節および文節の中オペランドを区切ることができます。
SOURCE-COMPUTER、OBJECT-COMPUTER、SPECIAL-NAMES、および I-O-CONTROL の各段落の終わりは、分離文字ピリオドでなければなりません。FILE-CONTROL 段落において、各ファイル制御記入項目は、分離文字ピリオドで終わらなければなりません。
- **データ部**においては、分離文字コンマまたは分離文字セミコロンによって文節および文節の中オペランドを区切ることができます。ファイル (FD) 記入項目、ソート・マージ・ファイル (SD) 記入項目、およびデータ記述記入項目は、それぞれ分離文字ピリオドで終わらなければなりません。
- **手続き部**においては、分離文字コンマまたは分離文字セミコロンによって文の中のステートメント、およびステートメントの中オペランドを区切ることができます。各文および各プロシーチャーは、分離文字ピリオドで終わらなければなりません。

括弧[() . . . ()]

疑似テキスト以外では、括弧は左右の対で使用しなければなりません。括弧は、添え字、一連の関数の引数、参照変更、算術式、および条件を区切ります。

引用符[b"] . . . ["b]

始めの引用符は、スペースまたは左括弧の直後に書かなければなりません。終わりの引用符は、その直後に分離文字 (スペース、コンマ、セミコロン、ピリオド、または右括弧) を書かなければなりません。引用符は、対で使用しなければ

なりません。これにより、リテラルが次の行に続く場合を除いて、非数字リテラルをくくります (27 ページの『継続行』を参照してください)。

IBM 拡張

*APOST コンパイラー・オプション、または APOST PROCESS オプションのもとでは、アポストロフィを引用符の代わりに使用できます。

IBM 拡張 の終り

疑似テキスト分離文字[b==]... リテラル-2 [==b]

始めの疑似テキストの分離文字は、直前にスペースがなければなりません。終わりの疑似テキストの分離文字は、直後に分離文字 (スペース、コンマ、セミコロ、またはピリオド) がなければなりません。疑似テキストの分離文字は、対で使用しなければなりません。これにより疑似テキストをくくります (634 ページの『COPY ステートメント』および 637 ページの『REPLACING 句』を参照してください。)

コロンの [:]

コロンは分離文字で、一般形式で示される場合に必要となります。

IBM 拡張

B" はブール・リテラルを記述するために使用する場合は分離文字です。 **B** は引用符の直前に書かなければなりません。

X" は 16 進数非数字リテラルを記述するために使用される場合は分離文字です。 **X** は引用符の直前に書かなければなりません。

G" は DBCS リテラルを記述するために使用する場合は分離文字です。 **G** は引用符の直前に書かなければなりません。

N" は DBCS リテラルを記述するために使用する場合は分離文字です。 **N** は引用符の直前に書かなければなりません。

NX" は国別 16 進リテラルを記述するために使用される場合は分離文字です。 **NX** は引用符の直前に書かなければなりません。

Z" はヌル終了非数値リテラルを記述するために使用する場合は分離文字です。 **Z** は引用符の直前に書かなければなりません。

IBM 拡張 の終り

注: PICTURE 文字ストリング、コメント文字ストリング、または非数字リテラルに含まれる句読文字は、どれも句読文字とは見なされず、むしろ文字ストリングまたは文字リテラルの部分と見なされます。

第 2 章 セクションおよび段落

セクションおよび段落はプログラムを定義します。これらは、文節とステートメントに分けられます。関連する規則に例外が明示されていない限り、必要な文節またはステートメントを、それぞれ形式に記された順序に従って書く必要があります。オプションの文節またはステートメントを使用する場合には、それらを形式に示された順序で書く必要があります。これらの規則は、コメントとして扱われる文節およびステートメントについても、適用されます。

文法上の階層は、次のようになります。

- 見出し部

段落
記入項目
文節

- 環境部

セクション
段落
記入項目
文節
句

- データ部 (DATA DIVISION)

セクション
記入項目
文節
句

- 手続き部

セクション
段落
文
ステートメント
句

記入項目

記入項目とは、一連の文節で、分離文字ピリオドで終わるものです。

文節

文節とは、記入項目の属性を指定する、連続した COBOL 文字ストリングの順序付きセットです。

文

文とは、1 つまたは複数のステートメントが連続し、分離文字ピリオドで終わるものです。

ステートメント

ステートメントとは、COBOL verb とオペランドの有効な組み合わせのことです。ステートメントは、オブジェクト・プログラムが取るべき処置を示します。種々のステートメントの説明は、次に示す節にあります。

- 285 ページの『命令ステートメント』
- 287 ページの『条件ステートメント』
- 288 ページの『範囲区切りステートメント』
- 633 ページの『第 16 章 コンパイラ指示ステートメント』.

句

プログラムの文節またはステートメントは、それぞれ、**句**と呼ばれる小さい単位に細分できます。

第 3 章 参照形式

COBOL プログラムは、必ず COBOL 参照形式で書く必要があります。図 1 に、COBOL の 80 文字ソース行の参照形式を示します。

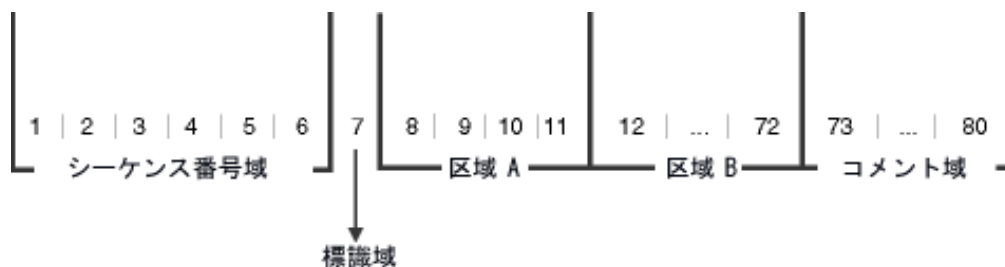


図 1. COBOL ソース行の参照形式

シーケンス番号域 (1 ～ 6 桁目)

シーケンス番号は、COBOL コンパイラーがコンパイルする各ステートメントを識別します。シーケンス番号の使用はオプションであり、コンピューターの文字セットの中の任意の文字で構成できます。シーケンス番号は、どんな順番でもよく、固有である必要はありません。

IBM 拡張

SEQUENCE を指定することにより、コンパイル時に順序検査を行うことができます。

NUMBER オプションを指定した場合には、1 ～ 6 桁目のシーケンス番号が使用されますが、そうでない場合には、ソース・ファイルで与えられるソース・シーケンス番号が使用されます。

IBM 拡張 の終り

標識域 (7 桁目)

標識域は、次のことを指定するために使用します。

- 直前の行から現在行までの行の継続 (27 ページの『継続行』の継続行に関する情報を参照)
- 文書またはコメントとしてのテキストの扱い (28 ページの『コメント行』のコメントに関する情報を参照)
- デバッグ行 (28 ページの『デバッグ行』のデバッグ行に関する情報を参照)

区域 A (8 ~ 11 桁目)

区域 A から始めなければならない項目を次に示します。

- 部のヘッダー
- セクション・ヘッダー
- 段落ヘッダーまたは段落名
- レベル標識 (FD および SD) またはレベル番号 (01 および 77)
- DECLARATIVES および END DECLARATIVES
- END PROGRAM ヘッダー

部のヘッダー

部のヘッダーとは、語の組み合わせの直後に分離文字ピリオドを書き、部の始まりを表すものです。

- IDENTIFICATION DIVISION.
- ENVIRONMENT DIVISION.
- DATA DIVISION.
- PROCEDURE DIVISION.

部のヘッダー (手続き部ヘッダーとともに USING 句が指定された場合を除く) の直後には分離文字ピリオドを書かなければなりません。USING 句を除き、同一行上にテキストがあってはなりません。

セクション・ヘッダー

セクション・ヘッダーとは、一連の段落の始まり (環境部および手続き部内)、または項目の始まり (データ部内) のいずれかのことです。たとえば、前者の場合は FILE-CONTROL があり、後者の場合は、FILE SECTION があります。

セクション・ヘッダーの直後には、手続き部のセグメント番号を指定する場合を除いて、ピリオドを書かなければなりません。(セグメント情報は構文検査だけ実行される。)

段落ヘッダーまたは段落名

段落ヘッダーまたは段落名は段落の始まりを意味します。環境部では、段落ヘッダーとその後に続く 1 つまたは複数の項目によって 1 つの段落が構成されます。手続き部では、段落名とそれに続く 1 つまたは複数の文によって 1 つの段落が構成されます。

レベル標識 (FD および SD) またはレベル番号 (01 および 77)

可能なレベル標識は FD または SD です。レベル標識は区域 A の中から書き始め、その後にスペースがなければなりません。(157 ページの『ファイル・セクション』を参照。) レベル番号は、区域 A から始めなければならない、01 または 77 の値を持つ、1 桁または 2 桁の整数です。詳細は、178 ページの『レベル番号』を参照してください。

DECLARATIVES および END DECLARATIVES

DECLARATIVES および END DECLARATIVES は、ソース・プログラムの宣言を開始および終了させるキーワードです。手続き部では、これらの語をそれぞれ区域 A から書き始め、その直後に分離文字ピリオドを続ける必要があります。同一の行にそれ以外のテキストを書くことはできません。END DECLARATIVES の後では、次のセクション・ヘッダーの前にテキストを書くことはできません。(262 ページの『宣言』を参照してください。)

END PROGRAM ヘッダー

END PROGRAM ヘッダーは、その後にプログラム名および分離文字ピリオドが続き、COBOL プログラムの終わりを表します。プログラム名は、対応する PROGRAM-ID 段落のプログラム名と同一でなければなりません。すべての COBOL プログラムはこのヘッダーで終わらなければなりません (ネストされたプログラムを含まず、一連の COBOL プログラム順序列の別の COBOL プログラムが後に続かない最外部プログラムを除く)。

区域 B (12 ~ 72 桁目)

次に示す項目は、区域 B から始めなければなりません。

- 記入項目
- 文
- ステートメント
- 文節
- 継続行

項目、文、ステートメント、文節

最初の記入項目、文、ステートメント、あるいは文節は、それらに従うヘッダーまたは段落名と同じ行、または次の非ブランク行でコメント行でない行の区域 B から始まります。後続の文または記入項目は、先行する文または記入項目の同一行の区域 B から始まるか、あるいは次の非ブランク行でコメント行でない行の区域 B から始まります。

記入項目や文の中で、区域 B にある後続行は同じ形式であっても、あるいはプログラム論理を明瞭にするために字下げしてもかまいません。出力リストは、入力ステートメントが字下げされている場合にだけ、字下げされます。字下げを行ってもプログラムの意味には影響ありませんが、どれだけ字下げするかは区域 B の幅の制約を受けます。23 ページの『第 2 章 セクションおよび段落』も参照してください。

継続行

複数行必要な文、記入項目、文節、または句は、次に続くコメント行やブランク行でない行の区域 B に続けることができます。後に続く行を持つ行は**継続される行**と呼ばれ、後に続く方の行は**継続行**と呼ばれます。継続行の標識域にはハイフンが含まれている必要がありますが、区域 A はブランクでなければなりません。ハイフンがない場合は、前行の最終文字の後にスペースが 1 つあるものと見なされます。

ある行の標識域にハイフンがある場合には、その継続行の最初の非ブランク文字と継続される行の最後の非ブランク文字の間にはスペースがなく、すぐ後ろに続いているものと見なされます。

継続される行に終わりの引用符のない非数字リテラルがある場合には、継続される行の終わりのすべてのスペース (72 桁目まで) はそのリテラルの一部と見なされます。この継続行の標識域にはハイフンが必要であり、最初の非ブランク文字は引用符でなければなりません。リテラルの継続は、引用符のすぐ後の文字から始まります。継続される行の最後の文字が 72 桁目にある単一引用符である場合、継続行にある最初の 2 つの非ブランク文字は、単一引用符を非数字リテラルの一部として示すために 2 つの連続した引用符でなければなりません。

疑似テキスト分離文字 (==) に関しては、分離文字を構成する 2 つの文字は同一行上になければなりません。

区域 A または区域 B

次の項目は、区域 A または区域 B のいずれからでも開始できます。

- コメント行
- デバッグ行
- ブランク行
- 疑似テキスト
- USE ステートメント以外のコンパイラー指示ステートメント

コメント行

コメント行とは、その行の標識域 (7 桁目) にアスタリスク (*) または斜線 (/) のある任意の行のことです。コメントは、行の区域 A および区域 B のどこにでも書くことができ、EBCDIC 文字セットの任意の文字の組み合わせから構成できます。コメント行は、見出し部ヘッダーの後なら、プログラムの中のどこにあってもかまいません。

複数のコメント行を書くことができます。それぞれの削除行の、標識域にアスタリスク (*) または斜線 (/) を書く必要があります。

アスタリスク (*) のコメント行は、出力リストの中で先行する最後の行にすぐ続いて印刷されます。斜線 (/) コメント行は次ページの最初の行に印刷され、出力リストの現行のページは排出されます。

コンパイラーはコメント行を文書として扱い、構文チェックは行いません。

IBM 拡張

DBCS 文字はコメント行に組み込めますが、次行に続けることはできません。

IBM 拡張 の終り

デバッグ行

デバッグ行とはその行の標識域に 'D' のある任意の行のことです。デバッグ行を書くことができるのは、環境部 (OBJECT-COMPUTER 段落の後)、データ部、および

手続き部の中です。デバッグ行の区域 A と区域 B にスペースしかない場合は、ブランク行と見なされます。74 ページの『WITH DEBUGGING MODE 文節』を参照してください。

ブランク行

ブランク行とは、7 ~ 72 桁目にスペースしかない行のことです。ブランク行は、プログラムの中のどこにあってもかまいません。

疑似テキスト

疑似テキストを構成する文字ストリングおよび分離文字は、区域 A または区域 B のいずれかで始めます。しかし、疑似テキスト開始分離文字に続く行の標識域 (7 桁目) にハイフンがある場合、その行の区域 A はブランクでなければならず、継続行の規則はテキスト語の形成に適用されます。

コンパイラー指示ステートメント

次のコンパイラー指示ステートメントは区域 A または区域 B のいずれからでも開始できます。

```
_____ IBM 拡張 _____  
• *CONTROL(*CBL)  
_____ IBM 拡張 の終り _____
```

• COPY

```
_____ IBM 拡張 _____  
• EJECT  
_____ IBM 拡張 の終り _____
```

• PROCESS
• REPLACE

```
_____ IBM 拡張 _____  
• SKIP1/2/3  
• TITLE  
_____ IBM 拡張 の終り _____
```

コメント域 (73 ~ 80 桁目)

コメント域は、ユーザーが自由に使用できます。たとえば、自分のプログラムを識別するために使用します。

第 4 章 データ参照と名前の有効範囲

データ参照と名前の有効範囲の一般的な概念は、COBOL の構文を効率的にまた正しく使用するために重要です。名前の有効範囲は、COBOL プログラムでネストを使用する場合に特に大切です。

このセクションの最初の部分では、データ参照の次の 5 つの方法に注目します。

- 修飾
- 添え字付け
- 参照変更
- 関数 ID
- ユーザー定義データ・タイプ

このセクションの後半では、名前の有効範囲について主に説明します。

データ参照の方法

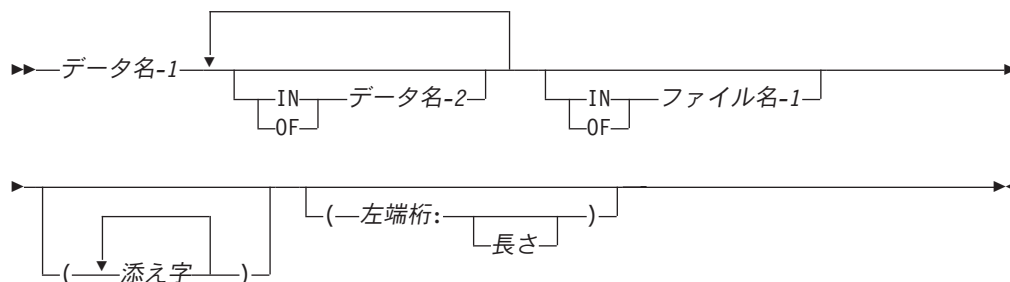
データおよびプロシージャは、明示的または暗黙的のいずれかで参照できます。

COBOL プログラムのユーザー定義名はすべて、データ処理の問題を解決する目的でリソースに名前を付けるためのものです。リソースを使用するためには、COBOL プログラムのステートメントに、そのリソースを固有に識別する参照を書かなければなりません。参照の固有性を確実にするために、ユーザー定義名の修飾や添え字付けまたは参照変更を行うことができます。しかし、この点を考慮する前に、**ID** という用語を理解しておく必要があります。

ID

構文図で **ID** という語は、プログラムの中で固有でなければ参照の固有性のために必要な場合には、修飾子、添え字、または参照修飾子を構文上正しく組み合わせ、後に続けたユーザー定義名のことを指しています。

形式 1 - ID



データ名-1、データ名-2

レコード名とすることができます。

ファイル名-1

データ部の FD または SD 項目によって識別されなければなりません。

ファイル名-1 は固有に識別できなければなりません。

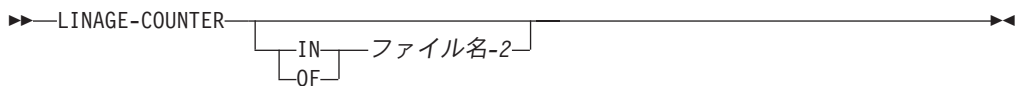
次の規則が適用されます。

- 修飾を行ってもデータ名が固有にならないところでは、データ名を重複して指定できません。
- 同じプログラムにおいて、レベル番号が 01 の 2 つの項目に対するデータ記述記入項目が同じデータ名を持つ場合、そのどちらの記入項目にも EXTERNAL 文節を適用できません。
- 同じデータ部の場合、同じデータ名を指定された 2 つのデータ項目のデータ記述記入項目に GLOBAL 文節を入れてはなりません。

ID には、**LINAGE-COUNTER** と条件名という 2 つの特殊なケースがあります。

LINAGE-COUNTER

形式 2 - LINAGE-COUNTER



LINAGE-COUNTER

ソース・プログラム内に LINAGE 文節を含むファイル記述記入項目が複数指定されている場合は、参照のたびに修飾しなければなりません。

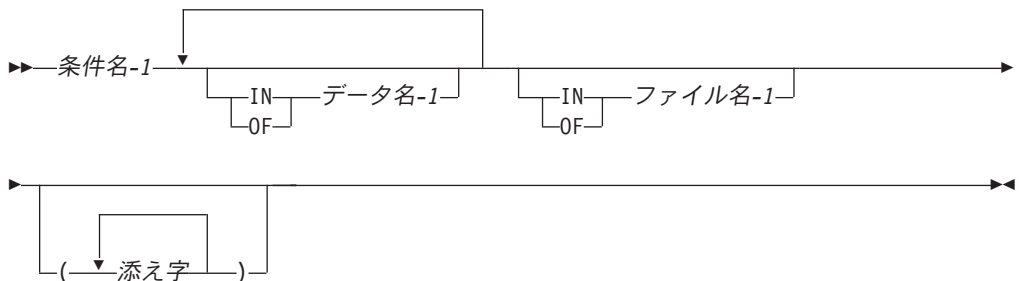
ファイル名-2

データ部の FD 記入項目によって識別されなければなりません。

ファイル名-2 は当該プログラムの中で固有のものでなければなりません。

条件名

形式 3 - 条件名



条件名-1

環境部の構成セクションの中の、データ部または SPECIAL-NAMES 段落で定義できます。条件名が構成セクションで定義されている場合、構成セクションを含むプログラムまたはネストしたプログラムの中で参照できます。条件名がデータ

部で定義されている場合、グローバル名またはローカル名の有効範囲規則に従って参照できます（48 ページの『グローバル名とローカル名』を参照してください）。

明示的に参照される場合、条件名は固有でなければならず、また名前の有効範囲規則そのものが参照の固有性を保証している場合を除き、修飾または添え字付け（あるいはその両方）によって固有になるようにする必要があります。

条件名を固有にするために修飾を使用する場合、最初の修飾子として関連する条件変数を使用できます。修飾を使用する場合、条件名を固有にするために、条件変数に関連した名前の階層を使用する必要があります。

条件変数を参照するために添え字付けが必要な場合、その条件名のいずれかを参照するには、同様の組み合わせの添え字付けも必要です。

条件名に修飾と添え字付けを組み合わせる場合の形式と制限は、データ名-1 を条件名-1 に置き換えるということを除き、「ID」の場合とまったく同じです。

以下に続く章にある一般的な形式の中で、「条件名」は、必要に応じて修飾されたり、添え字付けされた条件名を指しています。

データ名-1

レコード名とすることができます。

ファイル名-1

データ部の FD または SD 項目によって識別されなければなりません。

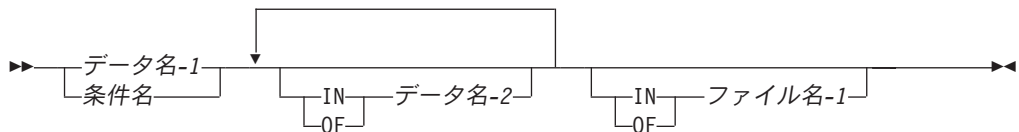
ファイル名-1 は当該プログラムの中で固有のものでなければなりません。

修飾

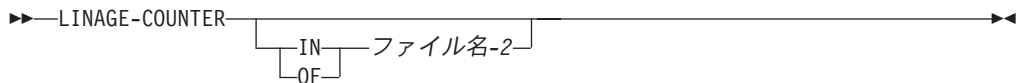
名前の階層の中に名前が存在し、その階層の中にある 1 レベルまたはそれ以上高いレベルの名前を指定することによってその名前が識別できる場合には、名前を固有にすることができます。この場合の高いレベルの名前を**修飾子**と呼び、このような手順で名前を固有にすることを**修飾**と呼びます。

ユーザー指定の名前の後に 1 つまたは複数の句を書き、それぞれの句は語 IN または OF の後に修飾子を付けて構成することによって、修飾が指定されます。（IN と OF は論理的に同じです。）

データ部の名前への参照 - 形式 1



データ部の名前への参照 - 形式 2



どの階層においても、最高レベルに関連するデータ名は固有でなければならず、その名前を修飾することはできません。

名前を固有にするためには、十分な修飾を指定する必要がありますが、階層のすべてのレベルを指定する必要はありません。たとえば、そのレコードに EMPLOYEE-NO フィールドの入ったファイルが 1 つまたは複数あるが、そのうち 1 つだけが MASTER-RECORD と名付けられたレコードをもっている場合、次のようになります。

- EMPLOYEE-NO OF MASTER-RECORD は、EMPLOYEE-NO の修飾には十分です。
- EMPLOYEE-NO OF MASTER-RECORD OF MASTER-FILE は有効ですが、このような修飾を行う必要はありません。

データ部の名前への参照

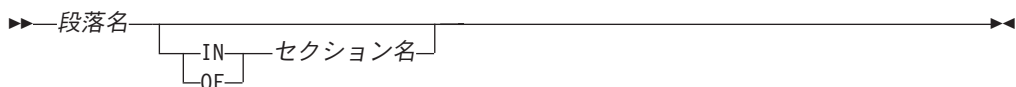
プログラム内で明示的に参照されるデータ部の名前は、固有に定義されたものであるか、または修飾によって固有にされたもののいずれかでなければなりません。参照されないデータ名は固有に定義する必要はありません。

レベル番号 01、あるいはファイル・セクション内の FD または SD レベル標識と関連しているデータ名は、データ階層内では最高レベルに位置します。このようなデータ名を参照する場合は、そのデータ名は固有に定義されていなければなりません。なぜなら、そのようなデータ名を修飾することはできないからです。なぜなら、そのようなデータ名を修飾することはできないからです。レベル番号が 02 ~ 49 のデータ項目は、データ階層内のレベルは順次下がっていきます。そのような項目を参照するときは、固有に定義されたものであるか、または修飾によって固有にできるもののいずれかでなければなりません。レベル 77 のデータ名を参照するときは、そのデータ名を修飾することはできないので、必ず固有に定義しておかなければなりません。

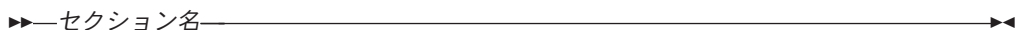
手続き部の名前への参照

明示的に参照される場合、セクション内では段落名を重複させることはできません。段落名をセクション名で修飾する場合は、SECTION という語を書いてはなりません。段落名をそれが書かれているセクション内で参照する場合は、修飾の必要はありません。プログラムに書かれる段落名またはセクション名は、他のプログラムからは参照できません。264 ページの『セクション』で説明しているセクション名は、段落名に対して使用可能な最高位の (そして唯一の) 修飾子であり、固有でなければなりません。

手続き部の名前への参照 - 形式 1



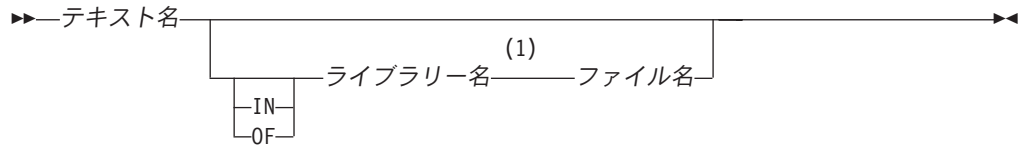
手続き部の名前への参照 - 形式 2



COPY ライブラリーへの参照

コンパイル中に複数の COBOL ライブラリーを使用できる場合は、テキスト名は参照されるたびに修飾できます。

COPY ライブラリーへの参照 - 形式 3



注:

- 1 ファイル名を修飾する場合は、ライブラリー名とファイル名の間にハイフンが必要です。

COPY ライブラリーの参照の規則については 634 ページの『COPY ステートメント』を参照してください。

修飾の規則

名前の修飾に関する規則を次に示します。

- 名前は、その必要がない場合でも、修飾できます。
- 各修飾子は、修飾する名前より高いレベルでなければならず、同じ階層内になければなりません。

たとえば、次のとおりです。

```
01 FIELD-A
  02 FIELD-B
    05 SUB1
      07 SUB2
  02 FIELD-C
    07 SUB1
```

階層には、同じかまたはより高いレベル番号が次に現れるまでのすべての従属記入項目が含まれます。したがって、上記の例ではすべての記入項目が FIELD-A の階層に含まれます。FIELD-B から FIELD-C の前までのすべての記入項目、ただし組み込まれているものではないものが FIELD-B の階層に含まれます。

FIELD-A の階層では、SUB1 を 2 回使用できます。1 回は FIELD-B に従属するものとして、さらにもう 1 回は FIELD-C に従属するものとして使用できます。SUB-1 を参照する場合には、SUB-1 OF FIELD-B または SUB-1 OF FIELD-C のように修飾しなければなりません。FIELD-B または FIELD-C では、SUB1 は自分自身に従属することはできません。

- 1 つのデータ名の全修飾子のリストは、別のデータ名の修飾子の部分的リストと同じであってはなりません。
- 1 つのデータ名または条件名が複数のデータ項目に割り当てられている場合は、そのデータ項目を参照するたびに修飾しなければなりません。(1 つ例外がありますので 221 ページの『REDEFINES 文節』を参照してください。)
- 修飾により参照を固有にできる場合は、指定されたプログラムまたはコンパイル単位の複数の場所でデータ名を定義できます。

- 固有性を確実にする修飾子の組み合わせが 2 組以上存在する場合には、どの組み合わせを使用してもかまいません。
- プログラム内でセクション名を参照する場合は、セクション名は固有でなければなりません。
- プログラム内で段落名を参照する場合、段落名はセクションの中で固有でなければなりません。段落名をセクション名で修飾する場合は、SECTION という語を書いてはなりません。段落名をそれが書かれているセクション内で参照する場合は、修飾の必要はありません。
- ソース・プログラム内に LINAGE 文節を含むファイル記述記入項目が複数指定されている場合は、LINAGE-COUNTER は参照するたびに修飾しなければなりません。
- ライブラリー名はシステム内で固有でなければなりません。したがって、ライブラリー名の上位 10 文字は固有でなければなりません。
- テキスト名 (メンバー名) は、それが属するライブラリー名およびファイル名によって修飾しなければなりません。(ライブラリー名とファイル名の間には、スペースを入れずにハイフンを置くことが必要です。) ライブラリーが指定されない場合は、ライブラリー・リストが検索されます。ファイル名が指定されない場合は、QCBLLSRC が使用されます。

IBM 拡張

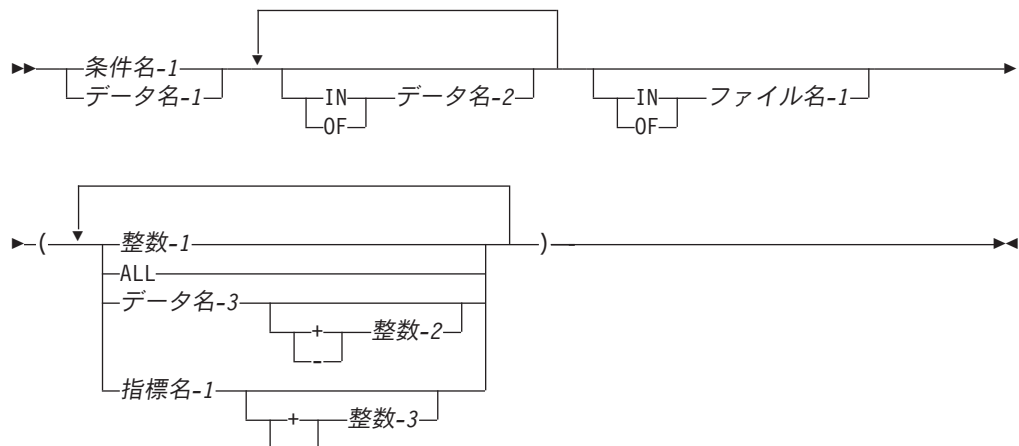
形式 1 の COPY ステートメントでは、ファイル名の指定はオプションです。ファイル名が指定されない場合のデフォルトは QCBLLSRC です。

IBM 拡張 の 終り

添え字付け

添え字付けとは、正の整数を使用してテーブル参照を行う手法のことです。添え字とは、テーブル・エレメントのオカレンス番号を指定する正の整数値 (または整数データ項目) です。

添え字付け - 形式



条件名-1

OCCURS 文節を含むデータ記述記入項目に従属する必要があります。

データ名-1

OCCURS 文節を含んでいるか、または OCCURS 文節を含むデータ記述記入項目に従属する必要があります。

整数-1

符号付きでもかまいません。符号付きの場合には、正でなければなりません。

ALL

さまざまな数の引数を認める関数の、関数引数として使用されます。添え字付き ID が関数の引数として使用されるときのみ使用でき、条件名が指定されているときには使用できません。

データ名-3

整数を表す数字基本項目でなければなりません。

データ名-3 は修飾できます。

指標名-1

指標名を指定している INDEXED BY 句を含む、参照されているテーブルの階層のデータ記述記入項目に対応します。

整数-2、整数-3

符号のない整数でなければなりません。

括弧で囲まれた添え字は、テーブル・エレメントの名前の修飾を直後に続けて書きます。このような参照の添え字の数は、そのエレメントが参照されているテーブルの次元の数と等しくなければなりません。すなわち、データ名そのものも含めて、データ名の入っている階層の各 OCCURS 文節に 1 つの添え字がなければなりません。

複数の添え字が必要とされるときには、それらはデータ編成を含めた小さい方の次元から連続した順序で書かれます。複数の次元のテーブルが連続するネストされたテーブルであると見なされ、ネストの一番外側のテーブルが大テーブルで、一番内側が小テーブルであると見なされる場合、添え字は大、中、小の順番で左から右へ書かれます。

たとえば、TABLE-THREE が次のように定義されている場合、

```
01 TABLE-THREE.  
   05 ELEMENT-ONE OCCURS 3 TIMES.  
     10 ELEMENT-TWO OCCURS 3 TIMES.  
       15 ELEMENT-THREE OCCURS 2 TIMES    PIC X(8).
```

TABLE-THREE への有効な添え字付き参照は次のとおりです。

ELEMENT-THREE (2 2 1)

項目への参照は、その項目がテーブル・エレメントまたはテーブル・エレメントに関連した項目または条件名でなければ、添え字付きにはなりません。

各テーブル・エレメント参照は、次のような参照が行われる場合を除き、添え字を付ける必要があります。

- USE FOR DEBUGGING ステートメントの中

- SEARCH ステートメントのサブジェクトとして
- REDEFINES 文節の中
- OCCURS 文節の KEY IS 句の中
- LIKE 文節の中

添え字によって表される最低の許容オカレンス数は 1 です。どのような特定の場合でも最高の許容オカレンス数は、OCCURS 文節で指定される項目のオカレンスの最大数です。

整数またはデータ名を使った添え字付け

整数またはデータ名が添え字を表すために使用されるとき、それらは異なったテーブル内の項目を参照するために使用できます。これらのテーブルは、同じサイズのエレメントを持つ必要はありません。同じ整数またはデータ名を、1 つの項目を持つ唯一の添え字および別の項目を持つ複数の添え字の中の 1 つとして表すことができます。各データ名は、修飾できますが、添え字付きまたは指標付きとすることはできません。たとえば、TABLE-THREE への有効な添え字付き参照には次のものがあります (SUB1、SUB2、および SUB3 はすべて、SUBSCRIPT-ITEM に従属する項目であると想定します)。

```
ELEMENT-THREE (SUB1 SUB2 SUB3)
ELEMENT-THREE IN TABLE-THREE (SUB1 OF SUBSCRIPT-ITEM, SUB2 OF
SUBSCRIPT-ITEM, SUB3 OF SUBSCRIPT-ITEM)
```

指標名を使用した添え字付け (指標付け)

指標付けにより、テーブル検索や特定項目の操作などの操作を行うことができます。指標付けを使用するには、データ記述記入項目に OCCURS 文節が入っているデータ記述記入項目に 1 つまたは複数の指標名を関連付けます。指標名と関連する指標は添え字として機能し、その値は指標名と関連する項目のオカレンス番号に対応します。

テーブルと関連する指標名を識別する INDEXED BY 句は、OCCURS 文節のオプションの部分です。指標名の定義は完全にシステム依存なので、指標名を記述する別の項目はありません。指標名は、このプログラムだけが使用するためにコンパイラーが生成したレジスターと考えることができます。指標名はデータまたはデータ階層の一部ではなく、COBOL プログラムの中で固有でなければなりません。

各指標名は、ユーザー定義語の形成規則に従っていなければなりません。

各指標名は、コンパイラーが生成したレジスターまたは記憶域を指します。

オブジェクト時の指標の初期値が定義されないときは、指標は添え字として使用される前に初期設定されなければなりません。指標の初期値は以下のいずれかにより割り当てられます。

- VARYING 句を伴う PERFORM ステートメント
- ALL 句を伴う SEARCH ステートメント
- SET ステートメント

CALL ステートメントの USING 句のパラメーターとしてまたは関係条件比較の中で指標名を参照できるのは、PERFORM、SET、または SEARCH ステートメントだけです。

テーブル・エレメントまたはテーブル・エレメント内の項目を参照する添え字としての整数またはデータ名を使っても、そのテーブルに関連付けられている指標に変化はありません。

指標名は、INDEXED BY 句によって関連付けられるテーブルだけへの参照として使用できます。

テーブルの形式内に配列されるデータは、しばしば検索されます。SEARCH ステートメントには、逐次検索および非逐次 (たとえば、2 進) 検索の機能があります。これは、特定の条件を満たすテーブル・エレメントの検索およびそのテーブル・エレメントを示す関連した指標の値の調整に使用されます。

指標値が実行時に有効であるためには、指標値は、オカレンス番号が 1 以上であり、かつ許容できる最高値以下のテーブル・エレメントのオカレンスに対応している必要があります。

指標名についての詳細は、OCCURS 文節の INDEXED BY 句に記述されています。196 ページの『INDEXED BY 句』を参照してください。

相対添え字付け

相対添え字付けの場合、テーブル・エレメントの名前の後に、データ名または指標名の次に + または - の演算子と符号なしの整数リテラルという形式の添え字が続きます。演算子の + および - の前後には、スペースを置かなければなりません。添え字にデータ名が入っている場合、添え字の値は、データ名が整数の値によって設定された後の値と同じ値になります。添え字に指標名が入っている場合、整数はオカレンス番号と見なされ、指標名への加算や減算の前に指標値に変換されます。相対指標付けの使用によって、オブジェクト・プログラムが指標の値を変化させることはありません。

指標の値は、指標データ項目の値を保管することによってオブジェクト・プログラムへアクセス可能にすることができます。指標データ項目は、USAGE IS INDEX 文節を含んでいるデータ記述記入項目によってプログラムに記述されます。指標値は、SET ステートメントを実行することによって指標データ項目に移されます。

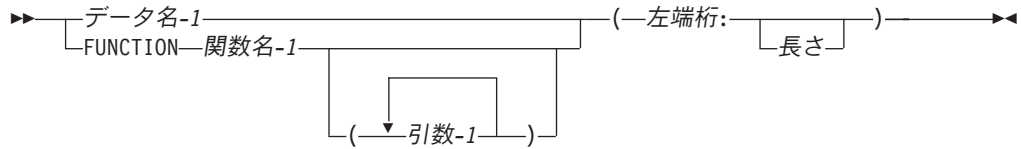
有効な指標値は、オカレンス番号が 1 以上で許容できる最高の値以下のテーブル・エレメントのオカレンスに対応していなければなりません。

指標名についての詳細は、OCCURS 文節の INDEXED BY 句に記述されています。196 ページの『INDEXED BY 句』を参照してください。

参照変更

参照変更は、他のコンピューター言語におけるサブstring化と類似しています。参照変更は、データ項目の開始桁と長さを指定することによって、データ項目を定義します。

形式



データ名-1

使用法が DISPLAY、DISPLAY-1、または NATIONAL として暗黙に、または明示的に定義されているデータ項目を参照する必要があります。データ名-1 には修飾や添え字付けができます。

IBM 拡張

ブール・データ項目を参照することはできません。

TYPE 文節を使用して定義した項目を参照してはなりません。

IBM 拡張 の終り

関数名-1

引数を含む、英数字関数、DBCS 関数、または国別関数でなければなりません。

詳細は 587 ページの『第 15 章 組み込み関数』を参照してください。

引数-1

引数-1 は、ID、リテラル (表意定数以外)、または算術式でなければなりません。

左端桁

算術式でなければなりません。左端桁の位置の評価結果は、データ名-1 または関数名-1 によって参照されるデータ項目内の文字数以下である正の非ゼロ整数にならなければなりません。

長さ

算術式でなければなりません。

左端桁と長さの和から 1 を引いた値は、データ名-1 または関数名-1 によって参照されるデータ項目内の文字数以下でなければなりません。長さを省略すると、使用される長さは、データ名-1 または関数名-1 によって参照されるデータ項目内の文字数に 1 を加え、さらにそこから左端桁を引いた値と同じになります。長さの評価の結果は、正の非ゼロの整数でなくてはなりません。

注: 算術式の結果が固定小数点の非整数の場合は、切り捨てが行われて整数になります。算術式の結果が浮動小数点の非整数の場合は、丸めが行われて整数になります。

IBM 拡張

DBCS または国別データ項目の場合、桁および長さは 2 バイト文字の数を参照します。

IBM 拡張 の終り

参照変更は、ID による英数字、DBCS、または国別データ項目の参照が認められるところでは、許可されるのが普通です。

IBM 拡張

日時クラスのデータ項目を参照変更することはできません。

IBM 拡張 の終り

データ名-1 または関数名-1 が参照するデータ項目の各文字には、左端桁から右端桁へ 1 ずつ増分する序数が割り当てられます。左端桁には序数 1 が割り当てられます。データ名-1 のデータ記述項目に SIGN IS SEPARATE 文節が含まれている場合、符号の桁にはそのデータ項目内の序数が割り当てられます。

参照変更は、データ名-1 または関数名-1 およびその引数によって参照されるデータ項目のサブセットとその引数である固有のデータ項目を作成します。この固有データ項目は、JUSTIFIED 文節なしの基本項目と見なされます。

データ名-1 が参照変更される場合、固有データ項目は、データ名-1 によって参照されるデータ項目に対して定義されたものと同じクラスとカテゴリを持っています。しかし、データ名-1 のカテゴリが数字、数字編集、英数字編集、または外部浮動小数点である場合、固有データ項目のクラスとカテゴリは英数字です。

関数が参照変更される場合、固有データ項目は、関数の引数によって英数字、DBCS、または国別のクラスおよびカテゴリを持ちます。

長さが指定されない場合、作成された固有のデータ項目は、左端桁によって識別された文字から、データ名-1 または関数名-1 によって参照されたデータ項目の右端桁までの範囲となります。

オペランドの計算

1 つのオペランドの参照変更は次のように計算されます。

- オペランドに対して添え字付けが指定されている場合、参照変更の計算は添え字の計算直後に行われます。
- オペランドに対して添え字付けが指定されていない場合、参照変更の計算は、もし添え字が指定されていたとしたら添え字付けが計算されるであろうときに行われます。オペランドに対して ALL 添え字付けが指定されている場合、テーブルの暗黙的に指定された各エレメントに対して、参照変更が適用されます。
- 組み込み関数に参照変更が指定されている場合には、参照変更の評価は、関数の評価の直後に行われます。

参照変更の例

この例では、変数 whole-name 内の最初の 25 字を、変数 last-name に転送しています。

```
MOVE whole-name(1:25) TO last-name
```

範囲エラー

範囲外の参照変更コンポーネント、たとえば左端の桁がゼロの場合などには、システム・メッセージが生成されます。これは、添え字範囲や文字ストリング境界内で

のエラーを知らせるメッセージと同じものです。(このメッセージは、CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドで RANGE オプションが指定された場合にだけ生成されます。)

参照変更に関する制約事項

IBM 拡張

INDICATORS 句は参照変更をサポートしません。

IBM 拡張 の終り

次の制約事項は以下にリストするステートメントに適用されます。

ステートメント

制約事項

STRING

ID-3 の参照変更は不可。

UNSTRING

ID-1 の参照変更は不可。

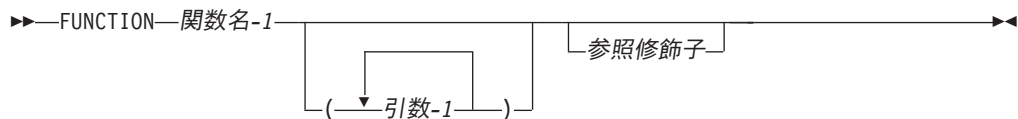
START

データ名-1 の最終オカレンスのに参照変更が可。

関数 ID

関数 ID は、関数の評価で得られるデータ項目を固有に参照する、文字ストリングと分離文字の構文的に正しい文字ストリングです。

形式



引数-1

ID、リテラル (表意定数以外)、または算術式でなければなりません。

関数名-1

関数名-1 は、組み込み関数名の 1 つでなければなりません。

詳細は 587 ページの『第 15 章 組み込み関数』を参照してください。

参照修飾子

英数字関数、DBCS 関数、または国別関数にだけ指定できます。

英数字項目への参照

英数字関数を参照する関数 ID は、ID が認められていて、関数への参照が特に禁じられていない場合は、どの場所においても指定できますが、次の場合を除きます。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定する場合。

- データ項目が特定の特性 (クラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、および暗黙的値など) を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定されている特定の引数がこれらの特性を持たない可能性がある場合。

整数への参照

整数または数字関数への参照を行う関数 ID は、算術式が使用できるのであればどこでも使用できます。

DBCS 項目への参照

IBM 拡張

DBCS ID が認められていて、一般形式に関する規則で特に関数への参照が禁止されていない場合は、一般形式のどの場所においても DBCS 関数を指定できますが、次の場合を除きます。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定する場合。
- 一般形式に関する規則で、参照されているデータ項目が特定の特性 (クラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、および暗黙的値など) を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定された特定の引数が、これらの特性を持たない可能性がある場合。

DBCS 関数の参照変更が認められています。関数に参照変更が指定されている場合には、参照変更の評価は、関数の評価の直後に行われます。

DBCS 関数は、DBCS 引数を認めている関数の引数として参照できます。

IBM 拡張 の終り

国別項目への参照

IBM 拡張

国別 ID が許可されており、一般形式に関連する規則で特に関数への参照が禁止されていない場合は、一般形式のどの場所においても国別 ID を指定できますが、次の場合を除きます。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定する場合。
- 一般形式に関する規則で、参照されているデータ項目が特定の特性 (クラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、および暗黙的値など) を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定された特定の引数が、これらの特性を持たない可能性がある場合。

国別関数の参照変更が認められています。関数に参照変更が指定されている場合には、参照変更の評価は、関数の評価の直後に行われます。

国別関数は、国別引数を認めている関数の引数として参照できます。

IBM 拡張 の終り

日時項目への参照

IBM 拡張

日時 ID が許可されており、一般形式に関連する規則で特に関数への参照が禁止されていない場合は、一般形式のどの場所においても日時関数を指定できますが、次の場合を除きます。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定する場合。
- 一般形式に関する規則で、参照されているデータ項目が特定の特性 (クラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、および暗黙的値など) を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定された特定の引数が、これらの特性を持たない可能性がある場合。

日時関数は、日時を引数として取ることができる関数の引数として参照できます。

IBM 拡張 の終り

ブール項目への参照

IBM 拡張

ブール ID が許可されており、一般形式に関連する規則で特に関数への参照が禁止されていない場合は、一般形式のどの場所においてもブール関数を指定できますが、次の場合を除きます。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定する場合。
- 一般形式に関する規則で、参照されているデータ項目が特定の特性 (クラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、および暗黙的値など) を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定された特定の引数が、これらの特性を持たない可能性がある場合。

ブール関数は、ブール値を引数として取ることができる関数の引数として参照できます。

IBM 拡張 の終り

ユーザー定義データ・タイプ

IBM 拡張

ユーザー定義データ・タイプ (またはタイプ名) は TYPEDEF 文節を含む 01 レベルの基本項目またはグループ項目です。このような項目にストレージが割り振られることはありません。これは、データ名とそれに従属する項目を記述するテンプレートと見なすことができます。したがって、タイプ名を TYPE 文節内で指定することにより、データ名 (または別のタイプ名) を定義することが可能です。このようにして定義したデータ名は、TYPE 文節内で指定したタイプ名の特性を持つことになります。このタイプ名がグループ項目の場合は、定義されたデータ名にはそのタイプ名に従属する項目と同じ名前、階層、および特性を持つ項目が従属します。

ユーザー定義データ・タイプを使用して TYPE 文節でデータ名 (またはタイプ名) を定義する際に、その TYPE 文節と他の文節との論理積をとってこのデータ名の記述を完全なものにすることができます。ただし、そのために使用できるのは以下の文節だけです。

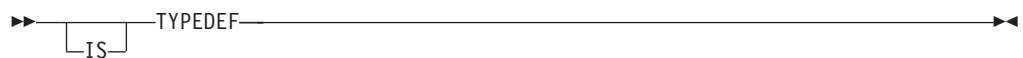
- EXTERNAL 文節
- GLOBAL 文節
- OCCURS 文節
- TYPEDEF 文節
- VALUE 文節

タイプ名の有効範囲に関する規則は、データ名の場合の規則と同じです。

TYPE 文節と TYPEDEF 文節の詳細については 233 ページの『TYPE 文節』および 234 ページの『TYPEDEF 文節』を参照してください。

TYPEDEF 文節

TYPEDEF 文節では、ユーザー定義データ・タイプ (タイプ名) となる基本データ項目またはグループ・データ項目を宣言します。いったん定義したタイプ名は、その後他のデータ項目を定義するために (TYPE 文節内で) 使用できます。



TYPE 文節

TYPE 文節では、ユーザー定義データ・タイプ (タイプ名) を使用してデータ項目を定義できます。これは (TYPEDEF 文節を使用して宣言した) タイプ名を TYPE 文節内で指定することによって行います。そのタイプ名がグループ項目の場合は、定義するデータ項目も同様にグループ項目となります。この場合、このデータ項目に從属する記入項目の名前、階層および特性は、当該のタイプ名に從属する記入項目のそれらと対応します。



タイプ名-1

対象とするデータ名を定義するために使用するタイプ名

IBM 拡張 の終り

名前の有効範囲

このセクションでは、COBOL 名のタイプについて簡潔に説明し、次に名前有効範囲の規則を説明します。

名前のタイプ

英字名

英字名は、特定の文字セット、または環境部の SPECIAL-NAMES 段落の照合順序 (あるいはその両方) に名前を割り当てます。

クラス名

クラス名は、真理値を定義できる環境部の SPECIAL-NAMES 段落の前置詞に名前を割り当てます。

条件名

条件名は、値と条件変数を関連付けます。

定数名

定数名は定数を示すもので、データ部で定義されます。

データ名

データ名はデータ項目の名前です。

ファイル名

ファイル名はファイル・コネクタの名前です。

指標名

指標名は特定のテーブルに関連した指標の名前です。

ライブラリー名

ライブラリー名は指定されたソース・プログラムのコンパイル時にコンパイラーが使用する COBOL ライブラリーの名前です。

簡略名

簡略名は実装者名にユーザー定義語を割り当てます。

段落名

段落名は手続き部の段落の名前です。

プログラム名

プログラム名は、外部または内部の (ネストされた) プログラムの名前です。

51 ページの『プログラム名に関する規則』を参照してください。

レコード名

レコード名はレコードの名前です。

セクション名

セクション名は手続き部にあるセクションの名前です。

シンボリック文字

シンボリック文字はユーザー定義の表意定数を指定します。

テキスト名

テキスト名は、COPY 指示ステートメントによって使用されるソース・メンバーを含むライブラリーを示す名前です。

IBM 拡張

タイプ名

タイプ名は、TYPE 文節内でデータ項目の定義に使用することができるユーザー定義データ・タイプを命名します。

ネストされたプログラム

COBOL プログラムには、他の COBOL プログラムを含めることができます。含まれた (つまりネストされた) プログラムにさらに別のプログラムが含まれている場合もあります。そのような場合には、あるプログラムに直接含まれるプログラムと間接的に含まれるプログラムが存在することになります。

図 2 は、直接のおよび間接的に含まれたプログラムのプログラム構造を説明しています。

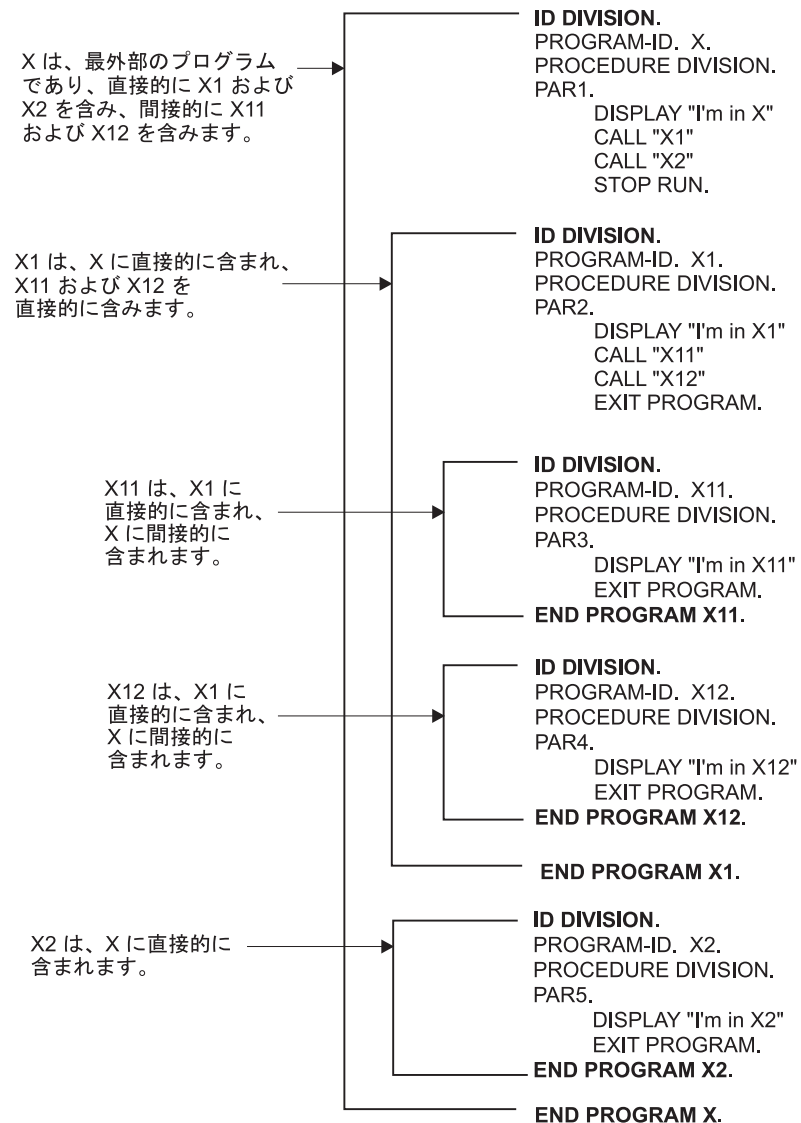


図 2. 直接的または間接的に含まれたプログラムのネストされたプログラム構造

異なるプログラムで異なるオブジェクトを定義するために、同じユーザー定義語を使用できます。特定のプログラムの場合、オブジェクトへの参照は常にそのプログラムの中で定義されたオブジェクトを参照します。

グローバル名とローカル名

名前にはグローバル属性またはローカル属性を含めることができます。名前の中には常にグローバルであるものもあれば、常にローカルであるものもあります。また、ローカルになるかグローバルになるかは名前が宣言されたプログラムで行う指定によって決まるという名前もあります。

プログラムは、それに含まれているプログラム内で宣言されたどの条件名、データ名、ファイル名、指標名、段落名、レコード名、セクション名、またはタイプ名も、参照することはできません。

グローバル名は、その名前が宣言されたプログラム内か、グローバル名を宣言したプログラムを含む他のプログラム内のいずれかで関連したオブジェクトを参照するために使用されます。

しかし**ローカル名**は、そのローカル名を宣言したプログラム内だけから関連したオブジェクトを参照します。

データ名、レコード名、条件名、タイプ名、またはファイル名がグローバルとして宣言されていない場合は、その名前はローカルです。

注: 特定の規則では、あるデータ記述記入項目、ファイル記述記入項目、またはレコード記述記入項目に対して GLOBAL 文節の指定を禁止する場合があります。

定数名

GLOBAL 文節が指定されている場合、定数名はグローバルです。

データ名

GLOBAL 文節が、データ名を宣言したデータ記述記入項目またはデータ記述記入項目が従属である別の記入項目のいずれかで指定された場合、そのデータ名はグローバルです。

ファイル名

ファイル名は、そのファイル名のファイル記述記入項目に GLOBAL 文節が指定されていると、グローバル名になります。

1 つの実行単位内の 2 つのプログラムは、次の状況の下では共通ファイル・コネクタを参照できます。

1. 外部ファイル・コネクタは、そのファイル・コネクタを記述したどのプログラムからでも参照できます。
2. プログラムが別のプログラムに含まれている場合、両方のプログラムは共通ファイル・コネクタを参照できます。それは、ファイル・コネクタのあるプログラムか、ファイル・コネクタのあるプログラムを直接的または間接的に含んだプログラムのいずれかで宣言された関連グローバル・ファイル名を参照することによって行われます。

レコード名

レコード名がグローバルになるのは、そのレコード名を宣言したレコード記述記入項目に GLOBAL 文節が指定されているときか、またはファイル・セクションのレコード記述記入項目の場合は、そのレコード記述記入項目と関連したファイル名のファイル記述記入項目に GLOBAL 文節が指定されているときです。

条件名

データ記述記入項目が GLOBAL 文節を指定する別の記入項目に従属する場合、条件名はグローバルで、データ記述記入項目に宣言されます。

条件名は、構成セクション内で宣言されるとき、常にグローバルです。

プログラム名

プログラム名はローカルでもグローバルでもありません。 51 ページの『プログラム名に関する規則』を参照してください。

セクション名および段落名

これらの名前は常にローカルです。

ライブラリー名およびテキスト名

これらの名前はプログラムに対して外部であり、どの COBOL プログラムからでも参照できます。またコンパイラ・システムは関連ライブラリーをサポートしており、参照されたエンティティーがそのシステムに分かるようになっていません。

英字名

英字名は常にグローバルです。

クラス名

クラス名は常にグローバルです。

簡略名

簡略名は常にグローバルです。

指標名

グローバル属性を持つデータ項目が指標によりアクセスするテーブルを含む場合、その指標もグローバル属性を持ちます。そのため、指標名の有効範囲はテーブル名を付けるデータ名の有効範囲と同一になります。そのテーブルの指標への命名はその指標名によって行われ、データ名の名前の規則の有効範囲が適用されます。指標名を修飾することはできません。

IBM 拡張

タイプ名

あるタイプ名が宣言されているデータ記述記入項目内に GLOBAL 文節が指定されている場合は、そのタイプ名はグローバルです。ただし、タイプ名の GLOBAL 属性はそのタイプ名のみ制限されるため、そのタイプ名を使用して TYPE 文節で定義したデータ項目がその属性を獲得することはありません。

IBM 拡張 の終り

外部オブジェクトと内部オブジェクト

アクセス可能なデータ項目には通常、保管されたデータの一定の表示が必要です。ファイル・コネクタには通常、保管されたファイルについての情報が必要です。データ項目またはファイル・コネクタに関連したストレージは、オブジェクトを宣言したプログラムの外部または内部に取ることができます。

オブジェクトに関連したストレージが、実行単位内の特定プログラムではなく実行単位に関連している場合、データ項目またはファイル・コネクタは外部オブジェ

クトです。外部オブジェクトは、オブジェクトを記述する実行単位内のプログラムによって参照されることがあります。同一の名前を持つオブジェクトの個々の記述を使って、異なるプログラムから外部オブジェクトを参照するとき、それらのオブジェクトは常に同一になります。実行単位には、ただ 1 つの外部オブジェクトの表示だけがあります。

オブジェクトに関連したストレージがオブジェクトを記述するプログラムにだけ関連する場合は、内部オブジェクトです。

外部および内部オブジェクトはグローバル名かローカル名のいずれかを持つことができます。

EXTERNAL 文節がそのデータ記述記入項目に存在することによって、作業用ストレージ・セクションに記述されたデータ・レコードには外部属性が与えられます。さらにデータ記述記入項目（外部レコードを記述している記入項目に從属する）で記述したデータ項目には、外部属性が与えられます。レコードまたはデータ項目に外部属性がない場合、それは記述したプログラムの内部データの一部です。

関連ファイル記述記入項目に EXTERNAL 文節がある場合は、ファイル・コネクタに外部属性が与えられます。ファイル・コネクタに外部属性がない場合、ファイル・コネクタは関連ファイル名を記述したプログラムに対して内部です。ソート・マージ・ファイルに対して EXTERNAL 文節を指定することはできません。

EXTERNAL 文節を含んでいないファイル記述記入項目に從属するように記述されたデータ・レコードや、ソート・マージ・ファイル記述記入項目に從属するように記述されたデータ・レコードは、そのようなデータ・レコードに対するデータ記述記入項目に從属するように記述されたあらゆるデータ項目同様に、ファイル名を記述するプログラムに対して常に内部です。EXTERNAL 文節がファイル記述記入項目にある場合、データ・レコードおよびデータ項目には、外部属性が与えられます。

プログラムのリンケージ・セクションに記述されたデータ・レコードや從属データ項目は、そのデータを記述するプログラムに対して常に内部と見なされます。特別な考慮事項がリンケージ・セクションに記述したデータに適用され、記述されたデータ・レコードと別のプログラムにアクセス可能な他のデータとを関連させます。

データ属性の指定

明示的なデータ属性は、実際の COBOL のコーディング中にプログラマーが指定します。

暗黙のデータ属性は、デフォルト値です。データの属性を明示的に指定しない場合には、コンパイラはデフォルト値を使用します。

たとえば、データ項目の USAGE は指定する必要はありません。これを省略した場合のデフォルトは USAGE DISPLAY であり、この場合は、暗黙のデータ属性です。しかし COBOL のコーディングの中に USAGE DISPLAY を指定すると、これは明示的なデータ属性になります。

名前の解決

プログラム B というプログラムが直接的または間接的に別のプログラム A というプログラムの中に含まれる場合、両方のプログラムは同一ユーザー定義語を使用し

てオブジェクトを定義できます。(オブジェクトには、たとえば、条件名、データ名、ファイル名、レコード名、関数名、またはタイプ名などが含まれます。) そのような重複した名前をプログラム B で参照するときには、次の規則を使用して参照オブジェクトを判別します。

1. 参照オブジェクトは、プログラム B で定義されたすべての名前セットから、また、プログラム A に直接含まれる定義されたすべてのグローバル名、さらに直接的または間接的にプログラム A を含むプログラムで定義されたすべてのグローバル名から識別されます。この名前のセットを使用するときには、修飾に関する通常の規則や参照の固有に関する他のすべての規則が適用されます。これは 1 つまたは複数のオブジェクトが識別されるまで続きます。
2. 1 つのオブジェクトだけが識別される場合は、それが参照オブジェクトです。
3. 複数のオブジェクトが識別される場合、適切な修飾によってオブジェクトの参照をそれぞれ固有なものにしないかぎり、ただ 1 つのオブジェクトだけがプログラム B に対してローカルな名前を持つことができます。プログラム B に対してローカルな名前を持つオブジェクトが 1 つあるか、または何もないとき、次の規則が適用されます。
 - 名前がプログラム B で宣言される場合、プログラム B は参照オブジェクトです。
 - また、プログラム A が別のプログラムの中に含まれる場合、参照オブジェクトは次のとおりです。
 - 名前がプログラム A で宣言される場合、プログラム A のオブジェクトが参照オブジェクトです。
 - 名前がプログラム A で宣言されるのではなく、プログラム A を含んだプログラムで宣言される場合、その収容プログラムのオブジェクトが参照オブジェクトです。この規則は、単一の有効なオブジェクトが見つかるまでさらに大きな範囲の収容プログラムに適用されます。
 - 参照されたオブジェクトが関数である場合は、その関数定義によって、時にはプログラマーが、その特定の参照のために関数の値を判別する 1 つまたは複数の引数の値を設定または指定することを要求されます。**関数 ID** という用語は、COBOL ソース・プログラムの手続き部内の組み込み関数を指すのに使用されます。関数によって示されるデータ項目は、関数名とその引数 (ある場合) によって固有に識別されます。

プログラム名に関する規則

プログラムのプログラム名は、そのプログラムの見出し部の PROGRAM-ID 段落で指定されます。プログラム名を参照できるのは次のものに限られます。

- CALL ステートメント
- CANCEL ステートメント
- END PROGRAM ヘッダー

IBM 拡張

- SET ステートメント

IBM 拡張 の終り

実行単位を構成しているプログラム名は固有である必要はありませんが、実行単位内の 2 つのプログラムが同一の名前であるとき、2 つのプログラムのうち少なくとも 1 つは直接的または間接的に別のプログラム (別個にコンパイルされた) になければなりません。そのコンパイル済みのプログラムには、2 つのうちの残った方のプログラムを含めることはできません。

プログラム名の有効範囲は次の規則によって規制されています。

- プログラム名が、COMMON 属性をもたないプログラムの名前で、別のプログラムに直接含まれている場合、収容プログラムにあるステートメントだけがそのプログラム名を参照できます。
- プログラム名が、COMMON 属性を持つプログラムの名前で、別のプログラム内に直接含まれている場合、収容プログラムにあるステートメント、およびその収容プログラム内に直接または間接的に含まれているプログラムのステートメントだけがそのプログラム名を参照できます。例外として COMMON 属性を持つプログラムそれ自体およびそのプログラム内に含まれているプログラムはどれも参照できません。
- プログラム名が、別個にコンパイルしたモジュール・オブジェクト中の最外部の COBOL プログラムの名前である場合、直接的または間接的に含まれるプログラムを除けば、実行単位内の他のどんなプログラムにあるステートメントでもプログラム名を参照できます。

プログラム名の有効範囲を規制する規則

次の規則は別のプログラム内に含まれたプログラムのプログラム名を参照する際に適用されます。ここでは、プログラム-B およびプログラム-C を直接含むプログラム-A、プログラム-D およびプログラム-F を直接含むプログラム-C、さらにプログラム-E を直接含むプログラム-D について取り上げます。

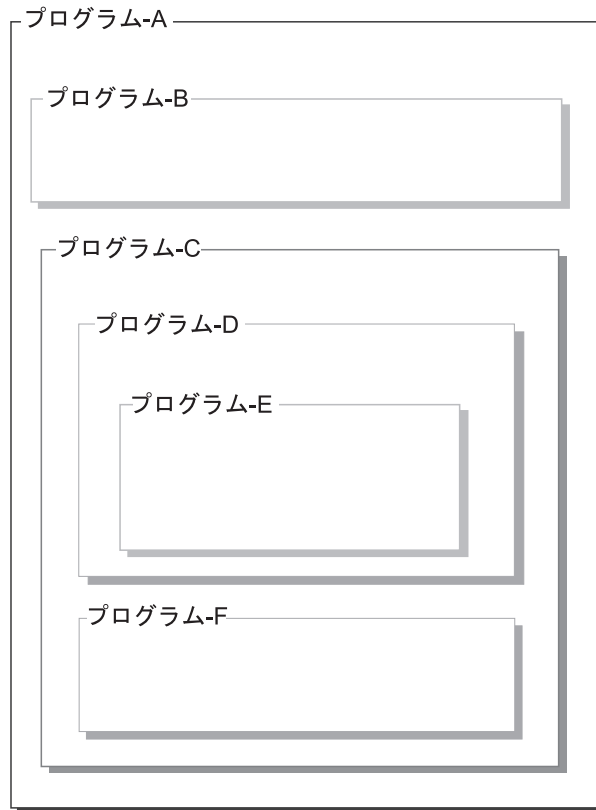


図3. プログラム名の有効範囲を規制する規則

プログラム-D が COMMON 属性を持っていない場合には、プログラム-D は、プログラム-D を直接含んでいるプログラム (つまりプログラム-C) によってのみ参照されます。

プログラム-D が COMMON 属性を持っている場合、プログラム-C はプログラム-D を含んでいるのでそれを参照できます。さらにプログラム-D およびプログラム-D に含まれるプログラム以外は、プログラム-C に含まれるどのプログラムでもプログラム-D を参照できます。言い換えると、プログラム-D が COMMON 属性を持っている場合、プログラム-D はプログラム-C およびプログラム-F で参照できますが、プログラム-E、プログラム-A、プログラム-B、またはプログラム-D のステートメントでは参照できません。

第 5 章 制御の転送

手続き部では、**明示的な**制御の転送が存在せず、次の実行可能ステートメントが存在するのであれば、プログラムの流れは、ステートメントが書かれた順番に従って次々と制御を転送していきます。(以下の注を参照してください。)この通常のプログラムの流れが、**暗黙の**制御の転送です。

連続するステートメントの間での暗黙の制御の転送の他、プロシージャーの分岐ステートメントが実行されずに正規の流れが変更される場合にも暗黙の制御の転送が行われます。以下の例は、ステートメントからステートメントへの制御の転送を無効にする、**暗黙の**制御の転送を示しています。

- 別の COBOL ステートメントの制御下で実行される COBOL プロシージャーの最終ステートメントが実行されると、暗黙のうちに制御が転送されます。(COBOL プロシージャーの実行を制御する COBOL ステートメントには、MERGE、PERFORM、SORT、および USE などがあります。)
- SORT または MERGE ステートメントの実行中に、INPUT または OUTPUT のプロシージャーに暗黙のうちに制御が転送されます。
- 宣言プロシージャーを実行させるような COBOL ステートメントの実行中、制御はそのプロシージャーに暗黙のうちに転送されます。
- 宣言プロシージャーの実行が終了すると、制御はその実行の原因となったステートメントに関連した制御メカニズムに暗黙のうちに返されます。
- プログラムに手続き部がないか、またはプログラムで非宣言のセクションのいずれかが呼び出されたとき、その呼び出し側プログラムは暗黙のうちに EXIT PROGRAM を出します。

COBOL はまた、プロシージャーの分岐または条件ステートメントの実行によって、**明示的な**制御の転送を行います。

次の実行可能ステートメント

注: 「次の実行可能ステートメント」という用語は、上記の規則に従って、制御が転送される次の COBOL ステートメントを指します。以下の場合には、**次の実行可能ステートメント**は存在しません。

- プログラムに手続き部がない場合。
- 宣言セクションの最後のステートメントが書かれている段落が別の COBOL ステートメントの制御下で実行されていない場合の、その最後のステートメントの後。
- あるプログラムの最後のステートメントが書かれている段落がそのプログラム内の別の COBOL ステートメントの制御下で実行されていない場合の、その最後のステートメントの後。
- 宣言セクションの最後のステートメントが異なるセクションで実行される活動 PERFORM ステートメントの範囲内にあり、また活動 PERFORM ステートメン

トの出口であるプロシージャーの最後のステートメントでない場合の、その宣言セクションの最後のステートメントの後。

- COBOL プログラムの外に制御を転送させる STOP RUN、EXIT PROGRAM、または GOBACK ステートメントの後。
- END PROGRAM ヘッダーの後。

次に実行可能ステートメントがなく、制御が COBOL プログラムの外に転送されない場合には、プログラム実行が CALL ステートメントの制御下でプログラムの非宣言手続き部分にない限り、プログラムの制御の流れは不確定になります。この場合、暗黙の EXIT PROGRAM ステートメントが実行されます。

第 2 部 COBOL プログラムの構造

第 6 章 一般構造

COBOL ソース・プログラムは、正しい構文の一連の COBOL ステートメントです。

COBOL ソース・プログラムは、他の COBOL ソース・プログラムを含むことがあります。含まれる側のプログラムは、含む側のプログラムのリソースの一部を参照することがあります。

このようなプログラムを含むという概念は、ネストと呼ばれ、含まれるプログラムは**ネストされたプログラム**と呼ばれます。ネストされたプログラムは、直接または間接に別のプログラムに含まれます。たとえば、プログラム B がプログラム A に含まれている場合、プログラム A に含まれプログラム B を含むような介在プログラムがなければ、プログラム B は「直接含まれる」ということになります。プログラム A に含まれプログラム B を含むような介在プログラムがあると、プログラム B は「間接的に」プログラム A に含まれます。

含む側と含まれる側のプログラムの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」のネストされたプログラムのセクションを参照してください。

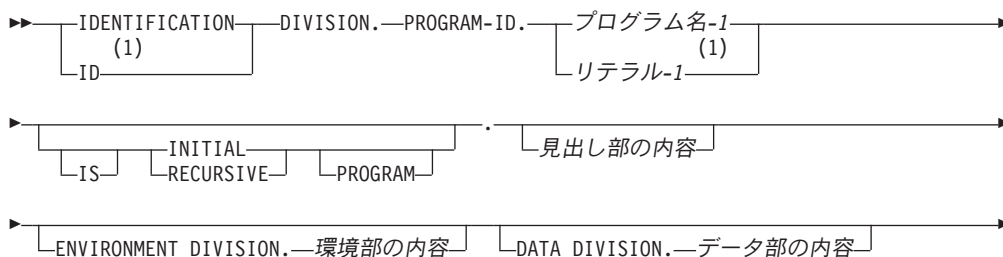
コンパイラ指示ステートメントと END PROGRAM ヘッダーを除き、COBOL ソース・プログラムのステートメント、項目、段落、およびセクションは、次の 4 つの部に分けられます。

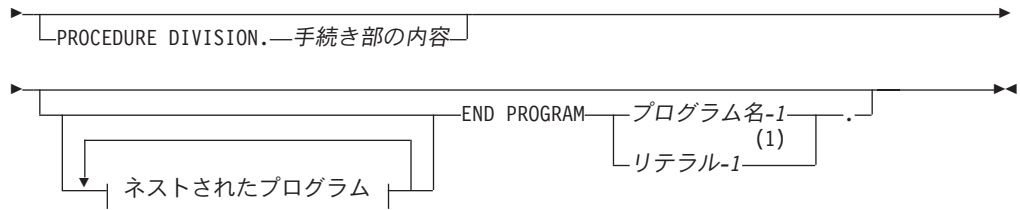
- 見出し部
- 環境部
- データ部
- 手続き部

COBOL ソース・プログラムの終わりは、END PROGRAM ヘッダー (指定された場合) で示されるか、またはそれ以上ソース・プログラムの行がないことによって示されます。

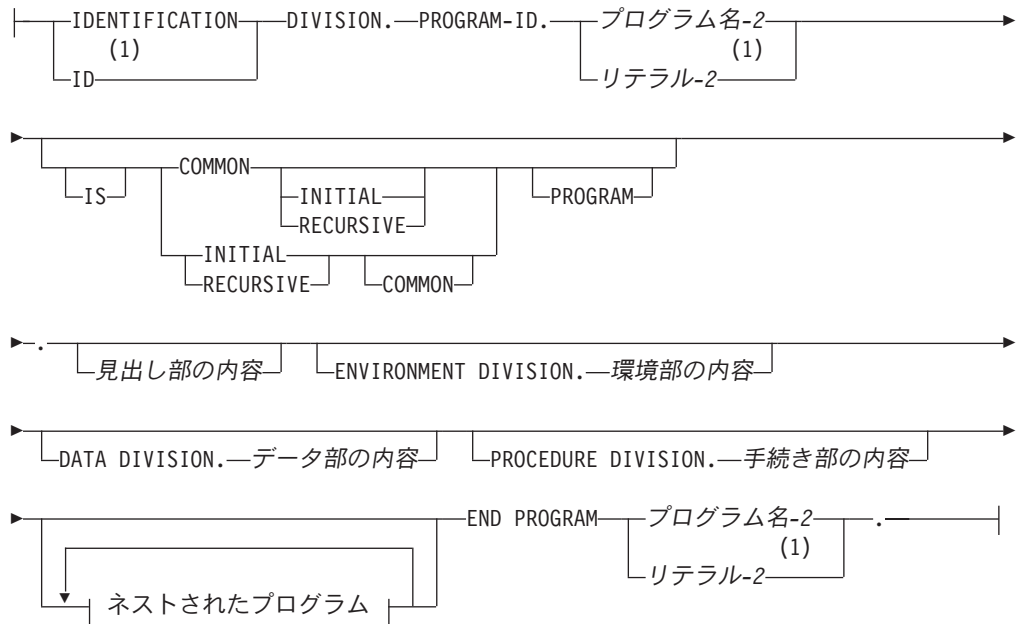
次の図に、COBOL プログラムの一般構造を簡単に図示してあります。

COBOL ソース・プログラム - 形式





ネストされたプログラム:



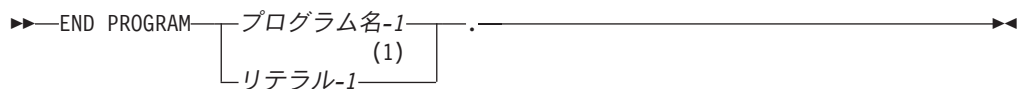
注:

1 IBM Extension

END PROGRAM ヘッダー

END PROGRAM ヘッダーは、名前付き COBOL ソース・プログラムの終わりを示します。また、このヘッダーは、一連のソース・プログラムの中の個々のプログラムを分離します。一連のソース・プログラムの最後のプログラムがネストされたプログラムを含んでいなければ、その最後のプログラムの END PROGRAM ヘッダーはオプションです。

END PROGRAM ヘッダー - 形式



注:

1 IBM 拡張

プログラム名-1

直前の PROGRAM-ID 段落で宣言されたプログラム名と同一でなければならな

いユーザー定義語。プログラム名の作成法の規則については 66 ページの『PROGRAM-ID 段落』のプログラム名 を参照してください。

IBM 拡張

リテラル-1

非数字リテラルでなければなりません。リテラルの作成法については 66 ページの『PROGRAM-ID 段落』のリテラル を参照してください。

IBM 拡張 の終り

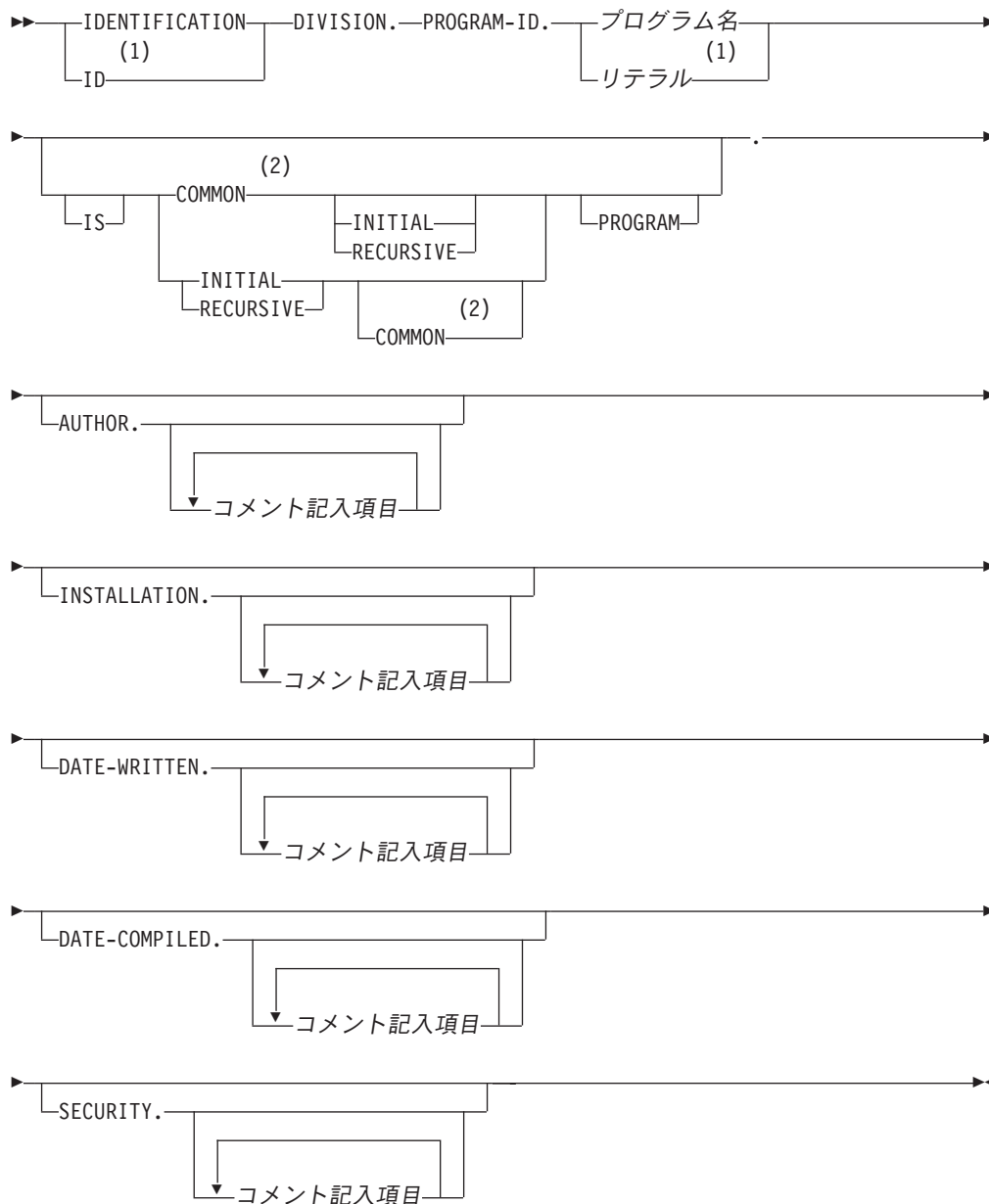
END PROGRAM ヘッダー

第 3 部 見出し部

第 7 章 見出し部

見出し部は、あらゆる COBOL ソース・プログラムの最初の部分として必要です。この部分にはプログラムの名前、プログラム作成日、コンパイルの日付、その他プログラムについての記述を入れることができます。

見出し部 - 形式



注:

- 1 IBM 拡張
- 2 ネストされた COBOL プログラムでのみ使用できます。

見出し部の最初の段落は、PROGRAM-ID 段落でなければなりません。他の段落はオプションですが、書く場合には、形式に示されている順序でなければなりません。

IBM 拡張

標準的な部のヘッダーの代わりに省略形 ID DIVISION を使用でき、オプションの段落は任意の順序とすることができます。

注: SEU 構文検査プログラムでは、次に示す段落ヘッダーの最初の文が段落ヘッダーと同じ行から始まる必要があります。

- PROGRAM-ID
- AUTHOR
- INSTALLATION
- DATE-WRITTEN
- DATE-COMPILED
- SECURITY

図 4 に、見出し部のコーディングの例を示します。

IBM 拡張 の終り

```
IDENTIFICATION DIVISION.  
PROGRAM-ID. IDSAMPLE.  
AUTHOR. PROGRAMMER NAME.  
INSTALLATION. COBOL DEVELOPMENT CENTER.  
DATE-WRITTEN. 12/02/94.  
DATE-COMPILED. 12/09/94 12:57:53.  
SECURITY. NON-CONFIDENTIAL.
```

図 4. 文が段落と同じ行で始まることを示すための見出し部のコーディング例

PROGRAM-ID 段落

PROGRAM-ID 段落は、COBOL プログラムの名前を指定します。また、最も外側のプログラムでは、この段落にプログラム・オブジェクト (*PGM) またはモジュール・オブジェクト (*MODULE)、あるいはその両方の名前を指定できます。これは必要であり、しかも見出し部の最初の段落でなければなりません。

システムが認識するプログラム・オブジェクトの名前は、CRTBNDCBL コマンドの PGM パラメーターによって指定変更できます。モジュール・オブジェクトの認識用の名前は、CRTCLMOD コマンドの MODULE パラメーターによって指定変更できます。PGM または MODULE パラメーターに関する詳しい情報は、

「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

プログラム名

プログラムまたはモジュール・オブジェクトをシステムに対して認識させるユーザー定義語。プログラムおよびモジュール・オブジェクトの場合、プログラム名の最初の 10 文字だけがそのオブジェクトの識別名として使用されます。ILE プロシージャ名の場合、プログラム名の最初の 250 文字が使用されます。CRTBNDCBL

コマンドまたは CRTCBMOD コマンドに *MONOPRC オプションを指定すると、プログラム名の先頭文字は英字にしなければなりません。数字にすると、次のように変換されます。

```
0      -> J
1 ~ 9  -> A ~ I
```

ハイフンが 2 ~ 10 桁目にある場合は、ゼロ (0) に変換されます。

*PGMID が、プログラムまたはモジュール名に対して CRTBNDCBL または CRTCBMOD コマンドで指定されていて、*NOMONOPRC オプションが指定されている場合、PROGRAM-ID 段落で指定されているプログラム名が、小文字を含む非数値リテラルを決して含まないようにしてください。使用できないオブジェクトが作成される可能性があります。プログラムまたはモジュール名に対する *PGMID がない場合でも、複数のソース・プログラムには注意する必要があります。複数のソース・プログラムは、SIMPLEPGM = *YES の場合の PROGRAM-ID 段落に対して小文字を持つ非数値リテラルを含む、2 番目以降の ILE COBOL プロシージャーに対して、使用できないオブジェクトが作成される可能性があります。

リテラル

非数値リテラルでなければなりません。

囲み用の分離文字のない非数値リテラルは、プログラム名になります。上記のプログラム名の項に定義してあるとおり、モジュール名、プログラム名、およびプロシージャー名の作成でも、同じ規則が適用されます。ただし、*MONOPRC オプションを指定しないと、リテラル内の小文字は相当する大文字に変換されます。

RECURSIVE 文節

IBM 拡張

RECURSIVE 文節は、COBOL プログラムの再帰的再入を可能にする、オプションの文節です。この文節は、プログラムおよびその中に含まれるすべてのプログラムが再帰可能であることを示します。ILE COBOL では、ネストされたプログラムでの RECURSIVE 文節の指定が可能です。さらに、再帰的プログラムは、ネストされたサブプログラムを含むことができます。RECURSIVE 文節が指定されていると、以前の呼び出しがまだアクティブなときに、プログラム名-1 に再帰的に入ることができます。RECURSIVE 文節を指定しないと、アクティブ・プログラムに再帰的に再入することはできません。

再帰的プログラムの作業用ストレージ・セクションは、プログラムへ最初に入ったときに静的に割り振られ、初期化されるストレージを定義し、最後に使われた状態で、すべての再帰呼び出しに使用することができます。再帰的プログラム (および非再帰的プログラム) のローカル・ストレージ・セクションは、呼び出しごとに、割り振り、初期化、割り振り解除が自動的に実行されるストレージを定義します。

再帰的プログラムのファイル・セクションで、FD に対応する内部ファイル・コネクタは静的に割り振られます。内部ファイル・コネクタの状況は、複数の呼び出し間で持続するプログラムの最後に使われた状態の一部です。

再帰的プログラムでは、以下の言語エレメントはサポートされていません。

- ALTER。335 ページの『ALTER ステートメント』を参照
- 指定されたプロシージャ名のない GO TO。400 ページの『GO TO ステートメント』を参照
- RERUN。128 ページの『RERUN 文節』を参照
- SEGMENTATION。
- USE FOR DEBUGGING。670 ページの『USE FOR DEBUGGING』を参照

このプログラムを直接または間接的に含むプログラムが最初のプログラムの場合、RECURSIVE 文節は指定しないでください。

IBM 拡張 の終り

COMMON 文節

COMMON 文節を使用すると、プログラム名で命名したプログラムを、その兄弟、およびその兄弟の中に含まれているプログラムによって呼び出すことができます。COMMON 文節は、ネストされたプログラムでしか使用できません。

INITIAL 文節

プログラム名が呼び出されると、そのプログラム名と、その中に含まれるすべてのプログラムはそれぞれの初期状態に設定されることを指定します。(作業用ストレージ項目はすべてそれぞれの初期状態にリセットされ、すべての INTERNAL ファイルはクローズされます。)

プログラムは次のような場合に初期状態に設定されます。

- ある実行単位内で最初にそのプログラムが呼び出されたとき
- INITIAL 属性をもったプログラムが呼び出されるたび
- そのプログラムを参照する CANCEL ステートメントか、またはそのプログラムを直接または間接的に含むプログラムを参照する CANCEL ステートメントの実行後、最初にそのプログラムが呼び出されたとき
- INITIAL 属性をもち、しかも直接または間接的にそのプログラムを含むプログラムを参照する CALL ステートメントの実行後、最初にそのプログラムが呼び出されたとき

たとえば、プログラム A がプログラム B を呼び出す場合に、プログラム B が INITIAL 属性をもち、さらにプログラム C を含んでいるとすると、A が B を呼び出した後で最初にプログラム C が呼び出されたときにプログラム C はその初期状態に設定されます。

プログラムが初期状態に設定されると、次のようになります。

- 作業用ストレージ・セクションおよびローカル・ストレージ・セクションに含まれるそのプログラムの内部データが初期設定される。データ項目の記述に VALUE 文節が使用されていると、そのデータ項目は定義値に初期設定される。VALUE 文節がデータ項目に関連付けられていない場合は、そのデータ項目の初

1. 兄弟プログラムとは、同じプログラムに直接含まれるプログラムのことです。

期値はコマンド CRTCBMOD または CRTBNDCBL にオプション *STDINZ、*STDINZHEX00 または *NOSTDINZ が指定されているかないかによって変わります。

- そのプログラムに関連付けられた内部ファイル・コネクタを持つファイルは、オープン・モードにならない。
- そのプログラムに含まれるすべての PERFORM ステートメントの制御メカニズムは、それぞれの初期状態に設定される。
- そのプログラムに含まれる変更済み GO TO ステートメントは、それぞれの初期状態に設定される。

このプログラムを直接または間接的に含むプログラムが再帰的プログラムの場合、INITIAL 文節は指定しないでください。

オプションの段落

見出し部のオプションの段落は、省略可能です。

AUTHOR

プログラム作成者の名前。これは構文検査だけを受けます。

INSTALLATION

会社名または場所名。これは構文検査だけを受けます。

DATE-WRITTEN

プログラムが作成された日付。これは構文検査だけを受けます。

DATE-COMPILED

プログラムがコンパイルされた日付。

SECURITY

プログラムの機密性のレベル。

コメント記入項目

すべてのオプションの段落のコメント記入項目として、コンピューターの文字セットにある任意の文字を組み合わせ使用できます。コメント記入項目とコメント行を混同しないでください。(後者は、標識域にスラッシュまたはアスタリスクで示されます。) コメント記入項目は、区域 B に 1 行または複数行を書きます。しかし SEU 構文検査プログラムでは、最初の文は段落ヘッダーと同じ行から始まっている必要があります。

コメント記入項目は説明として機能するだけです。この記入項目はプログラムの内容には影響を与えません。コメント記入項目では標識域 (7 桁目) のハイフンを使用することはできません。

段落名 DATE-COMPILED およびそれに関連したコメント記入項目は、コンパイル中に、次の形式の段落に置き換えられます。

```
DATE-COMPILED. current date.
```

オプションナルの段落

SECURITY 段落のコメント記入項目の最初の 8 行には、作成するモジュール・オブジェクトの著作権情報が入ります。

IBM 拡張

コメント記入項目では、その行の任意の場所に *CBL、*CONTROL、EJECT、SKIP1、SKIP2、SKIP3、または TITLE ステートメントを入れられます。これらのステートメントは、コメント記入項目の行に単独で入れられている場合に作用するもので、コメント記入項目を終了することはありません。

コメントには、2 バイト文字と 1 バイト文字を組み合わせて使用できます。2 バイト・ストリングを含むコメント記入項目には複数の行を指定できますが、シフトアウト文字とシフトイン文字は、対にして同一行で使用しなければなりません。

注: 混合ストリングについては 4 ページの『文字ストリング』で説明されています。

IBM 拡張 の終り

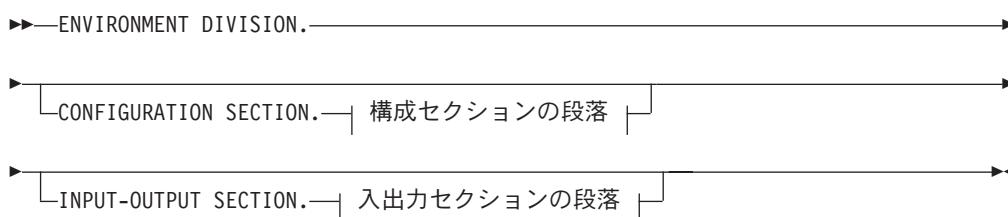
第 4 部 環境部

環境部は次の 2 つのセクションに分かれます。

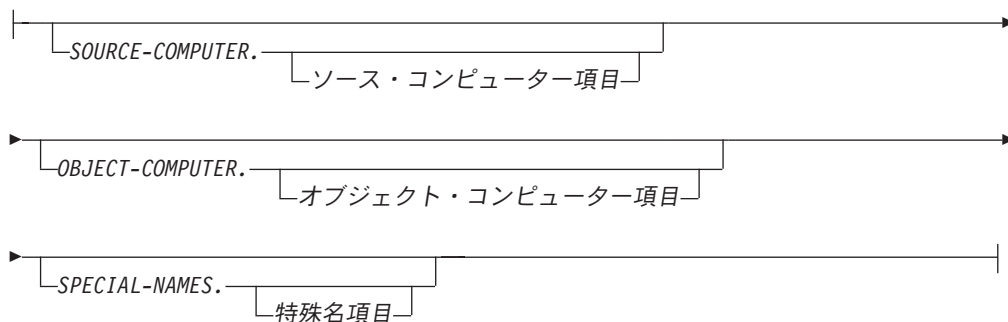
- 構成セクション
- 入出力セクション (99 ページの『第 9 章 入出力セクション』を参照してください。)

COBOL ソース・プログラムにおいては、環境部はオプションです。

環境部 - 形式



構成セクションの段落:



入出力セクションの段落:



第 8 章 構成セクション

構成セクションはオプションです。これを指定すると、ソース・プログラムがコンパイルされるコンピューター、およびオブジェクト・プログラムが実行されるコンピューターを記述することができます。しかし構成セクションは、ネストされたプログラムには指定してはなりません。プログラムの構成セクションに指定する項目は、そのプログラムに含まれるすべてのプログラムに対して適用されます。

さらに構成セクションは、次のことを行うことができます。

- IBM 定義の環境名とユーザーが定義した簡略名とを関連させる。
- 照合順序を指定する。
- 通貨符号のための、単一または複数の通貨文字ストリングおよび置換文字を指定する。
- PICTURE 文節および数字リテラル内のコンマとピリオドの機能を交換する。
- 英字名を文字セットまたは照合順序に関連付ける。
- クラス名と文字セットを関連付ける。
- CALL、CANCEL、または SET...ENTRY ステートメントで行うリンケージのタイプを指定する。
- 日付または時刻のデータ・タイプのデフォルト形式を指定する。

各段落には、段落の最後の項目の直後に分離文字ピリオドが 1 つだけなければなりません。

注: SEU 構文検査機能を使用する場合、以下の段落の最初の文節は段落名と同じ行に記入しなければなりません。

- SOURCE-COMPUTER
- OBJECT-COMPUTER
- SPECIAL-NAMES

環境部の構成セクションには、次の 3 つの段落があります。

- SOURCE-COMPUTER 段落
- OBJECT-COMPUTER 段落
- SPECIAL-NAMES 段落

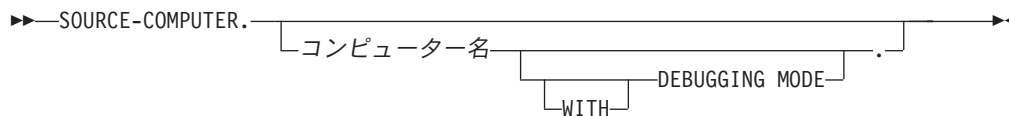
コーディング例

```
ENVIRONMENT DIVISION.  
CONFIGURATION SECTION.  
SOURCE-COMPUTER. IBM-ISERIES.  
OBJECT-COMPUTER. IBM-ISERIES.  
SPECIAL-NAMES. C01 IS TOP-OF-PAGE.
```

SOURCE-COMPUTER 段落

SOURCE-COMPUTER 段落は、ソース・プログラムをコンパイルするコンピューターを記述します。

SOURCE-COMPUTER 段落 - 形式



コンピューター名

システム名。コンピューター名は、たとえば次のようになります。

IBM-ISERIES.

WITH DEBUGGING MODE 文節を除き、SOURCE-COMPUTER 段落は、構文検査されますが、プログラムの実行には影響しません。

WITH DEBUGGING MODE 文節

ソース・プログラムに書かれたデバッグ行のコンパイル時スイッチを活動化します。

デバッグ行とは、コンパイル時スイッチが活動化されたときしかコンパイルされないステートメントのことです。たとえば、デバッグ行によってプロシージャのある点でのデータ名の値を検査できます。

WITH DEBUGGING MODE 文節があると、USE FOR DEBUGGING プロシージャはすべてコンパイルされます。この文節がなければ、これらのプロシージャはコメントとして扱われ、無視されます。

プログラムにデバッグ行を指定するには、7 桁目 (標識域) に 'D' または 'd' をコーディングします。デバッグ行を連続して入れても構いませんが、各行の 7 桁目に 'D' または 'd' を入れなければならず、文字ストリングを 2 行にまたがって分けることはできません。

コンパイルされるか、それともコメントとして扱われるかにかかわらず、デバッグ行はすべてプログラムが構文的に正しくなるように書かなければなりません。

DEBUGGING MODE 文節があるかどうかは、すべての COPY ステートメントが処理された後に判別されます。詳細は 634 ページの『COPY ステートメント』を参照してください。

デバッグ行は、環境部 (OBJECT-COMPUTER 段落の後)、データ、あるいは手続き部にコーディングできます。

デバッグ行の区域 A および区域 B にスペースしかない場合は、空白行と同様に扱われます。

WITH DEBUGGING MODE 文節を省略すると、デバッグ行はコメント行として扱われます。

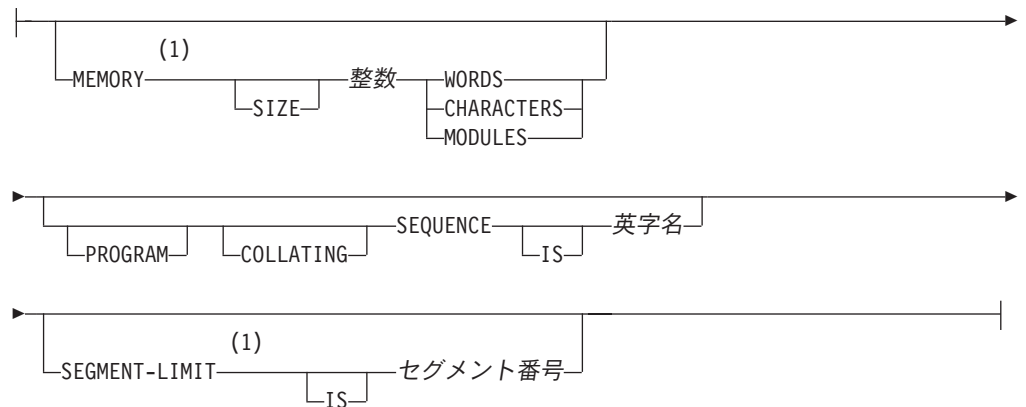
OBJECT-COMPUTER 段落

OBJECT-COMPUTER 段落は、オブジェクト・プログラムが実行されるシステムを指定します。

OBJECT-COMPUTER 段落 - 形式

▶▶ OBJECT-COMPUTER. _____ ▶▶
┌コンピューター名└ 記入項目 ─┐

記入項目:



注:

1 構文検査だけ行われます。

コンピューター名

システム名は構文検査されますが、プログラムの実行には影響しません。コンピューター名は、たとえば次のようになります。

IBM-ISERIES.

MEMORY SIZE

オブジェクト・プログラムを実行するために必要な主記憶域の容量。MEMORY SIZE 文節には、構文検査だけが行われます。

整数

語、文字、またはモジュールで表されます。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE IS

このプログラム（およびそれに含まれるすべてのプログラム）で使用される照合順序は、指定した英字名と関連付けられた照合順序です。

英字名

照合順序。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE によって、次の非数字比較の真理値が決まります。

- 比較条件に明示的に指定されたもの
- 条件名条件に明示的に指定されたもの

OBJECT-COMPUTER 段落

MERGE または SORT ステートメントに COLLATING SEQUENCE 句が指定されていない限り、PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節はすべての非数字のマージまたはソート・キーにも適用されます。PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節が省略されると、EBCDIC 照合順序が使用されます。

これらの照合順序については 683 ページの『付録 C. EBCDIC および ASCII 照合順序』を参照してください。

SEGMENT-LIMIT IS

オブジェクト・プログラムの永久セグメントと見なされるセグメントを決定します。この文節には、構文検査だけが行われます。

セグメント番号

1 ~ 49 の可変値の整数でなければなりません。

SPECIAL-NAMES 段落

SPECIAL-NAMES 段落では、以下を行います。

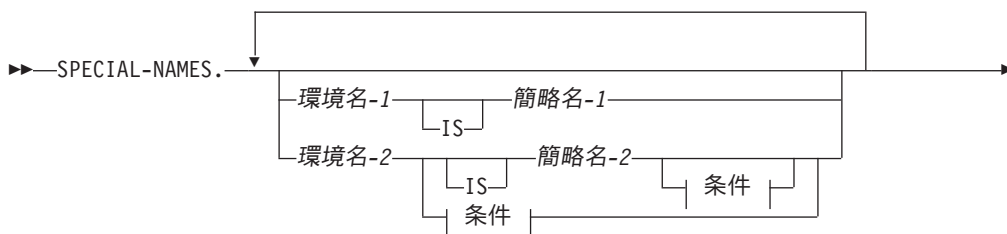
- IBM 指定の環境名とユーザーが定義した簡略名とを関連付ける。
- 英字名を文字セットまたは照合順序に関連付ける。
- クラス名を文字セットに関連付ける。
- 通貨符号のための、単一または複数の通貨文字ストリングおよび置換文字を指定する。
- PICTURE 文節および数字リテラル内のコンマと小数点の機能が交換されることを指定する。

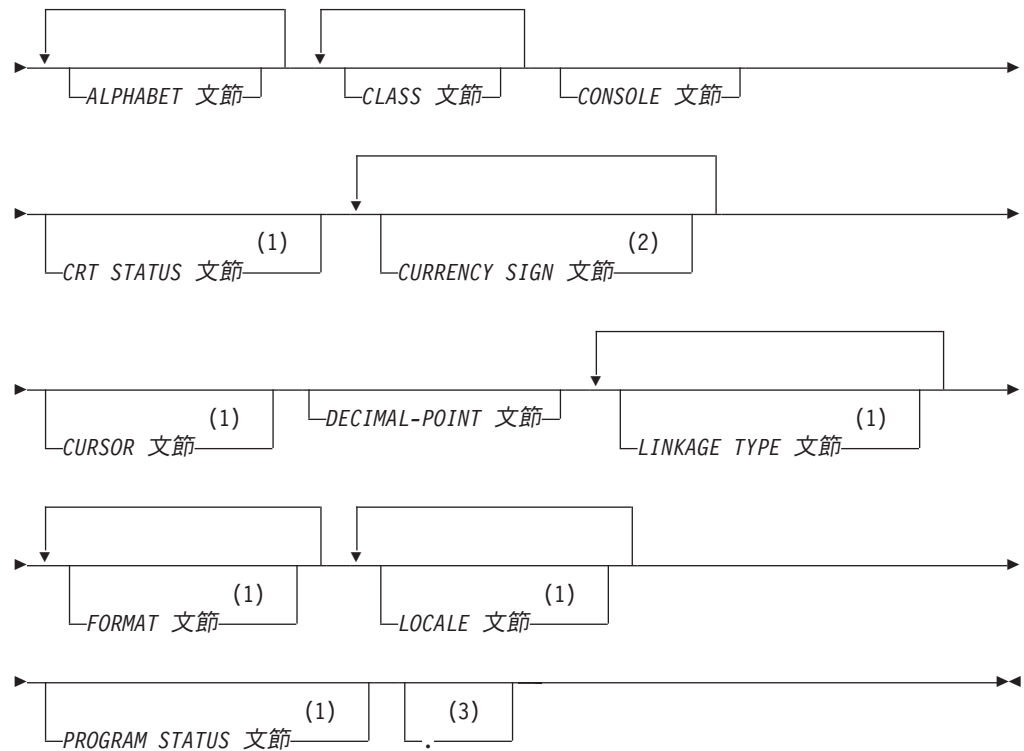
IBM 拡張

- ロケール・オブジェクト名およびそれらと関連付けられているライブラリーをユーザー定義の簡略名に関連付ける。
- 日付または時刻のデータ・タイプのデフォルト形式を指定する。
- ACCEPT または DISPLAY ステートメントが、拡張 ACCEPT または DISPLAY ステートメントとして取り扱われるか、または動的画面管理プログラムのセッション・サービス API に対する要求として取り扱われるように指定する。
- ACCEPT ステートメントと関連する追加機能を指定する。
- プログラムの CALL または CANCEL や、SET ステートメントでのプロシージャ・ポインターの設定に使用するリンケージのタイプを指定する。

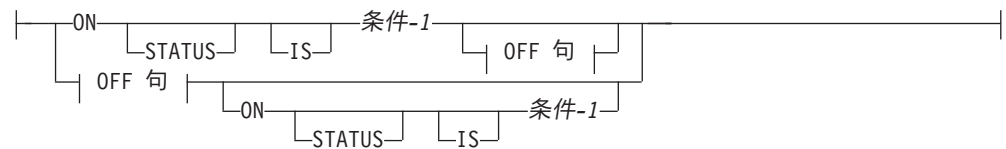
IBM 拡張 の終り

SPECIAL-NAMES 段落 - 形式





条件:



OFF 句:



注:

- 1 IBM 拡張
- 2 以降の反復は IBM 拡張です。
- 3 分離文字ピリオドは、オプションの文節が選択されたときに使用しなければなりません。文節は、任意の順序で入れられます。

環境名-1

コンパイラーが取るシステム装置または標準システムの処置。

表 2 は、環境名-1 の簡略名に関連付けられた処置を示しています。

SPECIAL-NAMES 段落

表 2. 環境名-1 の種類およびその機能

環境名-1	環境名に関係付けられた簡略名が使用されるステートメント	使用法
CSP	WRITE	印刷を行う際、スペース送りを抑止します。装置が PRINTER のときだけ使用します。
C01	WRITE	次のページにスキップします。装置が PRINTER のときだけ使用します。
ATTRIBUTE-DATA	ACCEPT	トランザクション・ファイルにより獲得されたプログラム装置についての属性データを検索します。ただしファイルがオープンされているときに限られます。
I-O-FEEDBACK	ACCEPT	ファイル上で行われた最後の入出力操作についての情報を与えます。ただしファイルがオープンされているときに限られます。
DATA-AREA	ACCEPT、DISPLAY	System i5/OS データ域を検索または更新します。
OPEN-FEEDBACK	ACCEPT	ファイルについての情報を与えますが、ファイルがオープンされているときに限られます。
CONSOLE、 SYSTEM-CONSOLE	ACCEPT、DISPLAY	システム・オペレーターのメッセージ・キュー (QSYSOPR) と通信します。
LOCAL-DATA	ACCEPT、DISPLAY	ジョブごとにシステムが作成したローカル・データ域へデータを転送、あるいはローカル・データ域からデータを検索します。
PIP-DATA	ACCEPT	開始前のジョブの一部として実行されるプログラム用に、プログラム初期設定パラメーター (PIP) データ域からデータを取り出します。
REQUESTOR	ACCEPT、DISPLAY	ユーザー・ワークステーション (対話型ジョブ)、バッチ入力ストリーム、またはジョブ・ログ (バッチ・ジョブ) と通信します。
SYSIN	ACCEPT	REQUESTOR と同じ (ACCEPT ステートメントの場合のみ)。
SYSOUT	DISPLAY	REQUESTOR と同じ (DISPLAY ステートメントの場合のみ)。

環境名-2

環境名-2 は、UPSI-0 ~ UPSI-7 と定義しても、または SYSTEM-SHUTDOWN と定義してもかまいません。UPSI とは、1 バイトのユーザー・プログラマブル状況標識スイッチのことです。

UPSI-7 ~ UPSI-0 は、COBOL プログラムの外部で定義されたプログラム・スイッチをオブジェクト時に識別する COBOL 名です。これらの内容は英数字と見なされます。ゼロの値はオフになり、1 の値がオンになります。

各スイッチは、制御言語 CHGJOB、SBMJOB、JOB、および JOBD コマンドの 8 文字の SWS パラメーターからの 1 バイトを次のように表します。

- UPSI-0 1 番目のバイト (左端)
- UPSI-1 2 番目のバイト
- UPSI-2 3 番目のバイト

⋮
⋮

UPSI-7 8 番目のバイト (右端)

SYSTEM-SHUTDOWN は、システム・オペレーターがシステムをシャットダウン保留状態にした場合またはジョブがある制御手段によってキャンセルされた場合に ON にセットされる内部スイッチです。関連する ON または OFF 条件名は、条件名が有効なところではどこでも参照できます。これらの状況をプログラムによって変更することはできません。

簡略名-1、簡略名-2

簡略名-1 および簡略名-2 はユーザー定義名の作成の規則に従います。簡略名-1 は、ACCEPT、DISPLAY、および WRITE ステートメントで使うことができます。簡略名-2 は、SET ステートメントにおいてのみ参照することができます。簡略名-2 は条件-1 または条件-2 の名前を修飾できます。

簡略名と環境名は、固有名でなくてもかまいません。環境名にも使用される簡略名を選択すると、その名前に対する任意の参照では、簡略名としてのその定義の方が、環境名としての定義よりも優先されます。

ON STATUS IS、OFF STATUS IS

UPSI スイッチは、年初や年末の処理のようなプログラム内の特殊条件を処理します。たとえば、手続き部の最初に UPSI スイッチをテストできます。それが ON であれば、特殊な分岐がとられます。(280 ページの『スイッチ状況条件』を参照してください。)

条件-1、条件-2

環境名-2 が外部スイッチを参照すると、そのスイッチのオン/オフ状況が、条件-1、条件-2 といった条件名と関連付けられることがあります。スイッチの状況は、条件名を介して得ることができます。条件名は、ユーザー定義名の規則に従います。少なくとも 1 文字は英字でなければなりません。条件名に関連付けられた値は、英数字と見なされます。

手続き部では、UPSI スイッチ状況は、関連した条件名によりテストされます。すべての条件名はレベル 88 項目に等しくなります。それに関連した簡略名は、指定された場合には、条件変数と見なされ、修飾に使用できます。

パラメーターの SPECIAL-NAMES 段落に宣言された名前はすべて、包含されるどのプログラムからでも参照できます。

コーディング例

このコーディング例では、SPECIAL-NAMES 段落で一般に使用される環境名に簡略名を割り当てています

```
SPECIAL-NAMES. SYSTEM-CONSOLE IS SYSTM
                REQUESTOR IS WORK-STATION
                C01 IS NEXT-PAGE
                LOCAL-DATA IS LOCAL-DATA-AREA
                ATTRIBUTE-DATA IS ATTRB-DATA
                SYSTEM-SHUTDOWN IS SHUTDOWN-SWITCH
                ON STATUS IS SHUTDOWN-PENDING
                UPSI-0 IS UPSI-SWITCH-0
                ON STATUS IS U0-ON
                OFF STATUS IS U0-OFF
                UPSI-1 IS UPSI-SWITCH-1
```

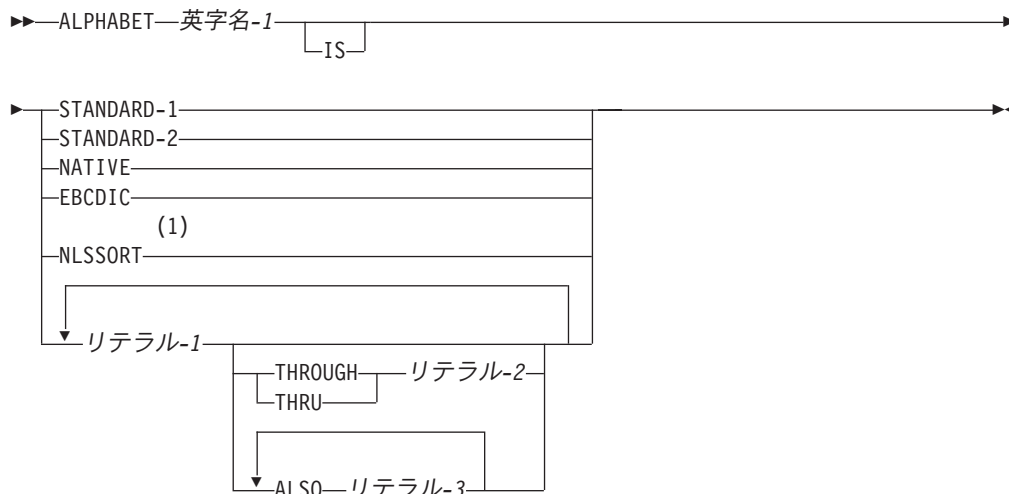
SPECIAL-NAMES 段落

```
ON STATUS IS U1-ON
OFF STATUS IS U1-OFF
IBM-ASCII IS STANDARD-1
CURRENCY SIGN IS "Y".
```

ALPHABET 文節

ALPHABET 文節を使用すると、指定した文字コード・セットまたは照合順序に英字名を関連付けることができます。

ALPHABET 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

次のいずれかで使用される際に、**照合順序**を指定します。

- OBJECT-COMPUTER 段落の PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節
- SORT または MERGE ステートメントの COLLATING SEQUENCE 句。

次のもので指定するときには、**文字コード・セット**を指定します。

- CODE-SET 文節の FD 記入項目

注: EBCDIC 照合順序は、英字名文節が省略されると使用されます。

- ALPHABET 文節のコーディング例

英字名-1

英字名-1 は、ユーザー定義名の規則にしたがいます。少なくとも 1 文字は英字でなければなりません。英字名-1 は、特定の文字コード・セットまたは照合順序を識別します。

STANDARD-1

ASCII 文字セットを指定します。

STANDARD-2

情報処理交換のための国際規格 646 (7 ビット・コード化文字セットに定義されている) ISO 7 ビット・コードの国際基準バージョンを指定します。

NATIVE

EBCDIC 文字セットを指定します。

EBCDIC

EBCDIC 文字セットを指定します。

NLSSORT

英字名の別の照合順序のさまざまな面でコンパイラ・オプション (または暗黙のデフォルト) に SRTSEQ および LANGID 仕様を使用します。NLSSORT と関連した英字名に対する参照は、SORT および MERGE ステートメントの PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節か、または COLLATING SEQUENCE 句でしか行えません。

リテラル-1、リテラル-2、リテラル-3

次のような規則に従って、プログラムが照合順序を決定することを指定します。

- リテラルが現れる順序は、この照合順序での文字の順序番号を昇順で指定します。
- 指定される各数字リテラルは、符号なしの整数で 1~256 (EBCDIC 文字セットの最大文字数) の値をもたなければなりません。各リテラルの値は EBCDIC 文字セット内の文字の相対位置を指定します。たとえば、次のとおりです。
 - リテラル 112 は EBCDIC 文字 ? を表します。
 - リテラル 234 は EBCDIC 文字 Z を表します。
 - リテラル 241 は EBCDIC 数字 0 を表します。

EBCDIC および ASCII 照合順序での各文字の順序番号は 683 ページの『付録 C. EBCDIC および ASCII 照合順序』にリストされています。

- 非数字リテラルの中の各文字は、EBCDIC 文字セットの実際の文字を表します。(非数字リテラルに複数の文字が含まれる場合には、このリテラルの左端から、各文字が照合順序の昇順で順次その位置を割り当てられます。)
- 明示的に指定されなかった EBCDIC 文字は、明示的に指定されたどの文字よりも上位の照合順序を持つものと見なされます。指定されなかった文字の相対順序は、EBCDIC 照合順序から変更されません。
- 1 つの英字名文節の中で、同一の文字を重複して指定してはなりません。
- THROUGH 句または ALSO 句に関連する各非数字リテラルは、長さが 1 文字でなければなりません (それ以上長い場合は、先頭文字だけが保管され、警告が発行されます)。
- THROUGH 句を指定すると、リテラル-1 で指定された文字で始まり、リテラル-2 で指定された文字で終わる連続した EBCDIC 文字に、この照合順序における連続した昇順の位置が割り当てられます。この順序は、元の EBCDIC 順序内の、昇順または降順のどちらでもかまいません。たとえば、文字 Z ~ S が指定されると、この照合順序での昇順値は ZYXWVUTS になります。
- ALSO 句を指定すると、リテラル-1、リテラル-3、... などと指定された EBCDIC 文字には、この照合順序内の同じ位置が割り当てられます。たとえば、次のように指定します。

```
"D" ALSO "N" ALSO "%"
```

上記では、文字 D、N、および % はすべて照合順序の同じ位置にあると見なされます。

- SPECIAL-NAMES 段落のリテラルとして指定された表意定数 HIGH-VALUE および LOW-VALUE は、それぞれ 16 進値 FF および 16 進値 00 と関連付けられます。
- SPECIAL-NAMES 段落のすべての文節の処理が終わると、この照合順序で最上位の順序位置の文字は、表意定数 HIGH-VALUE と関連付けられます。ALSO 句の指定があるために複数の文字が最上位の位置をもっていると、最後に指定された文字 (または、特定の文字が固有照合順序内に明示的に指定されていないときのデフォルトの文字) は、DISPLAY のようなプロシージャー・ステートメントの HIGH-VALUE 文字と見なされるか、または MOVE ステートメントの送り出しフィールドと見なされます。(固有照合順序内のすべての文字が明示的に指定され、かつ、上の例の ALSO 句が照合順序の高位文字として指定された場合には、HIGH-VALUE 文字は % になります。)
- SPECIAL-NAMES 段落のすべての文節の処理が終わると、この照合順序で最下位の順序位置の文字は、表意定数 LOW-VALUE と関連付けられます。ALSO 句の指定があるために、2 文字以上が最低位置にある場合は、最初に指定された文字が LOW-VALUE 文字になります。(上の例の ALSO 句が照合順序の低位文字として指定された場合、LOW-VALUE 文字は D になります。)

リテラル-1、リテラル-2、またはリテラル-3 を指定した場合は、英字名を CODE-SET 文節で参照してはなりません (168 ページの『CODE-SET 文節』を参照)。

IBM 拡張

DBCS リテラルおよび浮動小数点リテラルは、ユーザー指定の照合順序においては使用しないでください。

IBM 拡張 の終り

コーディング例

次の例は、ALPHABET 文節のいくつかの使用法を示したものです。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE IS USER-SEQUENCE の場合に、USER-SEQUENCE IS “D”、“E”、“F” と英字名文節を指定し、2 つのデータ部を次のように定義するとします。

```
77 ITEM-1 PIC X(3) VALUE "ABC".
77 ITEM-2 PIC X(3) VALUE "DEF".
```

上記の場合、次の比較は真になります。

```
IF ITEM-1 > ITEM-2
```

文字 D、E、および F はこの照合順序の順序位置の 1、2、および 3 です。文字 A、B、および C はこの照合順序の順序位置の 197、198、および 199 です。

英字名文節が USER-SEQUENCE IS 1 THRU 247、251 THRU 256、“7”、ALSO “8”、ALSO “9” の場合に、256 個の EBCDIC 文字がすべて指定されていて、そして 2 つのデータ部を次のように定義するとします。

```
77 ITEM-1 PIC X(3) VALUE HIGH-VALUE.
77 ITEM-2 PIC X(3) VALUE "789".
```

上記の場合、次の比較は真になります。

```
IF ITEM-1 = ITEM-2 . . .
IF ITEM-2 = HIGH-VALUE . . .
```

これらは、値 “7”、“8”、および “9” がすべてこの USER-SEQUENCE 照合順序で同じ位置 (HIGH-VALUE) を占めるので、真として比較します。

英字名文節を USER-SEQUENCE IS “E”、“D”、“F” と指定し、データ部のテーブルを次のように定義するとします。

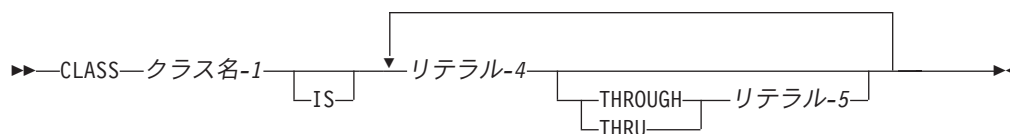
```
05 TABLE A OCCURS 6 ASCENDING KEY IS
  KEY-A INDEXED BY INX-A.
  10 FIELD-A ...
  10 KEY-A ...
```

上記の場合に、KEY-A の各オカレンスの昇順の内容が A、B、C、D、E、G であると、このテーブルの SEARCH ALL ステートメントの実行結果は、KEY-A の内容が昇順でないので無効になります。正しい昇順は、E、D、A、B、C、G です。

CLASS 文節

CLASS 文節は、その文節にリストされた指定文字セットに名前を関連付けます。

CLASS 文節 - 形式



クラス名-1

クラス名-1 はユーザー定義語であって、少なくとも 1 つの英字が入っていなければなりません。CLASS 文節のクラス名は、DBCS ユーザー定義語とすることができます。クラス名-1 は、クラス条件においてのみ参照できます。詳細は 267 ページの『クラス条件』を参照してください。この文節のリテラルの値により指定される文字は、このクラス名を構成する限られた文字セットを定義します。

リテラル-4、リテラル-5

数字の場合は、符号なしの整数で 1 ~ 256 の値になります (EBCDIC 文字セットの最大文字数)。

各リテラルの値は、EBCDIC 文字セット内での文字の相対位置、または順序番号を指定します。EBCDIC 照合順序の各文字の順序番号は 683 ページの『付録 C. EBCDIC および ASCII 照合順序』にリストされています。

IBM 拡張

浮動小数点リテラル、DBCS リテラル、または国別 16 進リテラルとして指定できません。

IBM 拡張 の終り

非数字の場合は、リテラルは EBCDIC 文字セット内の実際の文字です。非数字リテラルの値に複数の文字が入っている場合には、リテラル中の各文字はクラス名によって識別される文字セットに含まれます。

非数字リテラルが THROUGH 句に関連付けられている場合は、1 文字の長さでなければなりません。

THROUGH、THRU

THROUGH を指定すると、クラス名にはリテラル-4 の値で始まり、リテラル-5 の値で終わる文字が入ります。さらに、THROUGH 句によって指定される文字は、昇順または降順のいずれかで文字を指定することができます。

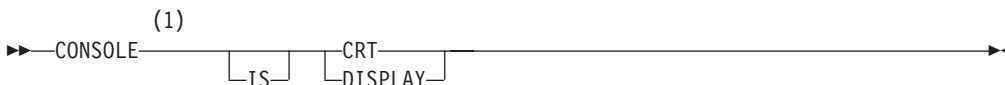
CONSOLE 文節

IBM 拡張

CONSOLE IS CRT を指定すると、特定の形式固有の句をもたないすべての ACCEPT または DISPLAY ステートメント (LOCAL-DATA または PIP-DATA) は、拡張された ACCEPT または DISPLAY ステートメントとして扱われます。

同様に、CONSOLE IS DISPLAY を指定すると、特定の形式固有の句をもたないすべての ACCEPT または DISPLAY ステートメントは、動的画面管理プログラム・セッション・サービス API に対する要求として取り扱われます。このような API の詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションを参照してください。

CONSOLE 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

CONSOLE IS 文節を指定しないと、特定の形式固有の句をもたないすべての ACCEPT または DISPLAY ステートメントは、標準の ANSI COBOL の ACCEPT または DISPLAY ステートメントとして取り扱われます。

ACCEPT または DISPLAY ステートメントが拡張ステートメントであるか標準ステートメントであるかを判別する条件の説明は 324 ページの『拡張 ACCEPT および拡張 DISPLAY の考慮事項』および 376 ページの『形式 3 - 拡張 DISPLAY ステ

ートメント』を参照してください。

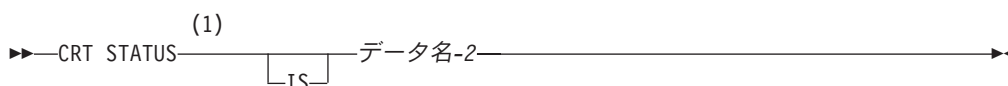
IBM 拡張 の終り

CRT STATUS 文節

IBM 拡張

CRT STATUS 文節は、拡張 ACCEPT ステートメント実行後の状況値の転送先のデータ項目を指定します。

CRT STATUS 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

データ名-2

このデータ名は、WORKING-STORAGE または LOCAL-STORAGE SECTIONS 内で記述されていなければならない、また、6 バイト英数字フィールドまたは 6 バイトの符号なしのゾーン整数でなければなりません。データ名-2 をネストされたプログラムから参照する場合には、これを最も外側のプログラムでグローバルとして定義しなければなりません。

CRT STATUS 文節についての考慮事項

CRT STATUS 文節が SPECIAL-NAMES 段落で指定されている場合は、拡張 ACCEPT ステートメントが実行されるたびに、その ACCEPT 操作の結果を示す値がデータ名-2 に入れられます。データ名-2 は、操作の完了によって生じる指定可能な条件を示すように設定されたいくつかの状況キーにより構成されます。

CRT 状況キー 1

データ名-2 の最初の 2 バイトが CRT 状況キー 1 となり、これは PIC 99 と記述しなければなりません。このキーは、ACCEPT 操作を終了させる原因となった条件を示します。指定可能な値は次のとおりです。

- 0 終了キー (たとえば、改行キー)、あるいは最終フィールドからの自動スキップを示します。
- 1 ファンクション・キーであることを示します。
- 9 エラーがあることを示します。

ACCEPT ステートメントに ON EXCEPTION 句が含まれている場合は、CRT 状況キー 1 内にどのような値 (0 を除く) が入っていても、ON EXCEPTION 句内の命令ステートメントが実行されることとなります。

CRT 状況キー 2

データ名-2 の次の 2 バイトが CRT 状況キー 2 を形成し、ACCEPT 操作を終了させる原因となった条件の詳細を示すコードが入ります。このキーの形式および可能な値は、次の表に示すように、CRT 状況キー 1 内の値によって異なります。

表 3. CRT STATUS キー 1 および 2 の有効な組み合わせ

キー 1	キー 2		意味
	形式	値	
0	PIC 99	0	オペレーターが終了キーを押した
0	PIC 99	1	最後のフィールドからの自動スキップ ¹
1	PIC 99	1 ~ 24	ファンクション・キーの番号
9	PIC 99	0	エラー条件 (画面内に入る項目が存在しない)

注: ¹ 最後のフィールドからの自動スキップが生じた場合、CRT STATUS KEY 2 の値 1 がサポートされている制御装置に返され、値 0 がサポートされていない制御装置に返されます。この関係は表 4 に記載されています。

表 4. 制御装置タイプによって戻される自動スキップ値

制御装置のタイプ	戻された自動スキップ値 1
i5/OS 制御装置: ローカル・ワークステーション制御装置 リモート 5251-12 型 リモート 5294 リモート 5394 リモート 3174 リモート 3274	あり 該当せず なし 新ワークステーション制御装置コードを使ったインストールのときは、あり *NOUNDSPCHR オプションを使ったときは、なし *NOUNDSPCHR オプションを使ったときは、なし
PC 接続機構 DOS およびオペレーティング・システム /2 (OS/2) の操作環境	なし
システム間パススルー iSeries システムから iSeries システム System/36™ から iSeries システム System/38™ から iSeries システム	あり なし なし

CRT 状況キー 3

データ名-2 の最後の 2 バイトが CRT 状況キー 3 です。CRT 状況キー 1 が 0 のときには、CRT 状況キー 3 には、ACCEPT 操作を終了させたキーボード・キーのコードが入ります。CRT STATUS キー 1 が 9 のときは、エラーであることがオペレーティング・システムによって通知され、CRT STATUS キー 3 が 99 に設定されることになります。

これらのキーのコードには、次のものがあります。

- 00 実行キー
- 90 次ページ・キー
- 91 前ページ・キー
- 93 ヘルプ・キー
- 94 クリア・キー

ヘルプ・キーとクリア・キーは、ローカル i5/OS ワークステーションでのみデータを受け入れます。

IBM 拡張 の終り

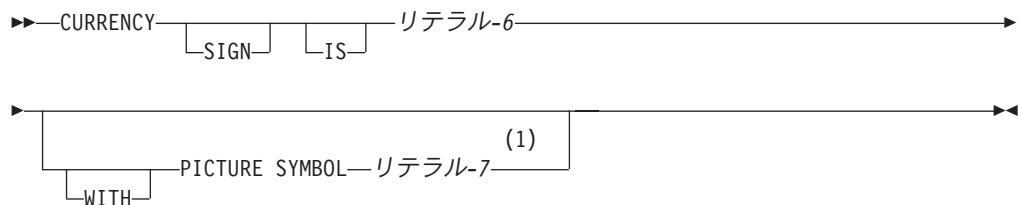
CURRENCY SIGN 文節

CURRENCY SIGN 文節は、次のような**通貨記号**を定義するために使用されます。

- 受け入れ項目として使用されるときに数字編集データ項目に挿入される。
- 項目の未編集数値を決定するときに、(編集解除した) 数字データ項目から除去される。

さらに、この文節は、PICTURE 文字ストリング内で通貨ストリングを表すために使用する記号を指定する際に使用される場合もあります。この記号を**通貨記号**と呼びます。

CURRENCY SIGN 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

IBM 拡張

注: CURRENCY SIGN 文節を繰り返すことによって、COBOL プログラム内で複数の通貨ストリングを使用することができます。ただし、通貨記号の値は**重複させない**でください。

IBM 拡張 の終り

CURRENCY SIGN 文節を省略する場合には、円記号 (¥) を通貨ストリングの値および通貨記号の両方に使用する必要があります。

PICTURE SYMBOL 句のないリテラル-6

通貨記号として使用される文字と、さらに**通貨ストリング**の値を指定します。単一文字で、非数字リテラルでなければならず、また次の文字であってはなりません。

- 0 ~ 9 の数字

CURRENCY SIGN 文節

- 大文字の英字 A B C D P R S V X Z またはこれらの文字の小文字
- スペース
- 特殊文字 * + - / , . ; () = "
- 表意定数

IBM 拡張

- プログラムが外部浮動小数点項目を定義している場合は、大文字の英字 E。
- プログラムが DBCS または国別項目を定義している場合は、大文字の英字 G および N。
- 小文字の英字 e、g、および n。

IBM 拡張 の終り

通貨記号には大文字小文字の区別があり、プログラムの中では必ず CURRENCY SIGN 文節で使用した文字とまったく同じ文字を指定する必要があります。ただし、OPTION パラメーター値 *NOMONOPIC、または PROCESS ステートメント・オプション NOMONOPIC が指定されていないければ、PICTURE 文字ストリングで使用される英字通貨記号は、実際の表記に関係なく大文字と見なされます。したがって、英字通貨記号は、NOMONOPIC オプションが指定されていないのであれば、常に英大文字で入力する必要があります。

PICTURE SYMBOL 句付きリテラル-6

PICTURE SYMBOL 句が指定されている場合、リテラル-6 は通貨ストリングの値を指定し、リテラル-7 は通貨記号を表します。リテラル-6 は、任意の長さ(複数文字)であり、コンピューターの文字セットから以下を除いた任意の文字から構成できます。

- 0 ~ 9 の数字
- 特殊文字 * + - / . ,
- 他の文字がない 1 つまたは複数のスペース

リテラル-7

PICTURE SYMBOL 句が指定されている場合、リテラル-7 は通貨記号として使用される文字を指定します。これは、単一文字で、非数字リテラルでなければならず、またプログラムで定義された他の通貨記号と同じ値であってはなりません。この文字の値は、PICTURE SYMBOL 句が省略される場合に通貨記号(リテラル-6)に適用されるものと同じ制約事項に従います。

CURSOR 文節

IBM 拡張

CURSOR 文節は、拡張 ACCEPT ステートメントで使用されるカーソル・アドレスが入るデータ項目を指定します。

CURSOR 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

データ名-1

4 バイトまたは 6 バイトの英数字フィールド、あるいは 4 バイトまたは 6 バイトの符号なしのゾーン整数フィールドでなければなりません。データ名-1 の長さが 4 文字のときは、最初の 2 文字は行番号として解釈され、残りの 2 文字は桁番号として解釈されます。データ名-1 の長さが 6 文字のときは、最初の 3 文字が行番号として解釈され、残りの 3 文字は桁番号として解釈されます。

データ名-1 に無効な位置値 (たとえば、ゼロ、非数字の値、または画面の範囲を超える値など) が入っている場合は、この文節は効力をもちません。

データ名-1 は、WORKING-STORAGE または LOCAL-STORAGE SECTIONS に記述しなければなりません。データ名-1 をネストされたプログラムから参照する場合には、最も外側のプログラムでグローバルと定義しなければなりません。

CURSOR 文節についての考慮事項

拡張 ACCEPT 操作の開始時に、データ名-1 に画面上の有効な位置を示す値が入っている場合は、その位置がカーソルの初期位置として使用されます。有効な位置とは、画面上の座標の 1 つを指します (つまり、行 1、列 1 から行 24、列 80 までの範囲内にあるもの)。ACCEPT 操作の終了後、データ名-1 に入っている位置が有効なものであった場合には、その時点のカーソル位置を示すようにデータ名-1 が更新されます。

CURSOR IS ID に無効な値が入っている場合 (たとえば、スペース、小さすぎる値、大きすぎる値、または画面範囲外の値など) には、カーソルは、画面上で活動状態にある最初の入力フィールドの先頭に置かれます。

CURSOR IS は、画面上のフィールドの位置付けには影響を与えません。

IBM 拡張 の終り

DECIMAL-POINT IS COMMA 文節

DECIMAL-POINT IS COMMA 文節は、PICTURE 文字ストリングおよび数字リテラルのピリオドとコンマの機能を交換させます。

DECIMAL-POINT IS COMMA 文節 - 形式

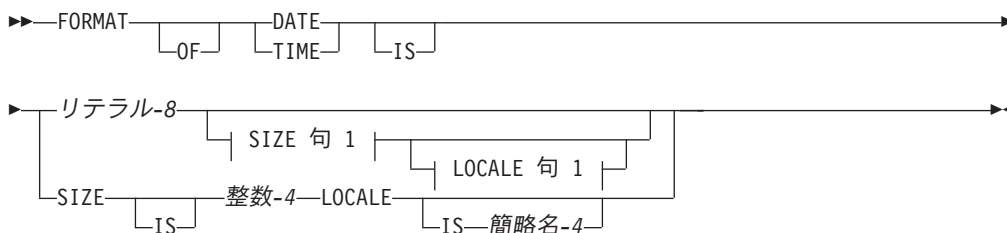
▶▶—DECIMAL-POINT—└─IS─┘—COMMA—▶▶

FORMAT 文節

IBM 拡張

FORMAT 文節は、DATA DIVISION の日付項目または時刻項目のデフォルトの形式を指定するために使用します。また、FORMAT 文節は、組み込み関数のデフォルトの日付形式または時刻形式を指定することもできます。

FORMAT 文節 - 形式



SIZE 句 1:



LOCALE 句 1:



リテラル-8

日付項目または時刻項目のデフォルトの形式を指定します。リテラル-8 は、その長さが最小でも 2 文字の非数字リテラルでなければなりません。リテラル-8 には 1 つまたは複数の変換指定子とゼロまたはそれ以上の分離文字が含まれている必要があります。リテラル-8 が LOCALE 句に及ぼす影響の詳細は 92 ページの『LOCALE 句』を参照してください。リテラル-8 で使用することができる変換指定子のリストは 91 ページの表 5 に記載されていますので、それを参照してください。

次の規則が適用されます。

- リテラル-8 とともに LOCALE 句を指定しない場合は、変換指定は COBOL ロケールに基づく値に置き換えられる。COBOL ロケールの詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。
- 日付項目に関しては、リテラル-8 には変換結果が年間通算日となる変換指定子が含まれていなければならない。リテラル-8 に年と月の変換指定は含まれていても、日についての変換指定が含まれていない場合は、当該月の最初の日が想定されます。i5/OS の日付形式およびそれらと等価のリテラル-8 日付形式のリストは 184 ページの表 10 に記載されていますので、それを参照してください。

- 日付項目に対して FORMAT 文節を指定しない場合は、ISO 形式がデフォルトの日付項目形式として使用される。
- リテラル-8 を指定しない場合は LOCALE 句を指定しなければならない。
- 時刻項目に関しては、リテラル-8 には時および分の変換指定が含まれていないなければならない。秒 (またはミリ秒) を指定しない場合は値 0 が想定されます。i5/OS の時刻形式およびそれらと等価のリテラル-8 時刻形式のリストは 184 ページの表 11 に記載されていますので、それを参照してください。
- 時刻項目に対して FORMAT 文節を指定しない場合は、ISO 形式がデフォルトの時刻項目形式として使用される。

表 5 に、リテラル-8 で使用することができる変換指定子をリストします。

表 5. リテラル-8 で使用できる変換指定子

指定子	内容	長さ	用途
@C	世紀を表す 1 つの整数 [0,9] に置き換えられる (0 ⁴ は 20 世紀)	1 バイト	D
%d	月の中の日にちを表す 1 つの整数 [01,31] に置き換えられる	2 バイト	D
%D	%m/%d/%y と同じ	8 バイト	D
%H	時を表す 1 つの整数 [00,23] に置き換えられる (24 時間時計)	2 バイト	T
%I	時を表す 1 つの整数 [01,12] に置き換えられる (12 時間時計)	2 バイト	T
%j	年間通算日 (年初から数えた日にち) を表す 1 つの整数 [001,366] に置き換えられる	3 バイト	D
%m	月を表す 1 つの整数 [01,12] に置き換えられる	2 バイト	D
%M	分を表す 1 つの整数 [00,59] に置き換えられる	2 バイト	T
%p	ロケールと等価の a.m. または p.m. のいずれかに置き換えられる	ロケール	T
@p	AM および PM については、大文字小文字を任意に混合させることができる	2 バイト	T
%r	a.m. および p.m. での時刻表記に置き換えられる。POSIX ロケールでは %I:%M:%S %p と等価。	ロケール、最小でも 8 バイト	T
%R	24 時間表記の時刻 [%H:%M] に置き換えられる	5 バイト	T
%S	秒を表す 1 つの整数 [00,61] に置き換えられる	2 バイト	T
@Sh	100 分の 1 秒単位の秒を表す 1 つの整数 [00,99] に置き換えられる	2 バイト	T
@Sm	100 万分の 1 秒単位の秒を表す 1 つの整数 [000000,999999] に置き換えられる	6 バイト	T
@So	1000 分の 1 秒単位の秒を表す 1 つの整数 [000,999] に置き換えられる	3 バイト	T
@St	10 分の 1 秒単位の秒を表す 1 つの整数 [0,9] に置き換えられる	1 バイト	T
%y	年を表す 1 つの整数 [00,99] に置き換えられる (世紀を併記せず)	2 バイト	D
%Y	年を表す 1 つの整数に置き換えられる (世紀を併記)	通常 4 バイト	D
@Y	年を表す 1 つの整数に置き換えられる (世紀を併記)	4 バイト	D
%%	1 つの % に置き換えられる	1 バイト	D, T

FORMAT 文節

表 5. リテラル-8 で使用できる変換指定子 (続き)

指定子	内容	長さ	用途
@@	1 つの @ に置き換えられる	1 バイト	D、T

表 5 の注:

- 変換指定子では大文字と小文字は区別されます。
- 用途欄の記号の意味は次のとおりです。
 - D - DATE 項目
 - T - TIME 項目
- 長さの欄は EBCDIC 単一バイト・エンコード体系 (CCSID 37) が適用されるデフォルトの COBOL ロケールに基づいています。
- デフォルトでは、ゼロの値は 20 世紀 (1900 年 ~ 1999 年) を表します。この値は DATTIM PROCESS ステートメント・オプションに指定する基本世紀 (base century) に基づきます。

SIZE 句

SIZE 句では、日付項目または時刻項目の合計サイズを桁数で指定します。この桁数は形式リテラルのサイズ以上でなければなりません。形式リテラルのサイズは、変換指定子をそれらの最大値によって置き換え、必要な場合はさらに実行時 CCSID への変換を行うことによって判別されます。詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」に記載されている CRTCBMOD 用 CCSID パラメーターの説明を参照してください。

日付項目または時刻項目の長さがコンパイル時に判別できない場合は、これらの項目について SIZE 句を指定する必要があります。コンパイラが日付項目または時刻項目のサイズを判別できない場合を以下に示します。

- リテラル-8 と LOCALE 句の両方が指定されている場合。これは、日付項目または時刻項目には指定されたロケールから実行時に判別される部分が含まれるため、実際の長さは実行時に決まるということを意味します。
- リテラル-8 は指定されているが LOCALE 句は指定されておらず、リテラル-8 の中に指定されている変換のうちの 1 つを実行した結果が可変長項目になる可能性がある場合。
- リテラル-8 が指定されていない場合。これは、日付項目または時刻項目のすべての内容は指定されたロケールから実行時に判別されるため、実際の長さは決まるのは実行時であることを意味します。

整数-3、整数-4

整数-3 および整数-4 では、デフォルトの日付項目または時刻項目のサイズを桁数で指定します。日付項目または時刻項目のサイズがコンパイル時に判別できない場合は、整数-3 または整数-4 を指定する必要があります。日付項目および時刻項目については、整数-3 および整数-4 は 4 以上でなければなりません。日時クラスの項目の最大サイズは、その項目に USAGE DISPLAY が指定されている場合、またはその項目の USAGE PACKED-DECIMAL に 31 が指定されている場合は 256 桁となります。

LOCALE 句

LOCALE 句は、日付項目および時刻項目のフォーマット設定に使用する、特定の文化圏固有のロケールを指定するために使用します。

リテラル-8 を指定せずに LOCALE 句を指定する場合は、日付項目または時刻項目の形式および分離文字はすべてロケールに基づきます。リテラル-8 を指定した上で LOCALE 句を指定すると、項目の形式はリテラル-8 から判別されますが、正確な表記 (たとえば、%p) のロケールに従う変換指定子の置き換えに使用される値は、そのロケールに基づいた値です。

簡略名-3、簡略名-4

簡略名-3 または簡略名-4 が指定されている場合は、日付項目または時刻項目のために使用されるロケールは SPECIAL-NAMES 段落内の簡略名-3 または簡略名-4 に関連付けられているロケールとなります。簡略名-3 または簡略名-4 が指定されていない場合は、現行ロケールが使用されます。現行ロケールを判別する方法については、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

簡略名-3 および簡略名-4 はロケール簡略名でなければなりません。ロケール簡略名は SPECIAL-NAMES 段落の LOCALE 文節で指定します。95 ページの『LOCALE 文節』を参照してください。

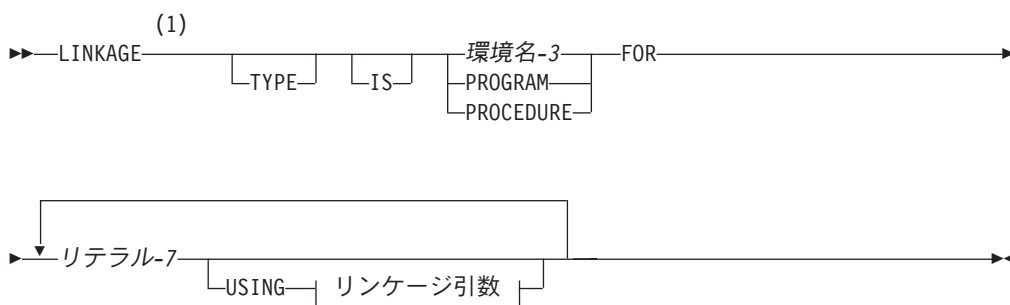
IBM 拡張 の終り

LINKAGE TYPE 文節

IBM 拡張

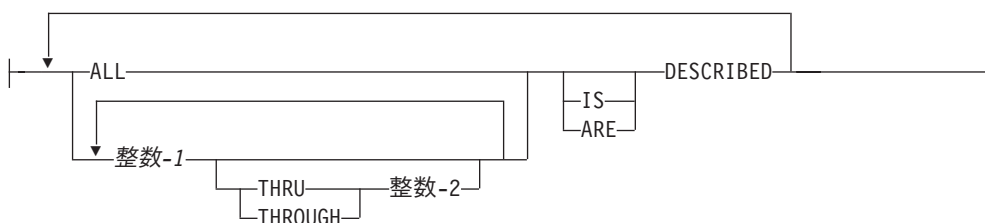
LINKAGE TYPE 文節は、リテラル-7 で指定されたプログラムに対する CALL またはそのプログラムの CANCEL で行うリンケージのタイプを指定するとともに、また、それを SET ステートメントで行うリンケージのタイプにすることを指定します。

LINKAGE TYPE 文節 - 形式



LINKAGE TYPE 文節

リンケージ引数:



注:

1 IBM 拡張

環境名-3

環境名-3 は次のように定義できます。

PGM プログラム・オブジェクト (*PGM) へのリンケージが生成されます。

PRC ILE プロシージャへのリンケージが生成されます。

SYS システム提供のプロシージャへのリンケージが生成されます。

PROGRAM

プログラム・オブジェクト (*PGM) へのリンケージが生成されます。これは、PGM の環境名-3 と同義です。

PROCEDURE

ILE プロシージャへのリンケージが生成されます。これは、PRC の環境名-3 と同義です。

リテラル-7

リテラル-7 は、プログラム・オブジェクトまたはプロシージャの名前です。リテラル-7 は、拡張名を含むことがあります。その名前は、プログラムでは最長 10 文字、プロシージャ名では最長 256 文字にできます。リテラル-7 は、OPTION(*MONOPRC) パラメーターの影響を受けます。*MONOPROC を指定すると、小文字は大文字に変換され、プログラム名を作成する際の規則が適用されます。詳細は、66 ページの『PROGRAM-ID 段落』にあるプログラム名のセクションを参照してください。

USING

どのパラメーターの操作記述子を呼び出し先のプロシージャから使用できるようにするのかを指定します。これらのパラメーターは、USAGE DISPLAY または USAGE DISPLAY-1 の指定付き基本データ項目として定義する必要があります。これらを参照変更することはできません。

USING 文節は、リンケージ・タイプのプロシージャに使用でき、CALL ステートメントにしか適用されません。

整数-1、整数-2

ゼロ以外の正の整数でなければなりません。操作記述子を使って記述されるすべてのパラメーターの順序位置を指定します。

整数-2 は整数-1 より大きくなければなりません。

DESCRIBED

整数-1 THROUGH 整数-2 で指定したパラメーターは、対応する操作記述子

とともに渡されます。 ALL を指定すると、適用できるのであれば、そのプロシージャー用に定義されたすべてのパラメーターが対応する操作記述子とともに渡されます。

LINKAGE TYPE 文節についての考慮事項

いくつかの方法で、CALL、CANCEL、または SET 用に生成されるリンケージのタイプに影響を与えることができます。その方法は、優先順位の順番でリストされます。CALL、CANCEL または SET ステートメントの LINKAGE 句が、最優先順位になります。ステートメントに LINKAGE 句の指定がなく、しかもネストされた可視のプログラムがない場合に LINKAGE TYPE 文節が指定されると、これが使用されます。優先順位は次のとおりです。

- ステートメントの LINKAGE 句
- ネストされたプログラムに対する CALL または CANCEL
- SPECIAL-NAMES 段落の LINKAGE TYPE 文節
- CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの LINKLIT パラメーター

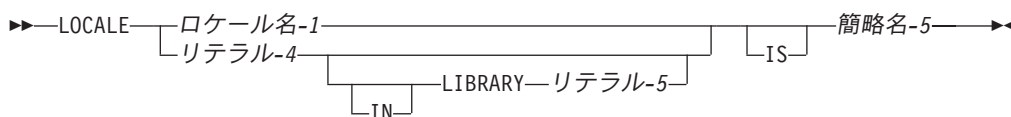
IBM 拡張 の終り

LOCALE 文節

IBM 拡張

LOCALE 文節は、ロケール簡略名と i5/OS においてそれらと等価のロケール・オブジェクト名およびライブラリーを定義するために使用します。

LOCALE 文節 - 形式



ロケール名-1

ロケール・オブジェクトを参照するシステム特定名を指定します。 ILE COBOL の場合、サポートされているロケール名-1 は POSIX だけです。

リテラル-4

リテラル-4 はロケール・オブジェクト名でなければなりません。これは、最大長が 10 文字までの非数字リテラルでなければなりません。

リテラル-5

リテラル-5 は、ロケール・オブジェクトを検出するオペレーティング・システム・ライブラリーの名前を指定する際に使用されます。これは、最大長が 10 文字までの非数字リテラルでなければなりません。特殊値 *LIBL (ジョブのライブラリー・リストを使用する検索) を指定できます。 LIBRARY 句を省略すると、ジョブのライブラリー・リストを使用して、ロケール・オブジェクトを検索します。

簡略名-5

簡略名-5 は、ロケール名-1 で識別されるロケールへの参照、またはリテラル-4

およびリテラル-5 に指定された値への参照を提供します。これを使用できるのは、FORMAT 文節、PICTURE 文節、SET ステートメントの形式-8、または数種の組み込み関数の引数リストの中だけです。

IBM 拡張 の終り

PROGRAM STATUS 文節

IBM 拡張

PROGRAM STATUS 文節は、エラーがプログラム内で発生した後、定義済みのプログラム状況構造の値の転送元の値にデータ項目を指定します。

PROGRAM STATUS 文節 - 形式



データ名-1

WORKING-STORAGE SECTION にある英数字フィールドでなければなりません。データ名-1 をネストされたプログラムから参照する場合には、最も外側のプログラムでグローバルと定義しなければなりません。データ名-1 は、プログラム状況構造サブフィールドの長さの倍数でなければなりません。

整数-1

プログラム状況構造の開始位置を指定します。整数-1 が指定されていない場合は、開始位置は 0 と仮定されます。整数-1 は、プログラム状況構造サブフィールドの開始位置と一致しなければなりません。

PROGRAM STATUS 文節が、SPECIAL-NAMES 段落で指定されている場合、データ名-1 は、定義済みプログラム状況構造の値で更新されます。この構造は、発生したプログラムの例外/エラーに関する情報を与えるサブフィールドを含んでいます。表 6 は、データ構造およびそれが含む情報のサブフィールドのレイアウトを規定します。

表 6. プログラム状況データ構造の内容

開始位置	長さ	形式	内容
0	10	文字	プログラム名。
10	10	文字	プログラム・ライブラリー名。
20	10	文字	モジュール名。
30	10	文字	ステートメント番号。選択不可の場合は、*N。
40	6	文字	最適化レベル。
46	7	文字	例外メッセージ ID。
53	10	文字	ジョブ名。
63	6	文字	ジョブ番号。

表 6. プログラム状況データ構造の内容 (続き)

69	1	文字	ジョブ・タイプ。
70	10	文字	プログラムを実行するユーザー・プロファイル。
80	14	文字	エラーが発生した時刻用のタイム・スタンプ (YYYYMMDDHHMMSS 形式)

長さおよび開始位置のコーディングによって、データ名-1 へ移動させられるプログラム状況構造のサブフィールド (複数のサブフィールド) を選択します。コンパイラーは、長さおよび開始位置を使用して、データ名-1 のマップ先であるプログラム状況のサブフィールド (複数のサブフィールド) を決定します。長さおよび開始位置は、プログラム状況構造の定義済みサブフィールドと 1 つ以上一致しなければなりません。

IBM 拡張 の終り

プログラム状況文節

第 9 章 入出力セクション

入出力セクションには、各ファイルを定義し、その外部ストレージ・メディアを識別し、1 つ以上の入出力装置にファイルを割り当て、そして外部メディアと COBOL プログラムの間でデータを送受信するのに必要な情報を指定します。

ファイル・カテゴリー

i5/OS システムには、データベース・ファイル、装置ファイル、DDM ファイル、および保管ファイルの 4 つのカテゴリーのファイルがあります。

本書では、これらのファイルを意味する用語として「ファイル」を使用します。

データベース・ファイル

データベース・ファイルを使用することにより、情報をシステムに永続的に保管できます。データベース・ファイルは、メンバーと呼ばれるレコードのグループに分けられます。データベース・ファイルは、物理ファイルと論理ファイルの 2 つのタイプに分かれます。

物理ファイルは、他のシステムのディスク・ファイルと同様に、データ・レコードを含むファイルです。

論理ファイルは、1 つまたは複数の物理ファイルのデータにアクセスするために使用するデータベース・ファイルです。このデータの形式および編成は、物理ファイル内のデータのものとは異なっています。各論理ファイルは、物理ファイル内のデータに別のアクセス・パス (索引) を定義でき、物理ファイルに定義されているフィールドを除外して、その番号を付け直すことができます。

分散ファイル

分散ファイルを使用すると、単一データベースの外観および機能を保ったまま、1 つのデータベース・ファイルを複数の System i5/OS サーバー上に分散させることができます。データベース要求を分割して複数のシステムで処理することにより、大規模な照会の処理効率を向上させることが可能です。分散ファイルは、多くの点で DATABASE ファイルと同様の振る舞いをします。ただし、ファイルは複数システムにまたがって分散されているため、その到着順序や相対番号を信頼することはできず、リモート・システムがアクセスされるたびにシステム間でデータを渡すためのデータ・リンクが必要となり、その分だけ時間がかかります。

分散ファイルへのアクセスの詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

装置ファイル

装置ファイルは、装置またはリモート・システムからの読み取りや、またはそれらへの書き込みを行います。装置ファイルは、物理装置またはリモート・システムとプログラムの間で行われるデータの送受信を制御します。

DDM ファイル

分散データ管理機能 (DDM) を用いると、DDM をサポートするリモート・システムに存在するデータにアクセスできます。他のシステムに存在するファイル内のデータ・レコードを、検索、追加、更新、または削除できます。

リモート・ファイルへのアクセスの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『*DB2 Universal Database for AS/400*』セクションを参照してください。

保管ファイル

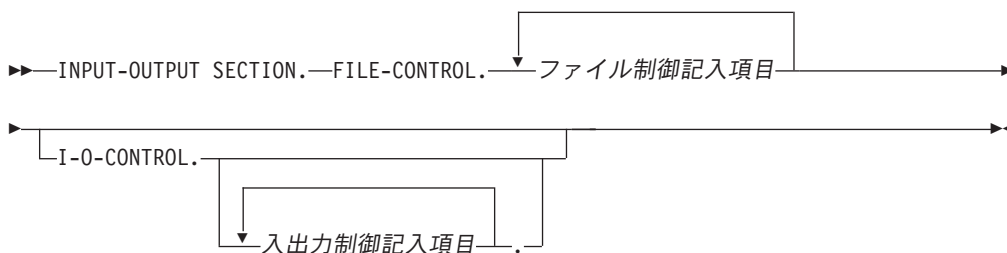
保管ファイルとは、バックアップおよびリカバリー用、または別のシステムへの転送用に適した形式でデータを作成するために使用されるファイルのことです。このファイルには、ライブラリー保管 (SAVLIB) またはオブジェクト保管 (SAVOBJ) CL コマンドから作成された出力が入ります。保管ファイルの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『*DB2 Universal Database for AS/400*』セクションを参照してください。

段落

環境部の入出力セクションには 2 つの段落があります。

- FILE-CONTROL 段落
- I-O-CONTROL 段落

入出力セクション - 形式



FILE-CONTROL 段落

ファイルに名前を付け、外部メディアと関連付けます。

キーワード FILE-CONTROL は、FILE-CONTROL 段落の先頭に、1 回だけ現れることができます。区域 A から始め、分離文字ピリオドが続かなければなりません。

ファイル制御記入項目

SELECT 文節の区域 B から始めなければなりません。これは分離文字ピリオドで終わらなければなりません。101 ページの『FILE-CONTROL 段落』を参照してください。

I-O-CONTROL 段落

外部メディアと COBOL プログラムの間でデータを伝送するために必要な情報を指定します。

入出力制御記入項目

連続する記入項目は、分離文字ピリオドで終わらなければなりません。126 ページの『I-O-CONTROL 段落』を参照してください。

入出力セクションの正確な内容は、ファイル編成と使用されるアクセス方式によって異なります。110 ページの『ORGANIZATION 文節』および 112 ページの『ACCESS MODE 文節』を参照してください。

FILE-CONTROL 段落

FILE-CONTROL 段落は、COBOL プログラム中の各ファイルを外部メディアと関連付けて、ファイル編成、アクセス・モード、およびその他の情報を指定します。

COBOL では 4 つの種類の異なるファイル入出力を行うことができます。

- 順次
- 相対
- 索引付き

IBM 拡張

- トランザクション

IBM 拡張 の終り

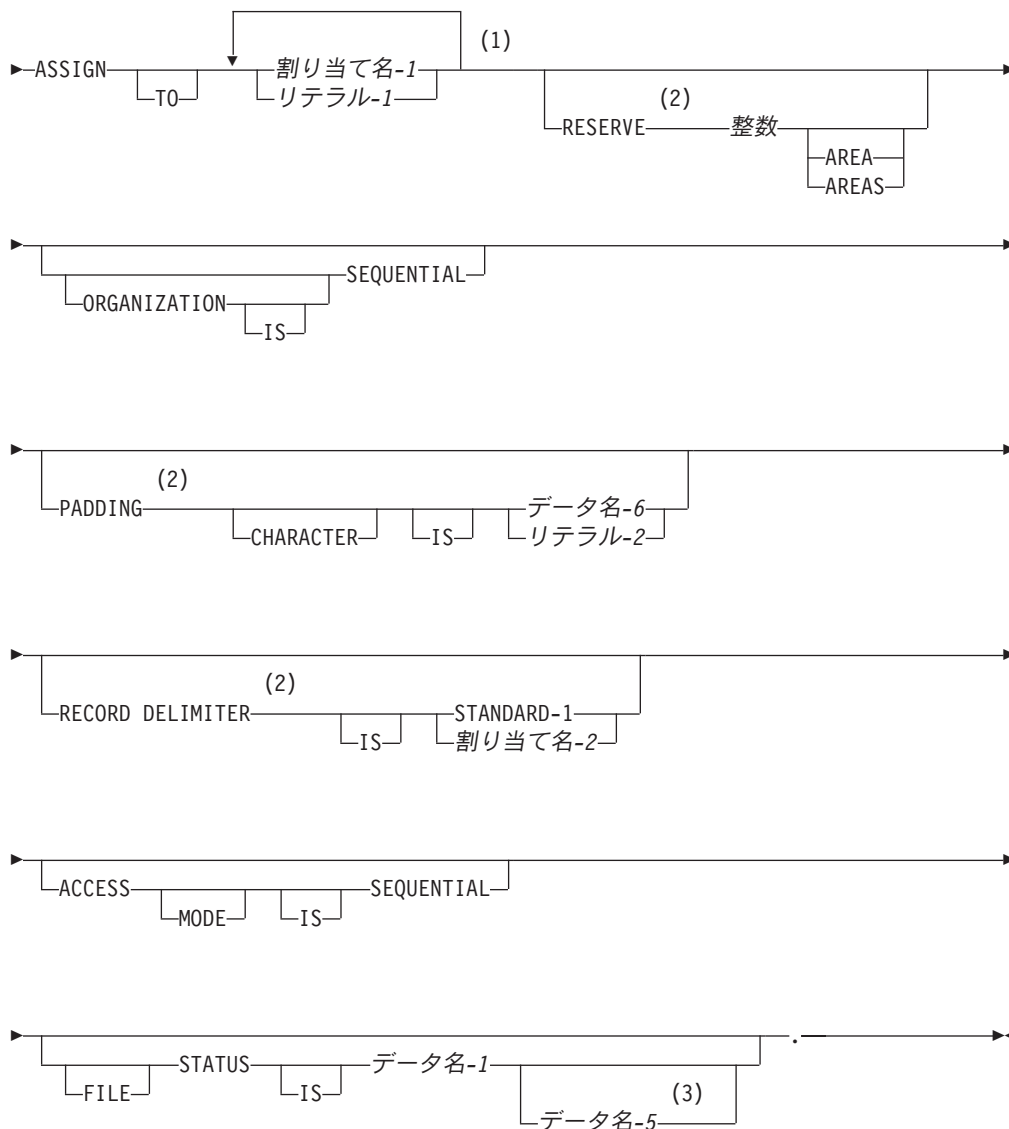
FILE-CONTROL 段落は、"FILE-CONTROL" という語で始まり、その後に分離文字ピリオドが付きます。この段落には、データ部の FD 記入項目または SD 記入項目に記述される各ファイルの記入項目が、1 つだけ含まれていなければなりません。各項目内の先頭には、必ず SELECT 文節がなければなりません。それ以外の文節はどのような順序で記入してもかまいません。

各データ名は、データ部のデータ記述記入項目に現れなければなりません。各データ名は、修飾できますが、添え字または指標を付けることはできません。

FILE-CONTROL 段落 - 形式 1 - 順次ファイル**FILE-CONTROL 段落 - 形式 1 - 順次**

▶▶ FILE-CONTROL.—SELECT OPTIONAL ファイル名 →

FILE-CONTROL 段落

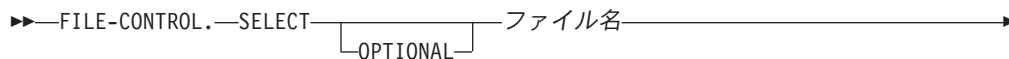


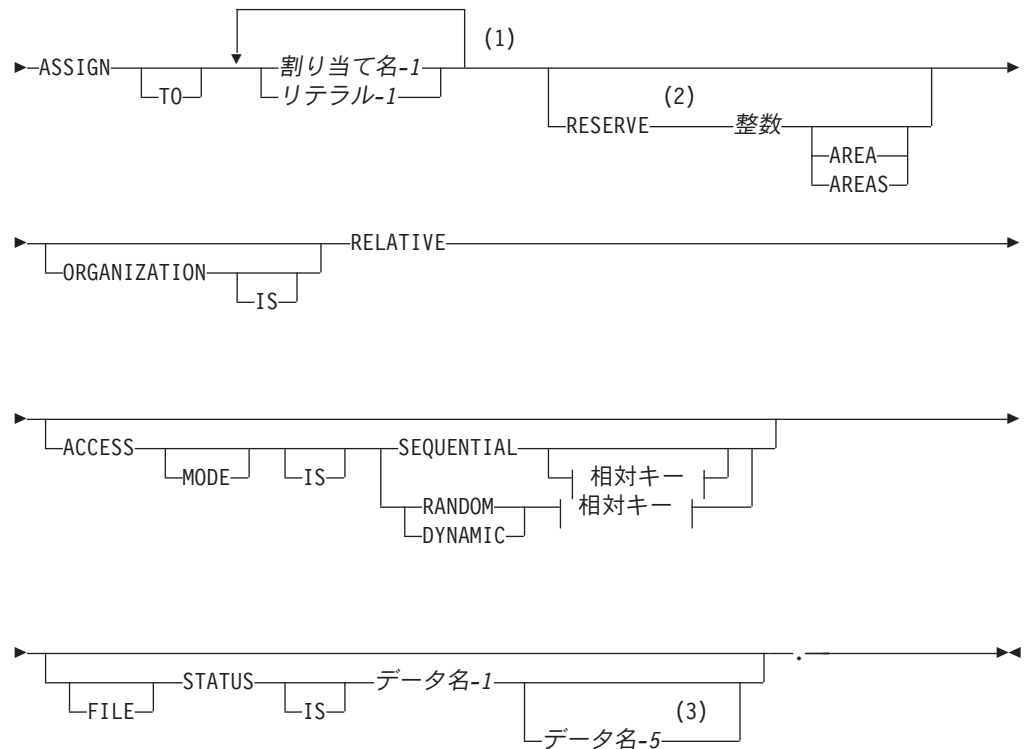
注:

- 1 以降の反復に対する構文検査だけが行われます。
- 2 構文検査だけ行われます。
- 3 IBM 拡張

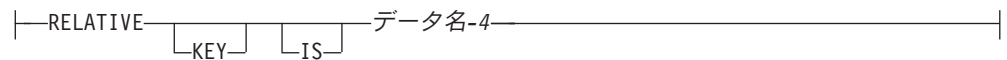
FILE-CONTROL 段落 - 形式 2 - 相対ファイル

FILE-CONTROL 段落 - 形式 2 - 相対





相対キー:

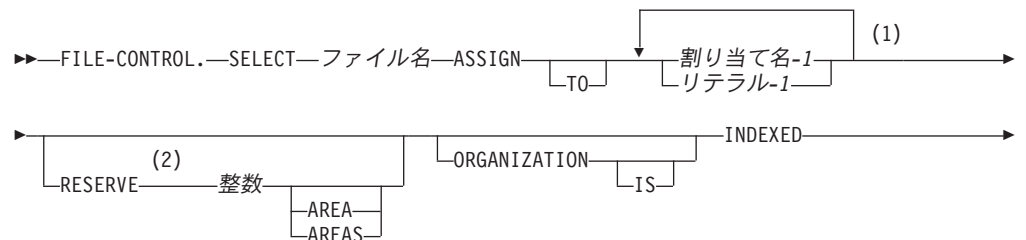


注:

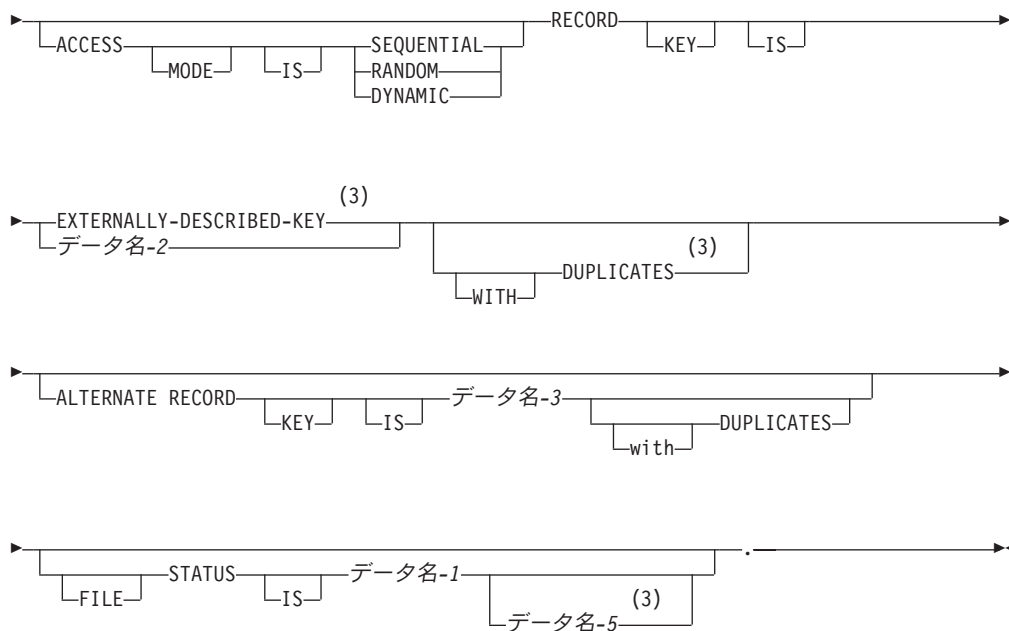
- 1 以降の反復に対する構文検査だけが行われます。
- 2 構文検査だけ行われます。
- 3 IBM 拡張

FILE-CONTROL 段落 - 形式 3 - 索引付きファイル

FILE-CONTROL 段落 - 形式 3 - 索引付き



FILE-CONTROL 段落

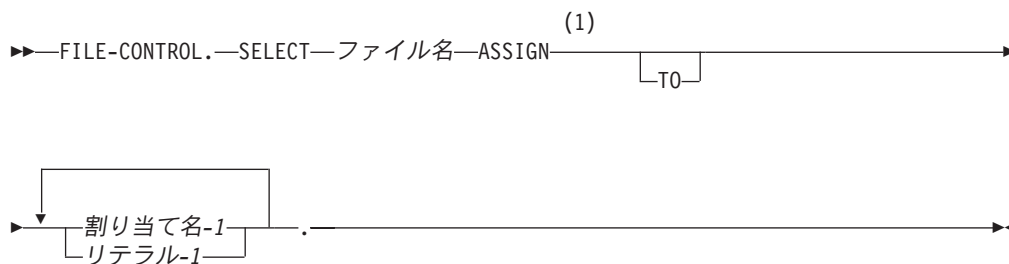


注:

- 1 以降の反復に対する構文検査が行われます。
- 2 構文検査だけ行われます。
- 3 IBM 拡張

FILE-CONTROL 段落 - 形式 4 - ソート・ファイルまたはマージ・ファイル

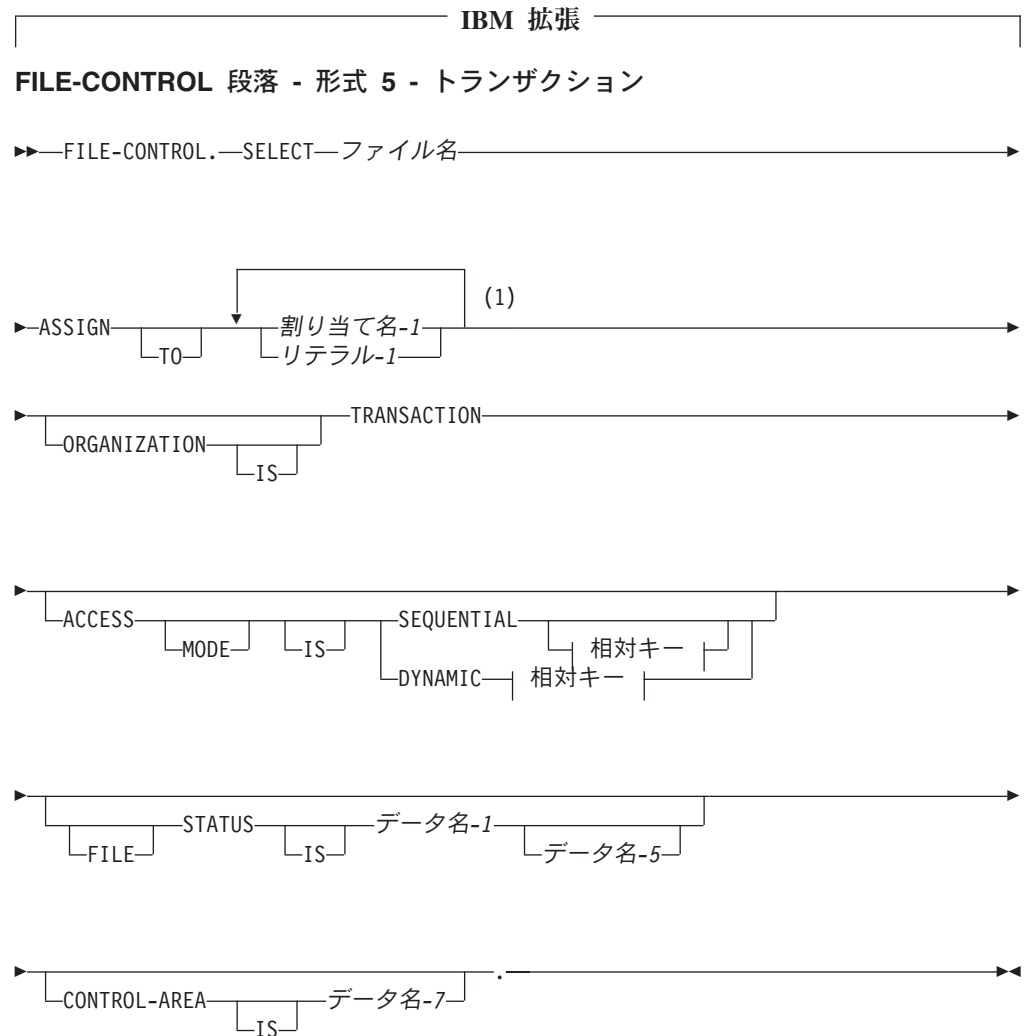
FILE-CONTROL 段落 - 形式 4 - ソートまたはマージ



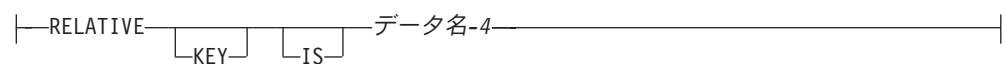
注:

- 1 構文検査だけ行われます。

FILE-CONTROL 段落 - 形式 5 - トランザクション・ファイル



相対キー:



注:

1 以降の反復に対する構文検査だけが行われます。

トランザクション・ファイル処理の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」のトランザクション・ファイルに関する章を参照してください。

IBM 拡張 の終り

SELECT 文節

SELECT 文節はファイルを選択します。

SELECT 文節 - 形式 - 順次および相対ファイル



SELECT 文節 - 索引付き、ソート・マージ、トランザクション・ファイル



SELECT OPTIONAL (形式 - 順次ファイル、相対ファイル)

入力、入出力、または拡張モードでオープンする順次ファイルと相対ファイルのときだけ指定できます。オブジェクト・プログラムを実行するごとに、必ずしも示されない入力ファイルに対して SELECT OPTIONAL を指定しなければなりません。

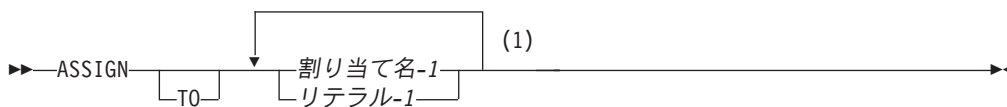
ファイル名

データ部の FD または SD 項目によって識別されなければなりません。ファイル名は COBOL ユーザー定義名の規則に従い、少なくとも 1 つの英文字が入り、かつ、このプログラム内で固有でなければなりません。

ASSIGN 文節

ASSIGN 文節は、ファイルと外部メディアを関連付けます。

ASSIGN 文節 - 形式



注:

1 以降の反復に対する構文検査だけが行われます。

ソート・ファイルまたはマージ・ファイル (SD 記入項目と関連した) では、外部メディアは使用しません。関連付けられた ASSIGN 文節は、構文が検査されるだけです。

割り当て名-1、リテラル-1

割り当て名-1 あるいはリテラル-1 で、ファイルと外部メディアを関連付けます。

2 番目以降の割り当て名-1 またはリテラル-1 はすべて構文検査されますが、プログラムの実行には影響を与えません。

割り当て名-1 またはリテラル-1 を構成する 3 つの部分は次のとおりです。

- 装置
- ファイル名

- 属性

これは、次の一般構造をもちます。

形式

▶—装置— - ファイル名 —————▶
 └ - 属性 ┘

装置

この部分はファイルが使用する装置のタイプを指定します。これによってコンパイラーは、ファイルが一貫した方法で記述され、使用されているかどうかを検査します。詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

注:

1. コンパイラーは、外部ファイルと関係のある装置が割り当て名-1 またはリテラル-1 の装置部分に指定されたタイプであるかどうかの検査はしません。
2. コンパイラーは、入出力 verb が整合性のない方法で使用されていないかぎり、診断をしません。
3. プログラムが実行されると、オペレーティング・システムはエスケープ・メッセージを出すか、または機能が装置に適用できなければそれを無視することがあります。一時変更ファイルの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリーの中の『ファイル・システムおよび管理』セクションを参照してください。

IBM 拡張

ファイルが使用する装置は OVRxxxF CL コマンドによって実行時に変更できます。矛盾のない結果を確実にするためには、ファイルに関連した装置タイプは割り当て名に与えられたものと一致させる必要があります。

IBM 拡張 の終り

装置は次のどちらでもかまいません。

装置 関連付けられるファイル

PRINTER

PRINTER はプログラム記述プリンター・ファイルにのみ指定されます。

FORMATFILE

FORMATFILE は、外部記述プリンター・ファイルにのみ指定されます。外部記述プリンター・ファイルの使用法についての詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『FORMATFILE』のセクションを参照してください。

TAPEFILE

テープ・ファイル

DISKETTE

ディスクット・ファイル

DISK 任意の物理データベース・ファイルまたは単一様式の論理データベース・ファイル。DISK が装置である場合、データベースの拡張は使用できませんが、動的ファイル作成はサポートされています。DISK ファイルの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。動的ファイル作成の詳細は 438 ページの『OPEN ステートメントに関する考慮事項』を参照してください。

DATABASE

任意のデータベース・ファイル (または DDM ファイル)。DATABASE が装置である場合、外部記述データおよびデータベース拡張は使用できませんが、動的ファイル作成はサポートされていません。

WORKSTATION

ディスプレイ・ファイルまたは ICF ファイル。

ファイル名

割り当て名のこの部分は、実際の外部ファイル (物理データベースまたは論理データベース、あるいは装置) の、10 文字以内のハイフンなしのシステム名でなければなりません。この外部ファイルが、プログラムの中で COPY ステートメント、DDS (データ記述仕様) または DD 様式で使用されている場合には、このプログラムのコンパイルの前にこの外部ファイルは作成されていなければなりません。

引用符付きのファイル名を、リテラル-1 に指定できます。たとえば、i5/OS システム・ファイルに、"sysfile" という引用符付きの名前が付いている場合、リテラル-1 の記入項目は次のようにコーディングします。

```
"device-" "sysfile" "-SI"
```

データベース・ファイルの場合、メンバー名をプログラム中に指定することはできません。最初のメンバー以外のメンバーを指定すべき場合は、実行時に、データベース・ファイル指定変更 (OVRDBF) CL コマンドを使ってメンバー名を指定しなければなりません。

このファイル名は、プログラム参照表示 (DSPPGMREF) コマンドによって表示される i5/OS オブジェクトの名前です。SD ファイルに外部メディアが使用されないため、DSPPGMREF コマンドは、SD ファイル用に定義されたファイルをリストしません。

ファイル名は、実行時に OVRxxx F CL コマンドの TOFILE パラメーターを使って変更できます。一貫性のある結果が得られるようにするためには、TOFILE パラメーターに関連付けられる装置タイプを、割り当て名-1 またはリテラル-1 に指定されているものと同じにすることが必要です。

属性

割り当て名-1 またはリテラル-1 のこの部分は SI または ALWNULL にすることができます。

SI ファイル FORMATFILE または WORKSTATION に関する DDS の中で独立標識域が指定されたことを示します。

ALWNULL

ALWNULL が指定されている場合は、プログラムはデータベース・ファイル内のヌル可能フィールドを操作できます。このキーワードを使用できるのは装置タイプが DATABASE の場合だけです。

属性 SI または ALWNULL の使用法と ASSIGN 文節の詳細については、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

割り当て名-1 またはリテラル-1 の各フィールドの有効な記入項目は、装置によって異なります。フィールドの有効な組み合わせを表 7 に示します。

表 7. 割り当て名-1 およびリテラル-1 の有効な記入項目

装置	ファイル名	デフォルト・ファイル名	SI	ALWNULL
PRINTER	O	QPRINT	N	N
FORMATFILE	R		O	N
TAPEFILE	O	QTAPE	N	N
DISKETTE	O	QDKT	N	N
DISK	R		N	N
DATABASE	R		N	O
WORKSTATION	R		O	N

キー:
 R = 必要
 O = オプション
 N = 使用不可

RESERVE 文節

RESERVE 文節は入出力域を予約します。構文検査は行われますが、文書化のための記述として処理されます。

RESERVE 文節 - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

ORGANIZATION 文節

ORGANIZATION 文節は、ファイルの論理構造を指定します。ファイル編成は、ファイル作成時に確立され、あとでそれを変更することはできません。

IBM 拡張

データベース・ファイルの場合、ORGANIZATION 文節は、プログラムでのファイルの現行プログラム使用を示します。したがって、同じデータベース・ファイルで、ORGANIZATION 文節に SEQUENTIAL、RELATIVE、または INDEXED を使えます (キー順アクセス・パスが存在すると想定して)。このファイルを使用する他のプログラムに何が指定されていても、同じことがいえます。

キー順アクセス・パスは、物理ファイル作成 (CRTPF) または論理ファイル作成 (CRTPF) CL コマンドへの入力として使われた DDS にキーが指定されると、常に作成されます。

IBM 拡張 の終り

ORGANIZATION IS SEQUENTIAL (形式 1)

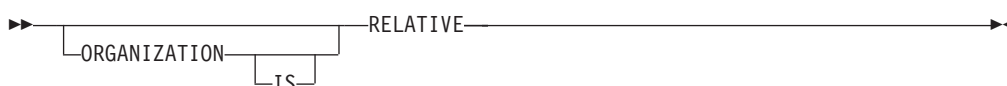
ORGANIZATION 文節 - 順次ファイル



ファイル中のレコードの先行・後続関係は、ファイルが作成または拡張されるときにレコードがファイルに置かれる順番によります (到着順アクセス・パス)。

ORGANIZATION IS RELATIVE (形式 2)

ORGANIZATION 文節 - 相対ファイル



ファイル中の各レコードの位置は、到着順アクセス・パス内のその相対レコード番号によって決まります。

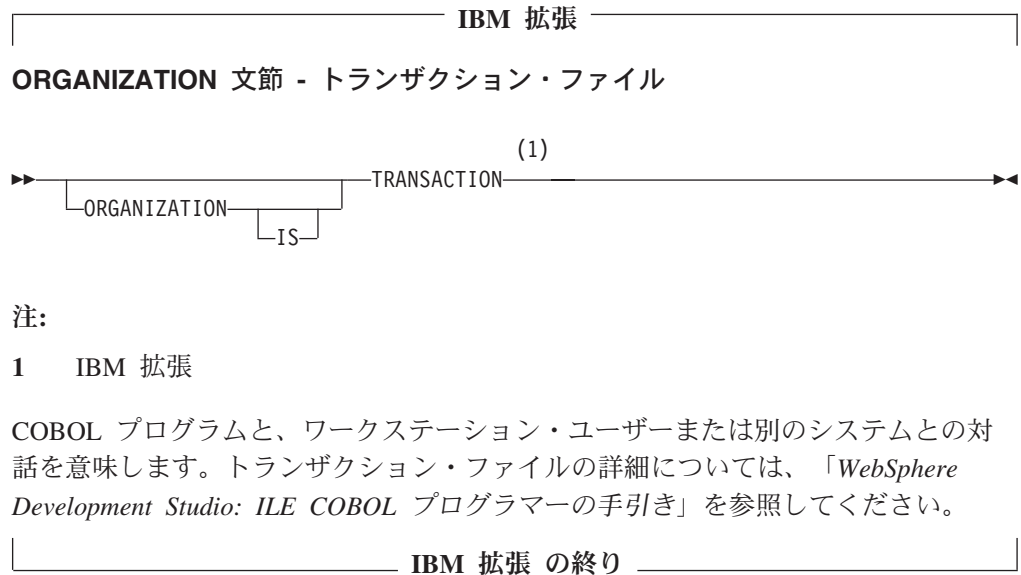
ORGANIZATION IS INDEXED (形式 3)

ORGANIZATION 文節 - 索引付きファイル



ファイル内の各論理レコードの位置は、ファイルと共に作成され、システムによって維持されるキー順アクセス・パスにより決まります。アクセス・パスは、ファイルのレコード内の埋め込みキーに基づいています。

ORGANIZATION IS TRANSACTION (形式 4)



PADDING CHARACTER 文節

PADDING CHARACTER 文節は、順次ファイルのブロック埋め込みに使用される文字を指定します。

PADDING CHARACTER 文節は構文検査はされますが、コンパイル時または実行時の検査は行われません。この文節はプログラムの実行には影響しません。

PADDING CHARACTER 文節 - 形式



注:

1 構文検査だけ行われます。

データ名-6

データ部に 1 文字データ項目として英数字で定義しなければならず、ファイル・セクションに定義してはなりません。データ名-6 は修飾できます。

リテラル-2

1 文字の非数字リテラルでなければなりません。

EXTERNAL ファイルの場合、データ名-6 が指定されると、それは EXTERNAL データ項目を参照しなければなりません。

RECORD DELIMITER 文節

RECORD DELIMITER 文節は、外部メディアでの可変長レコードの長さの判別法を示します。この文節は、可変長レコードにしか指定できません。

RECORD DELIMITER 文節の構文は検査されますが、コンパイル時にも実行時にも検査は行われません。この文節は説明として取り扱われます。

RECORD DELIMITER 文節 - 形式



注:

1 構文検査だけ行われます。

STANDARD-1

STANDARD-1 を指定する場合、外部メディアは磁気テープ・ファイルでなければなりません。

割り当て名-2

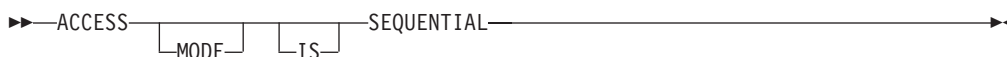
任意の COBOL 語を使えます。

ACCESS MODE 文節

ACCESS MODE 文節は、ファイル内のレコードが処理のために使用可能にされる際の方法を定義します。ACCESS MODE 文節を指定しないと、SEQUENTIAL アクセスと見なされます。

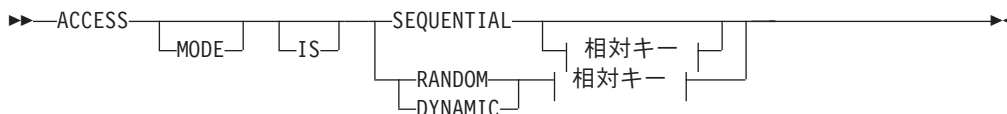
ACCESS MODE 文節 - 形式 1 - 順次ファイル

ACCESS MODE 文節 - 形式 1 - 順次ファイル

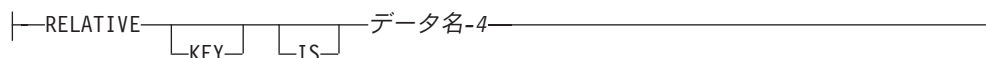


ACCESS MODE 文節 - 形式 2 - 相対ファイル

ACCESS MODE 文節 - 形式 2 - 相対ファイル



相対キー:



ACCESS MODE 文節 - 形式 3 - 索引付きファイル

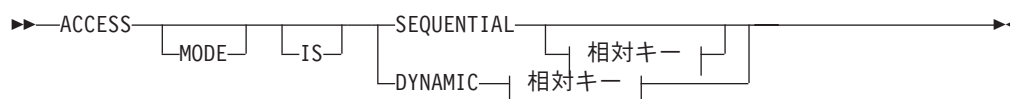
ACCESS MODE 文節 - 形式 3 - 索引付きファイル



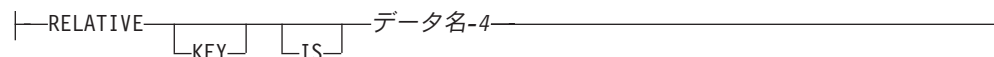
ACCESS MODE 文節 - 形式 4 - トランザクション・ファイル

IBM 拡張

ACCESS MODE 文節 - 形式 4 - トランザクション・ファイル



相対キー:



IBM 拡張 の終り

ACCESS MODE IS SEQUENTIAL

次の 3 種類のファイルのどれにでも指定できます。

順次

ファイル内のレコードは、そのファイルの作成時または拡張時 (到着順) に確立された順序でアクセスされます。

相対

ファイル内のレコードは、ファイル内の既存のレコードの相対レコード番号の昇順にアクセスされます。

索引付き

ファイル内のレコードは、そのファイルの照合順序にしたがって、昇順のレコード・キー値の順番にアクセスされます。

IBM 拡張

外部記述されたファイルの使用時に、フィールドをキー・フィールドと指定するのに DDS キーワードの DESCEND を使うと、そのファイル内のレコードは、索引内の降順のレコード・キー値の順番にアクセスされます。DESCEND キーワードまたは ASCEND キーワード (DESCEND が指定されない場合) のいずれかが、COBOL ソース・プログラム・リストのコメント・テーブルに RETRIEVAL というヘッディングで現れます。

IBM 拡張 の終り

ACCESS MODE IS RANDOM

相対ファイルまたは索引付きファイルにしか指定できません。また、SORT または MERGE ステートメントの USING 句または GIVING 句に指定するファイル名には、ACCESS MODE IS RANDOM を指定してはなりません。

相対

相対キー・データ項目に入っている値が、アクセスされるレコードを指定します。

索引付き

現行参照キーのレコード・キー・データ項目に入っている値で、アクセスするレコードを指定します。

ACCESS MODE IS DYNAMIC

相対ファイルまたは索引付きファイルにしか指定できません。

相対

特定の入出力要求の形式に応じて、ファイル内のレコードに順次またはランダムにアクセスできます。

索引付き

特定の入出力要求の形式に応じて、ファイル内のレコードに順次またはランダムにアクセスできます。

データ編成とアクセス・モード

データ編成とは、ファイルの永続的な論理構造のことです。コンピューターにファイルからレコードを検査する方法を伝えるには、**アクセス・モード**を指定します。COBOL では、4 種類のデータ編成、および 3 つのアクセス・モードをどれでも指定できます。順次編成されたデータには順次アクセスしかできませんが、索引編成または相対編成になっているデータには、3 つのアクセス方法のどれでもアクセスできます。

データ編成

COBOL プログラムのデータ編成には次のものがあります。

- 順次
- 相対
- 索引付き

IBM 拡張

- トランザクション

IBM 拡張 の終り

順次編成

ファイル内にレコードが置かれる物理的順序が、レコードの順序を決定します。ファイルのレコード間の関係は、ファイルが拡張されない限り、変わりません。キーはありません。データベース・ファイルおよび装置ファイルの両方が順次編成にできます。

ファイル内の各レコードには、最初のを除いて、固有の先行レコードがあり、また最後のレコード以外の各レコードには、固有の後続レコードがあります。

相対編成

このファイルは、おのおのが 1 つのレコードを持つレコード域がいくつか順に並んでいるものと考えられます。各レコード域は相対的なレコード番号で識別されますが、アクセス方式の場合、その相対レコード番号に基づいてレコードを保管したり取り出したりします。たとえば、最初のレコード域は相対レコード番号 1 でアドレスされ、10 番目のレコード域は相対レコード番号 10 でアドレスされます。相対ファイルは DISK または DATABASE に割り当てなければなりません。

表 8には、相対出力ファイルに影響する条件が要約されています。

表 8. 相対出力ファイルの初期設定

ファイル・アクセス および CL 指定	オープン時の条件	クローズ時の条件	ファイル境界
順次 *INZDLT		書き出されないレコードが初期設定される	全増分
順次 *INZDLT *NOMAX サイズ		CLOSE は正常に完了 ファイル状況は 0Q	書き込まれたレコードの境界まで
順次 *NOINZDLT			書き込まれたレコードの境界まで
ランダムまたは動的	レコードは初期設定されるファイルはオープンされている		全増分
ランダムまたは動的 *NOMAX サイズ	OPEN は失敗ファイル状況は 9Q		ファイルは空

9Q のファイル状況から回復するためには、関連する実行時メッセージ・テキストに記述されているとおりに、CHGPF (物理ファイル変更) コマンドを使用してください。

相対レコード番号処理は、物理ファイルまたは、ただ 1 つの物理ファイルに基づいている論理ファイルに使用できます。

ファイル境界の拡張

ファイルの作成後に、ファイル・サイズを拡張できます。ファイルのファイル状況として 0Q を受け取ったら、その処理を行う前にさらにレコードをそのファイルに追加することが必要な場合があります。INZPFM (物理ファイル・メンバー初期設定) コマンドを使えば、削除済みレコードをそのファイルに追加できます。

たとえば、10 000 のレコードのファイルを作成してから、毎回 1 000 のレコードを 3 回増分するとします。

1. レコード (最初の 10 000) を初期設定します。
2. さらに多くのデータを保管する必要が生じます。そこで、RECORDS(*DLT) オプションを指定して INZPFM コマンドを再度実行し、13 000 のレコードをすべて初期設定します。

3. そのうえ、さらにデータを保管する必要が生じますが、13 000 のレコードはすべて使いきっています。もう一度 INZPFM コマンドを実行すると、次のうちのいずれかを行うよう求める対話式エラー・メッセージ (重大度 99 の) を受け取ります。
 - a. INZPFM 要求を取り消す
 - b. 要求を継続する (つまり、次の 1 000 のレコードを初期設定する)
4. 上記のステップの 2 番目のオプションを選択すると、全部で 14 000 のレコードが初期設定されます。このようにして、それ以前に定義された最大値以上にファイル・サイズを拡大します。

索引編成

ファイル中の各レコードには、索引に関連付けられた埋め込みキー (キー・データ項目と呼ばれます) があります。各索引はそれに関連する埋め込みレコード・キー・データ項目の内容に従って、データ・レコードへの論理パスを提供します。データベース・ファイルと DISK ファイルのみを索引編成にできます。

レコードの挿入、更新、または削除が行われるとき、それらのレコードはその基本キーの値によってのみ識別されます。基本キー・データ項目名は、FILE-CONTROL 段落の RECORD KEY 文節に指定します。

IBM 拡張

OUTPUT 用にオープンされている論理ファイルは、そのベースとなっている物理ファイル内のすべてのレコードを取り除くわけではありません。そうではなく、ファイルは書き込み操作のみ許されるようにオープンされ、レコードをファイルに追加することができます。

IBM 拡張 の終り

TRANSACTION 編成

IBM 拡張

ワークステーションおよびデータ通信ファイルは、TRANSACTION 編成にできます。「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」のトランザクション・ファイルの章を参照してください。

IBM 拡張 の終り

アクセス・モード

アクセス・モードとは、論理ファイルまたは物理ファイルのデータを処理する方法を定義する COBOL の用語です。アクセス・モードには、順次、ランダム、および動的の 3 つがあります。

順次アクセス・モード

連続してファイルのレコードの読み取り、および書き込みを行えるようにします。参照する順は、そのファイル内のレコード位置によって決まります。

ランダム・アクセス・モード

プログラムの指定どおりにレコードの読み取りおよび書き込みを行えるようにします。ファイルの連続参照の制御は、ユーザーが提供する特殊な定義のキーで示します。

動的アクセス・モード

特定の入出力要求によって、アクセス・モードを決定できます。したがって、レコードを順次またはランダム (あるいはその両方) で処理することができます。

データ編成とアクセス・モードの関係

順次ファイル

順次編成のファイルへは、順次にアクセスします。レコードがアクセスされる順序は、レコードが書かれた順番です。

相対ファイル

3 つのすべてのアクセス・モードが指定可能です。

順次アクセス・モードでは、レコードがアクセスされる順序は、ファイル内に現在あるすべてのレコードの相対番号の昇順です。

ランダム・アクセス・モードでは、レコードがアクセスする順序をユーザーが制御します。目的のレコードにアクセスするには、**RELATIVE KEY** データ項目にそのレコードの相対レコード番号を入れます。**RELATIVE KEY** を、このファイルのレコード記述記入項目に定義してはなりません。

動的アクセス・モードでは、適切な形式の入出力ステートメントを使って順次アクセスからランダム・アクセスへ変更できます。

索引付きファイル

3 つのすべてのアクセス・モードが指定可能です。

順次アクセス・モードでは、レコードがアクセスする順序は、基本レコード・キーの値で決定されます。参照キーである別のレコード・キー内にも同じ重複値を持つレコードは、**WRITE** ステートメントか、またはその重複値を作成する **REWRITE** ステートメントの実行で解放されたときと同じ順序で使用できるようになります。

ランダム・アクセス・モードでは、レコードがアクセスする順序をユーザーが制御します。目的のレコードへアクセスするには、**RECORD KEY** データ項目にそのレコード・キーを入れます。一連のレコードが代替レコード・キー値を持つときは、最初に書き込まれたレコードだけが使用可能になります。

動的アクセス・モードでは、適切な形式の入出力ステートメントを使って順次アクセスからランダム・アクセスへ変更できます。

トランザクション・ファイル

IBM 拡張

トランザクション・ファイルの場合のアクセス・モードに関する考慮事項について

ACCESS MODE 文節

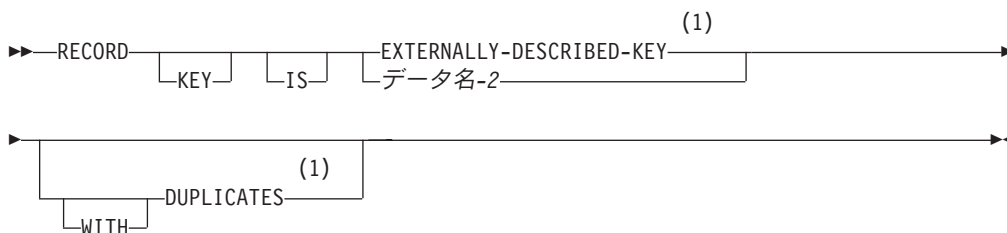
は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」のトランザクション・ファイルの章の説明を参照してください。

IBM 拡張 の終り

RECORD KEY 文節

RECORD KEY 文節は、索引付きファイルに指定しなければなりません。RECORD KEY 文節は、索引付きファイルのレコード・キーであるレコード内のデータ項目を指定します。

RECORD KEY 文節 - 形式



注:

- 1 IBM 拡張

DUPLICATES 句

IBM 拡張

DUPLICATES 句は、重複レコード・キーを割り当てられたファイルにしか指定できません。これによってファイルは同じ値を持つ複数のキーを持つことができます。ファイルに複数の形式がある場合、異なった形式の 2 つのキーは、キーの長さおよびキーの内容が同じであるときにのみ、同じ値を持ちます。

たとえば、次の 2 つの形式を持つファイルがあるとします。

- A、B、C のキーを持つ形式 F1
- A、B、D のキーを持つ形式 F2

フィールド C および D が同じ長さで、同じデータ・タイプ、および同じ値を持つ場合、ファイルには 1 つの重複キーを持つ 2 つのレコードが入ります。重複キーという用語は、形式の完全なレコード・キーにのみ適用します。形式についてのレコード・キーは、データベースにあるレコードの DDS 形式に定義されるキー・フィールドから構成されます。この用語はファイルの共通キー (上の例のフィールド A および B のみ) には適用しません。

ユーザーは、RECORD KEY 文節に DUPLICATES を指定できます。ファイル状況 95 は、以下の条件で正常にオープンした後に返されます。

- DUPLICATES 句が COBOL プログラムで指定されており、ファイルは、DDS で UNIQUE と指定して作成された。

- **DUPLICATES** 句は COBOL プログラムで指定されず、ファイルは非固有キーで作成された。

これらのいずれかの条件が存在するときのファイルの処理は、予測できない結果をもたらすことがあります。

重複を認め、ランダムにもしくは動的に処理されるファイル内では、更新または削除される重複レコードは適切なものでなければなりません。そのためには、**REWRITE** または **DELETE** 操作に先立って処理された最後の入出力ステートメントは、**NO LOCK** 句のない **READ** ステートメントが正常に処理されたものでなければなりません。

DDS ファイル・レベル・キーワード **LIFO** (後入れ先出し法) を指定した場合には、物理ファイル内の重複レコードは後入れ先出し法の順番で検索されます。

IBM 拡張 の終り

データ名-2

データ名-2 は、**RECORD KEY** データ項目です。これはファイルと関連するレコード記述項目内の固定長英数字項目として記述しなければなりません。またこれは、変数オカレンス・データ項目の入ったグループ項目を参照してはなりません。データ名-2 は修飾できますが、添え字を付けてはなりません。

レコード・キーの長さには制限があり、バイト数でのキー長は 2 000 を超えてはなりません。詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『*DB2 Universal Database for AS/400*』セクションを参照してください。

索引付きファイルに可変長レコードが入っていると、データ名-2 はそのレコードの最初の "x" 位置に入らなければなりません。ここで、"x" はそのファイル用に指定された最小レコード・サイズです。

EXTERNAL ファイルの場合、**EXTERNAL** ファイルに関連しそして実行単位内にあるすべてのファイル記述項目には、関連したレコード内の同じ相対ロケーションを使って、同じデータ記述項目をデータ名-2 に指定しなければなりません。そうしないと、予期しない結果を生じます。

IBM 拡張

ファイルが **DATABASE** 装置タイプに割り当てられている場合は、**RECORD KEY** データ項目 (データ名-2) は日時項目または数字項目であっても構いません。数字項目は、**DISPLAY**、**COMP-1**、**COMP-2**、**COMP (COMP-3)**、**COMP-4**、**PACKED-DECIMAL**、または **BINARY** 形式の場合があります。数字項目は、外部浮動小数点データ項目にすることもできます。

ILE COBOL は、広範な日時データ項目形式をサポートしています。これらの形式のうち、多くのものは **DDS** のサポート外です。サポート外の場合、下層の **DDS** フィールドは文字フィールドまたは数字フィールドとして定義する必要があります。 **COBOL** は日時項目を定義しているが下層 **DDS** フィールドは日時用ではない場合は、データベースに対するレコード検索またはレコード書き込み

は下層 DDS のデータ・タイプによって判別される順序に従って行われます。

IBM 拡張 の終り

キーは、ファイルの作成時に使われた照合順序で順序づけされます。

データ名-2 のデータ記述およびレコード内の相対位置は、ファイルが DDS に定義されたときに使用したものと同じでなければなりません。

データ名-2 を定義するレコード記述は、入出力操作でレコード・キー・フィールドへその後アクセスするごとに使用されます。

EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY

IBM 拡張

予約語 EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY は、このファイルのキーが DDS で外部記述されているものであることを指定できます。キーは、このファイルの FD で、COPY ステートメント、DDS、DD、DDSR、または DDR 形式によりコピーされるレコード形式により決定されます。

キーは、各形式ごとに、バッファ内の異なるオフセットから開始できます。この状況では、ランダム READ または START ステートメントを使って、あるレコード形式から別のレコード形式へ変更するときは注意しなければなりません。キーは、ファイルのランダム・アクセスで使用される形式のレコード形式で正しいオフセットに置かねばなりません。希望のレコードのキーが最後のレコード読み取りの一部であったデータに基づく場合、予期しない結果が起こることがあります。これは、キー・フィールドへのデータの移動が、オーバーラップ・フィールドに影響を与えるためです。

ある形式内のキーは、複数の、不連続 (隣接しない) フィールドから作ることができます。ファイルについて FD 内でコピーされるそれらのレコード形式のみが、FORMAT 句により参照されます。ファイル内で定義されているある形式が参照されても、その形式がプログラムにコピーされていない場合、キーはコピーされた最初のレコード形式に定義されるキー・フィールドを用いて作られます。これにより予期しない結果が起こる可能性があります。

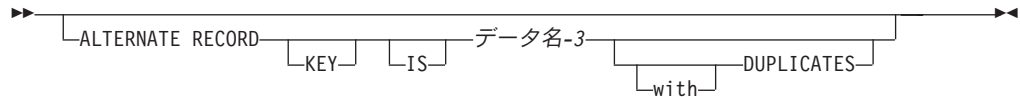
キーの一部が論理ファイルの中で (独立した宣言項目ではなく) 連結項目のエレメントとしてのみ宣言されている場合には、CONCAT 操作の結果を可変長項目にはなりません。

予約語 EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY を、ALTERNATE RECORD KEY 文節で指定することはできません。

IBM 拡張 の終り

ALTERNATE RECORD KEY

ALTERNATE RECORD KEY 文節は、索引付きファイルの代替レコード・キーであるレコード内のデータ項目を指定します。これらの代替レコード・キーを使用すれば、ILE COBOL プログラムは、ファイル・レコードのさまざまな論理配列を使用して、ファイルにアクセスできます。



データ名-3

データ名-3 は、ALTERNATE RECORD KEY データ項目です。これはファイルと関連するレコード記述記入項目内の固定長英数字項目として記述しなければなりません。またこれは、変数オカレンス・データ項目の入ったグループ項目を参照してはなりません。データ名-3 は修飾できますが、添え字を付けてはなりません。

代替レコード・キーの長さには制限があり、バイト数でのキー長は 2000 を超えてはなりません。索引付きファイルに可変長レコードが入っていると、データ名-3 はそのレコードの最初の「x」位置に入らなければなりません。ここで、「x」はそのファイル用に指定された最小レコード・サイズです。

EXTERNAL ファイルについては、実行単位内にあっても EXTERNAL ファイルと関連しているすべてのファイル記述記入項目には、次のものを指定しなければなりません。

- データ名-3 用の同じデータ記述記入項目
- 関連レコード内の同じ相対位置
- 代替レコード・キーの同じ番号
- 同じ DUPLICATES 句

IBM 拡張

ファイルが DATABASE 装置タイプに割り当てられている場合は、ALTERNATE RECORD KEY データ項目 (データ名-3) は日時項目または数字項目であっても構いません。数字項目は、DISPLAY、COMP-1、COMP-2、COMP (COMP-3)、COMP-4、PACKED-DECIMAL、または BINARY 形式の場合があります。数字項目は、外部浮動小数点データ項目にすることもできます。ILE COBOL は、広範な日時データ項目形式をサポートしています。これらの形式のうち、多くのものは DDS のサポート外です。サポート外の場合、下層の DDS フィールドは文字フィールドまたは数字フィールドとして定義する必要があります。ILE COBOL は日時項目を定義しているが下層 DDS フィールドは日時用ではない場合は、レコード検索は下層 DDS のデータ・タイプによって判別される順序になります。

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

キーは、ファイルの作成時に使われた照合順序で順序づけされます。データ名-3 の

データ記述、レコード内のその相対位置、およびその長さは、ファイルが DDS に定義されたときに使用したものと同じでなければなりません。データ名-3 の 1 番左端の文字位置は、RECORD KEY またはその他の ALTERNATE RECORD KEY の 1 番左端の文字位置と同じであってはなりません。DUPLICATES 句が指定されていない場合には、ALTERNATE RECORD KEY データ項目に含まれている値は、ファイルにあるレコードの中で固有のものでなければなりません。代替キー索引が一時的なものである場合、重複レコードの検索順序が、特定の順序である保証はありません。代替キー索引が永続的なものである場合、DDS ファイル・レベル・キーワード LIFO、FIFO、FCFO が、重複レコードの検索順序を指定するために使用されます。代替キー検索について詳しくは、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張の終り

使用に関する考慮事項

- 代替キーの順序付けは、基本キーと同じです。基本キーが、ファイルにある複数の DDS キー・フィールドにわたる場合、代替キー順序は、最初の基本キー・フィールドによって決定されます。永続代替索引が使用される場合、論理ファイルのキー順序は、物理ファイルとも同じでなければなりません。つまり、DDS キーワード DESCEND が物理ファイル DDS で指定されている場合は、論理ファイル DDS でも指定されなければなりません。その他の場合、ILE COBOL は永続代替索引を検出することができません。
- 代替キー付きのファイルは、外部で定義された基本レコード・キーを持つことはできません。
- 1 つのファイルに対して許可された代替キーの最大数は、253 です。
- ブロック化は、代替キー付きのファイルに対して、暗黙的に使用不可となっています。
- 指定変更コマンドで指定されたパラメーター値は、ILE COBOL が代替索引を作成した場合は、TOFILE、MBR、LVLCHK、WAITRCD、SEQONLY、および INHWRT 以外については、無視されます。
- 代替レコード・キーを使用するためには、データベース・ファイルは以下の要件を満たさなければなりません。 そうしないと、OPEN 操作が失敗し、ファイル状況が 39 に設定されます。
 1. 代替キーとして使用されているデータベース・ファイルのフィールド (複数のフィールドの場合もあり) は、入力、出力、または入出力フィールドでなければなりません。
 2. データベース・ファイルは、分散データ管理機能 (DDM) ファイルとすることはできません。
 3. データベース・ファイルは、オープン・データ・パスを共有してはなりません。
 4. プログラムの各キーに対して指定された DUPLICATES 文節は、データベース・ファイルの重複属性と一致しなければなりません。これには、基本キーも含まれます。永続代替索引を使用している場合、DDS キーワード UNIQUE が、固有のキーを指定するために使用されます。このキーワードがないと、ファイルが複写キーを許可するという暗黙指定します。一時的な代替索引を使用し、DUPLICATES 文節が指定されていない場合は、必ず、データ

ベース・ファイルにある既存のレコードが、プログラムでキーとして定義されているフィールドに、重複値を持たないようにしなければなりません。

- 以下の場合、OPEN オペレーションが失敗し、ファイル状況が 90 に設定されます。
 1. ILE COBOL は、それぞれの代替キーに対して 1 つの追加ファイルをオープンします。これらのファイルは、「QARK」で始まるオープン ID でオープンします。オープン ID は、プログラムが実行中である活動化グループ内で固有のものでなければなりません。OPEN 操作は、ILE COBOL が非固有のオープン ID を検出した場合に失敗します。これが起こる可能性があるのは、ILE COBOL プログラムと共に OPNDBF および/または OPNQRYF コマンドを使用し、「QARK」で始まるオープン ID を指定した場合です。
 2. CRTARKIDX オプションが指定されておらず、ILE COBOL が永続索引を検出できない場合、OPEN 操作は失敗します。
 3. 代替キーを形成するために使用できる連続する DDS フィールドの最大数は 156 です。この限界を超えている場合、OPEN 操作は失敗します。

RELATIVE KEY 文節

RELATIVE KEY 文節は、相対ファイル内の特定の論理レコードの相対レコード番号を指定するデータ名を識別します。

RELATIVE KEY 文節 - 形式

▶—RELATIVE—┌───┐ ┌───┐—データ名-4—▶
 └──KEY──┘ └──IS──┘

データ名-4

PICTURE 記号の P の入っていない記述をもった符号なしの整数データ項目として定義しなければなりません。データ名-4 は、この相対ファイルと関連したレコード記述項目に定義してはなりません。すなわち、RELATIVE KEY は、レコードの一部ではありません。データ名-4 は修飾できます。

順次アクセスで読み取りを行うと、使用可能になったレコードの相対レコード番号を使って RELATIVE KEY データ項目は更新されます。

データ名-4 は、START ステートメントが使用されるときにのみ ACCESS IS SEQUENTIAL に必要です。これは常に ACCESS IS RANDOM および ACCESS IS DYNAMIC には必要です。START ステートメントが出されると、システムは、RELATIVE KEY データ項目の内容を使用して、順次処理をどのレコードから開始するかを判別します。

ある値がデータ名-4 に置かれ、かつ START ステートメントが出されない場合、その値は無視され、処理はファイルの最初のレコードから開始されます。

IBM 拡張

ファイルのオープン時に、OVRDBF CL コマンドの POSITION パラメーターを使ってファイル位置標識をセットすることができます。これによって最初のレコード以外のレコードから処理を開始します。詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i/OS Information**

RELATIVE KEY 文節

Center の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

相対ファイルが **START** ステートメントで参照される場合、そのファイルに **RELATIVE KEY** 文節を指定しなければなりません。

ACCESS MODE IS RANDOM 文節は、**SORT** または **MERGE** ステートメントの **USING** あるいは **GIVING** 句に指定されたファイル名に指定してはなりません。

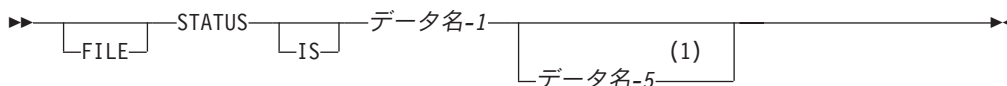
EXTERNAL ファイルの場合、データ名-4 は外部データ項目を参照しなければならず、それに関連した各ファイル制御記入項目の **RELATIVE KEY** 句もその同じ外部データ項目を参照しなければなりません。(相対キーはサブファイルと一緒に使用します。)

トランザクション・ファイルに関する考慮事項については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『トランザクション・ファイル』の章を参照してください。

FILE STATUS 文節

FILE STATUS 文節は、ファイルへの各入出力要求の実行をモニターします。

FILE STATUS 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

FILE STATUS 文節を指定すると、当該ファイルを明示的または暗黙のうちに参照する入出力要求が出されるたびに、システムはある値を状況キー・データ項目の中に入れます。その値は、そのステートメントの実行状況を示します。(296 ページの『共通の処理機能』の『状況キー』のセクションを参照。)

コンパイラーが、出力レコードをブロック化するため、または入力レコードをブロック解除するためにコードを生成すると、オペレーティング・システムの例外が原因で生じるファイル状況値は、ブロックが処理されるときにのみ設定されます。可能な値については『付録 F. ファイル構造サポートの要約およびファイル状況キーの値』を参照してください。出力レコードのブロック方法および入力レコードのブロック解除方法の詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

データ名-1

状況キー・データ項目は、データ部で 2 桁の英数字項目として定義されていなければなりません。データ名-1 をファイル・セクションの中で定義してはなりません。データ名-1 は修飾できます。

IBM 拡張

データ名-5

オプションの状況キー・データ項目を、ファイル処理用に指定できます。

トランザクション・ファイルの場合には、データ項目は 4 桁の英数字項目でなければなりません。

非トランザクション・ファイルの場合には、データ項目は 6 バイトのグループ項目でなければなりません。この項目は、すべての非トランザクション・ファイル (動的に作成されるものを除く) のための文書化として扱われます。OPEN OUTPUT を指定すると動的に作成されるファイルの場合、拡張ファイル状況は 0900 に設定されます。データ名-5 は修飾できます。

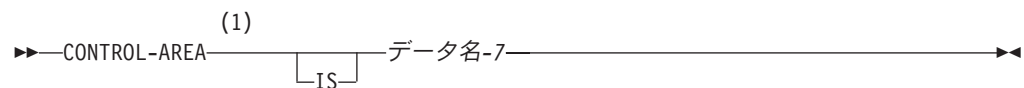
IBM 拡張 の終り

CONTROL-AREA 文節

IBM 拡張

この文節は、TRANSACTION ファイルの入出力操作を制御するのに使用する、装置依存情報とシステム依存情報を指定します。

CONTROL-AREA 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

データ名-7

LINKAGE、LOCAL-STORAGE または WORKING-STORAGE SECTION に定義される、次のような形式のデータ項目 (2、12、または 22 文字の長さ)。

```
01 data-name-7
   05 function-key PIC X(2)
   05 device-name PIC X(10)
   05 record-format PIC X(10)
```

ここで、

ファンクション・キー

オペレーターがトランザクションを開始するのに押したファンクション・キーを識別するための、ワークステーション・インターフェースからフィールドに挿入される 2 桁の数字です。

数字	意味
00	実行キー
01 ~ 24	1 ~ 24 のファンクション・キー
90	次ページ / ページ送りキー

CONTROL-AREA 文節

91	前ページ / ページ戻しキー
92	印刷キー
93	ヘルプ・キー
94	クリア・キー
95	ホーム・キー
99	未定義

装置名

プログラム装置の名前です。

レコード形式

それ以前の最後の入出力ステートメントの実行で参照された DDS レコード形式の名前です。

IBM 拡張 の終り

I-O-CONTROL 段落

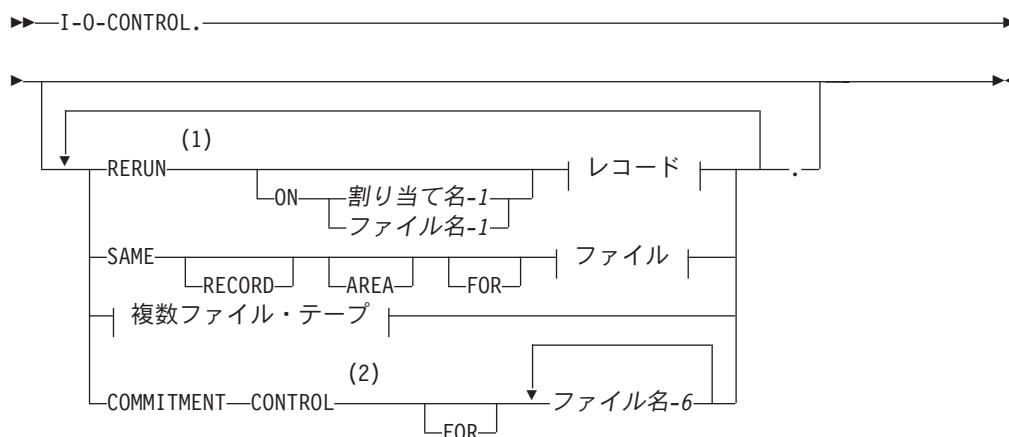
入出力セクションの I-O-CONTROL 段落は、さまざまなファイルが共用する記憶域を指定します。この段落は COBOL プログラムではオプションです。

キーワード I-O-CONTROL は、I-O-CONTROL 段落の先頭に、1 回だけ表示できます。I-O-CONTROL という語は、区域 A から始めて、その後に分離文字ピリオドを付けなければなりません。

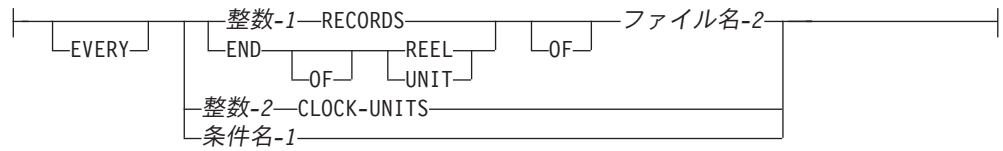
段落の中の各文節は、分離文字コンマまたは分離文字セミコロンによって、次の文節と区切ることができます。I-O-CONTROL 段落文節が書かれる順序は、重要ではありません。I-O-CONTROL 段落の終わりには、分離文字ピリオドを付けます。

I-O-CONTROL 段落 - 形式 1 - 順次ファイル

I-O-CONTROL 段落 - 形式 1 - 順次



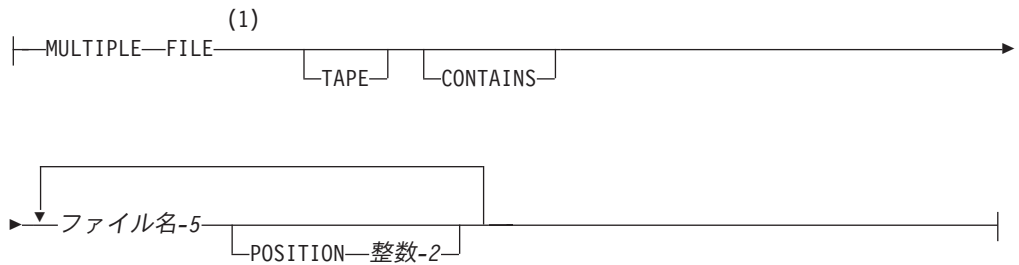
レコード:



ファイル:



複数ファイル・テープ:

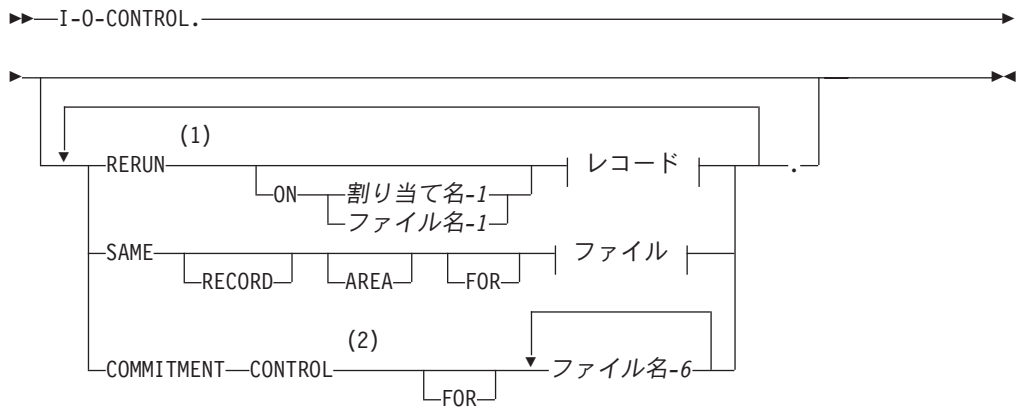


注:

- 1 構文検査だけ行われます。
- 2 IBM 拡張

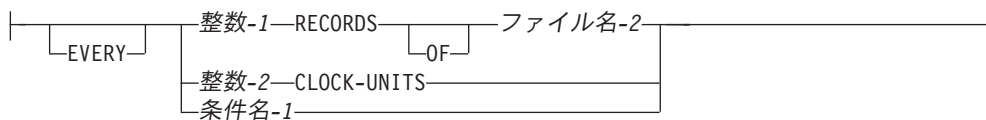
I-O-CONTROL 段落 - 形式 2 - 相対および索引付きファイル

I-O-CONTROL 段落 - 形式 2 - 相対 / 索引付き



レコード:

I-O-CONTROL 段落



ファイル:

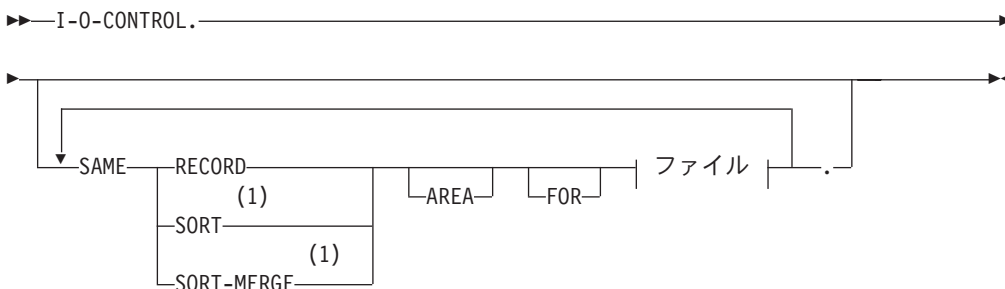


注:

- 1 構文検査だけ行われます。
- 2 IBM 拡張

I-O-CONTROL 段落 - 形式 3 - ソート・ファイルまたはマージ・ファイル

I-O-CONTROL 段落 - 形式 3 - ソート・マージ



ファイル:



注:

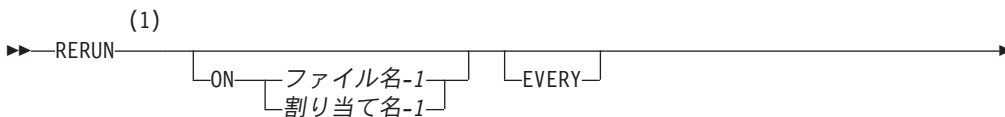
- 1 構文検査だけ行われます。

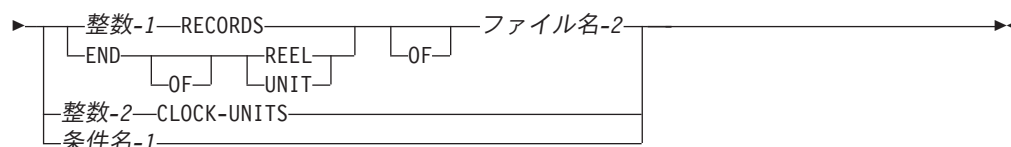
RERUN 文節

RERUN 文節は、チェックポイント・レコードを取ることを指定します。

RERUN 文節は構文検査されますが、文書化のための記述として処理されます。

RERUN 文節 - 形式





注:

- 1 構文検査だけ行われます。

ファイル名-1

順次編成されたファイルの名前です。RERUN 文節に指定するファイルは、GLOBAL と定義されたファイルであっても、I-O-CONTROL 段落と同じプログラムで定義されたファイルでなければなりません。

割り当て名-1

この名前は、どのユーザー定義語にもすることができます。RERUN 文節に指定するファイルは、GLOBAL と定義されたファイルであっても、I-O-CONTROL 段落と同じプログラムで定義されたファイルでなければなりません。

EVERY 整数-1 RECORDS

処理されるファイル名-2 内の整数-1 レコードごとに 1 つのチェックポイント・レコードが書き込まれます。

整数-1 の RECORDS 句を複数指定するときは、そのうちのどの 2 つにも同じファイル名-2 を指定してはなりません。

整数-1 は符号なしの整数でなければなりません。この文節は、RERUN 情報が書き込まれる前に処理するレコード数を指定します。

EVERY END OF REEL/UNIT

複数の END OF REEL 句または END OF UNIT 句に同じファイル名-2 を指定できません。UNIT の定義は、それぞれの割り当て名-1 で決まります。

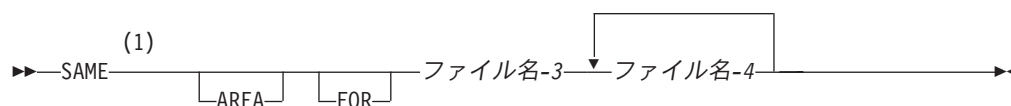
EVERY 整数-2 CLOCK-UNITS

CLOCK-UNITS 句を含んだ RERUN 文節は 1 つしか指定できません。

SAME AREA 文節

SAME AREA 文節は、ソート・ファイルまたはマージ・ファイルではない、複数のファイルが処理中に同じ主記憶域を使用することを指定します。SAME AREA 文節は、構文検査されますが、文書化のための記述として処理されます。

SAME AREA 文節 - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

SAME AREA 文節

SAME AREA 文節に指定される複数のファイルは同じ編成またはアクセスである必要はありません。

ファイル名-3、ファイル名-4 ...

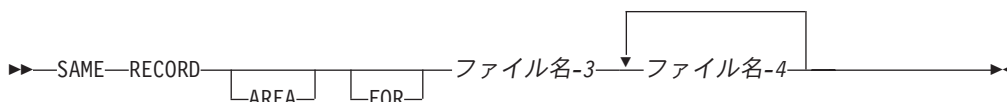
I-O-CONTROL 段落と同じプログラムの FILE-CONTROL 段落に指定しなければなりません。これらは、外部ファイル・コネクタを参照できません。

SAME RECORD AREA 文節

SAME RECORD AREA 文節は、複数のファイルが現行論理レコードの処理に同じ主記憶域を使用することを指定します。すべてのファイルを同時にオープンできません。

注: SAME RECORD AREA 文節は、主記憶域を効率的に使うことを意図しています。しかし、i5/OS 仮想記憶アーキテクチャではこの文節は不要になっており、この文節はパフォーマンスのためというより互換性を保つためにサポートされています。実際には、SAME RECORD AREA 文節を使用すると、パフォーマンスが低下してプログラム・サイズが大きくなります。

SAME RECORD AREA 文節 - 形式



共用記憶域にある論理レコードは、次の両方であると見なされます。

- SAME RECORD AREA 文節を使用してオープンされている各出力ファイルの論理レコード
- SAME RECORD AREA 文節を使用して最も新しく読み取られた出力ファイルの論理レコード

SAME RECORD AREA 文節によって、明示的なデータ操作をせずにあるファイルから別のファイルヘデータを移動できます。これは指定されるファイルの入出力レコード域が同一であり、すべてがユーザーに使用できるからです。

1 つのプログラム内に複数の SAME RECORD AREA 文節を書くことができます。ただし、以下の事柄を考慮する必要があります。

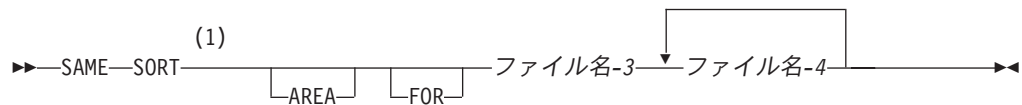
- 特定のファイル名を複数の SAME RECORD AREA 文節の中で指定してはなりません。
- SAME RECORD AREA 文節の中に SAME AREA 文節のファイル名が複数ある場合は、その SAME AREA 文節のファイル名のすべてが、SAME RECORD AREA 文節の中にもなければなりません。ただし、その SAME AREA 文節に記入されていないファイル名を、その SAME RECORD AREA 文節の中に追加できます。
- 複数のファイルに SAME RECORD AREA が指定されていると、それらのファイルのレコード記述記入項目またはファイル記述記入項目には GLOBAL 文節を入れてはなりません。
- SAME RECORD AREA 文節は、EXTERNAL ファイルと一緒に使えません。

SAME SORT AREA 文節

SAME SORT AREA 文節を使えば、特定の SORT ステートメントに対する記憶域の割り当てを最適化できます。

SAME SORT AREA 文節は構文検査されますが、文書化のための記述として処理されます。

SAME SORT AREA 文節 - 形式



注:

1 構文検査だけ行われます。

SAME SORT AREA 文節を指定する場合、指定するファイル名の少なくとも 1 つはソート・ファイルでなければなりません。ソート・ファイルでないファイルも指定できます。次の規則が適用されます。

- SAME SORT AREA 文節を複数指定できますが、特定の 1 つのソート・ファイルをその複数の文節の中で指定してはなりません。
- ソート・ファイルでないファイルが、SAME AREA 文節と 1 つまたは複数の SAME SORT AREA 文節の両方で指定されている場合は、SAME AREA 文節内のすべてのファイルがその SAME SORT AREA 文節の中になければなりません。
- SAME SORT AREA 文節で指定される複数のファイルは、同じ編成またはアクセスである必要はありません。
- SAME SORT AREA 文節で指定された、ソート・ファイル以外のファイルは、ユーザーがそれらを SAME RECORD AREA 文節で指定しない限り、相互にストレージを共有することはありません。

SAME SORT-MERGE AREA 文節

SAME SORT-MERGE AREA 文節を使えば、特定の SORT または MERGE ステートメントに対する記憶域の割り当てを最適化できます。

SAME SORT-MERGE AREA 文節は構文検査されますが、文書化のための記述として処理されます。

SAME SORT-MERGE AREA 文節 - 形式



注:

1 構文検査だけ行われます。

SAME SORT-MERGE AREA 文節

SAME SORT-MERGE AREA 文節を指定する場合、指定するファイル名の少なくとも 1 つはソート・ファイルまたはマージ・ファイルでなければなりません。ソート・ファイルまたはマージ・ファイルでないファイルも指定できます。次の規則が適用されます。

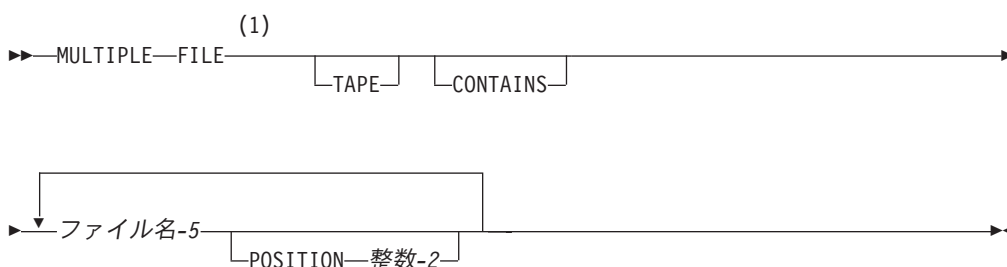
- SAME SORT-MERGE AREA 文節を複数指定できます。ただし、特定の 1 つのソート・ファイルまたはマージ・ファイルをそのような複数の文節の中で指名してはなりません。
- ソート・ファイルまたはマージ・ファイルでないファイルが、SAME AREA 文節と 1 つまたは複数の SAME SORT-MERGE AREA 文節の両方で指定されている場合は、SAME AREA 文節内のすべてのファイルがその SAME SORT-MERGE AREA 文節の中になければなりません。
- SAME SORT-MERGE AREA 文節で指定される複数のファイルは、同じ編成またはアクセスである必要はありません。
- SAME SORT-MERGE AREA 文節で指定された、ソート・ファイルまたはマージ・ファイル以外のファイルは、ユーザーがそれらを SAME RECORD AREA 文節で指定しない限り、相互にストレージを共用しません。

MULTIPLE FILE TAPE 文節

この文節は、複数のファイルが同じリール・テープを共用することを指定します。コマンド言語を使うことによって、システムからこの機能が提供されます。

MULTIPLE FILE TAPE 文節は、構文検査されますが、文書化のための記述として扱われます。Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションの CRTTAPF、CHGTAPF、および OVRTAPF コマンドを参照してください。

MULTIPLE FILE TAPE 文節 - 形式



注:

1 構文検査だけ行われます。

整数-2

符号のない整数でなければなりません。これは、テープでのファイルの相対位置を指定します。

ファイル名-5

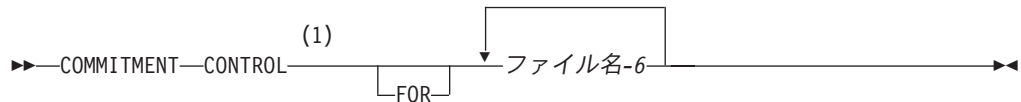
テープを共用するファイルを指定します。

COMMITMENT CONTROL 文節

IBM 拡張

COMMITMENT CONTROL 文節は、オープン時にコミットメント制御のもとに置かれることになるファイルを指定します。

COMMITMENT CONTROL 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

ファイル名-6 は、COMMITMENT CONTROL 文節のある I-O-CONTROL 段落と同じプログラムの FILE CONTROL 段落に指定しなければなりません。

そのように指定すると、これらのファイルは、COMMIT や ROLLBACK ステートメントによって影響を受けます。COMMIT ステートメントにより、データベース・レコードに対する変更の同期化が可能になるとともに、COMMIT が完了するまでは別のジョブによってこれらのレコードを修正することができなくなります。ROLLBACK ステートメントを使えば、データベース・ファイルに行われた変更を永続化してはならないときにそれを取り消せます。

COMMITMENT CONTROL 文節は、装置タイプが DATABASE と割り当てられたファイルにだけ指定できます。コミットメント制御下に置かれたファイルは、順次、相対、または索引付きの編成でもよく、それぞれの編成に許される任意のアクセス・モードが使用可能です。

システムは、コミットメント制御のもとに置かれたファイルの中に収められたレコードをアクセスする際、これらのレコードが他から使用されるのを禁止します。レコードは、COMMIT または ROLLBACK ステートメントによって解放されるまではロックされたままです。コミットメント制御下のファイルに対するレコード・ロックの詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

注: 常に首尾一貫した方法でファイルを使用するようにして、レコードのロックで問題が起きたり、まだデータベースに対して永続的にコミットされていないレコードを読み取ったりしないようにします。通常、ファイルは常に、コミットメント制御のもとでアクセスするか、またはコミットメント制御のもとではアクセスしないかを明確にしておくことが必要です。

IBM 拡張 の終り

第 5 部 データ部

第 10 章 データ部の概要

COBOL ソース・プログラムのデータ部は、オブジェクト・プログラムで処理されるすべてのデータおよび、物理レコードと論理レコードの関係を、構造化された方法で記述します。データ部は、COBOL ソース・プログラムではオプションです。

このセクションでは、データ部の構造を概略し、データ・タイプについて説明します。

データ部の構造

データ部は、DATA DIVISION という語で始め、その後にピリオドとスペースを続けなければなりません。

データ部は、次の 4 つのセクションに分けられます。

ファイル・セクション

外部的に保管されるデータ (ソート・マージ・ファイルも含む) を記述します。

作業用ストレージ・セクション

内部データを記述します。

ローカル・ストレージ・セクション

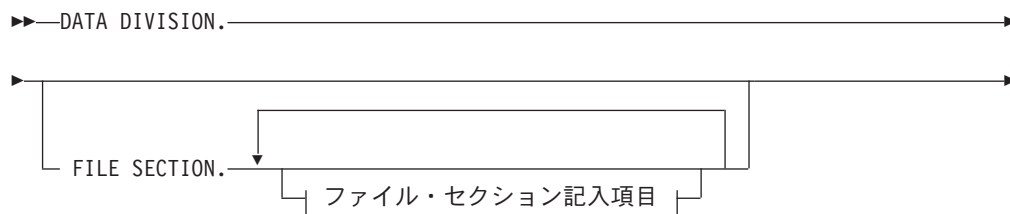
呼び出しごとに割り振られる内部データを記述します。

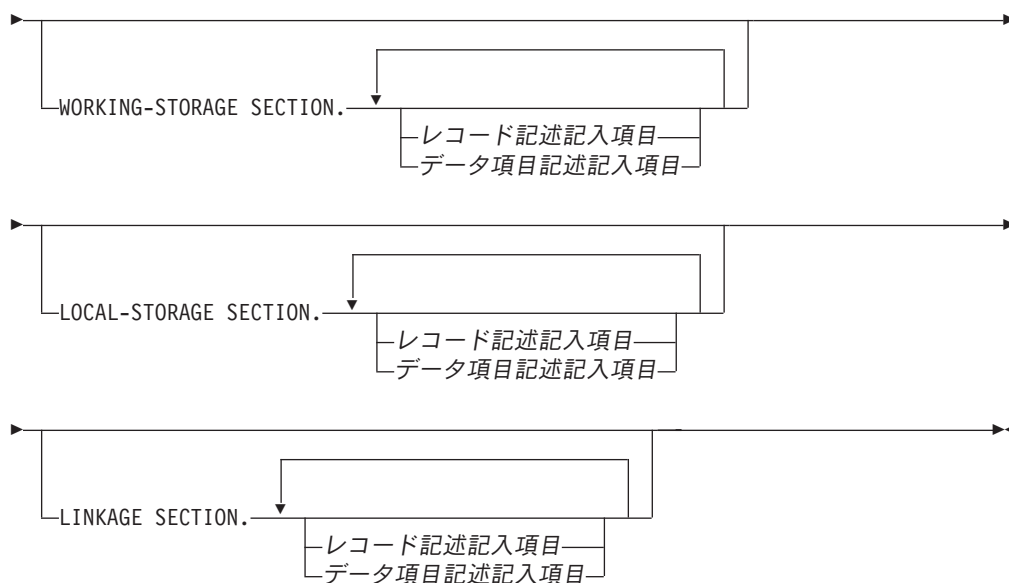
リンケージ・セクション

別のプログラムから使用可能にされるデータを記述します。このセクションは、呼び出し先プログラム内において、呼び出し側プログラムから提供されて呼び出し先プログラムによって参照されるデータ項目を記述します。呼び出し先プログラムは、ネストされたプログラムのこともあります。ネストされたプログラムの詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

それぞれのセクションは、COBOL ソース・プログラム内に特定の論理機能を持ち、その論理機能が必要ではないときには、それぞれのセクションをソース・プログラムから省くことができます。セクションを含める場合は、以下に示す順序で書かなければなりません。

データ部 - 形式





ファイル・セクション記入項目:



ファイル・セクション

ファイル・セクションは、次のファイルを記述します。

- 外部的に保管されるすべてのファイル
- 各ソート・マージ・ファイル

ファイル記述記入項目

ファイル・セクションの中の最高レベルの編成を表します。これは、ファイルの物理的な構造と ID についての情報を提供し、そのファイルに関連付けられるレコード名を示します。

ファイル記述記入項目で必要とされる形式と文節については 151 ページの『第 11 章 データ部 — ファイルとソート記述記入項目』を参照してください。

レコード記述記入項目

特定のファイル内に含まれている 1 つまたは複数の特定レコードを記述するか、あるいは (TYPEDEF 文節を使用することによって) タイプ名を記述するデータ記述記入項目のセットです。レコード記述記入項目で必要とされる形式と文節については 171 ページの『第 12 章 データ部 — データ記述記入項目』を参照してください。

レコード記述記入項目は複数指定できます。ただし、タイプ名を記述しない各記入項目は、それぞれが同じレコード・ストレージ域の代替記述になります。

ファイル・セクションで記述されるデータ域は、そのデータ域を含むファイルがオープンされていない限り、処理のために使用することはできません。 FILE

SECTION で定義したタイプ名は、他のデータ項目を定義するために WORKING-STORAGE、LOCAL-STORAGE、または LINKAGE SECTIONS 内で使用できます。

グループ項目 (テーブルを含む) の長さは、16 711 568 バイトに制限されます。

ファイル・セクション中のデータ項目の初期値は未定義です。

IBM 拡張

ファイルのレコード記述記入項目は、形式 2 の COPY ステートメント (DD、DDR、DDS、または DDSR オプション) を使って指定できます。これによってレコード形式のフィールド記述を、DDS での定義とまったく同じにすることができます。また、レコード形式記述がただ 1 か所に保持されるためプログラムがより書きやすくなります。COPY ステートメントのこの形式の詳細については 633 ページの『第 16 章 コンパイラ指示ステートメント』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

作業用ストレージ・セクション

作業用ストレージ・セクションは、外部データ・ファイルの一部ではなく、そのプログラムが内部で作成および処理するデータ・レコードを記述します。タイプ名は WORKING-STORAGE SECTION 内で定義できます。

レコード記述記入項目

詳細は、138 ページの『ファイル・セクション』を参照してください。作業用ストレージ・セクション内にあり、相互に一定の階層関係にあるデータ記入項目は、レベル番号によって構造化されるレコードにグループ化される必要があります。

データ項目記述記入項目

作業用ストレージ・セクション内にあり、相互に階層関係をもたない独立した項目は、それ以上、細分化する必要がない限り、レコードにグループ化する必要はありません。すなわち、それぞれがレベル番号 77 または 01 のいずれかで始まる別々のデータ項目記述記入項目の中で定義されます。データ項目記述記入項目で必要とされる形式と文節については 171 ページの『第 12 章 データ部 — データ記述記入項目』を参照してください。

作業用ストレージ・セクションにあるすべてのデータ項目 (指標データ項目を除く) の初期値は、VALUE 文節をその項目と関連付けることにより指定されます。任意の指標データ項目、すなわち VALUE 文節と関連のない任意のデータ項目の初期値は未定義です。

注: グループ項目 (テーブルを含む) には、最大 16 711 568 バイトが許されます。

ローカル・ストレージ・セクション

IBM 拡張

ローカル・ストレージ・セクションは、呼び出しごとに割り振りと解放が行われるストレージを定義します。呼び出しごとに、ローカル・ストレージ・セクションで定義されたデータ項目は再度割り振られ、VALUE 文節で割り当てられた値に初期化されます。ローカル・ストレージ・セクションで定義されたデータ項目は、EXTERNAL 文節を指定することはできません。ローカル・ストレージ・セクションは、分離文字ピリオドが後に付いたヘッダー LOCAL-STORAGE SECTION で始める必要があります。

レコード記述記入項目

詳細は 138 ページの『ファイル・セクション』を参照してください。

データ項目記述記入項目

詳細は 139 ページの『作業用ストレージ・セクション』を参照してください。

ローカル・ストレージ・セクションは、再帰的プログラムおよび非再帰的プログラムで指定できます。

IBM 拡張 の終り

リンケージ・セクション

リンケージ・セクションは、CALL ステートメントを介して別のプログラムから使用可能にされるデータを記述します。また、このセクションは、ADDRESS OF 特殊レジスターを使ってアクセスされるデータの形式を記述するのにも使えます。たとえば、リンケージ・セクション項目用の ADDRESS OF 特殊レジスターを、ILE のバインド可能 API を使って動的に割り振られるデータに設定できます。

レコード記述記入項目

詳細は 138 ページの『ファイル・セクション』を参照してください。

データ項目記述記入項目

詳細は 139 ページの『作業用ストレージ・セクション』を参照してください。

リンケージ・セクションのレコード記述記入項目とデータ項目記述記入項目は、データ項目の名前と記述を提供しますが、ストレージは提供しません。データ域は別の場所にあるので、ストレージはプログラム内に予約されません。タイプ名は LINKAGE SECTION で定義できます。

リンケージ・セクションでは任意のデータ記述文節を使用して項目を記述できますが、次のような例外があります。

- VALUE 文節は、レベル 88 の項目以外の項目に対して指定してはなりません。

IBM 拡張

リンケージ・セクションでレベル 88 以外の項目に VALUE 文節を指定すると、

それはコメントとして取り扱われます。

IBM 拡張 の終り

- EXTERNAL 文節は、リンケージ・セクションに指定することはできません。
- GLOBAL 文節は、リンケージ・セクションに指定することはできません。

IBM 拡張

- GLOBAL 文節は、レベル番号 01 のときリンケージ・セクションのデータ名または条件名に指定できます。リンケージ・セクションのデータ項目に GLOBAL を指定すると、組み込まれたソース・プログラムは、データ項目名でその項目を直接参照できます。リンケージ・セクションのコーディングの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

注: グループ項目 (テーブルを含む) には、最大 16 711 568 バイトが許されます。

ADDRESS OF

IBM 拡張

ADDRESS OF は、データ項目の計算アドレスを参照します。そのデータ項目は、修正済みまたは添え字付き参照にすることができます。タイプ名またはタイプ名の従属項目ではなく、そのレベル番号が 66 または 88 ではない任意のデータ部項目に対して ADDRESS OF を使用できます。そのようなアドレスを参照することはできませんが、変更することはできません。

ADDRESS OF 項目は、USAGE IS POINTER として暗黙定義されています。

ADDRESS OF 特殊レジスター

ADDRESS OF 特殊レジスターは、データ構造の開始アドレスであり、すべての計算アドレスはそのアドレスから決定されます。

互いに再定義するレコードを除いて、リンケージ・セクション内のレコード (レベル番号 01 または 77) ごとにアドレスが存在します。再定義する場合、この特殊レジスターも同様に再定義されます。

特殊レジスターは、暗黙に USAGE IS POINTER として定義されますが、これは変更できます。

参照で ADDRESS OF ID を変更した場合、特殊レジスターはもはやデータ構造の開始アドレスではなくなります。計算アドレスになります。

ユーザーは、ADDRESS OF または ADDRESS OF 特殊レジスターを、LENGTH 関数への引数として指定できます。ADDRESS OF または ADDRESS OF 特殊レジスターを LENGTH 関数への引数として使用した場合、その結果は常に 16 となり、ADDRESS OF に指定された ID に依存しません。

関数 ID は、ADDRESS OF または ADDRESS OF 特殊レジスタのどちらにおいても使用できません。

日時データ項目は ADDRESS OF または ADDRESS OF 特殊レジスタを使用する式の中で使用できます。

IBM 拡張 の終り

データのタイプ

ファイル・データとプログラム・データの 2 つのタイプのデータを処理できます。

ファイル・データ

ファイルとは、入出力装置上に存在するデータ・レコードの集合のことです。(157 ページの『ファイル・セクション』を参照。) ファイルは、物理レコード・グループと見なすことも、論理レコード・グループと見なすこともできます。

物理レコードとは、記憶装置へ (または記憶装置から) 移される際に 1 つのエントリとして取り扱われるデータの単位です。物理レコードの大きさは、それが収容される特定の入出力装置によって決まります。この大きさは、ファイルに含まれる論理情報の大きさや内容とは必ずしも直接的な関係はありません。

論理レコードとは、データの細分化部分が互いに論理的な関係をもっているデータの単位です。論理レコードそのものが物理レコードである (つまり、データの 1 つの物理単位に完全に含まれる) ことも、複数の論理レコードが 1 つの物理レコードに含まれることも、または 1 つの論理レコードが複数の物理レコードに分かれて入っていることもあります。

ファイル記述記入項目は、データの物理的な側面 (たとえば、物理レコードと論理レコードの大きさの関係、論理レコードの大きさと名前など) を指定します。

レコード記述記入項目は、ファイル内の論理レコードを記述します。たとえば、論理レコードの各フィールド内にあるデータの 카테고리や形式、データが割り当てられる種々の値を記述します。

物理レコードと論理レコードの間関係が確立された後では、ユーザーは論理レコードだけを使用できます。したがって、本書では特に「物理レコード」という用語を使用しない限り、「レコード」という用語は論理レコードを指します。

プログラム・データ

プログラム・データとは、ファイルから読み取られるものではなく、プログラムそのものによって作成されるデータのことで

論理レコードという概念は、ファイル・データだけでなくプログラム・データにも適用されます。したがって、プログラム・データを論理レコードにグループ化し、一連のレコード記述記入項目で定義できます。そのようにグループ化する必要のない項目は、独立データ項目記述記入項目に定義できます。

データの関係

プログラムで使用するすべてのデータの関係は、データ部で、レベル標識とレベル番号のシステムを使用して定義します。

レベル標識は、その記述記入項目とともに、プログラム内の各ファイルを識別します。レベル標識は、それに関連した任意のデータ階層の最高レベルを表します。すなわち、FD はファイル記述レベルの標識で、SD はソート・マージ・ファイル記述レベルの標識です。

レベル番号とその記述記入項目は、特定データの特性を示します。レベル番号は、データ階層を記述するために使用できます。たとえば、このデータには特殊な目的があることを示すことができ、さらにレベル番号は、レベル標識に関連（従属）させたり、単独で使えば内部データを記述したり複数のプログラムに共通したデータを記述したりすることもできます。（レベル番号の規則については 178 ページの『レベル番号』を参照してください。）

データのレベル

レコードを定義した後に、分割されたレコードをさらに分割して、より詳しいデータ参照を行うようにできます。

たとえば、百貨店のカスタマー・ファイルの場合に、1 人のカスタマーに関するすべてのデータを 1 つのレコードに完全に収容できるとします。そのレコードを分割したものが、顧客名、顧客住所、顧客番号、販売部門番号、販売単価、販売金額、それまでの残高、およびその他の付随情報であったとします。

レコードの基本的な細分化項目（それ以上分割されないフィールド）を**基本項目**といいます。したがって、レコードは一連の基本項目で構成されている場合もあれば、レコードそれ自体が 1 つの基本項目である場合もあります。

一連の基本項目を参照する必要がある場合には、基本項目をまとめて**グループ項目**にすることができます。グループ自体を組み合わせ、1 つまたは複数のサブグループを含む、より大きいグループにすることもできます。したがって、データ項目から成る階層において、1 つの基本項目を複数のグループ項目に属させることができます。

レベル番号体系は、基本項目とグループ項目をレコードに編成する方法を指定するものです。特殊レベル番号を使うこともでき、この番号で特殊目的に使うデータ項目が識別されます。

レコード記述記入項目のデータ・レベル

レコード内のグループ項目および基本項目には、それぞれ別々の記入項目が必要であり、また各項目ごとにレベル番号を割り当てなければなりません。

レベル番号は、01 ～ 49 の 1 桁または 2 桁の整数であるか、または 66、77、88 の 3 つの特殊レベル番号のうちの 1 つです。次のレベル番号が、レコードを構造化するために使用されます。

- 01 このレベル番号は、レコードそのものを指定する最も包括的なレベル番号です。レベル 01 の記入項目は、グループ項目または基本項目のどちらでもかまいません

ん。これは区域 A から始まらなければなりません。(TYPEDEF 文節を使用して定義した) タイプ名はレベル 01 の項目でなければなりません。

02 ~ 49

これらのレベル番号は、レコード内のグループ項目や基本項目を指定します。これらは、区域 A または区域 B から始められます。データ項目の包括性が低いほど、この一連の番号の中からより高い (必ずしも連続していない) レベル番号が割り当てられます。

1 つのグループ項目には、そのグループのレベル番号より小さいかあるいは等しいレベル番号が現れるまで、そのグループ項目の後ろにあるすべてのグループ項目と基本項目が含まれます。

ある 1 つのグループ項目のすぐ下にあるすべてのグループ項目と基本項目には、上のグループ項目のレベル番号より大きい同一のレベル番号を割り当てなければなりません。

タイプ名がグループ項目である場合、そのタイプ名を TYPE 文節で使用して新しいデータ項目を定義すると、その新規データ項目には使用されたタイプ名の従属項目と同じ名前、記述、および階層を持つ項目が従属します。新規データ項目が結果的に持つことになるレベルの数には制限がありません。その理由を以下に示します。

- TYPE 文節のサブジェクトが持つことができる最高レベル番号は 49 であり、タイプ名が記述できるグループ項目の 1 つ当たりの最大レベル数は 49 です。
- タイプ宣言は他のタイプ宣言を参照することができます。

コーディング例

IBM 拡張

ILE COBOL コンパイラーでは、同じレベルの他のものと同じでない非標準レベル番号を使えます。たとえば、次の 2 つのデータ記述記入項目は同じです。

```
01  EMPLOYEE-RECORD.  
   05  EMPLOYEE-NAME.  
       10  FIRST    PICTURE X(10).  
       10  LAST     PICTURE X(10).  
   05  EMPLOYEE-ADDRESS.  
       10  STREET   PICTURE X(10).  
       10  CITY     PICTURE X(10).  
01  EMPLOYEE-RECORD.  
   05  EMPLOYEE-NAME.  
       10  FIRST    PICTURE X(10).  
       10  LAST     PICTURE X(10).  
   04  EMPLOYEE-ADDRESS.  
       08  STREET   PICTURE X(10).  
       08  CITY     PICTURE X(10).
```

04 は 05 より小さいため、EMPLOYEE-NAME の下になりませんが、他方 01 より大きいため、EMPLOYEE-RECORD の下になります。04 の代わりに 07 を使うと、EMPLOYEE-ADDRESS は EMPLOYEE-NAME の下になります (これは、この例では望ましくありません)。

このようなコーディングは推奨されません。また、この拡張機能は互換性のためだけに提供されています。

IBM 拡張 の終り

概念例

図5はこの概念を表したものです。レベル01の記入項目に直接従属するグループは、すべて同一のレベル番号をもっていることに注意してください。またあるサブグループの基本項目と別のサブグループの基本項目は必ずしも同じレベル番号をもっていないこと、基本項目は階層内のどのレベルでも指定することができることに注意してください。



以下は、レコード記述記入項目のストレージ配置を図解したものです。

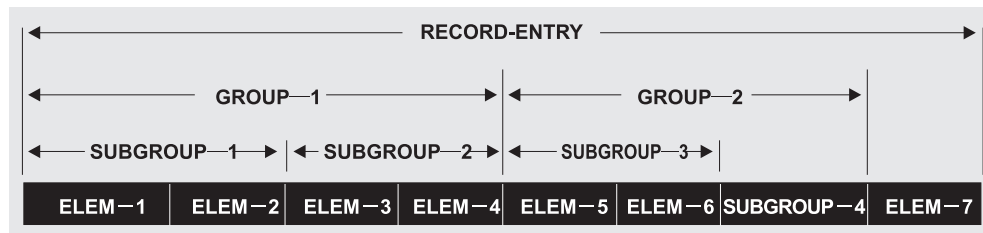


図5. レコード記述のレベル

特殊なレベル番号

特別なレベル番号は、レコードの構造を作らない項目を識別します。特別レベル番号は次のとおりです。

- 66 RENAME 文節しか入れてはならない項目を識別します。このような項目は、すでに定義されているデータ項目をグループ化し直します。(詳しくは 224 ページの『RENAME 文節』を参照してください。)
- 77 作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションまたはリンクページ・セクションの独立した項目 (他の項目の構成部分ではなく、それ自体分割されていないもの) であるデータ項目記述記入項目を識別します。レベル 77 の項目は区域 A から始めなければなりません。
- 88 条件変数の特定の特定の値と結び付いている任意の条件名記入項目を識別します。条件名記入項目には、VALUE 文節しか入れてはなりません。(詳しくは 248 ページの『VALUE 文節』を参照してください。)

注: プログラム内で参照される、作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションおよびリンクページ・セクション内のレベル 77 記入項目およびレベル 01 記入項目には、固有のデータ名を付けなければなりません。なぜなら、どちらも修飾することができないからです。プログラム内で参照される従属データ名は、固有名として定義するか、あるいは修飾によって固有名にしておく必要があります。参照されないデータ名は固有に定義する必要はありません。

字下げ

連続するデータ記述記入項目は、先行する記入項目と同じ列で始めることも、字下げすることもできます。字下げは、文書化するときに役立ちますが、コンパイラの処理には影響を及ぼしません。

データのクラスおよびカテゴリー

ポインター、プロシージャー・ポインター、および指標データ項目を除き、COBOL プログラムで使用するほとんどのデータは、クラスとカテゴリーに分けることができます。プログラム内の各基本項目は、すべて 1 つのカテゴリーと 1 つのクラスに属しています。すべてのグループ項目は、その下の基本項目が別のクラスとカテゴリーに属していても、英数字クラスに属します。表 9 に、データのクラスとカテゴリーとの関係を示します。

ある 1 つの項目のデータ・カテゴリーは、PICTURE 文字ストリング、BLANK WHEN ZERO 属性、および USAGE 属性によって決定されます。詳細は 209 ページの『データ・カテゴリーと PICTURE の規則』を参照してください。

IBM 拡張

項目のデータ・カテゴリーは、その項目用の FORMAT 文節から判別することもできます。FORMAT 文節は、カテゴリーの日付、時刻、およびタイム・スタンプの項目を定義します。

表示画面の形式に関連する標識の値および外部記述のプリンター・ファイルを修正したり渡したりするための IBM 拡張として、ブール・データ・タイプが用意されています。ブール値の 0 は標識がオフの状態で、ブール値の 1 は標識がオンの状況です。

ブール・リテラルには単一の 0 または 1 が入り、引用符で囲まれ、しかもその直前に識別用の B が付きます。ブール・リテラルは、B"0" あるいは B"1" のいずれかとして定義されます。

ブール文字は 1 バイトを占めます。

表意定数 ZERO がブール・データ項目またはブール・リテラルと関連付けられると、それはブール・リテラル B"0" を表します。

予約語 ALL はブール・リテラルに有効です。

IBM 拡張 の終り

組み込み関数であるデータ項目はすべて基本項目であり、英数字、数字、DBCS、国別、ブール、日付、時刻、またはタイム・スタンプのカテゴリに属し、それに対応するクラスに属します。各組み込み関数のカテゴリは、その関数の定義によって判別されます。

データのクラスおよびカテゴリ

表 9. データのクラスおよびカテゴリ

項目のレベル	クラス	カテゴリ
基本	英字	英字
	数字	数字 内部浮動小数点 ¹ 外部浮動小数点 ¹
	英数字	数字編集 英数字編集 英数字
	日時 ¹	日付 ¹ 時刻 ¹ タイム・スタンプ ¹
	ブール ¹	ブール ¹
	DBCS ¹	DBCS ¹ DBCS 編集 ¹
	国別 ¹	国別 ¹
グループ	英数字	英字数字 内部浮動小数点 ¹ 外部浮動小数点 ¹ 数字編集 日付 ¹ 時刻 ¹ タイム・スタンプ ¹ 英数字編集 英数字 ブール ¹ DBCS ¹ DBCS 編集 ¹ 国別 ¹

表 9. データのクラスおよびカテゴリ (続き)

項目のレベル	クラス	カテゴリ
注: ¹ IBM 拡張		

位置合わせの規則

基本項目にデータを位置決めするときの標準位置合わせの規則は、受け入れ項目 (つまり、データを移動する先の項目で 425 ページの『基本移動』を参照) のカテゴリによって異なります。

数字

1. データは、**仮想小数点**の位置に合わせて置かれ、必要に応じて切り捨てられるかゼロを埋め込まれます。(仮想小数点とは、PICTURE 文字の P または V のことであって、論理上の意味はあっても、実際の文字としてデータに存在しない小数点のことです。)
2. 仮想小数点が明示的に指定されていない場合は、受け入れ項目は、フィールドのすぐ右側に仮想小数点が指定されているものとして扱われます。そしてデータは上記の規則に従って扱われます。

数字編集

データは小数点の位置に合わせてられ、(必要ならば) 右端または左端のいずれかが切り捨てられるか、またはゼロを埋め込まれます。ただし、編集の結果、先行するゼロが置き換えられる場合は別です。

ただし、当該データのデータ記述記入項目に PICTURE 文節の LOCALE 句が指定されている場合は 202 ページの『LOCALE 句』で説明しているように、調整およびゼロの埋め込みまたは切り捨てが行われます。

内部浮動小数点

IBM 拡張

小数点が、フィールドのすぐ左に想定されます。そしてデータが、小数点に続く左端の数字位置に合わせてられ、指数もそれに合わせて調整されます。

IBM 拡張 の終り

外部浮動小数点

IBM 拡張

データが左端数字位置に合わせてられ、指数がそれに従って調整されます。

IBM 拡張 の終り

英数字、英数字編集、英字

1. データは左端の文字位置に合わせてられ、(必要ならば) 右端が切り捨てられるか、またはスペースを埋め込まれます。

2. この受け入れ項目に JUSTIFIED 文節を指定した場合は、上記の規則は 186 ページの『JUSTIFIED 文節』で説明されているように修正されます。

IBM 拡張

3. DBCS 受け入れ項目の場合、データは左端の文字位置に合わせられ、(必要ならば) 右端が切り捨てられるか、または DBCS スペースが埋め込まれます。
4. DBCS 受け入れ項目に JUSTIFIED 文節を指定した場合は、上記の規則は 186 ページの『JUSTIFIED 文節』で説明されているように修正されます。
5. 国別データ受け入れ項目の場合、データは左端の文字位置に合わせられ、(必要ならば) 右端が切り捨てられるか、または国別 (UCS-2) スペースが埋め込まれます。
6. 国別データ受け入れ項目に JUSTIFIED 文節を指定した場合は、上記の規則は 186 ページの『JUSTIFIED 文節』で説明されているように修正されます。

IBM 拡張 の終り

日付、時刻、およびタイム・スタンプ

IBM 拡張

1. USAGE DISPLAY が指定されている日時クラス項目の場合、データは左端の文字位置に合わせられ、(必要ならば) その右側にスペースが埋め込まれます。
2. USAGE PACKED-DECIMAL が指定されている日時クラス項目の場合、データは右端の数字位置に合わせられ、(必要ならば) その左側にゼロが埋め込まれます。

IBM 拡張 の終り

標準データ・フォーマット

ILE COBOL 言語の場合、デフォルトのデータ・フォーマットは EBCDIC 文字セットです。

文字ストリングおよび項目のサイズ

ユーザー・プログラムでは、基本項目のサイズは、その PICTURE 文字ストリングの中で指定する文字位置の個数によって決まります。しかし、ストレージ内では、その項目が実際に占めるバイト数 (PICTURE 文字ストリングと USAGE 文節の組み合わせによって判別される) によって項目のサイズが決められます。

IBM 拡張

LOCALE 句を含む PICTURE 文節を持つ基本項目のサイズは SIZE 句の整数-1 から判別されます。

内部浮動小数点項目については、ストレージ内の項目のサイズはその USAGE 文節によって決められます。USAGE COMPUTATIONAL-1 は項目用に 4 バイトのストレージを予約し、USAGE COMPUTATIONAL-2 は 8 バイトのストレージを予約します。

日時クラスの基本項目のサイズは、FORMAT リテラルまたは SIZE 句内の整数から判別されます。

IBM 拡張 の終り

通常、算術項目をあるフィールドからそれより短いフィールドに移すと、コンパイラーは短い方の項目の PICTURE 文字ストリングで表された文字数に合わせて、データを切り捨てます。

たとえば、PICTURE S99999 と指定され、+12345 という値が入っている送り出しフィールドから、PICTURE S99 と指定され、BINARY である受け入れフィールドにデータが移されるとすると、そのデータは切り捨てられて +45 になります。詳しくは 235 ページの『USAGE 文節』を参照してください。

符号付きデータ

COBOL 内で使用される代数符号には、演算符号と編集符号の 2 つのカテゴリがあります。

演算符号 (+、-) は、符号付き数字項目と関連した符号であり、その代数特性を示します。代数符号の内部表現は、その項目の USAGE 文節、およびオプションの SIGN 文節によって決まります。ゼロは、演算符号にかかわらず、固有の値と見なされます。符号なしフィールドは、常に正またはゼロであると見なされます。

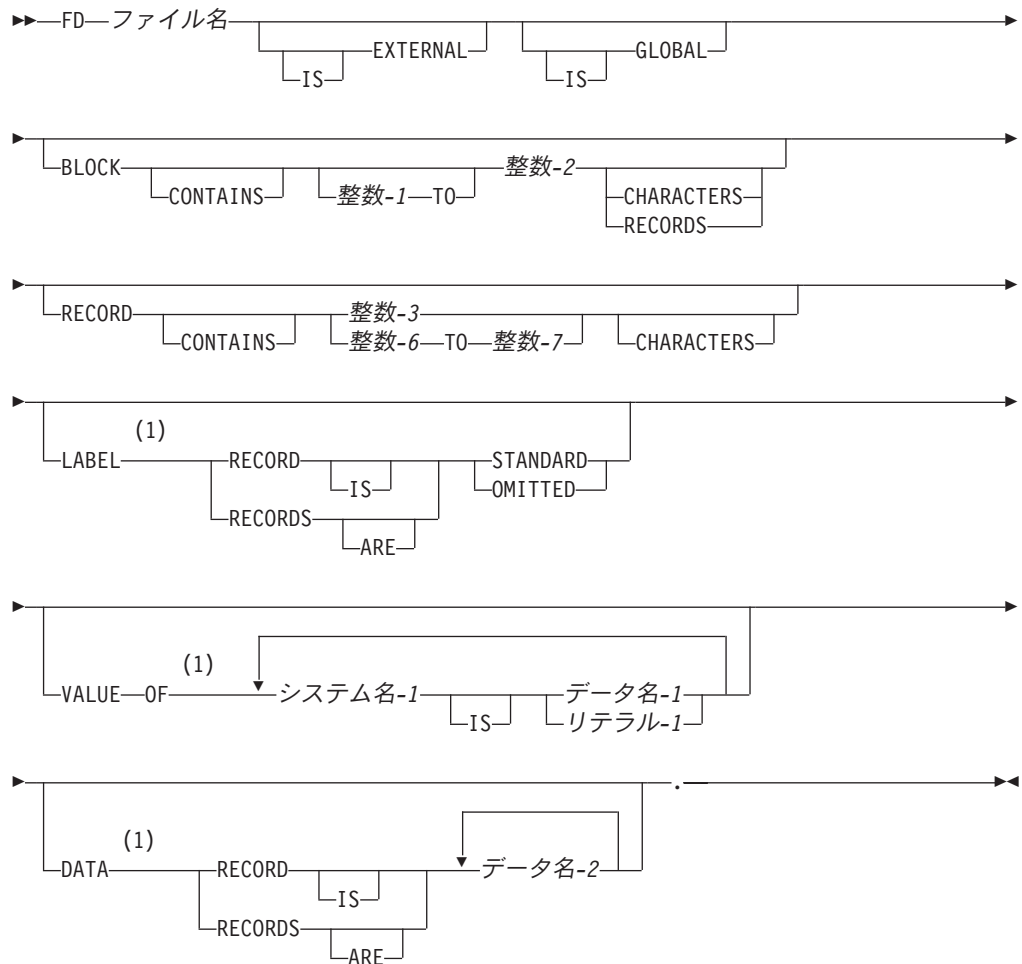
編集符号は、数字編集項目に関連した記号であり、編集出力内の項目の符号を識別する PICTURE 記号 (+、-、CR、DB) です。

第 11 章 データ部 — ファイルとソート記述記入項目

COBOL プログラムでは、ファイル記述 (FD) 記入項目 (またはソート・マージ・ファイルのソート記述 (SD) 記入項目) は、ファイル・セクションの中の最高レベルの編成を表しています。

ファイル記述記入項目 - 形式 1 - 順次ファイル

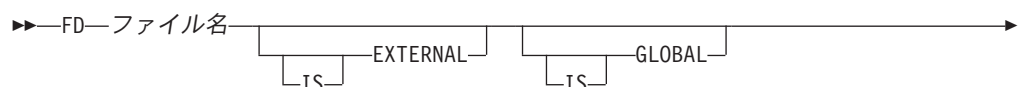
ファイル記述記入項目 - 形式 1a - 形式ファイル、データベース



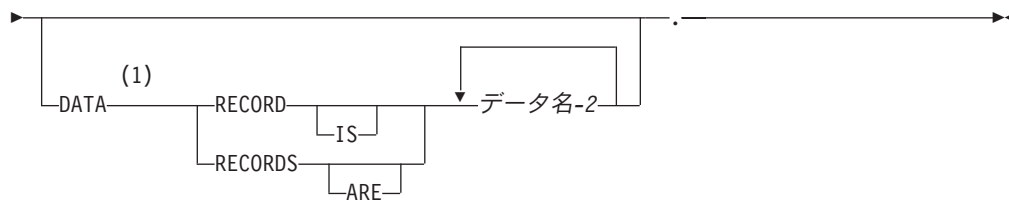
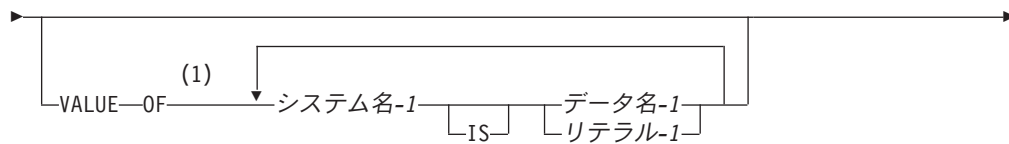
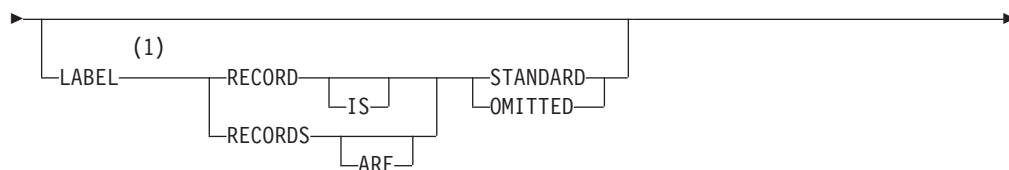
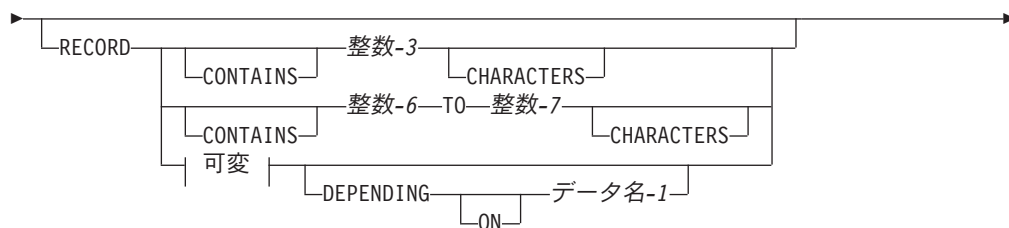
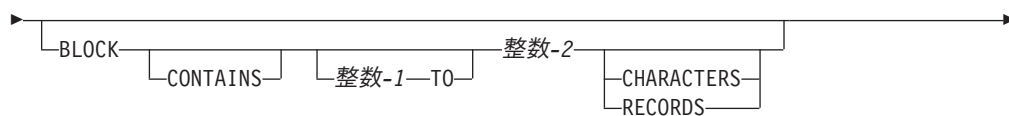
注:

1 構文検査だけ行われます。

ファイル記述記入項目 - 形式 1b - ディスク



データ部 - ファイルとソート記述項目



可変:

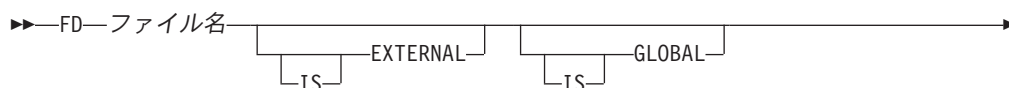


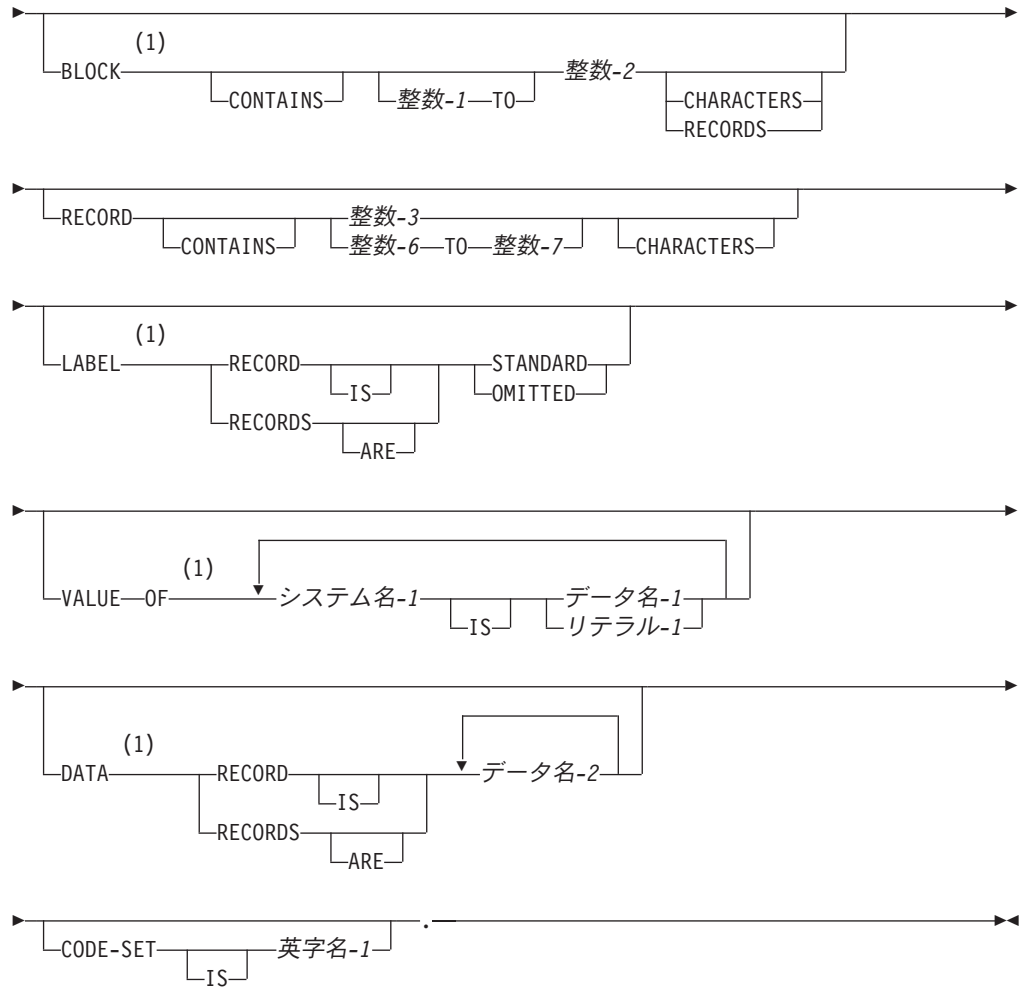
注:

- 1 構文検査だけ行われます。

ファイル記述記入項目 - 形式 2 - ディスケット・ファイル

ファイル記述記入項目 - 形式 2 - ディスケット



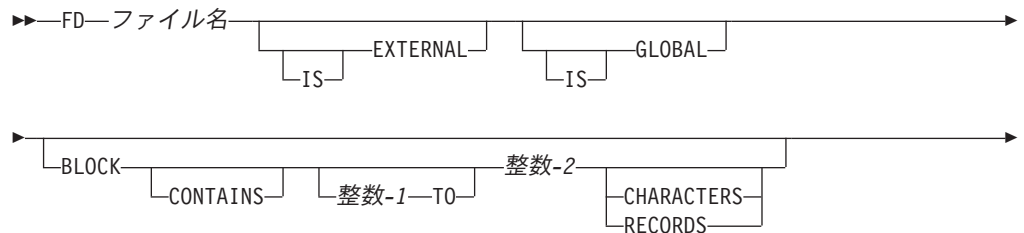


注:

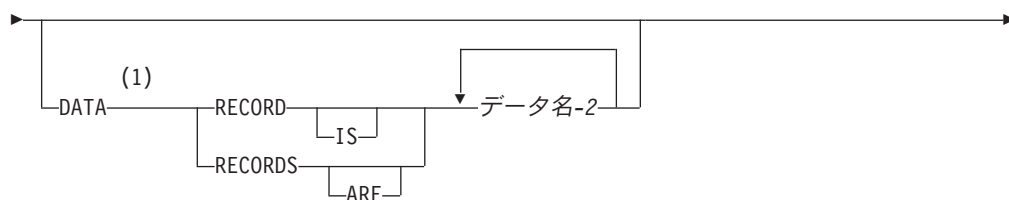
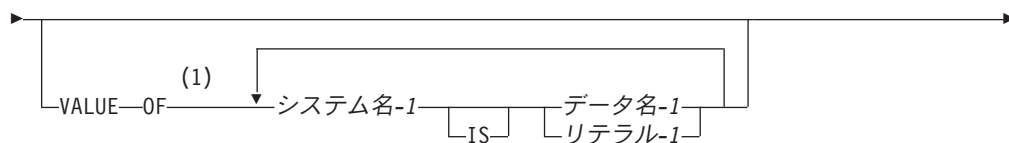
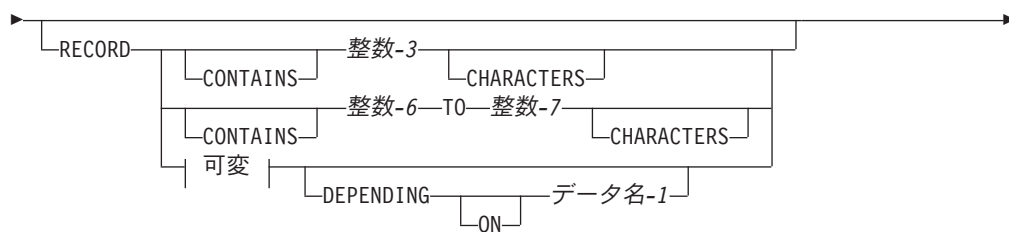
- 1 構文検査だけ行われます。

ファイル記述記入項目 - 形式 3 - テープ・ファイル

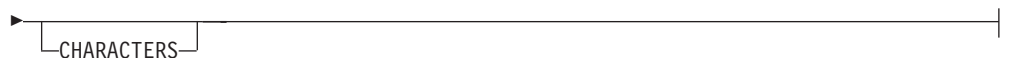
ファイル記述記入項目 - 形式 3 - テープ・ファイル



データ部 - ファイルとソート記述項目



可変:

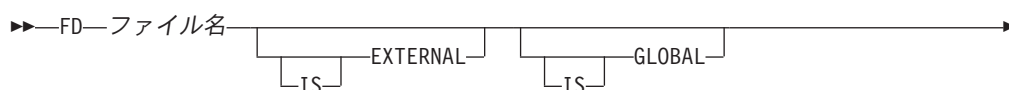


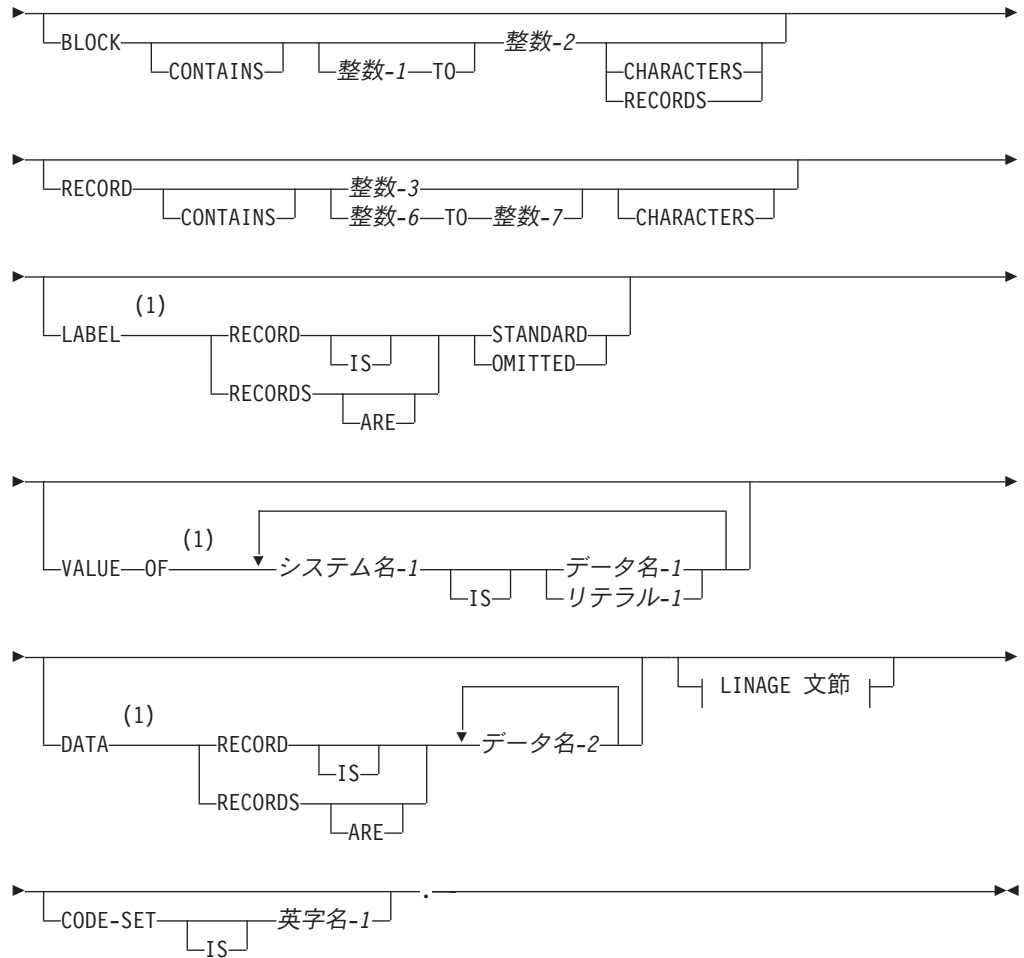
注:

1 構文検査だけ行われます。

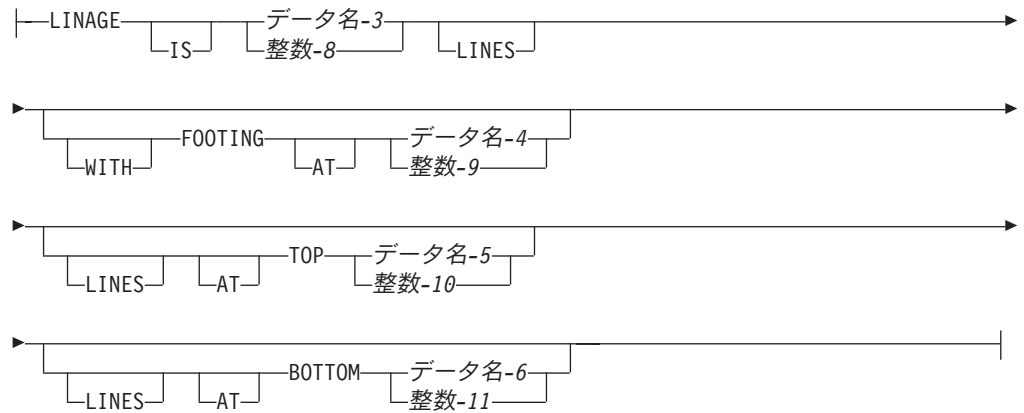
ファイル記述記入項目 - 形式 4 - プリンター・ファイル

ファイル記述記入項目 - 形式 4 - プリンター





LINAGE 文節:

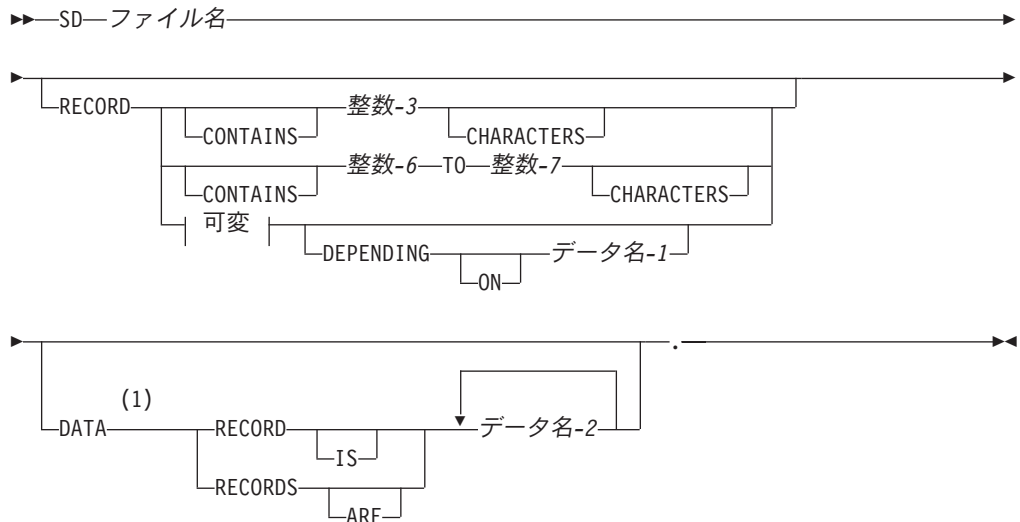


注:

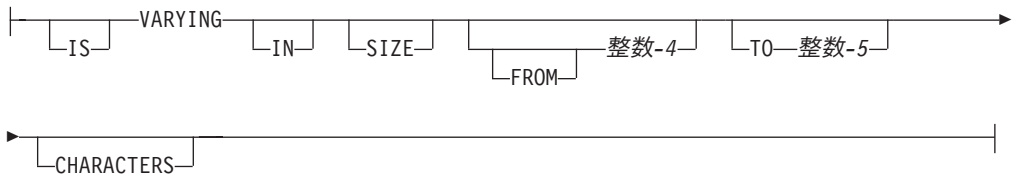
- 1 構文検査だけ行われます。

ソート記述記入項目 - 形式 5 - ソート・ファイルまたはマージ・ファイル

ファイル記述記入項目 - 形式 5 - ソート・マージ



可変:



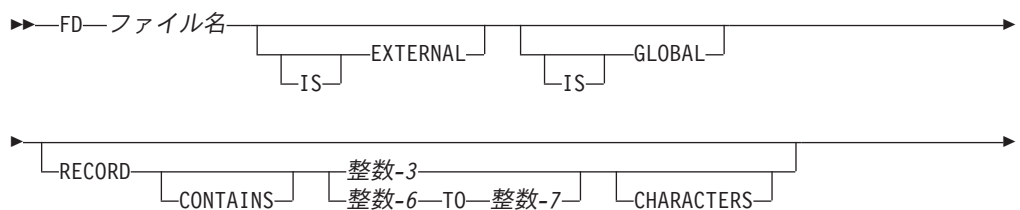
注:

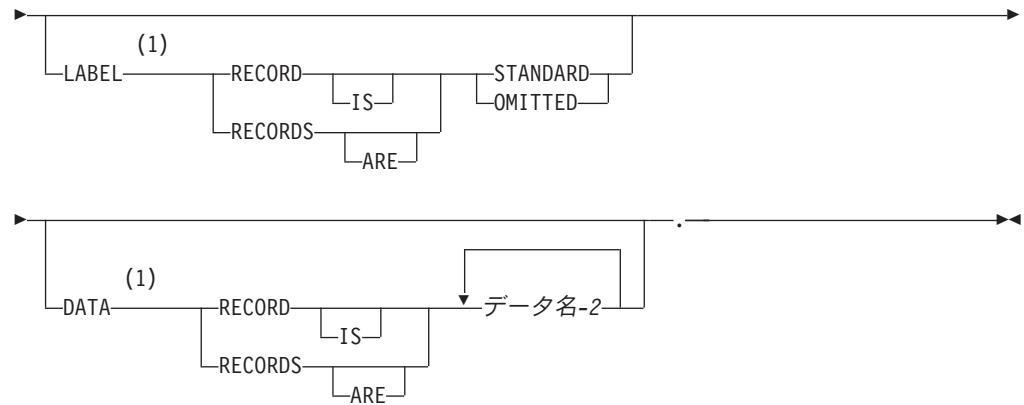
- 1 構文検査だけ行われます。

ファイル記述記入項目 - 形式 6 - トランザクション・ファイル

IBM 拡張

ファイル記述記入項目 - 形式 6 - トランザクション





注:

- 1 構文検査だけ行われます。

IBM 拡張 の終り

ファイル・セクション

ファイル・セクションには、それぞれの入力または出力ファイルごとにレベル標識がなければなりません。

- ソート・マージ・ファイル以外のファイルの場合は、必ず FD 記入項目がファイル・セクションに含まれていなければなりません。FD 記入項目の最後の文節のすぐ後に、分離文字ピリオドを付けなければなりません。
- ソート・ファイルまたはマージ・ファイルの場合は、SD 記入項目がファイル・セクションに含まれていなければなりません。SD 記入項目の最後の文節のすぐ後に、分離文字ピリオドを付けなければなりません。

ファイル名

レベル標識 (FD または SD) の後に記入します。これに関連する SELECT 文節で指定するファイル名と同じでなければなりません。ファイル名は、最低限 1 つの文字が英字でなければならないという、ユーザー定義語の作成に対する規則を守らなければなりません。ファイル名は、当該プログラムの中で固有のものでなければなりません。

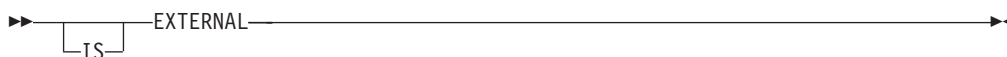
ファイル名の後には、1 つまたは複数のレコード記述記入項目が続かなければなりません。レコード記述記入項目はタイプ名を記述できます。タイプ名ではない各記入項目は、それぞれ同じ記憶域の再定義を暗黙指定しています。

ファイル名の後に続く文節の指定はオプションであり、任意の順序で置くことができます。

EXTERNAL 文節

EXTERNAL 文節は、ファイル・コネクタが外部であることを指定します。

EXTERNAL 文節 - 形式



実行単位内に示される外部ファイルは 1 つだけです。外部ファイルは、実行単位内にあってしかもそのファイルを記述する任意の COBOL プログラムで参照できます。

ファイル・セクションでは、EXTERNAL 文節はファイル記述記入項目にしか指定できません。ファイル記述記入項目に入れるレコードは、対応する外部ファイル記述記入項目内に同じ名前をもっている必要はありません。さらに、そのようなレコードの数は、対応するファイル記述記入項目内のものと同じである必要もありません。しかし、対応する外部ファイル記述記入項目での最大レコード長は同じでなければなりません。

EXTERNAL ファイルの場合、対応する EXTERNAL ファイルのすべての BLOCK CONTAINS 文節の値は、実行単位内で互いに一致しなければなりません。一致が必要なのは文字位置に関してだけで、その値が CHARACTERS または RECORDS と指定されているかどうかは関係ありません。

実行単位内にあってしかも外部ファイル・コネクタと関連しているすべてのファイル記述記入項目には、次のものがなければなりません。

- いずれかのファイル記述記入項目に LINAGE 文節があれば、LINAGE 文節
- 整数-8、整数-9、整数-10、および整数-11 が指定されていれば、これらに対応した同じ値
- データ名-3、データ名-4、データ名-5、およびデータ名-6 が参照するものに対応した同じ外部データ項目

EXTERNAL 文節を使用しても、それに関連したファイル名がグローバル名であることを意味しません。

TYPDEF 文節を EXTERNAL 文節と同じデータ記述記入項目に指定することはできません。ただし、TYPE 文節の場合は可能です。

外部ファイルについての考慮事項

一般的に、外部ファイルの定義はすべて同じでなければなりません。不一致があると、始動時に各種定義が比較されるとプログラムは失敗します。外部ファイルの属性は、次のように比較されます。

- ファイルに対応するいずれかの定義が外部記述されている (たとえば、COPY ステートメントの形式 2 を使って) と、他の定義もすべて外部記述されていなければなりません。すべての定義に関連したレベル検査情報は、一致していなければなりません。
- ASSIGN TO 文節に指定された名前は、すべての定義で同じでなければなりません。これには、装置タイプも含まれます。
- ファイルのすべての定義で、ORGANIZATION モードと ACCESS モードは同じでなければなりません。
- OPTIONAL 句は、指定するなら、ファイルのすべての定義に対して指定しなければなりません。

- RELATIVE KEY 句に指定する外部データ項目は、ファイルのどの定義でも、同じ物理位置にあってしかも同じバイト数を占めていなければなりません。
- 関連したレコード内のレコード・キーの位置は、ファイルのどの定義でも同じでなければなりません。
- ファイルに関連したブロック化情報は、ファイルのどの定義でも同じでなければなりません。これには、ブロック化を実行するかどうかと、ブロック・サイズも含まれます。
- RECORD 文節の最大または最小文字数の値は、ファイルのどの定義でも同じでなければなりません。
- CODE-SET 文節に指定された文字セットは、ファイルのどの定義でも同じでなければなりません。
- DUPLICATES 句に指定された値は、ファイルのどの定義でも同じでなければなりません。
- LINAGE 文節に指定された値は、ファイルのどの定義でもすべて同じでなければなりません。
- ASSIGN 文節の属性の指定 (別々の標識) は、ファイルのどの定義でも同じでなければなりません。
- COMMITMENT CONTROL 文節の指定は、ファイルのどの定義でも同じでなければなりません。
- ファイルの定義の入ったすべてのモジュールで、*DUPKEYCHK または *INZDLT コンパイル時オプションの指定は同じでなければなりません。
- コマンド CRTCBMOD または CRTBNDCBL 用の CCSID パラメーターの指定は、当該ファイルの定義を含むすべてのモジュールについて同一でなければなりません。

GLOBAL 文節

GLOBAL 文節は、ファイル名で指定されるファイル・コネクタがグローバル名であることを指定します。

GLOBAL 文節 - 形式



グローバル・ファイル名は、それを宣言するプログラム、およびそのプログラムに直接的または間接的に含まれるすべてのプログラムで使用できます。

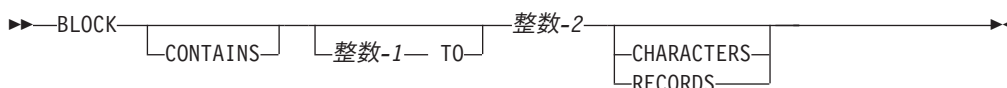
ファイル名は、そのファイル名のファイル記述記入項目に GLOBAL 文節が指定されていると、グローバル名になります。レコード名がグローバルになるのは、そのレコード名を宣言したレコード記述記入項目に GLOBAL 文節が指定されているときか、またはファイル・セクションのレコード記述記入項目の場合は、そのレコード記述記入項目と関連したファイル名のファイル記述記入項目に GLOBAL 文節が指定されているときです。このようなレコード記述記入項目はタイプ名を記述できます。

GLOBAL 文節は TYPEDEF 文節と同じデータ記述記入項目に指定することができます。この文節の有効範囲が適用されるのはタイプ名に対してだけです。TYPE 文節でグローバル・タイプ名を使用して定義したデータ項目には適用されません。

BLOCK CONTAINS 文節

BLOCK CONTAINS 文節は、物理レコードのサイズを指定します。

BLOCK CONTAINS 文節 - 形式



したがってこの文節は、各物理レコードにただ 1 つの完全な論理レコードが入っているときは、省くことができます。

FORMATFILE ファイルとプリンター・ファイルでは、この文節は構文検査されません。この文節を他のファイル・タイプに対して活動化するには、OPTION パラメータ値の *BLK または PROCESS オプション BLK を使用してください。

整数-1、整数-2

ゼロ以外の符号なしの整数でなければなりません。この整数は、文字数またはレコード数を指定します。整数-2 が 0 の場合には、システムによってブロック・サイズが決定されます。

CHARACTERS

データ・レコード内の文字がどのような USAGE をもっているかには関係なく、物理レコードを保管するのに要する文字位置の数を指定します。

整数-2 だけを指定するならば、それは物理レコードの正確な大きさを示します。整数-1 と整数-2 の両方を指定するならば、それらはそれぞれ物理レコードの最小と最大の文字サイズを表します。

整数-1 と整数-2 には、物理レコードに含まれる制御バイトや埋め込みバイトも入れなければなりません。(論理レコードには埋め込みバイトは含まれません。)

非テープ・ファイルの場合、整数-2 だけがブロック化因数を制御します。整数-2 が 0 の場合には、システム・デフォルトのブロック化因数が適用されません。

CHARACTERS 句がデフォルトです。CHARACTERS は、物理レコードに埋め込みが行われているときに指定しなければなりません。

一般的に、RELEASE、REWRITE、または WRITE ステートメントの可変長レコードの長さは、データ名-1 (指定されている場合) で決まります。データ名-1 が指定されていないと、レコード記述にテーブルが入っていないときは、長さはそのレコード記述内の文字数になります。データ名-1 は指定されていないけれど、レコードにテーブルが入っているときは、長さは、そのレコードの固定部分にその現行テーブル長を加算したものになります。

可変長レコードをディスク・ファイルに使うとき、BLOCK CONTAINS 文節はそのブロック・サイズを指定します。READ 操作後、データ名-1 の中に実際

のレコード・サイズが入ります。可変長レコードで WRITE を実行するには、データ名-1 をそのレコード長に設定しなければなりません。

テープ・ファイルの場合に、データをテープに転送するときは、それぞれの可変長レコードには 4 バイトのヘッダーが、またそれぞれのブロックにも 4 バイトのヘッダーが入ります。しかし、これらの 4 バイトのヘッダーはシステムにより提供され、可変長レコードの最大サイズは 32 764 に制限されていることを除いて、COBOL ユーザーには関係がありません。

テープ・ファイルに可変長レコードが使用される時、BLOCK CONTAINS 文節は最大物理レコード長を指定します。これに対して各レコードの論理レコード長は、コンパイラーによって WRITE ステートメントに使用されるレコード名から推測されます。明示的な長さが READ ステートメントの後に必要とされる場合は、ユーザーは I-O-FEEDBACK 簡略名によって、それを得ることができます。

RECORDS

各物理レコードに含まれる論理レコード数を指定します。

最大レコード・サイズは 32 767 で、最大ブロック・サイズは 32 767 です。これらの最大値には、可変長ブロック・レコードに必要な任意の制御バイトが含まれているため、可変長ブロック・レコードの最大サイズ・データ・レコードは 32 759 になります。

RECORD 文節

RECORD 文節は、固定長または可変長のレコードの文字位置の数を指定します。

RECORD 文節 - 形式 1

形式 1 は固定長レコードの文字位置の数を指定します。

RECORD 文節 - 形式 1



整数-3

ファイル内の各レコードに入っている文字位置の数を指定する、符号なしの整数でなければなりません。

レコード記述記入項目で決定された最大レコード長が RECORD 文節に指定された長さと一致しないと、最大値が使われます。

RECORD 文節 - 形式 2

形式 2 は、可変長レコードを取り扱うときの推奨形式です。

RECORD 文節 - 形式 2



**整数-4**

ファイルの任意のレコードに含まれる文字位置の最小数を指定します。整数-4を指定しないと、ファイルの任意のレコードに含まれる文字位置の最小数は、そのファイルのレコード用に記述された最小文字位置数になります。整数-4を指定するなら、ゼロ以外で、整数-5未満にしなければなりません。

整数-5

ファイルの任意のレコード内の文字位置の最大数を指定します。整数-5を指定しないと、ファイルの任意のレコードに含まれる文字位置の最大数は、そのファイルのレコード用に記述された最大文字位置数になります。

データ名-1

符号のない基本整数でなければなりません。

データ名-1が指定された場合

- ファイルに対して **RELEASE**、**REWRITE**、または **WRITE** ステートメントを実行する前に、レコード内の文字位置数を、データ名-1が参照するデータ項目に入れておかなければなりません。
- **DELETE**、**RELEASE**、**REWRITE**、**START**、または **WRITE** ステートメントを実行しても、または **READ** または **RETURN** ステートメントが失敗しても、データ名-1が参照するデータ項目の内容は変わりません。
- ファイルに対する **READ** または **RETURN** ステートメントの実行が正常に完了すると、データ名-1が参照するデータの内容に、読み取られたばかりのレコード内の文字位置数が示されます。

レコード記述に関連した文字位置数は、すべての基本データ項目（再定義と名前変更を除く）内の文字位置数に、同期化に起因したすべての暗黙の **FILLER** を加算したもので判別されます。

テーブルが指定されていると、上記の合算にはレコードに記述されたテーブル・エレメントの最小数と最大数が使われて、レコード記述に関連した文字位置の最小数と最大数が判別されます。

書き込まれる論理レコード内の文字位置数が整数-4以下または整数-5以上であれば出力ステートメントは失敗し、**RELEASE** ステートメントの実行時を除いて、それに関連した入出力状況キーは、その条件の原因を示す値に設定されます。

RELEASE、**REWRITE**、または **WRITE** ステートメントの実行時のレコード内の文字位置数は、次のような条件で決まります。

- データ名-1が指定されていれば、データ名-1が参照するデータ項目の内容による。
- データ名-1が指定されていなくて、レコードに可変長オカレンス・データ項目が入っていないときは、そのレコード内の文字位置数による。
- データ名-1は指定されていないが、レコードに可変長オカレンス・データ項目が入っているときは、固定部分に、出力ステートメントの実行時のオカレンス数に記述されたテーブルの該当部分を加算したものによる。

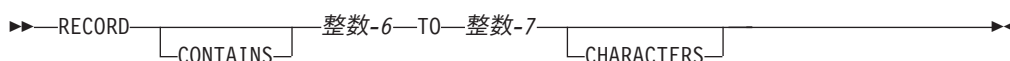
READ ... INTO ステートメントまたは RETURN ... INTO ステートメントの実行時、暗黙の MOVE ステートメント内の送り出しデータ項目として関与する現行レコード内の文字位置数は、次のような条件で判別されます。

- データ名-1 が指定されていれば、データ名-1 が参照するデータ項目の内容による。
- データ名-1 が指定されていなければ、データ名-1 がもし指定されていればデータ名-1 が参照するデータ項目へ移動されたはずの値による。

RECORD 文節 - 形式 3

形式 3 は、固定長または可変長レコードのいずれかの文字位置の数を指定します。(後者は、テープ・ファイルにだけ適用されます。)

RECORD 文節 - 形式 3



テープ・ファイルの場合

この場合、レコードは可変長であり、次のような記述が適用されます。

整数-6、整数-7

これらは、符号なし整数でなければなりません。整数-6 は、最小データ・レコード・サイズを指定し、整数-7 は最大データ・レコード・サイズを指定します。

他のすべてのファイルの場合

形式 3 をテープ以外のファイルに使用すると、レコードは最大データ・レコードのサイズの固定長レコードとして取り扱われます。論理レコードは、CRTxxx F CL コマンドに定義されたとおりのレコード長になるよう、切り捨てられるかまたは埋め込みが行われます。次の表のユーザー指定のレコード長は、そのファイルの中の最大長レコードを定義したもので、レコード記述によって指定したものです。

入出力タイプ	ユーザー指定長がファイルのレコード長より短い場合	ユーザー指定長がファイルのレコード長より長い場合
入力	切り捨て	ブランクの埋め込み
出力	ブランクの埋め込み	旧ファイル (空ではない) の場合は切り捨て。 新ファイル (空ファイル) の場合、長い方のレコード長を使用

注: ファイルの最大レコード長は 32 767 です。

すべての形式についての一般考慮事項

RECORD 文節を使用するとき、レコード・サイズは、レコードを内部で保管するのに必要な文字位置数に指定しなければなりません。つまり、レコード内のデータ項

RECORD 文節

目を表すのに使用される文字の個数ではなく、レコードの文字が内部で占有するバイト数を指定しなければなりません。レコードのサイズは、グループ項目のサイズを得る際の規則に従って決められます。

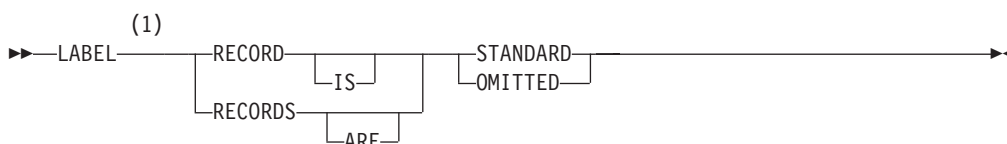
RECORD 文節を省略すると、コンパイラーはレコード記述からそのレコード長を判別します。レコード記述内の記入項目の 1 つに OCCURS DEPENDING ON 文節が含まれていると、コンパイラーは可変長項目の最大値を使用して、内部でレコードを保管するのに必要な文字位置数を計算します。

関連するファイル・コネクターが外部ファイル・コネクターである場合、実行単位内において、そのファイル・コネクターと関連するすべてのファイル記述記入項目は、同じ文字位置最大数を指定しなければなりません。

LABEL RECORDS 文節

LABEL RECORDS 文節は、ラベルの有無を示します。この文節が有効なのは FD - 形式 3 (TAPEFILE) の場合だけです。他のすべての FD 形式ではこの文節は構文検査されてから、文書化のための記述として扱われます。

LABEL RECORDS 文節 - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

これがファイルに指定されない場合、ファイルのラベル・レコードはシステム・ラベル仕様に従わなければなりません。

STANDARD

当該ファイルに、システム仕様に従うラベルが付いていることを示します。

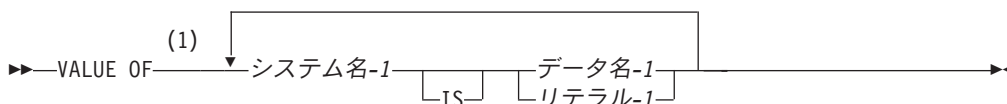
OMITTED

ファイルにラベルが付いていないことを示します。

VALUE OF 文節

VALUE OF 文節は、当該ファイルと関連しているラベル・レコードの項目を記述します。文節は構文検査されますが、文書化のための記述と見なされます。

VALUE OF 文節 - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

システム名-1

ユーザー定義語の形成に関する規則に従わなければなりません。

リテラル-1

任意のリテラルです。

IBM 拡張
浮動小数点リテラルは使用できません。
IBM 拡張 の終り

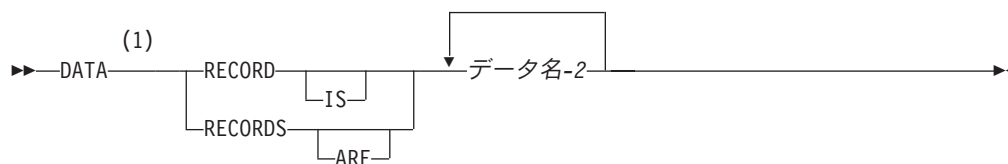
データ名-1

必要なときは修飾されますが、添え字付きにはできません。これは、必ず作業用ストレージ・セクションに記述しなければならず、また、USAGE IS INDEX 文節とともに記述することはできません。

DATA RECORDS 文節

DATA RECORDS 文節は構文検査されますが、ファイルに関連するデータ・レコードの名前の文書化としてだけ使用できます。

DATA RECORDS 文節 - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

データ名-2

ファイルに関連するレコード記述記入項目の名前。データ名-2 はタイプ名であってはなりません。

複数のデータ名を指定してある場合は、このファイルに複数のタイプのデータ・レコードが含まれていることを示します。このファイルの複数のレコード記述が、同じ記憶域を占めます。これらのレコードの記述または長さは、同じである必要はありません。データ名がリストされる順序は意味をもちません。

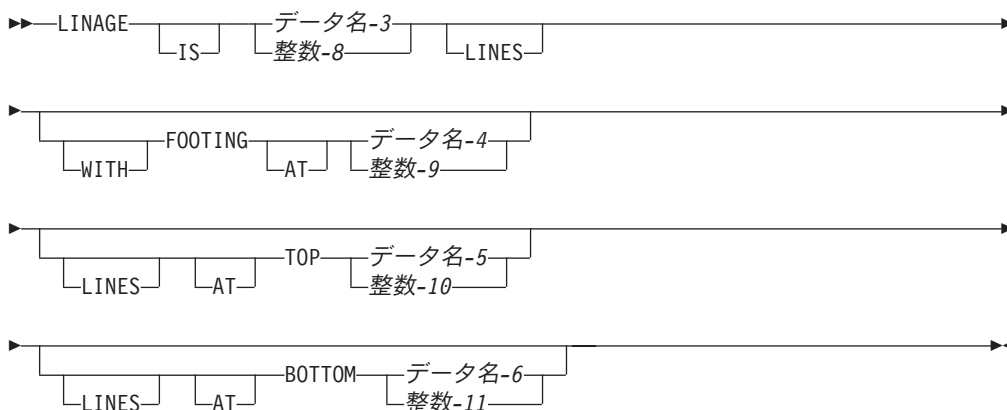
LINAGE 文節

LINAGE 文節は、1 論理ページの大きさを行数で指定します。オプションで、この文節はまたフッター域が始まる行番号、および論理ページの上下の端を指定します。(論理ページと物理ページは同一サイズである必要はありません。)

LINAGE 文節は、装置 PRINTER に割り当てられたファイルにだけ指定できます。106 ページの『ASSIGN 文節』を参照してください。

i5/OS のプリンター・ファイルには、DDS を介して活用できる有用な機能がいくつか備わっています。このようなファイルは ILE COBOL プログラムで FORMATFILE と宣言します。プリンター・ファイルの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『DB2 Universal Database for AS/400』セクションを参照してください。

LINAGE 文節 - 形式



LINAGE 文節は、選択された装置ファイル内の行数に影響を与えることはなく、COBOL プログラム内の論理ページのみメカニズムにだけ影響します。

実行時に、使用されるプリンター・ファイルによって物理ページ・サイズが判別されます。この情報は、LINAGE 文節に定義されたとおりの論理ページを作成するのに適した、スペース・コマンドおよび排出コマンドを出すために使用されます。このようにして、論理ページには複数の物理ページを入れたり、1 つの物理ページに複数の論理ページを入れることができます。

すべての整数は符号なしでなければなりません。すべてのデータ名は符号なしの整数データ項目として記述しなければなりません。

データ名-3、整数-8

この論理ページに書き出したり、またはスペース送りしたりすることのできる、あるいはその両方が可能な行数。これらの行が表すページ域は、**ページ本体**と呼ばれます。値はゼロより大きくなければなりません。

WITH FOOTING AT

整数-9 またはデータ名-4 の値は、ページ本体内のフッター域の最初の行番号を指定します。フッター行番号は、ゼロより大きく、かつページ本体の最終行を超える値でなければなりません。フッター域は、これらの 2 つの行の間の範囲を占めます。

LINES AT TOP

整数-10 またはデータ名-5 の値は、論理ページの上部マージンの行数を指定します。この値はゼロでもかまいません。

LINES AT BOTTOM

整数-11 またはデータ名-6 の値は、論理ページの下部マージンの行数を示します。この値はゼロでもかまいません。

図 6 は、LINAGE 文節の各句の使用法を示しています。

LINAGE 文節の各種の句の図

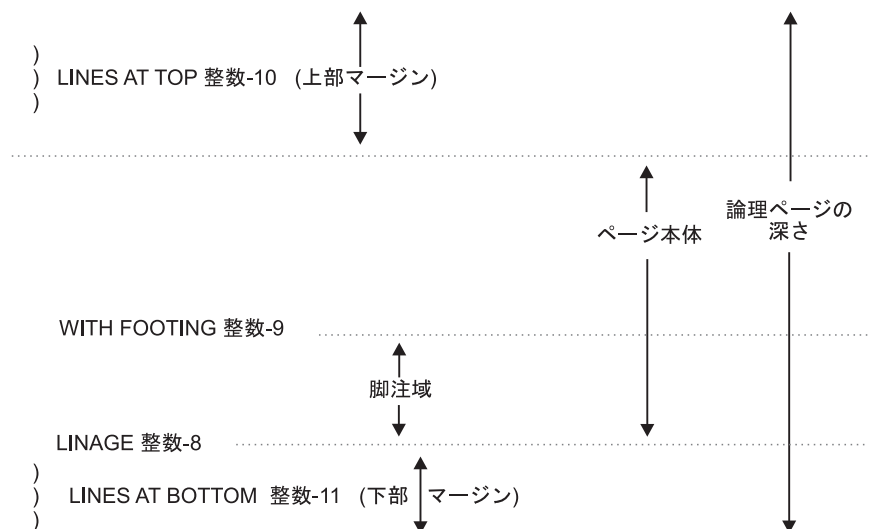


図 6. LINAGE 文節の各種の句

LINAGE 文節に指定される論理ページのサイズは、FOOTING 句を除く各句で指定する値の合計です。LINES AT TOP または LINES AT BOTTOM 句 (あるいはその両方) が省略された場合、上部および下部のマージンの値はゼロと見なされます。各論理ページのすぐ後に次の論理ページが続き、ページとページの間にはスペースはとられません。

FOOTING 句が指定され、データ名-4 あるいは整数-9 の値がデータ名-3 または整数-8 の LINAGE 値と等しい場合、1 行 (論理ページの最終行) をフッター情報に使用できます。

FOOTING 句が省略される場合、ページ本体 (整数-8 またはデータ名-3) の値と同等と見なされます。

OPEN OUTPUT ステートメントの実行時に、整数-8、整数-9、整数-10、および整数-11 の値 (それらが指定されていれば) が使用されて、そのファイルの論理ページのページ本体、最初のフッター行、上部マージン、および下部マージンが決定されます。図 6 を参照してください。このあと、プログラムが実行されている間、そのファイルに関して印刷されるすべての論理ページに対して、これからの値が使用されます。

OUTPUT 句を持つ OPEN ステートメントがファイルに対して実行されるとき、データ名-3、データ名-4、データ名-5、およびデータ名-6 により、最初の論理ページだけに対してページ本体、最初のフッター行、上部マージン、および下部マージンが決定されます。

ADVANCING PAGE 句を持つ WRITE ステートメントの実行時、あるいはページ・オーバーフローの状態が起こったとき、データ名-3、データ名-4、データ名-5、およびデータ名-6 の値 (指定されている場合) を使用し、次の論理ページに対して、ページ本体、最初のフッター行、上部マージン、および下部マージンが決定されます。

LINAGE-COUNTER 特殊レジスター

LINAGE 文節を含む FD 記入項目ごとに、別々の LINAGE-COUNTER 特殊レジスターが生成されます (複数のレジスターが生成されたら、各 LINAGE-COUNTER をそれに関連したファイル名で修飾しなければなりません)。

LINAGE-COUNTER に関する暗黙の記述は、次のいずれかです。

- LINAGE 文節がデータ名-3 を指定すれば、LINAGE-COUNTER にはデータ名-3 と同じ PICTURE と USAGE が入ります。
- LINAGE 文節で整数-8 を指定した場合には、LINAGE-COUNTER は、整数-8 の 2 進数表現を十分に含むことができる 2 進数項目です。

ある時点の LINAGE-COUNTER の値は、現在のページ内の装置が位置付けられている行の行番号です。LINAGE-COUNTER を手続き部のステートメントで参照できますが、そのステートメントで修正することはできません。

そのファイルに対して OPEN ステートメントが実行されたときに、LINAGE-COUNTER は 1 に初期設定されます。

LINAGE-COUNTER は、そのファイルに対する任意の WRITE ステートメントによって自動的に修正されます。(551 ページの『WRITE ステートメント』を参照してください。)

順次ファイルのファイル記述に LINAGE 文節と EXTERNAL 文節が含まれていると、LINAGE-COUNTER データ項目は外部データ項目になります。同様に、その記述に LINAGE 文節と GLOBAL 文節が含まれていると、LINAGE-COUNTER データ項目はグローバル・データ項目になります。

関数への整数の引数が認められているところではどこでも、LINAGE-COUNTER 特殊レジスターを指定できます。

CODE-SET 文節

CODE-SET 文節は、DISKETTE および TAPEFILE のデータを表すために使われる文字コードを指定します。

CODE-SET 文節 - 形式

▶▶ CODE-SET IS 英字名-1 ▶▶

CODE-SET 文節が指定されると、英字名は入出力装置でデータを表すのに使われる文字コード規則を識別します。

CODE-SET 文節はまた、入出力メディア上の文字コードを内部 EBCDIC 文字セットへ (またはその逆へ) 変換するためのアルゴリズムを指定します。

英字名-1 は、STANDARD-1 (ASCII エンコード・ファイルの場合)、STANDARD-2 (ISO の 7 ビット・エンコード・ファイルの場合)、NATIVE (EBCDIC エンコード・ファイルの場合)、または EBCDIC (EBCDIC エンコード・ファイルの場合) として SPECIAL-NAMES 段落に定義しなければなりません。NATIVE を指定すると、CODE-SET 文節は、構文検査はされますが、プログラムの実行にはまったく影響しません。

CODE-SET 文節がファイルに指定されると、そのファイル内のすべてのデータは USAGE DISPLAY をもたねばなりません。そして、符号付き数字データがある場合には、それを SIGN IS SEPARATE 文節で記述しなければなりません。

CODE-SET 文節を省略すると、EBCDIC 文字セットと見なされます。

注: テープ・ファイルおよびディスク・ファイルに関しては、i5/OS システムがサポートするのは ASCII と ISO だけです。したがって、CODE-SET 文節で、テープまたはディスク・ファイルでないファイルに対して、STANDARD-1 (ASCII) または STANDARD-2 (ISO) の文字コード・セットを指定した場合には、警告メッセージが出され、EBCDIC 文字コードが使用されます。

IBM 拡張

CODE-SET 文節を省略すると、ディスク・ファイル作成 (CRTDKTF) またはテープ・ファイル作成 (CRTTAPF) CL コマンドの CODE パラメーターが使用されません。

CODE-SET 文節は、ディスク・ファイル一時変更 (OVRDKTF) またはテープ・ファイル指定変更 (OVRTAPF) CL コマンドの CODE パラメーターを、プログラムの実行時に指定することによって変更できます。このようなコマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリーの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

第 12 章 データ部 — データ記述記入項目

データ記述記入項目は、データ項目の特性を指定します。データ項目には、**暗黙** (デフォルト値) または**明示**の 2 つの**属性**があります。

この章では、データ記述記入項目とレコード記述記入項目 (データ記述記入項目の集合を指す) のコーディングについて説明します。この章では、データ記述記入項目とレコード記述記入項目を指すときに、**データ記述記入項目**という 1 つの用語を使います。

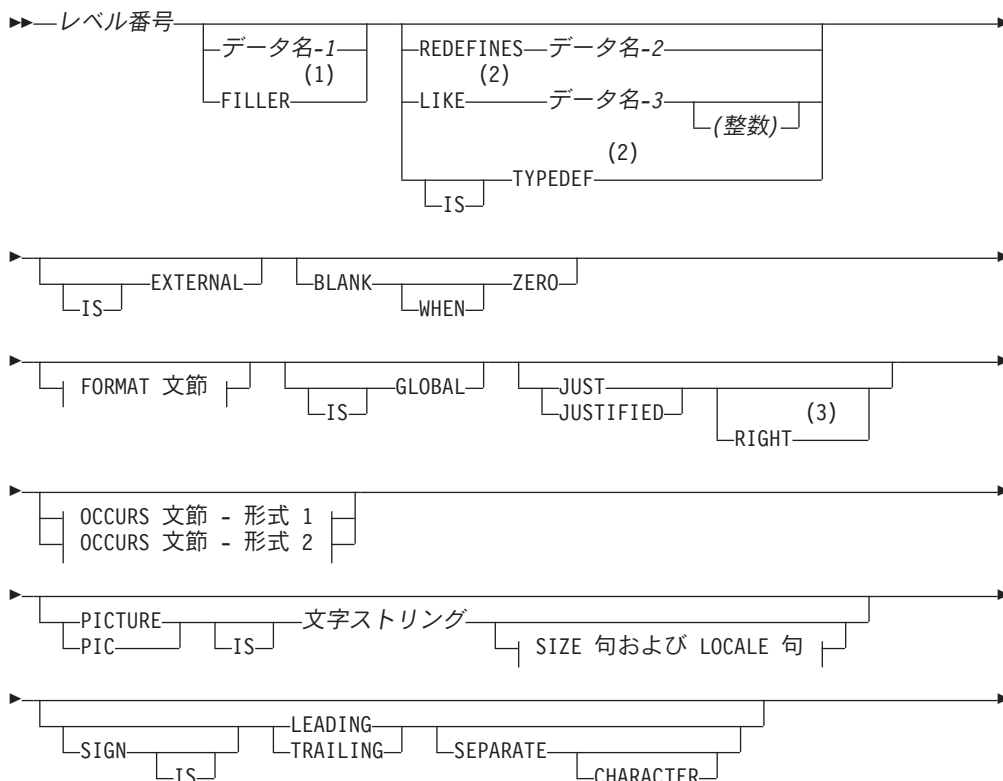
独立したデータ項目を定義するデータ記述記入項目は、レコードを構成しません。これらは**データ項目記述項目**とといいます。

データ記述記入項目には、次ページ以降に示す 4 つの一般形式があります。

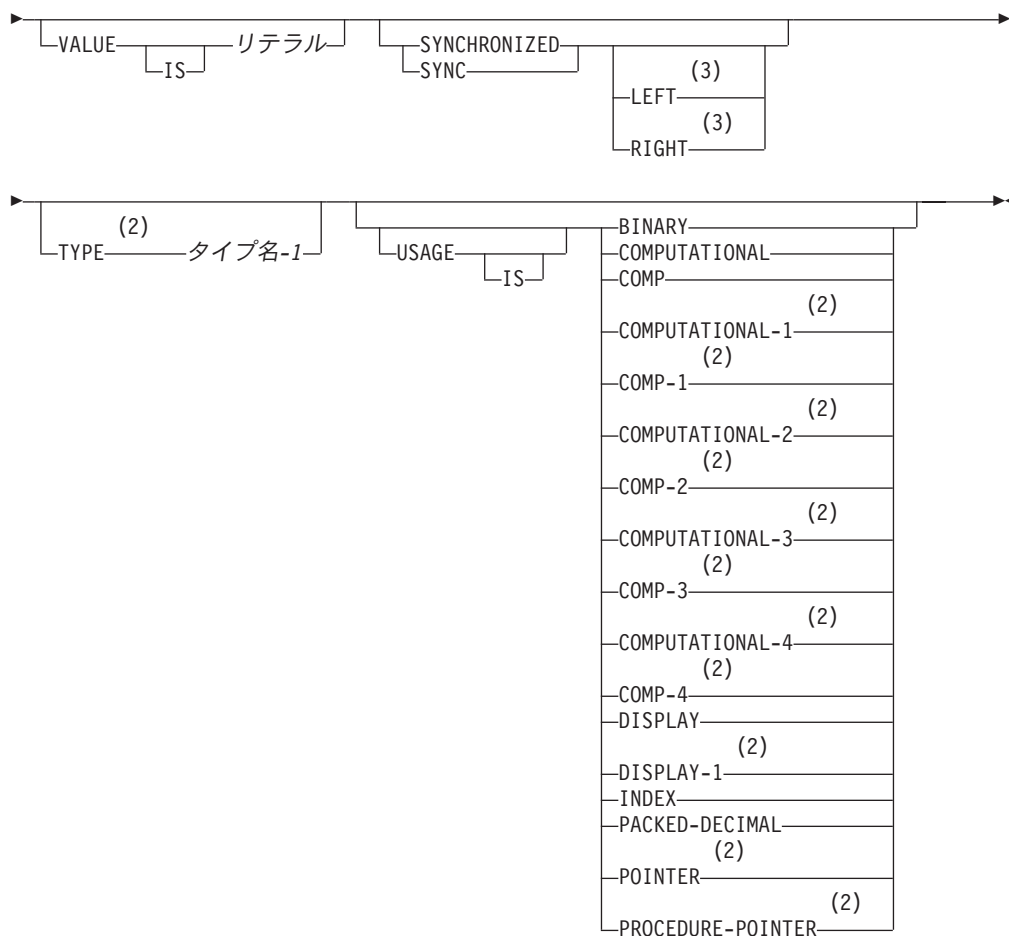
形式 1

形式 1 は、すべてのデータ部セクションのデータ記述記入項目に使われます。この形式内のレベル番号は、01 ~ 49、ならびに 77 のいずれかです。

データ記述記入項目 - 一般形式 1



データ部 - データ記述記入項目



注:

- 1 TYPEDEF 文節とともに使用することはできません。
- 2 IBM 拡張
- 3 構文検査だけ行われます。

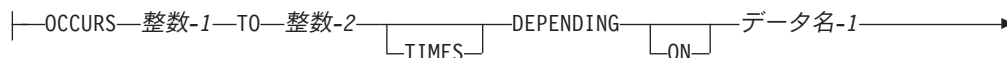
データ記述記入項目 - 一般形式 1 (続き)



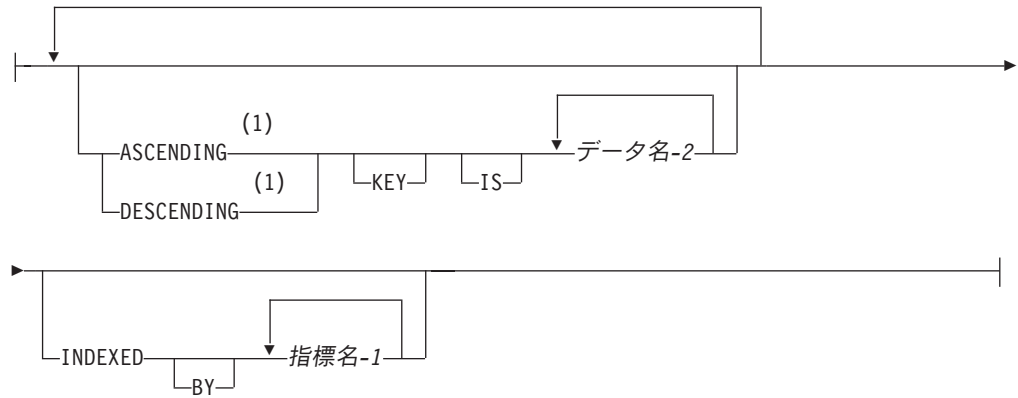
OCCURS 文節 - 形式 1:



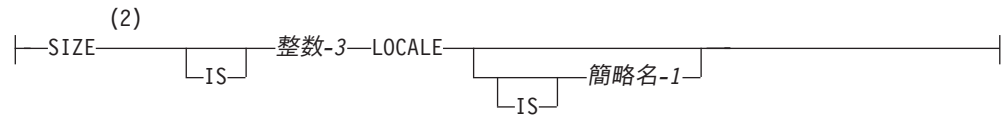
OCCURS 文節 - 形式 2:



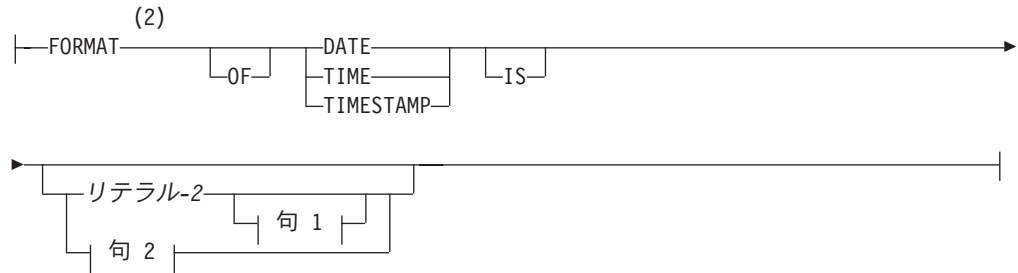
KEY - INDEXED-BY 句:



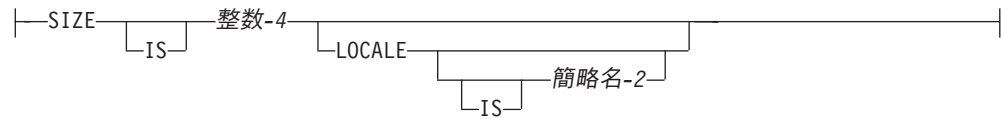
SIZE 句および LOCALE 句:



FORMAT 文節:

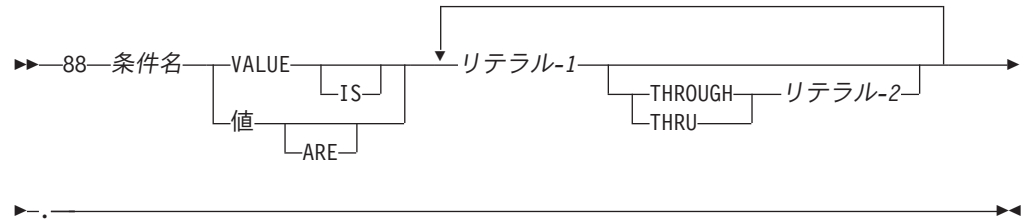


句 1:



句 2:





条件名

ある 1 つの値、一連の値、またはある範囲の値を条件変数と関連付けるユーザー指定名。

条件変数とは、1 つまたは複数の値を取ることでできるデータ項目であり、その後でそれらの値を条件名と関連付けることができます。

形式 3 は、基本およびグループ項目の両方の記述に使用できます。条件名項目についての詳細は 270 ページの『条件名条件』に説明があります。

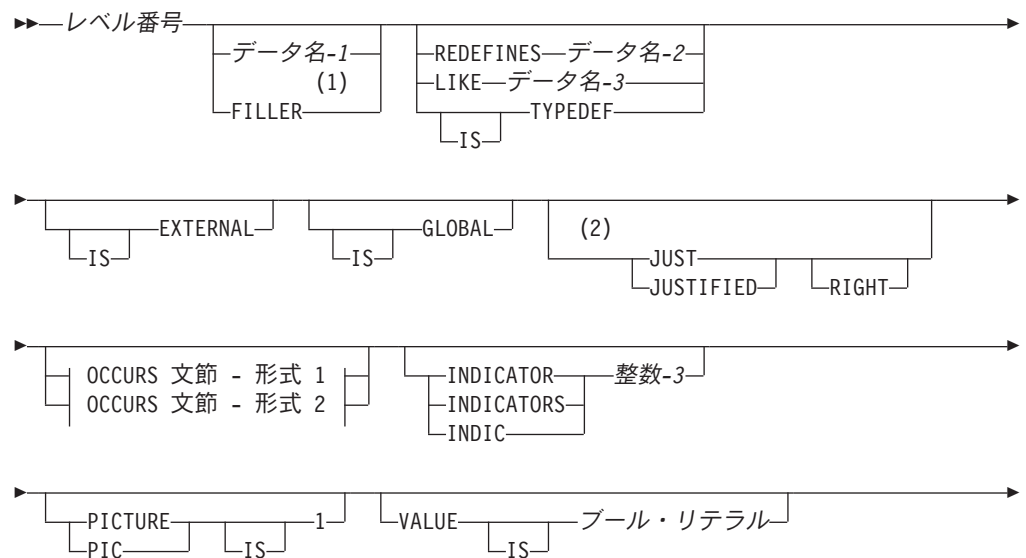
形式 4

IBM 拡張

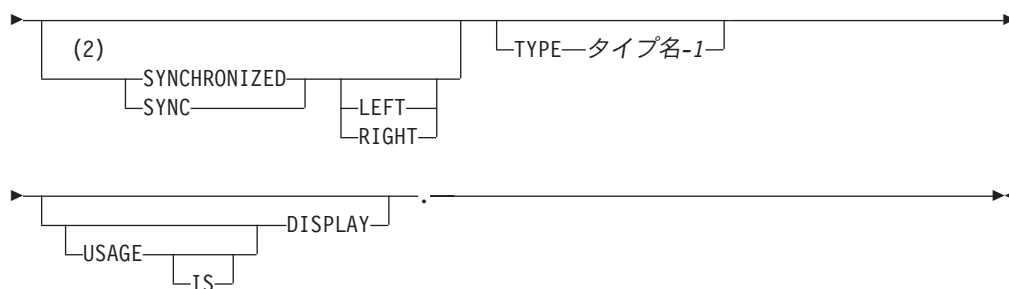
この形式は、ブール・データを記述します。ブール・データ項目は値を 1 または 0 に限定された項目です。

注: COBOL プログラムで標識を使用するときには、ブール・データのデータ記述記入項目を用いてそれらをブール・データ項目として記述しなければなりません。

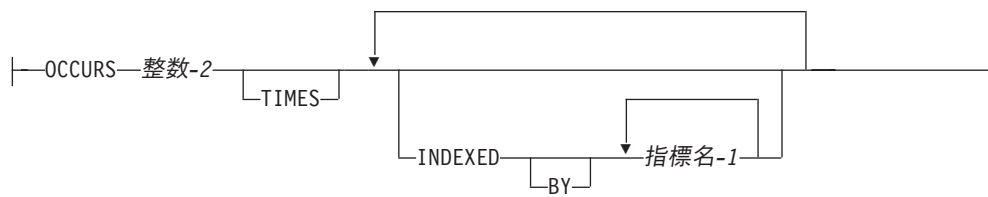
データ記述記入項目 - 形式 4 - ブール・データ



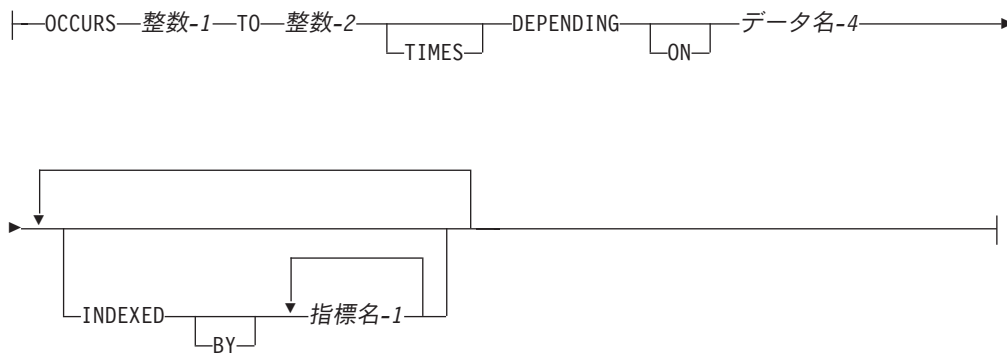
データ部 - データ記述記入項目



OCCURS 文節 - 形式 1:



OCCURS 文節 - 形式 2:



注:

- 1 TYPEDEF 文節とともに使用することはできません。
- 2 構文検査だけ行われます。

ブール・データとともに使用される文節の特別な考慮事項を説明します。文節のその他すべての規則は、他のデータの規則と同じです。

IBM 拡張 の終り

形式 5

IBM 拡張

形式 5 は定数名を示します。定数名を記述できるのは、レベル 01 の記入項目に対してだけです。定数名項目についての詳細は『CONSTANT 文節』に説明があります。

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張



IBM 拡張 の終り

CONSTANT 文節

IBM 拡張

CONSTANT 文節は、定数名とリテラルの関連付けに使用されます。定数名は、その後リテラルの代わりに使用することができます。CONSTANT 文節を指定できるのは、基本定数名の レベル 01 の記入項目に対してだけです。CONSTANT 文節を、事前に定義済みの別の定数名としても定義できます。

定数名は、使用する前に、CONSTANT 文節で定義しておく必要があります。定数名は、データ部および手続き部で使用でき、これらの部では、COPY ステートメントおよび TITLE ステートメントなどのコンパイラ指示ステートメント以外では、リテラルまたは整数が許可されています。

定数名-1 は、形式がクラスのリテラルおよび定数名-1 のカテゴリを指定する場所であればどこでも使用できます。定数名-1 のクラスおよびカテゴリは、リテラル-1 のクラスおよびカテゴリと同じか、または LENGTH OF 句が指定されている場合は整数です。定数名-1 が整数の場合、ピクチャー・ストリングでの繰り返しの指定にも使用される場合があります。

リテラル-1 は、表意定数であってはなりません。

LENGTH OF 句が指定されている場合、定数名-1 の値は、LENGTH 組み込み関数で指定されているとおりに決定されます。ただし、例外として、データ名-2 が、OCCURS DEPENDING ON 文節で記述される可変長データ項目の場合は、データ項目の最大サイズが使用されます。

IBM 拡張 の終り

LIKE 文節

この文節を使用してデータ項目の長さを変更することはできません。

OCCURS 文節

OCCURS 文節および INDICATOR 文節がともに基本レベルで指定されるとき、ブール・データ項目のテーブルは、外部標識に対応するテーブルの各エレメントとともに定義されます。このテーブルの最初のエレメントは、INDICATOR 文節に指定された標識番号に対応し、2 番目のエレメントは、INDICATOR 文節で指定された標識の後に順番どおりに続く標識に対応します。

たとえば、次のようにコーディングした場合、

```
07 SWITCHES PIC 1
      OCCURS 10 TIMES
      INDICATOR 16.
```

SWITCHES (1) は標識 16 に対応し、SWITCHES(2) は標識 17 に対応し、以下同様にして、SWITCHES (10) は標識 25 に対応します。

INDICATOR 文節

標識フィールドが、独立した標識域にある場合には、INDICATOR 文節は、DDS に定義された標識とブール・データ項目を関連付けます。標識フィールドがレコード域にある場合、INDICATOR 文節は構文検査されますが、文書化のための記述として取り扱われます。

整数-3 は、1 ~ 99 の値でなければなりません。

INDICATOR 文節は、基本レベルでのみ指定しなければなりません。

VALUE 文節

VALUE 文節は、ブール・データ項目の開始内容を指定します。ブール・リテラルの許容値は、B “0”、B “1”、およびゼロです。

レベル番号

レベル番号は、レコード内のデータの階層を指定し、また特別な目的を持つデータ項目を識別します。レベル番号は、データ記述記入項目、タイプ名、名前変更または再定義される項目、あるいは条件名記入項目を開始します。レベル番号は、1 ~ 49 の整数または特別レベル番号の 66、77、または 88 のうちのいずれかの値をもちます。

レベル番号

レベル番号の後には、分離文字のピリオドが続くか、または、スペースをあけてその後に関連したデータ名-1、FILLER、または適切なデータ記述文節が続かなければなりません。レベル番号 01 および 77 は区域 A から始めなければなりません。レベル番号 77 の後には、スペースあけてその後に関連したデータ名-1 が続かなければなりません。レベル番号 02 ~ 49、66、そして 88 は区域 A または B で始めます。

レベル番号 01 ~ 09 の代わりに、1 桁のレベル番号 1 ~ 9 を指定することもできます。

連続するデータ記述記入項目は、最初の項目と同じ桁から始めることも、あるいはレベル番号に合わせて字下げすることもできます。字下げしても、レベル番号の意味に影響はありません。

レベル番号を字下げすると、新しいレベル番号ごとに区域 A の右側に任意の数のスペースをあけてから始めることができます。右側へ字下げする範囲は、区域 B の幅による制限しか受けません。

詳しくは、143 ページの『データのレベル』および 149 ページの『標準データ・フォーマット』を参照してください。

IBM 拡張

1 つのグループ項目に直接従属する基本項目またはグループ項目に付けるレベル番号は個々に違っていてもかまいません。

IBM 拡張 の終り

データ名-1

記述されるデータを明示的に識別します。

データ名-1 を指定した場合、データ名-1 はプログラムの中で使用されるデータ項目を識別します。このデータ項目は、レベル番号の後につづく最初の語でなければなりません。

プログラム実行時に、データ項目を変更できます。

次のものにデータ名-1 を指定しなければなりません。

- レベル 66、レベル 77、およびレベル 88 の項目
- 文節 GLOBAL、EXTERNAL、または TYPEDEF を含む記入項目
- GLOBAL 文節または EXTERNAL 文節の入ったファイル記述項目と関連したレコード記述記入項目

FILLER

これは、プログラムの中で明示的に参照されることのないデータ項目です。キーワード FILLER の指定はオプションです。指定する場合、FILLER はレベル番号の直後に指定しなければなりません。

条件変数にではなくそれが取ることのできる値にだけ明示参照が行われるなら、条件変数と一緒にキーワードの FILLER を使えます。FILLER を条件名またはタイプ名とともに使用することはできません。

MOVE CORRESPONDING ステートメント、ADD CORRESPONDING、または SUBTRACT CORRESPONDING ステートメントにおいては、FILLER 項目は指定しても無視されます。INITIALIZE ステートメントでは、基本 FILLER 項目は無視されます。

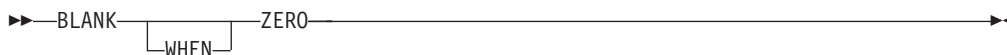
データ名-1 または FILLER 文節が省略された場合には、記述されているデータ項目は FILLER が指定されたものとして処理されます。

BLANK WHEN ZERO 文節

BLANK WHEN ZERO 文節は、項目の値がゼロのときはその項目にスペースだけが入ることを指定します。

BLANK WHEN ZERO 文節

BLANK WHEN ZERO 文節 - 形式



BLANK WHEN ZERO 文節は、基本数字項目または数字編集項目に関してのみ指定できます。これらの項目は、USAGE IS DISPLAY として暗黙にまたは明示的に記述されなければなりません。BLANK WHEN ZERO 文節が数字項目に関して指定されると、その項目は数字編集項目と見なされます。

BLANK WHEN ZERO 文節は、レベル 66 またはレベル 88 の項目に対して指定してはなりません。

BLANK WHEN ZERO 文節は、PICTURE 記号 S または * を含む記入項目に指定してはなりません。

BLANK WHEN ZERO 文節を以下のものとともに使用することはできません。

- USAGE IS INDEX 文節

IBM 拡張

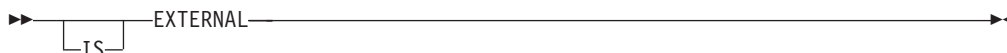
- 日時クラスの項目
- 外部または内部の浮動小数点項目
- USAGE IS POINTER 文節
- USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節で記述された項目
- DBCS 項目
- 国別項目
- TYPE 文節

IBM 拡張 の終り

EXTERNAL 文節

EXTERNAL 文節は、データ項目に関連したストレージを、実行単位内の特定のプログラムにではなく、実行単位に関連付けることを指定します。

EXTERNAL 文節 - 形式



外部データ項目は、実行単位にあってしかもデータ項目を記述した任意のプログラムから参照できます。データ項目の別々の記述を使ってさまざまなプログラムから外部データ項目を参照しても、常に同一のデータ項目を対象とします。1つの実行単位では、外部データ項目は1回しか現れません。

EXTERNAL 文節は、作業用ストレージ・セクションの 01 レベル記入項目に、またはファイル記述記入項目に指定できます。同一のデータ部に同一のデータ名の付いた2つのデータ記述記入項目があると、そのうち1つの項目にしか EXTERNAL

文節を入れられません。外部データ・レコード内の指標名、条件名、および名前変更 (レベル 66) 項目は EXTERNAL 属性を持ちません。

データ名文節で指定されたレコードに含まれるデータは、外部データであり、そのデータを記述し、オプションで再定義する実行単位内の任意のプログラムからアクセスしたり処理したりできます。このデータには、次のような規則が適用されます。

- 実行単位内の複数のプログラムが同一の外部データ・レコードを記述するときは、それに関連したレコード記述記入項目のすべてのレコード名は同一でなければならない。それらのレコードは同一数の標準データ・フォーマット文字を定義しなければなりません。しかし、外部レコードを記述するプログラムには、その外部レコード全体を再定義する REDEFINES 文節を含めたデータ記述記入項目を入れることができ、その全体の再定義は、実行単位内の他のプログラムと同様に行う必要はありません。
- EXTERNAL 文節を使用しても、それに関連したデータ名がグローバル名であることを意味しません。
- EXTERNAL 文節を含むか、またはこの文節を含む記入項目に従属するデータ記述記入項目に、VALUE 文節を使ってはなりません。そのようなデータ記述記入項目に関連した条件名記入項目には、VALUE 文節を指定できます。
- TYPEDEF 文節は EXTERNAL 文節と同じデータ記述記入項目に指定することはできません。

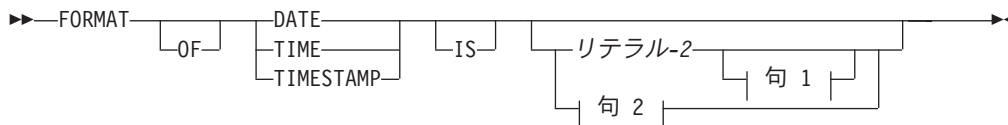
詳細は 31 ページの『第 4 章 データ参照と名前の有効範囲』を参照してください。

FORMAT 文節

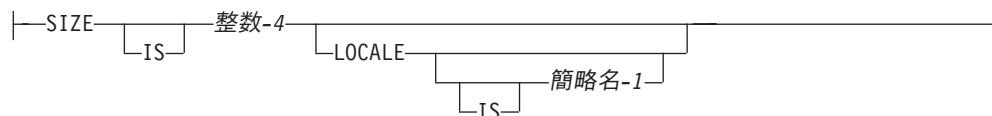
IBM 拡張

FORMAT 文節では、日付、時刻、またはタイム・スタンプの基本項目の一般特性および編集要件を指定します。

FORMAT 文節 - 形式



句 1:



句 2:



FORMAT 文節は、RENAMES 文節のサブジェクトを除き、日付、時刻、またはタイム・スタンプの各基本項目のそれぞれに対して指定する必要があります。

リテラル-2 および SIZE 句は、いずれもタイム・スタンプ項目には指定できません。これは、長さが 26 文字で、"@Y-%m-%d-%H.%M.%S.@Sm" のリテラル-2 の値と等価の固定形式になります。

リテラル-2 または LOCALE 句を日付項目または時刻項目に指定しないと、その項目の形式は SPECIAL-NAMES FORMAT 文節から判別されます。

日時クラスのデータ項目を参照変更することはできません。

FORMAT 文節を指定する場合は、以下の文節を指定することはできません。

- PICTURE 文節
- SIGN 文節
- BLANK WHEN ZERO 文節
- JUSTIFIED 文節
- LIKE 文節。ただし、LIKE 文節は、データ項目の FORMAT を定義する際に使用することができます。LIKE 文節で日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目のサイズを変更することはできません。LIKE 文節による日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目への参照時には、継承された適切な FORMAT 文節情報からコメントが生成されます。
- TYPE 文節

以下の一般規則が適用されます。

- 条件名を日時項目に関連付けることができる。この条件名の VALUE 文節は THRU 句を使用して指定できます。
- SYNCHRONIZED 文節は文書として扱われる。
- 文節 OCCURS、REDEFINES、および RENAMES は、日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目と関連付けることができる。
- LIKE 文節を指定する場合は FORMAT 文節を指定することはできない。
- 関連付けられている VALUE 文節は、どれでも非数字リテラルを指定しなければならない。このリテラルはまさに指定したとおりに扱われます。フォーマット設定は一切行われません。

リテラル-2

日付項目または時刻項目の形式を指定します。リテラル-2 は最小でも 2 文字の非数字リテラルでなければなりません。リテラル-2 の内容は、分離文字および変換指定子から構成されます。有効な変換指定子のリストが 91 ページの表 5 に記載されていますので、そちらを参照してください。リテラル-2 の内容に関

する規則の詳細は 90 ページの『FORMAT 文節』に記載されている、SPECIAL-NAMES 段落で使用する FORMAT 文節についての説明を参照してください。

SIZE 句

SIZE 句について、より詳細な説明が必要な場合は、92 ページの『SIZE 句』を参照してください。このセクションでは、この SIZE 句に指定するパラメーターについて説明します。

整数-3、整数-4

整数-3 および整数-4 から、日付項目または時刻項目の桁数でのサイズが判別されます。日付項目または時刻項目のサイズがコンパイル時に判別できない場合は、整数-3 または整数-4 を指定する必要があります。日付項目または時刻項目では、整数-3 および整数-4 の値は両方とも 4 以上でなければなりません。

簡略名-1、簡略名-2

簡略名-1 または簡略名-2 の詳細は『LOCALE 句』および 92 ページの『LOCALE 句』に記載されている説明を参照してください。

日時クラスの項目の使用法

日時クラスの項目に USAGE 文節が指定されていない場合は、USAGE DISPLAY が想定されます。日時項目の場合は、USAGE DISPLAY か USAGE PACKED-DECIMAL (COMP-3) を明示的に指定できます。日時クラスの項目に対して USAGE PACKED-DECIMAL を指定できるのは、リテラル-2 の内容が変換指定子だけの場合に限られます。これらの変換指定子は結果的に数字に置き換えられます。

FORMAT 文節と PICTURE 文節の類似点

FORMAT 文節は、暗黙の PICTURE 文節を定義します。日付項目または時刻項目を容易に記述できる PICTURE 文字ストリングは 1 つもないにもかかわらず、ある種の形式においては定義に近いものが存在します。たとえば、FORMAT `'%y,%m,%d'` が指定されている日付項目は PICTURE 99/99/99 に類似します。ここで、'/' PICTURE 記号は ';' に置き換えられます。

LOCALE 句

LOCALE 句は、日付、時刻、タイム・スタンプ項目を各文化圏に適切な形式で指定します。

リテラル-2 を指定せずに LOCALE 句を指定すると、日付項目および時刻項目に使用される形式および分離文字は完全にロケールに基づくものとなります。

リテラル-2 を指定した上で LOCALE 句を指定すると、項目の形式はリテラル-2 から判別されますが、変換指定はロケールに基づく項目に置き換えられます。

簡略名-1、簡略名-2

簡略名を指定すると、日付項目または時刻項目のために使用されるロケールは SPECIAL-NAMES 段落の LOCALE 文節の簡略名に関連付けられているロケールとなります。簡略名を指定しない場合は現行ロケールが使用されます。現行ロ

ケールを判別する方法の詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

LOCALE OF 特殊レジスター

LOCALE OF 特殊レジスターは、指定したデータ項目に関連付けられているロケール簡略名と等価の値を戻します。そのデータ項目に関連付けられているロケールがない場合は、キーワード COBOL が戻されます。LOCALE OF 特殊レジスターを変更することはできません。また、これを指定できるのは、ロケール簡略名が使用可能な PROCEDURE DIVISION においてだけです。

日時データ項目は LOCALE OF 特殊レジスターを使用する式の中で使用することができます。

DDS データ・タイプおよび FORMAT リテラルと等価の値

DDS では、日付データ・タイプの形式は DATFMT パラメーターで指定します。
*MDY および *ISO も有効な DATFMT パラメーターです。DATSEP キーワードは、月、日、および年の値の間の分離文字として使用される 1 文字の値を指定するために DATFMT キーワードとともに使用します。表 10 に、DATFMT パラメーター、それぞれの形式で使用可能な DDS 日付分離文字、およびこれらのパラメーターと等価の COBOL 形式リテラルの完全なリストを示します。

DDS では、時刻データ・タイプの形式は TIMFMT パラメーターで指定します。
*HMS および *ISO も有効な TIMFMT パラメーターです。TIMSEP キーワードは、時、分、および秒の値の間の分離文字として使用される 1 文字の値を指定するために TIMFMT キーワードとともに使用します。表 11 に、TIMFMT パラメーター、それぞれの形式で使用可能な DDS 時刻分離文字、およびこれらのパラメーターと等価の COBOL 形式リテラルの完全なリストを示します。

表 10. DDS 日付データ・タイプおよびそれらと等価の ILE COBOL の形式

i5/OS形式	COBOL が生成する形式	内容	形式	有効な分離文字	長さ
*MDY	%m/%d/%y	月 / 日 / 年	mm/dd/yy	/., スペース	8
*DMY	%d/%m/%y	日 / 月 / 年	dd/mm/yy	/., スペース	8
*YMD	%y/%m/%d	年 / 月 / 日	yy/mm/dd	/., スペース	8
*JUL	%y/%j	ユリウス	yy/ddd	/., スペース	6
*ISO	@Y-%m-%d	ISO (国際標準化機構)	yyyy-mm-dd	-	10
*USA	%m/%d/@Y	IBM USA 標準規格	mm/dd/yyyy	/	10
*EUR	%d.%m.@Y	IBM 欧州標準規格	dd.mm.yyyy	.	10
*JIS	@Y-%m-%d	JIS (日本工業規格) 西暦	yyyy-mm-dd	-	10

表 11. DDS 時刻データ・タイプおよびそれらと等価の ILE COBOL の形式

i5/OS形式	COBOL が生成する形式	内容	形式	有効な分離文字	長さ
*HMS	%H:%M:%S	時 : 分 : 秒	hh:mm:ss	:. , スペース	8
*ISO	%H.%M.%S	ISO (国際標準化機構)	hh.mm.ss	.	8
*USA	%I:%M @p	IBM USA 標準規格。AM および PM は、大文字小文字を任意に混合させることができます。	hh:mm AM または hh:mm PM	:	8
*EUR	%H.%M.%S	IBM 欧州標準規格	hh.mm.ss	.	8
*JIS	%H:%M:%S	JIS (日本工業規格) 西暦	hh:mm:ss	:	8

FORMAT OF 特殊レジスター

PROCEDURE DIVISION の FORMAT OF 句は、FORMAT OF 特殊レジスターと呼ばれる暗黙的な特殊レジスターを作成します。このレジスターの内容は、ID によって参照されるデータ項目の FORMAT リテラルと等価です。FORMAT OF 特殊レジスターは、日時クラスの日付データ項目に対してのみ指定することができます。この特殊レジスターの長さは、当該のデータ項目用の FORMAT 句内で指定されるリテラルまたはロケールによって決まります。

FORMAT OF 特殊レジスターには次のような暗黙の定義が入っています。

```
USAGE DISPLAY, PICTURE X(n)
where n equals the number of bytes of the implicit or explicit
FORMAT literal.
```

例として、以下の日付データ項目 date2 用のデータ記述記入項目について考えてみます。

```
05 date2 FORMAT DATE IS '%d,%m,%y'.
```

以下の MOVE ステートメントは、組み込み関数 CONVERT-DATE-TIME を使用して日付データ項目 date3 を日付データ項目 date2 の形式に変換します。FORMAT OF 句は、その内容が %d,%m,%y となる暗黙特殊レジスターを作成します。

```
MOVE FUNCTION CONVERT-DATE-TIME(date3, DATE, FORMAT OF date2)
      TO alpha-num-date.
```

この例では、特殊レジスターの長さは 8 文字です。

次の規則が適用されます。

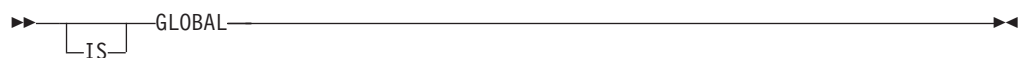
- FORMAT OF 特殊レジスターは、変更不能であり、FORMAT 非数字リテラルが使用可能な PROCEDURE DIVISION においてのみ指定可能。
- FORMAT OF 句を使って参照される ID ごとに別個の FORMAT OF 特殊レジスターが 1 つずつ存在する。

IBM 拡張の終り

GLOBAL 文節

GLOBAL 文節は、データ名また定数名を宣言するプログラムと、そのデータ名または定数名を宣言するプログラム内に含まれるすべてのプログラムが、そのデータ名または定数名を使えるよう指定します。しかし、含まれる側のプログラムでその名前を宣言しないことが前提条件です。グローバル名に從属するデータ名、グローバル名と関連した条件名または指標名は、すべてグローバル名です。

GLOBAL 文節 - 形式



GLOBAL 文節が、データ名を宣言したデータ記述記入項目またはデータ記述記入項目が從属である別の記入項目のいずれかで指定された場合、そのデータ名はグローバルです。

IBM 拡張

GLOBAL 文節は、リンケージ・セクションおよびローカル・ストレージ・セクションに指定できますが、レベル番号が 01 のデータ記述記入項目にしか指定できません。

IBM 拡張 の終り

同じデータ部の場合、同じデータ名を指定された 2 つのデータ項目のデータ記述記入項目に GLOBAL 文節を入れてはなりません。

グローバル名を記述したプログラムに直接または間接に含まれるプログラム内のステートメントは、もう一度その名前を記述しなくてもその名前を参照できます。

IBM 拡張

TYPDEF 文節を GLOBAL 文節とともに指定すると、GLOBAL 文節の有効範囲が当該のタイプ名およびそのタイプ名に従属するすべてのデータ項目に対して適用されます。TYPE 文節内のグローバル・タイプ名を使用して定義したデータ項目が GLOBAL 属性を獲得することはありません。

IBM 拡張 の終り

データの共用

実行単位内の 2 つのプログラムは、次のような場合に共通データを参照できます。

1. プログラムで外部データ・レコードを記述してさえいれば、その外部データ・レコードのデータ内容をそのプログラムから参照できます。
2. プログラムが別のプログラムに含まれているとき、どちらのプログラムからでも、含む側のプログラムに、またはその含む側のプログラムを直接または間接に含む任意のプログラムにグローバル属性を保有するデータを参照できます。
3. 参照のときに渡されるパラメーターは、呼び出し側プログラムと呼び出し先プログラムで共用できます。

JUSTIFIED 文節

JUSTIFIED 文節は、英字または英数字カテゴリーの受け入れ項目の標準位置合わせ規則を無効にします。

JUSTIFIED 文節 - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

JUSTIFIED 文節は、基本レベルでのみ指定できます。RIGHT はオプションの語であり、構文検査だけが行われ、プログラムの実行には影響を与えません。

JUSTIFIED 文節は、数字項目または数字編集項目に対して指定することができません。

IBM 拡張

DBCS 項目、DBCS 編集項目、および国別項目に対して指定できます。

IBM 拡張 の終り

JUSTIFIED 文節は、以下のものには許されません。

- レベル 66 (RENAMES) 記入項目
- レベル 88 (条件名) 記入項目
- USAGE IS INDEX 文節で記述された項目

IBM 拡張

- USAGE IS POINTER 文節で記述された項目
- USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節で記述された項目
- 外部または内部の浮動小数点項目
- TYPE 文節が指定されている項目

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

JUSTIFIED 文節は、英数字編集項目に指定できます。

IBM 拡張 の終り

JUSTIFIED 文節を省略すると、標準の位置合わせ規則が適用されます (148 ページの『位置合わせの規則』を参照)。

受け入れ項目に対して JUSTIFIED 文節を指定した場合、データはその受け入れ項目の右端の文字位置に位置合わせされます。また、以下のとおりです。

- 送り出し項目が受け入れ項目より大きいならば、左端の文字が切り捨てられます。
- 送り出し項目が受け入れ項目より小さいならば、左の使用されない文字位置がスペースで埋められます。

JUSTIFIED 文節は、VALUE 文節によって定められた初期値には影響を与えません。

LIKE 文節

IBM 拡張

LIKE 文節を使用すると、すでに定義済みのデータ項目から PICTURE、USAGE、SIGN、および FORMAT をコピーすることにより、データ項目のこれらの特性を定義することができます。また、LIKE 文節を使用して、データ項目の長さを元の項目の長さとは異なるものに定義できます。

LIKE 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

データ名-1

基本項目、グループ項目、指標名、またはタイプ名を参照することができます。データ名-1 によって参照される項目は、LIKE 文節のオブジェクトとして認識されます。

整数

新しい項目と既存項目との長さの差を指定します。

これには符号を付けることができます。

整数の前にブランクまたは + がある場合、この新しい項目は長くなります。- が整数の前にある場合、新しい項目は短くなります。

整数オプションを使用して、以下に示す変更はできません。

- 編集項目の長さを変更すること。
- 指標、ポインター、またはプロシージャ・ポインター項目の長さを変更すること。
- データ項目内の小数点以下の桁数を変更すること。
- 内部浮動小数点データ項目または外部浮動小数点データ項目の長さを変更すること。
- 時刻、またはタイム・スタンプの項目の長さを変更すること。

項目の属性に BLANK WHEN ZERO が入っていると、その項目は編集項目として扱われることに注意してください。

LIKE 文節は、新しいデータ項目に既存データ項目の特性を継承させます。これらの特性は、既存の項目の PICTURE、USAGE、SIGN、BLANK WHEN ZERO、および FORMAT の属性です。

コンパイラーはコメントを生成して、新しい項目の特性を識別します。このコメントは、LIKE 文節を含むステートメントの後に現れます。

デフォルトの USAGE IS DISPLAY および SIGN IS TRAILING の特性はコメントとして印刷されないことに注意してください。

継承可能な FORMAT 特性には、以下のものがあります。

- 項目のカテゴリ (日付、時刻、またはタイム・スタンプ)
- FORMAT リテラル
- SIZE 句および LOCALE 句

FORMAT 文節の詳細については 181 ページの『FORMAT 文節』を参照してください。

継承した USAGE 特性に基づいて生成されるコメント

元の項目に別の USAGE 文節を指定できますが、その場合はコメントの数が制約されます。これについては 表 12 で説明しています。

表 12. 継承した USAGE 特性に基づいて生成されるコメント

継承される USAGE 文節	生成されるコメント
PACKED-DECIMAL COMPUTATIONAL COMPUTATIONAL-3	* USAGE IS PACKED-DECIMAL
COMP-1 COMUTATIONAL-1	* USAGE IS COMPUTATIONAL-1
COMP-2 COMUTATIONAL-2	* USAGE IS COMPUTATIONAL-2
BINARY COMPUTATIONAL-4	* USAGE IS BINARY
INDEX	*USAGE IS INDEX
DISPLAY	これはデフォルトの USAGE なのでコメントは生成されない
DISPLAY-1	* USAGE IS DISPLAY-1
POINTER	* USAGE IS POINTER
PROCEDURE-POINTER	* USAGE IS PROCEDURE-POINTER

LIKE 文節を使用して定義するデータ項目の特性は、ユーザーのコンパイル済みプログラムのリスト内に示されます。

規則と制約事項

LIKE 文節は、レベル番号 01 ~ 49、およびレベル番号 77 で使用できます。

データ名または FILLER 項目を指定する場合、その後の任意の位置に LIKE 文節を記述できます。その他の場合には、レベル番号の後の任意の位置にこれを記述できません。

LIKE 文節の前後には、次の文節の 1 つまたは複数指定できます。

- JUSTIFIED
- SYNCHRONIZED
- BLANK WHEN ZERO
- VALUE
- OCCURS

LIKE 文節

BLANK WHEN ZERO は、これが以前に受け継がれなかったという場合にのみ指定できることに注意してください。

次の文節とともに LIKE 文節を使用することはできません。

- REDEFINES
- SIGN
- USAGE
- PICTURE
- FORMAT
- TYPE
- TYPEDEF

LIKE 文節に継承済みの文節を指定すると、重複エラーになります。

数字項目の場合、新しい項目の数字の総数はゼロにはできません。ただし、その項目に小数部分が入っている場合には、整数部分の数字がゼロになってもかまいません。

PICTURE 文節が英字、数字、または英数字を混合して指定しているときに LIKE 文節の長さを修正すると、新しい PICTURE 文節は英数字を指定します。

LIKE 文節を使用して、この文節内で名前を指定する項目に従属している項目を定義することはできません。

LIKE 文節のオブジェクトのデータ記述の中に TYPE 文節を含めることはできません。LIKE 文節のオブジェクトがグループ項目である場合は、このグループに従属する項目を TYPE 文節を使用して定義することはできません。ある LIKE 文節のオブジェクトが (レベル 01 の) グループ項目に従属しており、かつそのレベル 01 のグループ項目に従属する項目のいずれかに TYPE 文節が含まれている場合は、その TYPE 文節内で参照されるタイプ名は DATA DIVISION においてその LIKE 文節が使用されるポイントで完全に定義される必要があります。

コーディング例

データ項目 HEIGHT と同じ属性を持つデータ項目 DEPTH を作成するには、単純に次のように書きます。

```
DEPTH LIKE HEIGHT
```

データ項目 STATE と同じ属性をもち、ただし 1 バイトだけ長いデータ項目 PROVINCE を作成したい場合は、次のように書きます。

```
PROVINCE LIKE STATE (+1)
```

IBM 拡張 の終り

OCCURS 文節

テーブルの処理に使用するデータ部の文節は OCCURS 文節と USAGE IS INDEX 文節です (USAGE IS INDEX の説明は 235 ページの『USAGE 文節』を参照してください)。OCCURS 文節の形式 1 は、固定長テーブルを処理します。OCCURS 文節の形式 2 は、可変長テーブルを処理します。

テーブル処理の概念

テーブルとは、一連の項目の集合の中で、各項目が他の項目と同じデータ記述を持つ論理的に連続する一連の項目です。COBOL には、1 つのテーブルの全体または一部をエンティティとして参照するようなデータ参照の使用法が備わっています。

COBOL では、テーブルはデータ記述の中で OCCURS 文節とともに定義されます。OCCURS 文節は、指定された項目が示された回数だけ繰り返されることを指定します。そのように指定された項目は、テーブル・エレメントと見なされ、その名前および記述は、その項目が出現するたびに適用されます。オカレンスには固有のデータ名が与えられないので、特定のオカレンスへの参照は、エレメント内の希望する項目のオカレンス番号とともに、テーブル・エレメントのデータ名を指定することによってのみ可能です。

オカレンス番号は添え字とも呼ばれ、各テーブル・エレメントにオカレンス番号を与える方法は、添え字付けと呼ばれます。添え字付けは、後の節で説明します。

OCCURS 文節を含んだデータ項目のデータ名は、OCCURS 文節のサブジェクトと呼ばれます。OCCURS 文節のサブジェクト (またはその下にある任意のデータ項目) が参照される場合、次のような場合を除いて、そのサブジェクトに添え字が付いているか、指標が付けられていなければなりません。

- OCCURS 文節のサブジェクトが、SEARCH ステートメントのサブジェクトとして使われるとき
- そのサブジェクト (またはそれに従属するデータ項目) が、ASCENDING/DESCENDING KEY 文節のオブジェクトであるとき
- 従属データ項目が、REDEFINES 文節のオブジェクトであるとき

OCCURS 文節のサブジェクトに添え字または指標を付けると、それはテーブル内の 1 つのオカレンスを表します。付けない場合、そのサブジェクトはテーブル全体を表します。

IBM 拡張

用途が POINTER または PROCEDURE-POINTER である項目は、OCCURS 文節を含むことも、または OCCURS 文節を使って宣言された項目に従属することもあります。

ポインターまたはプロシージャ・ポインター・テーブル項目を含むテーブルは 246 ページの『ポインターの位置合わせ』で定義されているとおりのポインター位置合わせに従います。必要な場合には、コンパイラーが FILLER 項目を加えてテーブルの第 1 エレメントのポインターを位置合わせし、また同エレメントの最後には FILLER を加えて次のポインターを位置合わせします。これは、テーブル中のすべてのポインターが位置合わせされるまで続きます。

ブール、外部浮動小数点または内部浮動小数点、日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目は、OCCURS 文節を含んでいることもあり、また、OCCURS 文節を使って宣言された項目に従属することもあります。

IBM 拡張 の終り

制約事項

テーブルの処理時には、次の制約事項を理解しておかなければなりません。

- OCCURS 文節中の項目のオカレンス数は、最高 16 711 568 までとすることができます。
- 従属エレメントを含めたテーブル・エレメントのサイズ限度は、16 711 568 バイトです。
- OCCURS 文節は、次のようなデータ記述記入項目には入れられません。
 - レベル番号 01、66、77、または 88 を持つもの。
 - 再定義されたデータ項目を記述するもの。ただし、再定義された項目は、OCCURS 文節を含む項目に従属できます。

テーブルの定義

ILE COBOL コンパイラーでは、1 ~ 7 次元のテーブルを使用できます。

1 次元のテーブルを定義するには、1 つの OCCURS 文節を含むグループ項目をセットアップします。OCCURS 文節は、レベル番号が 01、66、77、または 88 であるデータ記述記入項目には入らないということに注意してください。

たとえば、次のとおりです。

```
01 TABLE-ONE.
05 ELEMENT-ONE OCCURS 3 TIMES.
   10 ELEMENT-A PIC X(4).
   10 ELEMENT-B PIC 9(4).
```

TABLE-ONE は、テーブルを含むグループ項目です。ELEMENT-ONE は、3 回発生する 1 次元テーブルのエレメントです。ELEMENT-A および ELEMENT-B は、ELEMENT-ONE に従属する基本項目です。

3 次元テーブルを定義するには、別の 1 次元テーブルの各オカレンス内にそれ自体が含まれている 1 次元テーブルの各オカレンス内に 1 次元テーブルを定義します。たとえば、次のとおりです。

```
01 TABLE-THREE.
05 ELEMENT-ONE OCCURS 3 TIMES.
   10 ELEMENT-TWO OCCURS 3 TIMES.
     15 ELEMENT-THREE OCCURS 2 TIMES
       PICTURE X(8).
```

TABLE-THREE は、テーブルを含むグループ項目です。ELEMENT-ONE は、3 回発生する 1 次元テーブルのエレメントです。ELEMENT-TWO は、ELEMENT-ONE の各オカレンス内に 3 回発生する 2 次元テーブルのエレメントです。ELEMENT-THREE は、ELEMENT-TWO の各オカレンス内に 2 回発生する 3 次元テーブルのエレメントです。図 7 は、TABLE-THREE のストレージ・レイアウトを示しています。

ELEMENT-ONE 3 回発生	ELEMENT-TWO 3 回発生	ELEMENT-THREE 2 回発生	バイト変位
			0
ELEMENT-ONE (1)	ELEMENT-TWO (1, 1)	ELEMENT-THREE (1, 1, 1)	8
		ELEMENT-THREE (1, 1, 2)	16
	ELEMENT-TWO (1, 2)	ELEMENT-THREE (1, 2, 1)	24
		ELEMENT-THREE (1, 2, 2)	32
	ELEMENT-TWO (1, 3)	ELEMENT-THREE (1, 3, 1)	40
		ELEMENT-THREE (1, 3, 2)	48
ELEMENT-ONE (2)	ELEMENT-TWO (2, 1)	ELEMENT-THREE (2, 1, 1)	56
		ELEMENT-THREE (2, 1, 2)	64
	ELEMENT-TWO (2, 2)	ELEMENT-THREE (2, 2, 1)	72
		ELEMENT-THREE (2, 2, 2)	80
	ELEMENT-TWO (2, 3)	ELEMENT-THREE (2, 3, 1)	88
		ELEMENT-THREE (2, 3, 2)	96
ELEMENT-ONE (3)	ELEMENT-TWO (3, 1)	ELEMENT-THREE (3, 1, 1)	104
		ELEMENT-THREE (3, 1, 2)	112
	ELEMENT-TWO (3, 2)	ELEMENT-THREE (3, 2, 1)	120
		ELEMENT-THREE (3, 2, 2)	128
	ELEMENT-TWO (3, 3)	ELEMENT-THREE (3, 3, 1)	136
		ELEMENT-THREE (3, 3, 2)	144

図 7. TABLE-THREE のストレージ・レイアウト

テーブル・エレメントの参照

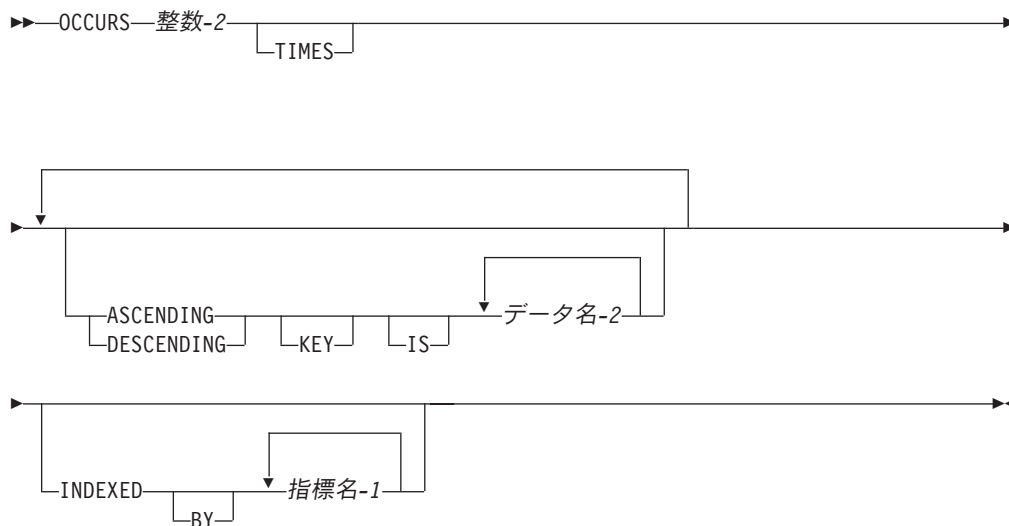
ユーザーがテーブル・エレメント、あるいはテーブル・エレメントに関連した項目を参照するときにはいつでも、参照がどのオカレンスを指しているかを示さねばなりません。

1 次元テーブルでは、希望するエレメントのオカレンス番号によって、詳細な情報が提供されます。2 次元以上のテーブルでは、各次元のオカレンス番号を指定する必要があります。たとえば、前に定義されている 3 次元テーブルでは、ELEMENT-THREE への参照には、ELEMENT-ONE、ELEMENT-TWO、および ELEMENT-THREE のオカレンス番号を与えねばなりません。

固定長テーブル

固定長テーブルは、OCCURS 文節を使って指定されます。7 つの添え字および指標が使用できるので、形式 1 の OCCURS 文節の 6 つのネストされたレベルと 1 番外側のレベルを 1 つ使用できます。形式 1 の OCCURS 文節は、OCCURS DEPENDING ON 文節の従属として定義してもかまいません。このように、7 次元までのテーブルを指定できます。

OCCURS 文節 - 形式 1 - 固定長テーブル



整数-2

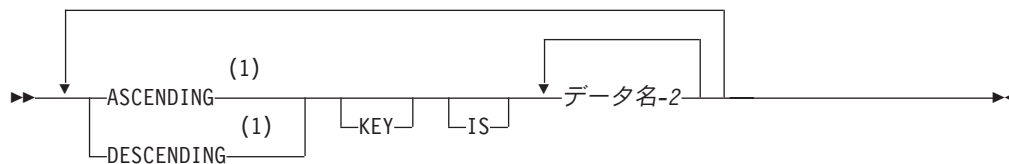
オカレンスの正確な数を指定します。これはゼロより大きくなければなりません。

ILE COBOL 言語では、整数-2 は 1 ~ 16 711 568 バイトでなければなりません。

ASCENDING/DESCENDING KEY 句

データは、データ名-2 に含まれる値にしたがって、昇順または降順に (指定されたキーワードに従って) 並べられます。データ名は、重要度の降順に記入されます。

ASCENDING/DESCENDING KEY 句 - 形式



注:

- 1 ブール・データ・タイプとともに使用することはできません。

順序は、オペランドの比較の規則に従って決められます (271 ページの『比較条件』を参照)。ASCENDING および DESCENDING KEY データ項目は、OCCURS 文節およびテーブル・エレメントのバイナリー・サーチを行う SEARCH ALL ステートメントで使用されます。

データ名-2

サブジェクト記入項目の名前、またはサブジェクト記入項目に從属する記入項目の名前でなければなりません。

データ名-2 がサブジェクト記入項目を指定する場合は、その記入項目全体が ASCENDING/DESCENDING KEY となり、またこのテーブル・エレメントに対して指定することのできる唯一のキーとなります。

データ名-2 がサブジェクト記入項目を指定しない場合は、データ名-2 は、次の規則が適用されます。

- テーブル記入項目そのもののサブジェクトに従属しなければなりません。
- OCCURS 文節を含む他の記入項目に従属または後続してはなりません。
- OCCURS 文節を含んではなりません。

ASCENDING/DESCENDING KEY 句の規則

ASCENDING/DESCENDING KEY 句を指定するときは、次の規則が適用されます。

- キーは、重要度の降順に記入しなければなりません。
- 使用している照合順序に従って、ASCENDING または DESCENDING 順序でテーブル内にデータを配列しなければなりません。
- キーは、DISPLAY、BINARY、PACKED-DECIMAL、または COMPUTATIONAL に使用できます。

IBM 拡張

- KEY 句は、DBCS 項目の OCCURS 文節に指定できます。
- キーは、COMPUTATIONAL-1、COMPUTATIONAL-2、COMPUTATIONAL-3、または COMPUTATIONAL-4 に使用できます。
- キーは、DISPLAY-1 を使用できます。
- キーは、日時クラスの項目であっても構いません。

IBM 拡張 の終り

ASCENDING/DESCENDING KEY 句のコーディング例

次の例は、ASCENDING KEY データ項目の指定を示しています。

```
WORKING-STORAGE SECTION.
01 TABLE-RECORD.
   05 EMPLOYEE-TABLE OCCURS 100 TIMES
      ASCENDING KEY IS WAGE-RATE EMPLOYEE-NO
      INDEXED BY A, B.
   10 EMPLOYEE-NAME                PIC X(20).
   10 EMPLOYEE-NO                  PIC 9(6).
   10 WAGE-RATE                    PIC 9999V99.
   10 WEEK-RECORD OCCURS 52 TIMES
      ASCENDING KEY IS WEEK-NO INDEXED BY C.
   15 WEEK-NO                      PIC 99.
   15 AUTHORIZED-ABSENCES          PIC 9.
   15 UNAUTHORIZED-ABSENCES       PIC 9.
   15 LATE-ARRIVALS                PIC 9.
```

EMPLOYEE-TABLE に関するキーは、その記入項目に従属し、一方 WEEK-RECORD に関するキーは、その従属記入項目に従属しています。

上記の例では、EMPLOYEE-TABLE の中のレコードは、WAGE-RATE の昇順に並べ、また WAGE-RATE の中では、EMPLOYEE-NO の昇順に並べなければなりません。

ん。WEEK-RECORD 中のレコードは、WEEK-NO の昇順に並べなければなりません。そのように並んでいない場合に任意の SEARCH ALL ステートメントを実行すると、結果は予測できません。

INDEXED BY 句

INDEXED-BY 句は、そのテーブルで使用することができる指標を指定します。そのテーブル・エレメントを参照するために指標付けを使用する場合は、INDEXED BY 句を指定する必要があります。38 ページの『指標名を使用した添え字付け (指標付け)』を参照してください。

指標の値は、指標データ項目の値を保管することによってプログラムへアクセスできるようになります。指標データ項目は、USAGE IS INDEX 文節を含んでいるデータ記述記入項目によってプログラムに記述されます。指標値は、SET ステートメントを実行することによって指標データ項目に移されます。

指標は、通常、テーブルを含むプログラムに関連した静的メモリーで割り振られます。このため、指標は、プログラムに再入したときの、最後に使われた状態になります。ただし、以下の場合、指標は、呼び出しごとに割り振られます。したがって、プログラムに入るたびに、以下のセクションのテーブルの指標に対して値を設定する必要があります。

- ローカル・ストレージ・セクション
- RECURSIVE 属性でコンパイルされるプログラムのリンケージ・セクション

INDEXED BY 句 - 形式



指標名-1

ユーザー定義語の形成規則に従っていなければなりません。少なくとも 1 文字は英字でなければなりません。

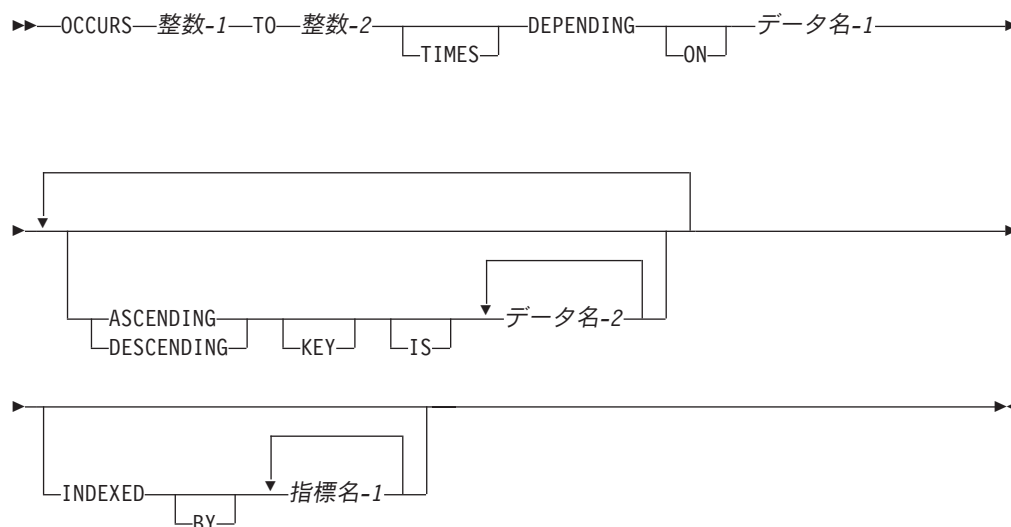
各指標名は、プログラムで使用するためにコンパイラーによって作成される指標を指定します。それらの指標名はデータ名ではなく、COBOL プログラムの他のどこでも識別されません。それらは、このオブジェクト・プログラムだけを使用するための専用の特殊レジスターと見なすことができます。そのため、それらの指標名はデータでもデータ階層の一部でもありません。そのため、おのおのが固有名でなければなりません。

GLOBAL 属性を持つデータ項目に、指標を使ってアクセスされるテーブルが含まれていると、そのテーブルに定義される指標も GLOBAL 属性をもちます。

可変長テーブル

可変長テーブルは、OCCURS 文節の形式 2 を使用して指定されます。

OCCURS 文節 - 形式 2 - 可変長テーブル



サブジェクト項目の長さは固定されています。可変であるのは、そのサブジェクト項目の反復回数だけです。

整数-1

最小のオカレンス数。

整数-1 の値は、ゼロかそれ以上でなければならず、また、整数-2 の値より小さくならない限りなりません。

整数-2

最大オカレンス数。

データ名-1

OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクト、つまり、サブジェクト項目の現行オカレンス数を表す現行値をもった (整数) データ項目を指定します。オカレンス番号がオブジェクトの値を超える項目の内容は、予測できません。

OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクトは、どのテーブルの範囲内のどの記憶位置 (すなわち、テーブルの最初の文字位置からテーブルの最後の文字位置までのすべての記憶位置) も占めてはなりません。

OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクトは、位置が可変でない場合があります。このオブジェクトは、OCCURS DEPENDING ON 文節を含んでいる項目の後に置くことはできません。

グループ項目 (あるいは、従属した OCCURS DEPENDING ON 項目を含んでいるデータ項目、または OCCURS DEPENDING ON 項目の後にあるが、この項目に従属していないデータ項目) を参照するときには、OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクトの値は、整数-1 から整数-2 までの範囲内にならなければなりません。グループの位置が可変でないとするれば、参照されるグループが CALL BY REFERENCE ステートメントで使われているときには、この規則は適用されません。

EXTERNAL 文節の入ったレコード記述記入項目に含まれるデータ記述記入項目に OCCURS 文節を指定するときは、データ名-1 は、同じデータ部に記述された EXTERNAL 属性を持つデータ項目を参照しなければなりません。

データ記述記入項目が GLOBAL 文節の入ったものに従属するときは、データ名-1 はグローバル名でなければならず、同じデータ部に記述されたデータ項目を参照しなければなりません。

従属 OCCURS DEPENDING ON 項目を含むグループ項目が参照される場合、テーブル域のどの部分が処理に使用されるかは、次のように判別されます。

- オブジェクトがグループ外にある場合は、操作の開始時にオブジェクトによって指定されるテーブル域の部分だけが使用されます。
- オブジェクトが同一グループに含まれていて、かつグループ・データ項目が送り出し項目として参照される場合には、操作の開始時にオブジェクトの値によって指定されるテーブル域の部分だけが操作時に使用されます。
- オブジェクトが同一グループに含まれていて、かつグループ・データ項目が受け入れ項目として参照される場合には、操作時にはグループ項目の最大長が使用されます。

可変長テーブルの入ったグループ項目に対して参照変更を加えると、その参照変更で参照されるデータ項目から固有データ項目が作成されます。その参照されるデータ項目の長さは、まず前の規則を適用して判別されます。その後、参照変更の規則が適用され、その固有データ項目の長さが判別されます。

CALL ステートメントの USING 句で引数として可変長テーブルの入ったグループ項目が使用されると、呼び出し先プログラムの立場から見たそのパラメーターのストレージ・サイズは、その引数の渡し方によって異なります。引数が BY REFERENCE で渡されるとき、最大サイズは、呼び出し側プログラム内の引数のデータ記述によって記述されます。引数が BY CONTENT で渡されるとき、グループ項目は送り出し項目とみなされます。

グループ項目の後に非従属項目が続く場合、実際の長さ（最大長ではなく）が使用されます。項目のサブジェクト（あるいは、項目のサブジェクトに従属するデータ項目、または項目のサブジェクトの上位のデータ項目）を参照するときには、OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクトの値は、整数-1 から整数-2 までの範囲内になければなりません。

OCCURS 文節のサブジェクトは、OCCURS 文節を含むデータ項目のデータ名です。OCCURS 文節のサブジェクトがタイプ名に従属する場合があります。OCCURS 文節そのものを除いて、サブジェクトに対して使用されるデータ記述文節は、記述される項目のそれぞれのオカレンスに適用されます。

サブジェクトが SEARCH または USE FOR DEBUGGING 以外のステートメントで使用されているときはいつでも、サブジェクトが REDEFINES 文節のオブジェクトでないかぎり、添え字や指標を付ける必要があります。この場合、サブジェクトはテーブル・エレメントの中の 1 つのオカレンスを指します。

サブジェクトが SEARCH で使用されている場合、USE FOR DEBUGGING ステートメントで使用されている場合、あるいは、サブジェクトが REDEFINES 文節のオ

プロジェクトの場合は、添え字および指標を付けてはなりません。この場合、サブジェクトはテーブル・エレメント全体を表します。

上記の 2 つの制限は LENGTH OF 特殊レジスターには適用されないことに注意してください。

1 つのレコード記述記入項目では、OCCURS DEPENDING ON 文節を含む記入項目の後には、それに従属する項目またはレベル 66 の項目だけしか続けることはできません。

OCCURS DEPENDING ON 文節は、別の OCCURS 文節に従属するものとして指定することはできません。

IBM 拡張

複合 OCCURS DEPENDING ON は、以下のように構成されます。

- 従属項目は OCCURS DEPENDING ON 文節を含むことができます。
- OCCURS DEPENDING ON 文節を含む記入項目の後に、非従属項目を続けることができます。ただし、非従属項目は、OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクトであってはなりません。
- OCCURS DEPENDING ON 文節を含む項目に続く、従属項目または非従属項目の位置は、OCCURS DEPENDING ON オブジェクトの値による影響を受けます。
- OCCURS DEPENDING ON 文節のサブジェクトに従属する記入項目は、OCCURS DEPENDING ON 文節を含むことができます。
- ファイル記述 (FD) 記入項目内で暗黙の再定義が使用される場合、従属レベル項目は OCCURS DEPENDING ON 文節を含むことができます。
- OCCURS DEPENDING ON 文節を含む従属項目を持つテーブルには、INDEXED BY 句を指定することができます。

複合 OCCURS DEPENDING ON について詳しくは 725 ページの『付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

OCCURS 文節に使用するすべてのデータ名は修飾できますが、そのデータ名に添え字または指標を付けることはできません。

OCCURS または OCCURS DEPENDING ON 文節は、次のようなデータ記述記入項目には指定できません。

- レベル番号 01、66、77、または 88 を持つもの。
- 再定義されたデータ項目を記述するもの。(ただし、再定義された項目は、OCCURS 文節を含む項目に従属できます。) 221 ページの『REDEFINES 文節』を参照してください。

ASCENDING/DESCENDING および INDEXED BY 文節については 193 ページの『固定長テーブル』で説明されています。

注: OCCURS DEPENDING ON 文節を使用する場合には、テーブルに含まれるオカレンス数は、16,711,568 を超えてはならず、テーブル・エレメントの長さも

16,711,568 バイトを超えてはならず、さらにテーブル全体の長さも 16,711,568 バイトを超えてはなりません。

IBM 拡張

複合 OCCURS DEPENDING ON は COBOL 85 標準の拡張としてサポートされません。コンパイラーによって許可される複合 ODO の基本形式を以下に示します。

- DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述され、非従属エレメントまたはグループが後に続いているデータ項目 (可変位置項目)。
- DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述され、DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述された非従属データ項目が後に続いているデータ項目 (可変位置テーブル)。
- DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述され、DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述された別のデータ項目内でネストしているデータ項目 (可変長エレメントを持つテーブル)。
- 可変長エレメントを持つテーブルの指標名。

複合 ODO は使用が容易でなく、コードの維持管理を困難にする可能性があります。ディスク・スペースを節約するために使用する場合には 725 ページの『付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON』に示したガイドラインに従ってください。

IBM 拡張 の終り

添え字付け

添え字付けとは、添え字を使用してテーブル参照を行う手法のことです。添え字とは、テーブル・エレメントのオカレンス番号を指定する正の整数値です。

添え字付けは、テーブル内の次元数を使って OCCURS 文節に関連付けられます。たとえば 4 次元のテーブルには 4 つの添え字が必要です。添え字付けは、OCCURS 文節を介して定義された、多次元配列内のエレメントを識別するための COBOL での手法と見なすことができます。

詳細は 36 ページの『添え字付け』を参照してください。

RANGE オプションが指定あるいは暗示される場合には、システムによって添え字の値が有効であることが確認されます。RANGE オプションが活動状態でない場合、添え字の値が有効であることを確認するのはユーザー の責任です。RANGE オプションを使っても、その指標記入項目が有効かどうかをシステムが検査することはありません。指標の値が有効であることを確認するのはユーザー の責任です。

注: CRTCBMOD コマンド、CRTBNDCBL コマンド、および PROCESS ステートメントについての包括的な説明は「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

添え字付けの制約事項

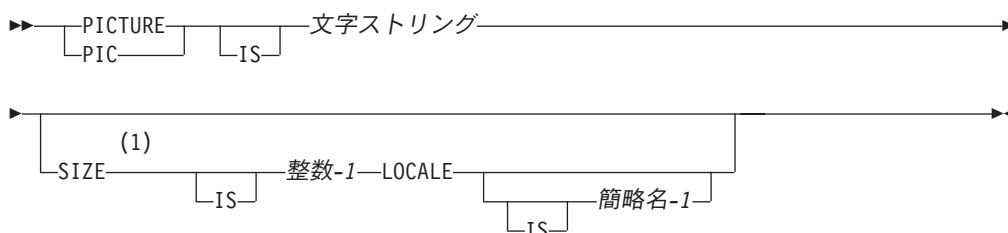
1. データ名を添え字または修飾子として使用するとき、そのデータ名に添え字または指標を付けることはできません。

2. 指標は、PERFORM、SEARCH、または SET ステートメントによってのみ修正できます。
3. 添え字の中でリテラルを使用するときは、そのリテラルは正または符号なしの整数でなければなりません。
4. 相対添え字付けおよび指標付けでリテラルを使用するときは、そのリテラルは符号なしの整数でなければなりません。

PICTURE 文節

PICTURE 文節は、基本項目の一般的な特性や編集上の要件を指定します。

PICTURE 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

PICTURE 文節は、指標データ項目、LIKE 文節のサブジェクト、RENAMES 文節のサブジェクト、または TYPE 文節のサブジェクトを除くすべての基本項目のそれぞれに対して指定する必要があります。

PICTURE 文字ストリングは、最大 90 文字までです。この文字ストリングは、記号として使用される特定の COBOL 文字で構成されます。基本データ項目のカテゴリーは、ロケール句が指定されている場合を除き、これらの文字の可能な組み合わせによって判別されます。PICTURE 文節内の LOCALE 句は、カテゴリーの 1 つである数字編集項目を定義します。

DECIMAL-POINT IS COMMA は、SPECIAL-NAMES 段落で指定されている場合は、PICTURE 文字ストリングおよび数字リテラル内でピリオドとコンマの機能が交換されます。

通貨記号は、円記号 (¥) または SPECIAL-NAMES 段落の CURRENCY SIGN 文節に指定された通貨記号のいずれかによって PICTURE 文字ストリングに示されます。

通貨記号は、通貨ストリングが置かれる 1 つまたは複数の文字位置を表します。

プログラムに複数の通貨記号が定義されている場合、同じ PICTURE 文字ストリング内ではいずれか 1 つの記号だけを繰り返すことができます。

ピクチャー・ストリング内に単一の通貨記号が現れる場合は、固定挿入記号になります。編集項目のサイズは、対応する通貨ストリングに含まれる文字数分増やされます。

PICTURE 文節

複数の同じ通貨記号のストリングがピクチャー・ストリング内に現れる場合は、浮動挿入記号として使用されます。編集項目のサイズは、最初に現れる通貨記号に対応する通貨ストリングに含まれる文字数分、および PICTURE 文字ストリングの追加通貨記号ごとにそれ以降の文字分増やされます。

PICTURE 文節は、次のものには使えません。

- USAGE IS INDEX で記述された項目の記述

IBM 拡張

- 内部浮動小数点 (USAGE IS COMP-1 または USAGE IS COMP-2) データ項目
- USAGE IS POINTER または USAGE IS PROCEDURE-POINTER データ項目
- 日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目
- TYPE 文節を含む項目の記述

IBM 拡張 の終り

LOCALE 句

IBM 拡張

LOCALE 句を PICTURE 文節に指定すると、編集はロケールの指定に従って行われます。次の規則が適用されます。

- BLANK WHEN ZERO 文節はロケール編集よりも高い優先順位を持つ。
- 簡略名-1 が指定されている場合は、項目の編集および編集解除には SPECIAL-NAMES 段落内の簡略名-1 に関連付けられているロケールが使用される。これ以外の場合は現行ロケールが使用されます。

注：編集ステージと編集解除ステージとでロケールを切り替えると、予測不能な結果を生じる可能性があります。項目の編集に使用されるロケールと項目の編集解除に使用されるロケールが同一であることを必ず確認する必要があります。

- 通貨記号 (cs) がピクチャー・ストリングに指定されている場合は、その通貨記号の位置、長さ、および文字ストリングはロケールから判別される。
- 小数点、3 桁ごとの分離文字、およびグループ化の方法はロケールから判別される。
- 小数点の位置合わせおよびゼロへの置き換えは 148 ページの『位置合わせの規則』で説明されている規則に従って行われる。
- PICTURE 文字ストリングに + が指定されている場合は、正数および負数の表示方法はロケールから判別される。
- 送信データは小数点の位置に合わせられ、(必要ならば) 受信データ項目の先頭または末尾の受信文字位置のいずれかにおいて切り捨てあるいはゼロの埋め込みが行われる。このデータに対しては右寄せも行われます。その際、ロケールの指定に従ってグループ化および分離文字の設定が行われます。先行ゼロはブランクに置き換えられます。

フォーマット設定後、PICTURE 文字ストリングに指定した桁数が受け入れ側の項目に合わず、送る側の項目に余分な桁が存在する場合は、左側の桁が切り捨てられ、

オペレーティング・システムのエスケープ・メッセージが発行されます。

IBM 拡張 の終り

PICTURE 文節で使用される記号

PICTURE 文節で使用される各記号の意味は、以下の表の中で定義されています。

- LOCALE 句が指定されていない 場合は 表 13 を参照。
- LOCALE 句が指定されている 場合は 206 ページの表 14 を参照。

PICTURE 文節の各記号を指定する際に守らなければならない順序は、以下の図に示されています。

- 207 ページの図 8 (LOCALE 句が指定されていない場合)
- 208 ページの図 9 (LOCALE 句が指定されている場合)

PICTURE の文節の記号の詳しい説明は図の後にあります。

PICTURE 文字ストリング内の句読点文字は、句読点文字とは見なされず、PICTURE 文字ストリング記号と見なされます。

OPTION オプション・パラメーター値 *NOMONOPIC、または PROCESS ステートメント・オプション NOMONOPIC が指定されている場合、PICTURE 文字ストリングで使用される通貨記号は大文字小文字を区別します。すなわち、PICTURE 記号の A、B、C、D、E、G、N、P、R、S、V、X、および Z の大文字に対応する小文字は、PICTURE 文字ストリングでのそれらの大文字の表現と等価です。その他の小文字は、対応する大文字表現と等価ではありません。

OPTION パラメーター値 *MONOPIC、または PROCESS ステートメント・オプション MONOPIC が指定されている場合、PICTURE 文字ストリング内のすべての英字は大文字に変換されます。

表 13. LOCALE 句が指定されていない場合における PICTURE 文節の記号の意味

記号	意味
A	英字またはスペースだけを入れることができる文字位置。
B	スペースが非 DBCS データで 1 バイト、DBCS データで 2 バイトを占める文字位置。
E	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張</p> <p>外部浮動小数点項目における指数の開始位置のマーク。マークは 1 バイトのストレージを占めます。</p> <p style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</p> </div>

PICTURE 文節

表 13. LOCALE 句が指定されていない場合における PICTURE 文節の記号の意味 (続き)

記号	意味
P	<p>仮想小数点の位取り位置。これは、データ項目内の数に小数点がない場合に仮想小数点の位置を指定するために使用します。位取り位置文字 P は、データ項目のサイズとしてはカウントされません。位取り位置文字は、数字編集項目、あるいは算術オペランドとして現れる項目の最大桁数 (63) を判別する際には、カウントされます。位取り位置文字 P は、PICTURE 文字ストリング内の左端または右端の桁位置に P の連続ストリングとしてのみ記入できます。位取り位置文字 P は仮想小数点を暗黙のうちに示す (一連の P が左端の PICTURE 文字ならば一連の P の左側、P が右端の PICTURE 文字ならば一連の P の右側) ので、仮想小数点記号 V は、PICTURE 記述などの中では、左端または右端のいずれかの文字が冗長となります。</p> <p>PICTURE 文字ストリングに記号 P が入っているデータ項目を参照するある演算においては、データ項目の実際の文字表示よりむしろデータ項目の代数值が使用されます。この代数值は、記号 P により指定される数字位置の代わりにゼロ、および指図されたロケーションに小数点を想定します。値のサイズは、PICTURE 文字ストリングにより表される数字位置の数です。これらの演算は次のうちのいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 数字送り出しオペランドを必要とする演算 • 送り出しオペランドが数字で、その PICTURE 文字ストリングに記号 P が入っている MOVE ステートメント • 送り出しオペランドが数字編集で、その PICTURE 文字ストリングに記号 P が含まれ、受け入れオペランドが数字または数字編集の MOVE ステートメント • 両オペランドが数字である比較演算 <p>その他すべての演算において、記号 P で指定される数字位置は無視され、オペランドのサイズにはカウントされません。</p>
S	<p>演算符号があることを示します。(ただし、演算符号の表現や、また必ずしもその位置を表すものではない。) これは PICTURE ストリングの左端の文字として書かなければなりません。演算符号は、演算に使用される項目の値が正であるか負であるかを示します。関連する SIGN 文節で SEPARATE CHARACTER 句を指定していないかぎり、記号 S は、基本項目のサイズの判別ではカウントされません。ハードウェア命令は符号を使用するので、可能なところでは PICTURE 文節に S を含めてパフォーマンスを向上させることができます。</p>
V	<p>仮想小数点の位置を示します。これは文字ストリング内に、1 回だけ書くことができます。V は、文字位置を表すものではないため、基本項目のサイズとしてはカウントされません。仮想小数点がストリングの右端記号の右側にあるとき、V は必要ありません。</p>
X	<p>EBCDIC 文字セットから任意の使用可能な文字を入れることができる文字位置。</p>
Z	<p>先行数字位置。その位置にゼロが入ると、そのゼロはスペース文字に置き換えられます。各 Z は項目のサイズとしてカウントされます。</p>
9	<p>数字が入る文字位置で、項目のサイズとしてカウントされます。</p>
1	<p style="text-align: center;">————— IBM 拡張 —————</p> <p>ブール値の B"1" または B"0" を含む文字位置。DISPLAY として明示的あるいは暗黙に定義して使用しなければなりません。</p> <p style="text-align: center;">————— IBM 拡張 の終り —————</p>
0	<p>数字のゼロが挿入される文字位置。各ゼロは項目のサイズとしてカウントされます。</p>
/	<p>スラッシュが挿入される文字位置。各スラッシュは、項目のサイズとしてカウントされます。</p>

表 13. LOCALE 句が指定されていない場合における PICTURE 文節の記号の意味 (続き)

記号	意味
,	コンマが挿入される文字位置。この文字は項目のサイズとしてカウントされます。コンマ挿入文字が PICTURE 文字ストリングの最後の記号の場合には、PICTURE 文節がデータ記述記入項目の最後の文節で、直後に分離文字ピリオドが続かなければなりません。
.	位置合わせ用の小数点を表す編集記号。さらに、これはピリオドが挿入される文字位置を表します。この文字は項目のサイズとしてカウントされます。ピリオド挿入文字が、PICTURE 文字ストリング内の最後の記号である場合には、PICTURE 文節がデータ記述記入項目の最後の文節であり、直後に分離文字ピリオドが続かなければなりません。 注: ある種のプログラムでは、SPECIAL-NAMES 段落で DECIMAL-POINT IS COMMA 文節が指定されている場合、ピリオドとコンマの機能が交換されます。その場合は、PICTURE 文節の中にピリオドやコンマがどこにあったとしても、ピリオドの規則がコンマに適用され、コンマの規則がピリオドに適用されます。
+ - CR DB	編集符号制御記号。それぞれ、編集符号制御記号が入られる文字位置を表します。1 つの文字ストリングの中でこれらの記号を併用することはできません。記号の中で使用された各文字は、データ項目のサイズを判別する際にカウントされます。
*	金額変造防止シンボル。これは先頭数字位置であり、この位置にゼロが含まれているときにはアスタリスクが入られます。それぞれのアスタリスク (*) は、項目のサイズとしてカウントされます。
\$	通貨記号が入る文字位置。文字ストリング内の通貨記号は、記号 ¥ で表されるか、または環境部の SPECIAL-NAMES 段落の CURRENCY SIGN 文節で指定された単一の文字で表されます。通貨記号は、項目のサイズとしてカウントされます。
G	<p style="text-align: center;">————— IBM 拡張 —————</p> <p>DBCS 位置。ストレージの 2 バイトを占めます。1 文字としてカウントされます。非 DBCS 項目には指定できません。USAGE は、DISPLAY-1 として明示的に定義しなければなりません。</p> <p style="text-align: center;">————— IBM 拡張 の終り —————</p>
N	<p style="text-align: center;">————— IBM 拡張 —————</p> <ul style="list-style-type: none"> • 使用法が NATIONAL として明示的に定義されている場合には、国別 (UCS-2 またはユニコード) 文字位置。 • 使用法が DISPLAY-1 として明示的に定義されている場合には、1 文字として 2 バイトのストレージを占有する DBCS 位置。 • 基本項目に、またはデータ項目が属しているグループに、USAGE 文節が指定されていない場合には、以下の規則が適用されます。 <ul style="list-style-type: none"> – NATIONAL コンパイラー・オプションが有効であれば、USAGE NATIONAL が暗黙指定されます。 – その他の場合は、USAGE DISPLAY-1 が暗黙指定されます。 <p style="text-align: center;">————— IBM 拡張 の終り —————</p>

PICTURE 文節

表 14. LOCALE 句が指定されている場合における PICTURE 文節の記号の意味

記号	意味
9	数字が入る文字位置であり、編集項目内に含めることができる数字としてカウントされます。
.	位置合わせ用の小数点を表す編集記号。ピリオド挿入文字が、PICTURE 文字ストリング内の最後の記号である場合には、PICTURE 文節がデータ記述記入項目の最後の文節であり、直後に分離文字ピリオドが続かなければなりません。実行時に使用される小数点文字はロケールからとられます。 注: ある種のプログラムでは、SPECIAL-NAMES 段落で DECIMAL-POINT IS COMMA 文節が指定されている場合、ピリオドとコンマの機能が交換されます。その場合は、PICTURE 文節の中にピリオドやコンマがどこにあったとしても、ピリオドの規則がコンマに適用され、コンマの規則がピリオドに適用されます。
+	編集符号制御記号。記号 + は、指定されたロケールに従って編集項目に符号を付けることを指示します。記号 + が指定されていない場合は、編集項目は符号なしとなります。
cs	文字ストリング内の通貨記号は、指定されたロケールと関連付けられている通貨ストリングを編集項目に含めることを指示します。

207 ページの図 8 は、LOCALE 句を指定しない 場合において、PICTURE 文節の各記号を指定する際に従う必要のある順序を示しています。図の最後の注を参照してください。 208 ページの図 9 は、LOCALE 句を指定する 場合において、PICTURE 文節の各記号を指定する際に従う必要のある順序を示しています。

最初の記号 2番目の記号	固定挿入記号										浮動挿入記号					その他の記号								
	B	0	/	,	.	{+}	{+}	{CR DB}	\$	E	{Z*}	{Z*}	{+}	{+}	\$	\$	9	A X	S	V	P	P	1	G
固定挿入記号	B	X	X	X	X	X	X		X		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X			X
	0	X	X	X	X	X	X		X		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X			
	/	X	X	X	X	X	X		X		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X			
	,	X	X	X	X	X	X		X		X	X	X	X	X	X	X			X	X			
	.	X	X	X	X		X		X		X		X		X		X							
	{+}																							
	{+}	X	X	X	X	X			X	X	X	X			X	X	X			X	X	X		
	{CR DB}	X	X	X	X	X			X		X	X			X	X	X			X	X	X		
	\$						X																	
	E				X	X											X			X				
浮動挿入記号	{Z*}	X	X	X	X			X		X														
	{Z*}	X	X	X	X	X		X		X	X								X		X			
	{+}	X	X	X	X			X				X												
	{+}	X	X	X	X	X		X				X	X						X		X			
	\$	X	X	X	X		X								X									
	\$	X	X	X	X	X	X								X	X			X		X			
その他の記号	9	X	X	X	X	X	X		X		X		X	X	X	X	X	X	X	X	X			
	A	X	X	X													X	X						
	X																							
	S																							
	V	X	X	X	X		X		X		X		X		X		X		X		X			
	P	X	X	X	X		X		X		X		X		X		X		X		X			
	P						X		X										X	X		X		
	1																							
G	X																						X	
N																								X

図 8. LOCALE 句を指定しない場合における PICTURE 文節の記号の順序

図 8 の注

1. 交差するところにある X は、最上段にある記号が、ある文字ストリングの中で、左欄にある記号の左側であればどこにあってもよいことを示します。
2. ¥ 文字は、該当する文字セットで表されますが、通貨記号のデフォルト値です。

PICTURE 文節

3. A、X、Z、9、または * 記号のうちの少なくとも 1 つ、または +、-、あるいは ¥ 記号のうちの少なくとも 2 つが PICTURE スtring になければなりません。

IBM 拡張

4. 記号 G または N は、PICTURE 文字Stringに単独で現れます。

IBM 拡張 の終り

5. 固定挿入記号 + と -、浮動挿入記号 Z、*、+、-、\$、および記号 P は、上記の PICTURE 文字優先テーブルに 2 回現れています。各記号の最左端の列と最上段は、小数点の左側にあるときの用法を示しています。表の中で 2 番目に出てくる記号は、それぞれ小数点の右側にあるときの用法を示しています。中括弧 ({}) は相互に排他的な項目を示しています。
6. 中括弧 ({}) は、相互に排他的な項目を示しています。

IBM 拡張

最初の記号 2 番目の 記号		記号			
		9	CS	.	+
記号	9	X	X	X	X
	CS				X
	.	X	X		X
	+				

図9. LOCALE 句を指定する場合における PICTURE 文節の記号の順序

IBM 拡張 の終り

文字Stringの表現法

次の記号は、1 つの PICTURE 文字Stringで複数回表すことができます。

A B P X Z 9 0 / , + - * \$

IBM 拡張

G N

IBM 拡張 の終り

次の記号は、1 つの PICTURE 文字Stringで 1 回だけ表すことができます。

S V . CR DB

IBM 拡張
E 1
IBM 拡張 の終り

LOCALE 句が指定されている場合に複数回現れることができる記号は 9 だけです。LOCALE 句が指定されている場合に 1 つの PICTURE 文字ストリング内で 1 回だけ現れることができる記号を以下に示します。

. + cs

PICTURE 文字ストリング内に複数回現れることができる記号のすぐ後にある小括弧で囲まれた整数は、その記号が連続発生する回数を指定します。整数は、定数名によって指定される場合があります。連続発生する回数は、16 711 568 回を超えてはなりません。

たとえば、次の 2 つの PICTURE 文節の指定は同等です。

PICTURE IS \$99999.99CR

PICTURE IS \$9(5).9(2)CR

上記の記号が文字ストリングに現れるごとに、それはその文字または許容される文字セットがデータ項目に 1 回現れることを示します。

データ・カテゴリーと PICTURE の規則

PICTURE 記号の可能な組み合わせによって、項目のデータ・カテゴリーが決まります。

- 英字項目
- 数字項目
- 数字編集項目
- 英数字項目
- 英数字編集項目

IBM 拡張
<ul style="list-style-type: none"> • ブール項目 • DBCS 項目 • DBCS 編集項目 • 国別項目 • 外部浮動小数点項目
IBM 拡張 の終り

注: LOCALE 句が PICTURE 文節に指定されている場合は、PICTURE 文節によって定義されるデータの категорияは数字編集のみとなります。

英字項目

- PICTURE 文字ストリングには記号 A だけ含むことができます。

- 標準データ・フォーマットの項目の内容は、英字とスペース文字の中の任意の文字で構成されていなければなりません。
- USAGE DISPLAY を指定するか、または暗黙指定する必要があります。
- 関連する VALUE 文節には、英字だけ、または表意定数 SPACE が入っている非数字リテラルを指定しなければなりません。

数字項目

- 数字項目のタイプには、次のものがあります。
 - 2 進数
 - パック 10 進数 (内部 10 進数)
 - ゾーン 10 進数 (外部 10 進数)
- PICTURE 文字ストリングには、記号 9、P、S、および V を入れることができます。
- 数字の桁数は、1 以上 18 以下でなければなりません。

IBM 拡張

- パック 10 進数およびゾーン 10 進数の項目の場合、数字の桁数は 1 ~ 63 の範囲にできます。

IBM 拡張 の終り

- 符号なしの場合、標準データ・フォーマットの項目の内容には、アラビア数字 0 ~ 9 の組み合わせが入っていなければなりません。符号付きの場合、+、-、あるいは演算符号のその他の表現を入れることができます。
- 項目の USAGE は、DISPLAY、BINARY、COMPUTATIONAL、または PACKED-DECIMAL とすることができます。

IBM 拡張

- 項目の USAGE は、COMPUTATIONAL-3 または COMPUTATIONAL-4 とすることができます。

IBM 拡張 の終り

- 基本数字項目に関連付けられている VALUE 文節は、数字リテラルまたは表意定数 ZERO を指定しなければなりません。基本数字項目から成るグループ項目に関連付けられている VALUE 文節は、非数字リテラルまたは表意定数を指定しなければなりません。なぜなら、そのようなグループは英数字であると見なされるからです。上記のどちらの場合でも、リテラルは指定されたとおりに扱われ、編集は行われません。

数字項目の例を示します。

PICTURE	有効な値の範囲
9999	0 through 9999
S99	-99 through +99
S999V9	-999.9 through +999.9
PPP999	0 through .000999
S999PPP	-1000 through -999000 and +1000 through +999000 or zero

数字編集項目

- PICTURE 文字ストリングには次の記号を入れることができます。

B P V Z 9 0 / , . + - CR DB * \$

入れられる記号の組み合わせ方は、PICTURE 文節の記号の許される順番 (207 ページの図 8 を参照) および編集規則 (214 ページの『PICTURE 文節の編集』を参照) で決まります。その他に、次の規則も適用されます。

- BLANK WHEN ZERO 文節を項目に指定するか、ストリングに次の記号のうちの少なくとも 1 つが含まれていなければなりません。

B / Z 0 , . * + - CR DB \$

- 文字ストリングで表される数字の桁数は、1 ~ 18 の範囲になければなりません。

IBM 拡張

- 文字ストリングで表される数字の桁数は、1 ~ 63 の範囲になければなりません。

IBM 拡張 の終り

- 結果的な文字位置の全体の長さは、127 以下でなければなりません。
- 標準データ・フォーマットで数字を表す文字位置の内容は、10 個のアラビア数字のいずれかでなければなりません。
- USAGE DISPLAY を指定するか、または暗黙指定する必要があります。
- 関連付けられている VALUE 文節では、非数字リテラルまたは表意定数を指定しなければなりません。リテラルは指定したとおりに扱われ、編集は行われません。

LOCALE 句を指定する場合:

IBM 拡張

- PICTURE 文字ストリングには次の記号を入れることができます。

9 . + cs (LOCALE 用通貨記号)

これらの記号のうち、次のものは 1 回だけしか使用することができません。

. + cs

- 使用可能な文字位置の数は SIZE 句内の整数-1 で指定します。
- USAGE DISPLAY を指定するか、または暗黙指定する必要があります。
- 関連付けられている VALUE 文節では、非数字リテラルまたは表意定数を指定しなければなりません。リテラルは指定したとおりに扱われ、編集は行われません。
- 受信項目が数字編集データ項目であり、PICTURE 文節の LOCALE 句がそのデータ記述記入項目内に指定されている場合、そのデータは 202 ページの『LOCALE 句』で説明されている規則に従って位置合わせされます。

IBM 拡張 の終り

英数字項目

- PICTURE 文字ストリングは、次のいずれかで構成する必要があります。
 - 記号 X
 - 記号 A、X、および 9 の組み合わせ (すべて A またはすべて 9 の入った文字ストリングは、英数字項目を定義しません)。
- 項目は、文字ストリングが記号 X のみを含んでいるかのように扱われます。
 - 標準データ・フォーマットの項目の内容は、EBCDIC 文字セットで許容される任意の文字とすることができます。
 - USAGE DISPLAY を指定するか、または暗黙指定する必要があります。
 - 関連付けられている VALUE 文節では、非数字リテラルまたは表意定数を指定しなければなりません。

英数字編集項目

- PICTURE 文字ストリングには次の記号を入れることができます。
A X 9 B 0 /
- ストリングは、少なくとも A または X が 1 つと、少なくとも 1 つの B または 0 (ゼロ) または / が含まれていなければなりません。
- 標準データ・フォーマットの項目の内容は、EBCDIC 文字セットで許容される任意の文字とすることができます。
- 結果的な文字位置の全体の長さは、127 以下でなければなりません。
- USAGE DISPLAY を指定するか、または暗黙指定する必要があります。
- 関連付けられている VALUE 文節では、非数字リテラルまたは表意定数を指定しなければなりません。リテラルは指定したとおりに扱われ、編集は行われません。

ブール項目

IBM 拡張

次の規則が適用されます。

1. PICTURE 文字ストリングには、記号 1 だけ含めることができます。
2. ただ 1 つの文字 1 が指定できます。
3. 項目の USAGE は、DISPLAY だけになり得ます。
4. 関連する VALUE 文節では、ブール・リテラル (B"1" または B"0") あるいはゼロを指定しなければなりません。
5. 次の文節は、ブール項目に指定できません。
 - SIGN 文節
 - BLANK WHEN ZERO 文節
 - ASCENDING/DESCENDING KEY 文節
6. INDICATOR 文節を指定できます。

(標識についての詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。)

IBM 拡張 の終り

DBCS 項目**IBM 拡張**

1. PICTURE 文字ストリングには、記号 G または N を含むことができます。
2. G または N のおのおのは、単一の DBCS 文字位置 (2 バイト) を表現します。
3. PICTURE 文節記号 G を使用した場合、USAGE DISPLAY-1 を指定しなければなりません。
4. PICTURE 文節記号 N を使用した場合、USAGE DISPLAY-1 を暗黙的または明示的に指定しなければなりません。
5. 関連する VALUE 文節は、DBCS リテラルまたは表意定数 SPACE/SPACES を指定しなければなりません。

IBM 拡張 の終り**DBCS 編集項目****IBM 拡張**

1. PICTURE 文字ストリングは、G および B と少なくともおのおの 1 つとの組み合わせです。
2. G および B のおのおのは、単一の DBCS 文字位置 (2 バイト) を表現します。
3. USAGE DISPLAY-1 を指定しなければなりません。
4. 関連する VALUE 文節は、DBCS リテラルまたは表意定数 SPACE/SPACES を指定しなければなりません。

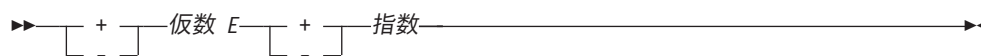
IBM 拡張 の終り**国別項目****IBM 拡張**

1. PICTURE 文字ストリングは、記号 N を含むことができます。
2. 項目の内容は UCS-2 文字でなくてはならず、複数のエンコード単位を必要とする文字であってははいけません。
3. 各 N は単一の UCS-2 文字を表します。
4. PICTURE 文節記号 N を使用した場合、USAGE NATIONAL を暗黙的または明示的に指定しなければなりません。
5. 関連する VALUE 文節は、国別 16 進リテラルまたは表意定数 SPACE/SPACES を指定しなければなりません。

IBM 拡張 の終り**外部浮動小数点項目****IBM 拡張**

- PICTURE ストリングは次の形式に従わなくてはなりません。

形式



+ または -

符号文字は、仮数および指数の直前にはなりません。+ 符号は、正の値を表すために正符号が出力で使用されていることを示し、負符号が負の値を表していることを示しています。- 符号は、正の値を表すために空白が出力で使用されていることを示し、負符号が負の値を表していることを示しています。各符号桁は 1 バイトのストレージを占めます。

仮数

仮数には記号を入れることができます。

9 . V

実小数点はピリオド (.) で表示され、仮想小数点は V で表示されます。仮数には、実小数点または仮想小数点のいずれかが存在しなければなりません。小数点は、先頭にあっても、途中にあっても、最後にあってもかまいません。仮数には 1 ~ 16 桁の数字を入れることができます。 . および V は、この数字の桁数としてはカウントされません。

E 仮数と指数の区切りを示すために使用されます。これは必要です。

指数

指数は記号 99 または 999 で構成されている必要があります。

- 文節 OCCURS、REDEFINES、LIKE、RENAMES、および TYPEDEF は外部浮動小数点項目と関連付けることができます。
- SIGN 文節は、文書として受け入れられ、その符号の表示に対してどのような影響も与えません。
- SYNCHRONIZED 文節は、文書として扱われます。
- 次の文節は、外部浮動小数点項目に指定できません。
 - BLANK WHEN ZERO
 - JUSTIFIED
 - VALUE

IBM 拡張 の終り

PICTURE 文節の編集

PICTURE 文節の中で編集を行う一般的な方法が 2 つあります。

- 挿入による編集
 - 単純挿入
 - 特別挿入
 - 固定挿入
 - 浮動挿入
- 消去と置き換えによる編集
 - アスタリスクを使ったゼロの消去と置き換え
 - スペースを使ったゼロの消去と置き換え

項目に許容される編集のタイプは、**データ・カテゴリー**によって異なります。各カテゴリーに有効な編集のタイプが以下に示されています。

表 15. データ・カテゴリーに有効な編集

カテゴリー	編集のタイプ
英字	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張</div> ブール </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</div> </div>	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張</div> DBCS </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</div> </div>	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張</div> 国別 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</div> </div>	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張</div> DBCS 編集 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</div> </div>	単純挿入
数字	なし
英数字	なし
英数字編集	単純挿入
数字編集	すべて
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張</div> 外部浮動小数点 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</div> </div>	特別挿入

単純挿入による編集

この編集タイプは、英数字編集項目および数字編集項目に有効です。

IBM 拡張

この編集タイプは、DBCS 編集項目に有効です。

IBM 拡張 の終り

各挿入記号は、項目のサイズとしてカウントされ、それに同等の文字が挿入される項目内の位置を表します。

表 16. 単純挿入による編集 - 各データ・カテゴリーごとの正しい挿入記号

カテゴリー	正しい挿入記号
英字	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張</p> <p>ブール</p> <p style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</p> </div>	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張</p> <p>DBCS</p> <p style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</p> </div>	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張</p> <p>国別</p> <p style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</p> </div>	なし
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張</p> <p>DBCS 編集</p> <p style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</p> </div>	B
数字	なし
英数字	なし
英数字編集	B 0 / - . , &
数字編集	B 0 / ,

単純挿入による編集の例

PICTURE	データの値	編集結果
X(10)/XX	ALPHANUMER01	ALPHANUMER/01
X(5)BX(7)	ALPHANUMERIC	ALPHA NUMERIC

99,B999,B000	1234	01, 234, 000
99,999	12345	12,345
GGBBGG	D1D2D3D4	D1D2 D3D4

特別挿入による編集

このタイプの編集は、次の項目に対してのみ有効です。

- 数字編集項目

IBM 拡張
<ul style="list-style-type: none"> • 外部浮動小数点項目
IBM 拡張 の終り

ピリオド (.) は特別挿入記号ですが、位置合わせに使う実小数点も表します。

ピリオド挿入記号は、項目のサイズとしてカウントされ、実小数点が挿入される項目内の位置を表します。

1 つの PICTURE 文字ストリングの中に、実小数点と、仮想小数点としての記号 V の両方ではなく、いずれか 1 つを指定しなければなりません。

特別挿入による編集の例

PICTURE	データの値	編集結果
999.99	1.234	001.23
999.99	12.34	012.34
999.99	123.45	123.45
999.99	1234.5	234.50
+999.99E+99	12345	+123.45E+02

固定挿入による編集

このタイプの編集は、数字編集項目に対してのみ有効です。次の挿入記号を使用します。

- 通貨記号 (たとえば ¥)
- + - CR DB (編集符号制御記号)

固定挿入による編集では、1 つの PICTURE 文字ストリングの中には 1 つの通貨記号と 1 つの編集符号制御記号だけを指定できます。

通貨記号は、通貨符号が表示される位置を表します。通貨符号を通貨記号自体にしたり、SPECIAL-NAMES 段落の CURRENCY SIGN 文節に指定されている長さの 1 文字または複数の文字の通貨ストリングにしたりできます。編集項目のサイズは、対応する通貨ストリングに含まれる文字数分増やされます。

+ または - 記号が前に付いている場合を除き、通貨記号 (¥) は文字ストリングの最初の文字でなければなりません。

+ または - を記号として使用する場合、それは文字ストリングの最初かあるいは最後の文字でなければなりません。

PICTURE 文節

CR または DB を記号として使用する場合、それは文字ストリングの右端の 2 文字の位置を占めなければなりません。これらの 2 文字位置に記号 CR または DB が含まれる場合には、大文字が挿入文字です。

編集符号制御記号によって得られる結果は、次に示すように、データ項目の値に応じて異なります。

PICTURE	結果:	結果:
PICTURE 内	データ項目	データ項目
文字ストリング	正またはゼロ	負
+	+	-
-	スペース	-
CR	2 スペース	CR
DB	2 spaces	DB

固定挿入による編集の例です。

PICTURE	データの値	編集結果
999.99+	+6555.556	555.55+
+9999.99	-6555.555	-6555.55
9999.99	+1234.56	1234.56
\$999.99	-123.45	\$123.45
U999.99	-123.45	EUR123.45 1
-\$999.99	-123.456	-\$123.45
-u999.99	-123.456	-USD123.45 2
-\$999.99	+123.456	\$123.45
\$9999.99CR	+123.45	\$0123.45
\$9999.99DB	-123.45	\$0123.45DB

1 通貨符号が次のように定義されている場合: CURRENCY SIGN IS "EUR"
PICTURE SYMBOL "U"

2 通貨符号が次のように定義されている場合: CURRENCY SIGN IS "USD"
PICTURE SYMBOL "u"

注: 符号を切り捨てると、貸方として負の金額が示されることに注意してください。

浮動挿入による編集

このタイプの編集は、数字編集項目に対してのみ有効です。次の記号を使用します。

- 通貨記号 (たとえば ¥)
- + -

1 つの PICTURE 文字ストリングの中では、これらの記号は浮動挿入文字として同時に指定することはできません。

浮動挿入による編集は、PICTURE 文字ストリングに連続した複数の浮動挿入記号を組み込むことによって指定されます。

通貨記号は通貨符号を表します。通貨符号は通貨記号自体にしたり、SPECIAL-NAMES 段落の CURRENCY SIGN 文節に指定されている長さの 1 文字または複数の文字の通貨ストリングにしたりできます。編集項目のサイズは、最初に現れる通貨記号に対応する通貨ストリングに含まれる文字数分、および PICTURE 文字ストリングの追加通貨記号ごとにそれ以降の文字分増やされます。

浮動挿入記号が単一文字を表す場合には、この記号を使用して、対応する文字が挿入されるすべての文字位置を表します。文字ストリング内の左端の浮動挿入記号は、そのデータ項目の中に文字が現れる左端の限界を表します。右端の浮動挿入記号は、文字が現れる右端の限界を表します。

浮動挿入記号が複数文字の通貨ストリングを表す場合には、この記号を使用して、通貨ストリングの最終文字が挿入されるすべての位置を表します。文字ストリング内の左端の浮動挿入記号は、そのデータ項目の中に通貨ストリングの最終文字が現れる左端の限界を表します。右端の浮動挿入記号は、通貨ストリングの最終文字が現れる右端の限界を表します。

文字ストリングの左端から 2 番目の浮動挿入記号は、データ項目の中で数字データが現れる左端の限界を表します。この限界の右端にある、または右端の隣の浮動挿入記号は、数字位置を表します。これは、ゼロ以外の数字が前に付いた数字で始まる数値データによって置き換えることができます。

浮動挿入記号のストリング内か、またはそのすぐ右側にある単純挿入記号 (B 0 / .) は、浮動文字ストリングの一部と見なされます。ピリオド (.) の特別挿入記号が浮動ストリングに入っていると、文字ストリングの一部と見なされます。

PICTURE 文字ストリングでは、浮動挿入による編集を表す方法は 2 とおりあります。それにより、次のように編集が行われます。

1. 小数点の左端にある任意の、またはすべての先行数字位置を浮動挿入記号で表します。編集が行われると、データ内の最初の非ゼロ数字または小数点 (この 2 つのうち、より左側にある方) のすぐ左に、単一の浮動符号挿入記号 (+ または -) あるいは通貨符号が 1 つ置かれます。挿入記号または通貨記号の左側の未使用の位置はスペースで埋められます。
2. すべての数字位置を浮動挿入記号で表します。編集が行われると、次のようになります。
 - データの値がゼロならば、データ項目全体にスペースが入ります。
 - データの値がゼロでなければ、結果は規則 1 の場合と同じになります。

切り捨てが行われるのを避けるために、PICTURE 文字ストリングの最小サイズは、次の数の合計でなければなりません。

- 送り出し項目の文字位置の数
- 受け入れ項目の固定挿入の記号の数
- 浮動挿入記号の文字の数

浮動挿入による編集の例です。

PICTURE	データの値	編集結果
\$\$\$\$.99	.123	\$.12
\$\$\$9.99	.12	\$0.12
,\$\$\$,999.99	-1234.56	\$1,234.56
U,UUU,UU9.99-	-1234.56	EUR1,234.56-
u,uuu,uu9.99	1234.56	USD1,234.56
+,+++ ,999.99	-123456.789	-123,456.78
\$\$,\$\$\$,\$\$\$.99CR	-1234567	\$1,234,567.00CR
++,+++,+++.+++	0000.00	

注: 符号を切り捨てると、貸方として負の金額が示されることに注意してください。

ゼロの消去と置き換えによる編集

このタイプの編集は、数字編集項目に対してのみ有効です。ゼロ消去による編集では、記号 Z と * を使用します。これらの記号は、1 つの PICTURE 文字ストリングにおいては相互に排他的です。

次の記号は、1 つの PICTURE 文字ストリングの中では浮動記号として同時に指定することはできません。

Z * + - 通貨記号 (たとえば, \$)

ゼロ消去および置き換えによる編集を指定するには、許容されている記号を 1 つまたは複数含むストリングを使用して、ゼロ消去と置き換えによる編集を行うことのできる左端の文字位置を表します。

浮動編集記号のストリング内か、またはそのすぐ右側にある単純挿入記号 (B 0 /、) は、そのストリングの一部と見なされます。ピリオド (.) の特別挿入記号が浮動編集ストリングに入っていると、文字ストリングの一部と見なされます。

PICTURE 文字ストリングでは、ゼロ消去を表す方法は 2 とおりあります。それにより、次のように編集が行われます。

- 小数点の左側にある任意の、またはすべての先行数字位置を消去記号で表します。編集が行われると、消去記号と同じ文字位置に現れるデータ内の先行ゼロは、置き換え文字で置き換えられます。消去は、次の文字のうち、最も左側にある文字で終わります。
 - 消去記号に対応しない文字
 - ゼロ以外のデータが入っている文字
 - 小数点
- PICTURE 文字ストリング内のすべての数字位置を消去記号で表します。編集が行われると、データの値がゼロでなければ、結果は前述の規則の場合と同じです。データの値がゼロのときは、次のようになります。
 - Z が指定されていれば、データ項目全体にスペースが入ります。
 - * が指定されていれば、データ項目全体 (実小数点は除く) にアスタリスクが入ります。

注: 同じ記入項目に、消去記号としてのアスタリスク (*) と BLANK WHEN ZERO 文節の両方を指定してはなりません。

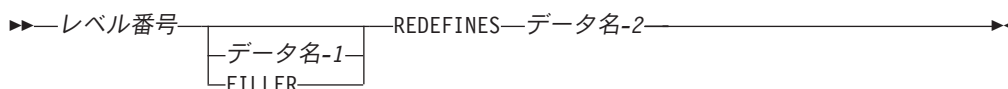
ゼロ消去と置き換えによる編集の例です。

PICTURE	データの値	編集結果
****.**	0000.00	****.**
ZZZZ.ZZ	0000.00	
ZZZZ.99	0000.00	.00
****.99	0000.00	****.00
ZZ99.99	0000.00	00.00
Z,ZZZ.ZZ+	+123.456	123.45+
*,***.**+	-123.45	**123.45-
,,***.**	+12345678.9	12,345,678.90+
\$Z,ZZZ,ZZZ.ZZCR	+12345.67	\$ 12,345.67
\$B*,***,**.**BDB	-12345.67	\$ ***12,345.67 DB

REDEFINES 文節

REDEFINES 文節によって、異なるデータ記述記入項目を使って、同じコンピューター・ストレージ域を記述できます。

REDEFINES 文節 - 形式



REDEFINES 文節を指定する場合は、データ名-1 または FILLER に続く最初の記入項目にしなければなりません。データ名-1 または FILLER を指定しない場合には、REDEFINES 文節は、レベル番号に続く最初の記入項目にしなければなりません。記述するデータ項目は、FILLER が指定されているのと同様に扱われます。

データ名-1 およびデータ名-2 のレベル番号は同じでなければならず、レベル 66 またはレベル 88 であってはなりません。

データ名-1/FILLER

同じ区域に関する代替記述を識別します。これは再定義する項目または REDEFINES サブジェクトです。

データ名-2

再定義される項目または REDEFINES オブジェクトです。これは、REDEFINES 文節のサブジェクトであるデータ名-1 と対照的です。

IBM 拡張

データ名-1 およびデータ名-2 のどちらも、ポインター、プロシージャ・ポインター、外部浮動小数点データ項目または内部浮動小数点データ項目、DBCS 項目、国別項目、日付項目、時刻項目、またはタイム・スタンプ項目を指定できます。

IBM 拡張 の終り

REDEFINES 文節をコーディングするときは、次のような規則が適用されます。

FD 記入項目に従属する複数のレベル 01 記入項目を書くと (さらにそのレベル 01 記入項目がタイプ名ではない場合は)、暗黙の再定義と呼ばれる条件が生じます。すなわち、2 番目のレベル 01 記入項目は、最初の記入項目に割り当てられた記憶を暗黙のうちに再定義します。このようなレベル 01 記入項目の中では REDEFINES 文節および TYPE 文節を指定してはなりません。さらに、TYPE 文節は、レベル 01 記入項目に従属するいかなる項目の中でも指定してはなりません。

再定義プロセス

再定義は、データ名-1 から始まり、データ名-1 のレベル番号と同じかそれより低いレベル番号が検出された時点で終了します。データ名-1 とデータ名-2 のレベル番号の間には、それら 2 つより数字の上で低いレベル番号を持つ記入項目があってはなりません。たとえば、次のとおりです。

REDEFINES 文節

```
05  A PICTURE X(6).
05  B REDEFINES A.
    10 B-1          PICTURE X(2).
    10 B-2          PICTURE 9(4).
05  C              PICTURE 99V99.
```

この例では、A が再定義される項目で、B が再定義する項目です。再定義は B から始まって、2 つの従属項目 B-1 と B-2 を含んでいます。レベル 05 の項目 C を検出すると、再定義が終了します。

再定義される項目のデータ記述記入項目は、OCCURS 文節を含むことができません。しかし、再定義される項目は、データ記述記入項目に OCCURS 文節を含んでいる項目に従属することはできます。この場合、REDEFINES 文節内の再定義される項目への参照は、添え字付けされてはなりません。元の項目、再定義項目、およびこれらの項目に従属するすべての項目は、OCCURS DEPENDING ON 文節を含むことができません。

REDEFINES 文節の入ったデータ記述記入項目に GLOBAL 文節を使うと、その文節のサブジェクトだけがグローバル属性をもちます。EXTERNAL 文節は、REDEFINES 文節と同じデータ記述記入項目に指定してはなりません。オブジェクトが GLOBAL または EXTERNAL であれば、サブジェクトは属性を継承しません。

データ名-1 (再定義する項目) はデータ名-2 (再定義される項目) より小さくてもかまいません。データ名-1 (再定義する項目) がデータ名-2 (再定義される項目) より大きくてもかまわないのは、再定義される項目が 01 のレベル番号で指定され、外部データ・レコードであると宣言されていない場合だけです。

同じ記憶域を何回でも再定義できます。その記憶域の新しい記述を与える項目は同じセクションになくなくてはならず、再定義される記憶域の直後になければならず、新しい文字位置を定義する項目を間にはさんではなりません。複数の再定義がある場合、それらはすべてのその記憶域を定義した元の項目のデータ名を使用しなければなりません。たとえば、次のとおりです。

```
05  A              PICTURE 9999.
05  B REDEFINES A  PICTURE 9V999.
05  C REDEFINES A  PICTURE 99V99.
```

再定義する項目 (データ名-1 によって識別される)、および従属する項目には、VALUE 文節を含めてはなりません再定義する記入項目に TYPEDEF 文節を含めることはできません。再定義する記入項目、再定義される記入項目、および各種の従属記入項目には TYPE 文節を入れてはなりません。

REDEFINES 文節についての考慮事項

ある区域内のデータ項目を、その長さを変えずに再定義できます。たとえば、次のとおりです。

```
05  NAME-2.
    10 SALARY          PICTURE XXX.
    10 SO-SEC-NO      PICTURE X(9).
    10 MONTH          PICTURE XX.
05  NAME-1 REDEFINES NAME-2.
    10 WAGE           PICTURE XXX.
    10 EMP-NO        PICTURE X(9).
    10 YEAR          PICTURE XX.
```

データ項目の長さおよびタイプを再定義される区域内で変更することもできます。たとえば、次のとおりです。

```
05 NAME-2.
   10 SALARY                PICTURE XXX.
   10 SO-SEC-NO             PICTURE X(9).
   10 MONTH                 PICTURE XX.
05 NAME-1 REDEFINES NAME-2.
   10 WAGE                  PICTURE 999V999.
   10 EMP-NO                PICTURE X(6).
   10 YEAR                  PICTURE XX.
```

ある区域を再定義しても、その区域のすべての記述は常に有効のままです。つまり、再定義によってどのデータも、消去されたりそれ以前の記述を置き換えたりしません。したがって、B REDEFINES C と指定した場合、2 つのプロシージャー・ステートメント MOVE X TO B と MOVE Y TO C はどちらも、プログラム内の任意のポイントで実行できます。

最初のステートメントの場合、B と記述された区域は X の値と形式をとります。2 番目のステートメント場合、同じ物理域 (今度は C と記述されます) は Y の値と形式をとります。2 番目のステートメントが最初のステートメントの直後に実行されると、1 つの記憶域で X の値は Y の値に置き換わります。

再定義するデータ項目の USAGE は、再定義される項目の USAGE と同じである必要はありません。ただし、同じでないときは、既存のデータに何の変化も起こりません。たとえば、次のとおりです。

```
05 B                PICTURE 99 USAGE DISPLAY VALUE 8.
05 C REDEFINES B    PICTURE S99 USAGE COMPUTATIONAL-4.
05 A                PICTURE S99 USAGE COMPUTATIONAL-4.
```

DISPLAY 値 8 のビット構成は、次のとおりです。

```
1111 0000 1111 1000.
```

B を再定義しても、記憶域内のデータのビット構成は変わりません。したがって、次の 2 つのステートメントを実行した場合、異なる結果になります。

```
ADD B TO A
ADD C TO A
```

前者のステートメントでは、値 8 が A に加算されます (B が USAGE DISPLAY をもっているため)。後者のステートメントでは、記憶域内のビット構成 (2 桁の 10 進数に切り捨てられる) は 2 進数の -48 になり、-48 という値が A に加算されます (C が USAGE COMPUTATIONAL-4 をもっているため)。

前記の例は、再定義を適切に使用しないと、予期しないまたは正しくない結果となることを示します。

コーディング例

REDEFINES 文節は、再定義される区域の範囲内にある項目 (すなわち、再定義される項目に従属する項目) に関して指定できます。たとえば、次のとおりです。

```
05 REGULAR-EMPLOYEE.
   10 LOCATION              PICTURE A(8).
   10 GRADE                  PICTURE X(4).
   10 SEMI-MONTHLY-PAY      PICTURE 9999V99.
   10 WEEKLY-PAY REDEFINES SEMI-MONTHLY-PAY
```

REDEFINES 文節

```
                                PICTURE 999V999.
05 TEMPORARY-EMPLOYEE REDEFINES REGULAR-EMPLOYEE.
   10 LOCATION                    PICTURE A(8).
   10 FILLER                      PICTURE X(6).
   10 HOURLY-PAY                  PICTURE 99V99.
```

再定義する項目に従属する項目に関しても、REDEFINES 文節を指定できます。たとえば、次のとおりです。

```
05 REGULAR-EMPLOYEE.
   10 LOCATION                    PICTURE A(8).
   10 GRADE                      PICTURE X(4).
   10 SEMI-MONTHLY-PAY          PICTURE 999V999.
05 TEMPORARY-EMPLOYEE REDEFINES REGULAR-EMPLOYEE.
   10 LOCATION                    PICTURE A(8).
   10 FILLER                      PICTURE X(6).
   10 HOURLY-PAY                  PICTURE 99V99.
   10 CODE-H REDEFINES HOURLY-PAY PICTURE 9999.
```

不確定の結果

次のときには、不確定の結果が起こることがあります。

- 再定義される項目が再定義する項目に移されたとき (すなわち、B REDEFINES C であり、MOVE B TO C というステートメントを実行したとき)。
- 再定義する項目が再定義される項目に移されたとき (すなわち、B REDEFINES C であり、MOVE C TO B というステートメントを実行したとき)。

RENAMES 文節

RENAMES 文節は、いくつかの基本データ項目の代替グループ化 (重複する可能性がある) を指定します。

RENAMES 文節 - 形式

```
▶▶—66—データ名-1—RENAMES—データ名-2—  
                                |  
                                |—THROUGH—データ名-3—|  
                                |  
                                |—THRU—|  
                                |  
▶▶
```

1 つの論理レコードに対し、1 つまたは複数の RENAMES 記入項目を書くことができます。1 つの論理レコードに関連する RENAMES 記入項目はすべて、そのレコードの最後のデータ記述記入項目の直後に書かなければなりません。

データ名-1

データ項目の代替グループ化を識別します。

レベル 66 の記入項目は、レベル 01、レベル 77、レベル 88、または別のレベル 66 の記入項目を名前変更することはできません。

データ名-1 を修飾子に使うことはできません。これは、レベル標識記入項目またはレベル 01 記入項目の名前でしか修飾できません。

IBM 拡張

データ名-2 が DBCS データ項目を指定し、THROUGH 句が指定されていない場合、データ名-1 は DBCS データ項目を指定できます。

データ名-2 が国別データ項目を指定し、THROUGH 句が指定されていない場合、データ名-1 は国別データ項目を指定できます。

データ名-2 が次のいずれかのデータ項目を参照し、かつ THROUGH 句が指定されていない場合、データ名-1 は次のいずれかのタイプのデータ項目になります。

- DBCS
- 国別
- ポインターまたはプロシージャ・ポインター
- 内部浮動小数点または外部浮動小数点
- 日付、時刻、またはタイム・スタンプ

IBM 拡張 の終り

データ名-2、データ名-3

基本データ項目の元のグループ化を識別します。つまりそれらの項目は、関連したレベル 01 記入項目内の基本項目またはグループ項目でなければならず、同じデータ名であってはなりません。データ名は双方とも修飾されていてもかまいません。

データ名-2 とデータ名-3 のデータ記入項目、またはそれらが従属するグループ記入項目に対するデータ記入項目の中では、OCCURS 文節を指定してはなりません。また、データ名-2 とデータ名-3 の間で定義されたどの項目に対しても、OCCURS DEPENDING ON 文節を指定してはなりません。

IBM 拡張

TYPE 文節は、データ名-2、データ名-3 のデータ記述内で指定してはなりません。同様に、データ名-2 とデータ名-3 の間で定義された項目またはこれらの項目に従属するどの項目でも指定してはなりません。データ名-2、データ名-3、またはデータ名-2 とデータ名-3 の間で定義された項目が TYPE 文節を使用して定義したグループ項目に従属している場合は、データ名-1 はその同じグループ項目に従属していなければなりません。

IBM 拡張 の終り

データ名-3 を指定すると、データ名-1 は、次のすべての基本項目を含むグループ項目として扱われます。

- データ名-2 (これが基本項目の場合)、またはデータ名-2 (これがグループ項目の場合) 中の最初の基本項目で始まる。
- データ名-3 (これが基本項目の場合)、またはデータ名-3 (これがグループ項目の場合) の最後の基本項目で終わる。

データ名-3 内の左端の文字は、データ名-2 の左端の文字の前にはあってはなりません。データ名-3 の右端の文字は、データ名-2 の右端の文字の後に続かなければなりません。このことは、データ名-3 がデータ名-2 に従属することはできないことを意味します。

データ名-3 を指定しないと、データ名-2 のすべてのデータ属性がデータ名-1 のデータ属性になります。つまり、以下のとおりです。

RENAMES 文節

- データ名-2 がグループ項目のときは、データ名-1 はグループ項目として扱われます。
- データ名-2 が基本項目のときは、データ名-1 は基本項目として扱われます。

図 10 に RENAMES 文節の有効な指定と無効な指定を図示します。

有効および無効な RENAMES 文節の指定の図示

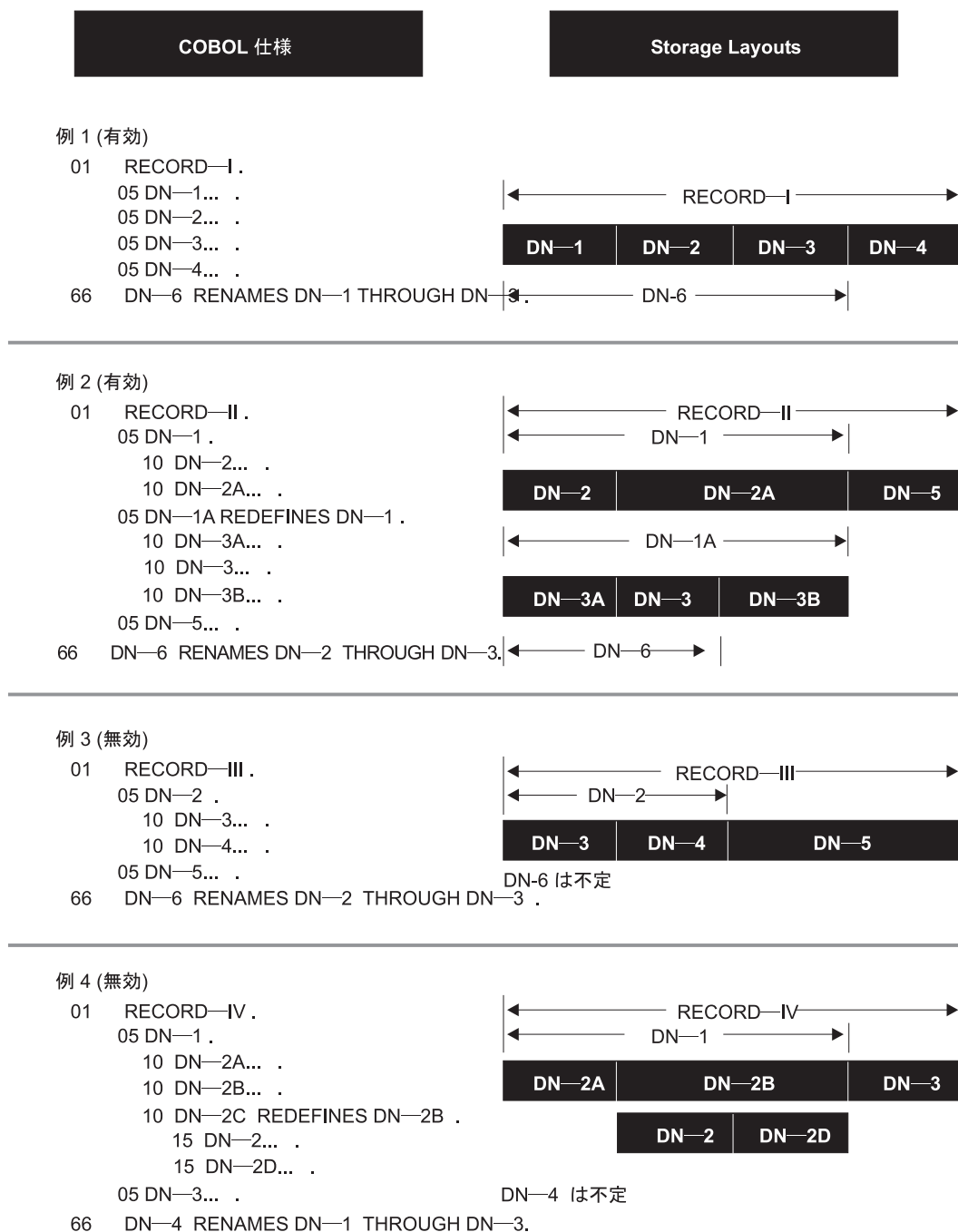


図 10. RENAMES 文節 — 有効な指定と無効な指定

SIGN 文節

SIGN 文節は、数字記入項目のための、演算符号の表現の位置とモードを指定します。

SIGN 文節 - 形式



SIGN 文節は、符号付き数字データ記述記入項目 (すなわち、PICTURE 文字ストリングに S が含まれている記入項目)、またはその種の基本記入項目を少なくとも 1 つ含んでいるグループ項目に対してだけ指定できます。USAGE IS DISPLAY を明示的にまたは暗黙のうちに指定する必要があります。

SIGN 文節が必要であるのは、演算符号の性質や位置を明示的に記述する必要がある場合だけです。

SIGN 文節 (指定するならば) は、演算符号が適用される数字データ記述記入項目、または演算符号が適用されるグループに從属するそれぞれの符号付き数字データ記述記入項目に関して、演算符号の位置と表示モードを定義します。

SIGN 文節が指定されるグループ項目に從属する、グループ記入項目または基本記入項目のいずれかに SIGN 文節を指定した場合、從属記入項目の SIGN 文節は、從属記入項目に優先します。

FD 記入項目に CODE-SET 文節を指定した場合、そのファイル記述記入項目に関連する符号付き数字データ記述記入項目は、SIGN IS SEPARATE 文節で記述しなければなりません。

記号 S を含む PICTURE 文字ストリングを持つ数字データ記述記入項目はどれも、符号付き数字データ記述記入項目です。そのような記入項目に対して SIGN 文節も指定されており、しかも計算や比較の際に変換が必要であれば、変換は自動的に行われます。

IBM 拡張

SIGN 文節は、外部浮動小数点項目の文書として扱われます。内部浮動小数点項目では、SIGN 文節は無効です。

SIGN 文節は、FORMAT 文節が指定されている場合には指定できません。

TYPE 文節は SIGN 文節と同じデータ記述記入項目に指定することはできません。

IBM 拡張 の終り

SEPARATE CHARACTER

SEPARATE CHARACTER 句を指定しない場合は、次のようになります。

- 演算符号は、基本数字データ項目の LEADING または TRAILING 文字位置 (いずれか、指定されている方) に関連付けられているものと見なされます。(この場合、SIGN IS TRAILING を指定することは、コンパイラーによる標準の処理と同等です。)
- PICTURE 文字ストリング内の文字 S は、データ項目のサイズ (標準データ・フォーマットの文字数) を判別する際にはカウントされません。

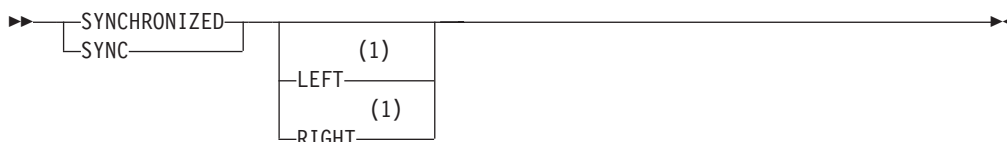
SEPARATE CHARACTER 句を指定する場合は、次のようになります。

- 算術演算符号は、基本数字データ項目の LEADING または TRAILING 文字位置 (いずれか、指定されている方) に関連付けられているものと見なされます。この文字位置は数字位置ではありません。
- PICTURE 文字ストリング内の文字 S は、データ項目のサイズ (標準データ・フォーマットの文字数) を判別する際にカウントされます。
- + は、正の演算符号用に使われる文字です。
- - は、負の演算符号用に使用される文字です。

SYNCHRONIZED 文節

SYNCHRONIZED 文節は、基本項目をストレージ内の正しい位置に合わせるように指定します。SYNCHRONIZED 文節を使用するには、CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドに *SYNC コンパイラー・オプションを指定します。

SYNCHRONIZED 文節 - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

指定した場合、LEFT 句と RIGHT 句は構文検査されますが、プログラムの実行には何の影響も与えません。

同期化を指定しないと、データは充てん文字スペースなしに連続して配置されます。同期化を指定すると、データは、1、2、4、8、または 16 バイト (許される場合。230 ページの表 17 を参照) で整数除算できるアドレスに沿って位置合わせされます。その前のデータ項目が各境界間のすべてのバイトを使いきっていないければ、同期化の指定には、充てん文字スペースを (暗黙に) 使用する必要があるかもしれません。

同期化データの利点

データを同期させるとどのような利点があるのでしょうか。データを同期した場合の利点として、アクセス可能度の点でパフォーマンスが向上します。欠点は、レコード・サイズが大きくなる (充てん文字スペースがレコードの一部を占める) ために一部のストレージが無駄になることです。

同期化を指定してもしなくても、01 レベルの項目とポインターは、常に 16 バイトの境界上に位置合わせされます。同期化は、基本項目にしか指定できません。グループ項目には、この文節を使うことはできません。

図 11 はこの概念を表したものです。

```

01  A
05  A2 PIC X(3)
05  A3 PIC 9(5) BINARY
01  B
05  B2 PIC X(16)
    
```

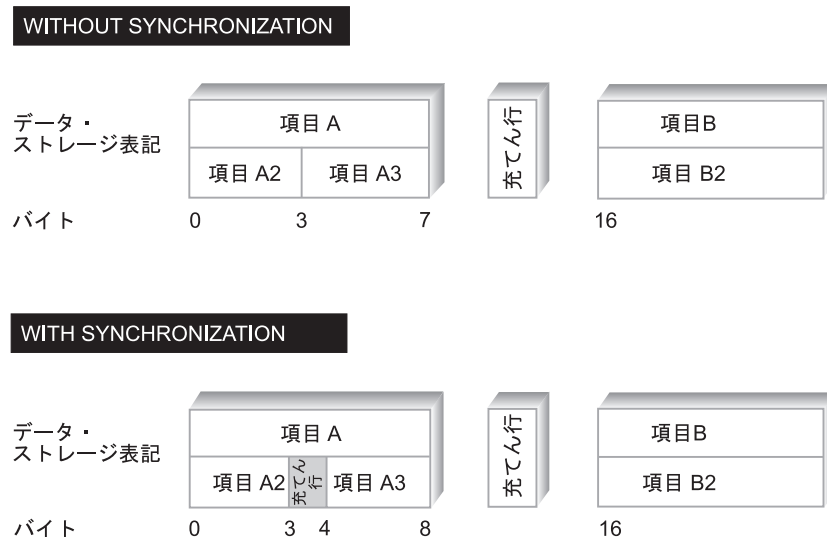


図 11. 同期化したときとしないときのデータ・ストレージ図

図 11 は、A と B は常に 16 バイト境界に位置合わせされることを示しています。同期化を指定しないと、A2 と A3 は、サイズに関係なく連続して保管されます。同期化を指定すると、4 バイト境界が選択され (A3 のタイプが原因で)、A3 はそれに応じて位置合わせされます。A2 と A3 の間には、1 バイトの充てん文字があります。しかし A3 はより迅速にアクセスされるようになります。

同期化とオフセット

上図では、A と B は、実際のストレージ内で互いに連続しているとは限らないことに注意してください。言い替えると、B は A の開始点から 16 バイト後、または 48 バイト (16 x 3) 後、または 16 x N バイト後のどれで開始するかユーザーには分からないということです。オフセットを指定することによって、同期化データを取り出そうとはなりません。

IBM 拡張

SYNCHRONIZED 文節は、ポインター・データ項目とプロシーチャー・ポインター・データ項目に対しては暗黙指定されます。リンケージ・セクションで宣言されたポインター・データ項目とプロシーチャー・ポインター・データ項目は同期化されません。

SYNCHRONIZED 文節

SYNCHRONIZED 文節は TYPE 文節と同じデータ記述記入項目に指定することはできません。

DBCS、国別、外部浮動小数点、日付、時刻、またはタイム・スタンプのデータ項目に対する SYNCHRONIZED 文節は無視されます。

COMPUTATIONAL-1 データ項目の SYNCHRONIZED 文節は、フルワード境界でデータの位置合わせを行います。

COMPUTATIONAL-2 データ項目の SYNCHRONIZED 文節は、ダブルワード境界でデータの位置合わせを行います。

IBM 拡張 の終り

項目に指定される USAGE によっては、SYNCHRONIZED 文節が特定の効果を持つ場合があります。表 17 に、ある項目の USAGE でどのように SYNCHRONIZED 文節がそれに影響を与えるかを示しています。

表 17. データ項目 USAGE および SYNCHRONIZATION 文節

USAGE の指定	SYNCHRONIZED 文節の処理
DISPLAY	構文検査されますが、実行には影響しません
DISPLAY-1 (DBCS)	無視されます
NATIONAL	無視されます
PACKED-DECIMAL	構文検査されますが、実行には影響しません
COMPUTATIONAL-1	フルワード境界でデータの位置合わせをします
COMPUTATIONAL-2	ダブルワード境界でデータの位置合わせをします
COMPUTATIONAL-3	構文検査されますが、実行には影響しません
BINARY: PIC S9(1) ~ PIC S9(4)	レコードの先頭から 2 の倍数位置にデータ項目を位置合わせします
BINARY: PIC S9(5) ~ PIC S9(9)	レコードの先頭から 4 の倍数位置にデータ項目を位置合わせします
BINARY: PIC S9(10) ~ PIC S9(18)	レコードの先頭から 8 の倍数位置にデータ項目を位置合わせします
COMPUTATIONAL-4	USAGE BINARY の場合と同様に機能します
COMPUTATIONAL	構文検査されますが、実行には影響しません
INDEX	使えません
POINTER	レコードの先頭から 16 の倍数の位置にデータ項目を位置合わせします
PROCEDURE-POINTER	USAGE POINTER の場合と同様に機能します

基本項目の長さが、SYNCHRONIZED 文節によって影響を受けることはありません。

OCCURS 文節を使った SYNCHRONIZED 文節の指定

OCCURS 文節の有効範囲内にある項目に SYNCHRONIZED 文節を指定すると、その項目が現れるごとに同期化が行われます。

REDEFINES 文節を使った SYNCHRONIZED 文節の指定

REDEFINES 文節が入っている項目に SYNCHRONIZED 文節を指定する場合には、再定義されるデータ項目には、再定義するデータ項目の正しい境界位置合わせが入っていない必要があります。REDEFINES 文節の入っている項目には、埋め込み文字は追加されません。たとえば、次のように書いた場合、データ項目 A はレコードの始まりからの位置が 4 の倍数バイトから始まらなければなりません。

```
02 A          PICTURE X(4).
02 B REDEFINES A    PICTURE S9(9) BINARY SYNC.
```

REDEFINES 文節が入っている項目に従属している最初の基本項目である 2 進数項目に SYNCHRONIZED 文節を指定する場合には、その項目は、未使用の文字位置の追加を必要とするものであってはなりません。

FILLER 項目

FILLER 項目は、前の項目と同じレベル番号を持つ項目であるかのように扱われます。この暗黙の FILLER 項目のサイズは、次のように計算されます。

- 位置合わせされた項目の前にあるすべての基本データ項目によって占有される文字の総数が、前に追加された暗黙の FILLER 項目とともに合計されます。
- この合計が、上記の位置合わせの計算で乗数 (2、4、8、または 16) として使用された係数 m で除算されます。
- この除算の剰余 r がゼロである場合には、暗黙の FILLER 項目は必要ありません。剰余がゼロでない場合には、暗黙の FILLER 項目のサイズは $m - r$ となります。

暗黙の FILLER 項目のサイズは、それが入っているグループ項目のサイズには含まれません。

グループ項目は通常、英数字として定義されます。すべての FILLER 項目はスペースで初期設定されます。その後、SYNCHRONIZED 文節を介して生成される暗黙の FILLER 項目も、(デフォルトの) *STDINZ コンパイラー・オプションのもとでスペースを使って初期設定されます。*NOSTDINZ または STDINZHEX00 オプションのもとでは、これら暗黙の FILLER 項目に 16 進数のゼロが含まれることとなります。

グループ項目が、OCCURS 文節で定義され、位置合わせされることになっているデータ項目が入っている場合には、暗黙の FILLER 項目も、コンパイラーによって追加される場合があります。暗黙の FILLER を追加するかどうかを決定するために、次の処置がとられます。

- 必要なすべての暗黙 FILLER 項目を含めて、コンパイラーはグループ項目のサイズを計算します。
- この合計が、グループ内の任意の基本項目で必要とされる最大の m によって除算されます。
- r がゼロの場合には、暗黙の FILLER 項目は必要ありません。 r がゼロでない場合には、サイズが $m - r$ の暗黙の FILLER 項目を追加しなければなりません。

SYNCHRONIZED 文節

暗黙の FILLER 項目は、OCCUR 文節が入っているグループ項目が現れるたびに、その終わりに挿入できます。これは、後続のグループ項目のオカレンスを同期させるために行うものです。

レベル 01 または 77 の項目は、次のような規則に従って位置合わせされます。

区域	レベル番号	境界合わせ
作業用ストレージ・セクション	01 77	16 バイト 16 バイト
ローカル・ストレージ・セクション	01 77	16 バイト 16 バイト
ファイル・セクション	01	コンパイラーは、項目を同期化するために 16 バイト境界を想定します。
リンケージ・セクション	01 77	コンパイラーは、項目を同期化するために 16 バイト境界を想定します。ポインター・データ項目とプロシージャ・ポインター・データ項目は同期されません。

暗黙 FILLER の例

次の COBOL データ記述によって 図 12 に示されるコンピューター・ストレージが割り振られることになります。

```

01 UNSYNCHRONIZED-RECORD
  02 UNSYNCHRONIZED-DATA-1 PIC 9(3) DISPLAY.
  02 UNSYNCHRONIZED-DATA-2 PIC X(2).
01 COMPOUND-REPEATED-RECORD.
  02 ELEMENTARY-ITEM-1 PIC X (2).
  02 GROUP-ITEM OCCURS 3 TIMES.
    03 ELEMENTARY-ITEM-2 PIC X.
    03 ELEMENTARY-ITEM-3 PIC S9(2) BINARY SYNC.
    03 ELEMENTARY-ITEM-4 PIC S9(4) V9(2) BINARY SYNC.
    03 ELEMENTARY-ITEM-5 PIC X (5).
  
```

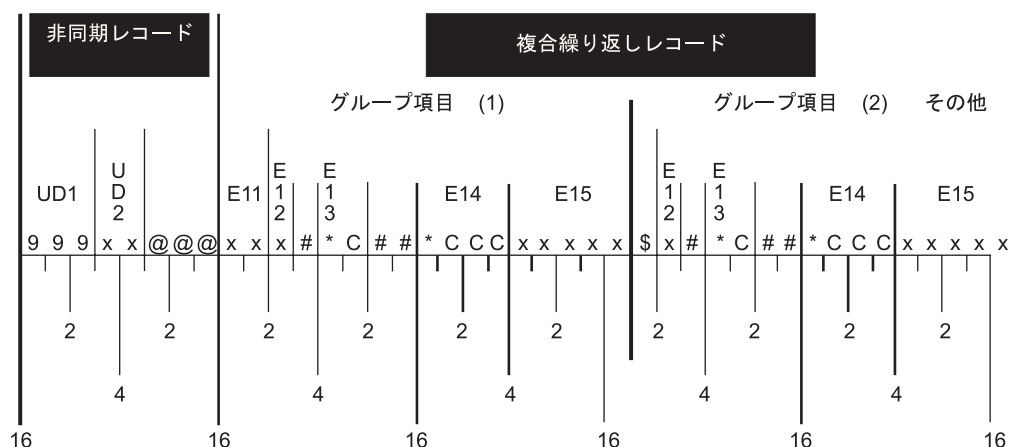


図 12. コンピューター・ストレージの割り振り

- @ 自動同期化またはレコード (01 レベル) 記述のために割り振られる暗黙の FILLER バイトを示します。
- # 後続のデータ項目が明示的に同期化されるときに割り振られる暗黙 FILLER バイトを示します。
- * 同期化された BINARY 項目の最初のバイトを示します。
- \$ 非基本項目が OCCURS 文節に従属しているときに割り振られる暗黙 FILLER バイトを示します。
- 9 数字の DISPLAY 文字に割り振られるバイト数を示します。
- X 英数字の DISPLAY 文字に割り振られるバイト数を示します。
- C BINARY データ・ストレージに割り振られるバイト数を示します。

TYPE 文節

IBM 拡張

TYPE 文節は、記入項目のサブジェクトのデータ記述がユーザー定義データ・タイプによって指定されることを指示します。ユーザー定義データ・タイプは TYPEDEF 文節を使用して定義します。これについては 234 ページの『TYPEDEF 文節』で説明しています。

▶—TYPE—タイプ名-1—▶

以下の一般規則が適用されます。

- (TYPEDEF 文節を使用して定義した) タイプ名-1 がグループ項目を記述している場合は、TYPE 文節のサブジェクトはグループ項目となり、その従属エレメントはタイプ名-1 の従属エレメントと同じ名前、記述、および階層をもちます。

注: TYPE 文節のサブジェクトが持つことができる最高レベル番号は 49 であり、さらにタイプ名-1 はグループ項目である場合に最大 49 のレベルを持つことができるため、この階層のレベル数が 49 を超えることがあります。タイプ名の記述では他のタイプ名の参照が認められているため、この階層のレベル数には事実上制限はありません。

- TYPE 文節のサブジェクトのデータ記述内に VALUE 文節を指定すると、この記入項目に関しては、タイプ名-1 の記述内に指定されている VALUE 文節はすべて無視されます。
- タイプ名の有効範囲に関する規則は、データ名の有効範囲に関する規則と同様です。
- TYPE 文節のサブジェクトとなっている基本項目を参照変更することはできません。
- (タイプ名-1 を参照する) TYPE 文節のサブジェクトを参照する LIKE 文節または TYPE 文節のサブジェクトが従属しているグループ項目をタイプ名-1 の記述に入れることはできません。この規則はタイプ名-1 の従属データ項目についても同様です。

SYNCHRONIZED 文節

- (タイプ名-1 を参照する) TYPE 文節がそのサブジェクトの従属先のレコードを参照する場合は、その TYPE 文節をタイプ名-1 の記述に入れることはできません。この規則はタイプ名-1 の従属データ項目についても同様です。

たとえば、A は TYPEDEF 文節を使用して定義したグループ項目であるとし、B も同様に TYPEDEF 文節を使用して定義したグループ項目であるが、B は TYPE A の従属項目も含んでいるとします。このような場合、A のタイプ定義に TYPE B の項目を含めることはできません。

- TYPE 文節のサブジェクトの名前は、全体でも一部でも変更することはできません。
- TYPE 文節のサブジェクトは、明示的にも暗黙的にも再定義することはできません。
- TYPE 文節のサブジェクトがグループ項目に従属している場合は、そのグループ項目のデータ記述に USAGE 文節を含めることはできません。
- TYPE 文節は、文節 BLANK、WHEN ZERO、FORMAT、JUSTIFIED、LIKE、PICTURE、REDEFINES、RENAMES、SIGN、SYNCHRONIZED、または USAGE が指定されているデータ記述記入項目内で使用することはできません。
- TYPE 文節は、文節 EXTERNAL、GLOBAL、OCCURS、TYPEDEF、および VALUE が指定されているデータ記述記入項目内に指定することができます。

TYPE 文節および TYPEDEF 文節の使用法の詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

TYPEDEF 文節

IBM 拡張

TYPEDEF 文節は、新規の**ユーザー定義データ・タイプ** (タイプ名) を作成します。この新しいユーザー定義データ・タイプの名前が TYPEDEF 文節のサブジェクトです。データ名-1 は TYPEDEF 文節を使用して指定する必要があります。したがって、FILLER は使用できません。TYPEDEF 文節は、データ名-1 の直後に続けて指定する必要があります。TYPEDEF 文節で新規データ・タイプを定義した後は、TYPE 文節を使用してデータ項目をこの新規データ・タイプとして宣言できます。TYPE 文節の詳細は 233 ページの『TYPE 文節』を参照してください。



TYPEDEF 文節を指定できるのはレベル 01 の記入項目に対してだけです。対象とする記入項目がグループ項目であっても構いません。グループ項目を指定する場合、そのグループのすべての従属項目はタイプ宣言の一部となります。タイプ宣言用にストレージが割り振られることはありません。

TYPEDEF 文節は、以下の文節と同じデータ記述記入項目に指定することはできません。

- EXTERNAL
- REDEFINES
- LIKE

上記以外のすべてのデータ記述文節は、指定すると、(TYPE 文節内で) ユーザー定義データ・タイプを使用して定義したあらゆるデータ項目に対して指定されたものと想定されます。

TYPEDEF は、複合 OCCURS DEPENDING ON とともに使用することはできません。これは、TYPEDEF の一部であるテーブル内では、OCCURS DEPENDING ON 文節を指定できないことを意味します。詳細は 725 ページの『付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON』を参照してください。

TYPEDEF 文節を指定できるのは、プログラムの作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクション、リンケージ・セクション、またはファイル・セクションの中だけです。

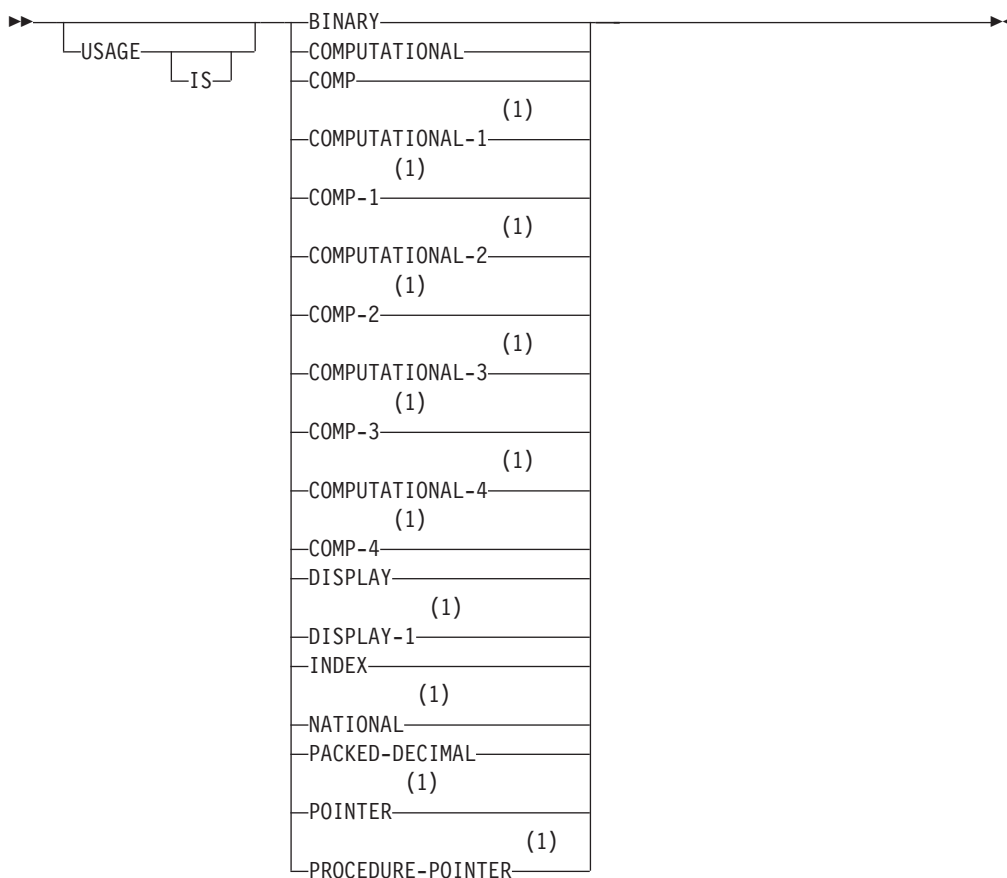
TYPE 文節は TYPEDEF 文節と同じデータ記述記入項目に指定することができます。

IBM 拡張 の終り

USAGE 文節

USAGE 文節は、データがストレージ内で表現される形式を指定します。この形式は、ある特定の手続き部ステートメントが使用される場合には、制約を受けることがあります。

USAGE 文節 - 形式



注:

1 IBM 拡張

次の表は、USAGE 文節で指定するさまざまなデータ項目に使用する句について概説しています。

表 18. USAGE 文節のデータ項目

データ項目	USAGE 文節の句
2 進数 (計算用項目)	BINARY または COMPUTATIONAL-4 ¹ または COMP-4 ¹
パック 10 進数 / 内部 10 進数 (計算用項目)	PACKED-DECIMAL または COMPUTATIONAL または COMP または COMPUTATIONAL-3 ¹ または COMP-3 ¹
内部浮動小数点 (計算用項目)	COMPUTATIONAL-1 ¹ または COMP-1 ¹ (4 バイト) COMPUTATIONAL-2 ¹ または COMP-2 ¹ (8 バイト)
数字 DISPLAY 項目 外部 10 進数 (ゾーン 10 進数) 外部浮動小数点 ¹	DISPLAY

表 18. USAGE 文節のデータ項目 (続き)

データ項目	USAGE 文節の句
非数字 DISPLAY 項目 英字 英数字 英数字編集項目 数字編集項目 ブール ¹ 日付、時刻、およびタイム・スタンプ ¹	DISPLAY
DBCS ¹ DBCS 編集 ¹	DISPLAY-1
国別 ¹	NATIONAL
指標	INDEX
ポインター ¹	POINTER
プロシージャ・ポインター ¹	PROCEDURE-POINTER
注: 1. IBM 拡張	

USAGE 文節は、どのレベル (66 または 88 を除く) の記入項目に対しても指定できます。ただし、グループ・レベルで指定した場合は、グループそのものではなく、そのグループ内の各基本項目にこの文節が適用されます。基本項目の使用法は、その基本項目が属するグループ項目に指定された使用法に矛盾するものであってはなりません。

USAGE 文節をグループ・レベルか基本レベルのいずれかで指定しなければ使用状況は DISPLAY と見なされます。

IBM 拡張

TYPE 文節と USAGE 文節とを同じデータ記述記入項目に指定することはできません。

TYPE 文節が指定されているデータ記述記入項目は、USAGE 文節を含んでいるデータ記述記入項目に従属することはできません。たとえば、以下の記述は誤りです。

```
01 FLAGS  USAGE  DISPLAY.
   05 F-STATUS  TYPE CHAR.
   05 FLAG-ACTIVE TYPE CHAR.
```

IBM 拡張 の終り

計算用項目

計算用項目は、算術演算で使用される値です。計算用項目は数字でなければなりません。これには、2 進数、パック 10 進数、および内部浮動小数点のデータ項目が入ります。

グループ項目の USAGE が計算用項目のいずれかを指定して記述されている場合、その使用状況を持つのはグループ内の基本項目です。グループそれ自体は非数字と見なされるため、数値演算に使用することはできません。ただし、CORRESPONDING 句を使用するグループの場合は例外です (290 ページの『CORRESPONDING 句』を参照してください)。

計算用項目の最大の長さは、10 進数で 18 桁です。

IBM 拡張

パック 10 進数の計算用項目の最大の長さは、10 進数で 31 桁です。

IBM 拡張 の終り

計算用項目の PICTURE に含めることができるのは、次のものに限ります。

- 9** 1 つまたは複数の数字位置
- S** 1 つの演算符号
- V** 1 つの暗黙の小数点
- P** 1 つまたは複数の 10 進数位取り位置

IBM 拡張

他の計算用項目とは異なり、COMPUTATIONAL-1 および COMPUTATIONAL-2 項目 (内部浮動小数点) には PICTURE スtringを入れることができません。

IBM 拡張 の終り

BINARY 句

BINARY 句は 2 進数データ項目に指定されます。この項目には、10 進数の数字 0 ~ 9 と符号から構成された 10 進数と同等の 10 進数を入れることができます。

2 進数項目によって占有される記憶容量は、その PICTURE 文節で定義される 10 進数の桁数によって異なります。

PICTURE 文節の桁数	占有ストレージ
1 ~ 4	2 バイト
5 ~ 9	4 バイト
10 ~ 18	8 バイト

記憶域の左端のビットが演算符号です。

パフォーマンスを向上させるには、8 バイトの 2 進数項目を使わないようにします。便宜上 8 バイトの 2 進数項目を指定することはできますが、それらを使用するにはコンパイラーで変換を行う必要があります。

PACKED-DECIMAL 句

PACKED-DECIMAL 句は内部 10 進数項目に対して指定されます。この項目は、ストレージの中ではパック 10 進数形式で表されます。各文字位置に 2 桁ずつ入りま

すが、後書き文字位置には、後続の文字位置をのぞいて、低位の数字と符号が入ります。そのような項目には、10 進数で 18 桁を超えない値を表す、0 ~ 9 までの数字と符号を入れることができます。符号の表記は 243 ページの図 13 に示されています。

IBM 拡張

パック 10 進数の計算用項目の最大の長さは、10 進数で 63 桁です。

PACKED-DECIMAL は、FORMAT リテラルの内容が変換指定子だけの日付項目および時刻項目にも指定できます。これらの変換指定子に数字以外のものを入れてはなりません。

IBM 拡張 の終り

COMPUTATIONAL または COMP 句

COMPUTATIONAL または COMP 句は内部 10 進数項目に対して指定されます。この項目はストレージの中で 1 バイトに 2 桁が入り、右端バイトの右端 4 ビットに符号が入れます。内部 10 進項目には、0 から 9 の数字と符号を入れることができます。内部 10 進項目の PICTURE に S が入っていない場合には、符号位置は正と解釈されるビット構成により占有されます。USAGE COMP は、操作上のパフォーマンスという点では、すべての USAGE の中で最も効率的です。

ILE COBOL コンパイラーの場合、COMPUTATIONAL 句は以下と同義です。

- オプション COMPASBIN が指定されている場合には、USAGE COMP-4 (2 進数)
- その他の場合には、PACKED-DECIMAL

COMPUTATIONAL-1 または COMP-1 句

IBM 拡張

COMPUTATIONAL-1 または COMP-1 句は内部浮動小数点項目 (単精度) に対して指定されます。COMP-1 項目は 4 バイト長です。符号は左端バイトの最初のビットに入っており、指数は次の 8 ビットに入っています。最後の 23 ビットには、仮数が入ります。条件式の場合、クラス条件を COMP-1 または COMPUTATIONAL-1 の内部浮動小数点データ項目に使用することはできません。

IBM 拡張 の終り

COMPUTATIONAL-2 または COMP-2 句

IBM 拡張

COMPUTATIONAL-2 または COMP-2 句は内部浮動小数点項目 (倍精度) に対して指定されます。COMP-2 項目は 8 バイト長です。符号は左端バイトの最初のビットに入っており、指数は次の 11 ビットに入っています。残りの 52 ビットには仮数が入ります。条件式の場合、クラス条件を COMPUTATIONAL-2 または COMP-2

の内部浮動小数点データ項目に使用することはできません。

IBM 拡張 の終り

COMPUTATIONAL-3 または COMP-3 句 (内部 10 進数)

IBM 拡張

これは、PACKED-DECIMAL と同じです。

コンパイル・パフォーマンスを向上させるには、COMP-3 (パック 10 進数) 項目の PICTURE 文節に奇数の数字位置を指定します。内部的には、パック 10 進数項目の右端のバイトには、数字が 1 つと符号が 1 つ入り、それ以外のバイトには数字が 2 つずつ入ります。よりパフォーマンスの良い構成を使用している場合には、脱落している数字をコンパイラから供給する必要はなくなります。

桁数が偶数であるパック 10 進数項目に割り振られるストレージの左端 (未使用) 数字位置の内容は、その項目の値が変更されるときに変更可能です。したがって、たとえばこの項目が再定義されたり、グループ・フィールドの一部を形成したり、索引付きファイルに対するキーとして使用される場合、予期しない値が含まれている可能性があります。

IBM 拡張 の終り

COMPUTATIONAL-4 または COMP-4 句 (2 進数)

IBM 拡張

これは、BINARY と同じです。

IBM 拡張 の終り

DISPLAY 句

データ項目は文字形式 (8 ビットのバイトに対して 1 文字) で保管されます。これは印刷出力の際に用いられる形式に対応します。DISPLAY は明示的または暗黙に指定できます。

USAGE IS DISPLAY は、次のタイプの項目に対して有効です。

- 英字項目
- 英数字項目
- 英数字編集項目
- 数字編集項目
- 外部 10 進数 (数字) 項目

IBM 拡張

- ブール項目
- 日付、時刻、およびタイム・スタンプの項目

- 外部浮動小数点項目

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

条件式の場合、クラス条件は、USAGE DISPLAY を持つ外部浮動小数点データ項目で使用することはできません。

IBM 拡張 の終り

英字、英数字、英数字編集、および数字編集の項目については 209 ページの『データ・カテゴリーと PICTURE の規則』で説明しています。

ゾーン項目の PICTURE 文字ストリングに入れることのできるものは、9、算術演算符号記号 S、仮想小数点 V、および 1 つまたは複数の P だけです。

外部 10 進数 (数字)

外部 10 進数項目は、ゾーン 10 進数項目とも呼ばれます。数の各桁は 1 バイトで表現されます。各バイトの高位 4 ビットは、ゾーン・ビットです。下位バイトの高位 4 ビットは、その項目の符号を表します。数字が正の場合には、これらの 4 ビットには 16 進数 F が入ります。数字が負の場合には、これらの 4 ビットに 16 進数 D が入ります。各バイトの下位 4 ビットにはその桁の値が入ります。

外部 10 進数項目の最大の長さは 18 桁です。

IBM 拡張

外部 10 進数項目の最大の長さは 63 桁です。

IBM 拡張 の終り

外部浮動小数点 (数字)

IBM 拡張

外部浮動小数点項目は、次の形式の文字ストリングです。

仮数符号

+ または - (必須)

仮数 1 ~ 16 桁の長さの数値。明示的に小数点を示す場合はピリオド (.) を、暗黙的に小数点を示す場合は V のいずれかを含む場合があります。小数点の記号は、仮数の任意の位置に入れることができます。

E 指数が入った定数。

指数符号

+ または - (必須)

指数 2 または 3 桁の数値。

IBM 拡張 の終り

USAGE 文節

243 ページの図 13 は、USAGE 文節で指定される数字項目の内部表現を示しています。数字 DISPLAY 項目には、外部 10 進数および外部浮動小数点のデータ項目が入ります。また、計算用数字項目 (2 進数、内部 10 進数、および内部浮動小数点のデータ項目) もこの図に示しています。

ITEM	DESCRIPTION	VALUE	INTERNAL REPRESENTATION*																																				
外部 10 進数	PIC S9999 DISPLAY	+1234 —1234 1234	F1 F2 F3 F4 F1 F2 F3 D4 F1 F2 F3 F4																																				
	PIC 9999 DISPLAY	+1234 —1234 1234	F1 F2 F3 F4 F1 F2 F3 F4 F1 F2 F3 F4																																				
	PIC S9999 DISPLAY SIGN LEADING	+1234 —1234 1234	F1 F2 F3 F4 D1 F2 F3 F4 F1 F2 F3 F4																																				
	PIC S9999 DISPLAY SIGN TRAILING SEPARATE	+1234 —1234 1234	F1 F2 F3 F4 4E F1 F2 F3 F4 60 F1 F2 F3 F4 4E																																				
	PIC S9999 DISPLAY SIGN LEADING SEPARATE	+1234 —1234 1234	4E F1 F2 F3 F4 60 F1 F2 F3 F4 4E F1 F2 F3 F4																																				
内部 10 進数	PIC S9999 {COMP } {COMP—3}	+1234 —1234	01 23 4F 01 23 4D																																				
	PIC 9999 {COMP } {COMP—3}	+1234 —1234	01 23 4F 01 23 4F																																				
2 進数	PIC S9999 COMP—4	+1234 —1234	04 D2 FB 2E																																				
	PIC 9999 COMP—4	+1234 —1234	04 D2 04 D2																																				
内部 浮動 小数点	COMP—1	+1234 —1234	44 9A 40 00 C4 9A 40 00																																				
内部 浮動 小数点	COMP—2	+1234 —1234	40 93 48 00 00 00 00 00 C0 93 48 00 00 00 00 00																																				
外部 浮動 小数点	PIC +9(2),9(2)E+99 DISPLAY	+1234 —1234	4E F1 F2 4B F3 F4 C5 4E F0 F2 60 F1 F2 4B F3 F4 C5 4E F0 F2																																				
<p>*各バイトの内部表記は、16 進数 2 桁で表示されます。 各桁のビット構成は以下のとおりです。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>16 進数の数字</th> <th>ビット構成</th> <th>16 進数の数字</th> <th>ビット構成</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0</td> <td>0000</td> <td>8</td> <td>1000</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>0001</td> <td>9</td> <td>1001</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>0010</td> <td>A</td> <td>1010</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>0011</td> <td>B</td> <td>1011</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>0100</td> <td>C</td> <td>1100</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>0101</td> <td>D</td> <td>1101</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>0110</td> <td>E</td> <td>1110</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>0111</td> <td>F</td> <td>1111</td> </tr> </tbody> </table>				16 進数の数字	ビット構成	16 進数の数字	ビット構成	0	0000	8	1000	1	0001	9	1001	2	0010	A	1010	3	0011	B	1011	4	0100	C	1100	5	0101	D	1101	6	0110	E	1110	7	0111	F	1111
16 進数の数字	ビット構成	16 進数の数字	ビット構成																																				
0	0000	8	1000																																				
1	0001	9	1001																																				
2	0010	A	1010																																				
3	0011	B	1011																																				
4	0100	C	1100																																				
5	0101	D	1101																																				
6	0110	E	1110																																				
7	0111	F	1111																																				

- 注:
- 2 進数の左端は符号を表し、0 ならば正、1 ならば負です。
 - 負の 2 進数は、2 の補数の形式で表されます。
 - 16 進数 4E は EBCDIC 文字の + を表し、16 進数 60 は EBCDIC 文字の - を表します。
 - SIGN TRAILING の仕様 (SEPARATE CHARACTER オプションなし) は、コンパイラーの標準のアクションに相当するものです。

図 13. 数字項目の内部表現

DISPLAY-1 句

IBM 拡張

DISPLAY-1 句は、DBCS または DBCS 編集として項目を定義します。

IBM 拡張 の終り

INDEX 句

INDEX 句で定義されるデータ項目は、**指標データ項目**です。

指標データ項目は、指標名の値を後の参照に備えて保管するために使用することのできる 4 バイトの基本項目 (必ずしもテーブルと関連付けられる必要はない) です。SET ステートメントによって、指標データ項目に指標名の値を割り当てることができます。

指標名の値は変位で、テーブル内のオカレンス番号に対応しています。指標名の値は次の値と等価です。

(オカレンス番号 - 1) * 記入項目の長さ

指標名を 999 999 999 以上の値に設定すると、指標名の値は未定義のままになります。

SEARCH ステートメント、SET ステートメント、比較条件、手続き部ヘッダーの USING 句、または CALL ステートメントの USING 句の中でだけ、指標データ項目を直接的に参照できます。

指標データ項目は、MOVE ステートメントまたは入出力ステートメントで参照されるグループ項目の一部とすることができます。

指標データ項目は、テーブル・オカレンスを表す値を保管しますが、それ自体は必ずしもテーブルの一部として定義する必要はありません。したがって、SEARCH または SET ステートメントで直接的に、あるいは MOVE ステートメントまたは入出力ステートメントで間接的に指標データ項目を参照した場合、そのステートメントの実行時に値は変換されません。

USAGE IS INDEX 文節は、どのレベルでも書くことができます。USAGE IS INDEX 文節でグループ項目が記述されると、そのグループ内の基本項目は指標データ項目になりますが、グループそのものは指標データ項目にはならず、そのグループ名を SEARCH ステートメントや SET ステートメント、または比較条件で使うことができなくなることがあります。基本項目の USAGE 文節は、その項目が属するグループの USAGE 文節に矛盾するものであってはなりません。

指標データ項目を条件変数とすることはできません。

文節 JUSTIFIED、PICTURE、BLANK WHEN ZERO、SYNCHRONIZED、TYPE、VALUE、または FORMAT を使用して USAGE IS INDEX 文節で記述されているグループ項目または基本項目を記述することはできません。

ソース・プログラムを他のシステムへ移送できるようにする場合、そのプログラムが外部レコードに保管されるときには、指標データ項目の内容に依存するものであってはなりません (その内容はシステム固有のものだからです)。

NATIONAL 句

IBM 拡張

NATIONAL 句は、国別として項目を定義します。対応するデータ項目のピクチャー・STRING は、1 つの N または複数の N のみを含むことができます。

IBM 拡張 の終り

POINTER 句

IBM 拡張

USAGE IS POINTER 文節を使って定義されたデータ項目は、ポインター・データ項目です。

ポインター・データ項目とは、基底アドレッシングに使用できる 16 バイト基本項目のことです。ポインター・データ項目は、等しいかどうかを比較したり、他のポインター項目に移したりすることができます。

ポインター・データ項目は、以下でしか使用できません。

- SET ステートメント (形式 5 および形式 7 のみ)
- 関係条件
- CALL ステートメントまたは手続き部ヘッダーの USING 句
- ADDRESS OF または LENGTH OF を含む式
- 組み込み関数の引数

USAGE IS POINTER 文節は、66 と 88 を除くすべてのレベルで書くことができます。

グループ項目が USAGE IS POINTER 文節で記述されているなら、そのグループ内の基本項目はポインター・データ項目です。ただし、そのグループ自身はポインター・データ項目ではなく、ポインター・データ項目が許可されている構文中では使えません。

ポインター・データ項目は、MOVE ステートメントまたは I/O ステートメントの中で参照されているグループの一部になることがあります。しかし、ポインター・データ項目がグループの一部である場合、ステートメント実行時にポインター値が別の内部表記に変換されることはありません。

ポインター・データ項目は、REDEFINES 文節のサブジェクトまたはオブジェクトになることがあります。

ポインター・データ項目の VALUE 文節は、NULL または NULLS だけを含めることができます。

ポインター・データ項目はクラスまたはカテゴリーに属しておらず、条件変数として使用することはできません。

文節 JUSTIFIED、PICTURE、SIGN、TYPE、BLANK WHEN ZERO、および FORMAT を使用して USAGE IS POINTER 文節で定義されているグループ項目または基本項目を記述することはできません。

ポインター・データ項目は、CORRESPONDING 操作においては無視されます。

ポインター・データ項目をファイルに書くことができますが、そのポインター・データ項目を含むレコードを後で読んだ場合、その項目はもはや有効なアドレスを表すことにはなりません。

USAGE IS POINTER は、ADDRESS OF 特殊レジスターには暗黙で指定されます。

ILE COBOL ポインター・データ項目を通常の数字として扱うことはできません。

ポインターの位置合わせ

この節のポインターの位置合わせについての説明では、ポインターという用語は、ポインター・データ項目とプロシージャ・ポインター・データ項目の両方を指します。

ポインターが参照されたり REDEFINES 文節のサブジェクトであるときは、そのオブジェクト項目は位置合わせされていなければなりません。言い換えると、レコードの始まりからの位置が 16 バイトの倍数になるオフセットに位置指定されていなければなりません。

作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションまたはファイル・セクションにおいてポインターとして記述されたデータ項目は位置合わせされます。ポインターが、レベル番号 01 から始まる構造の一部であれば、コンパイラーはその構造の先頭に位置合わせします。その後、コンパイラーはポインターの前に FILLER 項目を配置し、データ項目も確実に位置合わせされるようにします。コンパイラーは、これらの FILLER 項目を追加するときに警告を出します。

リンケージ・セクションでは、以下のとおりです。

- 処理オプション NOLSPTRALIGN が有効であれば、コンパイラーは FILLER 項目を構造に追加しません。コンパイラーは、ユーザーが 01 レベル項目を位置合わせしたという前提で処理していることを示す警告を出します。
- 処理オプション LSPTRALIGN が有効であれば、ポインターとして記述されたデータ項目も位置合わせされます。

ポインターがリンケージ・セクション中の REDEFINES 文節のサブジェクトで、その文節のオブジェクトがポインターでない場合、ユーザーは、ポインター位置合わせを保持する必要があるという警告を受け取ります。作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションまたはファイル・セクションでの同様な状況においては、ユーザーが文節のオブジェクトを位置合わせしないと、エラーが発生します。

SYNCHRONIZED 文節は USAGE IS POINTER または USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節とともに指定できますが、この文節はポインター用にすでに暗黙指定されています。

ポインターがテーブルの一部であれば、そのテーブルの最初の項目は位置合わせされ、そのポインターのすべてのオカレンスも必ず同様に位置合わせされるよう、そのテーブルの終わりに充てん文字項目が追加されることがあります。

データ構造に FILLER 項目が追加されないようにするには、構造の先頭にポインターを配置します。

IBM 拡張 の終り

PROCEDURE-POINTER 句

IBM 拡張

PROCEDURE-POINTER 句で定義されたデータ項目は、**プロシージャ・ポインター・データ項目**です。それは、次のような、ILE プロシージャまたはプログラム・オブジェクトへの入り口点のアドレス (*PGM) の入った 16 バイトの基本項目です。

- コンパイル単位内にあっても PROGRAM-ID ステートメントで定義された、最も外側の ILE COBOL プログラム (ILE プロシージャ) の入り口点
- ILE C の関数 (ILE プロシージャ) などの、COBOL 以外のプログラムの入り口点
- プログラムの入り口点 (*PGM)

プロシージャ・ポインター・データ項目は、以下のものだけに使用できます。

- SET ステートメント
- 関係条件
- CALL ステートメントの USING 句または手続き部ヘッダー
- ADDRESS OF および LENGTH OF を含む式
- ターゲットとしての CALL ステートメント
- 組み込み関数の引数

ポインター・データ項目と同様、プロシージャ・ポインター・データ項目も位置合わせしなければなりません。

使用規則

- USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節は、レベル 88 では記述できません。
- USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節内で記述されたグループ項目では、そのグループ内の基本項目はプロシージャ・ポインター・データ項目になります (グループそのものはプロシージャ・ポインターにはなりません)。
- 基本項目の USAGE 文節は、その項目が属するグループの USAGE 文節に矛盾するものであってはなりません。
- プロシージャ・ポインター・データ項目は、MOVE ステートメントまたは入出力ステートメントで参照されるグループの一部であってもかまいません。しかし、そのステートメントの実行時に値の変換は行われません。
- プロシージャ・ポインター・データ項目は、ファイルに書き込むことはできませんが、プロシージャ・ポインターを含んだ同じレコードを後で読み出すと、その項目はもう正しいアドレスを示しません。

USAGE 文節

- GLOBAL、EXTERNAL、OCCURS、SYNCHRONIZED、および LIKE 文節を、USAGE IS PROCEDURE-POINTER と一緒に使うことができます。
- プロシージャ・ポインターは、REDEFINES 文節のサブジェクトになることもオブジェクトになることもあります。
- プロシージャ・ポインター・データ項目の VALUE 文節には、NULL または NULLS しか含まれません。
- 文節 JUSTIFIED、PICTURE、TYPE、BLANK WHEN ZERO、および FORMAT は、USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節で定義されたグループ項目または基本項目を記述することはできません。
- プロシージャ・ポインター・データ項目は、条件変数になることも、どのクラスまたはカテゴリーに属することもできず、CORRESPONDING 操作では無視されます。

IBM 拡張 の終り

VALUE 文節

VALUE 文節は、データ項目の最初の内容、または条件名と関連する値を指定します。

VALUE 文節の用法は、この文節をデータ部のどのセクションで指定するかによって異なります。

IBM 拡張

リンケージ・セクションでは、条件名以外の記入項目で使用される VALUE 文節は、コメントとして扱われます。

IBM 拡張 の終り

ファイル・セクションおよびリンケージ・セクションでは、VALUE 文節は条件名とタイプ名の記入項目の中だけで使用するようにならなければなりません。作業用ストレージ・セクションおよびローカル・ストレージ・セクションでは、VALUE 文節は条件名記入項目およびタイプ名記入項目の中で使用できます。また、任意のデータ項目の初期値の指定に使用することが可能です。そのデータ項目は、プログラムの実行時の初めに指定された値を取ることになります。初期値を明示的に指定しなかった場合は、どのような値をとるかは予期できません。

VALUE 文節 - 形式 1 - リテラル値

VALUE 文節 - 形式 1 - リテラル値

▶▶—VALUE—
 └─IS─┘—リテラル—▶▶

形式 1 は、データ項目の初期値を指定します。初期設定は、BLANK WHEN ZERO または JUSTIFIED 文節の指定とは無関係に行われます。

OCCURS 文節を含むか、あるいはそれに従属するデータ記述記入項目に指定された形式 1 の VALUE 文節は、それに関連するデータ項目の各オカレンスに、指定された値を割り当てます。OCCURS 文節の DEPENDING ON 句を含むすべての構造は、VALUE の初期設定のための最大数のオカレンスを含むものと見なされます。

EXTERNAL 文節または REDEFINES 文節を含む記入項目が入っているか、またはそれに従属するデータ記述記入項目に、VALUE 文節を指定してはなりません。この規則は、条件名記入項目には適用されません。

VALUE 文節をグループ・レベルで指定する場合、リテラルは NULL または複数の NULLS 以外の非数字リテラルまたは表意定数でなければなりません。そのグループ内の従属記入項目は考慮されずに、グループ域が初期設定されます。また、このグループ内の従属記入項目に対して VALUE 文節を指定してはなりません。

グループ記入項目の場合、その記入項目に USAGE (USAGE DISPLAY を除く) 文節も含まれていれば VALUE 文節を指定してはなりません。

VALUE 文節は、データ記述記入項目の中にある他の文節や、この記入項目の階層のデータ記述の中にある他の文節と矛盾するものであってはなりません。

IBM 拡張

COMPUTATIONAL-1 または COMPUTATIONAL-2 (内部の浮動小数点) 項目と関連付けられている任意の VALUE 文節では、浮動小数点リテラルを指定しなければなりません。条件名 VALUE 句も、浮動小数点リテラルを指定しなければなりません。さらに、表意定数 ZERO と、ゼロ・リテラルの整数および 10 進小数点形式は、浮動小数点 VALUE 文節または条件名 VALUE 句に指定できます。

浮動小数点リテラル値の詳細については 19 ページの『浮動小数点リテラル』を参照してください。

VALUE 文節は、外部浮動小数点項目に対して指定することができません。

DBCS 項目に関連付けられている VALUE 文節には、DBCS リテラルまたは表意定数 SPACE または SPACES が含まれていなければなりません。

国別項目に関連付けられている VALUE 文節には、国別 16 進リテラルまたは表意定数 SPACE または SPACES が含まれていなければなりません。

VALUE 文節は、タイプ名のデータ記述記入項目内に指定できます。このような VALUE 文節は、このようなタイプ名を参照する TYPE 文節を使用して定義した任意の (タイプ名ではない) データ名を初期設定するために使用されます。TYPE 文節のサブジェクトのデータ記述内に VALUE 文節を指定すると、この記入項目に関しては、関連付けられているタイプ名の記述内に指定されている VALUE 文節はすべて無視されます。

先のデータ項目に DEPENDING ON 句を伴う OCCURS 文節が含まれている場合、データ項目は VALUE 句を含むことができません。位置が固定でない項目は VALUE 文節を含むことができません。

日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目に関連付けられている VALUE 文節は、非数値リテラルでなければなりません。このリテラルは位置合わせ規則に従っ

て位置合わせされます。変換指定子または LOCALE の定義に合わせるためにリテラルのフォーマット設定が行われることはありません。ただし、当該の項目の USAGE に PACKED-DECIMAL が指定されている場合は例外であり、非数字リテラルはパック 10 進数に変換されます。

IBM 拡張 の終り

リテラル値の規則

- リテラルが指定されているところは、表意定数で置き換えることもできます。
- 項目が数字の場合は、VALUE 文節のリテラルはすべて数字でなければなりません。リテラルが作業用ストレージ・セクションの項目の値を定義している場合は、そのリテラルは数字の移動の規則によって境界合わせがされますが、1 つだけ制約があります。つまり、そのリテラルは、ゼロ以外の数字の切り捨てを必要とする値を持ってないということです。符号付きリテラルの場合は、関連する PICTURE 文字ストリングに符号 (S) が含まれていなければなりません。
- 1 つの例外はありますが、項目の VALUE 文節内の数字リテラルは、その項目の PICTURE 文節によって表される値の範囲内にある値でなければなりません。たとえば PICTURE が 99PPP の場合、リテラルは 1 000 ~ 99 000 の範囲内にあるか、またはゼロでなければなりません。PICTURE が PPP99 の場合は、リテラルは 0.000 00 ~ 0.000 99 の範囲内になければなりません。例外とは、次の場合です。*NOSTDTRUNC コンパイラー・オプションが有効の場合、つまり、ピクチャー・シンボル P を PICTURE 文節に持たない BINARY または COMP-4 を使用して記述されたデータ項目である場合です。これらの項目に対する VALUE 文節は、固有の 2 進数表記の容量までの値を持っています。
- 項目がグループ項目、または英字、英数字、英数字編集、または数字編集の基本項目である場合は、VALUE 文節のリテラルはすべて非数字リテラルでなければなりません。リテラルは位置合わせ規則どおりに位置合わせされますが、その他の制約事項が 1 つあります。つまり、リテラル内の文字数はその項目のサイズを超えてはならないということです。

IBM 拡張

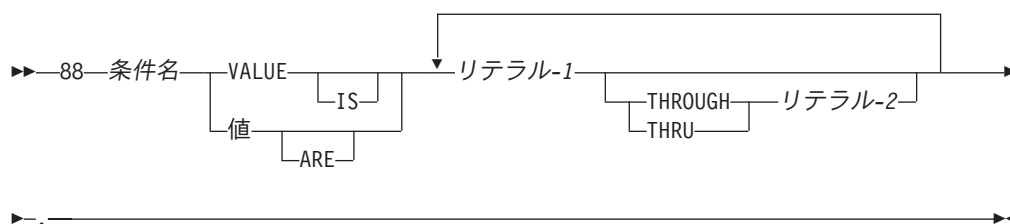
項目がブールの場合、VALUE 文節はブール・リテラルでなければなりません。

IBM 拡張 の終り

- 記述された項目の最初の状況を判別する際には、PICTURE 文節内の編集文字の機能は無視されます。ただし項目のサイズを判別する際には編集文字も含まれます。したがって、編集文字があれば、それをリテラルに含めなければなりません。たとえば、項目が PICTURE +999.99 と定義されており、その値が +12.34 ならば、VALUE 文節は、VALUE '+012.34' と指定する必要があります。
- 単一の VALUE 文節を使って、最大 32 767 バイトを初期設定できます。単一のプログラムに含まれるすべての VALUE 文節で、最大 65 472 バイトを初期設定できます。

VALUE 文節 - 形式 2 - 条件名値

VALUE 文節 - 形式 2 - 条件名値



この形式は、1 つの値、複数個の値、値の範囲 (複数の範囲も可) などを条件名に関連付けます。そのような条件名はそれぞれ、別々のレベル 88 記入項目を必要とします。レベル番号 88 および条件名は、形式 2 VALUE 文節そのものの一部ではありません。これらは明確にするために形式に入れられています。

条件名

ある値を条件変数に関連付けるユーザー指定の名前。関連付けられる条件変数に添え字または指標が必要な場合は、その条件名を手続き部で参照するたびに、条件変数に必要なものと同様の添え字または指標を付けなければなりません。

条件名は、プロシージャータ上、条件名条件の中でテストされます (267 ページの『条件式』を参照)。

リテラル-1

リテラル-1 だけを指定したときは、条件名は単一の値と関連付けられます。

リテラル-1 THROUGH リテラル-2

条件名は、少なくとも 1 つの値の範囲と関連します。THROUGH 句が使用されるときはいつも、リテラル-1 はリテラル-2 より小さくなければなりません。

IBM 拡張

関連付けられている条件変数が DBCS データ項目である場合、THROUGH 句に指定されるリテラルはすべて DBCS リテラル (または表意定数 SPACE、SPACES) でなければなりません。THROUGH 句に指定される DBCS リテラルの範囲は、DBCS 文字の 16 進数値の 2 進数照合順序に基づきます。

関連付けられている条件変数が国別データ項目である場合、THROUGH 句に指定されるリテラルはすべて国別 16 進リテラル (または表意定数 SPACE、SPACES) でなければなりません。THROUGH 句に指定される国別 16 進リテラルの範囲は、国別文字の 16 進数値の 2 進数照合順序に基づきます。

IBM 拡張 の終り

条件名値の規則

- VALUE 文節は、条件名記入項目内で必要であると同時に、その記入項目内の唯一の文節でなければなりません。各条件名記入項目は、先行の条件変数と関連付けられます。したがって、レベル 88 記入項目の前には必ず、条件変数に関する

記入項目、あるいは 1 つの条件変数にいくつもの条件名が適用されている場合、別のレベル 88 記入項目がなければなりません。そのようなレベル 88 記入項目はそれぞれ、その条件変数の PICTURE 特性を暗黙指定されます。

- 特定の条件変数に関連した条件名記入項目は、その条件変数記入項目のすぐ後になければなりません。条件変数は、次に示すもの以外の任意のデータ記述記入項目とすることができます。
 - レベル 66 項目 (RENAMES 文節)
 - USAGE IS INDEX を指定されたデータ項目
 - USAGE IS POINTER または PROCEDURE-POINTER を指定された項目
- 条件名は、グループ項目データ記述記入項目と関連付けることができます。この場合、以下のとおりです。
 - 条件名の値は、非数字リテラルまたは表意定数として指定しなければなりません。
 - 条件名の値のサイズは、グループ内すべての基本項目のサイズの合計を超えてはなりません。
 - グループ内のどのエレメントにも、JUSTIFIED または SYNCHRONIZED 文節を含めることはできません。
 - DISPLAY 以外の USAGE をグループ内で指定することはできません。
- 条件名は、グループ・レベルと、そのグループ内の従属レベルの両方で指定できます。
- グループ・レベルでの条件名の定義によって暗示される比較テストは、グループ内の基本項目の性質とは無関係に、非数字オペランドの比較の規則に従って行われます。

IBM 拡張

- VALUE 文節は、内部浮動小数点データ項目に対して使用できます。
- VALUE 文節は、DBCS 項目に対して使用できます。DBCS データ項目の比較テストは、DBCS 項目の比較の規則に従って実行されます。
- VALUE 文節は、国別項目に対して使用できます。国別データ項目の比較テストは、国別項目の比較の規則に従って実行されます。
- 条件名は、日付、時間、またはタイム・スタンプの項目に関連付けることができます。この場合、以下のとおりです。
 - 条件名の値は非数字リテラルとして指定しなければなりません。
 - 各条件名は、それぞれ条件変数の FORMAT 特性を暗黙的に持っています。したがって、この条件名を使用する比較テストは、すべて日時クラスの項目の比較に関する規則にしたがって行われます。
 - THROUGH 句は、条件変数が日時クラスの条件変数であるときに指定することができます。この場合、リテラル-1 の時刻または日付はリテラル-2 よりも小さくなければなりません。

IBM 拡張 の終り

- スペース、分離文字コンマ、あるいは分離文字セミコロンで、連続するオペランドを区切らなければなりません。

- 各記入項目は、分離文字ピリオドで終わる必要があります。
- 条件名記入項目のリテラルのタイプは、その条件変数のデータ・タイプと矛盾してはなりません。

VALUE 文節 - 形式 3 - NULL 値



注:

1 IBM 拡張

この形式は、ポインター・データ項目またはプロシージャ・ポインター・データ項目に対して有効ではないアドレスを割り当てます。 NULL 値は未定義です。

VALUE IS NULL は、暗黙的にまたは明示的に USAGE IS POINTER または USAGE IS PROCEDURE-POINTER として記述された基本項目に対してだけ指定できます。

IBM 拡張 の終り

第 6 部 手続き部

第 13 章 手続き部

手続き部は、COBOL ソース・プログラムではオプションです。手続き部はオプションの宣言で構成され、その処理には、セクションまたは段落あるいはその両方、文、およびステートメントが含まれます。

手続き部の構造は、以下のとおりです。

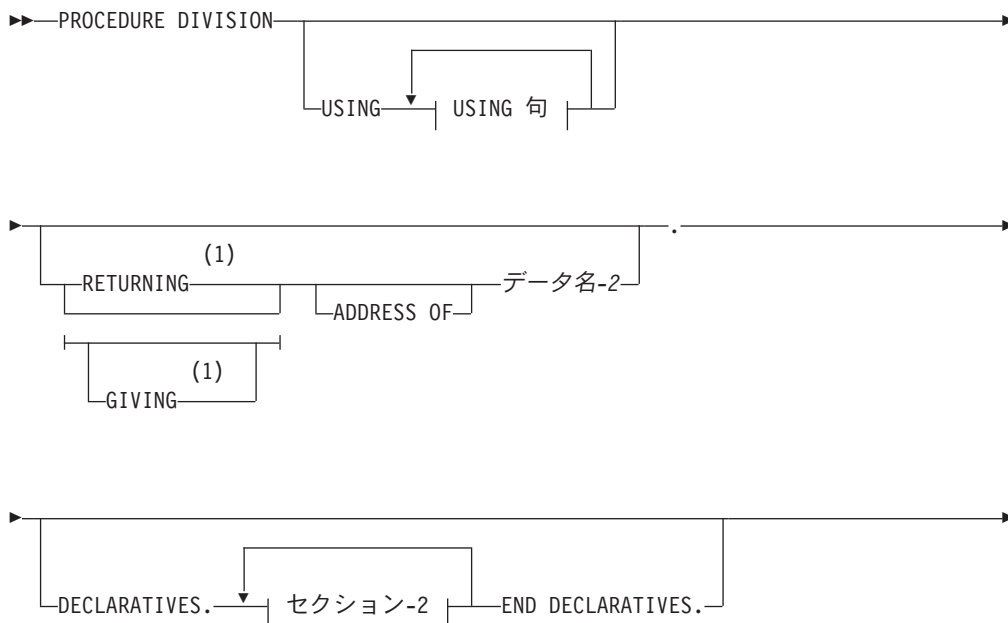
- 形式 1 - セクションと段落あり
- 形式 2 - 段落のみ

実行は、手続き部の宣言以外の最初のステートメントから始まります。ステートメントは、規則によって別の実行順序が決まる場合を除いて、コンパイルに渡される順序で実行されます。

手続き部は、END PROGRAM ヘッダーの位置、すなわち次の COBOL ソース・プログラムの先頭の手前、またはプログラムの物理的な終わりで終了します。プログラムの物理的な終わりとは、ソース・プログラムにおいてこれ以上ステートメントが現れない物理的な位置のことです。

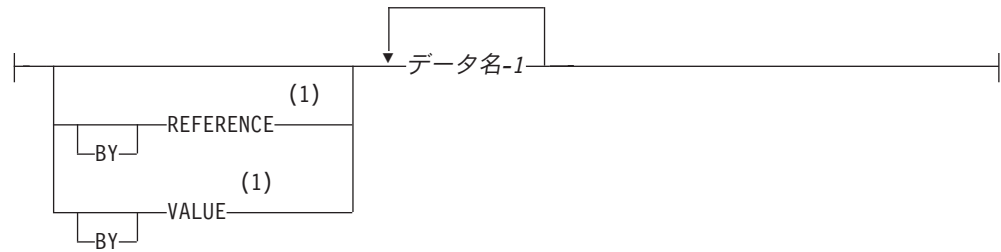
形式 1 - セクションと段落あり

手続き部 - 形式 1

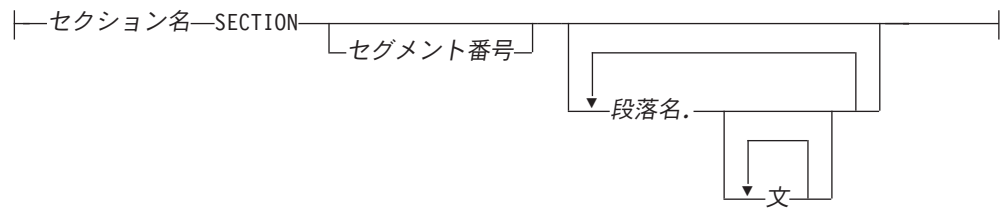




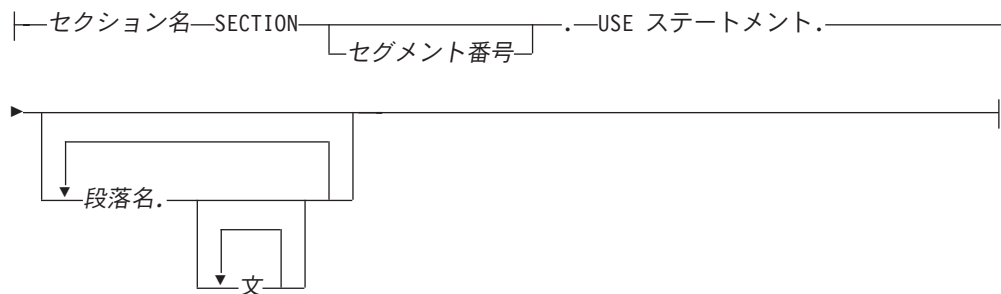
USING 句:



セクション-1:



セクション-2:



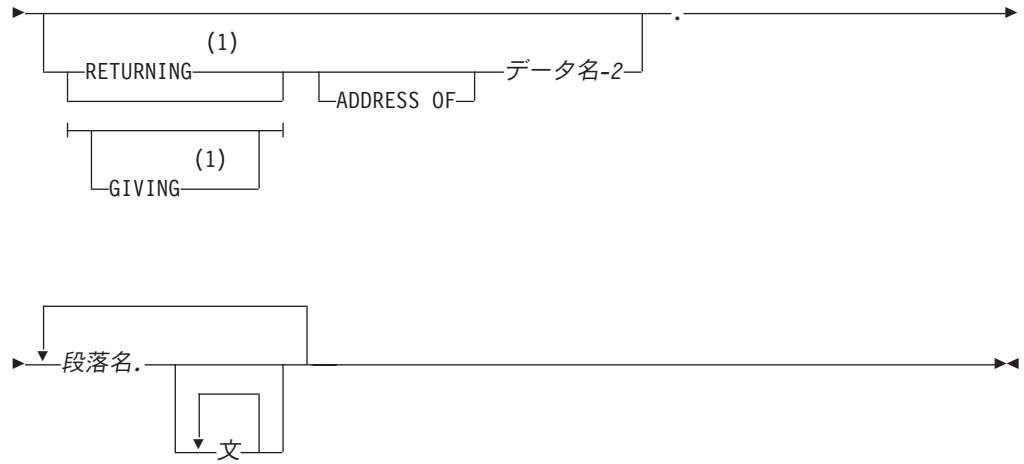
注:

1 IBM 拡張

形式 2 - 段落のみ

手続き部 - 形式 2





注:

1 IBM 拡張

```
SEQNBR -A 1 B..+....2....+....3....+....4....+....5....+....6....+....7..
```

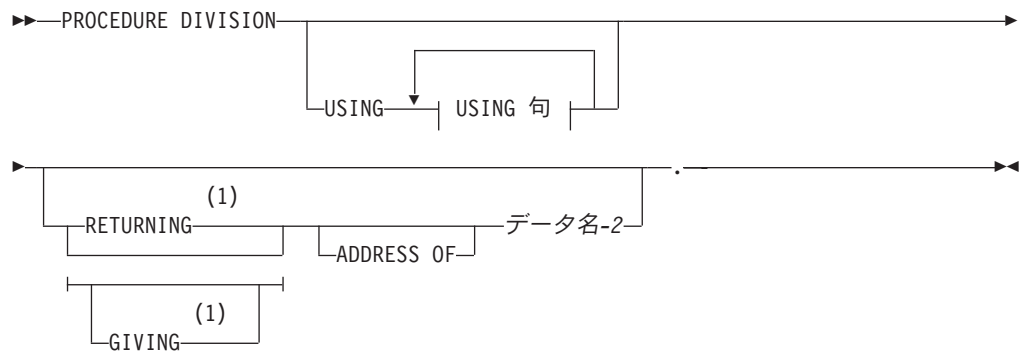
```
004010 PROCEDURE DIVISION.
004020 DECLARATIVES.
004030 SECTION-NAME SECTION.
004040 PARAGRAPH-NAMES.
004050 PROGRAMMING STATEMENTS.
004060* COMMENTS.
004070 END DECLARATIVES.
004080 SECTION-NAME SECTION.
004090 PARAGRAPH-NAME.
004100 PROGRAMMING STATEMENTS.
```

図 14. 手続き部の構成を示すコーディング例

手続き部ヘッダー

手続き部が指定される場合には、次のヘッダーによって識別されます。

手続き部 - ヘッダー - 形式



注:

1 IBM 拡張

USING 句は、オブジェクト・プログラムが CALL ステートメントによって呼び出され、そのステートメントに USING 句が入っている場合にだけ必要とされます。

USING 句

USING 句は、呼び出し側プログラムで定義されているデータ項目を、呼び出し先サブプログラムで使用可能にします。

USING 句に関する以下の規則は、呼び出し側プログラムと呼び出し先プログラムが COBOL でコーディングされていることを前提にしています。

- USING 句を手続き部ヘッダーで指定するのは、このプログラムが USING 句を含んでいる CALL ステートメントによって呼び出されるサブプログラムである場合に限られます。すなわち、呼び出し側プログラム中の CALL USING ステートメントごとにそれに対応する USING 句が、呼び出し先サブプログラムに指定されている必要があります。
- USING 句は、呼び出し先サブプログラムの手続き部ヘッダーの中で有効です。
- 各 USING ID は、呼び出し先サブプログラムのリンケージ・セクションの中でレベル 01 またはレベル 77 の項目として定義されなければなりません。
- USING ID に REDEFINES 文節を含めることはできません。
- 特定のユーザー定義語をデータ名-1 として複数回表示することはできません。
- 呼び出し側プログラムにおいては、USING 句は CALL ステートメントに対して有効となります。つまり、各 USING ID はデータ部にレベル 01、レベル 77、または基本項目のいずれかとして定義されている必要があります。
- プログラムがプログラムの LINKAGE TYPE で呼び出される場合のデータ名の指定可能な最大数は 255 です。また、プロシージャーの LINKAGE TYPE で呼び出されたプログラムについては、データ名の最大数は 400 です。
- 呼び出し側サブプログラムおよび呼び出し先サブプログラムの両方で USING ID の現れる順序によって、両方のプログラムで使用可能なデータの対応付けが行われます。対応は位置によるものであり、名前によるものではありません。対応する ID は、文字数が同じでなければなりません、データ記述が同じである必要はありません。さらに指標名の場合、対応付けはなされません。これは、呼び出し側プログラムと呼び出し先プログラムにおける指標名が常に別々の指標を参照するためです。
- CALL USING ステートメントに指定される ID は、呼び出し側プログラムで使用可能なデータ項目の名前となり、呼び出し先プログラムの中でそのデータ項目を参照できます。また、ある特定の ID は複数回現れます。これらの項目は、データ部の任意のセクションで定義しておきます。
- GLOBAL 文節を含む USING ID は、コンパイル単位のただ 1 つの「手続き部」のヘッダーで指定することができます。

- ID は、手続き部の USING 句で複数回現れることがあります。その場合には、CALL USING ステートメントによって渡される最後の値が使用されます。

IBM 拡張 の終り

- 呼び出し先プログラムのリンケージ・セクションに定義されたデータ項目は、そのプログラムの手続き部の中で参照できます。ただし、それは以下のいずれかの条件を満たしている場合に限られます。
 - 手続き部ヘッダーの USING 句のオペランドである。
 - REDEFINES または RENAMES 文節で定義され、そのオブジェクトが上の条件を満たす。

IBM 拡張

- ADDRESS OF 特殊レジスタの引数として使用されている。

IBM 拡張 の終り

- 上記の規則の条件を満たす項目に従属している。
- 上記の条件のいずれかを満たしているデータ項目に関連した条件名または指標名である。

BY REFERENCE

IBM 拡張

BY REFERENCE 句は、別の BY REFERENCE または BY VALUE 句により指定変更されるまで、その後続くすべてのパラメーターに適用されます。

CALL 引数が BY CONTENT または REFERENCE により渡される場合、BY REFERENCE を PROCEDURE DIVISION ヘッダーでの対応する形式のパラメーターに対して指定するか、または暗黙に指定する必要があります。

BY REFERENCE と BY VALUE のどちらも指定されていない場合には、BY REFERENCE がデフォルトとなります。

BY REFERENCE 句を使用して、内部浮動小数点または外部浮動小数点、DBCS、日付、時刻、あるいはタイム・スタンプのデータ項目を渡すことができます。

IBM 拡張 の終り

BY VALUE

IBM 拡張

BY VALUE 句は、別の BY VALUE または BY REFERENCE 句により指定変更されるまで、その後続くすべてのパラメーターに適用されます。

BY VALUE 句を使用して、内部浮動小数点または外部浮動小数点、日付、時刻、あるいはタイム・スタンプのデータ項目を渡すことができます。

IBM 拡張 の終り

GIVING/RETURNING 句

IBM 拡張

GIVING と RETURNING は同等です。

データ名-2

データ名-2 は、出力専用のパラメーターです。プログラムの結果として戻されるデータ項目を指定します。データ名-2 は、リンケージまたは作業用ストレージ・セクションに定義しなければなりません。添え字を付けたり参照変更することはできません。

データ名-2 は、内部浮動小数点または外部浮動小数点、DBCS、日付、時刻、あるいはタイム・スタンプのデータ項目のうちのどれであってもかまいません。

プログラムがその呼び出し側に戻されると、データ名-2 の値は CALL RETURNING 句に指定された ID に暗黙に保管されます。

RETURNING 句の存在は、RETURN-CODE 特殊レジスターの設定には影響しません。

呼び出し側プログラムが COBOL の場合、CALL ステートメントの GIVING/RETURNING 句を指定する必要があります。さらに、その呼び出し側プログラム内のデータ名 2 とそれに対応する CALL RETURNING ID は、同じ数の文字位置で、かつ同じ USAGE 文節、SIGN 文節およびカテゴリーのものでなければなりません。

PROCEDURE DIVISION RETURNING 句は主プログラムでは使用しないでください。予期しない結果となります。PROCEDURE DIVISION RETURNING 句を指定できるのは、呼び出し先サブプログラムだけです。主プログラムでは、操作環境に値を戻す RETURN-CODE 特殊レジスターを使用してください。

ADDRESS OF 特殊レジスター

この特殊レジスターについては 141 ページを参照してください。

IBM 拡張 の終り

宣言

宣言には、例外条件が発生した場合に実行する 1 つまたは複数の特別な目的のセクションを記述します。

宣言セクションを指定するときは、手続き部の始めに一連の宣言セクションとしてまとめて指定しなければならず、また手続き部の全体もいくつかのセクションに分割する必要があります。

各宣言セクションの先頭にはそのセクションの関数を示す USE 文があり、それ以降の部分に記述される一連のプロシージャーは、例外条件が発生した場合に取るべき処置を指定するものです。それぞれの宣言セクションは、別のセクション名とその後の USE 文で終わるか、または END DECLARATIVES というキーワードで終わります。USE ステートメントの詳細は 667 ページの『USE ステートメント』を参照してください。GLOBAL 句の使用については 669 ページの『ネストされたプログラムについての優先順位規則』を参照してください。

宣言セクションのグループ全体の前にはキーワード DECLARATIVES が、手続き部ヘッダーの下の方に指定されています。また、このグループの終わりにはキーワード END DECLARATIVES が指定されています。キーワード DECLARATIVES と END DECLARATIVES は区域 A から始め、キーワードの後には分離文字としてピリオドを指定する必要があります。同じ行に他のテキストがあってはなりません。

手続き部の宣言部分において、各セクション・ヘッダー (オプションであるセグメント番号のある) の後には分離文字のピリオド、USE 文、そして分離文字のピリオドの順に指定する必要があります。同じ行に他のテキストがあってはなりません。

USE 文自体は実行されることはありません。その代わりに、USE 文にはその後ろにあるプロシージャーの段落を実行する条件を定義し、取るべき処置を指定します。このプロシージャーの実行後に、それを実行したルーチンに制御が戻されます。

宣言プロシージャーの中では、非宣言のプロシージャーに対する参照があってはなりません。

USE ステートメントに関連したプロシージャー名は、別の宣言セクションで参照したり、または PERFORM ステートメントだけが指定されている非宣言プロシージャーで参照できます。

宣言は別の宣言からの、または COBOL プログラムの非宣言からの別個の呼び出しとして実行されます。「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」のエラー処理の章に記載されている宣言の使用に関するセクションを参照してください。

宣言プロシージャーの中では、以前に呼び出されてまだ呼び出しルーチンに制御を戻していない USE プロシージャーを実行させるようなステートメントがあってはなりません。

宣言プロシージャーは最後のステートメントが実行されると、そのプロシージャーは終了します。

プロシージャー

手続き部の中のプロシージャーは、次のものから構成されます。

- 1 つのセクションまたはセクションのグループ
- 1 つの段落または段落のグループ

注: COBOL プロシージャーと ILE プロシージャー (ILE COBOL のソース・プログラム) とを混同しないでください。

プロシージャ名は、セクションまたは段落を識別するユーザー定義名です。

セクション

セクションは、1 つのセクション・ヘッダーで構成され、その後にオプションで、1 つまたは複数の段落が続きます。セクション・ヘッダーはセクション名であり、その後、SECTION というキーワード、セグメント番号 (指定はオプション)、および分離文字のピリオドが続きます。セクション・ヘッダーの先頭は区域 A になければなりません。セグメント番号については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」で説明しています。

セクション名とは、セクションを識別するためのユーザー定義の語のことです。セクション名を参照する場合、セクション名は修飾できないので、そのセクション名が定義されているプログラム内で固有なものでなければなりません。

セクションは、次のセクション・ヘッダーの直前か、手続き部の終わり、あるいは宣言の中ではキーワード END DECLARATIVES で終わります。

段落

段落は、段落名の後に分離文字のピリオドがあり、場合によってはその後にさらに 1 つまたは複数の文が続くという構成になっています。

段落名とは、段落を識別するためのユーザー定義語のことです。段落名は修飾することができるので、固有なものにする必要はありません。段落名は区域 A で始めなければなりません。段落は次の段落名かセクション・ヘッダーの直前で、あるいは手続き部の終わりで終了します。また宣言においては、段落が終了するのは次の段落、次の USE ステートメント、あるいはキーワード END DECLARATIVES の直前です。プログラム中にある段落がセクションに含まれている場合、そのプログラムのすべての段落はセクションに含まれていなければなりません。

文

文は、分離文字のピリオドで終わる 1 つまたは複数のステートメントで構成されています。

ステートメント

ステートメントとは、ID や記号 (リテラル、関係演算子など) の構文的に有効な組み合わせのことで、その先頭に COBOL verb が指定されているものです。

実行は、手続き部の宣言以外の最初のステートメントから始まります。ステートメントは、規則によって別の実行順序が決まる場合を除いて、コンパイルに渡される順序で実行されます。

手続き部は、プログラムの物理的な終わり、つまりソース・プログラムにおいてこれ以上ステートメントが現れない物理的な位置で終わります。

ID

ID とは、データ項目を指名する構文的に正しい組み合わせのデータ名に、修飾子、添え字、および固有な参照ができるよう必要に応じて参照修飾子が指定されたものです。手続き部の参照では必ず (クラス・テストまたはテスト組み込み関数内の関

数引数の場合は除く)、ID の内容と PICTURE 文節または FORMAT 文節によって指定されたクラスと互換性がなければなりません。そうでないと、予想し得ない結果になります。

手続き部のサンプル・ステートメント

```
. 1 ... .. 2 ... .. 3 ... .. 4 ... .. 5 ... .. 6 ... .. 7

PROCEDURE DIVISION.
DECLARATIVES.
ERROR-IT SECTION.
    USE AFTER STANDARD ERROR PROCEDURE ON INPUT-DATA.
ERROR-ROUTINE.
    IF CHECK-IT = "30" ADD 1 TO DECLARATIVE-ERRORS.
END DECLARATIVES.
BEGIN-NON-DECLARATIVES SECTION.
100-BEGIN-IT.
    OPEN INPUT INPUT-DATA OUTPUT REPORT-OUT.
110-READ-IT.
    READ INPUT-DATA RECORD
        AT END MOVE "Y" TO EOF-SW.
    IF EOF-SW NOT = "Y" ADD 1 TO RECORDS-IN.
200-MAIN-ROUTINE.
    PERFORM PROCESS-DATA UNTIL EOF-SW = "Y".
    PERFORM FINAL-REPORT THRU FINAL-REPORT-EXIT.
    DISPLAY "TOTAL RECORDS IN = " RECORDS-IN
        UPON WORK-STATION.
    DISPLAY "DECLARATIVE ERRORS = " DECLARATIVE-ERRORS
        UPON WORK-STATION.
STOP RUN.
PROCESS-DATA.
    IF RECORD-ID = "G"
        PERFORM PROCESS-GEN-INFO
    ELSE
        IF RECORD-CODE = "C"
            PERFORM PROCESS-SALES-DATA
        ELSE
            PERFORM UNKNOWN-RECORD-TYPE.
```

算術式

値を計算する式のこと、計算された値は条件ステートメントや算術ステートメントでオペランドとして使用されることがあります。算術式は、厳密な階層と優先順位に従ってオペランドと演算子から構成されます。

一般に、算術式は以下のものを指します。

1. 以下のような基本数字項目
 - 数字リテラル (整数または小数)
 - 基本数字項目として記述された ID
 - 表意定数 ZERO (ZEROS、ZEROES)
 - 数字関数
2. 括弧で囲まれた算術式
3. 単項演算子 (+、-) の後にある算術式
4. 2 項算術演算子 (+、-、*、/、**) が間にある 2 つの算術式

算術式の中に現れる ID とリテラルは、算術を行うことのできる基本数字項目または数字リテラルのいずれかを表していなければなりません。

指数式

指数式が正の数と負の数の両方として評価される場合、結果は常に正の数になります。たとえば 4 の平方根は、常に +2 となります。

累乗される式の値がゼロである場合は、指数はゼロより大きい値を持たなければなりません。そうでない場合は、サイズ・エラー条件になります。式の結果が実数にならない場合は、いずれもサイズ・エラー条件になります。

値 2 のリテラル整数が指数でない限り、指数演算の結果は 13 桁目の小数部までで切り捨てられます。指数が非整数の場合、指数演算の結果は 7 桁まで正確です。

算術演算子

算術式では、5 つの 2 項算術演算子と 2 つの単項算術演算子を使用できます。それらは特殊文字によって表され、特殊文字の前後にはそれぞれ 1 つのスペースがなければなりません。

2 項演算子 意味

+	加算
-	減算
*	乗算
/	除算
**	累乗

単項演算子 意味

+	+1 を乗算
-	-1 を乗算

括弧を使用することにより、複雑な式における評価の順序を強調または変更できます。これは、読みやすさと保守しやすさの両方を向上させるものとなります。

括弧は左右を組み合わせて使用する必要があります、また左括弧はそれに対応する右括弧より前になければなりません。

括弧内の式が最初に評価され、括弧のついた組み合わせが他の組み合わせの中でネストされていることもあります。評価は、最も内側にある組み合わせから順に外側に向かって行われていきます。

評価の順序が括弧により明示されていないなら、以下に示す階層に従って左から右の順に式が評価されます。

1. 単項演算子
2. 累乗
3. 乗算および除算
4. 加算および減算

算術式は、左括弧、単項演算式、またはオペランド (ID やリテラル) でだけ始めることができます。また、右括弧またはオペランドでだけ終わらせることができます。算術式では、ID またはリテラルが少なくとも 1 回は参照されていなければなりません。

算術式の最初の演算子が単項演算子の場合、その算術式が ID あるいは別の算術式の直後にある場合には、その演算子は左括弧のすぐ後に来なければなりません。

表 19 は、対にできる算術記号を示しています。算術記号の対とは、そのような 2 つの記号を連続して組み合わせたものです。以下の表では、次のように表記しています。

可 対にできることを示します。

不可 対にできないことを示します。

表 19. 算術記号の有効な対

最初の記号	2 番目の記号				
	ID または リテラル	* / ** + -	単項 + または 単項 -	()
ID またはリテラル	No	Yes	No	No	Yes
* / ** + -	Yes	No	Yes	Yes	No
単項 + または単項 -	Yes	No	No	Yes	No
(Yes	No	Yes	Yes	No
)	No	Yes	No	No	Yes

条件式

条件式を使用すると、オブジェクト・プログラムは、テストの真理値に従って制御の代替パスを選択できます。条件式は、EVALUATE、IF、PERFORM、または SEARCH ステートメントの中で指定します。

条件式は以下のいずれかとして指定できます。

- 単純条件
- 複合条件

単純条件と複合条件は両方とも任意の数の括弧の対で囲むことができますが、括弧によって、単純条件であるか複合条件であるかが変更されることはありません。

単純条件

次の 5 つの単純条件があります。

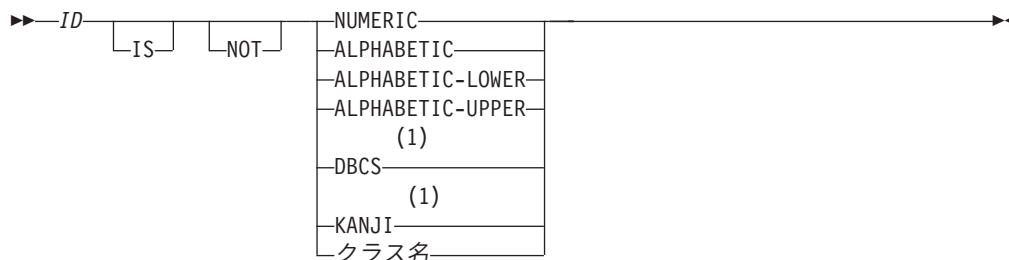
- クラス条件
- 条件名条件
- 比較条件
- 符号条件
- スイッチ状況条件

単純条件は、真か偽のいずれかの真理値をとります。

クラス条件

クラス条件は、データ項目の内容が英字、英小文字、英大文字、数字であるか、あるいは環境部の SPECIAL NAMES 段落で定義されているように CLASS 文節によって指定された一連の文字の中の文字だけを含んでいるのかを識別します。

クラス条件 - 形式



注:

1 IBM 拡張

ID 使用法が DISPLAY であるデータ項目を参照する必要があります。ID が長さゼロのグループ項目であり、さらにそれがクラス条件で指定されていないと、結果は常に真となります。NOT が指定されていないと、結果は常に偽となります。

ID が関数 ID である場合は、その参照対象は英数字、DBCS、または日時の関数でなければなりません。

NOT

これが使用された場合、NOT および次のキーワードは真理値によって実行されるクラス・テストを定義します。たとえば、NOT NUMERIC は、データ項目が非数字かどうかを判別する真偽テストです。

NUMERIC

このデータ項目は全体として 0 ~ 9 の文字で構成されており、演算符号は含まれていることもいないこともあります。

テストされる項目の PICTURE に演算符号が含まれていないなら、内容が数字で演算符号が存在しない場合にだけ、その項目は数字であると判別されます。

テストされる項目の PICTURE に演算符号が含まれているときは、その項目が基本項目であり、内容が数字で、しかも有効な演算符号が存在する場合にだけ、その項目は数字であると判別されます。

EBCDIC 文字セットにおいて有効な正の組み込み演算符号は、16 進数の F、C、E、A です。また、負の符号は 16 進数の D と B です。なお、推奨する正の符号は 16 進数の F、負の符号は 16 進数の D となっています。SIGN IS SEPARATE 文節に記述される項目の場合、有効な演算符号は + (16 進 4E) と - (16 進 60) です。

IBM 拡張

数字および日時のデータ項目の場合、テストされている ID は、USAGE DISPLAY、USAGE PACKED-DECIMAL、USAGE COMP、または USAGE COMP-3 として明示的あるいは暗黙に記述できます。

IBM 拡張 の終り

ALPHABETIC

ID が参照するデータ項目は、A ~ Z の大小の英文字とスペースの組み合わせで全体が構成されます。

ALPHABETIC-LOWER

ID が参照するデータ項目は、a ~ z の英小文字とスペースの組み合わせで全体が構成されます。

ALPHABETIC-UPPER

ID が参照するデータ項目は、A ~ Z の英大文字とスペースの組み合わせで全体が構成されます。

クラス名

ID が参照するデータ項目は、SPECIAL-NAMES 段落のクラス名の定義に列挙される文字で全体が構成されます。

クラス名テストは、数字として記述された ID に使用してはなりません。

IBM 拡張**DBCS**

ID は、以下の規則に従って DBCS 文字で全体が構成されます。

- DBCS データ項目の場合、テストされている ID は USAGE DISPLAY-1 として明示的あるいは暗黙に記述しなければなりません。
- DBCS 文字表示に有効な項目のデータ位置で、範囲検査が行われます。有効範囲はいずれのバイトとも X'41' ~ X'FE' です。X'4040' は DBCS ブランクです。

KANJI

ID は、以下の規則に従って DBCS 文字で全体が構成されます。

- DBCS データ項目の場合、テストされている ID は USAGE DISPLAY-1 として明示的あるいは暗黙に記述しなければなりません。
- DBCS 文字表示に有効な項目のデータ位置で、範囲検査が行われます。有効範囲は、最初のバイトは X'41' ~ X'7F'、2 番目のバイトは X'41' ~ X'FE' です。X'4040' は DBCS ブランクです。

IBM 拡張 の終り

クラス・テストは、使用法が INDEX、POINTER、PROCEDURE-POINTER のいずれかである項目では有効ではありません。これらの項目はどのクラスやカテゴリーにも属さないからです。

IBM 拡張

クラス条件は、外部の浮動小数点項目 (USAGE DISPLAY) または内部浮動小数点項目 (USAGE COMP-1 および USAGE COMP-2) には使用できません。

IBM 拡張 の終り

270 ページの表 20 に、クラス・テストの有効な形式を示します。

条件式

表 20. クラス・テストの有効な形式

ID のタイプ	クラス・テストの有効な形式	
英字	ALPHABETIC ALPHABETIC-LOWER ALPHABETIC-UPPER クラス名	NOT ALPHABETIC NOT ALPHABETIC-LOWER NOT ALPHABETIC-UPPER NOT クラス名
英数字、 英数字編集、 または数字編集	ALPHABETIC ALPHABETIC-LOWER ALPHABETIC-UPPER NUMERIC クラス名	NOT ALPHABETIC NOT ALPHABETIC-LOWER NOT ALPHABETIC-UPPER NOT NUMERIC NOT クラス名
外部 10 進数 内部 10 進数	NUMERIC	NOT NUMERIC
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張</p> </div> DBCS DBCS 編集 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</p> </div>	DBCS KANJI	NOT DBCS NOT KANJI
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張</p> </div> 日時 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p style="text-align: center;">IBM 拡張 の終り</p> </div>	NUMERIC クラス名	NOT NUMERIC NOT クラス名

条件名条件

条件名条件は、条件変数をテストして、条件変数の値が条件名に関連した任意の値に等しいかを判別します。

条件名条件 - 形式

▶▶—条件名——▶▶

条件名は、比較条件のための略語として条件の中に使用されます。条件変数と条件名の値を比較する際の規則は、比較条件に関して示されている規則と同じです。

条件名が値の範囲（またはいくつかの範囲）に結び付けられている場合、条件変数は、その値が範囲内（両端の値も含めて）に入っているかどうかテストされます。このテストの結果が真となるのは、条件名に対応する値の 1 つが、関連する条件変数の値に等しい場合です。

IBM 拡張

条件名には、浮動小数点値および DBCS 値が使用できます。

IBM 拡張 の終り

次の例は、条件変数および条件名の使用を図示しています。

```
01 NUMBER          PIC 99.
88 FIVE            VALUE 5.
88 ONE-DIGIT-EVEN VALUE 0, 2, 4, 6, 8
88 TWO-DIGIT-NUMBER VALUE 10 THRU 99
```

NUMBER は条件変数であり、FIVE、ONE-DIGIT-EVEN、TWO-DIGIT-NUMBER は条件名です。

次の IF ステートメントは、上記の例に追加して、特定のレコードの年齢グループを判別できます。

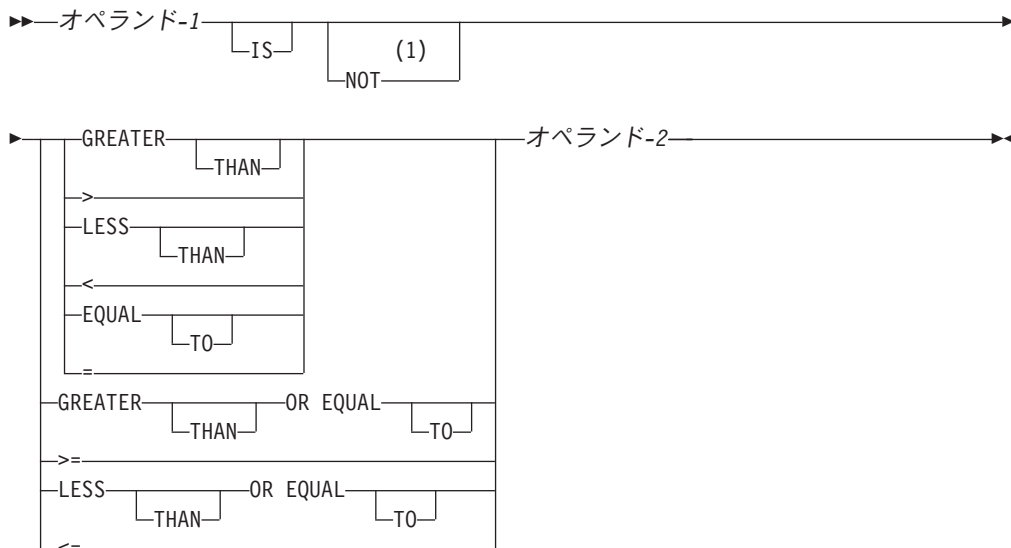
```
IF FIVE...          (値 5 のテスト)
IF ONE-DIGIT-EVEN  (値 0, 2, 4, 6, 8 のテスト)
IF TWO-DIGIT-NUMBER (値 10 ~ 99 のテスト)
```

この条件名条件のテスト結果によって、オブジェクト・プログラムがいずれかの実行代替パスに進みます。

比較条件

比較条件は 2 つのオペランドを比較し、どちらが ID、リテラル、算術式、指標名、または関数 ID にできるかを調べます。比較条件は少なくとも 1 つの ID を参照しなければなりません。

比較条件 - 形式



注:

- 1 NOT GREATER THAN OR EQUAL TO, NOT >=, NOT LESS THAN OR EQUAL TO, および NOT <= は IBM 拡張です。

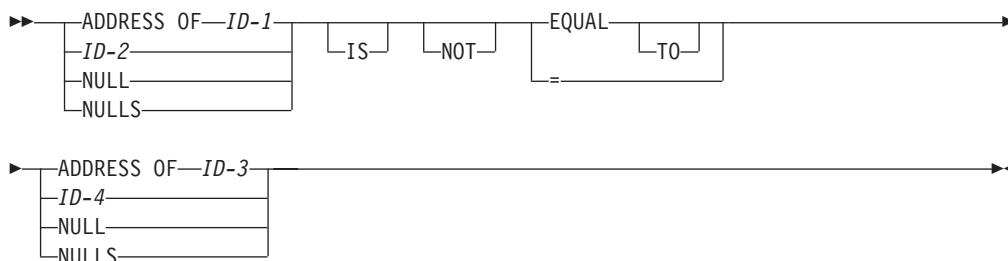
オペランド-1

比較条件のサブジェクト。ID、リテラル、関数 ID、算術式、または指標名です。

ポインター・データ項目を指定すると、EQUAL および NOT EQUAL だけが関係演算子として使用できます。比較において使用される 2 つのアドレスがどちらも同じ保管場所にある場合、オペランドは等しくなります。

この比較条件は、IF、PERFORM、EVALUATE、および SEARCH 形式 1 のステートメントの中で認められています。SEARCH 形式 2 (SEARCH ALL) ステートメントでは認められていません。それは、ポインター・データ項目に適用できる、意味のある配列がないからです。

ADDRESS 比較 - 形式



ID-1、ID-3

データ部セクションに定義されている任意のレベル項目 (レベル 66 と 88 を除く) を指定できます。

ID-2、ID-4

これは、USAGE IS POINTER として記述されていなければなりません。

NULL(S)

他のオペランドが以下のいずれかであるときだけ使用できます。

- 使用法が POINTER である項目
- ADDRESS OF 項目
- ADDRESS OF 特殊レジスター

つまり、NULL=NULL は使用できません。

IBM 拡張 の終り

プロシージャ・ポインター・データ項目:

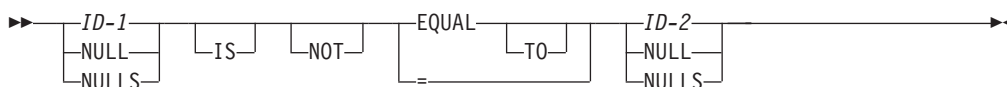
IBM 拡張

プロシージャ・ポインター・データ項目は、USAGE IS PROCEDURE-POINTER として明示的に定義されます。

プロシージャ・ポインター・データ項目を指定すると、EQUAL および NOT EQUAL だけが関係演算子として使用できます。比較において使用される 2 つのアドレスがどちらも同じ保管場所にある場合、オペランドは等しくなります。

この比較条件は、IF、PERFORM、EVALUATE、および SEARCH 形式 1 のステートメントの中で認められています。しかし、SEARCH 形式 2 (SEARCH ALL) ステートメントでは認められていません。それは、プロシージャ・ポインター・データ項目に適用できる、意味のある配列がないからです。

プロシージャ・ポインター比較 - 形式



ID-1、ID-2

USAGE IS PROCEDURE-POINTER として記述する必要があります (詳しくは 247 ページの『PROCEDURE-POINTER 句』を参照)。

NULL(S)

他のオペランドが USAGE IS PROCEDURE-POINTER として定義されている場合に限り使用されます。 NULL=NULL は使用できません。

IBM 拡張 の終り

数字オペランドと非数字オペランドの比較

数字と非数字の比較の規則は、次の表にあります。オペランドのいずれかがグループ項目の場合、非数字比較の規則が適用されます。

表 21 は、非数字オペランド と比較できる項目を要約したものです。

275 ページの表 22 は、数字オペランド と比較できる項目を要約したものです。

表 21 および 275 ページの表 22 で使用されている記号は次のとおりです。

- NN = 非数字オペランドの比較
- NU = 数字オペランドの比較
- NL = 国別オペランドの比較
- NLN = 国別オペランドと非国別オペランドの比較
- DT = 日時オペランドの比較
- ブランク = 比較できない

表 21. 非数字の第 2 オペランドと比較できる項目

第 1 オペランド	第 2 オペランド												
	GR	AL	AN	ANE	NE	FC ¹	NNL	DB	DBE	DA	TI	TS	NL
非数字オペランド													
グループ (GR)	NN	NN	NN	NN	NN	NN	NN			NN	NN	NN	NN
英字 (AL)	NN	NN	NN	NN	NN	NN	NN						NLN
英数字 (AN)	NN	NN	NN	NN	NN	NN	NN			NN	NN	NN	NLN
英数字編集 (ANE)	NN	NN	NN	NN	NN	NN	NN			NN	NN	NN	
数字編集 (NE)	NN	NN	NN	NN	NN	NN	NN			NU	NU	NU	
表意定数 (FC ¹)	NN	NN	NN	NN	NN								NL ⁴
非数字リテラル (NNL)	NN	NN	NN	NN	NN					NN	NN	NN	NLN
DBCS 項目 (DB) ³								NN	NN				NLN
DBCS 編集項目 (DBE) ³								NN	NN				
日付 (DA) ³	NN		NN	NN	NU		NN			DT		DT	
時刻 (TI) ³	NN		NN	NN	NU		NN				DT	DT	

表 21. 非数字の第 2 オペランドと比較できる項目 (続き)

第 1 オペランド	第 2 オペランド												
	GR	AL	AN	ANE	NE	FC ¹	NNL	DB	DBE	DA	TI	TS	NL
タイム・スタンプ (TS) ³	NN		NN	NN	NU		NN			DT	DT	DT	
国別 (NL)	NN	NLN	NLN			NL ⁴	NLN	NLN					NL
数字オペランド													
表意定数 ZERO (ZR)	NN	NN	NN	NN	NN								
数字リテラル (NL)	NN	NN	NN	NN	NN					NU	NU	NU	
外部 10 進数 (ED) ²	NN	NN	NN	NN	NN	NN	NN			NU	NU	NU	
2 進数 (BI)										NU	NU	NU	
算術式 (AE)										NU	NU	NU	
ブール・データ項目または ブール・リテラル (BO) ³													
内部 10 進数 (ID)										NU	NU	NU	
内部浮動小数点 (IFP) ³													
外部浮動小数点 (EFP) ³	NN ³	NN ³	NN ³	NN ³	NN ³	NN ³	NN ³						
浮動小数点リテラル (FPL) ³													

表 22. 数字の第 2 オペランドと比較できる項目

第 1 オペランド	第 2 オペランド										
	ZR	NL	ED	BI	AE	BO	ID	IFP ³	EFP ³	FPL ³	
非数字オペランド											
グループ (GR)	NN	NN	NN ²						NN ³		
英字 (AL)	NN	NN	NN ²						NN ³		
英数字 (AN)	NN	NN	NN ²						NN ³		
英数字編集 (ANE)	NN	NN	NN ²						NN ³		
数字編集 (NE)	NN	NN	NN ²						NN ³		
表意定数 (FC ¹)			NN ²						NN ³		
非数字リテラル (NNL)			NN ²						NN ³		
日付 (DA)		NU	NU ²	NU	NU		NU				
時刻 (TI)		NU	NU ²	NU	NU		NU				
タイム・スタンプ (TS)		NU	NU ²	NU	NU		NU				
数字オペランド											
表意定数 ZERO (ZR)			NU	NU	NU	NU ³	NU	NU ³	NU ³		
数字リテラル (NL)			NU	NU	NU		NU	NU ³	NU ³		
外部 10 進数 (ED)	NU	NU	NU	NU	NU		NU	NU ³	NU ³	NU ³	
2 進数 (BI)	NU	NU	NU	NU	NU		NU	NU ³	NU ³	NU ³	
算術式 (AE)	NU	NU	NU	NU	NU		NU	NU ³	NU ³	NU ³	
ブール・データ項目またはブール・リテラル (BO) ³	NU ³					NU ³					
内部 10 進数 (ID)	NU	NU	NU	NU	NU		NU	NU ³	NU ³	NU ³	

条件式

表 22. 数字の第 2 オペランドと比較できる項目 (続き)

内部浮動小数点 (IFP) ³	NU ³	NU ³	NU ³	NU ³	NU ³		NU ³	NU ³	NU ³	NU ³
外部浮動小数点 (EFP) ³	NU ³	NU ³	NU ³	NU ³	NU ³		NU ³	NU ³	NU ³	NU ³
浮動小数点リテラル (FPL) ³			NU ³	NU ³	NU ³		NU ³	NU ³	NU ³	

274 ページの表 21 および 275 ページの表 22 の注

- 1 ZERO と NULL を除くすべての表意定数を含む
- 2 整数項目のみ
- 3 IBM 拡張
- 4 SPACE の場合のみ

数字オペランドの比較

数字オペランドの代数值が比較されます。

- オペランドの長さ (桁数) は無関係です。
- 符号なし数字オペランドは正であると見なされます。
- ゼロは、符号には関係なく固有値であると見なされます。
- 数字オペランドどうしは、それぞれに指定されている USAGE のタイプには関係なく、比較できます。

非数字オペランドの比較

非数字オペランドの比較は、使用されている文字セットの照合順序について行われます。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節が OBJECT-COMPUTER 段落に指定されている場合、SPECIAL-NAMES 段落の英字名文節に関係づけられている照合順序が使用されます。そうでなければ、固有 EBCDIC 文字セットが使用されます。

各オペランドのサイズは、そのオペランドの文字の合計数です。以下の 2 つの場合が考えられます。

両オペランドのサイズが等しい場合

2 つのオペランドの対応する位置にある文字どうしが、左端の文字から始めて右端の文字まで比較されます。

対応する文字どうしが最後まですべて等しければ、両オペランドは等しいと見なされます。

等しくない文字の組が検出されると、それら 2 つの文字の照合順序での相対位置が判定されます。照合順序での位置が高い方の文字を含むオペランドが、より大きいオペランドであると見なされます。

両オペランドのサイズが等しくない場合

2 つのオペランドのサイズが等しくないときは、あたかも短い方のオペランドが、長い方のオペランドのサイズに合わせてその右端がスペースで拡張されているかのようにして、比較されます。

数字および非数字オペランドの比較

上記で説明した非数字比較の規則が適用されます。さらに、数字オペランドと非数字オペランドを比較するときは、その USAGE は同じでなければなりません。そのような比較においては、以下の規則も適用されます。

- 数字オペランドは整数リテラルまたは整数データ項目として記述されていなければなりません。
- 非整数のリテラルやデータ項目を非数字オペランドと比較してはなりません。

IBM 拡張

- 外部浮動小数点項目は非数字オペランドと比較できます。

IBM 拡張 の終り

いずれかのオペランドがグループ項目であれば、上述の非数字比較の規則が適用されます。そのほかに、次の規則があります。

- 非数字オペランドがリテラルまたは基本データ項目である場合、数字オペランドはあたかもそれが同じサイズの英数字基本データ項目に移され、その後でこの英数字データ項目の内容が非数字オペランドと比較されるかのように取り扱われます。
- 非数字オペランドがグループ項目である場合、数字オペランドはあたかもそれが同じサイズのグループ項目に移され、その後でこのグループ項目の内容が非数字オペランドと比較されるかのように取り扱われます。

(424 ページの『MOVE ステートメント』を参照してください。)

ブール・オペランドの比較

IBM 拡張

ブール・オペランドは、[NOT] EQUAL TO 比較条件においてのみ使用されます。ブール・オペランドは、非ブール・オペランドと比較することはできません。ブール・データ項目およびリテラルは、1 文字位置の長さでなければなりません。2 つのブール・オペランドが共にブール 1 またはブール 0 の値を持つ場合には、この 2 つのオペランドは同等です。

IBM 拡張 の終り

DBCS オペランドの比較

IBM 拡張

DBCS または DBCS 編集オペランドの比較の規則は、非数字オペランドの比較の規則と同じです。その比較は、DBCS 文字の 16 進数値の 2 進数照合順序に基づいています。OBJECT-COMPUTER 段落の PROGRAM COLLATING 文節は、この比較には影響を及ぼしません。

IBM 拡張 の終り

国別オペランドの比較

IBM 拡張

クラスが NATIONAL であるオペランドは、クラスが NATIONAL である別のオペランドと比較することができます。このような比較の結果は、UCS-2 文字セットの 16 進数値の 2 進数照合順序に基づきます。2 つのオペランドのサイズが異なる場合、短い方のオペランドの右側が、埋め込み文字 (Padding Character) コンパイル・オプションまたは等価の処理オプションに指定されている埋め込み文字によって埋められます。デフォルトは UCS-2 の 2 バイト文字のスペース文字 (NX"3000") です。

IBM 拡張 の終り

国別オペランドと非国別オペランドの比較

IBM 拡張

クラスが NATIONAL であるオペランドは、英字データ項目、英数字データ項目、DBCS データ項目、非数字リテラル、または DBCS リテラルと比較することができます。

国別項目以外のデータ項目またはリテラルは、MOVE ステートメントの規則に従って、クラスが国別で、同じ論理的な長さである基本データ項目に移動された場合と同様に処理されます。それから、変換後の値が国別オペランドと比較されます。項目の長さが異なる場合、短い方の項目の右側が、埋め込み文字 (Padding Character) コンパイル・オプションまたは等価の処理オプションに指定されている埋め込み文字によって埋められます。デフォルトは、非国別オペランドが 1 バイト文字の項目である場合には、UCS-2 の 1 バイト文字のスペース文字であり、非国別オペランドが 2 バイト文字の項目である場合には、UCS-2 の 2 バイト文字のスペース文字 (NX"3000") です。

IBM 拡張 の終り

日時オペランドの比較

IBM 拡張

日時クラスの項目と非数字オペランド (数字編集オペランドを除く) との比較の場合は、日時項目は非数字項目であるかのように扱われます。

日時クラスの項目と数字編集オペランドまたは数字オペランドとの比較時には、日時項目は編集解除されます。編集解除の結果、この項目は 1 つの整数値となります。その後、この整数値は他のオペランドと数字として比較されます。

1 つの日時項目と別の日時項目との比較時には、これらの項目は最初に共通の日付形式、時刻形式、またはタイム・スタンプ形式に変換されてから比較されます。形式リテラルの一部であるが変換指定子ではない文字 (たとえば / または - などの文字) は、日時比較にまったく影響を及ぼしません。

日時項目とタイム・スタンプ項目との比較時には、タイム・スタンプの日付の部分だけが考慮されます。時刻項目とタイム・スタンプ項目との比較時には、タイム・スタンプの時刻の部分だけが考慮されます。

IBM 拡張 の終り

指標名と指標データ項目の比較

指標名または指標データ項目（またはその両方）を含んだ比較は、次の規則に従います。

- 2 つの指標名の比較の際には、対応するオカレンス番号の比較がなされます。
- 指標名とデータ項目（指標データ項目以外）の比較、あるいは指標名とリテラルの比較では、指標名のオカレンス番号がデータ項目かリテラルと比較されます。

IBM 拡張

- 指標名と算術式の比較では、指標名の値に対応するオカレンス番号と、算術式が比較されます。

算術式を使用できる場合であれば整数関数が使用できるため、この拡張によって、指標名と整数または数字関数を比較できます。

IBM 拡張 の終り

- 指標データ項目と指標名または別の指標データ項目との比較では、変換されることなく実際の値が比較されます。比較データ項目に関してその他の比較を行った場合、どのような結果になるかわかりません。

表 23 は、指標名および指標データ項目に関する有効な比較を示しています。

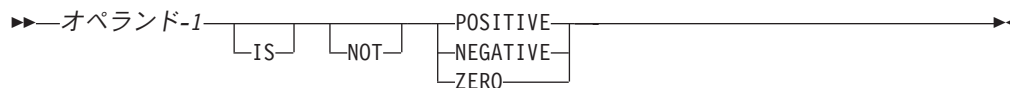
表 23. 指標名と指標データ項目についての比較

比較されるオペランド	指標名	指標データ項目	データ名	リテラル	算術式
指標名	オカレンス番号を比較	変換せずに比較	オカレンス番号とデータ名を比較	オカレンス番号とリテラルを比較	オカレンス番号と算術式を比較
指標データ項目	変換せずに比較	変換せずに比較	使用不可	使用不可	使用不可

符号条件

符号条件は、数字オペランドの代数値がゼロより大きいか、小さいか、または等しいかを判別します。

符号条件 - 形式



オペランド

数字 ID として定義されているか、または少なくとも 1 つの ID を参照している算術式として定義されていなければなりません。

IBM 拡張

オペランドは、浮動小数点 ID として定義できます。

IBM 拡張 の終り

符号のないオペランドは POSITIVE または ZERO です。

NOT

代数テストが実行され、符号条件の真理値を確かめます。たとえば、テストされたオペランドの値が正または負のときは、NOT ZERO は真であると見なされます。

スイッチ状況条件

スイッチ状況条件は UPSI スイッチの状況がオン、オフのどちらであることを識別するもので、条件名に関連した値をテストすることにより識別が行われます。(条件名に関係付けられた値は、英数字であると見なされています。) このテストの結果が真であるのは、UPSI スイッチが条件名に対応する値 (0 または 1) にセットされている場合です。

スイッチ状況条件 - 形式

▶—条件名—▶

条件名

SPECIAL-NAMES 段落に、UPSI スイッチの ON または OFF の値に関連させて定義する必要があります。(76 ページの『SPECIAL-NAMES 段落』を参照してください。)

複合条件

複合条件は、単純条件、結合条件、複合条件のうち、任意のものを論理演算子により結合するか、または論理否定することによって作られます。

それぞれの論理演算子の前後には、スペースが 1 つずつなければなりません。次の表は、論理演算子とその意味を示しています。

表 24. 論理演算子とその意味

論理演算子	名前	意味
AND	論理積	両方の条件が真であるときは、真理値は真である。
OR	包含 OR (包含論理和)	いずれか一方または両方の条件が真であるときに、真である。
NOT	論理否定	真理値の逆 (条件が偽であれば、真理値は真である)。

括弧で囲まれていない限り、次の規則が (番号の順で) 優先します。

1. 算術演算
2. 単純条件
3. NOT
4. AND
5. OR

複合条件 (括弧で囲まれているかどうかに関係なく) の真理値は、次の値のいずれかに関して、記述されたすべての論理演算子が相互に作用した結果の真理値です。

- 個々の単純条件の真理値
- 論理結合または論理否定された条件の中間真理値

複合条件は、次のいずれかとすることができます。

- 否定単純条件
- 結合条件 (否定が可能)

否定単純条件

単純条件を否定するには、論理演算子 NOT を使用します。否定単純条件は、単純条件の反対の真理値を与えます。

否定単純条件 - 形式

▶▶ NOT — 単純条件 —▶▶

結合条件

複数の条件を論理的に結合して、1 つの結合条件を作成できます。

結合条件 - 形式

▶▶ 条件-1 — AND — 条件-2 —▶▶
 ▶▶ 条件-1 — OR — 条件-2 —▶▶

次のどの条件でも結合できます。

- 単純条件
- 否定単純条件
- 結合条件
- 否定結合条件 (すなわち、NOT 論理演算子の後に、括弧で囲まれた結合条件を続けたもの)
- 前述の条件を組み合わせたもので、以下の表に示す規則に従って指定されます。

表 25. 結合条件 — 許されるエレメントの順序

結合条件のエ レメント	左端	左端ではない場合、 以下のものがその直 前に指定可能。	右端	右端ではない場合、 以下のものがその直 後に指定可能。
単純条件	あり	OR NOT AND (あり	OR AND)
OR AND	なし	単純条件)	なし	単純条件 NOT (
NOT	あり	OR AND (なし	単純条件 (
(あり	OR NOT AND (なし	単純条件 NOT (
)	なし	単純条件)	あり	OR AND)

1 つの結合条件の中で AND または OR のいずれか一方 (両方ではなく) を排他的に使用するとき、括弧は不要です。ただし、演算子およびオペランドの正しい論理関係を維持するために暗黙の優先規則を変更する場合には、括弧が必要になることがあります。

左括弧と右括弧は対になっていなければならず、それぞれの左括弧はそれに対応する右括弧より左側になければなりません。

以下の表は、論理演算子と条件 C1 と C2 の関係を示したものです。

表 26. 結合条件の論理演算子と演算結果

C1 の値	C2 の値	C1 AND C2	C1 OR C2	NOT (C1 AND C2)	NOT C1 AND C2	NOT (C1 OR C2)	NOT C1 OR C2
真	真	真	真	偽	偽	偽	真
偽	真	偽	真	真	真	偽	真
真	偽	偽	真	真	偽	偽	偽
偽	偽	偽	偽	真	偽	真	真

条件式の評価: 括弧を使用した場合には、結合条件の論理演算は次の順序で行われます。

1. 括弧内の条件が最初に評価されます。
2. 複数の括弧でネストされている場合には、最も内側の条件から最も外側の条件の順で評価が行われます。

括弧を使用しない場合 (あるいは、括弧のレベルが同順位でない場合) には、結合条件は次の順序で評価されます。

1. 算術式
2. 単純条件 (次の順序で)
 - a. 比較条件
 - b. クラス
 - c. 条件名
 - d. スイッチ状況
 - e. 符号条件
3. 否定単純条件 (項目 2 と同じ順序)
4. 結合条件 (次の順序で)
 - a. AND
 - b. OR
5. 否定結合条件 (次の順序で)
 - a. AND
 - b. OR
6. 同じ評価順序レベルの連続オペランドは、左から右へ評価されます。ただし、結合条件の真理値は、コンポーネントのすべての条件の真理値を評価せずに決定されることがあります。

結合条件のコンポーネントである条件は、左から右へ評価されます。ある条件の真理値が、結合条件の前のエレメントの評価によって影響を受けない場合には、これらのエレメントの評価は行われません。ただし、その条件の真理値は、この段落の始めに述べたように、常に同じになります (あたかもその条件全体が演算されているかのように)。

値は、それらを含む条件が評価される時、算術式および関数に設定されます。同様に否定条件は、それらが示す複合条件を評価する必要があるとき、評価されます。

たとえば、次のとおりです。

```
NOT A IS GREATER THAN B OR A + B IS EQUAL
    TO C AND D IS POSITIVE
```

この例は、次のように括弧で囲まれているかのように評価されます。

```
(NOT (A IS GREATER THAN B)) OR (((A+B) IS EQUAL
    TO C) AND (D IS POSITIVE))
```

この例での評価順序は次のとおりです。

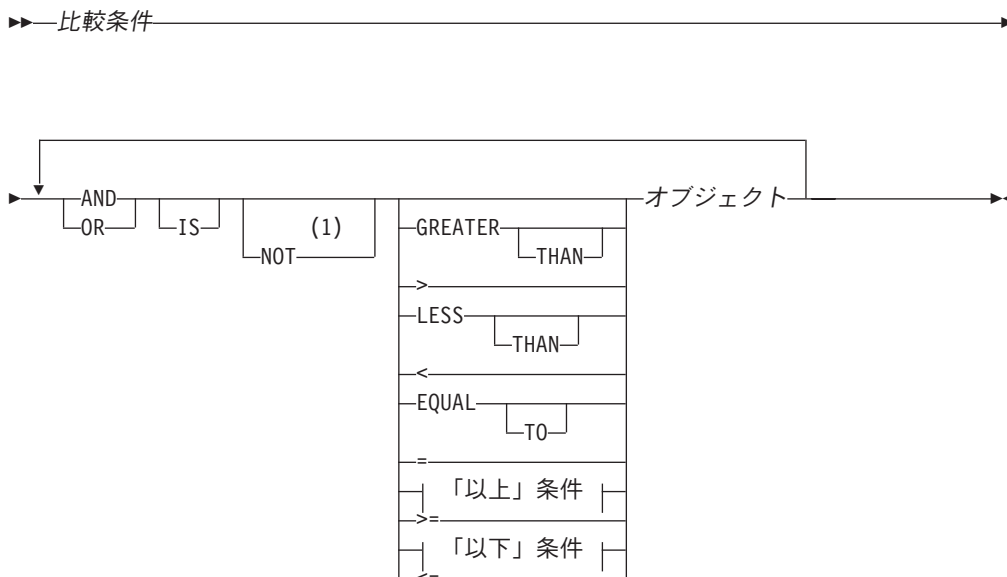
1. (NOT (A IS GREATER THAN B)) が評価されます。これが真の場合には、式が真なので、条件の残りの部分は評価されません。
2. (A+B) が評価され、中間結果 x が求められます。
3. (x IS EQUAL TO C) が評価されます。これが偽の場合には、式が偽なので、条件の残りの部分は評価されません。
4. (D IS POSITIVE) が評価され、式の最終的な真理値が求められます。

省略された結合比較条件

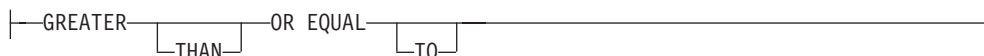
比較条件が括弧を間に入れずに連続して記述されている場合、最初の比較条件の後の任意の比較条件を、以下の 2 つの方法のいずれかで省略することが可能です。

- サブジェクトの省略
- サブジェクトと関係演算子の省略

省略された結合比較条件 - 形式



「以上」条件:



「以下」条件:



注:

- 1 NOT GREATER THAN OR EQUAL TO、NOT >=、NOT LESS THAN OR EQUAL TO、および NOT <= は IBM 拡張です。

オブジェクトとは、その前にある比較条件のサブジェクトと比較できる、任意のデータ項目または式のことです。

連続する一連の比較条件では、両方の省略形を指定できます。省略形の条件は次のように評価されます。

1. 最後に記述されたサブジェクトが省略されたサブジェクトであるものとして。
2. 最後に記述された関係演算子が、省略された関係演算子であるものとして。

その結果の結合条件は 285 ページの表 27 に示したような、結合条件でのエレメントの順序の規則に従っていなければなりません。

NOT という語は、NOT GREATER THAN、NOT >、NOT LESS THAN、NOT <、NOT EQUAL TO、および NOT = の形式の関係演算子の一部であると見なされま
す。

他の位置にある NOT は、論理演算子であると見なされます (したがって、否定比
較条件となります)。

以下の例では、省略された結合比較条件に括弧が付いたものと付いていないもの、
およびそれらと同じものを省略していない形が示されています。

表 27. 省略された結合比較条件

省略された結合比較条件	同等の内容
A = B AND NOT < C OR D	((A = B) AND (A NOT < C)) OR (A NOT < D)
A NOT > B OR C	(A NOT > B) OR (A NOT > C)
NOT A = B OR C	(NOT (A = B)) OR (A = C)
NOT (A = B OR < C)	NOT ((A = B) OR (A < C))
NOT (A NOT = B AND C AND NOT D)	NOT (((A NOT = B) AND (A NOT = C)) AND (NOT (A NOT = D)))

ステートメント・カテゴリー

COBOL のステートメントには、次の 4 種類があります。

- 命令
- 条件
- 範囲区切り
- コンパイラー指示

命令ステートメント

命令ステートメントは、プログラムが実行する無条件処置を指定するか、明示範囲
終了符号によって終了する条件ステートメントになるかのいずれかです (288 ペ
ージの『範囲区切りステートメント』を参照してください)。1 つの命令ステート
メントを指定できるときにはいつでも、一連の命令ステートメントを指定できま
す。

表 28 に COBOL 命令ステートメントをリストします。

表 28. 命令ステートメントのタイプ

タイプ	命令ステートメント
演算	ADD ¹ COMPUTE ¹ DIVIDE ¹ INSPECT (TALLYING) MULTIPLY ¹ SUBTRACT ¹

表 28. 命令ステートメントのタイプ (続き)

タイプ	命令ステートメント
データ操作	ACCEPT (DATE, DAY, DAY-OF-WEEK, TIME) INITIALIZE INSPECT (CONVERTING) INSPECT (REPLACING) MOVE SET STRING ² UNSTRING ² <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> IBM 拡張 </div> XML GENERATE ⁶ XML PARSE ⁶ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> IBM 拡張 の 終り </div>
終了	STOP RUN EXIT PROGRAM <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> IBM 拡張 </div> GOBACK <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> IBM 拡張 の 終り </div>
Input/Output	ACCEPT ⁶ ID CLOSE DELETE ³ DISPLAY ⁶ OPEN READ ⁴ REWRITE ³ SET (UPSI スイッチの場合) START ³ STOP リテラル WRITE ⁵ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> IBM 拡張 </div> ACQUIRE COMMIT DROP ROLLBACK <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> IBM 拡張 の 終り </div>

表 28. 命令ステートメントのタイプ (続き)

タイプ	命令ステートメント
順序付け	MERGE RELEASE RETURN SORT
プロシージャの分岐	ALTER EXIT GO TO PERFORM
サブプログラム・リンケージ	CALL ⁷ CANCEL
テーブルの処理	SET

285 ページの表 28 の注:

- 1 ON SIZE ERROR または NOT ON SIZE ERROR 句が指定されていないもの
- 2 NOT ON OVERFLOW または ON OVERFLOW 句が指定されていないもの
- 3 INVALID KEY または NOT INVALID KEY 句が指定されていないもの
- 4 AT END、NOT AT END、INVALID KEY、NO DATA、または NOT INVALID KEY 句が指定されていないもの
- 5 INVALID KEY、NOT INVALID KEY、END-OF-PAGE、または NOT END-OF-PAGE 句が指定されていないもの
- 6 ON EXCEPTION または NOT ON EXCEPTION 句が指定されていないもの
- 7 ON OVERFLOW、ON EXCEPTION、または NOT ON EXCEPTION 句が指定されていないもの

条件ステートメント

条件ステートメントは、条件の真理値を判別すること、そしてオブジェクト・プログラムの次取るべき処置がこの真理値によって決まることを指定します。(267 ページの『条件式』を参照してください。)

288 ページの図 15 には、条件ステートメントである COBOL ステートメント、または条件が含まれていて (例 : ON SIZE ERROR または ON OVERFLOW)、かつそのステートメントが明示範囲終了符号によって終了しないときに条件ステートメントになる COBOL ステートメントを列挙しています。

算術	順序付け
ADD...ON SIZE ERROR	RETURN...AT END
ADD...NOT ON SIZE ERROR	RETURN...NOT AT END
COMPUTE...ON SIZE ERROR	
COMPUTE...NOT ON SIZE ERROR	
DIVIDE...ON SIZE ERROR	
DIVIDE...NOT ON SIZE ERROR	
MULTIPLY...ON SIZE ERROR	
MULTIPLY...NOT ON SIZE ERROR	
SUBTRACT...ON SIZE ERROR	
SUBTRACT...NOT ON SIZE ERROR	
データの操作	サブプログラム・リンケージ
STRING...ON OVERFLOW	CALL...ON OVERFLOW
STRING...NOT ON OVERFLOW	CALL...ON EXCEPTION
UNSTRING...ON OVERFLOW	CALL...NOT ON EXCEPTION
UNSTRING...NOT ON OVERFLOW	
XML GENERATE...ON EXCEPTION	
XML GENERATE...NOT ON EXCEPTION	
XML PARSE...ON EXCEPTION	
XML PARSE...NOT ON EXCEPTION	
判断	テーブル処理
IF	SEARCH...WHEN
EVALUATE	
入力/出力	
ACCEPT...ON EXCEPTION	READ...NO DATA
ACCEPT...NOT ON EXCEPTION	REWRITE...INVALID KEY
DELETE...INVALID KEY	REWRITE...NOT INVALID KEY
DELETE...NOT INVALID KEY	START...INVALID KEY
DISPLAY...ON EXCEPTION	START...NOT INVALID KEY
DISPLAY...NOT ON EXCEPTION	WRITE...AT END~OF~PAGE
READ...AT END	WRITE...NOT AT END~OF~PAGE
READ...NOT AT END	WRITE...INVALID KEY
READ...INVALID KEY	WRITE...NOT INVALID KEY
READ...NOT INVALID KEY	

図 15. 条件ステートメント

範囲区切りステートメント

範囲区切りステートメントは、明示範囲終了符号を使用して、条件ステートメントを命令ステートメントに変えます。この命令ステートメントは、その後でネストされます。さらに、明示範囲終了符号は命令ステートメントの範囲の終了を示すのに使用されることもあります。明示範囲終了符号は、条件句を持つことができるすべての COBOL verb に提供されています。

特に明示的に指定されていない限り、言語の規則によって命令ステートメントを指定できる場合はいつでも、範囲区切りステートメントを指定できます。

明示範囲終了符号: 明示範囲終了符号は、特定の手続き部ステートメントの終わりを示します。明示範囲終了符号によって区切られる条件ステートメントは、命令ステートメントと見なされ、命令ステートメントの規則に従わなければなりません。

明示範囲終了符号は次のとおりです。

END-ACCEPT	END-PERFORM
END-ADD	END-READ
END-CALL	END-RETURN
END-COMPUTE	END-REWRITE
END-DELETE	END-SEARCH
END-DISPLAY	END-START

END-DIVIDE	END-STRING
END-EVALUATE	END-SUBTRACT
END-IF	END-UNSTRING
END-MULTIPLY	END-WRITE

IBM 拡張
END-XML
IBM 拡張 の終り

暗黙範囲終了符号: 文の終わりにある区切りのピリオドは暗黙範囲終了符号であり、まだ終了していない前のステートメントすべての範囲を終了させます。あるステートメントが別のステートメントの中に含まれているとき、含まれる側のステートメントの後にある含む側のステートメントの次の句が、含まれる側のステートメントの範囲を終了させる暗黙範囲終了符号となります。

範囲終了符号によって終了していない条件ステートメントを、別のステートメントの中に入れることはできません。

IF ステートメントの中でネストしている条件ステートメントを除いて、ネストされるステートメントは命令ステートメントでなければならず、命令ステートメントの規則に従わなければなりません。条件ステートメントをネストすべきではありません。

コンパイラ指示ステートメント

指定した処置を行うようコンパイラに指示するステートメントのことです。これらのステートメントについては 633 ページの『第 16 章 コンパイラ指示ステートメント』で説明してあります。

タイプ	コンパイラ指示ステートメント			
ライブラリー	COPY			
宣言	USE			
文書化	ENTER			
コンパイラ・オプション	PROCESS			
ソース・テキスト	REPLACE			
ソース・リスト	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center; padding: 5px;">IBM 拡張</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">*CBL *CONTROL EJECT SKIP1 SKIP2 SKIP3 TITLE</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center; padding: 5px;">IBM 拡張 の終り</td> </tr> </table>	IBM 拡張	*CBL *CONTROL EJECT SKIP1 SKIP2 SKIP3 TITLE	IBM 拡張 の終り
IBM 拡張				
*CBL *CONTROL EJECT SKIP1 SKIP2 SKIP3 TITLE				
IBM 拡張 の終り				

ステートメントによる操作

COBOL ステートメントは、次の種類の操作を行います。

- 演算
- データ操作
- 入出力
- 順序付け
- サブプログラム・リンケージ
- テーブル処理
- プロシージャ分岐

共通の句および概念

以下の算術ステートメントとデータ操作ステートメントには、いくつかの共通した句と概念があります。

- CORRESPONDING 句
- GIVING 句
- ROUNDED 句
- SIZE ERROR 句
- オーバーラップするオペランド

CORRESPONDING 句: 同じ名前の基本データ項目が属しているグループ項目が指定されている場合には、CORRESPONDING 句 (CORR) を使用することにより、それらの基本データ項目に対して ADD、SUBTRACT、および MOVE 操作を実行できます。

キーワード CORRESPONDING の後にある ID は両方とも、グループ項目でなければなりません。この説明では、これらの ID を ID-1 および ID-2 とします。

ID-1 から 1 つ、また ID-2 から 1 つのデータ項目の対 (従属項目) は、以下の条件が真である場合に対応します。

- ADD または SUBTRACT ステートメントで、両方のデータ項目は基本数字データ項目である。これ以外のデータ項目は無視されます。
- MOVE ステートメントで、データ項目のうち少なくとも 1 つが基本項目であり、その移動は移動規則に従って行われる。
- 両方の従属項目が同じ名前をもち、ID-1 および ID-2 までの (ID-1 および ID-2 は含まない) 同じ修飾子をもっている。
- 従属項目が、キーワード FILLER によって識別されない。
- ID-1 と ID-2 のどちらもレベル 66 またはレベル 88 の項目として記述されておらず、INDEX、POINTER、PROCEDURE-POINTER のどの項目の使用法でもない。ID-1 と ID-2 のどちらも修正済みとして参照することができません。暗黙の修飾子のアプリケーションの後では、データ項目の名前は固有のものでなければなりません。
- 従属項目の記述には、REDEFINES、RENAMES、OCCURS、USAGE IS INDEX、USAGE IS POINTER、または USAGE IS PROCEDURE-POINTER のいずれかの文節は含まれない。その従属項目がグループであれば、その項目に従属する項目も無視されます。

ただし、ID-1 および ID-2 は、それ自体が記述に REDEFINES 文節や OCCURS 文節を含む項目を含んでいたり、あるいはそれらに従属することがあります。

- ID-1 と ID-2 は、FILLER 項目に従属することがある。

たとえば、2 つのデータ階層が次のように定義されているとします。

```

05 ITEM-1 OCCURS 6 INDEXED BY X.
   10 ITEM-A PIC S9(3).
   10 ITEM-B PIC 99V9.
   10 ITEM-C PIC X(4).
   10 ITEM-D REDEFINES ITEM-C PIC 9(4).
   10 ITEM-E PIC 9(4) USAGE COMP.
   10 ITEM-F USAGE INDEX.
   10 ITEM-G PIC X(4).
05 ITEM-2.
   10 ITEM-A PIC 99.
   10 ITEM-B PIC 9V9.
   10 ITEM-C PIC A(4).
   10 ITEM-D PIC 9(4).
   10 ITEM-E PIC 9(9) USAGE COMP.
   10 ITEM-F USAGE INDEX.
   10 ITEM-G PIC X(4).
    
```

その後、ADD CORR ITEM-2 TO ITEM-1(X) が指定されていると、以下のようになります。

- ITEM-A および ITEM-A(X); ITEM-B および ITEM-B(X); ITEM-E および ITEM-E(X) は対応していると見なされて加えられます。
- ITEM-C および ITEM-C(X); ITEM-G および ITEM-G(X) は数字ではないので含まれていません。
- ITEM-D および ITEM-D(X) は加えられません。その理由は、ITEM-D(X) がそのデータ記述の中に REDEFINES 文節を含んでいるからです。
- ITEM-F および ITEM-F(X) は、USAGE IS INDEX として定義されているので加えられません。

(デフォルトの) *PRTCORR コンパイラー・オプションまたは PROCESS ステートメントの PRTCORR オプションを使用すると、コンパイラーは、CORRESPONDING 句が入っている各ステートメントの後のコンパイラー・リスト内にコメント行を挿入します。これらのコメント行は、次の有効なソース・ステートメントの直前で印刷され、指定されたグループ内部で影響を受ける基本項目を識別します。

GIVING 句: GIVING という語の後にある ID により参照されるデータ項目は、算術演算の計算結果に設定されます。この ID は、それ自体は計算に関与しないため、数字編集項目とすることができます。

GIVING 句 - 形式



ROUNDED 句: 小数点位置合わせが行われた後、算術演算結果の小数部の桁数と、結果の ID の小数部に用意されている桁数とが比較されます。

結果の小数部のサイズが、それを記憶するために用意された桁数を超過しているときは、ROUNDED が指定されていない限り切り捨てが行われます。ROUNDED が指

ステートメントによる操作

定されている場合は、結果の ID の最下位の桁は、超過した部分の最上位桁が 5 以上の場合は 1 つ増加します。正確に丸めることができる最大の桁数は 62 です。

結果の ID が右端に P (複数個) を持つ PICTURE 文節によって記述されており、また計算結果が指定された整数桁数を超える場合、ストレージが割り振られている最右端の整数桁に対して、丸めまたは切り捨てが行われます。

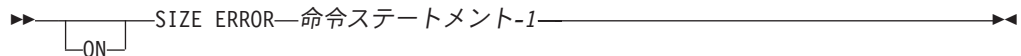
IBM 拡張

浮動小数点算術演算では、ROUNDED 句はどのような影響も与えません。浮動小数点算術演算の結果は常に丸められます。浮動小数点演算式の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

SIZE ERROR 句:

SIZE ERROR 句 - 形式



サイズ・エラー条件は、次の 3 つの状況で起こる可能性があります。

- 小数点位置合わせが行われた後の算術演算の結果の絶対値が、結果のフィールドに収容できる最大値を超えたとき
- ゼロ除算が行われたとき
- 指数式では、以下の場合
 - 指数 0 で累乗されたゼロ
 - 負の指数で累乗されたゼロ
 - 分数の指数で累乗された負数

サイズ・エラー条件は最終結果に適用され、中間結果には適用されません。

結果の ID が USAGE IS BINARY で定義される場合、それに収容できる最大値は、関連した 10 進数の PICTURE 文字ストリングで暗黙に指定される最大値です。

ROUNDED 句が指定された場合、サイズ・エラー検査の前に丸めが行われます。

サイズ・エラーが起こった場合、プログラムの次の処置は、ON SIZE ERROR 句が指定されているかどうかによって異なります。

ON SIZE ERROR 句が指定されているときにサイズ・エラー条件が起こると、サイズ・エラーの影響を受ける結果の ID の値はそのまま変わりません。すなわち、誤った結果が受け入れ ID の中に入れられることはありません。その他の結果の ID の値は、それらの ID に関してサイズ・エラーが起こっていなければ影響を受けることはありません。算術演算の実行完了後、ON SIZE ERROR 句の中の命令ステートメントが実行されます。ON SIZE ERROR 句に指定された命令ステートメント

の完了時に明示的な制御の転送が実行されない場合、制御は算術ステートメントの最後に渡され、NOT ON SIZE ERROR 句が指定されていてもそれは無視されません。

ON SIZE ERROR 句が指定されておらず、算術ステートメントで指定した算術演算の実行後にサイズ・エラー条件が存在する場合は、その影響を受けた、結果の ID の値は未定義となります。その他の結果の ID の値は、それらの ID に関してサイズ・エラーが起こっていないければ影響を受けることはありません。算術演算の完了後、制御は算術ステートメントの最後に渡され、NOT ON SIZE ERROR 句が指定されていてもそれは無視されます。

ADD CORRESPONDING と SUBTRACT CORRESPONDING ステートメントの場合は、個々の算術演算でサイズ・エラー条件が起こっても、それぞれの加算または減算のすべてが完了するまで、ON SIZE ERROR 命令ステートメントは実行されません。

NOT ON SIZE ERROR: NOT ON SIZE ERROR 句が指定されていて、算術演算の実行後にサイズ・エラー条件が存在しない場合、NOT ON SIZE ERROR 句が実行されます

ON SIZE ERROR 句と NOT ON SIZE ERROR 句の両方が指定され、実行される句の中のステートメントに明示的な制御の転送が入っていないとき、必要ならば、暗黙の制御の転送が、算術ステートメントの終わりの句の実行後に行われます。

オーバーラップするオペランド: ステートメントでの項目のやり取りが記憶域の一部または全部を共用しているながら、それらが同一のデータ記述項目で定義されていない場合には、そのようなステートメントの実行の結果は予測できません。さらに、項目のやり取りが同一のデータ記述項目により定義されているステートメントの中に、結果が予測不可能となるものがあります。これらの例は、前述のステートメントに関連した一般規則で言及されています。

算術ステートメント

演算ステートメントは計算のために使用します。個々の演算は、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、および DIVIDE ステートメントによって指定されます。これらの演算は、COMPUTE ステートメントを使って 1 つの式の中で記号によって組み合わせることができます。

算術ステートメントのオペランド: 算術ステートメントの各オペランドのデータ記述は、同じでなくてもかまいません。計算の間、コンパイラーは必要なデータ変換や小数点の位置合わせを行います。

オペランドのサイズ: 各オペランドの最大サイズは、10 進数で 18 桁です。

IBM 拡張

ゾーン 10 進数または内部 10 進オペランドの最大サイズは 10 進数で 63 桁です。

IBM 拡張 の終り

ステートメントによる操作

各オペランドから、**オペランドの合成**での 10 進数の桁数を決定できます。オペランドの合成は、小数点の位置にオペランドを合わせて、さらにそれらオペランドを重ね合わせた結果得られる仮想のデータ項目です。

たとえば、各項目がデータ部で次のように定義されているとします。

```
A PICTURE 9(7)V9(5).  
B PICTURE 9(11)V99.  
C PICTURE 9(12)V9(3).
```

次のステートメントを実行すると、オペランドの合成は 17 桁の 10 進数になります。

```
ADD A B TO C
```

これは、次のような暗黙の記述を持っています。

```
Composite-of-Operands PICTURE 9(12)V9(5).
```

オペランドを合成したものが 18 桁以下であれば、実行時に有効数字が失われないように十分な桁が保たれます。

IBM 拡張

(デフォルト) コンパイラー・オプション ***NOEXTEND** または **PROCESS** ステートメント・オプション **NOEXTEND** が指定されている場合、オペランドの合成は 10 進数で最大 30 桁までにできます。

算術計算モード・コンパイラー・オプション ***EXTEND31** または **PROCESS** ステートメント・オプション **EXTEND31** が指定されている場合、オペランドの合成は 10 進数で最大 31 桁まで可能です。

算術計算モード・コンパイラー・オプション ***EXTEND63** または **PROCESS** ステートメント・オプション **EXTEND63** が指定されている場合、オペランドの合成は 10 進数で最大 63 桁まで可能です。

注: オペランドの合成が指定された最大値を超えると、実行中に有効数字が失われる場合があります。

IBM 拡張 の終り

以下の表は、算術ステートメント内でオペランドの合成に使用できる 10 進数の最大桁数を示しています。

コンパイラー・オプション / 処理ステートメント	合成の最大長 (10 進数)
*NOEXTEND/NOEXTEND	18 IBM 拡張 30 IBM 拡張 の終り

*EXTEND31/EXTEND31	<p>18</p> <p>IBM 拡張</p> <p>31</p> <p>IBM 拡張 の 終り</p>
*EXTEND63/EXTEND63	<p>IBM 拡張</p> <p>63</p> <p>IBM 拡張 の 終り</p>

以下のリストには、算術ステートメントにおけるオペランドの合成の決め方が示されています。

ステートメント

オペランドの合成の決め方

- ADD** 与えられたステートメントの中のすべてのオペランド (GIVING という語の後に続くものは除く) を重ね合わせることによって決める。
- COMPUTE** 制約は適用されない。
- DIVIDE** REMAINDER データ項目以外のすべての受け入れデータ項目を重ね合わせるによって決める。
- MULTIPLY** すべての受け入れデータ項目を重ね合わせるによって決める。
- SUBTRACT** 与えられたステートメントの中のすべてのオペランド (GIVING という語の後に続くものは除く) を重ね合わせるによって決める。

どの算術ステートメントの場合にも、データを定義する際には、所要の精度の最終結果が得られるよう、十分な桁数と小数部分を指定することが重要です。演算の精度の詳細については 677 ページの『付録 B. 中間結果と算術精度』を参照してください。

複数の結果: 1 つの算術ステートメントが複数の結果を持つとき、実行は概念的に次のように進められます。

- このステートメントは、すべての算術演算を行って受け入れ項目に入れるべき 1 つの結果を出し、その結果を一時的な場所に保管します。
- 一連のステートメントは、この一時結果の値を、それぞれの受け入れフィールドに移すか、またはそれぞれの受け入れフィールドと組み合わせます。これらのステートメントは、複数の結果がリストされているのと同じ左から右への順序で書かれているものと見なされます。

たとえば、次のステートメントを実行するとします。

ADD A, B, C, TO C, D(C), E.

ステートメントによる操作

これは、次の一連のステートメントを実行するのと同じです。

```
ADD A, B, C GIVING TEMP.  
ADD TEMP TO C.  
ADD TEMP TO D(C).  
ADD TEMP TO E.
```

上の例では、TEMP はコンパイラーによって与えられる一時的な結果フィールドです。D(C) との加算が行われるとき、添え字 C に C の新しい値が入ります。

注: 算術ステートメントの実行中に生成される中間結果はシステム特有のものであり、プログラムの可搬性に影響します。算術ステートメントとして COMPUTE の代わりに ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、および DIVIDE を独立して使用すれば、不整合な結果が生じる危険性を少なくすることができます。

データ操作ステートメント

COBOL ステートメント ACCEPT、INITIALIZE、INSPECT、MOVE、READ、RELEASE、RETURN、REWRITE、SET、STRING、UNSTRING、および WRITE は、データの移動または検査を行います。

IBM 拡張

XML PARSE、XML GENERATE。

IBM 拡張 の終り

入出力ステートメント

COBOL 入出力ステートメントは、外部メディアに保管されているファイルへ（または、ファイルから）データを転送し、また入出力装置から得られる（または入出力装置へ送られる）少量のデータを制御します。

COBOL では、プログラムで使用できるファイル・データの単位はレコードなので、ユーザーはそのようなレコードに対してだけ関心をもてばよいことになります。バッファーや内部記憶装置へのデータの移動、妥当性検査、エラー訂正（可能な場合）、ブロック化と非ブロック化、ボリューム切り替え手順などの処理は、自動的に行われます。

環境部とデータ部でファイルがどのように記述されているかによって、手続き部で使用できる入出力ステートメントが決まります。

ファイル構成サポートの要約については 699 ページの『付録 F. ファイル構造サポートの要約およびファイル状況キーの値』を参照してください。

次の節の説明では、**ボリューム**および**リール**という用語を使用します。**ボリューム**とは、ユニット・レコード装置以外のすべての入出力装置を指します。**リール**は、テープ装置だけに適用されます。順次アクセス・モードでの直接アクセス装置の取り扱い方法は、テープ装置の取り扱い方法と論理的には同じです。

共通の処理機能: 共通の処理機能の中には、複数の入出力ステートメントに適用されるものがいくつかあります。共通の処理機能は次のとおりです。

- 状況キー
- INVALID KEY 条件

- INTO/FROM ID 句
- ファイル位置標識

状況キー: FILE STATUS 文節が FILE-CONTROL 項目に指定されている場合、そのファイルに対する要求の実行時に、指定した状況キー (FILE STATUS 文節で指名した 2 文字のデータ項目) の中に値が入られます。入れられる値はその要求の状況を示すものです。値が状況キーに入れられた後で、その要求に関連のある EXCEPTION/ERROR 宣言または INVALID KEY/AT END 句が実行されます。

状況キーの最初の文字は状況キー 1 (上位桁)、また 2 番目の文字は状況キー 2 (下位桁) として知られています。考えられる値の組み合わせとその意味は 705 ページの表 47 に示されています。

INVALID KEY 条件: INVALID KEY 条件は、START、READ、WRITE、REWRITE、または DELETE ステートメントの実行中に発生することがあります。

(条件の発生理由の詳細は 301 ページの『第 14 章 手続き部のステートメント』を参照してください。) 無効キー条件が発生すると、その条件を引き起こした入出力ステートメントは正常に実行されません。無効キー条件が入出力操作の後に存在している場合、以下の処置がとられます。

1. 該当するファイル状況文節 (該当する USE プロシージャーではない) が存在している場合は、ファイル状況は変更され、制御がプログラムに戻されます。
2. INVALID KEY 句が指定されている場合には、その句の命令ステートメントに制御が渡されます。
3. ファイルに明示または暗黙の EXCEPTION/ERROR プロシージャーが指定されている場合は、それが実行されます。そのようなプロシージャーが指定されていない場合には、結果は予測できません。
4. ファイル状況文節、USE プロシージャー、またはエラー処理の INVALID KEY 句が存在しないときは、実行時メッセージが出されて、プログラムを終了させるかプログラムに戻るかのオプションがユーザーに与えられます。

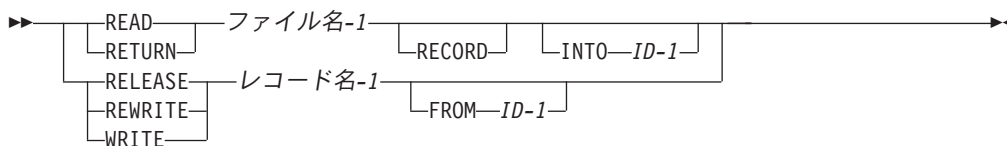
入出力操作の後に無効キー条件が存在しない場合、指定された INVALID KEY 句は無視され、次の処置がとられます。

1. 無効キー条件ではない例外条件が存在する場合、制御は、USE AFTER EXCEPTION プロシージャーが実行された後に、USE ステートメントの規則に従って転送されます。
2. 例外条件が存在しない場合には、NOT INVALID KEY 句に指定される入出力ステートメントまたは命令ステートメントの終わりにこれらが指定されれば、制御が転送されます。

エラー処理および INVALID KEY 句の役割の詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の例外処理とエラー処理に関する章を参照してください。

INTO/FROM ID 句: この句は READ、RETURN、RELEASE、REWRITE、および WRITE ステートメントに有効です。指定する ID は、作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクション、またはリンケージ・セクションの項目の名前、あるいは以前にオープンした他のファイルのレコード記述の名前でなければなりません。レコード名と ID は、同じ記憶域を参照してはなりません。

INTO/FROM ID 句 - 形式



INTO 句を指定して READ または RETURN ステートメントを実行すると、その結果は、次に示す規則が (この順序どおりに) 適用されたのと同じことになります。

1. INTO 句を指定していない同じ READ または RETURN ステートメントを実行する。
2. CORRESPONDING 句が指定されていない MOVE ステートメントの規則に従って、現在のレコードをレコード域から ID-1 に移動させる。現在のレコードの大きさは、RECORD 文節内に指定されている規則によって決定されます。ファイル記述記入項目に RECORD IS VARYING 文節が含まれている場合には、暗黙の MOVE はグループの移動となります。READ または RETURN ステートメントが正常に実行されなかった場合には、暗黙の MOVE ステートメントは実行されません。レコードが読み取られるか戻された後で、かつそのレコードがデータ項目に転送される直前に、ID-1 と関連する添え字付け、または参照変更の値が求められます。レコードは、レコード域と ID-1 の両方で使用できます。

FROM 句が指定されている RELEASE、REWRITE、または WRITE ステートメントが実行されると、その結果は、次に示すステートメントが (この順序どおりに) 実行されたのと同じことになります。

1. 以下のステートメントを
`MOVE identifier-1 TO record-name-1`
 MOVE ステートメントに指定された規則に従って実行する。
2. FROM 句が指定されていない同じ RELEASE、REWRITE、または WRITE ステートメントを実行する。

RELEASE、REWRITE または WRITE ステートメントの実行が完了すると、ID-1 内の情報が使用可能になりますが、SAME RECORD AREA 文節として指定されているものを除いて、レコード名-1 内の情報は使用することはできません。

ファイル位置標識: ファイル位置標識は概念的なエンティティであり、本書では、入出力操作における特定の順序の中で所定のファイル内でアクセスされる次のレコードを正確に把握しやすくするために使用しています。ファイル位置標識の概念は、出力または拡張モードでオープンするファイルには使用できません。ファイル位置標識の設定は、次のような OPEN、READ、RETURN、ROLLBACK および START ステートメントの影響だけを受けます。

- OPEN ステートメントは、ファイル位置標識をファイルの最初のレコードに位置付けます。

IBM 拡張

ファイル位置標識は、データベース・ファイルで変更 (OVRDBF) コマンドの POSITION パラメーターを使用することにより、ファイル内の任意のレコードに

置くことができます。

IBM 拡張 の終り

- 順次アクセス READ ステートメント、または動的アクセス READ NEXT ステートメントについては、次の考慮事項が適用されます。
 - OPEN または START ステートメントでファイル位置標識を位置付けた場合、ファイル位置標識によって識別されたレコードが使用できます。このレコードがすでに存在していないと、存在する次のレコードが使用可能になります。
 - 前の READ ステートメントがファイル位置標識を位置付けた場合、ファイル位置標識はファイル内の次の既存レコードを指すように更新され、そのレコードが使用可能になります。

IBM 拡張

- 動的アクセス READ FIRST ステートメントでは、ファイル位置標識はファイルの最初のレコードを示す位置に置かれ、そのレコードは使用可能になります。
- 動的アクセス READ LAST ステートメントでは、ファイル位置標識はファイルの最後のレコードを示す位置に置かれ、そのレコードは使用可能になります。
- 動的アクセス READ PRIOR ステートメントでは、ファイル位置標識はファイルの前の既存レコードを示す位置に置かれ、そのレコードは使用可能になります。

IBM 拡張 の終り

- RETURN ステートメントでは、次の考慮事項が適用されます。
 - 最初の RETURN ステートメントは、ファイル位置標識をファイルの最初のレコードに位置付け、そのレコードが使用可能になります。
 - 前の RETURN ステートメントがファイル位置標識を位置付けた場合、ファイル位置標識はファイル内の次の既存レコードを指すよう更新され、そのレコードが使用可能になります。

IBM 拡張

- ROLLBACK ステートメントでは、コミットメント制御下にあるファイルに次の考慮事項が適用されます。
 - ROLLBACK ステートメントは、ファイル位置標識を先のコミットメント境界のポインターの位置に設定します。順次処理を行っている場合には、このことを覚えておくことが大切です。
 - ファイル位置標識は、ファイルがオープンされてから COMMIT ステートメントが出されていない場合には、OPEN のポインターの位置に設定されます。
 - ファイル位置標識は、コミットメント制御下にはあるがオープンされていないファイルには定義されません。

IBM 拡張 の終り

- START ステートメントは、START ステートメントで指定された暗黙または明示の比較条件を満足させるファイル内の最初のレコードに、ファイル位置標識を位置付けます。

ステートメントによる操作

ファイル位置標識の概念は、ランダムアクセス・モードのファイルまたは TRANSACTION ファイルには使用できません。

DB-FORMAT-NAME 特殊レジスター:

IBM 拡張

入出力ステートメントの実行後、FORMATFILE または DATABASE ファイルについては、DB-FORMAT-NAME 特殊レジスターが次の規則に従って修正されます。

- READ、WRITE、REWRITE、START、または DELETE 操作が正常に完了した後、I-O 操作で使用されるレコード形式名は、暗黙に特殊レジスターへ移動されます。
- 入出力操作が正常に行われなかった後、DB-FORMAT-NAME には、最後に正常に行われた入出力操作に使用されたレコード形式名が入ります。
- DB-FORMAT-NAME は、最も外側のプログラムにおいて、PICTURE X(10) および GLOBAL として暗黙に定義されます。

英数字の引数が認められている場合はいつでも、DB-FORMAT-NAME 特殊レジスターを関数内で指定できます。

IBM 拡張 の終り

プロシージャ分岐ステートメント: 手続き部のステートメント、文、および段落は順番に実行されますが、(以下に列挙した) プロシージャ分岐ステートメントが使用されている場合は例外です。

- ALTER
- EXIT
- GO TO
- PERFORM

第 14 章 手続き部のステートメント

ID-1 は、日付、時刻、タイム・スタンプの項目にはできません。

IBM 拡張 の終り

簡略名

SPECIAL-NAMES 段落に指定する必要があります。この段落は、入力装置を参照する環境名と関連付けられています。入力装置は、対話式ジョブで使用されるワークステーション、バッチ・ジョブのジョブ入力ストリーム、またはシステム・オペレーターのコンソールにできます。

IBM 拡張

環境名

簡略名の代わりに環境名 CONSOLE または SYSIN を指定できます。

IBM 拡張 の終り

入力データ・ソース

入力データ・ソースは、次のようにプログラム開始の方式によって異なります。

プログラム開始の方法	データ・ソース (入力装置)		
	環境名に関連付けられた場合		FROM 句を省略した場合
	CONSOLE または SYSTEM-CONSOLE	SYSIN または REQUESTOR	
BATCH	システム・オペレーターのメッセージ・キュー	ジョブ入力ストリーム	ジョブ入力ストリーム
INTERACTIVE	システム・オペレーターのメッセージ・キュー	ワークステーション	ワークステーション

ジョブ入力ストリームは CL コマンドに付随するデータから構成されます。入力ストリームの中にデータがない場合、または ID-1 に入れるにはデータが不十分である場合には、例外条件が発生します。

入力がジョブ入力ストリームからのものである場合には、次の規則が適用されます。

- 入力レコードの大きさは 80 文字と見なされます。
- ID-1 の長さが 80 文字以下である場合には、入力データは入力レコード内の先頭文字として現れなければなりません。ID-1 の長さを超える文字は切り捨てられます。
- ID-1 が 80 文字よりも長い場合には、ID-1 の記憶域が満たされるまで引き続いて入力レコードが読み取られます。ID-1 の長さ 80 文字の整数倍になっていない場合には、最後の入力レコードが切り捨てられます。

装置がワークステーションの場合には、入力レコードの大きさは 100 です。また装置がシステム・オペレーターのメッセージ・キューの場合には、入力レコードの大きさは 58 です。次のステップが発生します。

1. プログラム名、テキスト “AWAITING REPLY POSITION(S)”, および開始位置と終了位置が含まれているシステム作成照会メッセージが、システム・オペレー

ACCEPT ステートメント

ターのメッセージ・キュー、またはワークステーションのオペレーターにあてて自動的に送られます。ACCEPT 画面上に前の表示内容が現れることがあります。

2. 実行が遅延されます。
3. 応答が ID-1 の中へ転送され、オペレーターがステップ 1 の照会に対する応答を行った後で処理が再開されます。応答の値が大文字または小文字で入力されたとおりにプログラムで使用可能となります。
4. ID-1 が入力レコード・サイズよりも長い場合には、ID-1 の長さに達するまで引き続き入力レコードが読み取られます (ステップ 1 ~ 3)。

着信応答が ID-1 よりも長い場合には、ID-1 の長さを超えた文字位置で切り捨てられます。

注: READ ステートメントに使用した装置と同じ装置を使用した場合には、実行結果は予測できません。

コーディング例

次に示すのは、ジョブ入カストリームを含んでいるバッチ・ジョブ・ファイル・メンバーの例です。

```
//BCHJOB JOB(ADD021) JOB(QUSER/ACCTEST)
CALL PGM(QSYS/ACCPT1X)
123456789012345
//ENDBCHJOB
```

次に示すのは、ジョブ入カストリームを読み取るために形式 1 の ACCEPT ステートメントを使用する COBOL プログラムの例です。

```
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. ACCPT1X.
ENVIRONMENT DIVISION.
CONFIGURATION SECTION.
SOURCE-COMPUTER. IBM-ISERIES.
OBJECT-COMPUTER. IBM-ISERIES.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
77 TRANS-DATA PIC X(15).
PROCEDURE DIVISION.
BEGIN.
ACCEPT TRANS-DATA.
DISPLAY TRANS-DATA.
STOP RUN.
```

バッチ・ジョブ・ファイル・メンバーを使って ACCPT1X を呼び出す場合、ACCEPT ステートメントは、CALL コマンドのすぐ後にある行からバッチ・ジョブ・ファイル・メンバーを読み取ります。それによって "123456789012345" が TRANS-DATA の中に受け入れられることとなります。

形式 2 - システム情報の転送

指定された概念上のデータ項目 DATE、DAY、DAY-OF-WEEK、または TIME に含まれているシステム情報は、ID に転送できます。DATE、DAY、DAY-OF-WEEK および TIME は概念上のデータ項目なので、COBOL プログラム内では記述されま

IBM 拡張

DATE (YYYYMMDD 句あり)

暗黙のうちに PICTURE 9(8) をもちます。

データ・エレメントは、左から右へ次のように並んでいます。

- 4 桁の西暦の年 (グレゴリオ暦)
- 2 桁のその年の月
- 2 桁のその月の日

したがって、1963 年 11 月 16 日は次のように表されます。

19631116

IBM 拡張 の終り

DAY (YYYYDDD 句なし)

暗黙のうちに PICTURE 9(5) をもちます。

データ・エレメントは、左から右へ次のように並んでいます。

- 2 桁の西暦の年
- 3 桁のその年の通算日数

したがって、1988 年 12 月 25 日は次のように表されます。

88360

IBM 拡張

DAY (YYYYDDD 句あり)

暗黙のうちに PICTURE 9(7) をもちます。

データ・エレメントは、左から右へ次のように並んでいます。

- 4 桁の西暦の年 (グレゴリオ暦)
- 3 桁のその年の通算日数

したがって、1995 年 12 月 31 日は次のように表されます。

1995365

IBM 拡張 の終り

DAY-OF-WEEK

暗黙のうちに PICTURE 9(1) をもちます。

次のように単一のデータ・エレメントで表されます。

- 1 は月曜日
- 2 は火曜日
- 3 は水曜日
- 4 は木曜日
- 5 は金曜日
- 6 は土曜日
- 7 は日曜日

したがって木曜日は 4 と表されます。

TIME

暗黙のうちに PICTURE 9(8) をもちます。

データ・エレメントは、左から右へ次のように並んでいます。

2 桁の時 (24 時間表示)
 2 桁の分
 2 桁の秒
 2 桁の 100 分の 1 秒表示

したがって、午後 2 時 41 分 12.25 秒は次のように表されます。

14411225

形式 3 - フィードバック

IBM 拡張

この形式は、活動ファイルから ID へフィードバック情報を転送する場合に使用します。

ACCEPT ステートメント - 形式 3 - フィードバック

```

▶▶—ACCEPT—ID-1—FROM—簡略名—
                                └─FOR—ファイル名-1─┘
                                └─END-ACCEPT—(1)─┘
  
```

注:

1 IBM 拡張

ID-1 は、固定長グループ項目または基本英字項目か、基本英数字項目か、外部 10 進数項目のいずれかが可能です。ID-1 には日時項目は許されません。ID-1 の説明に TYPE 文節が含まれる場合は、その文節で参照されるタイプ名は基本項目でなければなりません。

ID-1 は、内部浮動小数点データ項目でも外部浮動小数点データ項目でも可能です。

ファイル名-1 は、FD 記入項目に定義される必要があり、さらに ACCEPT ステートメントの実行より前にオープンされていなければなりません。ファイル名-1 がオープンされていない場合、ID-1 の内容は変更されません。

FROM 句は、SPECIAL-NAMES 段落中の OPEN-FEEDBACK または I-O-FEEDBACK の環境名に関連付けなければならない簡略名を指定します。

FOR 句が指定された場合には、フィードバック情報はこの句で指定されたファイルからのものです。FOR 句が指定されなかった場合には、フィードバック情報はいちばん最後にオープンされたファイルからのものか、または、現行のプログラムのいちばん最後の入出力操作で使用されたファイルからの情報です。

I-O-FEEDBACK 域および OPEN-FEEDBACK 域の説明については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。フィードバック域に含まれるフィールドのレイアウトおよび説明については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリーの中の『*DB2 Universal Database for AS/400*』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

形式 4 - 内部データ域

IBM 拡張

この形式は、ジョブごとに作られたシステム定義の内部データ域から ID-1 ヘデータを転送する場合に使用します。

ACCEPT ステートメント - 形式 4 - 内部データ域

```

▶▶ ACCEPT ID-1 FROM 簡略名
      (1)
      FOR ID-2
          リテラル-1
      END-ACCEPT
▶▶
  
```

注:

1 構文検査だけ行われます。

この形式が適用可能なのは、SPECIAL-NAMES 段落の中で簡略名が環境名 LOCAL-DATA と関連付けられている場合だけです。

ID-1 への転送は、MOVE ステートメントで、CORRESPONDING 句なしのグループ転送の場合の規則に従って行われます。ID-1 には日時項目は許されません。ID-1 の説明に TYPE 文節が含まれる場合は、その文節で参照されるタイプ名は基本項目でなければなりません。

ID-1 は、内部浮動小数点データ項目でも外部浮動小数点データ項目でも可能です。

ID-1 は DBCS または国別データ項目にすることができます。

FOR 句が指定された場合、この句は、コンパイル時に構文上の検査をされますが、プログラムの実行中にはコメントとして扱われます。リテラル-1 または ID-2 の値は、内部データ域に関連付けられている装置のプログラム装置名を示します。各ジョブに設けられる内部データ域は 1 つだけあり、1 つのジョブで使用される装置は、すべて同一の内部データ域をアクセスします。リテラル-1 を指定する場合、リテラル-1 は、非数字で、長さは 10 文字以内でなければなりません。ID-2 (指定されている場合) は、英数字データ項目で、10 文字以下の長さでなければなりません。内部データ域について詳しくは、「CL プログラミング」を参照してください。

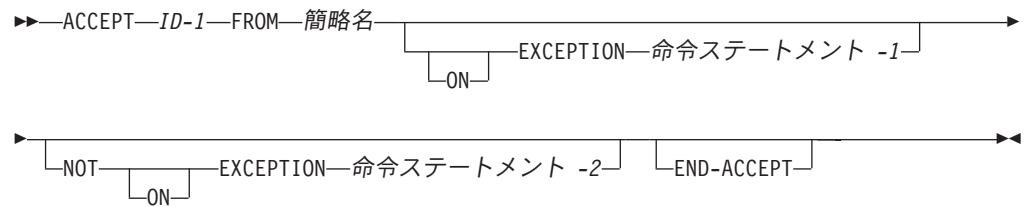
IBM 拡張 の終り

形式 5 - プログラム初期設定パラメーター

IBM 拡張

この形式は、PIP (プログラム初期設定パラメーター) データ域から ID ヘデータを転送するのに使用されます。

ACCEPT ステートメント - 形式 5 - PIP データ域



この形式を適用できるのは、SPECIAL-NAMES 段落内の簡略名を環境名 PIP-DATA と関連付ける場合に限られます。

ID-1 への転送は、MOVE ステートメントで、CORRESPONDING 句なしのグループ転送の場合の規則に従って行われます。ID-1 には日時項目は許されません。ID-1 の説明に TYPE 文節が含まれる場合は、その文節で参照されるタイプ名は基本項目でなければなりません。

ID-1 は、内部浮動小数点データ項目でも外部浮動小数点データ項目でも可能です。

PIP データ域が存在する場合には、ジョブは事前開始ジョブであり、NOT ON EXCEPTION 句で指定された命令ステートメントはすべて処理されます。

PIP データ域が存在しない場合には、ジョブは事前開始ジョブではなく、ON EXCEPTION 句で指定された命令ステートメントがすべて処理されます。PIP データ域が存在しない場合には、ジョブは事前開始ジョブではなく、ON EXCEPTION 句で指定された命令ステートメントがすべて処理されます。ON EXCEPTION 句が存在せず、しかも PIP データ域も存在していない場合には、実行時メッセージが出されます。

明示範囲終了符号 END-ACCEPT は、ACCEPT ステートメントの有効範囲を区切る働きをします。END-ACCEPT を使うと、条件 ACCEPT ステートメントを別の条件ステートメント内でネストさせることができます。END-ACCEPT は命令 ACCEPT ステートメントとともに使用することもできます。詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

COBOL を使用して PIP データ域を更新することはできませんので、ご注意ください。PIP データ域の詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」および「CL プログラミング」を参照してください。

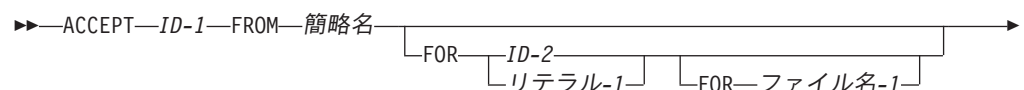
IBM 拡張 の終り

形式 6 - 属性データ域

IBM 拡張

ACCEPT ステートメントは、TRANSACTION ファイルに関連付けられている特定のプログラム装置についての情報 (属性データ) を検索します。

ACCEPT ステートメント - 形式 6 - 属性データ





この形式の ACCEPT ステートメントは、TRANSACTION の編成を持つファイルに対してしか使用することができません。ID-1 には日時項目は許されません。ID-1 の説明に TYPE 文節が含まれる場合は、その文節で参照されるタイプ名は基本項目でなければなりません。

ID-1 は、内部浮動小数点データ項目でも外部浮動小数点データ項目でも可能です。

ID-1 は DBCS または国別データ項目にすることができます。

ACCEPT の実行時に、ファイル-1 がオープンされていない場合、メッセージ LNR7205 が出されます。

簡略名は、SPECIAL-NAMES 段落の中で環境名 ATTRIBUTE-DATA に関連付けられていなければなりません。

ファイル名-1 が指定されていない場合、ACCEPT ステートメントのデフォルトのファイルは、FILE-CONTROL 段落の中の SELECT 文節で指定された最初の TRANSACTION ファイルです。

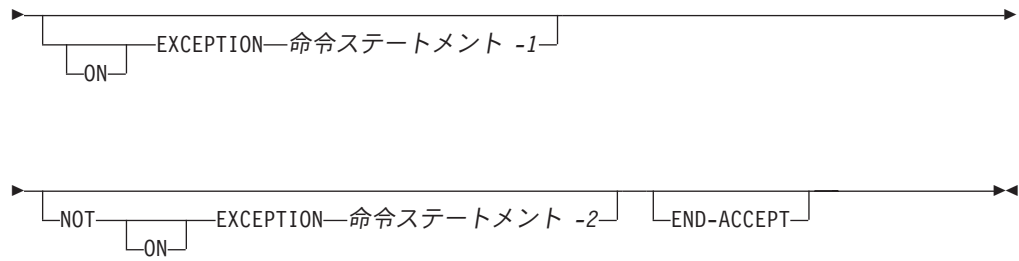
リテラル-1、または ID-2 の内容は (指定した場合)、属性データを使用できるプログラム装置名を示します。

ICF ファイルの場合、この装置は、(ICF 装置項目追加 (ADDICFDEVE) コマンド、ICF 装置項目変更 (CHGICFDEVE) コマンド、または ICF プログラム装置項目一時変更 (OVRICFDEVE) コマンドを使って) ファイルによって獲得されるように前もって定義しておかなければなりません。実際には、獲得されている必要はありません。ディスプレイ・ファイルの場合、ファイル作成、変更、または一時変更されたとき、そのファイルに対して OPEN が出される前に、DEV パラメーターにプログラム装置が前もって指定されていなければなりません。リテラル-1 を指定する場合、リテラル-1 は、非数字で、長さは 10 文字以内でなければなりません。ID-2 の内容を指定する場合、その内容は、英数字データ項目で、長さは 10 文字以下でなければなりません。無効なプログラム装置名が指定された場合、メッセージ LNR7205 が出されて、実行が終了します。

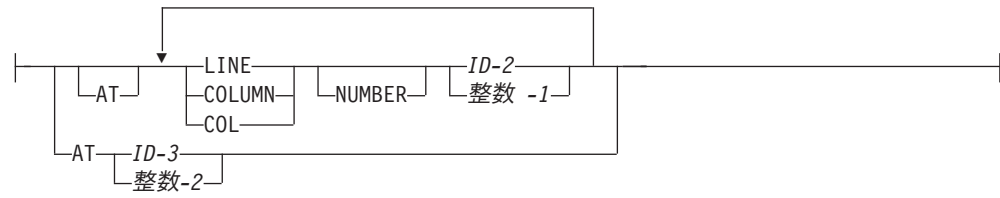
FOR 句が両方とも省略されている (デフォルトの TRANSACTION ファイルが使用されている) 場合、ACCEPT ステートメントは、デフォルト・ファイルに対して READ、WRITE、REWRITE、または ACCEPT (属性データ) 操作が最後に実行されたプログラム装置を使用します。ファイルに対する直前の操作が OPEN であった場合、ACCEPT ステートメントは、ファイルがオープンされたときにファイルによって暗黙のうちに獲得されたプログラム装置を使用します。両方の FOR 句が省略されている場合、この形式の ACCEPT ステートメントを使用するためには、プログラム装置は前もって獲得されていなければなりません。装置の獲得については詳しくは、「*ICF Programming*」を参照してください。

プログラム装置属性は、CORRESPONDING 句のないグループ MOVE の規則に従って、該当する属性データ・フォーマットから ID-1 に転送されます。

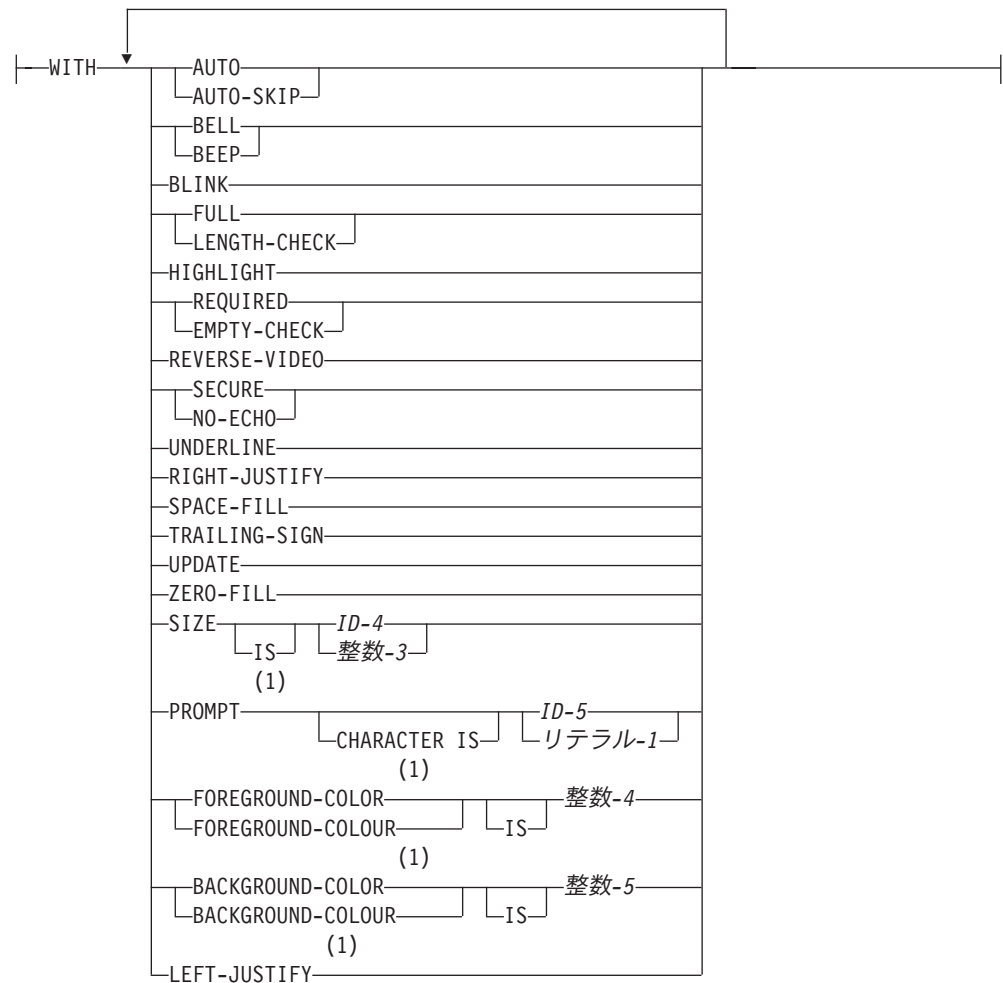
ACCEPT ステートメント



行と列の句:



WITH 句:



注:

1 構文検査だけ行われます。

ID-1

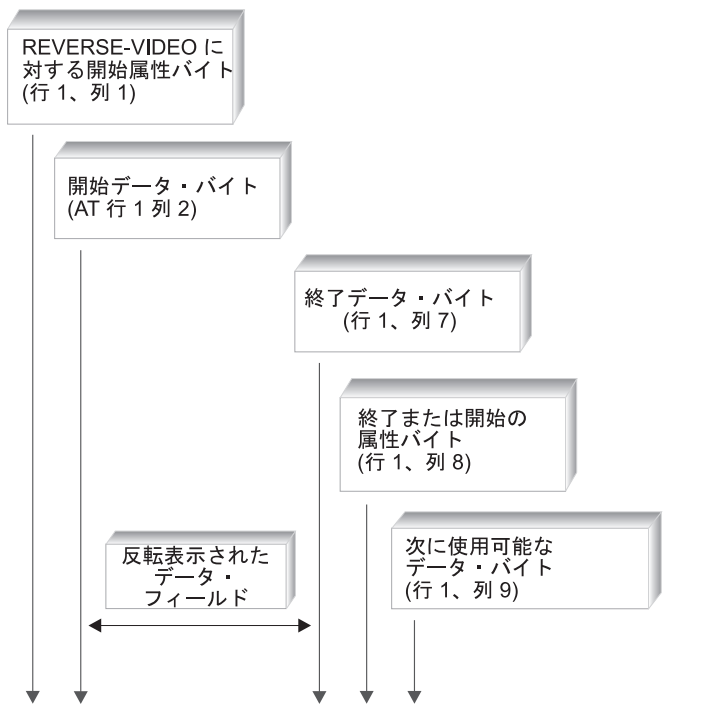
更新可能なデータ項目。

ID-1 は、内部浮動小数点データ項目でも外部浮動小数点データ項目でも可能です。

受け入れられた、または表示されたフィールドは、その前後に属性バイトが必要です。これを実現するには、少なくとも初期表示属性を表示するためのスペースが画面上で使用可能になっていなければなりません。したがって、第 1 行、第 1 列は最初の表示属性用に使用されるため、その場所をデータ用に使用することはできません。データ用に使用可能な最初の位置は、第 1 行、第 2 列となります。

たとえば、次のとおりです。

ACCEPT ステートメント



AT 句は、受け入れられる、または表示されることになるフィールドの開始行および列を設定します。これは、初期表示属性の位置を示すものではありません。

属性バイトがデータ・バイトと重なり合ったり、データ・バイトが属性バイトと重なり合ったりしないように、各フィールドが画面上に配置されていることを確認する必要があります。さらに、属性バイトの終わりは、特定ワークステーションについて定義した通常の属性になることにも留意してください。したがって、期待どおりの結果を得るには属性が正しい順序で指定されていることを確認する必要があります。

最初に画面をクリアするときは、WITH BLANK SCREEN 句を含んだ DISPLAY ステートメントを使用してください。

ID-1 が画面に合わないときは、英数字データが切り捨てられたり、数字データが画面上に表示されなくなります。

ID-1 がグループ項目で、MODE IS BLOCK 句がなければ、FILLER 以外の名前を持つ基本従属項目が表示されます。基本項目は、その記述が DATA DIVISION に現れる順番で画面に同時に表示されて位置付けられ、グループ中の FILLER 項目の長さによって分離されます。このため、行上の最初の位置は、直前の行の最後の位置にすぐ続くものと見なされます。

項目が FILLER によって分離されている場合、属性バイトは FILLER の長さに含まれます。このようにして、1 または 2 バイトの FILLER に、分離項目の後ろに続く属性および先の属性の両方が含まれていることになります。1 バイト FILLER の場合には、後ろに続く属性および先の属性が同じバイトを占有します。データ項目は、通常 1 つの属性バイトで分離されているので、1 バイトの FILLER 項目は必要ありません。

REDEFINES、POINTER、PROCEDURE-POINTER、および INDEX-NAME データが MODE IS BLOCK 句のないグループ項目にあるとき、それらのデータは無視されます。

ACCEPT ステートメント

表示だけ可能な文字は、次の場合に処理されます。

- 拡張 DISPLAY ステートメントが、2 進数、内部浮動小数点、またはパック・データ (直接または再定義されたもの) を使用しない場合。
- 拡張 ACCEPT ステートメントが、英数字フィールドとして再定義された 2 進数、内部浮動小数点、またはパック・データを使用しない場合。

注: MODE IS BLOCK 句は英数字フィールドに対する、データ・グループの暗黙的な再定義です。

たとえば、次のとおりです。

```
01  STRUC2.  
03  F21 PIC 99.  
03  F22 PIC 9(10) USAGE COMP-3 VALUE 1111123.  
03  F23 PIC X(5).
```

ACCEPT STRUC2 MODE IS BLOCK AT 0102 は、長さが 13 バイトの英数字フィールドの 1 つとして処理されるために、表示不能文字が含まれることになります。

リモート制御装置と 5250 エミュレーションを使用して、プログラムがワークステーションで実行される場合、ILE COBOL 実行時モジュールは、コンパイラー・オプション *UNDSPCHR を (それが有効な場合) *NOUNDSPCHR に変更して、通知メッセージをユーザーに送信します。システム構成にさまざまなワークステーション制御機構が含まれているときには、一貫性のある結果が得られるように、*NOUNDSPCHR オプションを使用することをお勧めします。このオプションを有効にするには、COBOL ソース・プログラム内の PROCESS ステートメントに NOUNDSPCHR を指定します。

浮動小数点データ項目の考慮事項

ACCEPT ステートメントで浮動小数点データ項目を使用する場合には、以下について考慮する必要があります。

外部浮動小数点リテラルが ACCEPT される場合は、結果が少し不正確になる可能性があります。このことは、浮動小数点データ項目が ACCEPT された後で転送された場合に、特にそうであると言えます。浮動小数点データ・タイプは近似値で、外部浮動小数点リテラルが転送された場合に、この浮動小数点データ・タイプはまず真の浮動小数点値 (IEEE) に変換されますが、この変換も浮動小数点データ・タイプの正確性に影響を与える可能性があります。

たとえば、以下の ACCEPT を考えてみます。

```
77 external-float-1 PIC +9(3).9(13)E+9(3).  
ACCEPT external-float-1 FROM CRT.  
DISPLAY "EXTERNAL-FLOAT-1=" external-float-1.
```

+123455779012.3453E+297 が ACCEPT された後の表示結果は以下のとおりです。

```
EXTERNAL-FLOAT-1=+123.4557790123452E+306
```

データ・カテゴリー

次の表は、拡張 ACCEPT ステートメントで処理されるデータのカテゴリーを示したものです。ここに示したデータ・カテゴリーは拡張 DISPLAY ステートメントでもサポートされます。(拡張 ACCEPT および DISPLAY ステートメントは

PICTURE 文節にスケール位置をともなうデータ項目をサポートしていません。)

表 29. 拡張 ACCEPT ステートメントで処理されるデータの категория

カテゴリー	初期表示	入力するデータ	更新されるデータ項目
英字	A、B、C	D	B、C
数字 (内部、2 進、10 進、またはパック 10 進)	B、C、E、F、F1、F2	D、G、H	O
数字 (ゾーン 10 進)	B、C、F、F1、F2	D、G、H	O
数字編集	A、I	J、H	K、O
英数字	A、B、C	D	B、C
英数字編集項目	A、I	J	L
ブール	A、B、C	D、M、N	B、C
DBCS	A、B、C	D	B、C
DBCS 編集	A、B、C	D	B、C、L
内部浮動小数点	A、I、II、P	Q	O
外部浮動小数点	A、I、II	Q	O

- A** 左そろえ (デフォルト)。
- B** RIGHT-JUSTIFY の場合は、後書きスペースおよび 16 進数のゼロが除去されて、データは右端の位置に移動されます。
- C** ZERO-FILL の場合は、データが左そろえであれば、後書きスペースおよび 16 進数のゼロがゼロに変換されます。また、データが右そろえであれば先行スペースがゼロに変換されます。
SPACE-FILL だけが指定されている場合、後書き 16 進ゼロはスペースに変換されます。
- D** RIGHT-JUSTIFY および ZERO-FILL (または SPACE-FILL) を指定した場合は、フィールド終了キーを押すと、ワークステーションによってそのフィールドが右端そろえでゼロが埋め込まれるか、またはスペースが埋め込まれます。ZERO-FILL は DBCS を処理しません。
ZERO-FILL (または SPACE-FILL) だけしか指定しない場合には、ワークステーションは何の変換も行いません。
- E** 2 進数またはパック 10 進数がゾーン 10 進数に変換されてから表示されます。
- F** 次の条件が起こります。
- 数字の左側にスペースが埋め込まれてから、その数字が表示されます。
 - 最初に、10 進数に小数点が挿入されて、整数部分と小数部分が分けられます。
 - 小数部分がある場合は、1 桁が小数点用に予約されます。
 - SPECIAL-NAMES 段落の中に DECIMAL-POINT IS COMMA が指定されている場合には、コンマとピリオドの意味が入れ替わります。システム値 QDECFMT とは何の関連もないことに注意してください。

ACCEPT ステートメント

- 数字が符号付きの場合は、符号用に 1 桁が予約されます。
- 数字に負符号が付いている場合は、負符号が表示されます。デフォルトでは、符号は数字の前に付きます。

F1 ZERO-FILL を指定すると、先行ゼロが表示されます。

F2 TRAILING-SIGN を指定すると、符号は右端の桁に入ります。

G 数字、ブランク、および以下に示す記号が受け入れられます。

- - (マイナス)
- + (プラス)
- . (ピリオド)
- , (コンマ)

符号は先行位置または後書き位置に入力しなければなりません。小数点は小数部分の前に入力しなければなりません。桁の位置そろえは行われません。コンマは整数部分を 3 桁ごとに区切ります。

H 数字は以下のような特性をもちます。

1. 符号を示すシンボル値はオプションであり、存在する場合は、どの桁の値よりも前にあっても (先行符号)、あるいは、その値の後に付いても (後書き符号) かまいません。使用できる符号は、正符号と負符号です。符号記号が先行符号の場合は、ブランク文字の前に付けることもできます。後書き符号の場合は、常にフィールドの右端の文字位置になければなりません。符号記号は 1 つしか使えません。
2. 最高 31 桁まで指定できます。使用できる数字は 0 から 9 までです。先頭の数字桁の前にはブランク文字を付けることができますが、左端の数字桁よりも右側に位置するブランク文字は無効となります。

10 進数値は整数と小数の 2 つの部分に分けられます。小数点の左側の数字は整数値として解釈されます。右側の数字は小数値として解釈されます。小数点が含まれていない場合、その数字は整数値として解釈されます。小数点記号が左端の数字桁よりも前にある場合、その数字は小数値として解釈されますが、その場合、左端の数字桁は小数点記号と隣り合っていないなければなりません。小数点が右端の数字桁のうしろにある場合は、その数字は整数として解釈されますが、右端の数字桁は小数点と隣り合っていないなければなりません。

整数部分の数字桁には、3 桁ごとのグループに分割するコンマを付けても付けなくてもかまいません。左端のグループは、1 桁、2 桁、または 3 桁のどれでもかまいませんが、その後の各グループは必ず前にコンマが付いて、しかも 3 桁からなるグループでなければなりません。コンマ記号の両側には必ず数字桁がくるようになっていなければなりません。

小数部分の数字桁をコンマで区切ることはできず、それらの数字桁の隣は必ず数字桁でなければなりません。

I 数字は、暗黙または明示の PIC 記号に従って編集されます。ZERO-FILL、SPACE-FILL、および RIGHT-JUSTIFY は編集フィールドまたは浮動小数点フィールドには影響を与えません。

II TRAILING-SIGN は、編集フィールドまたは浮動小数点フィールドには影響を与えません。

- J** データの入力には、編集された記号を使う必要があります。
- K** すべての編集記号が除去された後に、結果として得られる数字が編集によって数字編集フィールドの中に戻されます。非数字が検出されると、実行時メッセージが出されます。
- L** データがフィールド内に戻されて、編集は**行われません**。ユーザーは、必ずこの後に編集形式を指定するようにならなければなりません。
- M** 数字、ブランク、および以下に示す記号が受け入れられます。
- - (マイナス)
 - + (プラス)
 - . (ピリオド)
 - , (コンマ)
- N** ゼロまたは 1 以外のどの文字でもエラー・メッセージが生成されます。
- O** 想定されている小数点位に数字フィールドが位置合わせされます。データの位置付けに関する規則の詳細は 148 ページの『位置合わせの規則』を参照してください。
- P** 内部浮動小数点数は、外部浮動小数点数に変換されてから表示されます。
- COMP-1 項目は、-.9(8)E-99 という外部浮動小数点 PICTURE 文節を持っているかのように表示されます。
 - COMP-2 項目は、-.9(17)E-999 という外部浮動小数点 PICTURE 文節を持っているかのように表示されます。
- Q** データは、浮動小数点リテラルの形成に関する規則に従って入力しなくてはなりません (19 ページの『浮動小数点リテラル』を参照)。指数はオプションです。

ID-1 の後に続く句はどのような順序でもかまいません。指定されたすべての句は、それに先行する ID に適用されます。

AT 句

AT 句は、ACCEPT 操作が開始される画面上の絶対アドレスを示します。AT 句を指定しないと、ACCEPT 操作は第 1 行、第 2 列から開始されます。この句は、先行属性の開始位置を示すものではありません。

LINE 句は、画面上で画面項目が始まる行を指定します。

COLUMN 句は、画面上で画面項目が始まる列を指定します。

COL は、COLUMN の省略形です。

LINE 句および COLUMN 句は、どのような順序で記入してもかまいません。

ID-2、整数-1

ID-2 および整数-1 は、符号の付いていない 0 以上の値を持つ、9 桁未満の整数でなければなりません。LINE 句または COLUMN 句の値が負の場合は、絶対値がとられます。ID-2 または整数-1 は、PIC 9(3) 数字の中に移されます。

ID-2 は、内部浮動小数点データ項目であっても外部浮動小数点データ項目であってもいけません。

ACCEPT ステートメント

行および列番号の特定の組み合わせには、次のような特別な意味があります。

- 列が範囲内に入るまでは、その範囲外の列値は行の長さ分だけ減じられ、行値は増分されます。列番号によっては、行番号が数回増分されてしまうこともあります。
- 範囲外の行値は、画面を 1 行分上方に画面移動させます。これは、最下部の行番号が指定された場合と同じです。指定された行にかかわらず、画面が 2 行以上スクロールされることはありません。
- 列番号および行番号の両方ともが範囲外にある場合は、まず範囲外の列のほうが最初に処理されてから、次に範囲外の行が（上記の規則に従って）処理されます。
- 入力された行および列番号が両方ともゼロの場合は、ACCEPT は、直前の ACCEPT 操作が終了したところの次の位置から開始されます。各行の 1 列目は、直前の行の最終列の後に続いているものと見なされます。
- 行番号がゼロで、しかもゼロ以外の列番号が指定されている場合は、ACCEPT は、直前の表示操作が終了した行の次の行の、指定された列から始まります。
- 列番号がゼロで、しかもゼロ以外の行番号が指定されている場合は、ACCEPT は、指定された行の、直前の表示操作が終了した列の次の列から始まります。

ID-3、整数-2

ID-3 は、PIC 9(4) または PIC 9(6) フィールドでなければなりません。ID-3 は、内部浮動小数点データ項目であっても、外部浮動小数点データ項目であってもいけません。

整数-2 は、4 バイトまたは 6 バイトの数字フィールドでなければなりません。

ID-3 または整数-2 の長さが 4 バイトの場合は、最初の 2 桁が行を指定し、次の 2 桁が列を指定します。ID-3 または整数-2 の長さが 6 バイトの場合は、最初の 3 桁が行を指定し、次の 3 桁が列を指定します。

FROM CRT 句

ACCEPT ステートメントが拡張されていることを示します。

MODE IS BLOCK 句

ID は基本項目として扱われます。したがって、ID がグループ項目であっても、1 つの項目として受け入れられます。

ON EXCEPTION 句

ON EXCEPTION を指定すると、ACCEPT 操作が通常の完了以外で終わった場合は、命令ステートメント-1 が実行されます。つまり、CRT 状況キー 1 がゼロ以外の場合です。

ON EXCEPTION 句を使用しても、ワークステーション境界または画面範囲外などの条件に対する実行時メッセージが生成されないようにすることはできません。

NOT ON EXCEPTION を指定している場合、ACCEPT 操作が正常に完了して終了すると、命令ステートメント-2 が実行されます。

END-ACCEPT 句

END-ACCEPT はオプションです。ACCEPT ステートメントをネストする場合は、END-ACCEPT は必要です。

WITH 句

WITH 句を使うことによって、ユーザーは ACCEPT 操作の特定のオプションを指定することができるようになります。そのようなオプションについては、以下に示す各句で説明します。

AUTO (AUTO-SKIP) 句

フィールドがオペレーター入力によって充てんされると、カーソルは、終了文字が入力されるのを待たずに、次の入力フィールドに自動的にスキップします。そのフィールドがグループの最後のフィールドである場合は、AUTO-SKIP は、ENTER キーが押された場合と同じ効力を持ちます。

AUTO と AUTO-SKIP はいずれを使ってもかまいません。

BELL (BEEP) 句

この句を含んでいる項目が受け入れられるたびに、警報音が鳴ります。

BELL と BEEP はいずれを使ってもかまいません。

BLINK 句

画面項目が画面に表示されると明滅します。

FULL (LENGTH-CHECK) 句

オペレーターは、画面項目をまったく空のままにするか、または画面をデータで完全に埋め込むかのいずれかを行わなければなりません。フィールド終了、フィールド +、フィールド - のキーを使用することはできません。また、実行キーを押したあとに、入力フィールド内のデータに対して削除キーを使うこともできません。最初に表示されるデータで FULL 句を満たすことができます。

この句がグループ・レベルに指定されている場合、該当する従属基本項目のすべてに適用されます。

FULL 句は、すべての ACCEPT ステートメントの実行中に効力があります。

FULL および LENGTH-CHECK は、いずれを使ってもかまいません。

HIGHLIGHT 句

画面項目が高輝度モードで画面に表示されます。

REQUIRED (EMPTY-CHECK) 句

REQUIRED 句は、フィールドが空のまま残らないようにするために使用します。

英数字項目の場合、これは、フィールドにはスペースまたは 16 進ゼロ以外の文字が少なくとも 1 つ含まれていなければならないことを意味します。数字項目の場合、フィールドには必ずゼロ以外の数字が入っていなければならないことです。

この句を指定したときにフィールドが空のままになると、実行時メッセージが出力されて、ユーザーはリセット・キーを押してから、データを入力し直すように要求されます。

REQUIRED および EMPTY-CHECK 句は、いずれを使ってもかまいません。

REVERSE-VIDEO 句

画面項目が反転表示で示されます。

SECURE (NO-ECHO) 句

オペレーターが入力したデータが画面に表示されなくなります。この句はグループ画面項目に指定できます。その場合、この句は、その項目に従属するすべての基本項目に対して適用されます。SECURE 句が指定されているときは、画面項目内に現れるのはスペースとカーソルだけになります。

SECURE と NO-ECHO 同じ意味で使用されます。

UNDERLINE 句

画面に表示される画面項目に下線が引かれます。

RIGHT-JUSTIFY 句

オペレーターが入力した文字が画面のフィールドの右端の文字位置に移動されます。後書きスペースおよび後書き 16 進ゼロは除去されます。

このオプションで影響を受けるのは、非編集データ項目だけです。この句が効力を持つのは、データ項目の初期データが表示されたとき、および ACCEPT 操作が終了するときです。これは、数字データを処理する唯一の方法です。

データ項目の定義に DATA DIVISION の JUSTIFIED RIGHT 文節を使った場合は、そのデータ項目は RIGHT-JUSTIFY 句が指定されていた場合と同じように処理されます。

SIZE 句

画面上にデータ項目のサイズを指定します。この句は基本データ項目にしか使用することができません。

指定されたサイズがゼロであれば、SIZE 句には影響がありません。この場合、データ項目を表示するためにフィールドの長さが使用されます。

関連する PICTURE 文節によって暗黙指定されたサイズよりも小さなサイズが指定されると、ワークステーションの画面にはデータ項目の左端の部分だけが現れます。

数字または数字編集のデータ項目に対して指定したサイズが PICTURE 文節によって暗黙指定されたサイズよりも小さくなる場合には、値の表示や ACCEPT 操作における事前表示の際に、値の右端が切り捨てられた状態で表示されます。データ項目は MOVE 操作の規則に従って更新されます。

フィールドの長さが画面サイズを超える値を持つ SIZE リテラルを指定する場合には、英数字データが切り捨てられたり、数字データが無視されるか、表示されなくなります。

JUSTIFIED が指定された項目に関しては、その項目の長さよりも小さいサイズを指定すると、右端の部分だけが現れます。

ユーザーが指定するサイズが、PICTURE 文節で暗黙指定されたサイズよりも大きい場合には、その項目の表示用部分にはスペースが埋め込まれます。埋め込まれるのは右側です。

SPACE-FILL 句

非編集データ項目の場合、後書きの 16 進ゼロはスペースに変換されて、項目はすべての文字位置でゼロ消去が行われて画面に表示されます。この効果が現れるのは、データ項目の初期データが表示されたときと、データ項目内への ACCEPT 操作が終了したときです。このオプションは、編集フィールドには影響を与えません。

TRAILING-SIGN 句

演算符号がフィールドの右端の文字位置に表示されます。この効果が現れるのは、データ項目の初期データが表示されたときと、ACCEPT 操作が終了したときです。このオプションの影響を受けるのは、符号付きの非編集数字データ項目だけです。このオプションを指定していないときは、符号は数字の前に付きます。

UPDATE 句

新しいデータをキー入力するようオペレーターにプロンプトが出される前に、データ項目の現在の内容が表示されます。次いで、初期データは、オペレーターがキー入力した場合と同じように処理されます。

データ・タイプごとの事前表示: UPDATE 句がない場合には、一部のデータの前表示を制御できます。数字編集データだけを事前表示するには、EXTDSPOPT パラメーターの *ACCUPDNE オプションを指定します。全データを事前表示するには、デフォルト・オプション *ACCUPDALL を使用します。

ZERO-FILL 句

ゼロ消去が行われずに非編集データ項目が画面に表示されます。左そろえデータの場合、後書きスペースおよび後書き 16 進ゼロはゼロに変換されます。右そろえデータの場合、先行スペースがゼロに変換されます。

この効果が現れるのは、データ項目の初期データが表示されたときと、データ項目内への ACCEPT 操作が終了したときです。編集フィールドには影響を与えません。

構文検査だけを受ける句

次に示す句は、構文検査を受けませんが、以下のとおりです。

構文検査後コンパイラーは文書として扱います。

• PROMPT CHARACTER

– PROMPT CHARACTER 文節により画面上の空の文字位置をマークします。

ID-5 ID-5 は単一の英字または英数字データ項目でなければなりません。
ID-5 は OCCURS 文節に従属してはなりません。

リテラル-1

リテラル-1 は、1 文字の非数字リテラルまたは表意定数でなければなりません。

• FOREGROUND-COLOR または FOREGROUND-COLOUR

ACCEPT ステートメント

- FOREGROUND-COLOR/FOREGROUND-COLOUR 文節は画面項目の前景色を指定します。

整数-4 整数-4 は符号なしの整数でなければなりません。

- **BACKGROUND-COLOR** または **BACKGROUND-COLOUR**

- BACKGROUND-COLOR/BACKGROUND-COLOUR 文節は画面項目の背景色を指定します。

整数-5 整数-5 は符号なしの整数でなければなりません。

- **LEFT-JUSTIFY**

形式 7 の考慮事項

ID-1 がグループ項目で、しかも MODE IS BLOCK 句が付いていない場合には、FILLER 以外の名前が付いた基本従属項目が受け入れられます。このような基本項目は、その記述が DATA DIVISION 内に記入されている順序に従って画面上に配置され、それぞれの項目の間はグループの FILLER 項目の長さ分だけ空けられます。

このため、行上の最初の位置は、直前の行の最後の位置にすぐに続くものと見なされます。項目の受け入れもこれと同じ順序で行われます。

CURSOR 文節に特に指定がない限り、はじめはカーソルは最初の項目の先頭を指し示します。各項目への ACCEPT 操作が終了すると、カーソルは次の項目の先頭に移動します。

CURSOR 文節がフィールドの位置に影響を与えることはありません。唯一行えるのは、決められた規則に従って ACCEPT ステートメントのカーソル位置を変更することだけです。

記号 P を含んでいる PICTURE 文節を持つ数字項目は、拡張 ACCEPT ステートメントではサポートされません。

MODE IS BLOCK を指定しない限り、データ項目には固定長テーブルを入れることはできません。また、MODE IS BLOCK を指定するしないにかかわらず、データ項目には可変長のテーブルを入れることはできません。

拡張 ACCEPT および拡張 DISPLAY の考慮事項

拡張 ACCEPT ステートメントと拡張 DISPLAY ステートメントの両方について、次のことを考慮する必要があります。

画面形式: 拡張 ACCEPT または DISPLAY 操作では、24 行、80 桁の画面形式がサポートされます。

拡張 ACCEPT または DISPLAY 操作が処理されたときは、それ以外のディスプレイ・ファイルをプログラムでオープンすることはできません。拡張 ACCEPT および DISPLAY ステートメントが含まれているプログラムの中に TRANSACTION ファイルがコーディングされている場合、ユーザーは拡張 ACCEPT または DISPLAY ステートメントが TRANSACTION I/O の介入を受けないように気を付ける必要があります。また、逆に、TRANSACTION I/O が拡張 ACCEPT または DISPLAY ステートメントの介入を受けないように気を付ける必要もあります。

添え字および参照変更: 添え字付き項目および参照変更項目は両方ともサポートされています。

パフォーマンス: CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドで EXTDSPOPT(*NODFRWRT) パラメーター (非据え置き書き出し) を指定しない場合、ILE COBOL コンパイラーは、次の ACCEPT ステートメントが発生するまで、すべての拡張 DISPLAY ステートメントをバッファに入れます。*NODFRWRT オプションがあれば、DISPLAY ステートメントをその発生時に実行することにより、データ・エラーをその原因であるステートメントに関連付けることができます。据え置き書き出し (*DFRWRT) オプションは、連続する DISPLAY ステートメントが生成したデータ・ストリームをバッファリングすることにより、パフォーマンスを改善します。

DBCS 処理: DBCS プログラムは、DBCS システム上でコンパイルされた場合のみ、DBCS システム上で実行できます。

- DBCS 項目を継続させるには、シフトインおよびシフトアウト文字を正しくコーディングしなければなりません。 DBCS 項目の継続規則については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の 2 バイト文字セット・サポートに関する付録を参照してください。
- DBCS の内容は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の 2 バイト文字セット・サポートに関する付録に説明されている規則によって決まります。
- CRTCBMOD コマンドまたは CRTBNDCBL コマンドの拡張 DISPLAY パラメーターの *NOUNDSPCHAR (表示不能文字なし) オプションか、同等の処理ステートメント・オプションを指定しなければ、データは送信されたとおりに画面にそのまま渡されます。*NOUNDSPCHAR オプションを指定した場合には、データに制御情報が存在するかどうかワークステーションによって検査されます。この場合、出力データには有効な表示文字だけが含まれることとなります。
- 英字フィールドまたは英数字フィールドの長さが 4 バイトより小さい場合には、16 進数の 40 よりも小さい値が検出されてもエラーは生成されません。

句の組み合わせ: 1 つの ACCEPT または DISPLAY ステートメントで、1 つの WITH 句に UNDERLINE、HIGHLIGHT、および REVERSE-VIDEO 句が含まれている場合には、HIGHLIGHT 句が無視されます。このような組み合わせがコーディングされると、コンパイル時に警告メッセージ (LNC0265) が出されます。拡張 DISPLAY ステートメントの中では、UPON CRT-UNDER 句は UNDERLINE 句と同等です。フィールドが画面上に表示されないようにするには、SECURE オプションを使用します。

TRANSACTION ファイル: 拡張 ACCEPT/DISPLAY ステートメントと TRANSACTION ファイルを同一のプログラムで使用することはお勧めできません。拡張 ACCEPT/DISPLAY ステートメントが TRANSACTION ファイルと同一のプログラムで使用されている場合には、拡張 ACCEPT/DISPLAY ステートメントの実行時に、TRANSACTION ファイルをクローズする必要があります。TRANSACTION ファイルのオープン時に、拡張 ACCEPT/DISPLAY ステートメントを実行するならば予測不能な結果が生じます。重大エラーが生成されたり、ワークステーション上のデータの重なり合いまたは混合が生じる場合もあります。

ACCEPT ステートメント

リモート・ワークステーション: 拡張 ACCEPT および DISPLAY ステートメントは、5251-12 型制御装置に接続しているリモート・ワークステーションでは実行しません。

CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの EXTDSPOPT(*NOUNDSPCHR) パラメーターにより、拡張 ACCEPT ステートメントおよび DISPLAY ステートメントを 3174 および 3274 制御装置に接続しているリモート・ワークステーションで使用できます。ただし、ユーザーのデータに非表示文字が含まれてはなりません。リモート制御装置の使用、データの受け入れを行うために CLEAR キーおよび HELP キーを使用することはできません。

COBOL/2* の処理との相違点: ILE COBOL の拡張 ACCEPT および DISPLAY ステートメントは、ACCEPT および DISPLAY ステートメント (形式 2) に類似しています。異なる点については 729 ページの『付録 I. ACCEPT/DISPLAY および COBOL/2 に関する考慮事項』で説明します。

IBM 拡張 の終り

形式 8 - セッション I/O

IBM 拡張

ACCEPT ステートメントは ILE 共通セッション管理プログラムから情報を検索します。

ACCEPT ステートメント - 形式 8 - セッション I/O

▶—ACCEPT—ID-1—
└──FROM—DISPLAY—┘ └──END-ACCEPT—┘

ID-1 の説明に TYPE 文節が含まれる場合は、その文節で参照されるタイプ名は基本項目でなければなりません。

CONSOLE IS DISPLAY 文節が SPECIAL-NAMES 段落に指定される場合、ACCEPT ステートメントのこの形式では FROM 句の指定はオプションです。

形式 8 は、ILE 共通セッション管理プログラムから ID-1 ヘデータを転送する場合に使用します。入力データは、以下のいずれかの形式で受け取られます。

- USAGE IS DISPLAY 形式。データは変換されません。
- USAGE IS DISPLAY-1 形式。データを囲むシフトアウト文字とシフトイン文字が除去されます。
- USAGE IS NATIONAL 形式。データは、ジョブの現行 CCSID によって指定されるコード・セットから変換されます。

ILE 共通セッション管理プログラムを使用して ACCEPT ステートメントを管理します。画面入出力セッション・サービスの詳細については、Web サイト

<http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリーの中の『CL および API』セクションの

『『Dynamic Screen Manager』』セクションを参照してください。

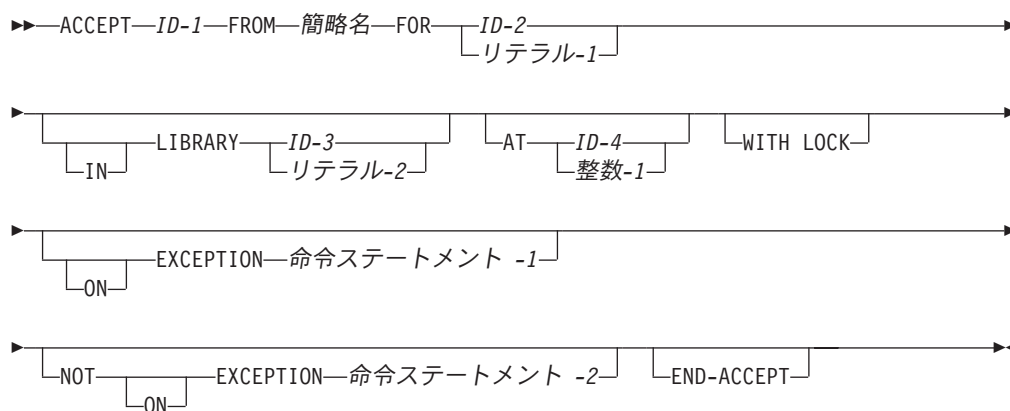
IBM 拡張 の終り

形式 9 - データ域

IBM 拡張

ACCEPT ステートメントは、FOR 句で指定されるデータ域から情報を検索します。

ACCEPT ステートメント - 形式 9 - データ域



ID-1

ID-1 のクラスは、英数字、数字、DBCS または国別のどれでもかまいません。

ID-1 の説明に TYPE 文節が含まれる場合は、その文節で参照されるタイプ名は基本項目でなければなりません。

FROM 句

FROM 句は、SPECIAL-NAMES 段落中の DATA-AREA の環境名に関連付けなければならない簡略名を指定します。

FOR 句

情報を検索するためのオペレーティング・システムのデータ域を識別します。指定されたデータ域が実行時に見つからない場合は、ON EXCEPTION エラーが発生します。

ID-2

英数字データ項目でなければなりません。ID-2 の内容は、有効なオペレーティング・システムのデータ域名を表していなければなりません。オペレーティング・システムのデータ域名は、最大 10 文字の長さです。したがって ID-2 の最初の 10 文字が、データ域名を形成するために使用されます。

リテラル-1

非数字で、長さが最大 10 文字でなくてはなりません。

LIBRARY 句

データ域を検出するオペレーティング・システムのライブラリーの名前を指定するために使用されます。特殊値 *LIBL (ジョブのライブラリー・リストを使用する検索) または *CURLIB (現行ライブラリーを検索) を指定できます。LIBRARY 句を省略すると、ジョブのライブラリー・リストを使用して、データ域を検索します。

ID-3

英数字データ項目でなければなりません。i5/OS のライブラリー名の長さは最大 10 文字であるため、ID-3 の最初の 10 文字だけを使用してライブラリー名が形成されます。

リテラル-2

非数字で、長さが最大 10 文字でなくてはなりません。

ID-2、ID-3、リテラル-1、およびリテラル-2 は、*MONOPRC コンパイラー・オプションによって影響を受けません。これらには、オペレーティング・システムの引用符付き名を入れることができます (詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』のセクションの『名前の指定の規則』を参照してください)。

AT 句

AT 句は、テキストを受け取るデータ域内の開始位置を示します。

AT 句が指定されていない場合、開始位置 1 が想定されます。

ID-4、整数-1

ID-4 および整数-1 は正の整数で、その値は 1 から最大データ域サイズ (2000) の範囲になくてはなりません。

WITH LOCK 句

ACCEPT ステートメントが、情報を検索して ID-1 に入れている間、データ域は、変更されないように LSRD ロック (読み取りのための共用ロック) でロックされます。ID-1 が情報を受け入れた後、WITH LOCK 句は LEAR ロック (排他ロック読み取り可) をデータ域に設置します。ロックをデータ域に設置できない場合、例外条件が発生します。

データの転送後もロックをデータ域に保存するためには、この句を指定してください。このステートメント以前にデータ域にロックが存在し、ステートメントに WITH LOCK 句が含まれていない場合、そのロックは解放されます。

(NOT) ON EXCEPTION 句

データ域にアクセスしている間にエラーが発生すると、ON EXCEPTION 句で指定された任意の命令ステートメントが処理されます。ON EXCEPTION 句がない場合は、実行時メッセージが発行されます。データ域が正常にアクセスされると、NOT ON EXCEPTION 句で指定された任意の命令ステートメントが処理されます。

END-ACCEPT 句

明示範囲終了符号 END-ACCEPT は、ACCEPT ステートメントの有効範囲を区切る働きをします。END-ACCEPT を使うと、条件 ACCEPT ステートメントを別の条件ステートメント内でネストさせることができます。END-ACCEPT は命令

ACCEPT ステートメント

ACCEPT ステートメントとともに使用することもできます。詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』のセクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

ACQUIRE ステートメント

IBM 拡張

ACQUIRE ステートメントは、TRANSACTION ファイル用のプログラム装置を獲得するために使用されます。

ACQUIRE ステートメント - 形式 - TRANSACTION

▶▶ ACQUIRE $\overbrace{\text{ID}}^{\text{リテラル}}$ FOR $\overbrace{\text{ファイル名}}$ ▶▶

ID、リテラル

リテラルまたは ID の内容で、指定ファイルによって獲得されるプログラム装置名を指定します。リテラルは、非数字で、長さは 10 文字以下でなければなりません。ID は英数字データ項目を参照し、長さは 10 文字以下でなければなりません。

ファイル名

ファイル名は TRANSACTION 編成のファイルの名前でなければならず、かつ、ACQUIRE ステートメントの実行時には、このファイルがオープンされていなければなりません。編成が TRANSACTION でない場合には、コンパイル・エラー・メッセージが出されます。

通信装置を獲得するために前もって適合していなければならない条件に関しては、「*ICF Programming*」を参照してください。ディスプレイ装置を獲得するために前もって適合していなければならない条件の詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/r> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『*DB2 Universal Database for AS/400*』セクションを参照してください。

ACQUIRE 操作が正常に完了すると、プログラム装置は入出力操作用に使用可能になります。ACQUIRE が正常に終了しない場合、ファイル状況値は 9H にセットされ、適用可能な USE AFTER EXCEPTION/ERROR プロシーチャーが呼び出されます。

ファイルがオープンされているとき、プログラム装置 1 台だけを暗黙のうちに獲得できます。ファイルが ICF ファイルである場合、暗黙的に獲得される 1 個のプログラム装置は、ICF ファイル作成 (CRTICFF) CL コマンドの ACQPGMDEV パラメーターによって決定されます。ファイルがディスプレイ・ファイルである場合、暗黙的に獲得される 1 個のプログラム装置は、表示装置ファイル作成 (CRTDSPF) CL コマンドの DEV パラメーターの中の最初の記入項目によって決定されます。追加のプログラム装置は、明示的に獲得しなければなりません。

プログラム装置は、ACQUIRE ステートメントを使用して明示的に獲得されます。ICF ファイルの場合、ファイルのオープン前に、ICF 装置項目追加 (ADDICFDEVE) コマンドまたは ICF プログラム装置項目一時変更 (OVRICFDEVE) コマンドを使って、プログラム装置がファイルに前もって定義されていなければなりません。ディスプレイ・ファイルの場合、ファイル作成、変更、または一時変更されたとき、そ

のファイルに対して OPEN が出される前に、DEV パラメーターにプログラム装置が前もって指定されていなければなりません。

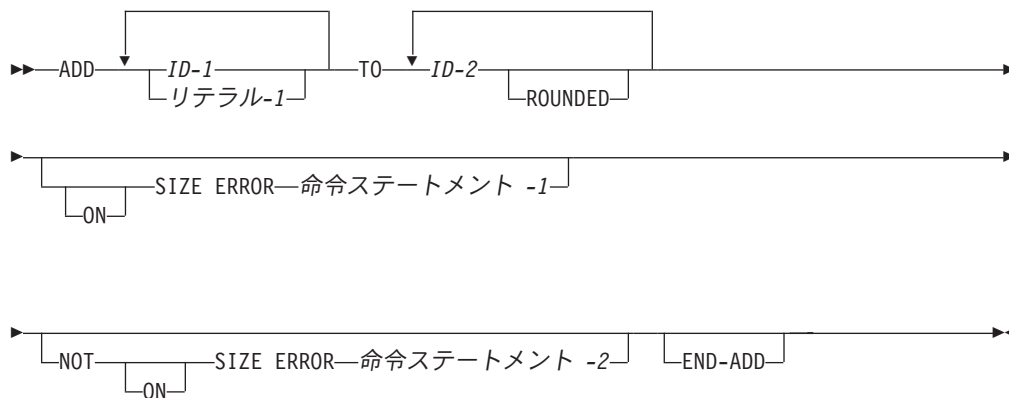
ディスプレイ装置用のこのような CL コマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリーの中の『CL および API』セクションを参照してください。通信装置用のこれらの CL コマンドについては、「*ICF Programming*」を参照してください。ACQUIRE ステートメントは、入出力エラーからの回復の補助手段としても使用できます。リカバリー・プロシージャの詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『通信機能の回復』のセクションを参照してください。

IBM 拡張の終り

ADD ステートメント

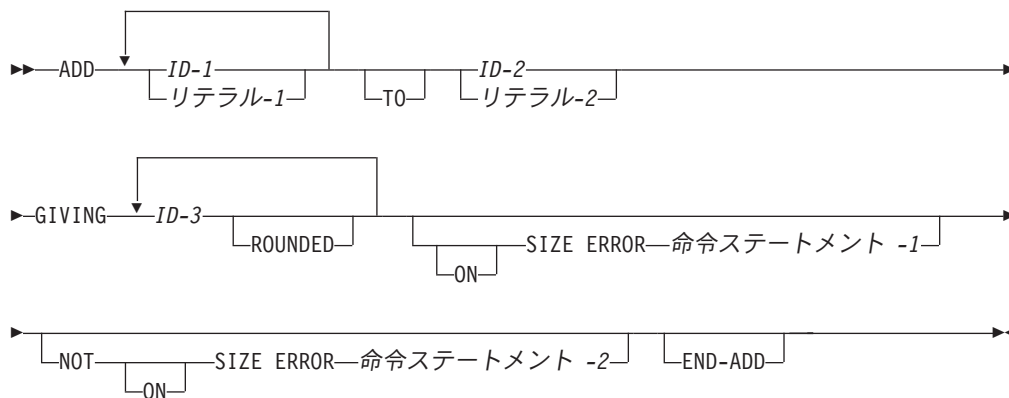
ADD ステートメントは、複数の数字オペランドを加算して、その結果を保管するために使用されます。

ADD ステートメント - 形式 1 - ADD



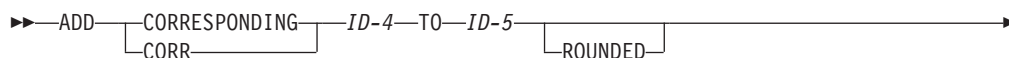
形式 1 では、キーワード TO の前にある ID およびリテラルを加算し、この和を ID-2 に加え、保管します。この最初の和も、連続して出現するそれぞれの ID-2 に対して、ID-2 が指定されている順に、左から右へ加算されます。

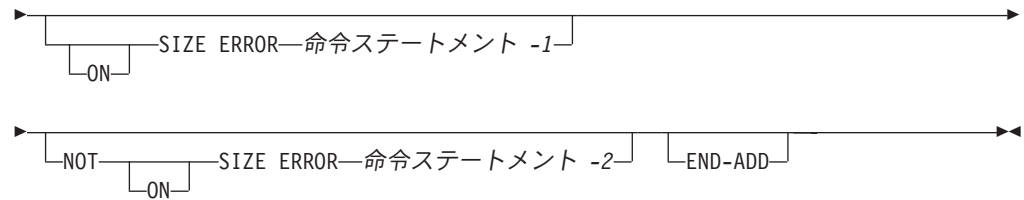
ADD ステートメント - 形式 2 - ADD GIVING



形式 2 では、語 GIVING の前にあるオペランドの値をすべて加算し、その和を、ID-3 が参照する各データ項目の新しい値として保管します。

ADD ステートメント - 形式 3 - ADD CORRESPONDING





形式 3 では、ID-4 内の基本データ項目を ID-5 内の対応する基本項目に加算して、保管します。

すべての形式において、以下が適用されます。

ID-1、ID-2

基本数字項目でなければなりません。

ID-3

基本数字項目または数字編集項目でなければなりません。

ID-4、ID-5

グループ項目でなければなりません。

リテラル-1、リテラル-2

数字リテラルでなければなりません。

形式 1 では、該当のステートメント内のすべてのオペランドを使用して、オペランドの合成内容が決定されます。

形式 2 では、語 GIVING に続くデータ項目を除く該当のステートメント内のすべてのオペランドを使用して、オペランドの合成内容が決定されます。

形式 3 では、対応するデータ項目のおおのの対に対して、個別にオペランドの合成内容が決定されます。

オペランドの合成に関する詳細は 293 ページの『オペランドのサイズ』を参照してください。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目および浮動小数点リテラルは、数字データ項目または数字リテラルが指定できる場所ではどこでも使用できます。

IBM 拡張 の終り

ROUNDED 句

291 ページの『ROUNDED 句』を参照してください。

SIZE ERROR 句

292 ページの『SIZE ERROR 句』を参照してください。

CORRESPONDING 句 (形式 3)

290 ページの『CORRESPONDING 句』を参照してください。

ADD ステートメント

END-ADD 句

この明示範囲終了符号は、ADD ステートメントの有効範囲を区切ります。
END-ADD は条件 ADD ステートメントを命令ステートメントに変換して、別の条件ステートメント内でネストさせることができます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

ALTER ステートメント

ALTER ステートメントは、GO TO ステートメントの中で指定されている制御の転送先を変更します。

注: ALTER ステートメントは、構造化されていないプログラミング技法を促すものです (使用はお勧めできません)。ALTER ステートメントと同じ機能を提供するものに EVALUATE ステートメントがあり、これはプログラムをより良く構成するのに役立ちます。

ALTER ステートメント - 形式



ALTER ステートメントの実行によって、プロシージャー名-1 で名前を指定された段落中の GO TO ステートメントが修正されます。続いてこの修正された GO TO ステートメントが実行されると、プロシージャー名-2 へ制御が移ります。

プロシージャー名-1

手続き部の段落には文が 1 つだけが含まれる必要があります。それは DEPENDING ON 句のない GO TO ステートメントです。

プロシージャー名-2

手続き部のセクションまたは段落でなければなりません。

プロシージャー名-1 およびプロシージャー名-2 が宣言プロシージャー内にある場合、そのどちらも、どの非宣言プロシージャーも参照できません。プログラムの非宣言の中では、EXCEPTION/ERROR 宣言プロシージャーの中に現れるプロシージャー名に対する参照があってはなりません。

ALTER ステートメントの実行前に、プロシージャー名-1 に指定されている段階に制御が移った場合には、GO TO ステートメントは GO TO ステートメントで指定された段落に制御を移します。しかし、ALTER ステートメントの実行後に、制御が再度プロシージャー名-1 によって指定された段落へ渡ると、GO TO ステートメントは制御をプロシージャー名-2 によって指定されている段落へ渡します。

注: RECURSIVE 属性をもつプログラムで、ALTER ステートメントを使用しないでください。

コーディング例

ALTER ステートメントはプログラム・スイッチの働きをします。たとえば、初期設定時にはある順序で実行し、ファイル処理の部分では別の順序で実行できます。変更した GO TO ステートメントはデバッグが困難なため、スイッチをテストしてそのスイッチの値に基づいて特定のコード・シーケンスを実行することをお勧めします。たとえば、次のとおりです。

```

  PARAGRAPH-1.
    GO TO BYPASS-PARAGRAPH.
  PARAGRAPH-1A.
  .
  
```

ALTER ステートメント

```
      .  
      BYPASS-PARAGRAPH.  
      .  
      ALTER PARAGRAPH-1 TO PROCEED TO  
          PARAGRAPH-2.  
      .  
      .  
      PARAGRAPH-2.  
      .  
      .
```

ALTER ステートメントの実行前に、制御が PARAGRAPH-1 へ渡った場合には、GO TO ステートメントは制御を BYPASS-PARAGRAPH へ移します。ただし、ALTER ステートメントの実行後に、制御が PARAGRAPH-1 へ渡ると、GO TO ステートメントは制御を PARAGRAPH-2 へ渡します。

INITIAL 属性のあるプログラム内で修正された GO TO ステートメントは、プログラムに入るたびに最初の状態に戻ります。

CALL ステートメント

CALL ステートメントは実行単位の中で、あるプログラムから別のプログラムに制御を渡します。

CALL ステートメントを含むプログラムは、呼び出し側プログラムです。また、CALL ステートメントに示されるプログラムは、呼び出し先サブプログラムです。呼び出し側プログラムには、他のプログラムを呼び出す時点で CALL ステートメントが入っていないなければなりません。

IBM 拡張

ILE COBOL では、サブプログラムは COBOL プログラム、他の i5/OS 言語で書かれたプログラム、または ILE プロシージャである可能性があります。

IBM 拡張 の終り

CALL ステートメントの処理によって、呼び出し先サブプログラムの非宣言の最初の命令へ制御が渡されます。呼び出し側プログラムへ制御が戻る場合の戻り先は、CALL ステートメントの次の命令です。呼び出し先サブプログラムに手続き部、または手続き部の非宣言セクションがない場合には、その呼び出し先サブプログラムは暗黙の EXIT PROGRAM を出します。

プログラム制御が CALL ステートメントによって移され、呼び出し先プログラムが、直接または間接的に、呼び出し元のプログラムを実行すると、再帰呼び出しが行われたこととなります。RECURSIVE 属性が定義されたプログラムは、直接または間接的にそれ自身を実行する CALL ステートメントを実行できます。ILE COBOL では、非再帰的プログラムで再帰を行うことはできません。非再帰的プログラムに対して再帰を試みると、実行時エラー・メッセージが生成されます。プログラムの呼び出しとそれに関連した概念および用語についての詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

RETURN-CODE 特殊レジスターを使用すれば、あるプログラムからその呼び出し側プログラムに戻りコードの情報を渡すことができます。詳細は 529 ページの『RETURN-CODE 特殊レジスター』を参照してください。

CALL ステートメントの処理は、呼び出し先サブプログラムに制御を渡します。CALL ステートメントにプログラム・オブジェクトのリンケージがあり、その CALL ステートメントが実行時に、指定されたライブラリー内に存在していないプログラム・オブジェクトを指定すると、エラー・メッセージが出されます。ON EXCEPTION 句または OVERFLOW 句を使用して、エラー処理のプロシージャを指定することが可能です。

呼び出し先サブプログラムは、実行単位の中で最初に呼び出されたときには初期状態になっています。また、CANCEL ステートメントの後で最初に呼び出されたときにも初期状態になっています。

プログラムが初期プログラムである (その PROGRAM-ID 段落に INITIAL 文節が含まれている) 場合、そのプログラムは呼び出されるごとにその初期状態になります。それ以外の場合はずべて、呼び出し先サブプログラムに入ったとき、そのサブ

CALL ステートメント

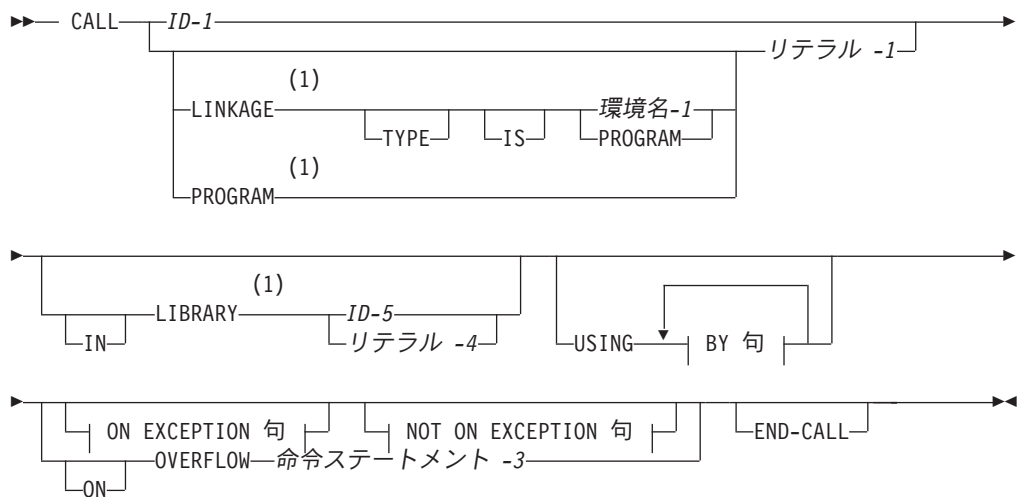
プログラムは最後に使われた状態のままですが、PERFORM ステートメントの制御メカニズムの場合は除きます。PERFORM ステートメントの制御メカニズムでは、常にそれらの初期状態に設定されます。

暗黙の、または明示の STOP RUN が生じると、言語とユーティリティーの戻りコードは 0 に設定されます。そうでない場合は、2 に設定されます。

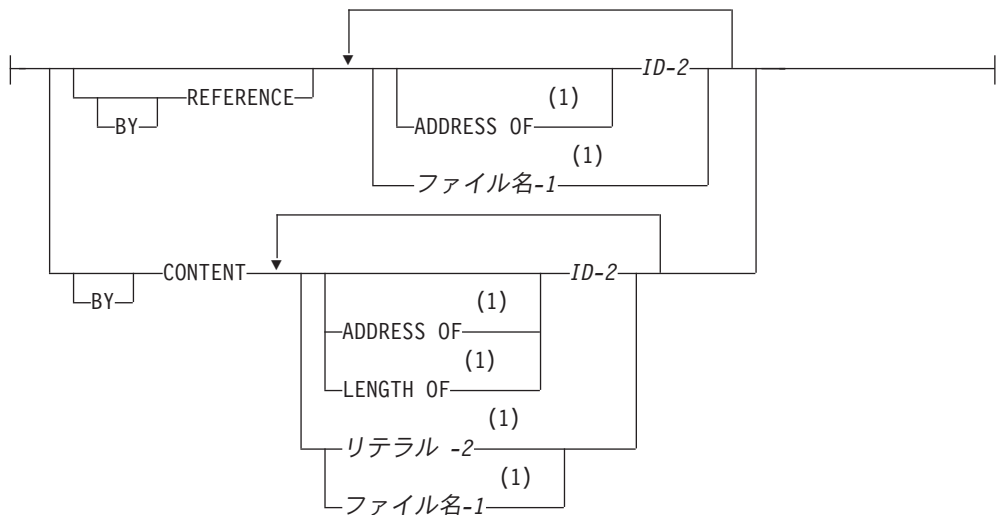
RETURN-CODE レジスターが作業制御ブロックのユーザー部分にコピーされます。戻りコードの詳細については、「CL プログラミング」の RTVJOBA コマンドおよび DSPJOB コマンドを参照してください。

ユーザー戻りコードは、COBOL プログラムの実行開始後と他のプログラムに対して呼び出しが行われる前には 0 にセットされます。

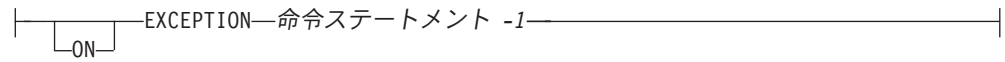
CALL ステートメント - 形式 1



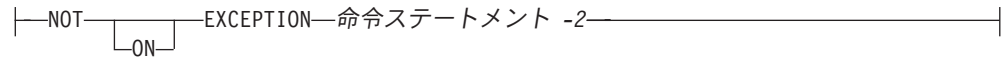
BY 句:



ON EXCEPTION 句:



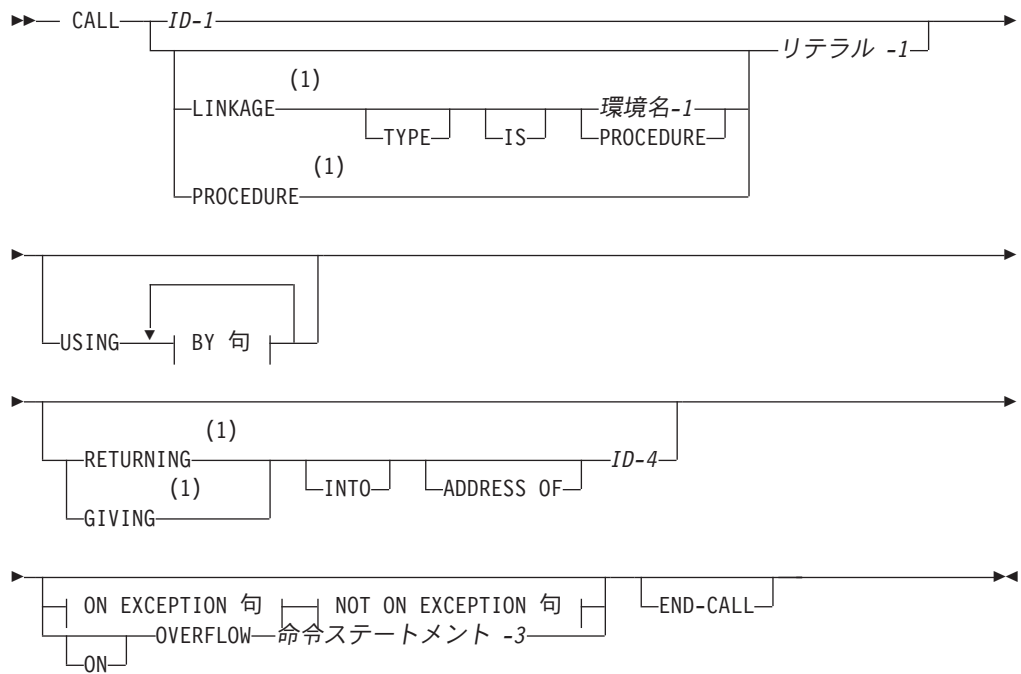
NOT ON EXCEPTION 句:



注:

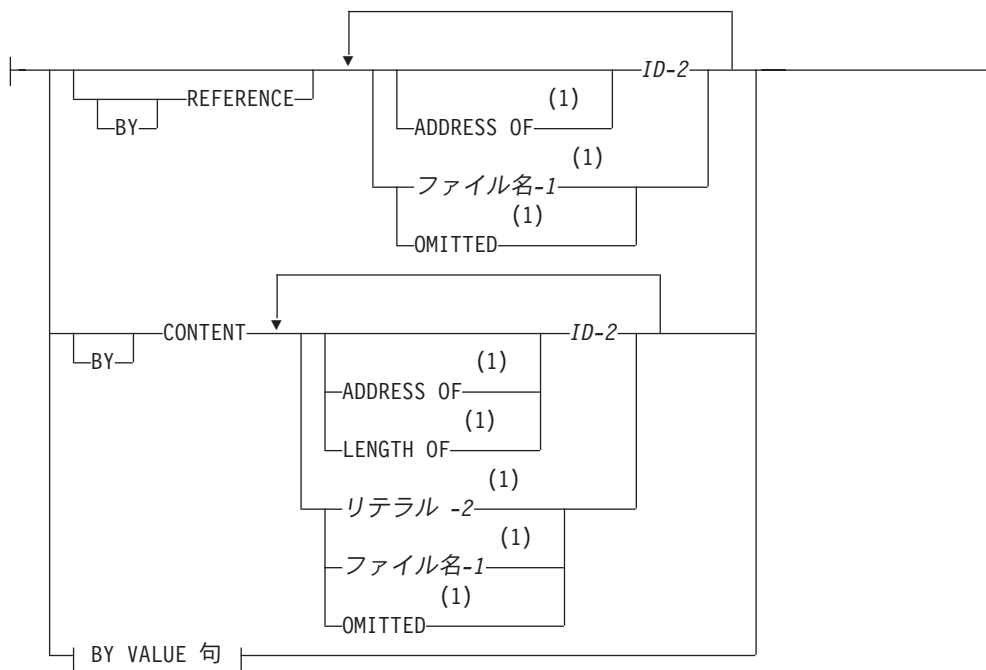
1 IBM 拡張

CALL ステートメント - 形式 2

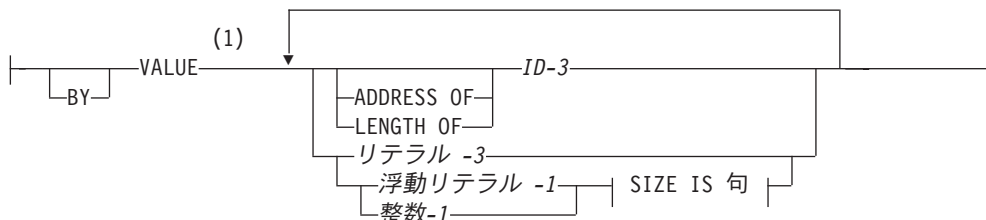


BY 句:

CALL ステートメント



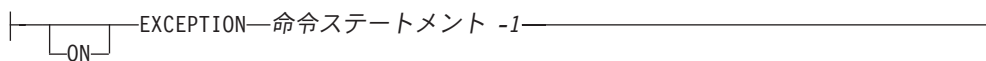
BY VALUE 句:



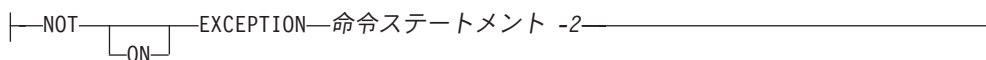
SIZE IS 句:



ON EXCEPTION 句:



NOT ON EXCEPTION 句:



注:

- 1 IBM 拡張

ID-1

英数字またはプロシージャ・ポインター・データ項目でなければなりません。
英数字データ項目の場合には、以下の規則が適用されます。

- リンケージがプログラム・オブジェクトに対するものであれば、ID-1 の内容はプログラム名の形成規則に従っている必要があります。呼び出し側プログラムと呼び出し先プログラムとの間を対応づけるために、ID-1 の先頭 10 文字が使用されます。
- リンケージがプロシージャに対するものであれば、ID-1 の最初の 256 文字が使用されます。呼び出し先プロシージャは、呼び出し側プロシージャと同じコンパイル単位になければなりません。
- コンパイラ・オプション *MONOPRC によって、ID-1 が英大文字で指定されており、プログラム名の命名規則に従っている必要があります。

プロシージャ・ポインター・データ項目は、CALL の前に SET ステートメントを使用して、プロシージャまたはプログラムのアドレスに設定する必要があります。プロシージャ・ポインター・データ項目の設定方法について詳しくは 507 ページの『形式 6 - プロシージャ・ポインター・データ項目』を参照してください。

リテラル-1

CALL リンケージは呼び出し先プログラムのタイプを判別し、それによりリテラル-1 の内容とサイズを制限することもできます。作成されるリンケージは、プログラム・オブジェクトまたは ILE プロシージャのいずれかに対するものです。リンケージがプログラム・オブジェクトに対するものであれば、リテラル-1 は非数字で英大文字 (拡張システム名を除く) であり、プログラム名の形成の規則に従っている必要があります。呼び出し側プログラムと呼び出し先サブプログラムとの間に対応づけるために、リテラルの先頭 10 文字が使用されます。リテラル-1 には拡張名を含めることができます。

リンケージが ILE プロシージャに対するものであれば、リテラル-1 は非数字で長さが最大 256 文字でなければなりません。コンパイラ・オプション *MONOPRC によって、リテラル-1 が英大文字で指定されており、プログラム名の形成規則に従っている必要があります。このリテラルは、呼び出し先サブプログラムのプログラム名を指定していなければなりません。

LINKAGE TYPE 句**IBM 拡張**

LINKAGE TYPE 句を使用して、CALL のリテラル-1 に対するリンケージのタイプを指定します。

環境名-1

コンパイラが CALL に対して生成する、リンケージのタイプ。環境名-1 は以下のものとして定義できます。

PGM プログラム・オブジェクト (*PGM) へのリンケージが生成されます。

PRC ILE プロシージャへのリンケージが生成されます。

PROGRAM

プログラム・オブジェクト (*PGM) へのリンケージ

CALL ステートメント

PROCEDURE

ILE プロシージャーへのリンケージ

CALL ステートメントに LINKAGE TYPE 文節が指定されていない場合、CALL に対して生成されるリンケージは SPECIAL-NAMES 段落の LINKAGE TYPE 句、CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの LINKLIT パラメーターのいずれかを指定することにより、変更できます。

IBM 拡張 の終り

IN LIBRARY 句

IBM 拡張

LIBRARY 句を使用して、i5/OS のプログラム・オブジェクトを i5/OS のライブラリー名で修飾できます。LIBRARY 句が指定されていない場合、プログラム・オブジェクトは、ジョブのライブラリー・リスト (*LIBL) を使用して検索されます。

ID-5

英数字データ項目でなければなりません。ID-5 の内容は、有効な i5/OS ライブラリー名を表していなければなりません。i5/OS ライブラリー名の長さは、最大 10 文字です。ID-5 の最初の 10 文字が、ライブラリー名を形成するために使用されます。

リテラル-4

非数字でなくてはならず、最大 10 文字まで可能です。

ID-5 およびリテラル-4 は *MONOPRC コンパイラー・オプションの影響を受けず、また、i5/OS 拡張名を含むことができます。

IBM 拡張 の終り

USING 句

パラメーターを呼び出し先サブプログラムに渡す必要がある場合に、CALL ステートメントの中に含まれます。呼び出し先サブプログラムが COBOL で書かれた場合は、呼び出し先サブプログラムの手続き部ヘッダーにも USING 句が含まれていなければなりません。両方の USING 句にあるオペランドの数は同一でなければなりません。プログラムの LINKAGE TYPE が指定された CALL ステートメントの場合、オペランドの最大数は 255 であり、またプロシージャーの LINKAGE TYPE の場合はオペランドの最大数が 400 となっています。

CALL ステートメントの USING 句にある ID の順番、および呼び出し先サブプログラムの手続き部ヘッダー中の対応する USING 句にある ID の順序によって、呼び出し側プログラムおよび呼び出し先プログラムで使用される ID の間の対応が決まります。この対応は名前によらず、位置によるものです。USING 句の詳細は 260 ページの『USING 句』を参照してください。

渡されるデータの属性は、呼び出し先サブプログラムの要件によって決定されます。呼び出し先プログラムにいくつかのパラメーターが必要な場合、そのパラメーターを構成するグループ項目でなく、個々のパラメーターの一致するものを指定しなければなりません。

IBM 拡張

いくつかのプロシージャ (たとえば、ILE CEEDATE および CEEDAYS API) では、1 つまたは複数のパラメーターの**操作記述子**が使用可能である必要があります。この要件は、SPECIAL-NAMES の段落で、適切なパラメーターを指定した USING 句と一緒にプロシージャ用の LINKAGE TYPE 文節を組み込むことにより満たす必要があります。さらに、このようなパラメーターはすべて DISPLAY または DISPLAY-1 の USAGE を使用して基本データ項目として定義される必要があります、参照変更はできません。

IBM 拡張 の終り

CALL ステートメントの USING 句の中で参照されるパラメーター値は、CALL ステートメントが実行されるときに、呼び出し先サブプログラムで利用できるようになります。

USING 句の例

呼び出し側プログラムの記述 (PGMA)	呼び出し先プログラムの記述 (PGMB)
WORKING-STORAGE SECTION. 01 ARG-LIST. 05 PARTCODE PIC A. 05 PARTNO PIC X(4). 05 U-SALES PIC 9(5). . . . PROCEDURE DIVISION. . . CALL PGMB USING ARG-LIST.	LINKAGE SECTION. 01 PARAM-LIST. 10 PART-ID PIC X(5). 10 SALES PIC 9(5). . . PROCEDURE DIVISION USING PARAM-LIST.

注: 呼び出し側プログラム内では、パーツ・コード (PARTCODE) とパーツ番号 (PARTNO) が別個に参照されます。呼び出し先サブプログラムにおいては、パーツ・コードとパーツ番号は 1 つのデータ項目 (PART-ID) にまとめられます。そのため、呼び出し先サブプログラムでは PART-ID への参照がそれらに対する有効な、唯一の参照となります。

BY REFERENCE 句

BY REFERENCE 句を通して渡されるパラメーター値は、CALL ステートメントの実行時に評価されます。この値は、呼び出し先プログラムの対応パラメーターに割り当てられます。各パラメーターの文字数は等しくなければなりません、データ記述は同一である必要はありません。

CALL ステートメント

ILE COBOL パラメーターに BY REFERENCE が渡されると、元のデータ項目に対するポインターが、呼び出し先プログラムに渡されます。このため、呼び出し先プログラムのパラメーターを変更すると、呼び出し側プログラムのデータ項目が変更されることになります。

ID-2

ファイル・セクション、作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションまたはリンケージ・セクションで、レベル 01、レベル 77、または基本データ項目として定義する必要があります。関数 ID であってはなりません。

IBM 拡張

この句は下記のものになります。

- データ部のあらゆるレベルのデータ項目
- ポインター・データ項目 (USAGE IS POINTER として暗黙に、または明示的に定義された項目)
- プロシージャ・ポインター・データ項目
- DBCS データ項目
- 国別データ項目
- 浮動小数点データ項目
- 日時データ項目

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

ADDRESS OF 特殊レジスター

この特殊レジスターについては 141 ページを参照してください。この場合には計算された ADDRESS OF が使用できない点に注意してください。

ファイル名-1

ファイル名-1 は、FD 記入項目内に示さなければなりません。これはヌル・ポインター・データ項目を渡します。

OMITTED

パラメーターに BY REFERENCE が渡されるとき標準のパラメーターの場合、元のデータ項目へのポインターは、呼び出し先プログラムに渡されます。OMITTED が指定されていると、呼び出し先プログラムに NULL ポインターが渡されます。この場合には、呼び出し先プログラムはそのデフォルト値を使用します。

OMITTED を指定できるのは、プロシージャの LINKAGE TYPE を指定したプログラムに対する呼び出しに限られます。

IBM 拡張 の終り

BY CONTENT 句

BY CONTENT 句を通して渡されるパラメーター値は、CALL ステートメントの実行時に評価されます。この値は、呼び出し先プログラムの対応パラメーターに割り当てられます。

BY CONTENT が渡される ILE COBOL の各項目に関しては、呼び出し側プログラム中でその項目のコピーが作られ、このコピーのポインターを呼び出し先プログラムに渡します。呼び出し先プログラムの中でそのパラメーターに加えられた変更は、呼び出し側プログラムのデータ項目には影響を与えません。各パラメーターの文字数は等しくなければなりません、データ記述は同一である必要はありません。

ID-2

ファイル・セクション、作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションまたはリンケージ・セクションで、レベル 01、レベル 77、または基本データ項目として定義する必要があります。関数 ID であってはなりません。

IBM 拡張

この句は下記のものになります。

- データ部のあらゆるレベルのデータ項目
- ポインター・データ項目 (USAGE IS POINTER として暗黙に、または明示的に定義された項目)
- プロシージャ・ポインター・データ項目
- DBCS データ項目
- 国別データ項目
- 浮動小数点データ項目
- 日時データ項目

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

ADDRESS OF 特殊レジスター

この特殊レジスターについては 141 ページを参照してください。

ADDRESS OF データ項目

この項目については 141 ページを参照してください。

LENGTH OF 特殊レジスター

LENGTH OF 特殊レジスターには、ID で参照されるデータ項目によって使用されるバイト数が含まれます。詳細は 347 ページの『LENGTH OF 特殊レジスター』を参照してください。

リテラル-2

リテラル-3 は、下記のものになります。

- 非数字リテラル
- 表意定数
- ブール・リテラル
- DBCS リテラル

CALL ステートメント

- 国別 16 進リテラル

ファイル名-1

ファイル名-1 は、FD 記入項目内に示さなければなりません。これはポインター・データ項目を渡します。

OMITTED

パラメーターに BY CONTENT が渡されるとき標準のパラメーターの場合、データ項目のコピーへのポインターは、呼び出し先プログラムに渡されます。OMITTED が指定されていると、呼び出し先プログラムに NULL ポインターが渡されます。この場合には、呼び出し先プログラムはそのデフォルト値を使用します。

OMITTED を指定できるのは、プロシーチャーの LINKAGE TYPE を指定したプログラムに対する呼び出しに限られます。

IBM 拡張 の終り

BY VALUE 句

IBM 拡張

BY VALUE 句が指定された場合は、送り出しデータ項目への参照ではなく、パラメーターの値が引き渡されます。呼び出し先プログラムは、BY VALUE パラメーターに対応する仮パラメーターを変更できます。ただし、呼び出し先プログラムは送り出しデータ項目の一時コピーにアクセスできるため、その変更はパラメーターには影響しません。

BY VALUE パラメーターはもともと非 COBOL プログラム (C など) との通信に使用することを意図したものですが、COBOL から COBOL への呼び出しにも使用できます。この場合、BY VALUE は、CALL USING 句におけるパラメーターと PROCEDURE DIVISION USING 句におけるそれに対応する仮パラメーターの両方に対して指定または暗黙に指定しなければなりません。

BY CONTENT 句、BY VALUE 句および BY REFERENCE 句は、他の BY CONTENT 句、BY VALUE 句または BY REFERENCE 句を見つけるまでそれらに続くパラメーターに適用されます。これらの句が最初のパラメーターより前に現れない場合は、BY REFERENCE が想定されます。

BY VALUE 句は、リンケージ・タイプのプログラムを使用して呼び出されたプログラムには使用できません。

ID-3

ファイル・セクション、作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションまたはリンケージ・セクションで、レベル 01、レベル 77、または基本データ項目として定義する必要があります。

この句は、下記のものになります。

- データ部のあらゆるレベルのデータ項目
- ポインター・データ項目 (USAGE IS POINTER として暗黙に、または明示的に定義された項目)

- プロシージャ・ポインター・データ項目
- DBCS データ項目
- 国別データ項目
- 浮動小数点データ項目
- 日時データ項目
- 参照変更。ただし参照変更項目の長さをコンパイル時に知っておく必要があります。

ADDRESS OF 特殊レジスタ

この特殊レジスタについては 141 ページを参照してください。

ADDRESS OF データ項目

この項目については 141 ページを参照してください。

LENGTH OF 特殊レジスタ

LENGTH OF 特殊レジスタには、ID で参照されるデータ項目によって使用されるバイト数が含まれます。詳細は『LENGTH OF 特殊レジスタ』を参照してください。

リテラル-3

リテラル-3 は、下記のものになります。

- 非数字リテラル
- 表意定数
- プール・リテラル
- DBCS リテラル
- 国別 16 進リテラル

浮動リテラル-1

SIZE 句が指定されていない限り、浮動小数点リテラルは、8 バイトの内部浮動小数点 (COMP-2) として渡されます。浮動小数点項目に対して、サイズ句は 4 でも 8 でも可能です。

整数-1

符号付きまたは符号なしの整数です。

整数-1 は 2 進数値として渡されます。整数-2 を指定しないと、整数-1 が 4 バイトの 2 進数値として渡されます。整数-2 は、整数-1 のサイズを指定します。これは、1、2、4 または 8 のいずれかです。

IBM 拡張 の終り

LENGTH OF 特殊レジスタ

IBM 拡張

LENGTH OF 句は、ID で参照されるデータ項目の現行の長さと同じバイト数の内容を持つ、特殊レジスタを暗黙に作成します。

LENGTH OF 特殊レジスタには、次のような暗黙の定義があります。

USAGE IS BINARY, PICTURE 9(9)

CALL ステートメント

LENGTH OF 特殊レジスタの暗黙定義と同じ定義を持つ数字データ項目を使用できる手続き部では、どこでもこの特殊レジスタを使うことができます。

これは、参照修飾子の開始位置または長さの式に現れることがあります。ただし、LENGTH OF 特殊レジスタは、修正された参照であるどのオペランドにも適用できるわけではありません。

LENGTH OF オペランドが関数であってはなりませんが、LENGTH OF 特殊レジスタは、整数のパラメーターが認められている関数では使用できます。

LENGTH OF 特殊レジスタが LENGTH 関数の引数として使用されている場合、その結果は常に 4 になり、LENGTH OF に対して指定された引数に依存しません。

下記のいずれにもすることはできません。

- 受け入れデータ項目
- 添え字

LENGTH OF を CALL ステートメントの BY CONTENT 句の中で使用できます。

日時データ項目は、LENGTH OF 特殊レジスタを使用する式の中で使用することができます。ID は、タイプ名であってもよいし、タイプ名に従属する項目であってもかまいません。

テーブル・エレメントの場合、LENGTH OF 特殊レジスタには 1 回のオカレンスの長さ (バイト単位) が入ります。この場合のテーブル・エレメントを参照する際に、添え字を使用する必要はありません。

可変長エレメントの場合、LENGTH OF 特殊レジスタには、オカレンス依存 (ODO) 変数の現行内容に基づく長さが入ります。

このレジスタは、ID によって参照される区域が現在はプログラムに利用できない場合でも、判別できる長さを持つどの ID に対してもその値を戻します。たとえば、ファイル定義において 01 レベル・レコードの一部である ID は該当するファイルがオープンするまで利用できませんが、LENGTH OF などの ID はファイルがオープンする前でも識別可能です。

可変長項目に関して、ODO 変数の内容が利用できない場合、LENGTH OF 特殊レジスタは未定義です。たとえば、ODO 変数がオープンしていないファイルの 01 レベル・レコードの中で定義された場合、LENGTH OF 値は存在しないため、エラーが発生します。

LENGTH OF 句を使って参照されるそれぞれの識別名に対して、別個の LENGTH OF 特殊レジスタが存在します。

たとえば、次のとおりです。

```
MOVE LENGTH OF A TO B
DISPLAY LENGTH OF A, A
ADD LENGTH OF A TO B
CALL "PROGX" USING BY REFERENCE A BY CONTENT LENGTH OF A
```

注: COBOL 項目によって占有されるバイト数は、組み込み関数 LENGTH を使用してアクセス可能です (611 ページの『LENGTH』を参照)。LENGTH は、デー

タ名の他に非数字リテラルをサポートします。

IBM 拡張 の終り

GIVING/RETURNING 句

IBM 拡張

GIVING/RETURNING 句は、リンケージ・タイプのプログラムを使用して呼び出されたプログラムには使用できません。GIVING と RETURNING は同等です。

ID-4

DATA DIVISION で定義しなければならない RETURNING データ項目。呼び出し先プログラムの戻り値は、ID-4 に暗黙に保管されます。ID-4 を参照変更することはできません。

ID-4 は、日時データ項目にすることができます。

ADDRESS OF 特殊レジスター

この特殊レジスターについては 141 ページを参照してください。

値を戻す ILE プロシージャラーへの呼び出しに RETURNING 句を指定できます。COBOL サブプログラムへの CALL に RETURNING 句を指定する場合、以下のことを行います。

- 呼び出し先サブプログラムは、その PROCEDURE DIVISION ヘッダーに RETURNING 句を指定しなければなりません。
- ターゲット・プログラムにおける ID-4 および対応する PROCEDURE DIVISION RETURNING ID は、同じ数の文字位置をもっていなければならない、また同じ USAGE と SIGN 文節およびカテゴリーのものでなければなりません。ID-4 が TYPE 文節を使用して定義された場合は、呼び出し先プログラムの PROCEDURE DIVISION ヘッダーの GIVING/RETURNING 句で参照される項目も、TYPE 文節を使用して定義しなければなりません。すなわち、両 TYPE 文節において、同一タイプ名を参照する必要があります。制御が呼び出し側プログラムに戻ると、ID-4 または特殊レジスターのその ADDRESS は、戻り値を含みます。

EXCEPTION または OVERFLOW が生じると、ID-4 は変更されません。

RETURNING 句の存在は、RETURN-CODE 特殊レジスターの設定には影響しません。

IBM 拡張 の終り

ON EXCEPTION 句

この句は、例外の元の受け取り側が呼び出し側の場合に、プログラムの存在、プログラム活動化、権限、およびストレージから生じる例外を処理するものです。そのときには、以下のいずれかが生じます。

1. CALL ステートメントに ON EXCEPTION 句が現れた場合には、制御が命令ステートメント-1 に移されます。処理はその後、命令ステートメント-1 で指定された各ステートメントの規則に従って続行されます。

CALL ステートメント

制御を明示的に渡すプロシージャー分岐ステートメントまたは条件ステートメントを実行する場合、制御はそのステートメントの規則に従って渡されます。それ以外の場合は、命令ステートメント-1 がいったん実行されると、制御は CALL ステートメントの最後に移され、また NOT ON EXCEPTION 句が指定されていればそれは無視されます。

2. CALL ステートメントに ON EXCEPTION 句がない場合、NOT ON EXCEPTION 句が指定されていても、無視されます。

NOT ON EXCEPTION 句

例外条件が生じない (言いかえると、呼び出し先サブプログラムが利用可能である) 場合、制御は呼び出し先サブプログラムに移されます。制御が呼び出し先プログラムから戻った後、ON EXCEPTION 句が指定されていれば、それは無視され、制御は CALL ステートメントの最後に (または、NOT ON EXCEPTION が指定されていれば、命令ステートメント-2 に) 移されます。

制御が命令ステートメント-2 に移される場合、処理は命令ステートメント-2 で指定された各ステートメントの規則に従って続行されます。

制御を明示的に渡すプロシージャー分岐ステートメントまたは条件ステートメントを実行する場合、制御はそのステートメントの規則に従って渡されます。それ以外の場合、命令ステートメント-2 がいったん実行されると、制御は CALL ステートメントの最後に移されます。

ON OVERFLOW 句と一緒にこの句を指定すると、エラーが発生します。

ON OVERFLOW 句

ON OVERFLOW 句には、ON EXCEPTION 句と同じ効果があります。

END-CALL 句

この句では CALL ステートメントの有効範囲を定めます。END-CALL は、条件付き CALL ステートメントが別の条件ステートメントにネストできるようにします。END-CALL は命令 CALL ステートメントでも使用できます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

CALL ステートメントの考慮事項

呼び出し ID

CALL ID (この場合の ID はプロシージャー・ポインターではない) を使用すれば、ネストされた ILE COBOL プログラムまたはプログラム・オブジェクトを呼び出すことができます。ID の内容は実行時に、呼び出されたのがネストされたプログラムか、それともプログラム・オブジェクトかを識別します。

ID をオブジェクトに関連付ける、オープン・ポインターは、その ID を CALL ステートメントで最初に使用する際に設定されます。

あるプログラム・オブジェクトを指す ID を用いて呼び出しを実行し、後でそのプログラムを削除または名前変更する場合は、CANCEL ステートメントを使用して、

その ID に関連付けられているオープン・ポインタをヌルにする必要があります。これにより、次回、ID を使用してプログラム・オブジェクトを呼び出す際に、関連付けられたオープン・ポインタを設定しなおすことができます。

オープン・ポインタの値は、ID の値を変更してこの新しい値を使用する呼び出しを実行すると、変更されます。

CALL プロシージャ・ポインタ

CALL プロシージャ・ポインタ・ステートメントを使用すれば、静的プロシージャ呼び出しや動的プログラム呼び出しを実行できます。

CALL プロシージャ・ポインタ・ステートメントを使用する前に、形式 6 の SET ステートメントを使用してプロシージャ・ポインタ のデータ項目の値を設定する必要があります。プロシージャ・ポインタ・データ項目を ILE プロシージャに設定するには、SET ステートメントに LINKAGE TYPE IS PROCEDURE を指定します。プロシージャ・ポインタ・データ項目をプログラム・オブジェクトに設定するには、LINKAGE TYPE IS PROGRAM を指定します。

さらに、SPECIAL-NAMES 段落の LINKAGE TYPE 文節、あるいは CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの LINKLIT パラメータを使用して、プロシージャ・ポインタ のデータ項目がどのタイプのオブジェクトに設定されているかを見分けることができます。LINKAGE TYPE 文節の使用方法については 93 ページの『LINKAGE TYPE 文節』を、また LINKLIT パラメータの使用方法については、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

パラメータの長さ

呼び出し側プログラムに定義されるいずれかのパラメータの長さ (バイト単位) が、呼び出し先プログラムの予期する長さとは一致しない場合、呼び出し側プログラムや呼び出し先プログラムで予期しない結果が生じる可能性があります。詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」の『プログラム間のデータの受け渡しと共用』のセクションを参照してください。

プログラム終了ステートメント

STOP RUN、EXIT PROGRAM、GOBACK の各ステートメントを使用して、呼び出し先の ILE COBOL プログラムから制御を戻します。エラー発生時、またはプログラム終了時にプログラム終了ステートメントごとになされる処置は、制御が戻されるのが主プログラムまたはサブプログラムのいずれであるかにより異なります。各種の条件における EXIT PROGRAM、STOP RUN、GOBACK ステートメントの動作についての詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」の『ILE COBOL プログラムからの戻り』のセクションを参照してください。また、個別のプログラム終了ステートメントについての詳細は、以下を参照してください。

- 397 ページの『EXIT PROGRAM ステートメント』
- 399 ページの『GOBACK ステートメント』
- 528 ページの『STOP ステートメント』

i5/OS グラフィックス・サポート

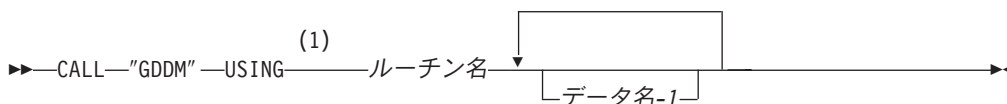
IBM 拡張

CALL ステートメントを使用すれば、以下の i5/OS グラフィックス・ルーチンにアクセスすることができます。

- 図形データ表示管理プログラム (GDDM) - 図形描画のためのグラフィックス・プリミティブのセット
- 図形表示ルーチン (PGR) - ビジネス図表ルーチンのセット

上記のすべてのグラフィックス・ルーチンにアクセスする場合に、同一形式の CALL ステートメントを使用します。

CALL GDDM ステートメント - 形式



注:

1 IBM 拡張

ルーチン名は、ユーザーが使用しようとしているグラフィックス・ルーチンの名前です。

ルーチン名の後に続くデータ名は、特定のグラフィックス・ルーチンを使用するのに必要なパラメーターです。指定しなければならないパラメーターの数は、選択するルーチンによって異なります。グラフィックス・ルーチンを選択している場合は、おのおののパラメーターが、このルーチンで要求されている大きさとデータ・タイプに合致していることを確認してください。

グラフィックス・ルーチン呼び出しの例を下記に示します。CALL リテラル形式を使用し、かつ、使用するグラフィックス・ルーチンが必要とする各パラメーターを定義しなければなりません。

```
MOVE "FSINIT" TO OS-400-GRAPHICS-ROUTINE-NAME.
CALL "GDDM" USING OS-400-GRAPHICS-ROUTINE-NAME.
.
MOVE "GSFLD" TO OS-400-GRAPHICS-ROUTINE-NAME.
CALL "GDDM" USING OS-400-GRAPHICS-ROUTINE-NAME,
PIC-ROW, PIC-COL,
PIC-DEPTH, PIC-WIDTH.
```

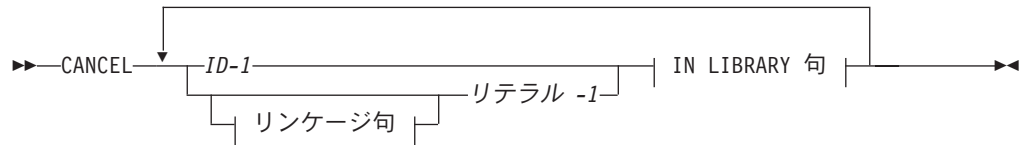
グラフィックス・ルーチンとそのパラメーターの詳細は、「*GDDM Programming Guide*」と「*GDDM Reference*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

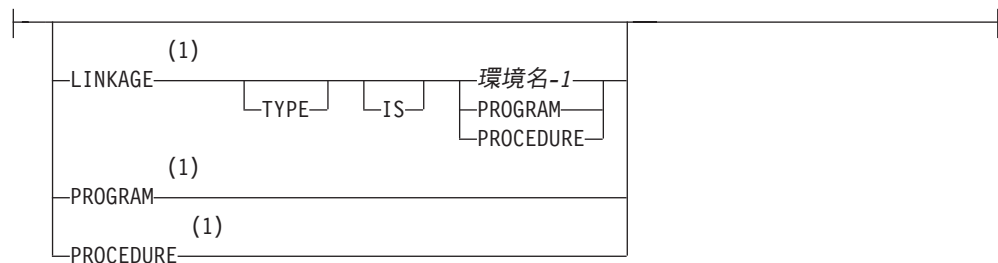
CANCEL ステートメント

CANCEL ステートメントを使用すると、参照されるサブプログラムが次に呼び出されたときに、必ず初期状態から入ります。

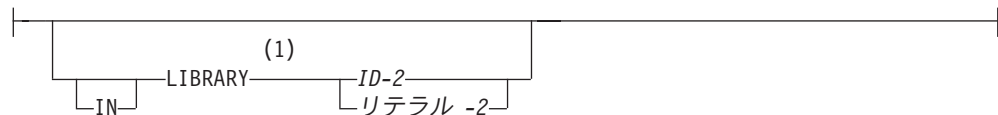
CANCEL ステートメント - 形式



リンケージ句:



IN LIBRARY 句:



注:

1 IBM 拡張

リテラル-1

取り消されるサブプログラムの名前を指定します。リテラル-1 には拡張名を含めることができます。CANCEL リンケージは取り消されるプログラムのタイプを判別し、それによりリテラル-1 の内容とサイズを制限することもできます。作成されるリンケージは、プログラム・オブジェクトまたは ILE プロシージャのいずれかに対するものです。リンケージがプログラム・オブジェクトに対するものであれば、リテラル-1 は非数字で英大文字 (拡張システム名を除く) であり、プログラム名の形成の規則に従っている必要があります。呼び出し側プログラムと呼び出し先サブプログラムとの間に対応づけるために、リテラルの先頭 10 文字が使用されます。

リンケージが ILE プロシージャに対するものであれば、リテラル-1 は非数字で長さが最大 250 文字でなければなりません。コンパイラ・オプション *MONOPRC によって、リテラル-1 が英大文字で指定されており、プログラム名の形成規則に従っている必要があります。このリテラルは、呼び出し先サブプログラムのプログラム名を指定していなければなりません。

CANCEL ステートメント

ID-1

以下の規則が適用される場合には、英数字データでなければなりません。

- リンケージがプログラム・オブジェクトに対するものであれば、ID-1 の内容はプログラム名の形成規則に従っている必要があります。呼び出し側プログラムと呼び出し先プログラムとの間を対応づけるために、ID-1 の先頭 10 文字が使用されます。
- リンケージがプロシージャに対するものであれば、ID-1 の最初の 250 文字が使用されます。
- コンパイラー・オプション *MONOPRC が指定されている場合、ID-1 の内容は英大文字にしてプログラム名の形成規則に従うようにする必要があります。

CANCEL ステートメントで指定する各リテラルまたは ID の内容は、関連する CALL ステートメントに指定されているリテラルまたは ID の内容と同じでなければなりません。

IN LIBRARY 句

IBM 拡張

この句は、i5/OS のプログラム・オブジェクトの取り消しでのみ有効です。つまり、リンケージ・タイプのプログラムを、CANCEL ステートメントで暗黙もしくは明示的に指定しなければなりません。

ID-2

英数字データ項目でなければなりません。ID-2 の内容は、有効な i5/OS ライブラリー名を表していなければなりません。i5/OS ライブラリー名の長さは、最大 10 文字です。ID-2 の最初の 10 文字が、ライブラリー名を形成するために使用されます。

リテラル-2

非数字でなくてはならず、最大 10 文字まで可能です。

ID-2 およびリテラル-2 は *MONOPRC コンパイラー・オプションの影響を受けず、また、i5/OS 拡張名を含むことができます。

IBM 拡張 の終り

LINKAGE TYPE 句

IBM 拡張

LINKAGE TYPE 句を使用して、CANCEL が対象とするプログラムのタイプを指定します。対象として考えられるのは、プログラム・オブジェクト (*PGM) または ILE プロシージャです。

環境名-1

CANCEL ステートメントが影響するプログラムのタイプです。環境名-1 は以下のものとして定義できます。

PGM

プログラム・オブジェクト (*PGM)

PRC

ILE プロシージャ

PROGRAM

プログラム・オブジェクト (*PGM) が取り消されます。

PROCEDURE

ILE プロシージャが取り消されます。

CANCEL ステートメントに LINKAGE TYPE 文節が指定されていない場合、取り消せるプログラムのタイプは SPECIAL-NAMES 段落の LINKAGE TYPE 句、CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの LINKLIT パラメーターのいずれかを指定することにより、変更できます。

IBM 拡張 の終り

呼び出し先サブプログラムに CANCEL ステートメントを実行することにより、このサブプログラムとプログラムとの間の論理的な結びつきは終了します。サブプログラムが記述する外部データ・レコードにあるデータ項目の内容は、サブプログラムが取り消されても変更されません。このサブプログラムを指定している実行単位中のプログラムが CALL ステートメントを後に実行する場合には、このサブプログラムには初期状態で入ります。

CANCEL ステートメントは、オープンしているすべての INTERNAL ファイルをクローズします。

呼び出し先サブプログラムは、以下のいずれかの方法で取り消すことができます。

- そのサブプログラムを CANCEL ステートメントのオペランドとして参照する
- そのサブプログラムがメンバーとなっている実行単位を終了する (これは同じ実行単位における STOP RUN、あるいはその実行単位の主プログラムからの GOBACK により実行できます。)
- 呼び出し先サブプログラムに INITIAL 属性が付いている場合、そのサブプログラムで EXIT PROGRAM ステートメントを実行する
- 呼び出し先サブプログラムに INITIAL 属性が付いている場合、そのサブプログラムで GOBACK ステートメントを実行する

CANCEL ステートメントは、指定されたプログラムだけで実行されるものであって、取り消されたプログラムによって呼び出し先プログラムでは実行されません。

呼び出し先サブプログラムの中に CANCEL ステートメントが入っていてもかまいません。また、呼び出し先サブプログラムには、その呼び出し側プログラムや、呼び出し階層でそれ自体より上位にある他のプログラムを、直接または間接的に取り消す CANCEL ステートメントがあってはなりません。呼び出し先サブプログラムがその呼び出し側プログラムを取り消そうとすると、そのサブプログラムにある CANCEL ステートメントは無視されます。

CANCEL ステートメント

CANCEL ステートメントに指定するプログラムは、一度呼び出されたが、まだ制御が呼び出し側プログラムへ戻されていないプログラムを参照することができません。たとえば、次のとおりです。

A が B を呼び出し、B が C を呼び出す	(A が制御を受け取った時点で、 C を取り消すことができる)
A が B を呼び出し、A が C を呼び出す it can cancel B.)	(C が制御を受け取った時点で、 it can cancel B.)

実行単位の中で呼び出されていないプログラムの名前を CANCEL ステートメントで指定したり、あるいは呼び出されはしたがすでに取り消されているプログラムの名前を指定した CANCEL ステートメントを実行しても、何も行われません。どちらの場合も、制御は次のステートメントへ移ります。

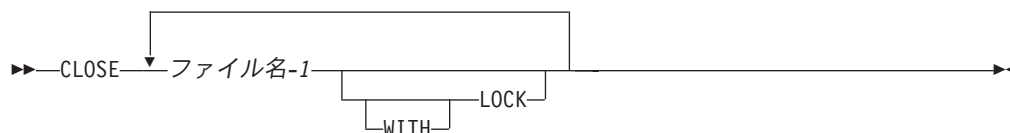
プロシージャおよびプログラム・オブジェクトの取り消しの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

CLOSE ステートメント

CLOSE ステートメントは、ボリュームおよびファイルの処理を終了させます。ここで指定できるのは、REWIND または LOCK (あるいはその両方)、または REMOVAL です。

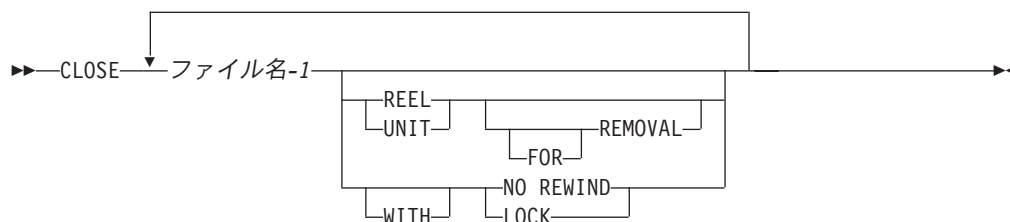
CLOSE ステートメント - 形式 1

CLOSE ステートメント - 形式 1



CLOSE ステートメント - 形式 2 - テープ・ファイル

CLOSE ステートメント - 形式 2 - テープ・ファイル



ファイル名-1

ファイル名-1 は、CLOSE ステートメントが処理するファイルについて指定します。複数のファイル名が指定されている場合、ファイルは同一の編成またはアクセスである必要はありません。また、ファイル名-1 は、ソート・ファイルまたはマージ・ファイルであってはなりません。

CLOSE ステートメントの考慮事項

CLOSE ステートメントは、オープン・モードであるファイルに対してしか実行できません。REEL 句または UNIT 句のない CLOSE ステートメントが正常に実行されると、次のような結果が生じます。

- ファイル名-1 に関連するレコード域が使用できなくなります。CLOSE ステートメントの実行が失敗すると、レコード・データの使用可能性が未定義のままにとどまります。
- 該当のファイルに対する OPEN ステートメントは、それ以外の入出力ステートメントに先立って実行しなければなりません。

以下の考慮事項は、CLOSE ステートメントの使用に適用されます。

- ファイルがオープン状態で CLOSE ステートメントの実行が失敗した場合、このファイルの EXCEPTION/ERROR プロシージャが (指定されていれば) 実行されます。

CLOSE ステートメント

- REEL 句または UNIT 句のない CLOSE ステートメントが、実行単位が終了する前、あるいはプログラムが取り消される前に処理されなかった場合、ファイルは暗黙的にクローズされます。
- 該当のファイルのファイル制御記入項目で SELECT OPTIONAL 文節が指定されてはいるが、そのファイルが実行時に存在しない場合には、標準のファイル終わり処理は実行されません。
- FILE-CONTROL 記入項目に FILE STATUS 文節が指定されている場合には、CLOSE ステートメントの実行時に、関連した状況キーが更新されます。状況キーの詳細は 296 ページの『共通の処理機能』を参照してください。
- **相対ファイルのみ:** 相対ファイルの境界を現時点のレコード数を超過してファイル・サイズの範囲内で拡張するには、削除されたファイルを INZPFM コマンドを使用してそのファイルの処理前に追加します。さらに多くのレコードがファイルに追加される必要があり、ファイル状況 0Q が受け取られた場合、これを行う必要があります。相対ファイルを現在のサイズ以上に拡張しようとするどちらの試みも、境界違反となります。

WITH LOCK 句

COBOL は、この COBOL プログラムの処理中に該当するファイルが再びオープンされることがないようにします。WITH LOCK でクローズした外部ファイルは、実行単位内では再びオープンすることができません。これには、外部ファイルで定義されているその他のプログラムも含まれます。

装置タイプ TAPEFILE だけに関する特別の考慮事項

装置タイプ TAPEFILE のファイルは、次の 2 つのカテゴリーに分割できます。

順次単一ボリューム

1 つのボリューム (リール) に完全に含まれている順次ファイル。このボリュームには複数のファイルが含まれることもあります。

順次マルチボリューム

複数のボリュームに含まれる順次ファイル。このファイルは、単一ボリューム上で保留できる量以上のデータを含んでいるか、あるいは複数のボリュームにまたがって計画的に分割されたかのいずれかです。

以下の句は、装置タイプ TAPEFILE にのみ適用されます。

- NO REWIND 句
- REEL または UNIT 句
- FOR REMOVAL 句

これらのうちのいずれの句も指定されていない場合には、CLOSE ステートメントによって現行のボリュームが、その先頭に位置付けられます。

順次マルチボリューム・ファイルの場合、REEL 句または UNIT 句を含まない CLOSE ステートメントは、現行のボリューム以外のどのボリュームにも影響を与えません。

NO REWIND 句

現在のボリュームは現在の位置にとどまっています。

REEL または UNIT 句

REEL 句または UNIT 句が出力ファイルに対して指定されている場合、それは、順次マルチボリューム・ファイルが作成されて、ファイルの現行のボリュームに書き込むレコードがこれ以上存在しないことを示しています。次の処理が行われます。

1. 標準ラベルが、現行ボリュームの終わりに書き込まれます。
2. ファイルの続きを受け取るために、新しいボリュームの取り付けを要求するメッセージが発行されます。
3. 標準ラベルが、新しいボリュームの先頭に書き込まれます。
4. 次に処理される WRITE ステートメントによって、新しく取り付けられたボリュームにレコードが書き込まれます。

入力のためにオープンされた順次マルチボリューム・ファイルに対して、REEL 句または UNIT 句が指定された場合、標準ラベルを読み込むために現行のボリュームが位置付けられます。それがファイルの最後のボリュームである場合は、プログラムは継続され、次に処理される READ ステートメントが AT END 条件を発生させます。それがファイルの最後のボリュームではない場合、以下のことが行われます。

1. ファイルの新しいボリュームの取り付けを要求するメッセージが発行されます。
2. 次のボリュームの先頭の標準ラベルが処理されます。
3. 次に処理される READ ステートメントが、新たに取り付けられたボリュームの最初のレコードを要求します。

入力のためにオープンされた順次単一ボリューム・ファイルの場合、REEL 句または UNIT 句の指定はオプションです。これらの句は構文チェックされるだけで、実行時にはどのような機能も行いません。

FOR REMOVAL 句

順次マルチボリューム・ファイルの場合、REEL 句または UNIT 句に FOR REMOVAL 句を追加すると、現行のボリュームが巻き戻されてアンロードされます。システムにはその後、ボリュームがこの実行単位から論理的に取り外されたことが通知されます。ただし、このボリュームは、ファイルを REEL 句または UNIT 句なしの CLOSE ステートメントでクローズした後に再オープンすれば、再びアドレスリングできるようになります。

入力のためにオープンされた順次単一ボリューム・ファイルの場合、FOR REMOVAL 句を使用するかどうかはオプションです。これらの句は構文チェックされるだけで、実行時にはどのような機能も行いません。

IBM 拡張

順次マルチボリューム・ファイルの場合は、CLOSE ステートメントに REEL 句または UNIT 句が指定されていると、たとえ FOR REMOVAL 句が含まれていなくても、システムは常にそのボリュームを巻き戻してアンロードします。

ファイルは、実行単位の終了まできたとき、またはプログラムが取り消されたとき、REEL 句または UNIT 句なしの CLOSE ステートメントが処理される前に自動的にクローズされます。この状況が発生した場合、現行のボリュームは、ファイル

CLOSE ステートメント

のシステム記述内にある ENDOPT キーワードに定義されているように位置付けされたまま残されます。このキーワード (LEAVE、REWIND、または UNLOAD の値を取ることができる) は、ファイル記述が CRTTAPF コマンドによって作成されるときに設定されます。ENDOPT キーワードは、CHGTAPF コマンドを使用して変更するか、または OVRTAPF コマンドを使用して指定変更できます。

IBM 拡張 の終り

COMMIT ステートメント

IBM 拡張

COMMIT ステートメントを使用することによって、データベース・レコードに対する変更を同期化するとともに、COMMIT が実行されるまでは他のジョブがこれらのレコードを修正しないようにすることができます。COMMIT ステートメントの形式は次のとおりです。

COMMIT ステートメント - 形式

▶▶—COMMIT—◀◀

COMMIT ステートメントが実行されると、前のコミットメント境界以降に現在のコミットメント定義のために、コミットメント制御下のファイルに対して行われたすべての変更が永続的なものになります。コミットメント境界は、ROLLBACK または COMMIT ステートメントが正常に実行されることによって設定されます。現行のジョブ中で COMMIT または ROLLBACK がまだ一度も出されていない場合、コミットメント境界は、そのジョブの中でコミットメント制御下のファイルが最初に OPEN されたときに設定されます。変更はコミットメント制御下のすべてのファイルに対して行われるものであり、単に COMMIT ステートメントを出す COBOL プログラム内のコミットメント制御下のファイルに対してのみ行われるものではありません。

COMMIT が実行されると、コミットメント制御下のファイルに対する最後のコミットメント境界以降に、現行のコミットメント定義によって保持されたすべてのレコード・ロックが開放され、レコードが使用可能になります。コミットメント制御は、ジョブ・レベルまたは活動化グループ・レベルで範囲を限定できます。コミットメント制御の範囲は、デフォルトでは活動化グループとなっています。これは、異なる活動化グループ (CL プログラム) でアプリケーションが非 ILE COBOL プログラムに関係している場合に重要です。

COMMIT ステートメントは、コミットメント制御下のファイルに対してのみ影響を与えます。COMMIT が実行されても、コミットメント制御下のファイルがオープンされていない場合は、COMMIT ステートメントは何ら効力をもたず、コミットメント境界も設定されません。

COMMIT ステートメントは以下のことを行いません。

- どのファイルの I-O-FEEDBACK 域も修正しません。
- どのファイルのファイル位置標識も変更しません。
- どのファイルのファイル状況値も設定しません。

コミットメント制御の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

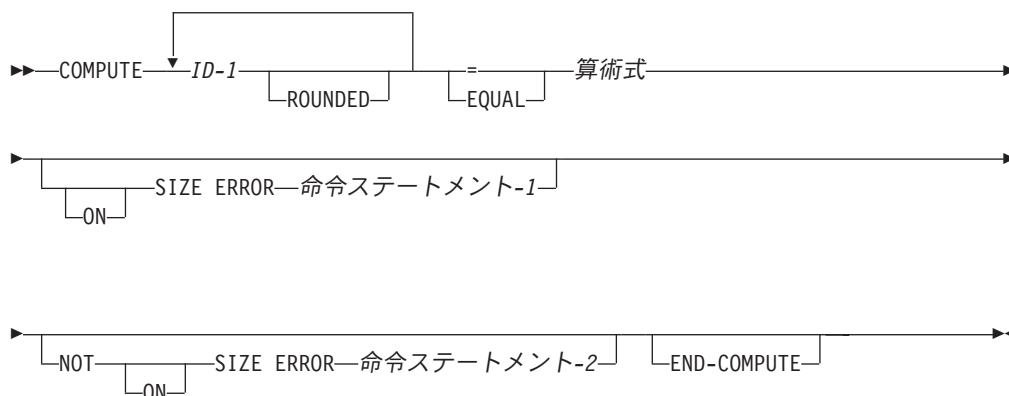
IBM 拡張 の終り

COMPUTE ステートメント

COMPUTE ステートメントは、1 つまたは複数のデータ項目に算術式の値を割り当てます。

COMPUTE ステートメントを使うと、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、および DIVIDE ステートメントの規則による受け入れデータ項目に関する制約に拘束されことなく、算術演算を組み合わせることができます。

COMPUTE ステートメント - 形式



しかし、可搬性が求められるのであれば、COMPUTE を使用する代わりに ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、および DIVIDE を使用してください。これは、システム特有の中間結果が異なる可能性があるためです。

算術演算を組み合わせただけの場合には、COMPUTE ステートメントは、別個の算術ステートメントを続けてするよりも効率的です。

ID-1

数字基本項目または数字基本編集項目のいずれかでなければなりません。

IBM 拡張

基本浮動小数点データ項目が可能です。

IBM 拡張 の終り

算術式

265 ページの『算術式』に定義されているように、任意の算術式が可能です。

COMPUTE ステートメントの実行時には、算術式の値が計算され、その結果の値が、ID-1 によって参照される各データ項目の新しい値として保管されます。

単一の ID、数字、関数、または数字リテラルから成る算術式を使用すれば、ID-1 によって参照されるデータ項目の値を、算術式の ID またはリテラルの値に等しく設定できます。

ROUNDED 句

291 ページの『ROUNDED 句』を参照してください。

SIZE ERROR 句

292 ページの『SIZE ERROR 句』を参照してください。

END-COMPUTE 句

この明示範囲終了符号は、COMPUTE ステートメントの範囲を区切るのに役立ちます。END-COMPUTE を使用することによって、COMPUTE 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-COMPUTE は COMPUTE 命令ステートメントと一緒に使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

CONTINUE ステートメント

CONTINUE ステートメントにより、ノーオペレーション・ステートメントを指定できます。CONTINUE は、実行可能な命令が存在しないことを示します。

CONTINUE ステートメント - 形式

▶▶—CONTINUE—◀◀

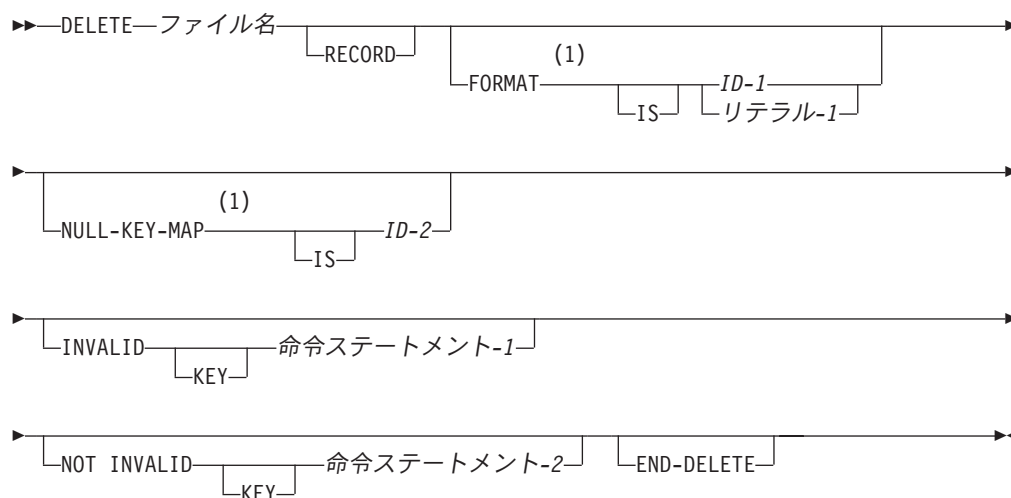
CONTINUE ステートメントは、条件ステートメントまたは命令ステートメントを使用できるところにはどこでも使用できます。これは、プログラムの実行には影響を与えません。

DELETE ステートメント

DELETE ステートメントは、レコードを索引付きファイルまたは相対ファイルから削除します。索引付きファイルの場合は、レコードを削除した結果生じた未使用キーが、直ちにレコードの追加処理に使用できるようになります。相対ファイルの場合は、この空間が、同じ RELATIVE KEY 値を持つ新しいレコードに対して使用できるようになります。

DELETE ステートメントの実行時には、関連するファイルが I-O モードでオープンされていない必要があります。

DELETE ステートメント - 形式



注:

1 IBM 拡張

ファイル名

ファイル名はデータ部の FD 記入項目で定義されていなければならない、また、索引付きファイルまたは相対ファイルの名前が付けられていなければならない。

DELETE ステートメントの実行が正常に終了すると、レコードはファイルから論理的に削除され、以後そのレコードにアクセスすることはできません。DELETE ステートメントの実行は、ファイル名に関連したレコード域の内容 (あるいは、ファイル名に関連した RECORD 文節の DEPENDING ON 句に指定されたデータ名が参照するデータ項目の内容) には影響しません。

ファイル制御記入項目の中で FILE STATUS 文節が指定されている場合には、DELETE ステートメントの実行時に、関連する状況キーが更新されます。

ファイル位置標識は、DELETE ステートメントの実行による影響を受けません。

DELETE ステートメントの考慮事項

IBM 拡張

データベース・ファイル一時変更 (OVRDBF) CL コマンドの書き込み禁止 (INHWRT) パラメーターによって、このステートメントの処置をプログラム実行時に禁止することができます。このパラメーターが指定された場合、データに依存するエラーに対しては、非ゼロのファイル状況コードが設定されません。データに依存するエラーの例として、重複キーおよびデータ変換エラーがあります。OVRDBF コマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

順次アクセス・モード

順次アクセス・モードにおける索引付きファイルまたは相対ファイルの場合、

- システムは DELETE ステートメントの処理時に、READ ステートメントによって検索されてロックされたレコードを論理的に削除します。

最終の入出力ステートメントが NO LOCK 句なしの READ ステートメントで、正常に処理されていない限りなりません。

IBM 拡張

最終入出力ステートメントが、NO LOCK 句を持つ READ ステートメントで、かつ正常に処理されていれば、次のようになります。

- ファイル状況キー (定義されている場合) が 9S に設定されます。
- EXCEPTION/ERROR プロシージャ (指定されている場合) が実行されます。
- DELETE ステートメントは処理されません。

IBM 拡張 の終り

最後の入出力ステートメントが、正常に終了した READ ステートメントでなかった場合、ファイル状況キー (定義されている場合) は 43 に設定されます。

ファイルおよびレコードのロックについては、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

- 順次アクセス・モードにおけるファイルの場合、INVALID KEY 句と NOT INVALID KEY 句は決して指定してはなりません。ただし、EXCEPTION/ERROR プロシージャは指定されることがあります。

エラー処理に関する情報については 296 ページの『共通の処理機能』を参照してください。

ランダム・アクセス・モードまたは動的アクセス・モード

ランダムおよび動的の各アクセス・モードにおいては、DELETE ステートメントを使用した結果はファイル編成により異なってきます。

これが相対ファイルであれば、システムは RELATIVE KEY データ項目の内容により識別されるレコードを論理的に除去します。同じ RELATIVE KEY の値をもった新規レコード用に空間を入手できます。ファイルに当該レコードがない場合には、INVALID KEY 条件が発生します。

索引付きファイルにおいては、システムは RECORD KEY データ項目の内容により識別されるレコードを論理的に除去します。ファイルに当該レコードがない場合には、INVALID KEY 条件が発生します。

IBM 拡張

ファイルに EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY が指定されている場合、FORMAT 句によって指定された形式のレコード域 2 の中のキー・フィールドを使用して、削除すべきレコードを見つけます。FORMAT 句が指定されていない場合、ファイルに対してプログラム定義された最初の形式を使用して、削除すべきレコードを見つけます。

IBM 拡張 の終り

DUPLICATES 句

IBM 拡張

ファイルに対してこの句が指定されていた場合、DELETE ステートメントの実行に先立ってこのファイルに対して処理された最後の入出力ステートメントは、NO LOCK 句なしの READ ステートメントであり、しかも、正常に実行されていなければなりません。そのステートメントによって読み取られたレコードが、削除されるレコードです。

この場合、FORMAT 句は、削除すべきレコードを見つけるためには使用されません。重複がある場合には、適切なレコードが削除されないようにするために、READ ステートメントが必要になります。

削除操作の前に READ 操作が正常に終了しなかった場合、以下のことが行われません。

- ファイル状況キー (定義されている場合) が 94 に設定されます。
- EXCEPTION/ERROR プロシージャ (指定されている場合) が実行されます。
- DELETE ステートメントは処理されません。

最終入出力ステートメントが、NO LOCK 句を持つ READ ステートメントで、かつ正常に処理されていれば、次のようになります。

- ファイル状況キー (定義されている場合) が 9S に設定されます。
- EXCEPTION/ERROR プロシージャ (指定されている場合) が実行されます。
- DELETE ステートメントは処理されません。

レコードが読み取られてから RECORD KEY データ項目の値が変更された場合には、次のようになります。

2. レコード域の中のキー・フィールドは、検索指数を作成するためのレコード形式または仕様に従って選択したバッファのロケーションです。

DELETE ステートメント

- 定義されている場合に、ファイル状況キーが 21 に設定されます。
- INVALID KEY 条件になります。
- DELETE ステートメントは処理されません。

IBM 拡張 の終り

FORMAT 句

IBM 拡張

FORMAT 句は、装置タイプが DATABASE である索引付きファイルだけに適用されます。これは、複数のレコード形式をもち、固有のキーを持つファイルの処理中に必要です。レコード・キーが複写で定義されていると、FORMAT 句は誤りとなり無視されます。

FORMAT 句で指定する値には、この入出力操作で使用するレコード形式の名前が入ります。システムは、これを使用して、どのレコード形式が操作に際して必要があるかを指定または選択します。

ID を指定する場合には 10 文字以下の文字ストリングでなければならず、さらに以下のいずれかの名前である必要があります。

- 作業用ストレージ・セクションの記入項目
- リンケージ・セクションの記入項目
- 以前にオープンされたファイルに関するレコード記述記入項目

リテラルを指定する場合、10 文字以下の英大文字の文字ストリングでなければなりません。全桁がブランクの値は、FORMAT 句が指定されなかった場合と同じ扱いになります。ブランクの値がそのファイルに関して有効でない場合は、FILE STATUS として 9K が戻され、そのファイルに対応可能であれば USE プロシージャが呼び出されます。

IBM 拡張 の終り

NULL-KEY-MAP IS 句

IBM 拡張

NULL-KEY-MAP IS 句については 522 ページの『NULL-KEY-MAP IS 句』の START ステートメントについての説明を参照してください。

IBM 拡張 の終り

INVALID KEY 句

適用可能な USE プロシージャが指定されていないファイルに対しては、INVALID KEY 句を指定する必要があります。詳細は 297 ページの『INVALID KEY 条件』を参照してください。

NOT INVALID KEY 句

NOT INVALID KEY 句のある DELETE ステートメントが正常に処理された後は、その句に関連した命令ステートメントに制御が渡されます。

END-DELETE 句

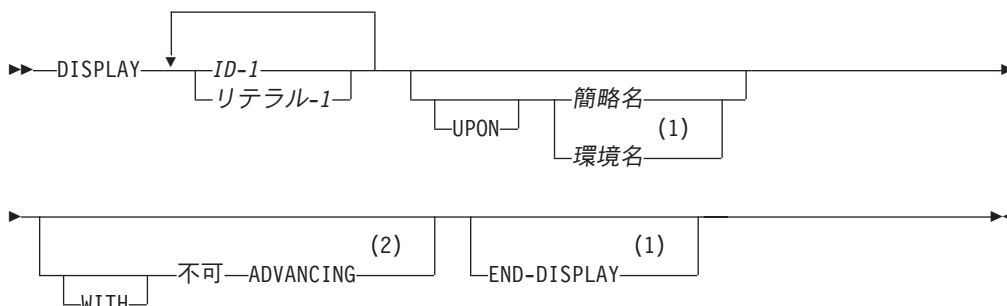
この明示範囲終了符号は、DELETE ステートメントの範囲を区切ります。これにより DELETE 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-DELETE は DELETE 命令ステートメントでも使用できます。

DISPLAY ステートメント

DISPLAY ステートメントは、各オペランドの内容を出力装置へ転送します。各オペランドの内容は、オペランドがリストされている順序で左から右に出力装置へ表示されます。

形式 1 - データの転送

DISPLAY ステートメント - 形式 1 - データ 転送



注:

- 1 IBM 拡張
- 2 構文検査だけ行われます。

ID-1

IBM 拡張

ID-1 の記述に TYPE 文節が含まれる場合は、その文節で指定されるタイプ名は基本項目でなければなりません。

IBM 拡張 の終り

これが数字であって外部 10 進数としては記述されていない場合、ID は以下の方法で外部形式に自動的に変換されます。

- 2 進数項目または内部 10 進数項目は、外部 10 進数に変換されます。負の符号付きの値を使用すると、低位桁の符号が表示されます。たとえば、SIGN WITH SEPARATE CHARACTER が指定されていないで、2 つの数字項目が -34 および 34 の値を持つ場合には、これらの値はそれぞれ 3M および 34 と表示されます。SIGN WITH SEPARATE CHARACTER が指定されている場合には、その数字の指定に従って + または - の符号が数字の先頭または末尾に表示されます。

注: パック、2 進数、浮動小数点、または日時データ (COMP、COMP-1、COMP-2、COMP-3、PACKED-DECIMAL、BINARY、または COMP-4) の入っているグループ項目をディスプレイ装置に表示してはなりません。このようなデータにはディスプレイ装置制御文字が入っていることがあるの

で、予期しない結果を引き起こすことになります。

IBM 拡張

- 内部浮動小数点データ項目であっても外部浮動小数点データ項目であってもかまいません。内部浮動小数点数は、たとえば次のように、表示される前に外部浮動小数点数に変換されます。
 - COMP-1 項目は、-.9(8)E-99 という外部浮動小数点 PICTURE 文節を持っているかのように表示されます。
 - COMP-2 項目は、-.9(17)E-999 という外部浮動小数点 PICTURE 文節を持っているかのように表示されます。

外部浮動小数点リテラルが表示される場合は、結果が少し不正確になる可能性があります。このことは、DISPLAY が MOVE の後に来る場合に、特にそうであると言えます。浮動小数点データ・タイプは近似値で、外部浮動小数点リテラルが転送された場合に、この浮動小数点データ・タイプはまず真の浮動小数点値 (IEEE) に変換されますが、この変換も浮動小数点データ・タイプの正確性に影響を与える可能性があります。

たとえば、以下の DISPLAY を考えてみます。

```
77 external-float-1 PIC +9(3).9(13)E+9(3).
   MOVE +12345779012.3453E+297 to external-float-1.
   DISPLAY "EXTERNAL-FLOAT-1=" external-float-1.
```

MOVE の後で表示される結果は以下のとおりです。

```
EXTERNAL-FLOAT-1=+123.4557790123452E+306
```

IBM 拡張 の終り

- 上記以外の ID は、変換する必要がありません。

IBM 拡張

- 基本 DBCS データ項目と国別データ項目は出力装置に転送されます。DBCS、国別、および SBCS オペランドはいずれも verb、DISPLAY を 1 つ使用するだけで指定できます。出力されるデータは、ジョブの現行 CCSID によって指定されるコード・セットに変換されます。

IBM 拡張 の終り

リテラル-1

リテラル-1 は、任意の表意定数を指定できます。表意定数が指定された場合には、その表意定数の 1 文字だけが表示されます。

おのおののリテラルは、符号なし整数でなければなりません。

IBM 拡張

浮動小数点リテラルを使用できます。

符号付きで非整数の、数字リテラルが使用可能です。

DISPLAY ステートメント

DBCS リテラルおよび国別 16 進リテラルが使用可能です。 verb、DISPLAY 内で、表意定数 ALL を DBCS リテラルおよび国別 16 進リテラルと一緒に使用できます。

IBM 拡張 の終り

UPON

UPON 句は簡略名を指定しますが、これはワークステーション (REQUESTOR)、またはシステム・オペレーターのメッセージ・キュー (CONSOLE または SYSTEM-CONSOLE) のいずれかに関連した簡略名でなければなりません。

IBM 拡張

簡略名の代わりに**環境名**を指定することもできます。有効な環境名は CONSOLE および SYSOUT です。

IBM 拡張 の終り

UPON 句を省略した場合には、DISPLAY ステートメントは REQUESTOR へ出力を送り出します。

WITH NO ADVANCING

この句に対しては構文検査だけが行われ、無視されます。 WITH NO ADVANCING 句の機能的な説明については 381 ページの『形式 4 - セッション入出力』を参照してください。

DISPLAY ステートメントの動作

DISPLAY ステートメントが実行されるとき、送り出しフィールドに入っているデータが出力装置へ転送されます。送り出しフィールドの大きさは、リストされたすべてのオペランドの合計文字数です。ハードウェア装置が、転送中のデータ項目と同じ大きさのデータを受け取ることができる場合は、このデータ項目が転送されます。ハードウェア装置が、転送中のデータ項目と同じ大きさのデータを受け取ることができない場合は、次のいずれかが適用されます。

- 合計文字数が最大の装置論理レコード長より小さい場合には、残りの右端の文字にスペースが埋め込まれます。
- 合計文字数が最大の論理レコード長より大きい場合には、すべてのオペランドを表示するために必要な数のレコードが書き出されます。レコードの終わりに到達したときに印刷中または表示中のオペランドが残っていれば、そのオペランドは次のレコードに継続されます。

IBM 拡張

- DBCS オペランドまたは国別オペランドが複数のレコードに分割される場合は、2 バイト境界でのみ分割されます。

IBM 拡張 の終り

最後のオペランドが出力装置に転送された後、この出力装置は、次の行の左端の位置にリセットされます。

論理レコードの長さは装置によって次のとおり異なります。

出力	最大論理レコード・サイズ
ジョブ・ログ	120 文字
ワークステーション	58 文字
システム・オペレーターのメッセージ・キュー	58 文字

IBM 拡張

DBCS または国別文字の項目またはリテラルが verb、DISPLAY 内で指定された場合、送り出しフィールドの大きさは、リストされたすべてのオペランドの合計文字数です。この合計文字数は、1 つの DBCS 文字を 2 バイトと数え、DBCS に必要なシフト・コードをすべて足した数です。

IBM 拡張 の終り

バッチ・ジョブ中のあるプログラムが、UPON 句のない DISPLAY ステートメントを実行する場合、または REQUESTOR と関連する UPON 句を指定した DISPLAY ステートメントを実行する場合は、重大度 99 の通知メッセージのジョブ・ログに出力が送られます。このメッセージの重大度は、メッセージ記述変更 (CHGMSGD) CL コマンドを使用して変更できます。詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションを参照してください。

ディスプレイ・ファイルを使用する対話式ジョブの場合、DISPLAY ステートメントは、通常、使用されません。もしこれらのステートメントを使用する場合は、以下の点を考慮しなければなりません。

対話式ジョブが DISPLAY ステートメントを実行する場合、プログラム・メッセージの表示画面に論理レコードが表示されます。

以下の画面は、プログラム・メッセージの表示の例を示しています。

```

                                プログラム・メッセージの表示
QSYS のサブシステム QINTER のジョブ JOB 000745/QPGMR/WS1 が 02/17/92 14:50:22 に開始された。 1
SAMPLE PROGRAM MESSAGE FROM PREVIOUS CALL OF PROGRAM. 2
SAMPLE PROGRAM MESSAGE FROM CURRENT CALL OF PROGRAM. 2
    
```

- **1** このセッションに対するシステム・メッセージ。
- **2** このセッションに対するプログラム・メッセージ。

この表示には、このセッションでの他の活動に関連したメッセージの他に、現在実行されているプログラムからのメッセージが含まれています。

DISPLAY ステートメントが処理される時、画面に関するディスプレイ・ファイルの特性によって、プログラムの処理を中断すべきかどうかが決まります。

DISPLAY ステートメント

- RSTDSP(*NO)

このパラメーターをディスプレイ・ファイルの変更・作成中に指定すると、処理中の DISPLAY ステートメントがプログラムの処理を中断し、画面にはプログラム・メッセージ表示が現れます。プログラムの実行を再開するには、実行キーを押し、直前の表示画面にすぐに戻ってください。

- RSTDSP(*YES)

このパラメーターをディスプレイ・ファイルの変更・作成中に指定するか、コマンド入力画面から DISPLAY ステートメントを実行した場合は、DISPLAY ステートメントの処理はプログラムの処理を中断しません。

プログラム・メッセージ表示が画面に現れ、以下のいずれかが生じるまでそのまま表示されます。

- プログラムが、そのファイルに対して非サブファイルの READ または WRITE ステートメントを処理します。プログラム・メッセージ表示は消え、前の表示が画面に戻されます。
- プログラムは終了します。

注: プログラムの実行を中断したい場合は、DISPLAY ステートメントの後に ACCEPT ステートメントをコーディングします。これによって、実行キーが押されるまでプログラムの実行が中断されます。

プログラム終了後に出カレコードを表示する場合は、コマンド入力画面から F10 キーを押します。

対話式処理の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。RSTDSP パラメーターの追加情報については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションの『CHGDSPF』および『CRTDSPF』コマンドを参照してください。

ワークステーションのオペレーターによって開始されたプログラムが DISPLAY をシステム・オペレーターメッセージ・キュー (ワークステーションとは別のもの) へ送り出す場合には、プログラムの処理は中断されません。

出力データの位置は、次のようにプログラム開始のタイプによって異なります。

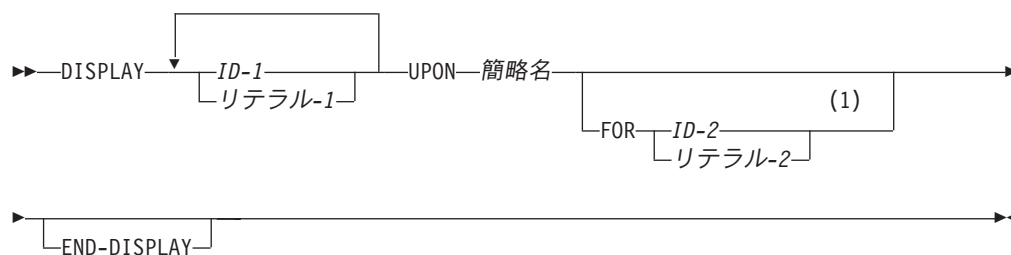
開始の方法	SYSTEM-CONSOLE に関連した簡略名	REQUESTOR に関連した簡略名	UPON 句を省略した場合
BATCH	システム・オペレーターメッセージ・キュー	ジョブ・ログ	ジョブ・ログ
INTERACTIVE	システム・オペレーターメッセージ・キュー	ワークステーション	ワークステーション

形式 2 - 内部データ域

IBM 拡張

この形式を使用して、ジョブ用に作成されたシステム定義の内部データ域にデータを転送します。

DISPLAY ステートメント - 形式 2 - 内部データ域



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

この形式が適用可能なのは、SPECIAL-NAMES 段落の中で簡略名が環境名 LOCAL-DATA と関連付けられている場合だけです。

ID-1 とリテラル-1 の変換および表示規則については 370 ページの『形式 1 - データの転送』に説明があります。しかし、ID-1 の説明に TYPE 文節が入っており、参照されるタイプ名が基本項目でなければならないという制約は適用されません。

ID-2 とリテラル-2 は、浮動小数点データ項目であってはなりません。

ID-1 は、日時データ項目が可能です。

ID-1 は DBCS または国別データ項目にすることができます。

DISPLAY ステートメントのリテラル・オペランド、または DISPLAY ステートメントの ID・オペランドの内容は、DISPLAY を出すプログラムを含んでいるジョブのシステム定義内部データ域に書き込まれます。データは、CORRESPONDING 句がなく、しかも右側がスペースが埋めこまれていないグループ転送の場合の MOVE ステートメントの規則に従って内部データ域に書き込まれます。

FOR 句 (指定されている場合) は、コンパイル時に構文上の検査を受けるが、プログラムの実行中にはコメントとして扱われます。リテラル-2 または ID-2 の値は、内部データ域にデータ書き込み中の装置のプログラム装置名を示しています。各ジョブに設けられる内部データ域は 1 つだけあり、1 つのジョブで使用される装置は、すべて同一の内部データ域をアクセスします。リテラル-2 (これが指定されている場合) は、非数字でなければならない、10 文字以下の長さでなければなりません。ID-2 (これが指定されている場合) は、長さが 10 文字以下の英数字データ項目を参照するものでなければなりません。

DISPLAY ステートメント

内部データ域については、「CL プログラミング」および「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

形式 3 - 拡張 DISPLAY ステートメント

IBM 拡張

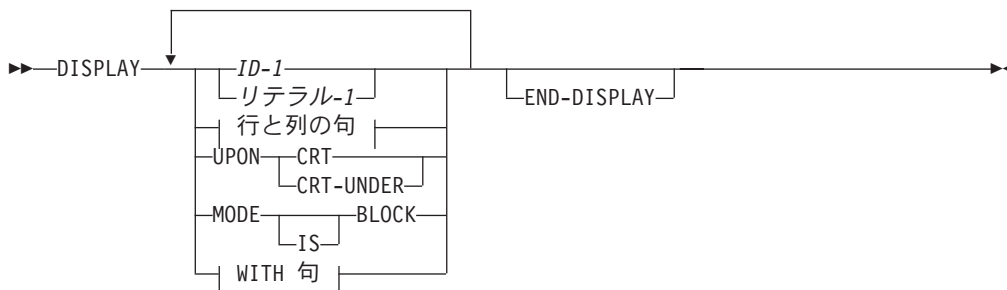
DISPLAY ステートメントは、以下のいずれかがある場合には、**拡張 DISPLAY** ステートメントと見なされます。

- AT 句
- UPON CRT 句または UPON CRT-UNDER 句
- MODE IS BLOCK 句
- WITH 句
- SPECIAL-NAMES 段落に UPON 句が指定されず、CONSOLE IS CRT が指定されている

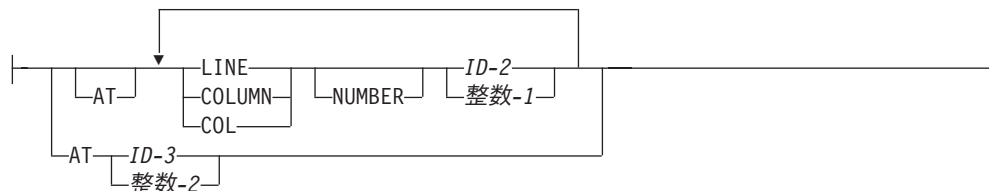
DISPLAY ステートメントに以下のいずれかがある場合には、**標準 DISPLAY** ステートメントと見なされます。

- UPON 句 (UPON CRT または UPON CRT-UNDER 以外)
- SPECIAL-NAMES 段落に UPON 句と CONSOLE IS CRT が指定されていない

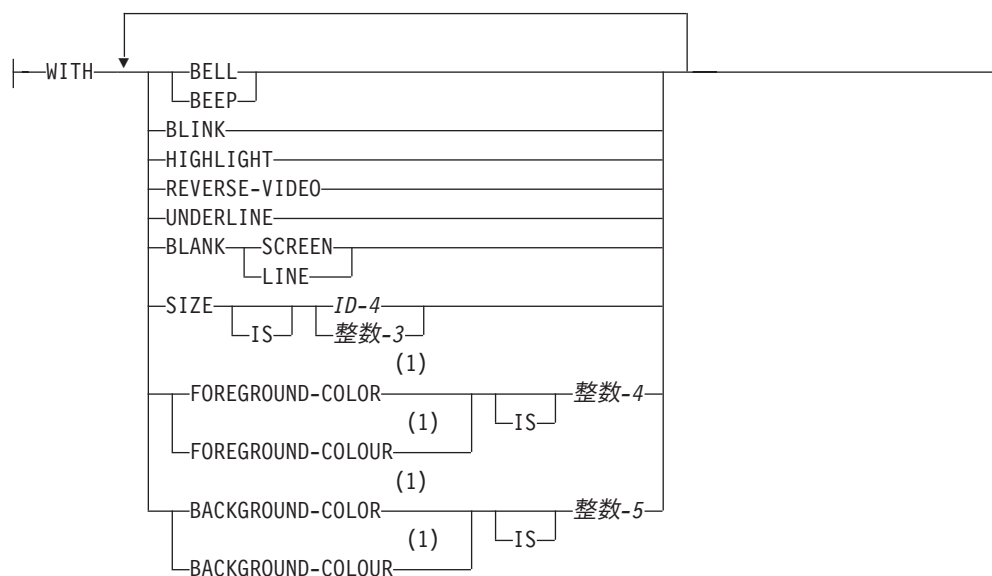
DISPLAY ステートメント - 形式 3 - ワークステーション I/O



行と列の句:



WITH 句:



注:

1 構文検査だけ行われます。

このステートメントの一部を繰り返すことによって、複数のデータ項目を表示させることもできます。最初の ID に AT、LINE、または COLUMN 句が付いていない場合、その ID は第 1 行、第 2 列から始まります。それ以降の各データ項目は、直前のデータ項目の後にある現在使用可能な画面位置から始まります。

ID-1 またはリテラル-1 を指定しないと、MODE IS BLOCK 句または WITH 句のどちらも使用することはできません。

ID-1 には日時項目は許されません。

ID-1 が画面に合わないときは、英数字データが切り捨てられたり、数字データが画面上に表示されなくなります。

ID-1 がグループ項目で、MODE IS BLOCK 句がなければ、FILLER 以外の名前を持つ基本従属項目が表示されます。基本項目は、その記述が DATA DIVISION に現れる順番で画面に同時に表示されて位置付けされ、グループ中の FILLER 項目の長さによって分離されます。このため、行上の最初の位置は、直前の行の最後の位置にすぐに続くものと見なされます。項目が FILLER で区切られるときは、属性バイトは FILLER の長さに含まれます。したがって、FILLER の長さが 1 バイトまたは 2 バイトの場合は、区切られる 2 つの項目の後書き属性と先行属性の両方が含まれることとなります。1 バイト FILLER の場合には、後ろに続く属性および先の属性が同じバイトを占有します。データ項目は 1 属性バイトで区切られるのが普通であるため、1 バイトの FILLER は必要ありません。

ID もリテラルもどちらも存在しない場合は、DISPLAY 操作によって、実際にはデータを何も表示せずに画面位置だけが変更されます。

DISPLAY ステートメント

ID またはリテラルの後の句は、どのような順序で記入してもかまいません。指定された句は、すべて直前の ID またはリテラル (指定されている場合) に提供されます。前に ID またはリテラルが指定されていなかった場合は、WITH および MODE 句を指定することはできません。

AT、LINE または COLUMN 句が指定されていない限り、DISPLAY ステートメントの中の複数の ID またはリテラルは、間に属性バイトを 1 バイト挟んで続けられます。このステートメント内に AT、LINE、または COLUMN 句が記入されていない場合には、最初の ID またはリテラルは、第 1 行、第 2 列から始まり、それ以外のすべての ID またはリテラルがその直後に続きます。

AT 句

AT 句は、DISPLAY 操作を開始する画面上の絶対アドレスを示します。この句は、先行属性の開始位置を示すものではありません。

LINE 句は、画面上で画面項目が始まる行を指定します。

COLUMN 句は、画面上で画面項目が始まる列を指定します。

COL は、COLUMN の省略形です。

LINE 句および COLUMN 句は、どのような順序で記入してもかまいません。

ID-2、整数-1

ID-2 および整数-1 は、ゼロまたはそれ以上で 9 桁より小さい、無符号整数でなければなりません。LINE 句または COLUMN 句の値が負の場合には、絶対値がとられます。

ID-2 は、浮動小数点データ項目にすることができません。

行と列の組み合わせ

行および列番号の特定の組み合わせには、次のような特別な意味があります。

- 列が範囲内に入るまでは、その範囲外の列の値は行の長さ分だけ減じられ、行値は増分されます。したがって、列番号によっては、行番号が数回増分されてしまうこともあります。
- 範囲外の行の値は、画面を 1 行分上方に画面移動させます。これは、最下部の行が指定された場合と同じです。指定された行に関係なく、画面が 2 行以上上方へ移動されることはありません。
- 列番号および行番号の両方ともが範囲外にある場合は、まず範囲外の列のほうを最初に処理されてから、次に範囲外の行が (上記の規則に従って) 処理されます。
- 入力された行および列番号が両方ともゼロの場合は、DISPLAY 操作は、直前の DISPLAY 操作が終了したところの次の位置から開始されます。各行の 1 列目は、直前の行の最終列の後に続いているものと見なされます。
- 行番号がゼロで、しかもゼロ以外の列番号が指定されている場合は、DISPLAY 操作は、直前の DISPLAY 操作が終了した行の次の行の、指定された列から始まります。各行の 1 列目は、直前の行の最終列の後に続いているものと見なされます。

- 行番号がゼロで、しかもゼロ以外の列番号が指定されている場合は、DISPLAY 操作は、直前の DISPLAY 操作が終了した行の次の行の、指定された列から始まります。

ID-3、整数-2

ID-3 は、PIC 9(4) または PIC 9(6) フィールドでなければなりません。整数-2 は、4 バイトまたは 6 バイトの数字フィールドでなければなりません。

ID-3 または整数-2 の長さが 4 バイトの場合は、最初の 2 桁が行を指定し、次の 2 桁が列を指定します。ID-3 または整数-2 の長さが 6 バイトの場合は、最初の 3 桁が行を指定し、次の 3 桁が列を指定します。

ID-3 は、浮動小数点データ項目にすることができません。

UPON CRT/CRT-UNDER 句

DISPLAY ステートメントが拡張されていることを示します。

CRT-UNDER は、UPON CRT-UNDER 句の前に表示されたデータ項目に下線も付けます。

MODE IS BLOCK 句

ID が基本項目として扱われます。その ID がたとえグループ項目であっても、1 つの項目として表示されます。

WITH 句

WITH 句を使うことによって、ユーザーは DISPLAY 操作の特定のオプションを指定することができるようになります。そのようなオプションについては、以下に示す各句で説明します。

BELL (BEEP) 句

この句を含んでいる項目が表示されるたびに、警報音が鳴ります。

BELL と BEEP はいずれを使ってもかまいません。

BLANK 句

BLANK は、この文節を含んでいる画面項目が表示されるたびに機能します。

BLANK LINE は、現在のカーソル位置から現在行の終わりまでを消去します。

BLANK SCREEN は、画面全体を消去して、カーソルを第 1 行、第 2 列に移動します。

これらの消去は、項目が表示される前に行われます。

BLINK 句

画面項目が画面に表示されると明滅します。

HIGHLIGHT 句

画面項目が高輝度モードで画面に表示されます。

REVERSE-VIDEO 句

画面項目が反転表示で示されます。

SIZE 句

画面上のデータ項目の現行サイズを指定します。この句は基本データ項目にしか使用することができません。

ID-4、整数-3

整数-4 は符号なし整数でなければならず、OCCURS 文節に従属してはなりません。整数-3 には符号が付いてはなりません。

ID-4 または ID-3 に符号がある場合、コンパイラーは絶対値を使用し、警告メッセージを出します。

ID-4 は、浮動小数点データ項目であってはなりません。

指定されたサイズがゼロであれば、SIZE 句には影響がありません。この場合、データ項目を表示するためにフィールドの長さが使用されます。

関連する PICTURE 文節によって暗黙指定されたサイズよりも小さなサイズが指定されると、ワークステーションの画面にはデータ項目の左端の部分だけが現れます。

数字または数字編集のデータ項目に対して指定したサイズが、PICTURE 文節によって暗黙指定されたサイズよりも小さくなる場合があります。その場合、値が表示される際に、右端が切り捨てられます。データ項目は MOVE 操作の規則に従って更新されます。

フィールドの長さが画面サイズを超える値を持つ SIZE リテラルを指定する場合には、英数字データが切り捨てられたり、数字データが無視されるか、表示されなくなります。

JUSTIFIED が指定された項目に関しては、その項目の長さよりも小さいサイズを指定すると、右端の部分だけが現れます。

ユーザーが指定するサイズが、PICTURE 文節で暗黙指定されたサイズよりも大きい場合には、その項目の表示用部分にはスペースが埋め込まれます。埋め込まれるのは右側です。

表意定数 ALL は、ユーザーが指定する長さに達するまで必要に応じて何度でも表示されます。表示が新しい行へ折り返すと、新しい行は定数の先頭から始まります。

SIZE 句の例

以下に示すのは、指定されたサイズが表意定数よりも大きくて、新しい行に折り返した場合の表意定数の表示例です。

```
DISPLAY ALL 'ABCD' AT 0270 WITH SIZE 15.
```

この定数は第 2 行、第 70 列から始まって、画面上に表示されます。

```

                                0000000001                67777777778
                                1234567890.....901234567890
Line 1
Line 2                                ABCDABCDABC
Line 3                                ABCD
```

以下の例における相違に注目してください。

Statement 1 DISPLAY 'WORKSTATION' AT 0275 WITH SIZE 10
 Statement 2 DISPLAY ALL 'WORKSTATION' AT 0275 WITH SIZE 10

```

                                0000000001          677777777778
                                1234567890.....901234567890
Statement 1                      WORKST
                                ATIO
Statement 2                      WORKST
                                WORK
    
```

UNDERLINE 句

画面に表示される画面項目に下線が引かれます。

形式 3 の考慮事項

MODE IS BLOCK が指定されているかどうかに関係なく、データ項目にはテーブルを入れることができます。固定長および可変長のテーブルはグループ項目 (MODE IS BLOCK が指定されていない) として扱われ、それらの項目はテーブルの最初のオカレンスから最後のオカレンスまで繰り返されます。

拡張 DISPLAY ステートメントに関する考慮事項のあるものは、拡張 ACCEPT ステートメントにも当てはまります。(詳しくは 324 ページの『拡張 ACCEPT および拡張 DISPLAY の考慮事項』を参照してください。)

ILE COBOL の拡張 DISPLAY ステートメントは、IBM COBOL/2 DISPLAY ステートメント (形式 2) に類似しています。異なる点については 729 ページの『付録 I. ACCEPT/DISPLAY および COBOL/2 に関する考慮事項』で説明します。

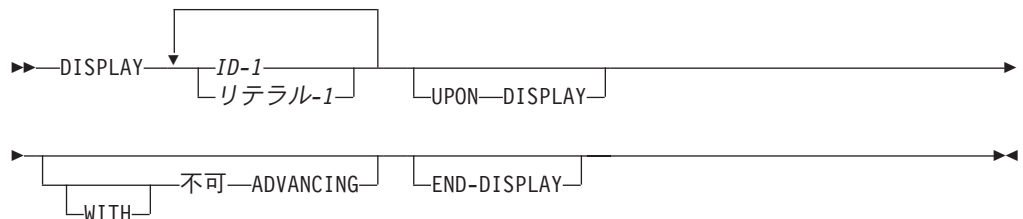
IBM 拡張 の終り

形式 4 - セッション入出力

IBM 拡張

この形式は、データを ILE 共通セッション管理プログラムに転送するのに使用します。

DISPLAY ステートメント - 形式 4 - セッション I/O



この形式は、SPECIAL-NAMES 段落に UPON DISPLAY 句または CONSOLE IS DISPLAY 文節が指定されている場合にだけ適用されます。

DISPLAY ステートメント

DISPLAY ステートメントのリテラル・オペランド、または DISPLAY ステートメントの ID オペランドの内容は、ILE 共通セッション管理プログラムに書き込まれます。この際、データは形式 1 - データの転送 (370 ページの『形式 1 - データの転送』の下の ID-1 とリテラル-1 の説明を参照) に略述されている規則に従ってセッション管理プログラムに書き込まれます。ID-1 またはリテラル-1 の内容が 2 行以上にまたがっている場合、データの書き込みは ILE 共通セッション管理プログラムの次の行の最初の位置から続きます。

WITH NO ADVANCING 句が指定されていないと、改行 (new line) 文字がセッション管理プログラムに書き込まれます。しかし、この句が指定されている場合には、表示されている最後のオペランドの最終文字のすぐ後にセッション管理プログラムが位置づけられます。

ID-1 は、日時データ項目が可能です。

ID-1 は DBCS または国別データ項目にすることができます。ID-1 が国別項目の場合、出力データは、ジョブの現行 CCSID によって指定されるコード・セットに変換されます。

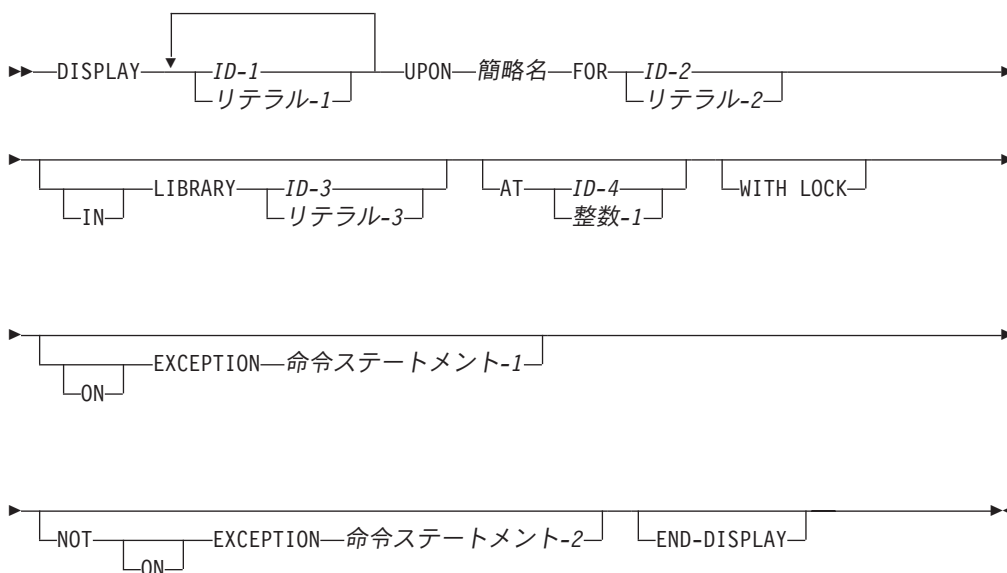
IBM 拡張 の終り

形式 5 - データ域

IBM 拡張

このステートメントは、FOR 句で指定されているデータ域にデータを転送するために使用されます。

DISPLAY ステートメント - 形式 5 - データ域



この形式が適用できるのは、SPECIAL-NAMES 段落の中で簡略名が環境名 DATA-AREA と関連付けられている場合だけです。

DISPLAY ステートメントのリテラル・オペランド、または DISPLAY ステートメントの ID オペランドの内容は、CORRESPONDING 句がなく、しかも右側にスペースが埋めこまれていないグループ転送の場合の MOVE ステートメントの規則に従ってデータ域に書き込まれます。

ID-1/リテラル-1

ID-1 とリテラル-1 の変換および表示規則については 370 ページの『形式 1 - データの転送』に説明があります。

ID-1 は、日時データ項目が可能です。

UPON

SPECIAL-NAMES 段落中の簡略名は、環境名 DATA-AREA と関連付けられていなくてはなりません。

UPON 句を省略した場合には、DISPLAY ステートメントは REQUESTOR へ出力を送り出します。

FOR 句

情報を書き込むための、オペレーティング・システムのデータ域を識別します。指定されたデータ域の位置が実行時に確認できないか、またはアクセスできない場合、ON EXCEPTION 条件が存在します。

ID-2

英数字データ項目でなければなりません。ID-2 の内容は、有効なオペレーティング・システムのデータ域名を表していなければなりません。オペレーティング・システムのデータ域名は、最大 10 文字の長さです。したがって ID-2 の最初の 10 文字が、データ域名を形成するために使用されます。

リテラル-2

非数字で、長さが最大 10 文字でなくてはなりません。

IN LIBRARY 句

データ域を検出するオペレーティング・システムのライブラリーの名前を指定するために使用されます。特殊値 *LIBL (ジョブのライブラリー・リストを使用する検索) または *CURLIB (現行ライブラリーを検索) を指定できます。LIBRARY 句を省略すると、ジョブのライブラリー・リストを使用して、データ域を検索します。

ID-3

英数字データ項目でなければなりません。オペレーティング・システムのライブラリー名の長さは最大 10 文字であるため、ID-3 の最初の 10 文字だけを使用してライブラリー名が形成されます。

リテラル-3

非数字で、長さが最大 10 文字でなくてはなりません。

ID-2、ID-3、リテラル-1、およびリテラル-2 は、*MONOPRC コンパイラー・オプションによって影響を受けません。これらには、オペレーティング・システムの引用符付き名を入れることができます (詳細については、Web サイト

DISPLAY ステートメント

<http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』のセクションの『名前の指定の規則』を参照してください。

AT 句

AT 句は、テキストを書き込むデータ域中の開始位置を示します。

AT 句が指定されていない場合、開始位置 1 が想定されます。

ID-4、整数-1

ID-4 および整数-1 は正の整数で、その値は 1 から最大データ域サイズ (2000) の範囲になくってはなりません。

WITH LOCK 句

FOR 句中の指定されたデータ域にデータが転送される前に、ロックを獲得しなければなりません。ロックが得られない場合には、データは転送されず、ON EXCEPTION 条件が存在します。

データの転送後もロックをデータ域に保存するためには、この句を指定してください。このステートメント以前にデータ域にロックが存在し、ステートメントに WITH LOCK 句が含まれていない場合、そのロックは解放されます。

(NOT) ON EXCEPTION

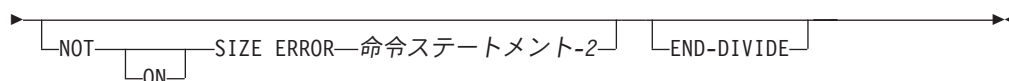
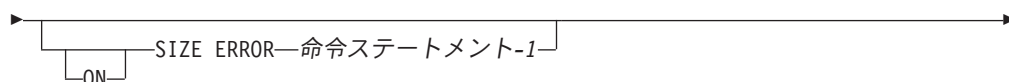
データ域にアクセスしている間にエラーが発生すると、ON EXCEPTION 句で指定された任意の命令ステートメントが処理されます。ON EXCEPTION 句がない場合は、実行時メッセージが発行されます。データ域が正常にアクセスされると、NOT ON EXCEPTION 句で指定された任意の命令ステートメントが処理されます。

END-DISPLAY 句

END-DISPLAY 明示範囲終了符号は、DISPLAY ステートメントの有効範囲を区切るのに役立ちます。END-DISPLAY を使うと、条件 DISPLAY ステートメントを別の条件ステートメント内でネストさせることができます。また、END-DISPLAY は命令 DISPLAY ステートメントでも使用できます。詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

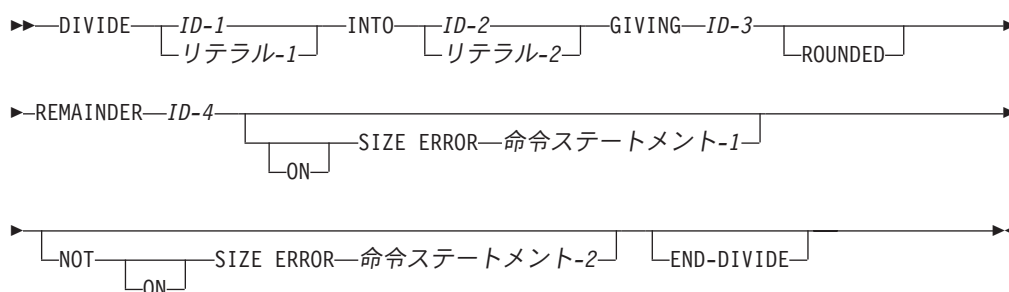
IBM 拡張 の終り

DIVIDE ステートメント



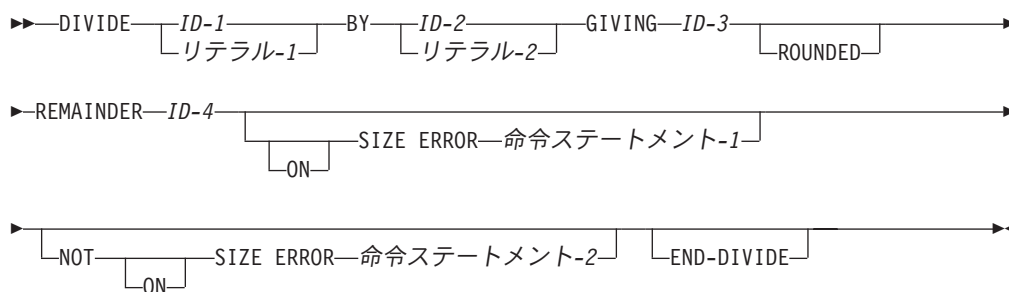
形式 3 では、ID-1 またはリテラル-1 の値は、ID-2 またはリテラル-2 の値で除算されます。この商は、ID-3 で参照される各データ項目に保管されます。

DIVIDE ステートメント - 形式 4 - INTO GIVING REMAINDER



形式 4 では、ID-1 またはリテラル-1 の値は、ID-2 またはリテラル-2 の値で除算されます。この商は ID-3 に保管され、余りの値は ID-4 に保管されます。

DIVIDE ステートメント - 形式 5 - BY GIVING REMAINDER



形式 5 では、ID-1 またはリテラル-1 の値は、ID-2 またはリテラル-2 の値で除算されます。この商は ID-3 に保管され、余りの値は ID-4 に保管されます。

すべての形式において、以下が適用されます。

ID-1、ID-2

基本数字項目でなければなりません。

ID-3、ID-4

基本数字項目または基本数字編集項目でなければなりません。

リテラル-1、リテラル-2

数字リテラルでなければなりません。

オペランドの合成は、REMAINDER データ項目を除いた、すべての受け入れデータ項目を重ね合わせるによって決定されます。オペランドの合成に関する詳細は 293 ページの『オペランドのサイズ』を参照してください。

IBM 拡張

形式 1 ~ 3 では、浮動小数点データ項目および浮動小数点リテラルは、数字データ項目または数字リテラルが指定できるところであればどこでも使用できます。

形式 4 および形式 5 では、浮動小数点データ項目または浮動小数点リテラルは使用できません。

IBM 拡張 の終り**ROUNDED 句**

形式 1、形式 2、および形式 3 については 291 ページの『ROUNDED 句』を参照してください。

形式 4 および形式 5 では、剰余を計算するために使用される商は、中間フィールドに置かれます。中間フィールドの値に対して、丸めではなく切り捨てが行われます。

REMAINDER 句

商と除数の積を被除数から減算した結果が、ID-4 に保管されます。ID-3 (商) が数字編集項目である場合には、剰余を計算するために使用される商は、編集されていない商を含む中間フィールドです。

IBM 拡張

REMAINDER 句は、受け取り側または任意のオペランドが浮動小数点項目である場合、無効になります。

IBM 拡張 の終り

REMAINDER 句内の ID-4 に対する添え字は、除算の結果が GIVING 句の ID-3 に保管された後に評価されます。

SIZE ERROR 句

形式 1、形式 2、および形式 3 については 292 ページの『SIZE ERROR 句』を参照してください。

形式 4 および形式 5 で、商もサイズ・エラーが起こった場合には、剰余の計算は意味をもちません。したがって、商フィールド (ID-3) および剰余フィールド (ID-4) の値は変わりません。

DIVIDE ステートメント

剰余にサイズ・エラーが起こった場合には、剰余フィールド (ID-4) の内容は変わりません。

前述の 2 つの場合には、ユーザーはどのような条件が起こったのかを判断するために結果を分析しなければなりません。

NOT ON SIZE ERROR 句については、293 ページの『NOT ON SIZE ERROR』を参照してください。

END-DIVIDE 句

この明示範囲終了符号は、DIVIDE ステートメントの範囲を区切ります。END-DIVIDE は DIVIDE 条件ステートメントを命令ステートメントに変換することにより、それが他の条件ステートメントにネストできるようにします。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

DROP ステートメント

IBM 拡張

DROP ステートメントは、TRANSACTION ファイルによって獲得したプログラム装置を解放します。

DROP ステートメント - 形式

```

▶▶ DROP ID FROM ファイル名
      └──┬──┘
        リテラル
  
```

リテラル、ID

リテラルまたは ID の内容は、ドロップされる装置のプログラム装置名を示しています。リテラルを指定する場合、非数字で、かつ、その長さが 10 文字以内でなければなりません。ID を指定する場合は、長さが 10 文字以内の英数字データ項目でなければなりません。

ファイル名

ファイル名には、TRANSACTION 編成のファイルを指定しなければなりません。これを DROP ステートメントの中で使用するためには、そのファイルがオープンされていなければなりません。DROP ステートメントが出されなかった場合、TRANSACTION ファイルに接続されたプログラム装置は、そのファイルが最終的にクローズされるときに、暗黙のうちに解放されます。

DROP ステートメントで指定されたプログラム装置は、OPEN 時に明示的な ACQUIRE、または OPEN 時の暗黙的な ACQUIRE によって、TRANSACTION ファイルに前もって獲得されていなければなりません。

DROP ステートメントが正常に実行されると、そのプログラム装置は、TRANSACTION ファイルを介する入力操作または出力操作に、使用できなくなります。そのプログラム装置は、必要ならば再び獲得できます。解放されたプログラム装置に関連したレコード域の内容は、その装置が再び獲得された場合でも、もはや使用できません。

DROP ステートメントが正常に終了しなかった場合、適用可能な USE AFTER EXCEPTION/ERROR プロシージャが実行されます。

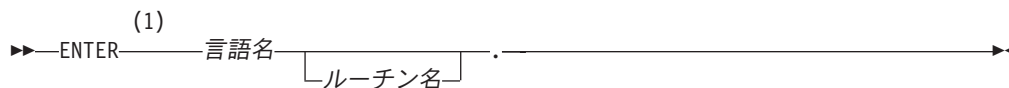
DROP ステートメントは、入出力エラーからの回復の補助手段としても使用できます。詳細については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『トランザクション・ファイルの回復手順』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

ENTER ステートメント

ENTER ステートメントにより、1 つのソース・プログラム内で複数のソース言語を使用できます。これは構文検査だけを受けます。

ENTER ステートメント - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

言語名

意味が定義されていないシステム名です。ユーザー定義語の形成に関する規則に従わなければなりません。少なくとも 1 文字は英字でなければなりません。

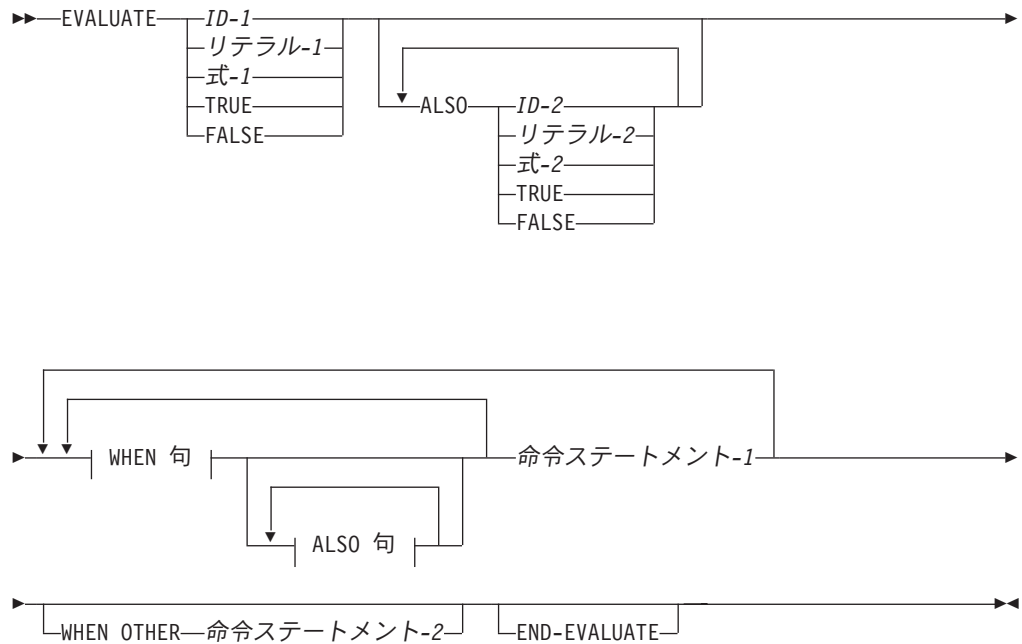
ルーチン名

ユーザー定義語の形成に関する規則に従わなければなりません。少なくとも 1 文字は英字でなければなりません。

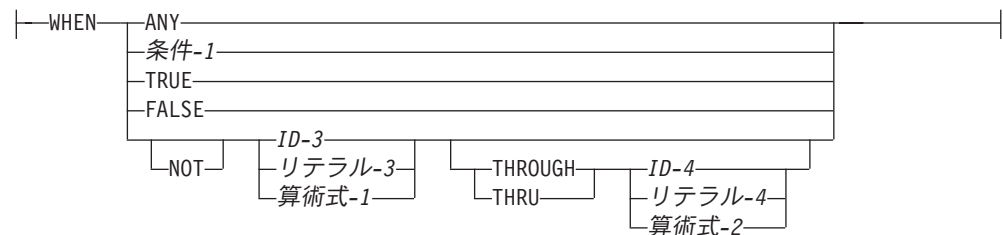
EVALUATE ステートメント

EVALUATE ステートメントは、ネストされた一連の IF ステートメントに対する省略表現を提供します。これは、複数の条件を評価できます。すなわち、IF ステートメントでは複合条件での構成になります。オブジェクト・プログラムのその後の処置は、これらの評価の結果によって決まります。

EVALUATE ステートメント - 形式

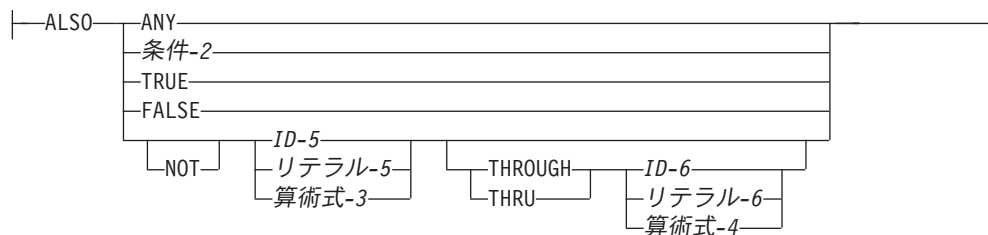


WHEN 句:



EVALUATE ステートメント

ALSO 句:



次の例は、EVALUATE ステートメントのコーディングと、それに対応する IF ステートメントのコーディングを示したものです。

コーディング例

EVALUATE ステートメントの簡単な例

```
EVALUATE MENU-INPUT
  WHEN "0"
    PERFORM INIT-PROC
  WHEN "1" THRU "9"
    PERFORM PROCESS-PROC
  WHEN "R"
    PERFORM READ-PARMS
  WHEN "X"
    PERFORM CLEANUP-PROC
  WHEN OTHER
    PERFORM ERROR-PROC
END-EVALUATE.
```

対応する IF ステートメント

```
IF (MENU-INPUT = "0") THEN
  PERFORM INIT-PROC
ELSE
  IF (MENU-INPUT ≥ "1") AND (MENU-INPUT ≤ "9") THEN
    PERFORM PROCESS-PROC
  ELSE
    IF (MENU-INPUT = "R") THEN
      PERFORM READ-PARMS
    ELSE
      IF (MENU-INPUT = "X") THEN
        PERFORM CLEANUP-PROC
      ELSE
        PERFORM ERROR-PROC
      END-IF
    END-IF
  END-IF
END-IF.
```

次の例は、EVALUATE ステートメントおよびそれに対応する IF ステートメントの、より複雑な例です。

EVALUATE ステートメントの複雑な例

```
EVALUATE A = B ALSO C > D ALSO TRUE
  WHEN TRUE ALSO TRUE ALSO E = F + 15
    imp-stat-1
  WHEN TRUE ALSO TRUE ALSO E > 12
```

```

    imp-stat-2
WHEN TRUE ALSO FALSE ALSO ANY
    imp-stat-3
WHEN FALSE ALSO TRUE ALSO ANY
    imp-stat-4
WHEN FALSE ALSO FALSE ALSO ANY
    imp-stat-5
END-EVALUATE.

```

対応する IF ステートメント

```

IF A = B THEN
  IF C > D THEN
    IF E = F + 15 THEN
      imp-stat-1
    ELSE
      IF E > 12 THEN
        imp-stat-2
      END-IF
    END-IF
  ELSE
    imp-stat-3
  END-IF
ELSE
  IF C > D THEN
    imp-stat-4
  ELSE
    imp-stat-5
  END-IF
END-IF.

```

選択サブジェクトと選択オブジェクトの解釈

WHEN 句の前のオペランド

個別に指定されている場合には、これらは**選択サブジェクト**と呼ばれます。
 集合で指定されている場合には、**選択サブジェクトのセット**と呼ばれます。

WHEN 句の中のオペランド

個別に指定されている場合には、**選択オブジェクト**と呼ばれます。
 集合で指定されている場合には、**選択オブジェクトのセット**と呼ばれます。

ALSO

選択サブジェクトのセット内のサブジェクトどうしを区切ります。また、選択オブジェクトのセット内のオブジェクトどうしを区切ります。

THROUGH および THRU

これらは、同じ意味です。THRU 句で結ばれた 2 つのオペランドは、同じクラスのものでなければなりません。このように結ばれた 2 つのオペランドは、1 つの**選択オブジェクト**を形成します。

選択オブジェクトの各セット内の**選択オブジェクト**の数は、**選択サブジェクト**の数と等しくなければなりません。選択オブジェクトのセット内の各**選択オブジェクト**は、次の規則に従って、**選択サブジェクト**のセット内の同じ順位を持つ**選択サブジェクト**に対応していなければなりません。

- **選択オブジェクト**の中に現れる ID、リテラル、または算術式は、**選択サブジェクト**のセット内の対応するオペランドと比較した場合に、有効なオペランドとなっていないければなりません。

EVALUATE ステートメント

- 選択オブジェクトとして現れる条件-1、条件-2、または TRUE や FALSE の語は、選択サブジェクトのセットの中の条件式または TRUE や FALSE の語と対応していなければなりません。
- 条件-1 および条件-2 は、任意の形式の条件式とすることができます。
- ANY という語は、任意のタイプの選択サブジェクトに対応することがあります。
- 条件式は、単純条件または複合条件のどちらにもすることができます。

IBM 拡張

- 数字リテラルが許可される場所では、浮動小数点リテラルが許可されます。
- ID が参照できる項目は、その使用法が POINTER または PROCEDURE-POINTER として暗黙に、または明示的に定義されている項目です。
- ID は、DBCS、国別、または浮動小数点の各データ項目を参照できます。
- ID は日時データ項目を参照できます。
- 非数字リテラルが許可されると、DBCS リテラルおよび国別 16 進リテラルもまた許可されます。

IBM 拡張 の終り

END-EVALUATE 句

この明示範囲終了符号は、EVALUATE ステートメントの有効範囲を区切るのに役立ちます。END-EVALUATE を使用することによって、EVALUATE 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。詳細は、288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

値の決定

EVALUATE ステートメントの実行は、あたかも、各選択サブジェクトおよび選択オブジェクトが演算され、数字または非数字の値、数字または非数字の値の範囲、あるいは真理値が割り当てられているかのように行われます。これらの値は、次のようにして決定されます。

- ID-1、ID-2、... で指定された選択サブジェクト、および NOT 句や THRU 句のない ID-3 または ID-5 (あるいはその両方) で指定された選択オブジェクトはすべて、それらが参照するデータ項目の値とクラスが割り当てられます。
- リテラル-1、リテラル-2、... で指定された選択サブジェクト、および NOT 句や THRU 句のないリテラル-3 またはリテラル-5 (あるいはその両方) で指定された選択オブジェクトはすべて、指定されたリテラルの値とクラスが割り当てられます。リテラル-3 またはリテラル-5 (あるいはその両方) が表意定数 ZERO である場合には、対応する選択サブジェクトのクラスがこれに割り当てられます。
- 式-1、式-2、... が算術式として指定されている選択サブジェクト、そして算術式-1 または算術式-3 (あるいはその両方) が指定されている、NOT 句や THRU 句のない選択オブジェクトはすべて、算術式の評価の規則に従って数字を割り当てられます。(265 ページの『算術式』を参照してください。)

注: ある算術式を別の算術式と比較する方法はシステム特有のものです。比較の真または偽の状況は、該当するシステムで作成される中間結果に左右されることがあります。

- 式-1、式-2、... が条件式として指定されている選択サブジェクト、そして条件-1 または条件-2 (あるいはその両方) が指定されている選択オブジェクトはすべて、条件式の評価の規則に従って真理値を割り当てられます。(267 ページの『条件式』を参照してください。)
 - TRUE または FALSE の語が指定されている選択サブジェクトまたは選択オブジェクトには、真理値が割り当てられます。TRUE の語が指定されている項目には、真理値「真」が割り当てられ、FALSE の語が指定されている項目には真理値「偽」が割り当てられます。
 - ANY の語が指定されている選択オブジェクトは、これ以上評価されません。
 - 選択オブジェクトに THRU 句が指定されていて、NOT 句が指定されていない場合には、値の範囲は比較の規則により、選択サブジェクトと比較したときに、最初オペランド以上で、2 番目のオペランド以下のすべての値となります。最初のオペランドが 2 番目のオペランドより大きい場合には、範囲内には値がないこととなります。
- 注: 比較がシステムの固有照合順序によるものであれば、非数字オペランドの比較の結果はシステム間で一貫していないことがあります。
- 選択オブジェクトに NOT 句が指定されている場合には、その項目に割り当てられる値は、NOT 句が省略されている項目に割り当てられる値または値の範囲とは等しくないすべての値となります。

選択サブジェクトと選択オブジェクトの比較

EVALUATE ステートメントの実行は、あたかも、選択サブジェクトのセットを満足させる WHEN 句があるかどうかを判別するために、選択サブジェクトおよび選択オブジェクトに割り当てられた値を比較するように進行します。この比較は、次のように進められます。

1. 最初の WHEN 句に対する選択オブジェクトのセット内の各選択オブジェクトが、選択サブジェクトのセット内の同じ順位を持つ選択サブジェクトと比較されます。比較を実行する場合には、次の条件の 1 つを満たしていなければなりません。
 - a. 比較する項目に数字または非数字の値、あるいは数字または非数字の値の範囲が割り当てられている場合には、比較の規則により、選択オブジェクトに割り当てられた値、または値の範囲の中の 1 つの値が、選択サブジェクトに割り当てられた値と等しい場合に比較が実行されます。
 - b. 比較する項目に真理値が割り当てられている場合には、その項目に同じ真理値が割り当てられた場合に比較が実行されます。
 - c. 比較する選択オブジェクトに ANY が指定されている場合には、選択サブジェクトの値に関係なく、常に比較が実行されます。
2. 比較する選択オブジェクトのセット内のすべての選択オブジェクトに対して上記の比較が実行された場合には、その選択オブジェクトのセットが入っている WHEN 句が、選択サブジェクトのセットの条件を満たす句として選択されます。
3. 上記の比較が、比較する選択オブジェクトのセット内のすべての選択オブジェクトに対して実行されたわけではない場合には、その選択オブジェクトのセットは選択サブジェクトの条件を満たしません。

EVALUATE ステートメント

4. このプロシージャは、その後の選択オブジェクトのセットで、それらがソース・プログラムに現れる順序で繰り返されます。これは、選択サブジェクトのセットの条件を満たす WHEN 句が選択されるか、あるいは選択されたすべてのセットがなくなるまで続けられます。

EVALUATE ステートメントの実行

比較操作が完了すると、EVALUATE ステートメントの実行が、次のように進められます。

- WHEN 句が選択された場合には、選択された WHEN 句の後の最初の命令ステートメント-1 から実行されます。1 つの命令ステートメント-1 に対して、複数の WHEN ステートメントを使用できることに注意してください。
- WHEN 句が選択されず、WHEN OTHER 句が指定されている場合には、実行は、命令ステートメント-2 から続行されます。
- WHEN 句が選択されず、WHEN OTHER 句も指定されていない場合には、実行は、範囲分離文字の後の次の実行可能ステートメントから続行されます。
- EVALUATE ステートメントの実行範囲は、実行が、選択された WHEN 句または WHEN OTHER 句の有効範囲の終わりに達したとき、あるいは WHEN 句が選択されず、WHEN OTHER 句も指定されないときに終了します。

EXIT ステートメント

EXIT ステートメントは、一連の段落に対する共通の終了点を与えます。

EXIT ステートメント - 形式

▶▶—EXIT—◀◀

EXIT ステートメントを使って、プログラム中の特定の点に名前を割り当てることができます。EXIT ステートメントは、プログラムのコンパイルおよび実行にはその他の影響を与えません。EXIT ステートメントは段落名の後に続くものでなければならず、また、このステートメント自身が 1 つの文になっていなければなりません。さらに、この文はその段落の中でただ 1 つの文でなければなりません。

EXIT ステートメントは一連の段落の終了点を文書化する場合に役に立ちます。EXIT 段落は宣言プロシージャーの最後の段落、あるいは実行される一連のプロシージャーの最後の段落として書かれた場合には、制御権が渡される点が以下のいずれかであるかを明らかにします。

- 活動状態の PERFORM または USE ステートメントによって左右されるプロシージャーの範囲の終わりにある EXIT 段落に制御が達すると、制御は該当する PERFORM または USE ステートメントの規則に従って渡されます。
- 制御が、実行中の PERFORM ステートメントまたは USE ステートメントが制御する一連のプロシージャーの終了点でない EXIT 段落に到達した場合は、EXIT ステートメントの次の段落にある最初のステートメントへ制御が移ります。

EXIT ステートメントが書かれていない場合には、ユーザーがプログラムの論理を理解していない限り、一連のステートメントの終了点を判別することは困難です。

EXIT PROGRAM ステートメント

EXIT PROGRAM ステートメントは、呼び出し先プログラムの終わりを指定して、呼び出し側プログラムに制御を戻します。また、グローバル宣言の範囲内にあるステートメントが呼び出す異なるプログラムにあるのでない限り、これをグローバル宣言の範囲内で使用してはなりません。

EXIT PROGRAM ステートメント

▶▶—EXIT PROGRAM—◀◀

(1)
AND CONTINUE RUN UNIT

注:

1 IBM 拡張

AND CONTINUE RUN UNIT

実行単位を停止することなく、呼び出し側プログラムを終了します。

あるプログラムの EXIT PROGRAM ステートメントに制御が達し、そのプログラムには呼び出し側プログラムの制御下での操作中に INITIAL 属性がない場合には、呼び出し側プログラムの CALL ステートメントに制御が戻ります。

EXIT PROGRAM ステートメント

呼び出し側プログラムのプログラム状態は、それが CALL ステートメントを実行した時に存在したプログラムと同一になります。ただし、その 2 つのプログラムで共有するデータ項目の内容とデータ・ファイルの内容は変更されている可能性があります。呼び出し先プログラムのプログラム状態は、この呼び出し先プログラムの実行するすべての PERFORM ステートメントの終了点に到達したと見なされる場合を除き、変更されません。

INITIAL 属性を持つ、呼び出し先プログラムの EXIT PROGRAM ステートメントを実行すると、参照されるプログラムの暗黙の CANCEL が実行されます。

主プログラム中で継続句なしの EXIT PROGRAM ステートメントに制御が達した場合、制御は出口点を通して、次の実行可能なステートメントに渡されます。

EXIT PROGRAM ステートメントは、ある文の一連の命令ステートメントの中で最後のステートメントとして現れなければなりません。

呼び出し先プログラム内に次の実行可能ステートメントがない場合には、暗黙の EXIT PROGRAM ステートメントが想定され、実行されます。

RETURN-CODE 特殊レジスターを使用すれば、あるプログラムからその呼び出し側プログラムに戻りコードの情報を渡すことができます。詳細は 529 ページの『RETURN-CODE 特殊レジスター』を参照してください。

AND CONTINUE RUN UNIT 句

IBM 拡張

主プログラム中で継続句ありの EXIT PROGRAM ステートメントに制御が達した場合、制御は呼び出し側プログラムの CALL ステートメントに移ります。名前付きの活動化グループにおいては、

- 活動化グループは活動状態のまま残ります。
- 主プログラムは最後に使用された状態のまま残りますが、呼び出し先プログラムによって実行されるすべての PERFORM ステートメントの範囲の終わりまで達したと考えられる場合は除きます。

ただし、*NEW 活動化グループにおいて主プログラムが呼び出し側へ制御を戻したとき、その活動化グループは終了します。その活動化グループは、活動化グループの有効範囲にあるすべてのファイルをクローズします。その活動化グループの有効範囲にあるすべての保留のコミット操作は、暗黙にコミットされます。その活動化グループに割り振られているすべてのリソースは、システムに戻されます。その活動化グループが終了した結果、活動化グループ中で活動状態にあったすべてのプログラムがそれらの初期状態に置かれます。

IBM 拡張 の 終 り

GOBACK ステートメント

IBM 拡張

GOBACK ステートメントは、COBOL 実行単位中のサブプログラムであるプログラムの一部としてコーディングされた場合は EXIT PROGRAM ステートメントと同じように働き、COBOL 実行単位中の主プログラムであるプログラム内にコーディングされた場合は STOP RUN ステートメントと同様に機能します。

GOBACK ステートメントは、呼び出し側プログラムの論理終了点を指定するものです。

GOBACK ステートメント - 形式

▶▶ GOBACK ◀◀

GOBACK ステートメントの後に続くステートメントは実行されないため、GOBACK ステートメントは文中における唯一のステートメントとして、または一連の命令ステートメントの最後のステートメントとして指定する必要があります。

CALL ステートメントが活動状態であるときに制御が GOBACK ステートメントに達すると、EXIT PROGRAM ステートメントの場合と同様、CALL ステートメントのすぐ後にある呼び出し側プログラムの地点に制御が戻ります。

RETURN-CODE 特殊レジスターを使用すれば、GOBACK ステートメントを実行する前に戻りコード情報を渡すことができます。529 ページの『RETURN-CODE 特殊レジスター』を参照してください。

COBOL 実行単位について詳しくは、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『ILE COBOL 用プログラム間の呼び出しおよびデータの共有』の章を参照してください。

IBM 拡張 の終り

GO TO ステートメント

GO TO ステートメントによって、手続き部のある点から別の点へ制御を渡すことができます。GO TO ステートメントには、次の 3 種類の形式があります。

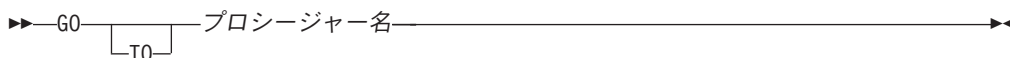
- 無条件
- 条件
- 変更

プロシージャ名またはプロシージャ名-1 が宣言プロシージャの中にある場合、他の宣言プロシージャを参照することも、非宣言プロシージャを参照することもできません。プログラムの非宣言の中では、EXCEPTION/ERROR 宣言プロシージャの中に現れるプロシージャ名に対する参照があってはなりません。

無条件 GO TO

無条件 GO TO ステートメントは ALTER ステートメントによって変更されない限り、プロシージャ名で指定された名前前の段落やセクション内の最初のステートメントへ制御を渡します。(335 ページの『ALTER ステートメント』を参照してください。)

GO TO ステートメント - 形式 1 - 無条件



プロシージャ名

GO TO ステートメントと同じ手続き部にあるセクションまたは段落でなければなりません。

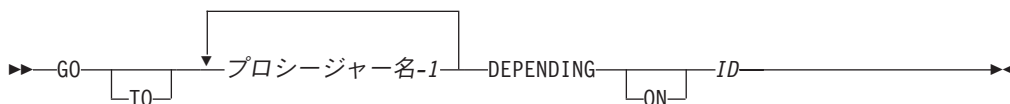
無条件 GO TO ステートメントが一連の命令ステートメントの中に現れる場合には、その一連のステートメントの最後のステートメントでなければなりません。

ある段落が ALTER ステートメントによって参照される場合には、その段落は段落名とそれに続く無条件または変更 GO TO ステートメントだけで構成しなければなりません。

条件付き GO TO

条件付き GO TO ステートメントは ID により参照されるデータ項目の値によって、連続したプロシージャの 1 つに制御を移します。

GO TO ステートメント - 形式 2 - 条件付き



プロシージャ名-1

手続き部にあるセクションまたは段落でなければなりません。

ID ID は基本データ項目の整数値でなければなりません。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目であってはなりません。

IBM 拡張 の終り

1 であれば、最初のプロシージャー名-1 で名前を設定されたプロシージャー中の先頭ステートメントへ制御が移ります。

2 の場合は、2 番目のプロシージャー名-1 で名前を指定されたプロシージャー中の先頭ステートメントへ制御が移ります。

ID の値が 1 ~ n (n はこの GO TO ステートメントで指定されたプロシージャー名の数です) の範囲内にはない場合には、制御の移動は起こりません。そのかわり、制御は正規の実行順序でステートメントへ移ります。

変更 GO TO ステートメント

変更 GO TO ステートメントは、ALTER ステートメントに指定された名前の段落の最初のステートメントに制御を渡します。

この GO TO ステートメントを含む段落を参照する ALTER ステートメントは、この GO TO ステートメントが実行される前に実行されていなければなりません。RECURSIVE 属性をもつプログラムで、変更 GO TO ステートメントを指定することはできません。

GO TO ステートメント - 形式 3 - 変更

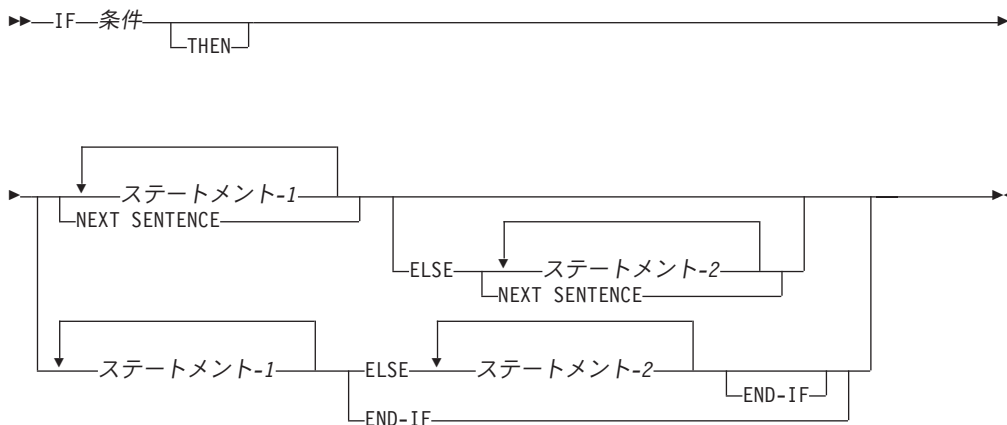
▶▶ GO TO . ◀◀

RECURSIVE 属性をもつプログラムで、変更 GO TO ステートメントを指定することはできません。

IF ステートメント

IF ステートメントにより、条件が評価され、その評価に従ってオブジェクト・プログラムの中で代替処置がとられます。

IF ステートメント — 形式



IF ステートメントの範囲は以下のいずれかによって区切ることができます。

- 同じネスト・レベルにある END-IF 句
- 分離文字ピリオド
- ネストされている場合、さらに上位のネスト・レベルにある IF ステートメントに関連した ELSE 句

条件

267 ページの『条件式』で説明されているように、単純条件または複合条件が指定されます。

ステートメント-1、ステートメント-2

ステートメント-1 またはステートメント-2 として、次のいずれかを指定できます。

- 命令ステートメント
- 条件ステートメント
- 条件ステートメントの後にある命令ステートメント

NEXT SENTENCE

END-IF 句を指定する場合には、NEXT SENTENCE 句を指定することはできません。

IBM 拡張

NEXT SENTENCE は、END-IF があっても指定できます。

IBM 拡張 の終り

ELSE NEXT SENTENCE

IF ステートメントを終了させる分離文字ピリオドの直前にある場合には、省略できます。

END-IF 句

この明示範囲終了符号は、IF ステートメントの範囲を区切る際に役立ちます。END-IF 句を使用することによって、IF 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

制御の転送

テストされた条件が真である場合には、次の処理のうちの 1 つが選択されます。

- ステートメント-1 が指定されている場合には、ステートメント-1 が実行されます。ステートメント-1 がプロシージャ分岐ステートメントを含む場合には、そのステートメントの規則に従って制御が移動します。ステートメント-1 がプロシージャ分岐ステートメントを含まない場合には、ELSE 句は指定されていても無視され、制御は対応する (暗黙または明示の) END-IF または分離文字としてのピリオドの後にある、次の実行可能なステートメントに渡されます。
- NEXT SENTENCE が指定されている場合は、これが実行されます。つまり、ELSE 句は指定されていても無視され、最も近い位置にある分離文字のピリオドの後にあるステートメントに制御が渡されます。

テストされた条件が偽である場合には、次の処理のうちの 1 つが選択されます。

- ELSE ステートメント-2 が指定されている場合には、ステートメント-2 が実行されます。ステートメント-2 にプロシージャ分岐ステートメントが含まれている場合には、そのステートメントの規則に従って制御が移動します。ステートメント-2 にプロシージャ分岐ステートメントが含まれていない場合には、制御は対応する END-IF または分離文字ピリオドの後にある次の実行可能ステートメントへ移されます。
- ELSE NEXT SENTENCE が指定されている場合には、次の文が実行され、最も近い位置にある分離文字ピリオドの後のステートメントに制御が渡されます。
- ELSE NEXT SENTENCE が省略されている場合には、最も近い位置にある END-IF または分離文字ピリオドの後のステートメントに制御が渡されます。

注: ELSE または ELSE NEXT SENTENCE が省略されている場合には、条件の後に、対応する END-IF またはその文の分離文字ピリオドより前にあるすべてのステートメントが、ステートメント-1 の一部であると見なされます。

ネストされた IF ステートメント

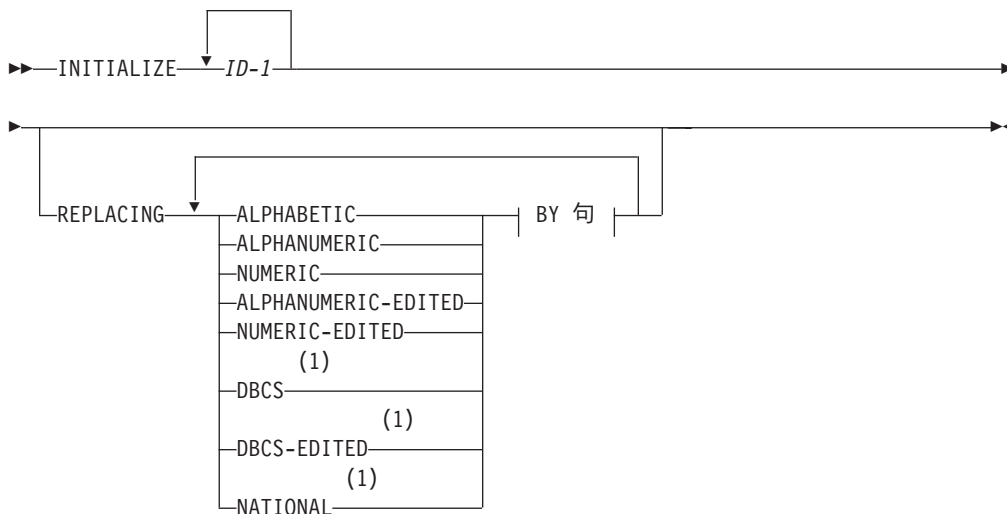
最初の IF ステートメントの中に、1 つまたは複数の IF ステートメントがあると、「ネストされた IF ステートメント」になります。ステートメントのネストは、より大きな算術式の中に従属算術式を括弧で囲んで組み込む指定をするのとよく似ています。

IF ステートメントに含まれる IF ステートメントは、左から右へと進む一対の IF、ELSE、および END-IF の組み合わせとして考えなければなりません。したがって、ELSE または END-IF が存在する場合、これと対になる IF は、直前にある IF で、対になる ELSE または END-IF がないものであると見なされます。

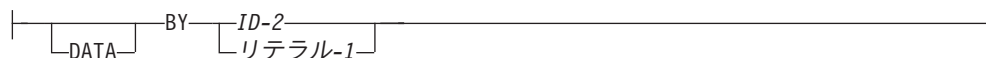
INITIALIZE ステートメント

INITIALIZE ステートメントは、選択されたデータ・フィールドのカテゴリをあらかじめ決められた値に設定します。これは、機能的には、1 つまたは複数の MOVE ステートメントと同じです。

INITIALIZE ステートメント - 形式



BY 句:



注:

1 IBM 拡張

ID-1

受け入れ区域 (複数可)

ID-2、リテラル-1

送り出し区域 (複数可)

ID-1 には添え字が付いていたり、参照が変更された項目である場合があります。完全なテーブルを初期設定できるのは、ID-1 が完全なテーブルを含むグループ項目である場合です。

ID-1 も、それに従属する項目も OCCURS 文節の DEPENDING ON 句を含みません。ID-1 のデータ記述記入項目には、RENAMES 文節を入れてはなりません。指標データ項目は、INITIALIZE のオペランドとすることはできません。

注: 同じ 01 レベル内 OCCURS 文節の DEPENDING ON 句に続く、可変位置項目またはグループを初期設定するために、INITIALIZE ステートメントを使用することはできません。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目または浮動小数点リテラルは、数字 ID または数字リテラルが指定できる場所ではどこでも使用できます。

DBCS または国別文字のデータ項目またはリテラルは、ID またはリテラルが指定されているところならば、どこでも使用できます。

IBM 拡張 の終り

REPLACING 句

REPLACING 句を使用する場合には、

- ID-2 またはリテラル-1 のカテゴリは、MOVE の規則により、対応する REPLACING 句で指示されたカテゴリとの互換性がなければなりません。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目または浮動小数点リテラルは、NUMERIC カテゴリであるかのように取り扱われます。

IBM 拡張 の終り

- REPLACING 句の中で、同じカテゴリのものを反復することはできません。
- REPLACING という語の後にあるキーワードは 146 ページの『データのクラスおよびカテゴリ』に示されるデータのカテゴリに対応しています。

REPLACING 句を使用しない場合には、

- SPACE が、英字、英数字、および英数字編集項目用の暗黙の送り出しフィールドとなります。

IBM 拡張

- SPACE が DBCS 項目および国別項目用の暗黙の送り出しフィールドとなります。

IBM 拡張 の終り

- ZERO が、数字および数字編集項目用の暗黙の送り出しフィールドとなります。

INITIALIZE ステートメントの規則

1. ID-1 が基本項目またはグループ項目のいずれかを参照しても、すべての操作は、あたかも一連の MOVE ステートメントが書かれていて、それぞれに受け入れフィールドとして基本項目が入っているかのように実行されます。

REPLACING 句が指定されている場合には、次のようになります。

- ID-1 がグループ項目を参照する場合には、ID-1 によって参照されるデータ項目内のすべての基本項目は、それが REPLACING 句に指定されたカテゴリに属している場合にだけ初期設定されます。

INITIALIZE ステートメント

- ID-1 が基本項目を参照する場合には、その項目は、それが REPLACING 句に指定されたカテゴリーに属している場合にだけ初期設定されます。

この初期設定は、ID-2 またはリテラル-1 によって参照されるデータ項目が、あたかも、識別された項目に対する暗黙の MOVE ステートメント中の送り出しオペランドとして働くかのように行われます。

このような基本的な受け入れフィールド (グループ内でのテーブル項目のすべてのオカレンスを含めて) は、次の例外を除いて、すべて影響を受けます。

- 指標、ポインター、およびプロシージャ・ポインター・データ項目
- 基本 FILLER データ項目
- ID-1 に従属していて、REDEFINES 文節が入っている項目、あるいはそのような項目に従属している項目。(ただし、ID-1 は、REDEFINES 文節が入っていてもよく、あるいは再定義項目に従属していてもかまいません。)
- BOOLEAN データ項目
- 日付、時刻、またはタイム・スタンプの FORMAT 文節で記述されるデータ項目。

2. ID-1 によって参照される区域は、ステートメント中で ID-1 が現れる順序 (左から右) で初期設定されます。受け入れフィールドのグループ内では、影響を受ける基本項目が、グループ内でそれらが定義された順序で初期設定されます。
3. ID-1 が ID-2 と同じ記憶域を使用している場合には、たとえば、これらのオペランドが同じデータ記述記入項目で定義されていても、このステートメントの実行の結果は未定義となります。
4. ID-1 がグループ項目である場合には、そのグループ項目内のすべての項目がプログラム中で参照されているものと見なされます。

INSPECT ステートメント

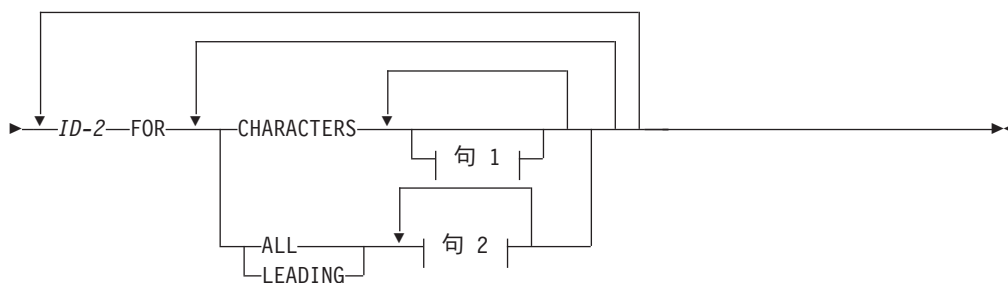
INSPECT ステートメントは、データ項目中の文字をカウントする (数える)、または置き換える (あるいはその両方) ように指定します。

- データ項目中に特定の文字 (英字、数字、または特殊文字) が現れるたびにカウントします。
- あるデータ項目の一部または全部をスペースまたはゼロで埋めます。
- 一連の文字の照合順序を別の照合順序に変換します。

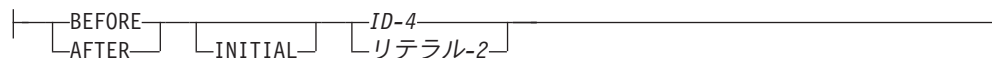
INSPECT ステートメント - 形式 1

INSPECT ステートメント - 形式 1

▶▶—INSPECT—*ID-1*—TALLYING—▶▶



句 1:



句 2:

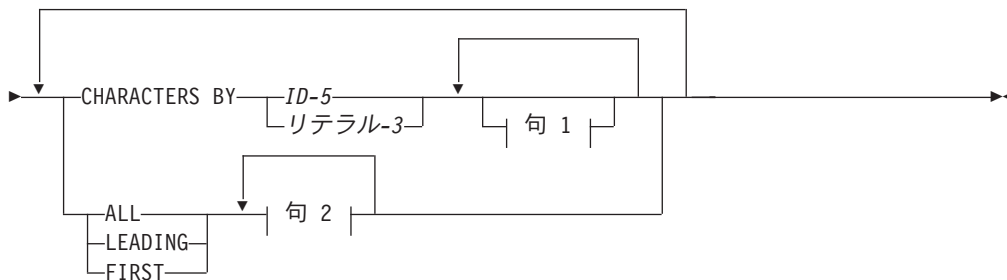


INSPECT ステートメント - 形式 2

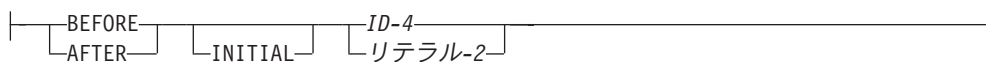
INSPECT ステートメント - 形式 2

▶▶—INSPECT—*ID-1*—REPLACING—▶▶

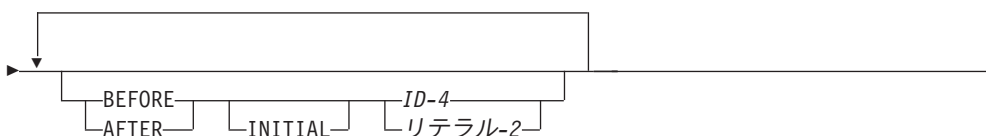
INSPECT ステートメント



句 1:

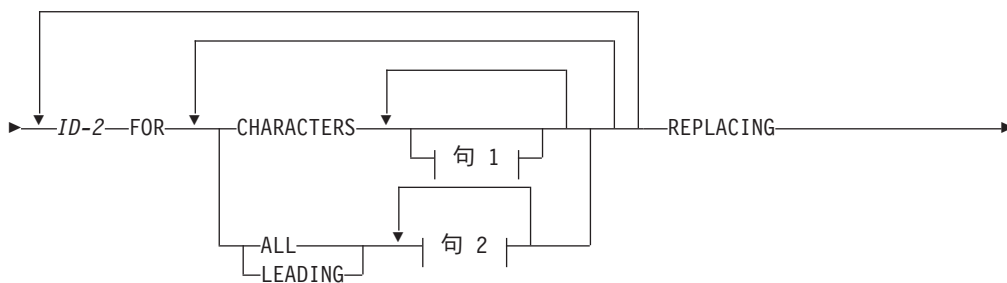


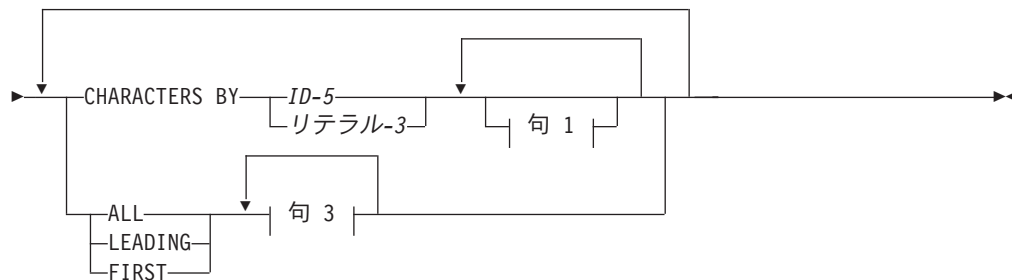
句 2:



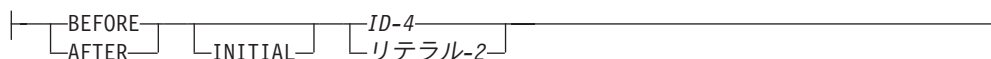
INSPECT ステートメント - 形式 3

INSPECT ステートメント - 形式 3

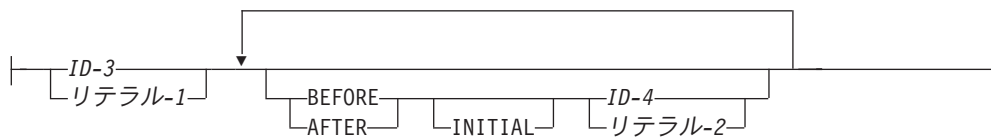




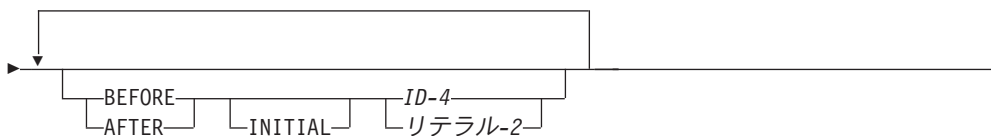
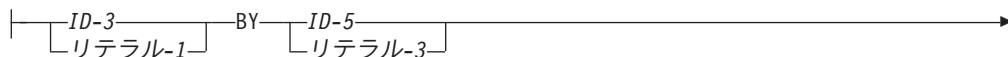
句 1:



句 2:

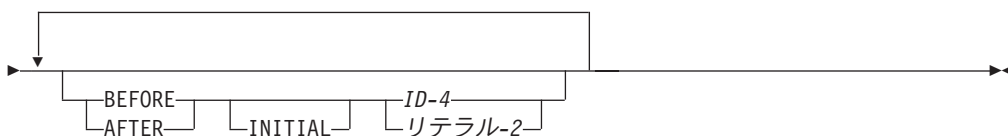
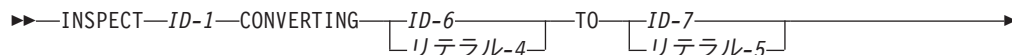


句 3:



INSPECT ステートメント - 形式 4

INSPECT ステートメント - 形式 4



INSPECT ステートメント

ID-1

検査される項目、すなわち USAGE DISPLAY が指定された基本項目またはグループ項目です。

形式 1 の場合、ID-1 は送り出し項目です。それ以外の形式の場合、これは長さを判別する目的で送り出しデータ項目として扱われます。

ID-2

基本数字データ項目でなければなりません。

ID-3 . . . ID-7

USAGE DISPLAY が指定された基本データ項目でなければなりません。

INSPECT ステートメントの中で使用する場合は、ID-2 (カウント・フィールド) 以外のすべての ID で参照される各データ項目の内容は、次のように取り扱われます。

英字項目または英数字項目

文字ストリングとして取り扱われます。

英数字編集項目、数字編集項目、または符号のない数字 (外部 10 進) 項目

英数字項目として定義されたものとして取り扱われ、INSPECT ステートメントはその英数字項目を参照します。

符号付きの (外部 10 進) 項目

長さが同じで符号のない外部 10 進項目へ転送されたものとして取り扱われ、その後で英数字項目を参照する INSPECT ステートメントを指定し、英数字項目として再定義されます。符号が分離文字の場合には、この符号を含むバイトが検査されず、したがって、置き換えられません。

リテラル-1 . . . リテラル-5

リテラルは非数字でなければならず、ALL で始まらない任意の表意定数とすることができます。リテラル-1、リテラル-2、またはリテラル-4 が表意定数の場合は、1 文字で構成される暗黙のデータ項目を参照します。

INSPECT ステートメントの考慮事項

IBM 拡張

ID-2 (カウント・フィールド) 以外の任意の ID またはリテラルが DBCS 項目である場合は、すべての ID またはリテラルを DBCS 項目にしなければなりません。

ID-2 を DBCS 項目にすることはできません。ID-2 では、データのバイト数ではなく DBCS 文字が計数されます。

ID-2 (カウント・フィールド) 以外の ID はすべて、外部浮動小数点項目であってもかまいません。外部浮動小数点項目は、英数字項目を参照する INSPECT ステートメントで英数字として再定義されたかのように取り扱われます。

IBM 拡張 の終り

BEFORE または AFTER 句が指定されている場合を除き、検査される項目 (ID-1) の左端の文字位置から検査が開始され、右端の位置に向かって文字単位に検査が続けられます。

次の句のオペランドは、INSPECT ステートメントにおいて指定された左から右の順序で比較されます。

- TALLYING (リテラル-1 または ID-3, . . .)
- REPLACING (リテラル-3 または ID-5, . . .)

ID が、添え字付き、参照変更されている、または関数 ID のいずれかである場合、添え字、参照修飾子、または関数は、INSPECT ステートメントの最初の実行時に一度だけ評価されます。

比較の規則

1. TALLYING 句および REPLACING 句の両方が指定されている場合には、INSPECT ステートメントは、INSPECT TALLYING ステートメントが指定されていて、その直後に INSPECT REPLACING ステートメントが指定されているかのように実行されます。
2. 最初の被比較項目は、検査される項目の左端から連続した文字について同じ桁数分だけ比較されます。両方の各文字が等しい場合に限り、被比較項目は検査文字と一致します。
3. 最初の項目が一致しない場合には、比較は後続の被比較数項目について次々と行われ、一致するものが見つかるか、すべての被比較数項目に対する比較が完了するまで繰り返されます。
4. 一致するものが見つかった場合には、TALLYING/REPLACING 句の記述に従ってカウントまたは置き換えが行われます。検査される項目において、右端の一致する文字の後に続く最初の文字は、左端の文字桁であるものと見なされます。その後で比較規則の 2 および 3 で説明した処理が繰り返されます。
5. 一致するものが見つからない場合には、検査される左端の文字に続く項目中の最初の文字が、ここでは左端の文字であると見なされます。その後で比較規則の 2 および 3 で説明した処理が繰り返されます。
6. CHARACTERS 句が指定されている場合には、暗黙の 1 文字の項目が規則 2 および 3 で説明した処理で使用されます。暗黙のうちに指定された文字は、検査される項目の文字と常に一致するものと見なされます。
7. 比較規則 1 ~ 6 で取られる処理 (**比較サイクル**として定義されます) は、検査される項目中の右端の文字が一致するか、または左端の文字桁と見なされるまで繰り返されます。その後で検査が終了します。

415 ページの『BEFORE および AFTER 句 (すべての形式)』で説明されているように、BEFORE 句または AFTER 句が指定されていると前述の規則は変更されます。

INSPECT ステートメントの実行結果の例を 412 ページの図 16 に示します。

INSPECT ステートメント

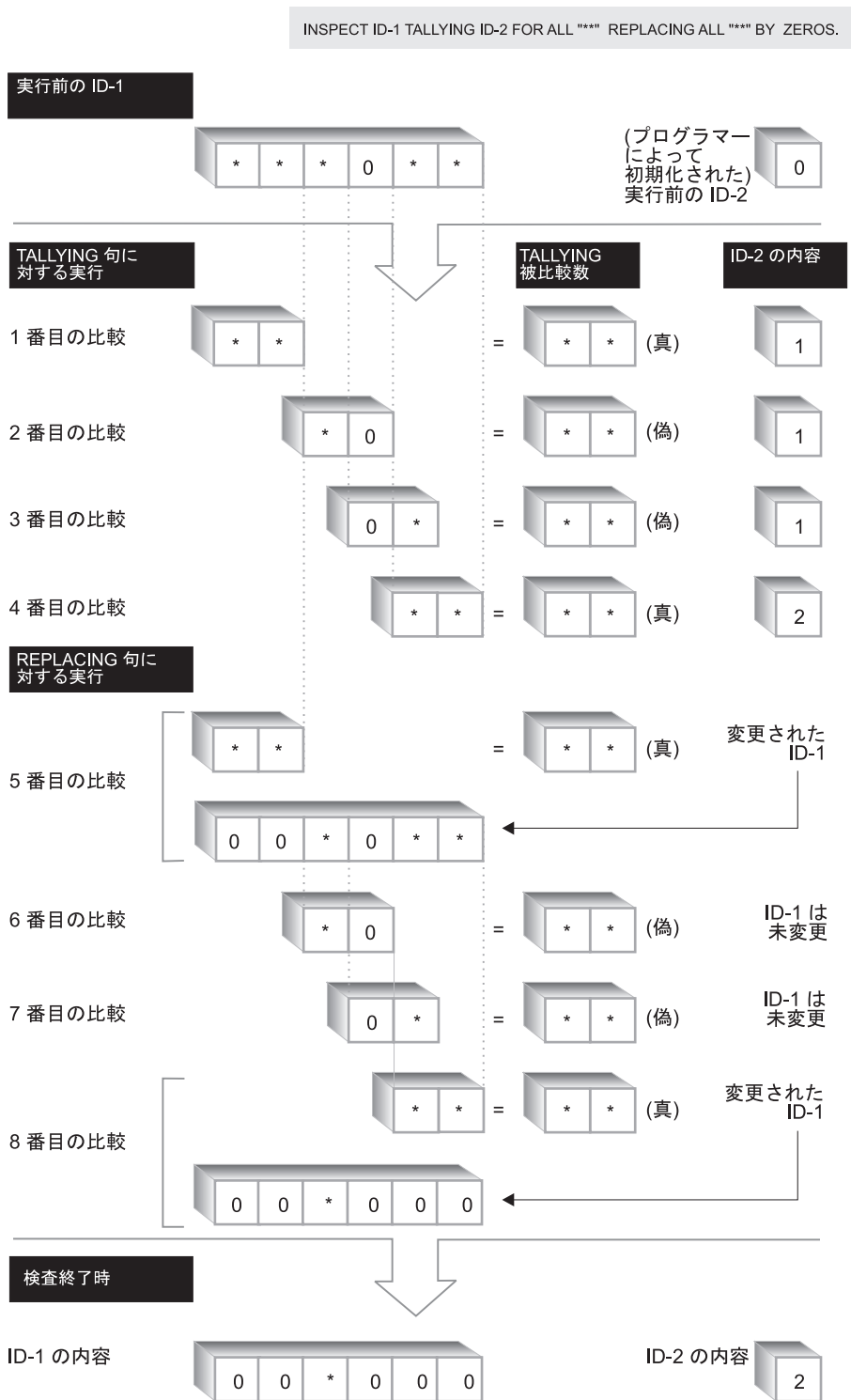


図 16. INSPECT ステートメントの実行結果例

INSPECT の例

INSPECT ステートメントの例を示します。


```

.. 1 ... .. 2 ... .. 3 ... .. 4 ... .. 5 ... .. 6 ... .. 7

DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 ID-1          PIC X(10)   VALUE "ACADEMIANS".
01 CONTR-1      PIC 99      VALUE 00.
01 CONTR-2      PIC 99      VALUE ZEROS.
PROCEDURE DIVISION.
*   THIS ILLUSTRATES AN INSPECT STATEMENT WITH 2 VARIABLES.
100-BEGIN-PROCESSING.
    DISPLAY CONTR-1 SPACE CONTR-2.
101-MAINLINE-PROCESSING.
    PERFORM COUNT-IT THRU COUNT-EXIT.
    STOP RUN.
COUNT-IT.
    INSPECT ID-1
    TALLYING CONTR-1
    FOR CHARACTERS BEFORE INITIAL "AD"
    CONTR-2
    FOR ALL "MIANS".
DISPLAY-COUNTS.
    DISPLAY "CONTR-1 = " CONTR-1.
    DISPLAY "CONTR-2 = " CONTR-2.
    DISPLAY "*****EOJ*****"
COUNT-EXIT.
EXIT.

```

出力結果

```

00 00
CONTR-1 = 02
CONTR-2 = 01
*****EOJ*****

```

TALLYING 句 (形式 1 と 3)

ID-2

カウント・フィールド。 PICTURE 文字ストリングに記号 P を指定せずに定義した数字基本項目でなければなりません。 INSPECT ステートメントの実行前に ID-2 を初期設定しなければなりません。

ID-3 またはリテラル-1

計数オペランド (オカレンスが数えられる項目)。計数オペランドが表意定数である場合、これは 1 文字の非数字リテラルと見なされます。

BEFORE 句も AFTER 句も指定されていない場合には、INSPECT TALLYING ステートメントの実行時に次の処置が取られます。

- ALL 句が指定されている場合には、左端の文字位置から右端まで続いて検査される項目中に重複しない計数オペランドが現れるたびに、カウント・フィールドに 1 が加えられます。
- LEADING 句が指定されている場合には、検査される項目中に連続する重複しない計数オペランドが現れるたびにカウント・フィールドに 1 が加えられます。ただしこれは、そのような左端のオカレンスが比較の開始点であり、該当する計数オペランドが関与できる最初の比較サイクルにこの開始点があることを前提にしています。
- CHARACTERS 句が指定されている場合には、検査される項目中の各文字 (スペース文字を含む) ごとにカウント・フィールドに 1 が加えられます。したがっ

て、INSPECT TALLYING ステートメントの実行によって、検査される項目中の文字数の値がカウント・フィールドの値に加えられます。

REPLACING 句 (形式 2 と 3)

ID-3 またはリテラル-1

サブジェクト・フィールド。

ID-5 またはリテラル-3

置き換えフィールド。

サブジェクト・フィールドおよび置き換えフィールドは、同じ長さでなければなりません。置き換えには次の規則が適用されます。

- サブジェクト・フィールドが表意定数である場合には、サブジェクト・フィールドは 1 文字の非数字リテラルと見なされます。検査される項目中の表意定数と等しい文字が、置き換えフィールドの 1 つの文字に置き換えられます。置き換えフィールドは長さが 1 文字でなければなりません。
- 置き換えフィールドが表意定数である場合には、そのフィールドはサブジェクト・フィールドと同じ長さであると見なされます。検査される項目にあるサブジェクト・フィールドの重複しない各オカレンスは、置き換えフィールドに置き換えられます。
- サブジェクト・フィールドおよび置き換えフィールドが文字ストリングである場合には、検査される項目中に重複しないサブジェクト・フィールドが現れるたびに、それが置き換えフィールドで指定された文字ストリングに置き換えられます。
- 検査される項目の所定の文字位置で置き換えが一度行われた後は、この INSPECT ステートメント実行中には、この文字位置に対する置き換えは行われません。

CHARACTERS 句を使用する場合、リテラル-3 または ID-5 の長さは 1 文字で、リテラル-2 または ID-4 の長さは 1 文字でなければなりません。

BEFORE 句も AFTER 句も指定されていない場合には、INSPECT REPLACING ステートメントの実行時に次の処置が取られます。

- CHARACTERS 句が指定されている場合、置き換えフィールドの長さは 1 文字でなければなりません。検査されるフィールドの各文字は、この置き換えフィールドによって置き換えられます。このプロセスは左端の文字から開始され、右端の文字まで続けられます。
- ALL 句が指定されている場合、検査される項目中のサブジェクト・フィールドの重複しない各オカレンスは、置き換えフィールドによって置き換えられます。これは左端の文字から開始され、右端の文字まで続けられます。
- LEADING 句が指定されている場合は、検査される項目中のサブジェクト・フィールドの重複しない一連の各オカレンスは置き換えフィールドによって置き換えられます。ただしこれは、そのような左端のオカレンスが比較の開始点であり、該当する計数オペランドが関与できる最初の比較サイクルにこの開始点があることを前提にしています。
- FIRST 句が指定されている場合には、検査される項目の中で左端にサブジェクト・フィールドの内容が現れたときに、それが置き換えフィールドによって置き換えられます。

BEFORE および AFTER 句 (すべての形式)

1 つの ALL 句、LEADING 句、CHARACTERS 句、FIRST 句、または CONVERTING 句に対して、1 つの BEFORE 句および 1 つの AFTER 句しか指定できません。これらの句が指定されている場合には、カウントおよび置き換えに関する前の規則が変更されます。

ID-4、リテラル-2

ID-4 およびリテラル-2 は、カウントまたは置き換えの対象になりません。ただし、検査される項目のカウントまたは置き換え、あるいはその両方は、ID およびリテラルによって区切られます。分離文字 (ID-4 およびリテラル-2) が表意定数である場合には、その長さは 1 文字であるものと見なされます。

BEFORE 句が指定されている場合には、検査される項目のカウントまたは置き換え、あるいはその両方が左端の文字から開始され、最初の分離文字が出てくるまで続けられます。検査される項目中に分離文字が存在しない場合には、カウントまたは置き換え、あるいはその両方は、右端の文字まで続けられます。

AFTER 句が指定されている場合は、検査される項目のカウントまたは置き換え (あるいはその両方) は、分離文字の右側にある最初の文字から開始され、検査される項目の右端の文字まで続けられます。検査される項目中に分離文字が存在しない場合には、カウントまたは置き換えは行われません。

CONVERTING 句 (形式 4)

置換値のストリングは、この句で表現できます。受け入れ側 (ID-7 またはリテラル-5) のサイズは、送り出し側 (ID-6 またはリテラル-4) のサイズと同じでなければなりません。表意定数をリテラル-5 として使用する際には、表意定数のサイズは、リテラル-4 または ID-6 のサイズと等しくなります。リテラル-4 または ID-6 のどちらの場合も、同じ文字が複数回現れてはなりません。

形式 4 の INSPECT ステートメントは、あたかも形式 2 の INSPECT ステートメントが同じ ID-1 を指定する一連の ALL 句 (リテラル-4 の各文字ごとに 1 つ) を使用して書かれているかのように解釈され、実行されます。その結果、リテラル-4 の各単一文字は、あたかもリテラル-1 として参照されているかのようになり、また、対応するリテラル-5 の各単一文字はリテラル-3 として参照されているかようになります。リテラル-4 の文字とリテラル-5 の文字との間の対応は、データ項目中の順位によります。

ID-4、ID-6、または ID-7 が、ID-1 と同じ記憶域を使用している場合には、たとえ記憶域が同じデータ記述記入項目によって定義されていても、このステートメントの実行結果は未定義となります。

INSPECT ステートメントの例

次の例は INSPECT ステートメントのいくつかの用法を示したものです。どの例の場合にも、INSPECT ステートメントの実行前にプログラマーが COUNTR フィールドをゼロに初期設定しています。

```
INSPECT ID-1
    REPLACING CHARACTERS BY ZERO.
```

INSPECT ステートメント

実行前の ID-1	実行後の COUNTR	実行後の ID-1
1234567	0	0000000
HIJKLMN	0	0000000

INSPECT ID-1
TALLYING COUNTR FOR CHARACTERS
REPLACING CHARACTERS BY SPACES.

実行前の ID-1	実行後の COUNTR	実行後の ID-1
1234567	7	
HIJKLMN	7	

INSPECT ID-1
REPLACING CHARACTERS BY ZEROS
BEFORE INITIAL QUOTE.

実行前の ID-1	実行後の COUNTR	実行後の ID-1
456"ABEL	0	000"ABEL
ANDES"12	0	00000"12
"T WAS BR	0	"T WAS BR

INSPECT ID-1
TALLYING COUNTR FOR CHARACTERS AFTER INITIAL "S"
REPLACING ALL "A" BY "0".

実行前の ID-1	実行後の COUNTR	実行後の ID-1
ANSELM	3	ONSELM
SACKET	5	SOCKET
PASSED	3	POSSED

INSPECT ID-1
TALLYING COUNTR FOR LEADING "0"
REPLACING FIRST "A" BY "2"
AFTER INITIAL "C".

実行前の ID-1	実行後の COUNTR	実行後の ID-1
00ACADEMY00	2	00AC2DEMY00
0000ALABAMA	4	0000ALABAMA
CHATAM0000	0	CH2THAM0000

INSPECT ID-1
CONVERTING "ABCD" TO "XYZX"
AFTER QUOTE
BEFORE "#".

実行前の ID-1	実行後の ID-1
AC"AEBDFBCD#AB"D	AC"XEYXFYZX#AB"D

MERGE ステートメント

MERGE ステートメントは、同じ方法で順序付けられた複数のファイル (すなわち、前もって同じ昇順 / 降順キーのセットに従ってソートされているファイル) を 1 つまたは複数のキーに基づいて結合します。レコードは、マージされた順序で、出力プロシージャまたは出力ファイルに対して使用可能になります。

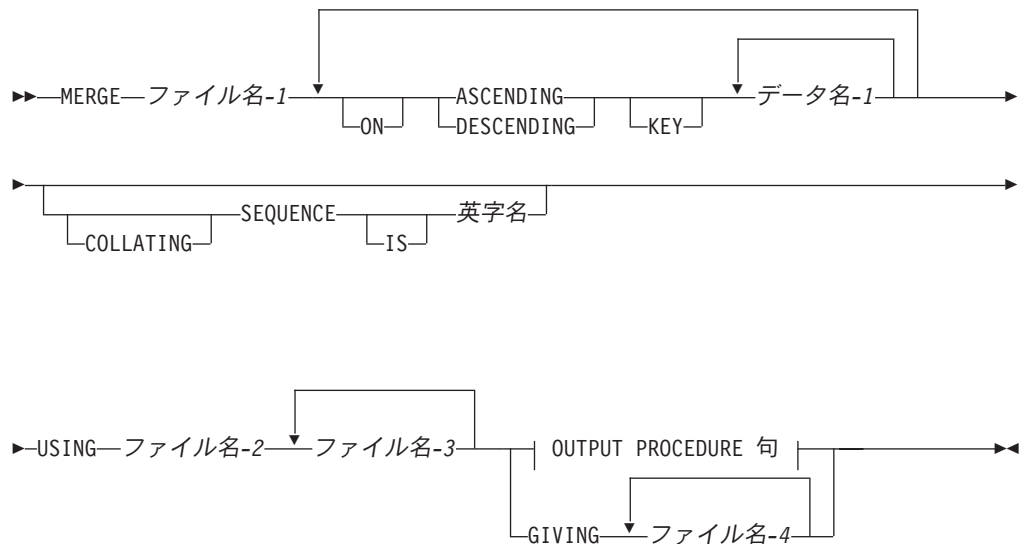
MERGE ステートメントは、宣言セクション内でなければ手続き部のどこに記入してもかまいません。USING または GIVING ファイルの最大数は 32 です。

IBM 拡張

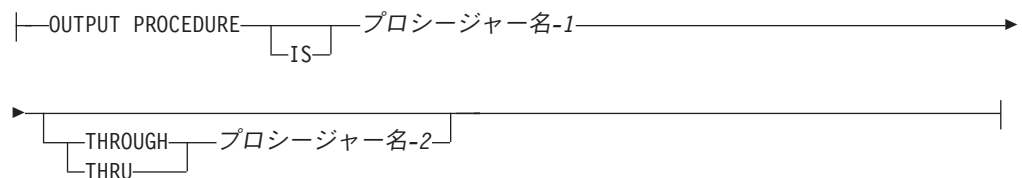
マージ操作の前に入力ファイルを順序付ける必要はありません。

IBM 拡張 の終り

MERGE ステートメント - 形式



OUTPUT PROCEDURE 句:



ファイル名-1

SD 記入項目で指定された、レコードを記述する名前。

MERGE ステートメントの中でファイル名を繰り返すことはできません。

MERGE ステートメントでは、SAME AREA、SAME SORT AREA、または SAME SORT-MERGE AREA 文節を介してすでにストレージを共用しているフ

MERGE ステートメント

ファイル名のペアを指定しないでください。ただし、MERGE ステートメントでは、SAME RECORD AREA 文節を共用しているファイルが GIVING 文節 (ファイル名-4) にも関連付けられる場合には、それらを指定できます。

MERGE ステートメントの実行時には、ファイル名-2、ファイル名-3、... に含まれているすべてのレコードがマージ・プログラムによって受け入れられ、その後、指定されているキーに従ってマージされます。

ヌル可能フィールドはサポートされますが、ヌル値は ASSIGN 文節で ALWNULL が指定された DATABASE ファイルにだけサポートされます。

ASCENDING/DESCENDING KEY 句

この句は、指定されたマージ・キーに基づいてレコードが昇順または降順 (指定された句に従います) に処理されるよう指定します。

データ名-1

キー・データ名です。レコードは、このキーに基づいて昇順または降順に処理されます。

データ名-1 は、マージの基礎となる KEY データ項目を指定します。各データ名は、ファイル名-1 に関連付けられたレコード内のデータ項目を識別します。MERGE ステートメントでは、KEY の後に続くデータ名は、それらの項目がどのように KEY 句に分割されているかにかかわらず、重要度の高いものから順に左から右に列挙されます。左端のデータ名が主要なキーであり、次のデータ名がその次に重要度の高いキーというようになります。

次の規則が適用されます。

- 特定の KEY データ項目は、各入力ファイル内で物理的に同じ位置に存在し、同じデータ・フォーマットをもっていなければなりません。ただし、同じデータ名を持つ必要はありません。
- ファイル名-1 が複数のレコード記述をもっている場合には、KEY データ項目は 1 つだけのレコード記述中で記述されている必要があります。
- ファイル名-1 に可変長レコードが含まれている場合には、すべての KEY データ項目はレコードの最初の *n* 文字の位置に入っていなければなりません。ここで *n* は、ファイル名-1 について指定された最小レコード・サイズです。
- KEY データ項目は、OCCURS 文節を含んではならず、また、OCCURS 文節を含む項目に従属してもなりません。
- KEY データ項目を修飾することはできますが、添え字付けまたは指標付けすることはできません。
- KEY データ項目の位置は可変であってはなりません。

IBM 拡張

- KEY データ項目は、浮動小数点項目または日時項目にすることができます。
- KEY データ項目を参照変更することはできますが、添え字付けまたは指標付けすることはできません。

IBM 拡張 の終り

- KEY データ項目の全長 (バイト単位) が 2 000 を超えてはなりません。
- MERGE キーの中で可変長フィールドを可変長フィールドとして使用することはできません。可変長フィールドは、ILE COBOLによってグループ項目に変換されます。可変長フィールドはグループ項目に変換されるため、MERGE キーの中で使用されると英数字項目として比較されます。

マージ操作の方向は、キーワード ASCENDING または DESCENDING の指定によって、次のように異なります。

- ASCENDING を指定すると、最下位キー値から最上位キー値への順序となります。
- DESCENDING を指定すると、最上位キー値から最下位キー値への順序となります。
- KEY データ項目が英字、英数字、英数字編集、または数字編集項目である場合には、キー値の順序は使用される照合順序によって決まります (以下の『COLLATING SEQUENCE 句』を参照してください)。KEY データ項目が DBCS または DBCS 編集である場合には、キー値の順序は DBCS 文字の 16 進数値の 2 進数照合順序に基づきます。COLLATING SEQUENCE 句は無視されます。

IBM 拡張

- KEY が外部浮動小数点項目である場合には、キーは英数字として取り扱われます。レコードがマージされる順序は、使用される照合順序によって異なります。
- KEY が内部浮動小数点項目である場合には、キー値の順序は数字の順序になります。
- KEY が日時項目である場合は、いくつかの形式だけが日付項目または時刻項目としてソートされます。ILE COBOL は、i5/OS DDS より多くの日時形式をサポートします。一般的に、i5/OS DDS 形式に一致する ILE COBOL の日時形式は、日付項目または時刻項目としてソートされます。その他のすべての形式は英数字項目として扱われ、その 16 進値に基づいてソートされます。

IBM 拡張 の終り

キーの比較は、比較条件内のオペランドの比較に関する規則に従って実行されます (271 ページの『比較条件』を参照してください)。

COLLATING SEQUENCE 句

この句は、このマージ操作において KEY データ項目の非数字比較に使用される照合順序を指定します。

英字名

SPECIAL-NAMES 段落の ALPHABET 文節の中で指定されていなければなりません。英字名、文節、句の任意の 1 つを指定することができ、結果は次のとおりになります。

- NATIVE を指定した場合には、すべての非数字比較に対して EBCDIC 照合順序が使用されます。

MERGE ステートメント

- NLSSORT を指定した場合には、照合順序は CRTCBMOD および CRTBNDCBL コマンドの LANGID および SRTSEQ パラメーターによって判別されます。
- リテラル句を指定した場合には、すべての非数字比較に対して、英字名文節中のリテラルの指定によって確立された照合順序が使用されます。
- STANDARD-1 を指定した場合には、すべての非数字比較に対して ASCII 照合順序が使用されます。
- STANDARD-2 を指定した場合には、International Standard 646, 7-bit Coded Character Set for Information Processing Interchange に定義されている ISO 7 ビット・コードの International Reference Version が使用されます。

COLLATING SEQUENCE 句を省略した場合には、OBJECT-COMPUTER 段落内の PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節 (指定されている場合) によって、使用される照合順序が決まります。

COLLATING SEQUENCE 句および PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節の両方を省略した場合には、EBCDIC 照合順序が使用されます。

USING 句

ファイル名-2、ファイル名-3、...

入力ファイルを指定します。

USING 句を指定した場合には、ファイル名-2、ファイル名-3、... (つまり、入力ファイル) のすべてのレコードが自動的にファイル名-1 に転送されます。MERGE ステートメントの実行時には、これらのファイルがオープンされてはなりません。コンパイラーによって、入力ファイルをオープン、読み取り、およびクローズするコードが自動的に生成されます。これらのファイルについて

EXCEPTION/ERROR プロシージャが指定されている場合には、COBOL コンパイラーはこれらのプロシージャに対して必要なリンケージを行います。

すべての入力ファイルは、データ部の FD 記入項目で記述されていなければなりません。さらに、それらのレコード記述は、マージ・ファイルについて記述されたレコードと同じサイズのレコードを記述するものでなければなりません。これらのレコードを構成する基本項目が同じでない場合には、入力レコードは、マージ・レコードと同じ文字桁数をもっていなければなりません。

入力ファイルは、順次、相対、または索引編成になっていなければなりません。

ファイル名-1 に可変長レコードが含まれている場合には、入力ファイル内のレコードのサイズは、ファイル名-1 について記述されている最小レコードよりも小さくはならず、最大レコードよりも大きくはなりません。ファイル名-1 に固定長レコードが含まれている場合には、入力ファイル内のレコードのサイズは、ファイル名-1 について記述されている最小レコードよりも小さくはならず、最大レコードよりも大きくはなりません。

GIVING 句

ファイル名-4、...

入力ファイルを指定します。

GIVING 句を指定した場合には、ファイル名-1 中のマージ済みの全レコードは自動的に出力ファイル (ファイル名-4) へ転送されます。MERGE ステートメントの実行開始時には、ファイル名-4 によって参照されているファイルがオープンしてはなりません。ファイル名-4 によって参照されるファイルのおのおのに対して、MERGE ステートメントの実行時に次のような処置が取られます。

1. ファイルの処理が開始されます。この開始処理は、OUTPUT 句を指定した OPEN ステートメントが実行されたかのように行われます。
2. マージ済みの論理レコードが戻され、ファイルに書き込まれます。おのおののレコードは、オプションの句を指定しない WRITE ステートメントが実行されたかのように書き込まれます。レコードは、ファイルの以前の内容 (もしあれば) を上書きします。

IBM 拡張

ファイル名-1 が論理データベース・ファイルである場合には、レコードはファイルの終わりに追加されます。

IBM 拡張 の終り

ファイル名-4 によって参照されるファイルが INDEXED ファイルである場合には、このファイルに関連するキー・データ名が、マージ・ステートメント中に ASCENDING KEY 句をもっていなければなりません。これと同じデータ名は、そのレコード内で、ファイルの基本レコード・キーに関連するデータ項目と同じ文字位置を占めていなければなりません。

相対ファイルの場合には、戻される最初のレコードについての相対キー・データ項目に値 '1' が入り、戻される 2 番目のレコードについての相対キー・データ項目に値 '2' が入り、... というようになります。MERGE ステートメントの実行後には、相対キー・データ項目の内容は、ファイルに戻された最後のレコードを示します。

3. ファイルの処理が、オプションの句を指定しない CLOSE ステートメントが実行されたかのように終了されます。

注: 索引付きファイルへの書き込み中に重複キーが見つかったら、MERGE ステートメントの実行が終了し、すべての GIVING ファイル内のマージ済みデータは未完成のままとなります。

これらの暗黙の機能は、関連する USE AFTER EXCEPTION/ERROR プロシージャが実行されるように実行されます。ただし、そのような USE プロシージャの実行により、ファイル名-4 によって参照されているファイルを操作するか、あるいはファイル名-4 に関連付けられているレコード域にアクセスするステートメントの実行が生じてはなりません。このファイルの外部定義境界を超えてデータを書き込もうとする最初の試みが行われると、このファイルについて指定されている USE AFTER STANDARD EXCEPTION/ERROR プロシージャが実行されます。この USE プロシージャから制御が返された場合、あるいはこのような USE プロシージャが指定されていない場合は、このファイルの処理が終了します。

出力ファイルは、データ部の FD 記入項目で記述されていなければなりません。さらに、そのレコード記述は、マージ・ファイルについて記述されたレコードと同じ

MERGE ステートメント

サイズのレコードを記述するものでなければなりません。これらのレコードを構成する基本項目が同じでない場合には、出力レコードは、マージ・レコードと同じ文字桁数をもっていなければなりません。

出力ファイルは、順次、相対、または索引編成でなければなりません。

出力ファイルは、キー順アクセス・パスなしで作成されたものでなければなりません。そうでなければ、MERGE ステートメントは、データ記述仕様 (DDS) で指定された照合順序を指定変更することができません。

出力ファイル (ファイル名-4) に可変長レコードが含まれている場合には、ファイル名-1 内のレコードのサイズは、出力ファイルについて記述されている最大レコードよりも小さくはなりません。出力ファイルに固定長レコードが含まれている場合には、ファイル名-1 内のレコードのサイズは、出力ファイルについて記述されている最大レコードよりも大きくはなりません。

OUTPUT PROCEDURE 句

この句は、マージ操作からの出力レコードを選択または変更するためのプロシージャの名前を指定します。

プロシージャ名-1

出力プロシージャ内の最初の (または唯一の) セクションまたは段落を指定します。

プロシージャ名-2

OUTPUT PROCEDURE の最後のセクションまたは段落を識別します。

OUTPUT PROCEDURE は、ファイル名-1 によって参照されたファイルからのマージされた順序で、RETURN ステートメントによって一度に 1 つずつ使用可能にされるレコードを選択、変更、またはコピーするのに必要な任意のプロシージャから構成できます。この中には、出力プロシージャ内の CALL、EXIT、GO TO、および PERFORM ステートメントによる制御権の移動の結果として実行されるすべてのステートメントが含まれます。また、出力プロシージャ内のステートメントの実行の結果として実行される宣言プロシージャ内のすべてのステートメントも含まれます。出力プロシージャ内では、MERGE、RELEASE、または SORT ステートメントの実行を引き起こしてはなりません。

出力プロシージャを指定すると、ファイル名-1 によって参照されたファイルが MERGE ステートメントによって順序付けられた後で、制御権がこの出力プロシージャに渡されます。

注: OUTPUT PROCEDURE 句は、基本 PERFORM ステートメントと類似しています。たとえば、OUTPUT PROCEDURE でプロシージャを指定すると、そのプロシージャは、PERFORM ステートメントで指定された場合と同じように、マージ操作時に実行されます。PERFORM ステートメントの場合と同様に、プロシージャの実行は最後のステートメントの実行が完了した後で終了されます。OUTPUT PROCEDURE の最後のステートメントは、EXIT ステートメントにすることができます (397 ページの『EXIT ステートメント』を参照してください)。

SORT-RETURN 特殊レジスター

IBM 拡張

SORT-RETURN 特殊レジスターは、2 進データ項目の名前であり、ソートとマージの両方のプログラムで使用可能です。

SORT-RETURN 特殊レジスターには、次の暗黙定義があります。

```
01    SORT-RETURN GLOBAL PICTURE S9(4) USAGE BINARY VALUE ZERO.
```

ネストされたプログラムの中で使用される際には、SORT-RETURN 特殊レジスターは、最外部の COBOL プログラム内で GLOBAL として暗黙に定義されます。SORT-RETURN 特殊レジスターには、ソート・マージ操作の完了時に 0 (成功) または 16 (失敗) の戻りコードが入ります。

エラー宣言または入出力プロシージャの中で SORT-RETURN 特殊レジスターを 16 に設定して、すべてのレコードが処理される前にソート・マージ操作を終了させることができます。操作は、レコードが RETURN または RELEASE される前に終了されます。整数の引数が認められているところではどこでも、SORT-RETURN 特殊レジスターを関数内で指定できます。

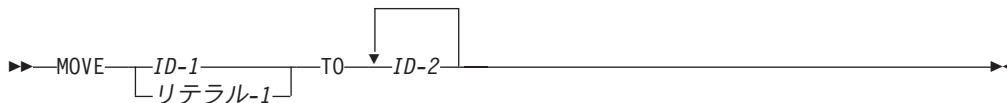
IBM 拡張 の終り

MOVE ステートメント

MOVE ステートメントは、ストレージの区域間でデータを転送します。

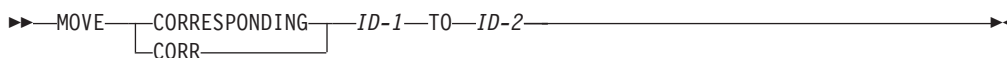
MOVE ステートメント - 形式 1

MOVE ステートメント - 形式 1



MOVE ステートメント - 形式 2

MOVE ステートメント - 形式 2



ID-1、リテラル-1

送り出し項目。

ID-2

受け入れ項目 (複数可)。

形式 1 では、すべての ID をグループまたは基本項目にすることができます。送り出し項目内のデータは、ID-2 が指定されている順序で、それぞれの ID-2 によって参照されているデータ項目に移動されます。425 ページの『基本移動』および 432 ページの『グループ移動』を参照してください。

形式 2 では、ID-1 および ID-2 はグループ項目でなければなりません。ID-1 内の選択された項目は 290 ページに説明されている CORRESPONDING 句に関連する規則に従って、ID-2 に移動されます。

MOVE ステートメントの規則

IBM 拡張

送り出し項目または受け入れ項目が DBCS データ項目の場合は、両方とも DBCS 項目でなければなりません。DBCS 送り出し項目は DBCS リテラルまたは表意定数 SPACE にすることができます。データ変換が行われない場合、データは切り捨てられるかまたは DBCS スペースで右側から埋められます。

IBM 拡張 の終り

MOVE ステートメントでは、指標データ項目を指定することはできません。

IBM 拡張

MOVE ステートメントでは、ポインター・データ項目 (USAGE POINTER) または

プロシージャ・ポインター・データ項目 (USAGE PROCEDURE-POINTER) を指定することはできません。アドレスをポインターまたはプロシージャ・ポインター・データ項目に移動するには、SET ステートメントを使用してください。

IBM 拡張 の終り

送り出し項目または受け入れ項目の長さの評価は、OCCURS 文節の DEPENDING ON 句によって影響を受けることがあります (190 ページの『OCCURS 文節』を参照してください)。

送り出し項目 (ID-1 またはリテラル-1) に関連する長さ評価、添え字付け、参照変更、または関数は、データが最初の受け入れ項目に移動される直前に一度だけ評価されます。受け入れ項目 (ID-2) に関連する長さ評価、添え字付け、または参照変更は、データが受け入れ項目に移動される直前に評価されます。

たとえば、次のステートメント

```
MOVE A(B) TO B, C(B).
```

の結果は、次のステートメントの結果と同じです。

```
MOVE A(B) TO TEMP.
MOVE TEMP TO B.
MOVE TEMP TO C(B).
```

ここで TEMP は、中間結果項目です。添え字 B は、最初の転送が行われる時点と最後の C(B) への転送が行われる時点では値が異なります。

MOVE ステートメントの実行後、送り出し項目は、実行前と同じデータを含んでいます (受け入れ項目が、ストレージで送り出し項目と重複する場合を除く。重複する場合、その内容は予測不可能です)。

基本移動

基本移動とは、受け入れ項目が基本項目であり、送り出し項目が基本項目またはリテラルである場合の移動のことです。移動時には、データの内部表現をある形式から別の形式に変換する処理が行われます (必要であれば)。また、このときに、受け入れ項目内で指定された編集、または受け入れ項目によって暗黙指定された編集解除が実行されます。

編集解除とは、すべての編集文字を数字編集データ項目から論理的に除去することです。これは、この項目の未編集数字値を決定するためです。

IBM 拡張

編集解除は、日時クラスにも起こります。このケースでは、すべての分離文字と数字でない変換指定子はすべて日時項目から取り除かれ、結果として数字になります。

IBM 拡張 の終り

各基本項目は次のカテゴリーの 1 つに属します。

- 英字 - 英字データ項目および表意定数 SPACE が含まれます。

MOVE ステートメント

- **英数字** - 英数字データ項目、非数字リテラル、および SPACE を除くすべての表意定数が含まれます。(表意定数 ZERO は、英数字項目または英数字編集項目へ移動される場合に限って、英数字として扱われます。)
- **英数字編集** - 英数字編集データ項目が含まれます。
- **数字** - 数字データ項目、数字リテラル、および表意定数 ZERO が含まれます。(表意定数 ZERO は、数字項目または数字編集項目へ移動される場合に限って、数字として扱われます。)
- **数字編集** - 数字編集データ項目が含まれます。

IBM 拡張

- **浮動小数点** - 内部浮動小数点項目 (USAGE COMP-1 または USAGE COMP-2 として定義)、外部浮動小数点項目 (USAGE DISPLAY として定義)、および浮動小数点リテラルが含まれます。
- **ブール** - ブール・データ項目およびブール・リテラルが含まれます。
- **DBCS** - DBCS データ項目および DBCS リテラルが含まれます。
- **国別** - 国別データ項目および国別 16 進リテラルが含まれます。
- **日時** - には、日時クラスの日付、時刻、およびタイム・スタンプのデータ項目が含まれます。日時データ項目は、USAGE DISPLAY または PACKED-DECIMAL として定義されます。

IBM 拡張 の終り

次の規則は、有効な基本移動を実行する場合の概略です。受け入れ項目別に示します。

英字

- 位置合わせおよび必要なスペース埋め込みが 148 ページの『位置合わせの規則』で説明したとおりに行われます。
- 送り出し項目の長さが受け入れ項目の長さより大きい場合には、右側のあふれた文字は受け入れ項目が満たされた後で切り捨てられます。

IBM 拡張

- 送り出し項目が国別データ項目である場合には、受け入れフィールドに渡される前に変換されます。変換は 429 ページの『国別』で説明したデータ変換規則に基づいて実行されます。

IBM 拡張 の終り

英数字または英数字編集

- 位置合わせおよび必要なスペース埋め込みが、148 ページの『位置合わせの規則』で説明したとおりに行われます。
- 送り出し項目の長さが受け入れ項目の長さより大きい場合には、右側のあふれた文字は受け入れ項目が満たされた後で切り捨てられます。
- 送り出し項目が演算符号をもっている場合には、絶対値が使用されます。演算符号が 1 文字を占めている場合には、その文字は転送されず、送り出し項目のサイ

ズは、実際のサイズより 1 文字小さいものと見なされます。

IBM 拡張

- 送り出し項目がブールである場合には、送り出し項目が長さ 1 の英数字項目として記述されているかのようにデータが移動されます。
- 送り出し項目が国別データ項目である場合には、受け入れフィールドに渡される前に変換されます。変換は 429 ページの『国別』で説明したデータ変換規則に基づいて実行されます。
- 送り出し項目が日時項目である場合には、日時項目は英数字項目のように扱われ、英数字から英数字への移動の規則に従って受け入れ項目へ移動されます。日時の送り出し項目が PACKED-DECIMAL の USAGE を持っている場合は、これは最初に DISPLAY の USAGE に変換されます。
- 受け入れ項目が英数字編集または数字編集であり、送り出し項目が位取りされた整数である (すなわち、PICTURE 文字ストリングの右端の文字として P を持つ) 場合、MOVE ステートメントの実行時に位取りの桁は後続ゼロとして扱われます。
- 受け入れ項目が数字であり、送り出し項目が英数字リテラルまたは ALL リテラルである場合は、リテラルのすべての文字が数字でなければなりません。

IBM 拡張 の終り

数字または数字編集

- 受け入れ項目が数字である場合は、10 進小数点による位置合わせおよび必要なゼロの埋め込みが 148 ページの『位置合わせの規則』で説明されているとおりに行われます。
- 受け入れ項目が符号付きである場合には、送り出し項目の符号は必要に応じて変換が行われて受け入れ項目の中へ入れられます。送り出し項目が符号なしである場合には、受け入れ項目に対して正の演算符号が生成されます。
- 受け入れ項目が符号なしである場合には、送り出し項目の絶対値が移動され、受け入れ項目に対して演算符号が生成されません。
- 送り出し項目が英数字である場合には、送り出し項目が符号なしの整数として記述されているかのようにデータが移動されます。

IBM 拡張

- 送り出し項目が浮動小数点である場合、データは、まず 2 進表記または内部 10 進表記のいずれかに変換されてから移動されます。

IBM 拡張 の終り

- 編集解除により、数字編集データ項目を数字または数字編集受け入れ項目に移動することが可能になります。コンパイラーはまず、数字編集項目の未編集値 (この値には符号を付けられる) を受け取り数字または数字編集データ項目に転送することによって、転送を完了します。

IBM 拡張

MOVE ステートメント

- 送り出し項目が日時項目である場合には、この項目は最初に編集解除されます。日時項目の編集されなかった値は、数字または数字編集データ受け入れ項目に移動されます。
- 受け入れ項目が数字編集の場合は、これは LOCALE 句を使用するか、あるいは使用せずに指定できます。 PICTURE 文節の LOCALE 句が、そのデータ記述記入項目で指定されなかった場合は、編集されたデータ項目に移されたデータは、必要に応じてデータ項目の受け入れ文字位置内の最初か最後かいずれかの端で、ゼロを埋めるかまたは切り捨てるかして 10 進小数点による位置合わせが行われます。ただし、編集によって先頭のゼロを置き換える必要がある場合は除きます。 LOCALE 句が指定されている場合は 202 ページの『LOCALE 句』の説明に従って位置合わせおよびゼロで埋める切り捨てが行われます。
- 受け入れ項目が英数字編集または数字編集であり、送り出し項目が位取りされた整数である (すなわち、 PICTURE 文字ストリングの右端の文字として P を持つ) 場合、 MOVE ステートメントの実行時に位取りの桁は後続ゼロとして扱われま
- 受け入れ項目が数字であり、送り出し項目が英数字リテラルまたは ALL リテラルである場合は、リテラルのすべての文字が数字でなければなりません。

IBM 拡張 の終り

浮動小数点

IBM 拡張

- 送り出し項目は、まず内部浮動小数点項目に変換されてから移動されます。
- データが、外部浮動小数点項目に、または外部浮動小数点項目から移動される場合、データは、同等の内部浮動小数点値に、または同等の内部浮動小数点値から変換されます。
- 外部浮動小数点リテラルが外部浮動小数点データ項目に移動される場合には、外部浮動小数点データ項目が不正確な値を受け取る可能性があります。これは、浮動小数点データ・タイプが近似値であるためです。外部浮動小数点リテラルが移動される場合には、これはまず真の浮動小数点値 (IEEE) に変換されますが、この変換も浮動小数点データ・タイプの正確性に影響を与える可能性があります。

たとえば、以下の MOVE を考えてみます。

```
77 external-float-1 PIC +9(3).9(13)E+9(3).  
   MOVE +123455779012.3453E+297 to external-float-1.  
   DISPLAY "EXTERNAL-FLOAT-1=" external-float-1.
```

MOVE の表示結果は次のとおりです。

```
EXTERNAL-FLOAT-1=+123.4557790123452E+306
```

IBM 拡張 の終り

日時

IBM 拡張

- 送り出し項目が日時である場合は、日時送り出し項目はまず受け入れ項目の形式に変換された後で移動されます。送り出し項目がタイム・スタンプで、受け入れ項目が日付または時刻の項目である場合は、タイム・スタンプ項目の日付または

時刻の部分だけが受け入れ項目へ移動されます。送り出し項目が日付または時刻の項目で、受け入れ項目がタイム・スタンプである場合は、タイム・スタンプの日付または時刻の部分だけが置き換えられます。

- 送り出し項目が数字の場合、各受け入れ項目の数字変換指定子は送り出し項目からの数字で置き換えられます。この置き換えは、右端の変換指定子、およびその変換指定子の右端数字で開始されます。すべての英数字変換指定子はデフォルト値をもちます。
- 送り出し項目が数字編集である場合は、数字編集項目が編集解除されます。結果の数字が日時項目へ移動されます。
- 送り出し項目が英数字または英数字編集である場合は、日時受け入れ項目は英数字項目として扱われ、英数字から英数字への移動の規則に従って移動が行われます。

IBM 拡張 の終り

ブール

IBM 拡張

- ブール受け入れ項目の場合、送り出し項目の最初のバイトだけが転送されます。
- 送り出し項目が英数字であれば、送り出し項目の先頭の文字が転送されます。文字 "0" および "1" はそれぞれ、ブール値の B"0" および B"1" に相当します。
- 送り出し項目が ZERO である場合には、ブール・リテラル B"0" として扱われます。

IBM 拡張 の終り

DBCS または DBCS 編集

IBM 拡張

- 送り出し項目が国別データ項目である場合には、受け入れフィールドに渡される前に変換されます。変換は『国別』で説明したデータ変換規則に基づいて実行されます。
- それ以外の場合、変換は行われません。
- 送り出し項目および受け入れ項目のサイズが異なる場合、データ項目は切り捨てられたり、DBCS スペースが必要に応じて (右側に) 埋められたりします。

IBM 拡張 の終り

国別

IBM 拡張

国別データ項目は、英字、英数字、DBCS、または国別データ項目から、さらに、非数値、DBCS、または国別 16 進リテラル、あるいは表意定数 SPACE/SPACES からデータを受け入れます。

このような項目に移動されたデータは、左端の文字位置に位置合わせされ、必要に応じて、右側が、切り捨てられるか、あるいは埋め込み文字コンパイル・オプション

MOVE ステートメント

ンまたは PROCESS ステートメントの NTLPADCHAR オプションに指定されている埋め込み文字によって埋められます。PROCESS ステートメントについては、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

転送中のデータが国別データでない場合には、受け入れフィールドに置かれる前に、データ変換規則に従って、送り出しフィールドの表記から変換されます。

国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された CCSID は、国別データ CCSID を定義するために使用されます。

他のデータ項目に関連する CCSID は、以下の規則によって決まります。

- 非数値リテラルは、プログラム・ソース・ファイルに指定された CCSID を使用します。
- DBCS リテラルは、プログラム・ソース・ファイルに指定された CCSID に対応する DBCS CCSID を使用します。
- 英字または英数字などの単一バイトのデータ項目は、PROCESS ステートメントの CCSID オプションの 2 番目の項目によって指定された CCSID を使用します。
- DBCS データ項目は、PROCESS ステートメントの CCSID オプションの 3 番目の項目によって指定された CCSID を使用します。

IBM 拡張 の終り

有効な基本移動

表 30 に、各カテゴリについての有効および無効な基本移動を示します。表の中では、以下のように表記します。

- 可 = 移動は有効である。
- 不可 = 移動は無効である。

表 30. 有効な基本移動

送り出し項目の カテゴリ	受け入れ項目のカテゴリ										
	英字	英数字、 英数字編集項目	数字、 数字編集	BOOLEAN (6)	DBCS (8)	外部 浮動小数点 (6)	内部 浮動小数点 (6)	日付 (6)	時刻 (6)	タイム・スタンプ (6)	国別 (6)
英字および SPACE	可	可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	可
英数字 (1)	可	可	可	可 (5)	不可	可 (9)	可 (9)	可	可	可	可
英数字編集項目	可	可	不可	不可	不可	不可	不可	可	可	可	不可
数字の整数 (2)	不可	可	可	不可	不可	可	可	可	可	可	不可
数字非整数 (3)	不可	不可	可	不可	不可	可	可	不可	不可	不可	不可

表 30. 有効な基本移動 (続き)

送り出し項目の カテゴリ	受け入れ項目のカテゴリ										
	英字	英数字、 英数字編集項目	数字、 数字編集	BOOLEAN (6)	DBCS (8)	外部 浮動小数点 (6)	内部 浮動小数点 (6)	日付 (6)	時刻 (6)	タイム・スタンプ (6)	国別 (6)
数字編集	不可	可	可	不可	不可	可	可	可	可	可	不可
LOW/HIGH-VALUE、QUOTES	不可	可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可
ZERO	不可	可	可	可	不可	可	可	不可	不可	不可	不可
ブール (4) (6)	不可	可	不可	可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可
DBCS (6) (7) (8) DBCS 編集	不可	不可	不可	不可	可	不可	不可	不可	不可	不可	可
浮動小数点 (10)	不可	不可	可	不可	不可	可	可	不可	不可	不可	不可
日付 (6)	不可	可	可	不可	不可	不可	不可	可	不可	可	不可
時刻 (6)	不可	可	可	不可	不可	不可	不可	不可	可	可	不可
タイム・スタンプ (6)	不可	可	可	不可	不可	不可	不可	可	可	可	不可
国別 (6)	可	可	不可	不可	可	不可	不可	不可	不可	不可	可

430 ページの表 30 の注

- (1) 非数字リテラルを含みます。
- (2) 整数の数字リテラルを含みます。
- (3) 非整数の数字リテラルを含みます。
- (4) ブール・リテラルを含みます。
- (5) 送り出し項目の先頭の文字は、その値に関係なく移動されます。
- (6) ブール項目、DBCS 項目、DBCS 編集項目、国別項目、内部浮動小数点項目、外部浮動小数点項目、および日時項目は、IBM 拡張です。
- (7) DBCS リテラルおよび SPACE を含みます。
- (8) DBCS データ項目を含みます。
- (9) 表意定数および非数字リテラルは、数字のみから構成されていなくてはならず、数字整数フィールドとして取り扱われます。ALL リテラルは、送り出し項目として使用することはできません。

IBM 拡張

- (10) 浮動小数点リテラル、外部浮動小数点データ項目 (USAGE DISPLAY)、および内部浮動小数点データ項目 (USAGE COMP-1 または USAGE COMP-2)

を含みます。

IBM 拡張 の終り

グループ移動

グループ移動とは、送り出し項目と受け入れ項目の片方または両方がグループ項目である場合の移動のことです。グループ移動は、データの内部表現がある形式から別の形式に変換されない点を除き、英数字基本項目の移動とまったく同じように取り扱われます。グループ移動では、送り出し項目や受け入れ項目に含まれる個々の基本項目については考慮せずに、受け入れ項目が埋め込まれます。すべてのグループ移動が有効です。

IBM 拡張

MOVE ステートメントおよびポインターに関する以下の説明では、ポインターはポインター・データ項目 (USAGE POINTER) とプロシージャ・ポインター・データ項目 (USAGE PROCEDURE-POINTER) の両方を指します。

ポインターは、MOVE ステートメント内で参照されるグループの一部にすることができます。

ポインターの移動が起こるのは、以下のすべての条件が満たされる場合です。

- MOVE ステートメントの送り出しまたは受け入れ項目にポインターが含まれている。
- 両方の項目が少なくとも 16 バイトの長さであり、正しく位置合わせされている。
- 両方が英数字またはグループ項目である。

移動される項目が 01 レベルの項目、または 01 レベル構造の一部であれば、それらの項目は 16 バイトの境界に対して同じオフセットに位置していなければなりません。作業用ストレージ内の 01 レベルの項目はすべて、16 バイトの境界で位置合わせされています。

ポインターの位置合わせの詳細は 246 ページの『ポインターの位置合わせ』を参照してください。

ポインターは、MOVE CORRESPONDING ステートメント内で参照されるグループの一部にすることはできますが、ポインターの移動は起こりません。

IBM 拡張 の終り

WHEN-COMPILED 特殊レジスター

IBM 拡張

この特殊レジスターには、コンパイルの開始日付が入ります。このレジスターは、次の暗黙定義および形式を持つ英数字データから構成されます。

01 WHEN-COMPILED GLOBAL PICTURE X(16) USAGE DISPLAY

形式

MM/DD/YYhh.mm.ss (MONTH/DAY/YEARhour.minute.second)

たとえば、コンパイルが 1994 年 12 月 15 日の午後 2 時 4 分に開始された場合には、WHEN-COMPILED に値 12/15/9414.04.00 が入ります。

ジョブ関連コマンド (CHGJOB など) の DATSEP または TIMSEP パラメーターは、WHEN-COMPILED 特殊レジスター内で使用される日付区切りまたは時刻分離文字を指定します。DATFMT パラメーターは、WHEN-COMPILED 特殊レジスター内で使用される日付形式を指定します。

これは MOVE ステートメントの送信項目についてのみ有効です。

特殊レジスターのデータは、送り出しデータ項目として使用されているときのみ参照変更できます。

ネストされたプログラムでは、この特殊レジスターは最外部のプログラム内で暗黙に定義されます。

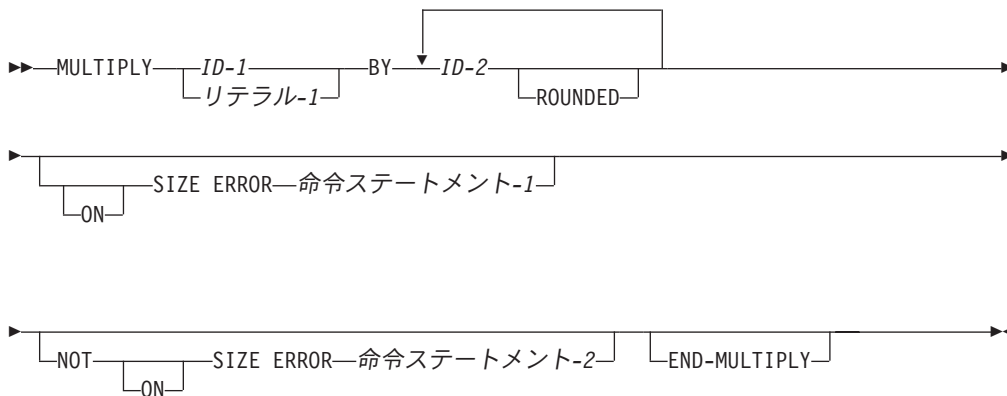
注: 日付および時刻の組み込み関数 WHEN-COMPILED を使用して、コンパイル日付および時刻をアクセスすることもできます (628 ページの『WHEN-COMPILED』を参照してください)。この関数は 4 桁の年の値をサポートし、追加情報を提供します。

IBM 拡張の終り

MULTIPLY ステートメント

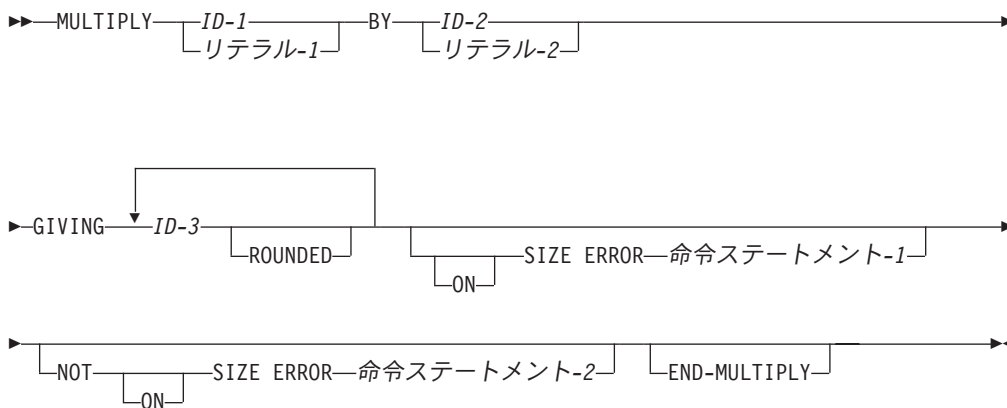
MULTIPLY ステートメントは、数字項目を乗算し、結果を保管します。

MULTIPLY ステートメント - 形式 1



形式 1 では、ID-1 またはリテラル-1 の値が保管されます。この値は、ID-2 が指定されている順序で左から右に、それぞれの ID-2 によって乗算され、保管されます。

MULTIPLY ステートメント - 形式 2 - GIVING



形式 2 では、ID-1 またはリテラル-1 の値が ID-2 またはリテラル-2 の値によって乗算されます。その後、積が、ID-3 によって参照されているそれぞれのデータ項目に保管されます。

すべての形式において、以下が適用されます。

ID-1、ID-2

基本数字項目でなければなりません。

リテラル

数字リテラルでなければなりません。

ID-3

基本数字項目または基本数字編集項目でなければなりません。

オペランドの合成は、すべての受信データ項目を重ね合わせることによって決定されます。オペランドの合成に関する詳細は 293 ページの『オペランドのサイズ』を参照してください。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目および浮動小数点リテラルは、数字データ項目または数字リテラルが指定できる場所ではどこでも使用できます。

IBM 拡張 の終り

注: MULTIPLY の実行中に生成される中間結果は、システム固有なものであり、プログラムの可搬性に影響する可能性があります。

ROUNDED 句

形式 1 および形式 2 については 291 ページの『ROUNDED 句』を参照してください。

SIZE ERROR 句

形式 1 および形式 2 については 292 ページの『SIZE ERROR 句』を参照してください。

END-MULTIPLY 句

この明示範囲終了符号は、MULTIPLY ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-MULTIPLY は、MULTIPLY 条件ステートメントを命令ステートメントに変換します。この句を使用することによって、MULTIPLY 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

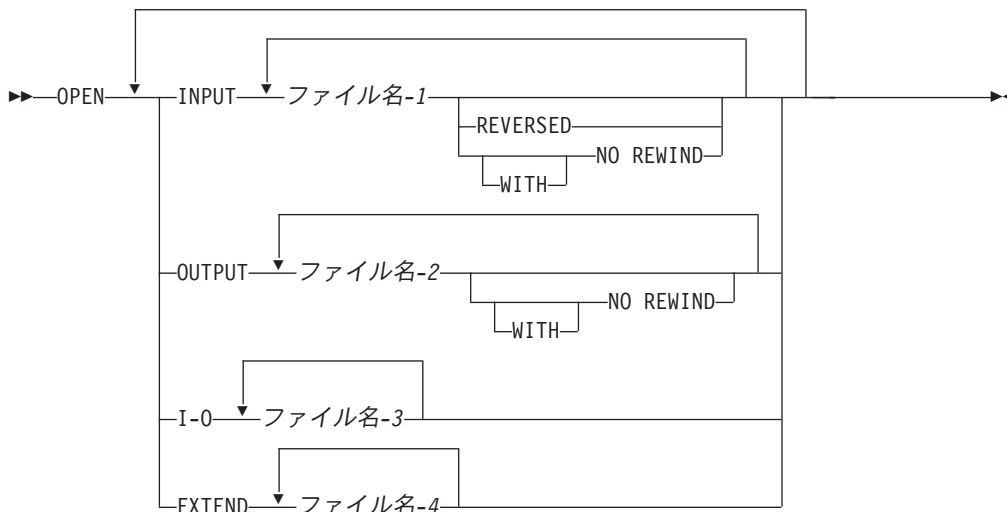
OPEN ステートメント

OPEN ステートメントは、ファイルの処理を開始し、ラベルの検査または書き込みを行います。

OPEN ステートメントの形式は、ファイルのタイプによって異なります。

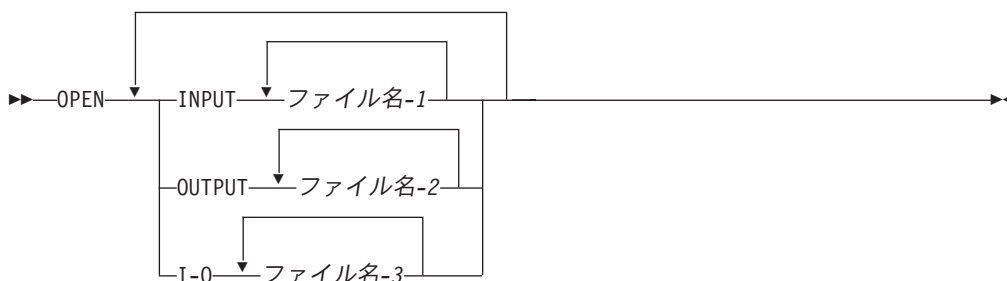
OPEN ステートメント - 形式 1 - 順次

OPEN ステートメント - 形式 1 - 順次



OPEN ステートメント - 形式 2 - 索引付きおよび相対

OPEN ステートメント - 形式 2 - 索引付きおよび相対



相対ファイルの場合だけ、次の論理ファイル・メンバーに対しては OPEN ステートメントを使用できません。

- 複数の物理ファイルに基づくもの
- 選択または省略の論理を含むもの

OPEN ステートメント - 形式 3 - TRANSACTION

IBM 拡張

OPEN ステートメント - 形式 3 - TRANSACTION



OPEN ステートメントを使用することにより、プログラム装置を TRANSACTION ファイル用に暗黙に獲得できます。プログラム装置の獲得に関する詳細は 330 ページの『ACQUIRE ステートメント』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

INPUT

ファイルを入力操作用にオープンするために使用します。

FORMATFILE またはプリンター・ファイルには使用できません。

OUTPUT

ファイルを出力操作用にオープンするために使用します。この句を使用すると、順次および相対 DISK ファイルが存在せず、CRTF オプションが指定されている場合には、それらのファイルが動的に作成されます。ファイルが OUTPUT 用にオープンされるときには、レコードを含みません。

既存のレコードは、物理ファイルの場合にだけ除去 (消去) されます。論理ファイルの場合には、EXTEND が指定されているかのようにファイルが扱われます。

I-O

ファイルを入力と出力の両方の操作用にオープンするために使用します。I-O 句は、DISK、DATABASE、およびワークステーション・ファイルなど、直接アクセス装置に割り当てられているファイルについてだけ指定できます。

EXTEND

ファイルを出力操作用にオープンするために使用します。

EXTEND 句は、複数ファイル・リールに対して指定してはなりません。

EXTEND 句は、次のものについては使用できません。

- FORMATFILE ファイル
- プリンター・ファイル
- DISKETTE ファイル

ファイル名-1、ファイル名-2、ファイル名-3、ファイル名-4

OPEN ステートメントが作用する対象のファイルを指定します。複数のファイルを指定する場合、これらのファイルの編成およびアクセスが同じである必要はありません。各ファイル名はデータ部の FD 記入項目の中で定義されていなければならない、ファイル名としてソート・ファイルまたはマージ・ファイルの名前を指定することはできません。FD 記入項目は、ファイルの定義時に指定された情報と同じでなければなりません。

OPEN ステートメント

REVERSED

順次の単一リール・テープ・ファイルについてだけ有効です。

NO REWIND

順次の単一リール・テープ・ファイルについてだけ有効です。

OPEN ステートメントに関する考慮事項

OPEN ステートメントの実行が正常に行われると、ファイルの可用性が決まり、そのファイルがオープン・モードになります。OPEN 操作が失敗すると、そのファイルは使用できなくなります。ファイルが物理的に存在していて、入出力制御システムによって認識されている場合には、そのファイルは使用可能です。445 ページの『OPEN ステートメントのプログラミング上の注意事項』に、使用可能および使用不可なファイルのオープンの結果を示します。

動的ファイル作成

OPEN ステートメントで作成されない限りは使用できないファイルが、OPEN ステートメントで作成される場合があります。この機能は、動的ファイル作成 と呼ばれます。

IBM 拡張

ILE COBOL では、動的ファイル作成は DISK に割り当てられているファイルに対してのみ、発生します。さらに、OPTION(*CRTF) が CRTCBMOD コマンドまたは CRTBNDCBL コマンドで指定されているか、あるいは CRTF オプションが PROCESS ステートメントに含まれていなくてはなりません。OPTION(*NOCRTF) または PROCESS NOCRTF が指定されているか、あるいはオプションが定義されていない場合は、プログラムで定義されているいずれのファイルも動的に作成されません。

動的ファイル作成が指定されていた場合、次のタイプのファイルが OPEN ステートメントの実行時に存在しなければ、それらが作成されます。

- OUTPUT 用にオープンされた順次ファイルおよび相対ファイル。
- I-O 用にオープンされた順次ファイルおよび相対ファイル (オプション)。
- EXTEND でオープンされた順次ファイル (オプション)。

オプション・ファイルは、SELECT OPTIONAL 文節を使用して定義されているファイルです。コンパイル時エラー・メッセージが、オプション・ファイルに対する OPEN I-O ステートメントまたは OPEN EXTEND ステートメント用に発行されますが、ただし、動的ファイル作成がそのファイルに対して有効でない場合です。

動的に作成されたファイルのデフォルトの属性は、ライブラリー QSYS 中に保留されているファイル QAXXDBF のデフォルトの属性に基づきます。CHGPF コマンドは、これらの属性を変更するために使用できます。たとえば、レコードの最大数を増やしたり、レコードの待機時間を減らしたりすることができます。

ファイル指定変更によってライブラリー名が提供されている場合、そのライブラリーにファイルが作成されます。いずれのファイル指定変更も有効でない場合は、ファイルは現行ライブラリーに作成され、また現行のライブラリーが定義されていない場合は、ライブラリー QTEMP 中に作成されます。

動的に作成できるファイルの最大レコード長は、32,766 文字です。

IBM 拡張 の終り

装置タイプ DATABASE に関する特別の考慮事項

IBM 拡張

ファイルをコミットメント制御下に置くことができます。詳しくは「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『コミットメントの制御』を参照してください。

ファイルにヌル可能フィールドが含まれ、ALWNULL がそのファイルの ASSIGN 文節上で指定されなかった場合は、ファイル状況が OP に設定され、ヌル・フィールドの入っていないレコードだけが処理されます。一方 ALWNULL がヌル可能ファイルに指定された場合は、ヌル・フィールドは処理可能で、ファイル状況は OP に設定されません。

IBM 拡張 の終り

INPUT 句 (順次ファイル)

ファイルは、入力操作用にオープンされます。ファイル位置標識は、ファイル内の最初のレコードに設定されます。ファイル内にレコードが存在しない場合、ファイル位置標識は、最初の順次 READ ステートメントの実行により AT END 条件が起こるように設定されます。

ファイル制御記入項目の中に SELECT OPTIONAL を指定しておくこと、OPEN ステートメントの処理によって、プログラムは実行時にこのファイルが存在するかどうかを検査します。ファイル位置標識が存在しない場合、ファイルに対する最初の READ ステートメントによって、AT END 条件が起こります。

OPTION(*NOBLK) オプションが指定されている場合には、コンパイラーは、以下の条件が満たされる場合に出力レコードをブロック化し、入力レコードを非ブロック化するためのコードを生成します。

- ファイル・アクセスが順次である。
- ファイルの編成が順次であり、ファイルが入力または出力専用オープンされる。
- ファイルが DISK、DATABASE、DISKETTE、または TAPEFILE に割り当てられている。

BLOCK CONTAINS 文節は、テープ・ファイル以外のファイルについてのブロック化因数を制御しません。BLOCK CONTAINS 文節は、すべてのファイルについてのブロック化因数を制御します。

装置タイプ DATABASE、TAPEFILE、および DISKETTE に関する特別の考慮事項

ファイル制御記入項目に SELECT OPTIONAL が指定されており、CRTCLMOD または CRTBNDCBL コマンドに OPTION(*CRTF) が指定されている場合には、この組み合わせは無効です。

装置タイプ DISK および DATABASE に関する特別の考慮事項

IBM 拡張

プログラムにとって最初に使用可能になるレコードは、プログラムの実行時に、OVRDBF CL コマンドで POSITION パラメーターを使用することによって指定できます。このコマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、System i5/OS Information Center の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

OUTPUT 句 (順次ファイル)

ファイルは、出力操作だけを認めるようにオープンされます。ファイルが正常にオープンされたときには、レコードは入っていません。

OPTION(*NOBLK) が指定されている場合には、コンパイラーは、以下の条件が満たされる場合に出力レコードをブロック化し、入力レコードを非ブロック化するためのコードを生成します。

- ファイル・アクセスが順次である。
- ファイルの編成が順次であり、ファイルが入力または出力専用オープンされる。
- ファイルが DISK、DATABASE、DISKETTE、または TAPEFILE に割り当てられている。

BLOCK CONTAINS 文節は、テープ・ファイル以外のファイルについてのブロック化因数を制御しません。

装置タイプ FORMATFILE および PRINTER は、出力用にだけオープンできます。

装置タイプ DISK に関する特別の考慮事項

動的ファイル作成が指定されていた場合、ファイルがすでに使用可能でなければ、OPEN ステートメントはそのファイルを作成します。

装置タイプ DISK、DATABASE、および FORMATFILE に関する特別の考慮事項

IBM 拡張

OUTPUT 用にオープンされる場合には、物理ファイルだけが消去されます。ファイルが正常にオープンされたときには、レコードは入っていません。論理ファイルを OUTPUT 用にオープンしようとする、ファイルはオープンされますが、レコード

は削除されません。ファイルは、EXTEND 句が指定された場合と同じ扱いになります。論理ファイルを消去するには、論理ファイルの基礎となっているすべてのメンバーを消去しなければなりません。

IBM 拡張 の終り

I-O 句 (順次ファイル)

装置タイプ DISK および DATABASE だけが、入出力用にオープンできます。

ファイルは、入力と出力の両方の操作用にオープンされます。ファイル位置標識は、ファイル内の最初のレコードに設定されます。ファイル内にレコードが存在しない場合、ファイル位置標識は、最初の順次 READ ステートメントの実行により AT END 条件が起こるように設定されます。

IBM 拡張

プログラムにとって最初に使用可能になるレコードは、プログラムの実行時に、OVRDBF CL コマンドで POSITION パラメーターを使用することによって指定できます。このコマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

装置タイプ DISK に関する特別の考慮事項

動的ファイル作成が指定され、そのファイルがオプション・ファイル (ファイル制御記入項目中で SELECT OPTIONAL) である場合、ファイルがすでに使用可能でなければ、OPEN ステートメントはそのファイルを作成します。

NO REWIND 句 (順次ファイル)

この句は装置タイプ TAPEFILE にのみ適用されます。

OPEN ステートメントは、ファイルの位置変更を行いません。テープは、OPEN ステートメントの処理前に、所要ファイルの先頭に位置決めされなければなりません。

リールという概念がストレージ・メディアにとって意味をもたない場合 (たとえば、直接アクセス装置の場合) は、REVERSED 句および NO REWIND 句が適用されません。この状況でこれらの句が使用されると、ファイル状況が 07 に設定されます。

IBM 拡張

システムは、テープ上の現在位置を記録し、自動的にテープを適切な場所に位置決めします。マルチファイル・テープ・ボリュームを処理する際には、すべての CLOSE ステートメントで NO REWIND 句を指定しなければなりません。そのテープ・ボリューム上で次のファイルがオープンされるときに、システムは、どの方向

にテープを移動すれば最も効率的に所要ファイルに到達するかを判別します。

IBM 拡張 の終り

REVERSED 句 (順次ファイル)

この句は装置タイプ TAPEFILE にのみ適用されます。

OPEN ステートメントの処理によって、ファイルがその末尾に位置決めされます。後続の READ ステートメントでは、データ・レコードが、最後のレコードから始まる逆順で使用可能になります。REVERSED は、入力ファイルに対してのみ指定できます。

リールという概念がストレージ・メディアにとって意味をもたない場合 (たとえば、直接アクセス装置の場合) は、REVERSED 句および NO REWIND 句が適用されません。この状況でこれらの句が使用されると、ファイル状況が 07 に設定されます。

EXTEND 句 (順次ファイル)

装置タイプ TAPEFILE、DISK、および DATABASE は、EXTEND としてオープンすることができます。

EXTEND 句は、ファイルを出力の操作用にオープンするために使用します。OPEN EXTEND ステートメントの処理により、ファイルがレコードの追加に向けて準備されます。追加レコードは、ファイル内の最後のレコードのすぐ後に続きます。後続の WRITE ステートメントでは、ファイルが OUTPUT 用にオープンされた場合と同様にレコードが追加されます。EXTEND 句は、ファイルの作成中に指定できます。

装置タイプ DISK に関する特別の考慮事項

動的ファイル作成が指定され、そのファイルがオプション・ファイル (ファイル制御記入項目中で SELECT OPTIONAL) である場合、ファイルがすでに使用可能でなければ、OPEN ステートメントはそのファイルを作成します。

INPUT 句 (索引付きおよび相対ファイル)

ファイルは、入力操作用にオープンされます。ファイル位置標識は、ファイル内の最初のレコードに設定されます。ファイル内にレコードが存在しない場合、ファイル位置標識は、最初の順次 READ ステートメントの実行により AT END 条件が起るよう設定されます。

順次アクセス・モードに関する特別の考慮事項

IBM 拡張

プログラムにとって最初に使用可能になるレコードは、プログラムの実行時に、OVRDBF CL コマンドで POSITION パラメーターを使用することによって指定できます。このコマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、System i5/OS Information Center の「プログラミング」カテゴリ

リーの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

OPTION(*NOBLK) が指定されている場合には、コンパイラーは、以下の条件が満たされる場合に出力レコードをブロック化し、入力レコードを非ブロック化するためのコードを生成します。

- ファイル・アクセスが順次である。
- ファイルの編成が索引付きであり、ファイルが入力または出力専用オープンされるか、ファイルの編成が相対であり、ファイルが入力専用オープンされる。
- ファイルが DISK または DATABASE に割り当てられている。
- ファイルについて START ステートメントが指定されていない。

BLOCK CONTAINS 文節は、ブロック化因数を制御しません。

START ステートメントは、OPTION(*BLK) と BLOCK CONTAINS 文節の両方を指定する場合に使用できます。BLOCK CONTAINS 文節は、すべてのファイルについてのブロック化因数を制御します。

動的アクセス・モードに関する特別の考慮事項

IBM 拡張

プログラムにとって最初に使用可能になるレコードは、プログラムの実行時に、OVRDBF CL コマンドで POSITION パラメーターを使用することによって指定できます。このコマンドの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

また、OPTION(*BLK) が指定されており、BLOCK CONTAINS 文節が指定されていると、コンパイラーは、以下の条件が満たされる場合に出力レコードをブロック化し、入力レコードを非ブロック化するためのコードを生成します。

- ファイル・アクセスが動的である。
- ファイルの編成が索引付きであり、ファイルが入力または出力専用オープンされるか、ファイルの編成が相対であり、ファイルが入力専用オープンされる。
- ファイルが DISK または DATABASE に割り当てられている。

BLOCK CONTAINS 文節でゼロのレコード・サイズを指定すると、システムのデフォルトのブロック化因数が適用されます。

OUTPUT 句 (索引付きおよび相対ファイル)

IBM 拡張

OUTPUT 用にオープンされる場合には、物理ファイルだけが消去されます。ファイルが正常にオープンされたときには、レコードは入っていません。論理ファイルを OUTPUT 用にオープンしようとする、ファイルはオープンされますが、レコード

は削除されません。論理ファイルを消去するには、論理ファイルの基礎となっているすべてのメンバーを消去しなければなりません。

IBM 拡張 の終り

相対ファイルに関する特別の考慮事項 - 装置タイプ DISK

動的ファイル作成が指定されていた場合、ファイルがすでに使用可能でなければ、OPEN ステートメントはそのファイルを作成します。

索引付きファイルに関する特別の考慮事項 - 順次アクセス

OPTION(*NOBLK) が指定されている場合には、コンパイラーは、以下の条件が満たされる場合に出力レコードをブロック化し、入力レコードを非ブロック化するためのコードを生成します。

- ファイル・アクセスが順次である。
- ファイルの編成が索引付きであり、ファイルが入力または出力専用オープンされる。
- ファイルが DISK または DATABASE に割り当てられている。
- ファイルについて START ステートメントが指定されていない。

BLOCK CONTAINS 文節は、ブロック化因数を制御しません。

OPTION(*BLK) と BLOCK CONTAINS 文節の両方を指定すると、ブロック化因数が適用されます。

索引付きファイルに関する特別の考慮事項 - 動的アクセス

OPTION(*BLK) が指定されており、BLOCK CONTAINS 文節が指定されていると、コンパイラーは、以下の条件が満たされる場合に出力レコードをブロック化し、入力レコードを非ブロック化するためのコードを生成します。

- ファイル・アクセスが動的である。
- ファイルの編成が索引付きであり、ファイルが入力または出力専用オープンされる。
- ファイルが DISK または DATABASE に割り当てられている。

BLOCK CONTAINS 文節でゼロのレコード・サイズを指定すると、システムのデフォルトのブロック化因数が適用されます。

I-O 句 (索引付きおよび相対ファイル)

ファイルは、入力と出力の両方の操作用にオープンされます。ファイル位置標識は、ファイル内の最初のレコードに設定されます。ファイル内にレコードが存在しない場合、ファイル位置標識は、最初の順次 READ ステートメントの実行により AT END 条件が起こるように設定されます。

相対ファイルに関する特別の考慮事項 - 装置タイプ DISK

動的ファイル作成が指定され、そのファイルがオプション・ファイル (ファイル制御記入項目中で SELECT OPTIONAL) である場合、ファイルがすでに使用可能でなければ、OPEN ステートメントはそのファイルを作成します。

順次または動的アクセス・モードに関する特別の考慮事項

IBM 拡張

プログラムにとって最初に使用可能になるレコードは、プログラムの実行時に、OVRDBF CL コマンドで POSITION パラメーターを使用することによって指定できます。このコマンドの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

OPEN ステートメントのプログラミング上の注意事項

OPEN ステートメントの実行が正常に行われると、ファイルの使用可能性が決まり、そのファイルがオープン・モードになります。表 31 に、ファイルが使用可能な場合と使用不可の場合のオープンの結果を要約しています。

表 31. ファイルの使用可能性

	ファイルが使用可能である場合	ファイルが使用不可である場合
INPUT	正常なオープン	オープンが失敗する
INPUT (オプション ル・ファイル)	正常なオープン	正常なオープン。最初の読み取りによって AT END 条件が発生する。
I-O	正常なオープン	オープンが失敗する
I-O (オプション・フ ァイル)	正常なオープン	オープンによってファイルが作成される (1)
OUTPUT	正常なオープン。ファイルには レコードが入っていない	オープンによってファイルが作成される (1)
EXTEND	正常なオープン	オープンが失敗する
EXTEND (オプション ル・ファイル)	正常なオープン	オープンによってファイルが作成される (1)

注: (1) 動的ファイル作成が指定され、ファイルが適切に編成されている場合、そのファイルが作成されます。 438 ページの『動的ファイル作成』を参照してください。

1. OPEN ステートメントの正常な実行により、関連するレコード域がプログラムで使用可能になります。最初のデータ・レコードは取得または解放されません。
2. OPEN ステートメントは、実行可能なあらゆる入出力ステートメント (USING または GIVING 句を指定した SORT または MERGE ステートメントを除く) の実行に先立って、正常に実行されなければなりません。
3. READ ステートメントは、INPUT または I-O 用にオープンされているファイルに対して実行されます。
4. WRITE ステートメントは、OUTPUT または EXTEND 用にオープンされているファイル (順次ファイルだけ) に対して実行されます。WRITE ステートメントは、I-O 用にオープンされているランダムまたは動的アクセス・モードの索引付きまたは相対ファイル、および I-O 用にオープンされている TRANSACTION ファイルに対しても実行されます。
5. REWRITE ステートメントは、I-O 用にオープンされているファイルに対して実行されます。

OPEN ステートメント

6. START ステートメントは、INPUT または I-O 用にオープンされている索引付きまたは相対ファイルに対して実行されます。
7. DELETE ステートメントは、I-O 用にオープンされている索引付きまたは相対ファイルに対して実行されます。
8. 1 つのファイルを同じプログラムの中で INPUT、OUTPUT、I-O、または EXTEND (順次ファイルだけ) 用にオープンすることができます。あるファイルについて OPEN ステートメントを最初に実行した後では、後続のそれぞれの OPEN ステートメントを実行する前に、REEL または UNIT 句 (順次ファイルの場合だけ) または LOCK 句を指定しない CLOSE ファイル・ステートメントが正常に実行されなければなりません。
9. FILE-CONTROL 記入項目に FILE STATUS 文節が指定されている場合は、OPEN ステートメントの実行時に関連する状況キーが更新されます。状況キーの詳細は、296 ページの『共通の処理機能』を参照してください。
10. すでにオープン状況にあるファイルに対して OPEN ステートメントが出されると、このファイルに対する EXCEPTION/ERROR プロシージャ (指定されている場合) が実行され、ファイル状況 41 が戻されます。

PERFORM ステートメント

命令ステートメント

行内 PERFORM について実行されるステートメント。

END-PERFORM

行内 PERFORM ステートメントの有効範囲を区切ります。行内 PERFORM の実行は、それに含まれている最後のステートメントが実行された後に完了します。

行内 PERFORM ステートメント

行内 PERFORM ステートメントは、プロシージャ名-1 (さらに、指定されている場合はプロシージャ名-2) の範囲内に含まれているステートメントの代わりに行内 PERFORM に含まれているステートメントが実行される点を除き、行外 PERFORM ステートメントと同じ一般規則に従って機能します。特に行内または行外という語によって限定されていない限り、行外 PERFORM ステートメントに適用される規則は、すべて行内 PERFORM にも適用されます。

行外 PERFORM ステートメント

行外 PERFORM ステートメントが実行されるたびに、プロシージャ名-1 に指定されたプロシージャの最初のステートメントに制御が転送されます。制御は、PERFORM ステートメントに続くステートメントに必ず戻されます。この制御がどの点から戻されるかは、次のように判別されます。

- プロシージャ名-1 が段落名であり、プロシージャ名-2 が指定されていない場合には、プロシージャ名-1 段落の最後のステートメントの実行後に制御が戻されます。
- プロシージャ名-1 がセクション名であり、プロシージャ名-2 が指定されていない場合には、プロシージャ名-1 セクション内の最後の段落の最後のステートメントの実行後に制御が戻されます。
- プロシージャ名-2 が指定されていて、それが段落名である場合には、プロシージャ名-2 段落の最後のステートメントの実行後に制御が戻されます。
- プロシージャ名-2 が指定されていて、それがセクション名である場合には、プロシージャ名-2 セクション内の最後の段落の最後のステートメントの実行後に制御が戻されます。

プロシージャ名-1 とプロシージャ名-2 の間に必要なのは、連続した一連の操作が、プロシージャ名-1 に指定されたプロシージャから開始され、プロシージャ名-2 に指定されたプロシージャで終了されるという関係だけです。

ネストされた PERFORM ステートメント

PERFORM ステートメントを、実行されるプロシージャ内に指定できます。戻り点への論理パスが複数ある場合には、プロシージャ名-2 に EXIT ステートメントだけで構成される段落を指定できます。そのようにする場合には、戻り点へのすべてのパスをこの段落に導かなくてはなりません。

プロシージャ名-1 とプロシージャ名-2 の両方を指定する場合には、GO TO および PERFORM ステートメントをこれらの段落またはセクションに含まれる一連のステートメント内に指定できます。GO TO ステートメントでは、プロシージャ名-1 とプロシージャ名-2 の範囲外のプロシージャ名を参照してはなりません。それを行うと、結果は予測できないものとなり、診断もできなくなります。

PERFORM ステートメント

PERFORM ステートメントの開始後には、ID-1 の値を変更しても、プログラムの実行回数を変える上での効果はありません。

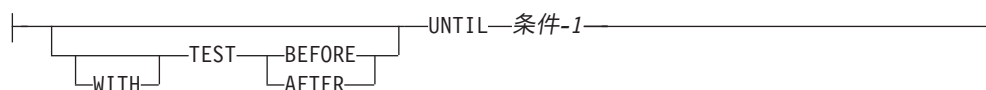
UNTIL 句を指定する PERFORM

UNTIL 句を指定する形式では、参照されるプロシージャは、UNTIL 句で指定された条件が真になるまで実行されます。その後、制御は、PERFORM ステートメントに続く次の実行可能ステートメントに渡されます。

PERFORM ステートメント - 形式 3



句 2:



条件-1

267 ページの『条件式』で記述されている条件を指定できます。PERFORM ステートメントの開始時に条件が真である場合には、指定されたプロシージャは実行されません。

条件-1 に指定されたオペランドに関連する、添え字付け、参照修飾子、または関数は、その条件がテストされるたびに評価されます。

TEST BEFORE 句が指定または想定されると、ステートメントが実行される前に条件がテストされます (DO WHILE 句に相当します)。

TEST AFTER 句を指定した場合には、実行すべきステートメントは、条件がテストされる前に少なくとも 1 回実行されます (DO UNTIL 句に相当します)。

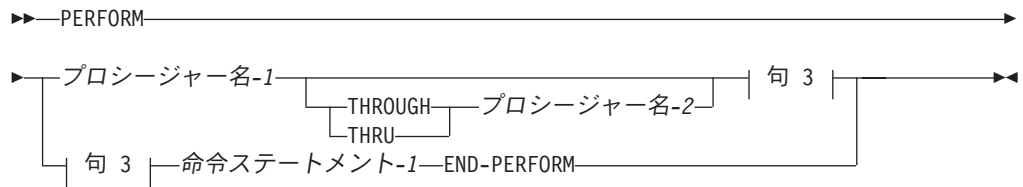
どちらの場合でも、条件が真の場合には、PERFORM ステートメントの終わりに続く次の実行可能ステートメントに制御権が移動されます。TEST BEFORE 句も TEST AFTER 句も指定しない場合には、TEST BEFORE 句が想定されます。

VARYING 句を指定する PERFORM

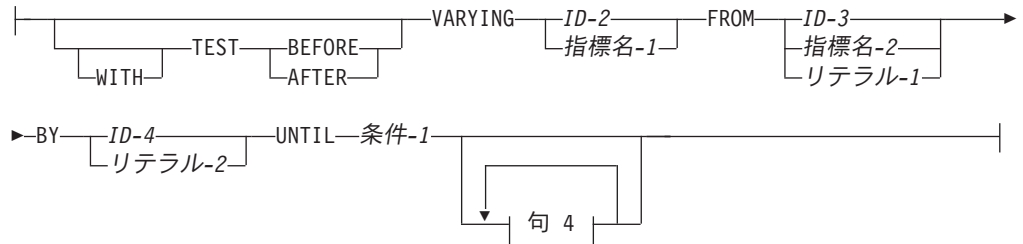
VARYING 句は、1 つまたは複数の ID または指標名の値を所定の規則に従って増大または減少させます。(459 ページの『VARYING 句の規則』を参照してください。)

VARYING 句を指定した PERFORM ステートメント (形式 4) では、7 次元テーブル全体を逐次検索できます。

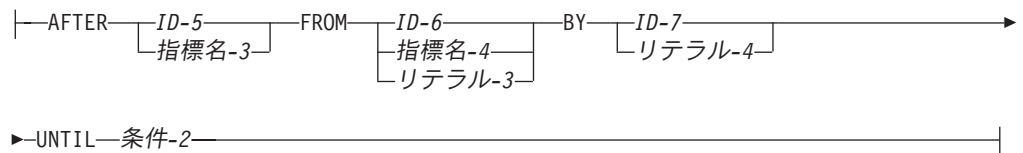
PERFORM ステートメント - 形式 4



句 3:



句 4:



条件-1、条件-2

267 ページの『条件式』で記述されている条件を指定できます。PERFORM ステートメントの開始時に条件が真である場合には、指定されたプロシージャは実行されません。

UNTIL 句内に指定された条件が満たされると、PERFORM ステートメントに続く次の実行可能ステートメントに制御権が渡されます。

条件-1 または条件-2 に指定されている任意のオペランドが、添え字付きであるか、参照変更されているか、または関数 ID である場合、その添え字、参照修飾子、または関数は、条件がテストされるたびに評価されます。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目および浮動小数点リテラルは、数字データ項目または数字リテラルが指定できるところではどこでも使用できます。

IBM 拡張 の終り

TEST BEFORE が指定されると、指定されたすべての条件が最初の実行前にテストされます。実行すべきステートメントは、指定されたすべてのテストが失敗した場合にだけ実行されます。TEST AFTER が指定されると、実行すべきステートメントは、条件がテストされる前に少なくとも 1 回実行されます。条件-1 に指定されたオペランドに関連する添え字付けは、条件がテストされるたびに評価されます。

PERFORM ステートメント

TEST BEFORE 句も TEST AFTER 句も指定しない場合には、TEST BEFORE 句が想定されます。

ID の変更

オペランドを増大または減少させる方法は、指定される変数の数によって異なります。以下の説明では、ID-n という表現を使用する場合、指標名-n にも等しく当てはまります (ただし、ID-n が BY 句の対象である場合を除きます)。

ID-2 あるいは ID-5 が添え字付けされている場合、添え字は、ID によって参照されるデータ項目の内容が設定または増補されるたびに評価されます。

ID-3、ID-4、ID-6、または ID-7 が添え字付けされている場合、添え字は、ID によって参照されるデータ項目の内容が設定または増補操作に使用されるたびに評価されます。

1 つの ID の変更

このセクションでは、PERFORM ステートメントを使用して 1 つの ID を変更する方法を記述する例を示します。

例:

```
PERFORM procedure-name-1 THROUGH procedure-name-2  
      VARYING identifier-2 FROM identifier-3  
      BY identifier-4 UNTIL condition-1
```

1. **ID-2** が、その開始値である ID-3 (またはリテラル-1) と等しく設定されます。
2. **条件-1** が次のように評価されます。
 - a. 条件-1 が偽である場合には、ステップ 3 ~ 5 が実行されます。
 - b. 条件-1 が真である場合には、制御権が PERFORM ステートメントに続くステートメントに直接渡されます。
3. **プロシージャ名-1** から**プロシージャ名-2** (指定されている場合) までのすべてが 1 回実行されます。
4. **ID-2** が ID-4 (またはリテラル-2) だけ増やされ、条件-1 が再び評価されます。
5. 条件-1 が真になるまで、ステップ 2 からステップ 4 が繰り返されます。

PERFORM ステートメントの実行終了時には、ID-2 は、最後に使用された設定値を増加 / 減少値分超える値をもちます (ただし、PERFORM ステートメントの実行開始時に条件-1 が真であった場合には、ID-2 に ID-3 の現行値が入ります)。

453 ページの図 17 は、TEST BEFORE 句を使用して ID を変更する場合の PERFORM ステートメントの論理を示したものです。453 ページの図 18 は、TEST AFTER 句を使用して ID を変更する場合の PERFORM ステートメントの論理を示したものです。

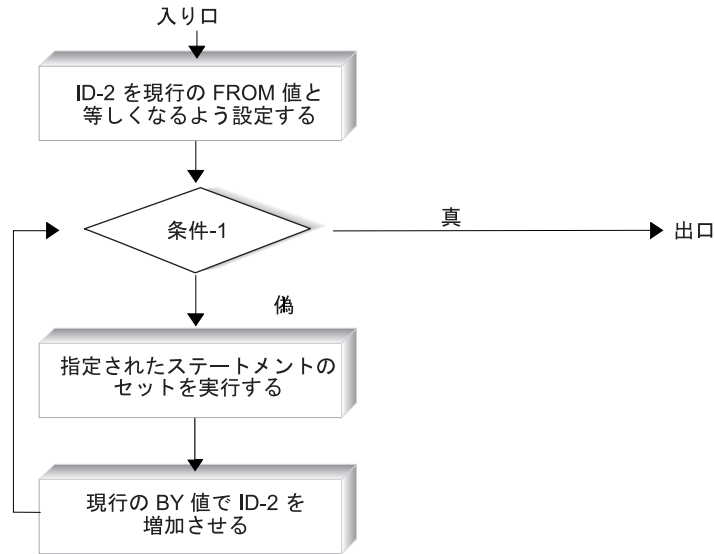


図 17. TEST BEFORE を使用して 1 つの ID を変更する場合

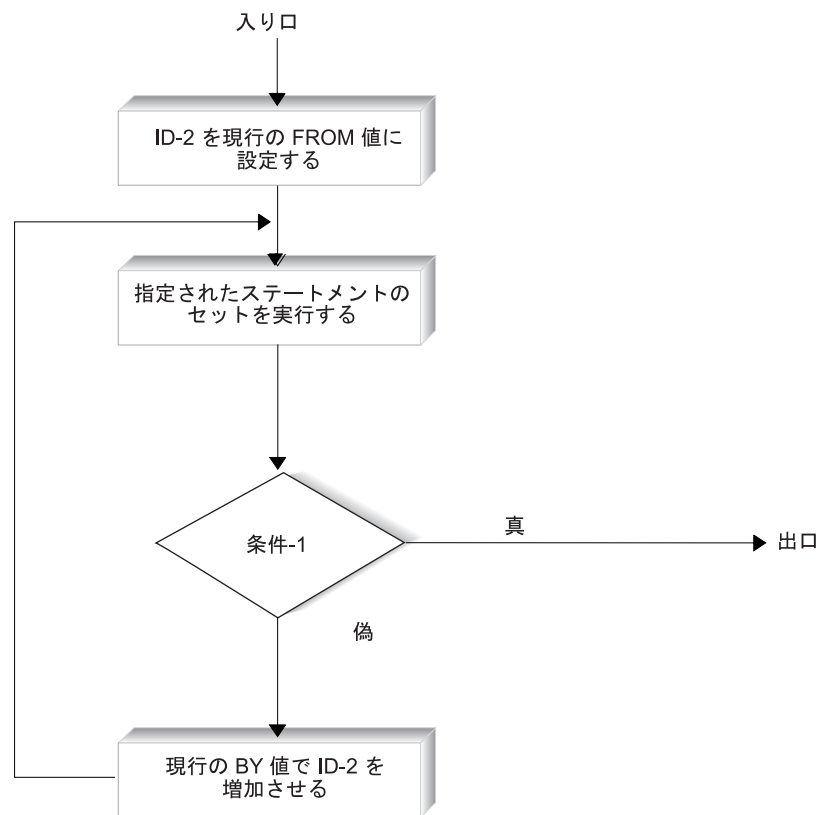


図 18. TEST AFTER を使用して 1 つの ID を変更する場合

2 つの ID の変更

このセクションでは、PERFORM ステートメントを使用して 2 つの ID を変更する方法を記述する例を示します。

PERFORM ステートメント

例:

```
PERFORM procedure-name-1 THROUGH procedure-name-2
  VARYING identifier-2 FROM identifier-3
  BY identifier-4 UNTIL condition-1
  AFTER identifier-5 FROM identifier-6
  BY identifier-7 UNTIL condition-2
```

1. **ID-2** と **ID-5** が、それらの初期値である **ID-3** と **ID-6** にそれぞれ設定されます。
2. **条件-1** が次のように評価されます。
 - a. 条件-1 が偽である場合には、ステップ 3 ~ 7 が実行されます。
 - b. 条件-1 が真である場合には、制御権が **PERFORM** ステートメントに続くステートメントに直接渡されます。
3. **条件-2** が次のように評価されます。
 - a. 条件-2 が偽である場合には、ステップ 4 ~ 6 が実行されます。
 - b. 条件-2 が真である場合には、**ID-2** が **ID-4** だけ増やされ、**ID-5** が **ID-6** の現行値に設定され、ステップ 2 が繰り返されます。
4. **プロシージャ名-1** から **プロシージャ名-2** (指定されている場合) までのすべてのものが 1 回実行されます。
5. **ID-5** が **ID-7** だけ増やされます。
6. 条件-2 が真になるまで、ステップ 3 からステップ 5 が繰り返されます。
7. 条件-1 が真になるまで、ステップ 2 からステップ 6 が繰り返されます。

PERFORM ステートメントの実行終了時には、次のようになります。

- **ID-5** には **ID-6** の現行値が入ります。
- **ID-2** は、最後に使用された設定値を増大 / 減少値分超える値をもちます (ただし、**PERFORM** ステートメントの実行開始時に条件-1 が真であった場合には、**ID-2** に **ID-3** の現行値が入ります)。

455 ページの図 19 は、**TEST BEFORE** 句を使用して 2 つの **ID** を変更する場合の **PERFORM** ステートメントの論理を示したものです。456 ページの図 20 は、**TEST AFTER** 句を使用して 2 つの **ID** を変更する場合の **PERFORM** ステートメントの論理を示したものです。

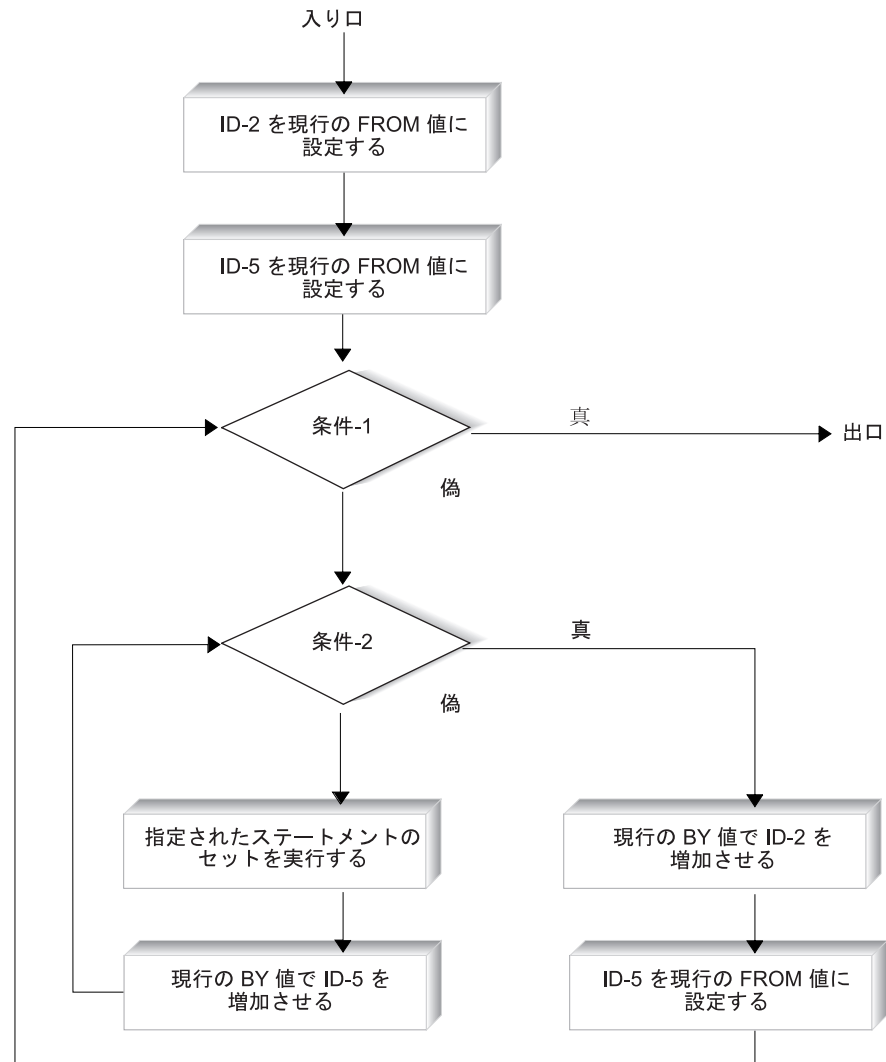


図 19. TEST BEFORE を使用して 2 つの ID を変更する場合

上の図では、ID-5 と ID-2 が関係をもたないことを想定してします。一方が他方に依存している場合 (たとえば添え字を介して)、結果は予測できませんが、一般的に望ましいものではありません。

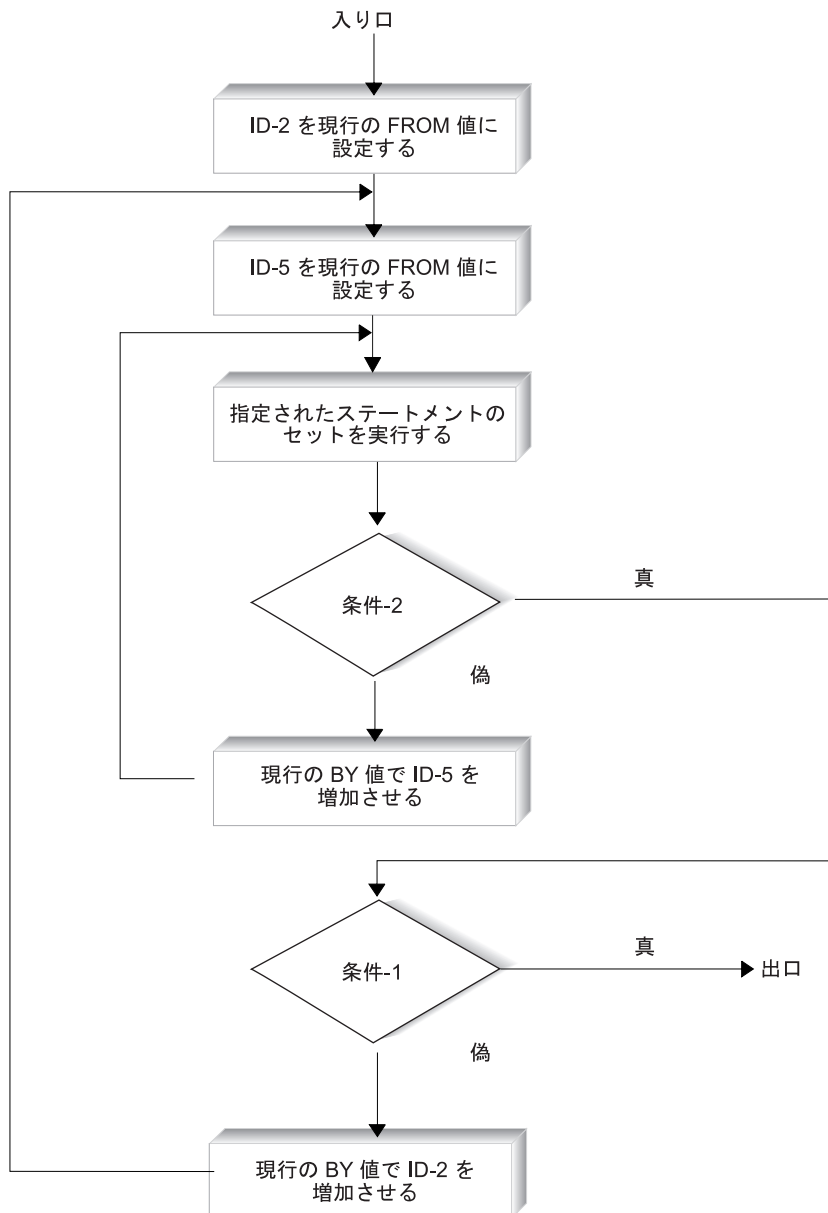


図 20. TEST AFTER を使用して 2 つの ID を変更する場合

3 つの ID の変更

このセクションでは、PERFORM ステートメントを使用して 3 つの ID を変更する方法を記述する例を示します。

例:

```

PERFORM procedure-name-1 THROUGH procedure-name-2
  VARYING identifier-2 FROM identifier-3
    BY identifier-4 UNTIL condition-1
  AFTER identifier-5 FROM identifier-6
    BY identifier-7 UNTIL condition-2
  AFTER identifier-8 FROM identifier-9
    BY identifier-10 UNTIL condition-3
  
```

処理は、次の点を除いては 2 つの ID を変更する場合と同じです。つまり、ID-5 が ID-7 だけ増やされるたびに ID-8 が完全なサイクルを通過し、次に ID-2 が変更されるたびに ID-5 が完全なサイクルを通過します。

PERFORM ステートメントの実行終了時には、次のようになります。

- **ID-5** と **ID-8** には、それぞれ ID-6 と ID-9 の現行値が入ります。
- **ID-2** は、最後に使用された設定値を増大 / 減少値分超える値をもちます (ただし、PERFORM ステートメントの実行開始時に条件-1 が真であった場合には、ID-2 に ID-3 の現行値が入ります)。

458 ページの図 21 は、3 つの ID を変更する場合の PERFORM ステートメントの論理を示したものです。

PERFORM ステートメント

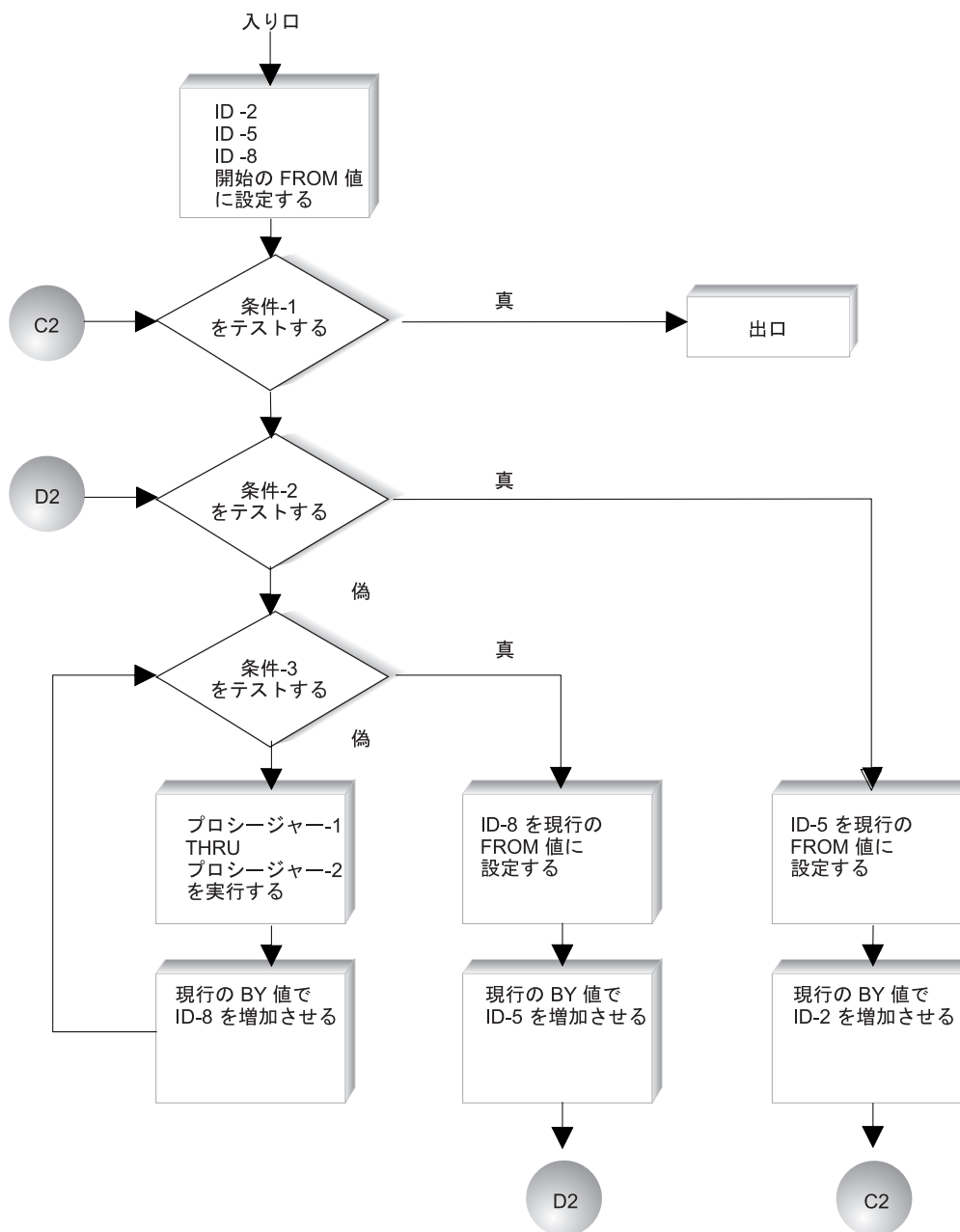


図 21. 形式 4 の PERFORM ステートメントの論理 - 3 つの ID を変更する場合

上の図では、ID-5 と ID-2 が関係をもたないことを想定してします。一方が他方に依存している場合 (たとえば添え字を介して)、結果は予測できますが、一般的に望ましいものではありません。

上の図では、さらに、ID-8 と ID-5 が関係をもたないことも想定しています。一方が他方に依存している場合 (たとえば添え字を介して)、結果は予測できますが、一般的に望ましいものではありません。

4 つ以上の ID の変更

VARYING 句を使用するときは、最高 4 つまでの AFTER 句を追加することによって、上記の例を合計 6 個の AFTER 句を持つように拡張できます。

VARYING 句の規則

指定される変数の数に関係なく、次の規則が適用されます。

1. VARYING/AFTER 句の中で指標名を指定する場合には、次のようになります。
 - a. 指標名は、196 ページの『INDEXED BY 句』の規則に従って初期設定され、増加または減少されます。(502 ページの『SET ステートメント』も参照してください。)
 - b. 関連する FROM 句では、ID は整数として記述されているものでなければならず、正の値をもたなければなりません。リテラルは正の値をもたなければなりません。
 - c. 関連する BY 句では、ID は整数として記述されているものでなければなりません。リテラルはゼロ以外の整数でなければなりません。
2. FROM 句の中で指標名を指定する場合には、次のようになります。
 - a. 関連する VARYING/AFTER 句では、ID は整数として記述されているものでなければなりません。これは、SET ステートメントのところで説明されているように初期設定されます。
 - b. 関連する BY 句では、ID は整数として記述されているものでなければならず、ゼロ以外の値をもたなければなりません。リテラルはゼロ以外の整数でなければなりません。
3. BY 句では、ID およびリテラルはゼロ以外の値をもたなければなりません。
4. 実行時に VARYING、FROM、および BY 句における ID または指標名、あるいはその両方の値を変更すると、プロシージャーの実行回数が変わります。
5. オペランドを増加または減少させる方法は、指定する変数の数によって異なります。

READ ステートメント

READ ステートメントは、レコードをプログラムが使用できるようにします。

- 順次アクセスの場合には、READ ステートメントは、ファイル内の次のレコードをオブジェクト・プログラムが使用できるようにします。
- ランダム・アクセスの場合には、READ ステートメントは、直接アクセス・ファイル内の指定されたレコードをオブジェクト・プログラムが使用できるようにします。

READ ステートメントの実行時には、関連するファイルが INPUT モードまたは I-O モードでオープンされていなければなりません。READ ステートメントの実行方法は、ファイル編成によって異なります。ファイル編成には次のものがあります。

- 順次
- 相対
- 索引付き

ファイル制御記入項目に FILE STATUS 文節が指定されている場合は、READ ステートメントの処理時に関連する状況キーが更新されます。

READ ステートメントの処理が失敗すると、関連するレコード域の内容およびファイル位置標識の位置は未定義になります。

装置タイプ DISK および DATABASE に関する特別の考慮事項

IBM 拡張

READ ステートメントが DISK または DATABASE 装置上にあるファイルに対して実行される場合には、ヌル可能フィールドがサポートされます。しかし、ヌル値は ASSIGN 文節で ALWNULL が指定された DATABASE ファイルにだけサポートされます。ALWNULL が指定されず、フィールドにヌル値が含まれている場合は、READ 操作は失敗し、ファイル状況の 90 が戻されます。READ ステートメントに NULL-MAP/NULL-KEY-MAP を指定することによっても、どのフィールドにヌル値が含まれているかを知ることができます。

IBM 拡張 の終り

順次アクセス・モード

形式 1 は、順次アクセス・モードのすべてのファイルに対して使用しなければなりません。

形式 1 の READ ステートメントを実行すると、ファイル内の次のレコードが検索されます。次にアクセスされるレコードは、ファイル編成によって決まります。

動的アクセス・モード

索引付き編成または相対編成のファイルの場合には、FILE-CONTROL 記入項目に動的アクセス・モードを指定することができます。動的アクセス・モードでは、使用する形式によって、レコードを順次またはランダムに検索できます。

順次検索を実行する場合は、NEXT 句を含む形式 2 を指定しなければなりません。順次アクセスに関するこれ以外の規則がすべて適用されます。

ランダム検索を実行する場合は、形式 3 を指定しなければなりません。ランダム・アクセスに関するこれ以外の規則がすべて適用されます。

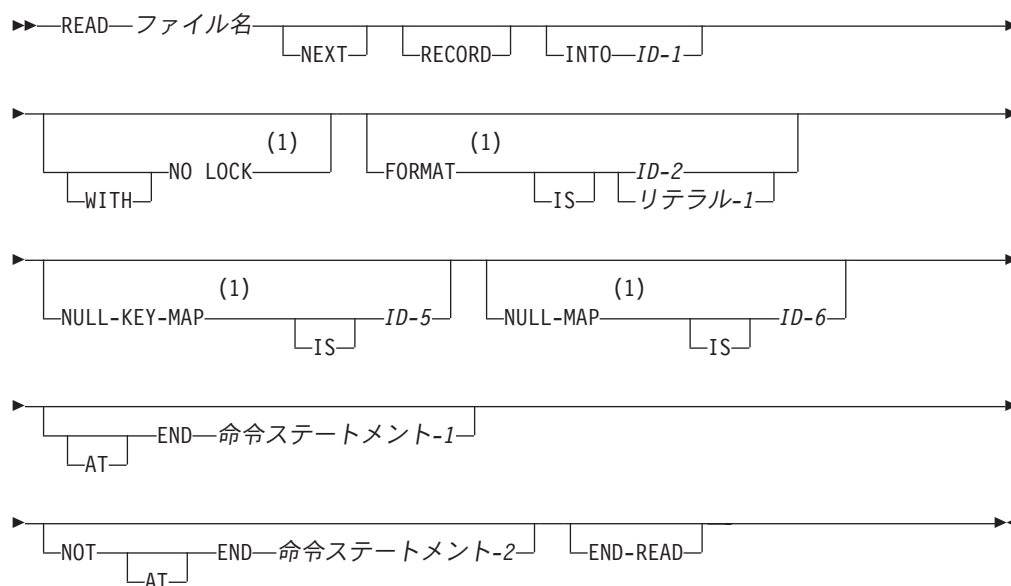
ランダム・アクセス・モード

形式 3 は、ランダム・アクセス・モードの索引付きおよび相対ファイルに対して指定しなければなりません。また、レコードの検索がランダムである場合の動的アクセス・モードのファイルに対しても指定しなければなりません。

以下の節で説明するように、READ ステートメントの実行方法はファイル編成によって異なります。

READ ステートメント - 形式 1 - 順次検索 / 順次アクセス

READ - 形式 1 - 順次検索 / アクセス

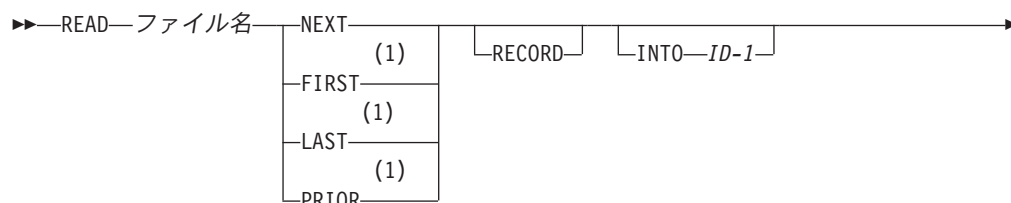


注:

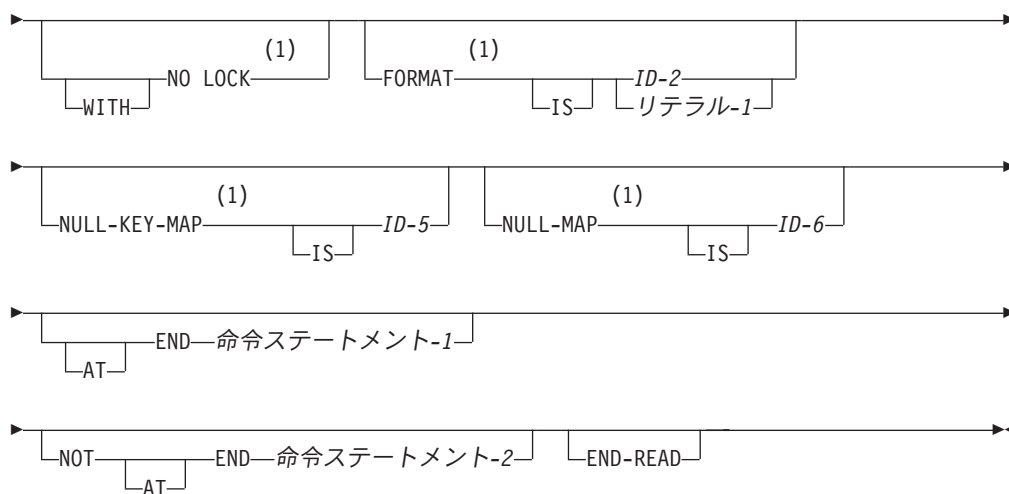
1 IBM 拡張

READ ステートメント - 形式 2 - 順次検索 / 動的アクセス

READ - 形式 2 - 順次検索 / 動的アクセス



READ ステートメント

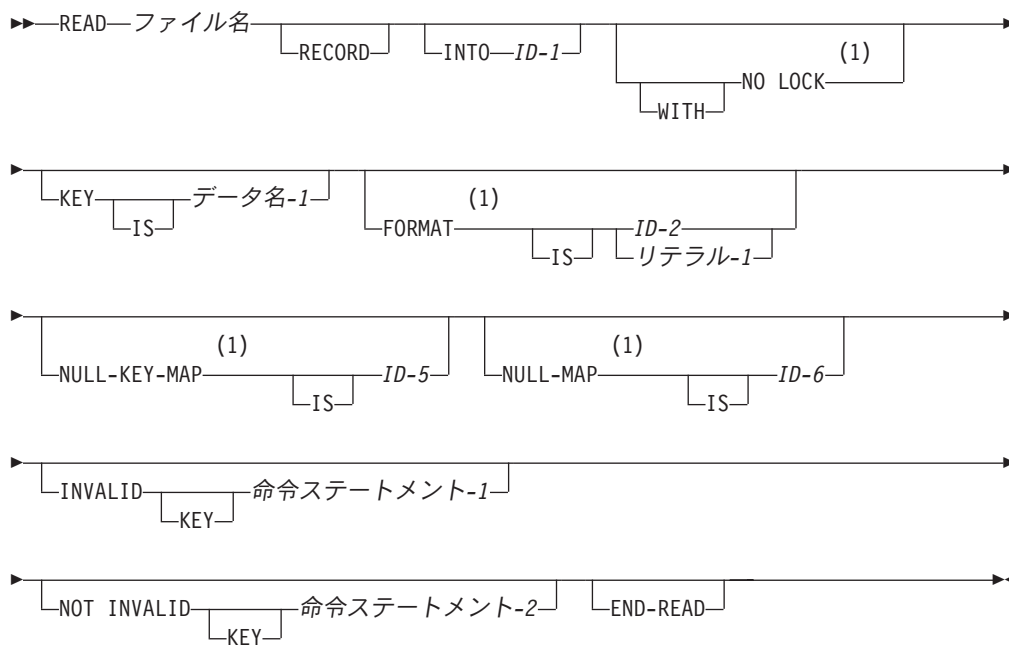


注:

1 IBM 拡張

READ ステートメント - 形式 3 - ランダム検索

READ ステートメント - 形式 3 - ランダム検索



注:

1 IBM 拡張

ファイル名

ファイル名は、データ部の FD 記入項目の中で定義されていなければならない、ソート・ファイルまたはマージ・ファイルの名前であってはなりません。

RECORD

一連のレコードの中の次のレコードです。

KEY IS データ名-1

この句は、索引付きファイルの場合にだけ指定します。データ名-1 は修飾できますが、添え字付けすることはできません。データ名-1 では、ファイル名に関連するレコード・キーを識別しなければなりません。

IBM 拡張

データ名-1 は DBCS データ項目として定義できます。RECORD KEY 文節が DBCS データ項目を指定する場合、READ ステートメントに指定された KEY は DBCS データ項目でなければなりません。

IBM 拡張 の終り**INTO 句**

INTO ID 句によって、READ ステートメントは次のステートメントと同等になります。

- READ ファイル名 RECORD
- MOVE レコード名 TO ID

READ ステートメントの処理が正常に終了すると、現行レコードは、レコード名と ID の両方で使用可能になります。

INTO ID 句が指定されている場合、現行レコードは、CORRESPONDING 句のない MOVE ステートメントの規則に従って、入力域から ID 域に移動されます。ID に関連する添え字付け、指標付け、または参照変更は、レコードが読み取られた後、ID に転送される直前に評価されます。(297 ページの『INTO/FROM ID 句』も参照してください。)

INTO 句を READ ステートメントに指定できるのは、次の場合です。

- ファイル記述記入項目に従属しているレコード記述が 1 つだけである。または
- ファイル名に関連付けられているすべてのレコード名、および ID-1 によって参照されているデータ項目が、グループ項目または基本英数字項目を記述している。

可変長レコードについて INTO ID 句を指定すると、受け入れフィールドに移動されるデータの量が、読み取られる可変長レコードの長さと同しくなります。

ID-1

ID-1 は受け入れフィールドです。現行レコードは、CORRESPONDING 句のない MOVE ステートメントの規則に従って、レコード域から ID-1 によって指定されている区域に移動されます。次の使用上の注意が適用されます。

- 現行レコードのサイズは、RECORD 文節内について指定されている規則によって異なります。
- ファイル記述記入項目に RECORD IS VARYING 文節が含まれている場合には、移動はグループ移動です。
- 暗黙の MOVE ステートメントが起こるのは、READ ステートメントの実行が成功する場合だけです。
- ID-1 に関連する添え字付けまたは参照変更は、レコードが読み取られた後、データ項目に移動される直前に適用されます。

READ ステートメント

- レコードは、レコード域と、ID-1 によって参照されるデータ項目の両方で使用可能になります。
- READ ステートメントで INTO 句を使用できるのは、次の場合だけです。
 - ファイル記述記入項目に從属しているレコード記述が 1 つだけである。または
 - ファイル名-1 に関連付けられているすべてのレコード名、および ID-1 によって参照されている項目が、グループ項目または基本英数字項目を記述している。
- ファイル名-1 および ID-1 に対応するレコード域は、同じ記憶域であってはなりません。

IBM 拡張

- ID-1 は、浮動小数点データ項目にすることができます。
- ID-1 は DBCS データ項目にすることができます。
- ID-1 は、日時データ項目にすることができます。

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

NO LOCK 句

NO LOCK 句は、READ 操作で、I-O (更新) モードでオープンするファイルに対するレコード・ロックを獲得できないようにします。さらに、NO LOCK 句を持つ READ 操作は、使用可能となるレコードが他のジョブによってロックされた場合でも成功します。さらに、この句を持つ READ ステートメントは、前の READ 操作によってロックされたレコードを解放します。

DUPLICATES 句がそのファイルに対して指定されると、NO LOCK 句を指定したステートメントによって読み取られるレコードは、DELETE または REWRITE ステートメントによっては処理できません。

I-O モードでオープンしていないファイルに対して NO LOCK 句を使用すると、コンパイル時にエラー・メッセージを受け取ります。

ファイルおよびレコードのロックの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

FORMAT 句

FORMAT 句が適用されるのは、READ ステートメントが、ASSIGN のファイル装置タイプとして DATABASE が指定された索引付きファイルに対して実行される場合だけです。

FORMAT 句で指定する値には、この入出力操作で使用するレコード形式の名前が入ります。システムはこれを使用して、どのレコード形式に対して操作を行うかを指定または選択します。

ID-2 を指定する場合には、10 文字以下の英数字データ項目にしなければなりません。

リテラル-1 を指定する場合は、10 文字以下の大文字の文字ストリングにしなければなりません。

FORMAT 句を指定せずに、ランダム・アクセス・モードで索引付きファイルにアクセスする場合には、定義された最初の形式が使用されます。

全桁がブランクの値は、FORMAT 句が指定されなかった場合と同じ扱いになります。その値がファイルに対して有効でない場合は、9K の FILE STATUS が戻され、(そのファイルに適用可能であれば) USE プロシージャが呼び出されます。

ファイルが順次アクセス・モードで読み取られるときには、キー順アクセス・パス内の、要求された形式を持つ次のレコードが使用可能になります。形式が省略された場合には、キー順アクセス・パスの中の次のレコードが使用可能になります。

ファイルがランダム・アクセス・モードで読み取られるときには、指定された形式について定義されたキーが、その形式のレコードを獲得するために使用されます。その形式のレコードが見つからない場合には、INVALID KEY 条件が発生します。この条件は、定義されたキーを持つが、レコード形式が異なるレコードがある場合でも発生します。

形式が省略された場合には、ファイルの共通キーが使用されて、その共通キー値を持つ任意の形式の最初のレコードが獲得されます。ファイルの共通キーは、データベース上に存在するレコードに関するファイルのすべての形式に共通なキー・フィールドから成り立っています。ファイルの共通キーは、ファイル中のすべてのレコード形式で共通な左端のキー・フィールドです。共通キーは、ファイルについてプログラム内で定義された最初のレコード形式を使用して、レコード記述域内のデータから作成されます。

ファイルが動的アクセス・モードで読み取られるときには、次に使用可能になるレコードは以下のように判別されます。

レコード	FORMAT 句	
	指定された場合	省略
NEXT	指定された形式を持つ、キー順アクセス・パス内の次のレコードが使用可能になります。	形式に関係なく、キー順アクセス・パス内の次のレコードが使用可能になります。
PRIOR	キー順アクセス・パス内のレコードで、ファイル位置標識によって識別されるレコードに先行しており、指定された形式を持つものが使用可能になります。	キー順アクセス・パス内のレコードで、ファイル位置標識によって識別されるレコードに先行しているものが、形式に関係なく使用可能になります。
FIRST	指定された形式を持つ、キー順アクセス・パス内の最初のレコードが使用可能になります。	形式に関係なく、キー順アクセス・パス内の最初のレコードが使用可能になります。
LAST	指定された形式を持つ、キー順アクセス・パス内の最後のレコードが使用可能になります。	形式に関係なく、キー順アクセス・パス内の最後のレコードが使用可能になります。

READ ステートメント

レコード	FORMAT 句	
	指定された場合	省略
上記以外	指定された形式について定義されたキーが、その形式のレコードを獲得するために使用されます。その形式のレコードが見つからない場合には、INVALID KEY 条件が発生します。この条件は、定義されたキーを持つが、レコード形式が異なるレコードがある場合でも発生します。	ファイルの共通キーが使用されて、その共通キー値を持つ任意の形式の最初のレコードが獲得されます。ファイルの共通キーは、データベース上に存在するレコードに関するファイルのすべての形式に共通なキー・フィールドから成り立っています。ファイルの共通キーは、ファイル中のすべてのレコード形式で共通な左端のキー・フィールドです。共通キーは、ファイルについてプログラム内で定義された最初のレコード形式を使用して、レコード記述域内のデータから作成されます。

NULL-KEY-MAP IS 句

NULL-KEY-MAP IS 句は、処理されるレコードのキーに対してデータ管理機能が提供するヌル・バイト・マップ値に対応する ID の値を示します。ID は、添え字を付けたり、参照変更できます。

句は、ASSIGN 文節が装置タイプとして DATABASE を指定し、ALWNULL 属性を指定した索引付きファイルに対してだけ指定できます。

ファイルに代替キーがある場合、ID-5 は、参照の現行キーのヌル・キー・マップに関連しています。

ヌル可能フィールドの使用についての詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

NULL-MAP IS 句

NULL-MAP IS 句は、処理されるレコードのデータ管理が提供するヌル・バイト・マップ値に対応する ID の値を示します。ID は、添え字を付けたり、参照変更できます。

この句は、ASSIGN 文節が装置タイプとして DATABASE を指定し、ALWNULL 属性を指定したすべてのファイルに対して指定できます。

ヌル可能フィールドの使用についての詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

AT END 句

AT END 句は、ファイルが順次アクセス・モードまたは動的アクセス・モードで読み取られる場合にだけ適用されます。

順次読み取りの処理時に次のレコードが存在しない場合には、AT END 条件が発生し (ファイル状況の高位桁は 1)、READ ステートメントの処理が正常に行われません。次の処置が取られます。

1. FILE STATUS 文節が指定されている場合には、状況キーが AT END 条件を示すように更新されます。

2. AT END 句が指定されている場合には、制御が AT END 命令ステートメントに渡されます。このファイルの EXCEPTION/ERROR プロシーチャーは実行されません。
3. AT END 句が指定されていない場合には、このファイルについての EXCEPTION/ERROR プロシーチャーが実行されます。制御は、このプロシーチャーから、READ ステートメントの終わりに続く次の実行可能ステートメントに戻されます。

AT END 条件が起こると、READ ステートメントが正常に実行されません。関連するレコード域の内容は未定義となり、ファイル位置標識は、次の有効なレコードが確立されていないことを示すように設定されます。

READ ステートメントの実行時に AT END 条件が起こらなかった場合には、AT END 句 (指定されている場合) が無視され、次の処置が取られます。

1. ファイル位置標識が設定され、ファイル名-1 と関連する I-O 状況が更新されます。
2. AT END 条件ではない例外条件が存在する場合は、ファイル名-1 について適用可能な USE AFTER EXCEPTION プロシーチャーの実行に続いて、制御権が USE ステートメントの規則に従って移動されます。
3. 例外条件が存在しない場合には、レコード域でレコードが使用可能になり、INTO 句の存在のために生じる暗黙の移動が実行されます。制御権は、READ ステートメントの終わりまたは命令ステートメント-2 (指定されている場合) に移動されます。後者の場合には、命令ステートメント-2 に指定されている各ステートメントについての規則に従って実行が続けられます。制御権の明示的な移動をもたらすプロシーチャー分岐ステートメントまたは条件ステートメントが実行される場合には、制御権はそのステートメントについての規則に従って移動されます。それ以外の場合には、制御権は命令ステートメント-2 の実行完了時に READ ステートメントの終わりに移動されません。

READ ステートメントが正常に実行されなかった場合には、関連するレコード域の内容は未定義となり、ファイル位置標識は、次の有効なレコードが確立されていないことを示すように設定されます。

ファイルに対して明示または暗黙の EXCEPTION/ERROR プロシーチャーが指定されていない場合には、AT END 句を指定しなければなりません。

注: 順次読み取りとは、順次アクセスのファイルに対する任意の READ ステートメント、または動的アクセスのファイルに対する READ NEXT、READ PRIOR、READ FIRST、または READ LAST ステートメントのことです。

READ FIRST または READ LAST ステートメントでは、ファイルが空の場合、または FORMAT 句が使用されていて、ファイルのどのレコードも指定された形式を持たない場合、AT END 条件になります。

ファイルを順次アクセス・モードで読み込んでいるときに AT END 条件が検出された場合には、さらに READ ステートメントを処理する前に、正常な CLOSE ステートメントとそれに続く正常な OPEN ステートメントを、このファイルに対して処理する必要があります。

READ ステートメント

ファイルを動的アクセス・モードで読み込んでいるときに AT END 条件が検出された場合には、さらに READ NEXT または READ PRIOR ステートメントを処理する前に、そのファイルに対して次のいずれかを処理する必要があります。

- 正常な CLOSE ステートメントとそれに続く正常な OPEN ステートメント。
- 正常な START ステートメント。
- 正常なランダム・アクセス READ ステートメント。
- 正常な READ FIRST または READ LAST ステートメント。

順次アクセスのファイルに対する READ ステートメント、または動的アクセスのファイルに対する READ NEXT または READ PRIOR ステートメントを、AT END 条件が発生した後で試み、また指定されたメソッドのいずれかでファイル位置標識がリセットされていなかった場合、ファイル状況 46 が戻されます。AT END 句も NOT AT END 句も実行されません。

NOT AT END 句

NOT AT END 句を指定した READ ステートメントが正常に完了するたびに (ファイル状況の高位桁は 0)、この句に関連付けられている命令ステートメントに制御権が移動します。

INVALID KEY 句

INVALID KEY 句は、相対または索引付きファイルがランダム・アクセス・モードまたは動的アクセス・モードで読み取られる場合にだけ適用されます。

該当する EXCEPTION/ERROR プロシージャが存在していないファイルについては、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

INVALID KEY 句の処理については 297 ページの『INVALID KEY 条件』を参照してください。

NOT INVALID KEY 句

NOT INVALID KEY 句は、相対または索引付きファイルがランダム・アクセス・モードまたは動的アクセス・モードで読み取られる場合にだけ適用されます。

NOT INVALID KEY 句を指定した READ ステートメントが正常に完了すると、この句に関連付けられている命令ステートメントに制御権が移動します。

NEXT 句

NEXT 句は、動的アクセス・モードの場合にだけ適用されます。

相対ファイルが動的に読み取られる場合に、NEXT 句が指定されていると、順次読み取りが行われます。この句が省略されると、ランダム読み取りが行われず。

索引付きファイルが動的に読み取られる場合に、NEXT 句が指定されていると、順次読み取りが行われます。NEXT、FIRST、LAST および PRIOR がすべて省略されると、ランダム・アクセス読み取りが行われます。

レコードのブロックに対して READ NEXT 操作が実行される場合には、ブロックが空になるまで READ PRIOR 操作は実行できません。READ PRIOR 操作が最初に実行されると、ブロックが空になるまで READ NEXT 操作は実行できません。これが試みられると、ファイル状況 9U が生じます。ファイル状況 9U から回復するには、ファイルをクローズし、その後再びオープンしてください。

IBM 拡張

FIRST 句

FIRST 句は、索引付きファイルが動的にアクセスされる場合にだけ適用されます。NEXT、FIRST、LAST および PRIOR がすべて省略されると、ランダム・アクセス読み取りが行われます。

LAST 句

LAST 句は、索引付きファイルが動的にアクセスされる場合にだけ適用されます。NEXT、FIRST、LAST および PRIOR がすべて省略されると、ランダム・アクセス読み取りが行われます。

PRIOR 句

PRIOR 句は、索引付きファイルが動的にアクセスされる場合にだけ適用されます。これが指定されると、順次読み取りが行われます。NEXT、FIRST、LAST および PRIOR がすべて省略されると、ランダム・アクセス読み取りが行われず。

レコードのブロックに対して READ PRIOR 操作が実行される場合には、ブロックが空になるまで READ NEXT 操作は実行できません。READ NEXT 操作が最初に実行されると、ブロックが空になるまで READ PRIOR 操作は実行できません。これが試みられると、ファイル状況 9U が生じます。ファイル状況 9U から回復するには、ファイルをクローズし、その後再びオープンしてください。

IBM 拡張 の終り

END-READ 句

この明示範囲終了符号は、READ ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-READ 句を使用することによって、READ 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-READ 句は、READ 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

順次ファイル

順次ファイルは、次の装置タイプから読み取ることができます。

- TAPEFILE
- DISKETTE
- DISK
- DATABASE

順次ファイルは、**順次アクセス・モード**でだけ読み取ることができます。

READ ステートメントによって使用可能となるレコードは、次のように判別されます。

- ファイル位置標識が OPEN ステートメントの処理によって設定された場合には、ポインターによって指し示されているレコードが使用可能になります。
- ファイル位置標識が前の READ ステートメントの処理によって設定された場合には、ポインターがファイル内に存在する次のレコードを指し示すように更新されます。次に、そのレコードが使用可能となります。

READ ステートメント

このファイルに対してのファイル制御記入項目に `SELECT OPTIONAL` が指定されており、このプログラムの実行時にファイルが使用可能でない場合には、最初の `READ` ステートメントの実行により `AT END` 条件が起こります。ファイルが使用できないので、ファイルのクローズ時にシステムの標準的なファイル終了処理は行われません。

- 装置タイプ `TAPEFILE` および `DISKETTE` に関する特別の考慮事項

装置タイプ `TAPEFILE` および `DISKETTE` に関する特別の考慮事項

`READ` ステートメントの実行中にボリュームの終わりが検出されたものの、論理的なファイルの終わりに達していない場合には、以下の処置が示されている順番で行われます。

1. 標準の終了ボリューム・ラベル・プロシージャールが実行されます。
2. ボリュームの切り替えが行われます。
3. 標準の開始ボリューム・ラベル・プロシージャールが実行されます。
4. 次のボリュームの最初のデータ・レコードが使用可能になります。

プログラムでは、読み取り操作中に上記の処置が取られたという標識を受け取りません。

相対ファイル

相対ファイルは、次の装置タイプから読み取ることができます。

- `DISK`
- `DATABASE`

相対ファイルは、**順次**、**ランダム**、または**動的アクセス・モード**で読み取ることができます。

相対ファイルが**順次アクセス・モード**で読み取られるときには、`READ` ステートメントによって使用可能となるレコードは、次のように判別されます。

- ファイル位置標識が `START` または `OPEN` ステートメントの処理によって設定された場合には、ポインターによって指し示されているレコードが使用可能になります (それが、ファイル位置標識によって示されているパスを介してアクセスできる場合)。そのレコードがアクセス可能でなくなっている (たとえば、レコードの削除が原因で) 場合には、現行レコード・ポインターがファイル内に存在する次のレコードを指し示すように更新されます。次に、そのレコードが使用可能となります。
- ファイル位置標識が前の `READ` ステートメントの処理によって設定された場合には、ファイル位置標識がファイル内に存在する次のレコードを指し示すように更新されます。次に、そのレコードが使用可能となります。

このファイルに対して `RELATIVE KEY` 句が指定されている場合には、`READ` ステートメントの処理によって、`RELATIVE KEY` データ項目が、使用可能にされるレコードの相対レコード番号を示すように更新されます。

相対ファイルが**ランダム・アクセス・モード**で読み取られるときには、`RELATIVE KEY` データ項目に入っている相対レコード番号を持つレコードが使用可能になります。ファイル内にそのようなレコードがない場合には、`INVALID KEY` 条件が発生し、`READ` ステートメントの処理は正常に行われません。

索引付きファイル

索引付きファイルは、次の装置タイプから読み取ることができます。

- DISK
- DATABASE

索引付きファイルは、**順次**、**ランダム**、または**動的アクセス・モード**で読み取ることができます。

索引付きファイルが**順次アクセス・モード**で読み取られるときには、READ ステートメントによって使用可能となるレコードは、次のように判別されます。

- ファイル位置標識が START または OPEN ステートメントの処理によって設定された場合には、ポインターによって指し示されているレコードが使用可能になります (それが、現行レコード・ポインターによって示されているパスを介してアクセスできる場合)。そのレコードがアクセス可能でなくなっている (たとえば、レコードの削除が原因で) 場合には、ファイル位置標識がファイル内に存在する次のレコードを指し示すように更新されます。次に、そのレコードが使用可能となります。
- ファイル位置標識が前の READ ステートメントの処理によって設定された場合には、ファイル位置標識がファイル内に存在する次のレコードを指し示すように更新されます。次に、そのレコードが使用可能となります。

IBM 拡張

重複キーが認められている (ファイル制御記入項目に DUPLICATES 句が指定されている) ファイルの場合、重複キー値を持つレコードは、ファイルの作成時に指定された順序で使用可能になります。システム・オプションとしては、先入れ先出し (FIFO)、後入れ先出し (LIFO)、および指定順序なし (FIFO も LIFO も指定されない場合) があります。

IBM 拡張 の終り

索引付きファイルが**ランダム・アクセス・モード**で読み取られるときには、参照の現行キーのキー値と等しいキー値を持つファイル内のレコードが使用可能になります。ファイル内にそのようなレコードがない場合には、INVALID KEY 条件が発生し、READ ステートメントの処理は正常に行われません。索引付きファイルが**ランダム・アクセス・モード**で読み取られるときに、入出力ステートメントで FORMAT 句が指定されていない場合には、ファイル内で定義された最初の形式が使用されます。外部記述キーが使用され、形式が指定されていない場合には、プログラム内に含まれている最初の形式がキーの作成に使用されることに注意してください。この形式は、ファイル内の最初の形式であるとは限りません。

KEY 句が指定されていない場合には、基本 RECORD KEY が、この要求に対する参照キーとなります。動的アクセスが指定されている場合、異なる参照キーが確立されるまで、基本 RECORD KEY も、順次 READ ステートメントのそれ以降の実行に対して、参照キーとして使用されます。

KEY 句が指定されると、データ名-1 は、この要求に対する参照キーとなります。動的アクセスが指定されると、異なる参照キーが確立されるまで、この参照キーが

READ ステートメント

順次 READ ステートメントのそれ以降の実行に対して使用されます。

IBM 拡張

重複キーが認められている (ファイル制御記入項目に `DUPLICATES` 句が指定されている) ファイルの場合、指定されたキー値を持つ最初のレコードが使用可能になります。最初のレコードは、ファイルの作成時に指定された順序で判別されます。システム・オプションとしては、先入れ先出し (FIFO)、後入れ先出し (LIFO)、および指定順序なし (FIFO も LIFO も指定されない場合) があります。

`DUPLICATE KEY` 検査用のファイル状況 02 を使用可能にするためには、次のものがが必要です。

- `SELECT` 文節内の `WITH DUPLICATES` 句
- `OPEN I-O` または `OPEN INPUT`
- `OPTION` パラメーターの `*DUPKEYCHK` オプション、または `PROCESS` ステートメントの `DUPKEYCHK` オプション

IBM 拡張 の終り

複数レコードの処理

ファイル名-1 に複数のレコード記述記入項目が関連付けられている場合には、これらのレコードは自動的に同じ記憶域を共用します。つまり、それらは暗黙に再定義されます。READ ステートメントが実行された後、現行レコードの範囲内のデータ項目だけが置き換えられます。その範囲を超えて保管されているデータ項目は未定義となります。図 22 はこの概念を表したものです。現行レコードの範囲がファイル名についてのレコード記述記入項目を超えている場合には、レコードが最大サイズの右側で切り捨てられます。いずれの場合にも、READ ステートメントは正常に実行され、入出力状況はレコード長の矛盾が生じたことを示すように設定されます。

FD 記入項目:
FD INPUT-FILE LABEL RECORDS OMITTED.

01 RECORD-1 PICTURE X(30).

01 RECORD-2 PICTURE X(20).

READ ステートメント実行時の入力域の内容:

ABCDEF GHIJKL MNOPQR STUVWXY Z1234

(RECORD-2) で読み取られているレコードの内容:

01234567890123456789

READ 実行後の入力域の内容:

01234567890123456789??????????



(入力域のこれらの文字は未定義)

図 22. 複数のレコード記述を持つ READ ステートメント

マルチボリューム・ファイル

READ ステートメントの実行中にボリューム終わりが検出されたものの、論理的なファイルの終わりに達していない場合には、以下の処置が行われます。

- システム定義の終了ボリューム・ラベル・プロシージャー
- ボリュームの切り替え
- システム定義の開始ボリューム・ラベル・プロシージャー
- 次のボリュームの最初のデータ・レコードが使用可能になります。

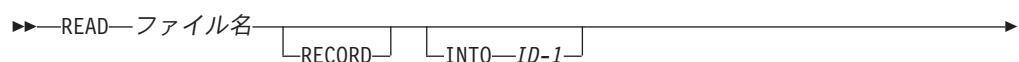
トランザクション・ファイル

IBM 拡張

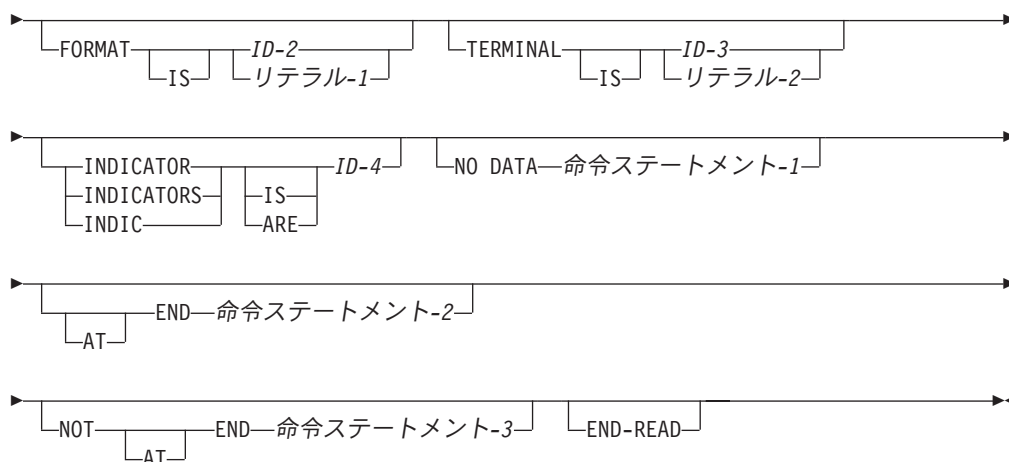
READ ステートメントは、指定された形式を使用して、ある装置のレコードを使用可能にします。形式がサブファイルである場合には、READ ステートメントは、そのサブファイルの指定されたレコードを使用可能にします。

READ ステートメント - 形式 4 - トランザクション (非サブファイル)

READ ステートメント - 形式 4 - トランザクション (非サブファイル)



READ ステートメント



形式 4 を使用するのには、サブファイル・レコードではない形式を読み取る場合だけです。RELATIVE KEY データ項目が FILE-CONTROL 記入項目に指定されていても使用されません。形式 4 の READ ステートメントは、サブファイル・レコードについては無効です。ただし、表示画面上で更新されたサブファイル・レコードをサブファイルに入れるためには、サブファイル制御レコード形式について形式 4 の READ ステートメントを使用しなければなりません。

データが使用可能である場合、それはレコード域に戻されます。レコード形式とプログラム装置の名前は、I-O-FEEDBACK 域と CONTROL-AREA に戻されます。

READ ステートメントは、ファイル用に獲得された装置がある場合にだけ有効です。READ が実行され、獲得された装置がなかった場合は、ファイル状況が 92 (論理エラー) に設定されます。

形式 4 の READ ステートメントが機能する方法は、次の条件によって異なります。

- READ が単一装置ファイルと複数装置ファイルのどちらに対するものであるか
- TERMINAL 句を介して特定のプログラム装置が要求されているかどうか
- FORMAT 句を介して特定のレコード形式が要求されているかどうか
- NO DATA 句が指定されているかどうか

以下の説明で、「データが使用可能 / 戻される」という表現は、応答標識のみが設定される状態も含んでいます。これは、別個の標識域が使用され、標識がファイル用のレコード域に戻されない場合にも当てはまります。

次の表は、句の可能な組み合わせと、単一装置ファイルまたは複数装置ファイルに対して実行される機能を示しています。たとえば、TERMINAL が N、FORMAT が N、NO DATA が N であれば、単一装置は D、複数装置は A です。

3. 句が指定され、データ項目またはリテラルがブランクの場合には、実行時に句はそれが指定されなかったかのように扱われます。

	句	Y= 可 N= 不可
コンパイル時に検査される	TERMINAL ³	N N N N Y Y Y Y
	FORMAT ³	N N Y Y N N Y Y
	NO DATA	N Y N Y N Y N Y
実行時に判別される	単一装置	D C D B D C D B
	複数装置	A A D B D C D B

コード A ~ D について以下に説明します。

コード A - 送信勧誘されたプログラム装置からの読み取り (複数装置ファイルだけ)

このタイプの READ は、使用可能なデータを持つ、最初に送信勧誘されたプログラム装置からデータを受け取ります。送信勧誘されたプログラム装置は、入力を送信するよう勧誘されているワークステーションまたは通信装置 (APPC、SNUF、BSCCL、非同期通信など) です。送信勧誘は、DDS キーワード INVITE を指定した形式でプログラム装置に書き込むことによって行われます。送信勧誘されたプログラム装置からの読み取りが実際に行われると、その装置は送信勧誘されなくなります。そのプログラム装置は、再送信勧誘されるか、あるいは TERMINAL 句または FORMAT 句を指定してそのプログラム装置に READ が出されない限り、別の READ ステートメントによる入力用には使用されません。

プログラム装置から戻されるレコード形式は、システムによって判別されます。ワークステーションごとのレコード形式の判別方法の詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『ファイル・システムと管理』セクションを参照してください。通信装置の場合、ICF ファイルの形式選定処理に関する詳細は、「*ICF Programming*」を参照してください。

この READ は、次の場合にはデータを戻さずに完了することがあります。

1. 送信勧誘された装置がなく、タイマー機能が有効でない。(AT END 条件)
2. ジョブの制御付き取り消しが発生する。この結果、ファイル状況値は 0A になり、メジャー / マイナー戻りコード値は 0309 になります。
3. NO DATA 句が省略されており、指定された待機時間が満了した。この結果、ファイル状況値は 00 になり、メジャー / マイナー戻りコード値は 0310 になります。指定された待機時間は、ファイルに対しての WAITRCD パラメーターで入力された値、またはタイマー機能に関して指定された時間間隔です。
4. NO DATA 句が指定されており、READ の実行時、すぐに使用できるデータがない。

データが使用可能である場合、それはレコード域に戻されます。レコード形式は、I-O-FEEDBACK 域と CONTROL-AREA に戻されます。「プログラム装置送信勧誘からの読み取り」についての詳細は、ディスプレイ装置については、「アプリケーション表示プログラミング」を、通信装置については、「*ICF Programming*」を参照してください。

コード B - 1 台のプログラム装置からの読み取り (無効な組み合わせ)

READ ステートメント

コンパイル時メッセージが出され、NO DATA 句は無視されます。NO DATA 句が省略される場合の同じ句の組み合わせについて、表の項目を参照してください。

コード C - 1 台のプログラム装置からの読み取り (NO DATA 句を指定している場合)

READ ステートメントのこの機能を使用すると、プログラムの実行を停止して、データが使用可能になるまで待つことはありません。データが即時に使用可能となるか、そうでなければ NO DATA 命令ステートメントが実行されます。

この READ 機能を使用して、特定のプログラム装置 (デフォルトのプログラム装置または TERMINAL 句によって指定されたプログラム装置) のデータが使用可能であるかどうかを定期的に検査できます。このデータの検査は、次のように行われます。

1. プログラム装置が次のように判別されます。
 - a. TERMINAL 句が省略されたかまたはブランクである場合には、デフォルトのプログラム装置が使用されます。デフォルトのプログラム装置は、最後に試行された READ、WRITE、REWRITE、ACQUIRE、または DROP ステートメントによって使用された装置です。上記の入出力操作が以前に実行されていない場合は、デフォルトのプログラム装置は最初に獲得されたプログラム装置です。
 - b. TERMINAL 句が指定された場合は、指示されたプログラム装置が使用されません。
2. データが使用可能であるかどうか、およびプログラム装置が送信勧誘されているかどうかを判別するために検査が行われます。
3. データが使用可能である場合、そのデータがレコード域に戻され、プログラム装置は送信勧誘されなくなります。すぐに使用できるデータがない場合、NO DATA 命令ステートメントが実行され、プログラム装置は送信勧誘されたままになります。
4. プログラム装置が送信勧誘されていない場合、AT END 条件が起り、ファイル状況は 10 に設定されます。

コード D - 1 台のプログラム装置からの読み取り (NO DATA 句が指定されていない場合)

この READ は、常に、データが使用可能になるのを待ちます。ジョブが制御付き取り消しを受け取った場合や、ファイルに対して WAITRCD 時間が指定されている場合でも、プログラムが READ ステートメントから制御を取り戻すことはありません。この READ 操作は次のように実行されます。

1. プログラム装置が次のように判別されます。
 - a. TERMINAL 句が省略されているかまたはブランクの値である場合には、デフォルトのプログラム装置が使用されます。デフォルトのプログラム装置は、最後に試行された READ、WRITE、REWRITE、ACQUIRE、DROP、または ACCEPT (属性データ) ステートメントによって使用されたプログラム装置です。これらの操作がどれも行われていない場合は、ファイルのオープン時に暗黙に獲得されたプログラム装置が使用されます。獲得された装置がない場合、AT END 状態が起ります。

- b. TERMINAL 句が指定されている場合は、指定されたプログラム装置が使用されます。
2. レコード形式が次のように判別されます。
 - a. FORMAT 句が省略されているかまたはブランクである場合、戻されるレコード形式はシステムによって判別されます。ワークステーション装置の場合のレコード形式が判別される方法については、「*ICF Programming*」を参照してください。通信装置の場合のレコード形式が判別される方法については、「*ICF Programming*」の ADDICFDEVE および OVRICFDEVE コマンドの FMTSLT パラメーターに関する章を参照してください。
 - b. FORMAT 句が指定されている場合は、指示されたレコード形式が戻されます。使用可能なデータが、要求されたレコード形式と一致しない場合は、ファイル状況値 9K が設定されます。
3. データが使用可能になるまで、プログラムの実行は停止します。READ ステートメントの実行後、データはレコード域に戻されます。プログラム装置が以前に送信勧誘されていた場合には、この READ ステートメントの後には送信勧誘されなくなります。

INTO 句

次のいずれかの場合でなければ、INTO 句を指定することはできません。

- ファイルに関連付けられているすべてのレコードと、INTO 句で指定されているデータ項目が、グループ項目または基本英数字項目である。

または

- ファイル記述記入項目に従属しているレコード記述が 1 つだけである。

KEY IS 句

KEY IS 句は、索引付きファイルに対してだけ指定できます。データ名では、ファイル名-1 に関連するレコード・キーを識別しなければなりません。データ名-1 は修飾できますが、添え字付けすることはできません。

注: KEY IS 句は、構文検査だけが行われ、READ ステートメントの操作には影響を与えません。

FORMAT 句

リテラル-1 または ID-2 では、読み取られるレコード形式の名前を指定します。リテラル-1 を指定する場合は、非数字で、10 文字以下の大文字にしなければなりません。ID-2 (指定されている場合) は、英数字データ項目で、10 文字以下の長さでなければなりません。ID-2 がブランクである場合、READ ステートメントは、FORMAT 句が省略された場合と同じように実行されます。

NO DATA 句

NO DATA 句が指定されている場合、READ ステートメントは、データがすぐに使用できるかどうかを判別します。データが使用可能である場合は、そのデータがレコード域に戻されます。データがすぐには使用できない場合は、命令ステートメント-1 が実行されます。NO DATA 句を指定すると、READ ステートメントはデータが使用可能になるのを待つことがなくなります。

TERMINAL 句

リテラル-2 または ID-3 では、プログラム装置名を指定します。リテラル-2 を指定する場合は、10 文字以下の非数字にしなければなりません。ID-3 を指定する場合は、10 文字以下の英数字データ項目を参照しなければなりません。プ

READ ステートメント

プログラム装置は、READ ステートメントの実行前に獲得されていなければなりません。ID-3 が空白である場合、READ ステートメントは、TERMINAL 句が省略された場合と同じように実行されます。単一装置ファイルの場合は、TERMINAL 句を省略できます。プログラム装置がその単一装置であると見なされます。

複数のプログラム装置を獲得しているトランザクション・ファイルの READ について TERMINAL 句を省略すると、デフォルトのプログラム装置が使用されます。

INDICATOR 句、INDICATORS 句、INDIC 句

データ・レコードが読み取られるときに使用される標識を指定します。標識は、データ・レコードについての情報と、それがプログラムに入力された方法を渡すために使用できます。

ID-4 は、OCCURS 文節なしで指定された基本プール・データ項目か、または基本データ・プールの項目が従属しているグループ項目でなければなりません。

INDICATORS 句の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『トランザクション・ファイルに関する標識の使用』を参照してください。

AT END 句

AT END 句は、ステートメントの有効範囲を明示的に区切る働きをします。AT END 条件が検出されると、命令ステートメント-2 が実行されます。AT END 条件は、送信勧誘されたプログラム装置がなく、タイマー機能が有効でない場合に発生します。

ファイル名について適用可能な USE プロシージャが指定されていない場合には、AT END 句を指定しなければなりません。ファイルに対して AT END 句と USE プロシージャの両方が指定されていて、AT END 条件が生じた場合、制御権は AT END 命令ステートメントに移動され、USE プロシージャは実行されません。

NOT AT END 句

この句では、使用されるステートメントについて AT END 条件が存在しない場合に実行されるプロシージャを指定できます。

END-READ 句

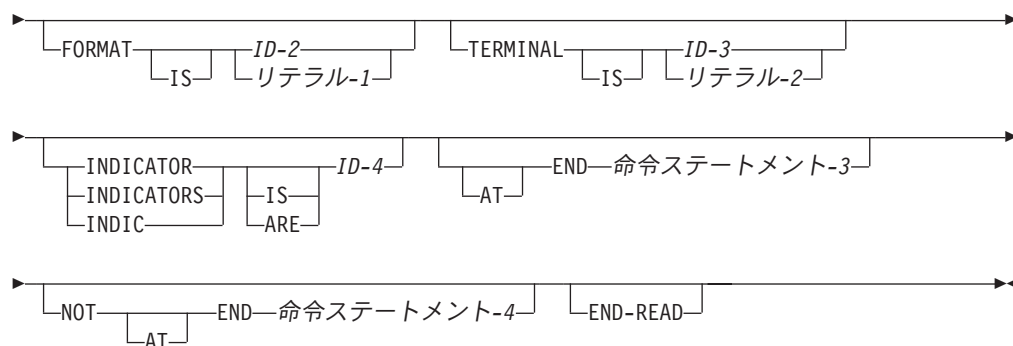
この明示範囲終了符号は、READ ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-READ 句を使用することによって、READ 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-READ 句は、READ 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

READ ステートメント - 形式 5 - トランザクション (サブファイル)

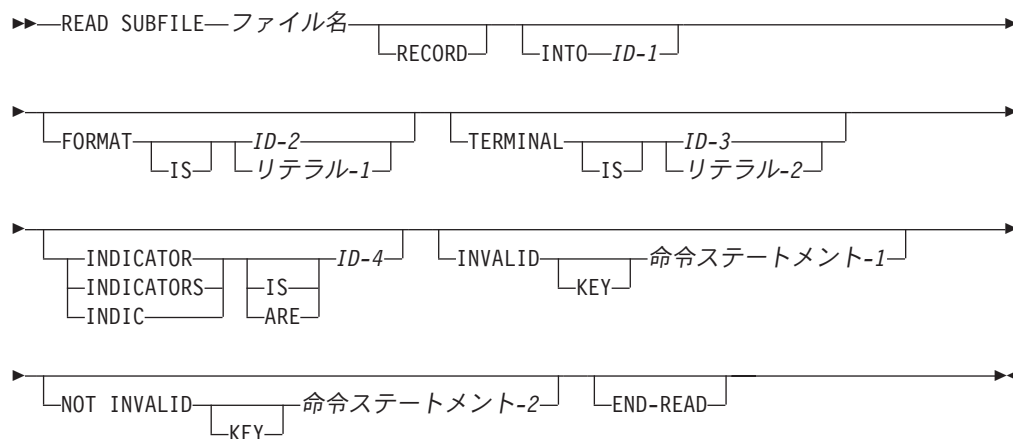
READ - 形式 5a - トランザクション (サブファイル順次)

▶▶—READ SUBFILE—ファイル名—NEXT—MODIFIED—RECORD—INTO—ID-1—▶▶



形式 5a は、サブファイル・レコードである形式を順次アクセス・モードで読み取る場合に使用します。サブファイル・レコードを順次にアクセスするためには、NEXT MODIFIED 句を指定しなければなりません。AT END 句は、NEXT MODIFIED 句と一緒になければ指定できません。

READ - 形式 5b - トランザクション (サブファイル・ランダム)



形式 5b は、サブファイル・レコードである形式をランダム・アクセス・モードで読み取る場合に使用します。INVALID KEY 句は、サブファイル・レコードにランダムにアクセスする場合にしか使用することができません。NEXT MODIFIED 句は、サブファイル・レコードにランダムにアクセスする場合には、使用してはなりません。

形式 5a または 5b は、通信装置については使用できません。通信装置についてサブファイル形式の READ ステートメントを使用すると、READ が失敗し、ファイル状況が 90 に設定されます。

NEXT MODIFIED 句

NEXT MODIFIED 句が指定されていない場合、使用可能になるデータ・レコードは、RELATIVE KEY データ項目の値と一致する相対レコード番号を持つ、サブファイル内のレコードです。

NEXT MODIFIED 句が指定されておらず、RELATIVE KEY データ項目にサブファイル内のレコードの相対レコード番号以外の値が入っている場合には、INVALID KEY 条件が発生し、READ ステートメントの実行は失敗します。

READ ステートメント

NEXT MODIFIED 句を指定した場合、使用可能になるレコードは、サブファイル内の変更された (変更データ・タグがオンになっている) 最初のレコードです。

次に変更されたレコードの検索は、次のように開始されます。

- 次の場合、サブファイルの始まりから開始されます。
 - サブファイル制御レコードに対して入出力操作が実行された場合。
 - 入出力操作によってサブファイルの消去、初期設定、または表示が行われた場合。
- その他のすべてのケースでは、前の読み取り操作によって読み取られたレコードの次のレコードから開始されます。

RELATIVE KEY データ項目の値は、プログラムにとって使用可能となったレコードの相対レコード番号を反映するために更新されます。

NEXT MODIFIED が指定されており、サブファイル内にユーザーによって変更されたレコード (RELATIVE KEY データ項目に入っている相対レコード番号よりも大きい相対レコード番号を持つ) がない場合には、AT END 条件が生じ、ファイル状況が 12 に設定され、RELATIVE KEY データ項目の値は更新されません。その後、命令ステートメント-2 または適用可能な USE AFTER ERROR/EXCEPTION プロシージャが実行されます。

FORMAT 句

形式名が指定されていない場合、使用される形式は、入力フィールド、入出力フィールド、または潜在フィールドを含むディスプレイ装置に書き込まれた最後のレコード形式です。ディスプレイ・ファイルにそのような形式がない場合には、ディスプレイ装置に対する最後の WRITE 操作のレコード形式が使用されます。

FORMAT 句を指定する場合、リテラル-1、または ID-2 の内容は、該当するプログラム装置に対して活動状態である形式にしなければなりません。READ ステートメントは、指定された形式のデータ・レコードを読み取ります。

複数形式ファイルの場合、正しい結果を得るために、FORMAT 句を必ず指定しなければなりません。

TERMINAL 句

TERMINAL 句に関する一般的な考慮事項については、上記の形式 4 を参照してください。

形式 5a または 5b の READ の場合、複数の装置が獲得されているファイルに対して TERMINAL 句が省略されると、デフォルトのプログラム装置に関連付けられているサブファイルからレコードが読み取られます。

INDICATOR 句、INDICATORS 句、INDIC 句

データ・レコードが読み取られるときに使用される標識を指定します。標識は、データ・レコードについての情報と、それがプログラムに入力された方法を渡すために使用できます。

INDICATORS 句の詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」の『トランザクション・ファイルに関する標識の使用』を参照してください。

ID-4 は、OCCURS 文節なしで指定された基本プール・データ項目か、または基本データ・プールの項目が従属しているグループ項目でなければなりません。

INVALID KEY 句

READ ステートメントの実行時に、サブファイルの相対レコード番号と一致しない値が **RELATIVE KEY** データ項目に入っている場合には、**INVALID KEY** 条件が生じ、READ ステートメントは正常に実行されません。

NEXT MODIFIED 句が指定されておらず、ファイル名について適用可能な **USE** プロシージャがない場合には、**INVALID KEY** 句を指定しなければなりません。

無効キー条件が発生した場合に生じる事柄の詳細は 297 ページの『**INVALID KEY** 条件』を参照してください。

NOT INVALID KEY 句

この句では、使用されるステートメントについて無効キー条件が存在しない場合に実行されるプロシージャを指定します。

AT END 句

NEXT MODIFIED が指定されており、サブファイル内にユーザーによって変更されたレコードがない場合には、**AT END** 条件が生じ、READ ステートメントの実行は失敗します。

NEXT MODIFIED 句が使用されており、ファイル名について適用可能な **USE** プロシージャが指定されていない場合には、**AT END** 句を指定しなければなりません。ファイルに対して **AT END** 句と **USE** プロシージャの両方が指定されていて、**AT END** 条件が生じた場合、制御権は **AT END** 命令ステートメントに移動され、**USE** プロシージャは実行されません。

NOT AT END 句

この句では、使用されるステートメントについて **AT END** 条件が存在しない場合に実行されるプロシージャを指定できます。

END-READ 句

この明示範囲終了符号は、**READ** ステートメントの範囲を区切る働きをします。**END-READ** 句を使用することによって、**READ** 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、**END-READ** 句は、**READ** 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

RELEASE ステートメント

RELEASE ステートメントは、入出力域からソート操作の最初のフェーズへレコードを転送します。

RELEASE ステートメントは、SORT ステートメントと関連する入力プロシージャの範囲内でしか使用できません。

RELEASE ステートメント - 形式

```
▶▶—RELEASE—レコード名-1—┐
                              └FROM—ID-1—┘
```

INPUT PROCEDURE の中には、少なくとも 1 つの RELEASE ステートメントを指定しなければなりません。

RELEASE ステートメントが実行されると、レコード名-1 の現行の内容がソート・ファイル内に置かれます。つまり、ソート操作の最初のフェーズで使用できるようになります。

レコード名-1

ソート・マージ・ファイル記述記入項目 (SD) 内のレコードの名前を指定しなければなりません。レコード名-1 は修飾できます。

IBM 拡張

浮動小数点にすることも、日時データ項目にすることもできます。

IBM 拡張 の終り

FROM ID-1

この句によって、RELEASE ステートメントは次のステートメントと同等になります。

```
MOVE identifier-1 to record-name-1
RELEASE record-name-1
```

移動は、CORRESPONDING 句のない MOVE ステートメントの規則に従って実行されます。

ID-1 は、英数字または DBCS 関数 ID の名前にすることができます。

IBM 拡張

ID-1 は、レコード名-1 が DBCS データ項目の場合、DBCS データ項目でなければなりません。

ID-1 は、浮動小数点にすることも、日時データ項目にすることもできます。

IBM 拡張 の終り

レコード名-1 と ID-1 で同じ記憶域を参照してはなりません。

SAME RECORD AREA 文節でファイル名-1 についての SD 記入項目を指定せずに RELEASE ステートメントを実行した場合には、レコード名-1 内の情報は使用可能でなくなります。

SAME RECORD AREA 文節で SD 記入項目が指定されている場合には、レコード名-1 は、その文節内に指定されている他のファイルのレコードとして、まだ使用できます。

FROM ID-1 を指定した場合には、情報は ID-1 でまだ使用可能です。

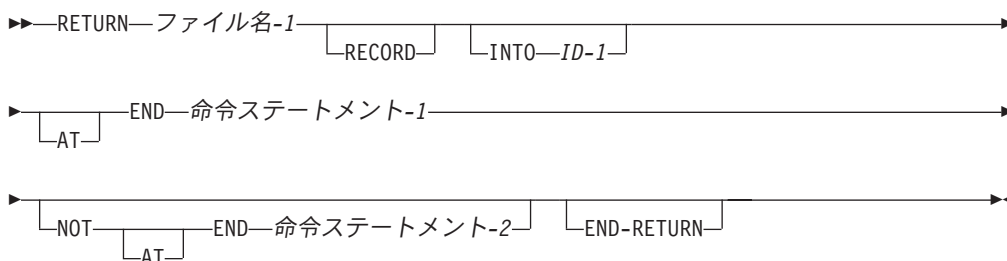
制御が INPUT PROCEDURE から渡されるときには、ソート・ファイルは、RELEASE ステートメントの実行により入れられたすべてのレコードから構成されています。

RETURN ステートメント

RETURN ステートメントは、ソートまたはマージの操作の最終フェーズから OUTPUT PROCEDURE ヘレコードを転送します。

RETURN ステートメントは、SORT または MERGE ステートメントと関連する出力プロシージャの範囲内でしか使用できません。

RETURN ステートメント - 形式



OUTPUT PROCEDURE の中には、少なくとも 1 つの RETURN ステートメントを指定しなければなりません。

RETURN ステートメントが実行されると、ファイル名-1 内の次のレコードが OUTPUT PROCEDURE による処理用に使用できるようになります。

ファイル名-1 および ID-1 に対応するレコード域は、同じ記憶域であってはなりません。

レコードは、レコード域と、ID-1 によって参照されるデータ項目の両方で使用可能になります。

ファイル名-1

ファイル名-1 は、データ部の SD 記入項目の中で記述されていなければなりません。

ファイル名-1 に複数のレコード記述が関連付けられている場合には、これらのレコードは自動的に同じ記憶域を共用します。つまり、それらは暗黙に再定義されます。RETURN ステートメントが実行された後、現行レコードの内容だけが使用可能になります。現行レコードの長さを超えて存在するデータ項目がある場合には、それらの内容は未定義となります。

INTO ID-1

この句によって、RETURN INTO ステートメントは次のステートメントと同等になります。

```
RETURN file-name-1
MOVE record-name TO identifier-1
```

IBM 拡張

ID-1 は、DBCS、浮動小数点、または日時データ項目とすることができます。

IBM 拡張 の終り

移動は、CORRESPONDING 句のない MOVE ステートメントの規則に従って実行されます。

現行レコードのサイズは、RECORD 文節について指定されている規則によって判別されます。ファイル記述記入項目に RECORD IS VARYING 文節が含まれている場合には、暗黙の MOVE はグループの移動となります。ただし、RETURN が成功しなければ、暗黙の MOVE は行われません。

ID-1 に関連する添え字付け、指標付け、または参照変更は、レコードが戻された後、ID-1 へ移動される直前に評価されます。

次の 1 つまたは両方が真の場合には、RETURN ステートメントに INTO 句を指定できます。

- ソート・マージ・ファイル記述記入項目に従属しているレコード記述が 1 つだけである。
- ファイル名-1 に関連付けられているすべてのレコード名、および ID-1 によって参照されているデータ項目が、グループ項目または基本英数字項目を記述している。

AT END 句

AT END 句に指定された命令ステートメント-1 は、すべてのレコードがファイル名-1 から戻された後で実行されます。これ以降は、現行の出力プロシージャの一部として RETURN ステートメントを実行することはできません。

RETURN ステートメントの実行時に AT END 条件が生じない場合には、レコードが使用可能になり、INTO 句の存在のために生じる暗黙の移動が実行された後で、制御権は NOT AT END 句によって指定されている命令ステートメントに移動されます。それ以外の場合には、制御権は RETURN ステートメントの終わりに渡されます。

END-RETURN 句

この明示範囲終了符号は、RETURN ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-RETURN 句を使用することによって、RETURN 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-RETURN 句は、RETURN 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

REWRITE ステートメント

REWRITE ステートメントは、直接アクセス・ファイル内に存在するレコードを論理的に置き換えます。

REWRITE ステートメントの実行時には、関連する直接アクセス・ファイルが I-O モードでオープンされていなければなりません。

IBM 拡張

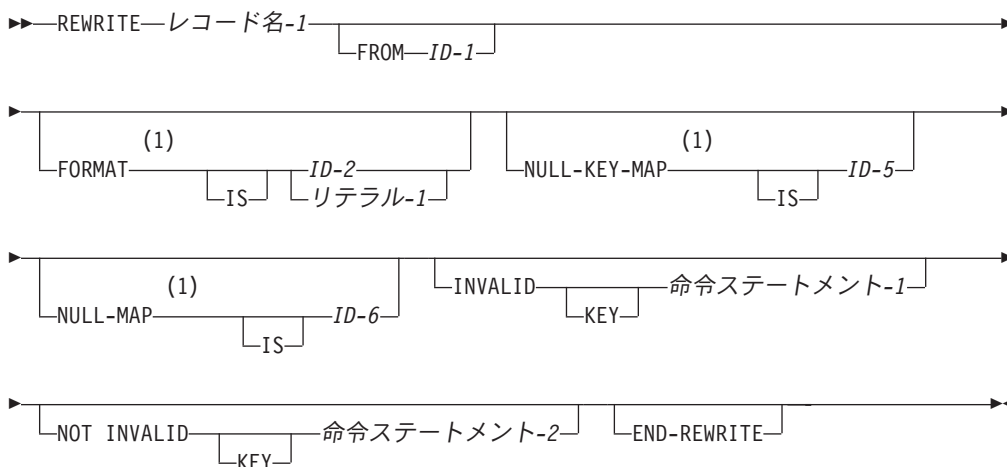
データベース・ファイル一時変更 (OVRDBF) CL コマンドの書き込み禁止 (INHWRIT) パラメーターによって、このステートメントの処置をプログラム実行時に禁止することができます。このパラメーターが指定されている場合には、データに依存するエラーがあっても、ゼロでないファイル状況コードは設定されません。データに依存するエラーの例として、重複キーおよびデータ変換エラーがあります。

このコマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

REWRITE ステートメント - 形式 1

REWRITE ステートメント - 形式 1



注:

1 IBM 拡張

レコード名-1

置き換えられるレコードと同じ数の文字桁を持つ、ファイル・セクション内のレコードの名前です。レコードの名前は参照変更できません。

ID-1

これは送り出し項目です。

FROM 句

この句は、次の効果をもちます。

```
MOVE identifier-1 TO record-name-1.
REWRITE record-name-1.
```

REWRITE ステートメントの処理が成功すると、現行レコードはレコード名-1では使用可能でなくなりますが、ID-1 ではまだ使用可能です。レコード名-1 と ID-1 の両方で同じ記憶域を参照してはなりません。

IBM 拡張

FORMAT 句

この句が適用されるのは、REWRITE ステートメントが、ASSIGN ファイルの装置タイプとして DATABASE が指定された索引付きファイルに対して実行される場合です。レコード形式が 1 つであるファイルを処理する場合には、この句の指定はオプションです。

FORMAT 句で指定する値には、この入出力操作で使用するレコード形式の名前が入ります。システムはこれを使用して、どのレコード形式に対して操作を行うかを指定または選択します。

ID-2 を指定する場合には、10 文字以下の英数字データ項目にしなければなりません。

リテラル-1 を指定する場合は、10 文字以下の大文字の文字ストリングにしなければなりません。

FORMAT 句を指定せずに、ランダム・アクセス・モードで索引付きファイルにアクセスする場合には、定義された最初の形式が使用されます。

全桁がブランクの値は、FORMAT 句が指定されなかった場合と同じ扱いになります。その値がファイルに対して有効でない場合は、9K の FILE STATUS が戻され、(そのファイルに適用可能であれば) USE プロシージャが呼び出されます。

NULL-KEY-MAP IS 句

466 ページの『NULL-KEY-MAP IS 句』のこの句についての説明を参照してください。

NULL-MAP IS 句

466 ページの『NULL-MAP IS 句』のこの句についての説明を参照してください。

IBM 拡張 の終り

INVALID KEY 句

この句は、索引編成ファイルと、ランダムまたは動的アクセスを持つ相対編成ファイルにおいて有効です。これは、レコード域内のキー・フィールドによって指定されたレコードが見つからない場合に処理されます。

INVALID KEY 条件が発生した場合、更新操作は行われません。レコード名の中のデータは影響を受けません。この句は、必要に応じて、対応する命令ステートメントに制御権を移動します。

REWRITE ステートメント

レコード名-1 について適用可能な EXCEPTION/ERROR プロシージャが指定されていない場合は、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

次のいずれかの場合に、INVALID KEY 条件が発生します。

- アクセス・モードが順次であり、置き換えられるレコードの基本 RECORD KEY に含まれる値が、ファイルの最後に検索されたレコードの基本 RECORD KEY データ項目の値と等しくない場合。
- 基本 RECORD KEY に含まれている値が、ファイル内のレコードのものとは等しくない場合。
- DUPLICATES が指定されていない ALTERNATE RECORD KEY データ項目の値は、ファイル内に既にあるレコードの値と同じです。

適用可能な USE プロシージャが指定されていないファイルに対しては、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

詳細は 296 ページの『共通の処理機能』の『INVALID KEY 条件』を参照してください。

装置タイプ DISK 上の順次にアクセスされる索引付きファイルの場合、この句は、置き換えられるレコードの RECORD KEY に含まれる値が、ファイルの最後に検出されたレコードの RECORD KEY データ項目と等しくない場合に処理されます。

NOT INVALID KEY 句

この句は、索引編成ファイルと、ランダムまたは動的アクセスを持つ相対編成ファイルに対して有効です。NOT INVALID KEY 句が指定されている REWRITE ステートメントの実行が正常に完了すると、制御権は、この句に関連する命令ステートメントに渡されます。

REWRITE ステートメントに関する考慮事項

REWRITE ステートメントの実行が正常に終了すると、レコードは、レコード名-1 では使用可能でなくなります。ただし、関連するファイルが SAME RECORD AREA 文節内で指定されている場合を除きます (この場合には、レコードは、SAME RECORD AREA 文節の中で指定されている他のファイルのレコードとしても使用可能です)。

ファイル位置標識は、REWRITE ステートメントの実行による影響を受けません。

FILE-CONTROL 記入項目に FILE STATUS 文節が指定されている場合は、REWRITE ステートメントの実行時に、関連する状況キーが更新されます。

順次ファイル

ファイルに対して実行された最後の入出力ステートメントが、正常に実行された READ ステートメントでなければなりません。置き換えられるレコードは、そのステートメントによって検索されたレコードです。

INVALID KEY および NOT INVALID KEY 句を指定してはなりません。EXCEPTION/ERROR プロシージャは指定できます。

順次編成のファイルについては、レコード名-1 の文字桁数は、置き換えられるレコードの文字桁数と等しくなければなりません。

索引付きファイル

順次アクセス・モードの場合には、ファイルに対して実行された最後の入出力ステートメントが、正常に実行された READ ステートメントでなければなりません。置き換えられるレコードは、そのステートメントによって検索されたレコードです。RECORD KEY データ項目の値は、レコードが読み取られてから変更されてはなりません。値が変更されていると、INVALID KEY 条件が発生します。

ランダムまたは動的アクセス・モードの場合には、置き換えられるレコードは、RECORD KEY データ項目内の値によって指定されます。ファイルに当該レコードがない場合には、INVALID KEY 条件が発生します。

EXCEPTION/ERROR プロシージャがファイルに定義されていない場合は、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

索引付き編成のファイルについては、レコード名-1 の文字桁数は、置き換えられるレコードの文字桁数と異なっても構いません。

IBM 拡張

ファイルに対して EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY が指定されているときには、FORMAT 句によって指定されている形式 (あるいは、FORMAT 句が使用されていない場合には、最初の形式) に対応するレコード域内にあるキー・データが、RECORD KEY データ項目の現行値を決定するために使用されます。

WITH DUPLICATES 句がファイルに指定されている場合には、すべてのアクセス・モード (順次、ランダム、動的) において、ファイルに対して実行された最後の入出力ステートメントが、正常に実行された READ ステートメントでなければなりません。置き換えられるレコードは、そのステートメントによって検索されたレコードです。RECORD KEY データ項目の値は、レコードが読み取られてから変更されてはなりません。値が変更されていると、INVALID KEY 条件が発生します。

注: 重複キーがファイル内にあるような場合に正しいレコードが置き換えられるようにするには、READ ステートメントが必要です。重複キーを持つ一連のレコードのうちの特定の 1 つのレコードを再書き込みする唯一の方法は、各レコードを順次に読み取り、識別したあとで、該当するレコードを再書き込みすることです。

IBM 拡張 の終り

相対ファイル

順次アクセス・モードの場合には、ファイルに対して実行された最後の入出力ステートメントが、正常に実行された READ ステートメントでなければなりません。置き換えられるレコードは、そのステートメントによって検索されたレコードです。INVALID KEY および NOT INVALID KEY 句を指定してはなりません。EXCEPTION/ERROR プロシージャは指定できます。

ランダムまたは動的アクセス・モードの場合には、置き換えられるレコードは、RELATIVE KEY データ項目内の値によって指定されます。ファイルに当該レコー

REWRITE ステートメント

ドがない場合には、INVALID KEY 条件が発生します。EXCEPTION/ERROR プロシージャがファイルに定義されていない場合は、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

相対編成のファイルについては、レコード名-1 の文字桁数は、置き換えられるレコードの文字桁数と異なっていても構いません。

レコード・ロック

IBM 拡張

以下のファイル・タイプの REWRITE ステートメントの前に、READ ステートメントを正常に実行しておく必要があります。

- 順次編成のファイル
- 順次アクセス・モードを使用したファイル
- 索引付き編成で、複写キーを持つファイル

このような READ ステートメントには NO LOCK 句を入れてはいけません。READ ステートメントによって選択されているレコードを置き換えようとしており、そのレコードが読み取られたときにロックされなかった場合には、REWRITE ステートメントは正常に実行されません。

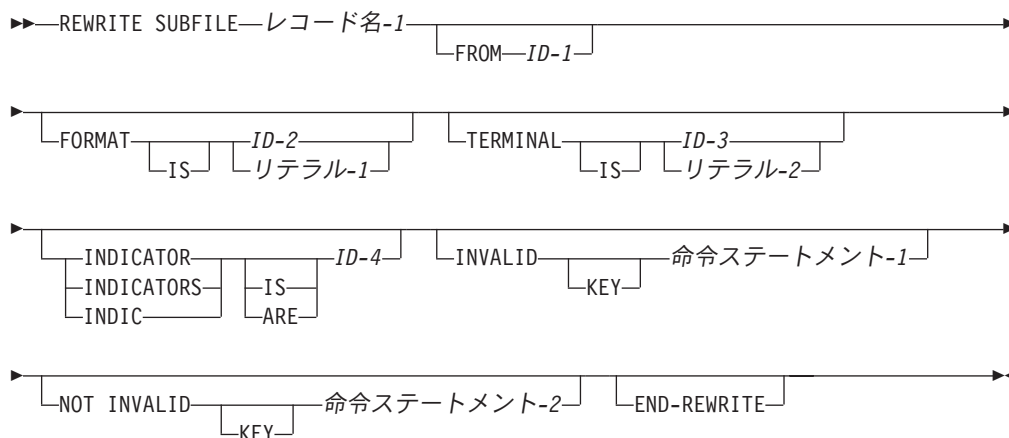
IBM 拡張 の終り

トランザクション (サブファイル) 形式

IBM 拡張

REWRITE ステートメントは、すでにサブファイル内に存在するサブファイル・レコードを置き換える場合に使用されます。

REWRITE ステートメント - 形式 2 - トランザクション (サブファイル)



レコード名-1 によって参照されるレコードの文字桁数は、置き換えられるレコードの文字桁数と等しくなければなりません。再書き込み操作に先立って、レコードの

読み取り操作を正常に実行しなければなりません。サブファイル内の置き換えられるレコードは、直前の読み取り操作でアクセスされたレコードです。

FORMAT 句

トランザクション・ファイルの場合には、それぞれ異なる形式を持つ複数のデータ・レコードを同時に活動状態にすることができます。FORMAT 句を指定する場合には、システムに定義されている有効な形式名を指定しなければなりません。また、同じ形式のデータ・レコードに対して入出力操作を実行しなければなりません。形式が無効な名前であるかまたは存在しない場合には、FILE STATUS データ項目 (指定されている場合) の値が 9K に設定され、レコード域の内容が未定義になります。

注:

1. FORMAT 句に指定するレコード形式は、直前の読み取り操作でアクセスされたレコード形式でなければなりません。
2. ID-2 の内容またはリテラル-1 は、直前の READ でアクセスされたサブファイル形式の名前でなければなりません。

TERMINAL 句

TERMINAL 句は、どのプログラム装置のサブファイルにレコードを再書き込みするのかを指示します。TERMINAL 句を指定する場合、リテラル-2 および ID-3 では、トランザクション・ファイルによって獲得されたワークステーションを参照しなければなりません。リテラル-2 または ID-3 がブランク桁である場合は、TERMINAL 句は無効です。TERMINAL 句によって指定されるプログラム装置は、明示的または暗黙に獲得されていなければならず、関連付けられたサブファイルをもっていなければなりません。

リテラル-2 または ID-3 は、有効なプログラム装置名でなければなりません。リテラル-2 を指定する場合には、10 文字以下の非数字にしなければなりません。ID-3 を指定する場合は、10 文字以下の英数字データ項目を参照しなければなりません。

複数のプログラム装置を獲得しているトランザクション・ファイルから TERMINAL 句が省略された場合、使用されるサブファイルは、そのトランザクション・ファイルの READ が試みられた最後のプログラム装置に関連付けられているサブファイルです。

REWRITE ステートメントを通信装置に対して使用することはできません。

REWRITE ステートメントを通信装置に対して使用すると、操作が失敗し、ファイル状況が 90 に設定されます。

INDICATOR 句、INDICATORS 句、INDIC 句

データ・レコードが再書き込みされるときに使用される標識を指定します。標識は、データ・レコードについての情報と、それがプログラムに入力された方法を渡すために使用できます。

INDICATORS 句の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『トランザクション・ファイルに関する標識の使用』を参照してください。

ID-4 は、OCCURS 文節なしで指定された基本プール・データ項目か、または基本データ・プールの項目が従属しているグループ項目でなければなりません。

REWRITE ステートメント

INVALID KEY 句

再書き込み操作時に、RELATIVE KEY データ項目に含まれる値が、直前の読み取り操作からのレコードの相対レコード番号と一致しない場合は、INVALID KEY 条件が生じます。

該当する USE プロシージャが指定されていないファイルについては、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。INVALID KEY 句が指定されておらず、USE プロシージャも指定されていない場合は、望ましくない結果が生じることがあります。

NOT INVALID KEY 句

NOT INVALID KEY 句が指定されている REWRITE ステートメントの実行が正常に完了すると、制御権は、この句に関連する命令ステートメントに渡されます。

END-REWRITE 句

この明示範囲終了符号は、REWRITE ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-REWRITE 句を使用することによって、REWRITE 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-REWRITE 句は、REWRITE 命令ステートメントで使用することもできます。詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

ROLLBACK ステートメント

IBM 拡張

ROLLBACK ステートメントは、データベース・レコードに対する 1 つまたは複数の変更を永続化すべきでないときに、それらを取り消す手段となります。

ROLLBACK ステートメント - 形式

▶▶—ROLLBACK—◀◀

ROLLBACK ステートメントが実行されると、最後のコミットメント境界以降にコミットメント制御下のファイルに対して行われたすべての変更が、データベースから除去されます。ファイルが OUTPUT 用にオープンされているときに消去されると、ROLLBACK ステートメントを実行しても、消去されたレコードがファイルに復元されないことに注意してください。

コミットメント境界とは、ROLLBACK または COMMIT ステートメントの前のオカレンスを指します。COMMIT または ROLLBACK が出されていなかった場合、コミットメント境界は、コミットメント制御下のファイルの最初の OPEN です。変更の除去は、ROLLBACK を発行する COBOL プログラム内のコミットメント制御下のファイルに対してだけでなく、コミットメント制御下にあるすべてのファイルに対して行われます。

ROLLBACK が正常に実行されると、コミットメント制御下のファイルに対して保持されていたすべてのレコード・ロックが解放され、レコードが他のジョブにとって使用可能になります。コミットメント制御は、ジョブ・レベルまたは活動化グループ・レベルで範囲を限定できます。(コミットメント制御は、デフォルトによって、活動化グループ・レベルで範囲が限定されます。)

ROLLBACK は、コミットメント制御下でないファイルには影響しません。ROLLBACK が実行され、コミットメント制御下にあるファイルがない場合は、ROLLBACK は無視されます。

コミットメント制御下のファイルは、最後のコミットメント境界以降に行われた変更の状況に影響を与えずに、オープンまたはクローズすることができます。なお、変更を永続的なものにするには、COMMIT を出さなければなりません。ROLLBACK が実行されると、ファイルは、実行前と同じオープンまたはクローズ状態に置かれます。

ROLLBACK ステートメントは、次のことは行いません。

- どのファイルの I-O-FEEDBACK 域も修正しません。
- どのファイルのファイル状況値も設定しません。

ROLLBACK ステートメントに対して、以下の考慮事項が適用されます。

- ROLLBACK ステートメントは、ファイル位置標識を前のコミットメント境界での位置に設定します。順次処理を行っている場合には、このことを覚えておくことが大切です。

ROLLBACK ステートメント

- ファイルがオープンされてから COMMIT ステートメントが発行されていない場合には、ROLLBACK ステートメントは、ファイル位置標識を OPEN 時の位置に設定します。
- 変更がコミットされないままファイルがクローズされている場合には、ROLLBACK 後にファイル位置標識は未定義となります。

コミットメント制御の範囲がジョブ・レベルで限定される場合には、それぞれのジョブの終わりでコミットメント制御下のすべてのファイルに対して、コミットされていないレコードの暗黙の ROLLBACK が自動的に行われます。データベースに対してコミットされていない変更が取り消されます。

コミットメント制御の範囲が活動化グループ・レベルで限定される場合には、活動化グループが正常に終了するときに、暗黙のコミットが起きます。活動化グループが異常に終了すると、暗黙の ROLLBACK が起きます。

コミットメント制御の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

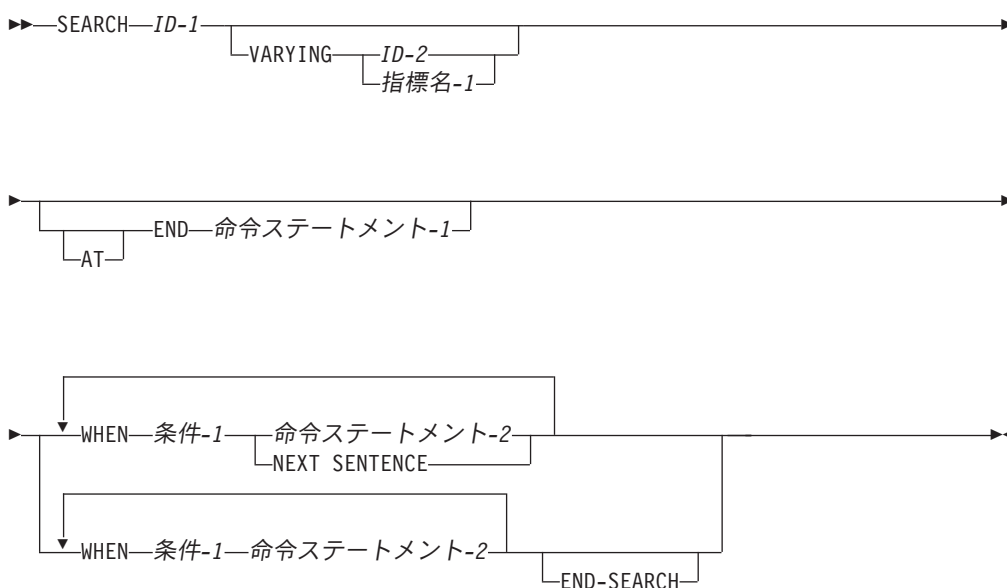
SEARCH ステートメント

SEARCH ステートメントは、指定された条件を満たすエレメントを見つけるためにテーブルを検索し、関連する指標がそのエレメントを指し示すように調整します。

- SEARCH ステートメントに関する考慮事項
- SEARCH の例

SEARCH ステートメント - 形式 1 - 逐次検索

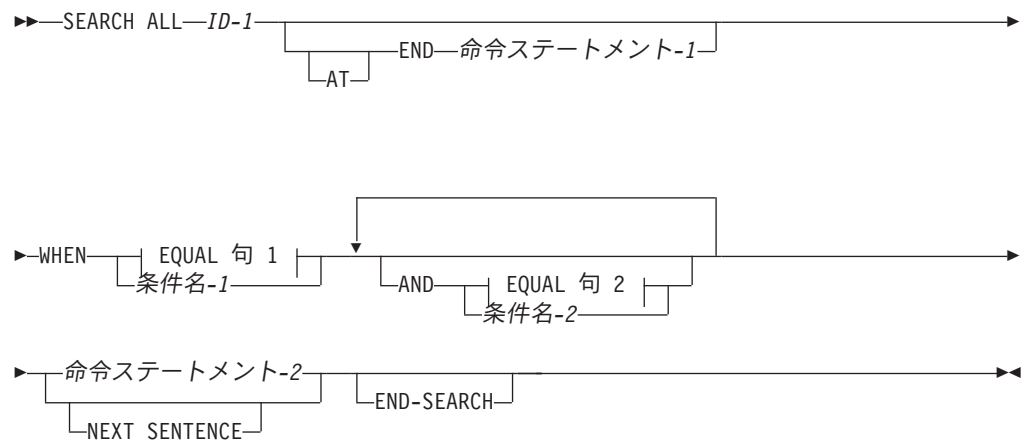
SEARCH ステートメント - 形式 1 - 逐次検索



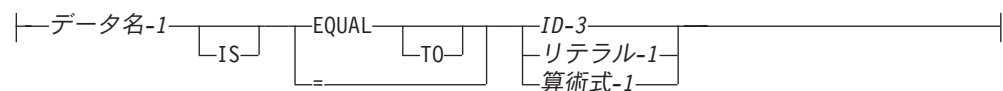
- 逐次検索の実行

SEARCH ステートメント - 形式 2 - 二分検索

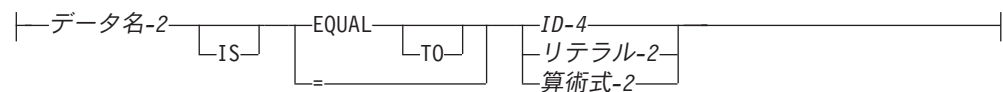
SEARCH ステートメント - 形式 2 - 二分検索



EQUAL 句 1:



EQUAL 句 2:



• 二分検索の実行

ID-1

OCCURS 文節を含むデータ項目に從属するデータ項目を指定できます。つまり、多次元テーブルの一部を指定できます。この場合には、データ記述記入項目で、テーブルの各次元について INDEXED BY 句が指定されていなければなりません。

IBM 拡張

ID-1 には、浮動小数点データ項目を含むテーブル、DBCS 項目を含むテーブル、または、日時項目を含むテーブルを指定できます。

IBM 拡張 の終り

ID-1 は、テーブル・エレメント内のすべてのオカレンスを指している必要があります。つまり、添え字が付けられたり、参照変更されてはなりません。

ID-1 のデータ部の記述には、INDEXED BY 句を伴う OCCURS 文節が入ってなければなりません。

SEARCH ステートメント

SEARCH ステートメントの実行によって変更されるのは、ID-1 に関連する指標名の値と、もし存在する場合は、指標名-1 または ID-2 の値だけです (497 ページの『VARYING 句』を参照してください)。したがって、2 次元から 7 次元のテーブル全体を検索する場合には、各次元に対して SEARCH ステートメントを実行しなければなりません。それぞれの実行の前に、SET ステートメントを実行して、関連する指標名を初期設定し直さなければなりません。

AT END/WHEN 句

命令ステートメント-1 または命令ステートメント-2 が実行された後、命令ステートメント-1 または命令ステートメント-2 が GO TO ステートメントで終わらない限り、制御は SEARCH ステートメントの終わりに渡されます。

条件-1

条件-1 は 267 ページの『条件式』で記述されている条件にすることができます。

IBM 拡張

条件-1 には、DBCS 比較または DBCS 条件名条件を含めることができます。

IBM 拡張 の終り

NEXT SENTENCE 句

この句を指定すると、制御権が、次の分離文字ピリオドの直前の暗黙の CONTINUE ステートメントに渡されます。NEXT SENTENCE 句を指定する場合には、END-SEARCH 句を指定してはなりません。

END-SEARCH 句

この明示範囲終了符号は、SEARCH ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-SEARCH 句を使用することによって、SEARCH 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。END-SEARCH 句を指定する場合には、NEXT SENTENCE 句を指定することはできません。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

逐次検索

形式 1 の SEARCH ステートメントでは、現在設定されている指標から開始して、逐次検索が実行されます。検索開始時に、ID-1 と関連する指標名の値が可能な最大オカレンス番号以下である場合には、次の処理が行われます。

- WHEN 句の中の条件が、それらが書かれている順序で評価されます。
- 条件がどれも満たされない場合には、ID-1 についての指標名が次のテーブル・エレメントに対応するように増やされてから、ステップ 1 が繰り返されます。
- 評価時に WHEN 条件の 1 つが満たされた場合には、検索はただちに終了し、その条件に関連した命令ステートメントが実行されます。指標名は、条件を満たしたテーブル・エレメントを指します。NEXT SENTENCE が指定されている場合には、最も近いピリオドの後のステートメントに制御が渡されます。

- WHEN 条件が満たされないままテーブルの終わりに達した (すなわち、増やされた指標名の値が可能な最大オカレンス番号より大きくなった) 場合には、以下に説明されているように検索が終了されます。

検索開始時に、ID-1 と関連する指標名の値が可能な最大オカレンス番号よりも大きい場合には、検索は直ちに終了し、AT END 命令ステートメントが指定されていれば実行されます。AT END 句が省略されている場合には、制御は SEARCH ステートメントの後の次のステートメントに移されます。

VARYING 句

指標名-1

次のいずれかの処理が適用されます。

- 指標名-1 が ID-1 についての指標である場合には、この指標が検索に使用されます。そうでない場合には、最初の (または唯一の) 指標名が使用されません。
- 指標名-1 が別のテーブル・エレメントについての指標である場合には、ID-1 についての最初の (または唯一の) 指標名が検索に使用されます。指標名-1 によって表されるオカレンス番号は、検索指標名と同じだけ、同じときに増やされます。

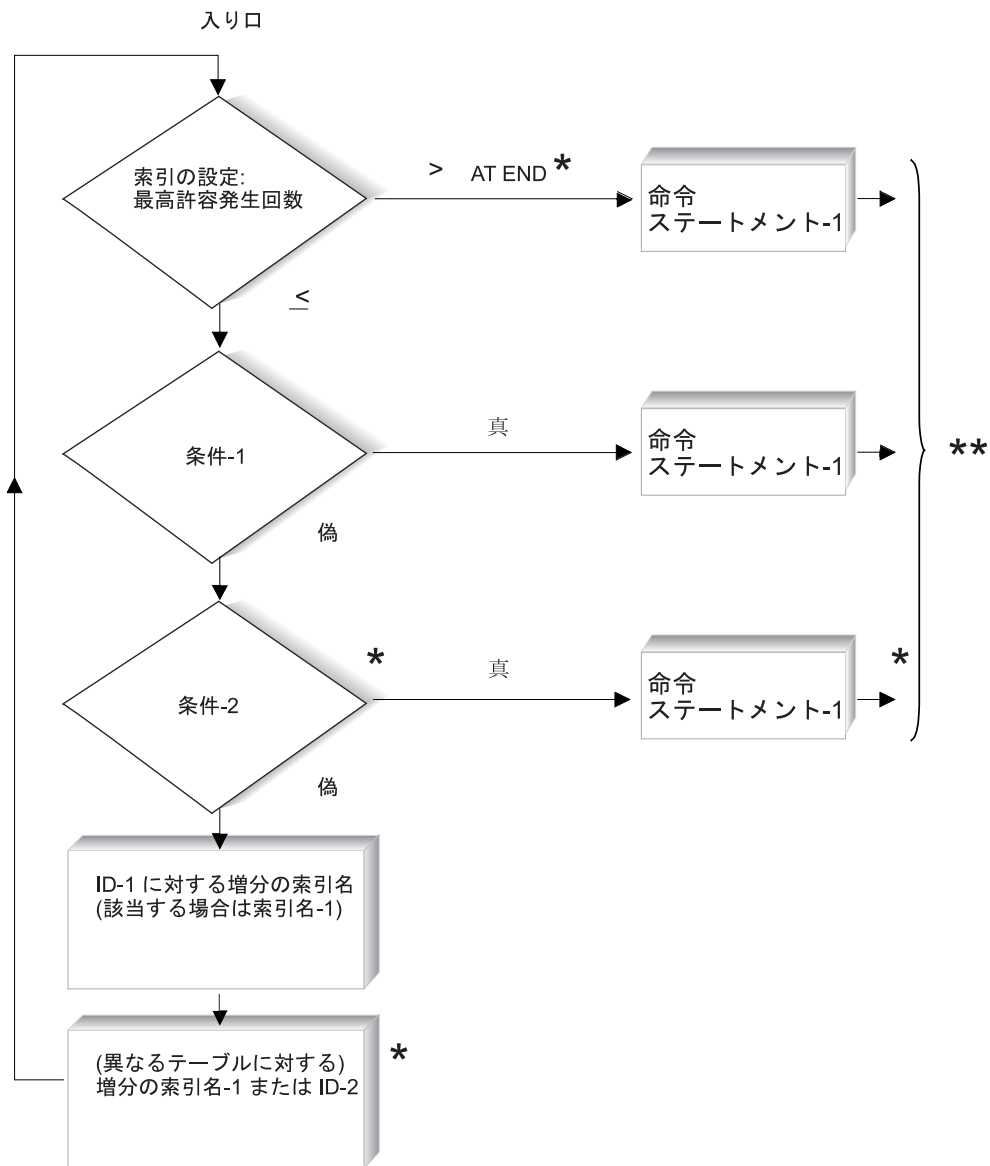
VARYING 指標名-1 句が省略されている場合には、ID-1 についての最初の (または唯一の) 指標名が検索に使用されます。

ID-2

ID-2 は、指標データ項目または基本整数項目のいずれかでなければなりません。検索中には、次のいずれかの処理が適用されます。

- ID-2 が指標データ項目である場合には、検索指標が増やされるたびに、指定された指標データ項目が同時に同じだけ増やされます。
- ID-2 が整数データ項目である場合には、検索指標が増やされるたびに、指定されたデータ項目が同時に 1 だけ増やされます。

図 23 は、2 つの WHEN 句を持つ形式 1 の SEARCH 操作を示しています。



* この操作は、ステートメントの中で要求された場合に限り含まれます。

** 命令ステートメントが GO TO ステートメントで終了しない限り、制御は次の文に転送されます。

* この操作は、ステートメントの中で要求された場合に限り含まれます。

** 命令ステートメントが GO TO ステートメントで終了しない限り、制御は次の文に転送されます。

図 23. 2 つの WHEN 句を持つ形式 1 の SEARCH

二分検索

形式 2 の SEARCH ALL ステートメントでは、二分検索が実行されます。 検索指標は、その設定値が最初のテーブル・エレメントの値より小さくならず、また最後のテーブル・エレメントの値より大きくならないように検索操作中に変化するの

で、SET ステートメントによって初期設定する必要はありません。使用される指標は、常に、OCCURS 文節で指定された最初の指標名に関連する指標です。

ID-1

OCCURS 文節を含むデータ項目に従属するデータ項目を指定できます。つまり、2 ～ 7 次元テーブルの一部を指定できます。この場合には、データ記述記入項目で、テーブルの各次元について INDEXED BY 句が指定されていなければなりません。

検索を行う前に、特定のテーブルの ID-1 のエレメントを定義するために、すべての指標の値をより高い次元のテーブル用に設定することが必要です。

ID-1 は、テーブル・エレメント内のすべてのオカレンスを指していなければなりません。つまり、添え字付けまたは指標付けされてはなりません。

ID-1 は、ポインター・データ項目またはプロシージャ・ポインター・データ項目にすることはできません。

IBM 拡張

ID-1 は、浮動小数点データ項目にすることができません。

ASCENDING/DESCENDING KEY が DBCS データ項目として定義される場合、ID-1 は DBCS データ項目にすることができます。

ASCENDING/DESCENDING KEY が日時データ項目として定義される場合、ID-1 は日時データ項目にすることができます。

IBM 拡張 の終り

ID-1 のデータ部の記述には、INDEXED BY オプションを伴う OCCURS 文節が入っていなければなりません。形式-2 の場合は、データ部の記述の OCCURS 文節に KEY IS 句も入っていなければなりません。

WHEN 句

WHEN 句がこの範囲内の指標の設定値について満たされない場合には、検索は失敗します。

WHEN オプションが満たされた場合には、制御が命令ステートメント-2 に渡され、WHEN 条件を満たしたオカレンスを示す値が指標に入ります。

条件名-1、条件名-2

指定される各条件名は、値を 1 つだけもたなければならず、また、それぞれがこのテーブル・エレメントについての ASCENDING/DESCENDING KEY ID と関連付けられなければなりません。

データ名-1、データ名-2

ID-1 のテーブル・エレメント内の ASCENDING/DESCENDING KEY データ項目を指定しなければなりません。さらに、ID-1 の最初の指標名と、他の指標またはリテラル (必要であれば) によって指標付けされなければなりません。各データ名は修飾できます。

IBM 拡張

データ項目-1 またはデータ項目-2 は、浮動小数点データ項目にすることができます。

SEARCH ステートメント

ません。データ名-1 またはデータ名-2 は、日時データ項目にすることができます。

IBM 拡張 の終り

ID-3、ID-4

ID-1 についての ASCENDING/DESCENDING KEY データ項目、または ID-1 についての最初の指標名によって指標付けされた項目であってはなりません。

ポインターまたはプロシーチャー・ポインター・データ項目であってはなりません。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目にすることも、日時データ項目にすることもできます。

IBM 拡張 の終り

算術式-1、算術式-2

265 ページの『算術式』で定義されている任意の式にすることができますが、次の制約があります。つまり、算術式内の ID は、ID-1 についての ASCENDING/DESCENDING KEY データ項目、または ID-1 についての最初の指標名によって指標付けされた項目であってはなりません。

WHEN 句の中で ASCENDING/DESCENDING KEY データ項目が暗黙または明示的に指定される場合には、ID-1 についてのすべての先行 ASCENDING/DESCENDING KEY データ名も指定されなければなりません。

SEARCH ALL 操作の結果は、次の場合にだけ予測できます。

- テーブル内のデータが ASCENDING/DESCENDING KEY 句に従って順序付けられている。
- WHEN 文節で指定された ASCENDING/DESCENDING KEY の内容によって、固有なテーブル参照がもたらされる。

SEARCH ステートメントに関する考慮事項

指標データ項目は、それに対する直接参照の制約があるために、添え字として使用することはできません。

同じ指標名に対して相対指標付け参照と一緒に直接指標付け参照も使用することによって、テーブル・エレメントの 2 つの異なるオカレンスを比較の目的で参照できます。

VARYING オプションの対象が他のテーブル・エレメントについての指標名である場合には、形式 1 の SEARCH ステートメント 1 つで、2 つのテーブル・エレメントを同時に進むことができます。

可変長テーブルに対して SEARCH ステートメントが正しく実行されるようにするためには、OCCURS DEPENDING ON 文節の対象 (データ名-1) に、テーブルの現在の長さを指定する値を含めるようにしなければなりません。

SEARCH ステートメントの範囲は、次のいずれかによって終了させることができます。

- 同じネスト・レベルの END-SEARCH 句
- 分離文字ピリオド
- 直前の IF ステートメントに関連する ELSE または END-IF 句

SEARCH の例

次の例では、入力データと一致する品目を見つけるために在庫テーブルを検索します。キーは ITEM-NUMBER です。

.. 1 2 3 4 5 6 7

```

DATA DIVISION.
FILE SECTION.
FD SALES-DATA
  BLOCK CONTAINS 1 RECORDS
  RECORD CONTAINS 80 CHARACTERS
  LABEL RECORDS STANDARD
  DATA RECORD IS SALES-REPORTS.
01 SALES-REPORTS          PIC X(80).
FD PRINTED-REPORT
  BLOCK CONTAINS 1 RECORDS
  RECORD CONTAINS 132 CHARACTERS
  LABEL RECORDS OMITTED
  DATA RECORD IS PRINTER-OUTPUT.
01 PRINTER-OUTPUT       PIC X(132).
FD INVENTORY-DATA
  BLOCK CONTAINS 1 RECORDS
  RECORD CONTAINS 40 CHARACTERS
  LABEL RECORDS STANDARD
  DATA RECORD IS INVENTORY-RECORD.
01 INVENTORY-RECORD.
  03 I-NUMBER            PIC 9(4).
  03 INV-ID              PIC X(26).
  03 I-COST              PIC 9(8)V99.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 EOF-SW               PIC X      VALUE "N".
01 EOF-SW2              PIC X      VALUE "N".
01 SUB1                  PIC 99.
01 RECORDS-NOT-FOUND    PIC 9(5)   VALUE ZEROS.
01 TOTAL-COSTS          PIC 9(10)  VALUE ZEROS.
01 HOLD-INPUT-DATA.
  03 INVENTORY-NUMBER   PIC 9999.
  03 PURCHASE-COST      PIC 9(4)V99.
  03 PURCHASE-DATE      PIC 9(6).
  03 FILLER              PIC X(64).
01 PRINTER-SPECS.
  03 PRINT-LINE.
    05 OUTPUT-ITEM-NUMBER PIC ZZZ9.
    05 FILLER              PIC X(48) VALUE SPACES.
    05 TOTAL-COSTS-0       PIC $(8).99.
01 PRODUCT-TABLE.
  05 INVENTORY-NUMBERS   OCCURS 50 TIMES
                        ASCENDING KEY ITEM-NUMBER
                        INDEXED BY INDEX-1.
                        07 ITEM-NUMBER      PIC 9(4).
                        07 ITEM-DESCRIPTION PIC X(26).
                        07 ITEM-COST        PIC 9(8)V99.

```

.. 1 2 3 4 5 6 7

```

PROCEDURE DIVISION.
100-START-IT.
  OPEN INPUT SALES-DATA INVENTORY-DATA OUTPUT PRINTED-REPORT.
  MOVE HIGH-VALUES TO PRODUCT-TABLE.
  PERFORM READ-INVENTORY-DATA.
LOAD-TABLE-ROUTINE.

```

SEARCH ステートメント

```
PERFORM LOAD-IT VARYING SUB1 FROM 1 BY 1 UNTIL SUB1 > 50
OR EOF-SW2 = "Y".
PERFORM 110-READ-IT.
200-MAIN-ROUTINE.
PERFORM PROCESS-DATA UNTIL EOF-SW = "Y".
MOVE TOTAL-COSTS TO TOTAL-COSTS-0.
PERFORM WRITE-REPORT THRU WRITE-REPORT-EXIT.
DISPLAY "RECORDS NOT FOUND - " RECORDS-NOT-FOUND
UPON MYTUBE.
STOP RUN.
PROCESS-DATA.
SEARCH ALL INVENTORY-NUMBERS
AT END PERFORM KEY-NOT-FOUND THRU NOT-FOUND-EXIT
WHEN ITEM-NUMBER (INDEX-1) = INVENTORY-NUMBER
MOVE ITEM-NUMBER (INDEX-1) TO OUTPUT-ITEM-NUMBER
MOVE ITEM-COST (INDEX-1) TO TOTAL-COSTS-0
ADD ITEM-COST (INDEX-1) TO TOTAL-COSTS
PERFORM WRITE-REPORT THRU WRITE-REPORT-EXIT.
PERFORM 110-READ-IT.
KEY-NOT-FOUND.
ADD 1 TO RECORDS-NOT-FOUND.
NOT-FOUND-EXIT.
EXIT.
LOAD-IT.
MOVE INVENTORY-RECORD TO INVENTORY-NUMBERS (SUB1).
PERFORM READ-INVENTORY-DATA.
WRITE-REPORT.
WRITE PRINTER-OUTPUT FROM PRINTER-SPECS.
WRITE-REPORT-EXIT.
EXIT.
READ-INVENTORY-DATA.
READ INVENTORY-DATA
AT END MOVE "Y" TO EOF-SW2.
110-READ-IT.
READ SALES-DATA INTO HOLD-INPUT-DATA
AT END MOVE "Y" TO EOF-SW.
```

SET ステートメント

SET ステートメントは、以下のことを行うために使用できます。

- テーブル・エレメントを参照するのに使用される指標名または ID の値を初期設定する
- 指標名の値を増加または減少させる
- 外部スイッチの状況を ON または OFF に設定する
- 条件変数条件を真にするためにデータを移動する

IBM 拡張

- ポインターおよびプロシージャ・ポインター・データ項目と ADDRESS OF 特殊レジスターを設定する
- 現行ロケールのロケール・カテゴリーを設定および照会する。

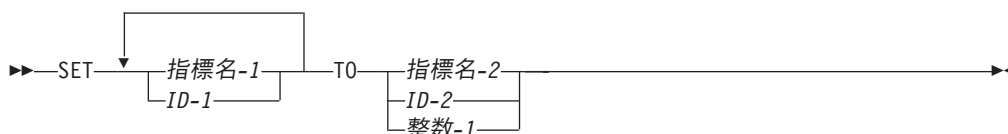
IBM 拡張 の終り

SET ステートメント内の送り出しフィールドと受け入れフィールドが記憶域の一部を共有している (すなわち、オペランドがオーバーラップしている) 場合には、その SET ステートメントの実行結果は未定義です。

形式 1 - 指標名、ID の初期設定

形式 1 の SET ステートメントが実行されると、受け入れフィールドの現行値が送り出しフィールドの値によって置き換えられます (変換を伴います)。

SET ステートメント - 形式 1



指標名-1、ID-1

受け入れフィールド。

指標データ項目または基本数字整数項目のいずれかでなければなりません。

IBM 拡張

ID-1 は、浮動小数点データ項目にすることができません。

IBM 拡張 の終り

指標名-2

送り出しフィールド。

SET ステートメント実行前の指標名-2 の値は、それに関連するテーブルのオカレンス番号と一致していなければなりません。

ID-2

送り出しフィールド。

指標データ項目または基本数字整数項目のいずれかでなければなりません。

IBM 拡張

ID-2 は、浮動小数点データ項目にすることができません。

IBM 拡張 の終り

整数-1

送り出しフィールド。

正の整数でなければなりません。

形式 1 の SET ステートメントの実行方法は、次のように受け入れフィールドのタイプによって異なります。

- 指標名の受け入れフィールド (指標名-1 など) は、通常、送り出しフィールドによって指示されたオカレンス番号を表す変位値に変換されます。結果としての指標名の値が有効になるのは、関連するテーブル・エレメントのオカレンス番号と一致している場合です。1 つの例外として、送り出しフィールドが指標データ項目である場合には、指標データ項目の値は変換されずに指標名へ入れられます。

SET ステートメント

- 指標データ項目の受け入れフィールド (ID-1 など) は、送り出しフィールドの内容 (指標名または指標データ項目でなければならない) と等しく設定されます。変換は行われません。数字整数またはリテラルの送り出しフィールドを指定してはなりません。
- 整数データ項目の受け入れフィールド (ID-1 など) は、送り出しフィールド (指標名でなければならない) に関連付けられたオカレンス番号に設定されます。整数データ項目、指標データ項目、またはリテラルの送り出しフィールドを指定してはなりません。

表 32 に、形式 1 の SET ステートメントでの送り出しフィールドと受け入れフィールドの有効な組み合わせを示します。

表 32. 形式 1 の SET ステートメントに関する送り出しフィールドおよび受け入れフィールド

送り出しフィールド	受け入れフィールド		
	指標名	指標データ項目	整数データ項目
指標名	有効	有効	有効
指標データ項目	有効*	有効*	-
整数データ項目	有効	-	-
整数リテラル	有効	-	-

* 変換は行われません。

受け入れフィールドは、それらが指定された順序で左から右に処理されます。ID の受け入れフィールドに関連する添え字付けまたは指標付けは、フィールドが処理される直前に評価されます。

送り出しフィールドに使用される値は、SET ステートメントの実行開始時の値です。

SEARCH または PERFORM ステートメントの実行後には、指標名の値が未定義になることがあります。このため、他のテーブル処理操作が試みられる前に、形式 1 の SET ステートメントによってそのような指標名を再び初期設定しなければなりません。

IBM 拡張

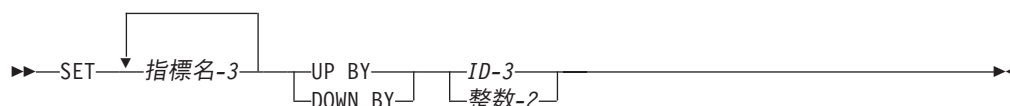
指標名-2 が OCCURS DEPENDING ON 文節を含む従属項目を持つテーブルを参照する場合、指標名-1 は未定義の値を受け取る可能性があります。詳細は 725 ページの『付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

形式 2 - 指標値の調整

形式 2 の SET ステートメントが実行されると、受け入れフィールドの値が、送り出しフィールド内の値と一致する値だけ増加 (UP BY) または減少 (DOWN BY) されます。

SET ステートメント - 形式 2



指標名-3

この指標名の値は、SET ステートメントの実行前と実行後の両方で、関連するテーブル内のオカレンス番号と一致していなければなりません。

ID-3

この送り出しフィールドは基本整数データ項目でなければなりません。

IBM 拡張

ID-3 は、浮動小数点データ項目にすることができません。

IBM 拡張 の終り

整数-2

この送り出しフィールドは整数でなければなりません。

形式 2 の SET ステートメントが実行されると、受け入れフィールドの値が、ID-3 または整数-2 の値によって表されているオカレンスの番号と一致する値だけ増加 (UP BY) または減少 (DOWN BY) されます。

IBM 拡張

指標名-3 が OCCURS DEPENDING ON 文節を含む従属項目を持つテーブルを参照し、形式 2 の SET ステートメントの実行前に、この ODO オブジェクトが変更された場合、指標名-3 には、関連するテーブルのオカレンス番号に対応する値が含まれていない可能性があります。詳細は 725 ページの『付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

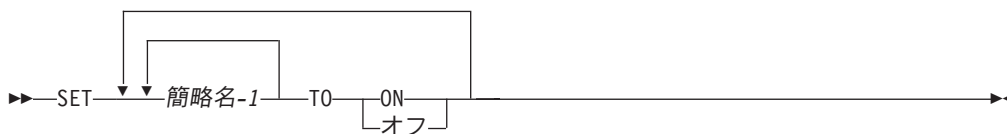
受け入れフィールドは、それらが指定された順序で左から右に処理されます。SET ステートメントの実行開始時点でのフィールドの増加または減少の値は、すべての受け入れフィールドで使用されます。

形式 3 - 外部スイッチの設定

形式 3 の SET ステートメントが実行されると、指定された簡略名に関連するそれぞれの外部スイッチの状況が ON または OFF になります。

SET ステートメント

SET ステートメント - 形式 3



簡略名

状況を変更できる外部スイッチと関連付けられなければなりません。

形式 3 の場合、各簡略名は、状況を変更できる外部スイッチと関連付けられなければなりません。使用できる外部スイッチは、UPSI-0 から UPSI-7 までの UPSI スイッチだけです。

指定された簡略名と関連する各外部スイッチの状況は、そのスイッチと関連する条件名の評価の結果としての真理値が、ON 句が指定された場合にはオンの状況、OFF 句が指定された場合にはオフの状況を反映するように変更されます。

形式 4 - 条件名

形式 4 の SET ステートメントが実行されると、条件名に関連する値がその条件変数に入られます。

SET ステートメント - 形式 4



条件名-1

条件変数に関連付けられなければなりません。

条件名-1 の VALUE 文節に複数のリテラルが指定されると、それに関連する条件変数は最初のリテラルに設定されます。

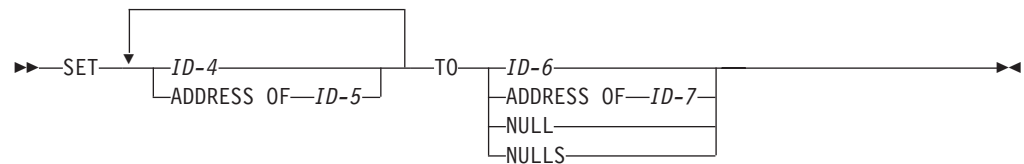
複数の条件名が指定された場合、結果は、それぞれの条件名について、それらが指定されているのと同じ順序で別々の SET ステートメントが書かれた場合と同じになります。

形式 5 - ポインター・データ項目

IBM 拡張

形式 5 の SET ステートメントが実行されると、受け入れフィールドの現行値が送り出しフィールドに含まれるアドレス値によって置き換えられます。

SET ステートメント - 形式 5

**ID-4**

受け入れフィールド。

これは、USAGE IS POINTER として記述されていなければなりません。

ADDRESS OF ID-5

受け入れフィールド。

これは ADDRESS OF 特殊レジスターです。

リンケージ・セクションで定義されたレベル 01 またはレベル 77 の項目でなければなりません。TO 句で指定されたオペランドの値に設定されます。添え字付けまたは参照変更することはできません。

ID-6

送り出しフィールド。

これは、USAGE IS POINTER として記述されていなければなりません。

プログラム自体の作業用ストレージ・セクション、ローカル・ストレージ・セクションまたはファイル・セクション内のアドレスが入ってはいけません。

ADDRESS OF ID-7

送り出しフィールド。

データ部のセクションのレベル 66 または 88 以外の項目でなければなりません。

ADDRESS OF ID-7 には、ID の内容ではなく、そのアドレスが入ります。ID-7 は、添え字付けまたは参照変更 (あるいはその両方) が可能です。

NULL, NULLS

送り出しフィールド。

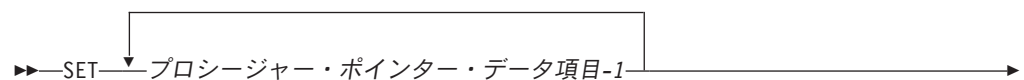
受け入れフィールドを、無効なアドレスの値を含むように設定します。

IBM 拡張 の終り

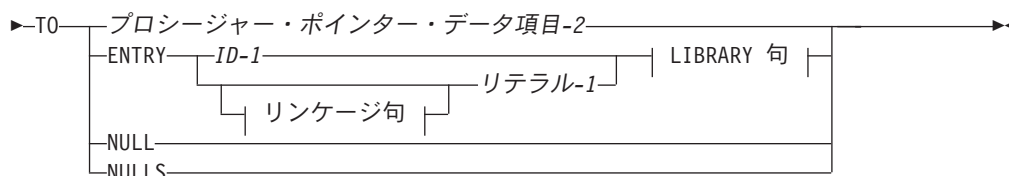
形式 6 - プロシージャ・ポインター・データ項目

IBM 拡張

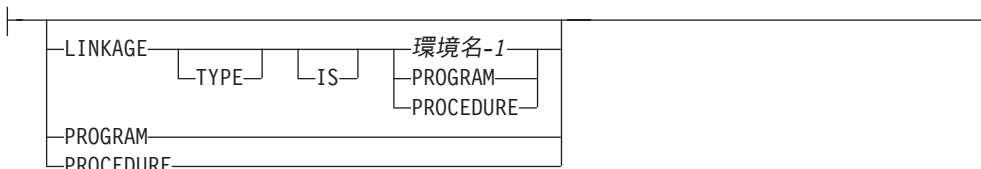
SET ステートメントの形式 6 が実行されると、受け入れフィールドの現行値が送り出しフィールドに含まれるアドレス値によって置き換えられます。

SET ステートメント - 形式 6

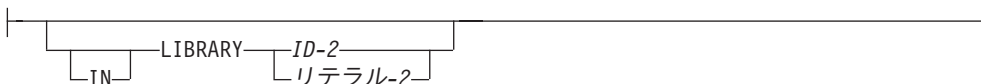
SET ステートメント



リンクージ句:



LIBRARY 句:



プロシージャ・ポインター・データ項目-1、プロシージャ・ポインター・データ項目-2

プロシージャ・ポインター・データ項目-1 は受け入れフィールドです。

USAGE IS PROCEDURE-POINTER として記述されていなければなりません。

ID-1

値をプログラム名にすることができるように、英数字項目として定義されていなければなりません。(詳細は 66 ページの『PROGRAM-ID 段落』を参照してください。) プロシージャ・ポインター・データ項目は、同じコンパイル単位の最外部の COBOL プログラム (ILE プロシージャ)、または ID-1 で指定されたプログラム・オブジェクト (*PGM) に設定されます。ID の内容は、CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの *MONOPRC オプションによって影響されます。

リテラル-1

非数字でなければならず、プログラム名の形成に関する規則に従っていなければなりません。リテラルは、CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの *MONOPRC オプションによって影響されます。プロシージャ・ポインター・データ項目は、同じコンパイル単位の最外部の COBOL プログラム (ILE プロシージャ)、他のコンパイル単位内の最外部の COBOL プログラム (ILE プロシージャ)、ILE プロシージャ (他の ILE 言語で書かれた)、またはプログラム・オブジェクト (*PGM) に設定できます。プロシージャ・ポインター・データ項目は、指定された名前のネストされた COBOL プログラムが SET のポイントから可視である場合でも、ネストされた COBOL プログラムに設定することはできません。プロシージャ・ポインター・データ項目が設定されるオブジェクトのタイプは、ENTRY 文節の LINKAGE TYPE 句と、

SPECIAL-NAMES 段落の LINKAGE TYPE 文節および CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの LINKLIT パラメーターによって判別されます。

LINKAGE TYPE 句

LINKAGE TYPE 句は、プロシージャ・ポインター・データ項目が設定されるプログラムのタイプを指定するために使用されます。個別にコンパイルされたプログラム・オブジェクト (*PGM) のアドレスまたはプログラム内のプロシージャに設定できます。

環境名-1

プロシージャ・ポインター・データ項目-1 が設定されるプログラムのタイプ。環境名-1 は以下のものとして定義できます。

- PGM (プログラム・オブジェクト、すなわち *PGM)
- PRC (プロシージャ)

PROGRAM

プロシージャ・ポインター・データ項目-1 はプログラム・オブジェクト (*PGM) に設定されます。

PROCEDURE

プロシージャ・ポインター・データ項目-1 はプロシージャに設定されます。

NULL(S)

受け入れフィールドを、無効なアドレスの値を含むように設定します。

IN LIBRARY 句

IN LIBRARY 句は、i5/OS プログラム・オブジェクトにプロシージャ・ポインター・データ項目を設定する場合のみ有効です。つまり、プログラムのリンケージは、SET ステートメントで暗黙または明示的に指定されなければなりません。

ID-2

英数字データ項目でなければなりません。ID-2 の内容は、有効な i5/OS ライブラリー名を表していなければなりません。i5/OS ライブラリー名は、最大 10 文字の長さです。したがって ID-2 の最初の 10 文字が、ライブラリー名を形成するために使用されます。

リテラル-2

非数字でなくてはならず、最大 10 文字まで可能です。

ID-2 およびリテラル-2 は *MONOPRC コンパイラー・オプションの影響を受けず、また、i5/OS 拡張名を含むことができます。

IBM 拡張 の終り

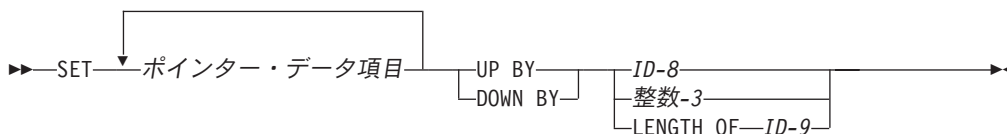
形式 7 - ポインターの調整

IBM 拡張

形式 7 の SET ステートメントが実行されると、ポインター・データ項目に含まれるアドレスが、送り出しフィールドの値に一致する値だけ増加 (UP BY) または減少 (DOWN BY) されます。

SET ステートメント

SET ステートメント - 形式 7



ポインター・データ項目

受け入れフィールドは、USAGE IS POINTER を持つ基本データ項目でなければなりません。

ID-8

この送り出しフィールドは基本整数データ項目でなければなりません。

ID-8 は、浮動小数点データ項目にすることができません。

整数-3

この送り出しフィールドは整数でなければなりません。

ID-9

ID-9 に関する規則の詳細は 347 ページの『LENGTH OF 特殊レジスター』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

形式 8 - ロケール

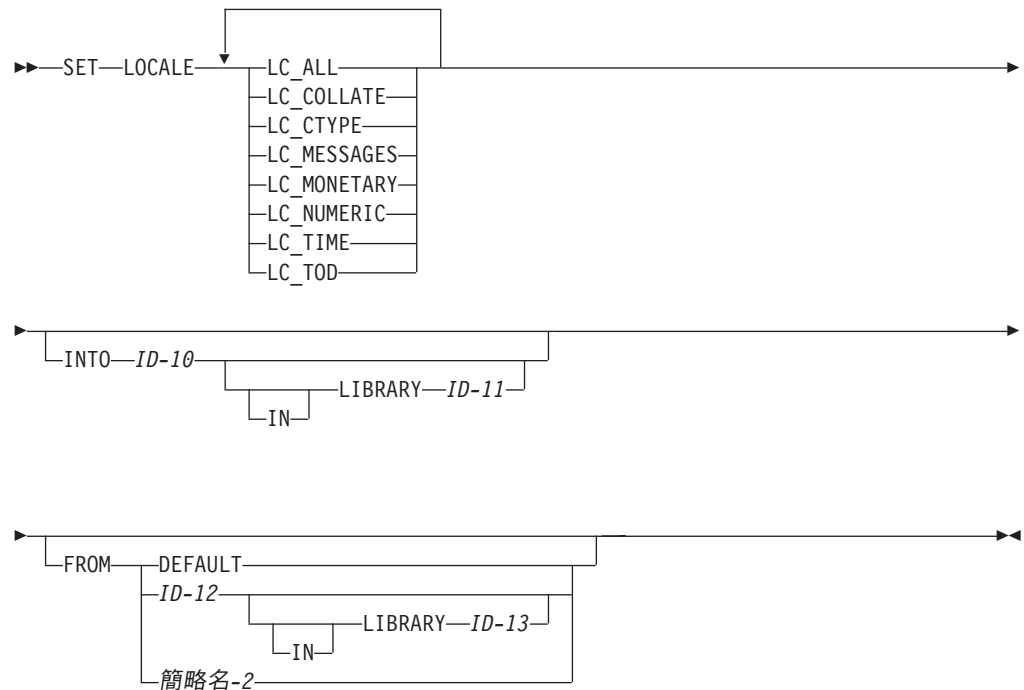
IBM 拡張

SET ステートメントの形式 8 によって、現行ロケールのロケール・カテゴリーの設定と照会が可能となります。**ロケール**は、言語や特定の文化圏固有の情報を含むシステム・オブジェクトです。たとえば、ロケールには世界の特定の地域の日付と時刻についての適切な形式が入っています。ロケール内の情報は、**ロケール・カテゴリー**に分割されます。たとえば、ロケール・カテゴリー LC_TIME には、日付と時刻の形式に関する情報が入っています。実行単位ごとに、1 つの DEFAULT ロケール、1 つの現行ロケール、およびゼロないし多数の特定のロケールが存在します。現行ロケールは、そのロケール・カテゴリーの一部またはすべてを DEFAULT または特定のロケールに設定することにより変更されます。ロケール・カテゴリー (現行ロケールの) が設定された特定ロケールの名前を ID の中で使用できます。ロケール・カテゴリーの内容は、下記からロケール・カテゴリーを設定することにより変更できます。

- システム・デフォルト
- 英数字基本データ項目において定義されたロケール
- SPECIAL-NAMES 段落で指定された簡略名

指定された各ロケール・カテゴリーは、実行単位の期間中またはカテゴリーを指定する別の SET ステートメントが処理されるまでの間効力をもちます。

SET ステートメント - 形式 8

**LC_ALL**

ロケール・カテゴリーの LC_COLLATE、LC_CTYPE、LC_MESSAGES、LC_MONETARY、LC_NUMERIC、LC_TIME、および LC_TOD (ロケールに含まれるこれ以外のすべてのカテゴリーも含まれます。)

LC_COLLATE

照合順序を定義するロケール・カテゴリー。

LC_CTYPE

文字種別と文字タイプを定義するロケール・カテゴリー。

LC_MESSAGES

通知メッセージと診断メッセージのフォーマット設定および対話式応答のフォーマット設定を定義するロケール・カテゴリー。

LC_MONETARY

通貨のフォーマット設定を定義するロケール・カテゴリー。

LC_NUMERIC

数字のフォーマット設定を定義するロケール・カテゴリー。

LC_TIME

日時フォーマット設定を定義するロケール・カテゴリー。

LC_TOD

時間帯差、時間帯名、および夏時間開始点と終点を定義するロケール・カテゴリー。

ID-10

ID-10 の値はロケール・カテゴリーを参照します。 ID-10 は基本英数字データ

SET ステートメント

項目でなければなりません。 INTO 句が指定されている場合は、指定されたカテゴリに対する現行ロケールの識別は、ID-10 が参照するデータ項目の中に保管されます。 INTO 句は、英数字から英数字への移動用 MOVE ステートメントの規則を使用して、FROM 句の前に処理されます。

DEFAULT

ロケール・カテゴリを現行のデフォルトに設定します。デフォルトのロケールは、実行単位が起動する時点で発生し、実行単位の期間中デフォルトのロケールのまま残ります。デフォルトのロケールはまた、実行単位が活動化される時点で現行ロケールにもなり、SET ステートメントの形式 8 を使用して切り換えられるまで現行ロケールのまま残ります。

ID-12

ID-10 の値はロケール・カテゴリを参照します。 ID-12 は基本英数字データ項目を参照する必要があります。 ID-12 で指定されたロケールが利用不能である場合は、オペレーティング・システムのエスケープ・メッセージが出されません。 FROM 句が指定されている場合は、指定されたカテゴリの現行ロケールは、ID-12 が参照するデータ項目の内容に設定されます。現行ロケール識別は、英数字から英数字への移動用 MOVE ステートメントの規則を使用して保管されます。

簡略名-2

簡略名-2 で指定されたロケールが利用不能である場合は、オペレーティング・システムのエスケープ・メッセージが出されます。 FROM 句が指定されている場合は、指定されたカテゴリの現行ロケールは、簡略名-2 が識別するロケール・カテゴリに設定されます。

IN LIBRARY 句

IN LIBRARY 句を使用して、ロケール・オブジェクトが置かれる i5/OS ライブラリーを指定します。 INTO 文節の場合、ID-11 は指定されたロケール・カテゴリのライブラリー名を使用して更新されます。 FROM 文節の場合、ID-12 を使用してロケール・カテゴリの設定先であるロケール・オブジェクトを位置指定します。

ID-11、ID-13

基本英数字データ項目でなければなりません。 ID-11 または ID-13 の内容は、有効な i5/OS ライブラリー名を表していなければなりません。 i5/OS ライブラリー名は、最大 10 文字の長さです。したがって ID-2 の最初の 10 文字が、ライブラリー名を形成するために使用されます。

ID-13 が指定されていない場合は、ライブラリー *LIBL が想定されます。そうでない場合は、ID-13 には、ID-12 で指定されたロケール・オブジェクト名が存在するライブラリーが入っていないければなりません。 ID-11 が指定される場合は、この ID には現行のロケール・カテゴリの最後の設定先であるロケール・オブジェクトのライブラリー名が入っています。 ID-10 内のロケール名が DEFAULT である場合は、ID-11 はスペースに設定されます。

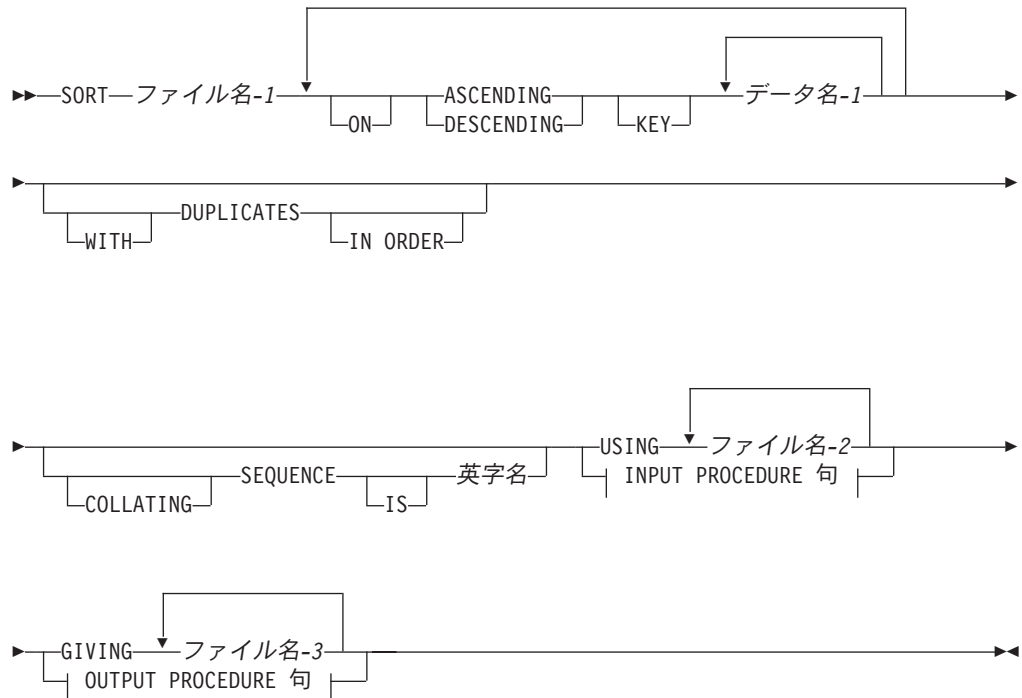
ID-11 および ID-13 は *MONOPRC コンパイラー・オプションの影響を受けず、また、i5/OS 拡張名を含むことができます。

IBM 拡張 の終り

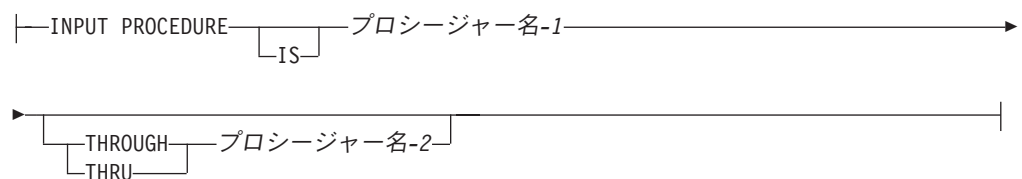
SORT ステートメント

SORT ステートメントは、1 つまたは複数のファイルからレコードを受け入れ、指定されたキーに従ってそれらをソートし、ソートしたレコードを OUTPUT PROCEDURE や出力ファイルで使用できるようにします。SORT ステートメントは、宣言セクション内でなければ手続き部のどこに記入してもかまいません。USING または GIVING ファイルの最大数は 32 です。

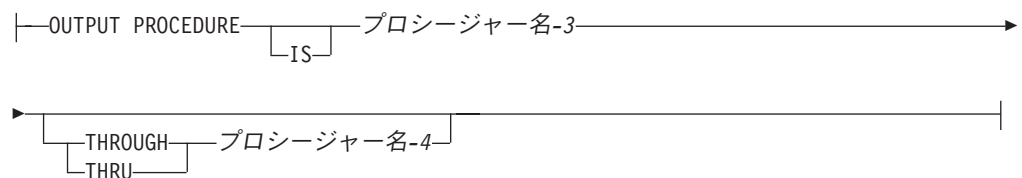
SORT ステートメント - 形式



INPUT PROCEDURE 句:



OUTPUT PROCEDURE 句:



ファイル名-1

SD 記入項目で指定された、ソートされるレコードを記述する名前。

ヌル可能フィールドはサポートされますが、ヌル値は ASSIGN 文節で ALWNULL が指定された DATABASE ファイルにだけサポートされます。ALWNULL が指定されず、フィールドにヌル値が含まれている場合は、SORT 操作は失敗し、ファイル状況の 90 が戻されます。

ASCENDING/DESCENDING KEY 句

この句は、指定されたソート・キーに基づいてレコードが昇順または降順 (指定された句に従います) に処理されるように指定します。

データ名-1

データ名-1 は、ソートの基礎となる KEY データ項目を指定します。各データ名は、**ファイル名-1** に関連付けられたレコード内のデータ項目を識別しなければなりません。次の規則が適用されます。

- 特定の KEY データ項目は、各入力ファイル内で物理的に同じ位置に存在し、同じデータ・フォーマットをもっていなければなりません。ただし、同じデータ名を持つ必要はありません。
- ファイル名-1 が複数のレコード記述をもっている場合には、KEY データ項目は 1 つだけのレコード記述中で記述されている必要があります。
- ファイル名-1 に可変長レコードが含まれている場合には、すべての KEY データ項目はレコードの最初の n 文字の位置に入っていなければなりません。ここで n は、ファイル名-1 について指定された最大レコード・サイズです。
- KEY データ項目は、OCCURS 文節を含んではならず、また、OCCURS 文節を含む項目に従属してなりません。
- KEY データ項目の全長が 2000 バイトを超えてはなりません。
- KEY データ項目を修飾することはできますが、添え字付けまたは指標付けすることはできません。
- KEY データ項目の位置は可変であってはなりません。
- SORT キーの中で可変長フィールドを可変長フィールドとして使用することはできません。可変長フィールドは、ILE COBOLによってグループ項目に変換されます。可変長フィールドはグループ項目に変換されるため、SORT キーの中で使用されると英数字データ項目として比較されます。

SORT ステートメントは、KEY データ項目を、それらの項目がどのように KEY 句に分割されているかにかかわらず、重要度の高いものから順に左から右に列挙します。左端のデータ名が主キーであり、次のデータ名がその次に重要度の高いキーというようになります。

ソート操作の方向は、キーワード ASCENDING または DESCENDING の指定によって、次のように異なります。

- ASCENDING を指定すると、最下位キー値から最上位キー値への順序となります。
- DESCENDING を指定すると、最上位キー値から最下位キー値への順序となります。

- KEY データ項目が英字、英数字、英数字編集、または数字編集である場合には、キー値の順序は使用される照合順序によって決まります (『COLLATING SEQUENCE 句』を参照してください)。
- KEY データ項目が DBCS、DBCS 編集、または国別である場合には、キー値の順序は DBCS 文字または国別文字の 16 進数値の 2 進数照合順序に基づきます。COLLATING SEQUENCE 句は無視されます。

IBM 拡張

- KEY データ項目は、浮動小数点項目または日時項目にすることができます。
- KEY データ項目を参照変更することはできますが、添え字付けまたは指標付けることはできません。
- KEY が外部浮動小数点項目である場合、コンパイラーはデータ項目を、数字データではなく文字データとして取り扱います。レコードがソートされる順序は、使用される照合順序によって異なります。
- KEY データ項目が内部浮動小数点である場合、キー値の順序は数字の順序になります。
- KEY が日時項目である場合は、いくつかの形式だけが日付項目または時刻項目としてソートされます。ILE COBOL は、i5/OS DDS より多くの日時形式をサポートします。一般的に、i5/OS DDS 形式に一致する ILE COBOL の日時形式は、日付項目または時刻項目としてソートされます。その他のすべての形式は英数字項目として扱われ、その 16 進値に基づいてソートされます。

IBM 拡張 の終り

- キーの比較は、比較条件のオペランドの比較に関する規則に従って実行されます (267 ページの『条件式』の『比較条件』を参照してください)。

DUPLICATES 句

DUPLICATES 句が指定されており、1 つのレコードに関連するすべてのキー・エレメントの内容が、他の 1 つまたは複数のレコード内の対応するキー・エレメントと等しい場合には、これらのレコードの順序は次のようになります。

- SORT ステートメント内に指定されている関連する入力ファイルの順序。特定のファイル内では、順序はレコードがそのファイルの中でアクセスされる順序です。
- これらのレコードが入カプロシージャーによって解放される順序 (入力プロシージャーが指定されている場合)。

DUPLICATES 句が指定されていない場合には、これらのレコードの順序は未定義です。

COLLATING SEQUENCE 句

この句は、このソート操作において KEY データ項目の非数字比較に使用される照合順序を指定します。

英字名

SPECIAL-NAMES 段落の英字名文節の中で指定されていなければなりません。

SORT ステートメント

英字名文節オプションの任意の 1 つを指定できます。英字名文節オプションおよびその意味のリストについては 76 ページの『SPECIAL-NAMES 段落』を参照してください。

COLLATING SEQUENCE 句を省略した場合には、OBJECT-COMPUTER 段落内の PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節 (指定されている場合) によって、使用される照合順序が決まります。

COLLATING SEQUENCE 句および PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節の両方を省略した場合には、EBCDIC 照合順序が使用されます。

USING 句

ファイル名-2, ...
入力ファイル。

USING 句を使用した場合には、**ファイル名-2, ...** (つまり、入力ファイル) のすべてのレコードが自動的にファイル名-1 に転送されます。SORT ステートメントの実行時には、これらのファイルがオープンされてはなりません。コンパイラーは、これらのファイルを自動的にオープンし、読み取り、レコードを使用可能にします。これらのファイルについて EXCEPTION/ERROR プロシージャが指定されている場合には、コンパイラーはこれらのプロシージャに対して必要なリンクージを行います。入力ファイルは、順次、相対、または索引付きファイルでなければなりません。

すべての入力ファイルは、順次または動的アクセス・モードを指定していなければならず、また、データ部の FD 記入項目で記述されていなければなりません。

INPUT PROCEDURE 句

この句では、ソート操作の開始前に入力レコードを選択または変更するためのプロシージャの名前を指定します。

プロシージャ名-1

入力プロシージャ内の最初の (また唯一の) セクションまたは段落を指定します。

プロシージャ名-2

入力プロシージャ内の最後のセクションまたは段落を指定します。

入力プロシージャは、ファイル名-1 で参照されるファイルに対して RELEASE ステートメントによって一度に 1 つずつ使用可能にされるレコードを選択、変更、またはコピーするのに必要な任意のプロシージャから構成できます。この中には、入力プロシージャ内の CALL、EXIT、GO TO、および PERFORM ステートメントによる制御の転送の結果として実行されるすべてのステートメントが含まれます。また、入力プロシージャ内のステートメントの実行の結果として実行される宣言プロシージャ内のすべてのステートメントも含まれます。入力プロシージャ内では、MERGE、RETURN、または SORT ステートメントの実行を起こしてはなりません。

入力プロシージャを指定すると、SORT ステートメントによってファイル名-1 が順序付けられる前に、制御がこの入力プロシージャに渡されます。コンパイラー

は、この入力プロシージャ内の最後のステートメントの終わりに、戻りメカニズムを挿入します。また、入力プロシージャ内の最後のステートメントに制御が渡るとファイル名-1 にリリースされたレコードがソートされます。

GIVING 句

ファイル名-3, ...
出力ファイル。

GIVING 句を指定した場合には、ファイル名-1 中のソート済みの全レコードは自動的に出力ファイル (ファイル名-3, ...) に転送されます。SORT ステートメントの実行時には、このファイルがオープンされてはなりません。

出力ファイルに可変長レコードが含まれている場合には、ファイル名-1 内のレコードのサイズは、出力ファイルについて記述されている最小レコードよりも小さくしてはならず、最大レコードよりも大きくしてはなりません。出力ファイルに固定長レコードが含まれている場合には、ファイル名-1 内のレコードのサイズは、出力ファイルについて記述されている最大レコードよりも大きくしてはなりません。

ファイル名-3 によって参照されるファイルのおののに対して、SORT ステートメントの実行時に次のような処置が取られます。

- ファイルの処理が開始されます。この開始処理は、OUTPUT 句を指定した OPEN ステートメントが実行されたかのように行われます。
- ソート済みの論理レコードが戻され、ファイルに書き込まれます。おののレコードは、オプションの句を指定しない WRITE ステートメントが実行されたかのように書き込まれます。レコードは、ファイルの以前の内容 (もしあれば) を上書きします。

IBM 拡張

ファイル名-3 が論理データベース・ファイルである場合には、レコードはファイルの終わりに追加されます。

IBM 拡張 の終り

ファイル名-3 によって参照されるファイルが INDEXED (索引付き) ファイルである場合には、このファイルに関連するキー・データ名が、SORT ステートメント中に ASCENDING KEY 句をもっていなければなりません。これと同じデータ名は、そのレコード内で、ファイルの基本レコード・キーに関連するデータ項目と同じ文字位置を占めていなければなりません。

相対ファイルの場合には、戻される最初のレコードについての相対キー・データ項目に値 '1' が入り、戻される 2 番目のレコードについての相対キー・データ項目に値 '2' が入り、... というようになります。SORT ステートメントの実行後には、相対キー・データ項目の内容は、ファイルに戻された最後のレコードを示します。

- ファイルの処理が終了します。この終了処理は、オプションの句を指定しない CLOSE ステートメントが実行されたかのように行われます。

SORT ステートメント

注: 索引付きファイルへの書き込み中に重複キーが見つかり、SORT ステートメントの実行が終了し、すべての GIVING ファイル内のソート済みデータは未完成のままとなります。

これらの暗黙の機能は、関連する USE AFTER EXCEPTION/ERROR プロシージャが実行されるように実行されます。ただし、そのような USE プロシージャの実行により、ファイル名-3 によって参照されているファイルを操作するか、あるいはファイル名-3 に関連付けられているレコード域にアクセスするステートメントの実行が生じてはなりません。

このファイルの外部定義境界を超えてデータを書き込もうとする最初の試みが行われると、このファイルについて指定されている USE AFTER STANDARD EXCEPTION/ERROR プロシージャが実行されます。この USE プロシージャから制御が返された場合、あるいはこのような USE プロシージャが指定されていない場合は、このファイルの処理が終了します。

すべての出力ファイルは、順次または動的アクセス・モードを指定していなければならず、また、データ部の FD 記入項目で記述されていなければなりません。

出力ファイルは、索引付き、相対、または順次ファイルでなければなりません。

また、出力ファイルは、キー順アクセス・パスなしで作成されたものでなければなりません。出力ファイルがそのようなパスをもっている場合、SORT ステートメントでは、データ記述仕様 (DDS) で指定された照合順序を指定変更することができません。

OUTPUT PROCEDURE 句

この句は、ソート操作からの出力レコードを選択または変更するためのプロシージャの名前を指定します。

プロシージャ名-3

出力プロシージャ内の最初の (または唯一の) セクションまたは段落を指定します。

プロシージャ名-4

出力プロシージャ内の最後のセクションまたは段落を識別します。

出力プロシージャは、ファイル名-1 からのソートされた順序で、RETURN ステートメントによって一度に 1 つずつ使用可能にされるレコードを選択、変更、またはコピーするのに必要な任意のプロシージャから構成できます。出力プロシージャの範囲には、出力プロシージャ内の CALL、EXIT、GO TO、および PERFORM ステートメントによる制御権の移動の結果として実行されるすべてのステートメントが含まれます。また、出力プロシージャ内のステートメントの実行の結果として実行される宣言プロシージャ内のすべてのステートメントも含まれます。出力プロシージャの範囲には、MERGE、RELEASE、または SORT ステートメントを含めることはできません。

出力プロシージャが指定されると、ファイル名-1 が SORT ステートメントによって順序付けられた後で、制御がこの出力プロシージャに渡されます。コンパイラは、この出力プロシージャ内の最後のステートメントの後に、戻りメカニズムを挿入します。制御がこのステートメントに渡されると、戻りメカニズムがソ-

ト操作を終了させ、SORT ステートメントの後の次の実行可能ステートメントに制御を渡します。出力プロシージャに入る前に、ソート・プロシージャは、ソートされた順序で次のレコードを選択できるポイントに到達します (要求された場合)。次のレコードを要求するのは、出力プロシージャ内の RETURN ステートメントです。

注: INPUT PROCEDURE 句および OUTPUT PROCEDURE 句は、基本 PERFORM ステートメントのものと類似しています。たとえば、OUTPUT PROCEDURE 句でプロシージャを指定すると、そのプロシージャは、PERFORM ステートメントで指定された場合と同じように、ソート操作時に実行されます。

PERFORM ステートメントの場合と同様に、プロシージャの実行は最後のステートメントが実行された後で終了されます。入力または出力プロシージャの最後のステートメントは、EXIT ステートメントにすることができます (397 ページの『EXIT ステートメント』を参照してください)。

IBM 拡張

SORT-RETURN 特殊レジスターには、SORT 操作の成功 (または失敗) を示す戻りコードが入ります。詳細は 423 ページの『SORT-RETURN 特殊レジスター』を参照してください。

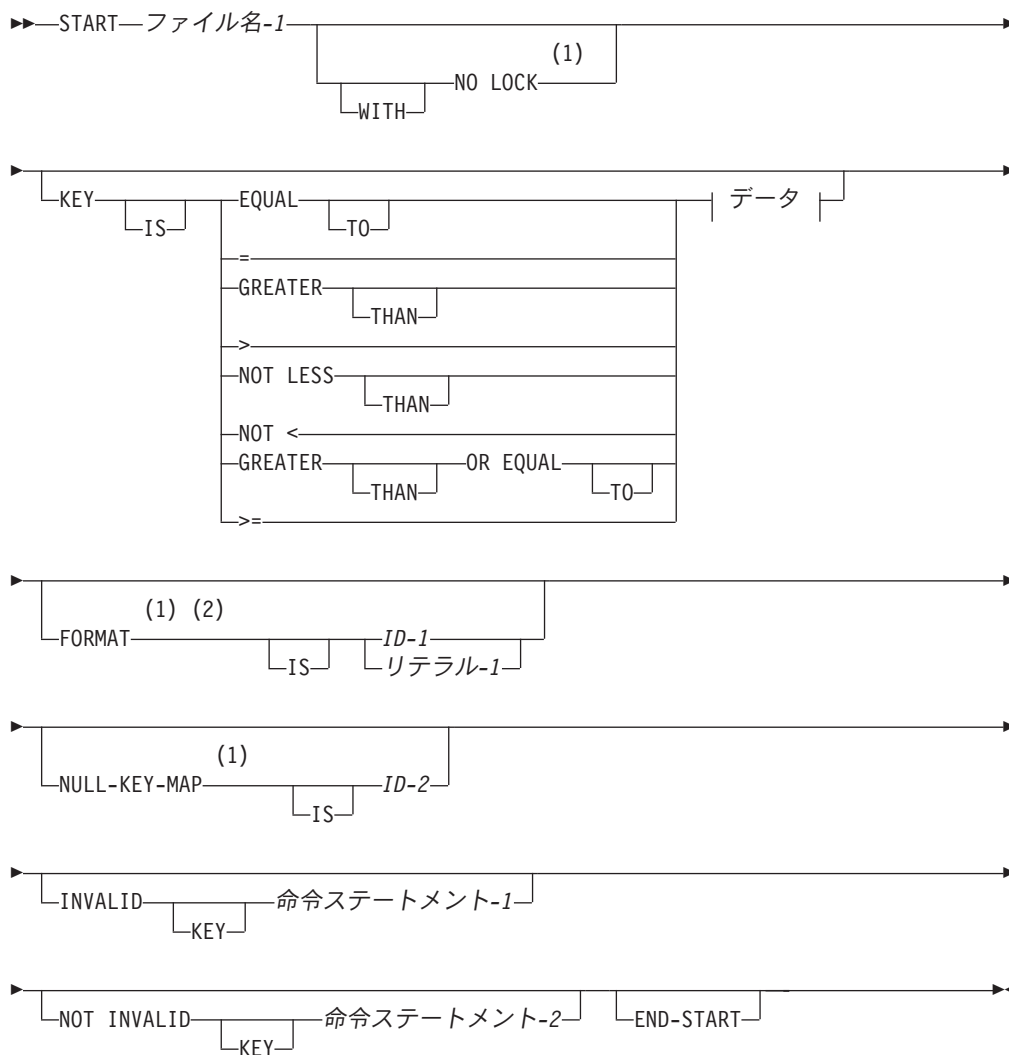
IBM 拡張 の終り

START ステートメント

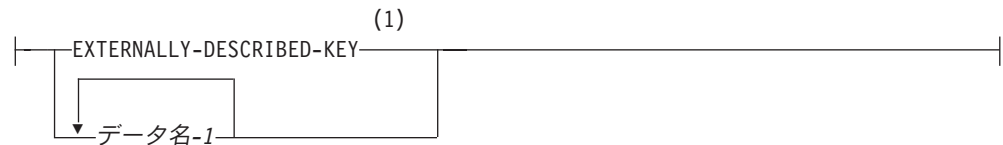
START ステートメントは、後続の順次レコード検索のために索引付きファイルまたは相対ファイル内の位置設定を行う手段となります。この位置設定は、ファイル内のレコードのキー値を、START ステートメントの実行に先立ってファイルのレコード域の RECORD KEY 部分 (索引付きファイルの場合)、あるいは RELATIVE KEY データ項目 (相対ファイルの場合) に入れられた値と比較することによって行われます。

注: START ステートメントの実行時には、関連する索引付きファイルまたは相対ファイルは、INPUT モードまたは I-O モードでオープンされていなければなりません。

START ステートメント - 形式



データ:



注:

- 1 IBM 拡張
- 2 DATABASE 装置上の索引付きファイルにだけ適用されます。

NO LOCK 句

IBM 拡張

NO LOCK 句は、I-O (更新) モードでオープンするファイルに対するレコード・ロックが START 操作によって取得できないようにします。また、NO LOCK 句を持つ START ステートメントは、キー値の比較を満たしたレコードが他のジョブによりロックされていても成功します。さらに、この句を持つ START ステートメントは、前の START 操作によってロックされたレコードを解放します。

I-O モードでオープンされていないファイルにこの句を使用すると、エラー・メッセージが出されます。

ファイルおよびレコードのロックの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

ファイル名-1

順次または動的アクセスを持つファイルでなければなりません。ファイル名-1 は、データ部の FD 記入項目で定義されていなければならない、また、ソート・ファイルの名前であってはなりません。

KEY 句

KEY 句が指定されている場合には、ファイル位置標識は、比較を満たすキー・フィールドを持つ論理レコードに設定されます。

KEY 句が指定されていない場合には、KEY IS EQUAL (TO 基本レコード・キー) が暗黙指定されます。

データ名-1

修飾または参照変更することはできますが、添え字付けすることはできません。

IBM 拡張

データ名-1 は、内部浮動小数点データ項目または外部浮動小数点データ項目、DBCS データ項目、または日時データ項目のどれでもかまいません。

START ステートメント

複数のデータ名を指定できます。最初のデータ名に続くすべてのデータ名は、構文検査されるだけです。

IBM 拡張 の終り

START ステートメントが実行される際に、キー・データ名内の現行値とファイルの索引内の対応するキー・フィールドが比較されます。

FILE-CONTROL 記入項目に FILE STATUS 文節が指定されている場合には、START ステートメントの実行時に関連する状況キーが更新されます。(297 ページの『状況キー』を参照してください。)

FORMAT 句

IBM 拡張

FORMAT 句で指定する値には、この入出力操作で使用するレコード形式の名前が入ります。システムはこれを使用して、どのレコード形式に対して操作を行うかを指定または選択します。

ID-1 を指定する場合には、10 文字以下の英数字データ項目にしなければなりません。

リテラル-1 を指定する場合は、10 文字以下の大文字の文字ストリングにしなければなりません。

全桁がブランクの値は、FORMAT 句が指定されなかった場合と同じ扱いになります。その値がファイルに対して有効でない場合は、9K の FILE STATUS が戻され、(そのファイルに適用可能であれば) USE プロシージャが呼び出されます。

この句を指定する場合、ファイル位置標識は、指定されたレコード形式をもち、比較を満たす最初のレコードに設定されます。この句を省略した場合には、現行レコード・ポインターは、レコード形式を問わず、比較を満たす最初のレコードに設定されます。

FORMAT 句と EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY および KEY IS 句の相互作用については 525 ページの表 33を参照してください。

IBM 拡張 の終り

NULL-KEY-MAP IS 句

IBM 拡張

ID-2 に指定された値に従って、START 操作のためのレコードのヌル・キー・マップを指定します。ID-2 はブール項目または英数字項目でなければなりません。

ID-2 は、添え字を付けたり、参照変更できます。

ファイルに代替キーがある場合、ID-2 は、参照の現行キーのヌル・キー・マップに関連しています。

この句は、ALWNULL 属性をもち、ASSIGN 文節で DATABASE が指定された装置タイプのファイルにだけ指定できます。キー・フィールドの 1 つがヌル可能で、NULL-KEY-MAP 句が使用されない場合は、すべてのブール・ゼロをもったヌル・キー・マップが使用されます。

NULL-KEY-MAP IS 句の例

この例では、以下の値はファイルの中のキーを表しており、これにはそれぞれが 2 バイトでできた 3 個のフィールドが入っています。キーは、ファイル・セクションで以下のコードによって定義されます。

```
INPUT-OUTPUT SECTION.
FILE-CONTROL.
    SELECT FILE-1 ASSIGN to DATABASE-FILE1-ALWNULL
    ACCESS is DYNAMIC RECORD KEY IS FULL-PRODUCT-CODE IN FILE-1
    ORGANIZATION IS INDEXED.
FD FILE-1.
01 FULL-PRODUCT-CODE.
    05 TYPE-CODE      PIC X(2).
    05 COLOR-CODE     PIC X(2).
    05 LOCATION-CODE PIC X(2).
WORKING-STORAGE SECTION.
01 FILE1-N.
    05 FULL-PRODUCT-CODE-NKM.
        06 FILLER          PIC X VALUE ZERO.
        06 COLOR-CODE-NF   PIC 1 VALUE B"0".
        06 LOCATION-CODE-NF PIC 1 VALUE B"0".
```

フィールド 2 および 3 はヌル可能フィールドであり、~~0~~ はヌルを示し、xx は任意の値を示します。以下は、ファイルの中のレコードを表しています。

```
NN0000
NN0xx
NNxx00
```

以下の START ステートメントを考えてみます。

```
START FILE-1
    NULL-KEY-MAP IS FULL-PRODUCT-CODE-NKM
    INVALID KEY DISPLAY "No data in system for product code " TYPE-CODE
    GO TO ERROR-ROUTINE
END-START.
```

START ステートメントのヌル・キー・マップの値が 010 の場合は、ポインターはキー NN~~0~~xx をもったレコードを指すように設定されます。START ステートメントのヌル・キー・マップの値が 011 の場合は、ポインターはキー NN~~0000~~ をもったレコードを指すように設定されます。

ヌル可能フィールドの使用についての詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張 の終り

INVALID KEY 句

ファイル内のレコードによって比較が満たされない場合には、無効キー条件が発生します。ファイル位置標識の値は未定義となり、INVALID KEY 命令ステートメント (指定されている場合) が実行されます。(297 ページの『INVALID KEY 条件』を参照してください。)

START ステートメント

このファイルについて EXCEPTION/ERROR プロシージャラーが明示的または暗黙に指定されていない場合は、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

NOT INVALID KEY 句

NOT INVALID KEY 句を指定した START ステートメントが正常に完了すると、この句に関連付けられている命令ステートメントに制御が渡されます。

END-START 句

この明示範囲終了符号は、START ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-START 句を使用することによって、START 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-START 句は、START 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

索引付きファイル

KEY 句が指定されている場合には、比較に使用されるキー・データ項目はデータ名です。

KEY 句が指定されていない場合、ファイル位置標識は、RECORD KEY データ項目に入っている値と等しいキーを持つレコードに設定されます。

START ステートメントが正常に実行された場合には、データ名-1 の関連付けられている RECORD KEY または ALTERNATE RECORD KEY が、後続の READ ステートメントの参照キーになります。

KEY 句が指定されている場合、比較に使用される検索引数はデータ名-1 であり、次のいずれかにすることができます。

- 基本 RECORD KEY 自体
- 任意の ALTERNATE RECORD KEY
- ファイルのレコード記述内の英数字データ項目で、左端の文字位置がレコード域内のキー・フィールドの左端の文字位置に対応しているもの。このデータ項目の長さは、そのファイルのレコード・キーの長さより小さいかあるいは等しくなければなりません。

このデータ項目は、修飾または参照変更できます。キーそのものを使用しない場合は、左端の文字位置に参照変更開始位置を加算した位置が、キー・フィールドの左端の文字位置に対応していなければなりません。

注: RECORD KEY が COMP、COMP-3、または COMP-4 として定義されている場合、キー・データ項目は RECORD KEY そのものでなければなりません。レコード域の部分キー・フィールドを使用することはできません。

ファイル位置標識は、ファイル内で比較を満たすレコード・キーを持つ、ある形式の最初のレコードに設定されます。比較するオペランドの長さが同じでない場合には、長い方のフィールドの右側が短いフィールドの長さに合わせて切り捨てられたかのように比較が実行されます。PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節が指定されても無効になる点を除き、他の数字比較および非数字比較のすべての規則が

適用されます。

IBM 拡張

RECORD KEY IS EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY を指定したファイルの場合は、次のような追加の考慮事項が適用されます。

- 予約語 EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY を指定できます。これは、レコード域内の完全なキーが比較に使用されなければならないことを示します。
- 一連のデータ名を指定できます。これによって、レコード域中の部分キー・フィールドが使用できます (総称 START)。これらのデータ名は以下の規則に従わなければなりません。
 - 指定するデータ名のうち最後のもの以外はすべて、ファイルについてコピーされた単一の形式用のレコード・キーでなければなりません。データ名が入っているレコード形式は、FORMAT 句によって指定できるものである必要はありません。
 - これらのデータ名 (キー・フィールド) の順序は、DDS で定義されているキーの順序と一致しなければなりません。つまり、重要度の高いフィールドから順に指定しなければなりません。
 - データ名の総数は、そのレコード形式用に定義されたキー・フィールドの数を超えることはできません。
 - 一連のデータ名の最後のデータ名がレコード域内のキー・フィールドでない場合、そのデータ名の左バイトは、その相対位置に定義されているキー・フィールドと同じスペースを占有しなければなりません。レコード域内でこの位置にあるキー・フィールドが COMP、COMP-3、または COMP-4 フィールドである場合には、キー・フィールドそのものだけがデータ名として使用可能です。
 - 最後のキーだけが参照変更することができ、参照変更開始位置は 1 と等しくなければなりません。
- 表 33 は、KEY IS と FORMAT 句の間の処理を示しています。

表 33. KEY IS と FORMAT 句の関係

FORMAT 句の指定	KEY 句		
	一連のデータ名	省略	EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY
可	A, B	C, D	C, B
不可	A, E	F, G	F, E

- A** 検索指数は、指定されたデータ項目を使用して作成されます。
- B** ファイル位置標識は、指定された形式をもち、KEY 句で指定された比較を満たすレコード・キーを持つ、ファイル内の最初のレコードに設定されます。
- C** 検索指数は、FORMAT 句で指定された形式用のレコード域内のキー・フィールドを使用して作成されます。
- D** ファイル位置標識は、指定された形式をもち、検索指数と等しいレコード・キーを持つ、ファイル内の最初のレコードに設定されます。
- E** ファイル位置標識は、ファイルの共通キーをもち、KEY 句で指定された比

START ステートメント

較を満たす、ファイル内の最初のレコードに設定されます。共通キーがない場合、ファイル位置標識はファイル内の先頭レコードに設定されます。

- F** 検索引数は、ファイルについての最初のレコード形式 (プログラムで定義された) 用のレコード域のキー・フィールドを使用して作成されます。
- G** ファイル位置標識は、ファイルの共通キーをもち、検索引数と等しい、ファイル内の最初のレコードに設定されます。共通キーがない場合、ファイル位置標識はファイル内の先頭レコードに設定されます。

IBM 拡張 の終り

KEY 句が指定されていない場合には、EQUAL TO 比較に使用されるキー・データ項目は基本 RECORD KEY です。

データ名-1

次のいずれかにすることができます。

- 基本 RECORD KEY
- ファイルのレコード記述内の英数字データ項目で、左端の文字位置がそのレコード・キーの左端の文字位置と対応しているもの。これは修飾できます。このデータ項目の長さは、このファイルのレコード・キーの長さと同じか、あるいはそれより小さくなければなりません。

ファイル位置標識は、比較を満たすキー・フィールドを持つ、ファイル内の最初のレコードに設定されます。比較するオペランドの長さが同じでない場合には、長い方のフィールドの右側が短いフィールドの長さに合わせて切り捨てられたかのように比較が実行されます。PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節が指定されても無効になる点を除き、他の数字比較および非数字比較のすべての規則が適用されます。

START ステートメントが正常に実行された場合には、データ名-1 の関連付けられている RECORD KEY が、後続の READ ステートメントの参照キーになります。

START ステートメントの実行が失敗すると、参照キーが未定義になります。

IBM 拡張

装置タイプ DATABASE の索引付きファイルの場合、比較の意味は、ファイル用に定義されたレコード域内のキー・フィールドのタイプの影響を受けることがあります。このシステムでのキー・フィールドは、複数フィールドとして定義することができます。それぞれのフィールドは昇順または降順にすることができます。システムは、レコード・キーに入っている値と DDS 内で指定された形式と順序に基づいて、レコードについての順序 (キー順アクセス・パス) を確立します。START ステートメントが処理される際には、要求は次のように解釈されます。

COBOL 比較
GREATER THAN
NOT LESS THAN

システムの結果
AFTER
EQUAL TO または AFTER

たとえば、GREATER THAN という比較を用いてステートメントが処理される場合は、START ステートメントによって指定された検索引数の後の最初のレコードを見

つけるために、順序付けられたレコードの検索が行われます。ファイルが降順キーで順序付けられた場合、ファイル位置標識は、指定されたキーより小さく、かつ、START ステートメントに指定されたキーよりも大きくないキーを持つレコードを指します。

IBM 拡張 の終り

相対ファイル

KEY 句が指定されていない場合、ファイル位置標識は、RELATIVE KEY データ項目と等しいキー (相対レコード番号) を持つ、ファイル内のレコードに設定されます。

KEY 句を指定する場合、データ名-1 には RELATIVE KEY を指定しなければなりません。ファイル位置標識は、RELATIVE KEY データ項目との比較を満たすキー (相対レコード番号) を持つ、ファイル内の最初の論理レコードに設定されます。

KEY 句が指定されていない場合には、KEY IS EQUAL (TO 基本レコード・キー) が暗黙指定されます。

データ名-1 は修飾できますが、添え字付けすることはできません。

START ステートメントの実行時には、相対キーの現行値とファイル内の既存のレコードの相対レコード番号が比較されます。

FILE-CONTROL 記入項目に FILE STATUS 文節が指定されている場合には、START ステートメントの実行時に関連する状況キーが更新されます。(296 ページの『共通の処理機能』の『状況キー』を参照してください。)

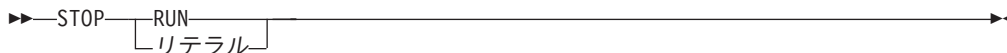
KEY 句が指定されているかどうかにかかわらず、比較に使用されるキー・データ項目は RELATIVE KEY データ項目になります。START ステートメントが正常に実行された場合、ファイル位置標識は、ファイル内で比較を満たすキーを持つ論理レコードを指します。このキーは、後続の READ ステートメントの参照キーとなります。

START ステートメントが正常に実行されなかった場合には、参照キーおよびファイル位置標識が未定義となります。

STOP ステートメント

STOP ステートメントは、オブジェクト・プログラムの実行を一時的にまたは永続的に停止させます。

STOP ステートメント - 形式



リテラル

数字、非数字、またはブールにすることができ、また、ALL リテラル以外の表意定数にすることもできます。リテラルが数字である場合は、符号なしの整数でなければなりません。

IBM 拡張

浮動小数点リテラルにすることはできません。

IBM 拡張 の終り

STOP リテラルを指定すると、そのリテラルが、バッチ・ジョブの場合にはシステム・オペレーターに、対話式ジョブの場合にはワークステーションに知らされます。プログラムの実行は中断されます。プログラムの実行は、オペレーターが介入しなければ再開されません。

オペレーターの応答によって、取られる処置が決定されます。

オペレーター

応答処置

G (デフォルト)

次の命令から続行します。

C 最も近い制御境界にあるプログラムまでのすべてのプログラムの実行を終了します。最も近い制御境界がハード制御境界である場合には、COBOL 実行単位の呼び出し側にエスケープ・メッセージ CEE9901 が出されます。バッチ・ジョブの場合、ジョブについての ENDSEV パラメーター (CRTJOB CL コマンドを参照してください) にメッセージの重大度より小さい値が入っていると、ジョブが取り消されます。

D COBOL ID をダンプした後、C と同じ処置を実行します。

F COBOL ID およびファイル情報をダンプした後、C と同じ処置を実行します。

STOP リテラルの出力には、プログラム名が入ります。リテラルは、2 次レベル・テキストに入れられ、ヘルプ・キーが使用された場合に表示されます。

STOP リテラル・ステートメントは、プログラムの実行中にオペレーターの介入が必要とされる場合に、特別な状況 (特別なテープまたはディスクを取り付けなければならない場合や、特定の日付コードを入力しなければならない場合など) で役立つ

ちます。ただし、オペレーターの介入が必要なときには、ACCEPT ステートメントおよび DISPLAY ステートメントを使用することをお勧めします。

STOP RUN を指定すると、最も近い制御境界にあるプログラム (これも含む) までのすべてのプログラムが終了され、制御が制御境界の前のプログラムに戻されます。最も近い制御境界がハード制御境界である場合には、STOP RUN によって活動化グループ (実行単位) が終了され、次に、活動化グループに範囲が限定されているすべてのファイルがクローズされます。STOP RUN ステートメントを一連の命令ステートメントで指定する場合には、その中の最後または唯一のステートメントにしなければなりません。

上記のどの場合も、呼び出し側プログラムはシステムである可能性があります。その場合は、実行単位の実行が終了し、オペレーティング・システムに制御が渡されます。

また、COBOL リンケージ規則に従わない言語で書かれたプログラムで主プログラムを呼び出すと、この呼び出し側プログラムに制御が戻ります。

各種の条件における STOP RUN ステートメントの動作についての詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」の『ILE COBOL プログラムからの戻り』のセクションを参照してください。

RETURN-CODE 特殊レジスター

IBM 拡張

RETURN-CODE 特殊レジスターは、プログラムから呼び出し側 (呼び出し側プログラムまたはシステム) に戻りコード情報 (つまり、数値) を渡すために使用できます。

RETURN-CODE 特殊レジスターは、EXIT PROGRAM、GOBACK、または STOP RUN ステートメントを実行する前に設定できます。

RETURN-CODE には、次の暗黙定義があります。

```
01 RETURN-CODE GLOBAL PICTURE S9999 USAGE BINARY VALUE 0
```

この特殊レジスターは、PICTURE S9999 USAGE BINARY のデータ定義を持つデータ項目が許容される場所であれば、プログラム内のどこでも使用できます。ネストされたプログラムの中で使用される際には、RETURN-CODE 特殊レジスターは、最外部のプログラム内で GLOBAL として暗黙に定義されます。COBOL サブプログラムが終了すると、そのサブプログラムの RETURN-CODE 特殊レジスターの内容が、呼び出し側プログラムの RETURN-CODE 特殊レジスターに転送されます。主 COBOL プログラムが終了し、制御権がオペレーティング・システムに戻される際には、特殊レジスターの内容がユーザー戻りコードとしてオペレーティング・システムに戻されます。

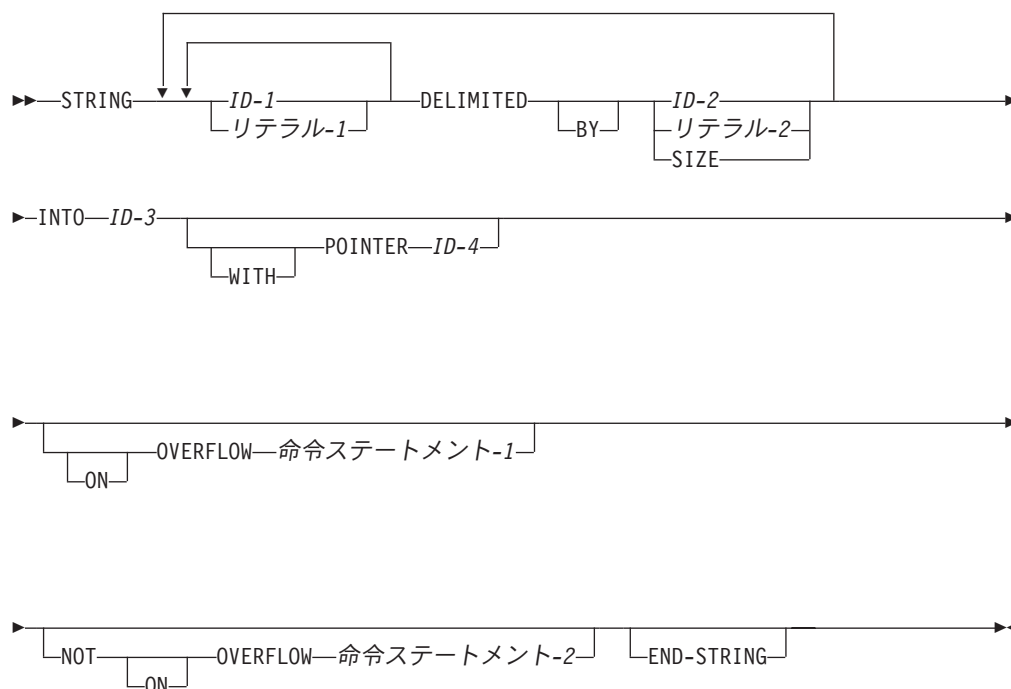
主 COBOL プログラムが活動化グループの最初のプログラムでなければならないことに注意してください。そのために RETURN-CODE 特殊レジスターの内容をジョブのユーザー戻りコードとして戻す場合は、通常オプション ACTGRP(*CALLER) を使ってこの COBOL プログラムをコンパイルしてはいけません。呼び出し側プロ

STRING ステートメント

STRING ステートメント・STRING は、複数のデータ項目またはリテラルの一部または全部の内容を連結して、単一のデータ項目にします。

一連の MOVE ステートメントの代わりに、1 つの STRING ステートメントを書くことができます。

STRING ステートメント - 形式



注: ID-4 (POINTER 項目) 以外のすべての ID は、明示的または暗黙に USAGE DISPLAY を持っていなければなりません。

ID-1

1 つまたは複数の送り出しフィールドを表します。送り出しフィールドまたは分離文字が基本数字項目である場合には、それは整数として記述されていなければなりません。さらに、その PICTURE 文字ストリングに記号 P が含まれていてはなりません。

リテラル-1

1 つまたは複数の送り出しフィールドを表します。すべてのリテラルは非数字リテラルでなければなりません。それぞれは、ALL リテラルをもたない表意定数にすることができます。表意定数を指定すると、それは 1 文字の非数字リテラルと見なされます。

IBM 拡張

ID-1 から ID-3 まで

外部浮動小数点項目にすることはできません。

IBM 拡張 の終り

IBM 拡張

ID-1、**ID-2**、または **ID-3** のいずれかが DBCS データ項目である場合は、それらの ID はすべて DBCS データ項目なければならず、リテラルはすべて DBCS リテラルでなければなりません。

リテラル-1 または リテラル-2 のいずれかが DBCS リテラルである場合は、両方とも DBCS リテラルでなければならず、リテラル-1 からリテラル-3 は DBCS データ項目でなければなりません。

SPACE は、DBCS 項目に使用できる唯一の表意定数です。

IBM 拡張 の終り

DELIMITED BY 句

DELIMITED BY 句は、ストリングの区切りを設定します。

ID-2、リテラル-2

分離文字、すなわち転送されるデータを区切る文字です。

ID-1 または ID-2 が ID-3 または ID-4 と同じ記憶域を占有している場合には、これらの ID が同じデータ記述記入項目によって定義されている場合でも、結果は未定義になります。

表意定数を指定すると、それは 1 文字の非数字リテラルと見なされます。

SIZE

送り出し区域全体を転送します。

INTO 句

ID-3

受け入れフィールドを表します。

これは、編集データ項目を表してはならず、JUSTIFIED 文節で記述されてはなりません。また、参照変更することはできません。

ID-3 と ID-4 が同じ記憶域を占有している場合には、これらの ID が同じデータ記述記入項目によって定義されている場合でも、結果は未定義になります。

IBM 拡張

外部浮動小数点データ項目を表してはなりません。

IBM 拡張 の終り

POINTER 句

ID-4

受け入れフィールド内の文字位置を指す **ポインター・フィールド** を表します。

この ID は、受け入れ区域の長さに 1 を加えた値を含むために十分な大きさを持つ基本整数データ項目でなければなりません。ポインター・フィールドの PICTURE 文字ストリング内に記号 P を含むことはできません。

IBM 拡張

ID-3 が DBCS データ項目の場合、ID-4 は受け入れフィールド内の相対 DBCS 文字位置を示します。

IBM 拡張 の終り

ON OVERFLOW 句

ポインター値 (明示または暗黙) が次のものになると、制御が命令ステートメント-1 に移されます。

- ゼロまたは 1 よりも小さい値
- 受け入れフィールドの長さを超える値

上記のいずれかの状態が起これば、オーバーフロー条件が発生し、それ以上データが転送されません。STRING 操作が終了し、制御権が命令ステートメント-1 に移されます (ON OVERFLOW 句が指定されている場合)。それ以外の場合には、制御権が STRING ステートメントの終わりに移されます。NOT ON OVERFLOW ステートメントは指定されていても無視されます。

制御権が命令ステートメント-1 に渡されると、命令ステートメント-1 に指定されている各ステートメントについての規則に従って実行が継続されます。制御権の明示的な移動をもたらすプロシージャ分岐ステートメントまたは条件ステートメントが実行される場合には、制御権はそのステートメントの規則に従って移されます。

STRING ステートメントの実行中にオーバーフロー条件が発生しないと、制御は STRING ステートメントの終わりに移されます。オーバーフロー条件が発生せず、NOT ON OVERFLOW 句が指定されている場合には、制御は命令ステートメント-2 に移されます。ON OVERFLOW 句は指定されていても無視されます。

制御権が命令ステートメント-2 に渡された場合は、命令ステートメント-2 に指定されている各ステートメントの規則に従って実行が継続されます。制御権の明示的な移動をもたらすプロシージャ分岐ステートメントまたは条件ステートメントが実行される場合には、制御権はそのステートメントについての規則に従って移動されます。それ以外の場合には、制御権は命令ステートメント-2 の実行完了時に STRING ステートメントの終わりに移されます。

ON OVERFLOW ステートメントは、ID-3 の終わりを越えて 1 つまたは複数の文字を入れようとしているか、または POINTER の初期値が 1 よりも小さい場合を除き、実行されません。

END-STRING 句

この明示範囲終了符号は、STRING ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-STRING 句を使用することによって、STRING 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-STRING 句は、STRING 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

データの流れ

STRING ステートメントが実行されると、データが送り出しフィールドから受け入れフィールドに移動されます。送り出しフィールドが処理される順序は、それらが指定されている順序です。次の規則が適用されます。

- 送り出しフィールドの文字は、英数字基本項目間の移動に関する規則に従って受け入れフィールドに転送されます。ただし、このときにスペースの埋め込みは行われません (424 ページの『MOVE ステートメント』を参照してください)。
- DELIMITED BY ID / リテラルを指定した場合には、各送り出し項目の内容は、左端の文字から、次のいずれかになるまで 1 文字ずつ転送されます。
 - この送り出しフィールドの分離文字に到達する (分離文字そのものは転送されません)。
 - この送り出しフィールドの右端の文字が転送される。
- DELIMITED BY SIZE ID を指定した場合には、それぞれの送り出しフィールド全体が受け入れフィールドへ転送されます。
- 受け入れフィールドが満杯になるかまたはすべての送り出しフィールドの処理が完了すると、操作が終了します。
- POINTER 句を指定した場合には、COBOL ユーザーは受け入れフィールド内のデータの配置を制御するための明示ポインター・フィールドを使用できます。ユーザーは明示ポインターの初期値を設定しなければなりません。初期値は、1 より小さいかまたは受け入れフィールドの文字カウントより大きい値であってはなりません。(ポインター・フィールドは、受け入れフィールドの長さ + 1 を加えた値を含むために十分な大きさのフィールドとして定義されていなければなりません。これは、転送の終了時にシステムがポインターを更新する際に算術オーバーフローが起こらないようにするためです。)
- POINTER 句を指定しない場合には、ユーザーはポインターを使用することができません。ただし、初期値 1 を持つ概念上の暗黙ポインターがシステムによって使用されます。
- 概念上、STRING ステートメント実行時の (明示または暗黙) ポインターの初期値は、データが転送される受け入れフィールドの先頭の文字位置です。その位置から始めて、データは左から右へ 1 文字ずつ配置されます。その位置から始めて、データは左から右へ 1 文字ずつ配置されます。各文字が配置されるたびに、明示または暗黙ポインターが 1 ずつ増やされます。ポインター・フィールド中の値はこの方法によってだけ変更されます。処理の終了時には、ポインター値は必ず、受け入れフィールドに転送された最後の文字の次の文字と等しい値を指します。

添え字付け、参照変更、可変長の計算、または関数の評価は、STRING ステートメントの処理の開始時に 1 回だけ実行されます。このため、ID-3 または ID-4 が、

STRING ステートメント内で添え字、参照修飾子、または関数引数として使用されるか、または STRING ステートメントの任意の ID の長さまたは位置に影響する場合、これらの値は STRING ステートメントの始まりにおいて判別され、STRING ステートメントの結果には影響されません。

ID-1 または ID-2 が ID-3 または ID-4 と同じ記憶域を占有している場合、または ID-3 と ID-4 が同じ記憶域を占有している場合には、STRING ステートメントの実行の結果は未定義です。

STRING ステートメントの実行が完了すると、受け入れフィールドのうち、データが転送された部分だけが変更されます。受け入れフィールドの残りの部分には、この STRING ステートメントの実行前に入っていたデータがそのまま残っています。

次の STRING ステートメントが実行された場合、得られる結果は 図 24 に示されているようになります。

```
STRING ID-1 ID-2 DELIMITED BY ID-3
      ID-4 ID-5 DELIMITED BY SIZE
      INTO ID-7 WITH POINTER ID-8
END-STRING
```

FD 記入項目:
FD INPUT-FILE LABEL RECORDS OMITTED.

01 RECORD-1 PICTURE X(30).

01 RECORD-2 PICTURE X(20).

READ ステートメント実行時の入力域の内容:

```
_____
ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ1234
```

(RECORD-2) で読み取られているレコードの内容:

```
_____
01234567890123456789
```

READ 実行後の入力域の内容:

```
01234567890123456789??????????
```



(入力域のこれらの文字は未定義)

図 24. STRING ステートメントの実行結果

STRING ステートメントの例

次の例では、STRING ステートメントに適用されるいくつかの考慮事項を示します。

データ部で、プログラマーは次のフィールドを定義したものとします。

STRING ステートメント

```
01 RPT-LINE      PICTURE X(120).
01 LINE-POS      PICTURE 99.
01 LINE-NO       PICTURE 9(5) VALUE 1.
01 DEC-POINT     PICTURE X VALUE ".".
```

また、FILE セクションで、次の入力レコードを定義したものとします。

```
01 RCD-01.
  05 CUST-INFO.
    10 CUST-NAME PICTURE X(15).
    10 CUST-ADDR PICTURE X(34).
  05 BILL-INFO.
    10 INV-NO    PICTURE X(6).
    10 INV-AMT   PICTURE $$,$$$$.99.
    10 AMT-PAID  PICTURE $$,$$$$.99.
    10 DATE-PAID PICTURE X(8).
    10 BAL-DUE   PICTURE $$,$$$$.99.
    10 DATE-DUE  PICTURE X(8).
```

プログラマーが、RCD-01 の情報の一部から成る出力行を作成したいとします。この行は、行番号、顧客の名前と住所、請求書番号、支払期日、および支払金額 (示された円の桁数に切り捨てられた) で構成されます。

読み取られるレコードには次の情報が入っています。

```
J.B.bSMITHbbbb
444bSPRINGbST.,bCHICAGO,bILL.bbbbb
A14275
¥4,736.85
¥2,400.00
09/22/76
¥2,336.85
09/09/94
```

手続き部で、プログラマーは RPT-LINE を SPACES に初期設定し、LINE-POS (ポインター・フィールドとして使用される) を 4 に設定します。その後で、次の STRING ステートメントを出します。

```
STRING LINE-NO SPACE
        CUST-INFO SPACE
        INV-NO SPACE
        DATE-DUE SPACE
        DELIMITED BY SIZE,
        BAL-DUE
        DELIMITED BY DEC-POINT
        INTO RPT-LINE
        WITH POINTER LINE-POS.
```

ステートメントの実行時には、次の処理が行われます。

1. フィールド LINE-NO が RPT-LINE の桁 4 ~ 8 に移動されます。
2. スペースが桁 9 に移動されます。
3. グループ項目 CUST-INFO が桁 10 ~ 58 に移動されます。
4. スペースが桁 59 に移動されます。
5. INV-NO が桁 60 ~ 65 に移動されます。
6. スペースが桁 66 に移動されます。
7. DATE-DUE が桁 67 ~ 74 に移動されます。

8. スペースが桁 75 に移動されます。
9. BAL-DUE の小数点の前にある部分が桁 76 ~ 81 に移動されます。

STRING ステートメントの実行後は、次のようになります。

- RPT-LINE は 図 25 で示されているようになります。
- LINE-POS には値 82 が入ります。

注: 一連の MOVE ステートメントの代わりに、1 つの STRING ステートメントを書くことができます。

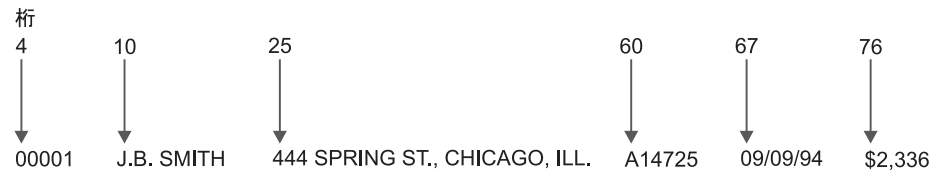
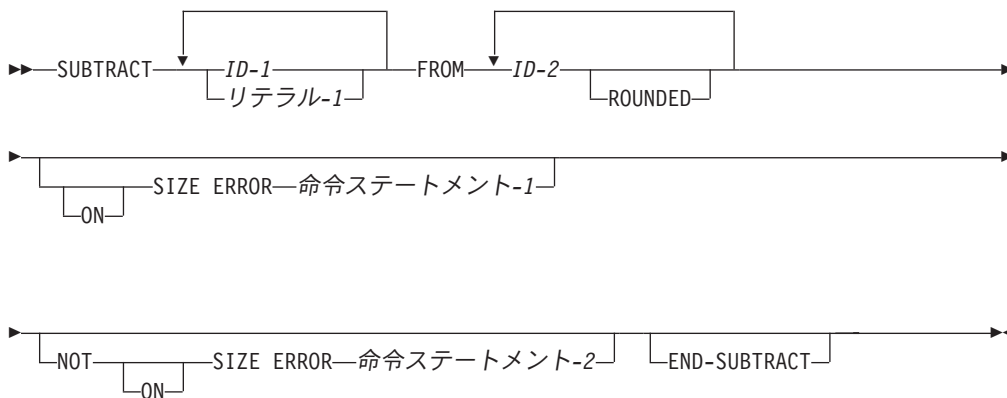


図 25. STRING ステートメントの例の出力データ

SUBTRACT ステートメント

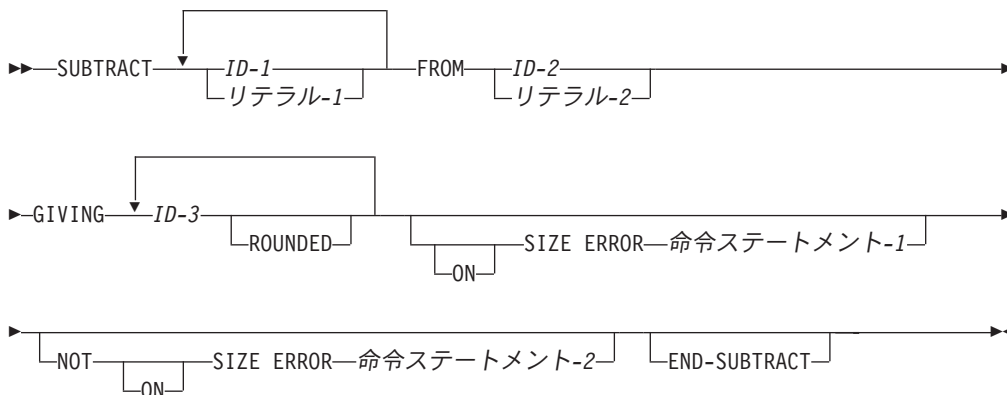
SUBTRACT ステートメントは、1 つまたは複数の数字項目から、1 つの数字項目または複数の数字項目の和を減算し、結果を保管します。

SUBTRACT ステートメント - 形式 1



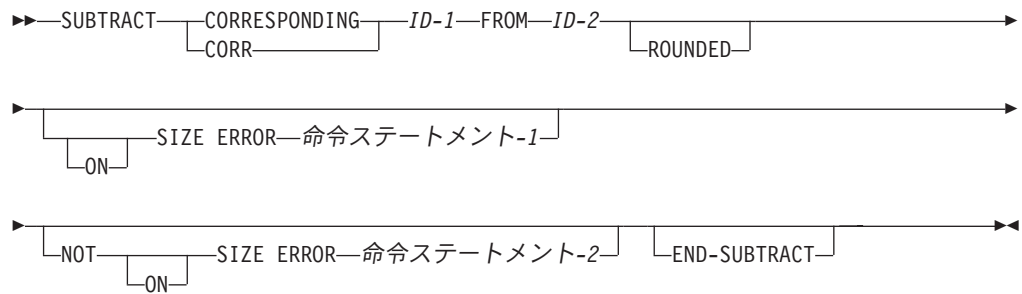
形式 1 では、キーワード FROM の前のすべての ID またはリテラルが加算され、この初期の和が ID-2 から減算され、ID-2 に保管されます。初期の和は、その後、ID-2 が見つかるたびに、ID-2 が指定されている順序で左から右に減算され、保管されます。

SUBTRACT ステートメント - 形式 2 - GIVING



形式 2 では、キーワード FROM の前のすべての ID またはリテラルが加算され、この和が ID-2 またはリテラル-2 から減算されます。減算の結果は、ID-3 によって参照されているデータ項目に保管されます。ID-2 またはリテラル-2 は未変更のままです。

SUBTRACT ステートメント - 形式 3 - CORRESPONDING



形式 3 では、ID-1 内の基本データ項目が、ID-2 内の対応する基本データ項目から減算され、結果が ID-2 に保管されます。

すべての形式において、以下が適用されます。

ID-1、ID-2、ID-3

形式 1 および 2 では、ID-1 および ID-2 は基本数字項目でなければなりません。

形式 2 では、GIVING の後のそれぞれの ID-3 は数字または数字編集基本項目でなければなりません。

形式 3 では、ID-1 はグループ項目でなければなりません。

リテラル-1、リテラル-2

数字リテラルでなければなりません。

語 GIVING に続くデータ項目を除く該当のステートメント内のすべてのオペランドを使用して、オペランドの合成内容が決定されます。オペランドの合成に関する詳細は 293 ページの『オペランドのサイズ』を参照してください。

IBM 拡張

浮動小数点データ項目および浮動小数点リテラルは、数字データ項目または数字リテラルが指定できる場所ではどこでも使用できます。

IBM 拡張 の終り**ROUNDED 句**

ROUNDED 句に関する情報、およびオペランドに関する考慮事項については、291 ページの『ROUNDED 句』を参照してください。

SIZE ERROR 句

SIZE ERROR 句に関する情報、およびオペランドに関する考慮事項については、292 ページの『SIZE ERROR 句』を参照してください。

CORRESPONDING 句 (形式 3)

CORRESPONDING 句 (CORR) を使用すると、同じ名前の基本数字データ項目を、それらが属するグループ項目を指定することによって操作できます。

END-SUBTRACT 句

この明示範囲終了符号は、SUBTRACT ステートメントの範囲を区切ります。
END-SUBTRACT は、SUBTRACT 条件ステートメントを命令ステートメントに交換します。この句を使用することによって、SUBTRACT 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。

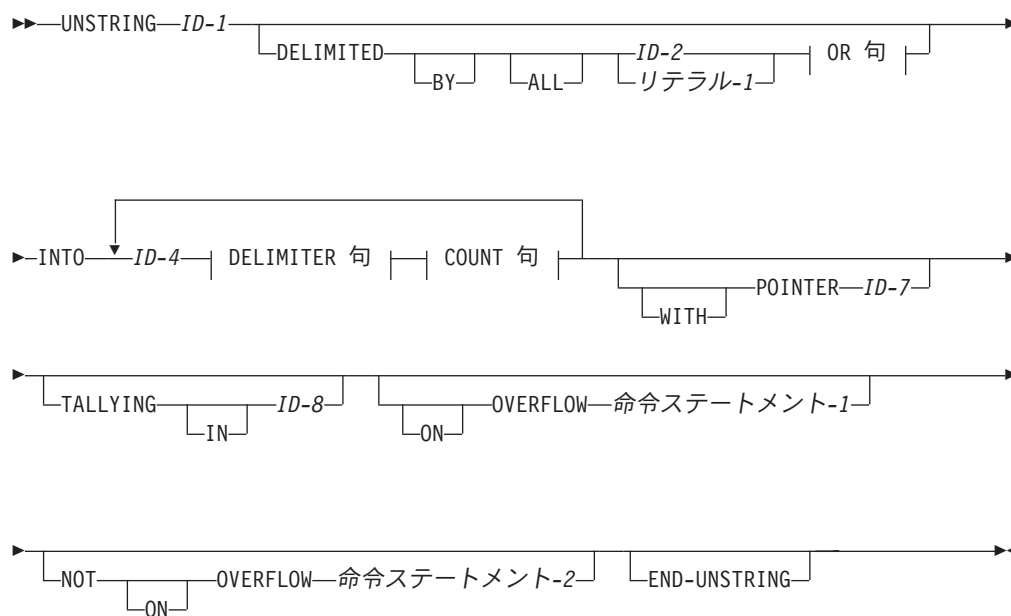
詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

UNSTRING ステートメント

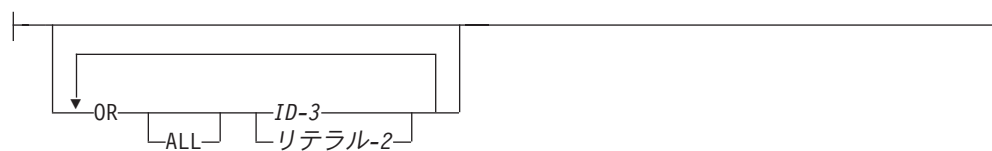
UNSTRING ステートメントは、送り出しフィールド中の連続したデータを分離し、複数の受け入れフィールドへ入れます。

一連の MOVE ステートメントの代わりに、1 つの UNSTRING ステートメントを書くことができます。

UNSTRING ステートメント - 形式



OR 句:



DELIMITER 句:



COUNT 句:



ID-1

送り出しフィールドを表します。

これは、英数字データ項目でなければならず、参照変更することはできません。データはこのフィールドから受け入れフィールドへ転送されます。

IBM 拡張

ID-1 は DBCS データ項目にすることができます。

IBM 拡張 の終り

DELIMITED BY 句

この句では、データ転送を制御する、データ内の分離文字を指定します。

分離文字は、ID-2、ID-3、またはそれと対応するリテラルです。指定される各 ID またはリテラルが 1 つの分離文字を表します。それぞれが英数字データ項目でなければなりません。

DELIMITED BY 句を指定しなければ、DELIMITER IN 句および COUNT IN 句を指定してはなりません。

ID-2、ID-3

各 ID は 1 つの分離文字を表します。それぞれが英数字データ項目でなければなりません。

IBM 拡張

いずれか一方が DBCS 項目である場合は、両方を DBCS 項目にしなければなりません。

IBM 拡張 の終り

リテラル-1、リテラル-2

各リテラルは非数字リテラルでなければなりません。それぞれ、ALL リテラルを除く任意の表意定数にすることができます。表意定数が指定されている場合には、1 文字の非数字リテラルと見なされます。

IBM 拡張

いずれか一方のリテラルが DBCS リテラルである場合は、両方を DBCS リテラルにしなければなりません。表意定数 SPACE は DBCS リテラルとして使用できます。

IBM 拡張 の終り

ALL

連続した分離文字が 1 つ以上あっても、1 つだけであるかのように取り扱われ、その 1 つが分離文字受け入れフィールド (指定された場合) へ移されます。送り出しフィールドの中の分離文字は、基本英数字項目として取り扱われ、MOVE ステートメントの規則に従って現行の分離文字受け入れフィールドへ移動されます。

IBM 拡張

ALL が DBCS ID またはリテラルで使用されると、送り出しフィールド内の分離文字は DBCS 項目として扱われます。これらは MOVE ステートメントの規則に従って移動されます。

IBM 拡張 の終り

DELIMITED BY ALL が指定されていないで、2 つ以上の連続する分離文字が検出されると、現行のデータ受け入れフィールドは、データ受け入れフィールドの記述に従ってスペースまたはゼロで埋められます。

1 つの分離文字に複数の文字が含まれている場合、それが分離文字として認識されるのは、分離文字が連続しており、送り出しフィールドで指定されたとおりの順序になっている場合だけです。

複数の分離文字が指定されている場合には、OR 条件が存在し、重なり合わない各分離文字は、指定された順序で送り出しフィールドの中で認識されます。たとえば、DELIMITED BY "AB" OR "BC" が指定された場合には、送り出しフィールド内に AB または BC があれば分離文字と見なされ、ABC があれば AB があつたと見なされます。データ・カウント・フィールド、ポインター・フィールド、およびフィールド・カウント・フィールドは、それぞれ PICTURE 文字ストリング中に記号 P をもたない整数項目でなければなりません。

INTO 句

ID-4

データ受け入れフィールドを表します。

それぞれが USAGE DISPLAY をもっていなければなりません。これらのフィールドは次のように定義できます。

- 英字
- 英数字
- 数字 (PICTURE 文字ストリング中に記号 P をもたない)

IBM 拡張

ID-4 は浮動小数点項目として定義できません。

ID-4 は DBCS データ項目にすることができます。

IBM 拡張 の終り

DELIMITER IN

ID-5 は分離文字受け入れフィールドを表します。ID-5 は英数字でなければなりません。

IBM 拡張

ID-5 は DBCS データ項目にすることができます。

IBM 拡張 の終り

UNSTRING ステートメント

DELIMITER IN 句を指定できるのは、DELIMITED BY 句を指定する場合だけです。ID は、英数字編集または数字編集項目として定義されてはなりません。

COUNT IN

ID-6 は、各データ転送用のデータ・カウント・フィールドであり、PICTURE 文字ストリング内に記号 P をもたない整数データ項目でなければなりません。各フィールドでは、データ受け入れフィールドに移動される、送り出しフィールド内の調べられた文字のカウント (分離文字または送り出しフィールドの終わりによって終了される) が保持されます。分離文字はこのカウントに含まれません。

IBM 拡張

ID-1 (送り出しフィールド) が DBCS データ項目である場合、ID-6 は、送り出しフィールド内で調べられた文字数 (バイト数ではない) を示します。

IBM 拡張 の終り

DELIMITED BY 句を指定する場合を除き、COUNT IN 句を指定してはなりません。

POINTER 句

ID-7

ID-7 は、PICTURE 文字ストリング内に記号 P をもたない整数データ項目であり、送り出しフィールド内の相対位置を示す値を含みます。この句を指定する場合には、UNSTRING ステートメントの実行前にこのフィールドを初期設定しなければなりません。

TALLYING IN 句

ID-8

ID-8 は、フィールド・カウント・フィールドです。これは、PICTURE 文字ストリング内に記号 P をもたない整数データ項目を介してユーザーによって初期設定され、この UNSTRING ステートメントの実行で影響されたデータ受け入れフィールドの数だけ増やされます。

ON OVERFLOW 句

命令ステートメント-1 は、次の場合に実行されます。

- ポインター値 (明示または暗黙) が 1 より小さい場合。
- ポインター値 (明示または暗黙) が、送り出しフィールドの長さと同じ値を超えている場合。
- すべてのデータ受け入れフィールドが影響された後、送り出しフィールドにまだ未調査の文字が含まれている場合。

上記のいずれかの条件が生じると、次のようになります。

1. オーバーフロー条件が発生し、それ以上データが転送されません。
2. UNSTRING 操作が終了されます。
3. NOT ON OVERFLOW 句が指定されている場合は無視されます。

4. 制御権が UNSTRING ステートメントの終わり、または命令ステートメント-1 (ON OVERFLOW 句が指定されている場合) に移動されます。

制御権が命令ステートメント-1 に渡されると、命令ステートメント-1 に指定されている各ステートメントについての規則に従って実行が継続されます。制御権の明示的な移動をもたらすプロシージャ分岐ステートメントまたは条件ステートメントが実行される場合には、制御権はそのステートメントについての規則に従って移動されます。それ以外の場合には、制御権は命令ステートメント-1 の実行完了時に UNSTRING ステートメントの終わりに移動されます。

オーバーフロー条件をもたらす条件が検出されなかった場合、ON OVERFLOW 句 (指定されている場合) は無視されます。NOT ON OVERFLOW 句が指定されている場合には、制御権は命令ステートメント-2 に移動されます。それ以外の場合には、制御権は UNSTRING ステートメントの終わりに移動されます。

制御権が命令ステートメント-2 に移動されると、命令ステートメント-2 に指定されている各ステートメントについての規則に従って実行が継続されます。制御権の明示的な移動をもたらすプロシージャ分岐ステートメントまたは条件ステートメントが実行される場合には、制御権はそのステートメントについての規則に従って移動されます。それ以外の場合には、制御権は命令ステートメント-2 の実行完了時に UNSTRING ステートメントの終わりに移動されます。

END-UNSTRING 句

この明示範囲終了符号は、UNSTRING ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-UNSTRING 句を使用することによって、UNSTRING 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-UNSTRING 句は、UNSTRING 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

データの流れ

UNSTRING ステートメントが開始されると、データは、次の規則に従って送り出しフィールドから現行のデータ受け入れフィールドへ転送されます (現行のデータ受け入れフィールドは ID-4 です)。

1. POINTER 句が指定されていない場合には、送り出しフィールドの文字ストリングは左端の文字から調査されます。POINTER 句が指定されている場合には、ポインター・フィールド内の値によって指定された相対文字位置からフィールドが調査されます。
2. DELIMITED BY 句が指定されている場合には、調査は左から右へ 1 文字ずつ、分離文字が検出されるまで続けられます。分離文字が検出される前に送り出しフィールドの終わりに達した場合には、調査は送り出しフィールドの最後の文字で終了します。この時点でまだ受け入れフィールドが残っている場合には、次のフィールドが選択されます。それ以外の場合には、オーバーフロー条件が起こります。
3. DELIMITED BY 句が指定されていない場合には、調査される文字数は現行のデータ受け入れフィールドのサイズと等しくなります。これは、フィールドのデータ・カテゴリーによって異なります。

UNSTRING ステートメント

- a. 受け入れフィールドが英数字または英字である場合には、調査される文字数は現行の受け入れフィールド内の文字数と等しくなります。
 - b. 受け入れフィールドが数字である場合には、調査される文字数は現行の受け入れフィールドの整数部分の文字数と等しくなります。
 - c. 受け入れフィールドが **SIGN IS SEPARATE** 文節で記述されている場合には、調査される文字数は現行の受け入れフィールドのサイズより 1 文字少なくなります。
 - d. 受け入れフィールドが可変長データ項目として記述されている場合には、調査される文字数は **UNSTRING** 操作開始時の現行の受け入れフィールドのサイズによって判別されます。
4. 調査された文字 (すべての分離文字を除く) は英数字基本項目として取り扱われ、**MOVE** ステートメントの規則 (424 ページの『**MOVE** ステートメント』を参照) に従って現行のデータ受け入れフィールドに移動されます。
 5. **DELIMITER IN** 句が指定されている場合には、送り出しフィールド内の分離文字は基本英数字項目として取り扱われ、**MOVE** ステートメントの規則に従って現行の分離文字受け入れフィールドに移動されます。区切り条件が送り出しフィールドの終わりである場合には、現行の分離文字受け入れフィールドはスペースで埋められます。
 6. **COUNT IN** 句が指定されている場合には、調査された文字 (すべての分離文字を除く) 数と等しい値が、基本項目移動の規則に従ってデータ・カウント・フィールドに転送されます。
 7. **DELIMITED BY** 句が指定されている場合には、送り出しフィールドが、分離文字の右側にある最初の文字からさらに調査されます。
 8. **DELIMITED BY** 句が指定されていない場合には、送り出しフィールドが、調査された最後の文字の右側にある最初の文字からさらに調査されます。
 9. 後続のデータ受け入れフィールドごとに、送り出しフィールド内のすべての文字が転送され終わるまで、あるいはデータの入っていないデータ受け入れフィールドがなくなるまで、上記のプロシージャァが繰り返されます。
 10. **POINTER** 句が指定されている場合には、ポインター・フィールドの値は、送り出しフィールド内の文字が調査されるごとに 1 ずつ増やされるかのように変化します。 **UNSTRING** ステートメントの実行完了時には、ポインター・フィールドに、初期値と送り出しフィールド内の調査された文字数とを加算した値が入ります。
 11. **TALLYING** 句が指定されていて、**UNSTRING** ステートメントの実行が完了したときには、フィールド・カウント・フィールドに、初期値と影響されたデータ受け入れ域の数とを加算した値が入ります。

注: すべての添え字付け、参照変更、可変長の計算、または関数の評価は、**UNSTRING** ステートメントの処理の開始時に 1 回だけ実行されます。

UNSTRING ステートメントの ID のいずれかが添え字付きまたは指標付きである場合には、添え字および指標は次のように評価されます。

- 送り出しフィールド、ポインター・フィールド、またはフィールド・カウント・フィールドに関連付けられている添え字または指標は、データが転送される直前に 1 回だけ評価されます。

- 分離文字、データ受け入れフィールド、分離文字受け入れフィールド、またはデータ・カウント・フィールドに関連付けられている添え字または指標は、データが当該データ項目へ転送される直前に評価されます。

図 26 に、UNSTRING ステートメントの実行規則を示します。

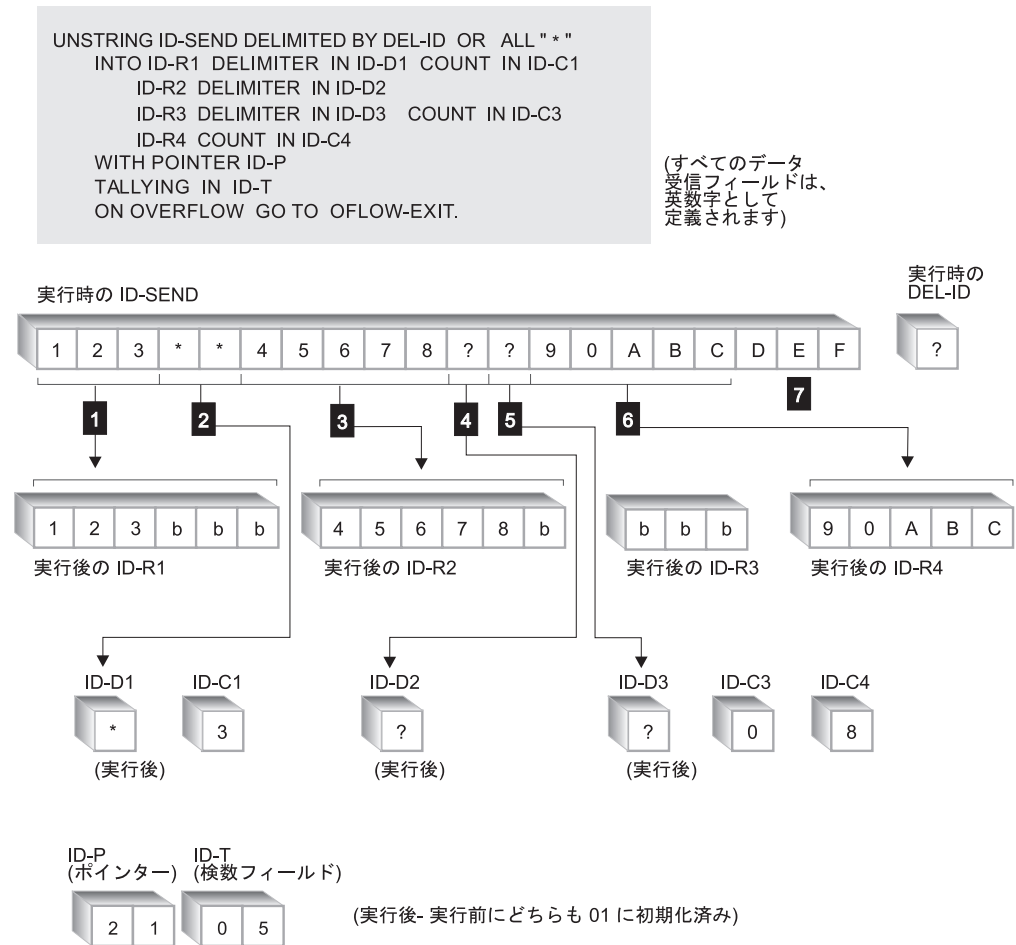


図 26. UNSTRING ステートメントの実行結果

- 1 ID-R1 に 3 文字が入られます。
- 2 ALL * が指定されているため、連続するすべてのアスタリスクが処理されますが、ID-D1 には 1 つのアスタリスクだけが入られます。
- 3 ID-R2 に 5 文字が入られます。
- 4 ID-D2 に ? が入られます。現行の受け入れフィールドは ID-R3 になります。
- 5 ID-D3 に ? が入られます。ID-R3 はスペースで埋められます。文字は転送されないため、ID-C3 に 0 が入られます。
- 6 ID-R4 に 5 文字が入られる前に、分離文字が検出されません。ID-C4 に 8 が入られます。これは、最後の分離文字以降に調べられた文字の数を表します。
- 7 ID-P が 21 に更新されます。これは、送り出しフィールドの全長 + 1 で

UNSTRING ステートメント

す。ID-T が 5 に更新されます。これは、影響を受けたフィールド数 + 1 です。ID-SEND 内に未調査の文字がないため、OVERFLOW EXIT は使用されません。

UNSTRING ステートメントの例

次の例では、UNSTRING ステートメントに適用されるいくつかの考慮事項を示します。

データ部では、UNSTRING ステートメントの影響を受ける以下の入力レコードが定義されているものとします。

```
01 INV-RCD.
   05 CONTROL-CHARS    PIC XX.
   05 ITEM-INDENT      PIC X(20).
   05 FILLER           PIC X.
   05 INV-CODE         PIC X(10).
   05 FILLER           PIC X.
   05 NO-UNITS         PIC 9(6).
   05 FILLER           PIC X.
   05 PRICE-PER-M     PIC 99999.
   05 FILLER           PIC X.
   05 RTL-AMT         PIC 9(6).99.
```

次の 2 つのレコードが UNSTRING ステートメントの受け入れフィールドとして定義されています。DISPLAY-REC は印刷出力用に使用されます。WORK-REC は内部処理用に使用されます。

```
01 DISPLAY-REC
   05 INV-NO          PIC X(6).
   05 FILLER          PIC X VALUE SPACE
   05 ITEM-NAME       PIC X(20).
   05 FILLER          PIC X VALUE SPACE
   05 DISPLAY-DOLS   PIC 9(6).

01 WORK-REC
   05 M-UNITS         PIC 9(6).
   05 FIELD-A         PIC 9(6).
   05 WK-PRICE
      REDEFINES
      FIELD-A         PIC 9999V99.
   05 INV-CLASS      PIC X(3).
```

UNSTRING ステートメントの中で制御フィールドとして使用するために、次のフィールドも定義されています。

```
01 DBY-1            PIC X, VALUE IS ".".
01 CTR-1            PIC 99, VALUE IS ZERO.
01 CTR-2            PIC 99, VALUE IS ZERO.
01 CTR-3            PIC 99, VALUE IS ZERO.
01 CTR-4            PIC 99, VALUE IS ZERO.
01 DLTR-1          PIC X.
01 DLTR-2          PIC X.
01 CHAR-CT         PIC 99, VALUE IS 3.
01 FLDS-FILLED     PIC 99, VALUE IS ZERO.
```

手続き部では、INV-RCD のサブフィールドを DISPLAY-REC および WORK-REC のサブフィールドに移動するために、次の UNSTRING ステートメントが書かれています。

```
UNSTRING INV-RCD
  DELIMITED BY ALL SPACES
  OR "/"
```



```

OR DBY-1
INTO ITEM-NAME COUNT IN CTR-1,
INV-NO DELIMITER IN DLTR-1
COUNT IN CTR-2,
INV-CLASS,
M-UNITS COUNT IN CTR-3,
DISPLAY-DOLS DELIMITER IN DLTR-2
COUNT IN CTR-4
WITH POINTER CHAR-CT
TALLYING IN FLDS-FILLED
ON OVERFLOW
GO TO UNSTRING-COMPLETE.

```

UNSTRING ステートメントを出す前に、CHAR-CT (ポインター項目) に値 3 を入れます。これは INV-RCD の始まりにある 2 文字の制御文字を処理の対象としないためです。DBY-1 には分離文字として使用されるピリオドが入れられ、FLDS-FILLED (フィールド・カウント項目) には値 0 が入れられます。さらに、図 27 で示されているデータが INV-RCD の中へ読み込まれます。

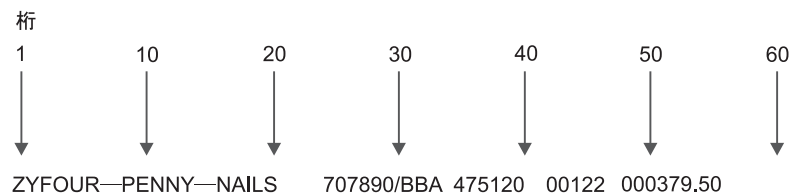


図 27. UNSTRING ステートメントの例 - 入力データ

UNSTRING ステートメントの実行時には、次の処理が行われます。

1. INV-RCD の桁 3 ~ 18 (FOUR-PENNY-NAILS) が ITEM-NAME に入れられ、その区域の中で左寄せされます。未使用の文字位置はスペースで埋められます。値 16 が CTR-1 に入れられます。
2. 分離文字として ALL SPACES が指定されているので、5 つの連続した SPACE 文字も 1 つの分離文字と見なされます。
3. 桁 24 ~ 29 (707890) が INV-NO に入れられます。分離文字 / が DLTR-1 に入れられ、値 6 が CTR-2 に入れられます。
4. 桁 31 ~ 33 が INV-CLASS に入れられます。分離文字は SPACE ですが、分離文字用の受け入れ域として定義されたフィールドがないため、SPACE はバイパスされます。
5. 桁 35 ~ 40 (475120) が調べられ、M-UNITS に入れられます。分離文字は SPACE ですが、分離文字用の受け入れ域として定義された受け入れフィールドがないため、SPACE はバイパスされます。値 6 が CTR-3 に入れられます。
6. 桁 42 ~ 46 (00122) が FIELD-A に入れられ、その区域の中で右寄せされます。高位の桁位置は 0 (ゼロ) で埋められます。分離文字は SPACE ですが、分離文字用の受け入れ域として定義されたフィールドがないため、SPACE はバイパスされます。
7. 桁 48 ~ 53 (000379) が DISPLAY-DOLS に入れられます。分離文字ピリオドが DLTR-2 に入れられ、値 6 が CTR-4 に入れられます。
8. すべての受け入れフィールドが影響され、INV-RCD 内のデータの 2 文字が調査されていないため、ON OVERFLOW 出口が使用され、UNSTRING ステートメントの実行が完了します。

UNSTRING ステートメント

UNSTRING ステートメントの実行終了時、DISPLAY-REC には次のデータが含まれます。

```
707890 FOUR-PENNY-NAILS      000379
```

WORK-REC には次のデータが含まれます。

```
475120000122BBA
```

CHAR-CT (ポインター・フィールド) には値 55 が入り、FLD-FILLED (フィールド・カウント・フィールド) には値 6 が入ります。

注: 一連の MOVE ステートメントの代わりに、1 つの UNSTRING ステートメントを書くことができます。

WRITE ステートメント

WRITE ステートメントは、出力ファイルまたは入出力ファイル用にレコードを解放します。

WRITE ステートメントの実行時には、関連する索引付きまたは相対ファイルが OUTPUT、I-O、または EXTEND モードでオープンされていなければなりません。関連する順次ファイルは、OUTPUT または EXTEND (装置タイプ TAPEFILE、DISK、または DATABASE) モードでオープンされていなければなりません。

IBM 拡張

OVRDBF CL コマンドの INHWRT パラメーターによって、このステートメントの処置をプログラム実行時に禁止することができます。このパラメーターが指定された場合、データに依存するエラーに対しては、非ゼロのファイル状況コードが設定されません。データに依存するエラーの例として、重複キーおよびデータ変換エラーがあります。

このコマンドの詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「プログラミング」カテゴリーの中の『CL および API』セクションを参照してください。

IBM 拡張 の終り

順次ファイル

ADVANCING 句および END-OF-PAGE 句は、印刷されるページ上の各行の垂直位置決めを制御します。印刷されるページが中間装置 (たとえばディスク) 上で保持されると、それが編集またはブラウズされたときに、形式が予期した出力と異なることがあります。

注: 1 つの WRITE ステートメントの中に ADVANCING PAGE 句と END-OF-PAGE 句の両方を指定してはなりません。

外部で定義されたファイルの境界を超えて書き込みを試みると、WRITE ステートメントの処理が正常に完了せず、EXCEPTION/ERROR 条件が起こります。レコード名の内容は影響を受けません。その後 669 ページの『USE ステートメントのプログラミング上の注意事項』で説明されているエラー処理の規則に従って、処理が行われます。

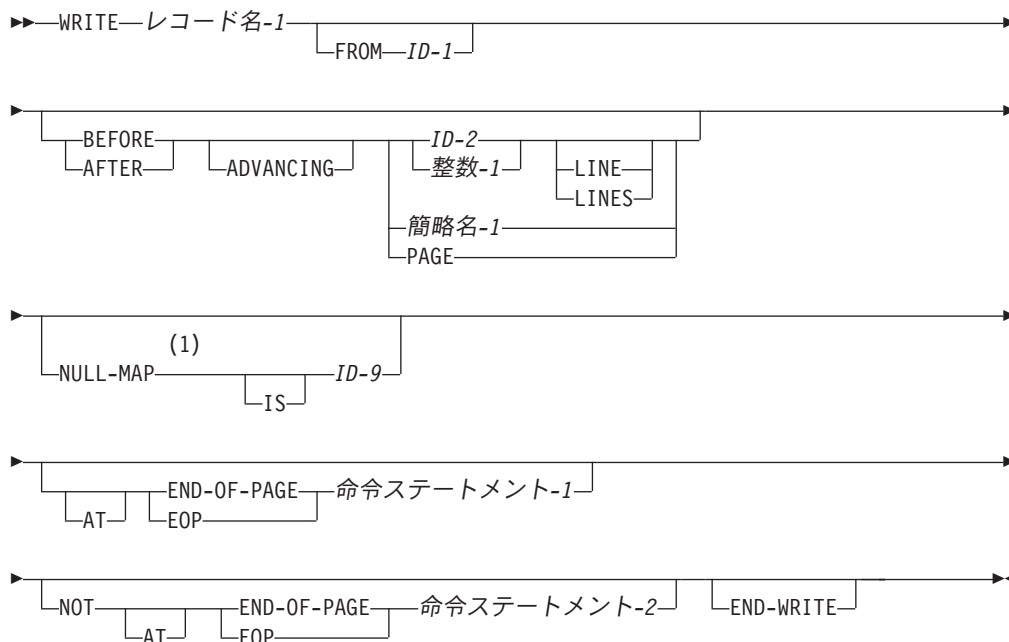
装置タイプ TAPEFILE または DISKETTE 上の順次ファイルの場合、マルチボリューム OUTPUT ファイルのボリュームの終わりが検出されると、WRITE ステートメントによって以下の操作が行われます。

1. 標準の終了ボリューム・ラベル・プロシージャーが実行されます。
2. ボリュームの切り替えが行われます。
3. 標準の開始ボリューム・ラベル・プロシージャーが実行されます。

ボリュームの終わりに達したという標識はプログラムに返されません。

WRITE ステートメント

WRITE ステートメント - 形式 - 順次ファイル



注:

1 IBM 拡張

レコード名-1

データ部の FD 記入項目で定義されていなければなりません。レコード名-1 は修飾できます。レコード名-1 をソート・ファイルまたはマージ・ファイルと関連付けてはなりません。

IBM 拡張

レコード名-1 は浮動小数点データ項目にすることができます。

レコード名-1 は DBCS データ項目を定義できます。レコード名-1 が DBCS データ項目の場合、ID-1 は、DBCS データ項目でなければなりません。

IBM 拡張 の終り

FROM

FROM を指定すると、実行結果は次の場合と同じになります。

```
MOVE identifier-1 TO record-name-1  
WRITE record-name-1
```

移動は、CORRESPONDING 句のない MOVE ステートメントの規則に従って実行されます。

WRITE ステートメントの実行後、情報は ID-1 ではまだ使用可能ですが、レコード名-1 では使用不可になります。(297 ページの『INTO/FROM ID 句』を参照してください。)

ID-1

英数字データ項目または数字編集データ項目でなければなりません。データはこのフィールドから受け入れフィールドへ転送されます。

ID-1 は、英数字または DBCS 関数 ID の名前にすることができます。

IBM 拡張

ID-1 は、浮動小数点にすることも、日時データ項目にすることもできます。

IBM 拡張 の終り

ID-2

整数データ項目でなければなりません。

ファイルの最大レコード・サイズはファイルの作成時に設定され、後で変更することはできません。

レコード名-1 と ID-1 で同じ記憶域を参照してはなりません。

WRITE ステートメントの実行後には、次のいずれかの場合を除き、レコードはレコード名-1 で使用可能でなくなります。

- 関連するファイルが SAME RECORD AREA 文節の中で指定されている (この場合には、レコードは、SAME RECORD AREA 文節の中で指定されている他のファイルのレコードとしても使用可能です)。
- WRITE ステートメントが境界違反のために失敗する。

これらのいずれかの場合には、レコードはレコード名-1 でまだ使用できます。

ファイル位置標識は、WRITE ステートメントの実行によって影響されません。

ファイルの中にレコードを保管するのに必要な文字桁数は、COBOL プログラムの中でそのレコードの論理記述によって定義された文字桁数と同じであってもなくてもかまいません。(214 ページの『PICTURE 文節の編集』および 235 ページの『USAGE 文節』を参照してください。)

ファイル制御記入項目で FILE STATUS 文節が指定されている場合には、WRITE ステートメントの実行時に、実行が成功するかどうかに関係なく、関連する状況キーが更新されます。

I-O モードでオープンされた順次ファイルに対しては、WRITE ステートメントを実行することはできません。

ADVANCING 句

ADVANCING 句は、ページ上の出力レコードの位置決めを制御します。この句は、装置タイプ PRINTER にのみ適用されます。次の規則が適用されます。

1. BEFORE ADVANCING を指定した場合には、ページ送りの前行が印刷されません。
2. AFTER ADVANCING を指定した場合には、ページ送りの後で前行が印刷されません。
3. ID-2 を指定した場合には、ID-2 の現行値と等しい行数だけページ送りが行われます。ID-2 は整数データ項目でなければなりません。
4. 整数-1 を指定した場合には、整数-1 の値と等しい行数だけページ送りが行われます。

WRITE ステートメント

5. 整数-1、または ID-2 の値はゼロにすることもできます。
6. 簡略名を指定した場合には、システム特有の処置が取られます。簡略名は、SPECIAL-NAMES 段落の環境名-1 と等価にする必要があります (有効な環境名は 78 ページの表 2 にリストされています)。簡略名として使用できる値の詳細は 76 ページの『SPECIAL-NAMES 段落』を参照してください。
7. PAGE を指定した場合には、装置が次の論理ページに位置付けられる前 (BEFORE) または後 (AFTER) (使用されている句による) に、レコードが論理ページに印刷されます。使用されている装置にとって PAGE が意味をもたない場合には、BEFORE または AFTER (指定されている句による) ADVANCING 1 LINE が使用されます。

FD 記入項目に LINAGE 文節が入っている場合には、その文節で指定されているように、次のページの最初の印刷可能行への位置変更が行われます。LINAGE 文節が省略されている場合には、次のページの 1 行目への位置変更が行われません。

LINAGE-COUNTER の規則 このファイルについて LINAGE 文節が指定されている場合は、WRITE ステートメントの実行時に、関連する LINAGE-COUNTER 特殊レジスターが次の規則に従って変更されます。

- a. ADVANCING PAGE が指定されている場合には、LINAGE-COUNTER が 1 にリセットされます。
- b. ADVANCING ID-2 または整数-1 が指定されている場合には、LINAGE-COUNTER が ID-2 または整数-1 内の値だけ増やされます。
- c. ADVANCING 句が省略されている場合には、LINAGE-COUNTER が 1 だけ増やされます。
- d. 装置が新しいページの最初の使用可能行に位置変更されると、LINAGE-COUNTER が 1 にリセットされます。

この句が省略される場合には、AFTER ADVANCING 1 LINE が書かれている場合と同様に、自動的な行送りが行われます。

NULL-MAP IS 句

IBM 拡張

466 ページの『NULL-MAP IS 句』のこの句についての説明を参照してください。

IBM 拡張 の終り

END-OF-PAGE 句

この句が指定されている (さらに、このファイルについての FD 記入項目に LINAGE 文節が入っている) 場合、WRITE ステートメントの実行中に、印刷されるページの論理的な終わりに達すると、命令ステートメントが実行されます。

NOT AT END-OF-PAGE 句が指定されている WRITE ステートメントの処理後に END-OF-PAGE 条件が存在しない場合には、制御はその句に関連する命令ステートメントに移動されます。

プリンター・ファイルに関する特別の考慮事項: キーワード END-OF-PAGE とキーワード EOP は同等です。END-OF-PAGE 句を指定する場合には、このファイル

の FD 記入項目に LINAGE 文節が入っていなければなりません。END-OF-PAGE を指定し、WRITE ステートメントの処理後に END-OF-PAGE 条件が存在する場合には、END-OF-PAGE 命令ステートメントが処理されます。印刷されるページの論理的な終わりは、レコード名に関連する LINAGE 文節の中で指定します。

プリンター・ファイルについての WRITE ステートメントの処理によってページ本体のフッター域での印刷または行送りが行われる場合には、そのファイルの END-OF-PAGE 条件が起こります。これは、WRITE ステートメントの実行により、LINAGE-COUNTER 中の値が、LINAGE 文節中の WITH FOOTING 句で指定された値と等しいかまたはそれより大きくなったときに起こります。WRITE ステートメントが処理されてから、END-OF-PAGE 命令ステートメント (コーディングされている場合) が処理されます。

WRITE ステートメントの処理が現行のページ本体内で完全に実行できないときには、END-OF-PAGE 句が指定されているかどうかに関係なく、必ず自動ページ・オーバーフロー条件が起こります。これは、WRITE ステートメントを処理した場合には、LINAGE-COUNTER の値が LINAGE 文節で指定されているページ本体の行数を超えるときに起こります。このケースでは、装置が LINAGE 文節で指定されているように次の論理ページの最初の印刷可能行に位置変更される前または後 (指定されているオプションによる) に、行が印刷されます。

END-OF-PAGE 句が指定されている場合には、END-OF-PAGE 命令ステートメントが実行されます。次の場合には、END-OF-PAGE 条件と自動ページ・オーバーフロー条件が同時発生します。

- LINAGE 文節の WITH FOOTING 句が指定されていない場合。この場合には、END-OF-PAGE 条件と自動ページ・オーバーフロー条件の間に区別がなくなります。FOOTING 句が指定されていない場合には、論理ページの下部にあるフッター情報を印刷することができません。
- WITH FOOTING 句が指定されているが、WRITE ステートメントの実行によって LINAGE-COUNTER が LINAGE 文節で指定されているフッターの値とページ本体の値の両方を超える場合。

キーワード END-OF-PAGE とキーワード EOP は同等です。

注: ADVANCING PAGE 句と END-OF-PAGE 句の両方を 1 つの WRITE ステートメント内に指定することはできません。

FORMATFILE に関する特別の考慮事項: キーワード END-OF-PAGE とキーワード EOP は同等です。END-OF-PAGE 句を指定し、FORMATFILE ファイルについての WRITE ステートメントの処理後に EOP 条件が存在する場合には、END-OF-PAGE 命令ステートメントが実行されます。FORMATFILE ファイルの EOP 条件が起こるのは、そのファイルについての WRITE ステートメントの処理時にページの論理的な終わりに到達したときです。印刷されるページの論理的な終わりは、CRTPRTF コマンドまたは OVRPRTF コマンドのオーバーフロー行番号パラメーターで指定します。

END-WRITE 句

この明示範囲終了符号は、WRITE ステートメントの有効範囲を区切る働きをします。END-WRITE 句を使用することによって、WRITE 条件ステートメントを別の

WRITE ステートメント

条件ステートメントにネストすることができます。また、END-WRITE 句は、WRITE 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

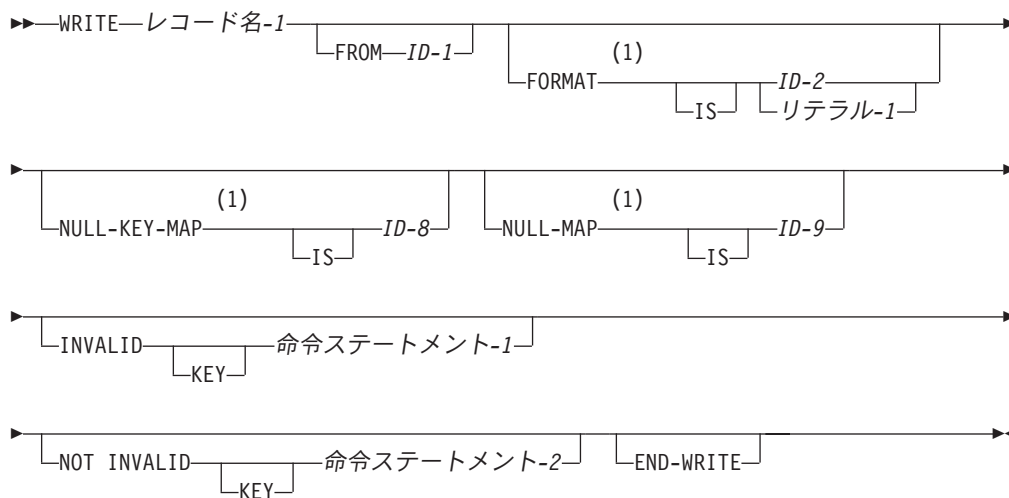
マルチボリューム・ファイル

マルチボリューム OUTPUT ファイル (テープまたは順次直接アクセス・ファイル) のボリュームの終わりが検出されると、WRITE ステートメントは次の操作を実行します。

- ・ 標準の終了ボリューム・ラベル・プロシージャ
- ・ ボリュームの切り替え
- ・ 標準の開始ボリューム・ラベル・プロシージャ

索引付きファイルおよび相対ファイル

WRITE - 形式 2 - 索引付きおよび相対ファイル



注:

1 IBM 拡張

レコード名-1

データ部の FD 記入項目で定義されていなければなりません。レコード名-1 は修飾できます。レコード名-1 をソート・ファイルまたはマージ・ファイルと関連付けてはなりません。

相対ファイルの場合のみ、レコード名-1 内の文字桁数は、置き換えられるレコード内の文字桁数と等しくなければなりません。レコード名-1 をソート・ファイルまたはマージ・ファイルと関連付けてはなりません。

FROM

FROM を指定すると、実行結果は次の場合と同じになります。

```
MOVE identifier-1 TO record-name-1
WRITE record-name-1
```


WRITE ステートメントの実行後、情報は ID-1 ではまだ使用可能ですが、レコード名-1 では使用不可になります。(297 ページの『INTO/FROM ID 句』を参照してください。)

ID-1

英数字または数字編集データ項目でなければなりません。データはこのフィールドから受け入れフィールドへ転送されます。

レコード名-1 と ID-1 の両方で同じ記憶域を参照することはできません。

ID-1 は、英数字または DBCS 関数 ID の名前にすることができます。

索引付きファイルの書き込みに関する考慮事項

WRITE ステートメントを実行する前に、基本レコード・キー (ファイル制御記入項目で定義されている RECORD KEY データ項目) を希望の値に設定しなければなりません。WRITE ステートメントが処理されると、システムはレコードを解放します。

IBM 拡張

DUPLICATES 句を指定する場合には、ある形式用のレコード・キーの値が固有である必要はありません (118 ページの『RECORD KEY 文節』を参照してください)。この場合、システムは、レコードに対する後続の順次アクセスにおいて、DDS で指定された順序で検索を行えるようにレコードを保管します。

IBM 拡張 の終り

SEQUENTIAL アクセスをもち、OUTPUT 用にオープンされており、ブロック化が有効である (BLOCK CONTAINS 文節が指定されている) 固定サイズの索引付きファイルにレコードが書き込まれる場合、ブロック化因数は、レコードのブロックによってファイルの終わりに到達するポイントで 1 に変わります。

ALTERNATE RECORD KEY 文節も、ファイル制御記入項目で指定されている場合、DUPLICATES 句が指定されない限り、それぞれの代替キーは固有でなければなりません。DUPLICATES 句を指定する場合には、代替レコード・キーの値が固有である必要はありません。

この時点でのファイル内の残りのレコード数は、ブロック内のレコード数よりも少なくなります。

ファイル制御記入項目中に ACCESS IS SEQUENTIAL が指定されている場合には、レコードを RECORD KEY 値の昇順に解放しなければなりません。

ファイル制御記入項目中に ACCESS IS RANDOM または ACCESS IS DYNAMIC が指定されている場合には、プログラマーが指定する順序に従ってレコードを解放できます。索引付きファイルがランダム・アクセス・モードでアクセスされるときに、入出力ステートメントで FORMAT 句が指定されていない場合には、定義された最初の形式が使用されます。複数形式論理ファイルへの書き込み時には、WRITE ステートメントで形式を指定しなければなりません。

相対ファイルの書き込みに関する考慮事項

OUTPUT ファイルに対しては、WRITE ステートメントにより次のような処置が取られます。

- ACCESS IS SEQUENTIAL が指定されている場合。

最初に解放されるレコードの相対レコード番号は 1 であり、2 番目に解放されるレコードの相対レコード番号は 2 であり、... というようになります。

ファイル制御記入項目内に RELATIVE KEY が指定されている場合には、WRITE ステートメントの実行時に、解放されたばかりのレコードの相対レコード番号が RELATIVE KEY に入れられます。

- ACCESS IS RANDOM または ACCESS IS DYNAMIC が指定されている場合には、WRITE ステートメントを出す前に、このレコードについての希望の相対レコード番号を RELATIVE KEY に入れなければなりません。このレコードは、WRITE ステートメントの実行時に、ファイル内の指定された相対レコード番号の位置に入れられます。

I-O モードでオープンされるファイルについては、ACCESS IS RANDOM または ACCESS IS DYNAMIC が指定されていなければなりません。WRITE ステートメントは、ファイルに新しいレコードを挿入します。WRITE ステートメントを出す前に、このレコードについての希望の相対レコード番号を RELATIVE KEY に入れておかなければなりません。このレコードは、WRITE ステートメントの実行時に、ファイル内の指定された相対レコード番号の位置に入れられます。

レコードの DELETE 操作を許可しない (たとえば、ALWDLT(*NO) パラメーターを指定した CRTPF を使用して) 物理ファイルについては、レコードの更新操作を許可 (つまり、ALWUPD(*YES) パラメーターを指定した CRTPF) しなければなりません。

FORMAT 句

IBM 拡張

ファイルに複数のレコード形式がある場合に必要です。

FORMAT 句で指定する値には、この入出力操作で使用するレコード形式の名前が入ります。システムはこれを使用して、どのレコード形式に対して操作を行うかを指定または選択します。

ID-2 を指定する場合には、10 文字以下の英数字データ項目にしなければなりません。

リテラル-1 を指定する場合は、10 文字以下の大文字の文字ストリングにしなければなりません。

索引付きファイルがランダム・アクセス・モードでアクセスされるときに、入出力ステートメントで FORMAT 句が指定されていない場合には、定義された最初の形式が使用されます。

IBM 拡張 の終り

NULL-KEY-MAP IS 句

IBM 拡張

466 ページの『NULL-KEY-MAP IS 句』のこの句についての説明を参照してください。

IBM 拡張 の終り

NULL-MAP IS 句

IBM 拡張

466 ページの『NULL-MAP IS 句』のこの句についての説明を参照してください。

IBM 拡張 の終り

INVALID KEY 句

このファイルに対して明示または暗黙の EXCEPTION/ERROR プロシージャが指定されていない場合には、INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

外部で定義されたファイルの境界を超えて書き込みを試みると、WRITE ステートメントの実行が失敗し、EXCEPTION/ERROR 条件が起こります。

ランダムまたは動的アクセス・モードの相対ファイルの場合、INVALID KEY 条件が起こるのは、RELATIVE KEY に、すでにデータの入っているレコードが指定されたときです。

ランダムまたは動的アクセス・モードの索引付きファイルの場合、INVALID KEY 条件が起こるのは、レコード域内のキー・フィールドの値が、すでに存在するレコードのものと等しく、DUPLICATES が認められていないときです。

順次アクセス・モードの索引付きファイルの場合、INVALID KEY 条件が起こるのは、連続するレコードの基本レコード・キーの値が昇順になっていないときです。

IBM 拡張

重複キーが認められているファイルの場合、INVALID KEY 条件が起こるのは、レコード・キーの値が前のレコードのものよりも小さいときだけです。

IBM 拡張 の終り

無効キー条件が検出されると、WRITE ステートメントの実行が失敗し、レコードの内容は影響されません。プログラム実行は 297 ページの『INVALID KEY 条件』に説明されている規則に従って続行されます。

NOT INVALID KEY 句

NOT INVALID KEY 句が指定されていて、WRITE ステートメントの実行終了時に無効キー条件が存在しない場合には、制御はこの句に関連する命令ステートメントに渡されます。

END-WRITE 句

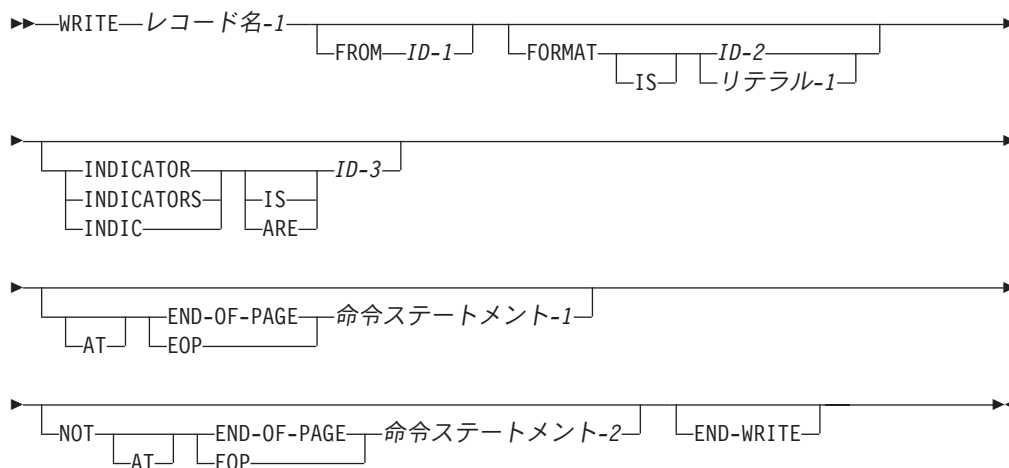
この明示範囲終了符号は、WRITE ステートメントの有効範囲を区切る働きをします。END-WRITE 句を使用することによって、WRITE 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-WRITE 句は、WRITE 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

FORMATFILE

IBM 拡張

WRITE ステートメント - 形式 3 - FORMATFILE



FORMAT 句: ファイルに複数のレコード形式がある場合に必要です。

FORMAT 句で指定する値には、この入出力操作で使用するレコード形式の名前が入ります。システムはこれを使用して、どのレコード形式に対して操作を行うかを指定または選択します。

ID-2 を指定する場合には、10 文字以下の英数字データ項目にしなければなりません。

リテラル-1 を指定する場合は、10 文字以下の大文字の文字ストリングにしなければなりません。

全桁がブランクの値は、FORMAT 句が指定されなかった場合と同じ扱いになります。その値がファイルに対して有効でない場合は、9K の FILE STATUS が戻され、(そのファイルに適用可能であれば) USE プロシーチャーが呼び出されます。

INDICATORS 句: データ・レコードが書き込まれるときに使用される標識を指定します。標識は、データ・レコードについての情報と、それがプログラムに入力された方法を渡すために使用できます。

INDICATORS 句の詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

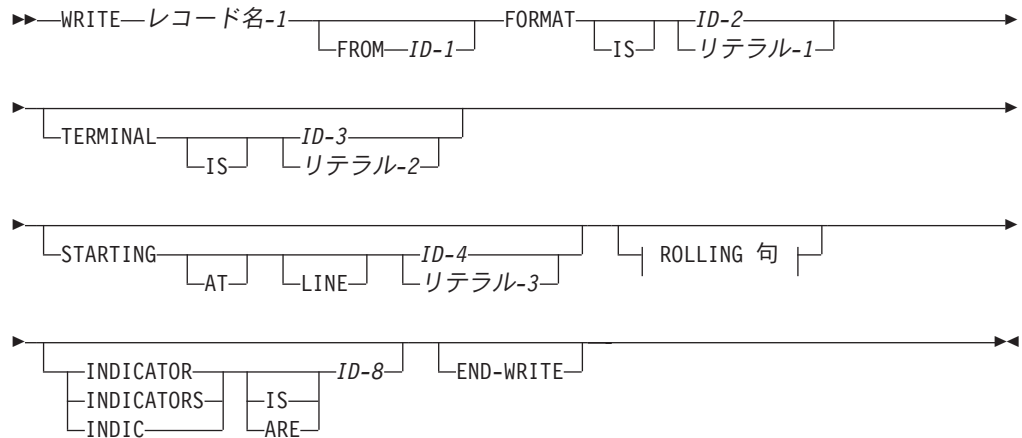
ID-3 は、OCCURS 文節なしで指定された基本プール・データ項目か、または基本プール・データ項目が従属しているグループ項目でなければなりません。

IBM 拡張 の終り

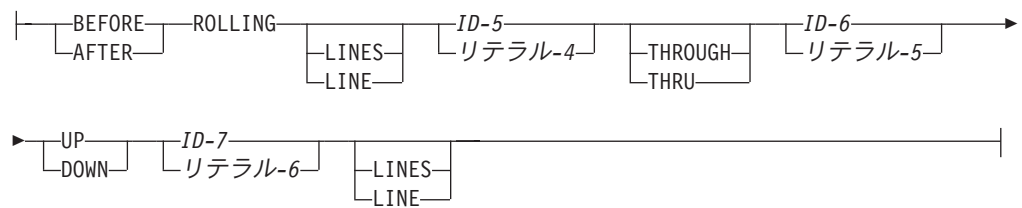
TRANSACTION (非サブファイル)

IBM 拡張

WRITE - 形式 4 - TRANSACTION (非サブファイル)



ROLLING 句:



FORMAT 句: リテラル-1 または ID-2 では、書き込まれるレコード形式の名前を指定します。リテラル-1 を指定する場合は、非数字で、10 文字以下の大文字にしなければなりません。ID-2 (指定されている場合) は、英数字データ項目で、10 文字以下の長さでなければなりません。ID-2 がブランクである場合、WRITE ステートメントは、FORMAT 句が省略された場合と同じように実行されます。

TERMINAL 句: TERMINAL 句は、出力レコードの送信先プログラム装置を指定します。

リテラル-2 または ID-3 の内容は、ファイルによって以前に明示的または暗黙に獲得されたプログラム装置の名前でなければなりません。リテラル-2 を指定する場合は、10 文字以下の非数字にしなければなりません。ID-3 を指定する場合は、10 文字以下の英数字データ項目を参照しなければなりません。ブランクの値は、TERMINAL 句が省略された場合と同様に扱われます。

WRITE ステートメント

TRANSACTION ファイルによって獲得されたプログラム装置が 1 台だけである場合は、TERMINAL 句を省略できます。そのプログラム装置は、常時、WRITE 操作用に使用できます。

複数のプログラム装置を獲得している TRANSACTION ファイルに対する WRITE 操作で TERMINAL 句が省略されると、デフォルトのプログラム装置が使用されます。

STARTING 句: STARTING 句は、可変開始行キーワードを使用するレコード形式の開始行番号を指定します。この句は、ディスプレイ装置についてのみ有効です。

フィールドが始まる実際の行番号は、次の式によって求めることができます。

実際の行 = 開始行 + DDS 開始行 - 1

ここで、

- 実際の行は、実際の行番号
- 開始行は、プログラム内で指定された開始行番号
- DDS 開始行は、データ記述仕様用紙の桁 39 ~ 41 に指定された行番号

以下の場合、書き込み操作が正常に行われます。

- 上記の式の結果が正であり、ワークステーション画面の行数以下である。
- STARTING 句に指定された値が 0 である。この場合は、値 1 が想定されます。

以下の場合、書き込み操作が失敗し、プログラムが終了します。

- 上記の式の結果がワークステーション画面の行数より大きい。
- STARTING 句に指定された値が負である。

STARTING 句に指定された値が画面区域内にある場合、画面区域の外側のフィールドは無視されます。

STARTING 句のリテラル-3 は数字リテラルでなければなりません。ID-4 は基本数字項目でなければなりません。

STARTING 句を使用するには、書き込まれる形式について、DDS レコード・レベル・キーワード SLNO(*VAR) を指定しなければなりません。レコード形式でこのキーワードが指定されていない場合、STARTING 句は実行時に無視されます。

DDS キーワード CLRL も STARTING 句に影響を与えます。CLRL は、WRITE ステートメントの実行時に画面がどの程度消去されるかを制御します。

SLNO(*VAR) および CLRL の詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『DB2 Universal Database for AS/400』セクションを参照してください。

ROLLING 句: ROLLING 句によって、ワークステーション画面に表示される行を移動できます。画面のすべてまたは一部の行を次ページ (ロールアップ) または前ページ (ロールダウン) することができます。行送りによって空けられる行は消去され、そこへ別の画面形式を書き出すことができます。この句は、ディスプレイ装置についてのみ有効です。

ROLLING は、ワークステーション画面に新しい形式を書き出そうとする WRITE ステートメントの中で指定します。書き出しを行送りの前と後のどちらに行うか、行送りしたい行の範囲、それらの行を何行送るか、および行送り操作を上方と下方のどちらに行うかを指定しなければなりません。

行送りの後、それらの行上のフィールドでは、その DDS 表示属性 (たとえば、下線表示) は維持されますが、その DDS 使用属性 (たとえば、入力可能性) は失われます。書き出されてから行送りされた (BEFORE ROLLING 句) 行上のフィールドも、その使用属性を失います。

形式の一部が行送りされる場合、形式全体がその使用属性を失います。複数の形式が存在する場合、行送りされた形式だけがその使用属性を失います。

ROLLING 句を指定する場合は、次の一般的な規則が適用されます。

- ROLLING 句を含む WRITE ステートメントで書き出されるそれぞれのレコード形式について、DDS レコード・レベル・キーワード ALWROL を指定しなければなりません。
- ALWROL キーワードと相互に排他的である別の DDS キーワードを使用してはなりません。
- 書き出されてから行送りされるレコード形式については、そのレコード形式が書き出されるときに表示画面が消去されるのを防ぐために、DDS キーワード CLRL または OVERLAY を指定しなければなりません。
- すべての ID およびリテラルは、正の整数値を表さなければなりません。
- 行送り開始行番号 (ID-5 またはリテラル-4) は、終了行番号 (ID-6 またはリテラル-5) を超えてはなりません。
- 開始行番号および終了行番号によって指定された、ウィンドウの外側に送られる行の内容は消えます。

詳細については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『DB2 Universal Database for AS/400』セクションを参照してください。

INDICATORS 句: データ・レコードが書き込まれるときに使用される標識を指定します。標識は、データ・レコードについての情報と、それがプログラムに入力された方法を渡すために使用できます。

INDICATORS 句の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『トランザクション・ファイルに関する標識の使用』を参照してください。

ID-8 は、OCCURS 文節なしで指定された基本プール・データ項目か、または基本プール・データ項目が従属しているグループ項目でなければなりません。

図 28 に、行送り (ローリング) の例を示します。初期画面形式 FMT1 がワークステーション画面に書き出されています。プログラムは、この画面形式を処理し、現在、次の画面形式 FMT2 をワークステーション画面に書き出す準備ができています。FMT2 がワークステーション画面に書き出される前に、FMT1 の一部が 2 行下方送りされます。

WRITE ステートメント

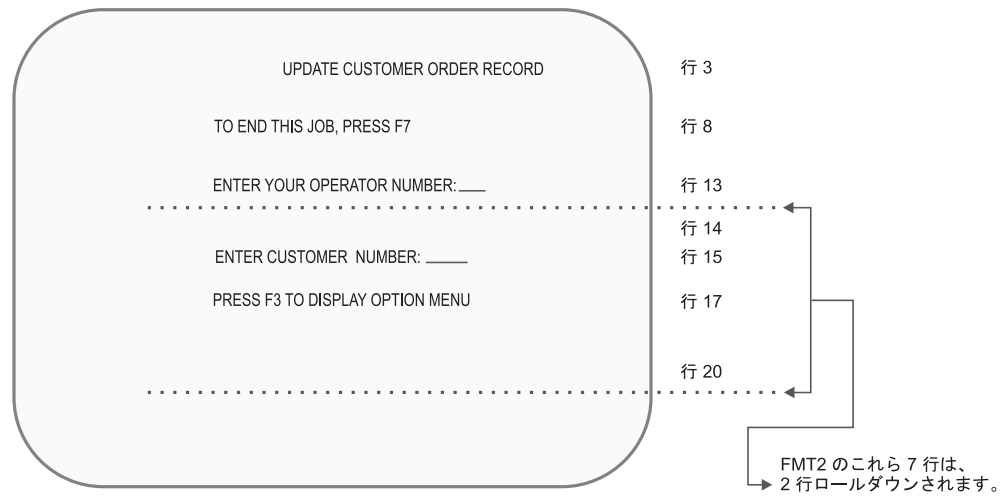
次の WRITE ステートメントの実行によって、FMT1 の一部が 2 行下方送りされ、FMT2 がワークステーション画面に書き出されます。

```
WRITE SCREENREC FORMAT "FMT2"  
  AFTER ROLLING LINES 14 THROUGH 20  
  DOWN 2 LINES
```

この WRITE ステートメントが実行されるとき、次のステップが行われます。

1. 行 14 ~ 20 の内容が 2 行下方送りされます。
 - a. 行 14 ~ 18 の内容が行 16 ~ 20 に表示されるようになります。
 - b. 行 14 および 15 の内容は空きになり、消去されます。
 - c. 行 19 および 20 の内容はウィンドウの外側に送られて消えます。
2. 行送り操作が行われた後、FMT2 がワークステーション画面に書き出されます。
 - a. FMT2 の一部は、行送り操作で空きとなった区域に書き出されます。
 - b. FMT2 の一部は、FMT1 から残っているデータの上書き出されます。
3. READ ステートメントによってワークステーション画面の内容がプログラムに戻されるときには、FMT2 の入力可能フィールドだけが戻されます。

DISPLAY BEFORE PROCESSING THE WRITE STATEMENT



DISPLAY AFTER PROCESSING THE WRITE STATEMENT

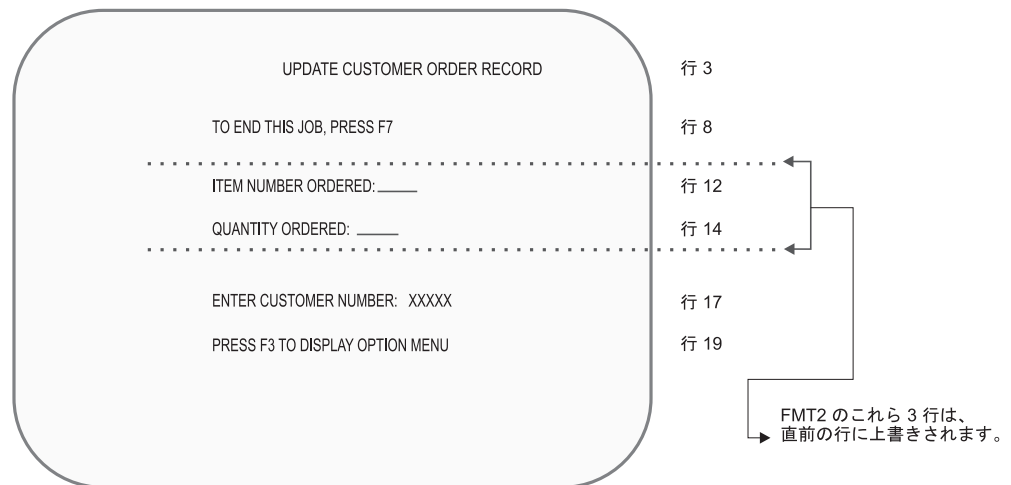


図 28. ROLLING 操作の例

IBM 拡張 の終り

TRANSACTION (サブファイル)

IBM 拡張

WRITE ステートメント - 形式 5 - TRANSACTION (サブファイル)

▶▶ WRITE SUBFILE—レコード名-1—FROM—ID-1—FORMAT—[IS]—[リテラル-1]—ID-2—▶▶

該当する USE プロシージャが指定されていないすべてのファイルについて、WRITE SUBFILE ステートメントの中で INVALID KEY 句を指定しなければなりません。

NOT INVALID KEY 句: この句では、使用されるステートメントについて無効キー条件が存在しない場合に実行されるプロシージャを指定できます。

END-WRITE 句: この明示範囲終了符号は、WRITE ステートメントの有効範囲を区切る働きをします。END-WRITE 句を使用することによって、WRITE 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。また、END-WRITE 句は、WRITE 命令ステートメントで使用することもできます。

詳細は 288 ページの『範囲区切りステートメント』を参照してください。

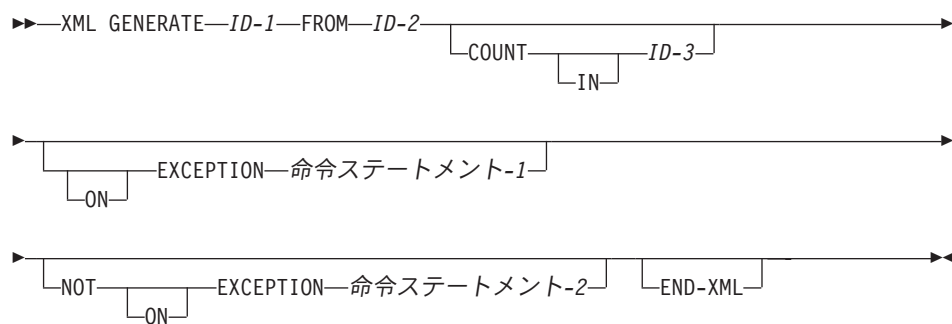
IBM 拡張 の終り

XML GENERATE ステートメント

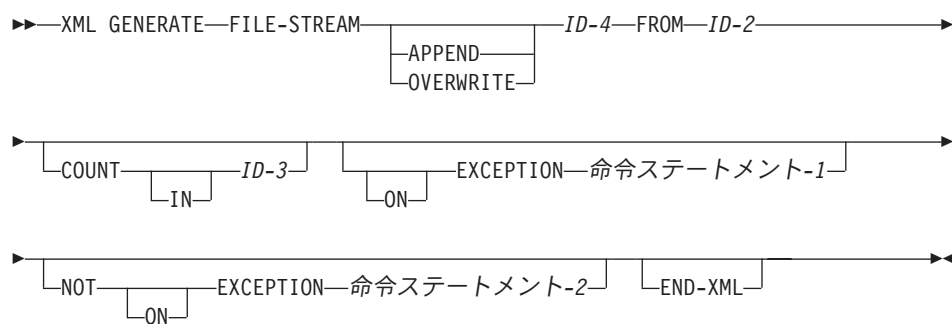
IBM 拡張

XML GENERATE ステートメントは、データを XML 形式に変換します。

形式 1



形式 2



ID-1 生成された XML 文書の受信領域。ID-1 は、以下のいずれかを参照する必要があります。

- カテゴリー-英数字の基本データ項目
- 英数字グループ項目
- カテゴリー-国別の基本データ項目

ID-1 が英数字グループ項目を参照する場合、ID-1 は、カテゴリー-英数字の基本データ項目であるかのように取り扱われます。

ID-1 は、JUSTIFIED 文節で記述されてはなりません。また、関数 ID であってはなりません。ID-1 は、添え字を付けたり、参照変更できます。

ID-1 は、ID-2 または ID-3 とオーバーラップしないようにしてください。

ID-1 がカテゴリ英数字のデータ項目を参照する場合、生成された XML 文書は、PROCESS ステートメント CCSID オプション *d* で指定される CCSID でエンコードされます (ソース・コードのコンパイル時に有効な XML GENERATE 1 バイト・データ CCSID)。有効な CCSID が 65535 である場合、実行時のジョブ・デフォルトの CCSID が使用されます。

ID-1 がカテゴリ国別のデータ項目を参照する場合、生成された XML 文書は、UCS-2 でエンコードされます。バイト・オーダー・マークは生成されません。

ID-1 は、生成された XML が以下の *ID-2* からのデータを含む場合、カテゴリ国別のデータ項目を参照する必要があります。

- クラス国別またはクラス DBCS のすべてのデータ項目
- DBCS 名を持つすべてのデータ項目 (つまり、名前に DBCS 文字が含まれるデータ項目)

ID-1 は、生成された XML 文書を十分に含むことができる大きさである必要があります。通常、これは *ID-2* のサイズの 5 倍から 8 倍である必要があります。 *identifier-2* 内の 1 つまたは複数のデータ名の長さによって異なります。 *ID-1* の大きさが十分でない場合、XML GENERATE ステートメントの終了時にエラー状態が発生します。

ID-2 XML 形式に変換されるグループまたは基本データ項目。

ID-2 は関数 ID にしたり参照変更にしたりすることはできませんが、添え字付きであってもかまいません。

ID-2 は、*ID-1* または *ID-3* とオーバーラップしてはいけません。

ID-2 は、RENAMES 節を指定してはいけません。

ID-2 で指定される以下のデータ項目は、XML GENERATE ステートメントによって無視されます。

- 名前が指定されていないすべての基本データ項目または基本 FILLER データ項目
- SYNCHRONIZED 項目用に挿入されるすべての遊びバイト
- REDEFINES 節で記述されるか、そのような再定義項目に従属する *ID-2* に従属するすべてのデータ項目
- RENAMES 節で記述される *ID-2* に従属するすべてのデータ項目
- すべての従属データ項目が無視されるすべてのグループ・データ項目

上記の規則に応じて無視されない *ID-2* によって指定されるすべてのデータ項目は、以下の条件を満たす必要があります。

- 各基本データ項目は、英字クラス、英数字クラス、数字クラス、または国別クラスのいずれかを持つか、指標データ項目である必要があります。(つまり、基本データ項目は USAGE POINTER または USAGE PROCEDURE-POINTER 句を使用して記述することはできません。)
- そのような基本データ項目が少なくとも 1 つ存在する必要があります。
- FILLER 以外の各データ名は、隣接した上位のグループ・データ項目内で固有である必要があります。

XML GENERATE ステートメント

- Unicode に変換される場合、すべての DBCS データ名は、XML 仕様、バージョン 1.0 で許可されている名前である必要があります。

たとえば、次のようなデータ宣言を想定します。

```
01 STRUCT.  
  02 STAT PIC X(4).  
  02 IN-AREA PIC X(100).  
  02 OK-AREA REDEFINES IN-AREA.  
    03 FLAGS PIC X.  
    03 PIC X(3).  
    03 COUNTER USAGE COMP PIC S9(9).  
    03 ASFPTR REDEFINES COUNTER USAGE PROCEDURE-POINTER.  
    03 UNREFERENCED PIC X(92).  
  02 NG-AREA1 REDEFINES IN-AREA.  
    03 FLAGS PIC X.  
    03 PIC X(3).  
    03 PTR USAGE POINTER.  
    03 ASNUM REDEFINES PTR USAGE COMP PIC S9(9).  
    03 PIC X(92).  
  02 NG-AREA2 REDEFINES IN-AREA.  
    03 FN-CODE PIC X.  
    03 UNREFERENCED PIC X(3).  
    03 QTYONHAND USAGE BINARY PIC 9(5).  
    03 DESC USAGE NATIONAL PIC N(40).  
    03 UNREFERENCED PIC X(12).
```

以下のデータ項目を *ID-2* として指定できます。

- STRUCT。従属データ項目 STAT および IN-AREA は XML 形式に変換されます。(OK-AREA、NG-AREA1、および NG-AREA2 は、REDEFINES 節を指定するため無視されます。)
- OK-AREA。従属データ項目 FLAGS、COUNTER、および UNREFERENCED が変換されます。(03 PIC X(3) を指定するデータ記述項目を持つ項目は、基本 FILLER データ項目であるため、無視されます。ASFPTR は、REDEFINES 節を指定するため、無視されます。)
- 以下を除く、STRUCT に従属するすべての基本データ項目。
 - ASFPTR または PTR (許可されない使用法)
 - UNREFERENCED OF NG-AREA2 (非固有であるため適格ではないデータ項目名)
 - すべての FILLER データ項目

以下のデータ項目は *ID-2* として指定できません。

- NG-AREA1。従属データ項目 PTR は、USAGE POINTER を指定しますが、REDEFINES 節を指定しないため。(PTR は、REDEFINES 節を指定した場合、無視されます。)
- NG-AREA2。従属基本データ項目が非固有名 UNREFERENCED を持つため。

COUNT IN

COUNT IN 句が指定された場合、*ID-3* には、生成された XML 文字位置のカウント (XML GENERATE ステートメントの実行後) が含まれます。*ID-1* (受信側) がカテゴリ・国別を持つ場合、そのカウントは国別文字位置 (UCS-2 文字エンコード単位) でのものです。それ以外の場合、カウントは、バイト単位です。

ID-3 データ・カウント・フィールド。ピクチャー・ストリングに記号 P を指定せずに定義した整数データ項目でなければなりません。

ID-3 は、*ID-1* または *ID-2* とオーバーラップしてはいけません。

FILE-STREAM 句

FILE-STREAM 句が指定される場合、変換された XML データは、*ID-4* で指定される IFS ファイルに保存されます。以下のように、CCSID を使用して、XML ファイルはエンコードされます。

- Unicode UCS-2。生成された XML が (「*ID-1*」で説明したように) 以下に対する *ID-2* からのデータを含む場合。
 - すべての国別データ項目または DBCS データ項目
 - DBCS 名を持つすべてのデータ項目
- これ以外の場合、PROCESS ステートメント CCSID オプション *d* で指定された CCSID (XML GENERATE 1 バイト・データ出力 CCSID、デフォルトは JOBRUN)。使用される CCSID は、580 ページの『XML 文書のためのコード化文字セット』にリストされている 1 バイト文字セット CCSID のいずれかである必要があります。

APPEND 句も OVERWRITE 句も使用されない場合、XML ファイル・エンコード CCSID を使用して新規ファイルが作成され、変換された XML データはそのファイルに保管されます。プログラムの実行中に同じ名前を持つファイルが存在する場合、XML 生成は停止し、特殊レジスター XML-CODE にはこのエラーを表す例外コードが含まれます。

APPEND 句が使用される時、ファイルが XML ファイル・エンコード CCSID を持つ場合には、変換された XML データは既存のファイルに追加されます。これ以外の場合、XML 生成は停止し、特殊レジスター XML-CODE にはこのエラーを表す例外コードが含まれます。

OVERWRITE 句が使用される場合、XML ファイル・エンコード CCSID を使用して既存のファイルは新規ファイルで置換されます。変換された XML データは新規ファイルに保管されます。

上述したエラーを除く他のすべてのファイル操作エラーは、ファイル操作エラー・メッセージを含むランタイム照会メッセージをトリガーします。操作を継続するために "G" で応答された場合は、特殊レジスター XML-CODE に例外コードが設定されます。

ID-4 IFS ファイル名であり、英字または英数字データ項目でなければなりません。変換された XML コンテンツを保持する IFS ファイルのパス名を含みます。

ON EXCEPTION

XML 文書の生成時にエラーが発生する場合は、例外条件が存在します。たとえば、*ID-1* が生成された XML 文書を含むのに十分大きくない場合などです。この場合、XML 生成は停止し、受信側 *ID-1* のコンテンツは未定義です。COUNT IN 句が指定された場合、*ID-3* には、0 から *ID-1* の長さの範囲を取ることができる、生成された文字位置の数が含まれます。

ON EXCEPTION 句が指定されている場合には、制御が 命令ステートメント-1 に転送されます。ON EXCEPTION 句が指定されていない場合、NOT ON EXCEPTION 句は、存在したとしても無視され、制御は、XML GENERATE ステートメントの終わりに転送されます。特殊レジスター

XML GENERATE ステートメント

XML-CODE には、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」に説明されている、例外コードが含まれます。

NOT ON EXCEPTION

XML 文書の生成時に例外条件が発生しない場合、指定されていれば、制御は 命令ステートメント-2 に渡され、指定されていない場合には、XML GENERATE ステートメントの最後に渡されます。ON EXCEPTION 句は、指定されていても無視されます。特殊レジスター XML-CODE は、XML GENERATE ステートメントの実行後、ゼロを含みます。

END-XML 句

この明示範囲終了符号は、XML GENERATE または XML PARSE ステートメントの有効範囲を区切ります。END-XML では、条件 XML GENERATE または XML PARSE ステートメント (つまり、ON EXCEPTION または NOT ON EXCEPTION 句を指定する XML GENERATE または XML PARSE ステートメント) を別の条件ステートメント内でネストすることができます。

条件 XML GENERATE または XML PARSE ステートメントの有効範囲を以下を使用して終了することができます。

- 同じネスト・レベルにある END-XML 句
- 分離文字ピリオド

END-XML は、ON EXCEPTION または NOT ON EXCEPTION 句のいずれも指定していない XML GENERATE または XML PARSE ステートメントで使用することも可能です。

ネストされた XML GENERATE または XML PARSE ステートメント

指定された XML GENERATE または XML PARSE ステートメントが 命令ステートメント-1 または 命令ステートメント-2 として表示された場合、または別の XML GENERATE または XML PARSE ステートメントの 命令ステートメント-1 または命令ステートメント-2 の一部として表示された場合、その指定された XML GENERATE または XML PARSE ステートメントは、ネストされた XML GENERATE または XML PARSE ステートメントです。

ネストされた XML GENERATE または XML PARSE ステートメントは、マッチングされた XML GENERATE および END-XML、または左から右に進む XML PARSE および END-XML の組み合わせとみなされます。したがって、検出される任意の END-XML 句は、暗黙的にまたは明示的に終了していない最も近い先行する XML GENERATE または XML PARSE ステートメントにマッチングしています。

XML GENERATE の操作

ID-2 内の適格な各基本データ項目のコンテンツは、573 ページの『基本データのフォーマット変換』 および 574 ページの『生成された XML データのトリミング』で説明されているような文字フォーマットに変換されます。各ストレージ域の最初

の定義のみが処理されます。データ項目の再定義は含まれません。RENAMES 節で効果的に定義されたデータ項目も含まれません。

次に、変換されたコンテンツは、XML マークアップで 要素文字コンテンツとして挿入されます。XML 要素名は、575 ページの『XML 要素名情報』で説明されているように ID-2 内のデータ名から取得されます。選択された基本項目を含むグループ項目の名前は親要素として保存されます。生成された XML をより読みやすくするために、余分の空白 (改行、インデントなど) は挿入されません。XML 宣言は生成されません。

ID-1 で指定された受信領域が、作成された XML 文書を含むのに十分大きくない場合、エラー条件が存在します。詳細は、上述の ON EXCEPTION 句の説明を参照してください。

ID-1 が生成された XML 文書よりも長い場合、XML が生成される部分の ID-1 のみを変更されます。ID-1 の残りの部分には、この XML GENERATE ステートメントの実行前に入っていたデータがそのまま残ります。このデータを参照するのを避けるためには、ID-1 を XML GENERATE ステートメントの前のスペースに初期設定するか、COUNT IN 句を指定します。

COUNT IN 句が指定された場合、ID-3 には (XML GENERATE ステートメントの実行後)、生成された文字位置の総数 (UCS-2 エンコード単位またはバイト単位) が含まれます。ID-3 を参照変更長さフィールドとして使用し、生成された XML 文書を含む部分の ID-2 を参照することができます。

XML GENERATE ステートメントの実行後、特殊レジスター XML-CODE は、正常な完了を示す 0 または、ゼロ以外の例外コードのいずれかを含みます。(詳しくは、「ILE COBOL プログラミング・ガイド」も参照してください。)

XML PARSE ステートメントは、特殊レジスター XML-CODE も使用します。したがって、XML PARSE ステートメントの処理手順で XML GENERATE ステートメントをコード化する場合は、その XML GENERATE ステートメントを実行する前に XML-CODE の値を保管し、XML GENERATE ステートメントの終了後に保管した値を復元します。

基本データのフォーマット変換

基本データ項目は、以下のようにデータ項目のタイプに応じて文字フォーマットに変換されます。

- カテゴリー英字、英数字、英数字編集、DBCS、外部浮動小数点、国別、および数値編集のデータ項目は変換されません。
- NOSTDTRUNC コンパイラー・オプションを使用してコンパイルされたバイナリー・データ項目以外の固定小数点数値データ項目は、以下を持つ数値編集項目に移動されたかのように変換されます。
 - 少なくとも 1 つの整数位置を持つ、数値項目が持つ整数位置と同数の整数位置
 - 数値項目が少なくとも 1 つの小数点以下の桁数を持つ場合の明示的小数点
 - 数値項目が持つ小数点以下の桁数と同数の小数点以下の桁数

XML GENERATE ステートメント

- データ項目が符号付きの場合、先導する ‘.’ ピクチャー記号 (PICTURE 節に S を持つ)
- NOSTDTRUNC コンパイラー・オプションを使用してコンパイルされたバイナリー・データ項目は、整数位置の数を除いて、他の固定小数点数値項目と同じように変換されます。整数位置の数は、以下のようにピクチャー文字ストリングの ‘9’ 記号の数に応じて計算されます。
 - データ項目が 1 から 4 の ‘9’ ピクチャー記号を持っている場合、5 から小数点以下の桁数を引く
 - データ項目が 5 から 9 の ‘9’ ピクチャー記号を持っている場合、10 から小数点以下の桁数を引く
 - データ項目が 10 から 18 の ‘9’ ピクチャー記号を持っている場合、20 から小数点以下の桁数を引く
- 内部浮動小数点データ項目は、以下のデータ項目に移動されたかのように変換されます。
 - COMP-1 の場合: PICTURE -9.9(8)E+99 を持つ外部浮動小数点データ項目
 - COMP-2 の場合: PICTURE -9.9(17)E+99 を持つ外部浮動小数点データ項目 (桁位置数のため適格ではない)
- 指標データ項目は、USAGE BINARY PICTURE S9(9) と宣言されているかのように変換されます。

『生成された XML データのトリミング』で説明されているように、文字フォーマットに変換後、前後のスペースおよび先行ゼロは除去されます。

変換後、データ項目が、XML コンテントで許可されていない文字を含む場合、関連する XML 仕様で指定したように、元のデータ値 (つまり、変換またはトリミングの前のデータ項目中の値) は 16 進数で表され、接頭部 ‘hex’ を持つ要素タグ名は、通常のタグ名で置換されます。たとえば、データ項目 Customer-Name が実行時に LOW-VALUES を含んでいることが分かった場合、通常の ‘Customer-Name’ の代わりに XML 要素タグ名 ‘hex.Customer-Name’ が使用され、コンテンツはゼロ数字のペアのストリングとして表されます。

5 つの文字 & (アンパーサンド)、’ (アポストロフィ)、> (より大きい)、< (より小さい)、および “ (引用符) の残ったインスタンスは、同等の XML 参照 ‘&’, ‘'’, ‘>’, ‘<’, および ‘"’ にそれぞれ変換されます。

したがって、ID-1 が、カテゴリー国別のデータ項目である場合、すべての国別以外の値は国別フォーマットに変換されます。

生成された XML データのトリミング

データ値へのトリミングは、文字フォーマットに変換後に行われます。(変換は、573 ページの『基本データのフォーマット変換』の下に説明されます。)

符号付き数値から変換される値の場合、値が正のとき、先行スペースは除去されません。

数値項目から変換される値の場合、実際のまたは暗黙の小数点のすぐ左の桁より前にある先行ゼロ (開始負符号 (-) の後) は除去されます。小数点より右にある後続ゼロは保持されます。たとえば、次のとおりです。

- -012.340 は、-12.340 になります。
- 0000.45 は、0.45 になります。
- 0013 は、13 になります。
- 0000 は、0 になります。

英字クラス、英数字クラス、DBCS クラス、および国別クラスのデータ項目からの文字値は、対応するデータ項目が左 (デフォルト) か右に位置調整されているかに応じて、後続または先行スペースが除去されます。つまり、JUSTIFIED 節を指定しない対応するデータ項目を持つ値の場合、後続スペースが除去されます。JUSTIFIED 節を指定するデータ項目を持つ値の場合、先行スペースが除去されます。文字値がスペースのみから構成される場合、トリミングの完了後、スペースが 1 つ値として残ります。

XML 要素名情報

ID-2 から生成される XML 文書では、XML 要素タグ名は、ID-2 で指定されるデータ項目の名前、および ID-2 に従属する適格なデータ名から、以下のように取得されます。

- データ記述項目からのデータ名の正確な大/小文字混合スペルが保持されます。そのデータ項目への任意の参照からのスペル (たとえば、OCCURS DEPENDING ON 節) は使用されません。
- 数字で開始するデータ名は、アンダースコアで接頭部が付けられます。たとえば、データ名 '3D' は、XML タグ名 '_3D' になります。
- 大文字および小文字の任意の組み合わせで、文字 'xml' で開始するデータ名は、アンダースコアで接頭部が付けられます。たとえば、データ名 'Xml' は、XML タグ名 '_Xml' になります。
- XML バージョン 1.0 コンテントでは許可されていない文字を含むことが実行時に検出されたデータ項目の名前は、'hex' で接頭部が付けられ、コンテント自身は 16 進数で表示されます。

Unicode に変換されるときに、DBCS データ名は、XML 仕様、バージョン 1.0 で許可されている名前である必要があります。

XML GENERATE ステートメントの実行後に特殊レジスター XML-CODE が含むことができる例外コードの説明については、「*ILE COBOL プログラミング・ガイド*」を参照してください。

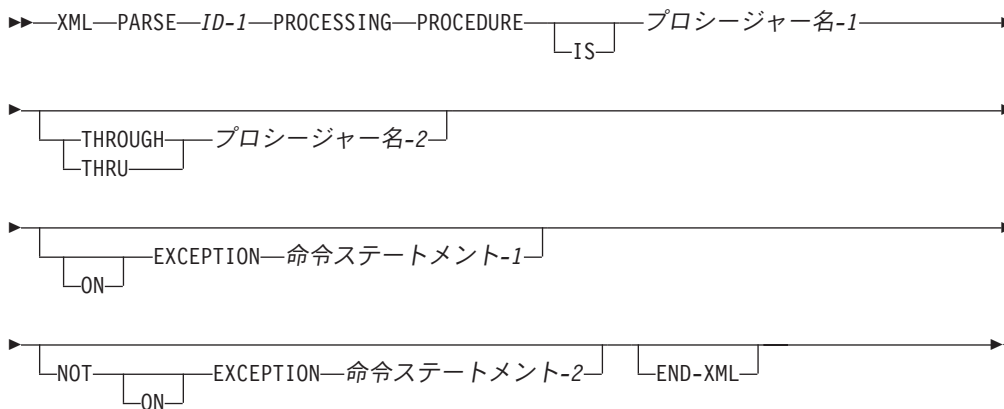
IBM 拡張 の終り

XML PARSE ステートメント

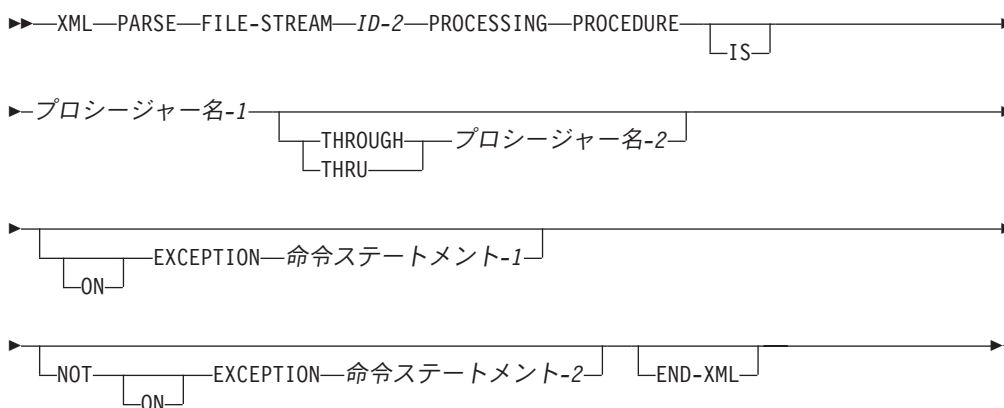
IBM 拡張

XML PARSE ステートメントは、COBOL 実行時の一部である高速 XML パーサーに対する ILE COBOL 言語インターフェースです。XML PARSE ステートメントは、XML 文書を構文解析し、1 つずつユーザー作成の処理プロシージャに渡します。

XML 解析ステートメント - 形式 1



XML 解析ステートメント - 形式 2



ID-1 XML 文書文字ストリームを含む英数字または国別データ項目でなければなりません。ID-1 は関数 ID とすることはできません。

ID-1 が英数字の場合、その内容は、580 ページの『XML 文書のためのコード化文字セット』でリストされている、1 バイト文字セットの 1 つを使用してエンコードされなければなりません。エンコード宣言を含まない EBCDIC XML 文書は、ソース・メンバーのコード化文字セットで解析されます。

ID-1 が国別の場合、その内容は、国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された UCS-2 CCSID を使用してエンコードされなければなりません。

ID-2 ID-2 は、XML 文書を含むストリーム・ファイルの絶対または相対パス名を含む英数字データ項目でなければなりません。絶対名は「/」で始まり、「/u/user1/myxml」のようになります。相対パス名は「/」では始まらないので、現行ディレクトリーと連結されます。エンコード宣言を含まない指定されたストリーム・ファイルに配置された XML 文書 (ASCII XML 文書を含む) は、ストリーム・ファイルのコード化文字セットで解析されます。

PROCESSING PROCEDURE 句

プロシージャの名前を指定し、XML パーサーが生成するさまざまなイベントを処理します。

プロシージャ名-1

処理プロシージャ内の、最初または唯一の、セクションまたは段落を指定します。

プロシージャ名-2

処理プロシージャ内の、最後のセクションまたは段落を指定します。

処理プロシージャは、XML イベントが処理されるステートメントで構成されます。処理プロシージャの中には、処理プロシージャ内の、CALL、EXIT、GO TO、GOBACK、および PERFORM ステートメントによって実行されるすべてのステートメントも含まれます。

処理プロシージャは、XML PARSE ステートメントを直接実行してはなりません。ただし、処理プロシージャが、CALL ステートメントを使用して制御を最外部プログラムに渡す場合、ターゲット・プログラムは、同じまたは異なる XML PARSE ステートメントを実行できます。複数のスレッドで実行するプログラムは、同じ XML ステートメントまたは異なる XML ステートメントを同時に実行できます。

コンパイラーは、処理プロシージャ内の最後のステートメントの後ろに、戻りメカニズムを挿入します。処理プロシージャは、STOP RUN ステートメントによって実行単位を終了できます。GOBACK または EXIT PROGRAM ステートメントによってパーサーに戻ろうとしてはなりません。

処理プロシージャについて詳しくは、578 ページの『制御フロー』および 579 ページの『処理プロシージャ』を参照してください。

ON EXCEPTION

ON EXCEPTION 句は、XML PARSE ステートメントが例外条件を発生させた場合に実行される命令ステートメントを指定します。

例外条件は、XML パーサーが、XML 文書の処理でエラーを検出した場合に発生します。まずパーサーは、制御を処理プロシージャに渡し、特殊レジスター XML-EVENT が「EXCEPTION」を含むように設定して、例外 XML イベントをシグナル通知します。パーサーは、特殊レジスター XML-CODE 内に数値エラー・コードを規定します。詳しくは、「*ILE COBOL* プログラマーの手引き」で説明しています。

例外条件は、通常の XML イベントからパーサーに戻る前に XML-CODE を -1 に設定することにより、処理プロシージャが解析を故意に終了した場合にも発生します。このケースでは、パーサーは、EXCEPTION XML イベントをシグナル通知しません。

XML PARSE ステートメント

ON EXCEPTION 句が指定されている場合、パーサーは制御を命令ステートメント-1 に転送します。ON EXCEPTION が指定されていない場合、NOT ON EXCEPTION 句は、あるとしても無視され、制御は、XML PARSE ステートメントの終わりに転送されます。

XML 処理プロシージャが、例外 XML イベントを処理し、制御がパーサーに戻る前に XML-CODE をゼロに設定した場合、例外条件はもはや存在しません。処理されていない他の例外が、パーサーの終了前に発生した場合、制御は、指定されていれば、NOT ON EXCEPTION 句の命令ステートメント-2 に転送されます。

NOT ON EXCEPTION

NOT ON EXCEPTION 句は、XML PARSE 処理の終了時に例外条件が存在しない場合に実行される命令ステートメントを指定します。

例外条件が XML PARSE 処理の終了時に存在しない場合、制御は、指定されていれば、NOT ON EXCEPTION 句の命令ステートメント-2 に転送されます。NOT ON EXCEPTION 句が指定されていない場合は、制御は XML PARSE ステートメントの終わりに転送されます。ON EXCEPTION 句は、指定されていても無視されます。

特殊レジスタ XML-CODE は、XML PARSE ステートメントの実行後、ゼロを含みます。

END-XML 句

この明示範囲終了符号は、XML PARSE ステートメントの範囲を区切る働きをします。END-XML 句を使用することによって、XML PARSE 条件ステートメントを別の条件ステートメントにネストすることができます。

END-XML は、ON EXCEPTION または NOT ON EXCEPTION 句のいずれも指定していない XML PARSE ステートメントで使用されることも可能です。

制御フロー

XML パーサーが XML PARSE ステートメントから制御を受け取ると、パーサーは XML 文書を解析し、処理中の以下のポイントで、プロシージャ名-1 に制御を転送します。

- 解析処理の開始
- 文書のフラグメントが検出された時点
- パーサーが XML 文書の解析中にエラーを検出した時点
- XML 文書の処理の終了

制御は、処理プロシージャが終わりに達した時点で、XML パーサーに戻ります。

パーサーと処理プロシージャ間での制御の交換は、以下のいずれかになるまで続きます。

- XML 文書全体が解析され、END-OF-DOCUMENT イベントで終了した。
- パーサーが例外を検出し、パーサーに戻る前に、処理プロシージャが特殊レジスタ XML-CODE をゼロにリセットしなかった。
- パーサーに戻る前に XML-CODE を -1 に設定して、処理プロシージャが故意に解析を終了した。

その後、パーサーは終了して、パーサーまたは処理プロシージャが設定した最も新しい値を含む XML-CODE 特殊レジスターによって、制御を XML PARSE ステートメントに戻します。

処理プロシージャに渡される各 XML イベントについては、XML-CODE、XML-EVENT、および XML-TEXT または XML-NTEXT 特殊レジスターが、個々のイベントに関する情報を含んでいます。XML-CODE 特殊レジスターの内容は、XML PARSE ステートメントの実行中および実行後に定義されます。他のすべての XML 特殊レジスターの内容は、処理プロシージャの範囲外では未定義です。

通常のイベントに対して、処理プロシージャが制御を受け取った場合、特殊レジスター XML-CODE はゼロを含んでいます。EXCEPTION イベントに対しては、XML-CODE は、「*ILE COBOL* プロ グラマーの手引き」で指定されている XML 例外コードのうち 1 つを含んでいます。特殊レジスター XML-EVENT は、「START-OF-DOCUMENT」などのイベント名に設定されます。XML-TEXT または XML-NTEXT のいずれかが、『XML-EVENT 特殊レジスター』で説明するように、イベントに対応する文書の部分を含んでいます。

XML 特殊レジスターに関して詳しくは、『特殊レジスター』を参照してください。

すべての種類の XML イベントに対しては、処理プロシージャが制御をパーサーに戻したとき、XML-CODE がゼロでない場合、それ以上の EXCEPTION イベントなしにパーサーは終了します。処理プロシージャからパーサーに戻る前に、EXCEPTION でないイベントに対して XML-CODE を -1 に設定すると、ユーザーが開始した例外条件でパーサーは強制的に終了します。いくつかの EXCEPTION イベントに対しては、処理プロシージャは XML-CODE をゼロに設定し、強制的にパーサーを続行させることができますが、以降の結果は予測不能です。XML-CODE がゼロの場合、XML 文書全体が解析されてしまうか未処理の例外条件が発生するまで、解析は続行します。

解析中、XML PARSE ステートメントを指定したプログラムが、繰り返し呼び出されてはなりません。

EXCEPTION イベントおよび例外処理に関して詳しくは、「*ILE COBOL* プログラマーの手引き」を参照してください。

処理プロシージャ

処理プロシージャのコーディングする場合、以下に十分注意してください。

- XML 処理プロシージャは、EXIT PROGRAM または GOBACK ステートメントを含んではなりません。
- 処理プロシージャの ALTER、GO TO、および PERFORM ステートメントを使用して、処理プロシージャ外部のプロシージャ名に、制御を転送できます。ただし、制御は、GO TO または PERFORM ステートメントの後、処理プロシージャに戻らなければなりません。
- 処理プロシージャは、CALL ステートメントを含むことができます。ターゲット・プログラムは、XML PARSE ステートメントを含むことができます。

「*ILE COBOL* プロ グラマーの手引き」には、XML PARSE ステートメントおよび処理プロシージャの使用に関する詳細があります。

XML 文書のためのコード化文字セット

XML PARSE は、国別データ項目、英数字データ項目、および UCS-2 および 1 バイト CCSID を持つ IFS ファイルの XML 文書をサポートしています。国別データ項目の文書は、国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された Unicode UCS-2 CCSID を使用してエンコードされなければなりません。英数字データ項目の文書は、XML 文書のための「XML 文書でサポートされている EBCDIC CCSID」(表 34) で示されている単一バイトの EBCDIC CCSID で明示的にサポートされているものの 1 つ、または「XML 文書でサポートされている ASCII CCSID」(表 35) で示されている ASCII CCSID のうち 1 つを使用して、エンコードされなければなりません。

表 34. XML 文書でサポートされている EBCDIC CCSID

CCSID	内容
1140, 37	米国、カナダなど。ユーロ国別拡張 CCSID (ECECP)、国別拡張 CCSID
1141, 273	オーストリア、ドイツ ECECP、CECP
1142, 277	デンマーク、ノルウェー ECECP、CECP
1143, 278	フィンランド、スウェーデン ECECP、CECP
1144, 280	イタリア ECECP、CECP
1145, 284	スペイン、ラテンアメリカ (スペイン語) ECECP、CECP
1146, 285	英国 ECECP、CECP
1147, 297	フランス ECECP、CECP
1148, 500	国際 ECECP、CECP
1149, 871	アイスランド ECECP、CECP

表 35. XML 文書でサポートされている ASCII CCSID

CCSID	内容
813	ISO 8859-7 ギリシャ語/Latin
819	ISO 8859-1 Latin 1/オープン・システム
920	ISO 8859-9 Latin 5 (ECMA-128、トルコ TS-5881)

ASCII XML 文書を解析する場合、特殊レジスター XML-TEXT にある処理プロシージャに渡される文書のフラグメントは、ASCII でエンコードされます。移動や比較のような ILE COBOL 操作は、適切な操作に対する EBCDIC エンコードまたは国別文字に依拠しているため、文書フラグメントを変換してから、それらを使用しなければなりません。XML 文書が COBOL プログラムにあるときにこれを行うには、MOVE ステートメントを使用して、まず XML 文書の ASCII CCSID から国別文字に変換します。次に、必要な場合、MOVE ステートメントを使用して、その結果を国別文字から EBCDIC に変換します。

他の CCSID でエンコードされた COBOL プログラムの XML 文書については、MOVE ステートメントを使用して、それらを国別文字に変換することで、解析できます。特殊レジスター XML-NTEXT にある処理プロシージャに渡された文書テキストの個々の部分については、その後、必要に応じて、MOVE ステートメントを使用して元の CCSID にもう一度変換できます。

XML 文書が IFS ファイルにある場合、オブジェクト・コピー (CPY) コマンドを使用して、CCSID 変換を実行します。パーサーから戻される文書フラグメントでの作業をより簡単にするには、XML PARSE で文書を使用する前に以下を実行することをお勧めします。

1. 各 xml レコードの開始で '<' タグに先行する文字を除去する必要があります。
2. IFS ファイルでの各行の終了は、LF (改行) ではなく、CR (復帰) のみを持つ必要があります。
3. XML 文書を国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された UCS-2 CCSID に変換するか、または XML 文書をジョブの CCSID に変換します。
4. XML 文書のエンコード宣言を手動で変更し、文書の実際の CCSID を指定します。

文書のエンコードの指定およびパーサーがエンコードを決定する方法について詳しくは、「*ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

特殊レジスター

- XML-CODE
- XML-EVENT
- XML-NTEXT
- XML-TEXT

XML-CODE 特殊レジスター

XML-CODE 特殊レジスターは、以下の目的に使用されます。

- XML パーサーと、XML PARSE ステートメントで識別された処理プロシージャ間で、状況を通信するため
- XML GENERATE ステートメントが正常に実行されたか、XML 実行時に例外が発生したかを示すため

XML パーサーが XML-CODE を設定してから、パーサーの終了時に、各イベントごとに制御が処理プロシージャに転送されます。XML-CODE をリセットしてから、制御を処理プロシージャから XML パーサーへ戻すことができます。

XML-CODE 特殊レジスターには、次の暗黙定義があります。

```
01 XML-CODE PICTURE S9(9) USAGE BINARY VALUE 0.
```

ネストされたプログラムの中で使用される際には、この特殊レジスターは、最外部のプログラム内で、グローバル属性によって暗黙に定義されます。

XML パーサーは XML イベントを検出すると、XML-CODE を設定してから制御を処理プロシージャに渡します。EXCEPTION イベントを除くすべてのイベントに対して、処理プロシージャが制御を受け取った場合、XML-CODE はゼロを含んでいます。

EXCEPTION イベントに対して、パーサーは、XML-CODE を例外の性質を示す例外コードに設定します。例外コードについては、「*ILE COBOL プログラマーの手引き*」で詳しく説明しています。

XML PARSE ステートメント

以下のように、パーサーに戻る前に、XML-CODE を設定することができます。

- -1 に設定すると、通常のイベント後、パーサーが EXCEPTION イベントを発生せずに終了することを示します。
- ゼロに設定すると、継続が許可されている EXCEPTION イベント後、パーサーが処理を続けることを示します。パーサーは XML 文書の処理を続けようとしませんが、結果は未定義です。

XML-CODE をその他の値に設定してからパーサーに戻る場合、結果は未定義です。

パーサーが制御を XML PARSE ステートメントに戻すと、XML-CODE は、パーサーまたは処理プロシーチャーのいずれかによって設定された最も新しい値を含みます。

XML GENERATE ステートメントの終了時に、XML-CODE には、XML 生成の正常完了を示す 0、または XML 生成時に例外が発生したことを示すゼロ以外のエラー・コードが含まれます。XML GENERATE 例外コードは、「*ILE COBOL プログラマーズ・ガイド*」で説明されています。

XML-EVENT 特殊レジスター

XML-EVENT 特殊レジスターは、XML パーサーから XML PARSE ステートメントで識別された処理プロシーチャーへ、イベント情報を通信するために使用されます。制御が処理プロシーチャーへ渡される前に、XML パーサーは、XML-EVENT 特殊レジスターを、表 36 にあるような XML イベントの名前に設定します。

XML-CODE 特殊レジスターには、次の暗黙定義があります。

01 XML-EVENT USAGE DISPLAY PICTURE X(30) VALUE SPACE.

ネストされたプログラムの中で使用される際には、この特殊レジスターは、最外部のプログラム内で、グローバル属性によって暗黙に定義されます。

XML-EVENT を、受信データ項目として使用することはできません。

表 36. XML-EVENT および XML-TEXT または XML-NTEXT 特殊レジスターの内容

XML イベント (XML-EVENT の内容)	XML-TEXT または XML-NTEXT の内容
ATTRIBUTE-CHARACTER	属性値にある定義済みエンティティー参照に相当する単一の文字。
ATTRIBUTE-CHARACTERS	引用符またはアポストロフィーで囲まれた値。値がエンティティー参照を含む場合、これは属性値のサブストリングとすることができます。
ATTRIBUTE-NAME	属性名、= の左側にあるストリング
ATTRIBUTE-NATIONAL-CHARACTER	XML PARSE ステートメントの ID-1 によって指定された XML 文書のタイプにかかわらず、XML-TEXT は空であり、XML-NTEXT は、(数値) 文字参照に相当する単一の国別文字を含む。
COMMENT	開始文字シーケンス「<!--」と終了文字シーケンス「-->」の間にあるコメントのテキスト

表 36. XML-EVENT および XML-TEXT または XML-NTEXT 特殊レジスターの内容 (続き)

CONTENT-CHARACTER	要素コンテンツにある定義済みエンティティ参照に相当する単一の文字。
CONTENT-CHARACTERS	開始タグと終了タグの間にある要素コンテンツ。コンテンツがエンティティ参照または別の要素を含む場合、これを要素コンテンツのサブストリングとすることができます。
CONTENT-NATIONAL-CHARACTER	XML PARSE ステートメントの ID-1 によって指定された XML 文書のタイプにかかわらず、XML-TEXT は空であり、XML-NTEXT は、(数値) 文字参照に相当する単一の国別文字を含む。
DOCUMENT-TYPE-DECLARATION	開始文字シーケンス「<!DOCTYPE」および終了文字シーケンス「>」を含む、すべての文書タイプ宣言。
ENCODING-DECLARATION	引用符またはアポストロフィーで囲まれた、XML 宣言内のエンコード宣言の値。
END-OF-CDATA-SECTION	常時、ストリング「]]>」を含む。
END-OF-DOCUMENT	Null、長さゼロ
END-OF-ELEMENT	終了要素タグまたは空の要素タグの名前。
EXCEPTION	例外が検出されたポイントまでを含む、正常にスキャンされた文書の部分。 ¹
PROCESSING-INSTRUCTION-DATA	処理命令の残り、終了シーケンス「?>」は含まないが、末尾の空白文字は含み、先頭の空白文字は含まない。
PROCESSING-INSTRUCTION-TARGET	処理命令ターゲット名、処理命令である開始シーケンス「<?»の直後にある。.
STANDALONE-DECLARATION	引用符またはアポストロフィーで囲まれた、XML 宣言内のスタンドアロン宣言の値。
START-OF-CDATA-SECTION	常時、ストリング「<![CDATA[」を含む。
START-OF-DOCUMENT	文書全体。
START-OF-ELEMENT	開始要素タグまたは空の要素タグの名前、エレメント・タイプとも言う。
UNKNOWN-REFERENCE-IN-CONTENT	エンティティ参照名で、「&」および「;」区切り文字を含まない。
UNKNOWN-REFERENCE-IN-ATTRIBUTE	エンティティ参照名で、「&」および「;」区切り文字を含まない。
VERSION-INFORMATION	引用符またはアポストロフィーで囲まれた、XML 宣言内のバージョン宣言の値。これは、現行では常時「1.0」です。

注:

1. エンコードの矛盾に関する例外がシグナル通知されてから、解析が開始します。これらの例外について、XML-TEXT は、長さゼロであるか、文書のエンコード宣言値のみを含みます。XML 例外コードに関する情報については、「*ILE COBOL* プログラマーの手引き」を参照してください。

XML-NTEXT 特殊レジスター

XML-NTEXT 特殊レジスターは、USAGE NATIONAL である文書フラグメントを含むように、XML 解析中に定義されます。

XML-NTEXT は、含まれている XML 文書フラグメントの長さの基本国別データ項目です。XML-NTEXT の長さは、ゼロから 8,000,000 までの国別文字位置をとることができます。最大バイト長は 16,000,000 です。

注: COBOL データ記述記入項目に相当するものではありません。

ネストされたプログラムの中で使用される際には、この特殊レジスターは、最外部のプログラム内で、グローバル属性によって暗黙に定義されます。

以下のケースでは、パーサーは、XML-NTEXT を、イベントに関連する文書フラグメントに設定してから、制御を処理プロシージャーに転送します。

- XML PARSE ステートメントのオペランドが国別データ項目の場合
- ATTRIBUTE-NATIONAL-CHARACTER イベントの場合
- CONTENT-NATIONAL-CHARACTER イベントの場合

XML-NTEXT が設定されている場合、XML-TEXT 特殊レジスターの長さはゼロです。いつでも、2 つの特殊レジスター XML-NTEXT および XML-TEXT のうち 1 つだけが、ゼロ以外の長さとなります。

LENGTH 関数を使用して、XML-NTEXT が含む国別文字の数を決定してください。XML-NTEXT に対する LENGTH OF 特殊レジスターには、国別文字の数ではなく、XML-NTEXT に含まれているバイト数があります。

XML-NTEXT を、受け入れ項目として使用することはできません。

XML-TEXT 特殊レジスター

XML-TEXT 特殊レジスターは、クラス英数字である文書フラグメントを含むように、XML 解析中に定義されます。

XML-TEXT は、含まれている XML 文書フラグメントの長さの基本英数字データ項目です。XML-TEXT の長さは、ゼロから 16,000,000 バイトまでをとることができます。

注: COBOL データ記述記入項目に相当するものではありません。

ネストされたプログラムの中で使用される際には、この特殊レジスターは、最外部のプログラム内で、グローバル属性によって暗黙に定義されます。

XML PARSE ステートメントのオペランドが、ATTRIBUTE-NATIONAL-CHARACTER イベントおよび CONTENT-NATIONAL-CHARACTER イベントを除く英数字データ項目の場合、パーサーは、XML-TEXT を、イベントに関連する文書フラグメントに設定してから、制御を処理プロシージャーに転送します。

XML-TEXT が設定されている場合、XML-NTEXT 特殊レジスターの長さはゼロです。いつでも、2 つの特殊レジスター XML-NTEXT および XML-TEXT のうち 1 つだけが、ゼロ以外の長さとなります。

LENGTH 関数または XML-TEXT に対する LENGTH OF 特殊レジスターを使用して、XML-TEXT が含むバイト数を決定します。

XML-TEXT を、受け入れ項目として使用することはできません。

IBM 拡張 の終り

XML PARSE ステートメント

第 15 章 組み込み関数

データ処理を行う上で、オブジェクト・プログラムに関連するデータ・ストレージにおいては必要な値が直接アクセスできず、代わりに他のデータを操作することでその値を得なければならなくなることがしばしばあります。組み込み関数は、数学演算、文字演算、論理演算を実行する関数です。したがって、組み込み関数を使うことにより、オブジェクト・プログラムの実行中に自動的に値を得るデータ項目を参照できます。

関数は、実行するサービスのタイプに基づいて、数理、統計、日付 / 時刻、財務、文字処理、および一般の 6 つのカテゴリに分けることができます。

関数は、手続き部ステートメントで関数名を必要な引数とともに指定することで参照できます。

関数は基本データ項目であり、英数字、DBCS、数字、整数、ブール、または日時の値を戻します。関数を、受け入れオペランドとして使用することはできません。

関数定義と評価

関数のクラスおよび特性や、関数が必要とする引数の数およびタイプは、その関数の関数定義によって決まります。これらの特性には、次のものが含まれます。

- 関数によってはそのクラスおよび特性が、その関数に対する引数によって決まる
- 英数字関数の場合は、戻り値のサイズ

IBM 拡張

- DBCS 関数の場合は、戻り値のサイズ
- 日時関数の場合は、戻り値の長さ

IBM 拡張 の終り

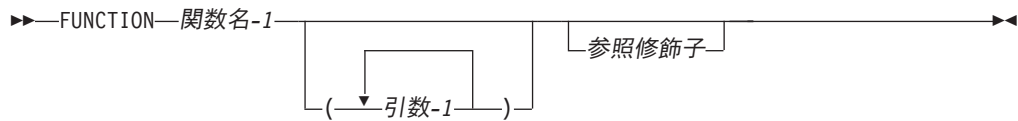
- 数字および整数関数の場合は、戻り値の符号およびその関数が整数かどうか
- その関数によって戻される実際の値

組み込み関数の評価はどれも、それが現れるコンテキストの影響を受けません。つまり、関数の評価は、その関数の外側にある演算およびオペランドの影響を受けないということです。ただし、関数の評価が、その引数の属性の影響を受けることはあります。

関数の指定

関数 ID の一般形式は次のようになります。

形式



関数名-1

関数名-1 は、組み込み関数名の 1 つでなければなりません。

引数-1

引数-1 は、ID、リテラル (表意定数以外)、または算術式でなければなりません。

参照修飾子

英数字または DBCS のカテゴリの関数に対してだけ指定できます。

英数字ソース・ステートメントと数字ソース・ステートメントで組み込み関数を呼び出す例が、次に示されています。

以下の英数字ソース・ステートメントは、

```
MOVE FUNCTION UPPER-CASE("hello") TO DATA-NAME.
```

引数内の小文字をそれぞれに対応する大文字に置き換え、結果的に HELLO を DATA-NAME に移動します。

以下の数字ソース・ステートメントは、

```
COMPUTE NUM-ITEM = FUNCTION MEAN(A B C)
```

A、B、および C の値を加算し、次に 3 で除算して、その結果を NUM-ITEM に入れます。

手続き部ステートメント内で、各関数 ID は、それと同じ位置にある ID に関連する任意の参照変更または添え字付けが評価されるのと同時に評価されます。

関数のタイプ

関数には次の 7 つのタイプがあります。

- 英数字
- 数字

IBM 拡張

- DBCS
- 国別
- 日時
- プール

IBM 拡張 の終り

- 整数

英数字関数のクラスおよびカテゴリーは英数字です。戻り値は DISPLAY を暗黙に使用し、標準データ・フォーマットの文字です。戻り値の文字位置の数は、関数定義によって決まります。

数字関数のクラスおよびカテゴリーは数字です。戻り値は、常に演算符号を持っているものと見なされ、数字中間結果となります。詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

IBM 拡張

DBCS 関数のクラスおよびカテゴリーは DBCS です。戻り値は、DISPLAY-1 を暗黙に使用します。戻り値の文字位置の数は、関数定義によって決まります。

国別関数のクラスおよびカテゴリーは NATIONAL です。戻り値は、NATIONAL を暗黙に使用します。戻り値の文字位置の数は、関数定義によって決まります。

日時関数は日時クラスの関数であり、そのカテゴリーは日付、時刻、またはタイム・スタンプです。戻り値は DISPLAY を暗黙に使用します。戻り値の文字位置の数は、関数定義によって決まります。

ブール関数のクラスおよびカテゴリーはブールです。戻り値は DISPLAY を暗黙に使用します。ブール値の真 (B"1") または偽 (B"0") のいずれかが戻されます。

IBM 拡張 の終り

整数関数のクラスおよびカテゴリーは数字です。戻り値は、常に演算符号を持っているものと見なされ、整数の中間結果となります。戻り値の桁位置の個数は、関数定義によって決まります。詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

使用上の規則

英数字関数

一般形式において ID が認められていて、かつ一般形式に関する規則が関数への参照を特に禁じていないところではどこでも、英数字関数を指定できます。ただし、次の指定はできません。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定する場合。
- 一般形式に関する規則で参照されているデータ項目が特定の特性 (クラスおよびカテゴリー、使用法、サイズ、および暗黙的値など) を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定された特定の引数が、これらの特性を持たない場合。

英数字関数の参照変更が認められています。関数に参照変更が指定されている場合には、参照変更の評価は、関数の評価の直後に行われます。

英数字関数を、英数字の引数が認められている関数に対する引数として参照できます。

数字関数

数字関数は、算術式を指定できるところでのみ使用できます。

数字関数は、数字の引数が認められている関数に対する引数として参照できません。

数字関数は、整数オペランドが必要なところでは、たとえその特定の参照が整数値を生成するとしても、使用できません。INTEGER または INTEGER-PART 関数を使用して、数字の引数のタイプを強制的に整数にすることができます。

IBM 拡張

DBCS 関数

一般形式において DBCS ID が認められていて、一般形式に関する規則が関数への参照を特に禁じていないところではどこでも、DBCS 関数を指定できます。ただし、次の指定はできません。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定。
- 一般形式に関する規則で参照されているデータ項目が特定の特性（クラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、および暗黙的値など）を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定された特定の引数が、これらの特性を持たない場合。

DBCS 関数の参照変更が認められています。関数に参照変更が指定されている場合には、参照変更の評価は、関数の評価の直後に行われます。

DBCS 関数は、DBCS 引数を認めている関数の引数として参照できます。

国別関数

一般形式において国別 ID が認められていて、一般形式に関する規則が関数への参照を特に禁じていないところではどこでも、国別関数を指定できます。ただし、次の指定はできません。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定。
- 一般形式に関する規則で参照されているデータ項目が特定の特性（クラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、および暗黙的値など）を持つ必要があり、定義に従った関数の評価および指定された特定の引数が、これらの特性を持たない場合。

国別関数は、国別引数を認めている関数の引数として参照できます。

日時関数

一般形式において日時 ID が認められていて、一般形式に関する規則が関数への参照を特に禁じていない場合であれば、日時関数を指定できます。ただし、次の指定はできません。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定。
- 一般形式に関する規則において、参照されるデータ項目が特定の特性（たとえばクラスおよびカテゴリ、使用法、サイズ、暗黙の値）を持つことが求められていて、関数定義および指定された特定の引数による関数の評価が、これらの特性を持たない場合の指定。

日時関数は、比較条件の一部として使用できます。日時関数を比較条件の中に指定すると、その比較条件の評価はこの関数の評価の直後に実行されます。

日時関数は、日時を引数として取ることができる関数の引数として参照できません。

ブール関数

一般形式においてブール ID が認められていて、一般形式に関する規則が関数への参照を特に禁じていない場合であれば、ブール関数を指定できます。ただし、次の指定はできません。

- 任意のステートメントの受け入れオペランドとして指定。
- 一般形式に関する規則において、参照されるデータ項目が特定の特性（たとえばクラスおよびカテゴリー、使用法、サイズ、暗黙の値）を持つことが求められていて、関数定義および指定された特定の引数による関数の評価が、これらの特性を持たない場合の指定。

ブール関数は、比較条件の一部として使用できます。ブール関数を比較条件の中に指定すると、その比較条件の評価はこの関数の評価の直後に実行されます。

ブール関数は、ブール値を引数として取ることができる関数の引数として参照できます。

IBM 拡張 の 終り

整数関数

整数関数は、算術式を指定できるところでのみ使用できます。

整数関数は、整数の引数を認めている関数に対する引数として参照できます。

特別な使用に関する注意

CALL ステートメントの USING 句中の ID は、関数 ID であってはなりません。

COPY ステートメントの REPLACING 句中では、すべてのタイプの関数 ID が認められています。

引数

関数によっては、戻り値が、その関数の評価時に関数 ID 内で指定された引数によって決まるものもあります。引数を必要としない関数もあれば、固定数の引数を必要とする関数もあり、そしてまた、可変数の引数を認める関数もあります。

引数は次のいずれかでなければなりません。

- ID
- 算術式
- 関数 ID
- 表意定数以外のリテラル
- 特殊レジスター
- 簡略名
- キーワード

関数への引数として、結果がその引数のカテゴリー要件を満たす任意の関数または関数を含む式（同じ関数の別の評価も含めて）が認められています。

関数に特有の引数指定については 595 ページの『関数定義』を参照してください。

引数のタイプには次のものがあります。

英字 英字クラスまたは英字のみを含む非数字リテラルの基本データ項目。引数の内容は、関数の値を決定するのに使用されます。引数の長さを使用して、関数の値を決定することもできます。

英数字 英字クラスまたは英数字クラス、または非数字リテラルのデータ項目。引数の内容は、関数の値を決定するのに使用されます。引数の長さを使用して、関数の値を決定することもできます。

IBM 拡張

ブール ブール・クラスのデータ項目またはブール・リテラル。

DBCS DBCS クラスまたは DBCS リテラルのデータ項目。引数の内容は、関数の値を決定するのに使用されます。引数の長さを使用して、関数の値を決定することもできます。

国別 NATIONAL クラスまたは国別 16 進リテラルのデータ項目。引数の内容は、関数の値を決定するのに使用されます。引数の長さを使用して、関数の値を決定することもできます。

日時 日時クラスのデータ項目。引数の内容は、関数の値を決定するのに使用されます。引数の長さを使用して、関数の値を決定することもできます。

IBM 拡張 の終り

指標 指標データ項目。引数に関連付けられているサイズをその引数の値の判別で使用できます。

整数 結果が常に整数値になる算術式。この式の、符号も含めた値は、関数の値を決定するのに使用されます。

数字 算術式の、符号も含めた値は、関数の値を決定するのに使用されます。

IBM 拡張

キーワード

キーワードは関数定義に従って指定する必要があります。

簡略名 SPECIAL-NAMES 段落で定義した簡略名が指定されます。簡略名に関連付けられている機能を関数の値の判別で使用できます。

ポインター

ポインター ID。引数に関連付けられているサイズを関数の値の判別で使用できます。

タイプ宣言

タイプ名が指定されます。タイプ宣言に関連付けられているサイズを関数の値の判別で使用できます。

特殊レジスター

特殊レジスターは関数定義に従って指定する必要があります。特殊レジスターに関連付けられている情報を関数の値の判別で使用できます。

IBM 拡張 の終り

関数によっては引数に、たとえば受け入れ値の範囲といった制約を定めているものもあります。関数の引数として割り当てられた値が指定された制約にしがっていない場合、戻り値は未定義になります。

ネストされた関数が引数として使用された場合、その関数の引数の評価は、外側の関数の引数の影響を受けません。

同じ関数レベルの引数のみが互いに影響し合います。この相互の影響は、次の 2 つの場合に生じます。

- 関数の引数として現れる算術式の計算は、その関数の別の引数の影響を受けません。
- 関数の評価においては、そのすべての引数の属性が考慮されます。

IBM 拡張

浮動小数点リテラルは、数字引数の使用が認められている場合、および数字引数を取ることができる関数内で使用される算術式の中では、どこでも使用できます。浮動小数点リテラルは、整数の引数が必要であるところでは認められていません。

外部浮動小数点項目は、数字引数の使用が認められている場合、および数字引数を取ることができる関数内で使用される算術式の中では、どこでも使用できます。

外部浮動小数点項目は、整数の引数が必要であるところや、関数 ID で英数字クラスの引数が認められているところ (たとえば LOWER-CASE、REVERSE、UPPER-CASE、NUMVAL、および NUMVAL-C 関数) では、認められていません。

IBM 拡張 の終り

関数の引数を評価する際の優先順序

関数が評価される時、その引数は、一連の引数が指定されている順序 (左から右) で個別に評価されます。評価される引数は、関数 ID であっても、関数 ID を含む式であってもかまいません。

算術式が引数として指定され、式の最初の演算子が単項正または単項負である場合、そのすぐ左端に左括弧が必要です。たとえば、関数 $\text{MEAN}(x-y z)$ は、2 つの引数 $x-y$ と z の平均になります。

y の単項負の平均を得るには、括弧を次のように追加します。

$\text{MEAN}((x) (-y) z)$

注: 上記の例のように、単項負の平均を計算していて、単項負が複数の引数の最初の引数でない場合、前にある一連の引数も、括弧で囲む必要があります。これによって、この例の単項負 $(-y)$ は添え字として解釈されないことが保証されます。

ALL 添え字付け

関数が、ある引数を不定の回数繰り返すことを認めている場合、データ名とテーブルを識別する任意の修飾子を指定することで、そのテーブルを参照できます。この後にすぐ添え字付けを続けて、添え字のうちの 1 つまたは複数を語 ALL にすることができます。

注: ALL 添え字の評価結果は、少なくとも 1 つの引数にならなくてなりません。そうでなければ関数によって戻される値が未定義となります。ただし、*RANGE コンパイラ・オプションを指定することで、状況を実行時に診断できます。

ALL を 1 つの添え字として指定すると、すべての可能なテーブル・エレメントを、その添え字位置におけるすべての有効な添え字を使用して指定することと同等になります。

「テーブル名 (ALL)」として指定されているテーブル引数に関しては、各テーブル・エレメントが引数として暗黙に指定される順序は左から右で、最初 (または左端) の引数は「テーブル名 (1)」となり、ALL は 1 に置き換えられます。次の引数は「テーブル名 (2)」で、添え字は 1 増やされています。この処理は、添え字が 1 ずつ増やされて暗黙の引数を生成しながら、ALL 添え字がその値の範囲に増えるまで継続されます。

たとえば、

```
FUNCTION MEAN(Table(ALL))
```

は、次と同じです。

```
FUNCTION MEAN(Table(1) Table(2) Table(3)... Table(n))
```

ここで、n はテーブル内のエレメントの数です。

複数の ALL 添え字、たとえば「テーブル名 (ALL, ALL, ALL)」がある場合、最初の暗黙の引数は「テーブル名 (1, 1, 1)」で、それぞれの ALL は 1 に置き換えられます。次の引数は「テーブル名 (1, 1, 2)」で、右端の添え字が 1 増やされます。右端の ALL で表されている添え字はその値の範囲まで増やされ続けて、それぞれの値の暗黙の引数を生成します。

ALL として指定された添え字がいったん値の範囲まで増えると、ALL と指定された次の左の添え字が 1 増やされます。新たに増やされた添え字の右にある、ALL として指定されている各添え字が、暗黙の引数を生成するために 1 に設定されます。再度右端の ALL で表されている添え字が、その値の範囲まで増え続け、それぞれの値のための暗黙の引数を生成します。この処理は、ALL と指定されているそれぞれの添え字が、それぞれの値の範囲まで増え続けるまで継続されます。

たとえば、

```
FUNCTION MEAN(Table(ALL, ALL))
```

は、次と同じです。

```
FUNCTION MEAN(Table(1, 1) Table(1, 2) Table(1, 3)... Table(1, n)
                Table(2, 1) Table(2, 2) Table(2, 3)... Table(2, n)
                Table(3, 1) Table(3, 2) Table(3, 3)... Table(3, n)
```



```

      .
      .
      .
Table(m, 1) Table(m, 2) Table(m, 3)... Table(m, n)

```

ここで、n はテーブルの列数をあらわす次元の要素数で、m はテーブルの行数をあらわす次元の要素数です。

ALL 添え字は、リテラル添え字、データ名添え字、または指標名添え字と結合して、多次元テーブルを参照できます。

たとえば、

```
FUNCTION MEAN(Table(ALL, 2))
```

は、次と同じです。

```

FUNCTION MEAN(Table(1, 2)
              Table(2, 2)
              Table(3, 2)
              .
              .
              .
              Table(m, 2))

```

ここで、m はテーブルの行次元の要素数です。

ALL 添え字が引数として指定され、その引数が参照変更されている場合、その参照修飾子はテーブルの暗黙に指定されたそれぞれの要素に対して適用されます。

ALL 添え字が参照変更されるオペランドとして指定されている場合、その参照修飾子は、テーブルの暗黙に指定されたそれぞれの要素に対して適用されます。

ALL 添え字が OCCURS DEPENDING ON 文節と関連している場合、値の範囲は、OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクトによって決定されます。

たとえば、次のような給与計算のレコード定義が与えられたとします。

```

01 PAYROLL.
  02 PAYROLL-WEEK  PIC 99.
  02 PAYROLL-HOURS PIC 999 OCCURS 1 TO 52
    DEPENDING ON PAYROLL-WEEK.

```

次の COMPUTE ステートメントを使用して、任意の週の平均作業時間を割り出すことができます。

```
COMPUTE MEAN-HOURS = FUNCTION MEAN (PAYROLL-HOURS(ALL))
```

この関数呼び出しでは、ALL 添え字を使用して PAYROLL-HOURS 配列のすべての要素 (PAYROLL-WEEK フィールドの実行時間値によって異なる) を参照できます。

関数定義

596 ページの表 37 に、それぞれの組み込み関数の、引数タイプ、関数タイプ、および戻り値の概説を記載してあります。引数タイプおよび関数タイプは次のように省略されています。

組み込み関数

- A = 英字

IBM 拡張

- B = プール
- D = DBCS
- DA = 日時

IBM 拡張 の終り

- I = 整数
- IX = 指標

IBM 拡張

- K = キーワード
- M = 簡略名

IBM 拡張 の終り

- N = 数字

IBM 拡張

- NL = 国別
- P = ポインター
- S = 特殊レジスター
- T = タイプ名

IBM 拡張 の終り

- X = 英数字
- U = 国別 (汎用文字セットとユニコード)

注: これらの省略形に関連する番号によって、関数のどの引数を参照しているかを識別します。

表 37. 関数の表

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
ACOS	N1	N	N1 のアークコサイン
ADD-DURATION ¹	DA1、 K2、I3	DA	期間が加算された日時項目
ANNUITY	N1、I2	N	I2 の期間に、N1 の利率で支払われた年金を概算する。
ASIN	N1	N	N1 のアークサイン
ATAN	N1	N	N1 のアークタンジェント
CHAR	I1	X	プログラム照合順序位置 I1 の文字

表 37. 関数の表 (続き)

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
CONVERT-DATE-TIME ¹	DA1 または X1 または I1、K2、X3 または K3 または S3、M4 または S4	DA	変換された日時項目
COS	N1	N	N1 のコサイン
CURRENT-DATE	なし	X	現在の日付と時刻、およびグリニッジ標準時との時差
DATE-OF-INTEGERS	I1	I	整数日付と等しい標準日付 (YYYYMMDD)
DATE-TO-YYYYMMDD ¹	I1 または I1、I2	I	標準日付の年を 2 桁から 4 桁に変換する
DAY-OF-INTEGERS	I1	I	整数日付と等しい年間通算日 (YYYYDDD)
DAY-TO-YYYYDDD ¹	I1 または I1、I2	I	年間通算日の年を 2 桁から 4 桁に変換する
DISPLAY-OF	NL1 NL1、I2 NL1、X2 または D2	X	指定された場合、I2 で識別されるコード・ページを使用して対応する文字表現に変換される NL1 の各文字、または I2 が指定されていない場合、コンパイル時に選択されるデフォルトのコード・ページ
EXTRACT-DATE-TIME ¹	DA1、X2 または K2	I または X	抽出された日付項目、時刻項目、またはタイム・スタンプ項目の一部
FACTORIAL	I1	I	I1 の階乗
FIND-DURATION ¹	DA1、 DA2、 K3	I	2 つの日時項目間の整数の期間
INTEGER	N1	I	N1 より大きくない最大の整数
INTEGER-OF-DATE	I1	I	標準日付 (YYYYMMDD) と等しい整数日付
INTEGER-OF-DAY	I1	I	年間通算日の日付 (YYYYDDD) と等しい整数日付
INTEGER-PART	N1	I	引数の整数部分
LENGTH	A1、N1、 X1、D1、 B1、T1、 DA1、 P1、IX1、 NL	I	引数の長さ
LOCALE-DATE ¹	X1 または D1、M2	X	指定したロケールに従って形式化された日付 string
LOCALE-TIME ¹	X1 または D1、M2	X	指定したロケールに従って形式化された時刻 string
LOG	N1	N	N1 の自然対数

組み込み関数

表 37. 関数の表 (続き)

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
LOG10	N1	N	N1 の 10 を底とする常用対数
LOWER-CASE	A1 または X1	X	引数中の文字をすべて小文字に設定する
	D1	D	
	NL	NL	
MAX	A1...	X	最大引数の値; 関数のタイプは引数によって異なります。
	I1...	I	
	N1...	N	
	X1...	X	
	U1...	U	
MEAN	N1...	N	引数の算術平均
MEDIAN	N1...	N	引数の中央値
MIDRANGE	N1...	N	最大引数と最小引数の平均値
MIN	A1...または	X	最小引数の値; 関数のタイプは引数によって異なります。
	I1...または	I	
	N1...または	N	
	X1...または	X	
	U1...	U	
MOD	I1, I2	I	I1 モジユロ I2
NATIONAL-OF	A1 または X1 または D1	NL	指定された場合、I2 で識別されるコード・ページを使用して、国別文字に変換される引数-1 の文字、または I2 が指定されていない場合、コンパイル時に選択されるデフォルトのコード・ページ
	A1 または X1 または D1、I2		
	A1 または X1 または D1、NL2		
NUMVAL	X1	N	単純な数字ストリングの数字
NUMVAL-C	X1 または X1、X2	N	オプションのコンマと通貨記号が付いた数字ストリングの数字
ORD	A1 または X1	I	照合順序における引数の順序位置
ORD-MAX	A1...、N1...、	I	最大引数の順序位置
	X1...、または U1...		

表 37. 関数の表 (続き)

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
ORD-MIN	A1...、 N1...、	I	最小引数の順序位置
	X1...、ま たは U1...		
PRESENT-VALUE	N1、N2...	N	N1 の割引率での、一連の将来の期間終了時の量 N2 の現在値
RANDOM	I1 また は、なし	N	乱数
RANGE	I1...	I	最大引数から最小引数を引いた値; 関数のタイプは引数によって異なります。
	N1...	N	
REM	N1、N2 (N2 はゼ ロ以外)	N	N1 を N2 で割ったときの剰余
REVERSE	A1 または X1	X	引数の文字の逆順
	D1	D	
	NL	NL	
SIN	N1	N	N1 のサイン
SQRT	N1	N	N1 の平方根
STANDARD DEVIATION	N1...	N	引数の標準偏差
SUM	I1...	I	引数の合計; 関数のタイプは引数によって異なります。
	N1...	N	
SUBTRACT-DURATION ¹	DA1、 K2、I3	DA	期間が減算された日時項目
TAN	N1	N	N1 のタンジェント
TEST-DATE-TIME ¹	DA1 また は X1 ま たは I1、 K2、X3 または K3 または S3、M4 または S4	B	日時項目が有効な場合は真 (B"1")、その他の場合は偽
TRIM ¹	A1 または X1	X	左ブランクおよび右ブランクを持つ、または指定した文字を切り取ったストリング
	A1、A2 または X1、X2		
	D1 または D1、D2	D	
	NL1 また は NL1、NL2	NL	

組み込み関数

表 37. 関数の表 (続き)

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
TRIML ¹	A1 または X1	X	左ブランクを持つ、または指定した文字を切り取ったストリング
	A1、A2 または X1、X2		
	D1 または D1、D2	D	
	NL1 または NL1、NL2	NL	
TRIMR ¹	A1 または X1	X	右ブランクを持つ、または指定した文字を切り取ったストリング
	A1、A2 または X1、X2		
	D1 または D1、D2	D	
	NL1 または NL1、NL2	NL	
UPPER-CASE	A1 または X1	X	引数中の文字をすべて大文字に設定する
	D1	D	
	NL	NL	
UTF8STRING ¹	A1、X1、D1 または NL1	A	可変長 UTF-8 ストリング
VARIANCE	N1...	N	引数の差異
WHEN-COMPILED	なし	X	プログラムがコンパイルされた日付と時刻
YEAR-TO-YYYY ¹	I1 または I1、I2	I	年を 2 桁から 4 桁に変換する
注: ¹ IBM 拡張			

表 38. 関数の表

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
ACOS	N1	N	N1 のアークコサイン
ASIN	N1	N	N1 のアークサイン
ATAN	N1	N	N1 のアークタンジェント
CHAR	I1	X	プログラム照合順序位置 I1 の文字
COS	N1	N	N1 のコサイン

表 38. 関数の表 (続き)

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
CURRENT-DATE	なし	X	現在の日付と時刻、およびグリニッジ標準時との時差
DATE-OF-INTEGERS	I1	I	整数日付と等しい標準日付 (YYYYMMDD)
DATE-TO-YYYYMMDD	I1 または I1、I2	I	標準日付の年を 2 桁から 4 桁に変換する
DAY-OF-INTEGERS	I1	I	整数日付と等しい年間通算日 (YYYYDDD)
DAY-TO-YYYYDDD	I1 または I1、I2	I	年間通算日の年を 2 桁から 4 桁に変換する
FACTORIAL	I1	I	I1 の階乗
INTEGER	N1	I	N1 より大きくない最大の整数
INTEGER-OF-DATE	I1	I	標準日付 (YYYYMMDD) と等しい整数日付
INTEGER-OF-DAY	I1	I	年間通算日の日付 (YYYYDDD) と等しい整数日付
INTEGER-PART	N1	I	N1 の整数部分
LENGTH	A1、N1、または X1	I	引数の長さ
	D1		
LOG	N1	N	N1 の自然対数
LOG10	N1	N	N1 の 10 を底とする常用対数
LOWER-CASE	A1 または X1	X	引数中の文字をすべて小文字に設定する
	D1	D	
MEAN	N1...	N	引数の算術平均
MOD	I1、I2	I	I1 モジュロ I2
NUMVAL	X1	N	単純な数字ストリングの数字
NUMVAL-C	X1 または X1、X2	N	オプションのコマと通貨記号が付いた数字ストリングの数字
ORD	A1 または X1	I	照合順序における引数の順序位置
RANDOM	I1、なし	N	乱数
REM	N1、N2	N	N1/N2 の剰余
REVERSE	A1 または X1	X	引数の文字の逆順
	D1	D	
SIN	N1	N	N1 のサイン
SQRT	N1	N	N1 の平方根

表 38. 関数の表 (続き)

関数名	引数タイプ	関数タイプ	戻り値
TAN	N1	N	N1 のタンジェント
UPPER-CASE	A1 または X1	X	引数中の文字をすべて大文字に設定する
	D1	D	
WHEN-COMPILED	なし	X	プログラムがコンパイルされた日付と時刻
YEAR-TO-YYYY	I1 または I1、I2	I	年を 2 桁から 4 桁に変換する

以下の各セクションには 596 ページの表 37 に要約されている組み込み関数のそれぞれの関数定義が記載されています。

ADD-DURATION

IBM 拡張

ADD-DURATION 関数は、日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目に期間を加算し、その変更した項目を戻します。

関数タイプは日時です。

戻り値の長さは、引数-1 に指定する日付項目、時刻項目、またはタイム・スタンプ項目の長さによって決まります。

日付項目に期間を加算する場合は、戻される日付は、以下に示す特定の範囲内の値でなければなりません。

- 4 桁の日付の場合は 0001/01/01 から 9999/12/31 までの範囲内であればならない。
- 2 桁の日付の場合は 0001/01/01 から 9999/12/31 までの範囲内であればならない。ただし、年の部分は 2 桁に切り捨てられます。
- 3 桁の年 (1 桁の世紀と 2 桁の年) の場合は 1900/01/01 から 2899/12/31 (デフォルト) までの範囲内であればならない。この範囲は DATTIM PROCESS ステートメント・オプションを指定することによって変更できます。

2 桁の日付項目に期間を加算する場合の戻り値の範囲は 4 桁の年の場合と同じです。ただし、戻り値の年の部分は 2 桁に切り捨てられます。

形式



引数-1

日付、時刻、またはタイム・スタンプのデータ項目でなければなりません。

引数-1 は、期間を加算される値が入っているデータ項目です。期間は引数-2 と引数-3 に指定します。

引数-2

引数-2 は期間を表すキーワードです。有効な期間キーワードを以下に示します。

- YEARS
- MONTHS
- DAYS
- HOURS
- MINUTES
- SECONDS
- MICROSECONDS

期間キーワードと引数-1 との間で整合性がとれている必要があります。たとえば、期間キーワードは以下の規則に従わなければなりません。

1. YEARS、MONTHS、および DAYS は、日付項目またはタイム・スタンプ項目に対してのみ加算することができる。
2. HOURS、MINUTES、SECONDS、および MICROSECONDS は、時刻項目またはタイム・スタンプ項目に対してのみ加算することができる。

引数-3

整数算術式でなければなりません。引数-3 は、引数-2 で指定した期間の単位数であり、引数-1 に加算されます。

引数-3 は負の整数でも構いませんが、この関数を取るはその絶対値だけです。引数-3 が 9 桁よりも長い場合は切り捨てが行われます。

引数-2 および引数-3 は反復可能です。ただし、1 つの組み込み関数の中に重複する引数-2 があってはなりません。

日付に期間を加算した結果が無効となった場合は、その日付に対する調整が行われます。たとえば、1997 年 3 月 31 日という日付に期間 1 月を加算すると、その結果は 1997 年 4 月 31 日という無効な日付となります。このような場合、この日付は 1997 年 4 月 30 日という有効な日付に調整されます。

例

以下の例で ADD-DURATION 組み込み関数の使用法を示します。

```
MOVE FUNCTION ADD-DURATION (date-3 MONTHS 1)
    TO date-2.
MOVE FUNCTION ADD-DURATION (date-3 MONTHS int-1 * 2)
    TO date-1.
MOVE FUNCTION ADD-DURATION (date-1 YEARS 1 MONTHS 5 DAYS 23)
    TO date-2.
```

IBM 拡張 の 終 り

CONVERT-DATE-TIME

IBM 拡張

CONVERT-DATE-TIME 関数は、英数字クラス、数字クラス、または日時クラスの項目をとり、日時項目を戻します。

関数タイプは日時です。

戻り値の長さは、引数-2 から引数-4 で指定した日付項目、時刻項目、またはタイム・スタンプ項目の形式で認められている長さによって決まります。

形式

▶▶ FUNCTION CONVERT-DATE-TIME (—引数-1—引数-2—
└─引数-3─┘
└─引数-4─┘)

引数-1

リテラル-3 は、下記のものになります。

- 日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目
- 英数字クラスの項目
- 非数字リテラル
- 整数値クラスの項目

引数-2

戻り値のカテゴリーを指定します。以下のキーワードのいずれか 1 つでなければなりません。

- DATE
- TIME
- TIMESTAMP

引数-1 が日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目である場合、CONVERT-DATE-TIME で可能な変換は以下のものだけです。

- 日付から日付またはタイム・スタンプへの変換
- 時刻から時刻またはタイム・スタンプへの変換
- タイム・スタンプから日付、時刻、またはタイム・スタンプへの変換

引数-2 が TIMESTAMP である場合は、引数-3 および引数-4 は両方とも指定できません。

引数-1 が日時項目である場合は、日時の移動が行われます。

引数-1 が整数値であり、戻される日時項目が引数-3 で指定した日時形式で認められている長さよりも長い場合は、戻される日時項目に対する右寄せおよび切り捨てが行われます。

引数-1 が整数値以外のものあり、戻される日時項目が引数-3 で指定した日時形式で認められている長さよりも長い場合は、戻される日時項目に対する左寄せおよび切り捨てが行われます。

引数-3

日付項目または時刻項目の形式を指定します。以下のものでなければなりません。

- 長さが最小でも 2 文字の非数字リテラル
- キーワード LOCALE
- FORMAT OF 特殊レジスター

有効なリテラルのリストおよびこの引数が従わなければならない規則については 90 ページの『FORMAT 文節』に記載されている SPECIAL-NAMES FORMAT 文節の説明を参照してください。

引数-3 は引数-2 によって参照されるカテゴリーを表していなければなりません。

引数-3 がキーワード LOCALE である場合は、日付または時刻の形式は LOCALE に基づきます。引数-4 を指定しないと、現行ロケールが使用されます。その他の場合は、簡略名または LOCALE OF 特殊レジスターと関連付けられているロケールが使用されます。

引数-3 を指定しないと、戻り値の形式は SPECIAL-NAMES FORMAT 文節に依存します。SPECIAL-NAMES 段落内に形式が 1 つも定義されていない場合は、*ISO 形式が使用されます。

引数-4

LOCALE と関連付けられている簡略名または LOCALE OF 特殊レジスターでなければなりません。

引数-4 が従わなければならない規則を以下に示します。

- 引数-4 が指定されており、かつ引数-3 がロケールに基づく形式リテラルである (たとえば %p を含んでいる) 場合は、そのロケールに基づく形式リテラルは引数-4 で指定されているロケールを使用して変換指定子の実際の値を判別する。
- 引数-3 がロケールに基づく形式リテラルであり (たとえば %p を含んでいる)、かつ引数-4 が指定されていない場合は、そのロケールに基づく形式リテラルは現行ロケールを使用して変換指定子の実際の値を判別する。
- 引数-3 がロケールに基づく形式リテラルであり (たとえば %p を含んでいる)、かつ LOCALE OF 特殊レジスターが非ロケール項目を参照するために使用されている場合は、そのロケールに基づく形式リテラルはデフォルトのロケールを使用して変換指定子の実際の値を判別する。

例

以下の例で CONVERT-DATE-TIME 組み込み関数の使用法を示します。

```
MOVE FUNCTION CONVERT-DATE-TIME ('95/05/30' DATE)
    TO date-1.
MOVE FUNCTION CONVERT-DATE-TIME
    ('95/05/30' DATE '%y/%m/%d')
    TO date-1.
MOVE FUNCTION CONVERT-DATE-TIME
    ('95/05/30' DATE '%y/%m/%d' my-locale)
    TO date-1.
MOVE FUNCTION CONVERT-DATE-TIME
    ('95/05/30' DATE LOCALE my-locale)
    TO date-1.
```

CURRENT-DATE

CURRENT-DATE 関数は、その関数を評価するシステムによって提供される、カレンダー日付、その日の時刻、およびグリニッジ標準時との時差を示す 21 文字の英数字の値を戻します。

関数タイプは英数字です。

形式

▶—FUNCTION CURRENT-DATE—▶

左から右へ読んだ場合、戻り値の 21 の文字位置は次のように解釈します。

文字位置

内容

- 1 ~ 4 西暦の年を表す 4 桁の数字
- 5 ~ 6 01 ~ 12 の範囲の月を表す 2 桁の数字
- 7 ~ 8 01 ~ 31 の範囲の日を表す 2 桁の数字
- 9 ~ 10
00 ~ 23 の範囲の時を表す 2 桁の数字
- 11 ~ 12
00 ~ 59 の範囲の分を表す 2 桁の数字
- 13 ~ 14
00 ~ 59 の範囲の秒を表す 2 桁の数字
- 15 ~ 16
00 ~ 99 の範囲の 1/100 秒を表す 2 桁の数字
- 17 文字 '-' または文字 '+'. 前の文字位置で示されているローカル時刻がグリニッジ標準時より遅れている場合、文字 '-' が戻されます。示されているローカル時刻がグリニッジ標準時と同じかそれより進んでいる場合、文字 '+' が戻されます。
- 18 ~ 19
文字位置 17 が '-' である場合には、00 ~ 12 の範囲の 2 桁の数字が戻され、通知された時刻がグリニッジ標準時よりその時間数だけ遅れていることを示します。文字位置 17 が '+' である場合には、00 ~ 13 の範囲の 2 桁の数字が戻され、通知された時刻がグリニッジ標準時よりその時間数だけ進んでいることを示します。
- 20 ~ 21
00 ~ 59 の範囲の 2 桁の数字が戻され、通知された時刻のグリニッジ標準時からの進み、または遅れの分数を示します。進んでいるか遅れているかは、文字位置 17 が '+' であるか '-' であるかによって決まります。

詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

DISPLAY-OF

DISPLAY-OF 関数は、特定コード・ページ表現に変換される引数-1 のコンテンツで構成される英数字ストリングを戻します。関数のタイプは英数字です。

形式 1: ターゲット CCSID の指定

```

▶▶—FUNCTION DISPLAY-OF—(—引数-1—┌—引数-2—┐)—▶▶

```

引数-1

クラス国別でなければなりません。引数-1 は、変換のソース・ストリングを識別します。

IBM 拡張

引数-2

整数でなければなりません。引数-2 は、変換のターゲット・コード・ページを識別します。引数-2 は、EBCDIC、ASCII、UTF-8、または EUC コード・ページを識別する有効な CCSID 番号でなければなりません。EBCDIC または ASCII CCSID は、SBCS、DBCS、または混合 SBCS/DBCS であるコード・ページを識別できます。

IBM 拡張 の終り

引数-2 が省略された場合、ターゲット・コード・ページは、ソース・コードがコンパイルされたときの CCSID コンパイラー・オプション用に有効になるターゲット・コード・ページです。有効なターゲット・コード・ページが 65535 である場合、デフォルトの CCSID 37 が使用されます。

戻り値は、ターゲット・コード・ページ表現に変換される引数-1 の文字で構成される英数字ストリングです。ソース文字をターゲット・コード・ページの文字に変換できない場合、ソース文字は、1 バイト EBCDIC ターゲット・コード・ページに対してはシステム定義の置換文字 X'3F' で、DBCS コード・ページに対しては X'FEFE' で置換されます。例外条件は発生しません。

戻り値の長さは、引数-1 のコンテンツおよびターゲット・コード・ページの特徴によって異なります。

例外: 変換が失敗すると、重大なランタイム・エラーが発生します。国別データ (国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された UCS-2 CCSID を使用してコード化された) からターゲット CCSID への変換がオペレーティング・システムでサポートされていることを確認してください。

使用上の注意

1. ターゲット・コード・ページが混合 SBCS/DBCS EBCDIC コード・ページである場合、戻り値は、シフトアウトおよびシフトイン制御文字で区切られている DBCS サブストリングを含むことができます。

2. 整数引数-2 を指定した DISPLAY-OF 関数は、CCSID コンパイラー・オプションで指定されたものと異なるコード・ページで表示される文字データを生成するために使用されます。そのデータへの後続の COBOL 操作は、データが CCSID コンパイラー・オプションで指定される EBCDIC コード・ページで表示されることを想定する暗黙の変換を伴うことができるので、細心の注意が必要です。

形式 2: ユーザー置換文字の指定

▶—FUNCTION DISPLAY-OF—(—引数-1—引数-3—)————▶

引数-1

クラス国別でなければなりません。引数-1 は、変換のソース・ストリングを識別します。

引数-3

1 文字位置の長さを持つ、クラス英字、英数字または DBCS のリテラルまたはデータ項目でなければなりません。引数-3 は、対応する英数字または DBCS 文字を持たない国別文字の変換で使用される英数字または DBCS 置換文字を指定します。ユーザー置換文字は、EBCDIC および ASCII コード・ページでのみサポートされます。EUC などの別のコード・ページ用で使用される場合、コンパイル・エラー・メッセージ (重大度 30) が発行され、引数-3 は無視されます。

ユーザー置換文字は、有効なターゲット・コード・ページ CCSID と同じ CCSID を持ちます。有効なターゲット・コード・ページ CCSID が 2 バイトである場合、2 バイトの置換文字 (DBCS) のみを引数-3 として指定できます。有効なターゲット・コード・ページ CCSID が 1 バイトまたは混合バイトである場合は、1 バイトの置換文字 (英字または英数字) のみを引数-3 として指定できますが、混合バイト CCSID 用の 2 バイト置換文字をユーザー置換文字で置換することはできません。ターゲット CCSID タイプおよび引数-3 クラスの間の不整合がコンパイル時に検出された場合、コンパイル・エラー・メッセージ (重大度 30) が発行されます。不整合がランタイム時に検出された場合、重大なランタイム・メッセージが発行されます。プログラムを継続するために、ユーザーがメッセージに 'G' で応答すると、引数-3 は無視されます。

ターゲット・コード・ページは、ソース・コードのコンパイル時に CCSID コンパイラー・オプション用に有効になるターゲット・コード・ページです。有効な CCSID コンパイラー・オプションが 65535 である場合、デフォルトの CCSID 37 が使用されます。

戻り値は、ターゲット・コード・ページ表現に変換される引数-1 の文字で構成される英数字ストリングです。ソース文字をターゲット・コード・ページの文字に変換できない場合、ソース文字は、ユーザー置換文字引数-3 で置換されます。例外条件は発生しません。

戻り値の長さは、引数-1 のコンテンツおよびターゲット・コード・ページの特徴によって異なります。

例外: 変換が失敗すると、重大なランタイム・エラーが発生します。ソース ccsid (UCS-2) からターゲット CCSID への変換がオペレーティング・システムでサポートされていることを確認してください。

DISPLAY-OF および NATIONAL-OF 組み込み関数をネストして、任意の CCSID から任意の他の CCSID に簡単に変換することができます。

たとえば、以下のコードは、EBCDIC スtringを ASCII スtringに変換します。

```

77 EBCDIC-CCSID PIC 9(4) BINARY VALUE 1140.
77 ASCII-CCSID PIC 9(4) BINARY VALUE 819.
77 Input-EBCDIC PIC X(80).
77 ASCII-Output PIC X(80).
. . .
* Convert EBCDIC to ASCII
  Move Function
    Display-of
      (Function National-of
        (Input-EBCDIC EBCDIC-CCSID)
        ASCII-CCSID
      )
  to ASCII-output

```

EXTRACT-DATE-TIME

IBM 拡張

EXTRACT-DATE-TIME 関数は、日付、時刻、またはタイム・スタンプ項目の一部を戻します。

関数タイプは整数または英数字です。引数-2 がキーワード (MONTHS または DAYS など) である場合または数字指定子のみから成る場合は、整数が戻されます。その他の場合は、英数字データ項目が戻されます。

結果の長さは、日時項目から抽出される値によって決まります。

形式

►►—FUNCTION EXTRACT-DATE-TIME—(—引数-1—引数-2—)—————◄◄

引数-1

日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目でなければなりません。

引数-2

EXTRACT-DATE-TIME 関数によって戻される値を指定します。

引数-2 は、1 つまたは複数の分離文字と変換指定を含む期間または非数字リテラルを表すキーワードです。

この非数字リテラルの内容が数字変換指定子だけの場合は、EXTRACT-DATE-TIME 関数の戻り値は整数です。非数字リテラルの内容に分離文字または英数字変換指定子が含まれている場合は、戻り値は英数字となります。

引数-2 がキーワードの場合は整数が戻されます。

有効な期間およびそれらと等価の変換指定を以下に示します。

- YEARS ('@Y')
- MONTHS ('%m')

EXTRACT-DATE-TIME

- DAYS ('%d')
- HOURS ('%H')
- MINUTES ('%M')
- SECONDS ('%S')
- MICROSECONDS ('@Sm')

他の有効な変換指定のリストは SPECIAL-NAMES 段落の FORMAT 文節について説明している 91 ページの表 5 を参照してください。

使用する期間キーワードまたは変換指定子は、引数-1 と整合性がとれている必要があります。たとえば、期間キーワードは以下の規則に従わなければなりません。

1. YEARS、MONTHS、および DAYS は、日付項目またはタイム・スタンプ項目からのみ抽出することができる。
2. HOURS、MINUTES、SECONDS、および MICROSECONDS は、時刻項目またはタイム・スタンプ項目からのみ抽出することができる。
3. 引数-1 がロケールに基づくデータ項目であり、引数-2 がロケールに基づく変換指定子 (%p など) を含むときは、そのロケールに基づく変換指定子 (この場合は %p) は引数-1 のロケールを使用する。

引数-1 がロケールに基づくデータ項目ではないときは、ロケールに基づく変換指定子 (この場合は %p) はロケールに基づかない変換指定子として扱われ、% は @ に置き換えられます。この例では %p が @p になるということです。ここで、@p はロケールに基づかない場合の %p と等価です。

例

以下の例で EXTRACT-DATE-TIME 組み込み関数の使用法を示します。

```
COMPUTE integer-1 = FUNCTION EXTRACT-DATE-TIME (date-3 MONTHS).  
COMPUTE integer-1 = FUNCTION EXTRACT-DATE-TIME (date-3 '%m').  
MOVE FUNCTION EXTRACT-DATE-TIME (date-2 '%m/%d') to alphanum-1.
```

IBM 拡張 の終り

FIND-DURATION

IBM 拡張

FIND-DURATION 関数は、以下の 2 つの間の期間を計算するために使用します。

- 日付と日付
- 日付とタイム・スタンプ
- 時刻と時刻
- 時刻とタイム・スタンプ
- タイム・スタンプとタイム・スタンプ

FIND-DURATION 関数は、指定した期間を完全単位とする形式の整数を戻します。丸めはすべて下方向に行われます。期間計算ではマイクロ秒の計算も行われます。

関数タイプは整数です。

関数結果は 9 桁の整数です。この関数結果が 9 桁 (999,999,999) よりも大きい場合は、マシン・チェックが発生します。

形式

▶▶—FUNCTION FIND-DURATION—(—引数-1—引数-2—引数-3—)————▶▶

引数-1、引数-2

日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目でなければなりません。

引数-2 から引数-1 が減算されます。戻り値は、引数-3 で指定する期間を単位とする整数です。引数-1 が引数-2 よりも時間的に後の場合は、結果は負となります。引数-1 が引数-2 よりも時間的に前の場合は、結果は正となります。

引数-3

期間を表すキーワードです。有効な期間キーワードを以下に示します。

- YEARS
- MONTHS
- DAYS
- HOURS
- MINUTES
- SECONDS
- MICROSECONDS

有効な期間キーワードを判別するために、以下の規則が適用されます。

1. 引数-1 または引数-2 が日付項目の場合は、指定する期間は日付と整合性がとれていなければならない。
2. 引数-1 または引数-2 が時刻項目の場合は、指定する期間は時刻と整合性がとれていなければならない。
3. 戻り値が整数でない場合は切り捨てが行われる。たとえば 1997 年 3 月 17 日と 1997 年 5 月 2 日との間の期間は 1.5 か月です。FIND-DURATION は整数だけを戻すため、.5 は切り捨てられ、実際に戻される値は 1 となります。

例

以下の例で FIND-DURATION 組み込み関数の使用法を示します。

```
COMPUTE integer-1 = FUNCTION FIND-DURATION (date-3 date-4 MONTHS).
COMPUTE integer-1 = FUNCTION FIND-DURATION (timestamp-1 date-5 MONTHS).
```

IBM 拡張の終り

LENGTH

LENGTH 関数は、引数の長さのバイト数に等しい整数を戻します。関数タイプは整数です。

関数結果は 9 桁の整数です。

形式

▶—FUNCTION LENGTH—(引数-1)————▶

引数-1

非数字、ブール、または DBCS のリテラルであっても構いません。つまり、あらゆるクラスまたはあらゆるカテゴリーのデータ項目を指定できるということです。

引数-1 または引数-1 に従属する任意のデータ項目が、OCCURS 文節の DEPENDING 句で記述されている場合は、DEPENDING 句で指定されたデータ名によって参照されるデータ項目の内容が、LENGTH 関数の評価時に使用されます。

引数-1 は、タイプ名またはタイプ名に従属する項目であってもかまいません。

USAGE IS POINTER または USAGE IS PROCEDURE-POINTER で記述されたデータ項目は、LENGTH 関数の引数-1 として使用できます。結果は常に 16 になります。

ADDRESS OF 特殊レジスターまたは LENGTH OF 特殊レジスターは、LENGTH 関数に対する引数-1 として使用できます。結果は、ADDRESS OF オブジェクトまたは LENGTH OF オブジェクトとは無関係に、それぞれが常に 16 と 4 になります。

引数-1 が非数字リテラル、基本データ項目、または可変のオカレンス・データ項目を含まないグループ・データ項目である場合、戻り値は、引数-1 の長さの文字位置の個数に等しい整数です。

引数-1 がヌル終了の非数値リテラルである場合、戻り値は、リテラルの最後のヌル文字を除いたリテラル内の英数字位置の数の等しくなります。1 バイトおよび 2 バイト文字の混合を含むヌル終了の非数値リテラルの長さは、各バイトが 1 バイト文字であるかのようにカウントされます。

IBM 拡張

<p>引数-1 が DBCS または国別文字のデータ項目またはリテラルである場合には、戻り値は、引数の長さの DBCS 文字位置または国別文字位置の個数です。たとえば、FUNCTION LENGTH (G"D1D2") は、値 4 ではなく 2 を戻します。</p>

IBM 拡張 の 終り

戻り値には、暗黙の FILLER 文字が (もしあれば) 含まれます。

LOCALE-DATE

IBM 拡張

LOCALE-DATE 関数は、ロケールによって指定されている、各文化圏に適切な形式の日付を含む文字ストリングを戻します。

関数タイプは英数字です。

▶▶ FUNCTION—LOCALE-DATE—(—引数-1—
簡略名-1)

引数-1

引数-1 は、英数字または DBCS でなければならず、8 文字位置分の長さをもっていないければなりません。

引数-1 は、CURRENT-DATE 関数によって文字位置 1 ~ 8 に戻される年、月、日の形式と同じ形式の日付でなければなりません。CURRENT-DATE 関数の詳細は 606 ページの『CURRENT-DATE』を参照してください。

簡略名-1

簡略名-1 は SPECIAL-NAMES 段落内のロケールと関連付けられていなければなりません。

戻り値

LOCALE-DATE 組み込み関数の戻り値は次のとおりです。

1. 簡略名-1 が指定されている場合は、簡略名-1 と関連付けられているロケールが日付のフォーマット設定に使用される。その他の場合は現行ロケールが使用されます。簡略名-1 と関連付けられているロケールが利用できない場合は、オペレーティング・システムのエスケープ・メッセージが発行されます。
2. 戻り値は、引数-1 で指定した日付を含む文字ストリングであり、ロケールに指定されている日付形式で戻される。
3. 戻り値の長さはロケールに指定されている形式によって決まる。

IBM 拡張 の終り

LOCALE-TIME

IBM 拡張

LOCALE-TIME 関数は、ロケールによって指定されている、特定の文化圏固有の適切な形式の時刻を含む文字ストリングを戻します。

関数タイプは英数字です。

▶▶ FUNCTION—LOCALE-TIME—(—引数-1—
簡略名-1)

引数-1

引数-1 は、英数字または DBCS でなければならず、13 文字位置分の長さをもっていないければなりません。

引数-1 の内容は、CURRENT-DATE 関数によって文字位置 9 ～ 21 に戻される時、分、秒の形式と同じ形式でなければなりません。CURRENT-DATE 関数の詳細は 606 ページの『CURRENT-DATE』を参照してください。

簡略名-1

簡略名-1 は SPECIAL-NAMES 段落内のロケールと関連付けられていなければなりません。

戻り値

LOCALE-TIME 組み込み関数の戻り値は次のとおりです。

1. 簡略名-1 が指定されている場合は、時刻のフォーマット設定に使用されるロケールは、簡略名-1 と関連付けられているロケールになる。その他の場合は現行ロケールが使用されます。簡略名-1 と関連付けられているロケールが利用できない場合は、オペレーティング・システムのエスケープ・メッセージが発行されます。
2. 戻り値は、引数-1 によって指定されている時刻の時、分、秒を含む文字ストリングであり、ロケールに指示されている、特定の文化圏固有の適切な形式になっている。この値は、引数-1 の最後の 5 文字の桁に入れられている協定世界時 (グリニッジ標準時) からの相対時間と、ロケールの LC-TOD カテゴリに指定されている相対時間との差によって調整されます。
3. 戻り値の長さはロケールに指示されている形式によって決まる。

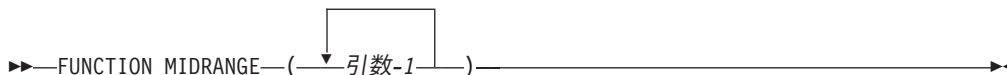
IBM 拡張 の終り

MIDRANGE

MIDRANGE 関数は、最小の引数と最大の引数の値の算術平均の近似値を戻します。

関数タイプは数字です。

形式



引数-1

数字クラスでなければなりません。

戻り値は、最大の引数-1 の値と最小の引数-1 の値の算術平均値です。最大値および最小値を判別するために使用される比較は、単純条件の規則に従って行われます。詳細は 267 ページの『条件式』を参照してください。

MIN

MIN 関数は、最小値を含む引数の内容を戻します。

関数タイプは、次のように引数のタイプに依存します。

引数タイプ	関数タイプ
英字	英数字
英数字	英数字
国別	国別
指標	指標
整数であるすべての引数	整数
数字 (整数の引数があってもよい)	数字

形式

▶▶ FUNCTION MIN ((引数-1)) ▶▶

引数-1

数字クラス、英数字クラス、英字クラス、または DBCS クラスであってもよく、ブール・クラスであってははいけません。

複数の引数-1 が指定されている場合には、英字の引数と英数字の引数の組み合わせが認められています。引数タイプの他の組み合わせは認められていません。たとえば DBCS 引数は、英数字の引数と混合することはできません。

戻り値は、最小値を持つ引数-1 の内容です。最小値を判別するために使用される比較は、単純条件の規則に従って行われます。詳細は 267 ページの『条件式』を参照してください。

複数の引数-1 が同じ最小値を持つ場合、その値を持つ左端の引数-1 が戻されます。

関数のタイプが英数字または DBCS である場合、戻り値のサイズは、選択された引数-1 のサイズと同じになります。

NATIONAL-OF

NATIONAL-OF 関数は、引数-1 内の UCS-2 表現の文字で構成される国別文字ストリングを戻します。関数のタイプは国別です。

形式 1: ソース CCSID の指定

▶▶ FUNCTION NATIONAL-OF ((引数-1 引数-2)) ▶▶

引数-1

クラス英字、英数字、または DBCS でなければなりません。引数-1 は、変換の

ソース・ストリングを識別します。

IBM 拡張

引数-2

整数でなければなりません。引数-2 は、変換のソース・コード・ページを識別します。引数-2 は、EBCDIC、ASCII、UTF-8、または EUC コード・ページを識別する有効な CCSID 番号でなければなりません。EBCDIC または ASCII CCSID は、SBCS、DBCS、または混合 SBCS/DBCS であるコード・ページを識別できます。

引数-2 が省略された場合、ソース・コード・ページは、ソース・コードのコンパイル時に CCSID コンパイラー・オプション用に有効になるソース・コード・ページです。ソース・コード・ページが 65535 である場合、デフォルトの CCSID 37 が使用されます。

IBM 拡張 の終り

戻り値は、国別文字表現 (国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された UCS-2 CCSID) に変換される引数-1 の文字で構成される国別文字ストリングです。詳しくは、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の「Conversions and Precision」を参照してください。

ソース文字を国別文字に変換できない場合、ソース文字は、システム定義の置換文字 X'FFFD' に変換されます。例外条件は発生しません。

戻り値の長さは、引数-1 のコンテンツおよびソース・コード・ページの特徴によって異なります。

例外: 変換が失敗すると、重大なランタイム・エラーが発生します。ソース CCSID からターゲット CCSID (国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された CCSID) への変換がオペレーティング・システムでサポートされていることを確認してください。

形式 2: ユーザー置換文字の指定

▶▶—FUNCTION NATIONAL-OF—(—引数-1—引数-3—)————▶▶

引数-1

クラス英字、英数字、または DBCS でなければなりません。引数-1 は、変換のソース・ストリングを識別します。

引数-3

長さが 1 文字位置の国別リテラルまたは国別データ項目でなければなりません。

引数-3 は、対応する国別文字を持たない英数字の変換で使用される国別置換文字を指定します。

ソース・コード・ページは、ソース・コードのコンパイル時に CCSID コンパイラ・オプション用に有効になるソース・コード・ページです。CCSID コンパイラ・オプションが 65535 である場合、デフォルトの CCSID 37 が使用されます。

戻り値は、国別文字表現 (国別 CCSID コンパイラ・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された CCSID) に変換される引数-1 の文字で構成される国別文字ストリングです。ソース文字を国別文字に変換できない場合、ソース文字は、ユーザー置換文字引数-3 に変換されます。例外条件は発生しません。

戻り値の長さは、引数-1 のコンテンツおよびソース・コード・ページの特徴によって異なります。

例外: 変換が失敗すると、重大なランタイム・エラーが発生します。ソース ccsid からターゲット CCSID (UCS-2) への変換がオペレーティング・システムでサポートされていることを確認してください。

ORD-MAX

ORD-MAX 関数は、最大値を含む引数の、引数リストにおける順序数の位置である値を戻します。

関数タイプは整数です。

形式

▶ FUNCTION ORD-MAX ((引数-1)) ▶

引数-1

数字クラス、英数字クラス、または英字クラスであってもよく、ブール・クラスであってははいけません。

複数の引数-1 が指定されている場合、すべての引数は同じクラスでなくてはなりません。英字の引数と英数字の引数との組み合わせだけは例外として認められています。

戻り値は、一連の引数-1 の中で最大値を持つ引数-1 の位置に相当する順序数です。

最大値を持つ引数-1 を判別するために使用される比較は、単純条件の規則に従って行われます。詳細は 267 ページの『条件式』を参照してください。

複数の引数-1 が同じ最大値を持つ場合、戻される数は、その値を持つ左端の引数-1 の位置に相当します。

ORD-MIN

ORD-MIN 関数は、最小値を含む引数の、順序数である値を戻します。

関数タイプは整数です。

形式



引数-1

数字クラス、英数字クラス、または英字クラスであってもよく、ブール・クラスであってははいけません。

複数の引数-1 が指定されている場合、すべての引数は同じクラスでなくてはなりません。英字の引数と英数字の引数との組み合わせだけは例外として認められています。

戻り値は、一連の引数-1 における最小値を持つ引数-1 の位置に相当する順序数です。

最小値を持つ引数-1 を判別するために使用される比較は、単純条件の規則に従って行われます。詳細は 267 ページの『条件式』を参照してください。

複数の引数-1 が同じ最小値を持つ場合、戻される数は、その値を持つ左端の引数-1 の位置に相当します。

PRESENT-VALUE

PRESENT-VALUE 関数は、引数-1 で指定した減価率に基づいて、引数-2 で指定した将来の各期末の総額に対する現在価値を近似値で戻します。

関数タイプは数字です。

形式



引数-1

数字クラスでなければなりません。-1 より大きな値でなければなりません。

引数-2

数字クラスでなければなりません。

戻り値と等しい算術式は、次のようになります。

1. 引数-2 のオカレンスが 1 の場合

$(\text{引数-2} / (1 + \text{引数-1}))$

2. 引数-2 のオカレンスが 2 の場合

$(\text{引数-2}_1 / (1 + \text{引数-1}) + \text{引数-2}_2 / (1 + \text{引数-1})^{**2})$

3. 引数-2 のオカレンスが n の場合

FUNCTION SUM $(\text{引数-2}_1 / (1 + \text{引数-1}) \dots \text{引数-2}_n / (1 + \text{引数-1})^{**n})$

引数-2 の各オカレンスに対して 1 つの項があります。指数 n は、一連の項のそれぞれに対して 1 ずつ増加します。

RANGE

RANGE 関数は、最大の引数の値から最小の引数の値を引いた値を戻します。

関数タイプは、次のように引数のタイプに依存します。

引数タイプ	関数タイプ
整数であるすべての引数	整数
数字 (整数の引数があってもよい)	数字

形式

▶▶—FUNCTION RANGE—(—引数-1—)

引数-1

数字クラスでなければなりません。

戻り値は、最大値を持つ引数-1 から最小値を持つ引数-1 を引いた値に等しくなります。最大値および最小値を判別するために使用される比較は、単純条件の規則に従って行われます。詳細は 267 ページの『条件式』を参照してください。

RANGE 関数と同等の算術式は、次のようになります。

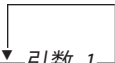
(FUNCTION MAX (argument-1) - FUNCTION MIN (argument-1))

STANDARD-DEVIATION

STANDARD-DEVIATION 関数は、その引数の標準偏差の近似値を戻します。

関数タイプは数字です。

形式

▶▶—FUNCTION STANDARD-DEVIATION—(—引数-1—)

引数-1

数字クラスでなければなりません。

戻り値は、一連の引数-1 の標準偏差の近似値です。戻り値は次のように計算されます。

1. 各引数-1 と一連の引数-1 の算術平均との差を求め、2 乗する。
2. 得られた値をすべて加算する。この値を一連の引数-1 の個数で除算する。
3. 得られた商の平方根を求める。戻り値は、この平方根の絶対値になります。

STANDARD-DEVIATION

一連の引数-1 がただ 1 つの値で構成されている場合、あるいは一連の引数-1 がすべて可変のオカレンス・データ項目で構成されていて、それらすべてのデータ項目に関してオカレンスの合計数が 1 である場合、戻り値はゼロになります。

FUNCTION STANDARD-DEVIATION と同等の算術式は、次のようになります。

FUNCTION SQRT (FUNCTION VARIANCE (argument-1))

SUBTRACT-DURATION

IBM 拡張

SUBTRACT-DURATION 関数は、日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目に期間を加算し、その変更した項目を戻します。

関数タイプは日時です。

戻り値の長さは、引数-1 に指定する日付項目、時刻項目、またはタイム・スタンプ項目の長さによって決まります。

日付項目から期間を減算する場合は、戻される日付は以下に示す特定の範囲内の値でなければなりません。

- 4 桁の日付の場合は 0001/01/01 から 9999/12/31 までの範囲内であればならない。
- 2 桁の日付の場合は 0001/01/01 から 9999/12/31 までの範囲内であればならない。ただし、年の部分は 2 桁に切り捨てられます。
- 3 桁の年 (1 桁の世紀と 2 桁の年) の場合は 1900/01/01 から 2899/12/31 (デフォルト) までの範囲内であればならない。この範囲は DATTIM PROCESS ステートメント・オプションを指定することによって変更できます。

2 桁の日付項目から期間を減算する場合は戻り値の範囲は 4 桁の年の場合と同じです。ただし、戻り値の年の部分は 2 桁に切り捨てられます。

形式

FUNCTION SUBTRACT-DURATION (引数-1 引数-2 引数-3)

引数-1

日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目でなければなりません。

引数-1 は、期間を減算される値です。期間は引数-2 と引数-3 に指定します。

引数-2

引数-2 は期間を表すキーワードです。有効な期間を以下に示します。

- YEARS
- MONTHS
- DAYS
- HOURS
- MINUTES
- SECONDS

- MICROSECONDS

使用する期間キーワードまたは変換指定子は、引数-1 と整合性がとれている必要があります。たとえば、期間キーワードは以下の規則に従わなければなりません。

1. YEARS、MONTHS、および DAYS は、日付項目またはタイム・スタンプ項目からのみ減算することができる。
2. HOURS、MINUTES、SECONDS、および MICROSECONDS は、時刻項目またはタイム・スタンプ項目からのみ減算することができる。

引数-3

整数算術式でなければなりません。引数-3 は、引数-2 で指定した期間の単位数であり、引数-1 から減算されます。

引数-2 および引数-3 は反復可能です。ただし、1 つの組み込み関数の中に重複する引数-2 があってはなりません。

引数-3 は負の整数でも構いませんが、この関数を取るのはその絶対値だけです。引数-3 が 9 桁よりも長い場合は切り捨てが行われます。

日付から期間を減算した結果が無効となった場合は、その日付に対する調整が行われます。たとえば、1997 年 5 月 31 日という日付から期間 1 月を減算すると、その結果は 1997 年 4 月 31 日という無効な日付となります。このような場合、この日付は 1997 年 4 月 30 日という有効な日付に調整されます。

例

以下の例で SUBTRACT-DURATION 組み込み関数の使用法を示します。

```
MOVE FUNCTION SUBTRACT-DURATION (date-1 MONTHS 1)
  TO date-2.
MOVE FUNCTION SUBTRACT-DURATION (date-2 MONTHS 1 + 2 * 3)
  TO date-1.
MOVE FUNCTION SUBTRACT-DURATION (date-3 MONTHS 5 DAYS 1000)
  TO date-1.
```

IBM 拡張 の 終 り

SUM

SUM 関数は、引数の合計値を戻します。

関数タイプは、次のように引数のタイプに依存します。

引数タイプ	関数タイプ
整数であるすべての引数	整数
数字 (整数の引数があってもよい)	数字

形式

FUNCTION SUM (引数-1)

引数-1

数字クラスでなければなりません。

戻り値は、引数の和になります。一連の引数-1 がすべて整数である場合、戻り値は整数になります。一連の引数-1 がすべて整数でない場合、ある数字が戻されます。

同等の算術式は、次のようになります。

1. 引数-1 のオカレンスが 1 の場合

(引数-1)

2. 引数-1 のオカレンスが 2 の場合

(引数-1₁ + 引数-1₂)

3. 引数-1 のオカレンスが n の場合

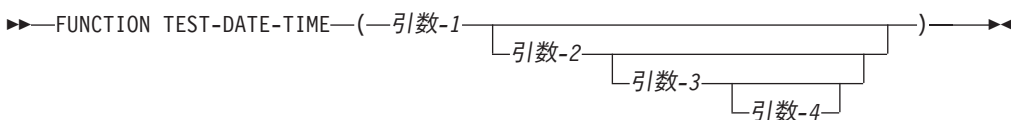
(引数-1₁ + 引数-1₂ + ... + 引数-1_n)

TEST-DATE-TIME**IBM 拡張**

TEST-DATE-TIME 関数は、日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目、英数字項目、数字バックまたは数字ゾーンの項目をとり、その日付、時刻、またはタイム・スタンプが有効であるかどうかを判別します。有効な項目の場合は真 (B'1') を、無効な項目の場合は偽 (B'0') を戻します。

関数タイプはブールです。

戻り値の長さは 1 バイトです。

形式**引数-1**

リテラル-3 は、下記のものになります。

- 日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目
- 英数字クラスの項目
- 非数字リテラル
- 整数値クラスの項目

引数-1 が日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目である場合は、引数-2 から引数-4 はオプションです。引数-1 が日付、時刻、またはタイム・スタンプの項目ではない場合は、引数-2 を指定する必要があります (引数-3 および引数-4 はオプションです)。

引数-1 は、それが有効な項目であるかどうかを調べるために、そのタイプまたは引数-2 から引数-4 に基づいてテストされます。

引数-2

以下のキーワードのいずれか 1 つでなければなりません。

- DATE
- TIME
- TIMESTAMP

引数-2 が TIMESTAMP である場合は、引数-3 および引数-4 は両方とも指定できません。

引数-3

日付項目または時刻項目の形式を指定します。以下のものでなければなりません。

- 長さが最小でも 2 文字の非数字リテラル
- キーワード LOCALE
- FORMAT OF 特殊レジスター

有効なりテラルのリストが必要な場合は SPECIAL-NAMES FORMAT 文節を参照してください。

引数-3 がキーワード LOCALE である場合は、日付または時刻の形式は LOCALE に基づきます。引数-4 を指定しないと、現行ロケールが使用されます。その他の場合は、簡略名または LOCALE OF 特殊レジスターと関連付けられているロケールが使用されます。

引数-3 を指定しない場合は、テストには SPECIAL-NAMES FORMAT 文節内で定義した形式が使用されます。

引数-4

LOCALE と関連付けられている簡略名または LOCALE OF 特殊レジスターでなければなりません。

引数-4 が従わなければならない規則を以下に示します。

- 引数-4 が指定されており、かつ引数-3 がロケールに基づく形式リテラルである (たとえば %p を含んでいる) 場合は、そのロケールに基づく形式リテラルは引数-4 で指定されているロケールを使用して変換指定子の実際の値を判別する。
- 引数-3 がロケールに基づく形式リテラルであり (たとえば %p を含んでいる)、かつ引数-4 が指定されていない場合は、そのロケールに基づく形式リテラルは現行ロケールを使用して変換指定子の実際の値を判別する。
- 引数-3 がロケールに基づく形式リテラルであり (たとえば %p を含んでいる)、かつ LOCALE OF 特殊レジスターが非ロケール項目を参照するために使用されている場合は、そのロケールに基づく形式リテラルはデフォルトのロケールを使用して変換指定子の実際の値を判別する。

例

以下の例で TEST-DATE-TIME 組み込み関数の使用法を示します。

```
IF FUNCTION TEST-DATE-TIME (date-3 DATE) = B'1'
  MOVE FUNCTION TEST-DATE-TIME (date-3 DATE '%y/%m') TO boolean-1.
IF FUNCTION TEST-DATE-TIME (time-1 TIME) = B'0'
  MOVE FUNCTION TEST-DATE-TIME (time-2 TIME '%H:%M') TO boolean-2.
```

IBM 拡張

TRIM 関数は、与えられたストリングを前後の空白を除去して、または、与えられたストリングを前後の指定した文字を除去して戻します。

関数のタイプはその引数のクラスに応じて英数字、DBCS または国別です。

形式:

▶▶ FUNCTION TRIM ((引数-1) [引数-2]) ▶▶

引数-1

非数値リテラル、またはクラス英字、英数字、DBCS または国別のデータ項目でなければなりません。引数-1 は、トリムのソース・ストリングを識別します。

引数-2

指定された場合、非数値リテラル、または引数-1 と同じクラスのデータ項目でなければなりません。切り取る文字を指定します。指定しない場合、トリム文字が空白にデフォルト設定されます。

引数-2 が指定されない場合、戻り値は、すべての前後空白を除去した引数-1 の文字で構成される英数字、DBCS または国別文字ストリングです。空白文字は、引数-1 がクラス英数字である場合、1 バイト・スペース文字 (' ' または X'40')、引数-1 がクラス DBCS である場合、2 バイト・スペース (X'4040')、または引数-1 がクラス国別の場合、国別スペース (X'0020' または X'3000') です。

引数-2 が指定された場合、引数-2 のすべての文字はストリングの両側から切り取られます。戻り値は、引数-2 で指定したすべての前後文字を除去した引数-1 の文字で構成される英数字、DBCS または国別文字ストリングです。

戻されるストリングの長さは、コンテンツおよび引数-1 のクラスによって異なります。文字位置の数で戻されるストリングの長さになります。引数-1 が DBCS または国別データ項目である場合には、長さは、DBCS 文字位置または国別文字位置の数です。

戻り値

引数-2 パラメーターの文字の順序は、操作の結果に影響しません。その文字列は、1 つずつの文字のリストとみなされます。たとえば、FUNCTION TRIML(fld, "abc") は、'a'、'b'、または 'c' でない任意の文字で始まる fld のサブストリングを戻します。fld が "caxyz" を含んでいる場合、FUNCTION TRIM(fld, "abc") は、"xyz" を戻します。文字は、2 番目のパラメーターで 2 回、エラーなしで表示することができます。たとえば、FUNCTION TRIM(fld, "aba") は、有効です。これは、FUNCTION TRIM(fld, "ab") と同じ意味です。

FUNCTION TRIM、TRIML または TRIMR の 2 番目のパラメーターが指定された場合、空白が引数-2 の一部として使用されない限り、空白は切り取られま

せん。TRIM、TRIML および TRIMR 関数は、混合 SBCS/DBCS ストリングであることを識別せず、引数-1 および 引数-2 は両方とも、そのクラスが英数字である場合に SBCS として扱われます。

例:

```
FUNCTION TRIM("xxxABxCxxx", "x") // returns 'ABxC'
FUNCTION TRIMR(">>>>ABC<<<<<", "<>") // returns '>>>>ABC'
MOVE "xyz" TO tc.
FUNCTION TRIML("xxyzyzyzzABCxyzyxzxy", tc) // returns 'ABCxyzyxzxy'
```

IBM 拡張 の終り

TRIML

IBM 拡張

TRIML 関数は、与えられたストリングを先行ブランクを除去して、または、与えられたストリングを先行の指定した文字を除去して戻します。

関数のタイプはその引数のクラスに応じて英数字、DBCS または国別です。

形式:

```
▶▶—FUNCTION TRIML—(—引数-1—└┬┘—引数-2—)————▶▶
```

引数-1

非数値リテラル、またはクラス英字、英数字、DBCS または国別のデータ項目でなければなりません。引数-1 は、トリムのソース・ストリングを識別します。

引数-2

指定された場合、非数値リテラル、または引数-1 と同じクラスのデータ項目でなければなりません。切り取る文字を指定します。指定しない場合、トリム文字がブランクにデフォルト設定されます。

引数-2 が指定されない場合、戻り値は、すべての先行ブランクを除去した引数-1 の文字で構成される英数字、DBCS または国別文字ストリングです。ブランク文字は、引数-1 がクラス英数字である場合、1 バイト・スペース文字 (' ' または X'40')、引数-1 がクラス DBCS である場合、2 バイト・スペース (X'4040')、または引数-1 がクラス国別の場合、国別スペース (X'0020' または X'3000') です。

引数-2 が指定された場合、戻り値は、引数-2 で指定したすべての先行文字を除去した引数-1 の文字で構成される英数字、DBCS または国別文字ストリングです。

戻されるストリングの長さは、コンテンツおよび引数-1 のクラスによって異なります。文字位置の数で戻されるストリングの長さになります。引数-1 が DBCS または国別データ項目である場合には、長さは、DBCS 文字位置または国別文字位置の数です。

戻り値および例について詳しくは、624 ページの『TRIM』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

TRIMR

IBM 拡張

TRIMR 関数は、与えられたストリングを末尾ブランクを除去して、または、与えられたストリングを末尾の指定した文字を除去して戻します。

関数のタイプはその引数のクラスに応じて英数字、DBCS または国別です。

形式:

►►FUNCTION TRIMR(—引数-1—引数-2)

引数-1

非数値リテラル、またはクラス英字、英数字、DBCS または国別のデータ項目でなければなりません。引数-1 は、トリムのソース・ストリングを識別します。

引数-2

指定された場合、非数値リテラル、または引数-1 と同じクラスのデータ項目でなければなりません。切り取る文字を指定します。指定しない場合、トリム文字がブランクにデフォルト設定されます。

引数-2 が指定されない場合、戻り値は、すべての末尾のブランクを除去した引数-1 の文字で構成される英数字、DBCS または国別文字ストリングです。ブランク文字は、引数-1 がクラス英数字である場合、1 バイト・スペース文字 (' ' または X'40')、引数-1 がクラス DBCS である場合、2 バイト・スペース (X'4040')、または引数-1 がクラス国別の場合、国別スペース (X'0020' または X'3000') です。

引数-2 が指定された場合、戻り値は、引数-2 で指定したすべての末尾の文字を除去した引数-1 の文字で構成される英数字、DBCS または国別文字ストリングです。

戻されるストリングの長さは、コンテンツおよび引数-1 のクラスによって異なります。文字位置の数で戻されるストリングの長さになります。引数-1 が DBCS または国別データ項目である場合には、長さは、DBCS 文字位置または国別文字位置の数です。

戻り値および例について詳しくは、624 ページの『TRIM』を参照してください。

IBM 拡張 の終り

UTF8STRING

IBM 拡張

UTF8STRING 関数は、指定された引数を対応する UTF-8 スtringに変換します。戻されるStringは可変長です。この関数によって戻される受け取り引数について、十分な長さを見込んでおくようにしてください。戻り値の最大長は、元の引数の 2 倍の長さです。

関数タイプは英数字です。

形式

▶▶FUNCTION UTF8STRING—(引数-1)▶▶

引数-1

英字、英数字、DBCS、または国別文字であり、長さは 1 文字以上でなければなりません。

IBM 拡張 の終り

VARIANCE

VARIANCE 関数は、その引数の平方偏差の近似値を戻します。

関数タイプは数字です。

形式

▶▶FUNCTION VARIANCE—(引数-1)▶▶

引数-1

数字クラスでなければなりません。

戻り値は、一連の引数-1 の平方偏差の近似値になります。

戻り値は、一連の引数-1 の標準偏差の 2 乗として定義されます。この値は、次のように計算されます。

1. 各引数-1 と一連の引数-1 の算術平均との差を求め、2 乗する。
2. 得られた値をすべて加算する。この値を一連の引数-1 の個数で除算する。

一連の引数-1 がただ 1 つの値で構成されている場合、あるいは一連の引数-1 がすべて可変のオカレンス・データ項目で構成されていて、それらすべてのデータ項目に関してオカレンスの合計数が 1 である場合、戻り値はゼロになります。

FUNCTION VARIANCE と同等の算術式は、次のようになります。

1. 引数-1 のオカレンスが 1 の場合

VARIANCE

(0)

2. 引数-1 のオカレンスが 2 の場合

$$(((\text{引数-1}_1 - \text{FUNCTION MEAN (引数-1)}) ** 2 + (\text{引数-1}_2 - \text{FUNCTION MEAN (引数-1)}) ** 2) / 2)$$

3. 引数-1 のオカレンスが n の場合

$$(\text{FUNCTION SUM } (((\text{引数-1}_1 - \text{FUNCTION MEAN (引数-1)}) ** 2) \dots ((\text{引数-1}_n - \text{FUNCTION MEAN (引数-1)}) ** 2)) / n)$$

WHEN-COMPILED

WHEN-COMPILED 関数は、プログラムのコンパイルされた日付と時刻を、そのプログラムをコンパイルしたシステムから提供されて戻します。

関数タイプは英数字です。

形式

▶—FUNCTION WHEN-COMPILED—▶

左から右へ読んだ場合、戻り値の 21 の文字位置は次のように解釈します。

文字位置	内容
1 ~ 4	西暦の年を表す 4 桁の数字
5 ~ 6	01 ~ 12 の範囲の月を表す 2 桁の数字
7 ~ 8	01 ~ 31 の範囲の日を表す 2 桁の数字
9 ~ 10	00 ~ 23 の範囲の時を表す 2 桁の数字
11 ~ 12	00 ~ 59 の範囲の分を表す 2 桁の数字
13 ~ 14	00 ~ 59 の範囲の秒を表す 2 桁の数字
15 ~ 16	00 ~ 99 の範囲の 1/100 秒を表す 2 桁の数字
17	文字 '-' または文字 '+'. 前の文字位置で示されているローカル時刻がグリニッジ標準時より遅れている場合、文字 '-' が戻されます。示されているローカル時刻がグリニッジ標準時と同じかそれより進んでいる場合、文字 '+' が戻されます。
18 ~ 19	文字位置 17 が '-' である場合には、00 ~ 12 の範囲の 2 桁の数字が戻され、通知された時刻がグリニッジ標準時よりその時間数だけ遅れていることを示します。文字位置 17 が '+' である場合には、00 ~ 13 の範囲の 2 桁の数字が戻され、通知された時刻がグリニッジ標準時よりその時間数だけ進んでいることを示します。
20 ~ 21	00 ~ 59 の範囲の 2 桁の数字が戻され、通知された時刻のグリニッジ標準時からの進み、または遅れの分数を示します。進んでいるか遅れているかは、文字位置 17 が '+' であるか '-' であるかによって決まります。

戻り値は、この関数を含むソース・プログラムがコンパイルされた日付と時刻です。ILE COBOL の場合、日付と時刻はコンパイルの開始時に計算され、各リス

ト・ページのヘッダ行、DATE-COMPILED 段落、および WHEN-COMPILED 特殊レジスターに入れられます。そのプログラムが、含まれるプログラムである場合、戻り値は、そのプログラムを含む、別にコンパイルされたプログラムのコンパイル日時になります。

第 7 部 コンパイラー指示ステートメント

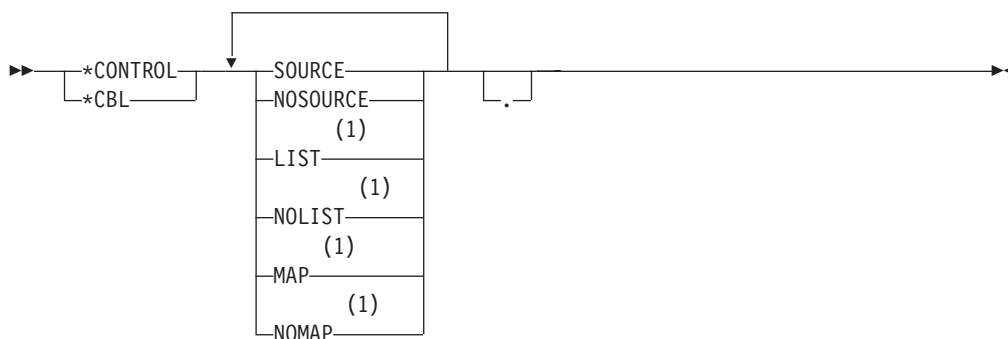
第 16 章 コンパイラー指示ステートメント

*CONTROL (*CBL) ステートメント

IBM 拡張

*CONTROL (または *CBL) ステートメントにより、ソース・プログラム全体のソース・コードのリストを選択的に表示または抑止できます。

*CONTROL (*CBL) ステートメント - 形式



注:

- 1 構文検査だけ行われます。

コンパイラー出力の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

*CONTROL ステートメントと *CBL ステートメントは同義です。

文字 *CONTROL または *CBL は、8 桁目以降の任意の桁から始めることができ、その後少なくとも 1 つのスペースまたはコンマと 1 つまたは複数のオプション・キーワードを続けます。オプション・キーワードは、1 つまたは複数のスペースまたはコンマで分離してください。このステートメントを指定する行には、それ以外のステートメントを指定することができず、また、継続行は許されません。ステートメントはピリオドで終わらせることができます。

要求するオプションは、次のように処理されます。

1. *CONTROL ステートメントに SOURCE または NOSOURCE が複数指定されると、最後のオプションが使用されます。
2. コンパイラー・オプションとして SOURCE ステートメントが要求されている場合に *CONTROL NOSOURCE ステートメントが検出されると、この時点からソース・リストの出力が抑止されます。ソースの出力が抑止されていることを告げる通知メッセージが出されます。

*CONTROL (*CBL) ステートメント

その後、*CONTROL SOURCE を指定してソース・リストの出力を再開できません。

コンパイラー・オプションの詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

3. コンパイラー・オプションとして *NOSOURCE が要求されている場合には、出力は常に禁止されます。
4. *CONTROL ステートメントは、それが書かれているソース・プログラムに対してだけ有効です。一連のソース・プログラムのバッチ・コンパイル全体にわたって有効ではありません。

*CONTROL (*CBL) ステートメントと COPY ステートメント

SUPPRESS 句を含む COPY ステートメントは、コピーされるメンバーに含まれている *CONTROL または *CBL オプションを無効にします。しかし、コンパイラーは、抑止された COPY メンバー内の *CONTROL および *CBL ステートメントを保管しています。COPY メンバーの処理が終了すると、その中の最後の NOSOURCE または SOURCE オプションが実行されます。

COPY ステートメントに SUPPRESS 句が含まれていない場合は、コピーされたメンバー内の *CONTROL および *CBL ステートメントは直ちに実行されます。

IBM 拡張 の終り

COPY ステートメント

COPY ステートメントは、事前に作成されたテキストを COBOL プログラムの中に組み入れるライブラリー・ステートメントです。

事前に作成されたソース・プログラム項目をコンパイル時にソース・プログラムに組み込むことができます。したがって、インストール・システムでは、標準のファイル記述、レコード記述、またはプロシーチャーを、再コーディングせずに使用できます。これらの項目およびプロシーチャーは、ユーザー作成のライブラリーに保管できます。その後、COPY ステートメントによってソース・プログラムに組み込むことができます。

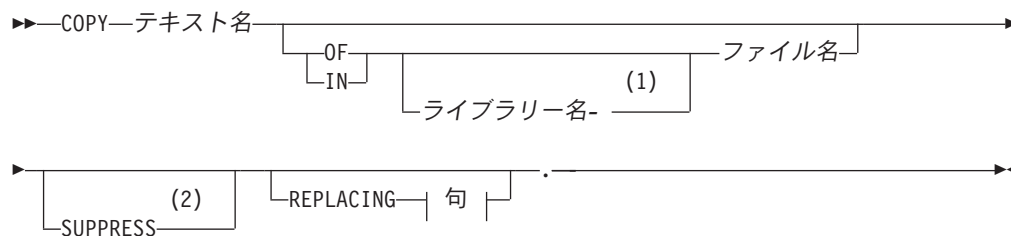
COPY ステートメントを含むソース・プログラムのコンパイルは、結果として得られるソース・プログラムを処理する前にすべての COPY ステートメントを処理することと論理的に同じです。

COPY ステートメントを処理すると、テキスト名に関連付けられているライブラリー・テキストがソース・プログラムの中にコピーされて、COPY ステートメント全体 (語 COPY で始まりピリオドで終わる) が論理的に置き換えられます。

REPLACING 句が指定されていない場合には、ライブラリー・テキストは未変更のままコピーされます。

COPY ステートメント - 形式 1 - 基本

COPY ステートメント - 形式 1



注:

- 1 ファイル名を修飾する場合は、ライブラリー名とファイル名の間にハイフンが必要です。
- 2 IBM 拡張

テキスト名

テキスト名は、コピーされるメンバーの名前です。テキスト名は英字で始まらなければなりません。テキスト名の最初の 10 文字は、メンバー名として使用されます。したがって、これらの最初の 10 文字は 1 つのファイル内で固有でなければなりません。

テキスト名は、それが存在するライブラリー名およびファイル名によって修飾できます。ファイル名を指定しないと、ファイル名として QCBLESRC が想定されます。コピー・メンバーがデフォルト・ファイル QCBLESRC の中で見つからないと、次に QLBSRC が検索されます。ファイル名がライブラリー名によって修飾されていない場合には、ファイル名はライブラリー・リスト内のファイルに存在するものと見なされます。ライブラリー名とファイル名の間には、スペースなしでハイフンを入れることが必要です。たとえば、ライブラリー MYLIB 内のファイル MYFILE を修飾するには、MYLIB-MYFILE とコーディングします。

ライブラリー名、ファイル名、およびテキスト名は、プログラム名の形成に関する規則に従わなければなりません。

ライブラリー名

ライブラリー名の最初の 10 文字は、識別名として使用されます。したがって、これらの最初の 10 文字はシステム内で固有でなければなりません。ファイル名を修飾するには、ライブラリー名とファイル名の間スペースなしでハイフンを入れることが必要です。

各 COPY ステートメントは、前にスペースがなければならず、分離文字ピリオドで終わらなければなりません。

COPY ステートメントは、文字ストリングまたは分離文字を指定できる場所であれば、ソース・プログラム内のどこにでも指定できます。ただし、COPY ステートメントを COPY ステートメントの中に指定してはなりません。コピーされた結果のテ

COPY ステートメント

キストの中に COPY ステートメントが含まれてはなりません。

IBM 拡張

COPY ステートメントはネストすることができます。ただし、ネストされた COPY ステートメントには REPLACING 句を含めることができず、REPLACING 句を指定する COPY ステートメントにはネストされた COPY ステートメントを含めることができません。

COPY ステートメントは、再帰を起こすことができません。つまり、COPY メンバーは、その COPY メンバーについてのファイルの終わりに達するまで、一連のネストされた COPY ステートメントの中で一度しか指定できません。

IBM 拡張 の終り

ライブラリー・テキストおよび疑似テキストの中にデバッグ行があってもかまいません。デバッグ行内のテキスト語には、標識域に D が指定されなかった場合と同様にマッチング規則が適用されます。デバッグ行が疑似テキストの中に指定されるのは、そのデバッグ行がソース・プログラムの中で、始まりの疑似テキスト分離文字の後で、かつ対応する終わりの疑似テキスト分離文字の前から始まっている場合です。

COPY ステートメントがデバッグ行に指定された場合には、コピーされるテキストは、テキスト内のコメント行が結果のソース・プログラムの中でコメント行となること以外は、それがデバッグ行に指定された場合と同様に取り扱われます。

COPY という語をコメント記入項目の中、またはコメント記入項目を指定できる場所に指定すると、それはコメント記入項目の一部と見なされます。

SOURCE-COMPUTER 段落に WITH DEBUGGING MODE 文節が指定されていない場合には、すべての COPY および REPLACE ステートメントが処理された後、デバッグ行はコメント行のすべての特性を持つものと見なされます。

コメント行またはブランク行がライブラリー・テキストの中にあってもかまいません。ライブラリー・テキスト内のコメント行またはブランク行は、未変更のまま結果のソース・プログラムにコピーされますが、次の例外があります。ライブラリー・テキスト内のコメント行またはブランク行は、疑似テキスト -1 と一致する一連のテキスト語の中にある場合にはコピーされません (639 ページの『置き換えおよび比較の規則』を参照してください)。

COBOL ソース・プログラム全体が構文的に正しいかどうかは、すべての COPY ステートメントが完全に処理されるまでは判断できません。これは、ライブラリー・テキストの構文の正しさが単独では判断できないためです。

ライブラリーからコピーされるライブラリー・テキストは、結果のプログラムにおいて、ライブラリーの中にあったときと同じ区域に置かれます。ライブラリー・テキストは、標準 COBOL 形式の規則に従っていなければなりません。

SUPPRESS 句

IBM 拡張

SUPPRESS 句を指定すると、COPY ステートメントは、コピーされたステートメントのリストを抑止します。SUPPRESS 句が継続している間は、このタイプの COPY ステートメントは *CONTROL ステートメントまたは *CBL ステートメントを無効にします。

コピーされたメンバーに *CONTROL ステートメントまたは *CBL ステートメントが含まれている場合、COPY メンバーの処理が終了すると、最後のステートメントが実行されます。

ネストされた COPY ステートメントの場合、SUPPRESS が有効なのは、次の COPY が検出されるまでの間だけです。抑止は、ネストされた COPY の完了後に再開されます。

IBM 拡張 の終り

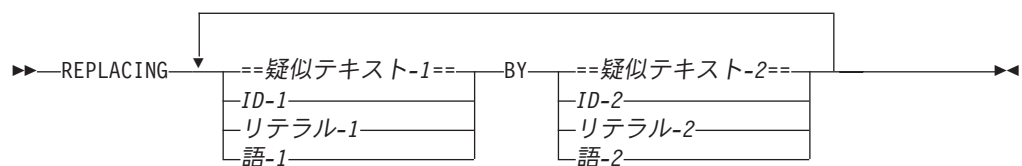
REPLACING 句

以下の説明では、各オペランドは、次のいずれかで構成できます。

- 疑似テキスト
- ID
- リテラル
- COBOL 語 (COPY を除く)
- 関数 ID

REPLACING 句を指定する場合には、ライブラリー・テキストがコピーされ、さらに、ライブラリー・テキスト内のオペランド -1 の正しく一致するものそれぞれが、対応するオペランド -2 によって置き換えられます。

REPLACING 句 - 形式



疑似テキスト -1、疑似テキスト -2

疑似テキストは、疑似テキスト分離文字 (==) によって結合された (ただし分離文字は含まない) 一連のテキスト語、コメント行、または区切りスペースです。

疑似テキスト -1 は、分離文字コンマまたは分離文字セミコロン以外の、最低 1 個のテキスト語を含んでいなければなりません。最初と最後のスペースは、テキスト比較処理には含まれません、複数の組み込みスペースはシングル・スペースであると見なされます。

COPY ステートメント

疑似テキスト -2 は、テキスト語を含んでいる必要はなく、また、スペース文字またはコメント行 (あるいはその両方) だけから構成できます。たとえば、ライブラリー・メンバー TEXTA が次の記入項目から構成される場合、

```
01 AA-DATA.  
 10 AA-ID      PIC X(9).  
 10 AA-TYPE    PIC X(1).
```

プログラマーは、次のように COPY ステートメントを使用して疑似テキストを置き換えることができます。

```
COPY TEXTA REPLACING ==01 AA-DATA== BY ==05 EE-DATA==.  
                    ==AA-ID==      BY ==EE-ID==.  
                    ==AA-TYPE==    BY ==EE-TYPE==.
```

結果のテキストは、次のように書かれている場合と同様に扱われます。

```
05 EE-DATA.  
 10 EE-ID      PIC X(9).  
 10 EE-TYPE    PIC X(1).
```

疑似テキスト -1 には、少なくともテキスト語が含まれる必要があります。定義により、テキスト語は分離文字によって結合されるため、疑似テキストを使用して置換する語の一部を選択することはできません (たとえば、データ名の中の接頭部)。一致するものを検出するために、完全なテキスト語を使用する必要があります。ただし、マッチングの目的のためだけに使用されており、ソース・プログラムにはコピーされない分離文字を使用して、ライブラリー・テキスト内にあるテキスト語を複数のテキスト語に分割することによって、そのテキスト語の部分的な置き換えをシミュレートすることはできます。この方式の例については 640 ページの『コーディング例』を参照してください。

IBM 拡張

疑似テキスト -1 または疑似テキスト -2 に、DBCS 文字ストリングまたは国別文字ストリングを含めることができます。ただしこの場合、疑似テキストは 2 行にわたってはなりません。

IBM 拡張 の終り

ID-1、ID-2

データ部のどのセクションでも定義できます。

関数 ID にすることができます。

リテラル -1、リテラル -2

数字または非数字にすることができます。

IBM 拡張

浮動小数点リテラル、DBCS リテラル、または国別 16 進リテラルにすることもできます。

IBM 拡張 の終り

語 -1、語 -2

任意の単一の COBOL 語 (COPY を除く) にすることができます。

マッチングのために、各 ID-1、リテラル -1、または語 -1 は、それぞれ ID-1、リテラル -1、または語 -1 だけを含む疑似テキストとして取り扱われます。

置き換えおよび比較の規則

1. ID の一部ではない算術および論理演算子は、テキスト語と見なされ、疑似テキスト・オプションを介してだけ置き換えることができます。
2. 表意定数がオペランド -1 である場合、それが一致するのは、それが指定されたとおりの正確な形で存在する場合だけです。たとえば、ライブラリー・テキスト内に ALL "AB" が指定されている場合には、"ABAB" は一致と見なされず、ALL "AB" だけが一致と見なされます。
3. 疑似テキスト -2 の位置付けの規則によって、置き換えで異なる区域への挿入が行われる場合を除き、オペランド -2 はオペランド -1 の位置にコピーされません。
4. ライブラリー・テキストの左端の語よりも前にある分離文字コンマ、セミコロン、またはスペース (あるいはこれらの組み合わせ) は、ソース・プログラムの中にコピーされます。左端のライブラリー・テキスト語と、REPLACING オプションで指定された最初のオペランド -1 から開始して、キーワード BY よりも前にある REPLACING オペランド全体が、等しい数の連続したライブラリー・テキスト語と比較されます。
5. オペランド -1 がライブラリー・テキストと一致するのは、オペランド -1 の中の一連のテキスト語が、文字単位で一連のライブラリー・テキスト語と等しい場合に限られます。マッチングのため、コンマまたはセミコロンの分離文字と、1 つ以上のスペース分離文字は、1 つのスペースと見なされます。
6. 一致が検出されない場合には、一致が検出されるかまたは REPLACING 句のオペランドがなくなるまで、連続するそれぞれのオペランド -1 について比較が繰り返されます。
7. オペランド -1 とライブラリー・テキストの間で一致が検出されると、対応するオペランド -2 がソース・プログラムにコピーされます。
8. すべてのオペランドが比較され、一致が検出されない場合、ライブラリー・テキストの左端の語がソース・プログラムにコピーされます。
9. その後、次に続くコピーされていないライブラリー・テキスト語が左端のテキスト語と見なされ、最初のオペランド -1 から比較処理が繰り返されます。この処理は、ライブラリー・テキストの右端の語が比較されるまで続けられます。
10. ライブラリー・テキストおよび疑似テキスト -1 の中のコメント行またはブランク行は、マッチングの目的で無視されます。ライブラリー・テキストおよび疑似テキスト -1 の中の一連の語は、参照形式に関する規則に従って判別されます。疑似テキスト -2 の中のコメント行またはブランク行は、疑似テキスト -2 がテキストの置き換えの結果としてソース・プログラムに入れられるときには常に、未変更のまま結果のプログラムにコピーされます。ライブラリー・テキスト内のコメント行またはブランク行は、未変更のまま結果のソース・プログラムにコピーされますが、次の例外があります。ライブラリー・テキスト内のコメント行またはブランク行は、疑似テキスト -1 と一致する一連のテキスト語の中にある場合にはコピーされません。

COPY ステートメント

11. 置き換え後のテキスト語は、標準 COBOL 形式の規則に従ってソース・プログラムの中に入れられます。参照形式域の詳細は 25 ページの『第 3 章 参照形式』を参照してください。

ライブラリーから更新せずにコピーされた各テキスト語は、結果のプログラムにおいて、元のライブラリーの中にあったと同じ行の区域から開始されます。しかし、この規則の例外として、更新されずにコピーされるテキスト語がライブラリー内の区域 A で開始し、かつ自分よりも長いテキストで置き換えられる区域 A 内の別のテキスト語の後に続く場合は、更新されずにコピーされたテキスト語は、区域 A で適合しなくなれば区域 B で開始されます。

結果のプログラムに入れられる疑似テキスト -2 の各テキスト語は、結果のプログラムにおいて、元の疑似テキスト -2 の中にあったと同じ区域で開始します。結果のプログラムに入れられる各 ID-2、リテラル -2、および語 -2 は、結果のプログラムにおいて、置き換えられるライブラリー・テキストと同じ区域で開始します。

IBM 拡張

12. COPY REPLACING は、EJECT、SKIP1/2/3、または TITLE コンパイラー指示ステートメントには影響を与えません。

IBM 拡張 の終り

コーディング例

多くのプログラムに共通な一連のコード（ファイル記述とデータ記述、エラー・ルーチンと例外ルーチンなど）をライブラリーに保管し、COPY ステートメントと結合させて使用できます。そのような共通のコードについての命名規則が確立されている場合には、REPLACING 句を指定する必要はありません。名前がプログラムごとに異なる場合には、REPLACING 句を使用して、このプログラムにとって意味のある名前を提供できます。

例 1: この例では、ライブラリー・テキスト PAYLIB が次のデータ部の記入項目から構成されています。

```
01 A.  
  02 B   PIC S99.  
  02 C   PIC S9(5)V99.  
  02 D   PIC S9999 OCCURS 1 TO 52 TIMES  
        DEPENDING ON B OF A.
```

プログラマーは、プログラムのデータ部で次のように COPY ステートメントを使用することができます。

```
COPY PAYLIB.
```

ライブラリー・テキストは、COPY ステートメントのすぐ後で未変更のまま COBOL プログラムにコピーされます。

例 2: 例 1 で使用したライブラリー・テキスト内のデータ名のいくつか（またはすべて）を変更するには、プログラマーは次のように REPLACING 句を使用できます。

```
COPY PAYLIB REPLACING A BY PAYROLL
                        B BY PAY-CODE
                        C BY GROSS-PAY
                        D BY HOURS.
```

ライブラリー・テキストがコピーされるときに、結果のテキストは次のように書かれている場合と同様に表示されます。

```
01 PAYROLL.
   02 PAY-CODE PIC S99.
   02 GROSS-PAY PIC S9(5)V99.
   02 HOURS PIC S9999 OCCURS 1 TO 52 TIMES
      DEPENDING ON PAY-CODE OF PAYROLL.
```

ここに示した変更は、このプログラムに対してだけ行われます。テキストはライブラリーの中では変更されていません。

例 3: この例では、ライブラリー・テキストを作成中にある特定の規則に従う場合に、データ名の一部を置き換えることができる方法を示します。この場合、ライブラリー・テキスト CONTACT には次のコードが含まれます。

```
01 (PRFX)-RECORD.
   03 (PRFX)-NAME PIC X(24).
   03 (PRFX)-PHONE PIC X(10).
   03 (PRFX)-EXTN PIC X(4).
```

プログラマーは、データ名の接頭部によってテキスト語 PRFX とそれを結合する括弧を置き換えて、このライブラリー・テキストをコピーできます。たとえば、次の COPY ステートメントをプログラムのデータ部に書くことができます。

```
COPY CONTACT REPLACING ==(PRFX)== BY ==CUST==.
```

ライブラリー・テキストがコピーされるときに、結果のテキストは次のように書かれている場合と同様に表示されます。

```
01 CUST-RECORD.
   03 CUST-NAME PIC X(24).
   03 CUST-PHONE PIC X(10).
   03 CUST-EXTN PIC X(4).
```

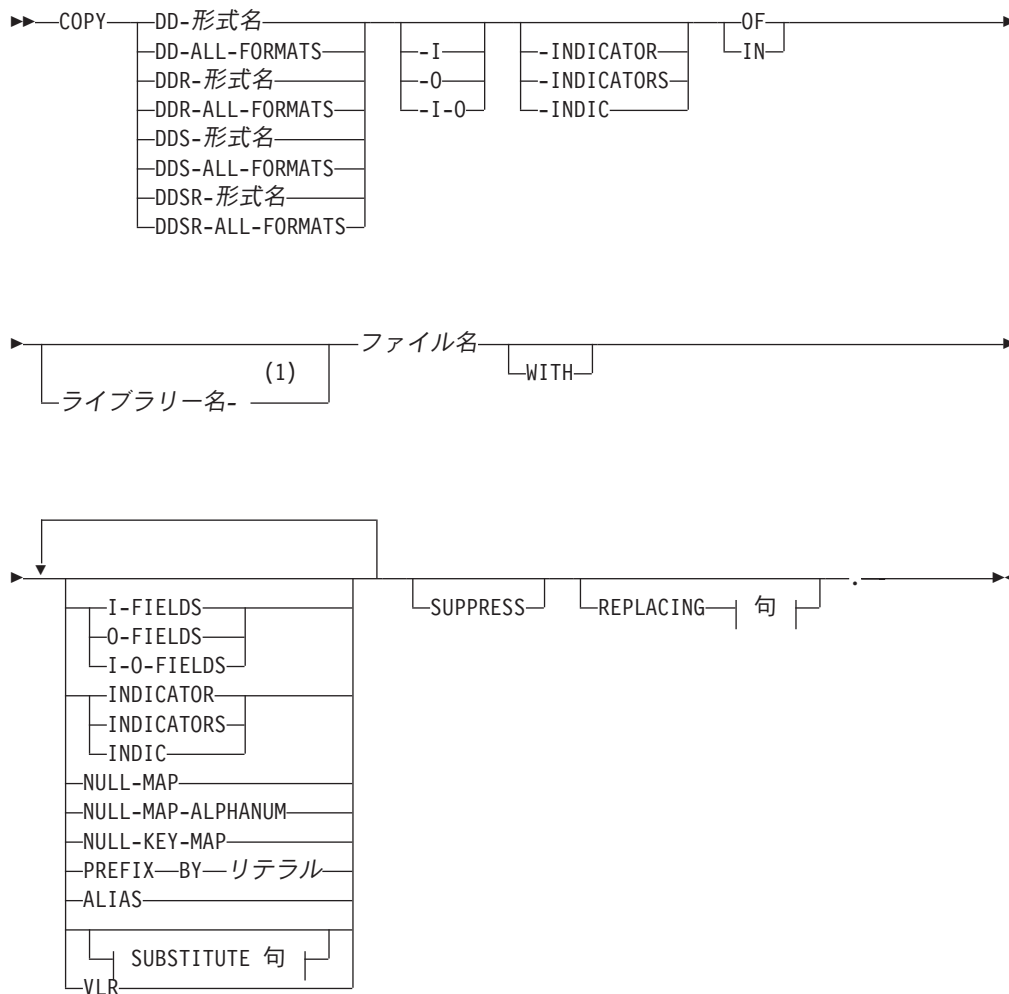
注: 多くの分離文字は COPY ステートメントを処理するときに特別に重要であるため、この方法でテキスト語の一部を区切るために使用できる値は括弧およびコロンの記号に制限されます。さらに、ライブラリー・テキストを入力するときに、SEU 構文検査機能によってフラグが立てられたある特定のエラーを無視する必要があります。

COPY ステートメント - 形式 2 - DDS 変換

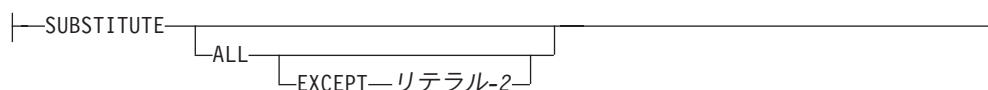
IBM 拡張

COPY ステートメント - 形式 2 - DDS 変換

COPY ステートメント



SUBSTITUTE 句:



注:

- 1 ファイル名を修飾する場合は、ライブラリー名とファイル名の間にハイフンが必要です。

形式 2 に関する考慮事項

形式 2 の COPY ステートメント (DD、DDR、DDS、または DDSR オプション) は、システムに存在するファイルを記述する COBOL データ部ステートメントを作成するために使用できます。これらの記述は、コンパイル時に存在するファイルのバージョンに基づきます。これらの記述では、ファイルについての DDS ソース・ステートメントを使用しません。

REPLACE ステートメントが有効である場合、COPY ステートメントはコード行上の最初の項目でなければなりません。また、この行には、少なくとも最初のハイフンまでに、必要なオプションを指定するテキスト語が入っていなければなりません。

DDS は、DBCS の形式 J (DBCS データだけを含めることができるフィールドの場合)、E (DBCS または英数字データのいずれかを含めることができるフィールドの場合)、または O (DBCS および英数字データの両方を含めることができるフィールドの場合) をサポートします。また DDS は、形式 G のグラフィック・データ・タイプをサポートします。*PICGGRAPHIC オプションは、形式 G の DDS 項目に対応する COBOL DBCS データ項目を作成するために使用されます。

*PICNGRAPHIC オプションは、国別 CCSID コンパイラ・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された UCS-2 CCSID を持つ COBOL NATIONAL データ項目を作成するために使用されます。その他の環境ではすべて、データの正確なバイト数のデータを保持することのできる英数字データ項目が作成されます。

形式 2 の COPY ステートメントはデータ部でだけ使用でき、ユーザーはステートメントの前に 05 よりも小さいレベル番号のグループ・レベル項目を入れなければなりません。

DD および ALIAS オプション: DD オプションまたは ALIAS オプションは、別名 (代替名) を参照するために使用されます。DDS 内で別名を指定すると、最大 30 文字のデータ名を COBOL プログラムに組み込むことができます。

DD オプションまたは ALIAS オプションが使用されると、存在する別名が対応する DDS フィールド名を置き換えます。別名の中の下線はすべて、置き換えが行われる前にハイフンに変換されます。

DDR オプション: DDR オプションまたは SUBSTITUTE オプションは、DD オプションによって行われることをすべて行います。さらに、フィールド名 (あるいは、該当する場合は別名) 内の無効な COBOL 文字である @、#、¥、および _ を対応する有効な COBOL 文字 A、N、D、および - に置き換えます。また、フィールド名の末尾から下線を除去します。

DDS オプション: DDS オプションは、指定した DDS 形式の内部 DDS のフィールド名をコピーします。

DDSR オプション: DDSR オプションは、DDS オプションによって行われることをすべて行います。さらに、無効な COBOL 文字である @、#、¥、および _ をそれぞれ有効な COBOL 文字 A、N、D、および - に置き換えて、指定した DDS 形式で内部 DDS のフィールド名をコピーします。また、フィールド名の末尾から下線を除去します。

形式名および ALL-FORMATS オプション: 形式名は、ILE COBOL データ記述記入項目に変換される DDS レコード形式定義の名前です。形式名は、ILE COBOL データ名の形成に関する規則に従わなければなりません。

ALL-FORMATS オプションは、データ名の規則に従わない名前を含む、ファイルに定義されたすべての形式を変換します。そのような形式名を有効なデータ名に変更するには、REPLACING 句を使用しなければなりません。ただし、REPLACING 句

COPY ステートメント

は、EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY によって定義された索引付きファイルの FD 記入項目内の形式名を変更する際には使用できません。このキーを RECORD KEY 文節内でデータ名を使用して定義できない場合は、そのファイルの DDS の指定内の形式名を変更する必要があります。

注: このコンテキストでは、コンパイラーは ALL-FORMATS と同様に ALL-FORMAT を受け入れます。

VLR オプション: VLR オプションは変数レコード・ファイルとともに使用する必要があります。このオプションは、可変長フィールドからのコピーを指定します。これは、CRTCBMOD と CRTBNDCBL コマンドの CVTOPT (*VARCHAR) オプションを指定変更します。

PREFIX オプション: PREFIX オプションは、それぞれのフィールド名の前に挿入される接頭部 (リテラル) を指定するのに使用できます。これを使用すると、フィールドの内容または用途を識別する (つまり、記述する) のに役立ちます。リテラルは、一組のアポストロフィまたは一組の引用符の中に入れることができます。リテラルの最大長は 15 文字です。

I-O

-I または I-FIELDS も -O または O-FIELDS も指定しないと、-I-O または I-O-FIELDS が想定されます。-I および O-FIELDS、または -O および I-FIELDS を指定すると、-I-O または I-O-FIELDS が想定されます。

形式名が標識属性なしで指定されており、-I と -O の両方の形式が生成される場合、それぞれのレコード形式は、生成される最大のレコード形式のサイズとして定義された 05 基本項目の再定義として生成されます。

ALL-FORMATS が標識属性なしで指定された場合には、それぞれのレコード形式は、次のいずれかとして定義された 05 基本項目の再定義として生成されます。

- COPY ステートメントが FILE SECTION にある場合には、ファイル内の最大レコード形式のサイズ。
- COPY ステートメントが FILE SECTION の外側にある場合には、生成される最大のレコード形式のサイズ。

標識属性が指定されている場合には、再定義は行われません。その代わりに、それぞれの形式が別々のデータ構造を生成します。詳細は 651 ページの『形式 2 の COPY ステートメントの INDICATOR 属性』を参照してください。

ファイルがデータベース・ファイルにある場合は、1 つの I-O 様式が生成されません。

その他のすべてのファイル・タイプの場合、生成される記述は次のようになります。

- -I が指定された場合、生成されるデータ記述記入項目には次のいずれかが含まれます。
 - 非サブファイル形式の場合、入力および入出力フィールド
 - サブファイル形式の場合、入力、出力、および入出力フィールド
- -O が指定された場合、生成されるデータ記述記入項目には出力フィールドおよび入出力フィールドが含まれます。

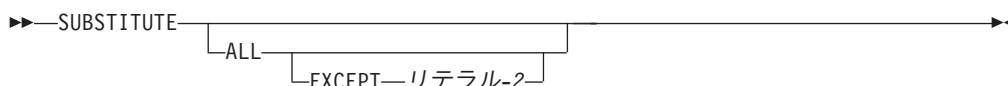
標識属性の使用法については 651 ページの『形式 2 の COPY ステートメントの INDICATOR 属性』で説明します。

ファイル名は、i5/OS システム・ファイルの名前です。生成される DDS 記入項目は、ファイル内で定義されたレコード形式 (1 つまたは複数) を表します。ファイルは、プログラムのコンパイルの前に作成しなければなりません。

ライブラリー名の指定はオプションです。指定されていない場合は、現行のジョブ・ライブラリー・リストがデフォルト値として使用されます。

SUBSTITUTE 句

SUBSTITUTE 句 - 形式



SUBSTITUTE 句を使用することによって、プログラムで DDS の使用が可能となり、下線文字のような特定の文字を保存しておくことができます。下線文字は、標準の ILE COBOL 文字ではありませんが、ロケール・カテゴリーを指定するのに必要です。下線文字を、たとえばコピーされた DDS に保存するためには、SUBSTITUTE 句を以下のように使用します。

```
...SUBSTITUTE ALL EXCEPT '_'.
```

リテラル -2

1 バイトの非数字リテラルでなければなりません。リテラル -2 で指定された文字は置き換えることはできません。

REPLACING 句

REPLACING 句は 637 ページの『REPLACING 句』で説明されています。

DDS ファイルでのヌル可能フィールドの使用

DDS でフィールドが ALWNULL として定義される場合は、COPY DDS ステートメントはそのフィールドをコメント付きでヌル可能と識別します。たとえば、下記の 2 つの図には、ヌル可能フィールドの入っている DDS ファイル、およびこのフィールドが ILE COBOL プログラムの FILE-SECTION にコピーされるときにこれに対して作成される結果のコメントが示されています。

```

.....+.....1.....+.....2.....+.....3.....+.....4.....+.....5.....+.....6.....+.....7.....+.....
A* With the following physical file (TESTPF)
R TESTING
  FLD1      5S 0
  FLD2      8      ALWNULL
  FLD3      6
  
```

図 29. ヌル可能フィールドを示す DDS

COPY ステートメント

```

* A COPY DDS-TESTING OF TESTPF.
*   I-O FORMAT:TESTING   FROM FILE TESTPF   OF LIBRARY QTEMP
*
    05 TESTING.
      06 FLD1                PIC 9(5).
      06 FLD2                PIC X(8).
                (null-capable field)
      06 FLD3                PIC X(6).

```

図 30. ヌル可能 DDS ファイルの ILE COBOL プログラムへのコピー後の結果

コピーされる DDS ヌル可能レコード形式のヌル・マップおよびヌル・キー・マップを生成するには、WITH NULL-MAP および WITH NULL-KEY-MAP 句を作業用ストレージ・セクションまたはローカル・ストレージ・セクションで新規 COPY DDS ステートメント上に指定する必要があります。DDS の形式当たり 1 つだけ NULL-MAP のコピーが生成されます。たとえば、形式に I (入力のみ) および B (入出力) の両方が含まれる場合、生成されるヌル・マップのサイズは形式の中で指定されたすべてのフィールドに合うものです。換言すれば、これには I および B のすべてのフィールドが含まれています。

特定形式用の DDS で定義されたヌル可能フィールドごとに、データ項目定義が生成されます。生成されるデータ項目は、作業用ストレージ・セクションまたはローカル・ストレージ・セクションで COPY DDS ステートメント上に NULL-MAP または NULL-MAP-ALPHANUM を指定するかどうかによって異なります。

NULL-MAP を指定した場合は、ヌル・マップが、2 進ゼロ (0) に初期設定される PIC 1 値を指定して作成されます。以下のステートメントが、ヌル可能フィールドのソースで生成されます。

```
06 <field-name>-NF      PIC 1 VALUE B"0".
```

フィールドがヌル可能でない場合は、FILLER 項目が生成されます。

NULL-MAP-ALPHANUM を指定した場合は、ヌル・マップが、文字ゼロ (0) に初期設定される PIC X 値を指定して作成されます。以下のステートメントが、ヌル可能フィールドのソースで生成されます。

```
06 <field-name>-NF      PIC X VALUE ZERO.
```

フィールドがヌル可能でない場合は、以下のステートメントがソースで生成されます。

```
06 <field-name>-AN      PIC X VALUE ZERO.
```

NULL-MAP-ALPHANUM を使用して生成されたヌル・マップのサイズは、NULL-MAP を使用して生成されたヌル・マップのサイズと同じです。

```

.....1.....2.....3.....4.....5.....6.....7.....
A* Physical file for DDS
  R REC
    FLD1      1A
    FLD2      1A   ALWNULL
    FLD3      1A

```

図 31. 一部のフィールドがヌル可能でない DDS ファイル

```

*DDS Generated
05 REC-NM
06 FILLER          PIC X VALUE ZERO.
06 FLD2-NF        PIC 1 VALUE B"0".
06 FILLER          PIC X VALUE ZERO.

```

図 32. NULL-MAP を使用して COPY DDS から生成された ILE COBOL コード

ヌル可能フィールド使用上の考慮事項

ヌル・マップ・フィールドに 1 または 0 以外の値を入れることは可能です。たとえば、SQL がヌル・マップに値 2 を入れて、そのフィールドに 0 除算の結果が入っていることを示すことは可能です。

ヌル・マップで 0 または 1 以外の値を分かるようにするには、COPY DDS ステートメントに NULL-MAP-ALPHANUM を指定する必要があります。

NULL-MAP-ALPHANUM は、ヌル・マップとの間でやり取りされる値の範囲を、0 または 1 以外の値を含むよう拡張します。ヌル・マップ・フィールド内で、このフィールドがヌルであることを示す値は 1 だけです。ヌル・マップでやり取りできる 0 または 1 以外の値についての詳細は、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『DB2 Universal Database for AS/400』セクションを参照してください。

日付データ・タイプを指定した COPY DDS の使用

表 39 および 648 ページの表 40 には、ゾーン、パック、および文字の DDS フィールドに許可された DATFMT パラメーター、および CVTOPT(*CVTTODATE) 変換パラメーターが指定されている場合に COPY DDS から生成される DATFMT パラメーターと同等の ILE COBOL の形式がリストされています。

表 39 には、i5/OS DDS 日付データ・タイプと、それと同等の ILE COBOL 用の形式がリストされています。表 39 は、文字フィールドおよびゾーン・フィールドで、USAGE DISPLAY を前提とします。

表 39. DDS 日付データ・タイプおよびそれらと等価の ILE COBOL の形式

i5/OS 形式	COBOL が生成する形式	内容	形式	有効な分離文字	長さ
*MDY	%m/%d/%y	月 / 日 / 年	mm/dd/yy	/.,&	8
*DMY	%d/%m/%y	日 / 月 / 年	dd/mm/yy	/.,&	8
*YMD	%y/%m/%d	年 / 月 / 日	yy/mm/dd	/.,&	8
*JUL	%y/%j	ユリウス	yy/ddd	/.,&	6
*ISO	@Y-%m-%d	ISO (国際標準化機構)	yyyy-mm-dd	-	10
*USA	%m/%d/@Y	IBM USA 標準規格	mm/dd/yyyy	/	10
*EUR	%d.%m.@Y	IBM 欧州標準規格	dd.mm.yyyy	.	10
*JIS	@Y-%m-%d	JIS (日本工業規格) 西暦	yyyy-mm-dd	-	10

184 ページの表 11 には、i5/OS DDS 時刻データ・タイプと、それと同等の ILE COBOL 用の形式がリストされています。648 ページの表 40 は、パック 10 進数フィールド用で、USAGE PACKED-DECIMAL が生成されます。

COPY ステートメント

表 40. DDS 時刻データ・タイプおよびそれらと等価の ILE COBOL の形式

i5/OS 形式	COBOL が生成する形式	内容	形式	有効な分離文字	長さ
*HMS	%H:%M:%S	時 : 分 : 秒	hh:mm:ss	..&	8
*ISO	%H.%M.%S	ISO (国際標準化機構)	hh.mm.ss	.	8
*USA	%I:%M @p	IBM USA 標準規格。AM および PM は、大文字小文字を任意に混合させることができます。	hh:mm AM または hh:mm PM	:	8
*EUR	%H.%M.%S	IBM 欧州標準規格	hh.mm.ss	.	8
*JIS	%H:%M:%S	JIS (日本工業規格) 西暦	hh:mm:ss	:	8

一般的な注意事項

- データベース・ファイルが標識を持つことはありません。
- RECORD KEY 文節で EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY が指定されている場合には、1 つの形式は 1 つの FD のもとで一度だけコピーできます。たとえば、ある FD のもとで、あるファイルのすべての形式がコピーされると、その FD のもとで同一ファイルに対して他の形式 2 の COPY ステートメントを指定することはできません。
- WORKING-STORAGE または LOCAL-STORAGE の中でそれぞれの形式について別々のストレージが必要とされる場合には、それぞれの形式について別々の COPY ステートメントを指定する必要があります。

たとえば、ファイル CUSTMASTER に 2 つの形式 CUSTADR と CUSTDETL が含まれているとすると、次の COPY ステートメントを指定できます。

```

SELECT FILE-X
ASSIGN TO DATABASE-CUSTMASTER.
.
.
.
FD FILE-X
LABEL RECORDS ARE STANDARD.
01 FILE-X-RECS.
    COPY DDS-ALL-FORMATS OF
        QGPL-CUSTMASTER. (See Note 1.)
.
.
.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 ADR-REC.
    COPY DDS-CUSTADR OF
        CUSTMASTER. (See Note 2.)
01 DETAIL-REC.
    COPY DDS-CUSTDETL OF
        CUSTMASTER. (See Note 2.)

```

注:

- この COPY ステートメントはすべての形式に対して記憶域を 1 つだけ生成しません。
- これらの COPY ステートメントは別々のストレージ域を生成します。

生成されるデータ構造

このセクションでは、COPY ステートメントによって生成される、以下のデータ構造について説明します。

- 形式 (レコード) レベルの構造
- データ・フィールドの構造
- 標識の構造

形式 (レコード) レベルの構造: ソース・プログラムのリストでは、各形式の先頭にコメント・テーブルが生成されます。これらのコメントは、プログラムのコンパイル中に使用されたファイルの詳細を示します。ファイルにレコード・キーがある場合には、DDS でキーが定義されている方法を示すコメントも生成されます。以下に、テーブルに入れられる可能性のあるレコード・キー記入項目と、テーブルのヘッディングを示します。

ヘッディング	可能な記入項目
NUMBER	キー・フィールド番号
NAME	キー・フィールド名
RETRIEVAL	ASCENDING、DESCENDING
ALTSEQ	NO、YES

複数の形式の生成に備えて再定義が必要とされる場合、次のようにグループ・レベルの名前が生成されます。

```
05 file-name-RECORD
   PIC X(size of largest record).
```

各形式に対してグループ・レベルの名前は次のように割り当てられます。

- INPUT


```
05 format-name-I
```
- OUTPUT


```
05 format-name-O
```
- I-O 形式


```
05 format-name
```

データ・フィールドの構造: フィールド名、PICTURE 定義、および数字の USAGE 文節は、内部 DDS 形式のフィールド名 (または、DD オプションの場合は別名) およびデータ・タイプ表現から直接に導出されます。フィールド名および PICTURE 定義は次のように構成されます。 06 フィールド名 PIC (以下の表の注 1 参照)

注: 適切な COBOL 定義については表 41 を参照してください。

表 41. データ・フィールドの構造

DDS		COBOL データ部 n = フィールドの全長 (DDS の桁 30 ~ 34) m = 小数部の桁数 (DDS の桁 36 と 37)	
データ・タイプ (桁 35)	形式	DDS の桁 36 と 37 がブランクである場合	DDS の桁 36 と 37 がブランクでない場合
物理ファイル、論理ファイル、プリンター・ファイル、および通信ファイル			

COPY ステートメント

表 41. データ・フィールドの構造 (続き)

b (ブランク)	デフォルト	PIC X(n) ³	PIC S9(n-m)V9(m) PIC S9(n-m)V9(m) COMP-3
P	パック 10 進数 ⁵	PIC S9(n) COMP-3	PIC S9(n-m)V9(m)
S	ゾーン 10 進数/符号付き数字 ⁴	PIC S9	PIC S9(n-m)V9(m) COMP-4
B	2 進数	PIC S9(n) COMP-4	PIC 9(5) COMP-4 または COMP-1
F	浮動小数点 ¹	PIC 9(5) COMP-4 または COMP-1	PIC 9(10) COMP-4 または COMP-2
	単精度	PIC 9(10) COMP-4 または COMP-2	
	倍精度文字 ⁴	PIC X(n) ³	
	16 進データ	PIC X(n)	
A	日付 ²	PIC X(n) または FORMAT DATE	
	時刻 ²	PIC X(n) または FORMAT TIME	
H		PIC X(n) または	
L	タイム・スタンプ ²	FORMAT TIMESTAMP	
T	DBCS 択一データ	PIC X(n)	
Z	DBCS 専用データ	PIC X(n)	
E	DBCS 混用データ	PIC X(n)	
J	DBCS グラフィック・データ	PIC X(2n) または PIC G(n) ³	
O	UCS2 グラフィック・データ	—	
G		PIC N(2n)	
ディスプレイ・ファイル			
b (ブランク)	デフォルト	PIC X(n)	PIC S9(n-m)V9(m)
X	英字だけ	PIC X(n)	—
N	数字シフト	PIC X(n)	PIC S9(n-m)V9(m)
Y	数字だけ	—	PIC S9(n-m)V9(m)
I	キーボード入力禁止	PIC X(n)	PIC S9(n-m)V9(m)
W	カタカナ	PIC X(n)	—
A	英数字シフト	PIC X(n)	—
D	数字だけ	PIC X(n)	PIC S9(n)
F	浮動小数点 ¹	PIC 9(5) COMP-4 または COMP-1	PIC 9(5) COMP-4 または COMP-1
	単精度	PIC 9(10) COMP-4 または COMP-2	PIC 9(10) COMP-4 または COMP-2
	倍精度	PIC X(n)	—
	倍精度数字専用の文字	PIC X(n) または FORMAT DATE	—
	日付 ²	PIC X(n) または FORMAT TIME	—
M	時刻 ²	PIC X(n) または	—
		FORMAT TIMESTAMP	PIC S9(n-m)V9(m)
L	タイム・スタンプ ²	—	—
T	符号付き数字シフト	PIC X(n)	—
Z	DBCS 択一	PIC X(n)	—
S	DBCS 専用	PIC X(n)	—
E	DBCS 混用	PIC X(2n) または PIC G(n)	—
J	DBCS グラフィック	—	
O	UCS2 グラフィック	PIC N(2n)	
G			
注:			
1. CVTOPT パラメーターの *NOFLOAT 値が有効な場合には、浮動小数点フィールドは、BINARY の USAGE を持つ FILLER 項目として取り入れられます。 *FLOAT が指定された場合には、フィールドは、与えられたそれらの DDS 名を COMP-1 (単精度浮動小数点) または COMP-2 (倍精度浮動小数点) の USAGE で使用することによって、取り入れられます。 654 ページの『浮動小数点フィールド』を参照してください。			
2. デフォルトで、FILLER 項目は英数字として宣言されます。 CRTBNDCBL または CRTCBMOD コマンドの CVTOPT パラメーター上で *DATE、*TIME、または *TIMESTAMP を指定することにより、COBOL に日付、時刻、およびタイム・スタンプのフィールドを日時データ・タイプとして扱うようにすることもできます。 654 ページの『日付、時刻、およびタイム・スタンプのフィールド』を参照してください。			
3. DDS では、フィールドが VARLEN の属性を持つ場合、結果はフィールドの先頭に 2 バイト追加されたものになります。			
4. DDS 文字または DATFMT キーワードを指定したゾーン・データ・タイプが使用された場合には、CRTBNDCBL または CRTCBMOD コマンドで CVTOPT パラメーターに *CVTTODATE 値が指定されると、ILE COBOL はこれを日付フィールドとして扱います。			
5. DATFMT キーワードを指定した DDS パック・データ・タイプが使用された場合には、CRTBNDCBL または CRTCBMOD コマンドで CVTOPT パラメーターに *CVTTODATE 値が指定されると、ILE COBOL はこれを日付フィールドとして扱います。			
6. DDS では、データ・タイプが G で、属性が CCSID(n) (n は、国別 CCSID コンパイラー・オプションまたは NTLCCSID PROCESS オプションで指定された CCSID) であるフィールドは、UCS-2 グラフィック・データ・タイプです。UCS-2 グラフィック・データ・タイプを COBOL NATIONAL データ・タイプとして取り入れるには、CRTBNDCBL または CRTCBMOD コマンドの CVTOPT パラメーターに *PICGRAPHIC を指定してください。詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。			

標識の構造: 標識が要求され、形式の中に存在する場合には、構造の先頭に追加のグループ名 (06 レベル) が生成され、その後に該当する個々の標識用の記入項目 (07 レベル) が続きます。

```
06 format-name-(I or O)-INDIC.
   07 INxx PIC 1 INDIC xx.
```

ここで、xx は標識番号です。

たとえば、次のとおりです。

```
06 SAMPLE1-I-INDIC.
   07 IN01 PIC 1 INDIC 01.
   07 IN04 PIC 1 INDIC 04.
   07 IN05 PIC 1 INDIC 05.
   07 IN07 PIC 1 INDIC 07.
06 FLD1 PIC ... .
06 FLD2 PIC ... .
```

形式 2 の COPY ステートメントの INDICATOR 属性: INDICATOR 属性は、標識用にデータ記述記入項目が生成されるかどうかを指定します。

INDICATOR 属性を指定すると、標識用にデータ記述記入項目が生成されますが、データ・フィールド用には生成されません。

次のように 05 グループ・レベル記入項目が生成されます。

- 単一構造について COPY を行う場合、

```
COPY DDS- 形式名 -INDIC
```

上記によって、以下が生成されます。

```
05 形式名 -I (または -O)
```

- 複数構造について COPY を行う場合、

```
COPY DDS-ALL-FORMATS-INDIC
```

上記によって、以下が生成されます。

```
05 file-name-RECORD.
```

生成されるデータ記述記入項目は、COPY ステートメントの中でどの用途属性 (I、O、または I-O) が指定または想定されるかによって決まります。

- ...I-INDICATOR... が指定された場合には、入力レコード域内で使用される標識として入力 (応答) 標識用のデータ記述記入項目が生成されます。
- ...O-INDICATOR... が指定された場合には、出力レコード域内で使用される標識として出力 (オプション) 標識用のデータ記述記入項目が生成されます。
- ...I-O-INDICATOR... が指定または想定された場合には、入力および出力レコード域内で使用される標識として、入力と出力 (応答とオプション) の両方の標識用の別個のデータ記述記入項目が生成されます。

個々の標識記述は 『標識の構造』の説明に従って生成されます。

INDICATOR 属性が指定されない場合は、標識用にデータ記述記入項目が生成されるかどうかは、ファイルの作成時に DDS 内でキーワード INDARA が指定されたかどうかによって決まります。

COPY ステートメント

- INDARA が指定されていない場合は、データ・フィールドと標識と両方のためにデータ記述記入項目が生成されます。
- INDARA が指定されている場合は、データ・フィールド用にだけデータ記述記入項目が生成され、標識用には生成されません。

I-O 形式の生成: フィールド記述がすべて同一であり、暗黙または明示的に INPUT または OUTPUT フィールドを要求した場合、生成されるフィールド記述は一組だけです。このタイプの記述には、「I-O FORMAT: 形式名」というコメント行が付けられます。レコード形式名には、-I と -O のどちらも付けられません。

注: データベース・ファイルの場合、データベース・ファイル内のフィールド記述はすべて同じであるため、必ずこのようになります。(図 33 を参照してください。)

STMT PL	SEQNBR	-A 1 B...	2...	3...	4...	5...	6...	7..	IDENTFCN	S	コピー名	変更日付	
1	000100	IDENTIFICATION DIVISION.											
2	000200	PROGRAM-ID. STRTEXTD.											
3	000300												
3	000400	ENVIRONMENT DIVISION.											
4	000500	CONFIGURATION SECTION.											
5	000600	SOURCE-COMPUTER. IBM-ISERIES.											02/02/21
6	000700	OBJECT-COMPUTER. IBM-ISERIES.											02/02/21
7	000800	INPUT-OUTPUT SECTION.											02/02/21
8	000900	FILE-CONTROL.											
9	001000	SELECT FILE-1 ASSIGN TO DATABASE-NAMES											
11	001100	ACCESS IS DYNAMIC RECORD KEY IS EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY											
13	001200	ORGANIZATION IS INDEXED.											
14	001300												
14	001400	DATA DIVISION.											
15	001500	FILE SECTION.											
16	001600	FD FILE-1.											
17	001700	01	RECORD-DESCRIPTION.										02/02/21
	001800	COPY DDS-RDE OF NAMES.											02/02/21
	+000001*	I-O	FORMAT:RDE	FROM	FILE	NAMES	OF	LIBRARY	TESTLIB	RDE			
	+000002*	RECORD DESCRIPTION										RDE	
	+000003*	THE	KEY	DEFINITIONS	FOR	RECORD	FORMAT	RDE	RDE				
	+000004*	NUMBER	NAME	RETRIEVAL	ALTSEQ	RDE							
	+000005*	0001	LNAME	ASCENDING	NO	RDE							
	+000006*	0002	FNAME	ASCENDING	NO	RDE							
	+000007*	0003	MINAME	ASCENDING	NO	RDE							
	+000008*	0004	MNAME	ASCENDING	NO	RDE							
18	+000009	05	RDE.	RDE									
19	+000010	06	FNAME	PIC	X(20).	RDE							
	+000011*	FIRST NAME										RDE	
20	+000012	06	MINAME	PIC	X(1).	RDE							
	+000013*	MIDDLE INITIAL NAME										RDE	
21	+000014	06	MNAME	PIC	X(19).	RDE							
	+000015*	REST OF MIDDLE NAME										RDE	
22	+000016	06	LNAME	PIC	X(20).	RDE							
	+000017*	LAST NAME										RDE	
23	+000018	06	PHONE	PIC	S9(10)	COMP-3.	RDE						
	+000019*	PHONE NUMBER										RDE	
24	+000020	06	DATA-DDS	PIC	X(40).	RDE							
	+000021*	REST OF DATA										RDE	
25	001900	66	MIDDLE-NAME	RENAMES	MINAME	THRU	MNAME.						
	002000												
26	002100	PROCEDURE DIVISION.											
	002200	MAIN-PROGRAM SECTION.											
	002300	MAINLINE.											
27	002400	OPEN INPUT FILE-1.											
	002500*	.											
	002600*	.											
	002700*	.											

図 33. I-O 形式の生成

形式の再定義: ALL-FORMATS または -I-O 句に対して生成される可能性がある REDEFINES 文節には、特別な注意を払う必要があります。すべての形式が同一の

区域 (一般にバッファ領域) で再定義されるため、複数のフィールド名が同一のストレージを記述する可能性があり、形式の区域全体が各出力操作に先立って再初期設定されない場合には、予測できない結果が生じる可能性があります。

MOVE CORRESPONDING ステートメントで指定されたデータ項目に從属するデータ項目は、それが REDEFINES 文節を含むか、または再定義項目に從属する場合には一致せず、移動されません。

再初期設定を回避するには、-I および -O 接尾部を指定した複数の形式 2 の COPY ステートメント (DDS または DD) を使用して、作業用ストレージ・セクションまたはローカル・ストレージ・セクションで各形式または形式タイプ (入力または出力) 用の別々のストレージ域を作成できます。これらのレコード形式を READ INTO および WRITE FROM ステートメントで使用できます。たとえば、次のとおりです。

```
FD ORDER-ENTRY-SCREEN . . .
01 ORDER-ENTRY-RECORD . . .
.
.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 ORDSFL-I-FORMAT.
   COPY DDS-ORDSFL-I OF DOESCR.
01 ORDSFL-O-FORMAT.
   COPY DDS-ORDSFL-O OF DOESCR.
.
.
PROCEDURE DIVISION.
.
.
READ SUBFILE ORDER-ENTRY-SCREEN NEXT MODIFIED RECORD
   INTO ORDSFL-I-FORMAT FORMAT IS "ORDSFL"
   AT END SET NO-MODIFIED-SUBFILE-RCD TO TRUE.
.
.
MOVE CORR ORDSFL-I TO ORDSFL-O.
REWRITE SUBFILE ORDER-ENTRY-RECORD FROM ORDSFL-O-FORMAT
   FORMAT IS "ORDSFL" . . .
.
.
.
```

注: COPY ステートメントは、ファイル・セクション、作業用ストレージ・セクション、およびローカル・ストレージ・セクションで使用できますが、得られる結果が全く同じというわけではありません。詳細は 658 ページの『キー生成の例』を参照してください。

フィールドおよび形式名に関する追加の注意事項: 生成されたフィールド名が COBOL 予約語の場合、接尾部 -DDS がそのフィールド名に付け加えられます。生成されたフィールド名が物理ファイルから取られた (つまり、そのフィールドが CONCAT または RENAME キーワードの引数である) 場合にも、接尾部が付け加えられます。詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

COPY ステートメント

EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY が使用されているときには、REPLACING 句を使用してキー・フィールド名または形式名を変更することはできません。

浮動小数点フィールド: ファイルは、内部浮動小数点フィールドを含むことができます。CVTOPT パラメーターの *NOFLOAT 値 (デフォルト) が有効な場合には、浮動小数点フィールドは、BINARY の USAGE を持つ FILLER 項目として取り入れられます。*FLOAT が指定された場合には、フィールドは、与えられたそれらの DDS 名を COMP-1 (単精度浮動小数点) または COMP-2 (倍精度浮動小数点) の USAGE で使用することによって、取り入れられます。

浮動小数点キー・フィールドが認められています。KEY が内部浮動小数点数である場合には、キー値の順序は数字の順序になります。KEY が外部浮動小数点数である場合には、キーは英数字であり、レコードの順序は、使用される照合順序によって異なります。

日付、時刻、およびタイム・スタンプのフィールド: このセクションでは、日付、時刻、およびタイム・スタンプのフィールドの以下のクラスについて説明します。

- 日時クラス
- 英数字のクラス

また、ここでは、DDS を使用して日時クラスの日付、時刻、タイム・スタンプのフィールドを定義する方法の例も示しています。

日時クラス: 日時フィールドには、日時クラスの日付、時刻、およびタイム・スタンプ・データ項目が入っており、DATFMT キーワードを指定するゾーン、パック、および文字 DDS フィールドの使用が許可されています。日付データ・タイプは、ユーザー・プログラムに固定長文字フィールドとして取り入れられる日付、時刻、およびタイム・スタンプのフィールドと同じではありません。ILE COBOL では、日付データ・タイプは USAGE DISPLAY または USAGE PACKED-DECIMAL データ項目に変換され、日付、時刻、およびタイム・スタンプ・フィールドは英数字データ項目に変換されます (『英数字のクラス』に説明されています)。

日付データ・タイプは、*CVTTODATE 変換パラメーター・オプション (CVTOPT) が指定されている場合には、それと同等の ILE COBOL 用の形式に COPY DDS から変換されます。

許可された DATFMT パラメーター、および CVTOPT(*CVTTODATE) 変換パラメーターが指定されている場合に、このパラメーター用に COPY DDS から生成されるこれと同等の ILE COBOL の形式については、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

英数字のクラス: 英数字の日付、時刻、およびタイム・スタンプ・フィールドをプログラムに取り入れることができるのは、CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの CVTOPT(*DATETIME) オプション、または PROCESS ステートメントの DATETIME オプションを指定する場合だけです。*DATETIME が指定されていない場合は、日付、時刻、およびタイム・スタンプ・フィールドは無視され、ユーザーの ILE COBOL プログラムで FILLER フィールドとして宣言されます。

日付、時刻、およびタイム・スタンプ・フィールドは、固定長文字フィールドとして取り入れられます。プログラムでは、それらのフィールドに対して有効な文字操作を実行できます。

日付、時刻、およびタイム・スタンプ・データ・タイプには、それぞれ固有の形式があります。

日付、時刻、またはタイム・スタンプ情報を含んでいるフィールドがプログラムによって更新され、その更新された情報がデータベースに戻される場合、フィールドの形式は、そのフィールドがデータベースから取り出されたときの形式と全く同じでなければなりません。同じ形式を使用しなければ、エラーが発生します。

また、日付、時刻、またはタイム・スタンプ・フィールドに適切な値を移動する前にレコードの **WRITE** を試みると、**WRITE** 操作が失敗し、ファイル状況は 90 となります。

各データ・タイプの有効な形式については、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、**System i5/OS Information Center** の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『*DB2 Universal Database for AS/400*』のセクションを参照してください。 .

日付、時刻、およびタイム・スタンプ DDS の例: 以下の例では、DDS で日付、時刻、およびタイム・スタンプ・フィールドの定義の方法について示しています。

.....1.....2.....3.....4.....5.....6.....7.....
A	LOGICAL FILE LF1 FOR DATE, TIME, AND TIMESTAMP EXAMPLES					
00010A						
00020A	R RECORD1					
00030A	DATFLD1	L	DATFMT(*JUL)			
00040A			ALIAS(A_DATE_JUL)			
00050A	DATFLD2	L	DATFMT(*EUR)			
00060A			ALIAS(A_DATE_EUR)			
00070A	DATFLD3	L	DATFMT(*DMY) DATSEP('-')			
00080A			ALIAS(A_DATE_DMY)			
00090A	DATFLD4	L	DATSEP(' ')			
00100A	TIMFLD1	T	TIMFMT(*ISO)			
00110A			ALIAS(A_DATE_ISO)			
00120A	TIMFLD2	T	TIMFMT(*USA)			
00130A			ALIAS(A_DATE_USA)			
00140A	TIMFLD3	T	TIMSEP(' ')			
00150A	TIMFLD4	T	TIMSEP('.')			
00160A	TSFLD1	Z	DFT('1998-02-27-08.15.22.000000')			
A						

現在の日付が 1990 年 6 月 21 日で、現行システムの日付形式値が MDY で、システム日付の分離文字値が ' ' の場合は、DATFLD3 には 21-06-90 が入ります。DATFLD4 には 06 21 90 が入ります。

現在の日付が 1990 年 6 月 21 日で、現行システムの日付形式値が MDY で、現行システムの分離文字値が / の場合は、DATFLD1 には 90/172 が入ります (1990 年の 172 番目の日)。DATFLD2 には 21.06.1990 が入ります。

現在の時刻が午後 2 時で、システム時刻形式が hhmmss で、システム時刻分離文字 ' ' の場合は、TIMFLD1 に 14.00.00 が入ります。TIMFLD2 には 2:00 PM が入ります。

現在の時刻が午後 2 時で、システム時刻形式が hhmmss で、システム時刻分離文字 ' ' の場合は、TIMFLD3 に 14 00 00 が入ります。TIMFLD4 には 14.00.00 が入ります。

タイム・スタンプ・フィールドを定義する場合は、以下の形式でデフォルト値を指定する必要があります。

```
DFT('YYYY-MM-DD-HH.MM.SS.UUUUUU')
```

DFT キーワードが指定されない場合は、デフォルト値は現在の時刻です。

図 34. 日付、時刻、およびタイム・スタンプ・フィールドが定義された DDS ファイル

可変長フィールド: CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドの CVTOPT(*VARCHAR) パラメーター、または PROCESS ステートメントの VARCHAR オプションを指定する場合には、プログラムに可変長フィールドを取り入れることができます。外部記述ファイルから抽出する可変長フィールドは、プログラムの中で固定長グループ項目になります。

これらのフィールドについての詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

レコードをレコード域に明示的に移動する前に WRITE 操作を実行すると、多くの場合、16 進値 40 (X'40') を持つブランクを書き込むことになります。可変長フィールドの場合、これは、現行のフィールド長として X'4040' が使用されることを意味します。

X'4040' は 10 進値 16448 に変換され、おそらく、可変長フィールドに関して定義された最大の長さを上回ります。このため、WRITE 操作または後続の CLOSE 操作は失敗し、ファイル状況は 90 となります。

形式 2 の COPY ステートメントで REPLACING 句を使用する場合の考慮事項:

レベル番号を含め、生成された COBOL ソースを置き換えるには、REPLACING 句を使用できます。(詳細は 637 ページの『REPLACING 句』を参照してください。) ただし、以下の例外に注意する必要があります。

- RECORD KEY IS EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY が指定されている場合には、REPLACING 句によって形式名、またはキーであるフィールドの名前を変更することはできません。

図 35 は、REPLACING オプションを指定しない、形式 2 の COPY ステートメントを説明しています。

```

5722WDS V5R4M0 060210 LN IBM ILE COBOL TESTLIB/STRTEXTD I-SERIES1 06/02/15 11:27:50 ページ 2
STMT PL SEQNBR -A 1 B..+...2....+...3....+...4....+...5....+...6....+...7..IDENTFCN S コピー名 変更日付

11 000100 FD CUST-MASTER.
12 000200 01 CUSTOMER-RECORD.
000300*
000400* COPY DDS W I T H O U T REPLACING OPTION
000500*
13 000600 COPY DDS-CUSMST OF TESTLIB-CUSMSTP.
+000001* I-O FORMAT:CUSMST FROM FILE CUSMSTP OF LIBRARY TESTLIB CUSMST
+000002* ORDER HEADER RECORD
14 +000003 05 CUSMST. CUSMST
15 +000004 06 CUST PIC X(5). CUSMST
+000005* CUSTOMER NUMBER CUSMST
16 +000006 06 NAME PIC X(25). CUSMST
+000007* CUSTOMER NAME CUSMST
17 +000008 06 ADDR PIC X(20). CUSMST
+000009* CUSTOMER ADDRESS CUSMST
18 +000010 06 CITY PIC X(20). CUSMST
+000011* CUSTOMER CITY CUSMST
19 +000012 06 STATE PIC X(2). CUSMST
+000013* STATE CUSMST
20 +000014 06 ZIP PIC S9(5) COMP-3. CUSMST
+000015* ZIP CODE CUSMST

```

図 35. REPLACING オプションを指定しない形式 2 の COPY ステートメント

次の図は、REPLACING オプションを指定する、形式 2 の COPY ステートメントを示します。

COPY ステートメント

```

5722WDS V5R4M0 060210 LN IBM ILE COBOL TESTLIB/STRTEXTD I-SERIES1 06/02/15 11:27:50 ページ 2
STMT PL SEQNBR -A 1 B..+...2....+...3....+...4....+...5....+...6....+...7...IDENTFCN S コピー名 変更日付

30 001000 FD CUST-MASTER.
31 001100 01 CUSTOMER-RECORD.
001200*
001300* COPY DDS W I T H REPLACING OPTION
001400*
32 001500 COPY DDS-CUSMST OF TESTLIB-CUSMSTP
33 001600 REPLACING NAME BY ADDR-LINE-1
34 001700 ADDR BY ADDR-LINE-2
35 001800 CITY BY ADDR-LINE-3.
+000001* I-0 FORMAT:CUSMST FROM FILE CUSMSTP OF LIBRARY TESTLIB CUSMST
+000002* ORDER HEADER RECORD CUSMST
36 +000003 05 CUSMST. CUSMST
37 +000004 06 CUST PIC X(5). CUSMST
+000005* CUSTOMER NUMBER CUSMST
38 +000006 06 ADDR-LINE-1 PIC X(25). CUSMST
+000007* CUSTOMER NAME CUSMST
39 +000008 06 ADDR-LINE-2 PIC X(20). CUSMST
+000009* CUSTOMER ADDRESS CUSMST
40 +000010 06 ADDR-LINE-3 PIC X(20). CUSMST
+000011* CUSTOMER CITY CUSMST
41 +000012 06 STATE PIC X(2). CUSMST
+000013* STATE CUSMST
42 +000014 06 ZIP PIC S9(5) COMP-3. CUSMST
+000015* ZIP CODE CUSMST

```

図 36. REPLACING オプションを指定する形式 2 の COPY ステートメント

キー生成の例

```

.....1.....+...2....+...3....+...4....+...5....+...6....+...7....+...8
A          PHYSICAL FILE PF1 FOR KEY GENERATION EXAMPLES
A
A          R PFRECORD
A
A          MTH          2
A          DAY          2
A          YEAR         4
A          ITEM         5
A
A
A          K MTH
A          K DAY

```

図 37. 物理ファイルのデータ記述仕様

図 37 に示されている物理ファイルが、次の例の基礎になっています。それぞれの例において、SELECT 文節中で EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY を指定している論理ファイル (物理ファイルから得られる) を参照しています。

CONCAT キーワードを使用した例

```

.....+.....1.....+.....2.....+.....3.....+.....4.....+.....5.....+.....6.....+.....7.....+.....8
A          LOGICAL FILE LF1 FOR CONCAT KEYWORD EXAMPLES
A
A          R RECORD1          PFILE(PF1)
A
A          DATE              CONCAT(MTH DAY YEAR)
A
A          K MTH
A          K DAY

```

図 38. CONCAT キーワードを使用したデータ記述仕様

図 38 に示されている論理ファイルに対して COPY DDS は、物理ファイルから得られるキーおよびキー名を生成します。

```

FD LF1 LABEL RECORDS ARE STANDARD.
  01 LOG-RECORD.
      COPY DDS-ALL-FORMATS OF LF1.
  05 LF1-RECORD PIC X(8).
* I-O FORMAT:RECORD-1 FROM FILE LF1          OF LIBRARY COPYDDS
*
*THE KEY DEFINITIONS FOR RECORD FORMAT RECORD1
* NUMBER          NAME          RETRIEVAL    TYPE    ALTSEQ
* 0001 MTH-DDS          ASCENDING    AN      NO
*          KEY NAME ORIGINATES FROM PHYSICAL FILE
* 0002 DAY-DDS-DDS          ASCENDING    AN      NO
*          KEY NAME ORIGINATES FROM PHYSICAL FILE
  05 RECORD1 REDEFINES LF1-RECORD.
  06 DATE-DDS          PIC X(8).
  06 FILLER REDEFINES DATE-DDS.
  07 MTH-DDS          PIC X(2).
  07 DAY-DDS-DDS          PIC X(2).
  07 FILLER          PIC X(4).

```

図 39. CONCAT キーワードを使用した例

MTH は物理ファイルから得られるキーであり、DATE は ILE COBOL の予約語なので、COPY ステートメントは、フィールド名 MTH および DATE に接尾部 -DDS を追加します。DAY は物理ファイルから得られるキーであり、また ILE COBOL の予約語でもあるので、COPY ステートメントは、フィールド名 DAY に接尾部 -DDS を 2 つ追加します。

COPY ステートメントをファイル・セクションから作業用ストレージ・セクション、またはリンケージ・セクションへ移動する場合は、DATE-DDS に従属するフィールドが利用できなくなることに注意してください。

COPY ステートメント

```
WORKING-STORAGE SECTION.  
  01 WRK-RECORD.  
      COPY DDS-ALL-FORMATS OF LF1.  
  05 LF1-RECORD PIC X(8).  
 * I-O FORMAT:RECORD-1 FROM FILE LF1 OF LIBRARY COPYDDS  
 *  
  05 RECORD1 REDEFINES LF1-RECORD.  
  06 DATE-DDS PIC X(8).
```

図 40. CONCAT キーワードを使用した例—作業用ストレージ・セクション

RENAME キーワードを使用した例

```
.....1.....2.....3.....4.....5.....6.....7.....8  
A LOGICAL FILE LF2 FOR RENAME KEYWORD EXAMPLES  
A  
A R RECORD2 PFILE(PF1)  
A MONTH RENAME(MTH)  
A  
A K MTH
```

図 41. RENAMES キーワードを使用したデータ記述仕様

658 ページの図 37 に示されている論理ファイルに対して COPY DDS は、物理ファイルから得られるキーおよびキー名を生成します。

```
*  
FD LF2 LABEL RECORDS ARE STANDARD.  
  01 LOG-RECORD.  
      COPY DDS-ALL-FORMATS OF LF2.  
  05 LF2-RECORD PIC X(2).  
 * I-O FORMAT:RECORD2 FROM FILE LF2 OF LIBRARY COPYDDS  
 *  
 *THE KEY DEFINITIONS FOR RECORD FORMAT RECORD2  
 * NUMBER NAME RETRIEVAL TYPE ALTSEQ  
 * 0001 MTH-DDS ASCENDING AN NO  
 * KEY NAME ORIGINATES FROM PHYSICAL FILE  
  05 RECORD2 REDEFINES LF2-RECORD.  
  06 MONTH PIC X(2).  
  06 MTH-DDS REDEFINES MONTH PIC X(2).
```

図 42. RENAME キーワードを使用

MTH は物理ファイルから得られるキーなので、COPY ステートメントは、フィールド名 MTH に接尾部 -DDS を追加します。

SST キーワードを使用した例

```

.....+.....1.....+.....2.....+.....3.....+.....4.....+.....5.....+.....6.....+.....7.....+.....8
A          LOGICAL FILE LF3 FOR SST KEYWORD EXAMPLES
A
A          R RECORD3          PFILE(PF1)
A
A          YY          I          SST(YEAR 2 2)
A
A          K YY

```

図 43. SST キーワードを使用したデータ記述仕様

658 ページの図 37 に示されている論理ファイルに対して COPY DDS は、次の仕様を生成します。

```

*
FD LF3 LABEL RECORDS ARE STANDARD.
01 LOG-RECORD.
      COPY DDS-ALL-FORMATS OF LF3.
05 LF3-RECORD PIC X(2).
* I-O FORMAT:RECORD3 FROM FILE LF3 OF LIBRARY COPYDDS
*
*THE KEY DEFINITIONS FOR RECORD FORMAT RECORD3
* NUMBER          NAME          RETRIEVAL  TYPE  ALTSEQ
* 0001 YY          RECORD3      ASCENDING  AN   NO
05 RECORD3        REDEFINES LF3-RECORD.
06 YY            PIC X(2).

```

図 44. SST キーワードを使用

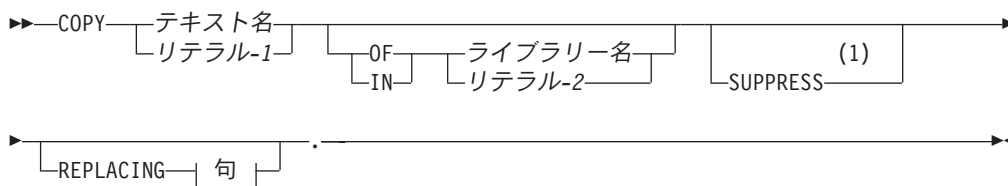
YY は物理ファイルから得られるキーではなく、また ILE COBOL の予約語でもないため、COPY ステートメントは、フィールド名 YY に接尾部を追加しません。

IBM 拡張 の終り

COPY ステートメント - 形式 3 - 基本 IFS

IBM 拡張

COPY ステートメント - 形式 3 - 基本 IFS



注:

1 IBM 拡張

literal-1 and literal-2

リテラル -1 は、コピーするストリーム・ファイルの名前です。ライブラリー名

COPY ステートメント

を省略すると、リテラルが直接、ファイル名、相対パス名、または絶対パス名として使用されます (最初の文字が「/」の場合)。たとえば、次のとおりです。

```
COPY "MyInc"  
COPY "x/MyInc"  
COPY "/u/user1/MyInc"
```

リテラル **-2** は、コピー・ファイルのテキスト名またはリテラル **-1** を探す、実際のパス、相対パスまたは絶対パスとして扱われます。

テキスト名

テキスト名がユーザー定義の COBOL ワードであり、その名前の環境変数が定義されている場合は、環境変数の値が、コピー・テキストを含むファイルの名前として使用されます。その名前の環境変数が定義されていない場合は、以下に指定された順番で、以下の名前に基づいて、コピー・テキストが検索されます。

1. text-name.cpy
2. text-name.CPY
3. text-name.cb11e
4. text-name.CB11E
5. text-name.cb11einc
6. text-name.CB11EINC
7. text-name.cb1
8. text-name.CBL
9. text-name.cob
10. text-name.COB
11. text-name.MBR
12. text-name

ライブラリー名

ライブラリー名がユーザー定義の COBOL ワードの場合は、その名前が環境変数として扱われます。環境変数の値は、コピー・ファイル、テキスト名、またはリテラル **-1** を探すパスとして使用されます。環境変数を設定しないと、エラーが発生します。ライブラリー名とテキスト名の両方を指定すると、コンパイラーは、それら 2 つの値の間にパス分離文字 (/) を挿入し、ライブラリー名とテキスト名を連結することによって、コピー・テキストのパス名を作ります。たとえば、COPY MYCOPY OF MYLIB について以下のように設定されているとします。

```
MYCOPY=mystuff/today.cpy  
MYLIB=/u/user1
```

これらの設定は、以下のようになります。

```
/u/user1/mystuff/today.cpy
```

ライブラリー名が、コピー・テキストのコピー元のパスを示す環境変数の場合は、以下のような ADDENVVAR コマンドを使用して、ライブラリー名を定義します。

```
ADDENVVAR ENVVAR(COPYLIB) VALUE(/u/mystuff/copybooks)
```

環境変数の名前は英大文字でなければなりません。複数のコピー・ライブラリーを指定するには、環境変数を : (コロン) で区切られた複数のパス名に設定します。ライブラリー名が省略され、テキスト名が絶対パス名でない場合は、コピー・テキストは、以下の順番で検索されます。

1. 現行ディレクトリー
2. INCDIR パラメーターに指定したパス

3. SYSLIB 環境変数で指定したパス

IBM 拡張 の終り

EJECT ステートメント

IBM 拡張

EJECT ステートメントは、次のソース・ステートメントを次のページの一番上に印刷することを指定します。

EJECT ステートメント - 形式

```
▶▶ EJECT [.] ▶▶
```

EJECT ステートメントを指定する行には、他のステートメントを指定してはなりません。このステートメントは、区域 A と区域 B のどちらにでも書くことができ、分離文字ピリオドで終わらせることができます。

EJECT ステートメントはソース・プログラム自体のコンパイルには影響を与えません。

IBM 拡張 の終り

REPLACE ステートメント

REPLACE ステートメントは、ソース・プログラムのテキストを置き換えるために使用されます。

REPLACE ステートメントは、文字ストリングを指定できる場所であれば、ソース・プログラム内のどこにでも指定できます。このステートメントは、個別にコンパイルされるプログラムの最初のステートメントである場合を除き、前に分離文字ピリオドを付けなければなりません。分離文字ピリオドで終わらせる必要があります。

REPLACE ステートメントは、COPY ライブラリー内のテキストだけではなく、ソース・プログラム全体に作用する点を除き、COPY ステートメントの REPLACING 句と類似しています。

REPLACE ステートメント - 形式 1

```
▶▶ REPLACE [.] ==疑似テキスト-1== BY ==疑似テキスト-2== . ▶▶
```

一致するそれぞれの疑似テキスト -1 が、対応する疑似テキスト -2 によって置き換えられます。この処理は、次のいずれかが検出されるまで継続されます。

REPLACE ステートメント

- REPLACE ステートメントの次のオカレンス
- プログラムの終わり
- REPLACE OFF (以下の形式 2 を参照してください)

REPLACE ステートメント - 形式 2

▶▶—REPLACE—オフ—◀◀

形式 2 は、形式 1 によって指定された現行のテキスト置き換えを終了させます。

疑似テキスト -1、疑似テキスト -2

疑似テキストは、疑似テキスト分離文字 (==) によって結合された (ただし分離文字は含まない) 一連のテキスト語、コメント行、または区切りスペースです。

疑似テキスト -1 は、分離文字コンマまたは分離文字セミコロン以外の、最低 1 個のテキスト語を含んでいなければなりません。最初と最後のスペースは、テキスト比較処理には含まれません、複数の組み込みスペースはシングル・スペースであると見なされます。

疑似テキスト -2 は、テキスト語を含んでいる必要はなく、また、スペース文字またはコメント行 (あるいはその両方) だけから構成できます。

疑似テキスト -1 には、分離文字で結合しなければならないテキスト語が必要であるため、疑似テキストをデータ名の一部 (たとえば接頭部) を置き換えるのに使用することはできません。データ名全体が置き換えられる必要があります。

IBM 拡張

疑似テキスト -1 または疑似テキスト -2 に、DBCS 文字ストリングまたは国別文字ストリングを含めることができます。ただしこの場合、疑似テキストは 2 行にわたってはなりません。

REPLACE ステートメントが有効である場合には、形式 2 - DDS 変換 COPY ステートメントのレイアウトにはある特定の制限があります。(641 ページの『COPY ステートメント - 形式 2 - DDS 変換』を参照してください。)

IBM 拡張 の終り

REPLACE ステートメントは、すべての COPY ステートメントが処理された後で処理されます。REPLACE ステートメントの処理の結果得られるテキストには、REPLACE ステートメントが入ってはいけません。

置き換えのアルゴリズム

たとえば、REPLACE ステートメントの中に 3 つの突き合わせられる疑似テキストの対があるとします。

1. 比較は、REPLACE ステートメントに続く左端のソース・プログラム・テキスト語と、最初の疑似テキスト -1 から開始されます。
2. 疑似テキスト -1 は、次の規則に従って、等しい数の連続したソース・プログラム・テキスト語と比較されます。
 - 比較は文字単位で行われます。
 - 大文字と小文字は同等です (リテラル内を除く)。

- 分離文字コンマ、セミコロン、および 1 つまたは複数のスペースは、単一のスペースとして扱われます。
- コメント行およびブランク行は、マッチングの目的では無視されます。

IBM 拡張

- EJECT、SKIP 1/2/3、または TITLE ステートメントを含む行は、マッチングの目的では無視されます (コメント行として扱われます)。

IBM 拡張 の終り

- デバッグ行は突き合わせのために処理されますが、標識域の D は無視されません。
3. 一致が検出されない場合には、一致が検出される (ステップ 5 に進む) まで、後続の疑似テキスト -1 それぞれについて比較が繰り返されます (この例では、3 つあります)。
 4. 結局一致が検出されなかった場合には、次のソース・プログラム・テキスト語が左端のソース・プログラム・テキスト語として扱われ、サイクルが再びステップ 1 から始まります。
 5. 一致が検出されると、対応する疑似テキスト -2 によってソース・プログラム内の一致したテキストが置き換えられます。
 6. 一致に関与した右端のソース・プログラム・テキスト語の直後のテキスト語が、左端のソース・プログラム・テキスト語になります。サイクルは、最初に現れる疑似テキスト -1 から再び始まります (ステップ 1)。

プログラミング上の注意事項

SOURCE-COMPUTER 段落に WITH DEBUGGING MODE 文節が指定されていない場合には、すべての COPY および REPLACE ステートメントが処理された後、デバッグ行はコメント行のすべての特性を持つものと見なされます。

REPLACE ステートメントの処理の結果としてソース・プログラムに追加の行が取り入れられる場合、新しい行の標識域には、置き換えられるテキストの行と同じ文字が入ります。ただし、行にハイフンが入っていると、新しい行にはスペースが入ります。

疑似テキスト -2 の中のリテラルが、疑似テキスト -1 が入っている行に収まりきらず、そのリテラルがデバッグ行に置かれなない場合には、リテラルの残りの部分を含む追加の継続行が取り入れられます。疑似テキスト -1 がデバッグ行にある場合には、プログラムがエラー状態になります。

SKIP1/2/3 ステートメント

IBM 拡張

SKIP1/2/3 ステートメントは、ソース・リストを印刷するときにコンパイラーが追加しなければならないブランク行を指定します。SKIP ステートメントはソース・プログラム自体のコンパイルには影響を与えません。

SKIP1/2/3 ステートメント

SKIP1/2/3 ステートメント - 形式



SKIP1

空白行を 1 つ指定します (2 行送り)。

SKIP2

空白行を 2 つ指定します (3 行送り)。

SKIP3

空白行を 3 つ指定します (4 行送り)。

SKIP1、SKIP2、または SKIP3 によって、2 行、3 行、または 4 行送りが 1 回発生します。

SKIP1、SKIP2、または SKIP3 は、区域 A または区域 B のどこにでも書くことができ、分離文字ピリオドで終わらせることができます。このステートメントを指定する行には、他のステートメントを指定してはなりません。

IBM 拡張 の終り

TITLE ステートメント

IBM 拡張

TITLE ステートメントは、コンパイル中に作り出されるソース・リストの各ページの上部に印刷されるタイトルを指定します。タイトル行は、コンパイラと現行のリリース・レベルの ID が入った行の下に印刷されます。表題は表題行で左寄せされます。

TITLE ステートメント - 形式



リテラル

非数字でなければならず、後に分離文字ピリオドを書くことができます。表意定数であってはなりません。DBCS リテラルまたは国別 16 進リテラルにすることができます。

TITLE ステートメントの働きを次に示します。

- 即座に強制的に改ページします。
- ソース・リストには印刷されません。
- コンパイルに対して他の影響は与えません。
- プログラムの実行には影響を与えません。

LIST オプションによって作り出されたリスト内の各ページごとに表題行が作り出されます。この表題行には、ソース・ステートメントの中で見つかった最後の TITLE ステートメントかまたはデフォルトが使用されます。

TITLE という語は区域 A と区域 B のいずれからでも始めることができます。

TITLE ステートメントは別の行へ継続させることはできません。

TITLE ステートメントはどの部のどの場所にも書いてもかまいません。

TITLE ステートメントと同じ行に他のステートメントを書くことはできません。

IBM 拡張 の終り

USE ステートメント

USE ステートメントは、システム定義のプロシージャに加えて実行される、入出力例外またはエラー処理用のプロシージャを指定します。USE ステートメントはコンパイラ指示ステートメントですが、手続き部にしか指定できません。また、区域 B でだけ始めることができます。(GLOBAL 句の使用については 669 ページの『ネストされたプログラムについての優先順位規則』を参照してください。)

USE ステートメント - 形式 1 - EXCEPTION/ERROR

EXCEPTION と ERROR は同義であり、相互に交換して使用できます。

USE ステートメント - 形式



ファイル名-1

すべてのファイルに対して有効です。このオプションを指定すると、指定したファイルに対してだけプロシージャが実行されます。ファイル名としてソート・ファイルまたはマージ・ファイルを参照することはできません。1つのファイルについては、1つの EXCEPTION/ERROR プロシージャしか指定できません。したがって、ファイル名の指定によって、複数の EXCEPTION/ERROR プロシージャの実行要求が同時に起こってはなりません。ファイル名を指定した USE AFTER EXCEPTION/ERROR 宣言ステートメントは、ファイルのオープン・モードを指定した宣言ステートメントよりも優先されます。

IBM 拡張

ファイル名句は TRANSACTION ファイルに対しても有効です。

IBM 拡張 の終り

INPUT

すべてのファイルに対して有効です。このオプションを指定すると、INPUT モードでオープンされ、エラーが生じたすべてのファイルに対してプロシージャが実行されます。

OUTPUT

すべてのファイルに対して有効です。このオプションを指定すると、OUTPUT モードでオープンされ、エラーが生じたすべてのファイルに対してプロシージャが実行されます。

I-O

すべての直接アクセス・ファイルに対して有効です。このオプションを指定すると、I-O モードでオープンされ、エラーが生じたすべてのファイルに対してプロシージャが実行されます。

IBM 拡張

I-O 句は TRANSACTION ファイルに対しても有効です。

IBM 拡張 の終り

EXTEND

このオプションを指定すると、EXTEND モードでオープンされ、エラーが生じたすべてのファイルに対してプロシージャが実行されます。

EXCEPTION/ERROR プロシージャが実行されるのは、次のいずれかのときです。

- システム定義の入出力エラー・ルーチンの完了後。
- INVALID KEY または AT END 句が入出力ステートメントの中で指定されていない場合に INVALID KEY または AT END 条件が検出されたとき。
- 状況キー 1 が 9 に設定されるような IBM 定義の条件が検出されたとき。
(297 ページの『状況キー』を参照してください。)

READ、WRITE、REWRITE、START、ACQUIRE、DROP、OPEN、または CLOSE ステートメントの実行中に入出力エラーが発生した場合には、EXCEPTION/ERROR プロシージャが活動化されます。どの条件がエラーであるかを判別するには、296 ページの『共通の処理機能』を参照してください。

EXCEPTION/ERROR 宣言プロシージャの実行後は、エラーの原因となった入出力ステートメントの直後のステートメントに制御が戻されます。

宣言プロシージャの中には、非宣言プロシージャに対する参照があってはなりません。プログラムの非宣言部分には、EXCEPTION/ERROR 宣言プロシージャの中で指定されているプロシージャ名に対する参照があってはなりません。ただし、例外として、PERFORM ステートメントでは、EXCEPTION/ERROR プロシージャまたはそれに関連付けられているプロシージャを参照できます。

EXCEPTION/ERROR 宣言プロシージャーの中には、以前に呼び出され、呼び出し側のルーチンへまだ制御を戻していない USE プロシージャーを実行させるステートメントを組み込むことはできません。

USE ステートメントのプログラミング上の注意事項

EXCEPTION/ERROR 宣言プロシージャーは、入出力エラーが発生するたびに状況キーの値をチェックするために使用できます。エラーの原因となったファイルに関する追加の情報は、簡略名、OPEN-FEEDBACK、および I-O-FEEDBACK からのデータを使用することによって得ることができます。

ファイルに対して EXCEPTION/ERROR 宣言プロシージャーを指定する際には、注意を払う必要があります。ファイルに対する最初の OPEN が正常に終了する前に、オブジェクト・プログラムによって現行の宣言が確立されることはありません。したがって、オープンされていないファイルに対して他の I-O ステートメントが実行された場合には、宣言は制御を受け取ることができません。ただし、このファイルが以前にオープンされたことがある場合には、直前に確立された宣言プロシージャーが制御を受け取ります。

たとえば、OPEN OUTPUT ステートメントによってこのファイルに対する宣言プロシージャーが確立され、その後でエラーが起これずにこのファイルがクローズされたものとして扱われます。後の処理の中で論理エラーが発生した場合には、このファイルが OUTPUT モードでオープンされたときに確立された宣言プロシージャーへ制御が渡されます。

エラー処理: 入出力エラーが発生したときに、適用可能なファイル状況文節がある (しかし、適用可能な USE プロシージャーはない) 場合には、ファイル状況が更新され、制御がプログラムに戻されます。エラーを処理するファイル状況文節、USE プロシージャー (暗黙または明示)、AT END 句、または INVALID KEY 句がない場合には、実行時メッセージが出されて、プログラムを終了させるかプログラムへ戻るかを選択することになります。

ネストされたプログラムについての優先順位規則

以下に、プログラムが他のプログラム内に含まれている場合の特殊な優先順位規則を示します。これらの規則を適用する際には、該当する最初の宣言だけが実行用に選択されます。選択される宣言は、その宣言の実行規則を満たさなければなりません。宣言の選択に関する優先順位は、次のとおりです。

1. 該当する条件を起こしたステートメントが入っているプログラム内のファイル固有の宣言 (GLOBAL 句を指定する、または指定しない *USE AFTER ERROR ON* ファイル名-1 の形式)。
2. 該当する条件を起こしたステートメントが入っているプログラム内のモード固有の宣言 (GLOBAL 句を指定する、または指定しない *USE AFTER ERROR ON* INPUT の形式)。
3. GLOBAL 句が指定されており、該当する条件について最後に調べられたプログラムを直接に含むプログラム内にあるファイル特定宣言。
4. GLOBAL 句が指定されており、該当する条件について最後に調べられたプログラムを直接に含むプログラム内にあるモード特定宣言。
5. 規則 3 および 4 が、プログラムのネスト内の親に対して再帰的に適用されません。

USE ステートメント

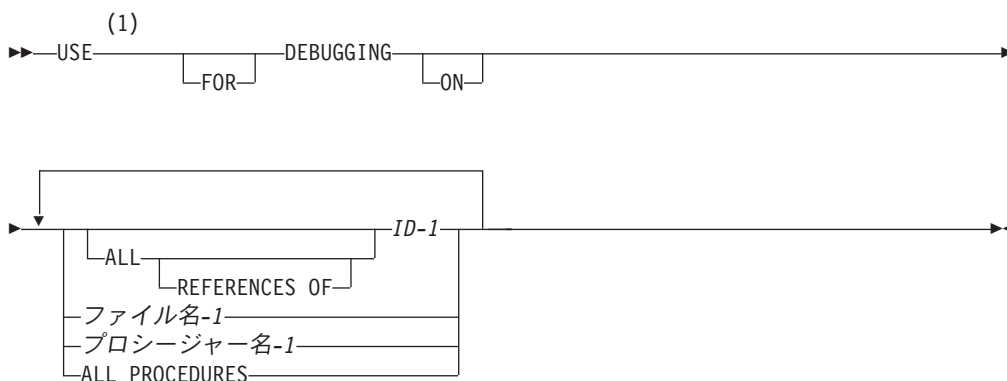
注: 各宣言プロシージャは、同じ ILE COBOL プログラムの他の宣言プロシージャおよび非宣言の呼び出しから独立する呼び出しとして実行されます。

USE FOR DEBUGGING

USE FOR DEBUGGING 宣言は、関連するデバッグ・プロシージャによってモニターされる、ソース・プログラム内の項目を識別します。この宣言では、特定のエラーの発生時あるいは特定の項目またはファイルの変更時に実行すべきプロシージャを確立します。

USE FOR DEBUGGING 宣言は、構文検査され、文書として扱われます。

USE FOR DEBUGGING 宣言 - 形式



注:

1 構文検査だけ行われます。

ID-1 を参照変更することはできません。

このステートメントは、デバッグ・モードにあるときにだけコンパイルされます。

コンパイラは、次の有効な USE AFTER EXCEPTION ERROR ステートメントまたは END DECLARATIVES 分離文字に到達するまで、このステートメントに続くすべてのステートメントをコメントとして扱います。

第 8 部 付録

付録 A. ILE COBOLコンパイラー限界値

次の表は、ILE COBOL コンパイラーによってサポートされるコンパイラー限界値の一覧です。

表 42. ILE COBOL コンパイラー限界値

言語エレメント	ILE COBOL の限界値
全般	
以下の数: 一度にオープンされるファイル ネストされた COPY 中のネスト・レベル COPY 中の REPLACING オペランド	実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1)
リテラルの全長	実質的に限界はありません (1)
VALUE 文節に使用可能な総ストレージ	実質的に限界はありません (1)
以下を識別する文字数: ライブラリー名 プログラム名 プログラム・オブジェクト ILE プロシージャ テキスト名	10 10 250 10
環境部	
以下の数: SELECT ファイル名 1 つのファイル内の代替レコード・キー 代替レコード・キーを形成するために使用できる連続する DDS フィールド	実質的に限界はありません (1) 253 156
RESERVE 文節に指定されるバッファ (領域) の最大数	実質的に限界はありません (1)
以下の長さ: 1 つのファイル内の RECORD KEY 1 つのファイル内の ALTERNATE RECORD KEY	2,000 バイト 2,000 バイト
データ部	
以下の長さ: 作業用ストレージ・セクショングループ項目 リンケージ・セクションのグループ項目 ローカル・ストレージ・セクション 基本項目	16,711,568 バイト 16,711,568 バイト 16,711,568 バイト 16,711,568 バイト

ILE COBOL コンパイラ限界値

表 42. ILE COBOL コンパイラ限界値 (続き)

言語エレメント	ILE COBOL の限界値
最大ブロック・サイズ	32,767 バイト
最大レコード長	32,767 バイト
以下の数: FD ファイル名 OCCURS レベル データ階層内のレベル SD ファイル名	実質的に限界はありません (1) 7 49 実質的に限界はありません (1)
以下の数: 数字編集 (データ項目) の 文字位置 ピクチャー文字ストリング ピクチャー複製	127 90 16,711,568
OCCURS テーブル・サイズ (固定長) テーブル・サイズ (可変長) テーブル・エレメント・サイズ 1 つのテーブルの中の ASC/DESC KEY 文節 の数 1 つのテーブルの中の ASC/DESC キー の数 指標名 (テーブル単位) INDEXED BY 文節 (テーブル単位) 1 つのテーブルの中のポインター	16,711,568 バイト 16,711,568 バイト 16,711,568 バイト 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 1 実質的に限界はありません (1)
手続き部	

表 42. ILE COBOL コンパイラー限界値 (続き)

言語エレメント	ILE COBOL の限界値
以下の数: GO TO プロシージャ名 DEPENDING ON ネストされた IF ステートメント IF のネスト・レベル ネストされた EVALUATE ステートメント CALL パラメーター プログラム・オブジェクトへの ILE プロシージャへの 組み込み関数の FUNCTION ネスト・レベルの限界 SORT-MERGE 入力ファイル SORT-MERGE 出力ファイル SORT-MERGE キー SEARCH ALL ... WHEN 比較条件 UNSTRING 分離文字 INSPECT TALLYING ID INSPECT REPLACING ID	実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 255 400 123 32 32 2,000 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1) 実質的に限界はありません (1)
以下の長さ: SORT-MERGE キー	2,000 バイト
注: 1. 限界は、ハードウェア構成によって異なりますが、非常に大きな数です。ほとんどのアプリケーションではそれに達することはありません。	

付録 B. 中間結果と算術精度

コンパイラーは、算術ステートメントを、演算子優先順位に従って実行される演算の連続として取り扱い、これらの演算の結果を入れるための中間フィールドを設定します。

中間結果が生成される可能性があるのは、次の場合です。

- ADD または SUBTRACT ステートメントで、verb の直後に複数のオペランドがある場合。
- COMPUTE ステートメントで、一連の算術演算または複数の結果フィールドを指定している場合。
- 算術式で、条件ステートメントおよび参照変更の指定に含まれている場合。
- GIVING オプションで、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、または DIVIDE ステートメントに対する複数の結果フィールドを持つ場合。
- ステートメントで、組み込み関数をオペランドとして使用している場合。

コンパイラーが、いつ固定小数点演算または浮動小数点演算を使用するかについては、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『データ項目の取り扱い』の章を参照してください。

中間結果の精度の計算

コンパイラーはアルゴリズムを使用して、中間結果用に確保された整数桁および小数桁の数を判別します。

以下に、中間結果用に確保される整数桁および小数桁の数をコンパイラーが判別する方法について説明します。その中で次の省略語を使用します。

- i** 中間結果用に確保される整数桁の数。
- d** 中間結果用に確保される小数桁の数。

ROUNDED

ROUNDED オプションを使用する場合、より正確にするために、もう 1 つの整数または小数が、必要であれば付け加えられることがあります。最終結果だけが丸められます。中間結果は丸められません。正確に丸めることができる最大桁数は 62 桁です。

dmax 特定のステートメントの中で、次のうちの最大のもの。

- 最終結果フィールドに必要な小数桁の数。
- 任意のオペランド用に定義された小数桁の最大数。
- 任意の関数オペランドの outer-dmax。

inner-dmax

関数の inner-dmax は次のうちの最大のものです。

- 任意の基本引数用に定義された小数桁の数。
- 任意の算術式引数用の dmax。

- 任意の組み込み関数用の outer-dmax。

outer-dmax

関数結果が、それ自身の評価の外側にある演算に対して、どのような結果をもたらすかを決定する数 (たとえば、その関数が算術式中のオペランドである、または他の関数への引数である場合)。

op1 生成された算術ステートメントの最初のオペランド。除算では、op1 は除数です。

op2 生成された算術ステートメントの 2 番目のオペランド。除算では、op2 は被除数です。

i1, i2 op1 と op2 のそれぞれの整数桁の数。

d1, d2

op1 または op2 用にそれぞれ定義された小数桁の数。

ir 生成された算術ステートメントまたは演算の処理から得られる中間結果フィールド。中間結果は、ir1、ir2 等で表されます。後続の中間結果が同じメモリー・ロケーションを共有することもあります。

COMPUTE ステートメントを使って、算術式での中間結果の使用方法を以下に示します。この場合、次のステートメントは、

```
COMPUTE Y = A + B * C - D / E + F ** G
```

以下のように置き換えられます。

F ** G		ir1 が生成される
MULTIPLY B	BY C	ir2 が生成される
DIVIDE E	INTO D	ir3 が生成される
ADD A	TO ir2	ir4 が生成される
SUBTRACT ir3	FROM ir4	ir5 が生成される
ADD ir5	TO ir1	Y が生成される

コンパイラーによる中間結果の計算

ir の中の整数桁の数は、次のように計算されます。

最初に、コンパイラーは、ir を生成するために使用されるオペランドのそれぞれに数字を割り当て、演算から得られる値を判別することにより、ir に入る可能性のある最大値を判別します。

- このステートメントのオペランドがデータ名の場合、そのデータ名に使用される値はそのデータ名の PICTURE の数字と等しくなります (すなわち、PICTURE 9V99 は値 9.99 をもちます)。
- オペランドがリテラルの場合、そのリテラルは PICTURE をもっているかのように取り扱われ、PICTURE の数字が使用されます (すなわち、リテラル +127.3 は暗黙の PICTURE S999V9 をもっています)。
- オペランドが中間結果の場合、前の演算で中間結果用に判別された PICTURE が使用されます。その PICTURE の数字が使用されます。
- 演算が除算である場合は、

- op2 がデータ名である場合、op2 に使用される値は、そのデータ名の PICTURE 内の桁のゼロでない最小値となります (すなわち、PICTURE 9V99 は値 0.01 をもちます)。
- op2 が中間結果である場合、その中間結果は PICTURE をもっているかのように取り扱われ、この PICTURE 内の桁のゼロでない最小値が使用されます。

上記のプロシーチャーによって ir の最大値が判別されると、i は最大値の中の整数桁の数と等しく設定されます。

ir に含まれる小数桁の数は次のように計算されます。

表 43. 中間結果の精度の判別

演算	整数桁の数	小数桁の数
+ または -	(i1 または i2) + 1 のいずれか大きい方	d1 または d2 のいずれか大きい方
*	i1 + i2	d1 + d2
/	i2 + d1	(d2 - d1) または dmax のいずれか大きい方
**	i2 が 0 と等しい場合 $\max(\min(i1,18),1)$ (op2 が非整数の場合) ¹ $\max(\min(i1 * i1,18),1)$ (op2 が整数リテラルの場合) ¹ i2 が 0 と等しくない場合 $\max(\min(i1 * (9 * i2),18),1)$ (op2 が非整数の場合) ¹ $\max(\min(i1 * i1 * (9 * i2),18),1)$ (op2 が整数リテラルの場合) ¹	op2 が非整数またはデータ名であれば、dmax、 op2 が整数リテラルであれば、 d1 * op2。 リテラル
注: 1. これらの結果はそれ以降の処理の対象となります。		

最終結果で希望する精度を得るためには、任意の算術ステートメントのオペランドを十分な小数桁で定義しなければなりません。

表 44 は、固定小数点数の中間結果を処理するときのコンパイラーの処置を示します。

表 44. コンパイラーが中間結果の切り捨てを行う時期の判別

i + d ² の値	d の値	i + dmax の値	処置
< MAXLENGTH ¹ = MAXLENGTH	任意の値	任意の値	整数桁 i と少数桁 d が ir 用に確保されます。
> MAXLENGTH ³	< dmax = dmax	任意の値	MAXLENGTH - d 整数桁と d 小数桁が ir 用に確保されます。
	> dmax	< MAXLENGTH = MAXLENGTH	i 整数桁と MAXLENGTH - i 小数桁が ir 用に確保されます。
		> MAXLENGTH	MAXLENGTH - dmax 整数桁と dmax 小数桁が ir 用に確保されます。

コンパイラーによる中間結果の計算

表 44. コンパイラーが中間結果の切り捨てを行う時期の判別 (続き)

$i + d^2$ の値	d の値	$i + d_{max}$ の値	処置
注:			
1. MAXLENGTH は次のいずれかの値です。 <ul style="list-style-type: none">• 10 進数の 18			
IBM 拡張			
<ul style="list-style-type: none">• (デフォルト) コンパイラー・オプション *NOEXTEND または PROCESS ステートメント・オプション NOEXTEND が指定されているときには、10 進数の 30。• 算術計算モード・コンパイラー・オプション *EXTEND31 または PROCESS ステートメント・オプション EXTEND31 が指定されている場合、10 進数の 31。• 算術計算モード・コンパイラー・オプション *EXTEND63 または PROCESS ステートメント・オプション EXTEND63 が指定されているときには、10 進数の 63。			
IBM 拡張 の 終 り			
2. $i + d$ の値が MAXLENGTH よりも小さい偶数である場合、コンパイラーは 1 を加算することによってそれを奇数に変換します。			
3. $i + d$ の値が 63 を超える場合は、ステートメントに SIZE ERROR 句が含まれていても、システム・メッセージ MCH1202 が出されることがあります。			

中間結果フィールドが MAXLENGTH 桁を超える可能性があると考えられる場合には、浮動小数点オペランド (COMP-1 および COMP-2) を使用して、切り捨てを避けることができます。

整数関数

これらの関数は常に整数を戻し、outer-dmax は常にゼロになります。引数が整数でなければならない関数に関しては、inner-dmax は常にゼロになります。

浮動小数点データと中間結果

IBM 拡張

浮動小数点命令は、以下の任意の条件が真の場合、算術式を計算するために使用されます。

- 式の受け入れ項目またはオペランドは、COMP-1、COMP-2、外部浮動小数点データ、または浮動小数点リテラルです。
- 組み込み数字関数は、浮動小数点関数です。
- 式は、浮動小数点関数の引数です。

算術式の任意の演算が浮動小数点で計算された場合、その式全体は、すべてのオペランドが浮動小数点に変換されたかのように、また演算が浮動小数点命令を使用して評価されたかのように、計算されます。

式が浮動小数点で計算される場合は、式の任意の受け入れ項目またはオペランドが COMP-1 でないとき、または乗算または指数演算が式に現れたとき、倍精度浮動小

数点が表示されます。算術式の 1 つの演算で倍精度浮動小数点が表示された場合は、式のすべての演算が、倍精度浮動小数点命令が使用されたかのように計算されます。

浮動小数点の指数は、常に倍精度浮動小数点演算を使用して評価されます。

負の数の、小数の累乗の値は未定義になります。たとえば、 $(-2) ** 3$ は -8 になりますが、 $(-2) ** (3.000001)$ は未定義になります。指数が浮動小数点で評価され、その指数の値が未定義になる（上記の例のように）可能性がある場合、その指数の値が実際に整数であるかどうかを判別するため、実行時に評価されます。

浮動小数点の数字関数は、常に倍精度浮動小数点値を戻します。浮動小数点関数および固定小数点関数のリストについては、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『数字関数のタイプ』を参照してください。

算術式は、算術ステートメント以外のコンテキストの中に出てきてもかまいません。たとえば、算術式を IF ステートメントで使用できます。このようなステートメントでは、中間結果、浮動小数点、および倍精度浮動小数点に関する規則は、次の変更とともに適用されます。

- 省略形の IF ステートメントは、そのステートメントが省略されなかったかのように処理されます。
- 必要関係演算子が 2 つのオペランド（ここでは被比較数として参照）間の比較を定義するために使用されている場合、明示的比較条件が存在します。片方または両方の被比較数が算術式である明示的比較条件において、中間結果に関する規則は、両方の被比較数の属性を考慮して判別されます。このことはつまり、`dmax` は、除数および指数を除く、いずれかの被比較数の任意のオペランドに対して定義された小数桁の最大数になるように定義されているということです。浮動小数点および倍精度浮動小数点に関する規則は、いずれかの被比較数の任意のオペランドが、`COMP-1`、`COMP-2`、外部浮動小数点データ、または浮動小数点リテラルである場合に、適用されます。

たとえば、次のステートメントの場合、

```
IF operand-1 = expression-1 THEN . . .
```

オペランド `-1` が `COMP-2` で定義されているデータ名で、式 `-1` が固定小数点オペランドのみを含んでいる場合、浮動小数点演算に関する規則は、式 `-1` が浮動小数点オペランドと比較されているため、式 `-1` に適用されます。

- 算術式と、データ項目または他の算術式のいずれかとの間の比較が、関係演算子を使用しないで定義されていた場合、明示的比較条件が存在するとは言えません。これらの場合、その比較は、明示的な演算子を持つ 1 つまたは複数の IF ステートメントとして書き直すことができます。したがって、それぞれの IF ステートメントは、上記で概説された明示的な比較条件についての規則に従います。たとえば、次のステートメントの場合、

```
EVALUATE expression-1
  WHEN expression-2 THRU expression-3
  WHEN expression-4
  .
  .
  .
END-EVALUATE
```

コンパイラによる中間結果の計算

同等の IF ステートメントは、次のようになります。

```
IF expression-1 >= expression-2 AND
   expression-1 <= expression-3
IF expression-1 = expression-4
then for each IF statement, the comparands must be looked at
to determine if all the arithmetic in that IF statement will
be fixed-point or floating-point.
```

IBM 拡張 の終り

付録 C. EBCDIC および ASCII 照合順序

この付録では、EBCDIC (拡張 2 進化 10 進交換コード) と ASCII (情報交換用米国標準コード) の両方の文字セット用の昇順の照合順序を示します。各文字の記号および意味の他に、順序数 (1 から始まる)、10 進表記、および 16 進表記が示されています。

EBCDIC 照合順序

順序数	記号	意味	10 進表記	16 進表記
65	b	スペース	64	40
...				
75	¢	セント記号	74	4A
76	.	ピリオド、小数点	75	4B
77	<	不等号 (より小)	76	4C
78	(左括弧	77	4D
79	+	プラス記号	78	4E
80		縦線、論理 OR	79	4F
81	&	アンパーサンド	80	50
...				
91	!	感嘆符	90	5A
92	\$	円記号	91	5B
93	*	アスタリスク	92	5C
94)	右括弧	93	5D
95	;	セミコロン	94	5E
96	¬	論理 NOT	95	5F
97	-	マイナス、ハイフン	96	60
98	/	スラッシュ	97	61
...				
108	,	コンマ	107	6B
109	%	パーセント記号	108	6C
110	_	下線	109	6D
111	>	不等号 (より大)	110	6E
112	?	疑問符	111	6F
...				
123	:	コロン	122	7A
124	#	番号記号、ポンド記号	123	7B
125	@	単価記号、推定記号	124	7C
126	'	アポストロフィ、プライム符号	125	7D
127	=	等号	126	7E

EBCDIC、および ASCII 照合順序

順序数	記号	意味	10 進表記	16 進表記
128	"	引用符	127	7F
...				
130	a		129	81
131	b		130	82
132	c		131	83
133	d		132	84
134	e		133	85
135	f		134	86
136	g		135	87
137	h		136	88
138	i		137	89
...				
146	j		145	91
147	k		146	92
148	l		147	93
149	m		148	94
150	n		149	95
151	o		150	96
152	p		151	97
153	q		152	98
154	r		153	99
...				
163	s		162	A2
164	t		163	A3
165	u		164	A4
166	v		165	A5
167	w		166	A6
168	x		167	A7
169	y		168	A8
170	z		169	A9
...				
194	A		193	C1
195	B		194	C2
196	C		195	C3
197	D		196	C4
198	E		197	C5
199	F		198	C6
200	G		199	C7
201	H		200	C8
202	I		201	C9
...				

順序数	記号	意味	10 進表記	16 進表記
210	J		209	D1
211	K		210	D2
212	L		211	D3
213	M		212	D4
214	N		213	D5
215	O		214	D6
216	P		215	D7
217	Q		216	D8
218	R		217	D9
...				
227	S		226	E2
228	T		227	E3
229	U		228	E4
230	V		229	E5
231	W		230	E6
232	X		231	E7
233	Y		232	E8
234	Z		233	E9
...				
241	0		240	F0
242	1		241	F1
243	2		242	F2
244	3		243	F3
245	4		244	F4
246	5		245	F5
247	6		246	F6
248	7		247	F7
249	8		248	F8
250	9		249	F9

ASCII 照合順序

順序数	記号	意味	10 進表記	16 進表記
1		ヌル	0	0
...				
33	␣	スペース	32	20
34	!	感嘆符	33	21
35	"	引用符	34	22
36	#	番号記号	35	23
37	\$	円記号	36	24

EBCDIC、および ASCII 照合順序

順序数	記号	意味	10 進表記	16 進表記
38	%	パーセント記号	37	25
39	&	アンパーサンド	38	26
40	'	アポストロフィ、プライム符号	39	27
41	(左括弧	40	28
42)	右括弧	41	29
43	*	アスタリスク	42	2A
44	+	プラス記号	43	2B
45	,	コンマ	44	2C
46	-	ハイフン、マイナス	45	2D
47	.	ピリオド、小数点	46	2E
48	/	スラッシュ	47	2F
49	0		48	30
50	1		49	31
51	2		50	32
52	3		51	33
53	4		52	34
54	5		53	35
55	6		54	36
56	7		55	37
57	8		56	38
58	9		57	39
59	:	コロン	58	3A
60	;	セミコロン	59	3B
61	<	不等号 (より小)	60	3C
62	=	等号	61	3D
63	>	不等号 (より大)	62	3E
64	?	疑問符	63	3F
65	@	単価記号、推定記号	64	40
66	A		65	41
67	B		66	42
68	C		67	43
69	D		68	44
70	E		69	45
71	F		70	46
72	G		71	47
73	H		72	48
74	I		73	49
75	J		74	4A
76	K		75	4B
77	L		76	4C
78	M		77	4D

EBCDIC、および ASCII 照合順序

順序数	記号	意味	10 進表記	16 進表記
79	N		78	4E
80	O		79	4F
81	P		80	50
82	Q		81	51
83	R		82	52
84	S		83	53
85	T		84	54
86	U		85	55
87	V		86	56
88	W		87	57
89	X		88	58
90	Y		89	59
91	Z		90	5A
92	[左大括弧	91	5B
93	\	逆スラッシュ	92	5C
94]	右大括弧	93	5D
95	^	曲折アクセント記号、脱字記号	94	5E
96	_	下線	95	5F
97		アクサングラフ、右プライム記号	96	60
98	a		97	61
99	b		98	62
100	c		99	63
101	d		100	64
102	e		101	65
103	f		102	66
104	g		103	67
105	h		104	68
106	i		105	69
107	j		106	6A
108	k		107	6B
109	l		108	6C
110	m		109	6D
111	n		110	6E
112	o		111	6F
113	p		112	70
114	q		113	71
115	r		114	72
116	s		115	73
117	t		116	74
118	u		117	75

EBCDIC、および ASCII 照合順序

順序数	記号	意味	10 進表記	16 進表記
119	v		118	76
120	w		119	77
121	x		120	78
122	y		121	79
123	z		122	7A
124	{	左中括弧	123	7B
125	;	縦の分割線	124	7C
126	}	右中括弧	125	7D
127		波形記号	126	7E

付録 D. ILE COBOL 関数名およびコンテキストに依存した語のリスト

この節は、ILE COBOL のコンテキストに依存した語および関数名をすべてリストしたものです。

表示キー

以下のキーは、ILE COBOL 言語の関数名およびコンテキストに依存した語を識別します。

ブランク

標準 COBOL からの、ILE COBOL の関数名またはコンテキストに依存した語。

- (1) 標準 COBOL に対する IBM 拡張である ILE COBOL の関数名またはコンテキストに依存した語。
- (2) ILE COBOL コンパイラーで使用されていない、1985 (1989 年に改訂) ANSI 規格からの COBOL 関数名。

関数名

関数名	関数名	関数名
ACOS	ADD-DURATION (1)	ANNUITY (2)
ASIN	ATAN	CHAR
CONVERT-DATE-TIME (1)	COS	CURRENT-DATE
DATE-OF-INTEGERS	DATE-TO-YYYYMMDD (1)	DAY-OF-INTEGERS
DAY-TO-YYYYDDD (1)	DISPLAY-OF	EXTRACT-DATE-TIME (1)
FACTOR-1	FIND-DURATION (1)	INTEGER (2)
INTEGER-OF-DATE	INTEGER-OF-DAY	INTEGER-PART (2)
LENGTH	LOCALE-DATE (1)	LOCALE-TIME (1)
LOG	LOG10	LOWER-CASE
MAX	MEAN	MEDIAN
MIDRANGE	MIN	MOD (2)
NATIONAL-OF	NUMVAL	NUMVAL-C
ORD	ORD-MAX	ORD-MIN
PRESENT-VALUE	RANDOM (2)	RANGE
REM (2)	REVERSE	SIN
SQRT	STANDARD-DEVIATION	SUBTRACT-DURATION (1)
SUM	TAN	TEST-DATE-TIME
TRIM (1)	TRIML (1)	TRIMR (1)
UPPER-CASE	UTF8STRING (1)	VARIANCE
WHEN-COMPILED	YEAR-TO-YYYY (1)	

コンテキストに依存した語

IBM 拡張	
コンテキストに依存した語	コンテキスト
APPEND	XML GENERATE FILE-STREAM APPEND data-1 FROM data-2
DAYS	MOVE FUNCTION ADD-DURATION(date-1 DAYS 90) (SUBTRACT-DURATION、FIND-DURATION、および EXTRACT-DATE-TIME においても使用可能。)
DEFAULT	SET LOCALE LC_ALL FROM DEFAULT
HOURS	MOVE FUNCTION ADD-DURATION(time-1 HOURS 90) (SUBTRACT-DURATION、FIND-DURATION、および EXTRACT-DATE-TIME においても使用可能。)
LC_ALL	SET LOCALE LC_ALL FROM DEFAULT
LC_COLLATE	SET LOCALE LC_COLLATE FROM DEFAULT
LC_CURRENCY	SET LOCALE LC_CURRENCY FROM DEFAULT
LC_MESSAGES	SET LOCALE LC_MESSAGES FROM DEFAULT
LC_MONETARY	SET LOCALE LC_MONETARY FROM DEFAULT
LC_NUMERIC	SET LOCALE LC_NUMERIC FROM DEFAULT
LC_TIME	SET LOCALE LC_TIME FROM DEFAULT
LC_TYPE	SET LOCALE LC_TYPE FROM DEFAULT
MICROSECONDS	MOVE FUNCTION ADD-DURATION(time-1 MICROSECONDS 30) (SUBTRACT-DURATION、FIND-DURATION、および EXTRACT-DATE-TIME においても使用可能。)
MINUTES	MOVE FUNCTION ADD-DURATION(time-1 MINUTES 35) (SUBTRACT-DURATION、FIND-DURATION、および EXTRACT-DATE-TIME においても使用可能。)
MONTHS	MOVE FUNCTION ADD-DURATION(date-1 MONTHS 12) (SUBTRACT-DURATION、FIND-DURATION、および EXTRACT-DATE-TIME においても使用可能。)
OVERWRITE	XML GENERATE FILE-STREAM OVERWRITE data-1 FROM data-2
SECONDS	MOVE FUNCTION ADD-DURATION(time-1 SECONDS 30) (SUBTRACT-DURATION、FIND-DURATION、および EXTRACT-DATE-TIME においても使用可能。)
SYMBOL	CURRENCY IS "EUR" PICTURE SYMBOL "\$"
TIMESTAMP	05 date-1 FORMAT TIMESTAMP (SPECIAL-NAMES 段落の組み込み関数 TEST-DATE-TIME および CONVERT-DATE-TIME でも検出される。)

関数名およびコンテキストに依存した語のリスト

コンテキストに依存した語	コンテキスト
YEARS	MOVE FUNCTION ADD-DURATION(date-1 YEARS 2) (SUBTRACT-DURATION、FIND-DURATION、および EXTRACT-DATE-TIME においても使用可能。)
YYYYDDD	ACCEPT id-1 FROM DATE YYYYDDD
YYYYMMDD	ACCEPT id-1 FROM DATE YYYYMMDD

IBM 拡張 の終り

関数名およびコンテキストに依存した語のリスト

付録 E. ILE COBOL 予約語リスト

この節は、ILE COBOL の予約語をすべてリストしたものです。

表示キー

以下のキーは、ILE COBOL 言語の予約語を識別します。

ブランク

標準 COBOL からの ILE COBOL 予約語。

- (1) 標準 COBOL に対する IBM 拡張である ILE COBOL 予約語。
- (2) ILE COBOL コンパイラーによって使用されない標準 COBOL からの COBOL 予約語。インストール・システムで互換性を重視する場合は、これらの語を使用すべきではありません。これを使用すると、診断メッセージが出されます。
- (3) 標準 COBOL の中になく、ILE COBOL コンパイラーによってサポートされていない COBOL 予約語。これを使用すると、診断メッセージが出されます。

予約語

予約語	予約語
ACCEPT	ACCESS
ACQUIRE (1)	ADD
ADDRESS (1)	ADVANCING
AFTER	ALIAS (1)
ALL	ALPHABET
ALPHABETIC	ALPHABETIC-LOWER
ALPHABETIC-UPPER	ALPHANUMERIC
ALPHANUMERIC-EDITED	ALSO
ALTER	ALTERNATE
AND	ANY (2)
ARE	AREA
AREAS	ARITHMETIC (3)
ASCENDING	ASSIGN
AT	ATTRIBUTE (1)
AUTHOR	AUTO (1)
AUTO-SKIP (1)	AUTOMATIC (3)
BACKGROUND-COLOR (1)	BACKGROUND-COLOUR (1)
B-AND (3)	BEEP (1)
BEFORE	BELL (1)
B-EXOR (3)	BINARY
BIT (3)	BITS (3)
BLANK	B-LESS (3)
BLINK (1)	BLOCK
B-NOT (3)	BOOLEAN (3)
B-OR (3)	BOTTOM
BY	CALL

ILE COBOL 予約語リスト

予約語	予約語
CANCEL	CD (2)
CF (2)	CH (2)
CHARACTER	CHARACTERS
CLASS	CLOCK-UNITS
CLOSE	COBOL (2)
CODE	CODE-SET
COL (1)	COLLATING
COLUMN	COMMA
COMMIT (1)	COMMITMENT (1)
COMMON	COMMUNICATION (2)
COMP	COMP-0 (3)
COMP-1 (1)	COMP-2 (1)
COMP-3 (1)	COMP-4 (1)
COMP-5 (3)	COMP-6 (3)
COMP-7 (3)	COMP-8 (3)
COMP-9 (3)	COMPUTATIONAL
COMPUTATIONAL-0 (3)	COMPUTATIONAL-1 (1)
COMPUTATIONAL-2 (1)	COMPUTATIONAL-3 (1)
COMPUTATIONAL-4 (1)	COMPUTATIONAL-5 (3)
COMPUTATIONAL-6 (3)	COMPUTATIONAL-7 (3)
COMPUTATIONAL-8 (3)	COMPUTATIONAL-9 (3)
COMPUTE	CONFIGURATION
CONNECT (3)	CONSOLE (1)
CONTAINED (3)	CONTAINS
CONTENT	CONTINUE
CONTROL	CONTROL-AREA (1)
CONTROLS	CONVERTING
COPY	CORR
CORRESPONDING	COUNT
CRT (1)	CRT-UNDER (1)
CURRENCY	CURRENT (3)
CURSOR (1)	DATA
DATE	DATE-COMPILED
DATE-WRITTEN	DAY
DAY-OF-WEEK	DB (3)
DB-ACCESS-CONTROL-KEY (3)	DB-DATA-NAME (3)
DB-EXCEPTION (3)	DB-FORMAT-NAME (1)
DB-RECORD-NAME (3)	DB-SET-NAME (3)
DB-STATUS (3)	DBCS (1)
DBCS-EDITED (1)	DE (2)
DEBUG-CONTENTS	DEBUG-ITEM
DEBUG-LINE	DEBUG-NAME
DEBUG-SUB-1	DEBUG-SUB-2
DEBUG-SUB-3	DEBUGGING
DECIMAL-POINT	DECLARATIVES
DEFAULT (3)	DELETE
DELIMITED	DELIMITER
DEPENDING	DESCENDING
DESCRIBED (1)	DESTINATION (2)
DETAIL (2)	DISABLE (2)
DISCONNECT (3)	DISPLAY
DISPLAY-1 (1)	DISPLAY-2 (3)
DISPLAY-3 (3)	DISPLAY-4 (3)
DISPLAY-5 (3)	DISPLAY-6 (3)

予約語

DISPLAY-7 (3)
 DISPLAY-9 (3)
 DIVISION
 DROP (1)
 DUPLICATES
 EBCDIC (1)
 EJECT (1)
 EMI (2)
 EMPTY-CHECK (1)
 END
 END-ADD
 END-COMPUTE
 END-DISPLAY (1)
 END-EVALUATE
 END-INVOKE (1)
 END-OF-PAGE
 END-READ
 END-RETURN
 END-SEARCH
 END-STRING
 END-UNSTRING
 END-XML (1)
 ENTRY (1)
 EOP
 EQUALS (3)
 ERROR
 EVALUATE
 EXCEEDS (3)
 EXCLUSIVE (3)
 EXTEND
 EXTERNALLY-DESCRIBED-KEY (1)
 FD
 FILE
 FILE-STREAM (1)
 FILLER
 FIND (3)
 FIRST
 FOR
 FOREGROUND-COLOUR (1)
 FREE (3)
 FULL (1)
 GENERATE
 GIVING
 GO
 GREATER
 HEADING (2)
 HIGH-VALUE
 I-O
 ID (1)
 IF
 INDEX
 INDEX-1 (3)
 INDEX-3 (3)
 INDEX-5 (3)

予約語

DISPLAY-8 (3)
 DIVIDE
 DOWN
 DUPLICATE (3)
 DYNAMIC
 EGI (2)
 ELSE
 EMPTY (3)
 ENABLE (2)
 END-ACCEPT (1)
 END-CALL
 END-DELETE
 END-DIVIDE
 END-IF
 END-MULTIPLY
 END-PERFORM
 END-RECEIVE (2)
 END-REWRITE
 END-START
 END-SUBTRACT
 END-WRITE
 ENTER
 ENVIRONMENT
 EQUAL
 ERASE (3)
 ESI (2)
 EVERY
 EXCEPTION
 EXIT
 EXTERNAL
 FALSE
 FETCH (3)
 FILE-CONTROL
 FILES (3)
 FINAL (2)
 FINISH (3)
 FOOTING
 FOREGROUND-COLOR (1)
 FORMAT (1)
 FROM
 FUNCTION
 GET (3)
 GLOBAL
 GOBACK (1)
 GROUP (2)
 HIGHLIGHT (1)
 HIGH-VALUES
 I-O-CONTROL
 IDENTIFICATION
 IN
 INDEXED
 INDEX-2 (3)
 INDEX-4 (3)
 INDEX-6 (3)

ILE COBOL 予約語リスト

予約語

INDEX-7 (3)
INDEX-9 (3)
INDICATE
INDICATORS (1)
INITIALIZE
INPUT
INSPECT
INTO
INVOKE (1)
JUST
KANJI (1)
KEY
LAST
LEADING
LEFT-JUSTIFY (1)
LENGTH-CHECK (1)
LIBRARY (1)
LIMIT (2)
LINAGE
LINE
LINES
LOCALE (1)
LOCAL-STORAGE (1)
LOW-VALUE
MEMBER (3)
MERGE
MODE
MODIFY (3)
MOVE
MULTIPLY
NATIONAL
NEGATIVE
NO
NONE (3)
NULL-KEY-MAP (1)
NULL (1)
NUMBER
NUMERIC-EDITED
OBJECT-COMPUTER
OF
OMITTED
ONLY (3)
OPTIONAL
ORDER
OTHER
OVERFLOW
PACKED-DECIMAL
PAGE
PARSE (1)
PF (2)
PICTURE
PIC
POSITION
PREFIX (1)

予約語

INDEX-8 (3)
INDIC (1)
INDICATOR (1)
INITIAL
INITIATE
INPUT-OUTPUT
INSTALLATION
INVALID
IS
JUSTIFIED
KEEP (3)
LABEL
LD (3)
LEFT
LENGTH
LESS
LIKE (1)
LIMITS (2)
LINAGE-COUNTER
LINE-COUNTER (2)
LINKAGE
LOCALLY (3)
LOCK
LOW-VALUES
MEMORY
METACLASS (1)
MODIFIED (1)
MODULES
MULTIPLE
MESSAGE (2)
NATIVE
NEXT
NO-ECHO (1)
NOT
NULL-MAP (1)
NULLS (1)
NUMERIC
OBJECT (1)
OCCURS
オフ
ON
OPEN
OR
ORGANIZATION
OUTPUT
OWNER (3)
PADDING
PAGE-COUNTER (2)
PERFORM
PH (2)
PLUS (2)
POINTER
POSITIVE
PRESENT (3)

予約語

PRINTING
 PROCEDURE
 PROCEDURES
 PROCESS (1)
 PROGRAM-ID
 PROGRAM
 PURGE (2)
 QUOTE
 RANDOM
 READ
 REALM (3)
 RECURSIVE (1)
 RECORD
 RECORDS
 REEL
 REFERENCE-MONITOR (3)
 RELATION (3)
 RELEASE
 REMOVAL
 REPEATED (3)
 REPLACING
 REPORTING (2)
 REPOSITORY (1)
 RERUN
 RESET
 RETRIEVAL (3)
 RETURNING (1)
 REVERSED
 REWIND
 RF (2)
 RIGHT
 ROLLBACK (1)
 ROUNDED
 SAME
 SD
 SECTION
 SECURITY
 SEGMENT-LIMIT
 SEND (2)
 SEPARATE
 SEQUENTIAL
 SHARED (3)
 SIZE
 SKIP2 (1)
 SORT
 SORT-RETURN (1)
 SOURCE-COMPUTER
 SPACE-FILL (1)
 SPECIAL-NAMES
 STANDARD-1
 START
 STATUS
 STORE (3)
 SUB-QUEUE-1 (2)

予約語

PRIOR (1)
 PROCEDURE-POINTER (1)
 PROCEED
 PROCESSING (1)
 PROMPT (1)
 PROTECTED (3)
 QUEUE (2)
 QUOTES
 RD (2)
 READY (3)
 RECEIVE (2)
 RECONNECT (3)
 RECORD-NAME (3)
 REDEFINES
 REFERENCE
 REFERENCES
 RELATIVE
 REMAINDER
 RENAMES
 REPLACE
 REPORT (2)
 REPORTS (2)
 REQUIRED (1)
 RESERVE
 RETAINING (3)
 RETURN
 RETURN-CODE (1)
 REVERSE-VIDEO (1)
 REWRITE
 RH (2)
 RIGHT-JUSTIFY (1)
 ROLLING (1)
 RUN
 SCREEN (1)
 SEARCH
 SECURE (1)
 SEGMENT (2)
 SELECT
 SENTENCE
 SEQUENCE
 SET
 SIGN
 SKIP1 (1)
 SKIP3 (1)
 SORT-MERGE
 SOURCE (2)
 SPACE
 SPACES
 STANDARD
 STANDARD-2
 STARTING (1)
 STOP
 STRING
 SUB-QUEUE-2 (2)

ILE COBOL 予約語リスト

予約語

SUB-QUEUE-3 (2)

SUBFILE (1)

SUBTRACT

SUPPRESS

SYNC

SYSIN (1)

TABLE (2)

TAPE

TERMINAL

TEST

THAN

THROUGH

TIME

TITLE (1)

TOP

TRAILING-SIGN (1)

TRUE

TYPDEF (1)

UNEQUAL (3)

UNSTRING

UP

UPON

USAGE-MODE (3)

USING

VALIDATE (3)

値

VLR (1)

WHEN

WITH

WORDS

WRITE

XML-CODE (1)

XML-NTEXT (1)

ZERO

ZEROES

ZEROS

<=

*

-

>

=

予約語

SUB-SCHEMA (3)

SUBSTITUTE (1)

SUM (2)

SYMBOLIC

SYNCHRONIZED

SYSOUT (1)

TALLYING

TENANT (3)

TERMINATE (2)

TEXT (2)

THEN

THRU

TIMES

TO

TRAILING

TRANSACTION (1)

TYPE

UNDERLINE (1)

UNIT

UNTIL

UPDATE (1)

USAGE

USE

VALID (3)

VALUE

VARYING

WAIT (3)

WHEN-COMPILED (1)

WITHIN (3)

WORKING-STORAGE

XML (1)

XML-EVENT (1)

XML-TEXT (1)

ZERO-FILL (1)

<

+

**

/

>=

付録 F. ファイル構造サポートの要約およびファイル状況キーの値

ファイル構造サポート・テーブル

表 45 は、サポートされている各種のファイル構造についての必要およびオプションの記入項目をリストしたものです。装置タイプがディスクであるファイルは、データベースまたは非データベース補助記憶装置ファイルに割り当てることができます。使用されているコードは、以下のとおりです。

- ・ 該当せず
- B** サブファイルをサポートするワークステーションの場合はオプション
- C** オプションの記入項目 (コメントとしてだけ扱われる)
- D** DATABASE- に割り当てられるファイルの場合はオプション。データベース・ファイルに割り当てられない場合は許可されない
- I** 入力または入出力用にオープンされたファイルの場合はオプション
- J** 入出力用にオープンされたファイルの場合はオプション
- O** オプション
- R** 必要
- S** サブファイルをサポートするワークステーションの場合は必要
- X** 必要 (構文検査されるが、文書として扱われる)

704 ページの表 46 および 705 ページの表 47 は、状況キーの値とその意味を示します。

表 45. ファイル構造サポート

装置タイプ	プリンター	テープ	ディスク (順次アクセス)	ディスク相対 (順次アクセス)	ディスク相対 (ランダム・アクセス)	ディスク相対 (動的アクセス)	ディスク索引付き (順次アクセス)	ディスク索引付き (ランダム・アクセス)	ディスク索引付き (動的アクセス)	ワークステーション	ディスクセット	フォーマット・ファイル
環境部												
RERUN...RECORDS	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
SAME	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
AREA	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
RECORD AREA	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O

ファイル構造サポートの要約

表 45. ファイル構造サポート (続き)

装置タイプ	プリンター	テープ	ディスク (順次アクセス)	ディスク相対 (順次アクセス)	ディスク相対 (ランダム・アクセス)	ディスク相対 (動的アクセス)	ディスク索引付き (順次アクセス)	ディスク索引付き (ランダム・アクセス)	ディスク索引付き (動的アクセス)	ワークステーション	ディスクセット	フォーマット・ファイル
SORT AREA	.	C	C
SORT MERGE AREA	.	C	C
MULTIPLE FILE TAPE	.	C
COMMITMENT CONTROL	.	.	D	D	D	D	D	D	D	.	.	.
SELECT	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
ASSIGN	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
OPTIONAL	.	.	I	I	I	I
ORGANIZATION	O	O	O	R	R	R	R	R	R	R	O	O
SEQUENTIAL	O	O	O	O	O
RELATIVE	.	.	.	R	R	R
INDEXED	R	R	R	.	.	.
TRANSACTION	R	.	.
ACCESS	O	O	O	O	R	R	O	R	R	O	O	O
SEQUENTIAL	O	O	O	O	.	.	O	.	.	O	O	O
RANDOM	R	.	.	R
DYNAMIC	R	.	.	R	S	.	.
RESERVE	C	C	C	C	C	C	C	C	C	.	C	C
RELATIVE KEY	.	.	.	O	R	R	.	.	.	S	.	.
RECORD KEY	R	R	R	.	.	.
DUPLICATES	D	D	D	.	.	.
FILE STATUS	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
CONTROL-AREA	O	.	.
データ部												
LABEL RECORDS	X	R	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
STANDARD	.	O	R	R	R	R	R	R	R	O	R	R
OMITTED	R	O	O	.	.
VALUE OF	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
BLOCK CONTAINS	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
RECORD CONTAINS	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
DATA RECORDS	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O

表 45. ファイル構造サポート (続き)

装置タイプ	プリンター	テープ	ディスク (順次アクセス)	ディスク相対 (順次アクセス)	ディスク相対 (ランダム・アクセス)	ディスク相対 (動的アクセス)	ディスク索引付き (順次アクセス)	ディスク索引付き (ランダム・アクセス)	ディスク索引付き (動的アクセス)	ワークステーション	ディスクセット	フォーマット・ファイル
CODE-SET	.	O	O	.
LINAGE	O
手続き部												
OPEN	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
INPUT	.	O	O	O	O	O	O	O	O	.	O	.
OUTPUT	R	O	O	O	O	O	O	O	O	.	O	O
I-O	.	.	O	O	O	O	O	O	O	R	.	.
NO REWIND	.	I
REVERSED	.	I
EXTEND	.	O	O	O
CLOSE	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
REEL/UNIT	.	O
REMOVAL	.	O
NO REWIND	.	O
NO REWIND	.	O
WITH LOCK	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
READ	.	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	.
NEXT	I	.	.	I	.	.	.
FIRST	D	.	.	.
LAST	D	.	.	.
PRIOR	D	.	.	.
INTO	.	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	.
WITH NO LOCK	.	.	J	J	J	J	J	J	J	.	.	.
KEY IS	I	I	.	.	.
AT END	.	I	I	I	.	I	I	.	I	I	I	.
NOT AT END	.	I	I	I	.	I	I	.	I	I	I	.
INVALID KEY	I	I	.	I	I	B	.	.
NOT INVALID KEY	I	I	.	I	I	B	.	.
FORMAT	.	.	D	.	.	.	D	D	D	J	.	R
NULL-KEY-MAP	D	D	D	.	.	.

ファイル構造サポートの要約

表 45. ファイル構造サポート (続き)

装置タイプ	プリンター	テープ	ディスク (順次アクセス)	ディスク相対 (順次アクセス)	ディスク相対 (ランダム・アクセス)	ディスク相対 (動的アクセス)	ディスク索引付き (順次アクセス)	ディスク索引付き (ランダム・アクセス)	ディスク索引付き (動的アクセス)	ワークステーション	ディスクセット	フォーマット・ファイル
NULL-MAP	.	.	D	D	D	D	D	D	D	.	.	.
NEXT MODIFIED	B	.	.
SUBFILE	B	.	.
INDICATORS	J	.	.
TERMINAL	O	.	.
NO DATA	O	.	.
WRITE	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
FROM	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
INVALID KEY	.	.	.	O	O	O	O	O	O	B	.	.
NOT INVALID KEY	.	.	.	O	O	O	O	O	O	B	.	.
ADVANCING	O
AT END-OF-PAGE	O
NOT AT END-OF-PAGE	O
FORMAT	.	.	D	.	.	.	D	D	D	R	.	R
NULL-KEY-MAP	D	D	D	.	.	.
NULL-MAP	.	.	D	D	D	D	D	D	D	.	.	.
STARTING	O	.	.
ROLLING	O	.	.
INDICATORS	O	.	.
SUBFILE	B	.	.
TERMINAL	O	.	.
START	.	.	.	O	.	O	O	.	O	.	.	.
KEY	.	.	.	O	.	O	O	.	O	.	.	.
INVALID KEY	.	.	.	O	.	O	O	.	O	.	.	.
NOT INVALID KEY	.	.	.	O	.	O	O	.	O	.	.	.
FORMAT	D	D	D	.	.	.
NULL-KEY-MAP	D	D	D	.	.	.
REWRITE	.	.	O	O	O	O	O	O	O	B	.	.
FROM	.	.	O	O	O	O	O	O	O	B	.	.
INVALID KEY	O	O	.	O	O	B	.	.

表 45. ファイル構造サポート (続き)

装置タイプ	プリンター	テープ	ディスク (順次アクセス)	ディスク相対 (順次アクセス)	ディスク相対 (ランダム・アクセス)	ディスク相対 (動的アクセス)	ディスク索引付き (順次アクセス)	ディスク索引付き (ランダム・アクセス)	ディスク索引付き (動的アクセス)	ワークステーション	ディスクセット	フォーマット・ファイル
NOT INVALID KEY	O	O	.	O	O	B	.	.
FORMAT	D	D	B	.	.
NULL-KEY-MAP	D	D	D	.	.	.
NULL-MAP	.	.	D	D	D	D	D	D	D	.	.	.
INDICATORS	B	.	.
SUBFILE	S	.	.
TERMINAL	O	.	.
DELETE	.	.	.	O	O	O	O	O	O	.	.	.
NULL-KEY-MAP	D	D	D	.	.	.
INVALID KEY	O	O	.	O	O	.	.	.
NOT INVALID KEY	O	O	.	O	O	.	.	.
FORMAT	D	D	.	.	.
USE	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
EXCEPTION/ERROR	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
FOR DEBUGGING	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
COMMIT	.	.	D	D	D	D	D	D	D	.	.	.
ROLLBACK	.	.	D	D	D	D	D	D	D	.	.	.
ACQUIRE	O	.	.
DROP	O	.	.

戻りコードは、トランザクション入出力の後にシステムによって設定されますが、これには ICF ファイルまたは DISPLAY ファイルが必要とされます。

戻りコードの詳細は、「WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き」を参照してください。

ファイル構造サポートの要約

表 46. ファイル状況キーおよび対応する戻りコード

ファイル状況キー	メジャー戻りコード	マイナー戻りコード	説明
00	00 03 08 09	xx xx (09 を除く) 00 00	正常終了 (操作が成功した)。 データが受信されなかった。 すでに活動状態のセッションまたは装置を獲得しようとする操作が試みられた。 ファイルが OPEN OUTPUT 用に動的に作成された。 (動的ファイル作成の詳細は、「 <i>ILE COBOL プログラマーズ・ガイド</i> 」に記載されている CRTCBMOD コマンドの OPTION(*CRTF) パラメーターの説明を参照。)
0A	02 03	xx 09	ジョブが取り消し中 (制御付き)。
10	11	00	送信勧誘されたプログラム装置からの読み取りが拒否された。 未処理の送信勧誘はない。
30	80	xx	永続的なシステム・エラー。セッションは終了した。
92	81	xx	永続的な装置エラーまたはセッション・エラー。
9C	82	xx	オープンまたは獲得が失敗した。セッションは開始されなかった。
9G	34	xx	装置またはセッションに対する出力例外。
9I	04	xx	装置またはセッションに対する出力例外。
9K	83	E0	形式が見つからない。
9N	83	xx (E0 を除く)	セッション・エラー。セッションはまだ活動状態。

ファイル状況キーの値および意味

エラー処理の詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」の『エラーおよび例外処理』のセクションを参照してください。

表 47. ファイル状況キーの値

高位桁	意味	低位桁	意味
0	正常終了	0	これ以上情報はありません。
		2	READ ステートメントが正常に実行されましたが、重複キーが検出されました。つまり、参照の現行キーのキー値が次のレコードのキー値と同じです。ファイル状況 02 を使用可能にする方法については、READ ステートメントの注意事項を参照してください。
		4	関連するファイル名の RECORD IS VARYING 文節によって認められている最大レコードよりも大きいか、または最小レコードよりも小さいレコードを読み取る試みがありました。
		5	OPEN ステートメントが正常に実行されましたが、参照されたオプション・ファイルが OPEN ステートメントの実行時に存在しませんでした。オープン・モードが I-O または EXTEND の場合は、ファイルが作成されています。 CPF4101、CPF4102、CPF4103、CPF4207、CPF9812
		7	NO REWIND、REEL/UNIT、または FOR REMOVAL 句が指定された CLOSE ステートメント、または NO REWIND 句が指定された OPEN ステートメントの場合に、参照されたファイルが非リール/装置メディア上にあります。
		A	ジョブが CL コマンド ENDJOB、PWRDWN SYS、ENDSYS、または ENDSBS CPF4741 によって制御付きで終了されました。入力受け入れ操作、つまり送信勧誘されたプログラム装置からの READ 中に、エスケープ・メッセージが送信されました (複数装置リストだけ)。
		M	最後のレコードがサブファイルに書き込まれました。 CPF5003
		P	ファイルが正常にオープンされましたが、ヌル可能フィールドを含んでおり、ASSIGN 文節が ALWNULL および装置タイプ DATABASE を指定していません。
Q	順次処理相対ファイルに対する CLOSE ステートメントが正常に実行されました。ファイルは *INZDLT および *NOMAX オプションを指定して作成されたため、その境界は書き込まれたレコードの数に設定されています。		

ファイル状況キーの値

表 47. ファイル状況キーの値 (続き)

高位桁	意味	低位桁	意味
1	AT END 条件	0	順次 READ ステートメントが試みられましたが、ファイルの終わりに達しているため、ファイル内に次の論理レコードが存在しませんでした (未処理の送信勧誘はありません)。 CPF4740、CPF5001、CPF5025
		2	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>————— IBM 拡張 —————</p> <p>変更サブファイル・レコードが見つかりません。 CPF5037</p> <p>————— IBM 拡張 の終り —————</p> </div>
		4	相対ファイルに対して順次 READ ステートメントが試みられましたが、相対レコード番号内の有効数字の数が、そのファイルについて記述された相対キー・データ項目のサイズを超えていました。
2	無効キー	1	<p>順次アクセスの索引付きファイルにシーケンス・エラーが存在します。ある READ ステートメントが正常に実行されてから、そのファイルに対する次の REWRITE ステートメントが実行されるまでの間に、基本レコード・キー値がプログラムによって変更されているか、あるいは連続するレコード・キー値の昇順要件に対する違反がありました。</p> <p>あるいは、重複キーを持つランダムまたは動的アクセス・ファイルに対する正常な READ 操作と後続の REWRITE または DELETE 操作との間に、レコード・キー値がプログラムによって変更されています。</p>
		2	相対ファイルの中で重複キーを作成することになる、レコードの書き込みが試みられました。あるいは、索引付きファイルの中で重複基本レコード・キーを作成することになる、レコードの書き込みまたは再書き込みが試みられました。 CPF4759、CPF5008、CPF5026、CPF5034、CPF5084、CPF5085
		3	ファイル内に存在しないレコードにランダムにアクセスする試みがありました。 CPF5001、CPF5006、CPF5013、CPF5020、CPF5025
		4	相対または索引付きファイルの外部定義境界を超えて書き込む試みがありました。あるいは、相対ファイルに対して順次 WRITE ステートメントが試みられましたが、相対レコード番号内の有効数字の数が、そのファイルについて記述された相対レコード・キー・データ項目のサイズを超えていました。 CPF5006、CPF5018、CPF5021、CPF5043、CPF5272

表 47. ファイル状況キーの値 (続き)

高位桁	意味	低位桁	意味
3	永続エラー条件	0	これ以上情報はありません。 CPF4192、CPF5101、CPF5102、CPF5129、CPF5030、CPF5143
		4	境界違反のために永続エラーが存在します。順次ファイルの外部定義境界を超えて書き込む試みがありました。 CPF5116、CPF5018、CPF5272 (編成が順次の場合)
		5	INPUT、I-O、または EXTEND 句を指定した OPEN ステートメントが、存在しない非オプションル・ファイルに対して試みられました。 CPF4101、CPF4102、CPF4103、CPF4207、CPF9812
		7	ファイルに対して OPEN ステートメントが試みられましたが、その OPEN ステートメントで指定されたオープン・モードはそのファイルでサポートされません。次に示す違反の可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> EXTEND または OUTPUT 句が指定されたが、ファイルは書き込み操作をサポートしない。 I-O 句が指定されたが、ファイルは許可された入力および出力操作をサポートしない。 INPUT 句が指定されたが、ファイルは読み取り操作をサポートしない。 CPF4194
		8	以前にロック付きでクローズされたファイルに対して OPEN ステートメントが試みられました。
9	固定ファイル属性と、プログラム内でそのファイルについて指定された属性との間に矛盾が検出されたため、OPEN ステートメントが失敗しました。考えられる原因は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> プログラムによって指定された最小レコード長が、そのファイルに必要な最小レコード長よりも小さいものでした。レベル検査エラー。 CPF4131 ファイルは、ALTERNATE RECORD KEY 文節を指定し、次のエラーのうち 1 つが検出されました。 <ol style="list-style-type: none"> 代替レコード・キーとして使用されるデータベース・ファイルのフィールド (複数のフィールドの場合もあり) が無効です。 データベース・ファイルが、分散データ管理機能 (DDM) ファイルです。 データベース・ファイルは、そのオープン・データ・パスが共有されることを許可しました。 プログラムの各キーに対して指定された DUPLICATES 文節が、データベース・ファイルの重複属性とは一致しませんでした。これには、基本キーも含まれます。 		

ファイル状況キーの値

表 47. ファイル状況キーの値 (続き)

高位桁	意味	低位桁	意味
4	論理エラー 条件	1	オープン・モードのファイルに対して OPEN ステートメントが試みられました。
		2	すでにクローズされたファイルに対して CLOSE ステートメントが試みられました。
		3	順次アクセス・モードの順次ファイルの場合、REWRITE ステートメントの前にファイルに対して実行された最後の入出力ステートメントが、正常に実行された READ ステートメントではありませんでした。順次アクセス・モードの相対および索引付きファイルの場合、DELETE または REWRITE ステートメントの前にファイルに対して実行された最後の入出力ステートメントが、正常に実行された READ ステートメントではありませんでした。
		4	レコードのファイルへの再書き込みが試みられましたが、そのレコードが、置き換えられるレコードと同じサイズではなかったため、境界違反が存在します。関連するファイル名の RECORD IS VARYING 文節によって認められている最大レコードよりも大きいか、または最小レコードよりも小さいレコードを書き込みまたは再書き込みする試みがありました。
		6	入力または入出力モードでオープンされたファイルに対して順次 READ、READ NEXT、または READ PRIOR ステートメントが試みられましたが、前の START ステートメントが失敗したか、あるいは前の READ ステートメントが失敗または AT END 条件を起こしたため、有効な次のレコードが確立されていません。CPF5001、CPF5025、CPF5183
		7	入力または入出力モードでオープンされていないファイルに対して READ または START ステートメントの実行が試みられました。
		8	出力または拡張モードでオープンされていない順次ファイルに対して WRITE ステートメントの実行が試みられました。入出力、出力、拡張モードでオープンされていない索引付きまたは相対ファイルに対して WRITE ステートメントの実行が試みられました。
		9	入出力モードでオープンされていないファイルに対して DELETE または REWRITE ステートメントの実行が試みられました。

表 47. ファイル状況キーの値 (続き)

高位桁	意味	低位桁	意味
9	その他のエラー	0	<p>その他のエラー</p> <ul style="list-style-type: none"> • ファイルが見つからない • メンバーが見つからない • ファイルが、ALTERNATE RECORD KEY 文節を指定し、次のエラーのうち 1 つが検出されました。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 代替レコード・キー・オープン ID と既存のものとの間で、矛盾が検出されました。 2. 永続索引が検出されず、CRTARKIDX オプションが指定されていませんでした。 3. 代替レコード・キーを形成するために使用される隣接する DDS フィールドの最大数 (156) を超過しました。 • 予期しない入出力例外 <p>ファイル (OPEN OUTPUT の非オプション・ファイル) について USE が適用可能な場合は、CPF4101、CPF4102、CPF4103。一般に、次の例外がモニターされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • CPF4101 ~ CPF4399 • CPF4501 ~ CPF4699 • CPF4701 ~ CPF4899 • CPF5001 ~ CPF5099 • CPF5101 ~ CPF5399 • CPF5501 ~ CPF5699 <p>これらの例外が見つかり、FILE STATUS が 90 に設定されます。</p>
		1	未定義または無許可のアクセス・タイプ。CPF2207、CPF4104、CPF4236、CPF4238、CPF5057、CPF5109、CPF5134、CPF5279
		2	<p>論理エラー</p> <ul style="list-style-type: none"> • ファイルがロックされている • ファイルがすでにオープンされている • クローズされたファイルに対する入出力 • ファイルの終わりの後の READ • オープンされていないファイルに対する CLOSE <p>CPF4106、CPF4132、CPF4740、CPF5067、CPF5070、CPF5119、CPF5145、CPF5146、CPF5149、CPF5176、CPF5209</p>
		4	順次アクセスでなく、最後の操作が成功した READ でなかった場合に、ファイル位置標識のない REWRITE/DELETE が試みられました。

ファイル状況キーの値

表 47. ファイル状況キーの値 (続き)

高位桁	意味	低位桁	意味
9	その他のエラー	5	無効または不完全なファイル情報 (1) COBOL プログラム内に重複キーが指定されています。ファイルは正常にオープンされていますが、固有のキーを持つ索引付きデータベース・ファイルが作成されました。または (2) COBOL プログラム内に重複キーが指定されておらず、重複キーを認めるデータベース・ファイルが作成されました。
		9	未定義 (表示または ICF)。
		C	獲得が失敗しました。セッションは開始されませんでした。
		D	レコードがロックされています。CPF5027、CPF5032
		G	装置またはセッションに対する出力例外。
		H	ACQUIRE 操作が失敗しました。リソースが別のプログラムに所有されているか、または使用不可でした。(9H は、ACQUIRE 操作によって、90 についてモニターされる オペレーティング・システムの例外、または 9N が発生した場合の結果です。)
		I	WRITE 操作が失敗しました。CPF4702、CPF4737、CPF5052、CPF5076
		K	無効な形式名。形式が見つかりません。CPF5022、CPF5023、CPF5053、CPF5054、CPF5121、CPF5152、CPF5153、CPF5186、CPF5187

表 47. ファイル状況キーの値 (続き)

高位桁	意味	低位桁	意味
9	その他のエラー	N	一時的な (回復の可能性はある) ハードウェア入出力エラー。(通信セッション中のエラー。) CPF4145、CPF4146、CPF4193、CPF4229、CPF4291、CPF4299、CPF4354、CPF4526、CPF4542、CPF4577、CPF4592、CPF4602、CPF4603、CPF4611、CPF4612、CPF4616、CPF4617、CPF4622、CPF4623、CPF4624、CPF4625、CPF4628、CPF4629、CPF4630、CPF4631、CPF4632、CPF4705、CPF5013、CPF5107、CPF5128、CPF5166、CPF5198、CPF5280、CPF5282、CPF5287、CPF5293、CPF5352、CPF5353、CPF5517、CPF5524、CPF5529、CPF5530、CPF5532、CPF5533
		P	ファイルをコミットメント制御下に置くことができないために、OPEN が失敗しました。 CPF4293、CPF4326、CPF4327、CPF4328、CPF4329
		Q	ランダムまたは動的アクセスの相対ファイルに対する OPEN ステートメントが、ファイルのサイズが *NOMAX であるために失敗しました。ファイルのサイズを必要なサイズに変更し (たとえば、CHGPF を使用して)、プログラムを再実行依頼してください。
		R	参照保全エラー。CPF502D、CPF502E、CPF503A
		S	最後の READ 操作で NO LOCK が指定されたため、REWRITE または DELETE が失敗しました。
		T	トリガー・プログラム例外。CPF502B
		U	READ NEXT からのブロックにレコードが残っているために READ PRIOR が完了できないか、またはその逆です。 CPF5184 ファイルをいったんクローズしてから、もう一度オープンしてください。
		W	制約の例外をチェックしてください。CPF502F
		X	マルチスレッド・ジョブではそのファイル・タイプをサポートしていないため、OPEN が失敗しました。ファイル・タイプを DATABASE、PRINTER (スプール・ファイルのみ) に変更するか、タイプ *IP の DDM ファイルに変更して、プログラムを再実行依頼してください。 CPF4380
Y	ファイルが置かれている補助ストレージ・プール (ASP) 装置が使用できないため、OPEN が失敗しました。 CPF980B.		

属性データ形式

属性データのレイアウトおよび値は、システムによって異なります。以下の形式は ILE COBOL 言語で使用されます。

装置タイプおよびレイアウトの完全なリストについては、Web サイト <http://www.ibm.com/systems/i/infocenter/> にある、System i5/OS Information Center の「データベースおよびファイル・システム」カテゴリの中の『DB2 Universal Database for AS/400』セクションを参照してください。

```

01 DISPLAY-ICF-ATTRIBUTES.
02 PROGRAM-DEVICE-NAME      PIC X(10).
02 DEVICE-DESCRIPTION-NAME  PIC X(10).
02 USER-ID                  PIC X(10).
02 DEVICE-CLASS             PIC X.
*       D - DISPLAY
*       I - ICF
*       U - UNKNOWN
02 DEVICE-TYPE              PIC X(6).
*       ' ' - UNKNOWN
*       '3179 ' - 3179 DISPLAY
*       '317902' - 3179 MOD 2 DISPLAY
*       '3180 ' - 3180 DISPLAY
*       '3196A ' - 3196 MOD A1/A2 DISPLAY
*       '3196B ' - 3196 MOD B1/B2 DISPLAY
*       '3197C1' - 3197 MOD C1 DISPLAY
*       '3197C2' - 3197 MOD C2 DISPLAY
*       '3197D1' - 3197 MOD D1 DISPLAY
*       '3197D2' - 3197 MOD D2 DISPLAY
*       '3197W1' - 3197 MOD W1 DISPLAY
*       '3197W2' - 3197 MOD W2 DISPLAY
*       '3270 ' - 3270 DISPLAY
*       '3476EA' - 3476 MOD EA DISPLAY
*       '3476EC' - 3476 MOD EC DISPLAY
*       '3477FG' - 3477 MOD FG DISPLAY
*       '3477FA' - 3477 MOD FA DISPLAY
*       '3477FC' - 3477 MOD FC DISPLAY
*       '3477FD' - 3477 MOD FD DISPLAY
*       '3477FW' - 3477 MOD FW DISPLAY
*       '3477FE' - 3477 MOD FE DISPLAY
*       '5251111' - 5251 DISPLAY
*       '5291 ' - 5291 DISPLAY
*       '5292 ' - 5292 DISPLAY
*       '529202' - 5292 MOD 2 DISPLAY
*       '5555B1' - 5555 MOD B01 DISPLAY
*       '5555C1' - 5555 MOD C01 DISPLAY
*       '5555E1' - 5555 MOD E01 DISPLAY
*       '5555F1' - 5555 MOD F01 DISPLAY
*       '5555G1' - 5555 MOD G01 DISPLAY
*       '5555G2' - 5555 MOD G02 DISPLAY
*       '3486BA' - 3486 MOD BA DISPLAY
*       '3487HA' - 3487 MOD HA DISPLAY
*
*       '3487HG' - 3487 MOD HG DISPLAY
*       '3487HW' - 3487 MOD HW DISPLAY
*       '3487HC' - 3487 MOD HC DISPLAY
*       'DHCF77' - 3277 DHCF DISPLAY
*       'DHCF78' - 3278 DHCF DISPLAY
*       'DHCF79' - 3279 DHCF DISPLAY
*       'APPC ' - ADVANCED-PROGRAM-TO-PROGRAM COMMUNICATIONS DEVICE
*       'ASYNCR' - ASYNCHRONOUS COMMUNICATION DEVICE
*       'BSC ' - BISYNCHRONOUS COMMUNICATION
*       'BSCCL ' - BSCCL COMMUNICATION DEVICE
*       'FINANC' - ICF FINANCE COMMUNICATION DEVICE
*       'INTRA ' - INTRA SYSTEMS COMMUNICATION

```

```

*      'LU1  ' - LU1 COMMUNICATION DEVICE
*      'RETAIL' - RETAIL COMMUNICATION DEVICE
*      'SNUF ' - SNA UPLINE FACILITY COMMUNICATION DEVICE
*      'NVT  ' - NETWORK VIRTUAL TERMINAL (NVT)
02 REQUESTOR-DEVICE          PIC X.
*      N - NOT A REQUESTOR DEVICE
*      Y - A REQUESTOR DEVICE
02 ACQUIRE-STATUS          PIC X.
*      N - DEVICE NOT ACQUIRED
*      Y - DEVICE ACQUIRED
02 INVITE-STATUS           PIC X.
*      N - DEVICE NOT INVITED
*      Y - DEVICE INVITED
02 DATA-AVAILABLE-STATUS  PIC X.
*      N - NO DATA IS AVAILABLE
*      Y - INVITED DATA AVAILABLE
02 DISPLAY-DIMENSIONS.
03 NUMBER-OF-ROWS          PIC S9(4) COMP-4.
03 NUMBER-OF-COLUMNS     PIC S9(4) COMP-4.
02 DISPLAY-ALLOW-BLINK    PIC X.
*      N - NOT BLINK CAPABLE
*      Y - BLINK CAPABLE
02 ONLINE-OFFLINE-STATUS  PIC X.
*      O - DISPLAY IS ONLINE
*      F - DISPLAY IS OFFLINE
02 DISPLAY-LOCATION         PIC X.
*      L - LOCAL DISPLAY
*      R - REMOTE DISPLAY
02 DISPLAY-TYPE           PIC X.
*      A - ALPHANUMERIC OR KATAKANA
*      I - IDEOGRAPHIC
*      G - GRAPHIC DBCS
02 KEYBOARD-TYPE          PIC X.
*      A - ALPHANUMERIC OR KATAKANA KEYBOARD
*      I - IDEOGRAPHIC KEYBOARD
02 CONVERSATION-STATUS    PIC X.
*      N - CONVERSATION NOT INITIATED
*      Y - CONVERSATION INITIATED
*      (VALID FOR ALL COMMUNICATION TYPES).
02 SYNCHRONIZATION-LEVEL  PIC X.
*      0 - SYNCHRONIZATION LEVEL 0 (SYNLVL(*NONE))
*      1 - SYNCHRONIZATION LEVEL 1 (SYNLVL(*CONFIRM))
*      (APPC APPLICATIONS ONLY)
*      2 - SYNCHRONIZATION LEVEL 2 (SYNLVL(*COMMIT))
02 CONVERSATION-USED      PIC X.
*      M - MAPPED CONVERSATION
*      B - BASIC CONVERSATION
*      (APPC APPLICATIONS ONLY)
02 REMOTE-LOCATION-NAME     PIC X(8).
*      (ALL COMMUNICATION TYPES)
02 LOCAL-LU-NAME          PIC X(8).
*      (APPC APPLICATIONS ONLY)
02 LOCAL-NETWORK-ID       PIC X(8).
*      (APPC APPLICATIONS ONLY)
02 REMOTE-LU-NAME         PIC X(8)
*      (APPC APPLICATIONS ONLY)
02 REMOTE-NETWORK-ID      PIC X(8).
*      (APPC APPLICATIONS ONLY)
02 MODE                   PIC X(8).
*      (APPC APPLICATIONS ONLY)
02 WORKSTATION-CONTROLLER PIC X.
*      N - NOT ATTACHED
*      1 - ATTACHED TO CONTROLLER 1
*      2 - ATTACHED TO CONTROLLER 2
*      3 - ATTACHED TO CONTROLLER 3
02 DISPLAY-IS-COLOR       PIC X.
*      Y - YES

```

属性データ形式

```

*      N - NO
02 DISPLAY-ALLOWS-GRID-LINES PIC X.
*      N - NO
*      1 - YES
02 LU6-CONVERSATION-STATE PIC X.
*      '00'X - RESET
*      '01'X - SEND
*      '02'X - DEFER RECEIVED
*      '03'X - DEFER DEALLOCATE
*      '04'X - RECEIVE
*      '05'X - CONFIRM
*      '06'X - CONFIRM SEND
*      '07'X - CONFIRM DEALLOCATE
*      '08'X - COMMIT
*      '09'X - COMMIT SEND
*      '0A'X - COMMIT DEALLOCATE
*      '0B'X - DEALLOCATE
*      '0C'X - ROLLBACK REQUIRED
02 LU6-CONVERSATION-CORRELATE PIC X(8).
02 FILLER PIC X(31).
*      RESERVED
02 CALLING-PARTY-ID.
03 REMOTE-NUMBER-LENGTH PIC S9(4) COMP-4.
03 REMOTE-NUMBERING-TYPE PIC X(2).
*      00 - UNKNOWN
*      01 - INTERNATIONAL
*      02 - NATIONAL
*      03 - NETWORK-SPECIFIC
*      04 - SUBSCRIBER
*      06 - ABBREVIATED
*      07 - RESERVED
03 REMOTE-NUMBERING-PLAN PIC X(2).
*      00 - UNKNOWN
*      01 - ISDN/TELEPHONY
*      03 - DATA
*      04 - TELEX
*      08 - NATIONAL STANDARD
*      09 - PRIVATE
*      15 - RESERVED
03 REMOTE-NUMBER PIC X(40).
03 FILLER PIC X(4).
*      RESERVED
03 REMOTE-SUBADDR-LENGTH PIC S9(4) COMP-4.
03 REMOTE-SUBADDR-TYPE PIC X(2).
*      00 - NSAP
*      02 - USER SPECIFIED
03 REMOTE-SUBADDRESS PIC X(40).
03 FILLER PIC X.
*      RESERVED
03 CALL-TYPE PIC X.
*      0 - CALL IN
*      1 - CALL OUT
*      2 - NON-ISDN
03 REMOTE-NETADDR-LENGTH PIC S9(4) COMP-4.
03 REMOTE-NETADDRESS PIC X(32).
03 FILLER PIC X(4).
*      RESERVED
03 REMOTE-ADDREXT-LENGTH PIC S9(4) COMP-4.
03 REMOTE-ADDREXT-TYPE PIC X.
*      0 - ISO 8348/AD2
*      2 - NOT ISO 8348/AD2
03 REMOTE-ADDRESS-EXTENSION PIC X(40).
03 FILLER PIC X(4).
*      RESERVED
03 X25-CALL-TYPE PIC X.
*      0 - INCOMING SVC
*      1 - OUTGOING SVC

```

```
*          2 - NOT X25 SVC
02 TRANSACTION-PROGRAM-NAME      PIC X(64).
02 LU6-PROTECTED-LUWID.
03 LENGTH-OF-PROT-LUWID-FIELDS   PIC S9(4)  COMP-4.
03 FILLER REDEFINES LENGTH-OF-PROT-LUWID-FIELDS.
05 LENGTH-OF-PROT-LUWID-FIELD   PIC X.
05 LENGTH-OF-PROT-LU-NAME       PIC X.
03 NETWORK-QUAL-PROT-LU-NAME     PIC X(17).
03 PROTECTED-INST-SEQ-NUMBERS.
05 PROT-INSTANCE-NUMBER         PIC X(6).
05 PROT-SEQUENCE-NUMBER        PIC S9(4)  COMP-4.
02 LU6-UNPROTECTED-LUWID.
03 LENGTH-OF-UNPROT-LUWID-FIELDS PIC S9(4)  COMP-4.
03 FILLER REDEFINES LENGTH-OF-UNPROT-LUWID-FIELDS.
05 LENGTH-OF-UNPROT-LUWID-FIELD PIC X.
05 LENGTH-OF-UNPROT-LU-NAME     PIC X.
03 NETWORK-QUAL-UNPROT-LU-NAME   PIC X(17).
03 UNPROTECTED-INST-SEQ-NUMBERS.
05 UNPROT-INSTANCE-NUMBER       PIC X(6).
05 UNPROT-SEQUENCE-NUMBER      PIC S9(4)  COMP-4.
```


付録 G. PROCESS ステートメント

PROCESS ステートメントは、COBOL ソース・プログラムのオプションの部分です。これより、通常はコンパイル時に指定するオプションを指定できます。

PROCESS ステートメントで指定されたオプションは、CRTCBMOD または CRTBNDCBL CL コマンドで指定された対応するオプションを指定変更します。

PROCESS ステートメントの形式は、次のとおりです。

PROCESS ステートメント - 形式



対応する作成コマンドのオプション

以下の表では、使用できる PROCESS ステートメントのオプションと、同等の CRTCBMOD および CRTBNDCBL コマンドのパラメーターおよびオプションを示します。デフォルトには、下線が付けられています。

PROCESS ステートメントのオプションの説明は、CRTCBMOD および CRTBNDCBL パラメーターのパラメーターおよびオプションの説明と一致します。詳細は、「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*」を参照してください。

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBMOD/CRTBNDCBL
	OUTPUT パラメーターのオプション
<u>OUTPUT</u> NOOUTPUT	<u>*PRINT</u> *NONE

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBMOD/CRTBNDCBL
	GENLVL パラメーターのオプション
GENLVL(nn)	nn

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBMOD/CRTBNDCBL
	OPTION パラメーターのオプション
<u>SOURCE</u> <u>SRC</u> NOSOURCE NOSRC	<u>*SOURCE</u> <u>*SRC</u> *NOSOURCE *NOSRC
<u>NOXREF</u> XREF	<u>*NOXREF</u> *XREF

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	OPTION パラメーターのオプション
<u>GEN</u> NOGEN	* <u>GEN</u> *NOGEN
<u>NOSEQUENCE</u> SEQUENCE	* <u>NOSEQUENCE</u> *SEQUENCE
<u>NOVBSUM</u> VBSUM	* <u>NOVBSUM</u> *VBSUM
<u>NONUMBER</u> NUMBER LINENUMBER	* <u>NONUMBER</u> *NUMBER *LINENUMBER
<u>NOMAP</u> MAP	* <u>NOMAP</u> *MAP
<u>NOOPTIONS</u> OPTIONS	* <u>NOOPTIONS</u> *OPTIONS
<u>QUOTE</u> APOST	* <u>QUOTE</u> *APOST
<u>NOSECLVL</u> SECLVL	* <u>NOSECLVL</u> *SECLVL
<u>PRTCORR</u> NOPRTCORR	* <u>PRTCORR</u> *NOPRTCORR
<u>MONOPRC</u> NOMONOPRC	* <u>MONOPRC</u> *NOMONOPRC
<u>RANGE</u> NORANGE	* <u>RANGE</u> *NORANGE
<u>NOUNREF</u> UNREF	* <u>NOUNREF</u> *UNREF
<u>NOSYNC</u> SYNC	* <u>NOSYNC</u> *SYNC
<u>NOCRTF</u> CRTF	* <u>NOCRTF</u> *CRTF
<u>NODUPKEYCHK</u> DUPKEYCHK	* <u>NODUPKEYCHK</u> *DUPKEYCHK
<u>NOINZDLT</u> INZDLT	* <u>NOINZDLT</u> *INZDLT
<u>NOBLK</u> BLK	* <u>NOBLK</u> *BLK
<u>STDINZ</u> NOSTDINZ	* <u>STDINZ</u> *NOSTDINZ
<u>NODDSFILLER</u> DDSFILLER	* <u>NODDSFILLER</u> *DDSFILLER
該当せず	* <u>NOIMBEDERR</u> *IMBEDERR
<u>STDTRUNC</u> NOSTDTRUNC	* <u>STDTRUNC</u> *NOSTDTRUNC

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	OPTION パラメーターのオプション
<u>CHGPOSSGN</u> NOCHGPOSSGN	* <u>CHGPOSSGN</u> *NOCHGPOSSGN
該当せず	* <u>NOEVENTF</u> *EVENTF
<u>MONOPIC</u> NOMONOPIC	* <u>MONOPIC</u> *NOMONOPIC

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	CVTOPT パラメーターのオプション
<u>NOVARCHAR</u> VARCHAR	* <u>NOVARCHAR</u> *VARCHAR
<u>NODATETIME</u> DATETIME	* <u>NODATETIME</u> *DATETIME
<u>NOCVTPIXGRAPHIC</u> CVTPICXGRAPHIC CVTPICGGRAPHIC NOCVTICGGRAPHIC	* <u>NOPIXGRAPHIC</u> *PIXGRAPHIC *PICGGRAPHIC *NOPIXGGRAPHIC
<u>NOCVTICNGRAPHIC</u> CVTPICNGRAPHIC	* <u>NOICNGRAPHIC</u> *PICNGRAPHIC
<u>NOFLOAT</u> FLOAT	* <u>NOFLOAT</u> *FLOAT
<u>NODATE</u> DATE	* <u>NODATE</u> *DATE
<u>NOTIME</u> TIME	* <u>NOTIME</u> *TIME
<u>NOTIMESTAMP</u> TIMESTAMP	* <u>NOTIMESTAMP</u> *TIMESTAMP
<u>NOCVTTODATE</u> CVTTODATE	* <u>NOCVTTODATE</u> *CVTTODATE

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	OPTIMIZE パラメーターのオプション
<u>NOOPTIMIZE</u> BASICOPT FULLOPT	* <u>NONE</u> *BASIC *FULL

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	FLAGSTD パラメーターのオプション
<u>NOFIPS</u> MINIMUM INTERMEDIATE HIGH	* <u>NOFIPS</u> *MINIMUM *INTERMEDIATE *HIGH

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	FLAGSTD パラメーターのオプション
<u>NOBSOLETE</u> OBSOLETE	* <u>NOBSOLETE</u> *OBSOLETE

PROCESS ステートメントのオプション EXTDSPOPT(a b c)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	EXTDSPOPT パラメーターのオプション
<u>DFRWRT</u> NODFRWRT	* <u>DFRWRT</u> *NODFRWRT
<u>UNDSPCHR</u> NOUNDSPCHR	* <u>UNDSPCHR</u> *NOUNDSPCHR
<u>ACCUPDALL</u> ACCUPDNE	* <u>ACCUPDALL</u> *ACCUPDNE

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	FLAG パラメーターのオプション
FLAG(nn)	nn

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	LINKLIT パラメーターのオプション
<u>LINKPGM</u> LINKPRC	* <u>PGM</u> *PRC

PROCESS ステートメントのオプション SRTSEQ(a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	SRTSEQ パラメーターのオプション
<u>HEX</u> JOB JOBRUN LANGIDUNQ LANGIDSHR 「LIBL/ソート順序テーブル名」 「CURLIB/ソート順序テーブル名」 「ライブラリー名/ソート順序テーブル名」 「ソート順序テーブル名」	* <u>HEX</u> *JOB *JOBRUN *LANGIDUNQ *LANGIDSHR *LIBL/ソート順序テーブル名 *CURLIB/ソート順序テーブル名 ライブラリー名/ソート順序テーブル名 ソート順序テーブル名

PROCESS ステートメントのオプション LANGID(a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	LANGID パラメーターのオプション
<u>JOBRUN</u> JOB 「言語 ID 名」	* <u>JOBRUN</u> *JOB 言語 ID 名

PROCESS ステートメントのオプション ENBPFRCOL(a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	ENBPFRCOL パラメーターのオプション
<u>PEP</u> ENTRYEXIT FULL	* <u>PEP</u> *ENTRYEXIT *FULL

PROCESS ステートメントのオプション PRFDTA(a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	PRFDTA パラメーターのオプション
<u>NOCOL</u> COL	* <u>NOCOL</u> *COL

PROCESS ステートメントのオプション CCSID(a b c d)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	CCSID パラメーターのオプション
a = ロケール 1 バイト・データの CCSID	
<u>JOBRUN</u> JOB HEX コード化文字セット ID	* <u>JOBRUN</u> *JOB *HEX コード化文字セット ID
b = 非ロケール 1 バイト・データの CCSID	
<u>JOBRUN</u> JOB HEX コード化文字セット ID	該当せず
c = 非ロケール 2 バイト・データの CCSID	
d = XML GENERATE 1 バイト・データ出力 CCSID	
<u>JOBRUN</u> JOB HEX コード化文字セット ID	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション NTLCCSID(a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	NTLCCSID パラメーターのオプション
<u>13488</u> コード化文字セット ID	<u>13488</u> コード化文字セット ID

PROCESS ステートメントのオプション DATTIM(a b)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
4 桁の基本世紀 (デフォルト 1900) 2 桁の基本年度 (デフォルト 40)	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション THREAD (a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
NOTHREAD SERIALIZE	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション ARITHMETIC (a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL ARITHMETIC パラメーターのオプション
NOEXTEND EXTEND31	*NOEXTEND *EXTEND31

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
NOGRAPHIC GRAPHIC	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
NONATIONAL NATIONAL	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
NOLSPTRALIGN LSPTRALIGN	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
NOCOMPASBIN COMPASBIN	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション OPTVALUE (a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
NOOPT OPT	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
NOADJFILLER ADJFILLER	該当せず

PROCESS ステートメントのオプション NTPADCHAR (a b c)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL NTPADCHAR パラメーターのオプション
<i>a</i> = 単一バイト・データから国別データへ移動する場合の埋め込み文字	
NX"0020" 1 つの国別文字を示す 国別 16 進リテラル	NX"0020" 国別文字
<i>b</i> = 2 バイト・データから国別データへ移動する場合の埋め込み文字	

PROCESS ステートメントのオプション NTLPADCHAR(a b c)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	NTLPADCHAR パラメーターのオプション
<u>NX"3000"</u> 1 つの国別文字を示す 国別 16 進リテラル	<u>NX"3000"</u> 国別文字
<i>c</i> = 国別データから国別データへ移動する場合の埋め込み文字	
<u>NX"3000"</u> 1 つの国別文字を示す 国別 16 進リテラル	<u>NX"3000"</u> 国別文字

PROCESS ステートメントのオプション LICOPT(a)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	LICOPT パラメーターのオプション
ライセンス内部コード・オプション・ストリング	ライセンス内部コード・オプション・ストリング

PROCESS ステートメントのオプション PGMINFO(a b)	CRTCBLMOD/CRTBNDCBL
	PGMINFO パラメーターのオプション
<i>a</i> = 生成されるプログラム・インターフェースの情報	
<u>NOPGMINFO</u> PCML	<u>*NO</u> *PCML
<i>b</i> = 生成されるプログラム情報の位置	
MODULE	<u>*STMF</u> *MODULE *ALL

付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON

複合 OCCURS DEPENDING ON (ODO) は COBOL 85 標準の拡張としてサポートされます。

コンパイラーによって許可される複合 ODO の基本形式は、以下のとおりです。

- 可変位置の項目またはグループ: DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述され、非従属データ項目またはグループが後に続いているデータ項目。
- 可変位置のテーブル: DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述され、OCCURS 文節によって記述された非従属データ項目が後に続いているデータ項目。
- 可変長エレメントを持つテーブル: DEPENDING ON オプションが指定された OCCURS 文節によって記述された従属データ項目を含んでいる OCCURS 文節によって記述されたデータ項目。
- 可変長エレメントを持つテーブルの指標名。
- 可変長エレメントを持つテーブルのエレメント。

複合 ODO によって、ディスク・スペースを節約できますが、使用が容易でなく、コードの保守を困難にする可能性があります。

以下の例は、考えられる複合 ODO のオカレンス・タイプを示しています。

```
01 FIELD-A.  
  02 COUNTER-1                      PIC S99.  
  02 COUNTER-2                      PIC S99.  
  02 TABLE-1.  
    03 RECORD-1 OCCURS 1 TO 5 TIMES  
      DEPENDING ON COUNTER-1      PIC X(3).  
  02 EMPLOYEE-NUMBER                PIC X(5).  
  02 TABLE-2 OCCURS 5 TIMES  
    INDEXED BY INDX.               1  
    03 TABLE-ITEM                  PIC 99.    2  
    03 RECORD-2 OCCURS 1 TO 3 TIMES  3  
      DEPENDING ON COUNTER-2.      4  
    04 DATA-NUM                    PIC S99.    5
```

この例で、COUNTER-1 は、RECORD-1 の DEPENDING ON 文節のオブジェクトなので、ODO オブジェクトです。RECORD-1 は、ODO サブジェクトと呼ばれます。同様に、COUNTER-2 は、対応する ODO サブジェクトである RECORD-2 の ODO オブジェクトです。

上記の例に示した複合 ODO のオカレンス・タイプは、次のとおりです。

- 1** 可変位置の項目: EMPLOYEE-NUMBER は、同じレベル 01 レコード内の可変長テーブルに続くデータ項目ですが、この可変長テーブルに従属していません。
- 2** 可変位置のテーブル: TABLE-2 は、同じレベル 01 レコード内の可変長テーブルに続くテーブルですが、この可変長テーブルに従属していません。

複合 OCCURS DEPENDING ON

- 3 可変長エレメントを持つテーブル: TABLE-2 は、オカレンス数が ODO オブジェクトの内容によって異なる従属データ項目 RECORD-2 を含むテーブルです。
- 4 可変長エレメントを持つテーブルの指標名 INDX。
- 5 可変長エレメントを持つテーブルのエレメント TABLE-ITEM。

各レコードの可変部分の長さは、その ODO オブジェクトと、その ODO サブジェクトの長さの積です。たとえば、上記の複合 ODO 項目の 1 つへの参照を行う場合、実際の長さ (使用する場合) は以下のように計算されます。

- TABLE-1 の長さは、COUNTER-1 の内容 (RECORD-1 の数) と 3 (RECORD-1 の長さ) を乗算した結果です。
- TABLE-2 の長さは、COUNTER-2 の内容 (RECORD-2 の数) と 2 (RECORD-2 の長さ) を乗算した結果です。
- FIELD-A の長さは、COUNTER-1、COUNTER-2、TABLE-1、EMPLOYEE-NUMBER、および TABLE-2 x 5 の長さの合計です。

グループ内の複合 ODO 項目を参照する前に、グループ内のすべての ODO オブジェクトを設定する必要があります。たとえば、上記のコードの EMPLOYEE-NUMBER を参照する前に、EMPLOYEE-NUMBER がその値を入手するために COUNTER-1 および COUNTER-2 に直接依存していない場合でも、両方の ODO オブジェクトを設定する必要があります。

ODO 値の変更の影響

DEPENDING ON オプションを指定した OCCURS 文節で記述したデータ項目の後に、同じグループ内で 1 つまたは複数の非従属データ項目が続く場合には (複合 ODO 形式)、ODO オブジェクトの値の変更によって、そのレコード内の複合 ODO 項目への以後の参照が影響を受けます。

- 関係のある ODO 文節を含むすべてのグループのサイズが、ODO オブジェクトの新しい値に反映されます。
- ODO サブジェクトを含んでいるグループへの MOVE は、ODO オブジェクトの新しい値に基づいて実行されます。
- ODO 文節によって記述された項目に続くすべての非従属項目の位置は、ODO オブジェクトの新しい値による影響を受けます。(非従属項目の内容を保存するには、ODO オブジェクトの値を変更する前に、内容を作業域に移動し、後から戻します。)

ODO オブジェクトの値は、データを ODO オブジェクトに移動するか、またはこのオブジェクトが含まれているグループに移動すると、変更される可能性があります。この値は、ODO オブジェクトが、READ ステートメントのターゲットであるレコードに含まれている場合も、変更される可能性があります。

ODO オブジェクトの値を変更する場合のエラーの防止

テーブル内の従属データ項目に関する ODO オブジェクトの値を変更した後に、複合 ODO 指標名 (可変長エレメントのテーブルの指標名) を参照する場合には、注意が必要です。ODO オブジェクトの値を変更した場合、関連する複合 ODO 指標内のバイト・オフセットは、テーブルの長さが変更されているので、もはや有効で

はありません。この後に、以下の方法で指標名を参照するようにコーディングする場合、注意しないと予期しない結果が生じる可能性があります。

- テーブルの要素への参照
- SET 整数データ項目 TO 指標名 という形式の SET ステートメント (形式 -1)
- SET 指標名 UPIDOWN BY 整数 という形式の SET ステートメント (形式 -2)

このタイプのエラーを回避するには、以下のステップを行います。

1. 指標項目を整数データ項目に保管する。(この実行によって、暗黙の変換が行われます。整数項目は、指標内のオフセットに対応する、テーブル・要素のオカレンス番号を受け取ります。)
2. ODO オブジェクトの値を変更する。
3. 即時に、整数データ項目から指標項目を復元する。(この実行によって、暗黙の変換が行われます。指標項目は、整数項目内のテーブル・要素のオカレンス番号に対応するオフセットを受け取ります。このオフセットは、その時点で有効であるテーブル長に従って計算されます。)

以下のコードは、ODO オブジェクト COUNTER-2 を変更する場合に 725 ページの『付録 H. 複合 OCCURS DEPENDING ON』に示した指標名を保管および復元する方法を示しています。

```
77 INTEGER-DATA-ITEM-1      PIC 99.
...
   SET INDX TO 5.
*     INDX is valid at this point.
   SET INTEGER-DATA-ITEM-1 TO INDX.
*     INTEGER-DATA-ITEM-1 now has the
*     occurrence number corresponding to INDX.
   MOVE NEW-VALUE TO COUNTER-2.
*     INDX is not valid at this point.
   SET INDX TO INTEGER-DATA-ITEM-1.
*     INDX is now valid, containing the offset
*     corresponding to INTEGER-DATA-ITEM-1, and
*     can be used with the expected results.
```

可変テーブルへの要素の追加時のオーバーレイの防止

同じグループ内で 1 つまたは複数の非従属データ項目が後に続く可変オカレンス・テーブルの要素数を増加する場合には、注意が必要です。ODO オブジェクトの値を増加し、テーブルに要素を追加する場合、テーブルの後に続く可変位置データ項目に意図せずにオーバーレイしてしまう可能性があります。

このタイプのエラーを回避するには、以下のステップを行います。

1. テーブルの後に続く可変位置データ項目を、別のデータ域に保管する。
2. ODO オブジェクトの値を増加する。
3. 新しいテーブル・要素にデータを移動する (必要な場合)。
4. 可変位置データ項目を保管したデータ域から復元する。

以下の例で、その要素数が ODO オブジェクト CONTROL-1 に依存する、テーブル VARY-FIELD-1 に要素を追加する必要があります。

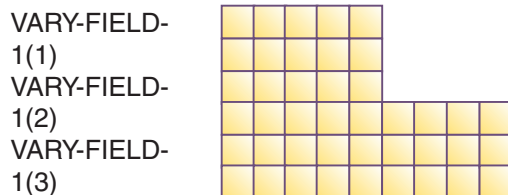
VARY-FIELD-1 の後には、非従属可変位置データ項目 GROUP-ITEM-1 が続いていて、この要素がオーバーレイされる可能性があります。

複合 OCCURS DEPENDING ON

```

WORKING-STORAGE SECTION.
01 VARIABLE-REC.
   05 FIELD-1                      PIC X(10).
   05 CONTROL-1                    PIC S99.
   05 CONTROL-2                    PIC S99.
   05 VARY-FIELD-1 OCCURS 1 TO 10 TIMES
       DEPENDING ON CONTROL-1      PIC X(5).
   05 GROUP-ITEM-1.
       10 VARY-FIELD-2
           OCCURS 1 TO 10 TIMES
           DEPENDING ON CONTROL-2  PIC X(9).
01 STORE-VARY-FIELD-2.
   05 GROUP-ITEM-2.
       10 VARY-FLD-2
           OCCURS 1 TO 10 TIMES
           DEPENDING ON CONTROL-2  PIC X(9).
    
```

VARY-FIELD-1 の各エレメントは 5 バイトであり、VARY-FIELD-2 の各エレメントは 9 バイトです。CONTROL-1 と CONTROL-2 の両方に値 3 が入っている場合、VARY-FIELD-1 と VARY-FIELD-2 のストレージを以下のような図で示すことができます。

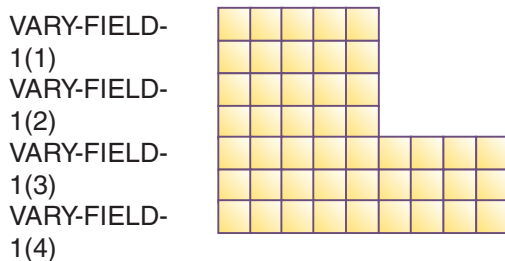


VARY-FIELD-1 に 4 番目のエレメントを追加するには、VARY-FIELD-2 の最初の 5 バイトへのオーバーレイを防止するために、以下のようにコーディングしてください。(GROUP-ITEM-2 は、可変位置 GROUP-ITEM-1 の一時記憶域として使用します。)

```

MOVE GROUP-ITEM-1 TO GROUP-ITEM-2.
ADD 1 TO CONTROL-1.
MOVE five-byte-field TO
    VARY-FIELD-1 (CONTROL-1).
MOVE GROUP-ITEM-2 TO GROUP-ITEM-1.
    
```

VARY-FIELD-1 と VARY-FIELD-2 の変更済みのストレージを、以下のような図で示すことができます。



VARY-FIELD-1 の 4 番目のエレメントは、VARY-FIELD-2 の最初のエレメントにオーバーレイしていないことに注意してください。

付録 I. ACCEPT/DISPLAY および COBOL/2 に関する考慮事項

ILE COBOL の拡張 ACCEPT および DISPLAY ステートメントは、IBM COBOL/2™ の ACCEPT および DISPLAY ステートメント (形式 2) に類似していますが、以下の例外があります。

- 一部の WITH 句については、構文検査だけが行われます (拡張 ACCEPT および DISPLAY の構文図に示されています)。
- ON ESCAPE は、ON EXCEPTION 句の代わりには使用されません。
- 表示されるかまたは受け入れられるデータ項目内で句が重複している場合、ILE COBOL コンパイラーは重大エラー・メッセージを出します。COBOL/2 コンパイラーでは、UPON や BELL など、一部の句の重複が許可されます。
- ILE COBOL の拡張 ACCEPT ステートメントではグループ項目について AUTO-SKIP を指定できますが、COBOL/2 コンパイラーでは重大エラー・メッセージが生成されます。
- ILE COBOL の拡張 ACCEPT ステートメントではグループ項目について BELL を指定できますが、COBOL/2 コンパイラーでは重大エラー・メッセージが生成されます。
- ILE COBOL コンパイラーは、以下のものがグループ項目について指定されている場合には、それを受け入れて該当するフィールドに適用します。COBOL/2 コンパイラーでは重大エラー・メッセージが出されます。
 - REQUIRED
 - SECURE
 - LEFT-JUSTIFY
 - RIGHT-JUSTIFY
 - SPACE-FILL
 - TRAILING-SIGN
 - UPDATE
 - ZERO-FILL
- COBOL/2 コンパイラーは符号付き数字データ (表示されるかまたは受け入れられる) を左そろえしますが、ILE COBOL コンパイラーはそれらのデータ項目を右そろえします。
- COBOL/2 コンパイラーでは、DISPLAY ステートメントの中で検出された表意定数による特殊な効果を処理します (たとえば、DISPLAY SPACE は DISPLAY WITH BLANK SCREEN と同じ効果をもちます)。一方、ILE COBOL コンパイラーでは、拡張 DISPLAY ステートメントの中で表示されるデータ項目として検出された表意定数に特殊な効果を適用しません。
- COBOL/2 コンパイラーでは、表示可能なデータ項目のためにすべての画面位置を使用しますが、ILE COBOL コンパイラーでは、必ず、それぞれの表示可能なデータ項目の前に属性バイト用の 1 バイトが必要とされます。このため、行 1、桁 1 は、ILE COBOL の拡張 ACCEPT または DISPLAY ステートメントでは使用できません。(コンパイル時にエラー・メッセージ LNC1263 が出され、実行時に LNR7054 が出されます。)

ACCEPT/DISPLAY および COBOL/2

- 1 つの ACCEPT または DISPLAY ステートメントで、1 つの WITH 句に UNDERLINE、HIGHLIGHT、および REVERSE-VIDEO 句が含まれている場合には、HIGHLIGHT 句が無視されます。この組み合わせがコーディングされると、コンパイル時に警告メッセージ (LNC0265) が生成されます。拡張 DISPLAY ステートメントの中では、UPON CRT-UNDER 句は UNDERLINE 句と同等です。フィールドが画面上に表示されないようにするには、SECURE オプションを使用します。
- CRTCBMOD または CRTBNDCBL コマンドで EXTDSPOPT(*NODFRWRT) パラメーターを指定しない場合、ILE COBOL コンパイラーは、次の ACCEPT ステートメントが発生するまで、すべての拡張 DISPLAY ステートメントをバッファに入れておきます。
- *NOUNDSPCHR コンパイラー・オプションが指定されている場合、16 進数 20 よりも小さい値は、拡張 ACCEPT および拡張 DISPLAY 操作において望ましくない結果をもたらします。このハードウェアの制限を無効にするには、(デフォルト) *UNDSPCHR オプションを使用してください。
- ILE COBOL のコンパイラーでは、実行時構成オプションを提供しません。
- COBOL/2 コンパイラーでは CRT STATUS 文節内のデータ名の長さは 3 バイトであり、ILE COBOL のコンパイラーでは 6 バイトです。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Ltd. Laboratory
Information Development
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario, Canada L6G 1C7

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。お客様は、IBM のアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

プログラミング・インターフェース情報

本書の目的は、統合言語環境® ILE COBOL プログラムをお客さまが作成する手助けをすることです。本書は、ILE COBOL コンパイラーを使用する場合に必要な情報を記述しています。

ILE COBOL コンパイラーのサービスを要求したり、サービスを受けたりするプログラムを作成する際に使用するプログラミング・インターフェースについては説明していません。

商標

以下は、International Business Machines Corporation の米国およびその他の国における商標です。

alphaWorks	MVS
AFP	Lotus Domino
AIX	Lotus Notes
AS/400	Operating System/400
AS/400e	Operating System/2
BookManager	OS/2
C/400	OS/400
CICS	Redbooks
CICS/400	S/390
COBOL/2	SQL/400
DB2 Universal Database	PM eServer iSeries
e(ロゴ)	Systems Applications Architecture
@server	System/36
GDDM	System/38
IBM	System/390
IBMLink	VisualAge
Integrated Language Environment	WebSphere

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

登録商標および未登録の商標はそれぞれ、® および ™ で示しています。

注

IBM は、ILE COBOL コンパイラーにおいて下記の研究プロダクトを使用しています。

S/SL ©Copyright 1981 by the University of Toronto

参考文献

iSeries システムでの ILE COBOL プログラミングに関連するトピックの詳細は、以下の IBM iSeries 資料を参照してください。

- 「*Communications Management, SC41-5406-02*」適用業務開発ツール・セットのプログラム開発管理機能 (PDM) を使用して、ライブラリー、オブジェクト、メンバー、およびユーザー定義オプションのリストを処理し、コピー、削除、名前変更などの操作を容易に行うための情報を提供します。PDM を学習するのに役立つ活動および参照情報が入っています。最もよく使用される操作およびファンクション・キーについては、例を用いて詳しく説明されています。
- 「*AS/400 適用業務開発ツールセット AS/400 用原始ステートメント入力ユーティリティー 使用者の手引きと参照, SD88-5047-00*」適用業務開発ツールセットの原始ステートメント入力ユーティリティー (SEU) を使用した、ソース・メンバーの作成および編集について説明します。この資料では、SEU セッションを開始および終了する方法と、このフルスクリーン・テキスト・エディターの多くの機能を使用する方法を説明しています。この解説書には、新規ユーザーと経験の深いユーザーの両方にとって簡単な行編集コマンドから高水準言語やデータ形式用の事前定義プロンプトの使用まで、各種の編集作業の実施に役立つ例が入っています。
- 「*アプリケーション表示プログラミング, SC88-4031-01*」次の情報を提供します。
 - DDS を使用したアプリケーション用の表示画面の作成および保守
 - システムでのディスプレイ・ファイルの作成および処理
 - オンライン・ヘルプ情報の作成
 - UIM を使用したアプリケーション用のパネルおよびダイアログの定義
 - パネル・グループ、レコード、および文書の使用
- 「*バックアップおよび回復, SD88-5008-09*」次の機能のセットアップと管理に関する情報を提供します。

- ジャーナリング、アクセス・パス保護、およびコミットメント制御
- ユーザー補助記憶域プール (ASP)
- ディスク保護 (装置パリティ、ミラー保護、およびチェックサム)

バックアップ・メディアおよび保管/復元操作についてのパフォーマンス情報も提供します。さらに、活動時保管サポートの使用、異なるリリースへの保管と復元、およびプログラミングのヒントと技法など、拡張バックアップおよびリカバリーに関するトピックも記載されています。

- 「*CICS for iSeries Application Programming Guide, SC41-5454-02*」iSeries 用 CICS のアプリケーション・プログラミングについて説明します。CICS アプリケーション・プログラム・インターフェースとシステム・プログラミング・インターフェース・コマンドに関する手引きおよび参照情報、さらに、新しいアプリケーションの開発や他の CICS プラットフォームからの既存のアプリケーションのマイグレーションに関する一般情報が記載されています。
- 「*CL プログラミング, SD88-5038-06*」オブジェクトとライブラリーに関する概説、CL プログラミング、制御の流れとプログラム間通信、CL プログラム内のオブジェクト処理、および CL プログラムの作成などの、iSeries プログラミングに関するトピックを広範囲にわたって説明しています。その他のトピックとしては、事前定義メッセージと即時メッセージおよびメッセージの処理、ユーザー定義のコマンドとメニューの定義と作成、デバッグ・モード、ブレークポイント、追跡、および表示機能を含むアプリケーションのテストなどが入っています。
- 「*Communications Management, SC41-5406-02*」通信環境における作業管理、通信状況、通信問題のトレースと診断、エラー処理とリカバリー、パフォーマンス、および特定の回線速度とサブシステム・ストレージについての情報を提供します。
- 「*Experience RPG IV Tutorial Kit, GK2T-9882-00*」RPG III と RPG IV の違いおよび

び新しい ILE 環境での作業方法を説明する、対話式のチュートリアルです。付属のワークブックには追加の練習問題が載せられていて、学習終了時には解説書として役立ちます。ILE RPG のコード例は、チュートリアルとともに配布され、それらはシステム上で直接実行できます。

- 「*GDDM Programming Guide*, SC41-0536-00」 i5/OS 図形データ表示管理プログラム (GDDM) を使用してグラフィックス・アプリケーション・プログラムを作成する方法について説明します。多くのプログラム例およびこのプロダクトをデータ処理システムに適合させる方法を理解するのに役立つ情報が含まれています。
- 「*GDDM Reference*, SC41-3718-00」 i5/OS 図形データ表示管理プログラム (GDDM) を使用してグラフィックス・アプリケーション・プログラムを作成する方法について説明します。GDDM で使用可能なすべてのグラフィックス・ルーチンについて詳しく説明します。さらに、GDDM に対する高水準言語インターフェースに関する情報を提供します。
- 「*ICF Programming*, SC41-5442-00」 iSeries 通信および i5/OS システム間通信機能 (i5/OS-ICF) を使用するアプリケーション・プログラムを作成するのに必要な情報を提供します。さらに、データ記述仕様 (DDS) キーワードに関する情報、システム提供の形式、戻りコード、ファイル転送サポート、およびプログラム例も記載されています。
- 「*IDDU Use*, SC41-5704-00」 iSeries 対話式データ定義ユーティリティ (IDDU) を使用して、データ・ディクショナリー、ファイル、およびレコードをシステムに記述する方法を説明します。次の情報が含まれています。
 - コンピューター・ファイルおよびデータ定義の概念の紹介
 - 照会および文書で使用されるデータを記述するための IDDU の使用の紹介
 - データ・ディクショナリー、ファイル、レコード様式、およびフィールドの作成、保守、および使用に関する代表的な作業
 - IDDU を使用して他のシステムで作成されたファイルを処理するための詳細情報と、エラー・リカバリーおよび問題の防止に関する情報
- 「*WebSphere Development Studio: ILE C/C++ Programmer's Guide*, SC09-2712-06」 ILE C 言語を使用して、アプリケーションを開発する方法を説明します。プログラムの作成、実行、およびデバッグに関する情報が記載されています。また、言語をまたがるプログラムとプロシージャ呼び出し、ロケール、例外処理、データベース、外部記述ファイル、および装置ファイルのプログラミング上の考慮事項が解説されています。パフォーマンス上のヒントもいくつか説明されています。付録には、EPM C/400 またはシステム C/400 から ILE C へのソース・コードのマイグレーションに関する情報が記載されています。
- *WebSphere Development Studio: ILE C/C++ 解説書*, SC88-4026-01 は、C および C++ プログラミング言語の構文、セマンティクス、および IBM インプリメンテーションを説明します。
- 「*WebSphere Development Studio: ILE COBOL プログラマーの手引き*, SD88-5045-06」 iSeries システムで ILE COBOL プログラムを作成、コンパイル、バインド、実行、デバッグ、および保守する方法を説明します。この資料は、他の ILE COBOL プログラムや ILE COBOL 以外のプログラムを呼び出す方法、他のプログラムとデータを共有する方法、ポインターを使用する方法、および例外を処理する方法に関するプログラミング情報を提供します。また、外部接続装置、データベース・ファイル、表示装置ファイル、および ICF ファイルに対する入出力操作の実行方法が説明されています。
- 「*ILE 概念*, SD88-5033-08」 iSeries ライセンス・プログラムの統合言語環境 (ILE) アーキテクチャーに関する概念および用語について説明します。扱われているトピックとしては、モジュールの作成、プログラムのバインディング、プログラムの実行、プログラムのデバッグ、および例外の処理があります。
- 「*WebSphere Development Studio: ILE RPG プログラマーの手引き*, SD88-5042-06」 iSeries システム上統合言語環境 (ILE) での RPG IV 言語のインプリメンテーションである ILE RPG プログラム言語について説明します。プログラムの作成および実行に関する情報と、プロシージャ呼び出しおよび言語間プログラミングに関する考慮事項が記載されています。さらに、デバッグおよび例外処理について扱い、RPG プログラム内で iSeries ファイルおよび装置を使用する方法を説明します。付録には、RPG IV へ

のマイグレーションに関する情報およびサンプル・コンパイラー・リストが記載されています。この資料は、データ処理の概念および RPG 言語についての基礎知識がある読者を対象としています。

- 「*WebSphere Development Studio: ILE RPG 言語解説書, SD88-5043-06*」 ILE RPG プログラム言語について説明します。この解説書は位置ごとおよびキーワードごとに、すべての RPG IV 仕様書に有効な項目を説明し、またすべての演算コードおよび組み込み関数を詳細に説明しています。またこの解説書には、RPG の論理サイクル、配列とテーブル、編集機能、および標識の説明があります。
- 「*AS/400 アドバンスド・シリーズ 装置構成, SD88-5003-00*」 iSeries システムでのローカル装置の構成について説明します。これには、次のものを構成する方法が含まれます。
 - ローカル・ワークステーション制御装置 (平衡型制御装置を含む)
 - テープ制御装置
 - ローカル接続装置 (平衡型装置を含む)
- 「*印刷装置プログラミング, SD88-5073-03*」印刷を理解し、制御するのに役立つ情報を提供します。エレメントの印刷と iSeries システムの概念、印刷操作のプリンター・ファイルと印刷スプーリング・サポート、およびプリンターの接続性に関する具体的な情報を提供します。パーソナル・コンピュータの使用に関する考慮事項、他の印刷機能 (ビジネス・グラフィックス・ユーティリティ (BGU) など)、高機能印刷 (AFP™)、および iSeries システムの印刷エレメントを扱う例 (スプール出力ファイルのある出力キューから別の出力キューに移動する方法など) が記載されています。さらに、付録には、印刷の作業負荷を管理するために使用される制御言語 (CL) コマンドが記載されています。iSeries システムで使用できるフォントも示されています。フォント置換テーブルによって、接続されたプリンターがアプリケーション指定のフォントをサポートしていない場合、置き換えフォントの相互参照が提供されます。
- 「*AS/400 適用業務開発ツールセット AS/400 用画面設計機能 (SDA), SD88-5046-00*」適用業務開発ツールセットの画面設計機能 (SDA) を使用して、表示画面、メニュー、オンライン・ヘルプ情報を設計、作成、保守するための情報を提供

します。iSeries システムと、iSeries システムのシステム/38 環境で SDA を使用する方法を理解するのに役立つ例および情報が記載されています。

- 「*機密保護解説書, SD88-5027-10*」システム・セキュリティ・サポートを使用して、システムやデータが適切な権限のないユーザーによって使用されるのを防ぐ方法、データを故意または偶発的な損傷または破壊から保護する方法、セキュリティ情報を最新の状態に保つ方法、およびシステムにセキュリティをセットアップする方法について説明します。
- 「*Installing, upgrading, or deleting i5/OS and related software, SC41-5120-10*」初期インストールと、IBM 提供のライセンス・プログラム、プログラム一時修正 (PTF)、および 2 次言語のインストール手順をステップごとに示します。この資料は、iSeries システムのインストール済みリリースをすでに所有しているユーザーで、新しいリリースをインストールしたい方も対象としています。

システム・アプリケーション体系 (SAA) 共通プログラミング・インターフェース (CPI) COBOL についての情報は、次の資料を参照してください。

- 「*システム・アプリケーション体系 (SAA) 共通プログラミング・インターフェース COBOL 解説書*」、N:SC26-4354

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセス・モード

記述

説明 117

DELETE ステートメント 366

READ ステートメント 460

順次

説明 116

READ ステートメント 460

説明 112

データ編成および 117

ランダム

説明 117

READ ステートメント 461

アスタリスク (*)

コメント行 28

挿入文字 220

PICTURE 文節の記号 203, 208

暗黙の

記憶域の再定義 157, 221

参照 31

データ属性 50

範囲終了符号 289

位置合わせ, ポインターの 246

位置合わせデータ 291

JUSTIFIED 文節 187

SYNCHRONIZED 文節 228

引用符 (") 文字

非数字リテラルおよび 28

分離文字として 21

受け入れ項目

MOVE ステートメント 424

受け入れフィールド

複数の結果の規則 295

COMPUTE ステートメント 362

SET ステートメント 503

STRING ステートメント 532

UNSTRING ステートメント 543

英字

クラスおよびカテゴリー 146

項目

位置合わせの規則 148

基本移動の規則 426

INSPECT ステートメント 410

英字 (続き)

項目 (続き)

PICTURE 文節 209

編集項目

位置合わせの規則 148

文字

ACCEPT ステートメント 302

ALL 添え字付け 593

英字名

説明 80

MERGE ステートメント 419

PROGRAM COLLATING SEQUENCE

文節 75

SORT ステートメント 515

英数字

クラスおよびカテゴリー

位置合わせの規則 148

説明 146

項目

位置合わせの規則 148

基本移動の規則 426

INSPECT ステートメント 410

PICTURE 文節 212

編集項目

基本移動の規則 426

INSPECT ステートメント 410

PICTURE 文節 212

英数字の引数 591

エラー条件

参照: EXCEPTION/ERROR 宣言部分

エラー処理 705

演算符号

代数, 記述 150

SIGN 文節および 150

USAGE 文節および 150

オーバーラップするオペランド

無効 293

置き換えによる編集 220

送り出し項目

MOVE ステートメント 424

送り出しフィールド

SET ステートメント 503

STRING ステートメント 531, 532

UNSTRING ステートメント 542

オプションナル語 9

オプションナル・ファイル

AT END 条件 439

オペランド

オーバーラップ 293

計算 41

合成 293

オペランド (続き)

数字の比較 276

非数字の比較 276

オペランドの合成 293

[カ行]

外部 10 進数項目

DISPLAY ステートメント 370

INSPECT ステートメント 410

下線, ハイフンへの変換 643

下線, フィールド名の末尾から除去される

643

括弧

結合条件, 使用 282

算術式における 266

分離文字, 使用上の規則 21

可変長テーブル 196

可変長フィールド 656

レコード・キー 120

環境部

句読点 21

構成セクション

OBJECT-COMPUTER 段落 75

SOURCE-COMPUTER 段落 73

SPECIAL-NAMES 段落 76

入力セクション

FILE-CONTROL 段落 101

I-O-CONTROL 段落 126

環境名

SPECIAL-NAMES 段落 77, 78

関係演算子

各演算子の意味 272

省略された結合比較条件における 284

のリスト 9

比較条件の使用 271

関数

関数のタイプ 588

構文 42

使用上の規則 589

説明 587

引数 591

DBCS および 42

関数 ID

構文 42

ネーム・レゾリューション 51

関数名 689

ILE COBOL 言語の 689

関数名としての SYSTEM-

SHUTDOWN 79

関数名としての UPSI-0 ~ UPSI-7 78

簡略名

ACCEPT ステートメント 302
DISPLAY ステートメント 372, 383
SET ステートメント 506
SPECIAL-NAMES 段落 79
UPSI 条件名の修飾子として 79
WRITE ステートメント 554

キーワード

説明 9

キー・フィールド

レコード域における 367

記号

LOCALE 句が指定されている
PICTURE 文節内の順序 208
PICTURE 文節 203
PICTURE 文節の順序 207

疑似テキスト

参照形式 28, 29
分離文字 22
COPY ステートメント 637
REPLACE ステートメント 664

記述子およびプロシージャ・パラメータ

参照：操作記述子

記入項目

定義 23

基本移動の規則 425

基本項目

位置合わせの規則 148
クラスおよびカテゴリー 146
ストレージでのサイズの決定 149
非数字オペランド比較 277
プログラムでのサイズの決定 149
レコードの基本的な細分化項目 143
MOVE ステートメント 425

行送り 553

行外 PERFORM ステートメント 448

境界違反 115

共通の考察

拡張 ACCEPT および DISPLAY 324

共通の処理機能 296

行内 PERFORM ステートメント 447

共用ファイル 48

句、定義 24

区域 A (8 ~ 11 桁目) 26

区域 B (12 ~ 72 桁目) 27

句読点 xxix

句読文字

使用上の規則 22
数字リテラル内 16
分離文字として定義 20

国別

データ項目 213
リテラル 15
NATIONAL 句 245

国別 16 進リテラル 15

国別文字

位置合わせの規則 149
混合リテラル 17
データ項目 213
分離文字 20
文字ストリング 5
リテラル 13
SPACE/SPACES 10

組み込み関数

英数字関数 588
概要 596
国別関数 588
クラス条件および 268
構文、一般 42
コンテキストに依存した語 689
参照変更および 40
条件評価および 283
数字関数 588
整数関数 588
添え字付けおよび 37
特殊レジスタおよび 12
日時関数 588
ネーム・レゾリューション 51
表意定数および 11
プール関数 588
浮動小数点リテラル 593
編成 116
認められたアクセス・モード 117
ADDRESS OF 特殊レジスタ 141
ADD-DURATION 602
CONVERT-DATE-TIME 604
CURRENT-DATE 606
DBCS および 14
DBCS 関数 588
EXTRACT-DATE-TIME 609
FIND-DURATION 610
LENGTH 611
LENGTH OF 特殊レジスタおよび 348
LOCALE-DATE 613
LOCALE-TIME 613
MIDRANGE 614
MIN 615
ORD-MAX 617
ORD-MIN 617
PRESENT-VALUE 618
RANGE 619
RETURN-CODE の特殊レジスタおよび 530
STANDARD-DEVIATION 619
STRING ステートメントおよび 534
SUBTRACT-DURATION 620
SUM 621
TEST-DATE-TIME 622
UTF8STRING 627
VARIANCE 627

組み込み関数 (続き)

WHEN-COMPILED 628

クラス条件

組み込み関数および 268
クラス名クラス・テスト 269
説明 267
ALPHABETIC クラス・テスト 269
ALPHABETIC-LOWER クラス・テスト 269
ALPHABETIC-UPPER クラス・テスト 269

NUMERIC クラス・テスト 268

クラス名クラス・テスト 269

グラフィック・サポート 352

グループ移動の規則 432

グループ項目

クラスおよびカテゴリー 146

説明 143

非数字オペランド比較 277

レベル、データの 143

MOVE ステートメント 432

グループ・レベルの名前 649

形式 (レコード) レベルの構造 649

形式の再定義 652

形式名、追加の注意事項 653

継続

行 27, 28

区域 25

結果フィールド

GIVING 句 291

NOT ON SIZE ERROR 句 292

ON SIZE ERROR 句 292

ROUNDED 句 291

結合条件

説明 281

評価規則 282

評価の順序 283

許されるエレメントの順序 282

論理演算子と評価結果 282

結合条件の評価の順序 283

限界値、ILE COBOL コンパイラー 673

言語

考慮事項 3

名前

関数名として 9

システム名として 8

構成セクション

説明 71

OBJECT-COMPUTER 段落 75

SPECIAL-NAMES 段落 76

構造

形式 (レコード) レベル 649

データ・フィールド 649

標識 649, 651

構造化プログラミング

DO-WHILE および DO-UNTIL 450

項目のアドレス 141
 効率
 および 8 バイトの 2 進数項目 238
 および COMP-3 (パック 10 進数) 項目 240
 PICTURE 文節の S 204
 固定挿入による編集 217
 固定長
 項目、最大長 171
 テーブル、OCCURS 文節の形式 194
 レコード 160
 固定ページ・スペーシング、LINAGE 文節 166
 コメント 69
 記入項目
 定義 20
 見出し部 21
 行
 説明 28
 定義 20
 ライブラリー・テキスト内の 636
 有効な文字 20
 コメント文字ストリング、定義 3
 固有照合順序 81
 固有文字セット 81
 コロン
 分離文字、使用上の規則 22
 混合リテラル 17
 コンテキストに依存した語 689
 説明 9
 ILE COBOL 言語の 689
 コンパイラ指示ステートメント
 説明 633
 COPY 634
 EJECT 663
 ENTER 390
 SKIP1/2/3 665
 TITLE 666
 USE 667
 コンパイラ出力、抑止 633, 637
 コンピューター名
 システム名 73, 75
 OBJECT-COMPUTER 段落 75
 SOURCE-COMPUTER 段落 73
 コンマ (,)
 句読点の規則 22
 構成セクション 73
 挿入文字 217
 分離文字、使用上の規則 21
 DECIMAL-POINT IS COMMA 文節
 89, 205, 206
 PICTURE 文節の記号 205, 208

[サ行]

最終算術結果
 参照：結果フィールド
 サイズ・エラー条件 292
 参照：ON SIZE ERROR 句
 再定義、暗黙 157
 再定義、グループ・レベルの名前 649
 作業用ストレージ・セクション
 形式 137
 説明 139
 データ項目記述記入項目 139
 レコード記述記入項目 139
 索引付きファイル
 DELETE ステートメント 366
 OPEN ステートメント 436
 START ステートメント 524
 WRITE ステートメント 556
 索引編成
 説明 116
 認められたアクセス・モード 117
 削除済みレコードと一緒にファイルを初期設定 115
 サブストリング
 参照：参照変更
 サブプログラム
 終了
 CANCEL ステートメント 355
 EXIT PROGRAM ステートメント 397
 GOBACK ステートメント 399
 サブプログラム・リンケージ
 CALL ステートメント 337
 CANCEL ステートメント 353
 参考文献 735
 算術演算子 xxix
 可能な記号の対 267
 説明 266
 のリスト 9
 算術式
 説明 265
 比較条件の使用 271
 COMPUTE ステートメント 362
 EVALUATE ステートメント 393
 算術ステートメント
 オペランド 293
 共通の句 290
 のリスト 293
 複数の結果 295
 プログラミング上の注意事項 295
 ADD 332
 COMPUTE 362
 DIVIDE 385
 MULTIPLY 434
 SUBTRACT 538
 参照形式 25

参照修飾子
 ALL 添え字付け 593
 参照の固有性 31
 参照変更 39
 オペランド、計算 41
 オペランドの計算 41
 関数および 40
 制約事項 42
 説明 39
 日時データ項目 41
 範囲エラー 41
 シーケンス番号域 (1 ~ 6 桁目) 25
 式、算術 265
 時刻フィールド 654
 字下げ 27, 146
 指数演算
 サイズ・エラー条件 292
 指数式 266
 指数演算の結果 266
 システム考慮事項、サブプログラム・リンケージ
 CALL ステートメント 337
 CANCEL ステートメント 353
 システム情報の転送
 浮動小数点および 304
 ACCEPT ステートメント 304
 YYYYDDD 句 304
 YYYYMMDD 句 304
 システムに依存しない 2 進数項目 240
 システム名
 コンピューター名 73, 75
 説明 8
 OBJECT-COMPUTER 段落 75
 SOURCE-COMPUTER 段落 73
 実行単位
 終了
 CANCEL ステートメント 355
 実行の終了 351
 EXIT PROGRAM ステートメント 397
 GOBACK ステートメント 399
 STOP RUN ステートメント 529
 STRING ステートメント 531
 実行の順序
 参照：実行の流れ
 実行の流れ
 ALTER ステートメント変更 335
 PERFORM ステートメント変更 447
 実小数点
 定義 19
 PICTURE 文節の 204
 指標
 データ項目
 比較 279
 MOVE ステートメントの規則 424
 MOVE ステートメントの評価 425

- 指標値の割り当て 502
- 指標付け
 - 制約事項 39, 200
 - OCCURS 文節 190
- 指標名
 - 値の割り当て 502
 - データ項目の定義 244
 - 比較 279
 - OCCURS 文節 196
 - PERFORM ステートメント 459
 - SEARCH ステートメント 496
 - SET ステートメント 502, 503
- 修飾 33
- 修飾子 33
- 終了符号、範囲 288
- 出力の抑止 633, 637
- 順次アクセス・モード
 - 説明 116
 - データ編成および 117
 - DELETE ステートメント 366
 - REWRITE ステートメント 488
- 順次ファイル
 - ファイル記述記入項目 151
 - 編成 114
 - 認められたアクセス・モード 117
 - CLOSE ステートメント 357
 - OPEN ステートメント 436
 - REWRITE ステートメント 488
 - SELECT OPTIONAL 文節 106
 - WRITE ステートメント 551
- 順次編成
 - 説明 114
 - 認められたアクセス・モード 117
 - LINAGE 文節 166
 - SELECT OPTIONAL 文節 106
- 順序、項目の
 - 見出し部 65
 - FILE-CONTROL 記入項目 101
 - FILE-CONTROL 段落の文節 101
 - I-O-CONTROL 段落 126
- 使用、REPLACING の、形式 2 の COPY での 657
- 使用上の規則 589
- 消去、ファイルの 440, 443
- 状況キー
 - 値 705
 - ファイル処理
 - 共通の処理機能 297
 - EXCEPTION/ERROR プロシージャによるチェック 668
- 消去による編集 220
- 条件
 - 組み込み関数の評価 283
 - クラス 267
 - 結合 281
 - 条件名 270
- 条件 (続き)
 - 省略された結合比較 284
 - スイッチ状況 280
 - 単純 267
 - 比較 271
 - 否定単純 281
 - 複合 280
 - 符号 279
 - EVALUATE ステートメント 394
 - IF ステートメント 402
 - PERFORM UNTIL ステートメント 450
 - SEARCH ステートメント 496
- 条件式
 - 説明 267
- 条件ステートメント
 - 説明 287
 - のリスト 287
 - IF ステートメント 402
 - PERFORM ステートメント 450
- 条件付き GO TO ステートメント 400
- 条件変数
 - 条件名項目 174
 - 説明 174
- 条件名
 - 値の規則 251
 - 条件
 - 記述および形式 270
 - 条件変数 174
 - スイッチ状況条件 79
 - 日時および 252
 - SEARCH ステートメント 499
 - SET ステートメント 506
 - SPECIAL-NAMES 段落 79
- 照合順序
 - デフォルト 76
 - ASCENDING/DESCENDING KEY 句および 195
 - ASCII 685
 - EBCDIC 683
 - OBJECT-COMPUTER 段落での指定 75
 - SPECIAL-NAMES 段落での指定 80, 81
- 使用されなくなるエレメント xxxi
- 小数点 (.) 291
- 初期状態、プログラムの 68
- 資料 735
- 真理値
 - 条件ステートメント 287
 - 複合条件 280, 281
 - 符号条件 280
 - EVALUATE ステートメント 394
 - IF ステートメント 402
- スイッチ状況条件 280
- 数字
 - クラスおよびカテゴリー 146
 - 項目 210
 - およびパフォーマンス 204, 238
 - 符号付き 210
 - 符号なし 210
 - 編集項目 211
 - 位置合わせの規則 148
 - 基本移動の規則 427
 - 編集符号 150
 - INSPECT ステートメント 410
 - リテラル 18
 - 数字、COBOL 文字セット内の 3
 - 数字オペランド、比較 276
 - 数字の引数 591
 - 数表示、数字リテラル 18
 - 図形データ表示管理プログラム (GDDM)、呼び出し 352
 - 図形表示ルーチン (PGR)、呼び出し 352
 - ステートメント
 - カテゴリー 285
 - 条件付き 287
 - 説明 24, 264
 - 操作 290
 - データ操作 296
 - 入出力 296
 - 範囲区切り 288
 - プロシージャの分岐 300
 - 命令 285
 - ストレージ
 - 補助 699
 - MEMORY SIZE 文節 75
 - REDEFINES 文節 221
 - スペース分離文字 21
 - スラッシュ (/)
 - コメント行 28
 - 挿入文字 217
 - PICTURE 文節の記号 204, 208
 - 制御転送
 - 暗黙の 55
 - 明示 55
 - 制御の転送
 - 暗黙の 55
 - 明示 55
 - GO TO ステートメント 400
 - IF ステートメント 403
 - PERFORM ステートメント 447
 - UNSTRING ステートメント 541
 - XML PARSE ステートメント 576
 - 整数 18
 - 整数の引数 591
 - 生成された XML データのトリミング 574
 - 正符号 (+)
 - 固定挿入記号 217
 - 挿入文字 220

正符号 (+) (続き)
 浮動挿入記号 218, 220
 編集符号制御記号 205, 206
 PICTURE 文節の記号 208
 PICTURE 文字ストリングでの使用
 208
 SIGN 文節 228

セクション
 説明 23, 264
 名前
 修飾子としての規則 35
 説明 264
 EXCEPTION/ERROR 宣言内の
 667
 ヘッダー
 指定 26
 説明 264

セグメント番号 76

セミコロン分離文字、使用上の規則 21

ゼロ
 埋め込み、基本移動 425
 消去と置き換えによる編集 220

宣言セクション 262

宣言プロシージャ
 記述および形式 262
 EXCEPTION/ERROR 667
 PERFORM ステートメント 447
 USE ステートメント 263

ソース・プログラム
 標準 COBOL 参照形式 25
 ライブラリー、プログラミングでの注
 意 640
 ライブラリー、COPY ステートメント
 634

ソート・ファイル記述 (SD) 記入項目
 説明 151, 157
 データ部 157
 レベル標識 143
 DATA RECORDS 文節 165
 EXTERNAL 文節 157
 GLOBAL 文節 159
 RECORD 文節 161

ソート・マージ機能
 MERGE ステートメント 417
 OUTPUT PROCEDURE 句 422
 RELEASE ステートメント 482
 RETURN ステートメント 484
 SAME SORT AREA 文節 131
 SAME SORT-MERGE AREA 文節
 131
 SORT ステートメント 513
 SORT-RETURN 特殊レジスター 423

ソート・マージ・ファイル・ステートメン
 ト句
 ASCENDING/DESCENDING KEY 句
 418

ソート・マージ・ファイル・ステートメン
 ト句 (続き)
 COLLATING SEQUENCE 句 419
 GIVING 句 420
 OUTPUT PROCEDURE 句 422
 USING 句 420

操作記述子 94, 343

相対ファイル
 編成 115
 認められたアクセス・モード 117
 OPEN ステートメント 436
 RELATIVE KEY 文節 117, 123
 REWRITE ステートメント 489
 START ステートメント 527
 WRITE ステートメント 556

相対編成
 説明 115
 認められたアクセス・モード 117

挿入による編集
 固定 (数字編集項目) 217
 単純 215
 特別
 外部浮動小数点項目 217
 数字編集項目 217
 浮動 (数字編集項目) 218

添え字 200

添え字付け
 制約事項 39, 200
 定義および形式 200
 ALL 37
 MOVE ステートメントの評価 425
 OCCURS 文節の INDEXED BY 句
 196
 OCCURS 文節の指定 190

属性データ 712

[夕行]

タイム・スタンプ・フィールド、COPY
 DDS 654
 単項演算子 266
 単純条件
 結合 281
 説明およびタイプ 267
 否定 281
 単純挿入による編集 215

段落
 終了、EXIT ステートメント 397
 説明 23, 264
 名前
 指定 26
 説明 264
 ヘッダー、指定 26

逐次検索 496
 PERFORM ステートメント 450
 追加の注意事項、形式名に関する 653

追加の注意事項、フィールド名に関する
 653

通貨記号 205

通貨記号 (¥)
 指定 87, 88
 挿入文字 217, 218
 PICTURE 文節の 205

通貨ストリング
 単一文字 87
 複数文字 88

次ページへスキップ 28

データ
 位置合わせ 148
 カテゴリー 209
 切り捨て 150, 187
 クラス 146
 参照、方法 31
 修飾で使用される階層 33, 143
 データ間の関係 143
 標準データ形式 149
 符号付き 150
 レベル 143

データ記述記入項目
 形式
 一般形式 171
 レベル 66 形式 (それ以前に定義さ
 れた項目) 174
 レベル 88 形式 (条件名) 174

字下げおよび 146
 説明 171
 データ名 179
 浮動小数点の使用法 171, 189, 195
 レベル番号記述 178
 2 つのレベル 01 記入項目および外部
 文節 32
 BLANK WHEN ZERO 文節 179
 EXTERNAL 文節 180
 FORMAT 文節 181, 183
 GLOBAL 文節 185
 JUSTIFIED 文節 186
 LOCALE 句 183
 OCCURS DEPENDING ON (ODO) 文
 節 196
 OCCURS 文節 190
 PICTURE 文節 201
 REDEFINES 文節 221
 RENAMES 文節 224
 SIGN 文節 227
 SYNCHRONIZED 文節 228
 TYPE 文節 233
 TYPEDEF 文節 234
 VALUE 文節 248

データ切り捨て
 参照: truncation of data

データ項目
 記述記入項目の定義 139

データ項目 (続き)
 データ記述記入項目 171
 浮動小数点 148, 149
 レコード記述記入項目 171
 データ項目の変換
 CCSID 間 609
 データ操作ステートメント
 のリスト 296
 INITIALIZE 404
 INSPECT 407
 MOVE 424
 RELEASE 482
 RETURN 484
 SET 502
 STRING 531
 UNSTRING 541
 WRITE 551
 データの共用 186
 データの切り捨て
 基本移動 426
 算術項目 150
 JUSTIFIED 文節 187
 ROUNDED 句 291
 データのクラス 146
 データのタイプ
 ファイル・データ 142
 プログラム・データ 142
 データの転送
 ACCEPT ステートメント 302
 MOVE ステートメント 424
 データの流れ
 UNSTRING ステートメント 545
 データの変換、DISPLAY ステートメント
 370
 データ部
 句読点 21
 形式 137
 構造
 作業用ストレージ・セクション
 137, 139
 ファイル・セクション 137, 138
 リンケージ・セクション 137, 140
 ローカル・ストレージ・セクション
 140
 ソート記述 (SD) 記入項目 157
 データ記述記入項目 171
 データの関係 143
 データのタイプ 142
 ファイル記述 (FD) 記入項目 157
 編成 137
 レベル、データの 143
 COPY DDS ステートメント 642
 EXTERNAL 文節 157
 GLOBAL 文節 159
 データ編成
 アクセス・モードおよび 117

データ編成 (続き)
 索引付き 116
 順次 114
 相対 115
 定義 114
 データ名
 修飾形式 34
 重複の制約 34
 データ記述記入項目 179
 データ・カテゴリー
 英字項目 209
 英数字項目 212
 英数字編集項目 212
 数字項目 210
 数字編集項目 211
 データのクラスとの関係 146
 データ・カテゴリー、概念 146
 データ・クラス、概念 146
 データ・タイプ
 TYPE 文節 233
 TYPEDEF 文節 234
 データ・フィールドの構造 649
 テーブル、定義 192
 テーブル処理についての考慮事項 192
 テーブルの参照
 制約事項 200
 添え字付け 200
 テーブルのストレージ・レイアウトの例
 192
 テーブル・レイアウト、例 192
 停止、実行の 528
 ディスク装置タイプ 699
 テキスト語 3, 636
 テキスト名 635, 662
 手続き部
 句読点 21
 形式 257
 コーディング例 259
 構成 257
 ステートメント 302
 説明 257
 宣言プロシージャ 262
 編成 257
 手続き部ヘッダー 259
 デバッグ行
 定義 28, 74
 WITH DEBUGGING MODE 文節 74
 等号 (=) 271
 動的アクセス・モード
 説明 117
 データ編成および 117
 DELETE ステートメント 366
 READ ステートメント 460
 特殊レジスター
 関係演算子 9
 関数および 12

特殊レジスター (続き)
 算術演算子 9
 使用説明 12
 ADDRESS OF 12
 DB-FORMAT-NAME 12, 300
 DEBUG-ITEM 12
 FORMAT OF 185
 LENGTH OF 347
 LINAGE-COUNTER 168
 LOCALE OF 184
 RETURN-CODE 529
 SORT-RETURN 423
 WHEN-COMPILED 432
 特別挿入による編集 217

[ナ行]

日時データ・タイプ
 位置合わせの規則 149
 カテゴリーの定義 146
 クラス条件および 268
 サイズの定義 150
 条件名および 252
 使用法 183
 数字比較 274
 データ・フィールドの構造 649
 比較、記述 278
 非数字比較 274
 標識の構造 651
 変換指定子 91, 184, 647
 ACCEPT ステートメント 303
 ADDRESS OF 特殊レジスター 142
 ADD-DURATION 関数 602
 ASCENDING/DESCENDING KEY 句お
 よび 195
 BY REFERENCE 句 261
 BY VALUE 句 261
 CALL ステートメント
 BY CONTENT 句 345
 BY REFERENCE 句 344
 BY VALUE 句 347
 GIVING/RETURNING 句 349
 CONVERT-DATE-TIME 604
 COPY DDS 647
 DATFMT DDS キーワード 184
 DATFMT キーワード 647, 654
 DISPLAY ステートメント 370, 375,
 377, 382
 EVALUATE ステートメント 394
 EXTRACT-DATE-TIME 609
 FIND-DURATION 610
 FORMAT OF 特殊レジスター 185
 FORMAT 文節 90, 181
 GIVING/RETURNING 句 262
 LC_TIME ロケール・カテゴリー 511
 LENGTH OF 特殊レジスター 348

日時データ・タイプ (続き)

LIKE 文節および 188, 189
LOCALE 句 92, 183
LOCALE-DATE 613
LOCALE-TIME 613
MOVE ステートメント
受け入れ項目 429
基本移動 430
使用法 426
OCCURS 文節および 191
PACKED-DECIMAL 238
PICTURE 文節および 202
PICTURE 文節の使用 183
READ ステートメント 464
REDEFINES 文節および 221
RELEASE ステートメント 482
RENAMES 文節および 225
SEARCH ステートメント 495, 499, 500
SET ステートメント 506
SIZE 句 92, 183
SORT ステートメント 515
START ステートメント 521
SUBTRACT-DURATION 620
SYNCHRONIZED 文節および 230
TEST-DATE-TIME 622
TIMFMT DDS キーワード 184
TIMFMT キーワード 647
UPON 句 383
VALUE 文節および 249, 252
WHEN-COMPILED 特殊レジスター 432
WRITE ステートメント 553
二分検索 498
入出力ステートメント
概説 296
形式および説明 436
ACCEPT 302
CLOSE 357
DELETE 365
DISPLAY 370
EXCEPTION/ERROR プロシージャー 668
OPEN 436
READ 460
REWRITE 486
START 520
WRITE 551
入出力セクション
形式 99
説明 99
FILE-CONTROL 段落 101
I-O-CONTROL 段落 126
入出力装置
参照: assignment-name

ヌル値

COPY DDS ステートメント 645
DELETE ステートメント 368
MERGE ステートメント 418
READ ステートメント 460, 466
REWRITE ステートメント 487
SORT ステートメント 514
START ステートメント 522
WRITE (形式 1) ステートメント 554
WRITE (形式 2) ステートメント 559
ヌル可能フィールド
COPY DDS ステートメント 645
DELETE ステートメント 368
MERGE ステートメント 418
OPEN ステートメント 439
READ ステートメント 460, 466
REWRITE ステートメント 487
SORT ステートメント 514
START ステートメント 522
WRITE (形式 1) ステートメント 554
WRITE (形式 2) ステートメント 559
ヌル終了非数値リテラル 17
ヌル・ブロック分岐、CONTINUE ステートメント 364
ネストされた IF 構造、EVALUATE ステートメント 391
ネストされた IF ステートメント 403

[ハ行]

ハイフン
別名のコピー時に生成される 643
ハイフン (-)、標識域 (7 桁目) における、 27
パック 10 進数項目
およびパフォーマンス 240
パフォーマンス
および 8 バイトの 2 進数項目 238
および COMP-3 (パック 10 進数) 項目 240
および DISPLAY ステートメントのバッファリング 325
PICTURE 文節の S 204
範囲エラーおよび参照変更 41
範囲区切りステートメント 288
範囲終了符号
暗黙の 289
明示 288
比較
指標データ項目 279
指標名 279
数字オペランド 276
数字および非数字オペランド 277
日時 274
非数字オペランド 276
浮動小数点 274

比較 (続き)

浮動小数点および 279
COPY ステートメントの規則 639
EVALUATE ステートメント 395
INSPECT ステートメントの規則 411
比較条件の使用
省略された結合 284
説明 271
COPY ステートメント 637
INITIALIZE ステートメント 404
OCCURS 文節および 194
比較文字
INSPECT ステートメント 414
比較文字 INSPECT ステートメント 414
引数 591
表意定数 9
非数字
ヌル終了 17
非数字オペランド、比較 276
非数字リテラル
混合 SBCS および DBCS 文字 17
有効な文字 15
16 進非数字 16
左の切り捨て
参照: データの切り捨て
日付フィールド、COPY DDS 654
否定単純条件
説明 281
表意定数
関数および 11
数字リテラルおよび 11
のリスト 9
DISPLAY ステートメント 371
INSPECT ステートメント 410
STOP ステートメント 528
STRING ステートメント 531
評価規則
結合条件 282
ネストされた IF ステートメント 403
EVALUATE ステートメント 395
標識域 25
標識の構造 649, 651
標準 COBOL 形式 25
標準位置合わせの規則 148
日時データ項目 149
JUSTIFIED 文節 187
標準データ・フォーマット 149
ピリオド (.)
実小数点 217
挿入文字 217
分離文字、使用上の規則 21
DECIMAL-POINT IS COMMA 文節 205, 206
PICTURE 文節の記号 205, 206, 209
プール・データ
形式 175

- ブール・データ (続き)
 - 定義 175
- ブール・リテラル 11, 13
 - 説明 147
 - 分離文字 21
- ZERO, ZEROS, ZEROES 11
- ファイル
 - データ・タイプ 142
 - 定義 142
 - 補助記憶装置 699
 - ラベル 164
- ファイル位置標識 439, 442
 - および COPY ステートメント 648, 651
 - 説明 298
- ファイル終わり (EOF) 処理 357
- ファイル記述 (FD) 記入項目
 - 参照: FD (ファイル記述) 記入項目
- ファイル構造サポートの要約 699
- ファイル状況キーの値 705
- ファイルの位置決め 440, 441, 442, 443, 445
- ファイルの使用可能性 445
- ファイル編成
 - 索引付き 116
 - 順次 114
 - 相対 115
 - LINAGE 文節 165
- ファイル名
 - 説明 8, 9
 - SELECT 文節での指定 106
- ファイル・セクション
 - 形式 137
 - ファイル記述記入項目 138
 - レコード記述記入項目 138
- フィールド名、追加の注意事項 653
- 複合 OCCURS DEPENDING ON (OCO) 文節 196, 725
- 複合条件
 - 結合条件 281
 - 省略された結合比較 284
 - 説明 280
 - 否定単純 281
 - 参照: 複合条件
- 複数の結果、算術ステートメント 295
- 複数レコードの処理、READ ステートメント 472
- 符号条件 279
- 符号条件、浮動小数点および 280
- 符号条件中の ZERO 280
- 符号付き
 - 演算符号 150
 - 数字項目、定義 210
 - 数字項目、INSPECT ステートメント 410
 - データ・カテゴリー 150
- 符号なしの数字項目、定義 210
- 物理順次ファイル
 - 参照: 順次ファイル
- 物理ファイル 99
- 物理レコード
 - 定義 142
 - ファイル記述記入項目および 142
 - ファイル・データ 142
 - BLOCK CONTAINS 文節 160
 - RECORDS 句 161
- 浮動小数点
 - キー・フィールド 654
 - 規則 19
 - 数字比較 274
 - データ項目 148, 149
 - 比較 279
 - 非数字比較 274
 - フィールド 654
 - 符号条件および 280
 - 浮動小数点および 638
 - 編集規則 213
 - ACCEPT ステートメントおよび 302, 307, 308, 309, 310, 317
 - ADD ステートメントおよび 333
 - ASCENDING KEY 句および 195
 - ASCENDING 句および 418, 419
 - BLANK WHEN ZERO 文節および 180
 - BY CONTENT 句および 345
 - BY REFERENCE 句 261, 274
 - BY REFERENCE 句および 344
 - BY VALUE 句および 347
 - CLASS 文節 83
 - COMPUTE ステートメントおよび 362
 - COPY ステートメントおよび 654
 - CURRENCY SIGN 文節 88
 - DESCENDING 句および 418, 419
 - DISPLAY ステートメントおよび 371, 375, 378, 379, 380
 - DIVIDE ステートメントおよび 387
 - EVALUATE ステートメントおよび 394
 - GIVING 句および 292
 - INITIALIZE ステートメントおよび 404
 - INSPECT ステートメントおよび 410
 - INTO 句および 464, 532
 - LIKE 文節および 188
 - MERGE ステートメントおよび 418
 - MOVE ステートメントおよび 426
 - MULTIPLY ステートメントおよび 435
 - OCCURS 文節および 191
 - PERFORM ステートメントおよび 451
- 浮動小数点 (続き)
 - PICTURE 文節および 202, 213
 - READ ステートメントおよび 464
 - RECORD KEY 文節および 119
 - RELEASE ステートメントおよび 482
 - RENAMES 文節および 225
 - REPLACING 句および 405
 - RETURN ステートメントおよび 484
 - REWRITE ステートメントおよび 486
 - SEARCH ステートメントおよび 495, 499
 - SET ステートメントおよび 503, 505, 506, 507
 - SIGN 文節および 227
 - SORT ステートメントおよび 515
 - START ステートメントおよび 521
 - STOP ステートメントおよび 528
 - STRING ステートメントおよび 532
 - SUBTRACT ステートメントおよび 539
 - SYNCHRONIZED 文節および 230
 - UNSTRING ステートメントおよび 543
 - USAGE 文節および 238, 242
 - VALUE OF 文節および 165
 - VALUE 文節および 249, 252
 - WRITE ステートメントおよび 552, 556
- 浮動挿入による編集 218
- 部のヘッダー
 - 形式、環境部 71
 - 形式、見出し部 65
 - 指定 26
- 負符号
 - 参照: 負符号 (-)
- 負符号 (-)
 - 固定挿入記号 217
 - 挿入文字 217, 218
 - 浮動挿入記号 218, 220
 - 編集符号制御記号 205, 206
 - COBOL 文字 3
 - PICTURE 文節の記号 205, 206
 - SIGN 文節 228
- ブランク行 29
- プログラミング上の注意事項
 - 算術ステートメント 295
 - データ操作ステートメント 531, 541
 - 変更 GO TO ステートメント 335
 - ACCEPT ステートメント 302
 - DELETE ステートメント 365
 - EXCEPTION/ERROR プロシージャ 669
 - OPEN ステートメント 445
 - PERFORM ステートメント 449
 - STRING ステートメント 531
 - UNSTRING ステートメント 541

プログラミング構造
DO-WHILE および DO-UNTIL 450
STOP ステートメント 528
プログラム終了 351
プログラム初期設定パラメーター (PIP)
データ域 308
プログラムの中断
DISPLAY ステートメント 373
プログラム名 67
プログラム・スイッチ
参照: UPSI-0 ~ UPSI-7、プログラ
ム・スイッチ
プロシージャ
説明 263
プロシージャ名
GO TO ステートメント 400
MERGE ステートメント 422
PERFORM ステートメント 447
SORT ステートメント 516
プロシージャ・ポインタ CALL 351
プロシージャ・ポインタ・データ項目
SET ステートメント 507
文
説明 264
COBOL、定義 24
文節
順序 24
定義 23
分離記号、クラス条件 268
分離文字
説明 20
のリスト 20
INSPECT ステートメント 415
UNSTRING ステートメント 542
VALUE 文節 252
ページ排出 28
ページ・サイズ、LINAGE 文節が指定す
る 166
別名 643
変換指定子 184, 647
変更 GO TO ステートメント 401
編集
置き換え 220
固定挿入 217
消去 220
単純挿入 215
特別挿入 217
符号 150
浮動挿入 218
編集解除 427
定義 425
ポインタ
条件式における 272
ポインタの位置合わせ
定義 246

ポインタ・データ項目
定義 245
SET ステートメント 506
USAGE 文節を使って定義された 245
補助記憶装置ファイル 699

[マ行]

マニュアル、その他 735
マルチボリューム・ファイル
READ ステートメント 473
WRITE ステートメント 556
右括弧 ()
参照: 括弧
見出し部
オプションの段落
AUTHOR 段落 69
DATE-COMPILED 段落 69
DATE-WRITTEN 段落 69
INSTALLATION 段落 69
SECURITY 段落 69
記述および形式 65
PROGRAM-ID 段落 66
認められた文字
COBOL プログラム 3
無効キー条件
共通の処理機能 297
無条件 GO TO ステートメント 400
明示
参照 50
データ属性 50
範囲終了符号 288
命令ステートメント
のリスト 285
文字、フィールド名内で置き換えられる
643
文字、別名内で置き換えられる 643
文字コード・セット
CODE-SET 文節 168
SPECIAL-NAMES 段落での指定 80
文字ストリング
サイズの決定 149
リテラル 13
COBOL 語 6
DBCS 5
PICTURE 20
PICTURE 文節での表現 208
SBCS 内の 4
文字セット、COBOL 定義 3
戻りコード 703

[ヤ行]

ユーザー定義語
タイプ 7

ユーザー・プログラム式状況標識スイッチ
参照: UPSI-0 ~ UPSI-7、プログラ
ム・スイッチ
呼び出し側プログラム
説明 337
呼び出し先プログラム
説明 337
予約語 693
組み込み関数および 693
説明 9
ILE COBOL 言語の 693

[ラ行]

ライブラリー名 635
およびライブラリー名 635
規則 7
形式 35
COPY ステートメント 635, 662
ライブラリー・テキストの置き換え規則
635
ランダム・アクセス・モード
説明 117
データ編成および 117
DELETE ステートメント 366
READ ステートメント 460, 461
リテラル
および算術式 265
混合 17
数字 18
ヌル終了 17
非数字 15
非数字オペランド比較 277
ブール 13
浮動小数点規則 19
文字ストリング 13
16 進非数字 16
ASSIGN 文節 106
CLASS 文節 83
CODE-SET 文節 ALPHABET 文節
82
CURRENCY SIGN 文節 87
SPECIAL-NAMES 段落での指定 81
STOP ステートメント 528
VALUE 文節 250
リンケージ・セクション
形式 137
説明 140
データ項目記述記入項目 140
呼び出し先サブプログラム 261
レコード記述記入項目 140
VALUE 文節 248
レコード
基本項目 143
区域記述 161
固定長 160

レコード (続き)
索引付きファイルのキー
DELETE ステートメントの使用
366
物理、定義 142
論理、定義 142
レコード記述記入項目
定義 138
レベル、データの 143
論理レコード 142
レコードの再使用 488
レコードの使用可能度 299
レコードのブロック化 439, 440, 443,
444
レコード・ロック
DELETE ステートメントおよび 366,
367
REWRITE ステートメントおよび 490
レベル
標識、定義 143
01 項目 143
02 ~ 49 項目 143
66 項目 145
77 項目 145
88 項目 145
レベル番号
区域 A から始める 26
区域 A または区域 B から始まる
143
構造化レコード
01 項目 143
02 ~ 49 項目 143
説明 178
データ記述記入項目の使用規則 178
定義 143
非構造化レコード
66 項目 145
77 項目 145
88 項目 145
レコード記述記入項目のデータ・レ
ベル 143
FILLER 句 179
ローカル・ストレージ・セクション
説明 140
データ項目記述記入項目 140
レコード記述記入項目 140
ロケール
用の形式リテラル 184
FORMAT OF 特殊レジスター 185
ロケール、SET ステートメントによる設
定 510
ロケール用の形式リテラル 184
ロック・レコード
DELETE ステートメントおよび 366,
367
REWRITE ステートメントおよび 490

論理演算子 xxix
結合条件の評価 282
のリスト 280
複合条件 280
論理ファイル 99
論理レコード
定義 142
ファイル・データ 142
プログラム・データ 142
レコード記述記入項目および 142
RECORDS 句 161

[ワ行]

割り当て名
ASSIGN 文節 106
RERUN 文節 128

[数字]

0
挿入文字 217
PICTURE 文節の記号 204, 208
16 進数のビット構成 242
16 進非数字リテラル 16
2 進数の算術演算子 266
2 進データ項目、およびパフォーマンス
238
2 進データ項目、DISPLAY ステートメン
ト 370
2 の補数形式 242
2 バイト文字セット (DBCS)
位置合わせの規則 149
コメントでの使用 70
混合リテラル 17
データ項目 213
分離文字 20
文字ストリング 5
リテラル 13
DISPLAY-1 句 244
SPACE/SPACES 10
66、RENAMES データ記述記入項目 224
7 桁目
アスタリスク (*) はコメントを指定
28
斜線 (/) はコメントを指定 28
標識域 27
77、項目記述記入項目 146
8 バイトの 2 進数項目、およびパフォー
マンス 238
88、条件名データ記述記入項目 174
9、PICTURE 文節の記号 204, 206, 208

A

A
PICTURE 文節の記号 203, 208
ACCEPT ステートメント
簡略名 78, 302
システム情報の転送 304
セッション入出力 326
属性データ 309
データ域 327
データの転送 302
内部データ域 308
フィードバック 307
浮動小数点および 302, 307, 308, 309,
310, 317
プログラム初期設定パラメーター 308
ワークステーション入出力 311
YYYYDDD 句 304
YYYYMMDD 句 304
ACCEPT ステートメント、拡張 311
拡張 DISPLAY と共通 324
句 319, 323
構文検査だけを受ける 323
処理されるデータ・カテゴリー 316
COBOL/2 に関する考慮事項 729
ACCEPT/DISPLAY、COBOL/2 に関する考
慮事項 729
ACCESS MODE 文節
説明 112
DYNAMIC 103
RANDOM 103
SEQUENTIAL 101
ACQUIRE ステートメント
記述および形式 330
ADD ステートメント
記述および形式 332
共通の句 290
浮動小数点および 333
CORRESPONDING 句 333
ADDRESS OF
説明 141
ADDRESS OF 特殊レジスター 12
暗黙の指定 246
およびポインター項目 246
組み込み関数および 141
説明 141
ADD-DURATION 関数 602
ADVANCING 句、WRITE ステートメン
ト 553
AFTER 句
INSPECT ステートメント 410
PERFORM ステートメント 450
REPLACING が指定された 414
TALLYING が指定された 413
WRITE ステートメント 553

ALL
 表意定数 10
 INSPECT ステートメントの句 413
 SEARCH ステートメント 498
 UNSTRING ステートメント 542
 ALL 添え字付け 37, 41, 593
 ALL リテラル
 INSPECT ステートメント 410
 STOP ステートメント 528
 STRING ステートメント 531
 UNSTRING ステートメント 542
 ALPHABET 文節
 形式 76
 説明 80
 CODE-SET 文節 80
 COLLATING SEQUENCE 句 80
 NATIVE 句 81
 NLSSORT 句 81
 PROGRAM COLLATING SEQUENCE
 文節 80
 ALPHABETIC クラス・テスト 269
 ALPHABETIC-LOWER クラス・テスト
 269
 ALPHABETIC-UPPER クラス・テスト
 269
 ALSO 句
 ALPHABET 文節 81
 EVALUATE ステートメント 393
 ALTER ステートメント 335
 記述および形式 335
 GO TO ステートメントおよび 401
 ALTERNATE RECORD KEY 文節 121
 AND CONTINUE RUN UNIT 句 397
 AND 論理演算子 280
 ASCENDING KEY 句
 照合順序 195
 説明 418
 浮動小数点および 195
 MERGE ステートメント 418
 OCCURS 文節 194
 SORT ステートメント 514
 ASCENDING 句
 浮動小数点および 418, 419
 ASCII
 照合順序 685
 EBCDIC への変換 609
 SPECIAL-NAMES 段落での指定 80
 ASSIGN 文節
 説明 106
 SELECT 文節および 106
 AT END 句
 RETURN ステートメント 485
 SEARCH ステートメント 496
 AT END 条件
 RETURN ステートメント 485
 AT END-OF-PAGE 句 554

AUTHOR 段落
 形式 65
 説明 69

B

B
 挿入文字 217
 PICTURE 文節の記号 203, 208
 BEFORE 句
 INSPECT ステートメント 410
 PERFORM ステートメント 450
 REPLACING が指定された 414
 TALLYING が指定された 413
 WRITE ステートメント 553
 BINARY 238
 BLANK WHEN ZERO 文節
 説明 179
 浮動小数点および 180
 USAGE IS INDEX 文節 180, 244
 BLOCK CONTAINS 文節
 説明 160
 BY CONTENT 句
 浮動小数点および 345
 BY REFERENCE 句
 浮動小数点および 261, 344
 BY VALUE 句
 浮動小数点および 347

C

CALL ID 350
 CALL ステートメント
 記述および形式 337
 考慮事項 350
 サブプログラム・リンケージ 337
 制御の転送 56
 手続き部ヘッダー 259, 260
 プログラム終了ステートメント 337
 リンケージ・セクション 261
 BY CONTENT 345
 BY REFERENCE 343
 BY VALUE 346
 CANCEL ステートメントおよび 353
 EXIT PROGRAM ステートメント
 397
 GIVING/RETURNING 349
 IN LIBRARY 句 342, 354
 NOT ON EXCEPTION 句 350
 ON EXCEPTION 349
 ON OVERFLOW 350
 ON OVERFLOW 句 337
 CALL プロシージャ・ポインター 351
 CANCEL ステートメント 353

CHARACTERS 句
 BLOCK CONTAINS 文節 160
 INSPECT ステートメント 413, 414
 MEMORY SIZE 文節 75
 RECORD 文節 161
 USAGE 文節および 160
 CLASS 文節
 形式 76
 説明 83
 浮動小数点 83
 CLOSE ステートメント 357
 COBOL
 言語構成 3
 参照形式 25
 プログラム構造 59
 COBOL 言語の構成 3
 COBOL 語 6
 関数名 9
 コンテキストに依存した 9
 システム名 8
 ユーザー定義語 7
 予約語 9
 COBOL ソース・プログラム
 一般構造 59
 END PROGRAM ヘッダー 27, 60
 COBOL 文字 3
 COBOL/2 に関する考慮事項、
 ACCEPT/DISPLAY 729
 CODE-SET 文節
 説明 168
 ALPHABET 文節 82
 NATIVE 句および 169
 SIGN IS SEPARATE 文節および 168
 USAGE 文節および 168
 COLLATING SEQUENCE 句
 ALPHABET 文節 80
 MERGE ステートメント 419
 SORT ステートメント 515
 COMMIT ステートメント
 形式 361
 COMMITMENT CONTROL 文節
 説明 133
 COMMON 文節 68
 COMPUTATIONAL (COMP) 239
 COMPUTATIONAL-1 238, 242, 249
 COMPUTATIONAL-1 (COMP-1) 239
 COMPUTATIONAL-2 238, 242, 249
 COMPUTATIONAL-2 (COMP-2) 239
 COMPUTATIONAL-3 (COMP-3) 240
 COMPUTATIONAL-4 (COMP-4) 240
 COMPUTE ステートメント
 記述および形式 362
 共通の句 291
 浮動小数点および 362
 COMP-3 項目
 およびパフォーマンス 240

CONSOLE IS CRT 文節 84
CONSTANT 文節
 CONSTANT 文節 177
CONTINUE ステートメント 364
CONTROL-AREA 文節 125
CONVERTING 句 415
CONVERT-DATE-TIME 関数 604
COPY DDS
 参照: dtm1
COPY DDS、標識の使用 651
COPY ステートメント
 置き換え規則 639
 および EXTERNALLY-DESCRIBED-
 KEY 648
 および外部記述データ 648
 および浮動小数点 654
 可変長フィールド 656
 記述および形式 634
 形式の再定義 652
 生成されるレコード形式 644
 データ・フィールドの構造 649
 比較の規則 639
 日付、時刻、タイム・スタンプのフ
 ィールド 654
 浮動小数点および 654
 例 638, 640
COPY ステートメント 661
COPY ステートメントおよび 638
DDS および使用 642
DDS の結果 651
I-O 形式の生成 652
REPLACING 句 637
SUBSTITUTE 句 645
SUPPRESS 句 637
COPY ステートメントの置き換え規則
639
COPY ライブラリーへの参照 35
CORRESPONDING (CORR) 句
 説明 333
 ADD ステートメント 333
 MOVE ステートメント 424
 ON SIZE ERROR 句の場合 293
 SUBTRACT ステートメント 539
CORRESPONDING 句、その影響 291
COUNT IN 句
 XML GENERATE ステートメント
 570
COUNT IN 句、UNSTRING ステートメ
ント 544
CR (貸方)
 挿入文字 217
 PICTURE 文節の記号 205, 206, 209
CRT STATUS 文節
 説明 85
CURRENCY SIGN 文節
 説明 87

CURRENCY SIGN 文節 (続き)
 浮動小数点および 88
CURRENT-DATE 関数 606
CURSOR 文節 88
D
DATA RECORDS 文節
 説明 165
DATE 90, 181, 305
DATE-COMPILED 段落
 形式 65
 説明 69
DATE-WRITTEN 段落
 形式 65
 説明 69
DATFMT DDS キーワード 184
DATFMT キーワード 647, 654
DAY 306
DAY-OF-WEEK 306
DB
 挿入文字 217
 PICTURE 文節の記号 205, 206, 209
DBCS (2 バイト文字セット)
 参照: 2 バイト文字セット (DBCS)
DB-FORMAT-NAME 特殊レジスター 12,
300
DD 名 642
DDR 名 642
DDS 名 642
DDSR 名 642
DEBUGGING MODE 文節 74
DEBUG-ITEM 特殊レジスター 12
DECIMAL-POINT IS COMMA 文節
 形式 76
 説明 89
DECLARATIVES キーワード 263
 区域 A から始める 27
DELETE ステートメント
 アクセスに関する考慮事項 366
 禁止 366
 形式および説明 365
 装置に関する考慮事項 366
 重複キー 367
 編成に関する考慮事項 366
DELIMITED BY 句
 STRING 532
 UNSTRING ステートメント 542
DELIMITER IN 句、UNSTRING ステート
メント 543
DEPENDING 句
 GO TO ステートメント 400
 OCCURS 文節 196
DESCENDING KEY 句
 照合順序 195
 説明 418

DESCENDING KEY 句 (続き)
 浮動小数点および 195
MERGE ステートメント 418
OCCURS 文節 194
SORT ステートメント 514
DESCENDING 句
 浮動小数点および 418, 419
DISPLAY 句、USAGE 文節の 240
DISPLAY ステートメント
 位置、出力の 374
 拡張 ACCEPT と共通 324
 項目の位置決め 377
 セッション入出力 381
 データ域 382
 データの転送 370
 テーブル項目 381
 内部データ域 375
 バッチおよび対話式 373
 フィールド・サイズ 372
 浮動小数点および 371, 375, 378, 379,
 380
 プログラムの中断 373
 ワークステーション入出力 376
IN LIBRARY 句 383
DISPLAY ステートメント、拡張 376
 句 378
 処理されるデータ・カテゴリー 316
 COBOL/2 に関する考慮事項 729
DISPLAY-OF 関数 607
DIVIDE ステートメント
 記述および形式 385
 共通の句 291
 浮動小数点および 387
 REMAINDER 句 387
DOWN BY 句、SET ステートメント
504, 509
DO-UNTIL 構造、PERFORM ステートメ
ント 450
DO-WHILE 構造、PERFORM ステートメ
ント 450
DROP ステートメント
 説明 389
DUPLICATES 句
 KEY 句 521
 SORT ステートメント 515
 START ステートメント 521
E
EBCDIC
 照合順序 683
 ASCII への変換 609
 CODE-SET 文節 169
 CODE-SET 文節および 168
 SPECIAL-NAMES 段落での指定 81
EJECT ステートメント 663

ELSE NEXT SENTENCE 句 402
END DECLARATIVES キーワード 263
END PROGRAM ヘッダー
説明 27, 60
END-IF 句 402
END-OF-PAGE 句 554
END-PERFORM 句 448
END-XML 句
XML GENERATE ステートメント
572
XML PARSE ステートメント 578
ENTER ステートメント 390
EOP 句 554
EQUAL TO 比較 271
ERROR 宣言ステートメント 667
EVALUATE ステートメント
オペランドの比較 395
形式および説明 391
真理値の判別 394
浮動小数点および 394
EVALUATE ステートメントにおけるオブ
ジェクト 393
EVALUATE ステートメントにおけるサブ
ジェクト 393
EVALUATE ステートメントにおける選択
オブジェクト 393
EVALUATE ステートメントにおける選択
サブジェクト 393
EXCEPTION 宣言ステートメント 667
EXCEPTION/ERROR 宣言部分
記述および形式 667
CLOSE ステートメント 357
DELETE ステートメント 366
EXIT PROGRAM ステートメント
形式および説明 397
AND CONTINUE RUN UNIT 句 397
EXIT ステートメント
形式および説明 397
PERFORM ステートメント 448
EXTEND 句 442
USE ステートメント 668
EXTERNAL 文節 157, 180
データ記述記入項目 180
EXTRACT-DATE-TIME 関数 609

F

FALSE 句 394
FD (ファイル記述) 記入項目
形式 151, 157
説明 151, 157
定義 138
物理レコード 142
レベル標識 143
BLOCK CONTAINS 文節 160
DATA RECORDS 文節 165

FD (ファイル記述) 記入項目 (続き)
LABEL RECORDS 文節 164
RECORD 文節 161
FILE STATUS 文節
状況キー 297
説明 124
DELETE ステートメントおよび 365
FILE-CONTROL 段落
順序、項目の 101
説明 101
ACCESS MODE 文節 112
ALTERNATE RECORD KEY 文節
121
ASSIGN 文節 106
FILE STATUS 文節 124
RECORD KEY 文節 118
RELATIVE KEY 文節 123
RESERVE 文節 109
SELECT 文節 106
FILE-STREAM 句
XML GENERATE ステートメント
571
XML PARSE ステートメント 576
FILLER 句
データ記述記入項目 179
CORRESPONDING 句 179
FILLER 句 179
FIND-DURATION 関数 610
FORMAT OF 特殊レジスター 185
FORMAT 文節
データ記述記入項目のコンテキスト
181, 183
LOCALE 句 92
SIZE 句 92, 183
SPECIAL-NAMES コンテキスト 90
FROM 句 302
ACCEPT ステートメント 303
ID のある 297
SUBTRACT ステートメント 538
WRITE ステートメント 552

G

G
PICTURE 文節の記号 208
GDDM、呼び出し 352
GIVING 句
演算 291
浮動小数点および 292
ADD ステートメント 332
DIVIDE ステートメント 387
MERGE ステートメント 420
MULTIPLY ステートメント 434
SORT ステートメント 517
SUBTRACT ステートメント 539
GLOBAL 文節 159, 185

GLOBAL 文節 (続き)
データ記述記入項目 185
GO TO ステートメント
形式および説明 400
条件付き 400
変更 401
無条件 400
PERFORM ステートメント 448
SEARCH ステートメント 496
GOBACK ステートメント
形式および説明 399
GOBACK ステートメント 399
GREATER THAN OR EQUAL TO 関係演
算子 271
GREATER THAN 記号 (>)
比較条件の使用 271

H

HIGH-VALUE/HIGH-VALUES 表意定数
10
SPECIAL-NAMES 段落 82

I

IBM 拡張の形式記述 xxxi
ID
および算術式 265
説明 264
ID CALL 350
IF ステートメント
形式および説明 402
ネストされた IF 403
ILE COBOL 関数名 689
ILE COBOL コンテキストに依存した語
689
ILE COBOL のコンパイラー限界値 673
ILE COBOL 予約語 693
IN LIBRARY 句
CALL ステートメント 342, 354
DISPLAY ステートメント 383
SET ステートメント 509, 512
INDEXED BY 句、OCCURS 文節 196
INDICATOR 文節 178
INITIAL 文節 68
INITIALIZE ステートメント 404
浮動小数点および 404
INPUT PROCEDURE 句
RELEASE ステートメント 482
SORT ステートメント 516
INPUT 句
USE ステートメント 667
INSPECT REPLACING の FIRST 句 414
INSPECT ステートメント
形式および説明 407

INSPECT ステートメント (続き)

- コーディング例 412
- 比較の規則 411
- 浮動小数点および 410
- AFTER 句 415
- BEFORE 句 415
- CONVERTING 句 415
- REPLACING 句 414

INSTALLATION 段落

- 形式 65
- 説明 69

INTO ID 句、READ ステートメントの
463

INTO 句

- 浮動小数点および 464, 532, 543
- DIVIDE ステートメント 385
- ID のある 297
- RETURN ステートメント 484
- STRING ステートメント 532
- UNSTRING ステートメント 543

INVALID KEY 句

- DELETE ステートメント 366
- DELETE ステートメントおよび
DELETE ステートメント 366
- REWRITE ステートメント 488
- START ステートメント 523
- WRITE ステートメント 559

IO CONTROL 段落

- 順序、項目の 126
- 説明 126

COMMITMENT CONTROL 文節 133

- RERUN 文節 128
- SAME AREA 文節 129
- SAME RECORD AREA 文節 130
- SAME SORT AREA 文節 131
- SAME SORT-MERGE AREA 文節
131

ir 中の整数桁の計算 678

I-O 形式の生成 652

I-O-CONTROL 段落 126

- 説明 101

I-O-FEEDBACK 78, 307

J

JUSTIFIED 文節

- 記述および形式 186
- 条件名 187
- データの切り捨て 187
- 標準位置合わせの規則 187
- STRING ステートメント 532
- USAGE IS INDEX 文節および 187
- VALUE 文節および 187, 249

K

KEY 句

- OCCURS 文節 194
- SEARCH ステートメント 499
- SORT ステートメント 514
- START ステートメント 521, 527

L

LABEL RECORDS 文節

- 説明 164

LEADING 句

- INSPECT ステートメント 413
- SIGN 文節 228

LENGTH OF 特殊レジスター 347

- 組み込み関数および 348
- 日時 348

LENGTH 関数 611

LESS THAN OR EQUAL TO 関係演算子
271

LESS THAN 記号 (<)

- 比較条件の使用 271

LIKE 文節

- およびプール・データ 177
- 規則と制約事項 189
- 形式 188
- 説明 188
- 浮動小数点および 188

LINAGE COUNTER 特殊レジスター

- 説明 168
- EXTERNAL 文節および 168
- GLOBAL 文節および 168
- WRITE ステートメント 554

LINAGE 文節

- 句のダイアグラム 167
- 説明 165

LINAGE-COUNTER および 168

LINAGE 文節の FOOTING 句 165

LINES AT BOTTOM 句 167

LINES AT TOP 句 166

LINE/LINES、WRITE ステートメント
553

LINKAGE TYPE 文節 93

LOCALE OF 特殊レジスター 184

LOCALE 句

- データ記述記入項目のコンテキスト
183
- LOCALE OF 特殊レジスターおよび
184

PICTURE 文節および 201

SPECIAL-NAMES コンテキスト 95

LOCALE 句、FORMAT 文節 92

LOCALE-DATE 関数 613

LOCALE-TIME 関数 613

LOW-VALUE/LOW-VALUES 表意定数
10

SPECIAL-NAMES 段落 82

M

MCH1202、および中間結果 680

MEMORY SIZE 文節 75

MERGE ステートメント

- 形式および説明 417

ヌル 418

浮動小数点および 418

ASCENDING/DESCENDING KEY 句
418

COLLATING SEQUENCE 句 419

GIVING 句 420

OUTPUT PROCEDURE 句 422

USING 句 420

MIDRANGE 関数 614

MIN 関数 615

MOVE ステートメント

- 基本移動 425

国別受け入れ項目 429

グループ移動 432

形式および説明 424

妥当性 431

日時の受け入れ項目 428

プール受け入れ項目 429

浮動小数点受け入れ項目 428

浮動小数点および 426

編集解除 427

CORRESPONDING 句 424

DBCS レシーバー 429

MULTIPLY ステートメント

- 共通の句 291

形式および説明 434

浮動小数点および 435

N

NATIONAL-OF 関数 615

NATIVE 句 81

- CODE-SET 文節 169

NEGATIVE 280

NEXT SENTENCE 句

- IF ステートメント 402
- SEARCH ステートメント 496

NLSSORT 句 81

NO LOCK 句

- DELETE ステートメントおよび 367

DELETE ステートメントおよび 366

READ ステートメント 464

REWRITE ステートメントおよび 490

START ステートメント 521

NO REWIND 句、OPEN ステートメント
438
NOT AT END 句
RETURN ステートメント 485
NOT INVALID KEY 句
REWRITE ステートメント 488
START ステートメント 523, 524
WRITE ステートメント 559
NOT ON EXCEPTION 句
CALL ステートメント 350
XML GENERATE ステートメント
572
XML PARSE ステートメント 578
NOT ON OVERFLOW 句
STRING ステートメント 533
UNSTRING ステートメント 544
NOT ON SIZE ERROR 句
概説 292
ADD ステートメント 333
DIVIDE ステートメント 388
MULTIPLY ステートメント 435
SUBTRACT ステートメント 539
NULL
表意定数 11
NULL 値 253

O

OBJECT-COMPUTER 段落
記述および形式 75
MEMORY SIZE 文節 75
PROGRAM COLLATING SEQUENCE
文節 75
OCCURS DEPENDING ON (ODO) 文節
オブジェクト 197
形式 196
サブジェクト 198
制約事項 199
説明 197
添え字付け 200
複合 196, 725
REDEFINES 文節および 199
SEARCH ステートメントおよび 199
OCCURS 文節
形式
可変長テーブル 196
固定長テーブル 194
説明 190
浮動小数点および 191
ASCENDING/DESCENDING KEY 句
194
INDEXED BY 句 196
ODO
参照: OCCURS DEPENDING ON
(ODO) 文節
OFF 句、SET ステートメント 505

ON EXCEPTION 句
CALL ステートメント 349
XML GENERATE ステートメント
571
XML PARSE ステートメント 577
ON OVERFLOW 句
CALL ステートメント 350
STRING ステートメント 533
UNSTRING ステートメント 544
ON SIZE ERROR 句
算術ステートメント 292
指数式での 292
ADD ステートメント 333
COMPUTE ステートメント 363
DIVIDE ステートメント 387
MULTIPLY ステートメント 435
SUBTRACT ステートメント 539
ON 句、SET ステートメント 505
OPEN ステートメント
句 436
索引付きファイル 436
システム依存性 446
順次ファイル 442
相対ファイル 436
妥当性 438
テープ・ファイル 441
ヌル可能フィールド 439
ファイルの位置決め 441
ファイルの使用可能性 445
プログラミング上の注意事項 445
EXTEND 句 442
LINAGE-COUNTER および 168
OPEN-FEEDBACK 78, 307
OPTIONAL 句 106
ORD-MAX 関数 617
ORD-MIN 関数 617
OUTPUT PROCEDURE 句
MERGE ステートメント 422
RETURN ステートメント 484
SORT ステートメント 518
OUTPUT 句
USE ステートメント 668
OVERFLOW 句
STRING ステートメント 533
UNSTRING ステートメント 544

P

P
PICTURE 文節の記号 204, 208
PACKED-DECIMAL 句、USAGE 文節の
238
PADDING CHARACTER 文節 111
PERFORM ステートメント
行外 448
行内 448

PERFORM ステートメント (続き)
形式および説明 447
コーディング例 452
実行順序 549
条件付き 450
浮動小数点および 451
END-PERFORM 句 448
EVALUATE ステートメント 391
EXIT ステートメント 397
GO TO ステートメント 448
TIMES 句 449
VARYING 句 450, 453
1 つの ID 452
2 つの ID 453
3 つの ID 456
4 つ以上の ID 458
PERFORM ステートメントの TIMES 句
449
PGR、呼び出し 352
PICTURE 文節
およびクラス条件 268
記号の順序 207, 208
計算用項目および 238
形式 201
使用される記号 203
説明 201
データ・カテゴリー 209
浮動小数点および 202, 213
編集 214
編集規則、浮動小数点 213
文字ストリング 20
CURRENCY SIGN 文節 87
DECIMAL-POINT IS COMMA 文節
89, 201
USAGE 文節および 202
PICTURE 文節の符号 204
およびパフォーマンス 204
PIP データ域 308
POINTER 句
STRING ステートメント 533
UNSTRING ステートメント 544
POSITIVE 280
PRESENT-VALUE 関数 618
PROCESS ステートメント 717
PROCESSING PROCEDURE 句、XML
PARSE の 577
PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文
節
ALPHABET 文節 80
COLLATING SEQUENCE 句 76
SPECIAL-NAMES 段落および 75
PROGRAM STATUS 文節 96
PROGRAM-ID 段落
形式 65
説明 66

Q

QUOTE/QUOTES 表意定数 10

R

RANGE 関数 619

READ ステートメント

形式および説明 460

順次アクセス・モード 460, 461

送信勧誘されたプログラム装置 475

重複キー 471

動的アクセス・モード 460

トランザクション・ファイル

サブファイル 478

サブファイル制御レコード形式
474

非サブファイル 473

ヌル可能フィールド 368, 460, 466,
487, 522, 554, 559, 645

複数レコードの処理 472

浮動小数点および 464

ボリュームの終わり 470

マルチボリューム・ファイル 473

レコード形式 465

FORMAT 句 477

INTO ID 句 297

INVALID KEY 句 297

NEXT RECORD 句 462

NO LOCK 句 464

RECORD 句 462

RECORD KEY 文節

可変長項目 120

説明 118

浮動小数点および 119

RECORD 句、READ ステートメント
462

RECORD 文節

形式 161

説明 161

RECORDS 句

BLOCK CONTAINS 文節 161

RERUN 文節 129

RECURSIVE 文節 67

説明 67

REDEFINES 文節

一般的な考慮事項 222

形式 221

再定義項目および 222

説明 221

不確定の結果 224

例 223

OCCURS 文節の制約事項 222

SYNCHRONIZED 文節および 231

VALUE 文節および 222

RELATIVE KEY 文節

説明 123

RELEASE ステートメント 482

浮動小数点および 482

REMAINDER 句、DIVIDE ステートメン
トの 387

RENAMES 文節

記述および形式 224

日時および 225

浮動小数点および 225

レベル 66 項目 146, 224

CORRESPONDING 句 290

INITIALIZE ステートメント 404

PICTURE 文節 201

REPLACE ステートメント

形式 664

説明 663

REPLACING 句

浮動小数点および 405

COPY ステートメント 637

INITIALIZE ステートメント 405

INSPECT ステートメント 408

REPLACING、形式 2 の COPY での
657

RERUN 文節

説明 128

RECORDS 句 128

RESERVE 文節

説明 109

RETURN ステートメント

記述および形式 484

浮動小数点および 484

AT END 句 485

RETURN-CODE 特殊レジスター 529

組み込み関数および 530

REVERSED 句、OPEN ステートメント
442

REWRITE ステートメント

記述および形式 486

禁止 486

トランザクション (サブファイル)
490

浮動小数点および 486

FORMAT 句 487

FROM ID 句 297

INVALID KEY 句 488

INVALID KEY 条件 489

ROLLBACK ステートメント

形式 493

説明 493

ROUNDED 句

サイズ・エラー検査および 292

説明 291

ADD ステートメント 333

COMPUTE ステートメント 363

DIVIDE ステートメント 387

ROUNDED 句 (続き)

MULTIPLY ステートメント 435

SUBTRACT ステートメント 539

S

S

PICTURE 文節の記号 204, 209
およびパフォーマンス 204

SAME RECORD AREA 文節

説明 130

SAME SORT AREA 文節

説明 131

SAME SORT-MERGE AREA 文節

説明 131

SBCS、文字ストリング 4

SD

参照：ソート・ファイル記述 (SD) 記
入項目

SEARCH ステートメント

記述および形式 494

コーディング例 501

逐次検索 496

二分検索 498

浮動小数点および 495, 499

ASCENDING/DSCENDING KEY 句
194

AT END 句 496

SET ステートメント 496

USAGE IS INDEX 文節 244

VARYING 句 497

WHEN 句 496

SECURITY 段落

形式 65

説明 69

SEGMENT-LIMIT 文節 76

SELECT OPTIONAL 文節

順次入出力ファイルに対する指定 106

説明 106

SELECT 文節

説明 106

ファイル名の指定 106

ASSIGN 文節および 106

SEPARATE CHARACTER 句、SIGN 文節
の 227

SET ステートメント

記述および形式 502

浮動小数点および 503, 505, 506, 507

プロシージャ・ポインター・データ
項目 507

ポインターの調整 509

ポインター・データ項目 506

ロケール、設定 510

割り当てられた指標データ項目値 244

DOWN BY 句 504, 509

IN LIBRARY 句 509, 512

SET ステートメント (続き)
OFF 句 505
ON 句 505
SEARCH ステートメント 504
TO TRUE 句 506
TO 句 503
UP BY 句 504, 509
USAGE IS INDEX 文節 244
SET ステートメント TO 句 503
SI 属性 108
SIGN IS SEPARATE 文節
説明 227
CODE-SET 文節および 168
SIGN 文節
演算符号 227
記述および形式 227
浮動小数点および 227
PICTURE 文節および 227
SIZE ERROR 句
参照: ON SIZE ERROR 句
SKIP1/2/3 ステートメント 665
SORT ステートメント
記述および形式 513
ヌル可能フィールド 514
浮動小数点および 515
ASCENDING KEY 句 514
COLLATING SEQUENCE 句 515
DESCENDING KEY 句 514
DUPLICATES 句 515
GIVING 句 517
INPUT PROCEDURE 句 516
OUTPUT PROCEDURE 句 518
USING 句 516
SORT-RETURN 特殊レジスター 423
SOURCE-COMPUTER 段落
記述および形式 73
SOURCE-COMPUTER 段落 73
WITH DEBUGGING MODE 文節 74
SPACE/SPACES 表意定数 10
SPECIAL-NAMES 段落
簡略名 79
句 80
形式 76
説明 76
例 79
ACCEPT ステートメント 303
ALPHABET 文節 80
CLASS 文節 83
CONSOLE IS CRT 文節 84
CRT STATUS 文節 85
CURRENCY SIGN 文節 87
CURSOR 文節 88
DECIMAL-POINT IS COMMA 文節
89
DISPLAY ステートメント 372, 383
FORMAT 文節 90

SPECIAL-NAMES 段落 (続き)
LINKAGE TYPE 文節 93
LOCALE 文節 95
WRITE ステートメント 554
STANDARD-1 句 80
ASCII エンコード・ファイル指定
169
CODE-SET 文節 169
STANDARD-2 句 80
STANDARD-DEVIATION 関数 619
START ステートメント
記述および形式 520
索引付きファイル 524
状況キーに関する考慮事項 522, 527
相対ファイル 527
浮動小数点および 521
FORMAT 句 522
INVALID KEY 句 297, 523
KEY 句 527
NO LOCK 句 521
STARTING 句
説明 562
STOP RUN ステートメント 529
STOP ステートメント 528
浮動小数点および 528
STRING ステートメント
記述および形式 531
組み込み関数および 534
実行 533
浮動小数点および 532
SUBSTITUTE 句
COPY ステートメント 645
SUBTRACT ステートメント
記述および形式 538
共通の句 290
浮動小数点および 539
SUBTRACT-DURATION 関数 620
SUM 関数 621
SUPPRESS 句 637
SYNCHRONIZED 文節
記述および形式 228
基本項目 231
日時および 230
浮動小数点および 230
REDEFINES 文節および 231
VALUE 文節および 249

T

TALLYING 句
INSPECT ステートメント 413
UNSTRING ステートメント 544
TERMINAL 句
説明 561
WRITE SUBFILE の場合、記述 566
WRITE SUBFILE の場合、形式 566

TEST-DATE-TIME 関数 622
THROUGH (THRU) 句
ALPHABET 文節 81
CLASS 文節 84
EVALUATE ステートメント 393
MERGE ステートメント 417
PERFORM ステートメント 447
RENAMES 文節 224
SORT ステートメント 513
VALUE 文節 251
TIME 90, 181, 306
TIMESTAMP 181
TIMFMT DDS キーワード 184
TIMFMT キーワード 647
TITLE ステートメント 666
TO TRUE 句、SET ステートメント 506
TRIM 関数 624
TRIML 関数 625
TRIMR 関数 626
TYPE 文節
グループ項目および 144
説明 233
レコード記述記入項目および 157
DATA RECORDS 文節および 165
EXTERNAL 文節および 158
FORMAT 文節および 182
GLOBAL 文節および 160, 186
JUSTIFIED 文節および 187
LIKE 文節および 190
OCCURS 文節および 225
PICTURE 文節および 201, 202
REDEFINES 文節および 221, 222
SIGN 文節および 227
USAGE 文節および 237
VALUE 文節および 249
TYPEDEF 文節
説明 234
レベル 01 の記入項目および 144

U

UNSTRING ステートメント
受け入れフィールド 543
送り出しフィールド 542
記述および形式 541
実行 545
浮動小数点および 543
UP BY 句、SET ステートメント 504,
509
UPON 句、DISPLAY 372, 383
UPSI-0 ~ UPSI-7、プログラム・スイッチ
値 78
および SET ステートメント 506
およびスイッチ状況条件 280
条件名 79
特殊条件の処理 79

UPSI-0 ~ UPSI-7、プログラム・スイッチ
(続き)
SPECIAL-NAMES 段落 78
SPECIAL-NAMES 段落のコーディング
例 79
USAGE DISPLAY
クラス条件 ID 267
STRING ステートメントおよび 531
USAGE IS POINTER 245
USAGE IS 文節
COMPUTATIONAL-1 句 195
COMPUTATIONAL-2 句 195
USAGE 文節
演算符号および 150
基本項目サイズ 149
浮動小数点および 238, 242
BINARY 句 237
CODE-SET 文節および 168
COMPUTATIONAL 句 239
COMPUTATIONAL-1 句 171, 189
COMPUTATIONAL-2 句 171, 189
COMPUTATIONAL-3 句 240
COMPUTATIONAL-4 句 240
DISPLAY 句 240
DISPLAY-1 句 244
INDEX 句 244
NATIONAL 句 245
PACKED-DECIMAL 句 238
PICTURE 文節および 202
POINTER 句 245
PROCEDURE-POINTER 句 247
VALUE 文節および 249
USAGE 文節の BINARY 句 237
USAGE 文節の INDEX 句 244
USE ステートメント
および標準のエラー処理 669
説明 667
USING 句 260
サブプログラム・リンケージ 260
手続き部ヘッダーにおける 259
MERGE ステートメント 420
SORT ステートメント 516
UTF8STRING 関数 627

V

V
PICTURE 文節の記号 204, 209
VALUE OF 文節
浮動小数点および 165
VALUE 文節
形式 248
条件名 251
条件名値の規則 251
説明 248
浮動小数点および 249, 252

VALUE 文節 (続き)
リテラル値の規則 250
リンケージ・セクションおよび 140
レベル 88 項目 146
NULL 値 253
VARIANCE 関数 627
VARYING 句
PERFORM ステートメント 450
SEARCH ステートメント 497

W

WHEN 句
EVALUATE ステートメント 393
SEARCH ステートメント 496
WHEN-COMPILED 関数 628
WHEN-COMPILED 特殊レジスター 432
WITH DEBUGGING MODE 文節 74
WITH DUPLICATES 句、SORT ステート
メント 515
WITH FOOTING 句 166
WITH NO LOCK 句
DELETE ステートメントおよび 366
READ ステートメント 464
START ステートメント 521
WITH POINTER 句
STRING ステートメント 533
UNSTRING ステートメント 544
WRITE ステートメント
簡略名 78
記述および形式 551
禁止 551
索引付きファイル 556
順次ファイル 551
相対ファイル 556
トランザクション
サブファイル 565
非サブファイル 561
浮動小数点および 552, 556
AFTER ADVANCING 553
BEFORE ADVANCING 553
END-OF-PAGE 句 554
END-OF-PAGE/EOP 554
FORMAT 句 560, 561
FORMATFILE 560
FROM ID 句 297
INDICATORS 句 563, 566
INVALID KEY 句 559
ROLLING 句 562
STARTING 句 562

X

X
PICTURE 文節の記号 204, 208

XML GENERATE ステートメント
操作 572
トリミング 574
フォーマット変換 573
要素名情報 575
例外イベント 571
XML GENERATE ステートメントの操作
572
XML PARSE ステートメント 576
サポートされている CCSID 580
処理プロシージャ 579
制御フロー 578
例外イベント 577
XML-CODE 特殊レジスター
XML GENERATE での使用 571
XML PARSE での使用 577
XML-EVENT 特殊レジスター 579
XML-NTEXT 特殊レジスター 579
XML-TEXT 特殊レジスター 579

Y

YYYYDDD 306
YYYYDDD 句 304
YYYYMMDD 306
YYYYMMDD 句 304

Z

Z
挿入文字 220
PICTURE 文節の記号 204, 208
ZERO/ZEROS/ZEROES 表意定数 9

[特殊文字]

(/) コメント行 28
* (アスタリスク)
PICTURE 文節の記号 203
*CBL (*CONTROL) ステートメント 633
*CONTROL (*CBL) ステートメント 633
*INZDLT、影響 115
*PRTCORR オプション 291
+ (プラス)
挿入文字 217, 218, 220
PICTURE 文節の記号 208
SIGN 文節 228
, (コンマ)
挿入文字 217
PICTURE 文節の記号 205, 208
- (マイナス)
PICTURE 文節の記号 208
PICTURE 文字ストリングでの使用
208
SIGN 文節 228

- . (ピリオド)
 - 実小数点 217
 - 挿入文字 217
 - ピリオド 217
 - PICTURE 文節の記号 205, 206, 209
- / (スラッシュ)
 - コメント行 28
 - 挿入文字 217
 - PICTURE 文節の記号 204, 208
- ¥ (通貨記号)
 - 挿入文字 217, 218
 - PICTURE 文節の記号 205, 208



プログラム番号: 5761-WDS

Printed in Japan.

SD88-5044-06



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12